
シャバの「普通」は難しい

中村 颯希

HinaProject Inc.

注意事項

このPDFファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をPDF化したものです。

このPDFファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】

シャバの「普通」は難しい

【Nコード】

NO641EH

【作者名】

中村 颯希

【あらすじ】

【9/26 コミック6巻発売】

「この世の地獄」と称されるヴァルツァー監獄。

服役中の娼婦から生まれ、囚人仲間によって獄内で育てられた少女・エルマは、大国ルーデン王の崩御を機に、恩赦として監獄から「釈放」させられる。

釈放の発令者である第二王子ルーカスの命で、王宮付き侍女となったエルマ。母の言いつけ通り「普通」の少女を目指して過ごしはじめるが、うっかりぶっ飛んだことばかりやらかしてしまふ。

それというのも、娼婦譲りの美貌に詐欺師譲りの読心術、狂戦士の戦闘術に、マッドサイエンティストの医術 「家族」である囚人仲間に、かなり独特な「普通」を教え込まれていたからだだった。彼女の常識外れの能力や行動は、やがて王宮全体を揺るがしていき？

「もしや……シャバの方というのは、そのくらいのこともできないのですか？（真顔）」

”普通”を指すわけあり少女の、うっかりシャバ無双物語。

完結しました。最後までお付き合いくださった皆さま、本当にありがとうございました！

カクヨムさまでも転載を始めました。

0・プロローグ

ヴァルツァー監獄。

大陸一の覇権を握るルーデン王国の外れ、険しい山と切り立った崖に囲まれたその場所には、大陸中の、終身刑を言い渡された大罪人ばかりが多く収容されている。

周囲の森は瘴気すら帯びて陰鬱と茂り、昏なお暗いその獄からは、ときおり、獣の鳴き声にも似た、断末魔の悲鳴が響き渡るのだという。

それは、心無い看守が囚人を拷問しているからとも、または、囚人同士が釈放をかけて、酸鼻な殺し合いをしているからとも言われた。

囁かれる噂は多々あれど、その趣旨はおおよそひとつにまとめられる。

ヴァルツァー監獄は、この世の地獄。

虫が湧き、腐臭の立ち込める牢獄にひとたび鎖で繋がれようものなら、その無慈悲な虐待に、暗澹たる境遇に、殺人鬼すら涙を浮かべて死罪を請うのだと。

さて。

その忌まわしき監獄の一室で、今、ふたりの人物が夜の闇をまとい、冷ややかな表情で立ち尽くしていた。

ひとりは、女性。

かすかな月光しか差し込まぬ牢獄にあってなお、淡く輝く銀髪とまぶしいほどの肢体を持った、艶麗な女性である。

ただし、その身にまとった囚人服は大きく胸元を裂かれ、頬には殴られた跡があった。

もうひとり、そんな彼女をかばうようにして立ち、長い足で「なにか」を押さえつけている男性。

獅子のたてがみのようにうねる黒髪、そして伸び切った髭に覆われてはいるが、高い鼻や印象的な空色の瞳が、精悍な容貌を窺わせる男性だった。

その彼は、靴すら許されぬ泥まみれの足を再度振り上げ、湿った床にうずくまる「それ」を大きく蹴り上げた。

「寝たふりか、看守殿」

「ぐ……おっ」

とたんに、先ほどまで男に踏みつけられ、今蹴り上げられた「それ」 看守と呼ばれる脂ぎった男が、わき腹を押さえて飛び上がる。

ぶよぶよとした腕で、教会の聖紋を縫い取った己のローブを手繰り寄せる看守に、男は淡々と片手を掲げてみせた。

「お探しのものは、これか？」

その男らしい大きな手の中には、不思議な色を放つ水晶の珠がある。

紐を通されたそれは、看守の職を任された導師が、緊急時に教会と連絡を取り合うための聖具であった。

「そ……っ、それを……！ それをなぜおまえが持っているのだ！ 下賤の罪人が触れていいものではない！ 聖なる水晶ぞ！ 返せ！」

権力と欲望を贅肉に変えて身にまとわせた看守が、目を見開いて叫ぶ。

しかし男は、飛んでくる唾を煩わしげに払うと、再び看守を床に押さえつけるだけだった。

「ぐっ……！」

「下賤の罪人？ ほう」

耳に心地よい低音が、ふいに剣呑な響きを帯びる。

男はぐ、と足に力を込めながら、看守に向かって囁いた。

「賤しき罪人とは、誰のことを言うのか」

「ぐっ……っ」

「国を裏切った勇者か？ 魔族の子を宿した娼婦か？ それとも囚人を虐待し、身重の女を犯そうとする、神の僕しもべであるはずの男のことだろうか」

「……っ……お……っ」

足を背にめり込ませた看守が、苦悶の表情を浮かべる。

冷や汗をにじませはじめた巨体に、男は甘さすら感じる声で続けた。

「罪人が罪人を裁く権利があるというのなら、当然俺にもおまえを

裁く権利があるはずだ。そうだろうか？」

「ひっ……」

ぎし、と骨の軋む不吉な音がする。

これ以上圧を掛けられたら、間違いなく骨が砕け、あるいは内臓が破裂するだろう。

真っ青になった看守が口の端から泡を滲ませはじめたそのとき、

「 待つて、ギルベルト」

それまで沈黙を守っていた女性が口を開いた。

「 助けてくれたのはありがたいけれど、ちょっとかっかすすぎよ」

「……しかし、ハイデマリー」

ハイデマリーと呼ばれた彼女は、乱雑に切られた銀髪を気だるげに掻き上げ、薄く笑みを浮かべる。

そうして、赤く腫れた自らの頬をつつと指で辿り、小首を傾げた。

「わたくし、これでも三国一高い女と言われていたの。頬を腫らした代償に豚の死体を押し付けられても、詫びには到底足りないし、困るだけだわ」

だから、と呟き、ちらりと優雅に視線を背後に投げかける。

背骨を折られかけている状況も忘れて、看守は元高級娼婦に見入っていたが、その背後の扉が開いたのに気付き、顔を強張らせた。

「おまえたち、は……」

重い石と鉄柵でできた扉を開け、やってきたのは、四人の男たち。

あどけなさを残した少年に、屈強な熊のごとき巨漢、中性的な青年に、穏やかそうな壮年の男。

国籍も罪状も様々な四人の男たちは、頑強な鎖で繋がれていたはずの腕や足をぶらぶらと振りながら、実に陽気に牢屋に踏み入ってきた。

「な、なぜ、おまえたちまで、封じの鎖を……!!」
「封じの鎖って、これ？」

呆然と呟く看守に向かって、最年少の少年がふふつと鉄の破片を摘まみ上げる。

「『聖なる鉄』ごときが王水に敵うわけないっていう、単純な科学の勝利だよな？」

ねえ、と彼が他の面々に呼びかけると、三者三様の答えが返った。

「……そんなもの、使わずとも、引き千切れば、それで」
「やあねえ、他の看守を平和裏に洗脳したに決まってるじゃない」
「皆さん穏やかでないですね。このくらい、『説得』で十分ですよ」

看守は素早く、囚人たちの罪状を脳内で照合し、青ざめた。

人体実験を繰り返した年少の狂博士に、禁域で希少動物を大量虐殺した狂戦士。

王侯貴族の子女を集団洗脳した誘拐犯、横領で国家規模の公庫を破綻させた詐欺師。

それぞれ、己の特技を駆使して封じを逃れたというわけだった。

「な、な、な……」

どうやって監視の目を潜り抜けたのか、とか、なぜこの場に集まってきたのか、とか、看守が確かめるべきことは多くあったはずだ。

しかし、そのどれかを口にする前に、麗しの娼婦・ハイデマリーがうっそりと微笑んだ。

「初めての方ですもの。お安くしてあげてよ、看守殿？」

「な……」

うっすらと血を滲ませた己の頬の傷を、細い指が撫でる。

「ヴァルツァー監獄。この素敵なお城だけで、手を打って差し上げる。あなたには、そのための傀儡かいらいを演じてもらいたいの」

声は、鈴を鳴らすようだった。

「なんだと……？」

「飲み込みの悪い豚ねえ。今この瞬間から、ヴァルツァー監獄はハイデマリー以下、あたしたちが掌握するってことよ」

看守が呆然と声を上げれば、すかさず中性的な青年が呆れたように言い捨てる。

掌握する。

その単語が時間を掛けて脳に染み込んでいくと、看守は引き攣った笑みを漏らした。

「……ば、馬鹿を言うな。ここはヴァルツァー監獄、この世の地獄だぞ？ 掌握どころか、私を小指の先ほども傷つけようものなら、とたんに監獄中の守衛や聖獣が駆け付け、おまえらを八つ裂きに」

「守衛？ それはどこにいるのだろう」

しかし反論は、淡々とした男の声に遮られる。

看守は背中に乗った足の重みを意識しながら、必死に耳を澄ませ廊下から物音ひとつしないことに気付いて愕然とした。

そんな馬鹿な。

四人、いや、この自分の背中を踏みつけている男も含めれば、五人もの犯罪者が独房から出歩いているというのに、なぜ誰も、なにも、異常事態を知らせようとしないのか。

「そんな……馬鹿な……二百の守衛ぞ……五十の聖獣ぞ……たった男五人で、この広大な監獄を掌握など……」

「五人？」

とたんに、男　ギルベルトが、背中を押さえ込んでいた足を大きく振り上げ、同じ場所に叩き落とす。

つぶれたヒキガエルのような声を上げた看守に、彼は淡々と告げた。

「ハイデマリー以下と言ったろう。六人の誤りだ」

「あら、それも違うわ、ギルベルト」

すると、ふふつと口元を綻ばせたハイデマリーが、そつとギルベルトのたくましい腕に手を添える。

彼女は、宥めるように男の腕に触れながら、もう一方の手で、優しく自らの腹を撫でた。
そうして、いつそ慈愛すら感じさせる微笑をもって、這いつくばる看守に言い放った。

「 七人よ」

1. 「普通」のお茶汲み(1)

王宮付き侍女の朝は早い。

手狭ながら清潔な寮室に、陽気な鶏の鳴き声が聞こえてくるのを耳にしながら、エルマはむくりと寝台から身を起こした。

いまだ、朝陽も射さぬ時分。

慣れない者なら寝台から降りるのすら手間取る薄暗さだが、本日が初出仕であるはずの彼女は、淡々と身支度を整えていく。

お仕着せのメイド服に腕を通し、清潔なエプロンに長い黒靴下、磨き抜かれた革靴を身に着ける。

肩を覆うほどの黒髪はくるくると団子にまとめ、ブリムと呼ばれるヘッドドレスを着ければ完成だ。

支給品である小さな鏡を覗き込み、エルマはしばらく首を傾げていたが、やがて、城に唯一持ち込んだ布靴の中から小道具一式を取り出した。

それをなにやら丁寧に顔に塗ったり描いたりし、さらには厚底の眼鏡まで装着したうえで、再び鏡を見つめる。

そこには、これといって美人でも不美人でもない、平凡な少女が映り込んでいた。

肌は十五という年齢にふさわしく滑らかだが、赤みに乏しく、どちらかといえばくすんで見える。

目は眼鏡の存在に引っ張られて、何色なのかすら判別がつきづら

く、薄めの唇は血の気がなくやや陰気である。

衣服とて、清潔感はあるものの、サイズが合わないのかどこか野暮ったく、全体に冴えない印象が強い。

だというのに、彼女はぱっとしない己の姿をまじまじと見つめると、

「よし」

満足げに頷いた。

その声だけは、はっとするほど美しい。

続いて彼女は、寝台を片付けついでに、なにげなく窓の外を眺めた。

四階建ての寮室の、最上階。

ルーデン王国の建築技術の粋を集めた王宮だけあって、ここでは侍女の寮ですら高層建築の使用が許されている。

平民ならばまずご縁のない高所からの眺望は、王宮付きを望む娘たちの憧れであり自慢でもあったが、しかし昨日まで最下層民であったはずの彼女は、飽きたように冷え冷えとした視線を向けるだけであった。

「これを毎日上り下り……」

むしろその眩きには、迷惑というか、単純にうんざりとした響きだけが籠っている。

彼女は、眼鏡の奥で死んだ魚のような目になると、「帰りたい……」とぼやきながらしばらく地上を眺めていたが、やがて諦めたようにため息をつき、すっと窓辺を離れた。

と、寮室を出ようとしたそのとき、エルマが手をかけるよりも先に木造りの扉が開いた。

無言で顔を上げると、ずいっと人影が迫ってくる。

エルマと同じくメイド服を身に着けたその人物は、開口一番にこう言い放った。

「まあ！ みすばらしい黒ネズミだこと」

こぎれいに結わえた金髪に、釣り目がちな若草色の瞳。なかなかの美少女だ。

年はちょうどエルマと同じか、ひとつ上くらいだろうか。

状況を冷静に検分して、どうやら先輩のようだと結論付ける。

ついでに黒ネズミというのは、黒髪で貧相なエルマへの擲揄^{ちやく}だと思われるが、物理的事実としてネズミがいる可能性も否定できないため、念のため床に視線を走らせた。

すると相手は、嘲るように片方の眉を上げた。

「あら、自覚もなくって？ あなたのことよ、苗字^ななしのエルマさん。言っておくけれど、いくら侍女長のグラーツ子爵夫人が後見くださったところで、あなた自身はしょせん、ただのエルマ。王宮付き侍女で苗字すら持たないなんていうのは、あなたくらいのものだわ」

猫のようににんまりと笑ってみせた彼女は、腰に手を当てて名乗った。

「私はイレネ。ノイマン男爵家の娘よ。侍女寮の東棟四階を預かる階長として、スティア・マスター新入りのあなたに挨拶と、今日の仕事を言いつけに来たの」
「はあ」

侍女寮は、既婚者・未亡人を含む年長者が住まう西棟と、十八歳以下の未婚の子女が住まう東棟から成り、さらに四つの階にはそれぞれ代表者が置かれている。

イレネは、その東棟四階の代表者、つまり階長であるらしかった。

男爵令嬢としてそこそこの実権を握っているらしく、イレネの言動は高飛車だし、新人をいびってやるうという意思が前面に現れている。

だがまあ、朝早くから单身寮室に殴り込むガッツの滲むさまはどこか清々しかったので、エルマはことさら反撃態勢は取らずに、しおらしく頷いた。

「が、それはイレネの気に食わなかったらしい。」

彼女は長い睫毛を上下させてエルマの全身を眺めると、ふんと鼻を鳴らした。

「愛想のない人ね。顔も、表情も地味。王宮付き侍女といったら、花嫁修業の最難関にして頂点のような役職なのに、あなたみたいな人がいたら私たち全体のレベル感が下がるじゃないの」

「はあ」

「まあいいわ。だからこそ、私たちが鍛えてさしあげなくてはね。」

よくて？ あなたは今日から、私の言う通り、割り振られた仕事をまっとうするのよ」

「はあ」

先ほどから「はあ」の一言しか発しないエルマ相手に、イレーネは痺れを切らしたように、一枚の紙を突きつけた。

「ほら、黒ネズミさん。これが今日のあなたの仕事よ」

支給品であるらしい上等な紙には、余白がほとんど残らないくらいに文字が書き連ねられている。

エルマがまじまじとそれを眺めていると、イレーネはふふんと唇の端を引き上げた。

「あなた、字は読めて？ 一度だけ私が音読してさしあげる。二度は言わないから、一度で覚えてちょうだい。まず、六つの鐘が鳴る前に鶏小屋に行つて」

イレーネは早口で膨大な量の仕事を読み上げていく。

苗字も持たない、つまり字も読めないであろう下層民ならば、間違ひなく悲鳴を上げる情報量だ。

しかもその内容とは、卵の受け渡しや厩舎への差し入れ、東庭の手入れや騎士団への手紙の配達、さらには妃への茶の準備など、王宮内のどこになにがあるのかもわからぬ新人には、過酷にすぎるものだった。

「厨房の端にある食堂で夕食を済ませたら、あとは聖堂の清掃と図書室の返却本の整理、それから」

「あの」

「ちなみにどの仕事も、遅刻は厳禁よ。三回までは食事が抜かれる程度だけど、あなたの評判は一気に失墜するからそのつもりで。さ

て、図書室のあとは」

「あの」

「なによ、うるさいわね。べつにこれ、いじめじゃないわよ？ グラーツ夫人に後見されていようと、ルーカス王子殿下に直接お言葉を頂く女だろうと、実力主義の私たちは、ちやほやなんかしないっていうだけ。仕事の押し付けなんかじゃなくて、あくまで、これが普通の業務量なのだからね？」

明らかに嘘だ。

エルマはかすかに眉を寄せた。

「……新人が、ユリアーナ前妃殿下のお茶を用意するというのも、普通なのですか？」

ユリアーナというのは、先月まで側妃としてヴェルナー前王に仕えていた女性だ。

ヴェルナーの崩御に伴い後宮を離れ、この崩御というのが、エルマがここにいる契機でもあるのだが、王宮内の大聖堂内に居室を構えて隠居生活を送っている。

いくら今は妃ではないとはいえ、新人に茶の準備をさせるには、あまりに高貴な身分にすぎるのではないか。

エルマが首を傾げると、イレーネはわかりやすく視線を泳がせた。

「……そ、それは、まあ、多少は珍しいかもしれないけれど、侍女がお茶汲みをするに、なんの不思議があつて？ 侍女はお茶を淹れ、主人の心に寄り添う。これって、実に当たり前のことだわ。そうでしょ？」

「……当たり前」

「え、ええ、そうよ。だいたい、あなたはまだ仕えるべき主人が決

まっつていないのだから、偶然気難し……いえ、高貴な方に当たってしまうのも、自然なことだわ。相手が高貴な方でも、卑しい身分の者でも、茶を淹れると命じられれば肅々とこなす。それが侍女のあべき、いえ、当然の、普通の姿よ」

「……普通」

イレーネの言い分は苦し紛れ以外の何物でもなかったが、エルマはふと顔を上げ、それから静かに頷いた。

「承知しました」

「そりゃあ、ユリアーナ前妃殿下にお茶を振舞うなんて、正直私だったらごめんだけれど　　なんですって？」

必至に言葉を重ねていたイレーネは、ぎよつとして聞き返す。

だが、エルマは淡々と繰り返すだけだった。

「承知しました、と」

「ほ……本気なの……？」

「ええ。それが普通のことなのでしたら」

「普通……。そ、そうね。ええ、至極普通のことだわ」

意表を突かれながらも、イレーネは内心で自分に言い聞かせた。

そうとも、侍女が茶を淹れるのも、新入りが先輩の命に従うのも、至極普通。当然のことだ。

ただ、ユリアーナ前妃殿下が求める茶のレベルが異様に高いことや、茶の淹れ方が気に食わないという理由でこれまで何人もの侍女がクビになってきたこと、そもそも、それまでにこなすべき業務が尋常でなく多いことというのは、……少しだけ、特筆すべき事項かもしれないが、別に、異常というほどではない。

思いきり破綻した論理で己を宥めていると、無表情の新人がすと脇をすり抜けていく。

「ど、どこへ行くのよ!？」

「時間があまりないようなので、さっそく業務を開始しようかと。念のためお聞きしますが、書かれていた業務が完璧にこなせるならば、多少作業順が前後しても構いませんね？」

「は……、メモも持たずに、ずいぶんと大口を叩くこと」

「ああ。すべて覚えましたので、メモはお捨て置きください。または裏紙として再利用を」

イレーネは愕然とした。

「は？」

だがエルマは、真新しい陽光が降り注ぎはじめた廊下に、真顔で頷きかけるだけだった。

「朝は空気が澄んでいますね。これがシャバの空気の味ですか」

「……は？」

イレーネは、豆鉄砲を食らった鳩のような顔つきになった。

2・「普通」のお茶汲み(2)

「ほら、おみ足の動きがまた緩んでおられますよ、ルーカス様。急いで！ 戦場の黒豹とあだ名されるあなた様はどこに行かれたのですか！ ほら、お早く！ 前進、駆け足！ いち、に！ いち、に！」

「そう何度も急かしてくれるな、ゲルダ。ちゃんと同じ速度で進んでいるだろう？」

初夏のまぶしい太陽が、高く昇った昼下がりに。
大聖堂へと続く回廊の片隅を、二人の人物が移動していた。

ひとりは、小柄な身体をしゃんと伸ばし、優雅な急ぎ足で進む中年の婦人。

もうひとりは、すらりとした長軀をシンプルなシャツと黒ズボンに包んだ、気だるげな青年である。

くせのある豊かな黒髪や、甘さを含んだ藍色の瞳は、男らしい精悍な美しさに満ちている。

耳に心地よい低音の声を持つ彼は、名をルーカス・フォン・ルーデンドルフといい、先日崩御したヴェルナー王の側妃の息子「第二王子」と呼ばれてきた人物であった。

正妃の息子であるフェリクス第一王子が即位してしまえば、ルーカスは王弟と呼ばれる立場になるわけだが、喪をまだ終えていないために、いまだ第二王子と呼ばれている。

ルーデン王国には四人の王子と三人の王女がいたが、ルーカスはその中でも先王に最も気に入られており、一時は凡愚と噂されるフ

エリクスを差し置いて、王の後釜につくのではないかという噂すら立っていた。

にもかかわらず、せっかくの寵愛と、優位な後継者競争をかなぐり捨て、あっさり騎士団に加わってしまったという変わり者だ。

だがそのおかげで、臣籍降下し国外にやられることもなく、いまだ王国内に留まって、日々のびのびと浮き名を流して過ごしている。

今も、彼が気だるげに道を歩くだけで、その姿を認めた侍女たちがきやあつと黄色い声を上げるのが見えた。

ルーカスは慣れているのか、簡単に片手を上げてそれに応じる。

「勘弁してくれ。十日ぶりの休日、それもさつき寝台にもぐりこんだばかりだぞ？　なぜ、十九にもなって母上のご機嫌を伺いに行かねばならない」

「悄然と肩を落としてみせたところで、香水の匂いはごまかせませんよ。いったい、なんの『お勤め』をして、そんな時間に眠られたのやら。それに、力なき少女を救うのは間違いなく騎士の仕事でございますでしょう。ご自身が彼女をこの王宮に連れてきたのなら、なおさら！」

ぶつぶつと零すルーカスに、元乳母の遠慮のなさでゲルダが突っ込む。

「王宮で働かせるというのは、ほとんどあなたの判断だろうよ、ゲルダ」

ルーカスは長い足で回廊を進みながら、優雅に肩をすくめた。

そう。

エルマと呼ばれる「わけありの少女」を、王宮付き侍女として迎え入れることを決めたのは、ルーカスであり、ゲルダであった。

事の起こりは先月。

先王ヴェルナーが急逝したときに遡る。

ここルーデン王国では、王の崩御の際に、その直系男子が民のためにつだけ願いを叶えてよいという、「大願^{たいがん}」と呼ばれる制度がある。

王の死という不幸を、王子たちの祝福によって振り払うという趣旨だ。

たいていの場合、それは「恩赦」という形で発動され、誤判により捕らえられた民や、軽微な罪人を救済するのが常だったのだが、なんと凡愚王子フェリクスは、「僕の即位の際には、国中の人々を招いて舞踏会を開きたい」などと言いだしたのである。

子どもの思い付きのような発言ではあっても、大願は大願。

貴族たちは可能な限りの調整を挟みつつ、舞踏会の実施に乗り出しはじめた。

しかしそうになると、当然あるものと思われていた「恩赦」のほう
が実施されない。

しかも、先王ヴェルナーは、教会の差し出す処刑リストに情け容赦なく署名してきた人物であったため、罪なくして捕らえられた民やその家族の恩赦要望は熾烈極まりないものだった。

すぐには爆発しないだろうが、不穏にすぎる不満の芽。

結局ルーカスは、柄でもない調整業務に奔走しながら、兄に代わって恩赦を発令したというわけである。

ところが、それで終わるはずだった大願は、その後予想外の展開を見せることとなった。

なんと、恩赦のために、改めて監獄に繋がれている人々の数や罪状を精査したところ、ひとり人数が多いというのである。

ルーデン王国の辺境にある、誰もが恐れるこの世の地獄　　ヴァ
ルツァー監獄。

よりによつて、その最も苛烈で、劣悪で、人々が踏み込もうとしなかったその場所に、服役中の娼婦から生まれたというだけで全く罪のない少女が暮らしていたというのだ。

これにはさすがのルーカスも青褪め、即座に事態の回収に乗り出した。

具体的には、監獄側のいかなる弁明も許さずに、ルーカスの独断で少女をすみやかに保護。

無実の囚人が存在したという事実は徹底的に隠匿し、少女の噂が不必要に広まらぬよう手を打った　　監獄の監督不行届きは追って処罰すべきだが、その生い立ちが先走つて、少女の未来を奪つてはならないと考えたためだ。

教育どころか、ろくな衛生環境も与えられていなかったであろう少女。

不憫に思い、信頼のおける孤児院に預けようとしていたルーカスだったが、それもまた、思わぬ方向へと事態は展開していく。

念のため、自ら少女と面談を試みたところ、意外にも最低限の教育は施されていることがわかったのだ。

多少表情が乏しく、姿かたちも冴えないものの、体は健康。

容貌の整ったルーカスが顔を近づけると、恥ずかしそうに俯くなど、反応もいかにも「普通の女の子」であり、情操面での発育も問題ないように見受けられた。

まあ、あまりにみすばらしく面白みに欠ける様子なので、ストライクゾーンがかなり広いルーカスでさえ、食指が動かなかったが。

ともあれ、ならば孤児院ではなく街で働き口でも手配するかと彼としては考えていたのだが、そこにゲルダが　口の堅く信用のおける彼女は、同性の立会人としてその場にいた　、「わたくしが後見するので、この子は王宮で働かせましょう！」と詰め寄ってきたのである。

どうやら、少女に会う前からすでに、「罪なくして監獄育ち」という背景にいろいろ妄想をたくましくしていた彼女には、少女が静かに受け答えるのも、表情が乏しいのも、すべて「劣悪な環境を、感情をそぎ落とすことで生き抜いてきた」ことの証として映ったらしい。

もともとゲルダには、そういった、お人よしが過ぎるといっつか、少々感情に脆すぎるところがある。

侍女が仮病を使えば「気付かなくてごめんなさい」と親切に看病し、母が倒れたと涙ぐまれば、庭師の少年にすら、同情して上等な宝石を与えてしまうほどに。

その過剰な人類愛の対象が、今度はエルマに向かったわけだが、尋ねてみたところ本人も特に異存はないという。

結局ルーカスは、少女の出自を伏せ、王宮付きを許可したと、そういうわけであった。

「彼女の件は、もう俺の手を離れてあなたの監督下にあるという認

識だったが。いったいなんでまた、『緊急事態』とやらに陥ってしまったんだ？」

「ですから、半分はあなた様のせいですよ、ルーカス様。無駄に整った顔で無駄に侍女を口説くあなた様が、あの子に自ら面談などするものだから、その噂が変に流れて、彼女は出仕初日から、あなた様を崇拜する侍女たちの嫉妬の的になってしまったのです」

そう言っただけで、自分が今朝、庭師の少年と話し込んでいた合間に、気の強い侍女の一人がエルマに過剰な仕事を強いたことを説明した。

「イレーネ……たしか、金髪で猫目の娘だったか。何度か声を掛けられたことがあるな」

「そういうところは、さすがの記憶力でございますね。……とにかく、イレーネを叱りつけたはいいものの、肝心のエルマが捕まらなくて……」

「城内で迷っているの？」

迷子の保護なら衛兵の仕事だ、と片方の眉を上げるルーカスに、ゲルダはため息を吐きながら首を振った。

「いえ、そうではなく、わたくしたちの予想を上回るスピードで仕事を片付けて回っているようなのです」

「……なんだと？」

「言いつけた仕事のメモを辿って追いかけてみると、鶏小屋でも詰所でも庭でも廊下でも、とにかくどこでも、『もう仕事を終えて去っていかれましたよ』と言われてしまっ……」

ルーカスは困惑した。

それは意外な展開だ。

とはいえ、過剰な量でも問題なくこなせているのなら、そのまま放っておいてよいように思われる。

だがそれを告げると、ゲルダはきつと眦を釣り上げて反論した。

「なんと冷酷な！　つい昨日まで監獄にいた少女なのですよ？

侍女の職務どころか、建物の配置だって文字通り右も左も分からない、そんな子どもを満足に休ませもせず、初日から馬車馬のように働かせる法がありますか！」

「　まあ、正論だな」

「しかも、言いつけられた仕事をすべてこなしてしまったのだとしたら、あと残っている業務というのは……ユリアーナ様にお茶を振る舞うことだけなのです」

それを聞いて、さしものルーカスも整った眉をわずかに寄せた。

「新人いびりにしては、随分酷なことをするものだ」

「……ええ」

ゲルダは、「ユリアーナ様は、高貴な方でいらっしやるから」と、苦し紛れのフォローを呟いた。

ユリアーナ。

正式な名を、ジュリアナ・フィッツロイ。

ルーデン風とは異なる名前の響きからわかる通り、彼女は海峡を隔てたラトランド公国から嫁いできた、異国の妃だ。ルーカスの母でもある。

艶やかな金髪と深みのある藍色の瞳からなる美貌を見込まれ、正

妃に次ぐ第一側妃となった彼女は、思慮深く聡明な女性だったが、同時に冷酷で、自分の愛するものを傷つける事物に対しては、苛烈なまでの攻撃性を見せる人物でもあった。

ユリアーナの愛するものとは、第一に息子のルーカス。

そして第二に祖国の文化。

特に、昼下がりに茶を楽しむ習慣は、彼女にとってけして侵されてはならぬ至高のものであり、そこで失態を演じた侍女は、かけらの慈悲もなく馘首されるのが常であった。

「ユリアーナ様にお茶を振舞うのは、わたくしか、さもなければ勤続十年以上のベテランと決めていたのに……。イレーネは、元の当番であった侍女に嘘をついて休ませてまで、そこにエルマを宛がったというのです。お茶の飲み方すら知らぬだろうあの子が、ポットを取り落としてもしたら、どんな禍が起こるか……」

ルーカスは眉間の皺を深めた。

単なる叱責程度で済めばよい。

しかし母ユリアーナの場合、機嫌によっては徹底的に相手の精神を蹂躪するような振舞いをするのだ。

「紅茶を冷ましすぎたからと真冬のテラスに裸で追い出されたり、カップに羽虫が入っていたからと体中に虫を這わせられたり、そのような目に遭うあの子を、わたくしは見たくありません。万一のことがあった場合……ルーカス様。彼女を諫められるのはあなた様だけなのです」

苛烈妃・ユリアーナも、最愛の息子の頼みならば、いくらかは機

嫌を直してくれると踏んでのことである。

女の好みにはうるさいし、興味のないことには徹底的に手を抜くが、これで騎士道精神を叩きこまれているルーカスは、小さく肩をすくめると、歩調を速めた。

回廊を進み、聖堂の門を抜け、ユリアーナの居室に面している奥庭へと向かう。

ちょうどその瞬間、ユリアーナの興奮したような声が聞こえ、二人は険しい顔で目配せをしあったのだったが、

「……………え？」

慌てて庭へと踏み込もうとした瞬間、目に飛び込んできた光景に、ルーカスたちは言葉を失った。

3・「普通」のお茶汲み(3)

ユリアーナは苛立っていた。

こんな侮辱を受けるのは、ずいぶんと久しぶりのことだ。

「それで、今日わたくしにお茶を用意してくれるのは、あなただというのね？」

「恐れながら」

「グラーツ夫人でも、アマールエでもコリンナでもなく、今日が初出仕の、あなただと」

「さようでございます」

慇懃に頭を下げられて、ユリアーナは思わず扇をぱちんと閉じた。

隠居生活の いや、この息苦しい王宮生活での唯一の楽しみは今日、台無しになるのが確定したようなものだ。

ついため息が漏れる。

ユリアーナがこれまで、お茶の淹れ方を理由に侍女を多くクビにしてきたのは事実だ。

ただしその多くは、己と息子の身を守るためだった。

たとえばかつて、とある侍女を半裸で屋外に追い出したのは、紅茶に毒を仕込み、服の下に短剣を忍ばせていたためだった。

またある侍女を虫責めにしたのは、幼い息子の寝室に、彼女が毒虫を撒いていたからだった。

どちらも、第一王子フェリクスを確実に即位させたいという、とち狂った親心と妬心を炸裂させた、正妃の差し金だ。

ユリアーナは水際でそれを躲しつつ、正妃を糾弾することもまた避けた。

同時に、「苛烈妃」との謗りを受け、後宮内で孤立することも、自らに許した。

自分のもとに出入りする侍女が限られれば限られるほど、安全性は高まる。

結局、自分に仕える侍女たちは、極端にお人好しな侍女長を除けば、始終ユリアーナに怯える者たちばかり。実の息子すら、彼女の真意を理解しているかわからない。

だが、ユリアーナはそれで構わなかった。

悪評に胸を痛めるなど、命と尊厳が守られて初めてできることだからだ。

とはいえ、ヴェルナー王の崩御でフェリクスの即位がほぼ確定となり、正妃もようやく矛を収めたであろう今、もはや必要以上に悪評をばら撒くこともない。

ようやく、怯えている侍女にも、多少は優しく接することができ
る。そしていずれは、だいぶ綻んでいる息子や侍女長との関係も
修復をと思っていた矢先に、これである。

(……わたくしの大好きな紅茶は、このぱつとしない新米侍女に煮
詰められてしまうのかしら)

まずい茶を淹れられると不機嫌になること自体は、事実である。

ユリアーナは、目の前の侍女に懐疑的な視線を向けた。

簡素にまとめた黒髪に、顔の半分ほどもありそうな分厚い眼鏡。
服装は清潔なのに、どこか野暮ったい。

表情も乏しく、全体的に冴えない、平民上がりと思しき侍女

(……え？)

とそのとき、不思議なことが起こった。

エルマ、と名乗った少女が、すっと身を起こし、ほのかな笑みを浮かべたのである。

まるで、頭の上からぴんと一本の線で引っ張られたような、しなやかに伸びた立ち姿。

とたんに、どこか身の丈に合っていないようだったメイド服が、絶妙に体のラインに沿っているように見える。

均整の取れた、美しいスタイルだ。

ほんのりとした笑みを象る唇も、どうして今まで気付かなかったのかというほど、美しい形をしている。

左右が完璧に対象で、品のある口元である。

ただ背筋を伸ばして、笑みを浮かべただけ。

それなのに、目の前の少女が、冴えない平民から、急に典雅な貴婦人へと変身したかのように思える、それは劇的な変化であった。

「あなた……」

思わず、ユリアーナが扇を握った手を差し伸べかける。

しかし、エルマはふと空を見上げ、太陽の位置を確かめると、「
頃合いです」と静かに頷き、

「それでは恐れながら、お茶のご用意をさせていただきます」

庭にセツトされた椅子に腰掛けるよう、ユリアーナに向かって優雅に頭を下げた。

それから数十分の間起こったのは、すべてユリアーナの想像を超える出来事であった。

「お茶の銘柄はいかがいたしましょう。初摘みのレーベルクのほか、シュトルツ、クレーデル、お好みでハニツシュもご用意しております」

「そ、そんなに……？ しかもレーベルクの、それも初摘みですって？ ならばそれを」
「かしこまりました」

レーベルクの茶葉は、険しい山の山頂付近でしか取れない、流通量も限られた大変貴重な茶葉だ。

紅茶好きの貴族の多かった母国ならまだしも、ルーデン王国に嫁いできてからはほとんど口にすることがなかったため、ユリアーナは一も二もなく飛びついた。

それにしても、平民上がりとは思えぬ紅茶への精通ぶりだ。

「なお、ミルクは三種用意しております」
「さ、三種……？」

なにをどう三種なのかと思えば、牛の種類を取り揃えているのだという。

母国でもなかなか見ぬ充実ぶりである。

「レーベルク、それも初摘みですと、ミルクは加えなくてもよいくらいなので、最も風味の控えめなアーベライン種などお勧めでございます」

「で……、では、それで」

この時点で、もはやこの少女が淹れる紅茶は、母国の最高位貴族クラスのクオリティとなるに違いないと、ユリアーナは確信した。

「それはようございました。本日、アーベライン牛・モーリッツの機嫌は実に麗しく、ミルクも間違いないく最高の味わいでしょうから、

モーリッツ、カモン！」

「今から搾るの！？ とうるかその牛は今どこから現れたの！？」

いや、超すかもしれない。

ユリアーナは、牛に話しかけながら手際よくミルクを搾る侍女を、呆然と見つめた。

新鮮なミルクを確保し、牛を視界から丁重に追い出すと、続いてエルマは、滑らかな手つきで茶葉をポットに移し、傍から見ても間違いなく適温とわかる湯を注ぎ入れ、コジーをかぶせた。

蒸らす間、邪魔にならない程度の、かつ実に興味深い、軽妙なトークで場をつなく心憎さである。

そうしてあつという間に蒸らしを終えると、彼女は軽々と白磁のポットを抱え上げ、もう片方の手に持ったカップへと紅茶を注ぎ入れた。

折しも、陽光のまぶしい昼下がり。

空高くから差し込む祝福の光は、琥珀色の液体をきらきらと輝かせ、滑らかな軌跡を描きながら優雅にカップに収まっていく紅茶は、まるで天と地上とをつなぐ虹のようだった。

(う……美しいわ……！)

ただ紅茶を注ぐだけの行為の、その芸術性に、ユリアーナは頬を張られたような衝撃を覚えた。

「どうぞ、お召し上がりくださいませ」

やがて差し出された紅茶は 完璧だった。

そう。完璧。

色も、香りも申し分ない。

直感が告げている。ミルクなど加えず、まずはこのまま飲めと。

その声に従い、紅茶好きの妃は、逸る手つきでカップを掲げた。

ひと口含めば、舌に心地よい温度と繊細な渋みが広がり、飲み下せば優雅としか言えない戻り香を感じる。

なんとということだろう。

こんな、好みのだ真ん中を全力で仕留めに掛かってくるような紅茶、初めてだ。

「……………ああ……………！」

感極まって、ユリアーナは恍惚の叫びを漏らした。

「最高よ……！」

庭へと足を踏み出しかけたルーカスとゲルダは、その姿勢でしばし固まり、互いの顔を見つめた後、ふたたび庭で茶を嗜むユリアーナの姿を見やった。

美貌を険しい表情で固めていることの多かった彼女が、今や満面の笑み いや、陶然の色に頬を染め、叫んでいる。

心からの歡喜が漏れだしたと言わんばかりの面持ちは、傍目にも実に眼福で、見ているこちらの心まで洗われそうである。

「で……殿下の満面の笑み……？ なんなの……？ 幻覚なの……？」

ふと、斜め後ろから呆然とした呟きが聞こえる。

ぎよっとして視線を向ければ、そこには顔色を真っ白にした金髪の侍女 イレーネが佇んでいた。いや、佇んでいるというよりは魂が抜けたような状態で、茂みに半ば倒れ掛かっている。

憧れの第二王子がすぐ傍にいるというのに、しなを作る余裕もないようだった。

どうやら、ゲルダ侍女長からともに謝罪に参じるよう命じられたのち、一足先にこの場に到着し、ルーカスたちと同様硬直していたらしい。

微笑を見ただけで夏に雪が降ると言われる苛烈妃の、渾身の笑みを目の当たりにして、その激レア度に身震いしているようだ。

いや、厳密に言えば、イレーネに衝撃を与えたのはそればかりではない。

「四人が一日かけて完遂する仕事量を、午前中だけで終えたばかりか、そのすべてが完璧だなんて……」

ユリアーナの茶の準備よりも前にエルマがこなした仕事の数々が、ことごとく恐ろしいレベルで完了していることに、イレーネは心底
慄いていたのである。

しかも、紅茶を振舞うエルマにはかけらも疲労の色は見えない。

さらには。

「スコーンまで召し上がりましたら、続きましてこちら、本日のスイーツでございます。完成までの過程を楽しめるよう趣向を凝らし、あえてティースタンドにはセットせず、直接取り分けますこと、なにとぞご容赦くださいませ」

「まあ……！」

三人が見守る先では、エルマが恭しくスイーツの用意を始めるではないか。

それも、イレーネやゲルダはもちろん、ルーカスですら見たことのない調理器具がセットされたワゴンを押してきて　もはや、ここからなにが起こるのか、想像もつかない。

（なんだあれは……？　とろみのある生地と薄い鉄板を見るに、クレープでも作るのか……？）

第二王子として、古今東西のスイーツを口にしてきたルーカスは、辛うじてそんな当たりをつける。

が、エルマの行動は、それよりももう少しだけ上を行っていた。

「まずは口当たりよく、とろけるような柔らかなクレープを作り」

手際よくクレープを焼き、美しくひだを寄せながら鉄板の中央に集める。

「続いてアルコール度数の高い蒸留酒を振りかけ　なお本日は、香り高いグロースクロイツ産のブランデーを使用しております」

踊るような手つきで鉄板上のクレープめがけて瓶を傾け、エルマはさらにマッチの火をかざした。

「フランベ」

ポツ！

とたんに、美しい炎が天をめがけて飛翔していく。

「きゃあ！」

ユリアーナは悲鳴を上げ　といっても、恐怖ではなく歓喜の悲鳴だ　、息をつめて胸を押さえた。

「なんてこと……胸の高鳴りが、止まらないわ……！」

興奮のあまり、表情がもはや少女のそれになっている。

エルマは手早くクレープを皿に装い、フルーツやソースを散らして盛り付けると、手早く用意したほか二品のスイーツと併せてユリアーナに差し出した。

そして、くいつと眼鏡のブリッジを持ち上げた。

「本日の品は、東洋の神秘、スピリチュアル・禅センにインスパイアされた三部作。左から順に、『業カルマ』、『涅槃ねはん』、『悟り、その先へ』と申します」

なんかすごい名前付いてる！

ルーカスたち覗き見三人衆の心の声が、奇しくも一つになった。

「素晴らしいわ……！なるほど、人を魅惑し墮落させる馥郁たる香りを残しながらも一瞬の残像を残し消えてゆく炎というのが生まれながらにして人間に宿命づけられた禍々しくも甘美なる罪業すなわちカルマを表しているというのね……！」

「仰るとおりでございます」

しかも通じ合ってる！

ルーカスたちは、冷や汗を浮かべながら互いの顔を見合わせた。

『ああ……！なんとということなの、ルーデンの地を踏んでからはや二十年。いえ、ラトランド時代まで遡っても、このように含蓄に富む美しいスイーツに出会ったことはなかったわ！』

『過分なお言葉を頂戴し汗顔の至りでございます』

あまつ、興奮のあまり母語のラトランド語で捲し立てはじめたコリアーナに、エルマはがちりとミートしていくではないか。

語学堪能！？

再三、ルーカスたちは声をそろえて脳内で叫んだ。

が、衝撃はそれだけにとどまらなかった。

「あら、それにしても、ずいぶんと量が多いわね？」

我に返ったユリアーナがふと首を傾げると、エルマがひとつ頷き、かと思うと次の瞬間には、テーブルにあと三人分の席が追加されているではないか。

動体視力に優れたルーカスですら目を疑う、一瞬の早業だった。

まさか、と三人が息を呑むよりも早く、エルマが声を上げた。

「そちらの茂みにいらっしやるお三方。本日のこの陽気、さぞ喉も渴いておいででしょう。ユリアーナ殿下に申し上げます。ご令息ならびに侍女長、そして願わくは私の敬愛する先輩侍女に、ご相伴の栄誉を頂戴しても？」

ルーカスたちが覗き見していたことなど、お見通しというわけだ。いけしゃあしゃあと同席の許可を求められたユリアーナは一瞬きよとんとし、それからルーカスたちの姿を認めると、弾けるような笑い声を上げた。

「まあ！ あなたたち……！」

なにがそんなにおかしいのか、涙まで浮かべて笑っている。

「ええ。……ええ、そうね、そうしましょう。ふふ、……なんだか夢みたい」

本当は、ずっとこうしてみたかったの。

小さなラトランド語の呟きは、おそらくルーカスとエルマだけに聞こえた。

ついでに言えば、三人が初めて口にしたスピリチュアル・ゼン・スイーツは、どれも軽く昇天しそうなほどの美味しさであった。

4・「普通」のお茶汲み(4)

ひとしきりティータイムを楽しむと、やがてエルマは滑らかに会話を切り上げ、ユリアーナの御前を退出した。

成り行きで、ルーカス以下三人も同行する。

失態を演じるであろう新米侍女を救いに駆けつけたはずが、なぜか当人に完璧な紅茶と菓子を振舞われ、引率されて城に帰るという謎展開である。

四人は、本城へと続く回廊を黙々と歩いた。

予想外の事態が続きすぎて、三人からはなんと話題を切り出していかわからなかったためだ。

と、一番後ろを歩いていたイレーネが、なにかを思い切ったように顔を上げ、背後からエルマに駆け寄り、その腕を掴んだ。

「エ……エルマ！」

「なんでしょうか」

対するエルマは超然としている。

足を止め、じつとこちらを見返してくる新米侍女に、イレーネはうつと言葉を詰まらせ、それから、じりじりと喉から声を追い出すように詫びを口にした。

「その……今日のことは、申し訳なかったわ。私、あなたのことを見くびっていた」

「評価いただくような働きはしておりませんので、それも当然かと」「なにを言うの！ 四人分の仕事を半日でこなし、前妃殿下を破顔

させる完璧な紅茶を淹れることのできる侍女が、この大陸にどれだけいると言つたよ。あの、カルマとかいうスイーツも、心臓が止まりかけるくらい美味しかったわ」

直情型だし、気に食わない相手のことは即座に攻撃するが、同じ速さで反省し、素直に敬意を表現できるところは、イレーネの美点だ。

彼女は、エルマの腕を握りしめた手に力を籠めると、目を潤ませて言い募った。

「だからその……、こ、これからは、同階の侍女として……な、仲よく、して……してさしあげてもいいわ！」

とはいえ、下手に出るところまではうまくいかなかったらしい。顔を林檎のように染めながら、イレーネは、最後でやけくそのように顔を逸らした。

だが、懂れていたはずのルーカス第二王子をそっちのりで、この不思議な少女との友情を確保しようとするあたり、彼女がいかにエルマに夢中になっているかが伝わってくる。

「はあ、どうぞよろしくお願いいたします」

結局、そんなユルい返事であっさり申し出を受け入れたエルマを、ルーカスは片眉を上げて、ゲルダは微笑ましそうに見守っていた。

「ああ、それにしてもエルマ。あなたの有能さには恐れ入るわ！」

会話が一段落したタイミングで、ゲルダがそんな風に言って手を合わせる。

「語学力や、仕事の腕前そのものも素晴らしいけれど、なににわたくしが一番感動したって、その洞察力の鋭さだわ。ユリアーナ様のお好みを、まさか初回で見抜いてしまうなんて」

「いえ。茶葉やミルクのお好みは、直接お尋ねしただけですの。」「なにを言うの。ユリアーナ様はね、侍女には清潔と品を求め、会話には知性を求め、食事には味以上に物語を求められるお方なのよ。それを尋ねることもなしに、あなたは完璧に差し出してみせたわ」

さすが侍女長だけあり、表面的な腕前だけでなく、エルマのその辺りの察しのよさに気付いていたらしい。

ルーカスは隣で耳を傾けながら、たしかに、と内心で頷いた。

どうも、このエルマという少女は、ユリアーナの前では、自分が面談したときとは異なる雰囲気をもとっていたように見える。

清潔で、品があり、知的　つまり、ユリアーナにとっての理想の姿だ。

（相手や状況に合わせて、印象を操作している……というのは、考えすぎか？）

たとえば、女好きの男の前では興味を引かぬよう野暮ったく、庇護者となりえる人物の前では健気に、根が素直な同僚の前では超然と。

ちらりと視線を向けた先では、厚い眼鏡で素顔のほとんどを隠した少女が、淡々と謙遜の言葉を口に出している。

ルーカスはじっくりと彼女を観察し、その顔の骨格がずいぶん整っていることに、初めて気づいた。

「ねえ、そんなこと言わないで。わたくし、本当にすごいことだと感心しているのよ。あなた、いったいどうやってユリアーナ様のお好みを見抜いたの？」

「お顔を拝見し、思考を巡らせただけです」

「いやだわ、顔色を窺うだけで、そんなことができるものですか」「そうおっしゃられましても……」

エルマの洞察力の根源に興味津々のゲルダは、粘り強く質問を重ねている。

すると、困惑気に口を閉ざしたエルマが、ふと思い出したようにエプロンのポケットを漁った。

「そうでした 侍女長様」

「なにかしら？」

「こちら、庭師のハンス少年に代わってお返しいたします」

そうして差し出したのは ゲルダの瞳と同じ、琥珀色をした寶石をはめ込んだブローチだ。

今朝しがた、病気の母親の薬代がないと泣いていたハンス少年に、ゲルダが同情してプレゼントしたものである。

「え……？ なぜこれを、あなたが」

「あなたと話すとき、ハンス少年は必要以上にパーソナルスペースを詰めているようでした。親密感を演出するためです。また、母親の病気について説明する際には五秒もの間、彼はまったく目を逸らしませんでした。これはあなたが自分の嘘を信じているかを確認するためと思われます。事実、あなたが目を潤ませた瞬間、彼の上唇が頬に引っ張られるようにわずかに持ち上がるのが見えました。これは、侮蔑の感情を表す微表情です」

ほかにも軽微なサインは多数見つかりましたが、と、エルマは眼鏡のブリッジを押し上げた。

「彼は、あなたに詐欺行為を働いているとみなして間違いないでしょう。ひとまず今朝の被害分は、僭越ながら私が取り返しておきました」

「え？ え？ え……？？」

「お納めください。みかじめ料です」

「え……っ!？」

今、さりげに監獄コトバのようなものが出た気がする。

「え？ び、微表情って……みかじめ……いえ、待って、あなたいつたはどこから見ていたの？」

「侍女寮の四階です」

「ええ!？」

「どんな視力ですの!？」

ツツコミどころが満載すぎて、ゲルダが目を白黒させている。イレーネも仲良く叫びだすのをよそに、ルーカスは警戒心からわずかに眉を寄せた。

「……おまえの、その知識や洞察力の深さというのは、もしや看守……導師譲りなのか？」

看守と言いかけて、とつさに導師と言い換える。

イレーネの前で監獄育ちであることをばらすわけにもいくまい。

罪人に教育を施されたわけはあるまいが、看守の任に当たるような、優秀な導師から教えを受けたならば、まだ納得できる

そう考えての問いだったが、エルマはあっさりとそれを否定した。

「いえ。導師はただの飛べない豚でした。表情を読む術は、【怠惰】の父から教わったものです」

「……豚？ 怠惰な父？」

「いえ、【怠惰】の父です」

本人はまじめに答えているようなのだが、さっぱり意味がわからない。

困惑したルーカスが問いを重ねようとしたところ、それを制するように、エルマが首を傾げた。

「……と言いますか……」

眼鏡でよく見えないが、彼女自身どこか困った様子だった。

「微表情の読み取りくらいは、ままごとなどを通じて、どこの家庭でも幼少時から身に着けるものではないのですか。もしや……シヤバの方というのは、そのくらいのこともできないのですか？」

馬鹿にするのではけっしてない。

心底不思議そうな口調に、ルーカスたち三人は同時にぽかんと口を開けた。

4・「普通」のお茶汲み(4)(後書き)

本日から、8時と20時に1話ずつ投稿予定です。
どうぞよろしくお願いいたします。

5・詐欺師の娘

「ふふ、白の女王クイーンをもらったわ」

「騎士ナイトと歩兵ボーンもあつさり封じられてしまったか。やれやれ、君は女王を働かせすぎだ」

「愚鈍な王キングよりも、よほど身軽なんですもの」

ヴァルツァー監獄。

初夏の昼下がりであろうといつも薄暗いこの空間は、意外にも快適に整えられている。

もともと独房だった場所を十室分貫いた、広々とした居間。

丁寧に磨かれた床の上には、革張りのソファや重厚なテーブルセツト、さらには天鵞絨の絨毯が配置されている。

高い天井には、巨大なシャンデリアまでもが吊られていた。

どれも手入れが行き届き、監獄というよりは、王城の一室とでも表現したほうがふさわしいほどである。

今、その心地よいソファに背を沈めながら、二人の男女がチェスを楽しんでいた。

ひとりは、豊かな黒髪と空色の瞳が印象的な、精悍な壮年の男性。もうひとりは、美しく年輪を重ね、頬杖を突く仕草すら艶めいて見える、銀髪の女性。

十五の娘の母とはとても信じられない美貌を持った元娼婦　ハ
イデマリーは、ギルベルトから奪った白の女王にそつと口づけた。

「かわいいエルマも、今頃お城で女王様のひとりくらい陥落させているかしら？」

「ここを抜けたからと言って、王城に留まるとは限らないだろう」

「あら、あなたも賭ける？ わたくし、賭け事は得意よ？」

ふふつと笑いかけると、ギルベルトは無言で肩をすくめた。

このヴァルツァー監獄という名の帝国で、彼女に賭け事で挑みにいく愚か者はいない。

とそのとき、

「お茶が入りましたよ」

繊細な彫刻の施された扉が開き、銀のワゴンを押した男性が部屋にやってきた。

白髪混じりの灰色の髪に、同色の瞳。

質のよいシャツとパンツをまとい、細身のタイを締めたその姿は、柔和で知的な相貌とあいまって、まるで上位貴族に仕える執事のような上品さだ。

滑らかな仕草でお茶のセットを運び込む彼に、ハイデマリーは細く整った眉を上げた。

「あら、珍しいことね、モーガン。【怠惰】のあなたが、自らお茶を淹れてくださるなんて」

「あなたが、私のかわいいエルマを追い出してしまったからでしょう。せつかく私が、紅茶の淹れ方を含め、私の後継者となれるよう大切に育ててきたというのに」

やんわりと窘めるように言われ、ハイデマリーは傷ついたように胸を押さえた。

「追い出す？ ひどいわ。無力な罪人が、無辜むこの娘を解放せよとの勅命に逆らえるわけがないじゃない」

「表情筋が口調と仕草を裏切っていますよ。まったく……ヴァルツァーを掌握して並みの王族以上の権力を握っているあなたが、よくそんなことを言えたものです」

「『あなた』ではなくて、『私たち』の間違いでしょう？ ここは、私たち七人のお城よ」

「そうですね」

モーガンは逆らわなかった。事実だからだ。

十五年前、月の青褪める夜に彼らが静かに蜂起してから、この監獄はずっと彼らの快適な根城だ。

狂戦士の規格外の膂力で獄内を改装し、狂博士の指令のもと医療と衛生水準を異常なまでに引き上げ、反乱分子は芽が出る前に、誘拐犯が洗脳を施した。

モーガンはなにをしたか？

なにもしなかった。面倒だからだ。

彼はただ、おいしい紅茶を飲めるようになるならばと、他の仲間たちが躍動するのを「邪魔しなかった」だけ。

ラトランド公国の寒村が生んだ稀代の詐欺師・モーガンは、かつて貧しさのために家族全員を失ったそのときから、生に熱意を燃やすことをやめていた。

立身出世を夢見て蓄えた知識も、するりと人の心に入り込む術も、

必要なときに間に合わなければまったくの無駄である。

彼はただ淡々と、無為に贅をため込んでいる貴族たちを口車に乗せ、金を巻き上げることで暇つぶしをしてきた。

けっして自らの手を汚しはしない。あくまで自分は「働きかけ」で、傍観するだけ。

怠慢を罰するのに、こちらが勤勉になるのもおかしな話だからだ。

ただ、そう。

十五年前にこの場で生まれ、その日のうちに無垢な笑顔を見せてくれたエルマのことだけは、彼なりに愛情を注いで育ててきたつもりだ。

コミュニケーションに不可欠な食事のマナー、心を解す紅茶の淹れ方。

微表情の読み方までも。

人の感情を掌握し、操作できるようになれば、彼女の人生はきつと、とても楽になる。

今のモーガンの人生のように。

高みの見物を決め込みながら、表情を読み、口先だけで人を動かす詐欺師。実に怠惰ね。

出会ったばかりのころ、ハイデマリーはモーガンのことをそう評した。

彼女が面白がって、自分を含む七人に大罪の名を当てはめたため、仲間内ではすっかり、罪の名で呼び合う習慣ができてしまった。

エルマは律儀に、周囲のことを「【怠惰】のお父様」、
「【貪欲】のお兄様」などと呼んでいたから、家族とはそういうものだと思っ
込んでいるかもしれない。

「そうそう、【暴食】のイザークも荒れていましたよ。せっかく、
『その一撃、龍をも倒す』というレベルにまで仕込んだのに、なん
とということをしてくれるのかと。厨房の戦力が減ったから、しばら
く肉料理はお預けだそうです」

「ねえ、待つて？ 人の娘に、彼はなにを仕込んでくれたの？ 嫁
の貰い手がなくなってしまっじゃないの」

モーガンが紅茶を注ぎながら告げると、ハイデマリーはいかにも
迷惑そうに銀の髪を掻き上げた。

ほんの一瞬強張った眉間と上唇は、真実不快を呈しているように
も見えるし、しかしわずかに瞳孔を広げた猫のような瞳は、事態を
面白がっているようにも見える。

実はこの女性の表情だけは、モーガンも判別をつけかねることが
多かった。

それもまた、彼女の魅力のひとつだ。

「ま、いいわ」

ハイデマリーは、差し出された紅茶を礼の言葉とともに受け取る
と、すうつと香りを楽しんだ。

「だからこそその巢立ちですもの。課題は難しいほうが、あの子もや
る気が出るでしょう」

「課題？」

向かいで盤面を睨みつけていたギルベルトが、わずかに首を傾げ
る。

するとハイデマリーは、カップに口づけながら、ふふつと静かに

微笑んだ。

「ええ。『普通の女の子』がどついつものか、世界を見ていらっしやい。それがわかるまでは、おうちに帰ってきちゃだめよ、って」

彼女の吐息は琥珀色の紅茶を揺らし、淡く、ゆらりと、波紋を広げていった。

5 ・詐欺師の娘（後書き）

次話より、【大食】仕込みの料理回となります。

6・「普通」の手料理（1）

『くそっ！ どいつもこいつも！』

ジョルジュはコック帽を投げ捨て、短く整えた鳶色の髪をがしがしと掻きむしった。

どすのきいたモンテーニュ語の悪態に、餌をついばんでいた鶏の何羽かが、ばさばさと翼を揺らして飛び去って行く。

ここルーデン王国は、彼の故郷とは異なり、昼は簡素に済ませる。慌ただし朝食を終えてしまえば、晚餐の下ごしらえを始めるまでは料理長とはいえ暇が許され、だからこそジョルジュも鶏小屋で油を売ることができた。

ついでに、部下の陰口を盗み聞いてしまうことも。

『誰がお高く止まってるって？ てめえらのレベルが低すぎんだよ。老害だ？ 笑わせんな、俺はまだ四十代の男盛りだっつーの！』

日に十時間以上フライパンを揺らすことのできる、強靱な腕を柱に叩きつける。

モンテーニュ男には欠かせない顎鬚、引き締まった体躯は、祖国では浮名を流すのに一役買ったものだったが、なにかと粗忽なルーデン王国においては、それも無意味に思われた。

ジョルジュ・ラマディエ。

愛と美食の国モンテーニュから、第一王子フェリクスの肝いりで招聘された料理長。

それが彼だ。

だが実際のところ、祖国の厨房で権力競争に敗れたために、彼が「都落ち」したにすぎないことは、うすうす誰もが気付いている。

でなければ、いくらルーデンが大陸一の先進国とはいえ、美食の都・モンテーニュから、わざわざ料理人が国外に出ていくはずもないのだから。

ルーデンは武に優れた剛の国。

そのぶん、料理文化では後進国といっている。

それでも、苦虫を噛み潰す思いで引き抜きを受け入れたのは、宮廷料理長という肩書を維持したいというプライドのためだった。

二国間では、言語も方言程度にしか変わらないから、こちらがモンテーニュ語しか話せなくても、なんとか意思疎通はできる。そういう目算もあった。

だが、先月王城入りを果たしてから、ジョルジュのプライドと目算は、すでに何度も八つ裂きの目に遭っていた。

まず、職務内容が異なりすぎる。

宮廷料理長といえば、祖国では高貴なる方々への美食を提供するのが役目だった。

だがここでは、王族の食事だけでなく、下働きの賄いづくりまでも監督を任される。

設備もなっていない。

人手も不十分だ。

食材の鮮度はまあまあいいが、そのぶん調理技術が原始時代で止

まっているようにしか思えない。

じゃがいもをふかして塩を掛けただけのものや、塩辛すぎる腸詰めを固すぎるパンに挟んで、平然と「食事」として食べているあたり、ジオルジュからすれば暴挙としか思えなかった。

茶の文化は側妃がラトランドから持ち込んだためか、多少ましと言えるが。

あげく、彼を引き抜いたフェリクス王子は、現地ルーデンでは「凡愚王子」との評判だ。

おかげで、ジオルジュがなけなしのモチベーションを掻き集めて、厨房で改革を起こそうとしても、誰もついてこようとしらない。

『俺の料理より、侍女の賄いのほうがうまいだと……！？』

彼は苛立っていた。

本来、料理長の立場とは貴族にも等しい。

その身分の違いを乗り越えて、こちらの偉大さをわからせてやろうと、下働きの食事もうまいものを用意してやったのだ。

料理長であるジオルジュ自ら包丁を握り、食文化のなんたるかを教え込んでやるつもりで三百食以上をこしらえた。

にもかかわらず、丹精込めて作った繊細の美食の数々を、彼らはさして感謝も感動もせずに流し込み、むしろ、「こんなものか」「これなら、新入りの侍女が作った飯のほうがうまい」などと言いはじめたのである。

とうてい、受け入れられない事態であった。

『侍女……新入りの侍女……たしか、エルマといったな』

分厚い眼鏡をかけた野暮ったいルーデン女が、彼の不在時を狙って何度か厨房に出入りしていたのを、ジヨルジュは知っていた。

これが祖国ならば、女の身で厨房に踏み入る不遜をどやしつけるところだ。

神聖な火を扱う竈に、不浄の女が近づいてはならない。

女性を愛でる文化と、女性を卑しむ精神は、ジヨルジュの中で矛盾なく存在していた。

聞けば、エルマとかいう少女は、侍女長である子爵夫人と仲が良く、その夫人が第二王子の乳母を務めていたことから、色男と評判の第二王子とも懇意であるらしい。

ときどき王子や、その母であるユリアーナ前妃から頼まれて、軽食や菓子を振舞っているとのことだった。

高貴な人の胃を満たす、大切な役割。神聖な職場。

それを土足で踏み荒らす、分を弁えないガキ　つまりそれが彼女だ。

ジヨルジュに、女子供だからと目こぼしをするつもりはなかった。むしろ、格下の存在だからこそ、大人の男であり料理長である自分が、きちんと指導し誤りを正してやらねばならないと思った。

『……一丁、締めとくか……』

ジヨルジュは馬鹿にするような鳴き声を上げた鶏を睨みつけ、スープの出汁にすべく、ぐいと乱暴に首根を掴んだ。

6・「普通」の手料理(1)(後書き)

このあと、ジャンル別1位御礼にもう1話更新させていただきます。
どうもありがとうございます。

7・「普通」の手料理(2)(前書き)

中途半端な時間ですが、ジャンル別1位御礼にもう1話！
乗せられやすい作者で恐縮です。

7・「普通」の手料理(2)

二週に一度だけ巡ってくる夜番を終え、昼前になってようやく職務から解放されたエルマは、寝台に横になるべく淡々と準備を進めた。

ブリムとエプロンを外し、団子にまとめていた髪を解く。

艶やかな黒髪が肩を流れ落ちるのを細い指で掻き上げながら、メイド服を脱ぎ、寝間着へと着替える。

靴も脱いで寝台に上がり、下半身を薄手の掛け布団にうずめた状態で、ようやく眼鏡を外した彼女だったが、ふと顔を上げると、すちやっと眼鏡を装着しなおした。

そのとたんに、

「エルマー！」

ノックもなしに寮室の扉が開き、ひょこつと金髪の同僚 イレーネが顔を出す。

猫のような緑の瞳で無邪気にエルマを見つめ、彼女が眼鏡を着けたままであることを理解すると、イレーネはちっと舌打ちを漏らすようなそぶりを見せた。

「……あと十秒早かったようね……。寝る前はさすがに眼鏡を外すと思ったのに」

「あのような足音を響かせられては、寝ていたままでも気配に気づいて眼鏡を掛けなおせます」

「最大限足音を殺してきたわよ！」

イレーネはむっと頬を膨らませる。

初日ですっかりエルマに敬服した彼女は、ボスと認めた相手に忠誠を尽くす犬さながら、以降べつたりとまとわりついてきているのであった。

特にここ数日は、エルマの素顔を見ようと躍起になっているようである。

「私たち、と……友達、でしょう！？　友達にまで素顔を隠す法ってないわ」

「侍女長より禁じられておりますので」

友達、の単語で恥じらいながらも、懸命に食い下がるイレーネに、エルマは淡々と答えた。

そう、彼女は初日、ユリアーナ前妃にお茶を振舞った後、グラーツ子爵夫人ゲルダに別室に呼ばれ、懇々と諭されたのである。

いわく、普通の家庭では人の表情を微細に読み取ることなど教えない。

主人の心を押し量ることは侍女の美德だが、感情どころか思考を察知し、つまびらかに解説するようなことをしては周囲を怯えさせってしまう。

それは「普通」ではないと。

ゲルダの説教を聞きながら、エルマは獄内での、とある日常のコマを思い出していた。

いいですか、エルマ。私のかわいいお嬢さん。

今のあなたは「生活に疲れ夫の浮気を疑いながらも子どもには笑顔を振りまく母親」の役です。

頬の筋肉はもつとぎこちなく、瞼は時折わずかに痙攣し、笑みは左右非対称になる。

そのことを意識して、はい、もう一度やってみましょう。

はい、たいだのおとうさま。

かつて【怠惰】の父・モーガンは、幼い自分のままごとに根気よく付き合い、丁寧な演技指導をしてくれたものだったが、世の父はそんなことをしないのだという。

というか、父が複数いるというのも「普通ではない」ことなのだろう。目から鱗とはこのことだ。

エルマはあの監獄の中では、かなり真つ当な神経と常識の持ち主だと自負していたが、なるほど母の言う通り、シャバにはシャバのルールがある。監獄の常識は世の非常識と考えたほうがよさそうだ。

ひとまずエルマは、職務的にも人間的にも信用されているゲルダの言うことを、全面的に信じようと考えた。

そのゲルダは、説教の最中、相手の素顔が見えないことが気になったようで、エルマに眼鏡を外すように命じた。

粛々と従ったエルマだが、しかし、侍女長はたつぷり呼吸五分分ほど黙り込んだ後、顔を真っ赤にしながら、「や、……やはい、眼鏡は掛けておきなさい。あなた、その素顔を殿方には……いえ、同性もね、とにかく誰にも見せないほうがいいわ」と、再度装着を命じたのである。

逆らう理由もなかったので、以降エルマはその命に従っている次第である。

「まったくもう、融通がきかないのだから。まあいいわ、今日は珍しく髪を下ろしたところが見られたから、それで勘弁してあげる。きれいな髪ねえ。どうやってお手入れしているの？」

「蜂蜜をベースにしたトリートメントを調合しております。気になるようなら、あとでレシピを差し上げますよ」

「まあ、ぜひ欲しいわ！」

イレーネは寝台に乗り上がって髪を掬い取ったり匂いを嗅いだりと、こちらの研究に余念がない。

ついでに言えば、エルマを寝かしてくれる気もなさそうだ。

「あの。本日はこのまま非番なので、できれば八時間ほど眠りたいのですが」

「だめよ」

下手に出ると、イレーネはにっこりとそれを却下した。

「私、これからお昼なの。一緒に食べに行きましょう？ 寝るのはお腹を満たした後よ」

若い男ならころつと落ちてしまいそうな、魅力的な笑顔。

しかしエルマにその気はなかったので、むしろ警戒心も露わに掛け布団を引き上げた。

「……そうやって、成り行きでまた私に料理をさせる気でしょう。その手には乗りませんよ」

「あら、ばれてしまったわ」

小悪魔がぺろりと舌を出す。これで彼女はなかなか強かな策略家

なのだ。

どうやらお茶会を機にすっかりエルマの料理の腕に惚れ込んでしまったらしく、「普通」のワードをちらつかせれば高確率でエルマが従つと気付いてからは、なにかと料理をさせに追い込んでくるのである。

微表情を読めば、嘘かの見分けくらいは付くのだが、「あなたの作る料理が食べたいの！」と懇願する様子はいつも心底本気のようなので、これでなかなかお人よしのエルマは、つついその口車に乗せられてしまうと、そういうわけだった。

「ですがさすがに、熊の解体ショーを披露したり、巨大鍋を铸造するために裏庭に反射炉を作ったのは、やりすぎのようでした。おかげで侍女長に叱られてしまったではないですか。イレーネのせいです」

「……正直、それは私の想像の範疇を超えていてよ」

常識と非常識の判別がつかず、過剰なスキルを持ち合わせたエルマは、「うっかり」文化水準や価値観に激震を走らせるようなことをしでかしてしまうのである。

当時の騒動と、そのたびに火消しに奔走していたルーカスや侍女長の姿を思い出し、イレーネも少しばかり遠い目になった。

が、そこはそれ。

切り替えの早さに定評のある彼女は、懲りずにエルマの手を取って頼み込む。

「ねえ、お願いよ。私、さっぱりとしたスイーツか野菜、さもなければがつつりとしたお肉か魚が食べたいわ。つまりなんでもいい。な

んでもいいから、あなたの料理が食べたい」
「自分に正直な人ですね……」

眉を寄せながらも、腕は振り払わない。
全力でこちらに飛び込んでくるイレエネとのやりとりは、存外心地よかった。

これがシャバの友情というものなのかもしれない。
だとしたら、彼女は友人第一号なわけで、その意思はできうる限り尊重するというのが正しいシャバ的交友の在り方であろう。

彼女の要望を叶えるなら、シャーベットなどどうだろうか。
反射炉のときは、巨大な設備を個人が公有地に造ったために叱られてしまったが、小ぢんまりと塩と氷を使って凍らせるぶんには問題ないだろう。

ただ、凍ってなお甘みを感じさせるには、王宮の砂糖だとやや質が悪いので、こっそり上白糖を精錬してしまおう。
そうだ、野菜が好きということなら、遣伝子改良した野菜を育てておくのもいいかもしれない。

エルマ自身、フルーツのように甘いトマトは傑作だと思っていて、城にもこっそり苗木を持ち込んできていた。あれを食べさせてあげよう。

菓子作りに園芸。

これなら「普通の女の子」の趣味の域内だ。問題ない。

エルマは冷静にとち狂った思考を展開し、やがて頷いた。

ちなみに夏場の氷は貴重品だし、砂糖の精錬度もトマトの糖度ももちろん王宮にあるものが現在の大陸における最高品質のものである。

る。

彼女が「趣味」を実行すると、もれなくルーデンの製菓と農業の歴史が動くことになるはずであった。

「わかりました。では」

しかし、彼女が再度伝説の域に足を踏み入れかけた、その瞬間。

「エルマ！　そこにいるわね？」

慌ただしいノックの音とともに、再び寮室の扉が開いた。礼儀に欠けた振舞いの主は、なんと意外にも侍女長・ゲルダである。

彼女は、人の好きそうな柔らかな顔に、珍しく焦りの表情を浮かべて、エルマを窺った。

「非番の日にごめんなさいね。ちょっと　　やっかいなお客様が、侍女寮の前でお待ちなの」

8・「普通」の手料理(3)

「まあ、ルーカス。珍しいのね、あなたがこの手の誘いに乗るだなんて」

「母上こそ。後宮にいたときは、イベントごとにはちらりとも興味を示さなかつたくせに、まさか王宮の庭を貸し切つてまで、こんな催しを開くとは」

巨大な噴水や温室、完璧な形に整えられた植栽を誇る、ルーデン王国の庭園。

祝祭日には騎士団のパレードが行われる、その広大な広場の片隅で、ユリアーナはにこやかに息子を迎え入れた。

アイアン脚の白テーブルに、巨大な日よけの傘を掲げる侍従、野外でも快適に過ごせるような、つばの広い帽子と手袋をつけた装い。一見すると、息子を招いてのガーデンパーティーのようにも見える。

が、明らかに普通と異なるのはその配置、そして「ギャラリー」の存在だった。

噴水の傍には、石畳で四角く整えられた、まるで舞台のような空間が左右に二つ。

石畳の上には、腰ほどの高さの広い調理台と簡易の竈かまど、そして汲み置きの水を湛えた巨大な甕かめが左右対称にしつらえられている。

ユリアーナは、ちょうどそれを見つめる観客席のような位置に腰

かけていた。

さらに、彼女が先頭になるような形でロープがぐるりと張り巡らされ、その後ろには、王宮中の使用人たちがひしめいている。

侍女に侍従、馬丁に料理人、洗濯女、衛兵……とにかく、時間に都合をつけることのできた全員とっていい。

彼らは一様に、隠しようのない興奮をにじませながら、「舞台」に役者が登場する瞬間を心待ちにしていた。

「王宮内で最高の料理人の座を掛けた競い合い……。今度はいったい、なにがどうしてこんなことになったんだ……」

用意された椅子にどさりと腰を下ろし、長い足を優雅に組みながらルーカスがぼやく。

ユリアーナの傍に控えていた侍女長は、そのげんなりとした呟きを聞き取って、肩身が狭そうに頭を下げた。

「申し訳ございません。さすがにわたくしも、ここまでの事態になるとは思わなかったのです……」

事の起こりは、一日前。

ゲルダが、侍女寮の前に仁王立ちするジョルジュ・ラマディエ料理長に遭遇したときまで遡る。

男子禁制の寮に今にも突撃しそうだった彼は、聞けば、エルマなる少女に物申したいことがあるのだという。

料理人の資格を持たず、あまつさえ女の身でありながら厨房に踏み入り、その領分を侵したことに、謝罪を求めたいというのだ。

調理どころか、反射炉の製造まで心当たりのあった侍女長は、慌ててエルマを呼び出し、頭を下げさせたのだが、その際彼女がぼつりと漏らした、

「料理は、資格や性別ではなく、おいしいものを作れる人が作ればよい、という考え方は『普通』ではないのですね」

という発言に、ジョルジュが大激怒。

『俺よりおまえのほうが、うまいものを作れるというのか！？』

とこんな感じで、どちらがより料理上手か対決しよう、という運びになってしまったのである。

聞き取りづらいモンテニユ語であっても、明らかな憤怒が伝わってくるくらいの怒声であったとは、ゲルダの言だ。

ジョルジュは料理人としての威信をかけ、自分の料理が高貴なる方々の舌に合わないというのなら、料理長をやめたついでに宣言した。

だがそうになると、彼を引き抜いてきた第一王子フェリクスの体面にもかかわる。

とすれば、その判定は宮中の使用人ではなく、王子本人にしてもらったほうがいい。

ところが、いざそれをゲルダが上奏したところ、凡愚王子と評判のフェリクスは、けんもほろろに「それは、いやだよ」と断ってしまったのである。

なんでも、ただでさえ即位前の慌ただしい時期、「そんなくたら

ないいざこざのために」、下賤の侍女が作る料理を口にするのが面倒だとのことだった。

「義兄上……」

話を聞いていたルーカスは、つい額を押さえた。

即位前だからこそ、使用人相手とはいえ宮中の支持を集めるのは重要なことだ。

侍女の料理を口にしたくないというのなら、「勝負するまでもなく、ジヨルジュ・ラマディエこそがこの城の料理長だよ」と認めてしまえばそれでよかったのに。

ともあれ、断られてしまったなら仕方がない。

ゲルダは安堵半分、ジヨルジュにこの話はこれで打ち止めにと持ち掛けたのだが、頑固な彼は、こう返したのだ。

この城には、あなたと懇意の「高貴なる方々」が、まだいるだろうと。

ユリアーナ前妃とは二十年来の付き合いであるゲルダは、そこでしぶしぶ、彼女に経緯を説明した。

警戒心が強く、これまでこの手の騒動にはけっして関わろうとしなかった彼女のことだ。

きつとうまいこと、断ってくれると踏んでのことだったのだが

「あら、面白そうね。わたくしもエルマの料理を出来立てで食べてみたいわ」

なんと予想外にも、思い切り話に乗られてしまったのである。

エルマとの茶会を経てから、いろいろ吹っ切れてしまったらしい彼女は、「なんなら、ほかの使用人たちにも食べてもらいましょう」「宮中の全員に声をかける?」「よし、ならば庭を貸し切つてしましましょう」と、むしろ話を広げる有様であった。

気付けば、宮中の使用人を集めて、大々的な「どっちの料理シヨ」を開催する羽目になっていたと　　そういうわけである。

「なぜ、あの娘が関わると、こつも突拍子もないことばかりが起るんだ……」

騎士団の式典準備を抜け出して駆けつけたルーカスは　　まあ、面倒ごとをフケること自体は彼としても歓迎だったのだが　　、これまでのあれこれを思い出して、男らしい精悍な容貌をしかめた。

「まあ。女の子と見るや片っ端から口説いていたあなたが、まさかあの子は気に食わないというの?　　殿方というのは、意外性のある女性に惹かれるものではなくて?」

「お言葉ですが母上、私にだって好みはあります。それに男の好む意外性というのは、眼鏡を外したら意外に美人だったとか、気丈な女が実は酒に弱かったとか、その程度のことを言うのです。彼女のあれは、意外性などではない。いつどんな風に爆発するかわからない地雷のような、迷惑きわまりないただの予測不能性だ」

ルーカスはぶすつとした表情で言い返す。

王子でありながら騎士団に所属し、ときに下町に繰り出して庶民と友情を結ぶ彼のことを「型破り」とか「常識外れ」だと評する声は多く、ルーカス自身それを受け入れていたが、「普通」の二文字

を渾身の力でかなぐり捨て、少女の姿を見て、今では思っ
自分^{エルマ}はまったくもって、常識人だと。

眼鏡を外すと、のあたりで、ゲルダはちらりとルーカスの顔を見
たが、不機嫌そうに舞台を見つめる王子は、それには気付かなか
た。

「彼女が宮中にやってきてから、俺は反射炉の後始末をしたり、熊
の解体技術にほれ込んだ獵友会に付きまとわれたり、さんざんです」

ほかに、とにかくエルマのスキルがなにかと凄まじすぎて、皿
を焼けば国宝級のものが出来上がるし、土いじりをさせれば古代生
物の化石を掘り当てるしと、そんなことばかりなのだ。

彼女を宮中に引き入れたのはゲルダとルーカスだが、侍女長には
手の余ることばかり起こるので、ルーカスがやむなくこれらの処理
に当たることになる。

だが、秘密裏に皿を売り払えば「稀代の陶芸作家、現る！」と街
がざわめくし、こっさり化石を学院に寄付すれば「そのとき歴史が
動いた！」と調査団が王宮まで押し寄せてくるしで、最近の彼に心
の休まる暇はなかった。

「あらまあ。でも、そんなことを言いながら、こうしていそいそと
この場にやってくるんですもの。あなただって本当は、彼女のこと
を気に入っているでしょう?」

「まあ、料理の腕前は、ですね。それに、新しい料理長がどん
な人物かも、気になっていましたし」

ルーカスは形のよい唇を片端だけ吊り上げ、肩をすくめる。

新たに雇われたモンテーニュ人の料理長はよい仕事をしていると思うが、宮中で孤立しているようなのが気に掛かっていた。

異母兄の手前、接触は避けていたが、今回こうして彼に突き放されてしまったのならば、これを機に親交を深めてもいいかもしれない。

食の安全を握る人物と仲よくなっておくことは、なにかと毒殺のリスクを持つ第二王子にとって、非常に有益だから。

ルーカスはこれで、人間関係に慎重な計算を払う男である。

「おっと、お出ました」

そのとき、ギャラリーがざわめいて、ジョルジュ　ルーデン風に発音するならば、ゲオルクGeorgがやってきたのがわかった。

ルーデンでも普及しはじめた高いコック帽を身に着け、首元には料理長の地位を示す赤いチーフを巻いている。

たくましい腕に短く整えた髪。

モンテーニュ人らしく感情の起伏が激しい御仁のようだが、鋭い眼光や伸びた背筋からは、仕事への矜持が感じられる。

悪くない面構えだと思った。

『ユリアーナ前妃殿下、ならびに、ルーカス王子殿下。このたびは、審議の榮譽を賜りましたこと、礼を申し上げます。我が技術の粋を集めし品、どうかご賞味賜りますよう』

ジョルジュは帽子を取って一礼する。

プライドの高いモンテーニュ人らしく、王族の前であってすら母国語のままだが、堂々と発言する態度はかえって潔いほどだった。

「許可します。あなたの忠誠と腕を期待します」
「楽しみにしている」

母に続いて、ルーカスは端的に答える。

ここではユリアーナが主催者。彼女の進行を妨げてはならない。

満足そうに頷いたユリアーナは、扇子をぱらりと広げて言い放った。

「ゲオルク　いえ、ジョルジュ・ラマディエ。仮にあなたがこの対決に勝ったならば、わたくしはあなたを後見し、息子ルーカスやフェリクス殿下とともに、この宮中での立場を約束いたしますよう」

凡愚王子フェリクスだけでなく、人望ある第二王子、およびその母親からも庇護を約束するというわけだ。

これでジョルジュは、フェリクスに見放されたとしても、または逆に彼がフェリクスを見捨てたとしても、宮中で一定の権力を確保できる。申し分のない褒賞であった。

ジョルジュもさすがに興奮をにじませ、深く頭を下げている。

やがて彼は意識を切り替えたのか、てきぱきとした動きで準備に取り掛かった。

この世の贅を尽くしたといわんばかりに、二人分とは到底信じられない多彩な食材を運び込み、竈を温めはじめ。

一方、左側の調理場には、挑戦を受けたはずの侍女がまだ姿を見せなかった。

料理長という目上の人物との対決、それも王族の御前でありながら、あまりに誠意に欠けた態度だ。

不審に思った使用人たちが、徐々に囁きを交わしだす。

だが、

ざわっ！

それらを押しよける勢いでざわめきが広がり、ルーカスは顔を上げた。

そして、彼らの視線の先にある光景を理解して、ぎよっと目を見開いた。

ぎし、と鈍い音を響かせて、ゆっくりと台車を押してくるのは、分厚い眼鏡が印象的な野暮ったく小柄な侍女。

ちょうど昼に差し掛かる初夏の陽光を浴びながら、まっすぐ前を見つめて進む様は、まるで花道を抜ける役者のようであったが、それよりなにより、周囲が突っ込まざるをえない、異様な存在感を誇る物体があった。

台車に乗せられた、大型の調理器具と、大量の小麦粉。
これはわかる。

同じく、大量のキャベツと調味料。

これもわかる。

大量の固そうなパン。

これも、粗末さが気に掛かるものの、まあ、わかる。

巨大なまぐる。

「!?」

ルーカスは思わずその場に立ち上がった。

「そんなものをおまえ、どこで手に入れてきた

!?」

8・「普通」の手料理(3)(後書き)

総合日刊1位御礼に、本日中にもう1話更新させていただこうと思
います。

どうもありがとうございます。

9・「普通」の手料理(4)(前書き)

総合日刊1位御礼に投稿させていただきます。

の…乗せられ、やすい、作者で、恐しゆ…く…(疲労困憊)
誤字が多かったら申し訳ないですが、楽しんでいただけますと幸いです。

9・「普通」の手料理(4)

「そんなものをおまえ、どこで手に入れてきた　!？」

巨大なまぐろ。しかも、まるまる一本だ。

推定体重、大の男五人分。

熟練の漁師が総出で仕留めにかかるような、もはや伝説級といつていいサイズである。

目は黒く、ひれはぴんと張りを残し、体表は濡れたような輝きを帯びていた。

新鮮だ。

「昨日が非番でしたので、近海まで漁に出ておりました。食いつくまでは早かったのですが、重量の関係で釣り上げるのに五時間の死闘を要した結果、この場に少し遅れてしまいましたこと、平にお詫び申し上げます」

「エルマ……あなた……」

しよっぱなから想定を大気圏外にぶっ飛ばす暴拳に出られ、一同が言葉を失う。

が、ユリアーナの滑らかな頬は、どこか上気しているようだった。

そこはきゅんとするところじゃないだろう。

ルーカスは母に言いたかった。

大いにペースを崩された周囲をよそに、寡黙な侍女は淡々と準備を進める。

「ごろ、と鈍い音を立ててまぐるを調理台に転がしてから、彼女はメイド服の裾を摘まみ上げて、しずしずと頭を下げた。

「侍女エルマ。僭越ながらも、シヨルジュ・ラマディ工料理長の胸を借りる気持ちで、誠心誠意心づくしの品を作らせていただきます。高貴なる方々のお口に、どうか合いますよう」

「きよ、許可します。あなたの忠誠と腕を期待していてよ……!」
「……安全を第一に優先するよう」

ルーカスの言葉には、つい本音が滲んだ。

(「冗談じゃねえぜ……」)

一連のやり取りを見守っていたシヨルジュも、さすがにしばし呆然としてしまった。

(料理人歴三十年を通したって、あんな巨大なまぐる、見たことねえぞ。……だが、そうか。魚なら新鮮でさえあれば、そのまま出しても「うめえ」となる。考えたな)

ルーデンやモンテーニユでは、魚を刺身で出すことはしないが、酢や油で和えたマリネやカルパッチョのような料理は好まれる。軽く炙って塩を振るだけでも美味しいだろう。

あれだけ大きければ、卸し方に失敗してもいくらでもやり直しがきくし、あの巨体から究極にうまい部位だけを使用してみせるといっても、かなりインパクトのあるパフォーマンスだ。

(「……やるじゃねえか」)

だが、こちらとて負けはしない。

権力競争のような腹芸は苦手だが、腕には覚えがある。
グルメと名高いモンテーニユの王侯貴族たちを唸らせてきた経歴は伊達ではないのだ。

ジオルジュはコック帽を直して気合を入れ、調理に取り掛かった。

初夏にふさわしく、作るのはじゃがいもの冷製スープだ。ヴァイシソワーズ

じゃがいもといえばルーデンの国民食。

ふかして食べるしか能のないルーデン人に、モンテーニユの料理文化の神髄を見せつけてやるつもりだった。

事前に目利きした二種類の玉ねぎを、たっぷりのバターで炒め、均一に薄切りにしたじゃがいもを放り込んでいく。

焦がすことなく素材の甘さを引き出す加熱法、鶏と香味野菜でじっくりと味を深めた秘伝のブイヨン、隠し味に加える最高級のシェリー酒。

どれもモンテーニユで研鑽を積んだ自分だからこそ実現できる、最高の技術であり味わいだ。

その手際の鮮やかさ、そしてかすかに漂いはじめた食欲をくすぐる匂いに、ギャラリーがほうつと息を呑んだ。

のも束の間。

「そちらの、茶色いベストをまとった馬丁さん。それから、真新しい胸当てを付けた衛兵さん。そう、あなたです。もう少し右に避けていただけますか。危ないですよ」

左の調理場から繰り出される謎の指令に、人々は困惑の声を上げた。

もとより、調理場と観客席の間にはずいぶんと距離がある。
怪訝に思いつつ、侍女から醸し出される不思議な迫力に吞まれ、
彼らが場所を移動したとたん、それは起こった。

「では、解体します」

ざんっ！

エルマが眼鏡のブリッジを押し上げ、おもむろに刃渡りの大きい
包丁 もはや剣と言っていていい を掲げた次の瞬間、すさまじい
風が巻き起こったのだ！

「きゃあっ！」

風は女性陣の衣服を乱し、男性陣の頭髪を激しくそよがせ、一部
はかまいたちとなって石畳を割り砕いた。

エルマの背後で、まっすぐ空に向かって伸びあがっていたはずの
噴水の水が、まるで剣に切り取られたように崩れる。

一瞬遅れて、ざばああ！ と水が落下するのと引き換えに、周囲
はしんと静まり返った。

「な……なにが起こったの……？」

ビシュッ！ という音が確かに聞こえた気がしたが、エルマの包
丁さばきはあまりに速すぎて、それが刃の立てた音だったのか、そ
れとも風が唸った音だったのかすらわからない。

ただ、「解体する」と言っていたわりに、まぐるは頭と胴をつな

げたままエルマの前に横たわっている。

人々は当惑の眩きを漏らした。

「ね、ねえ、ルーカス？ エルマは、その、風を起こしたただけなのかしら？ 魚は無傷に見えるのだけど」

「いや、あれはおそらく、太刀筋が鋭すぎて、まぐるも切られたことに気付いていないんだ」

『なにそれ！』

動揺のあまり、ユリアーナの口から母語が飛び出した。

しかし、ルーカスの見立ては正しかったようで、一瞬ののち、

ぐら……っ

まるでまぐるが時の流れを思い出したとでもいうかのように、ぐらりと形を崩していくではないか。

瞬きをした次の瞬間には、まぐるは頭部と胴体、骨と内臓と肉に分かれ、ブロック状に美しく整列していた。

『なにこれ！』

ユリアーナの叫びは、奇しくもその場にいた人物全員的心を代弁することとなった。

しかし、エルマの勢いはとどまらない。

彼女はぱつと巨大なボウルに小麦粉と牛乳、油と塩を混ぜ合わせ、目にも止まらぬ早業で捏ね合わせると、パン種となったそれを次々と丸めていった。

あまりに素早いので、彼女の手からシュパパパ！ と飛び出すパ

ン種の玉が、まるで砲身から次々飛び出す銃弾に見えるほどだ。

さらには、キャベツを人ならざる速度で刻みあげ、塩とレモンを振ってしんなりとさせ、かと思えば固いパンを削って細かなパン粉に仕上げた。

物が一瞬で削れるとき、「ごりごり」などではなく、「じゅっ…」という音が響くのだということを、このとき人類は学んだ。

続いて、まぐる肉をこぶし大に切り分け、塩コシヨウをし、小麦粉と卵液にくぐらせて先ほどのパン粉をまぶす。

地獄の釜かと疑うような巨大な鍋に、並々と油を熱しだしたのを見て、とうとう人々は理解した。

まぐるのフライ　！

じゃっ！　という腕の一振りで大量のまぐるを放り込み、からりと揚げているその間にも、エルマは卵を茹で潰し、さらにそれを卵と酢で作った白っぽいソースに和え、と忙しい。

同時に、圧延した鉄板の上で、大量のパンと思しきものを焼いていた。

「あれはなんだ。パンにしては随分と平たい」

「あれはナンよ。南の大陸で広く食されているパンの一種だと、以前書物で読んだわ」

ルーカスの独白を、風土記に詳しいユリアーナが拾う。

図らずもダジャレのような会話になっていることに、近くに控えていたゲルダとイレーネだけが気付き、二人とも静かに顔を伏せた。

そうこうしているうちに、まぐるが揚げ上がる。

油から掬い上げるのかと思いきや、しかし同時に、ナンも焼き上がったようだ。

どちらかを優先すれば、その間にもう片方が焦げてしまう。

さあ、どうする。

もはや調理ではない。

試合かなにかを観戦するような気持ちで、その場に居合わせた総勢百人近くが、ごくりと息を呑んだ。

が、眼鏡の侍女は、ここでも予想外の動きに出た。

片手にフライ返し、もう片手にサーベルを握りしめ　サーベル！　、前傾姿勢を取りながら、胸の前で静かにそれを交差させたのである。

次の瞬間。

「はっ！」

凜とした掛け声とともに、彼女はぐるりと旋回した。

風が舞う。

黒のメイド服が、白のエプロンが、残像を残しはためく。

それと同時に、からりと揚がったまぐるが、こんがりと焼き目をついたナンが、フライ返しに弾き飛ばされるようにして宙に踊った。

「同時に跳ね上げただと　!?」

ギャラリーがどよめく。

その視線の先では、完璧に重量と軌跡を計算されつくしたフライとナンが、空中のとある場所で、見事に一列に整列していた。

そこに、

ざんっ！

「フライとナンを、一気に切り裂いた……！」

サーベルが唸りを上げて旋回し、浮かんだ物体すべてを真っ二つに切り裂いていった。

食・即・斬。

あまりに鮮やかな手際だ。

しかも少女は素早くフライ返しを投げ捨て、代わりに大ぶりなスプーンを握りしめると、刻んだキャベツを掬い、落下しはじめたナンに向かって「投げつけて」いった。

凄まじい速さで叩きつけられたキャベツの塊は、風圧をまとってナンの断面を袋状に割り開く。

そうして、まるで安住の地を見つけたとでも言わんばかりに、自らは行儀よくナンの中に納まっていった。

さらにそこに、少女がサーベルをバットののように持って打ち付けたフライが、追いかけるようにして飛び込んでいく。

「馬鹿な……！」

瞬く間に、フライと刻みキャベツのナンサンドが成形されていく。その過程を、動体視力に優れたルーカスだけが理解し、驚愕に喉を鳴らした。

規格外の膂力。

鮮やかにすぎる太刀筋。

髪一筋すらコントロールを違わぬ投擲能力。

かつてひとりで千人の軍を壊滅させたという、伝説の狂戦士^{ヘルセルク}を彷彿とさせる姿だ。

この娘が、ほしい。

騎士団に身を置き、ときにそれを率いる者として、ルーカスは思わず唸った。

性的にではなく、職務的観点から女性を渴望するなど、初めてだ。

周囲の興奮や熱視線をよそに、エルマはナンサンドが落下するぎりぎりのタイミングで、今度はタルタルソースの「銃弾」を叩きつける。

とぽぽぽぽぽぽぽ！

独特な音を立てて、タルタルソースが過たずナンサンドの中央に収まったことを確認すると、彼女はさつと清潔な布を広げ、今度こそ一斉に落下したサンドを受け止めた。

そっ……。

最後に、それまでの猛攻ぶりが嘘だったかのような静かさで、調理台にサンドを並べる。

「完成です」

ほかほかとまだ湯気を立てるナンサンドを前に、侍女は眼鏡のブリッジを押し上げながらそう告げた。

「お……」

誰かがごくりと喉を鳴らす。

あまりに鮮やかな手腕である。

実にうまそうな品である。

そして 明らかに百人分くらいの量である。

ずっと少女の異常な調理過程にばかり注目していたギャラリーたちは、ふと思った。

もしかして、これは。

高貴なる方々に向けた料理とは言いつつも、この量は。

「ユリアーナ前妃殿下、およびルーカス王子殿下。そして、今この場にいらっしやる皆さまのためにご用意いたしました。どうぞ、おひとりおひとつずつ、ご賞味くださいませ」

「うおおおおおおおー！」

エルマが一礼したとたん、使用人たちが一斉に拳を突き上げ叫んだ。

10・「普通」の手料理(5)

朝早くから起き出し、いま昼どきを迎えつつある彼らの魂を、この明らかにハイカロリー・高塩分の一品は、激しく揺さぶってきた。

『おい……、エルマとやらよ、話が違っじゃねえか。高貴なる方々への料理のはずだぞ？ 使用人どもを懐柔して、点数稼ぎするつもりか？』

エルマの大活劇の傍らで、貴重な氷を使って丁寧にヴィシソワーズを冷やしていたジオルジュは、目を細めて声を荒らげた。

彼は腹芸を嫌う男だ。

神聖な勝負を、ごますりできぐり抜けようとするのだとしたら、到底許せるものではなかった。

が、調理台に群がろうとする使用人たちから、王族献上分とおぼしき量をひよいとかわったエルマは、滑らかなモンテーニュ語でこり返した。

『懐柔ではありません。あなた様と私では、高貴なる方々の定義が異なるだけです』

『ああ……っ。』

その流暢さと内容に、ジオルジュは眉を寄せる。

するとエルマは、自らの腕に確保していたサンドのうち、ひとつを差し出してきた。

『私には苗字がない。厳密に言えば戸籍も、故郷と呼べる町もなく、平民でも通える学校というものに通ったことありません。本来なら、このような場所で働くことなど、とうてい許されない身分の間です』

『なに……？』

『ですから、その私からすれば、激しい研鑽と競争の末に王宮での職を得た人々は、皆、高貴なる方々です。あなた様も含めて』

眼鏡で覆われていて瞳の色すら判別がつかないが、それでも、真剣にこちらを見つめていることはわかった。

まっすぐにサンドを差し出す腕や、その発言に、嘘偽りがないことも。

『誇り高きジョルジュ・ラマディ工料理長。どうぞ、私からの心づくしの品を、ご賞味くださいませ』

声は静かだったが、小柄な身体からは、迫力とも呼べるなにかがにじみ出ていた。

ジョルジュはそれに圧される形で、無意識にサンドを受け取った。そして、ユリアーナやルーカスがサンドを差し出され、興味深そうに口に運ぶのを見つめながら、自らもそれを頬張ってみた。

『……………！』

うまい。

袋状に開かれたナンは、見た目よりも柔らかくもっちりとした食感があり、噛めばほんのりと甘い小麦の香りが口に広がる。

歯を立てて、ザクッとフライの衣を噛み破れば、たちまち塩気の

きいた脂がじゅわりと舌の上を走った。

それを、どつしりとしたタルタルソースや、さりげなくレモンをきかせた細切りのキャベツの食感が、追いかけてくる。

観客席でも同様の感動が広がっているようで、あちこちから「うおおおお！」という魂の雄たけびが聞こえてくるが、ジョルジュはそうしたい衝動をぐっところえた。

自分はプロだ。

うまいものに巡り合ったら、感涙にむせぶよりも先に、分析に励むべきだ。

「……………」

料理人としての味覚からすれば、油は少々くどすぎだ。

これだけ脂の乗ったまぐろを使うならば、むしろ揚げ油は極力落とすほうがいい。

ソースに十分塩気があるから、衣やキャベツにここまで塩を混ぜる必要もない。

だが、

(このこつてり感と、がつんときいた塩気が……たまらなくうまい)

朝から準備に奔走し、夏の太陽に晒されながら調理していたジョルジュは、自分がいつも以上にカロリーと塩分を欲していたことに、今更気付いた。

同時に、あることに思い至ってはっと顔を上げると、調理場に戻ってきたエルマがそれを肯定するかのように頷いた。

『ルーデンの民は、勤勉です。王族ですら、朝は鶏の声とともに起き出し、労働をいとわない。使用人ともなれば、なおさらに。食事をするとき、我々の身体は、ほとんど飢餓状態になっているのです。油分と塩分への渴望度合いは、あなた様がこれまで料理を捧げてきたモンテーニユの王侯貴族の比ではありません』

そうだ。

なぜ気付かなかった。

ジョルジュは己の頬を張り飛ばしてやりたい思いだった。

これまで彼が料理を振舞ってきたのは、美食と美女に溺れ、優雅なソファにその身を沈めている王侯貴族ばかりだった。

美の国モンテーニユと、武の国ルーデンでは、求める味が異なっていたのだ。

人手が少ない中、大量の業務に奔走している使用人たちが求めていたのは、急速に身体が回復し、腹に溜まる。つまり脂っこくて塩気の強い食事だった。

そんなところに、上品かつ繊細に調味したスープなど差し出しても、たしかに「こんなものか」と言われるだけだろう。

『……なにやってんだ、俺は』

食べる側の好みも考えず、当然の指摘を的外れにも侮辱にすり替えて。

どちらが人々の舌を満足させられるかなんて、ナンサンドを笑顔で頼張る彼らの姿を見れば明らかだ。

自分は、料理人としてのスタートラインにすら立っていないかった。

そのとき、調理台のボウルの中で氷がからんと音を立てて、ジョルジュははっと振り向いた。

素材の味わいを殺さぬように、氷を惜しみなく使って急速に冷やしていたヴィシソワーズ。

そろそろ提供できる頃合いだ。

だが。

ジョルジュは、一度は手にした取り分け匙サーバーを、静かに下ろした。今更この品を振舞うことなど、自分にはできない。

もしかしたら、王族ふたりであれば、ほかの使用人連中よりは「おいしい」と言ってくれるのかもしれないが、いや、使用人たちに紛れて平然としている前妃に、騎士団で忙しく体を動かしてきた変わり者の王子だ。

きっとそれもないだろう。

苦い笑みを刻み、ジョルジュがコック帽を脱ごうとしたとき、しかし背後から声が掛けられた。

『ジョルジュ・ラマディエ料理長』

『なんだよ』

エルマである。

表情の読めない眼鏡姿の侍女は、抑揚の少ない声で問うてきた。

『そのじゃがいものスープ　ヴィシソワーズですね。それは、出されないのですか』

『……見りゃわかんたら。……出せねえよ』

敗者と言えど多少のプライドはある。

しかし、エルマはわずかに首を傾げると、予想外の行動に打って出た。

『なるほど。 ですがご安心を。 そんなこともあるつかと、スプーンを百本ほどご用意してまいりました』

『……………は？』

会話が噛み合っていない。

だが、ジヨルジュがその意図を問い返すよりも早く、エルマは例の人ならざる動きでスプーンを捌く。

彼が瞬きを終えた瞬間には、侍女の持つ巨大なトレイの上に、ずらりと白磁のスプーンがヴィシソワーズを湛えて整列していた。

スプーンに一口ずつだけ料理を盛る モンテーニュの夜会などで見る、ワンスプーンとも呼ばれるスタイルだ。

『……………は？』

『その量ではあっても、ワンスプーンであれば、百人以上に提供できるものと思考しました。 あなた様のつくるヴィシソワーズは、少量ずつであっても城中の人々に振舞われるべきだと思います。』

『……………は？』

先ほどから「は」しか言えていない。

が、ぽかんと口を開けるジヨルジュをよそに、エルマはさっさとヴィシソワーズを、ユリアーナ以下全員に配ってしまうのではないか

……………！

『お……おい、ちよつ、待てよ、おまえ　！』

これはなんだ。

引き際くらいは自身で決めたいと考えたジオルジュへの辱めなのだろうか。

ただでさえ好みに合わない料理を、それも、ナンサンドでひとしきり腹を満たした状態で食べては、まずく感じるだけではないか。

そうとも、厨房の部下たちも、侍女も、馬丁も、衛兵も、きつとまた、困ったか馬鹿にしたような顔で

「　う……つまあああ！」

「……………！？」

ジオルジュは耳を疑った。

見れば、使用人たちはスプーンを口に突っ込んだまま、きらきらと目を輝かせているではないか。

瞳は恍惚として潤み、頬は紅潮し、手はスプーンを強く握りしめている。

全身から、嘘偽りのない「うまい！」の賛辞が響いているかのようだった。

「ああ……。やはり、ラマディ工料理長の味付けは実に繊細で奥深いわね」

「じゃがいものアクの強さを殺して、甘みとうまみだけを丁寧に引き出している。美しい仕事だ」

この手の食事を口にしながらいる王族ふたりはともかく、

「うま……っ、うまいっす！ 今、ようやく初めてじゃがいもの味がわかった！」

「すっごくいいものを頂いてる気分！」

「王様になったみたいだ……！」

使用人たちまでもが、興奮したように話し合っている。

彼らは一斉にジオルジュのほうを向くと、感動の勢いそのまま走り寄ってきた。

「ゲオルク　じゃなかった、ジオル、ジュ、料理長！　うまいです！　これ、めっちゃくちゃうまいです！」

「ゲオル　いえ、ジ……ヨルジュ料理長！　私たち、前こんなおいしいもの食べさせてもらってたんですねえ！　味わずに流し込んでんじやって損しちゃった！」

「ゲオ……ジオルジュ料理長！　これ、また食べたいです！」

慣れないモンテーニュ風の名前を、舌を噛みながら呼ぼうとしてくれる。

あけすけで、単純な彼らの言葉。

だからこそ、ジオルジュはすっかり喉の奥に熱を感じるほど嬉しくなった。

（なんだよ……）

そして、理解する。

そうとも、彼らは料理の味がわからなかったのではない。

味わう余裕もないほどに飢えていたのだ。

そして今、エルマによって満たされたからこそ、異質なものを理解し、歩み寄ろうとしてくれている。

『さすがですね。私の料理は、単に彼らの胃袋にカロリーを投下しただけでしたが、ジョルジュ料理長の料理ともなると、食するだけで一介の使用人でも王侯貴族の気分が味わえるかのようです』

そのとき、ヴィシソワーズの配膳を終えたエルマが調理場に戻り、ジョルジュに話しかけてきた。

それから彼女は、眼鏡のブリッジをくいと押し上げ、告げた。

『降参です』

『え……？』

ぼかんとする。

が、ジョルジュがなにかを言い返すよりも先に、優雅にスプーンを下ろしたユリアーナが口を開いた。

「どちらが高貴なる者の舌に合うか。この勝負、ゲオ　ジョルジュ・ラマディエ料理長に分があったようですね。あなたの料理は、人々を『高貴なる者』に仕立てあげてしまうのですから」

「隣の調理台で異常現象が起こっても調理を完遂する、その集中力も称えられるべきだな」

ルーカス王子も、そんなことを言っつて肩をすくめる。

ジョルジュが呆然と立ち尽くしていると、エルマはすつとメイド服の裾を摘まみ、深々と礼を取った。

勝者のジョルジュに向かって敬服を示す格好だ。

それに気付いた観客たちは、ジョルジュに称賛の視線を投じた。

勝利宣言を期待するかのような流れである。

(なんだよ……)

ジオルジュはもう一度胸中で呟き、頭を下げたままの侍女をちらりと見やった。

それから、背の高いコック帽に手を伸ばし　それを彼女に向かって脱いでみせた。

「　いいえ。前妃、殿下」

そうして、片言のルーデン語で告げる。

通じるからと頑なにモンテーニユ語を貫いていた彼が、この国の言葉で話そうとするのは、初めてであった。

「お言葉は、嬉しく、思う、ですが、この勝負は、……せめて、引き分けに。私は、舌を満たせた、かもしれないませんが、彼女に、勝つたとは、思えないからです」

飢えていては、わからない。満たされたからこそ、歩み寄れる。それはきつと、自分も同じだ。

今ジオルジュは、ずっとほしかったルーデンでの居場所を、エルマに分けてもらったからこそ、こうして、もっと彼らに近づきたいと思えるようになったのだから。

「いつか、彼女を、こてんぱんに負かしたら……そのときこそ、殿下の、庇護を、お約束ください。それと　私の名は、ゲオルクで、結構です」

このままでは、自分の名が「ゲオジヨルジユ」になってしまつので。

肩をすくめて告げると、ユリアーナたちは愉快そうに笑った。

その日から、ジヨルジユ 改め、ゲオルク・ラマディエ料理長は一層の研鑽を積み、やがて「ルーデン王城の食べられる至宝」と呼ばれる宮廷料理を、数多く生み出すことになる。

11・「普通」の手料理(6)

「なあ、おい。 エルマ」

すっかり腹の満たされたユリアーナや使用人たちが散会し、エルマがイレーネに手伝ってもらいながら調理台を片付けていると、先に片づけを終えたゲオルクが話しかけてきた。

「その……昨日は、どなりつけて、……悪かった、な」

ただでさえ慣れないルーデン語で、慣れない謝罪の言葉を口にするものだから、すっかりブツ切れの口調になってしまう。

だが、エルマはそれを気にすることなく、滑らかに手を動かしながら、

「いえ。こちらこそ、不用意に料理長の持ち場を荒らしてしまい申し訳ございませんでした」

淡々と答えた。

「いや、それ、言うなら、自分の縄張りに、侵入を、許した、俺、いけない。その時点で、気付くべき、だったし、叱る、べきだった」

ゲオルクがきちんと厨房を掌握できていたならば、そもそも起こらなかった事態のはずなのである。

詫びの代わりに、これからは自分のいるときは好みに厨房を使っていると言ってみたが、その破格の申し出よりも、ゲオルクが「こ

れからは俺が厨房を締める」と宣言したときにこそ、エルマは満足そうに頷いた。

眼鏡のせいで、あまりよくわからないが。

「素晴らしいことだと思います。統率の取れた協調性ある職場では、不正は起こりにくいと言いますから。これで、王城内の毒殺リスクも限りなく低減されるでしょう」

「あん……?」

エルマは、自分がときどきやらかしてしまつ「普通でない」行動が、ルーカスの生活と胃に負担を掛けていることを理解していた。こういった形で、王子に少しでも借りを返せるなら、大変結構なことである。

受けた恩は返す。

至極真つ当で、普通のことだ。

エルマは真顔ながらもご満悦であった。

なにやら自己完結してしまっているエルマに、困ったのはゲオルクのほうだ。

この侍女の思考が読めない。

というか、冷静になつて考えてみれば、彼女のやることなすことに対して理解が追いつかない。

そういえば、彼女の圧倒的技量に対していまだコメントできていなかったことを思い出し、ゲオルクは口をもごもごとさせながら、不器用に誉め言葉をひねり出した。

「その……おまえ、見事、だったな。正直、感心、したよ」

「過分なお褒めのお言葉を頂戴し、恐縮に存じます」

「いや、本当だ。サンドの出来栄も、そうだし、それ以上に、あの包丁捌き、油捌き……。正直、何度も、口が顎から、外れる、思った。いや、あの巨大まぐろが、出てきたときから、すでに」

ルーカス王子はゲオルクの集中力を褒めてくれたものの、平時であれば彼だって、腰を抜かしていただろう。

それほどの、異常な光景だったのだ。

「おまえ、いつたい、あの技術、どこで、身に着けた？」

「あの技術……と、仰いますと？」

「だから。巨大なまぐろ、釣ってきたり、解体したり、揚げたり、挟んだり。そういう、技術だよ。まったく……。聖力が、そうじゃなきゃ、失われた魔力でも、使ったのか、思った」

聖力とは、教会の高位導師だけが、神の恩寵を譲り分けてもらい行使できる力。

そして魔力とは、かつてこの大陸に禍を撒き散らした魔族だけが持ち、彼らの滅亡とともに失われたとされる力だ。

魔力は歌劇や小説の世界では好んで扱われる題材だが、今のこのご時世、そんなものを信じている人間はいない。

学校にも行っていないなかったようだし、と不思議に思ったゲオルクが尋ねると、

「え……？」

エルマは困ったように首を傾げた。

「まぐろを育てながらその様子を観察し、最終的に釣って食べる、

というのは、どこの家庭でも見られる、食育のひとつなのではないですか？」

「……おまえの、家は、漁師か、なにかか？」

「いえ。食育の対象のうち、海洋生物はまぐろとクラークンだけでしたから、漁師ということではないかと」

『クラークン！？ 導師が十人がかりでも倒せないっていう、あのクラークンか！？』

ゲオルクがぎよっとして、思わず母語で聞き返す。

横で聞き耳を立てていたイレエネまで、つい一緒に声を上げてしまったが、彼女はエルマが「倒せない……？」と首の角度を深めるのを見て、あ、と思った。

この流れは、「あれ」が来るぞと。

「クラークンは、毎年夏になると馬鹿みたいに釣れるタコ的一种ですよね。もしや、……シャバのお方というのは、クラークンを捌くくらいのことでもできないのですか？ 料理長でも？」

『………はい？』

こわもての料理長がぼかんと口を開ける。

彼は五秒ほど、奇妙な表情のまま固まっていたが、やがて止まっていた呼吸を再開し、ちよっとな機嫌そうにエルマの頭をはたいた。

『………ったく、ルーデンのジョークはわかりにくいんだよ』

「え」

エルマとイレエネの眩きが重なる。

けれどもおかげで、ゲオルクと王城の精神的平和は、この日も保たれたようだった。

12・狂戦士の娘

「ふふ。城をもらったわ」

「今日はやけにルークにこだわるな」

「だって、ギルベルト。もしこれが現実ならば、王を射落とすよりも、城を落とすほうが、よほど気持ちがよいと思わない？」

夕闇の迫ったヴァルツァー監獄の一室。

大国の王城でも類を見ないほど贅を凝らした居間で、ふたりの男女　ギルベルトとハイデマリーは、今日もチェスに興じていた。

ハイデマリーの駒の打ち方は、惑乱的だ。

狂戦士のように歩兵ポーンを刈り取っていくときもあれば、偏執的に相手の聖職者ビショップをつけ狙うこともある。

だが、いずれにせよ最後には勝利を収めてしまふあたり、その手腕は見事なものだ。

ハイデマリーは奪い取ったルークの駒にキスを落として、ちらりと向かいのギルベルトに微笑みかけた。

「ねえ。かわいいあの子も、今ごろ王城を掌握していたりするのかしら？」

「……俺たちは、間者か暗殺者だかを送り込んだのではなく、娘を巣立たせただけだと思っていたんだが」

「いやだわ、ものの表現でしょう？　たとえば城中の胃袋を掴んだ料理人がいたとしたら、その人物は『王城を掌握した』と言えるのよ」

ちよつと拗ねたように言い返すハイデマリーは、麗しいのと同時に、まるで少女のような魅力がある。

反撃の気がそがれたギルベルトは軽く肩をすくめると、次の一手を模索して盤面を見据えた。

とそこに、

「入るぞ」

ノックもそこそこに、大男が居間に踏み入ってきた。

筋骨隆々たる長軀に、ひと睨みするだけで気の弱い者なら気絶しそうな、凶悪な顔が乗っている。

不相应な白いエプロンを身に着けた彼の名は、イザーク。

かつてひとりで千の軍を打ち負かし、しかしながらあまりに残虐な振る舞いで自軍からも恐れられた ヘルセルク。そして、禁域で聖獣を黽り殺したという名目で自国を追放された狂戦士であった。

「エルマが、いないから、モチベーションがわからない。今日の飯は、これだけだ。食べ」

美食の国として知られるモンターニュ出身の彼は、ヴァルツァー監獄内の公用語であるルーデン語を流暢に話せない。

そして、娘代わりのエルマにきっちりモンターニュ語を仕込んでしまい、話し相手に不自由しなかったものだから、十五年経ってもその片言は一向に改善を見せなかったようだ。

特徴的なぶつ切りの言葉を聞き取ったハイデマリーたちは、げん

なりと眉を寄せた。

「……また、クラーケンの姿焼きなの？」

「……せめて、小麦で丸めてからりと揚げ焼きにした、クラーケン団子焼きに……」

「夏の味だ。堪能、しろ」

イザークは取り付く島もない。

さつさと姿焼きを配膳してしまうと、つまらなそうに手近なソファにどさりと腰を下ろした。

「せっかく、ミソ、とかいう、東方の調味料、完成するところだったのに。あれで、夏至の日には、ドラゴンのフルコースをと、エルマと、話し合って、いたのに」

この監獄で料理人代わりに務める彼は、その外見とは裏腹に、四季の味や節句メニューを大切に作る男である。「愛娘」がいたならば、ではあるが。

「ちょっと、またドラゴンを狩ってきたの？ やめてちょうだいな。いくら監獄の全員で食べても、大量に余るじゃない。連日同じドラゴン肉を食べ続けるなんて、ごめんだわ」

空をも覆う、と描写されるドラゴンは、とにかく巨大で食べ甲斐があるのである。

ちなみに、イザークの腕は確かで、彼の手に掛ければドラゴンも上質な鶏肉のような味わいがすることを知っているので、ドラゴンが食卓に上ること自体は、ハイデマリーとしても異存はなかった。

「ふん。やけ食いすれば、あれくらい、一日で、片付く」

「……さすがね」

彼の無限に近い胃袋をもって、【暴食】と名付けたのはハイデマリーだったが、こうしてその凄まじさを見せつけられると、胸やけを起こしそうである。

微妙な表情で相槌を打っていたら、イザークはそのいかめしい顔をさらにしかめて、ふんと鼻を鳴らした。

「ああ、つまらん。だいたい、ここの住民は、食への、敬意が足りない。糧となった、生物の尊さも、称えず、未知の味に、挑みもせず、出たものばかり食って、文句を、言いやがって」

生まれつき強大な胃袋を持ち、かつ、生後すぐに飢饉に襲われて強烈な飢餓感を植え付けられたイザークは、食べることにとにかく貪欲だった。

木の実を見たらまず食し、雑草も食し、生き物と見るやまず食す。

狩りをするうちに、魔獣だとか怪物と呼ばれるものの妙味に気づき、以降その虜となって、はからずも武技を磨いていくこととなったのだ。

一騎当千の戦士と称賛されるようになったのは、そのおまけの結果であった。

「イザーク、あなたね。その食欲と好奇心をこじらせて、禁域で見境なく聖獣を屠ったから、戦士の名を剥奪されて、獄に繋がれているわけでしょう。懲りない人ね」

「……俺なりに、種を、根絶させないくらいには、配慮していた。魔獣を狩れば、称えられるのに、聖獣を狩れば咎められるなど、おかしい。あの味を、全土に知らしめることが、できたなら、俺は『食聖』と、称えられているはず、だったのに」

聖獣や魔獣、怪物の臓腑を引きちぎりながら、食聖を夢見る男。それが【暴食】イザークの正体である。

彼の空腹感や、食への興味を宥めるのは並大抵のことではない。自分で狩りをし、調理してもいいが、それではサプライズ感も薄れるし、フライパンを揺すっている間に腹が減ってしまう。

ときに師匠のイザークも知らぬような食材を狩り、彼の空腹を先回りして料理をつくってくれるエルマは、だから彼にとってかけがえのない存在だったのだ。

イザークは、はあ、と切なげなため息を漏らし、母語でぼやいた。

『一撃必殺の戦闘術、数百人分を一度に作り上げる大量調理技術。エルマほどの逸材は、そういないのに……。このまま空腹をこじらせて、カニバリズムに目覚めてしまったら、俺はいつたいどうすればいいんだ』

しょんぼりとした口調で、とんでもない発言である。

モンテーニュ語ながら、不穏な内容を拾ったハイデマリーとギルベルトは、呆れたように視線を交わし合った。

「同族食いのご法度よ。どうしても食べたくなくなったら、【貪欲】に頼んで、実験後の死体でも卸してもらいなさい」

倫理的に、それもどうなのかというところだ。

だが、イザークの反論ポイントは、そこにはないようだった。

「【貪欲】が手をかける、時点ですら、どうしようもないカスという、

ことじゃないか。しかも、薬漬け。俺の料理は、良素材、良鮮度、無農薬が、売りののに」
「なら我慢なさい」

まるで、空腹に泣き出す子どもをたしなめる、母親のような口調だ。

ギルベルトは、イザークがむすっと黙り込むのを無言で見守っていたが、やがてふと気づいたように顔を上げた。

「そういえば、【食欲】はどこにいるんだろう。しばらく姿を見えないが」

「さあ。また地下の研究室に籠っているのではないかしら」

白く繊細な指先で、優雅にクラーケンの姿焼きを摘まみながら、ハイデマリーが答える。

彼女は、香ばしく焼き上がった触手を見て、ひとつ頷くと、上品にそれを頬張った。

「ほら。『妹』を失うって、あの子にとっての逆鱗というか、トラウマのようなものだから。苦悩を昇華しようと、精力的に実験に取り組んでいるのだと思うわ」

「やれやれ。やはり、エルマはここから出すべきではなかったかな」

ギルベルトが眉を上げると、ハイデマリーは猫のように笑う。
その魅力的な微笑みは、見る者すべての脳をとろけさせるようだった。

「いいえ。あの子には、ちゃんと世界を見せてあげないとね」

細められた瞳。

その視線の先では、黒の女王^{クイーン}が、無数の駒を睨みつけるように、毅然と立ち尽くしていた。

13・「普通」の手当て(1)

デニス・フォン・ケストナーは、自慢の金髪を振りかざし、狂ったように全身に香水を擦りつけていた。

「ああ、もう！ 臭い！ 臭い！ 臭い！」

そこそこ整った顔立ちは、男らしさには欠けるものの品があり、贅肉の付いていない若い体は、力強さはないが清潔さがある。

その、貴族らしく美しく整えられた自身の身体が、下品で鼻の曲がりそうな悪臭に蝕まれかけているのを、デニスは必死で防ごうとしていた。

「なんで、この僕が！ 栄えあるケストナー家の一員にして、聖医導師としての将来を嘱望されるこの僕が！ 馬の糞やら男の汗やらにまみれて働かなくてはならないんだ！」

高価な香水を惜しみなく使って、忌まわしい臭いを打ち消してから、デニスはようやく呼吸を落ち着けた。

そうして、寮の自室で、ほかに人目がないのをいいことに、恐れ多くも神の名を吐き捨てるように唱え、悪態をつきつづけた。

「なんなんだ、あの者たちは。騎士だとか言って、要は荒くれ者の集まりじゃないか。臭いし、汚いし、礼儀もなっていない。せつかくこの僕が！ 聖なる癒術を使ってやったというのに、それを崇め称えもしないだなんて。聖医導師の尊さがわかってないのじゃないか」

聖医導師。

それは、神の恩寵と呼ばれる聖なる力で、医療を行う者のことである。

この大陸では、多くの人間がアウレルを主神とするアウル教を信奉し、そのうちのごく一部が「聖力」とも呼ばれる神の恩寵を授かる。

その内容や強弱は様々だが、傷を癒したり、植物の生育を早めたり、雨を呼んだりと、総じて生を守り育むためのものだ。

聖力はそれこそ奇跡のように、平民にもある日突然発現することもあるが、基本的には血統によって受け継がれる。

ケストナー家も、数多くの高位導師や聖女を輩出してきた名家のひとつであり、爵位こそ男爵ではあるものの、司教を兼任するロツトナー侯爵家とも懇意な、由緒正しい家系であった。

なかでも、デニスが持つのは、ケストナー家の始祖と同じと言われる、癒しの力。

切断された手足を復元するといった、始祖が持っていたものの威力よりはだいぶ劣るが、それでも、そこらの医師の技量を遥かに凌駕する力だ。

結果デニスは、成人もせぬ十五のうちから聖医導師として正式に宮廷勤めを許され、王城内の中心にほど近い場所に部屋も与えられている。

「侯爵閣下の後見も得て、ゆくゆくはルーデンの宗教界で実権も握りうるだろう僕が！ なぜ、こんな、忌々しい下積みを！」

だというのに、デニスはここ数週間というもの、騎士団員の治療

や、使用人たちの世話に追われていた。

それというのも、彼の敬愛するクレメンス・フォン・ロットナー侯爵が、「癒術を高めるには、多くの場数をこなし、見聞を広めることが重要です」と、彼に実地研修インターンを命じたからだ。

「そりゃあ、退治すべき魔族も滅びた今日日、尊き方が大けがをなさることなんてないけれど……。だからといって、下々の者の怪我まで治してやることなんか、ないではないか」

デニスは、手入れの行き届いた爪をがじりと噛んだ。

癒術は、選ばれし人間にのみ与えられた聖なる力だ。

それを、貴族でもない、神の寵愛を受けたでもない、凡百の人間に施してやるなど、あまりに勿体ないように思えた。

百姓上がりの人間にはそのへんの薬草でも渡しておけばよいのだ。どうせ彼らは頑丈なのだから。

「あまつさえ、治療しておいてもらって、ろくに感謝の言葉すら言えないのだから……」

先ほどの場面を思い出してしまい、デニスは齒ぎしりした。

今日は騎士団の診療の日だった。

模擬戦訓練とやらに付き合わされ、東屋で待機していたところ、次々に負傷者が運び込まれてきたのだ。

その多くは、打撲や捻挫、裂傷。

軽傷でない者もいたが、重傷というほどではない。

ついでにいえば、運び込まれてきたのは下級騎士ばかりで、見たところは単に薄汚れたごろつきと変わらない。

そのような状態で貴族の御前に出るのも不遜であるのに、と思いつながら、デニスには泥で汚れた汗臭い体に触れ、祈りの言葉を呟いてやったのだ。

にもかかわらず、癒術を受けた騎士たちは、「なんだ」と一様に物足りなさそうな顔をしたのである。

「一瞬で傷が消えるとしても？ ふん、ひとりひとりにそんな膨大な聖力を注いでいられるか、馬鹿め」

なにぶん、あと何人治療すべきかわからない中での施術である。

余力を残しながら治療した結果、せいぜい各人の傷を申し訳程度に塞ぎ、痛みを和らげるくらいのことしかできなかった。

ただ言っておくと、それでも通常の手技を施すよりは数倍早く癒えるし、術者のこちらには結構な負担なのだが。

「なのに、『これくらいなら、侍女殿の手当てと変わらないじゃないか』だって……!？」

最も許せないのは、帰り際に騎士のひとりが首をすくめてぼやいたその言葉だった。

大層小声の独白であったが、地獄耳のデニスはばつちりと聞き取ってしまったのである。

噂によれば、騎士団には最近、エルマとかいう名前の侍女が出入りし、負傷者の治療に当たっているのだという。

その手際は素晴らしく、彼女に手当てしてもらった者は、そうでない者より三倍以上早く快癒することだ。

（だが、侍女。貴族でもない、医導師でもない。男ですらない！
ふん、おおかた、女相手に脂下がった騎士どもの思い込みだろう）

エルマという名前は、以前、前妃のお気に入りで、料理上手な女という文脈で噂を聞いたことがある。

きっと、美丈夫の第二王子が騎士団の恋人の座を狙う、女の魅力を過剰に押し出した野心家なのだろう。でしゃばりなのだ。

だが、侍女の分際で医療行為に手を出すのはやりすぎである。

実態としては、せいぜいおまじないに毛が生えた程度の手技なのだろうが、だとしたらなおさら、治療を武器に子どもを勧誘するのはやめてもらいたいものだ。デニスが高慢な少年だが、治療行為そのものは、神聖なものだと考えていた。

「ああ、早くこんな日々を終えて、侯爵閣下みたいに、高貴なるお方の専属医導師になりたいものだ」

実地研修が始まる前までは、デニスはロットナーのかばん持ちとして、彼が支持する第一王子フェリクスの部屋に訪れたりもしていた。

ロットナーは侯爵であり、司教であり、癒術はなくとも心を解^{ほぐ}す能力を持っているため、王子のカウンセラーとしても活躍しているのである。

フェリクス自体は、噂通りぼんやりとした、凡愚な人間のようなのだが、それでもやはり第一王子。

部屋は贅を凝らされ、趣味であるらしい馬具や宝石のコレクションは素晴らしかった。

デニスは侯爵を通じてそれらを鑑賞する栄誉を許され、いたくご

満悦だったのである。

彼が望むのは、そちら側の世界だ。

「早く、僕にふさわしい世界に戻りたい……」

奇跡の力である癒術を、もつときちんと称賛してもらえて、周りには清潔で高貴な人々しかいない世界。

騎士どもは、せいぜい侍女の治療とかいう民間療法でもありがたがっておけばいい。

デニスはほう、とため息を漏らして、壁に掛けた祈祷布をぼんやりと見つめた。

14・「普通」の手当て(2)

ステンドグラス越しに、初夏の陽光が淡く降り注ぐ聖堂。

昼なお、人を瞑想の世界へと誘うような薄暗い空間に、ふたりの男女がいた。

「なあ。どうか色よい返事をくれ」

ひとりには、すらりとした長躯に、豊かな黒髪、深い藍色の瞳が印象的な精悍な青年。

シンプルなシャツとパンツ、そして胸のあたりに騎士団の紋章が刺繍された濃紺のベストをまとっている。

彼は、その長身をかがめて、壁際に追い込んだ人物を覗き込んでいた。

「恐れながら殿下。パーソナルスペースが近うございます」

それに対し、抑揚なく答えるのがもうひとりの人物。

彼女は、小柄な身体に黒のドレスと白いエプロン、そしてブリムつまり侍女の制服と、おまけに分厚い眼鏡を身に着け、先ほど

から淡々と青年に応えている。

青年の正体とはもちろんルーデン王国第二王子ルーカス、そして侍女の正体はエルマであった。

「その手の単語でごまかそうとしてくれるな。俺は本気だ。おまえが必要なんだ」

「その手の言葉でごまかさないてくださいませ。私は道を踏み外し

「たぐいしません」

男が女に顔を寄せて囁く様子や、その内容から、一見した限りではまるで男女の駆け引きのようにも思われる。

しかしながらその実態は、

「なぜだ。騎士団に所属することのなにが、外道だというんだ」
「女、それも平民ですらない身分の人間が騎士団に加わることが、前代未聞、つまり普通ではないと申し上げているのです」

ルーカスによる騎士団へのヘッドハンティングであった。

先日、料理対決　という名の、もはや天下一武闘会　でエルマが大立ち回りを見せてからというもの、ルーカスはこうして折に触れて、熱心に入団を勧めてくるのである。

今の彼の騎士団での身分は、中隊長。

年齢の割にかなりの地位と言えるが、それは第二王子という生まれではなく、優れた剣技と、時間をかけて築き上げた人望によって獲得したものだ。

多少色は好むものの、ルーカスの騎士団への忠誠は厚く、彼は心からその発展を望んでいた。

そしてその「発展」を考えたとき、エルマというのは喉から手が出るほど欲しい人材だったのである。

「前代未聞がなんだというんだ。おまえが入団すれば、それが『前例』になる。その後それに勇気を得て、武に優れた女や、身分に恵まれなかった者たちが続々と入団してくるかもしれないぞ。そうす

れば、見事おまえは『普通』の女だ」

「屁理屈にすらなっていない謎理論を展開するのはおやめください
ますか」

エルマは取り付く島もない。

接触を重ねるうちに、ある程度本性はばれてしまっていると考えたのだろう。当初のような「男性への恥じらいを見せる初心な少女のふり」すらなくなっている。

可愛げのなさにも少々思うところはあがあるが、それ以上にエルマの頑なさに業を煮やして、ルーカスは顔を顰めた。

「おまえの『普通』への妙なこだわりはなんなんだ。それ以上に、その基準はなんだ？ 見学だけでいいと連れていったときには、たつたひとりで団員全員の手当てまでしてくれただけなのに。あのときは、割と乗り気に見えたが」

「……あれは、教科書の解釈を違えた私の過ちでございます。ご放念くださいませ」

エルマは、眼鏡で素顔を隠したまま、少々ばつが悪そうな様子を見せた。

彼女が現在吸収しつつある「常識」によれば、「騎士団の訓練を熱く見守る」のも、「傷ついた男性をかいがいしく世話する」のも、「普通」のはずだったのだ。

ただ、その延長で、見学中にすっかり副隊長の太刀筋を見切ってしまったたり、世話のつもりで手当てをひとりで完結させてしまったりし、それをエルマとしては大いに反省していた。

「教科書？」

「普通の女の子を目指すのならばこの辺りを読めばよいと、ロマンス小説なるものを大量に貸していたのだです」

ルーカスは天を仰ぎそうになった。

親切のつもりかもしれないが、なんというものを教科書として提示してくれたのだ。

「イレーネか？ 勘弁してくれ……。あんなものに行動を準拠されたら、たまったものではない」

「いえ、恐れながら、貸してくださったのはゲルダ侍女長です」

「そちらか……！」

「ちなみにイレーネは、いわゆる薄い本と言われる系統のほうが好みだそうですね」

「薄い本？」

怪訝な眼差しを寄越したルーカスに、エルマは言葉を選ぶような間を置いて問うた。

「……ちなみに殿下におかれては、『攻め』の対義語はなんだと思われませんか？」

「『守り』ではないのか？」

「なるほど。殿下とは生涯無縁のジャンルの話のようです。今のやり取りはご放念くださいませ」

あげく、そんなふうには誤魔化されてしまう。

気になったルーカスは執拗に尋ねたがはぐらかされつづけ、むっとなったルーカスは「おい」とエルマの腕を取った。

と、掴まれた腕をまじまじと見ていたエルマが、ふと顔を上げ、

じつとルーカスのことを見つめる。

「……そういえば、のべ三十五冊のうち、三十三冊までもが、主人ヒロ公に険悪に接してくる騎士が、実は激しい恋情を秘しているというものでした。まさか」

「待て二次元と三次元を混同するな。あれはフィクションですらない。ファンタジーだ」

野暮つたい眼鏡姿の侍女に、「うわ……」みたいな視線を向けられて、ルーカスは素早く手を離れた。

というかこの眼鏡はなんなのだろう、素顔を隠しているはずなのに、まざまざとドン引き感を表現してかかるなど、もはや眼鏡の域を超えたなにかだ。

「今こそ俺の微表情とやらをよく読んでくれ。これが、女に恋する男の顔か？」

「どちらかといえば、未知の生命体を前に緊張と好奇心を隠せないでいるような表情にお見受けしますね」

「すごいな微表情」

ストライクゾーンの広さには自信のあったルーカスだが、不思議なことに、この少女には現時点でちなりとも欲が刺激されなかった。好奇心は大いにそそられるし、面白い娘だとは思うのに、なぜだろ。

それはこの冴えなく見せている容貌のせいかもしれないし、あるいは、彼女のほうがひとかけらも、こちらに異性としての興味を抱いていないからかもしれない。

そういえば、第二王子という身分やこの顔、あるいは騎士として

鍛えた身体や振舞いに、まったく興味を示されなかったのは、これが初めてかもしれないということに、ルーカスは今更のように思い至った。

駆け引きでも腹の探り合いでもなく話せる異性など、貴重だ。

「なあ、おまえ。やはり、騎士団に加わらないか？」

「なにがどうやはりなのか、わかりかねます」

ルーカスはこれまで以上に真剣に誘い掛けたのだが、エルマはついと顎を引き、次いで滑らかな動きで接近を躲すと、床に置いていた掃除道具を拾い上げた。

聖堂の掃除を言いつけられていたところを、王子に見つかったのだ。

「お話がそれだけのようでしたら、恐れながら、聖堂の清掃業務に取り掛かせていただけますでしょうか」

「この広い聖堂内を、すべてひとりで掃き清めるのか？」

怪訝な声での問いにも、エルマの答えは淡々としていた。

「一瞬で済みますので」

「……やはり入団」

「殿下もどうぞ、騎士団の訓練にお戻りください。即位式に向け連日式典準備に追われているさなか、中隊長ともあるうお方がこのように職務を離れてよいはずがございません」

食い下がろうとしたところを、ぴしゃりと跳ね除けられる。

が、それに対してルーカスはにやりと笑ってみせた。

「どうせ今日はパレードの予行演習だけだ。鎧をかぶれば誰が誰か

はわからんから、俺の馬に勝手に乗ろうとした愚か者の新人を、罰として代役に立ててきた。やつも本望だろう。よって、今日の俺は正々堂々自由の身だ」

ぬけぬけとしたサボリ工作である。

それは正々堂々とは言わないのでは、と、エルマがもつともなツッコミを入れようとしたところに、しかしそれは起こった。

「ルーカス様　！」

聖堂の扉が慌ただしく開いて、少年が駆け込んできたのである。

そばかすの残った顔に汗の粒を浮かべた彼は、どうやら騎士団の小姓のようであった。

ルーカスよりは色の浅い紺色の、紋章入りのベストを身に着けている。

「マルク？　どうした？　よくここがわかったな」

「よくわかったな、じゃありませんよ、めちやくちや探しましたよ

……！！　逢引するなら、もっとそれっぽい場所にしてくださいよ、もう！」

マルクと呼ばれた少年は、あどけなさの残る瞳できつとこちらを睨みつけてから、表情を引き締め、拳を握った。

「トラブルです。ルーカス様の乗るはずだった馬が、パレードの演習中に突然暴れ出して人をふるい落とし　　代役をしていたテオが、足の骨を砕かれました。はっきり言って……ひどい怪我です」

「なんだと　？」

ルーカスが眉を寄せる。

「今、慌てて聖医導師を呼びに行っていますが……ひとまず、ルーカス様もお越しく下さい。そちらのお相手には悪いですけど、あ！ エルマさん!？」

険しい顔で報告していたマルクが、ルーカスの背に隠れていたエルマに気付き、声を上げる。

彼は逢引などと言っていたくせに、ルーカスとエルマの恋仲を疑うことすらせず、あまりにありえない取り合わせだからだ、ぱっと顔を輝かせた。

「エルマさん、よかつたら我々と来ていただけませんか!? 聖医導師にもいるいる派閥があつて、今日はフェリクス殿下側のいけない新人しか駐在していないみたいなんです。彼が来るまでに、エルマさんが手当をしてくれれば、少しは状態も」
「馬鹿を言うな。それは聖医導師の領分だろう」

言い募るマルクを、ルーカスが遮る。

彼は素早く踵を返すと、早くも事件の現場へと足を向けはじめた。

「ですがルーカス様。エルマさんなら、その辺の女性と違って血を見て卒倒することもないでしょうし」
「言っておくが、俺だつてこいつ相手に、男だ女だの問題を云々するつもりはないさ。だが、それほどの怪我だというなら、手当などしても意味がないだろう」

必要なのは回復魔法だ。

お姫様の看病で騎士が回復するのは小説や歌劇だけの話で、現実

に今求められるのは、確実に傷を癒すことのできる聖力である。

冷静に言い切ってその場を去ろうとしたルーカスだが、その背を、
淡々とした声が呼び止めた。

「お待ちください」

眼鏡を反射させた、エルマである。

「二次元と三次元を混同させてはなりません。魔法で怪我が癒える
などというものは、フィクションですらなくファンタジーだと、私
は【貪欲】の兄に教わりました」
「なんだと？」

彼女は、人差し指でブリッジをくいと持ち上げて、さも常識を告
げるかのような口調でこう言った。

「普通、大怪我をしたときに必要なのは、祈りよりも
外科手術
ですよね？」

「……………おへ？」

耳慣れぬ言葉に、ルーカスとマルクは顔を見合わせた。

15・「普通」の手当て(3) (前書き)

傷についての生々しい描写があります。ご注意ください。

15・「普通」の手当て(3)

あとはパレードの演習だけだからと、汗臭い模擬戦の救護活動から解放されたはずなのに、デニスが居室に「緊急事態だ！」と踏み込まれたのは、そのわずか一時間後のことだった。

聖力の連続行使は術者への負担が大きいため、聖医導師のシフトは事前に綿密に組まれている。

聞けば、けがをしたというのは平民上がりの騎士のようだし、担当の同僚が戻ってくるまで待ってもらおうとしたのだが、連絡に来た騎士に怒鳴りつけられ、現場に連行されてしまった。

(なんて野蛮な連中なんだ！)

むくつけき野郎集団に再び接近させられながら、デニスは内心で罵った。

貴族と騎士団の間には、かつては確固たる身分差があったはずだが、第二王子が入団などしたものだから、彼らはすっかり調子づいているのだ。

曲がりなりにも男爵令息であるデニスを拉致するなんて、無礼千万である。

が、主張の結果、殴られてはかなわないと思ったデニスは、その怒りをかろうじて喉の奥に引っ込めた。

そして、

「……………なんだ、これは」

連れてこられた訓練所近くの東屋　そこで横たわっている「患者」を認めた瞬間、その怒りを完全にどこかに見失ってしまった。

そこには、ある程度の怪我を見慣れているはずの自分でも、目を覆いたくなってしまうような惨状があった。

石造りの床の上には、デニスより少しだけ年上と見える青年が、右足のズボンを膝下から切り取られ、素足を剥き出しにして仰向けになっている。

いや、素足だったもの、と言ったほうがよいのかもしれない。

脛のあたりから肉がぎざぎざに裂かれ、足首は異様な方向に曲がっている。

肉の隙間からは、ぬらりと光る筋ばったものと、白い骨が見えた。

あげく、膝のすぐ下で布を縛り、止血をしているというのに、時折奇妙に血が噴き出してくるではないか。

それは、単純な怪我というより　なにか、呪いめいた光景に見えた。

「呪具だ」

自分を連れてきた騎士のひとりが、そんなことを言う。

彼は、忌々しげに顔を歪めると、デニスにあるものを突き付けた。素手で触れぬよう、布で覆われた馬蹄である。

「こいつの乗った馬の蹄が、こんなものにすり替わっていた。見た目は芸術品のようだが、しばらく歩くと碎けて、破片が足に突き刺

さる。それで馬が暴れてこいつを蹴り飛ばし、最悪なことに、破片ごとこいつの足を踏みつぶしちまった。今、こいつの足の中では、その破片が呪いを撒き散らしてるんだ」
「そんな……」

誰がなぜそんなことを、と思う。

だが、横たわった青年が獣のような呻き声を上げるのを聞き取り、なまじ痛みに耐性があるだけに、気絶もできなかつたらしい、デニスのはつと我に返った。

今はとにかく、治療だ。

デニスは血だまりの広がった床に片膝を突き、青年の足にこわこわと手を伸ばした。

あまりに酸鼻な傷口に、生唾を飲み込む。

新人だし、なにより祈りを唱えれば治してしまえるからこそ、このようにひどい現場は、デニスはこれまで遭遇したことがなかったのだ。

「て……天より降り注ぎたる、至高の光よ。我がいの、祈りに応え、その気高き、慈愛の灯にて、憐れなる、ち、地上の子を」

声が震える。

折しもそのとき、ふたたび傷口から血しぶきが上がり、

「うわああああ！」

デニスは情けなく悲鳴を漏らして腰を抜かした。

「馬鹿野郎！ 医者のほうが悲鳴あげてんじゃねえよ！」

とたんに、横たわった青年　テオというらしい　の傍らで必死に手を取って励ましていた仲間の騎士が声を荒らげる。

その怒声にデニスはびくつと肩を揺らし、なんとかテオに再び向き直ったものの、傷口はあまりにグロテスクで、とても直視できるものではなかった。

「あ、憐れなる、地上の子を、包み、い、癒して」

かざした手がわななく。

師匠でもあるロツトナー侯爵からは、聖力の発動にはイメージが必要なのだと聞いた。

つまり傷を癒すならば、その砕けた骨が繋ぎ合わさり、裂けた肉がふさがるところをありありと想像する必要があるということだ。

(む、無理……っ)

デニスは卒倒しそうになった。

だが、目の前のテオは、文字通り手負いの獣のように、脂汗を浮かべながら咆哮を上げている。

痛いのだろう。

苦しいのだろう。

身分の貴賤など関係ない。

百姓上がりは頑丈なはず、などという薄っぺらい先入観を吹き飛ばすような、圧倒的なむごさがそこにはあった。

自分が救わなくてはならないものの重大さも。

「包み、癒して、祝福を、さ、授けたまえ……！」

初めて芽生えた責任感を燃料に、なんとか祈りの言葉を唱える。
だが 燐光を発して塞がるはずの傷は、一向に変化の兆しを見せなかった。

「しゅ 祝福を！ 祝福を授けたまえ！」

なぜだ。

デニスには焦った。

「祝福を！ どうか……！」

喉が裂けんばかりに叫んでも、事態は変わらなかった。

いや、むしろ逆に、まるで聖言に抗うように、再びどぶつと血が溢れだす。

それを見て、デニスは絶望とともに悟った。

「呪具が……聖力を跳ね返している……！」

「なんだと……！？」

周囲で見守っていた騎士たちがどよめく。

衝撃に青褪めながら、デニスは理解したままを震える声で伝えた。

「あ、足の中のどこかに食い込んだ呪具の破片が、聖力を跳ね返しているんだ。傷が癒術を受け付けない。こ……このままでは、彼は、全身の血を失って……」

死んでしまっただろう、とは、さすがの彼も口にはできなかった。

が、その場にいた全員がそれを理解したらしい。

人だかりをなしていた群れのうち、一番権限があると思しき人物
副中隊長が、ぐっと口を引き結んでから、低い声で告げた。

「おまえら。テオの身体を押さえる。あと、舌を噛まないように猿轡も」

「……………副長……………」

ほかの騎士たちが、沈痛の面持ちでそれに頷く。

真意を取り損ねたデニスだけが、怪訝な眼差しを副中隊長に向けた。

「いったいなにを……………？」

「テオの足を切り落とす」

「な……………っ！」

絶句する彼をよそに、副中隊長と呼ばれた男は、痛みをこらえるような表情で剣を抜いた。

「要は、呪具の破片さえこいつの身体から離してやればいいんだ。

切断面を塞ぐくらいは、おまえさんもできるんだろう？」

「そんな……………！ 傷は塞げても、失われた足を戻すことはできないんだぞ！」

「じゃあほかにどうするんだ！」

一喝されてしまうと、それ以上の反論はできなかつた。

無力感に打ちのめされながら、騎士たちが切断の準備を進めるのを見つめる。

（僕は……………なにもできないのか……………？）

彼らの会話が、膜を一枚隔てた向こう側で聞こえるかのようにだった。

（呪具なんて……聖水を浴びせれば、それで効力をなくすのに。そんな初歩の初歩が、……僕が呪具を取り出せないために、できないのか……？）

だとしたら、なにが聖医導師だ。なにが癒術だ。

ただ、肉を元通りにくつつけるだけのことのできたって、そんなの、粘土細工が得意なのと、なにが違うというのだ！

視線の先で、副中隊長が騎士のひとりから蒸留酒のボトルを取り上げるのが見える。

彼はテオの傍に跪くと、こわもての顔に、子どもに向けるような優しい表情を浮かべた。

「テオ、おまえ、こいつが好物だろう。たんまり飲んでいいぞ。なあに、怖いことなんてないさ。俺の剣は、かなりの切れ味だ」
「うっ……あ、あ……あり、が……」

テオは脂汗を浮かべながら、必死に頷く。

呻き声に紛れて、礼を述べようとしているようだった。

酒で痛みと恐怖をごまかしての、切断。

そんな拷問のような光景が、これから繰り広げられようとしている。

（僕では……救えないのか……！）

デニスは知らぬ間に涙を浮かべながら、拳を握りしめる。
と、そのとき。

「お待ちください」

背後から、低く涼やかな、少女のものと思しき声が掛かった。
その場の全員が振り向く。

何十という視線を平然と受け止めた小柄な少女は、なぜかむき出しの両手を空中に掲げるようなポーズをしながら、淡々と告げた。

「その蒸留酒、もっと有効に活用しませんか。 具体的には、私の手の殺菌に使わせてください」

ほっそりとした白い腕と、素顔を窺わせない分厚い眼鏡が、陽光を反射してまぶしく光った。

16・「普通」の手当て(4)

ルーカスは、目の前で肅々と「殺菌」とやらを進めるエルマを、真剣な表情で見守った。

事情を呑み込めていないほかの団員たちが、もの問いたげな顔を向けてくるが、それを視線だけで封じる。

それほどに、現場には異様な緊迫感が満ちていた。

いや、異様といえば、真っ先に言及すべきは、エルマの恰好だろう。

彼女はルーカスとともに聖堂を飛び出し、まっすぐに東屋に向かうのかと思いきや、一度侍女寮に寄り、次に追い付いてきたときにはこの姿となっていたのである。

すなわち、全身を覆う長袖のエプロンに、ブリムではなくほつかり、そして口布。

袖を捲りあげている両腕はともかく、顔に関しては眼鏡の部分しか見えない。

つまり、素顔はかけらも見えない。

全身白っぽい布で覆われているわけだが、なぜだかそれは、頑強な鎧のようでもあった。

彼女は銅のトレイのうえに、なにやら見慣れぬ器具をずらりと並べると、さらに清潔な布を敷いて床の上に置いた。

そうして、この場の最高責任者　ルーカスを、じっと見つめて告げた。

「それではこれより、テオ・フェルスター様の脛骨骨幹部骨折の手術を開始します。ご覧の通り開放骨折ですので、観血的整復術によってアライメントを戻し、かつ、筋肉内異物摘出手術、および靭帯断裂縫合術を行います。術後は速やかに抗生物質を投与し、感染症への罹患を防ぎます」

「……………は？」

「ですから、テオ・フェルスター様の脛骨骨幹部骨折……………」

彼女はもう一度繰り返し返そうとしたが、少し考えて、

「つまり、傷口を消毒して開いて、呪具の破片を取り除いたり縫い合わせたり薬を処方したりします」

物言いを改めた。

ずいぶんざつくりとしたインフォームドコンセントだ。

だが、あまりに淡々とした自信に満ちたその様子に、誰もが言葉を失い、自然と患者の傍らの場所を譲りはじめた。

剣に手をかけていた副中隊長までもが、戸惑いながらもエルマの動向を見守っている。

彼女はその隙を突くかのように、滑らかな動きでテオの傍に跪くと、呻く彼にそつと話しかけた。

「フェルスター様。これより、右足全体に麻酔をかけます。十数えますから、吐き気を覚えるようでしたら教えてください」

「うつ……………あ……………ま、魔水……………？」

耳慣れぬ単語に、テオが困惑の呟きを漏らす。

エルマはひとまずそれを了承と受け止め、素早く右足に麻酔を注射した。

変化は劇的だった。

「い、痛みがなくなった……！」

「動きませんよう。これからしばらく酸鼻な光景が続きますので、目隠しをさせていただきます。副中隊長様、恐れ入りますがお願いできますか？」

「あ、ああ……」

エルマは、なるべく自分の手の滅菌状態を保ちたいらしい。

副中隊長に目隠しをさせ、テオの身体を固定させたほか、残りの騎士たちにも蒸留酒で手を消毒させ、ひとりひとつずつ医療具を握らせた。

「ではあなたは、私が『メス』と言ったらメスをください」

「お……おお！」

すっかり空気に呑まれた団員たちは、素直に従う。

呆然としていたデニスが我に返ったのは、そのときだった。

「お……おまえ……！ さっきからなにをしているんだ！」

「オペですがなにか」

「なにか、じゃないだろう！ 治療行為は医師か聖医導師の領分だ。侍女ごときが、なんの真似ごとか知らないが」

自分は役に立たなかったが、だからといってそれは侍女の越権を許しているという理由にはならない。

デニスは激しく糾弾しようと思いを吸い込んだが、

「臭い！」

拳よりも攻撃力のある言葉によって殴り飛ばされた。

「……………！？」

物理攻撃ではないのに、心と頭をがつんと抉られたような衝撃だ。デニスが思わず絶句すると、跪いたままのエルマが、ぎらりとこちらを見上げてきた。いや、ぎらりとしているのは眼鏡なのだが。

「恐れながらその香水、強烈に臭うございます。衛生に障るレベルです。それに、親指をかじる癖でもおありで？ 爪が一部ぎざぎざになっていらつしやるようです。それで患者および傷口に触れようなど、言語道断。文字通り顔を洗って、ついでに爪を切り手指を清めておいください」

「な……な、なな……なんて、無礼な……」

あまりの暴言に青褪める。

だが、デニスがぱくぱくと口を動かしていると、業を煮やしたらしいエルマが今度こそ吠えた。

「人体に触れようつてモンが、香水かぶって指しゃぶってんじゃねえよ常識だろう！？ 医導師の自覚があるなら出直してこい！ ねえなら引っ込め！」

「ひっ！」

団員以上にドスの利いた恫喝に、思わず悲鳴を漏らす。

いや、団員の声も複数重なっていたかもしれない。

あたりに、針が落ちる音すら聞こえそうな沈黙が訪れる。

静けさの中、デニスはしばらくテオとエルマを見比べていたが、やがて拳を握ると、勢いよく走り去っていった。水汲み場の方角へ。

「失礼。取り乱しました。眼鏡」

「は、はい！」

すると先ほどの怒声が嘘だったかのように、エルマが静かに告げる。

眼鏡担当の騎士はよい子のお返事をして、わずかに下がっていた眼鏡のブリッジを、横からそっと持ち上げた。

そうして、デニスが香水を洗い落とし、手指を清めて再度駆け付けたときには、手術はほぼクライマックスに向かおうとしていた。

「メス」

「はい！」

「汗」

「はい！」

「眼鏡」

「はい！！」

エルマが短く告げるたびに、それぞれの担当である騎士が腹から返事をして、従順に要望を叶えていく。

むくつけき男どもが、小柄な侍女に従う様子は異様の一言に尽きたが、当のエルマはといえば、こちらに背を向け、ただ黙々とテオの傍に屈みこみつづけていた。

自分だって、聖医導師だ。

治療の様子はきちんと把握している必要がある。

デニスは覚悟を決めて拳を握ると、恐る恐る、「おへ」の現場に近づいていった。

(な……なんだこれは……！)

そうして、息を呑む。

視線の先では、恐るべき速さで侍女が骨の破片を繋ぎ合わせていた。

無残に砕かれていたはずの骨は、ヒビこそ走っているものの、本来あるべき姿でまっすぐに並び、ひどく裂けていたはずの肉も、繊維に沿う形を取り戻し、あとは縫い合わされるだけとなっている。

いや、それよりも異様なのは、侍女の腕の動きだ。

(な……っ！　あまりに素早すぎて、残像しか見えない……だと……！?)

ピンセットとメス、そして鉗子を器用に操る様子はあまりに素早く、まるで手が四本、五本もあるようにも見える。

デニスは呆然としながら、何度も目を擦った。

これはおまじないに毛が生えた「女の手当て」などではない。

治療の域すら越している。

これはもはや　芸術だ。

デニスは言葉を失った。

聖力を伴わない手技など、子どもの手当ての延長のようにはか思

っていなかった。

だが、今、彼女の手から繰り出される奇跡的な治療術の前に、ただ圧倒され、感服している自分がいる。

現に、施術を見守る周囲の顔色は格段によくなり、むしろ興奮に目を潤ませている者たちまでいることに、彼は気付いた。

「呪具、摘出。聖水」

「はい！ 聖水をかけます！」

ピンセットで摘み上げた呪具の破片を、担当の騎士が持つ布の上に置き、即座にもう一人がそれに聖水を振りかける。

じゅっ……という小さな音が響き、破片が効力を失ったのがわかった。

「破片と馬蹄を照合し、完璧に一致するかを確認してください」

「完璧に一致しているな。破片はこれですべてのようだ」

「よし」

骨や肉を整えながら、呪具もばっちり摘出したらしい。

馬蹄を検分したルーカス王子が告げるのを聞き取ると、侍女は静かに頷いた。

「それでは縫合します」

「縫合？ 糸で縫うのか？ 針がないようだが」

「ああ。風で飛ばされそうだったので、眼鏡のつるに仕込んだままにしていたのです。取っていただけますか。蒸留酒で消毒してください」

怪訝そうなルーカスが問うと、エルマは手を動かしたまま答える。

「……………なんだっておまえは、眼鏡のつるに医療用の縫い針など仕込んでいるんだ」

「え？ 麻酔や針のたぐいは、エチケットとして誰だって持ち歩きますよね？」

持ち歩かねえよ！

不思議そうに問い返すエルマに、デニスは思わず叫び出しそうになった。

そして彼女の肩を揺さぶってやりたかった。

まさか持ち歩かないのこの人、みたいな雰囲気醸し出さないでくれと。

トイレにハンカチを持っていくのとはわけが違っただから。

そしてその思いは、さすがにその場の騎士全員に共通するものだったらしい。

ルーカスはじめ、一同が微妙な表情に顔を引き攣らせていた。

「……………そもそも聞きたかったんだが、これらの膨大な医療器具をおまえ、いったいどこに隠し持っていたんだ」

「もちろん鞆の中にですが」

それを聞いてつい視線を向けてみれば、たしかに彼女の傍らには小ぶりの布鞆がある。

どうやら、侍女寮から持ってきたものらしい。

だが、明らかに質量保存の法則を無視するような大きさだったので、ルーカスは眉間にしわを寄せた。

「……なんでこの量が、こんな小さな鞆に収まるんだ？」
「女性は収納上手であれ、と育てられたのですが、もしやそれは普通ではないのでしょうか」

余談だが、ヴァルツァー監獄内では、「マリーの谷間か、エルマの鞆か」という格言がある。

どちらも四次元に繋がっていて、突拍子もないアイテムを引き出してくるので、彼女たちがそこに手を突っ込んだときは注意せよという意味だ。

だが、そんなことを知るはずもないルーカスは、答えになっていない返答に曖昧に頷きつつ、追及を諦めたようだった。

順調に進んでいる「おぺ」の邪魔をしてまで問いただす内容ではない。

「まあいい。針を取るぞ。どちら側のつるだ？」

「右です。レンズとの連結部分に小さな突起がありますので、それを」

「ま……待ってくれ！」

そのまま縫合に移行しそうな展開に、デニスは慌てて待ったをかけた。

エルマがゆっくりと振り返る。

真意の見えない眼鏡の奥の瞳に、デニスは必死に話しかけた。

「待ってくれ。……その、ここからは、僕の出番だ」

「……………」

「いや、領分や資格がどうというのではなく……呪具がない以上、骨を繋ぎ、肉を閉じることならば、糸で縫い合わせるよりも、癒術

のほづが早い」

また怒鳴りつけられるだろうか。

ここまでまったく役に立たなかったではないかと、嘲笑われるだろうか。

だが、デニスとて、最年少の聖医導師として認められたプライドがある。

ここで逃げ出したら終わりだと思っただし、苦しむ患者^{テオ}を前に、なにもできなかった自分のままでいたくはなかった。

デニスが言葉を選びながら訥々と語ると、

「……………はい」

侍女は意外な返答を寄越した。

「もとよりそのつもりでした」

「……………は？」

「準備は整えました。聖医導師様。なにとぞ治療をお願い申し上げます」

そう言って立ち上がり、テオの隣の位置を譲るではないか。

デニスはぼかんとしていたが、エルマに再度声を掛けられ、慌てて彼女が座っていた場所に跪いた。

祈りを唱えようと両手をかざすと、隣からほっそりとした腕が伸び、自分の手を取る。

エルマは丁寧に、蒸留酒を染み込ませた布でデニスの手指を清めてくれた。

「癒術には必要ないのかもしれませんが、念のため。爪、きれいに切つていらつしやいますね」

「あ……ああ。その……おまえ……いや、あなたの言う通り、患者に触れるには、自分が清潔でなくてはと、思ったので」

一本一本を拭き取る、エルマの指は繊細で白い。

そんな場合ではないのに、しかも全身を布で覆った異様な格好だというのに、ほっそりとした手指を這わされて、デニスはどぎまぎとしてしまった。

慌ててひとつ咳払いする。

「で……では、祈りを」

そう仕切り直して、改めて患部を直視する。

肉が割り開かれたそこは、しかしあまりにエルマが美しく施術していたので、もうグロテスクだとは思わなかった。

(こんなに……複雑な構造なんだ)

そつと手を近づけながら、そんなことを思う。

自分がただ「癒すべき傷」としか考えていなかった部分には、骨があり、筋肉があり、それに張り巡らされた神経や血管があった。

どれもが機能と役割を持ち、複雑に絡み合いながら「足」という一つの部位を形成している様は、豊かであり、美しさすら感じられた。

デニスは静かに目を閉じ、聖言を唱えはじめた。

「天より降り注ぎたる、至高の光よ」

光が傷口に降り注ぎ、穢れを祓っていくところをイメージする。

「我が祈りに応え、その気高き慈愛の灯を差し伸べたまえ」

傷ついた筋肉の繊維や骨をそつと温め、ゆるやかに、元の形へと溶け合わせていく。

「憐れなる地上の子を包み、癒して、祝福を授けたまえ」

ぴんと通った骨を、頑強な筋肉が包み込み、神経、血管、そして皮膚が、繊細にそれを囲みこむ。

ふわ、と光が溢れる。

周囲に、「おお……！」という感嘆の呟きが漏れたのは、それと同時にだった。

デニスが自分の手にこれまでにない熱を感じ、驚きながら目を開けたとき、そこには、すっかり元の通りに回復した足が出現していた。

「神よ……！！」

「テオの足が戻ったぞ……！！」

騎士たちから次々と歓声が上がる。

それに囲まれながら、デニスもまた、信じられない思いでテオの足を見つめていた。

傷跡ひとつ残っていない、「完治」。

こんな完璧な癒術ができたのは、初めてだ。

「テオさん。足首を曲げられますか。右、左。上、下。はい。ありがとうございます」

横ではエルマが冷静に、回復ぶりをチェックしている。

痛みも違和感もなく、足全体が完全に元通りになっていることを確認すると、彼女は感嘆の溜息を漏らした。

「素晴らしい」

そうして、デニスに深々と頭を下げてるではないか。

「さすがでございます。聖医導師様」

その、心底感服したかのような仕草に、慌てたのはデニスのほうだった。

「……な、なにを言うんだ。彼を治したのは、おま、あ、あなたじゃないか……！」

「なにを仰いますやら。私は単に異物を取り除くお手伝いをしただけ。リハビリも経ずに完全な機能回復を得る。まさに神の御業をもって彼を救ったのは、あなた様でございます」

「り……りはびり？」

耳慣れぬ単語に目を白黒させるが、エルマは頓着しない。

淡々と道具を片付けはじめた姿を見て、デニスは心を決め、口を開いた。

「あ、あの……エルマ。……エルマ、さん」

権力、身分、美しいコレクション。

デニスはそのいった、わかりやすいものばかりに平伏する性根の持ち主だ。

だがそれはつまり、「すごいもの」「自分より強いもの」と認識した事物に対しては、素直にしつぽを振る性格だということでもある。

デニスは今、医学の粋を軽々と超えるような手技を見せ、あまつ、自分に榮譽を譲り、褒めてくれたエルマに対して、純粋な敬意を持つに至っていた。

「僕の癒術がこれだけの仕上がりになったのは、あなたが肉体の構造を示してくれたからだ。そもそも、呪具が食い込んだ状態では、癒術なんて無意味だった。彼を救ったのは、あなただ」

「……いえ。私はそんな。ただ、『皆様の力を借りて』、『少し器用な侍女として普通の範囲で』あくまでお手伝いをしただけで」

しかしエルマは、妙にあちこちを強調しながら、ぼそぼそと言いつ返す。

彼女は彼女なりに、「ひとりです手術を完結させるのが異常なら、みんなでするのは普通なのだろう」とか、「呪具を抽出するのは、まあ、目に入ってしまった睫毛を取ってやるようなものだろう」といった理論武装を経てこの手術に臨んでいたので、それを否定されたくないという思いがあったのである。

負けず嫌いと言ったデニスを焚きつけて、仕上げを彼に譲ったのもそのためだ。

あくまで、自分は侍女として「手伝い」をしただけだと。

しかしそんな理屈が、デニスに通用するはずもなかった。

「いったいなにを言っているんだ！ 少し器用なんてものではないだろう」

「いえ。このくらい普通です」

「普通の人間が、あんなに滑らかに肉を開いたり骨を繋ぎ合わせた
りできるものか！ 縫合までしようとしていたくせに。あんなの、
僕でも見たことがないぞ」

むきになったデニスが言葉を重ねると、エルマは、「そんな」と、
ちよつとむつとしたような、困惑したような雰囲気を漂わせた。

「普通ですよ？ だって、積み木や針仕事の一環ですよ」

その、心底「なぜそう言われるのかわからない」といった物言いに、そばで聞いていたルーカスは「あ」と思った。

これは、来るぞと。

「普通、女子というのは、骨格標本の積み木で手指を鍛え、針仕事
がうまくなるようにとの願いを込めて、三歳の誕生日には針をプレ
ゼントされるものではないのですか」

「は……？」

「私の初オペは五歳のときでしたし、あれくらいの手術なら、少し
の器用さがあれば誰でもできると思うのですが……まさか、シャバ
の方というのは、そのくらいのことでもできないのですか？ 医師で
も？」

その場にいた全員が、ぽきつと小枝が折れるような音を聞いた気がした。

それはたぶん、暴言に頭と心を抉られたデニスが、今とどめに天

狗鼻を折られた音だった。

「……………っ！……………っ！……………っ！……………っ！」

デニスが涙目になって拳を握りしめている。

ルーカスはそっとその肩に手を置いてやりながら、小声でぼやいた。

そこまで言っただけだよ、と。

だが、それでかえって奮起した少年医導師が、進んで平民たちの治療をこなして人体への理解を深め、やがて稀代の聖医導師として大成することになるとは、そのときはまだ、誰も予想さえしなかったのである。

17・「普通」の手当て(5)

「いやあ、それにしても、見事な手腕だったな、エルマよ。感謝する」

今に見てる、と叫びながらデニスが走り去っていったから、しばし。

ようやく時の流れを思い出した騎士たちは、めいめい、テオの回復を喜んだり、片づけを手伝ったりしはじめた。

そんな中、いかめしい顔に満面の笑みを乗せて話しかけたのは、短く刈った黒髪に、同色の瞳が印象的な巨漢 副中隊長・ディルクである。

彼は、その分厚い手ではしんとエルマの背を叩くと、ついで一部始終を見守っていたルーカスに目礼した。

「まったく、ルーカス。よくぞ彼女を連れてきてくれたものだ」

身分としては部下になるのだが、ディルクのほうが十歳以上上であるのと、ルーカス自身がそう望んだため、彼は気安い言葉遣いをする。

ルーカスは軽く眉を上げると、肩をすくめた。

「ああ。俺の代わりにテオの足が持っていかれかけたと聞いて、生きた心地がしなかった。彼女には感謝の一言しかないよ」

まさか式典練習をサボったツケが、こんな形で現れようとは。そう述べたルーカスに、ディルクは深刻な表情で頷き返した。

「テオが無事回復したのは幸いだが、これは看過できない事態だぞ。癒術すら跳ね除ける呪具。それも、第二王子が乗るとわかっている馬にだ。まさかとは思うが、馬好きと噂の第一」
「デイルク」

しかし、その声はルーカスによって遮られる。
男らしい端正な顔には、いつも通りの皮肉っぽい笑みが浮かんでいるだけだった。

「そんな憶測にまみれた、生臭い話を女性の前でするものではない。だからおまえは無粋だと言われるんだ」

「……ルーカス」

女の好みにつるさいこの王子が、目の前のほっかむり眼鏡侍女を女性として見ていないことなど明らかだ。

だが、あえてそのような物言いで咎めてきた意図までも理解し、デイルクは続く言葉を飲み下した。

「呪具の残骸は俺が預かる。形状が馬蹄だったということは、周囲に漏らすな」

「……承知した」

端的なやり取りで、今後取るべき姿勢を打ち合わせる。
ルーカスたちがちらりと視線を向けると、エルマは淡々と、

「私はなにも聞いておりません。ほっかむりをしていると、耳が遠くなるようです」

とだけ述べた。できた侍女である。

ディルクは感謝を込めて、再びエルマの肩をばしんと叩いた。

「改めて、感謝するぞエルマ。ところでそろそろ、そのほっかむりと口布を外してはどうだ。いい加減暑いだろう」

「はい。実は熱気が籠り、なかなか不快でした」

「はははっ。脱げ、脱げ！」

ディルクはその勢いのままに、先ほどまで消毒に使っていた蒸留酒を取り上げ、部下から巻き上げた銅マグにそれをなみなみと注ぎ込む。

そうして、背を向けてエプロンやほっかむりを脱いでいたエルマに、ずいと差し出した。

「ほれ、飲め！ 喉が渴いたろう。最高にうまい水だ」

「お言葉に甘えます」

冷静なようできて、その実、長時間集中しつづけた疲労と、夏の気温に体力を奪われていたのだろう。

エルマは臭いを嗅ぐことすらせず、口布を外したそのままの流れで、ぐいとマグを傾けた。

「……………」

数秒ののち、ぴたりとその動きが止まる。

一気に度数の強い酒を飲み干したエルマを見て、ディルクはひゅと口笛を鳴らした。

「いい飲みっぷりじゃねえか」

「まったく、そんなところまで普通ではないのか」

ルーカスはもはや苦笑の態だ。
十五の少女の飲みっぷりとは思えない。

が。

「……………」

ガロン、と銅マグが手から滑り落ち、石畳を転がりはじめた時点で、二人はぎよっと目を見開いた。

いまだ口布を剥がした状態で硬直している右手。

マグを取り落とした左手は、代わりにふらりとした動きで、少女の小さな口元を覆っている。

ふらりとした動き？

呆然とする二人に、エルマはぼそりと告げた。

「……………わたし」

心なしか、いつもより滑舌が甘い。

「フランベ、や、消毒、に、使うくらいなら、平気なのですが」

その声は、まったくもって年相応の、少女のものだった。

「度数の、高い、お酒は……………苦手で」

「お……………おい！」

「大丈夫か!？」

だらり、と両腕を下げたエルマに、男二人が血相を変える。慌てて手を伸ばすルーカスたちに、彼女は奇妙に冷静な声で告げた。

「恐縮ですが、あと三秒で……気絶します」

宣言通り、きっかり三秒後、エルマはルーカスたちの伸ばした腕の中で、どさっと崩れ落ちた。

「ただいま戻りました」

東屋から走り去り、聖医導師の詰め所に向かうと、ちょうどほかの仕事を終えたのか、同僚や先輩の導師たちが珍しく勢ぞろいしていた。

最年少のデニスは、軽く目礼をしながら部屋に踏み入り、自席を指す。

聖医導師は名誉職。

先ほどまでのデニスのように貴族意識に凝り固まった人間も多いし、貴族社会そのもののような派閥闘争や、足の引っ張り合いもある。

必要以上に馴れ合わないのが吉だ。

と、指定された席に腰を下ろしたとき、入り口から呼びかける声

があった。

「ああ、戻ってきましたか、デニスくん」

「侯爵閣下！」

侯爵にして司祭、聖医導師の顧問も務める、クレメンス・フォン・ロツトナー侯爵である。

常に穏やかな後見人の登場に、デニスは慌てて立ち上がり、駆け寄った。

「なに用でございましょうか」

「いえ。君が急な案件で呼び出されたと聞いて、心配になったものでね。たしか今日は、すでに騎士団模擬戦の救護をお願いしていたはず。そこに重ねての対応で、負担は大丈夫でしたか？」

「は。過分なお気遣い、痛み入ります」

デニスは侯爵の思いやりをいっぱいにした。

「噂でしかありませんが、なんでも最初、君の癒術が効かなかったそうじゃないですか。君の能力を疑うわけではありませんが、やはり相当無理があったのではないかと、そう思いましたね」

「ああ、それは」

侯爵の言葉に、つい渋面を作ってしまったそうになる。

善意とはわかってはいるが、「癒術が効かなかった」だとかのワードを、同僚たちの前で堂々と言わないでほしい。

彼らは、クレメンスが席を外した途端、それを言いふらしてデニスの足を引っ張ろうとするに違いないのだから。

「私の能力云々というよりは、呪具のせいだったのです」

「呪具？ 穏やかでないですね」

「はい。一見したところでは、まるで芸術品のような」

そこまで説明しかけて、デニスはふと口をつぐんだ。

報告は重要だが、それはこのように、公衆の面前ですべきものだろうか。

（いや、呪具なんて話題を出せば、僕の失態なんかよりよほど、こいつらの噂の種になることは間違いないから、僕としては助かるんだが……）

数刻前までのデニスだったら、嬉々として呪具の形状や、それがいかに禍々しかったかを語っていただろう。

すべてそれが原因であると。

さらには、思わせぶりに、馬蹄がまるで「第一王子の蒐集物のように」、質の良いものだったことも付け加えていたかもしれない。

そうすればデニスは、不測の事態に役立てなかった無能者から、ゴシップを握るキーパーソンに早変わりだ。

居心地としてはこちらの方がよほどいい。

だ　　が　　。

（それって、どうなんだ。医師として）

先ほど怒声を浴びせてきた侍女の姿を思い出し、デニスは自問した。

彼女には、香水を浴びて悪臭をごまかし、爪を噛んで苛立ちをごまかすことを、「常識がない」と叱られた。

それでも医師かと。

ならばきつと、ゴシップを振りまいて己の技量不足をごまかすのも、理想からはかけ離れた振舞いのはずだ。

馬蹄はルーカス王子が所持している。

自分はそれをじっくり検分すらさせてもらっていないし、第一王子フェリクスがその馬蹄を持っていたかも定かではない。

そもそも、自分の本分は患者を治療することであって、その背景について、下世話に憶測を立てることではないはずだ。

デニスはつるりと切りそろえられた親指の爪をなぞりながら、自らの言葉を訂正した。

「いえ。そうですね、僕的能力不足です」

「……デニスクン？」

「気に掛かる点もあったので、今回の治療法や、得られた知見も含めて、書面で改めてご報告させていただきます」

きつぱりと言い切ると、侯爵は少し目を見開いて、やがて頷いた。

「そうですね。けれどももし書面にしにくいことがあれば、いつでも話を聞きますからね」

そんな言葉まで添えて。

侯爵の優しさに改めて頭を下げ、退室を見送ると、デニスは自席に戻ってペンを取った。

報告書をまとめるのだ。

す、と羽ペンをインク壺に浸したところで、しかし彼はふと疑問を覚えた。

最初、自分の癒術が効かなかったという噂を、この短時間で、侯爵はいったいどうやって耳にしたのだろうか。

18・「普通」の手当て(6)

「まったく……こんなところだけ急に『普通の女の子』になつてくれるなよ」

小柄な侍女を、寝台にそつと横たえてやりながら、ルーカスはぼやいた。

昼下がりの侍女寮。

エルマの自室である。

気絶した後、幸い彼女はすぐに意識を取り戻し、その手の対応に慣れた若手の騎士に手伝われながら、大量の水を飲んだり吐いたりを繰り返していた。

そうして、なんとか症状が軽くなったと思われた時点で、疲れからか眠ってしまったのである。

医導師に診てもらえればよいのだが、内臓が損傷したなどの場合は別として、基本的に「酔い」は癒しの対象とはならない。

となると、できるのは「普通の医師」による診療くらいなものだが、すでに応急処置は済ませてしまつて、アルコールはほとんど排出したので、あとは寝かせてやるくらいのものである。

結局、それならば自室で休ませてやろうという話になり、しかしながら寮の四階まで侍女仲間に眠つたエルマを運ばせるのも不可能なので、ルーカス自らが運搬を名乗り出たというわけだった。

侍女長に話を通す前に侍女寮に踏み入ってしまったわけだが
まあ、事情が事情だし、相手はエルマだし、男女の間違いがどうと
かいった観点で咎められることはなかるう。

ぐったりと横たわる少女を、ルーカスはやれやれと見つめた。

エルマ。

監獄で生まれ、育った少女。

最初はただの哀れな弱者だと思っていた。

だが、ふたを開けてみれば、微表情を読むわ、まぐるを釣るわ、
外科手術をするわ。

いったいどんな教育を施されれば、こんな仕上がりになるのか、
ルーカスとしては監獄に立ち入り調査のひとつもしてみたいところ
だ。

が、「監獄内に極めて高度な教育を施せる人物がいる」という事
実は、芋づる式に不都合な真実　たとえば、陰謀の存在に繋がる
可能性がある。

享乐的な第二王子に徹することで、これまで地位や安全を守って
きた自分が、それをかなぐり捨てて陰謀を明らかにするというのは、
は、いささかのためらいがあった。

あとは純粹に、彼女の監獄出身という出自を徹底的に抹消してい
ることもあり、表立ってはそこに踏み込むことができないという事
情もある。

ただ、ルーカスは、あの監獄について、たしかにきな臭いなか
を嗅ぎ取ったのだ。

違和感があり、いびつ。

実像を歪めているのは、こちら側の人間かもしれないし、
あるいは監獄側の人間かもしれない。 あ

そう遠くない未来、自分がそのあたりの事情に介入せざるを得ないことを、ルーカスは予感した。

(……………いずれにせよ)

首をゆるく振って、思考を切り替える。

目の前の現実として、寝台に横たわっているのは、幼く小柄な少女だった。

彼女の背景はきな臭いが、しかし、彼女自身は悪意のない人間であることを、これまでの付き合いで理解している。

やることなすこと突拍子がないし、すっかり自分自身、彼女を未知の生命体かなにかと思いかけている節もあるが、実際には、まだ十五の少女なのだ。

「……………悪かったな」

小さく、詫びる。

意外なほどにきゃしゃな体の少女は、ただ眠りつつづけるだけだった。

ルーカスは、寛げられた襟元をなんの欲も覚えずに眺め だつて、冴えない外見の、性格的にも可愛げのない地雷めいた少女を、どうこうする気にはなれない 、ふと、あることに気付いた。

(……………鎖骨の辺りから、肌の色が違う……………?)

普段はメイド服の立て襟に隠された、胸元。
その肌が、はっとするほど白いように思われたのだ。

(いや……待てよ。そういえば、手も……)

手術をするときから、妙に腕が白いなと思っていたのだ。
そのときは、それ以上に気にすることが多すぎて、追及はしなかつたが。

「……………」

ルーカスは無言で眉を寄せた。

今、むき出しになっている腕は、血管が青く透き通るような美しい色をしていて、とても偽物とは思えない。
となれば、こちらのほうが「素」の肌だ。

(ということとは……)

ルーカスは衝動的に、枕元にあった水の瓶を己の袖に傾けて、濡れた布で彼女の頬を強く拭ってみた。

たちまち、真珠のような美しい肌が現れた。

思わず目を見開く。

エルマ。

くすんだ肌に陰気な表情の、「ぱっとしない」はずの少女。

だが、そう。

以前、その唇の形が、美しいと思ったこともあったのだ。

ルーカスは、ゆっくりと眼鏡に手を伸ばした。

もはや顔と一体化しているような、印象の大部分を占める二つのガラス。

この下の素顔は、いったいどうなっているのだろう。

(なにが素顔だ。ある程度は透けて見えていたのではないか)

どこか胸をざわめかせてしまった自分に、頭の片隅で苦笑しつつ、そっと眼鏡を外す。

そうして、息を呑んだ。

「……………！」

そこには、妖精か使徒かと言われても信じてしまいそうな、圧倒的に美しい顔があった。

艶やかな黒い前髪の下には、ふわりと自然な山を描いた肩。

滑らかな弧を描いた長い睫毛に、高い鼻梁。化粧という名のくすみアラバスターを落とした肌は、雪花石膏のような透き通った白さだ。

眼鏡は、まるで計算しつくしたかのように、それらを最も無残な形に見えるよう歪めていたのだと、彼は悟った。

「……………つさま……………？」

そのとき、すうつと瞼が持ち上がって、ルーカスははっと我に返った。

初めて見た彼女の瞳は、夜明けの色。
青とも、濃紺とも、紫ともつかない、深みのある、いつまでも見
つめ続けたくなくなるような色だった。

エルマはその瞳をぼんやりとさまよわせ、やがてルーカスの黒髪
を視線で撫でるようにして眺めると、ぽつんと呟いた。

「おとうさま」

そうして、ふわりと、蕾が綻ぶような笑みを見せた。

「……………！」

どうやら、寝ぼけて父親と勘違いしたらしい。
完全に心を許しきったその表情は、女馴れしたルーカスですら黙
らせる破壊力があつた。

「……………おい」

「わたし。がんばって、きますから」

なにかを言いかけた、それをエルマに遮られてしまう。
彼女は、ふわふわと夢見心地の表情のまま、続けた。

「ぶつづの、女の子というものを……………理解して……………はやく」

すつと、また瞼が下りてゆく。

「はやく……………おうちに、かえり……………」

そして、再び眠りに落ちた。
しんと、部屋に沈黙が満ちる。静かな空間の中に、幼い寝息だけが響いた。

「……嘘だろう」

つい、独白が漏れる。

ルーカスは、無意識に右手で顔の下半分を覆っていた。

ぱつとしない、突拍子もない、可愛げもない少女。

いろいろと人外の域に差し掛かっている、人を混乱の渦に叩き込む存在。

なのに、不覚にも、

「……かわいいじゃないか」

好ましく、思えてしまった。

そのとき、階下から勢いよく階段を駆け上がる足音が聞こえてきて、ルーカスははっと顔を上げた。

意味もなく慌てて部屋を出る。

こちらに向かってきていたのは、髪を振り乱したイレーネだった。

「エルマ！ あなた、倒れたっていったい えっ？ ルーカス王子殿下！？」

扉が開いたのを本人と勘違いしたイレーネが、叫び声を上げかけ、それを詰まらせる。

事態を追及される前に、ルーカスは端的に、

「倒れたので運んだ。今は眠っているだけだ。俺は行くから、ゲルダによるしく頼む」

そう告げると、足早にその場を去っていった。

イレーネはしばらく扉の前で困惑していたようだったが、やがて扉を開けなおす音が響き

「……地上に天使がいるんですけどおおおおおおお！？」

ちょうどルーカスが階下にたどり着いたとき、寮全体を揺るがすような叫び声を響かせた。

19・狂博士の妹

「あん、もう。忌々しい聖職者だこと」
ビシヨップ

薄暗い監獄の一室。

贅をこらした居住空間へと作り変えられたそこで、ハイデマリーは今日もチェスに興じていた。

ただし、珍しく相手はギルベルトではない。

上等なソファに背を沈みこませているのは、三十を少し超えるかというくらい、鳶色の髪 of 青年だった。

くりつとしたはしはみ色の瞳に、不敵そうな口元。

にやりと笑むと、まるでいたずら盛りの少年のような顔つきになる。

「いつまでも自分の天下だなんて思わないことだね、マリー」

「もう。ホルストつたら、ゲームの勝利にまで貪欲なのだから」

拗ねるハイデマリーに肩をすくめてみせたのは、仲間内からは【貪欲】のあだ名で呼ばれる人物　ホルスト・エングラーだった。

幼少期から奴隷や犯罪者を買集め、人体実験を繰り返したかどで捕らえられただけあって、頭脳は明晰であるらしく、不敗を誇るハイデマリーを容赦なく追い詰めているのである。

「まいったわねえ。騎士はともかく、わたくしのかわいい黒の女王
ナイト　　クイーン
まで危ないじゃないの」

「……気付いてると思うけど、その女王の立ち回りにこだわらなけ

れば、あっさり勝てたよね？」

「そんなことではつまらないじゃない」

不思議そうに返されて、ホルストは鼻白んだように顎を引いた。

「チェスにおいて、勝敗よりも優先するものってある？」

「欲しがるだけの坊やには、美学なんてわからなくてよ」

嫣然と言い切るハイデマリーには、並みの男には太刀打ちできない迫力がある。

悔しくなったのか、ホルストは「はいはい」と両手を上げた。

「どうせ僕には、あなたの考えなんてさっぱりわからないよ。あんなにかわいい妹をあっさりと追い出してしまえる、残酷な母親の考えなんてね」

「あら」

細い指を唇に当てて考えていたハイデマリーは、その言葉にふと視線を上げる。

そして、猫のように目を細めた。

「やっぱり拗ねていたのね。しばらく実験室に閉じこもっていたのは、わたくしと口を利きたくなかったから？」

「悪い？」

「いいえ。かわいいわ」

妹を大切にする兄って、とっても素敵なもの。

完璧な形の唇が紡ぐフレーズは、砂糖菓子のように甘い響きを帯びていた。

ホルスト・エングラー。
またの名を、狂気の少年博士。

裕福な商家の妾腹に生まれた彼は、その財力と頭脳を利用して次々と人体実験を繰り返した、精神異常者だと有名であった。

だが、その実験の動機が、暴漢に襲われ昏睡状態になった妹にあったことを知る者は少ない。

少し目を離したすきに攫われ、壊された妹。

当時からうじて流通していた魔石と、独自に編み出した医療技術を組み合わせ、心臓の動きを維持し、意識を司る脳の機能を探求するために、ひたすら他人の頭蓋を開いた。

医者としてならば、そして対象が死者や罪人だけだったならば、あるいは黙認されたかもしれない行為。

だが、かつて妹を襲った犯人を見つけ出し、高貴な身分であったその男の脳を蹂躪したことで、ホルストの実験の数々は「犯罪」の烙印を押されることになった。

彼の場合、逃げようと思えば逃げられたのだろう。

それこそ、金の力を使うか、密かに蓄積させていた高度な医療技術を取引材料として。

しかしそうしなかった。

ある日、あっけなく、魔石の寿命とともに彼の妹は息を引き取ったからだ。

もう、なにもいらない。

輝かしい未来も、命さえも。

そうやって水すら取らずに牢獄に繋がれていた彼に、ある日ハイ

デマリーが話しかけたのだ。

本当に？ かつて、神の領分をも冒して知識を、生をほしがったあなたが、その貪欲さを燃え尽きさせてしまったというの？

無言で視線だけを向けたホルストの腕を掴み、ハイデマリーは己の腹に触らせてみせた。

ねえ。ここ。

ここではね。今、新たな命が育っているの。

死者を生者へと蘇らせることはできなかったかもしれない。けれど、それにも匹敵する、無から有を生み出す奇跡が、ここで起こっているのよ。

彼女は、まだ少年であったホルストをそっと抱きしめ、まるで聖母のごとき声で囁いた。

あなた、本当は償いたかったのでしょうか。育て、慈しみたかっただけなのでしょう。

……いいわ。叶えてあげる。

わたくしと一緒に、この子を育てていいわ。

育てていいだなんて、よくわからない労働を押し付ける、傲慢にすぎる言葉。

なのになぜかそのとき、ホルストは全身で感じたのだ。

許された、と。

その後監獄を掌握し、ハイデマリーのお産を手伝い赤子を取り上げたとき、彼は久しぶりに涙を流したことを覚えている。

人間の技術を重ねてもはるかに及ばなかった神の御業。

誕生。または生命。

大きな産声とともにこの世に現れた彼の「妹」は、まぶしいほどの力強さに溢れていた。

「まあ、正直ここまで過保護になるとは思わなかったけれど」「なに言ってるの？ 僕はいつだって、かわいい『妹』に必要な最低限な保護を提供しただけだよ」

チェス盤を眺めながらハイデマリーが嘆息すれば、ホルストは即座に言い返す。

のみならず、彼は心底心配そうに眉尻を下げた。

「ああ、エルマ。風邪を引いたりしていないかな。あれで結構うっかりしてるから、転んで擦り傷とか作ってなきやいいけど。麻酔をもっと持たせてあげればよかった」

「ねえ。擦り傷に麻酔で対処するな、だなんて無粋な突っ込みをさせたいの？」

「悪い虫がついたらどうしよう。眼鏡の屈折率をいじって、かなり不美人に見えるようにしたつもりだったけど。護身用に毒針も仕込んでいたほうがよかったよね、絶対。大後悔だ。駆除しにいったほうがいいかな？」

「ねえったら」

竜を一撃で倒し、柄の悪い囚人たちのこともきつちりと締めつけたエルマだ。

そんな彼女に言い寄る男がいたなら、それは随分と出来のよい虫である。

というか母親としては、十五の娘には恋のひとつもしてほしいと

ころだった。

はあ、と切ない溜息を漏らすホルストに、ハイデマリーは細い肩をすくめた。

「まったくもう。どうして兄から妹に向ける愛って、こころも暑苦し
いのかしら。エルマはもう、はいはいしかできない赤ん坊ではなく
つてよ」

「僕からすればそんなようなものだよ。それに『兄から』とは言
けど、【嫉妬】の例を見たら、暑苦しさに性差なんてないと気付く
はずだ」

小気味よく言い返すと、ハイデマリーは大げさに胸を押さえる。

「いやだわ、ホルスト。【嫉妬】が女性だとも言うつもり？」

「男性ではないよね」

「女性でもなくつてよ」

「でも自称、『監獄一のいい女』らしいから。本人の意思は尊重し
ないと」

「まあ、監獄一ですって？」

ハイデマリーはそこでまた拗ねたように唇を尖らせた。

「彼つたら、そうやってなにかとわたくしを挑発してくるのだから
「乗るような勝負でもないでしょうに」

「だって、女をかけた争いと聞くと、つい無視してはられないの
だもの」

「知ってるよ。それに巻き込まれるのはいつもエルマだ、っていう
こともね」

たとえば化粧の仕方。服の選び方。
髪のかき方、香水の利き方、歌い方。

どちらがより女性美を体現できるかの勝負は、エルマが成長するにつれ、「どちらがよりエルマを女性として魅力的に育てられるか」の勝負になぜか変化していったのだ。

おかげでエルマは、あるときは蟲惑的な魅力を振りまく娼婦に、またあるときは清楚な笑みを湛える聖女に、と日替わりのようにイメチェンをさせられ、見守る側のホルストとしては気が気ではなかった。

おそらくやらされている本人も、あれでは自分のキャラクターをどの方向に形成すべきか掴めなかっただろう。

ホルストが「かわいそうに」と呟くと、麗しの元娼婦は、優雅に首を傾げた。

「でもおかげで、あの子はきつと、大国の王子様だつて一瞬で魅了できる女に育つたと思うのだけど」

「マリーはさ、自分の娘をいつたい何にしたかったわけ。僕の大事な妹に、変な教育しないでよね」

ホルストは半眼で突っ込む。

「ここの住民は全員が全員、「自分が一番の常識人だ」と思っているあたり、救いようがなかった。」

「あら」

ハイデマリーは、さも意外なことを問われたとでもいうように長い睫毛を瞬かせる。

そして、盤上に佇む黒の女王をそつと指で撫でながら、薄く笑み

を浮かべた。

「決まってるわ。『普通の女の子』にしたかったのよ」

20・「普通」のダンス(1)

クレメンス・フォン・ロットナー侯爵は、貴族らしい端正な面差しをした、穏やかな物腰の男性である。

壮年期には金色をしていた髪は、今は色だけを白く変えて豊かに頭部を覆い、皺の刻まれた顔にはいつも柔らかな微笑がたたえられている。

人の心を解す能力と司教の資格を持った彼は、まさしく神の威光を担うにふさわしい、人格者といった様子であった。

少なくとも、表面上は。

(やれやれ、また呼び出しか。この凡愚王子め)

クレメンスは内心でそう罵りながら、外面は完璧な平静を装って、第一王子の居室に踏み入った。

が、肝心のフェリクスの姿が見えない。

代わりに、ほっとした表情を浮かべた侍女が、いそいそとこちらに向かってくる。

彼女は平身低頭し、クレメンスに経緯を説明した。

「申し訳ございません、侯爵閣下。殿下は閣下をお呼びになった後、突然部屋の模様替えをしたいと仰って……。お止めしたのですが、無理やり絵画や宝石やらの配置をご変更になって。今は埃まみれになりながら、ワインの棚の並びをご変更中です。急なお呼び立ても、また模様替えも止められず、申し訳ございません」

「いえ。あなたも大変でしたね」

クレメンスは誰に対しても穏やかな言葉遣いをする。それは、彼が真実柔和な性格の持ち主だからではなく、体のうちに溢れる苛立ちや侮蔑を、外に気取らせないためであった。

この侍女は、彼の遠縁の親戚の娘で、最近王子付きに仕立てたばかりだ。

フェリクスの即位に合わせて、家臣も侍従も侍女も、徐々に自分の息が掛かったものに「差し替え」しているとところなのだが、第一王子の凡愚ぶりに慣れない彼らが、そのたびにあたふたしてしまい、クレメンスの手まで煩わせるのは、腹立たしいばかりだった。

(だがまあ、虫けらに人間同様の働きを期待するほうが無理な話よ。ロットナーの家長たる者、これらの事態を含め、うまいこと「調理」できるようであらねば)

ロットナー侯爵家は、先王の時代よりその懐に寄生し、たっぷりと甘い汁を吸ってきた者たちだ。

クレメンスの経験に照らせば、王は、そして使用人は、愚かであればあるほどよかった。

傀儡にも、手先にも、考える頭などいらぬ。

はずだったのだが。

「やあ、クレメンス！ 遅かったではないか！ 僕が相談したいというのに、おまえはいつたいなにをしていたんだ！ おかげで、僕は部屋の模様替えなんて始めてしまったぞ」

滑舌の悪い、子どもっぽい不満声をかけられて、クレメンスはつい渋面を浮かべそうになってしまった。

振り返った先には、せつかくの美しい衣装を埃で汚した青年が立っている。

高貴な人物らしからぬ出で立ちをした彼こそ、フェリクス・フォン・ルーデンドルフ　この国の第一王子であった。

正妃譲りの金髪に緑の瞳、すらりとした体つき。

と、ここまででは、そこそこの貴公子ぶりだ。

しかし姿勢は重心が定まらず、表情は緩み切って知性を感じさせない。

彼と話すたびに、愚鈍さがこちらにうつってくるかのように思えて、クレメン스는げんなりするのが常だった。

傀儡にしたって、こんな愚か者を主と仰ぐだなんてと嘆かすにはいられないほどに。

(即位式の準備だとも。おまえが望んだ、大々的な晴れ舞台の、な)

内心で鼻を鳴らしながら、クレメンスは申し訳なさそうに頭を下げる。

ここで下手に反論しては、かえって事態をこじらせるだけだということはわかっていた。

フェリクスは先だつての「大願」で、「国中の人間を招いて盛大な舞踏会を開きたい」と言っていた。大層ばかげた話だ。

だが、そこは腐っても「大願」。

フェリクスのお守り役と認識されているクレメンスは、好き勝手を言う馬鹿王子と、呆れて物も言えないでいる貴族たちの間に立つて、如才なく実現可能なレベルへと願いを落とし込んでいった。

すなわち、「国中の人間」というのを「貴賤や出自を問わない老

若男女」と置き換え、その縮図が「宮中の使用人たち」としたうえで、彼らまでを即位式の舞踏会に招くこととしたのだ。

同時に、即位式当日を挟んだ三日間は、王城の外郭に限って市民への開放を約束。

これで、警備問題や予算に頭を悩ませていた貴族連中もようやく安堵し、フェリクスも満足したようで、クレメンスが報告を上げたときには「みんな喜ぶといいなあ」とにこにこしていた。

(なにが、「喜ぶといいなあ」だか)

改めてこの騒動にまつわる混乱を思い出し、クレメンスは苦々しく内心で吐き捨てた。

凡愚な君主は好ましいが、凡愚でありながら意思の強い人間はよろしくない。

王というのは、常にロットナーの顔色を見ながら、「どうすればよいと思う?」と判断をゆだねてくるようではなくてはならないのだ。

先王のように。

(その点、ヴェルナー王は素晴らしかった)

意思がなく、気弱で、責任感も責任能力もなく。

ロットナーはただ彼にそっと囁くだけで、自らの手を一切汚すことなく望みをかなえることができた。

もっとも、そうするためには、彼なりに努力を払ったものだったが。

彼の権力の一番の源泉となったものは、ヴァルツァー監獄だった。

周辺諸国を代表して建設費用を負担し、小国では手に余るような「犯罪人」を積極的に受け入れることで、彼は諸国の王室や権力機関に貸しを作っていた。

ルーデン国内でも、都合の悪い人間は容赦なく冤罪をかぶせて投獄し、口封じを凶つたものだ。

看守には、クレメンスの息が掛かった導師を置いてある。

外見は豚のようだし、頭も悪いが、もう十五年以上監獄で任に当たっているというのに文句も言わない、使える駒だ。

あるいは、着任時に美貌と評判の娼婦を放り込んでおいたから、それが気に入ったのかもしれないが。

ヴァルツァー監獄はこの世の地獄。

獄内は不潔で、怨嗟に溢れ、凄惨な拷問を加えられた囚人たちの絶叫が鳴り響く。

毎月上がってくる報告書は読むだに酸鼻で、クレメンスは大いに満足していた。

不都合な真実は、檻の向こうで絶望の声に紛れ、けして表舞台上に上がることはない。

ただ、そこまで考えたとき、つい第二王子ルーカスのことまで連想してしまい、彼はつい口元を歪めそうになってしまった。

ルーカス・フォン・ルーデンドルフ。

政治や権力に興味を示さず、剣の道を取った変わり者の色男。

これまでは「支配の美味がわからぬとは、愚かな男よ」と放置していたが、彼がフェリクスに代わって恩赦を施したことによって、状況は変わった。

クレメンスの聖域であり、権力の源泉であるヴァルツァー監獄。その内実 不都合な真実に、もしかしたら彼は触れてしまったのかもしれないのだ。

（今のところ、冤罪の囚人がいることも、獄内で虐待が横行している事実も言及してはこないが……）

看守が上手くやっているため気付かなかった、というのは浅はかに過ぎる考えだろう。

なにかを勘付いているからこそ、次の一手を考えているのかもしれない。

第二王子は、あれで多少の知恵もあるようだ。

（恩赦の大願を、我々家臣に頼らず、独力で遂行したことがその証拠。少なくとも第一王子よりは有能のようだ。ふん……王子でさえなければ子飼いにでもするところだが、現状、邪魔なだけだな）

そして不要な駒は、同じく不要な駒を使って盤上から排除するのが、クレメンスのやり方だった。

当初はフェリクスを傀儡に仕立ててやろうと思っていたが、彼の愚鈍さと突拍子のなさは、クレメンスをあまりに苛立たせた。

先王の時代には、「カウンセリング」のたびに相手を洗脳してきたものだったが、それこそがクレメンスの能力である、フェリクスに向き合うと、その意味の分からない言動に、先にこちらの嫌気がさしてしまうのだから大したものだ。

第一王子と第二王子に殺し合いを演じさせて、どちらも引きずり落とす。

その筋書きをクレメンスが練りはじめるのに、さして時間はかか

らなかった。

しかし。

（グラーツ子爵夫人のブローチの入手は失敗。新しい料理長を孤立させることも失敗。どうも最近、巡り合わせが悪いようだ）

最初クレメンスは、ルーカスと懇意の侍女長のブローチを入手し、フェリクスを害した現場にそれを紛れ込ませることによって、第二王子による暗殺説を流布させようとしていた。

が、庭師の少年が愚かにもそれを仕損じて、しかもなぜか経緯について頑なに黙秘するため、その筋書きは捨てざるをえなかった。王子暗殺に加担させられかけていると、まさか彼が気付いたわけもあるまいが、妙な怯えようだった。

それでは逆に、第一王子が第二王子を弑するという設定で、と思い、フェリクス肝煎りの新料理長のもとで毒殺事件でも起こしてやるうと思っていたのだが、下準備として彼を孤立させていたら、いつの間にか風向きが変わって、活気あふれる厨房になってしまった。団結力のある組織には付け込みにくい。

極めつけに、先日のデニスの一件である。

男爵の息子ごときに、わざわざ第一王子のコレクションを見せて馬蹄の存在を刷り込ませてやったというのに、あの愚か者は、呪具が第一王子の差し金であるということを周囲に仄めかしもしなかった。

情報は、クレメンスを経由することなく拡散されなくてはならないというのに。

クレメンスは苛立っていた。

（舞台が必要だ。二人の王子が醜い殺し合いをしているのだという「事実」が、誰の目にも明らかになるような、盛大な舞台が）

そう。

たとえば、即位式や、舞踏会のような。

（舞踏会の最中の毒殺などどうだろうか？）

王子の居室に掛けられた年代物の絵画を見て、クレメンスはふと思いついた。

画中では、この国の始祖が、自らの血の入ったワインを周囲に振り、忠誠を誓わしている。

これは「盟約の杯」と呼ばれる場面で、即位式の前夜に今でも再現される儀式だ。

たとえば舞踏会の場で、第一王子が振舞ったワインによって、第二王子が倒れたとしたらどうだろう。

そこに、呪具の噂も重ねて流せば、「第一王子の殺意」はかなり信ぴょう性が高まるだろう。

神聖なる盟約の儀を汚したとなれば、世論の反発も必至なので、これはなかなかよい手だ。

もっとも、その場で開栓されるワインに毒物を混入するのは難しいので、実際には、ワインを飲むタイミングに合わせて「毒針を刺す」くらいのほうが現実的かもしれないが。

絵画の横に並んだ王子の宝石コレクション 「毒の王妃」と名高かった前妃の針付きの指輪を見て、クレメンスはそんなことを考えた。

「それで相談なのだが、クレメンス。舞踏会当日、やはり主役の傍には、相応の華やぎが必要だろう？ 貴族のきれいどころは、基本的に僕の傍に侍っているよう、触れを出しておいてほしいんだ。そうでもないルーカスのやつ、兄を立てずにすぐ女たちを攫って行くから」

「……さようでございますか。では、第二王子殿下の傍には、令嬢たちが近づきにくいよう下男たちで固めておくといたしましょう」

思考を巡らせる間にも、フェリクスは呆れた要求を寄越してくる。ルーカスが女を奪っているのではなく、愚か者と評判の第一王子に女性が近寄りたがらないだけだと、本人は気付いていないらしい。

「相談」とやらの内容は、そんな幼稚なものだったかと天を仰ぎそうになったが、クレメンスはこれも利用すべきだと考えを改めた。

第二王子に毒針を仕込む役割は、下男の誰かにやってもらおう。美女がフェリクスの周囲に集まれば、冴えない王子とはいえ多少の注目は向けられる。つまり証人が増える。

そのタイミングでフェリクスにワインを振舞わせ、とたんに第二王子が倒れば、舞台の盛り上がりとしてもなかなかだ。

「あと、この僕が主催する舞踏会だもの。歴史に残る、質の高いものにしたんだよね。今手配している楽団ではなく、芸術の都・ヤーデルードから、最高の楽師を招きたいんだ。ほら。前に噂になっていた……ええと、スヴァルド？ とかいう音楽家がいたじゃない。彼とか」

「……ヨーラン・スヴァルド氏のことですか？　ですが彼は
「神に愛された天才ヴァイオリニスト、だよ。僕の舞踏会を彩る
のにぴったりだろう」

超絶技巧を誇る、それも「孤高」と噂の天才ヴァイオリニストが、
ダンスの添え物として、没个性的にひたすらワルツを刻み続けたが
るわけがなからう。

舞踏会と音楽会は違うのだ。

クレメンスは喉元まで叫びかけたが、それも堪えた。

これも利用してやるのだ。

スヴァルドには活躍の場を与えてやるとしよう。

クレメンスが彼に合図をし、スヴァルドが目印となる音を奏でた
その瞬間に、下男に毒針を刺させる。

スヴァルドを間に挟めば、クレメンスは下男と視線を合わせる必
要すらなくなるので、ますます彼に疑いが向くことはなくなるだろ
う。

有能な人間というのは、ばかげた要求すらも織り込んで、自分の
利益を確保するものなのだ。

（好きにほざくがいいさ、愚鈍王子よ。おまえの最期の望みだ、謹
んで叶えてしんぜよう）

ここルーデンで、王族殺しは、たとえ王であってもご法度だ。

第二王子を殺害したとなれば、フェリクス王位剥奪、あるいは
それこそヴァルツァーへの投獄くらいありえるかもしれない。

そうすれば次代となってもクレメンスの天下である。

業突く張りの老侯爵は、表面上は穏やかに王子に従いながら、腹の中では忙しく諸々の算段を着けはじめた。

「あ、あの、フェリクス王子殿下……」

クレメンスが去ったのち、掛けなおしたばかりの絵画に再び手を伸ばしたフェリクスを見て、侍女は恐る恐る声を掛けた。

「位置を調整なさりたいようでしたら、わたくしどもがいたしますので。どうぞ、これ以上このような仕事は」

「調整してるんじゃないよ。捨てるんだ」

「は？」

わざわざ目立つ位置に引っ張り出してきた年代物の絵画を、今度は捨てるなどと言いだす。

その真意を掴みかねて眉を寄せた侍女に、フェリクスは軽く笑って答えた。

「もう、こいつの役目は終わったからね」

「は……？」

相変わらず、言っていることがさっぱりわからない。

戸惑う侍女をよそに、フェリクスは腕まくりまでして、模様替えを再開した。

今度は部屋の中央に、なにやら不要そうなものを集め出して、徹底的に捨てる作業をするつもりであるらしい。

その不用品の中には、先ほどの絵画や、高価な宝石の付いた指輪まで入っている。

「あの、殿下……！ もう、どうか、このあたりで……！」
「えー。やだ」

取りすぎる侍女に、フェリクスは相変わらず間延びした口調で続けた。

「僕はね。片づけは大嫌いだけど、するとすると 徹底的にゴミを出しきりたいタイプなんだ」

どこか遠くを見ているような、視点の定まらぬ緑の瞳。

けれど、よくよく目を凝らせば、そこにはぞつとするほど冴えた光が浮かんでいるようだった。

21・「普通」のダンス(2)

シフトにもよるが、王宮付き侍女の仕事は、夜の鐘が八つ鳴ったあたりで終了する。

遅めの夕食を取ったら、その後は自由時間だ。

明け方には起き出さねばならないので、たいていの者は早々に寝床についてしまうが、体力と話の種を持て余した若い侍女は、互いの寮室を行き来して、おしゃべりに興じることもある。

エルマはもっぱら早く寝る側の人間だったので、彼女の部屋は深夜ともなると寝息しか聞こえないのが常だったのだが、この日はやはり様子が違っていた。

「さあ、エルマ。答えてちょうだい！ あなたはどちらのドレスで舞踏会に出るのか 私との友情と、グラーツ侍女長との上下関係、そのどちらを優先するのかを」

「およしなさい、イレエネ。そういう言い方をするものではありませんよ。これは人間関係の問題ではなくて、単純にセンスの善し悪しの問題なのですから。　　ねえ、エルマ？」

小ぢんまりとした寮室に、イレエネと、そしてなぜかゲルダまでもが押しかけて、エルマに詰め寄っているのである。

彼女たちは二人とも、両手にドレスを握りしめていた。

「はあ……」

対するエルマはといえば、困惑気味である。といつても、分厚い眼鏡に覆われているため、よくわからないが。

就寝準備をすませたあとに、二人の女性に突撃された彼女は、不思議そうに首を傾げた。

「そもそもなのですが、なぜ私までもが、即位式前夜の舞踏会に出席することになっていいるのでしょうか」

その問いに、イレーネとゲルダはそろって声を荒げた。

「なにすつとぼけたことを言っているの！ 凡愚王子 もとい、心優しいフェリクス王子殿下の思いつきのおかげで、王宮の使用人は全員舞踏会に参加できることになったということ、まさかあなた、知らないわけじゃないでしょう!？」

「そうですね！ 若い娘や恋人のいない青年はもとより、わたくしのように社交界を離れた者たちだって、ちよっぴり、いえ、かなりそわそわとしているというのに」

そうなのである。

フェリクスおよびクレメンス・フォン・ロットナーの差配により舞踏会への参加が許された者たちは、ここ数週間というもの、ドレスや髪型、登場のタイミングについてずっと心を悩ませているのだ。特に、王宮付き侍女といえば下級貴族の子女も多い。

彼女たちにとって舞踏会は、一気に「大物」を、しかも正々堂々と釣り上げるまたとないチャンスであり、その気合の入りようは凄まじいの一言に尽きた。

「いえ、ですが私は、当日はゲオルク料理長を手伝って、厨房にで

も回ろうかと」

「もちろん一番人気は、婚約者も高すぎる次期王の身分もない、気さくなルーカス王子殿下。けれど、あまりの人気の集中ぶりに、ベテラン婚活者たちは中級貴族や騎士団員に狙いを分散させはじめていると聞くわ……。出回りはじめたイケメン番付に貴族令息名鑑、夜な夜な秘密裏に特訓されているダンス・ステップに情報戦……よくって、エルマ。これは、女の闘いなのよ。私はあなたに、女としての勝利を味わわせてあげたい」

「いえですから」

「なにもその場で殿方を釣り上げるばかりがゴールではありません。舞踏会の場で特筆すべき美貌や佇まいを見せられれば、のちのちの縁談に有利になるばかりか、王宮内での立ち位置も向上し、給与の増分だって見込めなくはないのですよ」

エルマが冷静に遮ろうとするのを、その横からさらにふたりが遮る。

イレーネもゲルダも、それぞれよかれと思って参加を勧めてくれていることはよくわかった。

「ええと、ですが、舞踏会は強制参加というわけではありませんし、私としても、とくに縁談や給与増分を目指しているわけでもないの
で」

「そこよー！」

丁寧に断りを入れようとしたら、びしりと指を突きつけられた。

顔を上げた先では、イレーネが猫のような緑瞳に真剣な表情を乗せて、こちらを見ていた。

「あなたのように有能で、しかも……信じられない美貌の持ち主が、どうしてそっやって夢を諦める必要があつて？ 天の采配ともいえ

る素質を持ち合わせながら、女の頂点を目指さないなどという法はないわ！」

価値観の根底が武闘派だ。

どうも彼女には先日素顔を見られてしまったようで、以降執拗に「なぜ隠すの女性として他者を圧倒したくはないのいいえ目指しましょう女の頂点を！」的なお誘いを受けているのである。

いえですから、と再度説明を試みたところ、今度は手を握りしめられた。

「皆まで言わずともよくってよ、エルマ。私……本当はわかっているの」

「は？」

「あなた……ひどく厳しい修道院で、箱入りで育ってきたのでしよう？」

「……は？」

自分の出自について、なぜそんな設定が補完されているのかわからない。

エルマが思わず言葉を失っていると、イレエネは真顔で頷きかけた。

「あなたがときどき言う『シャバ』という言葉。これって、俗世のことを指すらしいわね。つまりあなたは、俗世とは隔離された環境にいた。それも、教育水準に優れた、複数の導師がいた環境に、ね」

そうして、思いつきり決め顔で言い放った。

「過ぎた美貌は色欲に繋がるわ。ならばそれを隠すよう教育されたというのも頷ける。妙に世間知らずな態度。ときどき見せる行き過ぎた遠慮。辺境の地には、修道女や孤児に虐待まがいの躰をして、取り潰しとなった修道院もあると聞くわ。間違いない　あなた、その修道院出身なのね？」

「あー……」

思いつきり外しているが、まあ、監獄出身というよりは思いつきやすい選択肢だったのだろう。

見れば、ゲルダは「とりあえずそういうことにしておきなさい」とさかんに視線で合図してくる。

そこで、エルマは曖昧に頷いた。

まあ、箱入りというのが「ブタ箱」なら正解だ。

「……そうですね。そんな感じです」

「やっぱりー！」

とたんに、イレエネがぱんと手を叩き合わせる。

彼女はその後、改めてドレスを握りしめた。

「ならば、エルマ。私はあなたに何度でも言いたいわ。そこで詰め込まれた貞淑や謙虚の教えは行き過ぎていと。生まれ持った美貌才覚は、活かすことこそ世の定め。あなたのその美貌と才覚は、今こそ花開く時を迎えつつあるのだと……！！」

「無理強いするものではありませんが、私も同意見ですよ、エルマ。あなた自身の能力や存在が認められれば、あなたの『出自』について人がなにかを言ってきたとしても、それを跳ねのける盾になるのだから」

いたずらに顔を見せてはいけないと言っただけで、ここぞというときに切り札を使うことになんの問題がありませんよ。

ゲルダまでもがそんなことを言い添えてくる。

エルマ自身は、監獄出身であることについて後ろ暗く思うことなどなかったが、ゲルダがそのような反応を示すからには、きっと世の中では、監獄育ちという出自は隠してしかるべきものなのだろう。

エルマがちょっと黙り込んだのを了承と取っただけで、イレーネとゲルダはますます勢いづいてドレスのプレゼンを始めた。

「で、天下一舞踏会で他者を圧倒するためのドレスなのだけど、私としてはやはりこの、深紅のマーメイドラインがいいと思うの。」

あなたの白い肌にはぴったりだと思っし、ルーカス王子殿下も、基本的に華やかな女性を好まれるからばつちりだわ」

「若いわね、イレーネ。よいですか。殿方というのはね、清楚な装いからほのかに漂う色香こそを求める生き物なのです。よってわたくしのお勧めは、この生成りのエンパイアライン。一見飾らない無垢なスタイルでありながら、背中は大大きく開いたこのギャップ。それによってルーカス様のハートをねらい打つのです」

「いえあの、なぜそこで殿下……？」

エルマの眼鏡が困惑気に光る。

ふたりがエルマの態度を遠慮と捉え、目立たせようとしているのは理解できた。

とはいえ、一介の侍女が、なぜ一国の王子のお相手を目指すことになっているのか。

疑問をぶつけると、イレーネは呆れたように息を吐きだした。

「なによ、本人が知らないってどうということ？ 前妃殿下のお気に

入りで、全方位に万能。海に出ればまぐろを釣り上げ、騎士に出会えば傷を癒し、素顔は謎に包まれた歩くミステリー・エルマって、今ではちよつとした有名人よ。ルーカス王子殿下も気にしはじめたようだ、ってね」

「え」

「上位貴族の御令嬢たちって、私たち以上に嫉妬が激しいから、これでも私、貴族たちにはあまり噂が広まらないよう努力していたんだけど。でもあなた、この前殿下に抱きかかえられて侍女寮に運ばれたじゃない？ あれを、よりによって伯爵家のお嬢様をご覧になつてしまったらしくつて。彼女、ダンスが得意でこの舞踏会に賭けているものだから、取り巻きまで動員して、あなたに嫌がらせでも仕掛けてくるかもしれないわ」

かつての自分と重ねたのだろう、イレーネはそこでむうつと難しい顔になった。

「……心配なのよ、あなたのことが。頂点を目指してほしいのも事実だけれど、それ以上に、彼女たちを牽制というか、蹴散らしてほしいの。あなたたちなんか目じゃないわよつて。まあ……かつて嫌がらせをしてしまった私が言うのでは、信じてもらえないかもしれないけれど」

「え……。嫌がらせなんてされましたっけ」

「……まずはそこから話し合いましょうか」

イレーネがあからさまに脱力する。

その様子にふとある懸念を覚えて、エルマは念のために尋ねてみることにした。

「つかぬことをお伺いいたしますが、床や靴に針を忍ばせておくというのは、『針仕事、頑張つてね（はあと）』という激励の行為で

はなかつたりしますか？」

「は！？ 嫌がらせのモデル事例じゃないの！」

「では、行く先々で頭上から突如水が降ってくるのも、『今日は暑いから打ち水しとくね（はあと）』といった、心温かな行為ではなかつたりしますか？」

「心を折る行為だわよ！ なにそのポジティブ！」

イレーネがぎょつとして叫ぶのを聞き、エルマは神妙な表情で頷いた。

「……なるほど、私はすでに嫌がらせに遭っていたようです」

針は回収して有効活用していたし、水も手近な鉢やバケツで受け止め、ありがたく水撒きなどに使っていたので、まさかそれが嫌がらせだとは気付かなかったのだ。

ふたりの懸念も、あながち的外れなものではないのだとひとまず理解したエルマは、質問の矛先を変えてみた。

「ご懸念は理解しましたが、堂々とした姿を見せつけるのが目的というのなら、別に殿下のお相手まで目指させる必要はないのでは。むしろ侍女長はよく殿下に女遊びを控えるよう忠言していらつしやいますし、イレーネ。あなただって、殿下のファンなわけですよね？」

問うてみると、それぞれ苦笑交じりの答えが返った。

「わたくしは昔から、殿下が女性を手のひらで転がすところばかりを見てきました。乳母としてはそんな殿下が心配ですし、この機会に一度逆の立場を味わっていただき、彼に真つ当な殿方になっても

らいたいのです」

「私も、以前の殿下は微チヤラ俺様系キャラで一番の推しだったのだけれど、最近の殿下は苦勞性タグが加わってもはやオカン属性っていうか微受けていうか。ほら、私、リバって駄目な人じゃない？」

「……イレーネの主張がよく理解できなかったのですが、これは私の読解力の問題があるのでしょうか」

ゲルダにも「逆の立場ってなんですか」みたいな突っ込みを入れたかった気がするが、イレーネの暴投によって吹き飛んだ。

微妙な思いを噛み締めながら尋ねると、

「この子の妄言は気にしないでよろしい」

「この世界の深淵を、やすやすと理解できるだなんて思わないことね」

両者からしたり顔で頷かれた。

と、いつまで経っても一向にドレス選びが進まないことに焦れたらしい。

イレーネが「それで」とおもむろに距離を詰めてきた。

「今一度聞いわ。どちらのドレスを着てくれるの？ 言っておくけれど、参加資格も着ていくべきドレスもある以上、あなたに舞踏会を欠席する選択肢などなくてよ」

「ええ……」

「エルマ。わたくしからも言っておくけれど、舞踏会に出て周囲から見初められるというのは、普通の女の子ならば誰もが夢見る、王道の未来予想図ですからね？ 貸した小説でも、そんなエピソードが多かったですよ？」

普通、誰もが、王道。

最も有効な魔法のワードをちらつかされ、エルマが一瞬黙り込む。手ごたえを感じたふたりが、一層前に身を乗り出したそのとき、

「　　そうでしょうか」

しかし彼女はついと眼鏡のブリッジを押し上げた。

「え？」

「夫人には申し訳ないのですが、以前お貸しいただいたロマンス小説は、社会常識や情操教育の教本としては妥当ではないとの指摘を、ある方から受けまして。新たなルートから、別の教本を確保しました」

そう言ってエルマが布鞆から取り出した「あるもの」に、二人は大きく目を見開いた。

22・「普通」のダンス(3)

「お美しいですよ、母上。瞳と同じ藍色のドレスが映えて、古の神話に登場する海の精霊のようです」

「ありがとうございます。ずいぶん不機嫌なのね？」

即立式前夜の舞踏会場。

メインホールへと繋がる大階段で、エスコート役として手を差し出してきた息子に、ユリアーナは眉を上げてそう答えた。

せつかくの誉め言葉も、わざわざ「古の」なんて付けては、遠回しに相手を年増だと批判しているようなものだし、そもそも海の精霊^{セイレイ}というのは、ほかの妖精とは違って怪物の扱いだ。

女性に対してはいつもそつなく対応するのに、と、不機嫌になるより心配になって首を傾げると、ルーカスはばつが悪そうに顔を顰めた。

「失礼。どうも、ここ数日気が立っていたもので」

「珍しいこと。強力な敵でも現れたの？」

「そうですね。手ごわくて粘着質な敵でした」

滑らかな動きで階段を進みつつ、そんな答えを返す。

興味を惹かれてユリアーナが追及すると、ルーカスはあまり乗り気ではなさそうに「毎夜襲撃されたのです」と説明を始めた。

ルーカス・フォン・ルーデンドルフは、男らしく端正な容姿と長躯に恵まれた、武芸に秀でた青年である。

貴族として求められる教養にも優れ、恵まれすぎた者に特有の冷淡さはときどきあるものの、誰とでも気さくに接して人望も厚い。しかも「第二」王子なので、結婚したとしても厄介な公務はなく、それでいてそこらの貴族と結婚するよりも高い地位が保証されるのなら、女性が群がらないはずがなかった。

ルーカス自身、愛らしい女性との時間は大いに満喫するほうなので、これまでは大人の遊びと割り切れる相手に限って渡り歩いていたのだが、ここにきて、女性たちが急に目の色を変えてきたのである。

「……まあ、王宮内の全員や国内貴族が揃い踏みする舞踏会で相手を務めれば、事実上の婚約者も同然ですものね」

「おっしゃるとおりで」

そう。

これまでのらりくらりとこの手のイベントを躲してきたルーカスが、とうとう舞踏会に出るとあって、令嬢　どころか、平民出身の侍女までもが、一斉に着火してしまったのである。

遠回しな誘いや、手紙での嘆願くらいなら可愛いものだ。

しかし、待ち伏せに夜這い、ときに媚薬付き、それも連日となると、さすがのルーカスも難儀しだした。

結局、舞踏会では誰とも踊らず母親のエスコートに徹すると宣言して、なんとか切り抜けたのだ。

未亡人の母を、未婚の息子がエスコートすることはなんら恥ずべきことではないが、十九にもなつて親の力を借りねば女性を退けられないのかと、ルーカスは忸怩たる思いをしたのである。

「言って聞くような相手でもなし、かといって手を上げるわけにも
いかない。これなら、魔獣の退治でもしていたほうがよほど楽なも
のだ」

ぼやいた息子に、ユリアーナはちらりと視線を向けた。

「さつさと特定の誰かを作ってしまったわいなからよ。あなたなら、貴
族令嬢だろうと他国の姫だろうと、いつそ平民上がりの娘だろうと、
皆納得するでしょうに」

王族としては異例だが、ルーカスの場合、すでに騎士団に身を置
いている以上、平民とのロマンスがあっても「物語みたい！」と歡
迎されるだろうことは想像に難くなかった。

「さては母上、数年前に婚約を進めようとして、俺が拒否したこと
を根に持っているんでしょう。よしてください。俺にだって、一応
考えはあるんですから」

「青臭い理想じゃないでしょうね？ もしそうなら、もっと現実を
直視なさい。母親としては、たとえ身分が低くても、紅茶を淹れる
のが上手くて、語学堪能で、手先が器用で、意外性があって、毎日
を刺激的にしてくれるような女性を推すわね」

「……誰だそれは、とは聞きませんよ？」

ルーカスは表情に悩みながら答えた。

以前ならば一刀両断していた類の妄言だが、先日「彼女」の素顔
と、思いもよらない頼りなげな様子を見てしまったからは、少々そ
の心が揺らいでいる。

我ながら安直な、と嘆かわしく思うのと同時に、彼が長年抱いて
きた「方針」もあって、ルーカスはなかなかエルマへの好意を認め

られないでいた。

「義兄上よりも先に、俺が特定の相手を作るわけにもいきませんか
らね」

「冗談めかして、その方針を口にしてみると、ユリアーナは「なん
ですって」と一瞬目を見開いた。

「嘘でしょう。まさかあなた、フェリクス王子殿下に義理立てして
いるというの？ 凡愚王子と評判の、あの方に？」

徐々に階下の人ばかりが近づいてきたため、あくまで表面上はに
こやかな顔をキープしたまま、小声で問いたです。

ちょうどそのとき、「ユリアーナ前妃殿下、ならびにルーカス王
子殿下のおなり」と使用人の一人が高らかに告げたため、方々から
歓声上がり、それ以上の会話は困難になってしまった。

「あの人但凡愚王子だと、母上は思われますか？」

ルーカスの小さな咳きは、シャンデリアからこぼれる光の粒や、
女性がまとった美しいドレスや香水の波に紛れて、誰の耳にも届か
なかった。

神に愛されたと評判のヴァイオリニスト、ヨーラン・スヴァルドの機嫌は最悪であった。

頭上には粒ぞろいのシャンデリア、向かいのテーブルには趣向を凝らされた料理、視線の先には美しく装った貴婦人たちが行き交うが、そんなもの、彼の慰めにもならない。

いつだって彼が真に望むのは、己の技量を磨くこと、そして美しく研磨された音楽をぞんぶんに奏でることであって、無才のオーケストラと眠くなるような背景曲をなぞりつつけることではないのだ。

隣に座るルーデン人の奏者が、またも音程を外したのを聞き取って、ヨーランはうんざりと顔を顰めた。

（あまりにレベルが低すぎる。やはりこんな話、受けるべきではなかったのだ）

もう何度目になるかわからない後悔を、胸のうちでそつと吐き出す。

三か国での音楽活動を支援する、との甘言に乗せられ、うかうかと舞踏会での演奏を承諾してしまった自分を、ヨーランは呪った。

（つまらない。最悪だ。こんなの、音楽への冒涇だ）

ヨーランは若い。技量への自信もある。

そのぶん、至らない他者を馬鹿にしてしまうような、才気走ったところがあった。

ただしそれは、信仰ともいえる音楽への愛と裏返しでもあるのだ。

（音楽とは、言語や信じる神の違いすら乗り越えて人を跪かせる、

絶対の美。けしてこんなふうには、へたくそな演芸の付け合わせのように、消費されてよいものではないのに)

決まり切ったステップを、ただ練習したとおりに踏むことのためにが楽しいのだ。

音楽とは、ダンスとかいう猿芸の添え物ではない。

もっと堪能され、讃えられてしかるべきものだ。

だというのに、音楽家としてヨーランが本懐を遂げられそうな機会には、この舞踏会ではなさそうだ。

いや、この誘いを寄越したルーデンの侯爵から、彼の合図に合わせて「至高のトリル」を披露してくれと言われているから、せいぜいそのときくらいか。

常人の何倍もの速さで素早く音階を駆け上がるヨーランのトリルは、神の恩寵すら感じると評判で、彼の「売り」でもあるのだった。穏やかなワルツには必要のない技法だが、注目度はすさまじいものがあるだろう。

こんな退屈な楽団との付き合いなどいつ捨て去っても構わないので、ヨーランは合図さえもらったら ロットナー侯爵からは、もっとも注目が集まるタイミングで合図をくれると約束されている。即座にトリルを披露してやるつもりだった。

(だが……それにしても、つまらない)

ともに音楽の頂点を競い合うライバルか、さもなければ音楽を捧げたいくなるミュージズでも現れればよいのにと、ヨーランは思った。

会はずつがなく進行している。

きれいだころの貴族令嬢たちや、主役であるフェリクス次期王は

とうに登場を済ませ　意外なほどに存在感の薄い男で、これなら少し前に登場した第二王子のほうが、よほど王にふさわしいと思われた　、一度目の挨拶を済ませた後、これからは王宮の使用人たちが続々と登場するという運びである。

貴族以外を招くなど珍しいとは思うものの、使用人の中からミューズが現れる可能性などますますない。

ヨーランはあきらめの溜息とともに、背景曲の最後のフレーズとなる音に手をかけたのだが

ざわっ

そのとき、場内の空気が大きく揺れた。

人々が一斉に大階段の先を注視する。

ヨーランもとっさにそれに倣い、赤絨毯の敷かれた階段の先を見やった。

「……………」

そして、思わず息を呑んだ。

大階段の先には、天使が佇んでいたのだから。

生成り色のドレスをまとった少女は、ほっそりとした肢体をまっすぐに伸ばして、静かにこちらを見下ろしていた。

その、遠くからでも人をくぎ付けにする、夜明けの空のような瞳。肌はミルクのように滑らかで、品よく結われた髪も、ほんのりとした唇も、控えめな鼻筋、影を落とす睫毛までも、そのすべてが繊細な美に満ち溢れていた。

胸のすぐ下で宝石付きのベルトで絞られ、あとは広がらずに足を覆うような控えめな裾のデザインも、彼女をとにかく無垢な存在に見せている。

穢れなく、はかなげで、この世の者とは思われないような美貌の少女。

彼女がゆっくりと階段を下りていくのに、誰もが目を離せない。ヨーランもまた、曲の最後の音を必要以上に長く弾きつづけてしまった。

いや、楽団の全員がそうだ。最後のフレーズだけがスローになっている。

彼女が、まるで洗練しつくされた旋律のように滑らかに移動するのを、ヨーランはしばし、呆然として見守った。

そして彼女が視界から消えたのち、ようやく我に返った。

(なんてことだ……)

弓を下ろしながら、ぼんやりと思う。

この僕が、音楽以外のものに気を取られるだなんて、と。

恋の駆け引きにおいて、ルーカスはいつも勝者の側だった。

じらすのも、引き寄せるのも、彼のほう。

女性は向こうから近づいてくるのが常であって、自分は優雅に足を組んでそれを待っていていればよい。

甘えた声ですり寄ってくる女性を選び取り、抱き上げて口寄せて飽きたら互いに肩をすくめて、笑顔で別れる。その繰り返し。

だから、佇む女性のもとに慌てて駆け寄るなどというのは、考えてみればこれが初めてのことだった。

「おい」

少々焦りを含んだ声で話しかければ、相手はふ、と顔を上げて振り向く。

夜明けの色を瞳に宿した少女は、長い睫毛を伏せ、優雅に裾を掴まんで礼を取った。

「ルーカス王子殿下におかれては、ご機嫌麗しく」

その仕草には、一国の王女のように品がありながら、同時に、ごく淡い色香がある。

礼の瞬間、ほっそりとした肩や、むき出しになったうなじに周囲がぐくりと喉を鳴らしたのに気づき、ルーカスは無意識に少女を囲い込むように腕を回した。

「なんだって、今日はそんな出で立ちなんだ。いつもの眼鏡はどうした、エルマ」

「おかしいでしょうか？」

「いや……とても美しい、が」

つい歯切れが悪くなる。

美少女を前にして、それを称える言葉がすらりと出てこないなど、実に自分らしくなかった。

ついでに言えば、エスコートすべき母親も放り出し、付き合いのあった女性や貴族令嬢を差し置いて一介の侍女に話しかけるなど、まったく理性を欠いているとしか思えなかった。

しかも、先ほど自分が彼女の名前を呼んでしまったことで、周囲がざわつきはじめている。

噂になりつつある「なんかすんごい侍女」と、目の前の美少女が同一人物だと気付いてしまったのだろう。

ルーカスは己の失態を悟って歯噛みしそうになった。

「美しいが、……美しすぎる。先ほどから、周囲が義兄上すら差し置いておまえに注目しているではないか。目立つのは嫌いなのではないかったのか？」

「厳密には、目立つのが嫌なのではなく、普通でなくなるのが嫌なのです」

「……なんだと？」

淡々と返されて、ルーカスは思わず目を細める。

が、目の前の少女は、彼の疑問など歯牙にもかけない様子だった。

「勝負を挑まれたら、全力でそれに応える。拳を交わし合うようにして両者の共通する土俵で戦い合い、やがて理解と友情を深めていく。それが、殿下もよく知る『王道』ですよね？」

「……………は？」

「正直なところ、ディルク様にお貸しいただいた教本までもが、この舞踏会への参加を示唆するものになるとは思っておりませんでし

た。が、女性の教本と殿方の教本、両者から『全力で晴れの場に臨め』と読み取れた以上、全力装備でこの場に参じるのが常識かと判断した次第です」

「さつきからおまえはなにを言っているんだ？」

エルマの言っていることがわからない。

が、なんとなく、不穏な予感に満ちていることだけは、まぎまぎと理解できた。

腕を取ろうとすると、可憐な妖精のごとき姿をした少女はひらりとそれを躲す。

「おっと。敵の出方がわからないので、いたずらに刺激するようなことはお控えください。ただし、戦いの火蓋が切られましたらそのときは、力をお貸しくださいますと幸いです」

「だからおまえは、いったいなんの話をしているんだ!？」

「友情と努力と勝利の話です」

そこが意味不明だというのに。

エルマはさつきと踵を返してしまっ。

ふわりと控えめに揺れる裾を、周囲の視線が追った。

『ねえ……! 今のが、エルマだというの!? すごい、素晴らしいわ! 想像以上よ!』

とそこに、興奮のあまりラトランド語で母ユリアーナが話しかけてくる。

彼女は人の波を優雅かつ大胆に捌いていくエルマの後ろ姿を、うつとりと見守った。

「ああ……！　きれいな子だろうとは思っていたけれど、まさかこれほどだなんて。ゲルダにドレスや化粧道具を融通した甲斐があったというものだわ！」

「まさか母上が一枚噛んでいたのですか？」

ルーカスがぎょっとして振り向くと、さらにそこに声が掛かった。

「おう、ルーカス。あれ、エルマなのか。凄まじいな。騎士団の若い連中が色めき立ってるぞ」

騎士団副中隊長・ディルクである。

いかめしい顔と巨軀を、めずらしくかつちりとした正規の衣装に包んだ彼は、ちよつと戸惑ったように頬を掻いていた。

「ずいぶん、なんつーか……れっきとした『女』じゃないか。俺なんかつい、弟に接するような気持ちで、この前俺の愛読書を貸したんだが、ちよつと早まったかもしれんなあ」

「……なんだと？」

嫌な予感を覚えて、思わず剣呑な声で問いただす。

するとディルクは、あっけらかんと答えた。

「いや、エルマは、自分が教本としているものをおまえに否定されたのが、気になっていたらしくてな。一般教養となる、または全員の共有知のような書物を貸してくれと言われたので、俺的大ベストセラーを貸したんだ」

「……………」

そのベストセラーとやらの正体を聞くまでもなく、ルーカスは天

を仰ぎそうになった。

デイルクは、努力家の主人公が天才系ライバルに全力で挑んで勝利したり、仲間と力を合わせて強敵を倒したりする「熱血もの」が好きだ。

（もし、「敵は全力で倒せ」が常識だと思われたら……まさかこの場で、決闘やら戦闘やら戦争やら、……起こったりしないだろうか？）

いつそエルマには、少なくとも戦闘シーンとは無縁のロマンス小説のほうを、「常識」と思わせておいたほうがよかったのではないか。

そんな思いがちらりと頭をかすめる。

そしてそれを証明するかのようなタイミングで、人波の向こう、令嬢たちの集っているあたりでちよつとした事件が勃発した。

「エルマと言ったわね。あなた、侍女の分際で、少々調子に乗りすぎなのではなくって!？」

甲高い声とともに、カシャーン！ と、薄いガラスの割れる音が響いたのである。

さほど推理力を働かせなくてもわかる。

男の視線をかすめ取られてしまうという脅威を抱いた、高慢なタイプの貴族令嬢が癪癢を起したのだ。

そして、このような場で良識も弁えずに、容易にグラスを投げつけるような気性の持ち主に、ルーカスは残念ながら心当たりがあった。

ファイネン伯爵家の娘、カロリーネ。
媚薬を使ってまで、ルーカスに近づこうとした少女だ。

「あらあ、手が滑ってしまったわ。生成りのドレスなんて、あなたにとつては大切な宝物のように、ごめんなさいねえ。でも、侍女なら洗濯も得意でしょう？ ワインが一張羅の奥まで染み込まないうちに、持ち場にお帰りになったらよいのではないかしら？」

近づくにつれ、高慢を絵に描いたようなカロリーネの顔がよく見えてくる。

彼女はこちらを視界に入れたとたん、ぱつと態度を翻し、甘えるような表情になった。

「まあ、ルーカス王子殿下！ どうされたのです？ もしや、わたしをファーストダンスのお相手としてお誘いに？」

変わり身の早さには、いっそ芸としての風格すらあるが、あいにく今のルーカスにそれを楽しむ余裕はなかった。

彼は心配だったのである。

「淑女同士の会話にはふさわしくない音が聞こえたようだったが、いったいなになが」
「あん、お優しくしていらっしやるわ。このとおり、わたくしがうっかり彼女にワインを浴びせてしまったのです。でも、悪いのは彼女ですよ」

カロリーネはこちらを遮らんばかりにすり寄ってくる。

だがそれよりも、白いドレスを赤く染めて立ち尽くしている少女を見て、ルーカスはますます心配の度合いを深めた。

「彼女、出会い頭に詫びを要求してきたりするものだから、わたくし、すっかり怖くなってしまっていたのですが、殿下が来てくださったのならもう安心ですわ」

「おい」

「一曲踊ってくださいますでしょ？ わたくし、この日のために、得意のダンスに磨きをかけて」

「おい、カロリーネ・フォン・ファイネン」

うきつきと世迷言を続ける伯爵令嬢を、げんなりとした声で遮る。

「おまえ……自分がなにに着火してしまったか、理解しているか？」

「……………は？」

カロリーネがぼかんとしているが、ルーカスが解説するよりも早

く、

ぱしゃっ

軽やかな、水が弾けるような音が辺りに響いた。

ぎょつとして振り向けば、エルマがやはり無言で佇んでいる。

美貌の少女は、ほっそりとした手に空のワイングラスを持ち、その中身を、自身の白いドレスに浴びせていたところだった。

「……………！？ あ、あなた、なにを」

「カロリーネ・フォン・ファイネン様におかれましては、口でのお話合いよりも、拳での語り合いがお好みとお見受けしましたので、紅白試合でも、と思ひまして」

よつやく、エルマは静かに口を開くが、その言葉の意味がカロリーネにはわからない。

伯爵令嬢はうつすらと冷や汗を浮かべながら、厚塗りした唇をぱくぱくと動かした。

「こ、こうはくじあい……?」

「ええ。僭越ながら、わたくしエルマ、先攻の赤を務めさせていただけます」

「へ……?」

絶句するカロリーネの前で、エルマはなんのためらいもなく、裾の一部を持ち上げ、右足の腿の辺りまで引き裂いてみせた。

「ええ……っ!?!」

一瞬垣間見えた太ももの眩しさに、男性だけでなく、周囲の女性までもが赤面する。

しかしエルマはそれだけにとどまらず、清楚に結い上げていた髪に手を差し入れ、それを大胆に乱してみせた。

「……………っ!」

次の瞬間現れたのは、妖艶な赤の女王。

ゆるく波打つ黒髪をむき出しの肩に這わせ、物憂げな夜明け色の瞳で微笑む、とびきり華やかで、大胆で、蠱惑的な 魔性の美少女だった。

「ご協力を、お願いできますか?」

小首を傾げながら、ルーカスに向かってすつと右手を持ち上げるその仕草。

囁く声までもが、まるで蜜のように、甘い。

まるで傾国の娼婦のごとき、噓せ返らんばかりの色香。

(勘弁してくれ……)

それに脳を溶かされるような錯覚すら抱きつつ、ルーカスは条件反射でその手を取ってしまった自分の腕を、絶望の思いで見つめた。

そうとも、彼は心配していた。

これから徹底的に鼻っ柱を折られるであろうカロリーネ嬢と、それに付き合わされる自分自身を。

(なんて顔をしているんだ……)

今の少女の顔は、あらゆる男を陥落させる、煽情的な美しさに満ちている。

満ちているが、それ以上に、

よろしい。ならば戦争だ。

そう言わんばかりの、青年誌の主人公的戦闘意欲に満ち溢れていた。

23・「普通」のダンス(4)

情報や条件を緻密に組み合わせ、事前に完璧な筋書きを作り上げる。

それがクレメンスの強みだ。

だが言い換えればそれは、想定を超える出来事が起こると、とたんに心の均衡を失うという弱みでもある。

今、彼は、目の前の光景を強張った表情で見守っていた。

(なにが起こっているんだ……)

視線の先、人々が円形に取り囲むそこは、ダンスフロアである。巨大なシャンデリアと鏡に彩られた舞踏会場では、使用人たちも加わった今、大勢の紳士淑女が入り乱れてワルツを披露しているはずであった。

が、

「ああ、見て……！　なんて美しいターン！」

「そして滑らかなスイング……。動きそれ自体が音楽のようだ……！」

実際には、踊っているのはたった一組　ルーカスと、謎の少女　しかない。

当初踊っていた者たちは、二人のダンスのあまりの美しさに圧倒され、次々と会場を退いてしまったのだ。

滴るような赤いドレスを身に着けた美少女は、濃紺の騎士服をまとったルーカスにリードされながら、指の先まで繊細にワルツを踊る。

絡み合う視線、ときどき寄せられる頬、切なげに腕を滑る指先に交差する脚。

そのすべてがどきりとするような色香に溢れていて、女性を工作の駒としか考えていないクレメンズでさえ、注視せずにはいられないほどだった。

（これはまるで、物語だ……。そう、たとえば、美貌の娼婦と清廉な騎士が織りなす、胸を引き裂かれるような悲恋と、そして再会の物語……）

そう。きっと舞台は、引っかき傷のような三日月が浮かぶ青褪めた夜。

身分の差と悪意ある運命によって引き離された美しき娼婦が、夜露に濡れた草木に足を取られてその場に崩れ落ちる。

響く嗚咽、こぼれ落ちる涙。しかしそこにそっと差し伸べられる手。

細い肩をわななかせ、見上げた先には、甘い瞳をした精悍な青年。呆然とする娼婦の手の甲にキスを落としながら、彼は熱に浮かされた表情のまま囁く。

恋の翼に、乗ってきました

（　　って、ちがうわ！）

クレメンズは近くの壁に頭を叩きつけたい衝動に駆られた。

妄想の翼を広げている場合ではない。

自分の計画が大幅に狂おうとしている、これは緊急事態なのだ。

当初の予定では、この円舞曲が一段落した後に、フェリクスが注ぎ分けた盟約のワインを配って回り、乾杯する。つまり、そこでルーカスの毒殺はなされるはずだった。

ということは、このワルツの間に、「フェリクス自らがワインを取り出し、開栓し、注ぎ分けている」現場を、多くの者たちに印象付けておかねばならない。

だというのに、この場にいる者たちは、全員が全員フェリクスではなく、ルーカスと少女の二人に熱視線を送っているではないか。せつかく、美しいと評判の娘をフェリクスの周囲に配置しているにもかかわらず、である。

(いや、目撃情報は後からでも工作できる。最大の問題は、タイミングだ)

目立ちたがりの異国の音楽家には、クレメンスが鼻を擦ったら「トリルの準備をせよ」のサイン、そして耳に触れたら「トリルを弾け」の合図だと打ち合わせてある。

それに合わせて「至高のトリル」が披露され、それを聞き取った給仕係　クレメンスが弱みを握った下男　が、毒針を仕込んだ靴でルーカスの足を踏む、という流れなのだ。

これであれば、クレメンスはルーカスたちと距離を置いていても、彼が盟約のワインを口にしたタイミングで毒殺を決行させることができる。

が。

(おい！ ヨーラン・スヴァルド！ こちらを見ぬか！)

先ほどからしきりに鼻を擦ってみせているというのに、ヨーランがいつこうにこちらに気付かないのである。

どうやら孤高の音楽家は、依頼主のことなどすっかり忘れて、この美貌の少女にくぎ付けになってしまっているようであった。

(なるほどたしかに、この娘のダンスには人を惹きつけるなにかがある。テンポを髪一筋も外さないステップ。旋律のニュアンスを余すことなく表す表情。そう……いわば、音楽そのものを体現したダンス、彼の音楽を舞踏へと転じるミューズ っ、だからそうではなく！)

ヨーランが夢中になってしまった理由を解説している場合ではない。

クレメンスは必死になって鼻を擦った。

(ヨーラン・スヴァルド！ 気付け！ おい！)

「いやあ。なんて美しい子だろうねえ」

とそこに、背後から間延びした口調で話しかけてくる者がある。ぎよつとして振り向けば、それは夜会用の華やかなチュニツクに身を包んだ青年 フェリクス王子であった。

「ああいうきれいな子こそ、僕の傍について言ったのにさあ。集めて

くれた子たち、みんな話もつまらないし、ついでに言うつと香水もきつすぎるよ。クレメンス。君の今回の仕事ぶりはイマイチだったね？」

あはは、失敗、失敗。

そんな風に笑いながら、フェリクスはどぼどぼと手持ちのグラスにワインを注ぐ。

見れば、それこそ古めかしいラベルの貼られた年代物のボトル。盟約の杯に使うはずのワインであった。

(こいつ……いつの間に開栓しおった！)

神経を逆なでするような発言も許しがたいが、打ち合わせていた進行を無視して、早々にワインを注ぎはじめているフェリクスに、クレメンスは激高しそうになった。

ワインの開栓は曲が終わってから。

盟約の儀に移行してから行われるべきものだ。

だがフェリクスはそれらの常識にまったく頓着する様子もなく、貴重なワインを水でも汲むように注ぎ込む。

そうして、クレメンスを見てへらつと笑った。

「踊ると喉が渇くだろうからさあ。ちょうどこれを差し入れてあげようと思って。そこから、あの子を口説いてみよっかなって。あの娘、エルマって言うんだって。最近ちょっと噂だよな。知ってた？」「……いえ、お恥ずかしながらここ最近、ずっと式の準備にかかりきりでしたので。……グラスですが、身分がありますから、弟君に先にお渡しく下さいね」

ぎりぎりど歯ざしりしそつになるのをこらえて、なんとかクレメンスは告げた。

ひとまずフェリクスがルーカスにワインを飲ませさえすれば、当初の予定通りだ。

だが、いよいよタイミングが差し迫っている。

クレメンスはさりげなさを装いながら、必死に音楽家に向かって鼻を擦りつづけた。

(おい！ 気付け！ ヨーラン・スヴァルド！ 出番が近いぞ！)
「あはは、どうしたの、クレメンス。鼻血が出そう？ 興奮しちゃった？ よしなよ、老いらくの恋なんてみっともない」

ぶわりと殺意が溢れそつになったのも、致し方ないことであろう。ほとんど睨みつけそつになっている視線の先、人だかりの向こうでは、今も美しいワルツが展開されている。

ダンスもいよいよ終曲部。

一番の盛り上がり差し掛かろうところだ。

だが、踊り手の表現する世界に対して、楽団の奏でる音楽がもうひとつ及ばない。

惜しいものよ、と誰かが溜息をこぼしかけたそのとき、ひたすらパートナーを見つめていた少女が思いもよらない行動に出た。

すなわち、楽団に視線を投げかけ、すいと腕を伸ばしたのだ。

まるで、誘うような仕草。

もつと盛り上がりを。

もつと調和を。

その艶めかしい手つきは、まるでごう叫んでいるようにも見えた。

楽団のみんな。私に力を　　！

（なんなのだこの娘！　仲間と力を合わせて敵を倒す主人公かなにかか！）

自分でアテレコしてしまった内容に、クレメンスは自分で突っ込んでしまったが、実際、変化は劇的であった。

とたんに、ヨーランを筆頭とした楽団員たちが目の色を変え、渾身の音を奏ではじめたのである。

緊張をはらんだ低音。すすり泣くような旋律。

大きな感情のうねりが、楽器を、奏者を突き動かし、ひとつの世界を創りあげていく。

それは舞台の真ん中でステップを踏むふたりと融合し、とてつもなく壮大な物語を出現させた。

踊る少女の向こうに、美貌の娼婦の姿が見える。

彼女が求めた青年と、ふたりの間に芽生え、そして燃やし尽くされた情念の炎が見える。

忍んでも抑えようなく燃え上がる　　そう、それこそが……愛！

「ああ……」

もはや「表現力」などという領域には収まらぬ、ブランニューな肉体言語に、誰ともなく感嘆の声が漏れる。涙を流す者もあった。

ひとときわ高く鳴り響く音とともに、完璧なスローアウェイ・オーバースウエイ　　。

王子の腕の中に崩れ落ちるようにして、大きく背をしならせた少女に、誰もが美貌の娼婦の愛と死、そして祈りを幻視した。

しん、と会場が静まり返る。

呼吸三つ分ほどの沈黙ののち、誰かが、思い出したように手を打った。

それが引き金となったように、一斉に拍手の波が広まる。

これが舞台だったなら、まさしくスタンディングオベーションと叫んだところだ。

踊り切った少女は、しかし称賛にちらりとも心を動かされた様子はなく、むしろ周囲を見回して、真つ青な顔で佇んでいた貴族の娘相手になにか話しかけている。

「いったいなにを告げたのか、隣の王子が慌てたような表情で素早く少女の口を塞いだところで、やりとりを見ていたフェリクスがのんびりと言った。

「いやあ、すごいなあ。ちょっと僕、このワインを差し入れてくる

よ」

「……………」

まずい。

合図役のヨーランとは、まだアイコンタクトすら取れていないとこころだ。

(おい！ ヨーラン・スヴァルド！)

クレメンスはもはや絶るような思いでヨーランに視線を向け、そこでぎよっと目を見開いた。

「 ミューズよ」

なぜならば、己の音楽の才に慢心しきっていたはずの若き音楽家は。

「私の本気と、あなたの本気。ぶつけては、みませんか」

まるで最高のライバルを見つけた少年のごとく、たぎるような挑戦心をその瞳に燃やし、おもむろにヴァイオリンをかき鳴らしはじめたのだから。

24・「普通」のダンス(5)

ワルツを一通り踊りきり、会心のフィニッシュを決めたあと、ルーカスは内心でやれやれと溜息をついた。

(おーお、真っ青な顔で……)

人の輪に紛れてこちらを凝視しているカロリーネに視線を向け、同情を覚える。

ダンスにかけては右に出る者がいないと豪語していた彼女だ。

こんなにも完璧な演技を見せつけられては、言葉すら浮かばないだろう。はつきり言って格が違う。

王子として、これまで熟練の芸妓を目にしてきた自分とて、こんな見事なステップを踏む娘は初めてだったのだから。

いや、素晴らしかったのはダンスだけではない。

彼女が誘いかけた瞬間、明らかに楽団の士気が高まり、音楽の質が変わったのを、ルーカスは肌で感じていた。

おそらくだが、エルマなしにこの演奏のクオリティを維持するのは難しいだろう。

彼女は、最高の音楽と最高のダンスで、至高の美を体現してみせたのだ。

(なにもそこまでしなくても、という感じではあったが……)

ルーカスの見立てでは、カロリーネは最初の五秒ですでに戦意を

喪失していた。

だというのに、腕の中の可憐な狂戦士は、いまだに戦闘姿勢を崩さない。

それどころかカロリーネの姿を見つけ出すと、真顔で彼女に話しかけた。

「お待たせいたしました、カロリーネ・フォン・ファイネン様。次はあなた様の番です」

「あ……え……、ええ……あ」

踊れと言うのか。この状況で。

カロリーネがさあっと血の色を失い、もはや昏倒しそうなのがわかる。

「エルマ、よせ。並の令嬢にこれほどのダンスができるものか」

加害者はたしかカロリーネのはずだったのに、と思いつながら彼女に助け舟を出してやると、エルマは怪訝そうに首を傾げた。

「これほど？　ですが今のは、一番簡単な部類のワルツでしたよね。もしやシャバ」

「やめる。言うな。もうそれくらいにしてやれ、頼むから」

例のセリフで息の根を止めにかかるエルマの口を、慌てて塞ぐ。

しかし彼女はその手を払うと、不本意そうにこちらを見上げてきた。

「なぜですか？　これはおかしいことですか？　仲間の力を借りながら、強大な存在に挑みに行く。これは一般的な展開というもので

「はいのですか？」

「挑むのを通り越してすでに叩きのめしている。いいか。おまえが
ディルクから借りて読んだ書物、あの内容はすべて忘れる」

「ですが」

エルマなりに、今度こそようやく常識の拠り所になると思った内
容を否定されるのは、腑に落ちなかったらしい。

拗ねたような表情　無駄に、すさまじくかわいい　を浮かべ
るのを見て、ルーカスは溜息をついた。

「なら、こう思え。書物の中の主人公は、背中を見せて逃走する敵
には手をかけなかったろう？　来る者は拒まんでいいが、せめて去
る者は追うな。それが良識というものだぞ」

「ああ……」

エルマはぱちりと目を瞬かせる。

そうして、カロリーネがじりじりと後ずさっていることに今更な
がら気付कि、ようやく納得の様子を見せた。

「そうですね」

これでようやく一段落、とルーカスが緊張を緩めかけたとき、し
かしそれは起こった。

「ミュージズよ」

異国風のニュアンスが残る言葉で、ヴァイオリンを構えた青年が
話しかけてきたのである。

「私の本気と、あなたの本気。ぶつけては、みませんか」

彼は言うさま、手の中の楽器を高らかにかき鳴らしてみせた。それは、これまでとは明らかに一線を画した、至高の響き。

音楽家が、己の生命を賭けて紡ぎ出す、まさに渾身の音色だった。

「ヨーラン・スヴァルド殿？」

王子として、青年の正体に心当たりのあつたルーカスが、戸惑いながらつぶやく。

天才と評判の　つまり、こんな舞踏音楽など片手間でこなしてしまえるだろう彼が、なぜ今エルマに挑むような表情でヴァイオリンを奏ではじめたのかと首を傾げ、すぐにその答えにたどり着いた。

一番簡単な部類のワルツ。

おそらくは、さっきのエルマの言葉が、彼の心を着火させてしまったのだ。

先ほど、エルマは演奏を自在に「操つて」いた。音楽を、ダンスを引き立てるための道具として利用し、乗りこなしていた。それは、音楽こそを至高と思う彼にとっては屈辱的だったのである。

ヨーランは、本気の演奏を突きつけることで、エルマの傲慢をただそうとしているのだ。

「本来の音楽とは、しなやかで、誰にも囚われぬ、いわば野生の暴れ馬。あなたにそれが　乗りこなせますか？」

そう告げて彼がかき鳴らしたのは、はっと胸を打つ、それだけに変則的なフレーズ。

とても踊るのには適さない、生々しい旋律だ。

困惑する周囲をよそに、エルマは真顔で告げた。

「ルーカス王子殿下」

「……………なんだ」

「新たなライバルの出現です。向こうから来たので、拒まないのが良識ですよね」

「……………」

どうしてそうなる。

ルーカスの率直な感想だった。

「いや、それは」

どうしたら矛盾なく説得できるか。脳裏で素早く思考を巡らせる。

「もう一度、お力を貸してくださいませるか。闘いましょう、ともに」

しかしその僅かな時間が仇となったらしい。

エルマはさつとルーカスの手を取り、再びダンスホールに飛び出していつてしまった。

(ああ……………ああ……………！　なんて……………なんという……………！)

ヨーランは歓喜していた。

身体のうちから溢れ出る音楽。

全身を満たす興奮。

ヨーランは、異国の地で運命の出会いを果たせたことを、神に感謝していた。

（すごい……素晴らしい……僕の音楽に、小麦一粒のずれもなく寄り添ってくる……いやちがう、超越してくる……！）

幼少のころから彼の音楽への愛は深く、その解釈や表現は、常人に理解できる範囲から逸脱していた。

たった一音からでも、彼は無限の物語と色彩を感じ取り、表現することができるというのに、他人にとってはただの一音。

自分の音楽的感覚と、他人のそれは、あまりに粒度が違いすぎる。ヨーランにはずっとそれが不満だったのだ。

ところが今、目の前の少女は、ヨーランが音に込めた意図をあまりすことなく理解し、表現してくる。

音色に込めた哀愁、テンポをこくわずかにずらした遊び、余韻に含ませた緊張感、それらを、指先の動きひとつ、背中のみそらし方ひとつで、見事に体現してみせているのだ。

ヨーランは、自らが音楽に込めた情景が、寸分たがわず少女に伝わっているのを感じた。

そしてまた、彼女によって身体的な動作を得た音楽が、広大な物語となって描き出されるのを理解した。

（ああ……見える……！僕の音楽と、彼女のダンスが溶け合ったその先に……無限に広がる世界が……！）

ヨーランは、演奏しているその楽曲に、ある国の芽生えと滅亡を

描き込んだつもりだった。

澄んだ空の下、穏やかに草をはむ動物と、それを世話する心優しい人々。

集落は村となり、やがて緩やかに周囲と融合しながら、ひとつの大きな国を成す。

大きな石の建物。実りの季節。
しかし突然、敵はやってくる。

一方的な蹂躪、逃げ惑う人々。
飛び交う戦火、満ちる怨嗟と絶望の声……。

ありふれたワルツなどでは到底表現できない、感情を激しく行き来する情景だ。

しかし少女は、ときに軽やかにフィガーを刻み、またときに大胆にターンを決め、悲しい宿命を帯びた国の行く末を、鮮やかに表現してみせた。

（ふ、なるほど、伸びた指をだらりと下げていくことで、不穏な未来を暗示してみせたか……。だが、これはどうだ？ おお……。なんて大胆なジャンプ……。パートナーの手を離れ、風に煽られた木の葉が舞うように回転する……。ままならぬ運命の表現か……。！ 音楽より一步踏み込んだ解釈……。くそつ、見事だ……。！ ならば次は……。！）

フルオーケストラなんていらない。

世界を表すのには、ひとりの奏者と、そしてひとりの踊り手さえいればいい。

だが 主導権を握るのは、どちらか。

ヨーランとエルマは、ときに視線を絡み合わせながら、遙かなる高みを目指しつづけた。

（おい！ いつまでやっているのだ、ヨーラン・スヴァールド！）

一方、それどころでない人物がひとり。

皮膚が擦り切れんばかりに、必死に鼻を擦っている、クレメンスである。

彼は、先ほどからヨーランがまったくこちらを見ないことに、強い危機感を抱いていた。

「す……すごいわ！ なんて鮮やかなシャツセ！」

「おい見るよ……あんな高速のウィンドミル……！ す、すごい風だ！ すごい風速だぞ！」

「ああっ、摩擦熱でフロアから煙が！」

観客からは、舞踏会というより武闘会でも見ているような感想が次々に上るが、クレメンスはそれどころではなかった。

（なにを恍惚とした顔で演奏しておる！ うつけめが！ おまえは、トリルさえ弾けばよいのだ！）

段取りが。完璧に整えた計画が崩れていく。

とそのとき、口元に不敵な笑みを浮かべたヨーランが独特の構えを見せたので、クレメンスはぎょっと目を見開いた。

まさか。

「あ。これ、ヨーラン・スヴァルド名物の、『至高のトリル』のポーズじゃないかなあ」

ワイングラスをくるくると傾けながら、フェリクスがのんびりと呟く。

それと同時に 空気を震わせるほどに激しく、高音のトリルが響き渡った！

(今ではないわ、うつけがああああああ！)

クレメンスはその場に崩れ落ちそうになった。

冷や汗を浮かべながら視線を転じれば、ルーカス王子の踊る近くで、必死にその動きを捕らえようとしている青年がいる。

間違いなくそれは、クレメンスが弱みを握り、毒針を仕込んだ靴でルーカスの足を踏み抜くよう命じた下男であった。

が、王子たちのステップが早すぎて、まったく足を踏み出すタイミングが掴めないらしく、先ほどからかくん、かくん、と中途半端に顎と片足を突き出している。

(長縄に入れない子みたいになっているではないか！)

実に拳動不審だ。

というか、今毒針を仕込んでもらっては困るのだ。

あくまで、「フェリクスが手渡したワインによって倒れたように見える」ことが狙いなのだから。

ワインとは無関係に毒殺されてしまったのは、かえって面倒なことになる。

（くそっ、ひとまず今回の計画は取りやめだ。下手にあやつが口を割らぬよう、私が直々に始末して）

作戦中止の合図を決めておかなかったのは痛恨のミスだった。どうせ使い捨ての駒だからと、再利用することを端から想定していなかったのだ。

クレメンスは下男に近づき、それこそ指輪に仕込んだ毒針で彼を「処分」してしまおうかと腕を持ち上げたが、それよりも早く、興奮したらしいヨーランが再び「至高のトリル」を奏でた。

「……………！」

トリルが鳴ったら刺す、としか仕込まれていない下男は、それでいよいよ焦ったらしく、もはや自然さなどかなくなり捨てて、高速で回転しているルーカスたちに勢いよく突進していく。

クレメンスが人込みの中から伸ばした腕は空振りして、代わりに下男の足が、ルーカスの足をめがけて振り下ろされた！

「オ・レ！」

ぱんっ！

次の瞬間、掛け声とともに、空気を引き裂くような鋭い手拍子が響く。

眼前に広がる光景に、クレメンスは目を疑った。

まるで、トリルをその手拍子によって封じ込めたような、奇妙な沈黙。

頭上で両手を重ね合わせた少女は、まっすぐに背筋を伸ばし、同時に、一方の足だけをぴんと外側に跳ね上げていた。

つま先までしなやかに伸びたその足は、下男の足をしっかりと持ち上げている。

そう。

少女が、毒針を仕込んだ靴ごと、刺客を蹴り上げたのだ。

いったいどんな力学が働いているのか、片足を少女に持ち上げられた下男は、びくびくと震えながら、奇妙なポーズのまま静止していた。

「う……あ、ああ……」

「ダンスに割り込むなど無粋ですよ。殿方の足を踏んでよいのは、パートナーの女性だけです」

少女は神妙な表情で諭していたが、ふと下男の靴底を見ると、「おや」と不思議そうに首を傾げた。

そうして、三秒ほどじつくりと、給仕係の顔と、彼の視線の先を見つめた。

「あの。もしや」

『見事だった』

だが、彼女がなにかを言うよりも早く、異国の音楽家はその場に立ち上がり、拍手をしはじめる。

少女が振り向くと、その拍子に給仕係は尻もちをつき、それからわたわたと逃げ出した。

ヨーランはそれには一瞥もくれず、おもむろに美貌の少女に近づくと、その場に跪いて熱っぽく彼女を見上げた。

『僕と対等に渡り合える音への感受性、解釈の深さ、そして豊かな表現力。音楽と並び立つ芸術があるのだということを、今日僕は初めて理解した。魂ごと奪われるような見事なダンス……特に、トリルと同時に披露してみせた錐もみ回転のようなステップからは、物理的にも神の息吹を感じた』

捲し立てるようなヤーデルード語。

興奮のあまり、母語が出ているのだろう。

諸国との交流があるクレメンスですら、断片的にしか聞き取れなかったが、異様なことに少女は難なくそれを聞き取っているようだった。

『いえ。音楽と、パートナーのリードあつてのダンスですから。素晴らしかったのだとしたら、それはひとえに音楽と殿下のおかげです』

あまつさえ、流暢にそれに返しすらしている。

どうやら謙遜しているようだが、それを遮るようにヨーランは激しく首を振った。

『なにを言うんだ！ 君のそのダンスの技術は、僕がこれまで見た誰より卓越している。いや、はつきり言って人知の域すら超えている！』

『え、いえ、別にこのくらい、割と普通の』

『神よ！これが普通などと言うのなら、僕はなにを信じればいい。

それともそうか。君が神か。^{ミユース}神だから、こんな異能、異常、いや、奇跡をなにげなく扱ってしまえるのか！」

『異常……いえ、あの』

ルーカスは乱れた息を整えながら、珍しく圧されているエルマを見て、おやと片眉を上げた。

(珍しく「これくらい普通でしょ爆弾」は炸裂しないのか)

その心無い発言で、すでに敗北を認めている相手の心をごりつとえぐっていくのが常だったのに。

さすがにこんなに熱烈に讃えられては 完全には聞き取れないが、それでも意図は伝わってくるぐらいの熱量である、そんな気も起きないのかと思いかけたが、それにしても様子がおかしい。どこかそわそわしているようである。

「どうした、エルマ。珍しく殊勝に褒められているじゃないか。とうとう、自分が普通ではないという事実を、受け入れる気になったか?」

「普通ではないという事実? そんな」

ルーカスとしては、ずば抜けたダンスを披露したエルマを持ち上げる意図も込めて、そのように軽く言ってみたのだが、彼女の反応は予想とは違った。

凶星を指された人のように、気まずそうに視線を逸らしてみせたのである。

ついで彼女は、俯いたまま抗議した。

「あんまりです、殿下。私はどうやら常識外れらしいと自覚してい

るからこそ、侍女長や副中隊長の価値観に準拠して、懸命に『普通』を探っているのに。これは本当に『普通』なのだろうかと疑問に思う時でも、きっとシャバではこちらが正しいのだからと、疑念を押し殺して、愚直に『普通』に沿おうとしているのに」

「だとしたら、愚直がすぎる。ロマンス小説も武闘派小説も、教本になりえないと薄々気づいていたなら、その時点で引き返してくれ、頼むから」

思わずルーカスが突っ込んでしまうと、エルマはちょっと怯んだように顎を引いた。

そして、再びちらりと人の波に視線を投じてから、小さく溜息を落とし、覚悟を決めたように顔を上げた。

「あの、殿下」

「なんだ」

「こんなことを言いだすのは、『普通』ではないかと思われたため、ためらっていたのですが、やはり私個人の価値観に照らせば、その価値観こそが普通ではない可能性も否めないのですが、それでもここはひとつ、一言もの申し上げるべきかと考えました次第です……」

彼女なりの規範を冒そうとしているのか、どうも歯切れが悪い。

「これまでのように、個人の能力を披露するくらいのことならばまだしも、一介の侍女が陰謀を暴く展開というのはちょっと行き過ぎといえますか、いかにも普通ではないですし、殿下も先ほど『去る者は追うな』と仰ったなか、執拗に追及するようなことを申し上げるのも良識外れの振る舞いのような気がして心苦しいのですが」

「なんなんだ。端的に言え」

「王子殿下は、毒殺されかけていたようです」

本当に端的に言い放ったエルマに、ルーカスは硬直した。

「は？」

「下手人は先ほど私が足を蹴り上げました給仕係。凶器は靴に仕込んだ毒針。そして黒幕は、今その給仕係を追いかけて、毒針付きの指輪を振り下ろそうとしている」

エルマは素早く靴を脱ぎ取り、びゅっ！ と斜め後ろに向かって投擲した。

どっ！……っ！

「うぐあっ！」

とたんに、靴が鈍く人体にぶつかる音と、苦悶の叫びが響く。その場にうずくまった人物を指さしながら、エルマは続けた。

「クレメンス・フォン・ロットナー侯爵閣下です」

舞踏会場の空気が凍りつく。

しん、と静まり返った空間に委縮したように、エルマは視線を逸らした。

「三秒で陰謀を暴くというのは、やはり普通……ではないですよね……」

消え入りそうな声だった。

24・「普通」のダンス(5) (後書き)

作者のキャパオーバーのため、明日より朝の投稿をやめ、1日1話、20時のみの投稿とさせていただきます。

初志貫徹できず申し訳ございません…(血涙)

少しでも精度が上げられるよう、がんばります!

25・娼婦または誘拐犯の娘

「コールは？」

ハイデマリーが駒を動かしたとたん、向かいに座る男性がむすつとした顔で言い放った。

「え？」

「^{チェック}王手でしょ。きちんと言いなさいよ。マナーよ」

はずっぱな女言葉で告げられ、ハイデマリーは長い睫毛を瞬かせる。

彼女は盤面を眺めてから、「あら」と首を傾げた。

「本当ね。もうチェックだったわ。やあね、こんなに早く仕留めるつもりはなかったのに」

「なによ。あたしが弱いつて言いたいわけ？」

男性がとげとげしい声で問うと、ハイデマリーは苦笑して肩をすくめた。

「どうしたの。ご機嫌斜めね、リーゼル？ お化粧のノリが決まらなかった？」

「はん？ 今日もあたしの玉の肌は輝かんばかりよ。いちいち神経を逆なでする女ね」

本人の言う通り、リーゼルと呼ばれた人物は、女性のように化粧をしている。

細く整えた眉に、滑らかな肌。

それらは、長めに伸ばした髪や、中性的に整った相貌と相まって、不思議な自然さと、独特な美しさを帯びていた。

年は、三十の半ばを過ぎた頃か。

ぴつたりとしたパンツにゆつたりとした白いシャツを合わせていて、その装いは線の細い男性のようにも、または乗馬服をまとった快活な女性のようにも見える。

ただ、皺のまったく見えない衣類や、品よくコーディネートされた小物、さりげないが高級なアクセサリーの類から、彼がそのらの女性よりも数段優れたセンスの持ち主であることは明らかだった。

リーゼルは、美しく手入れされた指先で唇の下を擦ってから、不機嫌そうに頬杖を突いた。

「ああ、本当にイライラするわね。なにこの盤面。あんた、なにがしたいわけ？ 引つ掻きまわすのは、取り巻きの男たちだけにしなさいよね、この性悪女」

「……ギルベルトを押しつけて、勝負を名乗り出てきたのはあなただったと思うけれど、リーゼル。あなたって、本当にわたくしのことが嫌いよね」

「あつたり前でしょう。あたしはね、愛情のない母親っていう生き物がこの世で一番嫌いなんだから」

呆れたようにハイデマリーが言うのに、リーゼルはふんと鼻を鳴らす。

そのやりとりは、男女の会話というよりは、反りの合わない女同士の間だった。

リーゼル・エストマン。

芸術の都と名高いヤーデルード出身のこの人物は、かつて王侯貴族の子女を次々と誘拐したかどで投獄された。

ただ、誘拐した本人は「あたしが攫ったほうが幸せになれると思つた」と主張し、攫われた令嬢たちも、「リーゼルお母様のお傍にいられて幸せでした」と口を揃えたのが異常ではあつたが。

リーゼルは、生まれながらにして女性の心を持つ男性であつた。

そこらの姫君以上の「女性的魅力」を身に着けつつも、自らではけつして子どもを産めないということに絶望した彼は、まるでその埋め合わせをするように、虐げられていたり、容姿に恵まれず委縮していた少女たちを見つけては連れ去り、女の英才教育を施していたのである。

肌の手入れから、メイク、歩き方、話し方、ダンスに刺繍、はては誘惑の仕方まで。

ときに過酷を強いる鍛錬は少女たちの精神をも作り変え、彼女たちは至高の美を手に入れるのと同時に、リーゼルへの忠誠心を刷り込まれた。

それはさながら、雛鳥が親鳥を一心に慕う姿のようだったという。リーゼルもまた、盲目的に捧げられる「子どもからの愛情」の虜となり、徐々に意識的に、洗脳を施すようになっていったのだが。

「失礼な人ねえ、リーゼル。いくらエルマという素晴らしい娘に恵まれたわたくしが妬ましいからといって、人をさも冷酷な母親のようになんて言うのはよしてちょうだい」

「エルマが最高の娘つてのは事実だけどね、あたしが育てたようなものだし。でも、あんたが冷酷な母親つても事実でしょ？」

嫉妬、という罪業を含ませるように言えば、リーゼルは即座に言い返す。

「あんなにかわいいあの子を、あっさりと手放してしまえるんだから」

その声音は、軽妙なやり取りに似つかわしくないほど、冷え冷えとしていた。

「ねえ、リーゼル」

「ハイデマリー。あなた、なにを考えてるわけ？」

駒を置き、ソファから身を起こしかけたハイデマリーを遮り、リーゼルは吐き捨てるように続けた。

「言っとくけど、せいぜい拗ねて不満を言うくらいでとどまってるほかの連中と、あたしは違うわ。彼らはしょせん『父親』。あたしは、あの子にとって姉であり、『母親』だもの。愛の深さが違うのよ。今回あなたがエルマを追い出したこと、心底信じられないと思ってるし、心底あなたに怒りを覚えるわ」

高貴な猫のような瞳と、美しく化粧の施された瞳とがぶつかり合う。

リーゼルはゆっくりと瞬きをし、次にその目を開いたときには、それまでかろうじて維持していた「チエスについての応酬」という体裁すら投げ捨て、踏み込んだ会話をすることに決めたようだった。

ハイデマリーが先ほどまで動かしていた黒の女王を見つけると、それを摘み上げる。

それから彼は、駒を透かし見るようにして娼婦の姿を睨みつけた。

「ねえ、ハイデマリー。あんた、ルーデンの属国の生まれよね。三国一の娼婦と謳われ、その国の王に見初められたのを、けんもほろろに断って、逆鱗に触れた。結果、魔族の生き残りを通じたなんて噂を立てられて、それをかばった勇者　ギルベルトともども、このヴァルツァー監獄に放り込まれた。そうよね？」

「……………」

ハイデマリーはなにも言わない。

ただ、優美な眉を、器用に片方だけ持ち上げた。

「むちゃくちゃな話よね。実際に魔族の子なんて宿そうものなら、即殺されているはずだし、そもそも魔族なんてとうの昔に衰退した種族。生き残りだなんて、小説の世界の話よ。つまり、魔族云々はでっちあげ　あからさまな、冤罪」

リーゼルは器用に駒を投げ、それを空中でキャッチしてから、ゆつくりとハイデマリーのもとに歩み寄った。

「ギルベルトだって、王女との婚約が控えていた中あんたに肩入れしたのはまずかつたろうけど、別に投獄されるほどの罪状じゃないわ。ほとんど言いがかりよね。馬鹿正直なやつだから、おおかた、国のお偉方の腐敗でも責め立てて、厄介がられてたんじゃないの？」

豪華なソファ。

それを後ろから回り込み、背もたれに手をついて、背後からハイデマリーを覗き込む。

座ったままの彼女がちらりと視線を上げると、リーゼルはその細い顎を掴み、ぐいと上に持ち上げた。

「荒唐無稽な罪状。腹いせのような投獄。でも、そんなものが可能になったのは、大国ルーデンの王が、当時の各国に貸しを作るべく手を回したからだわ。そうでしょ？」

リーゼルはそつと顔を近づけ、「ねえ」と、まるで誘惑するよう
に囁いた。

「あたしたちはこれまで、あなたを【色欲】、ギルを【憤怒】と呼んできたけど、本当は逆よね。実際のところ、ギルは色恋に溺れて、せつせとあなたに住みやすい監獄いえを整えてやった愚か者。そしてあなたは、十五年経っても怒りを忘れられない、執念深くて救いようのない復讐者」

薄暗い部屋で、リーゼルの瞳がきらりと光る。

彼は、子を守る獣のように、険しい声でハイデマリーを詰った。

「あなた……ルーデンを引っかきまわすために、エルマを送り込んだんじゃないの」
「……………」

ハイデマリーはなにも言わない。

見つめ合うふたりの傍らでは、王手の掛かった盤面が沈黙を貫いていた。

26・シャバの「普通」は難しい(1)

擦り切れた絨毯に、粗末なソファ。

シャンデリアはもちろん、燭台すらなく、あるのは天井近くの小窓から差し込む月光だけ。

そんな貧相で薄暗い一室で、クレメンスはもう何度目になるかわからない溜息を漏らした。

「……………なぜだ……………」

口からは、溜息とともに唸り声が漏れる。

こちらは何度反芻したかわからない、憤りにまみれた言葉を、クレメンスは飽かず呟き続けた。

「なぜだ……………なぜ……………」

王城の一室である。

しかし、司祭にして宰相でもある侯爵にはまったく似つかわしくなく、尖塔の一つにしつらえられたその部屋は、ひどく居心地が悪かった。

もっとも、有罪との判決が下りる前までの軟禁部屋と考えれば、妥当な環境なのだろう。

しかし、クレメンスは、「自分が」そこに囚われているという事実が受け入れられなかった。

舞踏会の場で、エルマという名の侍女が自分を告発してから、わ

ずか数刻。

クレメンスは衛兵に取り押さえられ、身体をくまなく調べられ、王自らの査問に臨むとの誓書にサインさせられ、この部屋に放り込まれた。

まさしく、あつという間の出来事だった。

「なぜ……」

自分の理解をはるかに超える事態に直面し、ただ呆然としていたクレメンスだが、ひとりソファに腰を下ろしつづけて、今になってようやく思考能力が戻ってきた。

とたんに溢れだしたのは、ただひたすら「なぜ」という言葉から始まる大量の疑問だった。

なぜ、エルマは自分が黒幕だと見破った。

なぜ、周囲はあっさりとそれを信じた。

なぜ、こんなにもスムーズに一連の手続きがなされているのだ。

(いや……)

あの侍女がクレメンスの殺意にたどり着いたのは、下手人の男に手を掛けようとする自分を見とがめたからだ。

そして周囲があっさり彼女の告発を信じたのは、取り押さえられたクレメンスから、様々な物証が出てきたからだだった。

たとえば、毒針付きの指輪。

それと同一の成分を塗りつけた、下男の靴底に仕込んだのと同じ針。

下男を脅すのに使った手紙。

それに加え、畳みかけるように周囲が次々と証言しだしたのだ。

たとえば、侯爵はたびたび使用人を脅していたようであるとか、第一王子の部屋から馬蹄を持ち出していたようであるとか。

自分がかつて侍女長のブローチを盗むように命じられたことがあるとか、異国の音楽家と二人きりで打ち合わせをしていたようであるとか。

ひとつひとつは些細な噂。

けれど、それらが組み合わさった時、人々はそこに不動の「真実」を見出す。

身分の上下を問わない王城中の人物が集まる中、証言者が一斉に証言を始めれば、事態は一気に動き出す。

これはもともと、「フェリクス黒幕説」を既成事実化するために、クレメンスが描いていたはずの筋書きであった。

けれど蓋を開けてみれば、その筋書きによって、今まさに自分の首が締められようとしている。

「なぜだ……」

もつとも解せないのは、進展のあまりのスムーズさだった。

一国の宰相が、王となる第一王子を騙って、第二王子を弑そうとしたのだ。

それも即位式の前夜に。

だというのに、それが発覚したという割には、周囲は実に混乱なく、手際よく、クレメンスを捕縛し裁くための手はずを整えていった。

(まるで……誰かがあらかじめ仕組んでいたみたいに……)

おかしいではないか。

今この国の頂点には、自分がいなければなにもしかない凡愚王子しかいないのに。

フェリクス。

頭が悪くて、人を苛立たせて、現実的な段取りがなにひとつできぬ浅慮な王子。

だが、そう。

あの侍女がこちらを指さしてから、彼は即座にクレメンスの捕縛を命じた。

戸惑いも、ためらいもなく、実に淡々と。

「やあ、クレメンス。気分はどう？」

そのとき、なんの前触れもなく声が掛かって、クレメンスはびくっと肩を揺らした。

月が落とす青い影のもと佇んでいたのは、彼が今まさに思い描いた人物　フェリクスだった。

だが、いつもとなにかが違う。

奇妙な胸騒ぎを覚えながら目を凝らし、クレメンスは気付いた。

背筋が、ぴんと伸びている。

「もうすぐ夜が明けるよ。即位式は十時から。でも、僕の新しい時代が始まる前に、古い汚れはすべて落としておきたいからね。君の

査問は、その前にねじ込むことにしたよ。つまり、夜明けとともに開始だ」

フェリクスが滑らかに話すのを聞いて、クレメン스는愕然とした。

そう、滑らか。

彼の口調には、滑舌の甘いところなどまったくない。

一歩一歩近づいてくるその顔は引き締まり、目にはまぎれもない知性が覗いていた。

「あんまり大勢を叩き起こすのも忍びないから、査問はごくごく内輪で執り行うつもり。民をいたずらに混乱させたくもないしね。こいつ優しさって、上に立つ者にとって重要だと思わない？」

そして、ぞっとするほどの残酷さも。

「……………あ……………」

口からぼろりと、咳きが漏れる。

だが、なにを言いたかったのか、自分自身でもわからなかった。

ソファから腰を浮かせたまま、呆然と相手を見つめるクレメンズに、フェリクスはにこりと笑いかけた。

「どうしたの？　びっくりしちゃった？」

「……………」

「そうだね。君は、僕を凡愚王子に仕立て上げてくれた、立役者のような人だったから」

彼はまるで、優美な猫のように歩く。

そうしてクレメンスの目の前までやってくると、とん、と指先でこちらの胸先を押した。

それだけで、クレメンスはたちまち足が溶けてしまったかのような感覚を抱き、どさりと力なくソファに崩れ落ちた。

「そうだな。君は突発的な事態に弱いようだから、これまでの恩に報いて、経緯と今後君を待ち受ける状況を説明しておこうか？」

王子からは、相変わらず甘ったるい花のような、奇妙な香りが漂っている。

それを吸い込んだ瞬間、クレメンスは頭の片隅が鈍く痺れたような気がした。

「どこから話そう。……そうだなあ、君が父王を駒にして、いろいろ権力の蜜を堪能していたこと、僕は知っていたよ。王の子どもたちを見比べて、僕が一番御しやすいそうと踏んで、後見を決めたことも。第三、第四王子を手際よく国外に追い出していったことも」

フェリクスは穏やかに話すが、その内容はほとんど頭に入っていない。

クレメンスは、ただ馬鹿のように硬直して、彼を見上げていた。

「でもそれらはね、僕としては問題なかった。のんびんだらりと過ごしていれば、自動的に君が僕を押し上げてくれるんだもの。文句なんてないよね。ただ、頂点まで上ってしまえば、もう君の働きはいらなくなる。それに君……僕の馬具を使って、ルーカスを殺そうとしたよね。それはちよっと、やりすぎだった」

「……ルーカス、王子殿下……」

「そう。あの男をね、僕はなかなか買ってるんだ。彼は 野生の
勘みたいなものかなあ、ずいぶん昔から、僕の本性に気付いてるみ
たいなんだよね。ああいう男は、女か親かを使って縛り付けてでも、
ぜひ子飼いにして手元に置いておきたい。それを、君ごときが手出
ししちゃ、だめだよ」

話を聞きながら、クレメンスはほんやりと、いつからこの王子の
性質を見誤っていたのだろうと考えていた。

先王のときには、クレメンスは「カウンセリング」の名のもと、
少しずつ聖力を流し込み、彼を洗脳していった。

フェリクスに対しても、同様に接していたはずだ。

いや、違う。彼と話すと、苛立ちばかりが募って、先にこち
らの嫌気がさしてしまうのが常だった。

(そうだ……王子と話すと、いつも心が乱れて……いっそ、王子を
弑してしまおうと……はやく……はやく、と)

思えば、どうして自分は感情を優先して、王族殺害などという大
胆な方策を選んでしまったのだろう。

失敗があってもろくに作戦を練り直すことすらせず、拙速にこと
を運ぼうとしたのだろう。

即位式の場で、音楽家を利用して、ワインと毒針を使ったの殺害。
そのときは確かに素晴らしい計画だと思ったのに、今となっては、
なぜそんなまどろっこしくて工数の多い方法を取ったのか、わから
ない。

だが、……そう。

自分が「こうせねば」と決め込んだのは、きまって、フェリクス

と会話を交わした直後だった気がする。

ゆら、と視線を上げると、フェリクスは優しく目を細め、頷いた。ただ、それだけだった。

「さて。君への査問だけだね、君がかつて都合の悪い人間を監獄に放り込んでいったときと、同じ方法を取ろうと思ってる。つまり、被告人が『自供』すれば即判決。証人は裁く側が用意し、弁護人は立候補がない限り用意しない。五分で片付きそうだね。だって君は、すぐ『自供』してくれるから」

「な、にを……」

自分の罪状や手口がすべて明らかになっていること以上に、フェリクスから漂うえもいわれぬ迫力に、クレメンスはたじろいだ。

身動きが取れない。

フェリクスの腕が、その甘ったるい香水かなにかをまとわせた腕が、ゆっくりとこちらに近付いてくる。

「さあ、僕の掌をよく見て。大きく息を吸い込んでごらん。今回の顛末、仕組んだのはすべて」
「私でございます」

そのとき、月光しか差さなかったはずの空間に、突如として燭台を掲げ持った人物が現れて、クレメンスはぎょっと目を見開いた。

同時に、金縛りにあっていたようだった身体が緩み、自由に動かせるようになったことに彼は気付いた。

「おまえは……！」

慌てて視線を上げて、クレメンスは再度絶句する。

暗がりの中、蠟燭の炎に頬を寄せて佇んでいたのは、艶やかな黒髪をまとめ上げ、メイド服に身を包んだ少女。

舞踏会で彼を告発した、美貌の侍女だった。

「……エルマと言ったね？ どうしてこの部屋に入ってきたんだい？」

「侯爵閣下に蠟燭をお持ちしました」

「動機じゃない、手段だ。扉の前には騎士団の精鋭を複数立たせていたはずだよ」

「お眠りいただきました」

フェリクスが面白がるように声を掛ければ、エルマは淡々と返す。彼女は真意を窺わせない顔つきで、クレメンスに向かって蠟燭を掲げてみせた。

「灯のない部屋は心細いもの。『罪なくして捕らわれた』状況ならば、なおさらでございましょう。僭越ながら、希望の明りを届けにまいりました。さあ、閣下。この火をよくごらんください。心が落ち着くでしょうっ」

「え……？」

罪なくして捕らわれた、の言葉に、クレメンスはのろのろと顔を上げた。

そしていつもの習性で素早く思考を巡らす。

この娘は、自分を「無実」だと思って、助けに来たというのだからか。

(だとしたら……こやつを利用せぬ手はない……)

そもそも、ならばなぜこの侍女は自分のことを犯人呼ばわりなどしたのだ、というもつともな疑問が頭をかすめるが、それは蠟燭の火と同様に、ゆらりと揺らいで退いていった。

だつて現に、彼女自らが助けようとやってきてくれているのだ。

こんなにも美しい少女が。

その夜明けの色のような瞳に、うつとりするような慈愛と力強さをにじませて。

深みのあるエルマの瞳、そしてその近くで揺れる炎を見つめると、フェリクスに向き合ったとき以上に、頭がぼんやりとする感じを覚えた。

「あなたはなにも悪くない。そうでしょう？　だつて、あなたは栄えあるルーデンの宰相にして、敬虔な司祭。犯罪人として捕らえられるような人物ではない。大それた犯罪など、思いつくはずもありません。あなたは悪くない。あなたが今ここにいるのは、誰かに仕組まれたから。そうでしょう？」

「あ……ああ……」

そんなはずがないとは思うが、一部一部は真実を突いている。

そうとも、自分は悪くない。

自分は権力者だ。司祭だ。

捕らえられるのはおかしい。

自分には犯罪など思いつかない

真実であるはずの部分を反芻しているうちに、クレメンスはだんだん訳がわからなくなってきた。

自分には犯罪など思いつかない。
そうであつたらうか。

眉を寄せようとしたとき、エルマにじつと瞳を覗き込まれて、クレメンスは全身の力を抜いた。

そうか。

そうかもしれない。

きつとそうだ。

頭がしびれる。

いや、溶けてしまいそうだ

「ちよつと」

今度はフェリクスの声が引き金となって、クレメンスは我に返つた。

焦点の定まりにくい視線を向けると、彼はむっとした様子で両手を広げていた。

「さつきからなにをしているんだい、君は」

「洗脳ですがなにか」

「質問じゃなくて非難だよ。なに、いけしゃあしゃあと判事ほくの前で自供内容を魔改造しようとしているの」

「言った者勝ちで判決が下されるとお聞きしまして」

質疑は、噛み合っているようでいて微妙に噛み合わない。

フェリクスは呆れたように鼻を鳴らすと「なにそれ」と呟いた。

「だからって、暗示で強制的に自白を引き出すなんて、そんな外道な！」

「殿下がそれを仰いますか」

会話は非常識人対決の様相を呈しはじめていた。

「というか、そもそも君がクレメンスを犯人だと見破ったんだらうに、いったいなんで彼をかばう展開になっているのさ。君、彼の隠し子かなにか？」

「いえ。実際のところ、私は本来かばい立てするほど閣下のことを存じ上げません。かといって被害を受けたり憎んだりしているわけでもないの、正直なところ、彼の動機や真の罪状、ついでに処刑されるかどうかについても、さほど興味はありません」

「え」

フェリクスとエルマの間で、首を振りながら会話のラリーを追いかけていたクレメンスが顔を引き攣らせる。

が、この場でそれに頓着してくれる人物はいなかった。

「判決は自供に基づく。証人も限られたごく内輪の査問。つまり、その幾人かの証人を抱き込んだうえで私が『自供』さえすれば、見事私は犯人ですね？」

「……まあそうなるけど」

「王族に殺意を向け、あまつその罪を一国の宰相になすりつけようとした。実行犯ではないし未遂なので処刑まではいかないけれど、これだと判決としては監獄送りですね？」

「……君は起訴すらされてないけど？」

「はい。なので『自首』して自ら起訴します」

押しかけ女房ならぬ、押しかけ被告人に、フェリクスが怪訝そう

に眉を寄せる。

エルマはひとつ頷くと、いけしゃあしゃあと自らの罪状を告げた。

「えー、私は、実はルーデンの先王によって監獄送りにされた娼婦の娘で、実はルーデンへの恨み骨髓でした。そこで、獄内で育った間に身に着けた洗脳の技術で侯爵を操り、復讐として、実は憎んでいた第二王子を殺害し、この国を混乱の坩堝に叩き込もうとしました」

「実は」が連発されているあたり、打ち切りにあつた小説を急遽畳むために無理やり設定を付け加えたような、後付け感バリバリの自白である。

しかしエルマは、これ以上ないほど真剣な顔で燭台を床に置くと、フェリクスに向かって、神妙に両手を突き出してみせた。

「さあ」

そのポーズだけは、妙にしおらしい。

しかし逆に言えば、それ以外は実に堂々としていた。

「重罪人として、速やかに私を監獄送りにしてくださいませ」

それはまるで、実家に帰らせていただきますと三下り半を突きつける妻のような、たいそう腹の据わった様子であった。

27. シャバの「普通」は難しい(2)

「沈黙は肯定とみなすわよ」

豪華な、けれど薄暗い部屋に、リーゼルの這うような声が響く。答えがないのを確認すると、彼は掴んでいたハイデマリーの頤をぱつと放し、忌々しげに舌打ちした。

「……あたり、ってわけ。見損なつたわよ、ハイデマリー」

娼婦の肌に触れていた手を、汚らわしいとでもいうように服に擦りつける。

化粧を施したアーモンド形の瞳には、いまや溢れんばかりの軽蔑の色が浮かんでいた。

「昔、監獄（トウ）に乗っ取ったとき、あんたは『お腹の子どもに快適な環境をつくるため』って言つてたじゃない。あたし、感心したのよ。大した女だと思つたわ、だから協力したの。なのに、なんなの。エルマはしょせん、あんたにとっては駒でしかなかつたってわけ？」

がっ！

背もたれの後ろから、勢いよくソファを蹴り上げる。

細身でありながら、彼のひと蹴りで重厚なソファは大きく揺れた。

「ざっけんじゃないわよ。あんたにエルマの母親たる資格なんてないわ。よくって？ エルマの母親の座はあたしがもらう。あの子はこの家に帰ってきて、あたしたちと幸せに暮らすの。そして、あん

たには出て行ってもらおうわ」

「……エルマは帰ってこないわ
「いいえ、帰ってくる」

ようやく口を開いたハイデマリーを、リーゼルは素早く遮ってみせた。

そうして、再び背もたれに手を突き、背後からハイデマリーに頬を寄せた。

「あんた、あの子に『普通の女の子がどういうものかわかるまで、帰ってきちゃだめ』なんて言ったらしいわね？ ひどい話よ あたしたちに育てられたあの子が、普通になんてなれるわけがないのに……でも、大丈夫。あたしが、ちゃあんとフォローしといたから」
「……なんですって？」

ハイデマリーがぱつと振り返る。

人形のような白皙の美貌に、とうとう険しい表情が浮かんだのを見て、リーゼルはせせら笑った。

「『言い聞かせて』おいたのよ。『普通になんかなれなそうだと思つたら』『マリーの命令なんて無視して』『どんな手を使ってでも』おうちに帰ってらっしゃい、ってね」

刷り込み 暗示をかけておいたということだ。

ハイデマリーがその猫のような瞳に、はつきりと苛立ちを浮かべたのを認めて、リーゼルはますます笑みを深めた。

「愛しい我が子突き放すなんて母親の所業じゃないわ。世間に馴染めない子どもすらも、温かく迎え入れる、そういう場所を作ってあげるのが母親の ってうおおあああ！」

が、その文尾はどすの利いた雄たけびに焼かれた。

「痛ああああ！ あんたっ、なに、すんのよ！」

「香水を吹きかけただけでしょ。目に」

「どっから出てきたその香水！」

「谷間よ」

しれつと答えてから、ハイデマリーは気だるげに肩をすくめた。

「ブランデーだったら失明していたかもしれないよ。軽いアル
コールしか含まない香水で、残念、もとい、幸運だったわね」

「至極無念そうに言っただけじゃないわよおお！」

目を押さえながらリーゼルが絶叫すると、それを聞きつけたのか、
居室のドアが開いた。

「どうした？ 討ち入りか？」

席を外していた、ギルベルトである。

「いいえ。ただのご乱心よ」

ハイデマリーはひらりと片手を上げて答え、それから、少し拗ね
たように付け加えた。

「【嫉妬】 ったら、わたくしの母性と賭けの行方を、思い切り否定
してくるものだから」

「それは」

精悍さを含んだ理知的な顔に、面白がるような色が浮かぶ。
ギルベルトは整った唇の片方だけを持ち上げると、わずかに首を傾げてみせた。

「無謀だな」

「なによ……」

ようやく目の痛みが落ち着いてきたリーゼルは、充血した瞳をハ
ンカチで押さえながら、ぎらりとふたりを睨みつけた。

「この女に十分な母性が備わっているとでも？ 賭けてってなんのこ
とよ」

「エルマがすぐ帰ってきてしまうかどうかの賭けよ。ちなみに
わたくしは、『帰ってこない』にすべてを賭けてる。あの子を信じ
ているから」

「はあ？」

怪訝な様子を隠しもしないリーゼルに、ハイデマリーは小さく微
笑んだ。

「そして、わたくしはこれまでどんな賭けにだって、負けたことは
ないわ」

「その賭けに関連してだが」

とそこに、ギルベルトが切り出す。

彼はそのたくましい手の片方に、一枚の便箋を持っていた。

「我らが看守殿のもとに届いた手紙によれば、近々、この監獄いえに新
入りが来るそうだ。罪状は、王族の殺害未遂」

「あら。久々じゃない」

「それで？」

リーゼルが目を瞬かせるのをよそに、ハイデマリーは静かに問う。彼女は膝の上で両手を組み、じっとテーブルの上のチェス盤を見つめていた。

「いったい、誰が来るのかしら」

「ああ、それが」

ギルベルトはちらりと彼女に一瞥を向け、それからおもむろに口を開いた。

28・シャバの「普通」は難しい(3)

普通とはなんだろう、というのは、エルマのここ最近の疑問だった。

みんなと同じことが普通。

あるいは、平均であることが普通。

けれどだとすれば、普通というのはつかみどころのない雲のような存在だ。

だって、エルマは彼女の「家族」と同じこと、監獄内では当然だったことをしているだけなのに、シャバの人たちには驚かれてばかりなのだから。

かつてはエルマだって、あまりに厳しい鍛錬に、「本当にこれは普通なの？」と「家族」に尋ねたものだった。

しかし彼らが実に堂々と、「これくらいできなくてどうする」と返すので、てつきりそれが正しいのだろうと信じていたのだが。

【怠惰】の父モーガンからは、人の表情を読むことと、おいしい紅茶の淹れ方を教わった。

【暴食】の父イザークからは、調理と狩りを教わった。

【貪欲】の兄ホルストからは人体の神秘を、【嫉妬】の姉 本人は母と主張しているけれど リーゼルからは女性としての嗜みを。

エルマが一番好きな父、ギルベルトからは、実はなにか特別な技術を受け継いだわけではない。

ただし彼は、いつも穏やかにエルマのことを見守り、微笑みを向け、頭を撫でて褒めてくれた。

たぶん彼からは、「父親」というものを一番多く教わった。

だからエルマはギルベルトのことを、ただ「お父様」とだけ呼ぶ。

そして、彼女がただ「お母様」とだけ呼ぶ、エルマの生みの母ハイデマリー。

あの美貌の女性が、いったいなにを考えているのかというのは、実はエルマにもよくわかっていない。

微表情を読み取ってさえも、だ。

彼女はエルマが「家族」からの教えを器用にこなすと、ひどく複雑な顔をする。

それは、驚いたような、不安がるような、いや、ほっとするような、面白がるような。

けれど、気まぐれで冷酷にも見える彼女が、本当は驚くほど愛情深いことをエルマは肌で理解しているので、彼女が言うことを、できるならば守りたいと思っていた。

「普通の女の子」がどういうものか、世界を見ていらっしやい。

それがわかるまでは、おうちに帰ってきちゃだめよ。

監獄からの「解放」を言い渡されたとき、ハイデマリーはエルマにそう告げた。

そしてエルマは、そんなの簡単なことだ、と思った。思っていた。

が、蓋を開けてみれば、それは予想をはるかに上回り困難なこと

だった。

勤務初日だからと、少々張り切って紅茶を淹れれば驚かれた。

あまり凝った料理を作りすぎないようにと、あえてラフな料理を振舞ってみせたら　しかも勝ち相手は相手に譲ったのに！　その調理法に慄かれた。

なにごとく一人でやっては驚かれるからと、聖医導師に仕上げをお願いしつつ「手当て」をしたら、それでもやっぱりシヨックを与えてしまったらしい。

この辺りでいよいよ自分の非常識さを猛省し、常識人と評判のデイルクから教本を借りなおしまでしたのに、「王道」通りライバルに勝負を挑んだら、ルーカス王子から「それ以上人を追い詰めるな」といった具合にたしなめられた。

彼から叱られたのは二回目だった。

あげく、舞踏会で踊るだけならまだしも、流れで陰謀まで明らかにしてしまった。

自分なりの正義感に基づいて告発したわけだし、後悔はしていないが　これまでに読んできた百冊近い「教本」のどれにも、出会って三秒で犯人を言い当てる主人公は出てこなかった。

やはり、自分は、「普通の女の子」の能力が著しく欠如した人間なのだろう。

（普通というのは、なんて難しい……）

舌に苦味を感じるかのようにだった。

何度やっても、うまくいかない。

努力したり、自分なりに考えれば考えるほど空回りする。

外見上は平然を装っていたが、本当は周囲からドン引きされるた

びに、顔から火が出る思いだった。
穴を掘って埋まりたかった。

人生で初めて味わう挫折だった。

「お願いでございます。私を、監獄送りにしてくださいませ」

お縄頂戴、のポーズで神妙に両手を差し出す。
もうおうちに帰ろう、と思った。

(申し訳ありません、お母様……)

本当なら、普通の女の子というものを理解して、大手を振って監獄に帰りたかったが、自分が上げるのは錦ではなく白旗だ。

だが、それでも監獄では、「あの人」が自分を待っていてくれる。

負け犬でも、きっと温かく受け入れてくれるあの人。

だから、自分は帰らなくてはならない。

普通になんてなれないと痛感した自分は、母の命令さえ無視して、どんな手を使ってでも。

エルマの脳裏に、彼女のものでない言葉が混ざりだす。

しかし、それに気付くこともなく手を差し出しつつづけていると、

「……ええと」

フェリクスが、微妙な表情で口を開いた。

「ちょっと、君の主張を確認させてもらうけど」

「はい」

「獄内で娼婦から生まれたって ああ、そう。うん。たしか十五年くらい前に監獄送りになった傾国の娼婦がいたよね。ってことは君の主張のうち経歴の部分は事実だとして……わああ、ってことは君、かのヴァルツァー監獄で育ったってこと？ まじ？」

「まじです。先ほどからそう申しております」

エルマが真顔で頷くと、フェリクスは興味深げな表情でとんとんと顎を叩いた。

「一度君の経歴を浚ったときは、侍女長の遠縁の娘ってことになってたけど ははあ、なるほどねえ。ああそうか、さてはルーカスのやつ……ふうん。僕の情報網にも気取らせないで保護するなんてやるじゃない」

ぶつぶつ呟きながら、すさまじい勢いで情報を照合しているようである。

視線を宙の一点に固定して素早く思考を巡らせる姿は、【貪欲】のホルストにも通ずるものがある。

おそらく彼と同様、ものすごく情報処理能力が高いのだろうと、エルマは内心でそんなことを思った。

「で」

だが彼は、顎に当てていた手をほどくと、それを困惑したようにひらりと翻した。

「君が監獄育ちだっていうところまでは信じるとして、以降の主張がさっぱり理解できないんだけど」

「

フェリクスとエルマが、クレメンスをそっちのけにして会話を進めようとしたとき、それは起こった。

「なにがあつた！」

鋭い声とともに、扉が蹴破られたのである。

長い足で勢いよく蝶番ごと扉を弾き飛ばしたのは、騎士服をまとつた精悍な青年。

小姓のマルクを伴つたルーカスであつた。

剣を構えていた騎士兼第二王子は、部屋に佇む異母兄と侍女を見るなり軽く目を見開き、それから眉を寄せた。

アテレコするなら、「うわ……」みたいな、げんなりとした顔だつた。

「乱暴だなあ、ルーカス。ノックもなしに急に扉を開けられては、びっくりしてしまふよ」

「ですが蝶番を弾き飛ばしているぶん、扉にはさほど傷は付いていないようです。これなら修理も容易ですね。さすがです」

「……義兄上に、エルマ。念のため常識として突っ込ませてもらうが……王族殺害を目論んだ容疑者の居室で、見張りまで気絶させて、いったいなにを？」

ろくでもない予感しかしないけど、といった様子で、ルーカスが低く問う。

対するフェリクスの答えはあつけらかんとしていた。

「いやまあ。即位式前に迅速に査問が済むよう、彼の心を折りがて

ら洗脳しておこうと思って」

いけしゃあしゃあとした洗脳宣言にルーカスは半眼になり、「またそんな、あくどい手段を……」と静かな非難を漏らした。

「あれ？　君、意外に冷静だね。もつとこう、『まさか愚鈍と噂のこの義兄が！』みたいな反応を期待しなくもなかったんだけど」
「……第三・第四王子たちや悪意ある家臣など、あなたと利益が対立する人間に限って、実に自然に『退場』していったのを見て、もしやと思っていたので」

「あれま。やつぱり」

フェリクスも、ある程度は本性を見抜かれているものと理解していたらしい。

「それに義兄上からは、いつも妙に胸が悪くなるような、甘つたるい　暗示の香の類ですかね？　そんな匂いがしましたので」

「言うねえ。君だって甘つたるい女の香水ばかりまとわりつかせていたくせに」

ルーカスが補足すると、軽く苦笑した。

「ま、そこまでわかってるなら話は早い。僕は僕なりによき治世を目指しているだけだし、君のことも無下にしないつもりだよ　僕の邪魔をしない限りはね」

「……馬具の件は」

「あれはこいつの暴走。だから僕が罰する」

「なら結構です」

その短いやり取りで、ふたりはおおよそを分かりあったらしい。肩をすくめると、続いてルーカスはエルマに向き直った。

「で、エルマ。おまえはなにをしているんだ」

「はい。今回のルーカス王子殿下暗殺未遂事件の黒幕は私であるというのを、侯爵閣下に申し出て、『ご理解いただこうと』しておりました」

「……なんだと？」

「そういうことにして、監獄送りにしてほしいんだってさ。被告と証人を洗脳しちゃえば、弁護人なんていないし、どうとでもできると思ったみたい。自称、母親を投獄された復讐として、国を混乱させようとした犯人なんだって」

エルマの主張をフェリクスが要約して伝えると、ルーカスはちょっと眉を寄せて、それからちらりとクレメンスに一瞥をくれた。

「……なるほど。それで、義兄上とエルマがふたりして、相反する内容の暗示を彼にかけた結果、こうなったと」

侯爵は先ほどから会話を遮ることもなく、なにをしていたかといえ

ば
「よし皆の者、見ておれ、長縄はな……、鋭角……鋭角から勢いよく踏み込むのだ……サイドスイングのクレメンスと呼ばれた私に……不可能はない……」

精神と時の間に籠って、ぶつぶつと内なる誰かと対話していた。

どうやら、強力な暗示を続けざまに掛けられて、頭のねじが多少緩んでしまったらしい。

ときどき「ふふっ」と笑ったりして、少々不気味だ。

ルーカスは溜息をつくど、控えていたマルクに何ごとかを言い含め、部屋から追い払った。人払いのようだ。

ついで、彼はエルマを正面から見つめた。

「エルマ」

「はい」

「おまえ洗脳までできるのか、などという愚問は、もはや口にする気もない。おまえが騎士の精鋭を昏倒させる技量を持っていても、突如として被告人の部屋に出没しても、一国の王子の本性をしれつと見抜いていても、まあエルマだしなと思うだけだ」

「……………はい」

副音声に込められた、「もはやおまえに常識とか普通とかは期待しない」といった趣旨に、エルマは無表情の下で、少々がっくりした。

やはり自分には「普通」などというのは過ぎた目標だったのか。内心で忸怩たる思いを噛み締めていると、ルーカスは真剣な表情で続けた。

「ただ、ふたつだけ聞かせてほしい」

「はい」

「ひとつ。おまえにとって……………監獄からの解放は、迷惑だったか？
こちらの世界は、厭わしいだけだったか」

その問いに、エルマはふと顔を上げ、まじまじと相手のことを見つめた。

わずかに持ち上がった左の口角に、下がった視線。

詐欺師にして【怠惰】の父・モーガンからの教えによれば、それは 罪悪感を示す微表情だ。

「……………いえ」

少し考えてから、エルマは首を横に振った。

たしかに、ヴァルツァー監獄は快適だった。

愛情深い家族と贅を凝らした便利な環境。

まるで胎児を包み込む羊水のように、どこまでも優しく温かい空間だった。

できればそこから出たくないと思ったし、王城に上がってからはばらばらは、しきりと帰りたいと思っていたのも事実だが

(でも、こちらの生活も楽しかった)

はじめて同年代の友人ができた。

「家族」以外に自分を指導してくれる人に出会った。

自分は失敗してばかりだったし、はじめての挫折は苦々しいものだったけれど、「普通」を模索して挑戦する日々には張り合いがあった。と思う。

そこまで考えて、ふと胸に違和感がきざすのを覚える。

ではなぜ、自分はこうもしゃかりきになって、監獄に帰ろうとしているのだろうか。

(それは……「普通になんてなれない」と痛感したからで)

そうだ。

「普通になれないことがわかったら」、自分は「母の命令を無視して」「どんな手段を使っても」監獄に戻らなくてはならないのだ。

エルマは無意識に額に手を押し当てて、自分に言い聞かせた。

「ただ……そう。私は帰らなくてはならないのです。『普通』になんてなれなかったから。私には『普通の女の子』の才能が欠如している、わかったから」

しっぽを巻いて家に帰るのだ。

そうして優しい【嫉妬】の姉にして母・リーゼルに、よしよしと慰めてもらう。

エルマはなんだか、ものすごく情けなくてみじめな気持ちになっ
てきた。

「……しよせん私は落伍者です……。皆さまと同じようにすることができない、まさに外れ者……。努力を重ねても、いっこうに『普通』が理解できない。どころか遠ざかっていくばかり。紅茶を淹れても料理をしても、手当てをしても踊っても、人々にドン引きと冷や汗をもたらす、痛い女です……」

「ちよつと待て」

額にやっていた手を滑らせ、どんよりとした表情で頬に手のひらを押し当てていると、ルーカスが真顔で制止してきた。

「おまえ、どういうことだ？ 微表情まで読めるくせに、なぜそういう解釈になるんだ!？」

「ああ、それは呆れの微表情……私、またなにかやらかしましたでしょうか」

「文脈で理解しろ、馬鹿めが!」

ルーカスは一喝したが、エルマが表情を敏感に読み取ってしまうがゆえに、かえって真意まで解釈しようとしないう性質であることを理解した。

同時に、真意を読み取らせない眼鏡の下で、彼女がそんなにも懊悩していたのだということも。

「馬鹿……初めて言われました……」

眼鏡を外し、素顔をさらしたエルマは、いつもよりずいぶんと感情豊かに見える。

悄然と頂垂れた肩は小さく、伏せられたまぶたは哀しげだ。

抑揚のない声と眼鏡のために、いつも超然とした雰囲気をもっていた彼女だが、その内側では、いつもこのように、感情を揺らがせていたのだろう。それこそ、年相応の少女のように。

俯いてしまったエルマに、無意識に手を差し伸べながら、ルーカスは気づけば告げていた。

「……なんだ。おまえも、そういうところは可愛らしいではないか」

「……え？」

「自己認識はさておき、『自分は至らない』だとか『ままならない』だとか思い悩む様は、いたって真つ当で普通の娘のように見えるが」

なんとなく顎をすくい、顔を上げさせたら、その夜明け色が大きく見開かれた。

「……本当ですか……？」

瑠璃色のような瞳に、ほんのわずかに朱が混じり、宝石のような紫がかった色になる。

目は潤み、頬は上気し、淡く色づいた唇をほんの少しだけ開いた様子は、数多の美女を見てきたルーカスにも、実に可憐に映った。

「ああ。今のおまえは、……可愛げがある」

好ましい、と素直に言うのは少し癪で、そんな風に告げてみせたら、エルマはとろけるような笑みを浮かべた。

「……………！ 殿下……………！」

傍から見れば、この一連のやりとりは、口説く男とそれを喜ぶ娘の図だ。

行儀よく沈黙を守っていたフェリクスは、興味深そうにやりとりを見守っていたが、珍しくふたりの間に発生しかけた甘やかなる空気を、しかしエルマは次の一言で粉碎してみせた。

「ならば私は、大手を振って監獄に帰れますね！」

「……………なんだと？」

ルーカスは愕然とするが、エルマは気にしない。彼女は心底、これまで自分に「異常」の烙印を押してきた男から、見事「普通」のお墨付きを得てみせたことに歓喜していた。

「ああ、よかった。とても嬉しいです。これほどの達成感を噛み締めめたのは、ドラゴンを素手で倒して以来です」

気分が凄まじい勢いで浮上していく。

先ほどまで頭を占拠していた霧のようなもの思いが一気に晴れ、いじけた気持ちや、一刻も早く逃げ帰らねばという強迫観念が溶け

消えていた。

「おい、なんだと？ ドラゴン……？」

「それでは私、無事に約束も叶えられそうですので、監獄に帰りませぬ。どうせ侯爵閣下もほどよい具合に壊れてしまっただけです。いや、いますし、もう筋書きとしてはこのまま、真犯人の私が監獄送りになる、ということでは？」

「おい待て」

心が弾む。

早く逃げ帰らねば、という切羽詰まった思いは消えていたが、代わりに、いそいそ帰って「家族」に自慢したい気持ちで満ち溢れていた。

シャバの暮らしは思ったより楽しかった。

新しい出会いも、張り合いのある生活も愛おしかった。

だが、やはり、実家の居心地のよさにはかなわない。

自覚こそなかったが、エルマは根っからの引きこもり気質だった。

リーゼルの暗示は、かなり強力にエルマの帰還を促していたが、たとえば暗示がなくとも、エルマは監獄に帰る気満々だったのである。

フェリクスもまた、にやにやとしながら、厭味つたらしく告げる。

「ねえ、ルーカス。君の女性を引き留める力なんていうのも、大したことないね？」

「……………」

ルーカスは無言で青筋を浮かべたが、そこで、事態は急展開を迎

えた。

ばたばたばたばたっ！

「エルマ！」

騒々しい足音を響かせて、イレ―ネが飛び込んできたのである。

29. シャバの「普通」は難しい(4)

彼女は、すでに扉として機能していない木の板を蹴り飛ばすと、その勢いのまま部屋に踏み入ってきた。

「あなた、ルーカス王子殿下暗殺未遂事件の犯人として、濡れ衣を着せられそうになっているって本当!？」

「は？」

やって来るなり叫んだその内容に、エルマはきよんとする。

が、「いつたいなにを」と言い返す前に、さらに複数の人物が部屋になだれ込んだ。

「エルマ! なにがあつたのです! 殺人犯としての自白を強要されているですって!？」

「ねえエルマ、信じられないわ! あなたが愚息に殺意を持っていただけなんて与太話を吹聴しているのは、どこの誰なの!？」

『おう、なに妙な事件に巻き込まれてんだ、エルマ。おまえは明日いや、今日だな、今日の即位式正餐会の仕込みを手伝うっていう重要な仕事があんだらうが』

「エルマさん! 侯爵に騙されていた僕が言うのはなんだけど、あなたがこんな陰謀に巻き込まれるだなんて、信じられない! こんな嫌疑、早く晴らしてしまわなくてどうするんだ!」

『ミューズよ! 君がこんな美しくない事態を甘受しようなど! 神が許してもこの僕が許すものか!』

順に、ゲルダ、ユリアーナ前妃、ゲオルグ料理長、デニス聖医導師、そしてヨーランである。

興奮のまま、母語も交えて話す彼らの背後には、やりきった感を前面に浮かべたマルクもいる。

就寝中に王子付きの小姓によつてたたき起こされたらしい六人は、全員、着の身着のままといった様子で、その瞳にだけ燃えるような怒りと闘志を宿していた。

「は……？」

やけに張り切っている彼らの姿に、エルマは嫌な予感を覚えた。

珍しく彼女がなにも言えずに立ち尽くしていると、それをどう受け取ったものか、イレエネを筆頭とした六人は素早く彼女に近付き取り囲む。

そして肩に手を置いたり、腕を取ったり、抱きしめたりした。

「まったく信じられない話だわ。まさか無実の人間に罪をなすり付けて、悪名高きヴァルツァー監獄に送り込もうなど。つくづくロツトナー侯爵は見下げた男だわ」

「いえあの……悪名高いといいますが、ヴァルツァー監獄は私の実家なのですが……」

「そこよ、エルマ！ あなたの非常識はだからだったのね。けれど、監獄育ちだから罪を着せられても問題ないだろうだなんて、おぞましい発想だわ！ 聞けば、あなた、監獄出身の人間にどのみち未来はないなどと脅されたのですって!？」

「え」

ユリアーナやイレエネが捲し立てる内容に、思わず思考が停止してしまふ。

彼女たちの話を総合すると、エルマは「環境劣悪な監獄で育ったところを恩赦によって解放されるも、出自を知った侯爵に『監獄出身のおまえに未来はない』と脅され、ルーカス殺害未遂の罪を押し付けられかけている」ことになっているようだった。
なんだそれはという感じだ。

「いえ……あの、そうじゃなくて、私は本当に自身の意思で監獄送りを希望していて……その、侯爵をも利用して殺害をもくるんだ、この事態の黒幕……」

「それが侯爵の書いたシナリオなの？ まったく、あなたがわざわざ他人を利用して殺害をもくるむだなんで、荒唐無稽としか言いようがないわ」

「え」

「そうですね。あなたほどの能力があれば、ルーカス様のような隙だらけの殿方など瞬殺できようものを、どれだけあなたのことを見くびっているのだから」

神妙に反論すると、ユリアーナとゲルダから速攻でそれを封じられた。

どうやらエルマは、「彼女がそんな（人道的に）悪いことをするわけない！」という文脈ではなく、「彼女がそんな（効率の）悪いことをするわけない！」といった方向で信頼されているらしい。

少々の虚しさを覚えて、エルマは一瞬黙り込んだ。

「……いえあの、それほど私を買ってくださっているなら、なぜ侯爵に利用されたなどという発想に……？」

「だってあなた、頭はよさそうなのに、ひどくずれているんだもの！」

「おまえ、常識、なさそうだしな」

「突拍子もない理由で監獄行きを受け入れていそうだと思ったもの

で」

『ミュージズよ。君の話すルーデン語もひどく音楽的だね』

粘ってみると、今度はイレーネやゲオルグ、デニスから、エルマの「普通」をデイスられた。

ちなみにヨーランは芸術家肌だからなのか、明後日の発言をしている。

エルマは世の無情を思い、再び沈黙を選んだ。

とそこに、

「大丈夫よ、エルマ。わたくしが弁護士を作ってさしあげる。この国の前妃として、いいえ、ラトランドの人脈を使っても、優秀な弁護人を確保して、あなたの無実を世に突きつけてみせるわ」

整った相貌を自信で彩ったユリアーナが、力強く頷きかける。

それにつられたように、その場にいた一同が次々と親指を立てはじめた。

「微力ながら、私も心ある下級貴族くらいまでなら動かせます。フットワークの軽さに定評のある下級貴族の底力を、今こそ見せつけてやろうではありませんか」

「若手侍女たちへの根回しなら、このイレーネに任せてちょうだい」

女性陣がきらつと瞳を輝かせれば。

「俺だって、この城の、胃袋を、握っている。全員、おまえの、弁護人にしてやるぜ。モンテーニュ人は、美人の味方だからな」

「僕は騎士団に顔が利く。これまで治療してやった患者たちも全員

動員してあげるよ」

男性陣もまた自信に満ち溢れた様子で胸を叩く。

『ところで、僕を招いた侯爵が犯人ということは、僕への支払いはどうなるんだろうか。演奏代も支払われないようなら、友人の国際弁護士を通じて訴えようと思っっているんだけど』

ヨーランだけはやはり頓珍漢なことを口に出しているが　いや、国際弁護士へのツテを持っているあたり、ほかの五人よりよほど厄介な存在かもしれない。

王族だって雇えないだろうというような、大規模で国際的で網羅的な弁護団の登場に、エルマは顔を引き攣らせた。

特に「大規模」というのが問題だ。

査問が行われるまでの数時間で、これだけの人数を洗脳、または説得するのは、エルマの能力をもってしても困難である。

引き換え相手はいえば、持ち前の行動力で、今この瞬間にでも、自分の仲間を召喚しそうな様子だ。

「こんなに手厚く弁護されては、起訴など不可能だな。監獄行きは諦める」

静かに結論を言い渡され、エルマは青褪めながらルーカスを振り返った。

「いえ、あの……弁護など不要といえますか……私はただ、家に帰りたいただけ」

「エルマ」

珍しく動揺しているエルマを、ルーカスは実にいい笑顔で遮った。

「おまえ、まだ理解していないようだな」

「な……にを、でしょうか」

表面上はにこやかな第二王子の、その瞼や頬の筋肉がごくわずかに強張っていることを見て取り、エルマは冷や汗を浮かべる。

この微表情はなんのサインだろうか。

怒り、いや、興奮、いや、愉悦。

そのすべてのような気もするし、どれも微妙に異なる気もする。

ただなにかこう、自分が彼の導火線のようなものに着火してしまったことだけは、理解できた。

そしてなぜか、この瞬間になって、かつて母ハイデマリーが自分に告げた言葉をエルマは思い出していた。

愛にはね、エルマ。

彼女は完璧に整った唇を、苦笑の形に歪めていた。

愛には……好意には、友情には、善意には、よくよく注意しなくてはならないわ。

一度それらに絡め取られたら、絶対に逃がしてもらえないから。

なんの話をしていたときだったか。

そう、罪の名を持つ「家族」の中で、誰が一番たちが悪いか、と

いった話題で盛り上がっていたときだった気がする。

彼女は困ったような、諦めたような笑みを浮かべて、少し離れた場所に佇むギルベルトを見つめていた

「シャバにはな。七つの大罪よりもよほど執念深くて、厄介な美德があるんだ　愛だとか好意、と、俺たちはそれを呼ぶがな」

ルーカスがにやりと笑いながら告げた言葉で我に返る。

脳内のものとぴったり一致したその単語に呆然としてみると、彼はぐっと腰をかがめ、睦言を囁くように唇を耳元に寄せた。

「俺たちからこれだけ好かれておいて……そう簡単に放してもらえらると、思っなよ？」

聞きようによっては、口説かれているようにも思えるせりふ。

しかしエルマには、恫喝か最後通牒のように響いた。

呆然と固まっていたら、その空気を解すように「えー」とフェリクスが片手を挙げて切り出した。

「話を戻すけど。そのエルマ嬢が今回の犯人でないことは自明だし、本人が言い張ったとしても、強力な弁護士に囲まれて不起訴濃厚だから、もう無視しちゃっていいかな？　で、当初の予定通り、クレメンスを対象に査問するということで」

すでに被告人が自供内容を刷り込まれている時点で、なんの意味もない査問である。

だがその場には誰一人として　クレメンス本人も含めて　異議を唱える者はいなかった。

「え……え……」

ただエルマだけが、現実を受け入れられないとでもいうように視線をさまよわせる。

それを見てルーカスが、「そういえば」と片方の眉を上げた。

「すっかり話が逸れてしまったが、聞きたいことのもうひとつはな、エルマ。おまえ、いくら監獄に帰りたいたいからといって、この男を飛ばうような真似をしてよかったのか？」

「……と仰いますと？」

話が呑み込めず怪訝な顔をするエルマに、ルーカスはやはりと頷く。

それからくしゃりと彼女の頭を撫でて、「おまえもまだまだだと嘆息した。

「人の顔や物事の表面だけ見るからそうなるんだ。おまえ、この男
ロットナー侯がなにをしてきたのか、知らないんだろう」

「あ、やっぱりそうなんだ。道理でねえ」

ルーカスが呆れたように告げれば、フェリクスが得心したように手を打つ。

「彼がなにを……？」

眉を顰めたエルマに向かって、ふたりの王子はそれぞれゆったりと仕草で頷き返した。

「今回の件をきっかけに、侯爵の居室を搜索したらな。監獄を材料

にして諸国と取引を重ねた履歴が出るわ出るわ。……この男は、宰相の地位と、暗示の能力を利用して、罪なき者を次々と監獄送りしてきた大罪人だ」

「王の誘いを断っただけの娼婦、王女との婚約を拒否して腐敗政治を批判しただけの英雄。ほかにも何人もいるようだけど……君の母親が美貌の娼婦だというなら、つまり彼は　君の仇だね」

え、と夜明け色の目が見開かれる。

ルーカスはそれを見て、にやりと口の端を持ち上げてみせた。

「無実の姫君は仲間の協力のもと仇に復讐し、監獄送りになるのは悪人だけ。これがシャバの『普通』というものだ。　おまえには、そのくらいのことわからないのか？」

今度こそ、エルマはぼかんとした顔になった。

29・シャバの「普通」は難しい(4)(後書き)

エピソードは本日中に投稿させていただきます。

30・エピローグ

「クレメンス・フォン・ロットナー？」

新たに監獄送りにされることとなった人物の名を聞いて、リーゼルは化粧を施した目を見開いた。

「え、それって、豚看守に偽の報告書を送らせてる相手でしょ？」

この監獄の統括者よね。なんでまた」

「王族の殺害未遂、そして、権力と引き換えに諸国の無辜むこの民を監獄送りにしてきた罪だそうだ。たとえば 一国の王からの召し上げを拒んだだけで、魔族と通じた姦婦として投獄された娼婦、とか
な」

ギルベルトが分厚い手紙に視線を落としながら告げると、リーゼルは長い睫毛を瞬かせる。

「無実の人間を監獄送りにしてきたのは、ルーデンの王ではなく、宰相の仕業だったの……？」

しかし、当事者であるはずのハイデマリーは、それらの情報をまったく気にする様子はない。

ただテーブル上のチェス盤を見つめたまま、ギルベルトに問うた。

「エルマは？」

慎重さの滲む声だった。

「あの子は、ここには帰ってこない？ ……うまく、やっているのかしら」

「ああ」

応じるギルベルトの声には笑いが含まれていた。

苦笑、といってもよいかもしれない。

「なんでも、このロットナー侯を告発したのはエルマだそうだ。侯爵の余罪を洗っているうちに、彼が仕掛けようとした罠を彼女が先回りして防いでいたことがわかって、城では今、エルマがちょっとしたヒーローになっているらしい」

看守に手紙を寄越したのは、捕縛されたクレメンスに代わって、一時的に監獄関連の業務を補助することになったデニスという若い聖医導師だが、彼はよほど「ヒーロー」に傾倒しているのか、クレメンスについての情報よりもよほど紙幅を割いて、エルマについて描写していた。

「エルマはすっかり、シャバで人気者ということだ。 ……おめでとう、マリー。今回の賭けも君の勝ちだな」

「 ……よかったわ」

ギルベルトが祝うと、ハイデマリーはそつと笑って組んでいた両手をほどく。

それからソファに沈み込むようにして、しみじみと繰り返した。

「本当に、よかった」

あからさまに緊張を解き、幸せそうな表情を浮かべているハイデマリーとは裏腹に、リーゼルはすっかり会話に取り残されていた。

「どういうこと？ 賭けに勝って……あの子が帰ってこないこと、なにがそんなに嬉しいのよ。っていうか、ロットナーこそがあんたの仇のわけでしょ？ そこをあっさりスルーしていいわけ？」

彼は混乱していた。

ハイデマリーの投獄は冤罪だろうとは思っていたが、その主犯が王ではなく宰相だったというのは少々驚いたし、それ以上に、その相手が捕まったというのに、なんの反応も示さないことが不思議だった。

いや、しかし考えてみれば、ハイデマリーは以前から、自分の冤罪を晴らすかなどとはしなかった。

彼女が執着したのは、ただ快適な住空間を整えることだけ。そう、だとすれば、今更エルマを使って復讐を企むというのも、少々違和感のある仮説だ。

すっかり自説に自信をなくして、途方に暮れたような表情をしたリーゼルに、ハイデマリーはふふっと笑いかけた。

「ねえ、リーゼル。特別に答え合わせをしてあげるわ。あのね。わたくし、ロットナー侯爵には、どちらかといえば感謝しているのよ」「……なんですって？」

ますます話が見えない。

リーゼルが整った眉を寄せると、ハイデマリーは対照的に穏やかな笑みを浮かべて、すっとソファから身を起こした。

「わたくしに掛けられた嫌疑。魔族の生き残りと同じ、その子を宿

した。それはね　　真実なの」

「……………は？」

つい素の声で答えてしまったリーゼルに「やだわ、低い声」と朗らかに指摘しながら、ハイデマリーは優雅に身をかがめる。

そうしてチェス盤に手を伸ばし、艶やかな黒の駒を拾い上げると、完璧な形の唇でキスを落とす。

「驚くことではないでしょう？　だって、もともと私はそういう触れ込みでこの監獄に来たわけじゃない。あなただって、ほかの皆だって、エルマを魔族の子と半ば信じて接していたはずよね」

「いえ、それは……………まさに『半ば』というか、半信半疑というか……………」

エルマの図抜けた才能に、人ならざる要素を感じることはしばしばあった。が、それ以上に突き抜けてしまった師匠たち、もとい「家族」がいたため、「人間の身でもこれくらいのことではできないのだな」とも思っていた。

どのみち、人の道から外れた者たちが集う監獄において、エルマが魔族の血を引いていようがいまいが、そんなことは些事ではしかなかった。

だからリーゼルたちは、エルマの本性を追及しようなどとは思いませんでした。

それをもごもごと指摘すると、ハイデマリーは「まさに」と頷いた。

「まさにそれこそが、わたくしの望んだことだったの」

「なんですって……………？」

「木を隠すなら森の中。人外を隠すなら 人の道を外れた者たちの中に、ってね」

彼女は、愛おしさを感じさせる手つきで、黒の駒を撫でた。

「エルマの父親はね、魔族の最後の生き残りだった。魔族なんていう恐ろしい名前がいけないのね。彼自身は、そこらの人間の男よりずっと優しく、穏やかな男性だったわ。魔族というだけで幼いころから蹂躪され、息を潜めて生きてきた……少々器用で、力持ちなだけの、ただの男性だったわ」

人ならざる者。

脅威たる存在。

その本性にかかわらず、魔族であると判明すれば、異端だと退けられ石を投げられる。

愛した魔族の子を宿したとき、ハイデマリーは喜びとともに、我が子に降りかかるだろうその悪意を恐れた。

そして思いついたのだ。

頑強な揺りかごを確保することを。

異質な者たちの中に異質な我が子を隠し、「普通」の愛情を注いで育て上げることが。

ハイデマリーは、ギルベルトにちらりと一瞥をくれると、遠い昔のことを思い出したように微笑んだ。

「女ひとりが監獄を掌握しようだなんて、無謀だと思つてしょう？ けれどわたくしにはギルがいた。心優しく英雄がね。ギルは、エルマの父親 魔族というのが単に人間に虐げられた存在だと気付

くと、剣を下ろして友誼を結び、彼が死を迎えたときには、代わりに妻の面倒を見るとまで宣言してくれたわ。……もつとも、そのせいでギルは英雄の名を奪われたわけだけれど」

「……は。そういう、ことだったの」

脛に傷持つ者同士、あえて深くは踏み込もうとはしなかった過去。はじめてその詳細を語られて、リーゼルは曖昧に頷いた。

ハイデマリーは「ええ」とだけ答えると、再びチェス盤に視線を落とした。

「愛情深い、そして独特な『家族』に囲まれて、おかげでエルマは自分を異質だと思うことも、迫害されることもなく過ごしてこられた。完璧な揺りかご。満足だったわ。わたくしを監獄送りにした王だか宰相だかには、感謝したくらいだった。けれど、ルーデン王が崩御したと聞いたとき、気付いてしまったの」

美しく紅を引いた唇から、悲しそうな吐息が漏れた。

「富と権力に身を固めた王でさえ、寿命には勝てない。親は、子どもよりも長くは生きていられないのだと」

あまりに当たり前の事実。

けれど、常識からかけ離れた場所で暮らしを積み重ねているうちに、すっかりそのことを忘れてしまっていた。

もし自分が死んでしまったら、きっとこの揺りかごは、「家族」の誰かが引継ぎ束ねる。

けれどその人物も死んでしまったら、エルマはどうなる？

人生の大半を過ごした後いきなり俗世に放り出されて、そこに混じってゆこうと足掻くのか。

それとも、家族の誰もいない揺りかごで、ひっそりと息絶えてゆくのか。

そのどちらの未来も、ハイデマリーは娘に許したくはなかった。

「それにあの子、なにしろ【傲慢】でしょう？ 他人を深く理解しようとはしないし、自分の持つ物差しが絶対のものだと思いついでいる。わたくしたちがいびつな愛と、価値観を注ぎ込みつづけたからだわ」

家族の情は注いだ。過剰なほどに。

けれど、一方的に愛されすぎる環境は、彼女から他人への興味を奪った。

そしてまた、家族の愛は捧げられても、男女の情や、友情を注げる人物は、この監獄内にはいなかった。

手探りしながら関係を築くこと。

愛の優しさだけでなく、恐ろしさや煩わしさを知ること。

自分の「普通」が他者の「普通」とは異なるのだと理解すること。

それらはやはり、どうしても、揺りかごの外でしか学べないことだ。

エルマという人間が完成してしまっただけでは遅い。

今のうちに彼女を親元から放し、この監獄とは異なる「愛」や「普通」を学ばせて、人の輪に溶け込ませる。

そう決めたのだ。

「身勝手とも、浅はかとも、どう罵ってくれても構わないわ。けれ

ど、それがわたくしの考えつく最善だった。あの子をこの監獄から放ち、彼女が無事、人々から受け入れられることをただ祈り」

ハイデマリーは、黒の女王の駒を、チェス盤の真ん中にとんと置く。

「そうしてわたくしは、賭けに勝ったわ」

それから、ずっと沈黙を守っていたギルベルトに向かって、優雅に腕を差し出した。

「待たせたわね、ギルベルト。わたくしの賭けはこれでおしまい。エルマの巣立ちを無事見届けられたから、もう、思い残すことはなにもないわ」

告げた瞬間、ギルベルトがはっと息を呑む。

彼はまじまじとハイデマリーを見つめた後、囁くように問うた。

「……ハイデマリー。では……」

「ええ。あなたの求婚を受け入れる」

立ち尽くしたまま、相手の腕も取れずにいるギルベルトのために、ハイデマリーは自ら一歩近づき、骨ばった彼の手にそつときゃしゃな手のひらを重ねた。

「十五年よ。……きっと彼も、許してくれるわ」

触れ合った肌の温度を確かめるように、そつと手を持ち上げて、甲にキスを落とす。

まるで長年連れ添った夫婦のような、自然な愛情の滲む仕草だっ

た。

会話に置いてきぼりを食らったのは、リーゼルである。

彼は、穏やかに微笑むハイデマリーと、感極まって言葉を失っているギルベルトを交互に見つめながら、「え？ え……？」と手を髪に差し込んだ。

「なにそれ……あんたたち、とつくの昔にデキてたんじゃないの？
え？ なに？ っていうことは、ギル、あんた、自分の女でもな
かったマリーのために、この監獄の掌握に協力してたってこと？」
「ああ」

生真面目なギルベルトは、おそろおそろハイデマリーを抱きしめながらも、神妙な顔でリーゼルの解説してくれた。

「俺はマリーに一目ぼれだったが、そのときすでに、彼女は友の妻
だったからな。友の死後も、やはり友への義理があつたし、彼女も
また母親であることを優先したいと言っていたから、エルマが一人
前になるまでは、と話し合っていたんだ」

「引き延ばして逃げ切るつもりだったんだけどね。十五年ずっと
この調子なんだもの。いい加減、絆されるわ」

抱擁を受け止めながら、美貌の娼婦が苦笑を刻む。

強く腕に力を籠めてくるギルベルトをそつと宥めながら、彼女は
いたずらっぽくリーゼルの目配せをした。

「ねえ、リーゼル。あなたはわたくしのことを『執念深くて救いよ
うがない』なんて言ったけれど、彼のこの色欲ギルベルトというか、愛情のほ
うが、よほど救いようがないと思わない？」

「……そうね。ギルはあたしたちの中で一番地味というか、真つ当だと思っていたけど、今この瞬間から認識を改めるわ」

常識と道徳心の塊みたいな顔をしておきながら、妻でもない女のために平気で英雄の肩書を捨て、十五年の間、監獄の王の地位に君臨してみせるとは。

リーゼルが呆れて肩をすくめる。

すると、ふたりから処置なしとの烙印を押されたギルベルトが、複雑な顔で反論を寄越した。

「……好ましい女性を、粘り強く手に入れようとすることの、どこがおかしい。愛は監獄の外では称えられるべき美德だし、好きなものを好きでいつづけるといっのは、いたって普通のことだ」

むっとしたような、困惑したような声に、ハイデマリーはくすくすと笑う。

そして、彼の胸に顔をうずめながら、歌うように呟いた。

「だとしたら、シャバの『普通』というのは、なんて難しいのかしら」

30・エピソード（後書き）

これにて完結となります。

最後までお付き合いいただきまして、ありがとうございました。

0・プロローグ(前書き)

4月5日にKADOKAWAエンターブレインさまより書籍化される運びとなりました。

書籍化御礼に、第2部を始めさせていただきます…！

息切れするまでは、連日20時)と、序盤はもしかしたら朝8時(の投稿を目指します。

お付き合いいただけますと幸いです。

0・プロローグ

物憂げな満月の、夜だった。

完全な円を象った月は、青白い腕を地上に向けて差し向けてはいたが、鬱蒼と茂る森の中は、ほとんど闇に沈んでいる。

青年は、蔦性植物に足を取られ、一瞬バランスを崩すと、忌々し気に舌打ちを漏らした。

「邪魔な植物。硝酸で焼いてやろうか？」

いまだ青年期の張りを残した、若々しい声。

理知の色とともに、どこか狡猾さの滲む鳶色の瞳。

ランタンをかざし、森を探索していたその人物は 若き日のホルストであった。

彼は、普段なら悪戯っぽい笑みの浮かんでいる顔に、剣呑な表情を乗せ、周囲をくまなく見回していた。

「エルマ！ エルマー！ どこに行ったんだい？ 出ておいでー！」

それというのも、彼の大切な大切な「妹」エルマが、すっかり日が沈んだというのに、一向に監獄いえに帰ってこないからだった。

「まったく、シャバ慣れしてない【暴食】が連れ出すと、これだから……。エルマみたいに小さくてかわいい子は一瞬で迷子になるから、よくよく気を付けるとあれほど言ったのに、森でかくれんぼだ

なんて……」

独白には、焦りと苛立ちが等しく混ざる。

もちろん、苛立ちのすべては、監獄を総動員して探索救助をさせることになってしまったエルマにはなく、だって、子どもが本気でかくれんぼをするのは、とても健全なことだ、その保護監督を怠り、おめおめと彼女を見失ってしまったイザークへと向かっていたのだが。

ハイデマリーが監獄を掌握して以降、ホルストやモーガン、男装時のリーゼルといった「一見一般的な」容貌のメンバーは、日常的に脱獄し、買物や情報収集を楽しんでいた。

イザークはあまりに目を引く巨漢ぶりから、滅多にシャバには下りないのだが、徐々に森で身体を動かしたいというので、たまにはとエルマの相手を任せてみれば、とたんにこれだ。

おかげで、エルマの保護者を自任するホルストたちは、かれこれもう三時間以上も、エルマを探して森をさまよっていた。

キィ……ン。

と、ホルストの足が、枝と枝の間に張り巡らされていた糸に触れてしまい、硬質な音が辺りに響き渡る。

音の正体と、その奥に広がる光景を認めて、ホルストは眉を寄せた。

「……フレンツェルにまで出てきちゃったか」

フレンツェル領。

ヴァルツァー監獄を擁する北西の海岸に接した、ルーデン边境の

土地だ。

冬には雨が続くが、一年を通じて気候は穏やかで、ワインの名産地として知られる。

しかし同時に、瘴気を帯びた海と魔獣の棲む森に囲まれた厳しい土地でもあり、この、国境沿いに張り巡らされた「鳴鎖」は、そこに住む人間の涙ぐましい生活の知恵のひとつであった。

磨いた鉄の棒が打ち鳴らされるときの高い音が、魔物を払うというのである。

「……ま、着眼は悪くないと思うけど。エルマが侵入しちゃってるかもしれないって時点で、効果は推して知るべしって感じだよな」

獄内では、【色欲】と【憤怒】しか知らない、エルマの出生の秘密。

しかしホルストは、その出産に立ち会い、かつ、その後も頻繁に彼女の診察をしていたがために、エルマの体質が常人とは異なることを、薄々理解してしまっていた。

たとえば、膂力。

たとえば、知力。

免疫構造、強靱な皮膚、異様な学習能力。

エルマのそれは、今までにホルストが見てきたどの人間とも、かけ離れている。

「全然いいんだけどね、元気でかわいければ、それで」

ホルストは、軽く鼻を鳴らしてそう片付ける。

かつて暴漢に襲われてから、ずっと寝台と魔石に繋がれていた妹を見ていた彼からすれば、自らの庇護する少女が健康で頑丈すぎる

という事実は、なんの問題もなかった。

問題なのは、フレンツェル領のほうだ。

「魔境を拓きし、聖酒の守り手　ね」

神に捧げる飲み物とされる、ワイン。

かつて魔族が栄えていた時代にもその干渉を跳ね除け、今も魔物を躲し、聖なるぶどう酒を造り続けている彼らは、おしなべて信念深く、魔に連なるものを毛嫌いしていると聞く。

そんな場所にエルマが迷い込み　あげく、その「本性」に気付かれでもしたら、どうなるか。

無意識に目を眇めたホルストは、そのとき地面に転がったなにかが、きらりとランタンの光を跳ね返したのに気付いた。

駆け寄り、拾い上げる。

蝶の形に宝石を嵌め込まれた、繊細な髪飾り。

王都でもなかなか見ないだろう上等なそれは、先日エルマの四歳の誕生日に、おしゃれにうるさい【嫉妬】がプレゼントしたものであった。

ふむ、と眉を寄せて、ホルストは思考を巡らす。

ついでに視線も巡らせて、すぐそばの登りやすそうな木、そのふもとに落ちた食べかけの木の实までを認めたとこで、彼は深々と溜息をついた。

幼いエルマの行動傾向を知悉した彼が推測した内容は、こうだ。

恐らく彼女は、その四歳とは思えぬ優れた身体能力と知恵を発揮し、【暴食】の探索を躲しながらここまでやってきた。

しかしながら、あまりに長い間見つからないので、退屈してしまった。いや、不安になったのかもしれない。

そこで彼女は、「迷子になったら、高い場所で動かず待機」、というホルストの教えを思い出し、森の中でもひとときわ高いこの木に登り、ついでにお腹が空いたのか、木の実をもいで食べた。

そうして足をぶらぶらさせながら、優れた視力でぐるりと周囲を見下ろし

(視界に入るとしたら、闇に擬態している監獄よりも、火を灯しはじめただろう頃合いの、民家のほうか)

ホルストは、独自に開発した小型の望遠鏡を取り出し、ふんと鼻を鳴らした。

なだらかな葡萄畑の向こう側、曲がりくねった道の遙か先に、一等大きい灯りが見える。恐らく、領主の館であろう。

「……これでエルマになにかあったら、この土地と【暴食】を焼き殺してやるけど」

不安をそんな軽口でごまかし、ホルストは軽く唇をゆがめる。

それから、キーンと音を立てている鳴鎖をひよいとくぐり、迷いのない足取りで森を抜けていった。

その後ろでは、鉄の立てる音に怯えて踏み込めぬ魔蛾が、恨めしそうに羽ばたきを繰り返していた。

0 プロローグ（後書き）

なお、書籍情報詳細につきましては、活動報告をご確認いただけますと幸いです。

1. ゲーム開始

「【貪欲】。ねえ、【貪欲】ったら」

優雅な声に繰り返し呼ばれ、ホルストはゆるりと瞼を押し上げた。

「……………」

豪華なシャンデリアに、贅を凝らしたタペストリー。

繊細な細工を施した大テーブルと、完璧に配置されたティーセット。
ト。

なんの変哲も無い、いつもの「獄内」だ。

ホルストが、くあ、とひとつ欠伸を漏らすと、斜め向いに座っていたその女性は呆れた声を上げた。

「んもう、せっかく珍しく【怠惰】が紅茶を淹れてくれたというのに、冷めてしまつてよ?」

ネグリジエのようなドレスをしどけなく着崩し、艶のある銀髪を肩に流した、美貌の女性。

傾国の元娼婦にして、この監獄の女王、ハイデマリーである。

「よいのですよ。本日用意したハニッシュは、冷えても美味しい銘柄ですから」

今日も今日とて、名家の執事のような出で立ちをした元詐欺師・

【怠惰】のモーガンは、穏やかに笑みを刻む。

その横では、彼らの仲間たちが、すでに思い思いの格好で紅茶のカップに口を付けていた。

「なあに？　また徹夜で実験でもしてたの？」

細く整えた眉をからかうように上げてみせたのは、洗脳を得意とする元誘拐犯の【嫉妬】・リーゼル。

「なにやら、不穏な寝言が漏れていたが」

ハイデマリーの隣で足を組み、印象的な蒼い瞳を興味深そうに向けてきたのは、元勇者の【憤怒】・ギルベルト。

そして、会話に特に加わることなく、ひたすらスコーンにクロテッドクリームを塗りつけて貪っている巨漢が、【暴食】のイザークだ。

「……いや、ちょっと。十年くらい前だったかな。【暴食】を焼き殺してやるのかなと思った出来事を思い出してみたい」

「む？」

エルマ迷子事件は、彼の中ではすべてイザークの責任として処理されている。

あのとときの焦りと苛立ちを思い出し、腹立ちまぎれに呟くと、イザークは怪訝そうに顔を上げた。

その、凶悪でありながら朴訥とした　ひどい矛盾だ　面構えに、ホルストはふんと鼻を鳴らすと、意識的に話題を変えた。

「ま、いいよ。過ぎたことだ。　それよりこのソファ、最近クツ

シヨンを替えたりした？ やけに寝心地がよかつたんだけど」
「まあ、今頃気付いて？」

ソファの感触を確かめるように掌を押し付けていると、向かいのハイデマリーが呆れたような声を上げる。

それから彼女は、繊細な鎖骨を見せつけるようにして肩をすくめた。

「前に言ったじゃないの。ちょっとした『臨時収入』があったから、獄内の家具を刷新するって」

「臨時収入？」

首を傾げれば、今度はリーゼルが呆れの溜息を漏らす。

彼は、女性のように美しく整えた手をひらりと広げ、処置なしと
いうように告げた。

「だめよ、マリー。この子、クレメンスちゃんの入獄に伴うあれこれがあった間、ずっと実験室に籠ってたもの」

「クレメンス……？」

耳なじみのない名前に眉を寄せ、なんとか記憶を手繰り寄せる。

明晰な頭脳は、さほど興味のない情報でもすぐに引っ張り出してくれた。

クレメンス・フォン・ロットナー元侯爵。

王族暗殺未遂、および冤罪による人権蹂躪のかどで、つい先日監獄送りになった元宰相だ。

それがなぜ臨時収入に結びつくのか、と、寝起きの頭でほんやりと考えていたら、それよりも早くモーガンたちが説明をしてくれた。

「このたび即位した新王は、元侯爵が冤罪を着せてきた獄中の『被害者』に、丁寧にも手紙を寄越してくれましてね。恩赦で釈放し、その後の生活にも便宜を図るつもりだが、いかがなものだろうか、とお伺いを立ててくださったので、我らが女王の意見を仰いだのですよ」

「お気持ちありがたいけれど、今さら釈放なんてされても困ってしまうじゃない？ 楽しい我が家は、もう『ここ』にあるわけだし、シヤバに戻るつもりなんてさらさらないから、その旨上手く伝えてちょうだいと【怠惰】に一任したのよ」

すると、モーガンは元詐欺師の肩書に恥じぬ働きを見せた。

すなわち、「厚意には深く感謝するものの、もはや失われた年月は戻らないし、新王の御代に影を落とすのも本意ではないため、監獄の近くにひっそりと庵を結び、つつましく生活したい。ついてはその費用だけ手当てしてもらえるとありがたい」といった内容を、実に嫌味のない、説得力溢れる表現で伝えたのである。

端的に言えば 慰謝料の請求だ。

「……いくらもらったの？」

ちよつと気になったホルストが尋ねてみると、モーガンは穏やかに笑って、指を三本立ててみせた。

肝心の桁数は聞き出せていないが……いや、聞かなくてもわかる。相当な額を巻き上げたのだろう。

「……さすがだね、【怠惰】」

「いえ。ルーデンの新王が情け深い方だったというだけで。ついでに彼は、好きにしてよいとの手紙とともに、贈り物までしてくださいさ

いました」

「贈り物？」

「ええ、おもちゃです　無聊の慰みにとのことで」

それこそが、猿轡をかまされ、粗末な衣に身を包んだ、クレメン
ス・フォン・ロットナーだったのだ。

通常、高貴なる身分にあつた者は、いくら囚人とはいっても、相
応の人権が保障される。

しかしフェリクス王は、彼を「好きにしてよい」と被害者の巢に
投げ入れることで、怨嗟の緩和を図つたのだ。

目を抉ろうと、腕をもごうと、好きにせよと書き添えて。

実に如才なく、意趣に富み　そして冷酷なやり口だ。

だが、ホルストは面白そうに、「へえ」と眉を上げただけだった。

「で、そのクレメンスさんとやらはどこに？　姿が見えないようだ
けど」

「それが　」

モーガンはちょっと困つたように笑つて両手を広げる。

「ここに送られてきた時点で、あまりに愉快的仕上がりになつてい
たので、【嫉妬】に治療をしていたのですよ」
「なにそれ？」

ホルストの問いには、優雅に紅茶を啜つたりゼル本人が答えた。

「なんかね、あたしの優秀な教え子がちょっと洗脳しすぎちゃった

みたいで、頭のねじが数本飛んでたのよね。体は始終左右にスイングしてるし、ひも状のものをみると興奮するしで、マリーが彼を一目見るや『こんなおもちゃ、いらないわ』って不機嫌になっちゃって。おかげであたしが駆り出されたってわけ」

リーゼルは、しょっちゅう些細なことでハイデマリーに突っかかるが、基本的には彼女と仲良しだし、頼られるのが好きなようだ。よくわからないが、それがいわゆる「女子のノリ」というやつなのだろう。

ホルストは「ふうん」と頷き、受け流した。

「無事治ったの？」

「当然。緊急時にはあたしの命令に従うよう、洗脳もばっちり。まあ、なぜかごく一部の情報について話させようとすると、とたんに口が重くなるのが少し気になってはいるけど」

人差し指を唇に当てながら眉を寄せるリーゼルは、ちょっと不満気だ。

彼の洗脳は、「すべて、苛烈に、さりげなく」が基本。

対象のことはすべて把握したうえで、自死せよとの命令すら従うように徹底的に支配し、かつ、通常時は本人にもそれを悟らせないというのが彼の美学である。

にもかかわらず、「話せ」と命じてみせても抗おうとする気配がまだ残っている。それがリーゼルには不満なのだった。

「あら、珍しいこと。【嫉妬】でも洗脳に失敗するなんてことがあるのかしら？」

「言葉の選び方には気を付けなさいよね。誰が失敗したつていうのよ。対象領域によって隷属の度合いが異なるのは当然のことだし、あたしのチェックが人一倍細やかだから、常人では気づかないその差異に気付ける、っていうだけでしょ。言っとくけど、本人が洗脳された記憶どころか、あたしに会った記憶すら持たないほどに意識を操るっていうのは、相当繊細な技術なんですからね」

女友達にしてライバルでもあるハイデマリーに揶揄され、むっとしたリーゼルは、ぴしゃりとやり返す。

それから滑らかに、クレメンスの現在の様子に話を戻した。

「ふふ、実際、ずいぶんしおらしくて、知的な、いかにも聖職者っぽい感じになったわよ。ちよっと【怠惰】にタイプが似てるかしら……うふん、でも、腹の底の黒おい感情がちよっぴり滲んじやってるあたり、【怠惰】よりもずっと可愛げがあるわあ」

「失礼な。私から溢れる可愛げを認めていただけはないとは」

リーゼルがにやりと笑うと、横でモーガンが大仰に胸を押さえてみせる。

静かにやり取りを聞いていたギルベルトは、くすりと笑みをこぼし、

「たしかに。ポーカーフェイスは【怠惰】のほうが上手そうだな。彼……クレメンスは、静かに脱獄の機会を窺っている様子だった。そのうち、我々の寝首を掻こうと画策でもしはじめられるかもしれない」

そう言いながら、傍らに座すハイデマリーの髪を一筋掬い上げた。

「しばらくは、ここも賑やかになりそうだ」

彼は、愛する女性に娯楽が提供されたことを、歓迎している様子である。

「あら、そうかしら」

ハイデマリーは、そんな献身的な恋人のために、美味しそうに焼かれたパイを取り分けてやろうと、ナイフを手に身を乗り出す。

が、ふとなにかに気付いたように顔を上げた。

ピン……ッ

ついで、なんのためらいもなく右手を振るい、背後に向かってナイフを投擲する。

丁寧に磨かれた銀の刃は、がっ……と鈍い音を立てて、部屋の奥の扉に突き刺さった。

「……でも、ギル」

彼女は、目を伏せたままちらりと扉を振り返り、ゆっくりと唇を引き上げた。

「なりそう、ではなく、『なった』のほぅが、正確のようよっ」

ナイフの勢いに圧されて、ゆらりと開いた扉のその向こう。

そこには、すぐ目の前に刺さったナイフを凝視し硬直しているクレメンスの姿があった。

「………な」

「盗み聞きなんて寂しいわ。どうぞ遠慮せず、中に入って」

動揺する元・老侯爵を笑顔で封じ、ハイデマリーは優雅に片手で室内を指し示す。

動けずにいるクレメンスを、イザークに合図して強引に部屋へと引きずり込むと、彼女はそっと笑みを深めた。

「ようこそ、クレメンス。わたくしたちは、あなたを歓迎するわ」

蜜を溶かしたような甘い声で、告げる。

警戒しながらも、悲鳴を上げたり腰を抜かしたりしない相手に、彼女は満足そうに目を細めると、「紅茶をどうぞ。ゆっくりおしゃべりでもしましょう」と、席を勧めた。

「……私を、いつたいどうするつもり」

「どうか肩の力を抜いて。ここはとても静かで、快適で、退屈な場所。少しだけ、わたくしたちの相手をしてくださいな」

低く問うたクレメンスに、ハイデマリーは娼婦そのものの蠱惑的な視線を投げかける。

彼女は、辛うじて平静の表情を保っているクレメンスをとっくり見つめ、それから「そうねえ」と小首を傾げた。

「カードの類は、お好き？」

なにやら、ちょうどよい遊びを思いついたらしい。

彼女の決定は、この監獄の掟にして法律である。

ハイデマリーが笑みを含んだ視線を超越すと、ただそれだけで、物憂げに紅茶を楽しんでいた男たちはゆらりと身を起こした。

詐欺師が、誘拐犯が、マッドサイエンティストが、狂戦士が、堕ちた勇者が、それぞれ真意を窺わせない表情で、じっとクレメンスを見る。

「……………」

気圧され、つい言葉を失ってしまった彼に向かって、ハイデマリは「さあ」と優雅に微笑みかけた。

「新しいゲームを始めましょう」

2・「普通」の余暇の過ごし方(1)

厨房とは戦場だ。

それが、王宮付きの、数百人分の食事を一度に整えねばならぬ厨房であるなら、なおさらだ。

その朝も、ルーデン王城の広々とした調理場では、男たちが忙しく包丁を振るう音と、フライパンを揺する音、そしてそれをまとめる料理長の怒号が響き渡っていた。

「おい！ サラダ班！ トマトは、均等な、大きさに、切れ！ シチュー班、胡椒、弱い！ パン班！ 厚み、変えるな！ 野郎ども、本気出せ！」
「はい！！！」

モンテーニュ出身の料理長・ゲオルクが、片言のルーデン語で指令を飛ばせば、男たちは汗の粒を浮かべながら、全力でそれに答える。

その間にも、大窯では火が渦巻き、調理台ではざつと音を立てて野菜が洗われ、空中を滑るように皿が渡されと、厨房は完全なる修羅場の様相を呈していた。

「おい、時間が、ねえぞ！ 七の鐘まで、あと、少しだ！ おい、そこ！ ちんたら、バター、量るな！ そこ！ 火が弱い！」
「ヤー！」

「ちつ……！ だから、卵をいちいち両手で割ってんじゃねえよ！ てめえ、ままごとを始めたばっかの二歳児か！？ ああ！？ おい、ソーセイジもちんたら切ってんじゃねえよ、んなもん手元を見

ず、切れんדרוּףが！」

『ウイ！』

苛立ちのあまり、とうとう母語が出始めたゲオルクに、料理人たちも全力でミートしに行く。

朝食開始の七の鐘を待ちわびる、腹をすかせた使用人たちというのを、常に彼らは恐れている。

しかし、今この瞬間は、ゲオルク料理長の機嫌を損ねないのが先決だ。

この、己の職分にかけては妥協を許さぬ料理長は、まったく躊躇いなく人を怒鳴りつけ、ときに手だつて出る御仁だから。

と、焦りが災いしてか、料理人の一人が、量っていたバターを秤から下ろしそこね、思い切り床にぶちまけてしまった。

『おい、なにやってる！』

「ひい！」

食材を粗末にすることを、この料理長はなにより嫌う。

しかも間の悪いことに、バターの大容量はすでに補充班が回収して、ここから離れた倉庫へと持ち去ってしまったために、「床に撒いてしまったから、はい、すぐに新しいもの」とはいかないのだった。

このままでは、本日の朝のメイン、ゲオルクの得意料理であるオムレツの味が、大幅に変わってしまう。

粗相をした料理人はざつと青褪めた。

「す、すみません……！！」

もうだめだ。

故郷から出てきてはや三年。厳しい下積みを終え、ようやく王宮の厨房で食材に触れる身となったが、きつと今日を最後にその日も終わる。

いや、そんなことはどうでもいい。

彼はこの、厳しくも尊い職務を心から愛し、敬意を払っていた。数百人の舌と胃を満たしきる仕事、そしてそれを導いてくれる料理長を尊敬していたのだ。

なのに、自分はそれを妨げてしまった。

未熟ゆえに、どこまでも責任感の強い彼が、くしゃりと顔をゆがませる。

が、そのとき、

「おはようございます」

ふいに厨房に凜とした声が響き渡り、彼はぱつと背後を振り返った。

「侍女、エルマ。僭越ながら、厨房が混戦状態とお聞きし、助太刀に馳せ参じました」

侍女の制服である黒いドレスにエプロン姿、朝陽を弾く分厚い眼鏡。

長い黒髪をきつちりと団子に結わえ、感情を窺わせぬ表情で佇むエルマである。

「エルマさん！！」

きらりと陽光を跳ね返した眼鏡侍女の登場に、誰もが戦女神の降

臨を重ね見た。

「エルマさん……！ エルマさん、エルマさん！ エルマさんんんん！」

「ありがとうございますますうううう！ 助けて……助けてください
いいいい！」

既に何度もこの侍女に救済されている料理人たちは、恥も外聞もなく救いを求めて腕を伸ばす。

エルマはそれを滑らかな動きで躲しながら厨房に踏み入ると、まずはゲオルクに挨拶を寄越した。

「おはようございます、料理長。また、ここでお手伝いさせていた
だいても？ 今日朝から実に豪華な献立とお見受けしますが」

「おう、いつも、悪いな。今日は、前に評判だった、オムレツをと、
思ってたんだが……、ちと、目玉焼きあたりに、品書きを、変える
かもしれん」

外部者の登場に少しだけ苛立ちを納めたゲオルクは、しかしちらりとバターが落ちた床を見て眉を寄せる。

エルマは「ふむ」とそれを目で追うと、ついでこくりとひとつ頷いた。

「ですが、すでに卵のいくつかは割られているではありませんか。
ついでに言えば、私は目玉焼きよりもオムレツに熱き一票を投じた
い所存です。ですので」

少々、お手伝いさせていただきますね。

くい、と彼女が眼鏡のブリッジを持ち上げた次の瞬間、それは起

こった。

ぶわっ！

厨房に一陣の風が走り抜け、調理台で山をなしていた卵が、一斉に宙に浮かび上がったのである。

「な……っ!?」

実際にはエルマが卵を一斉に投げ上げたのだが、あまりに素早い動きのため腕が視認できず、もはや超常現象のように見える。

ゲオルク以下、周囲の料理人がぎょっとしたが、エルマはそれに構わず「はっ！」と短く気合いを入れ、飛び上がった卵の間に差し入れた手をぱぱぱぱ！と左右に振ってみせた。

カカカカカカカッ！

エルマの手に当たった卵は、まるで宿命の伴侶を見つけたとでもいうように、勢いよく隣の卵とぶつかってゆく。

互いに熱き抱擁を交わした卵たちはその場でばかりと割れ、次々とその中身を落下させていった。

それを、いつの間にか巨大なボウルを掲げたエルマが受け止める。彼女はその、どれだけの重量があるのかもわからないほどのボウルに、なぜか巨大な棒を突き立てると、

ぐんっ！

まるでボウルを傘にするように持ち上げ、回転させはじめた！

「な……っ、泡だて器でかき混ぜるんじゃない、ボウルのほうを回転させるだど!?」

「っていつかあの棒、今どこから出てきた!?」

観衆と化した料理人たちがどよめく。

が、エルマは際立った集中力のもとそれを黙殺すると、わずか数秒で卵の攪拌を終えた。

ちらりと見えたボウルの中では、すでに黄身と白身がまんべんなく混ざり合い、とろりと黄金の輝きを呈している。

彼女はそれを丁寧な手つきで調理台に置くと、ついでソーセージとトマトを隣の台から確保した。

そして、

「はっ!」

気合い一閃。

卵同様、食材を宙に投げ上げると、いつの間にか両手にサーベルのように握りしめた包丁を繰り出し、それらを切り刻んでいった。

とぽぽぽぽぽぽ!

髪一筋ほどの狂いもなく、均一に切られたソーセージが、トマトが、母なる海に回帰するがごとく、卵液の中へと飛び込んでゆく。生命を秘めた黄色い海は、食材たちの帰還を、飛沫ひとつ立てることなく、軽やかに受け入れた。

「ソーセージと、トマト入りのオムレツ……!」

やがて卵液を巨大なフライパンに注ぎ入れはじめたエルマに、真意を悟った周囲が息を呑む。

ふんわりと焼き上げた卵、というだけでも贅沢なのに、さらにそこに、ルーデン人の大好物のソーセージが加わるとは。

肉の旨みと、じゅわりと焼き溶けたトマトの甘みが織りなす豪華なハーモニーを想像するだけで、すでに涎が出そうである。

しかし、エルマの行動は、その想像のもう少し先を行っていた。彼女は、すっと、神妙な表情で布に包まれた半月状の物体を取り出したと思うと、

しゃしゃしゃしゃしゃしゃ……！！

それを、くつくつと火を通してゆくオムレツの中に、擦り入れていったのである。

卵液の上に、雪が降る。

肉と野菜の旨みを閉じ込めた黄金色の海に降り注ぎ、液に触れるやとろりと輪郭を溶かしていく、その雪の正体は

「チーズ……！！」

「アーベライン牛・モーリッツの、渾身のチーズでございます」

誰かの上げた叫び声に、エルマは淡々と答えた。

やがて、具材や卵に火が通つたのを確認すると、彼女は躊躇いのないダイナミックな手つきでそれを巻き上げてゆく。

見る間に、巨大な具たくさんオムレツが出来上がった。

「料理長。どうぞご確認を」

序列をちゃんと弁えているエルマは、彼女もだいぶその手のことを学習してきたのである。出来上がったオムレツにナイフを入れ、ひと切れゲオルクに差し出してみせる。

すうっと切り取られたとたん、チーズと溶け合った黄金色の断面がとろりと揺れるのを見て、無意識にゲオルクは喉を鳴らした。

固すぎず、かといって緩すぎない、完璧な火の通り方だ。

熱されて色を増したトマトと、光沢のある卵の黄色、そしてところどころ混じるチーズの白やソーセージの茶色といった、色とりどりの見た目も食欲をそそる。

じっくりと検分し、口に含んでみて、ゲオルクは一瞬目を見開いた。

肉から滲み出た塩気とうまみ、トマトから広がる酸味と甘み、そしてチーズのコク。

それら全てが渾然一体となり、失われたバターと同等、いや、それ以上の味わい深さがもたらされていた。

（なるほど……具を加えることで、バター分の風味をカバーしたか）
ついでに、下っ端料理人のカバーも。

「相変わらず……見事だ。悪いな、毎回のよう」

その圧倒的技量もさることながら、頻繁に助太刀してもらって

ることに引け目を感じて、ゲオルクがつぶやくと、エルマは淡々と「いえ」と答えた。

「困っている方、それも日頃お世話になっている方を手伝うのは、至極『普通』のことですから」
「……………」

真剣な声で言い切られて、ゲオルクはちょっと唇の端をひきつらせた。

べつに、彼女の発言に嫌味を感じ取ったからではない。

そうではなくて、

「ところでどうでしょう、料理長。今回は、前回『気圧で卵を割るな!』と叱られた学びを活かし、きちんと手や調理器具を使って料理をしたのですが」
「……………」

ひたむきな視線　いや、眼鏡であまり見えないのだが　とともにも、エルマがそんなふうにあくまで水を向けてくるのが、わかっていただけである。

「あーっと、なあ……………」

ゲオルクは無意識に、コック帽の位置を直した。
この局面を滑らかに切り抜けるのは、祖国ではそれなりに女慣れしていた彼をしても、かなりの難易度だったのだ。

そう。

エルマは先日ルーカス王子以下、ゲオルクたちに引き留められて

からというものの、やたら自分は「普通」であるとの言質を取りにかかってくるのである。

理由は簡単。

せっかくダイナミック里帰りを決めようとしていたところを妨げられ、不機嫌になっていたエルマを、フェリクスが

「君、まさか自分が母君からの課題を無事こなせたとも思っているの？ 自分が『普通』だとも？」

と挑発することで、彼女に残留を決意させたからだ。

相変わらず、「普通」のなんたるかをよく理解していない彼女は、ひとまず一定数の人数から「普通」だと評価されればよいだろうと考えたらしく、以降なにかと周囲に絡んでは、こつこつと迫ってくるのである。

「これくらいなら、さすがに『普通』ですよね？」

と。

「あー……」

ゲオルクは視線を逸らした。

彼は成り行き上、エルマが監獄出身であることや、どうやら「普通の女の子」というものを知りなさい」と母親に言い渡されたいことも知っている。

ただ、まさかそれが、「魔族であっても『普通の』人間としてやっていきなさい」という意味などとは思わぬ彼は、額面通り、「監

獄出身であっても、『普通の』女の子としてやっていきなさい」という、一般的な親心あふれる言いつけだと思いつけていたのである。

不遇の出自であっても、親の言いつけを守り普通たろうとする姿は、いじらしい。

それに、モンテーニュ人は美人の味方だ。できるなら、彼女の望む通り、「おう、普通だな！」と言ってやりたいゲオルクではあるのだが

(……いや、そこまで人間捨てることはできねえ……！)

指先ひとつで数百の卵を割り、演武のように包丁をふるう彼女のことを、部下の前でそんなふうの評することは、到底できないのであった。

「あー……、いやあ、なんというか……普通というよりは、少し……わりと……かなり、異常、かね……？」

「え……？」

「いや……ほら、その……なんだ、卵を割る、方法はだいぶ『普通に近づいた、気もするが、その、……速度とか、だな』」

もとより片言のうえ、さらに慎重に言葉を選んでいるものだから、かなりのぶつ切りになる。

「……………」

物言わぬ眼鏡ごと顔を俯かせてしまったエルマに、ゲオルクは慌てた。

付き合いの深まってきた今ならわかる。

これは不機嫌のサインではない。彼女はショックを受けているのだ。

「あー、いや。その……」

なぜだ。

なぜ人を称賛するのに、こんなにも冷や汗をかかねばならない。

王侯貴族の前で皿を割った時でも堂々としていたゲオルクが、すっかり固まってしまったそのとき

「あ、いたわ！ エルマ！」

再び厨房の扉が開いて、軽やかな声が飛び込んできた。

少し癖のある金髪に、猫のような翠の瞳。

エルマの先輩格の侍女仲間、イレエネである。

彼女は硬直した周囲の雰囲気をもともせず、つかつかと厨房に踏み入ると、まな板に移された巨大なオムレツを見て、ぱっと目を輝かせた。

「まあ、なあにこれ？ オムレツ？ あなたが作ったの、エルマ？」

「……はい。本日の朝食づくりが難航していると聞いたので、微力ながら手伝いをお願いまして」

エルマは傷心のままぼそぼそと答えていたが、イレエネは「まあ！」と顔をほころばせ、試食用のナイフを手に取った。

「料理長、私が毒見役を仰せつかってもよろしくて？ いいですわ

よね！ いただきます！」

言っが早いか、ぱくりとひとくちを放り込む。そして即座に、「んうううう！」と悶えた。

「おいしい！ おいしいわ！ エルマ！ ちょっともうこれ、尋常ならざる美味だわよ！」

「……普通でなくてすみません……」
「なぜ謝るのよ、普通じゃないって、つまり特別ってことじゃない！」

異常、ではなく特別、という言葉に、一瞬エルマは瞳を見開く。しかし、眼鏡に隠されたそれにイレーネは気づくこともなく、なので彼女は、いたって何気なく話を続けた。

「で、エフマ。あなたに伝言ほ託っていふのだけど」

「……イレーネ、食べるか話すかどちらかにしてはどうでしょうか
『っていつかモリモリ試食してんじゃねえよ』」

もしかもしゃオムレツを頬張るイレーネに、双方から突っ込みが入る。

腹ぺこな小悪魔は慌ててオムレツを飲み下し、ついでぺろりと舌を覗かせると、そこから無邪気に爆弾を投下した。

「至急、王の間に来るように。フェリクス殿下 ではなかった、
陛下と、ルーカス王弟殿下が、あなたをお待ちよ」

「……またですか」

大国ルーデンの、その頂点に立つ王と、その弟からの呼び出し。それに対して、ついげんなりとした相槌が漏れてしまうほどには

招集^{それ}もまた、彼女の日常の光景であったのだ。

3・「普通」の余暇の過ごし方(2)

騎士などというのは、舞台に立つ役者のようなものだ。

花形だなんだと持て囃されながら、その実役割も台詞も、舞台には決して上がらない脚本家によって定められている。

本当の支配者というものは、いつだって目立たぬ姿、時には人から蔑まれるような格好をして、暗がりくらがりに静かに佇んでいるものだ。

ルーカスは、義理の兄を見るたびに思うことを、その日も思わずにはいられなかった。

「おやまあどうしたんだい、ルーデンの誇る色男にして武勇の騎士、新王よりむしろ王に相応しいと噂の王弟殿下が、そんなげんなりとした顔をして」

「……心にもないことを」

狡猾な脚本家は、この義兄だ。

即位してからはや一ヶ月ほど。最初の一週間でロットナーを筆頭とする「不都合な」旧臣を肅清し、あっさり自身に快適な権力基盤を整えた後は、眠れる獅子のように日がな情眠を貪っている、フェリクス・フォン・ルーデンドルフ新王である。

彼は、即位時に見せた鮮やかな肅清劇を「ぜんぶ有能な義弟と、その部下のおかげ」というストーリーで誤魔化し、以降は相変わらず愚王の仮面を被っているのだ。

即位式以降、頻繁に招かれるようになったフェリクス私室で、ルーカスは顔をしかめながら腰を落ち着けた。

「それで？ 朝早くから人を呼び立てて、今度はなんのご用です？ 言っておきますが、税滞納領地についての聞き込みも、貴族間抗争への仲裁も、騎士の領分を大きく逸脱してますから。これ以上、『騎士なんだから、不慣れな王の僕を助けてよ』の言い分でこき使われるのはごめんです」

「えー、そんな悲しいことを言わないでよ。民も僕なんかより色男の君に、困り事を解決してもらったほうが嬉しい。僕も楽　もとい、適切な資源配分ができて嬉しい。双方よしのワインウィンじゃないか」

「俺のワインはどちらへ」

ルーカスはぼそつと呟いたが、フェリクスは華麗にそれをスルーした。

「いやあ、それにしても、僕の周囲は有能で、本当に助かったなあ。大抵のことは、君に頼めばたちまち解決するもんね。実に素晴らしい」

「……俺だけならまだしも、あの娘までを巻き込むのはやめてもらえませんか」

精悍な顔立ちが不機嫌そうに顰められ、声が低まる。

そう、このフェリクスは、即位式前夜の騒動とある侍女の有用さを理解してから、隙あらば彼女　エルマを利用しようとしてくるのだ。

彼が、「王直々の命令には、身を粉にして従うのが『普通』のことだよ」などと言いくるめ、彼女にハニートラップもどきを演じさ

せようとした時には、それを察知したルーカスが血相を変え、止めさせたのであった。

隣国の大臣の弱みを握るつもりでハニートラップなど仕掛けようものなら、間違いない、彼女のクオリティなら国が傾く。

エルマを恩赦で世に放つてから二ヶ月ほど。

彼女の異常さを誰より知っているルーカスは、男として　　とい
うより保護者の責任として、エルマに色仕掛けなどさせるわけには
いかないのだ。

結果として、エルマを庇ったぶんが「じゃあ代わりに君が弱みを
握ってきてよ」とルーカスに回されることも多く、ここ最近、彼は
寝る暇もないほどなのだった。

「えー、だってあの娘、君や侍女長が命じ直したものだから、また
無粋な眼鏡で顔を隠してしまったじゃない？　こうでもすれば、あ
のきれいな顔がまた拝めるかなと期待したんだけど」

「そんな理由で傾国の危機を招かないでください。だいたい、あな
たは俺たちを働かせすぎる。……口さがない者や浮き足立った者は、
義兄上を差し置いて俺に接触してくる始末です」

「あはは、だってそれが狙いだし」

即位早々の、分裂を煽る動き。

ルーカスとしては、慎重さを滲ませて告げたくもりなのだが、し
かしフェリクスからはあっさりと返されてしまった。彼は、まだま
だ先王治世時の膿を出しきるつもりなのだろう。

「いいじゃない。第二、第三の逆臣ロベーターがいるなら、早々に見極めて、
処置すべきだ。ふふ、でもまあ、野心的な家臣は往々にして優秀だ
から、『間引き』しすぎないように注意はしなきゃいけないかな」

「……………」

ルーカスは黙って肩を竦める。

この義兄は、狡猾で冷酷で、手段を選ばないが、その根底にある治世方針は、歴代の王よりもよほど健全で崇高だ。

そしてそれが、ルーカスがフェリクスに対して、徹底的に抗う気になれない理由でもある。

自分にできるのは、せいぜい権力の中枢から距離を置くことくらい　しかしそれも、この義兄によって、強引に引き戻されつつあるのだったが。

「失礼いたします」

とそのとき、扉の向こうから丁寧な呼びかけが聞こえ、ルーカスは顔を振り向けた。

許可を得て、先輩侍女のイレーネとともにしずしずと入室してくるのは、厚底眼鏡とひつまめ髪が印象的な、小柄な侍女。

エルマ。

フェリクス被害者の会のもうひとりだ。

今は眼鏡で地味な姿に身をやつしていることもあり、到底彼女が、元侯爵捕縛の立役者にして、現フェリクスの有能な手駒だとは信じられない。

（まったく、毎回思うが、この小柄な身体のどこに、熊を一撃で倒す膂力が隠れているのやら）

広々とした王の私室の入り口でちょこんと佇んでいるエルマを見つめながら、ルーカスはそんなことを思う。

いや、倒したのは熊だけではなかったか。

この前は遙か上空を舞う鷹に豆を投げつけて捕獲していたし、騎士の訓練場に放たれていた巨大な蛇の魔物を口笛ひとつで硬直させていたし。

そういえば、先日夜に侍女寮の近くを通りがかったときには、こつそりと焚き火をして、なにかを炙っている彼女の姿を目撃したのだった。

一瞬で証拠を隠滅されてしまったし、本人も「夏の味が恋しくて、つい」と視線を逸らすだけだったが、あるとき彼女の手に握られた串に刺さっていたのは、ルーカスの気のせいでなければ、クラーケンの触手ではなかったか

(……いや、やめよう)

ルーカスは無理やり思考を切り上げた。

この少女に、常識だとか普通だとか、そういった価値観を持ったまま接するのは危険だ。こちらが疲弊するだけである。

「 侍女イレーネ。ご命令のとおり、侍女エルマを連れてまいりました 」

と、エルマの傍らで頭を下げていたイレーネが、自らはお役御免だとばかり、しずしずと部屋を退出しかかる。

それを、フェリクスの軽やかな声が引き留めた。

「 あ、待ってくれないかな。今回は君にも協力してもらいたいことがあるんだ、イレーネ 」

「 ……私に、でございますか？ 」

「 そう 」

城では相変わらず「凡愚」の振る舞いを押し通しているフェリクスだが、ロットナー捕縛の際に本性がばれてしまったイレーネたちに対しては、彼は特に言動を取り繕うことはしない。

狡猾そのものの笑みを浮かべ、胡散臭く告げると、イレーネは警戒したように顎を引いた。

「恐れながら、エルマとは異なり、私は陛下の特殊なご用命にお応えできる能力は持ち合わせていないように思うのですが」

「ははは、今『特殊な』ってところに『非常識な』とでも思いを込めたでしょ。君、一国の王に向かって結構ふてぶてしいよねえ。大丈夫、君のね、そのふてぶてしさと、そこそきれいな顔を見込んで、ぜひ頼みたいことがあるんだ」

「……………」

まったく、人を苛立たせることに関しては右に出る者がいない男である。

イレーネの顔が引きつり、冷氣すら漂いはじめたが、フェリクスは頓着しない。

彼は三人に向き直り、両手を広げた。

「朗報だよ、三人とも。今回は至極真つ当な、そして穏やかな依頼だ。僕はね、君たちに、フレンツェル辺境伯の領地を視察してきてほしいと思ってるんだ」

「フレンツェル領？」

ルーカスは眉を寄せながら、素早く情報呼び起こす。

フレンツェル辺境伯領。

ルーデンの北西に位置する、ワインが名産の土地だ。

大地は肥沃だが、魔獣や魔蟲の干渉が多く、住民は古くからそれらと戦って土地を拓き、独自の文化を築いてきた。

よって、ほとんど独立した小国家の態を成していたのを、良質なワインに目を付けたルーデン王が、百年近く前に無理やり征服する形で領土化したはずだ。

経緯が経緯であるので、フレンツェル領は王都に対して敵対的だ。王都側もそれを持って余し、かの領にはろくな助成もしていない。

通常、「辺境伯」というのは、伯爵の中の伯爵、侯爵にも準じるほどの権力を持つはずだが、ことフレンツェルについては、文字通り「辺境の地の貴族」を意味するほどである。

「とうとう、謀反の気配でも？」

「さてねえ。フレンツェル現当主は、幼少時にはその創意工夫で領地から魔蛾を追い払った、明晰ぶりで知られる人物だ。そんな御仁が、軽薄にも王国に牙を剥くとは思えないけど……まあ逆に、自信があるからこそ歯向かう、っていう可能性もあるよね」

フェリクスはひょいと備え付けのサイドボードからワインを引っ張り出し、無造作にグラスに注ぐと、それをくるくると手で弄んだ。

「フレンツェル家の不和は有名で、領民の心は当主からすでに離れ気味だ。そんなところに謀反なんて起こしても、失敗するに決まっている。だから、そこはさして心配してないんだけど……噂では、現当主は、時折夜中に屋敷を抜け出しては、奇妙な実験をしてるらしいんだよね」

「実験、ですか？」

「そう。なんでも、沼に汚泥を注ぎ込み、魔族を召喚しているとか
なんかか？」

「魔族……」

魔族とは、とうに絶えたはずの種族で、今となっては小説の中にしか存在しない生き物だ。それを召喚など。

ルーカスは胡乱げな顔つきになったが、同時に納得もしていた。

フレンツェル領は、その魔物との対決の歴史から、魔に連なる者を嫌う性質にある。

少しでも怪しげな行動があれば、見咎めずにはいられないのだから。それが、たとえ領主であっても。

「告発者は、領民ですか？」

「まあね。国中から人が集まると、それ相応に噂も集まる。先の舞踏会で、辺境伯家の一家が参列にやってきたとき、フレンツェル領出身の使用人たちが、ちよつと嫌そうに顔をしかめて囁き合っていた、君たち、気付かなかった？」

「……………」

ルーカスは思わず目を見開いた。

それでは、この義兄は、国中の情報を収集するために、「即位時の舞踏会には、国中の民を招きたい」などという馬鹿げた発言をしていたというのか。

やはりこの人物は侮れない

「さようでございますね。フレンツェル辺境伯一家を前にしたとき、同領出身の使用人たちが『陰気領主』『醜女令嬢』『病弱令息』などというコードネームで彼らを呼び称すると同時に、一様に侮蔑、嫌悪の微表情を浮かべていたのが、とても印象的でした」

「……………だから呼吸するように微表情を読むのはやめるとあれほど」

ルーカスは無意識に突っ込みつつ、内心で訂正した。

いや、やはり、一番侮れないのはこの娘だ。

あれほど激しくダンスを踊っていたというのに、いったいいつの間にもそれらを観察する余裕があったというのか。

「あの」

とそのとき、神妙に話を聞いていたイレーネが、おずおずと切り出した。

「それがどのように、私にも繋がるのでしょうか」

もつともな質問だ。

警戒心も露わに問う侍女に対し、フェリクスはにこりと小首を傾げた。

「ああ、それはね。ほら、王家から『めっちゃくちゃ疑ってます』っていう態で騎士団を差し向けるのも照れるじゃない。だから、今回ルーカスには、騎士団中隊長としてでも、王弟としてでもなく、あくまで休暇のぶらり旅っていう形で入境してもらおうと思ってる。そのとき、きれいだころの下級貴族の娘を、一人くらい連れてた方が、彼の場合には自然でしょ」

「……………」

実際、下級貴族の未亡人と、馴染みの貴族の屋敷に遊びに行ったこともあるルーカスとしては、なにも言い返せなかった。

「恋人のふり、ということですか……………？　あら！　それでしたら、ぜひこちらのエルマに」

「いや、素顔だと目立ちすぎるし、眼鏡姿だと設定と違和感が生じるから。彼女は戦力としてすぐ期待しているけど、ルーカスの相手役としては無しだね」

「私個人といたしましても、遊び人の恋人役はご遠慮願いたいです」

ロマンス小説めいたシチュエーションに興奮したらしいイレーネが、にわかには声を張り上げるが、それはフェリクスとエルマ当人の双方向から遮られた。

後者の反論は、ルーカスの心を地味に抉っていった。

「ま、そういうわけでき。未婚の君の評判が落ちないよう、城での情報操作は僕がしておくし、報酬も弾むから、頑張つて来てよ。僕は玉座を温めるのに忙しいからさ」

「お言葉ですが、この時期忙しいのは全国民同じでございます。収穫祭の長期休暇には、久々に家に帰れると思っておりましたのに……特別手当も付けてくださいますよね？」

強引にまとめようとするフェリクスに、イレーネがちよつと不服そうに申し立てる。

すると、それを聞き取ったエルマが、ことりと首を傾げた。

「収穫祭？ ……とはなんででしょう？」

なにやら、収穫祭という単語そのものが聞き慣れない様子である。イレーネはぱつとエルマに振り向くと、信じられないというように問いただした。

「いやだわ、エルマ！ まさか収穫祭を知らないの！？」

「はあ、名前から察するに祝祭事なのでしょうけれど、監獄では基

本的に、なにかを祝うことはしませんから」
「そうは言うが、その年の実りに感謝する祭だぞ。なにかしら祝わないことには、収穫年の区切りもつかないだろう。獄内でも、食を賄うための菜園か農場があるはずだが」

ルーカスが怪訝そうに指摘すると、エルマははて、と目を瞬かせた。

「年の区切り、とおっしゃいますが、収穫によって一年を区切るということがおかしいですよね」

「……なんだと？」

「え？ だって普通、野菜や穀物って一年中収穫できませんか？ 少なくとも獄内はそうでしたが」

狂博士ホルストが遣伝子組み換えを行い、囚人を総動員して厳格な温室栽培を維持するヴァルツァー監獄では、四季の野菜が年中収穫し放題なのである。

そうとは知らないルーカスたちは、無意識に眉間の皺を深めた。

「……なんだと？」

「……なんですって？」

イレーネも、困惑気に重ねて問う。

「か、仮に獄内の菜園が素晴らしく肥沃な環境だったのだとしても……でも、収穫祭よ？ 一年の中の最大のイベントよ？ なにかしらはしていたでしょう？」

「なにかしら、とは」

「そりゃあ……家族で集まって一年を振り返ったり、踊ったり、新しいワインの樽を開けたり、あとは恋人や親しい友人を紹介しあっ

たり　って、それはさすがに獄内では無理かもしれないけど、なにかそれっぽいことよ！　あとは、市で小物を買って贈り合ったりとか、いろいろあるでしょ、いろいろ！」

エルマは興味深そうにそれらの情報を聞いていたが、しばし考え、それから「ああ」と手を打った。

「今思えば、年に一度、囚人全員を招集する集会がありました。その一年で最も反抗的だった囚人を振り返り、屋上の手すりで踊らせたり、ワインの樽に沈めたりしていましたが、もしかしたらそれがそうだったのかもしれない」

「絶対違うわよそれ！！」

噂にたがわぬ監獄の残酷な環境に、イレーネはぎょつとして叫び出した。

「なんて恐ろしいところなの！？　看守の悪逆ぶりは鬼畜の域よ。

囚人の尊厳を蹂躪しきっているわ！」

「……………」

なんとなく、蹂躪している側も囚人なのですが、とは言い出せないエルマであった。

イレーネは神妙な顔つきになると、エルマの袖をきゅっと掴み、真剣な声で告げた。

「ねえ、エルマ。やはりあなた、そんな監獄に帰ったりなんかしないで、ずっとこちらにいるべきだわ。今回のご命令も、一緒にこなしましょうよ。私、もっとあなたと一緒にいて、こちらの『普通』というものを、いっぱい教えてあげたいわ」

「……ええと」

エルマはちょっと困惑したように顎を引いた。

微表情を読み、一瞬で事件の黒幕を言い当てるほどの洞察力に優れた彼女だが、それだけに、実はこうしたストレートな物言いには大変弱いのだ。

「そうですね……」

「なあに？ なにが不満？」

「不満と言いますか、そもそも一介の侍女に、王直々のご下命を賜るといふこの展開自体が不思議で仕方ないのですが」

「それを言ったら、私も同じだわ。一緒よ？ ほら、普通じゃないの」

もごもごとした反論を、イレーネは強気に封じていく。

そこに、フェリクスがぱんと手を打った。

「よし、じゃあこうしないかい？」

彼はにこりと笑みを浮かべ、エルマを見つめる。

「君、やたら『普通』にこだわってるよね。たしか、普通の女の子になりなさいって、母親から言われてるんだっけ。なら 今回の件がスムーズに終わったらさ、その証明として僕が一筆書いてあげるよ」

「え……？」

「だってほら、王の命じる通り働くって、いたって普通なことだし。王とは城中の人間の雇用主。君がきっちり任務を果たしたら、その勤務態度をもって、『当方で働いているお宅のお嬢さんは、大層普通な人物です』って書いてあげる。それを持って、里帰りでもなん

でもしたらいいじゃない」

めちやくちやな報酬だ。

だが、フェリクス以上にめちやくちやな思考回路を持ち合わせたエルマは、ぱつと顔を輝かせた。いや、物理的には眼鏡がきらりと光っただけなのだが。

「……はい。必ずや、この命に代えましても」
「そこまで前のめりになるのか!？」

意外なやる気を見せたエルマに、ついルーカスは突っ込んでしま
う。

イレネは、渾身の説得にもかかわらず、相変わらず里帰りにこ
だわっているらしい友人に、少し唇を尖らせたものの、収穫祭の時
期も一緒に過ごせるということで、意識的に気持ちを切り替えた。

「じゃ、決まりだね」

機嫌よくフェリクスが宣言する。

「女にだらしないルーカスと、そこそこ美少女の男爵令嬢イレネ
は、一時的な恋人。エルマは、二人きりだとあからさまだから、っ
ていう理由で巻き込まれた冴えない侍女。フレンツェル辺境伯の屋
敷および領内で起こっていることを、しっかり視察してきてくれた
まえ」

「女にだらしない……」

「そこそこ美少女……」

「冴えない侍女……」

対する三人は、微妙な表情を隠さずにぼそりと呟く。

そんなこんなで、彼らの収穫祭近辺の過ごし方は決まってしまうのであった。

3・「普通」の余暇の過ごし方(2) (後書き)

監獄サイドを挟み、次エピソードから物語が動きはじめる予定です。
エルマの活躍まで、もう少しお待ちくださいませ。

4・手札

クレメンス・フォン・ロットナーは戸惑っていた。

(なんだ……… いったい。これはいったい、どういうことなのだ………)

強引に座らされたソファは、身体の重みをしなやかに受け止める、艶やかな革製の一級品。

美しく磨かれた石床に敷かれているのは、足首まで埋もれそうな豪華な絨毯。

シャンデリアにティーセット、花瓶に絵画。

これまで大国ルーデンの宰相として、高級品を見慣れてきたクレメンスでさえ見とれてしまうような逸品が、この部屋には実になにげなく取り入れられている。

「はい、どうぞ。あなたのぶんよ、クレメンス」

耳に心地よい声とともに、渡されたのは七枚のカード。

ハートにダイヤにスペードにクローバー 四種類の柄と数字、

そして王たちの絵柄が描き込まれたそれは、ところどころ金箔があらわれ、それ自体が芸術品として鑑賞に堪えるような品物だった。

ここは監獄。

それも、常に囚人たちが劣悪な環境下で虐げられているはずの監獄だ。

なのになぜ、この場はまるで、王宮のように いや、ともすれ

ばそれ以上に美麗で、快適に整えられているのか。

(いったいこやつらは、何者なのだ……)

監獄送りとなり、自我を取り戻してから二日ほど。

クレメンスは従順な囚人の態を装いながら、油断なく監獄内を探索してまわっていた。

そう、探索。

驚くべきことに、ここでは囚人たちが、鎖で繋がれることも、部屋に閉じ込められることもなく、いたって自由に建物の中を歩き回っているのだ。

それでも不思議なことに、それで獄内の規律が乱れているということはない。

建物は清潔に保たれ、食事は行き届き、囚人たちは皆勤勉に各々の職務に取り組んでいる。まるで、完璧に統制の取れた軍の寮内のようにであった。

ただし、自由の許されているように見える囚人たちが、けっして近づかない一画がこの獄内にはある。

切り立った崖の上に建てられた監獄の、最上階。

眼下に荒れ狂う海を見下ろしているのであろう、元は独房が並んでいたその空間には、彼らが「大罪人」と呼ぶ者たちが集っている。

さすがにここでは、厳重に囚人が繋がれているのかと思いきや、その予想は大いに裏切られた。

広々とした空間に、贅を尽くした家具。いかにも座り心地のよさ

そんなソファの上で、六人の男女が悠々と紅茶を楽しんでいたのだから。

精悍な顔立ちの男、筋骨隆々たる巨漢、なぜか白衣をまとった年若い青年に、執事のような品を漂わせた壮年の男、女性と見まごう中性的な ロットナーはなぜだか、彼のことをどこかで見たことがあるような気がした 青年。

姿かたちは様々だが、皆一様に、囚人では考えられないような、清潔で、美しく整った身なりをしている。

そして

「ほおら。手が止まっていますよ？ 手札を並び替えなくてよいの？ カードを配られたなら、すぐに作戦を考えはじめなくては。あなたの今後の人生が懸かっているのだから」

蜜を混ぜ込んだような甘い声で、そつと腕に触れながら告げる女を、クレメンスはまじまじと見つめた。

美しい女だ。

緩く波打つ銀の髪、血管が透けるような白い肌、蠱惑的な碧い瞳に、完璧な形の唇。

「大罪人」たちの紅一点、ネグリジェのようなドレスをしどけなく着崩した女は、まるでこの監獄の女王のように、悠然と、最奥のソファに身を預けていた。

かつて傾国と謳われた美貌の娼婦 ハイデマリーは、薄く笑みを浮かべ、歌うように告げる。

「カードの強さと役については、先ほど説明したとおりよ。順に強いカードを出して、手持ちの札を無くしていく。最初に上がれば皇帝^{ザイ}、最後に上がれば大貧民。あなたが皇帝になったならば、わたしたちはあなたに従い、たがわずこの監獄から出して差し上げる」
「……………」

この世の地獄と言われるヴァルツァー監獄からの解放を、なんでもないことのように語る女。

その言葉が真実であるはずがない。

あるはずがないのに　クレメンスは、彼女の碧い瞳に覗き込まれると、それだけで、その唇から紡がれるすべての言葉が真実であるように思えた。

「けれどクレメンス。わたくしたちは、なかなか強いわよ？　有り金をすべて糞取り取られて、素寒貧になってしまわないよう、どうぞお気を付けになって」

猫のように気まぐれで高貴な瞳が、楽し気に瞬く。

さあ、と、彼女はクレメンスに呼び掛けた。

「手札はそろったわね。それでは　最初のカードを」

4 手札（後書き）

今回ちょっと短めだったので、お昼頃もう1話投稿しておきます！
エルマ活躍シーンまで、あと5話くらい……でしょうか？
見捨てずお付き合いいただけますと幸いです。

5・「普通」のお手入れ(1)

デボラ・フォン・フレンツェル辺境伯爵令嬢は、侍女に呼ばれ、不機嫌そうに寝台から身を起こした。

閉まっていたカーテンが開けられ、広く取られた部屋に真っさらな朝陽が降り注ぐ。

大地を温め、命を育む神聖なその光は、しかし同時に容赦なくデボラの顔立ちも明らかにしてくるので、彼女はいつもの習慣で、鏡に映り込む自分の姿からさっと目を逸らした。

「……着替えは自分でするわ。さっさと出ていきなさい」

低い声で侍女を追い払う。

彼女たちもデボラのそのような態度にはすっかり慣れてきているのか、無表情でひとつお辞儀をすると、さっさと部屋を去ってしまった。

この屋敷の使用人は、領主の娘に丁寧に接してくるが、その顔や触れる手指はいつも冷たい。

デボラはふんと鼻を鳴らすと、のろのろとドレスに着替え、それから眉を寄せて鏡に姿を映した。

艶もなくパサついた麦わら色の髪に、だらしなく緩んだ肢体。

茶色の瞳は泥のように濁り、荒れた肌は青白く、顎の肉は重そうに垂れている。

いかにも不摂生と怠慢な性格を感じさせる、いつもの、「醜女令嬢」の姿だ。

デボラは忌々しげに舌打ちを漏らした。

「……だって仕方ないじゃない、屋敷から出られないのだから」
この姿を見ると、いつも思う。
なんて自分は不幸なのかと。

フレンツェル領は、かつて魔族が栄えていた時にもその干渉を退け、今も、豊かな自然に惹かれてやってくる魔物や魔蟲と戦いながら神聖な酒を作る、誇り高い土地。

魔に連なる者と長く渡り合って来た彼らは、自然と他の地の住民よりも、強い魔への耐性を身に付けた。

ぶどう畑の守り人には、魔獣の爪毒も届かず、淫魔の誘惑も効かぬという逸話も数多く残る。

その領主たるフレンツェル家は、とりわけ魔に強く、果敢で聡明な者が多かったが、しかし同時に、まるでその反動のように、魔に耐性を持たぬデボラのような子どもが、時折産まれてしまうのである。

瘴弱、と呼ばれるそれらの子どもたちは、文字通り、魔の発する瘴気にいたく弱かった。

デボラもたとえば幼少時、ぶどうの葉にかすかに残った魔娥の鱗粉に触れただけで、三日三晩高熱に襲されたりしたものだ。

魔族が減び、すっかり魔の気配が薄まったかに思われる現代となっても、このフレンツェルの地には、未だ魔獣の類が跋扈する。彼らが発する瘴気、ときどき風に乗って漂ってくるそれに大層弱いデボラは、だから滅多に外出もできないのであった。

「ああ、お母様が生きていてくだされば、きっと不憫なわたくしを可愛がってくくださったのに」

ぱつと鏡から踵を返し、彼女は嘆く。

不幸だ。

まったくもって不幸だ。

そんな想いが渦巻いて、胸が苦しくなってきたため、デボラはベツド横の壺から砂糖菓子を摘み出し、頬張った。

甘美な菓子は心の安定剤だ。寝起きで苛立っていた哀れな彼女の心を宥め、そつと包み込んでくれる。

「ごそそと続けていくつかを取り出しながら、デボラはどさりと寝台に腰かけた。

ああ、不幸だ。

理解者を、優しく慰めてくれる母を早くに失ってしまったから、自分はこうして一人寂しく、甘味で心を慰めている。

彼女の母エリーザは、弟ケヴィンの出産時に命を落としてしまったのだった。

フレンツェルの太陽とも呼ばれていた、朗らかで可憐だったエリーザ。

彼女を失ってから、この家は実際、すっかり日を翳らせてしまった。

聡明な領主として、そして愛妻家として敬意を集めていたらしい彼女の父親ヨナスは、家族の前ですら滅多に話さなくなり、自室に籠り、あるいは夜中にふらりと領内を徘徊している。

母が命と引き換えに産んだ弟は、瘡弱ではないが病弱で、しょっちゅう寝込んで性格を拗らせているし、自分の身体は瘡気を溜め込んでご覧の有り様。

陰気で、不健康で、不健全な領主一家に注ぐ領民からの眼差しは冷たく、デボラはこの土地で日々を過ごすというただそれだけで、多大な苦痛を強いられているのであった。

「ああ、ずっと王都にいられたら、どんなにかよかったのに……」

唇の端についた砂糖を拭いながら、デボラはそんなことを呟く。

先日、新王即位の舞踏会に参加するために、初めて赴いた王都。

建物はどれも壮大で、空気には瘴の気配のかけらもなく、見るものの全てが美しかった。

とりわけ

「ルーカス王子殿下……いえ、もう王弟殿下とお呼びするべきね」

うつとりとしながら、デボラは今度は飾り棚に向かい、そっと引き出しを開ける。

そこには、王都で流通していた王弟ルーカスの姿絵が収まっており、彼女は愛しげに何度もそれを撫でた。

ルーカス・フォン・ルーデンドルフ。

武勇に富んだ騎士にして、次々と女性を渡り歩く、ルーデナーの色男。

舞踏会で目にしたその精悍な男ぶりに、デボラはすっかり心を奪われてしまったのであった。

「ダンスも華麗で……相手を巧みにリードしていて……本当にいるのね、あんな殿方が」

本当にいる、といえば、相手役を務めていた少女の美貌にも度肝を抜かれたものだったが。

やはり王都、あれほどの美丈夫や美少女も、平然と存在しているのである。

引き換えデボラなど、初の王都、初の舞踏会にすっかり逆上せしまい、彼らのダンスが一区切り着いた時点で早々に、宛てがわれた部屋に帰ってしまっていた。

そういえば、その直後に侯爵が、ルーカス王子暗殺未遂という大罪を犯したかどで捕まったのだったか。

デボラは政治に疎いし、ついでに言えばその手の事件を細かに教えてくれる同郷の使用人にも恵まれなかったので、そんな曖昧な理解にとどまっていた。

（なんでも、毒を使って弑そうとしたのだったけ？ お勞しい王弟殿下！ でもそれを、相手の娘が庇ったとかなんとか……あら、ということは、その娘は無事だったのかしら）

とかくルーカスの身の方が気掛かりで、彼が無事ということだけ確認したら、後の情報にはまるで注意を払っていなかった。

もしや身代わりに毒でも受けていたり、などと今更首を傾げたデボラだったが、少し考えた後、意地悪く唇の端を釣り上げた。

もしそうだったらいい。

美人で、王都住まいで、舞踏会では王族の相手も務めるだなんて、

あまりに恵まれすぎている。

そのうえ危機を男に救われたりなんかしていたら、デボラは嫉妬でどうにかなくなってしまふ。

あの少女も、少しくらい世の辛さを知ればよいのだ。

「いい気味。神様が、わたくしの代わりに釣り合いを取ってくださいのだから」

デボラはそう嘯いて、今度は窓際に近付いていった。

大きく取られた窓からは、フレンツェル領の誇る広大なぶどう畑が見える。

なだらかな丘陵、抜けるような青い空、豊かな森。

この土地には、自然の美がすべてである。

同時に、醜さも。

「……今日は、あのおぞましい沼からの風は吹いてこないといけど」

豊かな森の中には沼があり、さらにその先 斜面を登った先には、切り立った崖と海があった。

沼はすっかり瘴気に汚染されて濁り、崖のへりには「この世の地獄」と称される監獄が建っている。

そのどちらもが、フレンツェルの住民の心に暗い影を落とす存在であった。

ただ、瘴弱のデボラにとっては、両者のうちなら沼のほうが問題だ。

そこでは魔蟲がうじゃうじゃと繁殖し、腐臭と瘴気を充満させて

いる。

ふと、デボラは自嘲的に唇を歪めた。

おぞましく醜いその沼のことを、使用人たちが自分の名前を重ねて、「デボラ沼」と称していることを、思い出したからだ。

「……ひどいわ。ひどすぎる。みんな、消えてしまえばいいのに」

不幸だ。

実に実に不幸だ。

神様はまったく仕事を怠けすぎている。

かの存在が真に慈愛深き存在ならば、美しいというだけで持て囃されるすべての女たちに罰を下し、哀れなデボラにルーカスとの縁を用意すべきだ。自分ならばそうする。

しばらく頭の中で、美少女をいたぶったり、ルーカスに口説かれたりする空想を弄んでいたデボラだったが、やがて溜息をついた。

とはいえ、この辺境の地。

まかり間違っても、王弟ルーカスと自分が言葉を交わす機会など、ありはしない。

そう思っていたのだが

「……………？」

ふと、見下ろしていた窓の外に、みすばらしい馬車が停まったのを認めて、デボラは目を瞬かせた。

この屋敷に、見覚えのない馬車がやって来ることなど、珍しい。

(仕立てこそみすばらしいとはいえ、……車輪の音は滑らかだったし、馬は随分立派だし……、あえて貧相に見せているのかしら?)

なんとなく気になり、窓に額をくっつけて検分する。

馬車から滑らかに、小柄で地味な侍女が出てきた後　それは激しくどうでもいい　、続いて地上に降り立った人物を見て、彼女は思わず声を上げそうになった。

「……………！」

板に着いた仕草で、金髪の美少女の手を引き、馬車から下ろしてやっている、その人物。

豊かな黒髪に、精悍な顔立ち、しなやかな長躯。

なぜか質素な商人風の衣服に身をやつした　ルーデナーの色男、ルーカスであった。

6・「普通」のお手入れ(2)

「んーっ！ ようやく快適に座れるわ」

フレンツェル辺境伯の屋敷の応接間、質素ながら広々としたソファに案内され、使用人たちが茶を淹れるために去っていくと、イレネは大きく伸びをした。

彼女の背後に控えているエルマは、とくに疲労の色は見せず、淡々と周囲を見回している。

設定として、イレネは男爵令嬢にしてルーカスの隠れた恋人、エルマはそれをごまかすための平民の侍女仲間、ということになっているので、イレネはソファに座れても、エルマは壁際に立ったままとなるのである。

ちなみにルーカスとはいえば、この突然の訪問に目を見開いた領主ヨーナスを巧みに誘い出し、地下のセラーでフレンツェル自慢のワインを試飲させてもらっている。

エルマの洗脳技術ほどではないが、軽妙ながら嫌味のない言葉選びでするりと相手の懐に入っていく話術はなかなか巧みで、ひとまず屋敷の人間は、彼らの訪問を設定どおりのものと信じた様子である。

すなわち、ルーカスは最近の恋人イレネとその友人を伴い、ワインで有名なフレンツェルに足を伸ばした。最初は通りすぎるだけのつもりだったが、あまりにぶどう畑が見事なので、数日滞在して豊かな自然を堪能したい。

については、身分を隠して数日、屋敷に滞在したく、それを領主に頼みに来た。

「人たらしよねえ、殿下つて。概要だけ聞くと荒唐無稽な設定なのに、ああも堂々と、肩なんかすくめながら笑って仰ると、なんだかそれっぽく聞こえるもの」

「そうですね。自己開示返報性と好意返報性を巧みに織り交ぜつつ、フットインザドアテクニクを用いてアサーティブに要求を伝える様は、なかなか堂に入っていたと私も思いました」

「……もしもし？ ルーデン語で話してください？」

イレエネがもはや反射的に突っ込む。

この友人の口からは、時折呼吸するように難解な用語が飛び出すのだ。

本人は日々「普通」を目指して精進しているつもりのようなのだが、その傍から、エルマ自身が目標を踏みにじっている気さえするイレエネであった。

「あなた、『普通』を学びたいというのなら、まずは言葉遣いから変えていった方がいいのじゃない？ 城に戻ったら、私が聖書を貸してあげるから、それで勉強したらいいわ」

彼女の言う聖書とは、正規のものではなく、もちろん薄く仕立てられた本のことだ。

エルマはこの申し出に対するアサーティブな回避方法はなにかを考え、

「……そういえば、今回は聖書を持ってこなかったのですね。久々の休暇ですし、てっきり、馬車の中でも読みふけるのかと思っていました」

話題を微妙に逸らすことでそれに応じた。
するとイレーネは、いよいよ呆れたような顔になる。

「もう、エルマったら！ あなた、なんにもわかってないのね。本を読むときには、『尊い、無理』って後ろに倒れ込むスペースが必要なのよ。馬車なんて狭い場所で読書ができるわけないじゃないの」
「そうなのですか」

シャバの読書というのは、なかなかややこしいようである。

とそのとき、ドアが開き、応接間に二人の人物が踏み入ってきた。上質なワインを堪能し、少々ご機嫌のように見えるルーカスと、彼を案内する壮年の男性。この屋敷の主にして領主、ヨーナスである。

肩のあたりで整えた白髪が目立つ髪、そして皺の刻まれたいかめしい顔。

年はたしか五十に届かぬはずだが、感情を削ぎ落した顔つきと相まって、ひどく老け込んで見える。

彼は、言葉少なにルーカスをソファに通し、イレーネの隣に座らせる。

使用人を呼び、エルマも含めた三人に茶を振舞わせると、ひどく億劫そうに告げた。

「……改めて、ご挨拶を。ようこそ我が領へ。殿下および、侍女殿の事情には踏み入りませぬゆえ、ごゆるりとお過ごしください。使用人も含め、屋敷内のすべてを随意にお役立てくださいますよう」

低姿勢であるし、大層鷹揚な内容ではあるが、それはルーカスたちを歓迎しているからというよりは、心底興味がないからというようであった。

王家からの詮索を疑うでもない。

「過分な配慮、感謝する。なにぶん王都では、伸び伸びと過ごすことの難しい身の上なのでな」

ルーカスが色男そのものの仕草で、傍らのイレーネの肩にさりげなく手を回してみせても、ヨーンナスは非難の色を浮かべるでもなく、淡々と「さようですか」と頷いた。

ちなみに、エルマも道端に生えるぺんぺん草を見るような、特になんかの感情もにじまぬ視線を向けてきたため、それに気付いたルーカスは一瞬遠い目になり、そつとイレーネから手を外した。

ヨーンナスは抑揚の少ない声で、近々行われる収穫祭にも参加されるは、などと形ばかりの誘いを口にする、最後に、応接間に彼の子どもを呼び寄せた。

「私の子どもたちを紹介いたしましょう。なにかあれば、遠慮なくお命じになられればと」

謙虚な申し出であるし、自慢の子どもたちを信頼しているかのようにも聞こえる。

しかしながら、部屋に呼び寄せられてきた二人の子どもたちは、どう見ても客人をもてなすには適さないような人物であった。

「ごきげんよう。フレンツェル边境伯ヨーンナスが娘、デボラと申します。ルーカス殿下におかれては、ようこそこの边境のぶどう畑へ。

わたくし、心より歓迎いたしますわ」

一人目、次期領主たる息子を差し置いて挨拶を寄越してきたのは、娘のデボラ。

たるんだ肢体とむくんだ顔に、浮ついたピンクのドレスを宛がい、上目遣いでお辞儀をするさまは、醜悪を通り越して滑稽ですらある。

ルーカスに呼び掛ける声こそ、甘くしとやかだが、「辺境のぶどう畑」の言葉にむっとした使用人たち　おそらく、彼らの家族がぶどう畑で働いているからだろう　には、ぎろりと険しい視線を向けた。

「あなたたち、もう下がってよくつてよ」

と、領主すら差し置いて、勝手に使用人たちを下げてしまう。

それから彼女はくるりとこちらに向き直り、媚びた笑みを浮かべた。

「ごめんなさい。このように躰も行き届いていない使用人たちですから、屋敷でお困りの際には、なんなりとこのわたくし、デボラにお申し付けくださいませね。ええと……その、ノイマン男爵の娘？　と、そちらの眼鏡は平民の侍女かしら？　本来下の身分とはいえ、あなた方も大切な客人。なんなりとわたくしを頼ってくださいっていいのよ」

そう告げる様は一見しおらしくもあるが、その実、自宅の使用人たちをこき下ろし、客の身分が自分より下であることを強調させている。

イレーネがむっと顔を強張らせたところで、今度は息子のほうが名乗り出た。

「息子のケヴィンです。このような外れの、魔物まで出る領地へようこそ、殿下。でも、愛人を連れ込むには、人目もないほうがいいけどと思いますよ。　　ねえ、その金髪、あんた、愛人なんだよな？ そっちの眼鏡はさすがに違うだろ？　　もしそうだったら、殿下の趣味を疑うけど」

年の頃は、十を少し越えた頃か。

デボラとは異なり、見た目はなかなか愛らしいし、聡明な話しぶりだが、枝のように細い手足と、生意気な態度が、彼の魅力を台無しにしていた。

「……申し訳ない。倅は生まれつき病弱なもので、甘やかしすぎた結果すっかり生意気になってしまって」

ヨーナスはぼそりと謝罪を寄越したが、それ以上特に注意をすることはなく、むしろデボラが「ああ！」と小太りの身体を嘆かわしそうに揺すった。

「ケヴィン、その失礼な口を閉じなさい！　まったく、うちの家族ときたら！　殿下、申し訳ございません。このデボラ、お詫びにぜひ、殿下の案内役を務めさせていただきますわ。明日には、ささやかながら感謝祭前の市も立ちはじめます。屋台や道化、いろいろな催しもありますから、きつと観光を楽しめると思いますわ」

実際には、謝罪に見せかけた誘いだ。

ルーカスは、彼女からの情報収集と、街の視察のどちらを優先すべきかを素早く計算したらしく、「いや、その楽しみは感謝祭当日に取っておこうか」などと如才なく断った。

街の様子は自身の目だけで確かめることにしたようだ。

デボラは残念がっていたが、最終的には引き下がり、弟のケヴィンを連れて部屋を辞した。

ヨーナスも、ぼそぼそと謝罪のような、社交辞令のような言葉を残して去っていく。

結果、応接間にはルーカスたち三人だけが残った。

「なんと、まあ」

最初に呆れたように声を漏らしたのは、一応身分の最も高いルーカスである。

彼は整った眉をくいと持ち上げ、肩をすくめながらカップに口をつけた。

「フレンツェル家の、子どもたちを含む一家の人望の無さは聞いていたが、まさかこれほどとは」

「私たちをさして詮索もせずに受け入れてくださったのはありがたいですけど、単純に彼ら、私たちを放置して嫉妬して攻撃してきただけでしたものね」

道中で、すっかりルーカスに気安く接するようになっていたイレネも、相槌を打つ。

侍女ではあるが、一応男爵令嬢として育てられてきた彼女は、王子に対して堂々と媚びてくるデボラや、暴言を向けるケヴィンの態度が信じられないようだった。

「私だってかつてはルーカス殿下に媚びた視線を向けたものだったけれど、さすがにあそこまではなかったわ。辺境伯の感情の読めない態度といい、子どもたちの向こう見ずな態度といい、……もし

や、彼らはなにか深い考えでもあるのかしら。ねえ、エルマ？」

彼女が水を向けると、周囲が去ったのをいいことに、自身もちやっかり紅茶を楽しんでいた眼鏡姿の同僚は、ことりと小首を傾げた。

「さて。少なくともデボラ様とケヴィン様におかれては、特別、お言葉以上のお考えがあるようには見受けられませんでしたが」

要は、彼らはその振る舞い通り、単純な性格の持ち主だということだ。

エルマは淡々と、

「デボラ様はルーカス殿下に夢中のようにでしたし、ケヴィン様も、イレエネに突っかかりながらも、瞳孔がほんの少し開き、呼吸が浅くなっていましたので、わずかな肉体的興奮　つまり、ほのかな好意を感じているようです」

お二人ともモテモテですね、と、なんでもないことのように付け加えた。

「それより、気になったのですが　」
「なんだ？」

眼鏡をきらりと光らせるエルマに、ルーカスがごくわずかに緊張しながら問う。

エルマは紅茶のカップを置き、神妙な様子で尋ねた。

「明日は、収穫祭に向けた市が立ちはじめるといっのは、本当ですか？」

「……………は？」

「屋台や道化、いろいろな催しが用意されているらしいですが、これは、私どもも参加してきてよいのでしょうか。一応今は『非番』という扱いなので、よいのですよね？」
「……………は？」

思わぬ問いに、ルーカスがつい怪訝な声を上げる。
彼はそれからまじまじとエルマの顔を見つめ　　といつても、ほとんどもが眼鏡で覆われているのだが　　そのガラスの表面が、いつもよりやけに、きらきらと輝いているようであることに気が付いた。

おそらく、……………すごく、わくわくしているのだ。

というか毎度思うが、持ち主の感情を無機物の域を超えて表現しにかかるこの眼鏡は、いったい何物なのだろう。

「……………市に行きたいのか？」

「いえ別にそういうわけでは」

「市に行きたいんだな？」

「いえ別に　　はい」

重ねて問うと、エルマはどうとう頷いた。

「はい。ものすごく、行ってみようございます」

その、まるで子どもが真剣に挙手するかのような様子に、横で聞いていたイレーネが思わず吹き出す。

彼女はくすくす笑いながら、エルマの手を取った。

「やだわ、エルマ。あなたって結構ミィハーなのね。いいわ、行きましよ！　どうせ私たちは殿下の視察の『添え物』ですもの。情報

収集は殿下に任せて、私たちは収穫祭恒例、市場でのショッピングとしゃれ込みましょ」

「はい。ぜひ」

「おい待て。せめて申し訳ながる姿勢くらいは見せないのか」

ルーカスは仏頂面で突っ込むが、唇の端はわずかに持ち上がっている。彼とて、目を掛けている少女が、普通の娘らしく市場に興味を示したことを歓迎しているのだ。

三人はそれぞれの役割を確認し、明日はイレーネとエルマで買い物に専念することを約束したのだったが

しかし、エルマの市場デビューは、残念ながら阻まれることになる。

7・「普通」のお手入れ(3)

「屋敷での雑用を手伝え、ですって？」

明くる朝。

ルーカスの領地視察のカムフラージュという役目も忘れて、しっかり食事を頂き、しっかりとエルマとの枕投げまで楽しんだイレエネは、着替えを済ませるなり告げられた言葉に、猫のような目を見開いた。

「いいええ、手伝いだなんて。あくまで、王城で磨いてきたという侍女の腕を、わたくしの屋敷の至らぬ使用人たちに披露して、『指導』していただきたいだけよ」

曲がりなりにも客人の部屋に、朝っぱらから踏み入ってきたのは、誰あろうデボラである。

彼女は、朝早くにルーカスが馬を駆って出かけたことを察知するや否や、それまで辛うじて保っていた愛想すらかなぐり捨てて、こうしてイレエネたちのもとに乗り込んで来たのだ。

デボラはそのむくんだ顔に、意地悪な笑みを浮かべて続けた。

「ねえ、これってあなたのためでもあるのよ？ だって、いくら殿下が遊び人とはいえ、未婚の娘と二人きりで外泊したって、ちよつとまずいんじゃないかしら。おっと、その眼鏡が一緒だとはいっても、そんなの、言い訳にもならないでしょ。ここであなたが侍女としてちゃんと働いている姿が見られれば、周囲もきつと安心するわ。『ああなんだ、単に使用人として連れてきたのか』ってね。要

は、カムフラージュってこと」

実際のところ、ルーカスとイレーネの恋人設定こそがカムフラージュであるのだが、まさかそれを説明するわけにもいくまい。

なんとリアクションしたものと、イレーネが一瞬躊躇ったのを、怯んだと取ったのか、デボラはますます唇を釣り上げた。

「ねえ、わたくし、一生懸命考えたのよ。あなた方　王都からの侍女ならば、きっとこれくらいのごときは朝飯前だろうって。ほら」

そう言っただけで彼女が突きつけてみせたのは、「お願いリスト」と題された一枚の紙だ。

そこには、豆拾いから洗濯、床掃除など、とつてい客には頼まぬような業務がこれでもかと書かれている。

さっと視線を走らせたイレーネは、次に顔を上げると、真つすぐにデボラを睨みつけた。

「お断りします。泊めていただく以上、なんらか恩義は返したいところだけれど、これって度を超しているわ。私たちは、この後感謝祭の市に出かける予定なのです。どうしてもと仰るなら、殿下をお通しくださいませ」

気の強い彼女らしく、きつぱりとした態度だ。

しかし、身分が下の者には強く出るタイプのデボラは、ふんと鼻白んだ様子で言い返した。

「まあ！　市にですって？　殿下とデートでもされるのかしら。寝泊りする部屋を貸している領主の娘の、ささやかなお願いをも差し

置いて？　それが昨今の王都の侍女、いえ、男爵家の娘の態度ということかしら」

「そんな、王都だとか男爵家だとかは、今は関係　」

「関係大ありよ。なるほど、ノイマン男爵家の娘は、フレンツェル辺境伯の娘を軽んじているというのね！」

「いえ、ですから　」

イレーネが努めて冷静に言い返そうとするのを、デボラは高慢かつ大仰な言い草で封じていく。

身分差まで持ち出してくるデボラに、傍らに控えていたエルマが思わず身を乗り出すと、それよりも早く、デボラ付きの侍女が、こっそりとエルマに話しかけてきた。

「ごめんなさいね。お嬢様ったら、お客様があんまりに美人だから、嫉妬しているのかわ」

「嫉妬、ですか？」

「そう。なにぶん、あのご容姿でしょ？　ご自身がブスだということとはわかってて、そのくせプライドだけは人一倍高いから、よくあやつて、見目がいい女の子に突っかかり、嫌がらせをしたりするのよ。おかげで、若くてかわいい使用人は皆辞めてしまったわ」

まあ、今はちょうど収穫の最盛期だし、その子たちの家族は助かっているでしょうけど。

そうこぼす侍女は、確かにエルマたちの母親くらいの年代だ。

領主の娘付き、ということとは、侍女の中でもリーダー格に近い存在なのだろうが、そんな彼女が主人を「ブス」と断言しているあたり、この屋敷における雇用者と被雇用者の関係は、かなり破綻しているようだった。

「逆らえば逆らうほど悪化するし、あれでなかなか悪知恵は働くから、大人しく従っておくのが身のためよ。手伝ってあげられたらいいけど、ごめんね、正直こちらも人手が足りなくて。適当にやり過ぎしてくれればそれでいいから」

侍女は、エルマが同じ平民の出と見込んでか気安く話してくる。

それでも、この状況に手を差し伸べるつもりは無いようだった。

本来人のよさそうな彼女の顔には、主人に対してすべてを諦めきってしまったような、冷え冷えとした表情が浮かんでいる。

視線の先では、たるんだ顎を震わせながら、いよいよデボラが語気を強めてイレーネを詰っていた。

「ああ、最低。本当に最低だわ。ノイマン男爵家がどのようなものかは知らないけれど、このようなふしだらな娘を育て上げるくらいなのだから、お察しよね。王城で侍女を務めているからって、お高く止まって。境界の地では、哀れな同年代の娘のために、その技術を披露することすら惜しいとでも？」

「ですから　！」

「かしこまりました」

とうとうイレーネが、苛立ちを前面に出して反論しようとしたとき、差し水をするように、凜とした声が響いた。

少女のものにしては、ほんの少しだけ低い、耳に心地よい響き。

エルマだ。

眼鏡姿の冴えない侍女　のはずの彼女は、やけに美しい姿勢で、

デボラに告げた。

「僭越ながら申し上げます。先ほどデボラ様は、『あなた方、王都からの侍女』と仰いましたね。つまり、これはイレーネに対する嫌がらせなどではなく、あくまで私どもの私とイレーネ二人の日頃の働きぶりを見てみたいと」

「……ふ、ふん。先ほどからそう言っているじゃない」

もちろん眼鏡侍女のことなど眼中になかったデボラだが、エルマの放つ気迫に圧され、辻褄を合わせるために頷いた。

「もちろん、あなたたち二人にお願いしているつもりよ。まあでも、どちらかといえば、あなたは別にどうでもいいっていうか」

「では、私とイレーネの二人で、さっそく取り掛からさせていただきます」

「は？」

低姿勢ながらきつぱりと言い切ったエルマに、デボラは怪訝そうな視線を向けた。

「なんですか？？」

「ですので、豆拾いに床磨きに洗濯、花瓶の花の差し替え、野菜の皮むき、ベッドメイク、化粧瓶の補充に水差し交換、ランプの煤取り、シルバー磨きとクローゼットの整理まで済ませました上で、市に出かけさせていただくことにします」

膨大な量の仕事を、メモを見ることすらせずに諳んじられ、デボラはその隈の目立つ目を大きく見開いた。

「え？」

「いえ、お気になさらず。さして時間はかからないと思いますし、宿泊の恩を労働で返すというのは、古典や童話でもしょっちゅう描かれる、実に『普通』なことだと思いますので」

「え？」

淡々と告げられた内容に、デボラが戸惑う。

しかし、彼女はそれを単なる強がりと捉えたのか、やがてふんと鼻を鳴らした。

「あらそう。さすがは王都からの侍女ね。今日一日でどこまで済むか、楽しみにしているわ」

そうして嫌味にも、

「ちなみに今日は、市の開始を記念して、評判の大道芸団が来る予定だけど。まあきつと、昼前までには終わってしまうでしょうから、あなた方には関係のないことね」

そんなことを吐き捨て、踵を返す。

デボラ付きの侍女も、こっそりとこちらに向かって肩をすくめて去って行ってしまった。

後には、エルマと、いまだ憤慨したままのイレエネだけが残された。

イレエネはその猫のような目をきつと釣り上げ、両手を広げた。

「あれが誉ある边境伯のご令嬢だなんて、信っじられない！ もう、エルマ！ どうしてあんな理不尽な命令を受け入れてしまうのよ！ さすがにあれが嫌がらせだということくらいはわかったでしょう

!？」

「どうやら、デボラに対してだけでなく、彼女にあっさり従ってしまったエルマに対しても苛立っているらしい。」

「ぷりぷりと怒りを露わにする同僚に、エルマはことりと首を傾げた。」

「いえでも、イレーネも出会った頃の様子はあんな感じでしたよね」「うっ」

「それに、理不尽というにはささやかすぎる要望ですし、怒るほどではないというか。私一人でも数十分で片付く案件だと思います」「えっ」

「イレーネは、己の過去の所業に顔を強張らせたり、相手の突き抜けた能力にドン引きしたりと忙しい。」

「ひとしきり懊悩した後、イレーネはちょっと拗ねたようにエルマに告げた。」

「……ねえ、私、あなたのそういう能力の高さだとか、意外にも図抜けた寛容さを心底すごいと思うけど、ちょっと心配でもあるわ」「心配？」

「そうよ。いくらあなたにとっては問題のないことでも、客観的に見て理不尽であるなら、あなたは腹を立てるべきだわ。躲してしまえば、相手は肩透かしを食らうだろうし、あなたも楽なのだろうけど、あなたが搾取されている事実に変わりはないもの。そういうのには、ちゃんと怒って、抗わなきゃいけないわ」

怒って、抗う。

「不思議そうに繰り返したエルマの頬をぎゅっとなみみ、イレーネは続けた。」

「私に売られた喧嘩を、あなたが大人しく買ってしまったてどうするの。私を庇おうとしてくれたのは嬉しいけど、それなら一緒に、ちゃん怒って。ほら、速やかに復唱！ 『ぶんぶん』！」
「ぶんぶん」

エルマが頬を引っ張られたまま素直に従うと、イレーネはようやく手を離した。

「今日はこのくらいで勘弁してあげましょう。……ありがとうございます、エルマ」

最後にちよつと顔を逸らして付け加えるあたりが彼女らしい。

イレーネは短く息を吐き出し、気持ち切り替えると、きびきびと外着 町に下りるからと、珍しく私服を着ていたのだ からメイド服へと着替えた。

「エルマ、悪いけど本当に手伝ってくれる？ 私とあなたで業務を分担しましょう」

そう言っでぐるりと部屋を見回し、窓際に飾られた花瓶を見つける。

まずは花の取り替えを、と、それに手を伸ばし、そこで彼女は悪戯っぽく目を輝かせた。

「そうだわ」

活けられていた秋の花を何本か取り出し、くるくると器用に輪っかに編み上げていく。

あっという間に二つの花冠が出来上がった。

「これは……？」

「収穫祭の時期に女の子が付ける花冠よ。本当は、専用を使う花があるんだけど、代用」

イレーネが上機嫌に告げると、エルマはまじまじと花冠を見つめた。

「これを付けると防御力が向上する、といったアイテムではなさそうですね。祭りの王者を明確化するツールですか？ それとも、着用者の興奮を盛り上げる、向精神作用があるとか」

「……その中では、最後がまだ近いかしらね。豊穡の女神の象徴たる花を髪に挿したり、冠にして身につけることで、お祭り気分を盛り上げるのよ」

「なるほど」

さほど興味なさそうに頷いていたエルマだが、

「仲良しの友達は、こうして同じ花で冠を作ったりするの。友情の証のようなものね」

とのイレーネの補足に、少しだけ顔を上げる。

そして、

「そうなんですか」

思いのほか慎重な手付きで、イレーネが掲げた花冠をひと撫でした。

恐る恐る、といった様子で匂いまで嗅いでから、ぽつんと、

「いい匂いがします」

と、ちょっとはにかんだように呟く。

「……ま、作業中に花冠をするわけにもいかないし、一旦この棚の上置いておくとして」

エルマにつられて気恥ずかしくなったらしいイレーネは、そそくさと花冠を棚の上 先ほど脱ぎ置んだ外着の隣に置くと、今度こそぐるりと肩を回した。

「さあ、ちゃきちゃき働きましょう。昼前には出発するわよ！ まずはこの部屋の床磨きを って、きゃあ！」

気合を入れて宣言した途端、ふわりと巻き上がった風に悲鳴をあげる。

咄嗟に顔を庇ったイレーネが、おずおずと腕を下ろすと、目の前にはぴかぴかに磨かれた床が出現していた。

「……………！？」

「こんな感じでいかがでしょう」

風を巻き起こした犯人は、どこからか、いつのまにか取り出したモップを片手に、くいと眼鏡のブリッジを押し上げている。

分厚いガラスと、滑らかに磨き上げられた床が、まっさらな陽光を浴びてきらりと光った。

「少々気合を入れて、ニス塗装加工にしてみました」
「なにそれ！？」

のつけから大いに想定速度と質を上回る仕事ぶりに、イレーネはぎよつと目を剥いた。

シフトこそなかなか重ならないもの、なぜなら、エルマは大抵単身で業務をこなしているから、この同僚の仕事の速さは方々で噂されている。

それをしょっちゅう耳にしているイレーネは、エルマの万能ぶりを、この数ヶ月でよくよく理解しているつもりだった。

つもりだったが、人伝てに聞くのと実際に目にするのでは、衝撃が段違いだということを、彼女は思い知った。

「さ、さすがね……。じゃ、じゃあ、私はリネンを洗濯に出してこようかし」

「あ、柔軟仕上げにしたのですが、外干しと内干しどちらがいいでしょうか」

「いつの間に!? じゃ、じゃあ、私は皮剥きの手伝いのほうに」

「こっそり皮の残りを使ってチップフライにしてみたのですが、いかがですか」

「だからいつ!? はっや! そしてうっま!」

瞬く間にあらゆる業務が、しかも完璧を超越した水準でこなされてしまい、イレーネの出る幕がない。

呆然としていると、エルマはこともなげに、

「実は少々早く目が覚めてしまったため、イレーネが寝ている間にこっそりと、自主的なお手伝いをしておりました」

と告げた。

イレーネは、デボラが残していったメモを慌てて辿り、なんとか

自分のできそうなミッションを確保する。

「わ、私にも少しくらいやらせてよね！」

そうして、部屋を飛び出して屋敷中の花の交換を済ませ、次に廊下でエルマとすれ違った時には、彼女は既に十近くの作業を完了させていた。

「こちらは花の差し替えが完了したわ。エルマは？」

「お陰様で豆拾いにベッドメイク、化粧瓶の補充とランプの煤取り、シルバー磨きとクローゼットの整理が完了しました」

「いい加減、神がかつてるわよ……!!」

「ついでに、池に虫が湧いていたようなので、浚っておきました」
「だから神かよ！」

動揺のあまり、ついイレーネの口調が乱れる。

ふと見渡してみれば、領主一家の人となり同様、どこか陰気な佇まいであった屋敷内が、いや、庭の池までもが、どこもかしこも美しく輝いていた。

「眩しい……!!」

「恐縮です」

エルマはあくまで淡々としている。

これにて、無事に彼女たちの突発的業務は完了したわけだった。

いったいどんな奇跡を起こせばこんなに早く仕事をこなせるというのか。

同僚の肩を揺さぶって全力で問いただしたい気もしたイレーネだが、しかし実際にやり方を教えてもらったところで、とても再現で

きまいと冷静に判断する。

彼女は再度意識的に気持ちを切り替え、エルマとともに部屋に戻った。

「ありがとう、エルマ。これだけ済ませれば、さすがのデボラ嬢も私たちの外出に文句なんて」

勝ち誇った笑みとともに、ドアノブに手を掛けたが、

「……なにこれ」

しかしイレーネは、そこで言葉を失った。

なぜなら、窓際に生けなおしたはずの花瓶が倒れ、粉々になって床に散らばっていたからである。

8・「普通」のお手入れ(4)

花はひしゃげ、のみならず、窓近くの棚に置いてあったイレーネの服や荷物は、ぐっしょりと水で濡れていた。

もちろん、繊細な花冠は、破片にまみれ、無残に花びらを散らしてしまっていた。

「……ひどいわ」

あからさまな悪意の形に、気の強いイレーネも青褪める。

これほどまでに、しかも持ってきた衣服のすべてを濡らされてしまったては、すぐに外出することなどできない。

乾いているのは、今着ている王城お仕着せのメイド服だけ。作業をした後で少々埃っぽいし、それ以上に、このまま町に出れば、悪目立ちしてしまうだろう。

かろうじて、自然に倒れてしまった態を装っているようだが、イレーネを足止めしようとするその意図から、犯人が誰だかはわかる。

デボラの仕業だ。

「信つじられない……。そこまでして、殿下と私のデートを阻みたいわけ？ 全然恋人同士なんかじゃないっていうのに！」

釣り目がちの翠色の瞳に、悔しさのあまり少し涙がにじむ。

だが、デボラが犯人だというのは推測に過ぎないし、問い詰めた

ところで相手は強引にごまかすだけだろう。

そもそも、身分差のことを考えれば、イレーネがデボラを弾劾するなんてできるはずもないのだ。

イレーネはさっと目じりを拭い、強気な彼女らしくシヨックを怒りに変換してやり過ぎすと、顔を真っ赤にしながら服を拾い集めた。

「最低！ ああもう最低だわ！ なにも祭りの日にこんなことしなくたっていいじゃないの」

彼女は、ぎゅっと布を絞りながら、想いを言葉で発散しつづける。そうすることで、少しずつ心の平静を取り戻そうとしていた。

「いくら私のことが気に食わないからって、あんまりだわ。そう思わない、エルマ？」

だが、返事がない。

怪訝に思っ顔を上げたイレーネは、友人が淡々とした様子で、部屋の片隅で作業をしているのを見て、目を見開いた。

小さなブラシを持ち、なにやら埃取りでもしている様子である。

イレーネはむっとした。

「ちょっと、エルマ！ ねえ、掃除の最終仕上げでもしているの？ あなたの友人である私がひどい目に遭っているのよ。ちょっとは私の怒りに共感してくれたっていいじゃないの」

そして彼女は、その苛立ちのままにエルマの肩をつかみに行った。

「あなたはさほど興味がないかもしれないけれど、私、服と同じくらい、お揃いの花冠を台無しにされたこともショック」
「おのれデボラ」

ぼそつと、地を這うような声での呟きに、イレーネは一瞬耳を疑った。

「……………は？」

「角度が特徴的な三角州に、極めて短い島形線……………指の下部に密集した汗線孔。十二の特徴点の一致を確認　間違いなく、デボラ様の仕業ですね」

「……………はい？」

先ほどから、彼女が何を言っているのかわからない。

「な、なにを、しているの……………？」

イレーネが、無意識に引き攣ってしまった声で問えば、エルマはこともなげに眼鏡のブリッジを押し上げ、

「指紋の照合ですが」

と答えた。

「シモン……………？」

よくよく見てみれば、エルマは小さなブラシを使って、小麦粉のようなものをはたいていたようだが、それがいったい何の意味を持つ行為なのか、イレーネにはわからない。

ただ、この友人のまとう雰囲気が、いつもと異なるようだということにはわかった。

「エ、エルマ……？ いえ、エルマさん……？ あなたもしや、その、なにかちょっと……怒ってる……？」

なぜだか、相手をさん付けしてしまう衝動に駆られる。

エルマは静かに眼鏡を外すと、その夜明け色の美しい瞳をぎらりと光らせた。

「彼女を殲滅します」

「いやむしろめっちゃ怒ってる　！？」

この友人はめっちゃ花冠をかぶって市に出かけたかったのだと、そのときイレーネは悟った。

基本的に感情の起伏が乏しいように見えるエルマが、そこまで怒りを露わにすることなど珍しい。

いや、珍しいというよりは、初めて見た。

周囲の空気の温度が、ぐんと下がったような感覚に、背筋が思わずぶるりと震えた。

「あ、あのあのあの、エルマ？ ちょっと落ち着いて？ その……花冠なんてまた作ればいいし、私の服もすぐ乾くじゃない。あの、どうかデボラ嬢への復讐なんてやめてね？ いえ、気分的にはぜひしてほしいところだけど、なんていうかあの、人の道を踏み外さないでね？」

「私が今まで人の道を踏み外したことなどありましたか？ というかなぜ止めるのですか？ 客観的に見て理不尽であるなら、腹を立てるのが『普通』なんでしょう？」

「いえ、あの、もちろんそれ自体は『普通』なんだけれども、あな
たの場合、ちょっと、その発露の方法が普通じゃなさそうっていう
か」

「デボラ・フォン・フレンツェル」

ももごと仲裁を試みるイレーネをよそに、エルマは低く呟いた。

「私の『ぶんぶん』を、思い知るといい」

まるで、世界に禍を降り注がんとする、魔王のような声だった。

8・「普通」のお手入れ(4) (後書き)

次回、探偵エルマによる犯人弾劾回！

…は、明日20時のお届けとなります。すみません) ; ;)

9・「普通」のお手入れ(5)

ソファに横になりながら、自堕落に焼き菓子を貪っていたデボラは、皿に突っ込んだ指がつるりとした底に触れたのに気付いて、ようやく顔を上げた。

「……やだ、からっぽ」

いつの間に食べ終えてしまったのか。
苛立つことが多いと、比例して間食の量も多くなる。

未練がましく指に残った砂糖の粒を舐め取ると、デボラは短く溜息を漏らした。

「ああ、むしゃくしゃするわ」

それは、もう四回目の独白だった。

二度と会えないと思っていた王弟ルーカスに、なんの因果か巡り会えたのが昨日のこと。

これは、哀れな自分に良縁を結べとの神のお導きに違いないと確信したデボラは、かといって男性の客間に単身押しかけるには恥じらいが勝ったため、とある作戦に出ていた。

それ即ち、ものすごく早起きして、ルーカスが起きだすのを待ち伏せするというものである。

早起きなどもう十年近くもしていない彼女が、それでも低血圧と

戦って寝台を離れ、一人で着替えと化粧を済ませ、薄暗い廊下を進む。

お目当ての部屋の隣　あの忌々しいふしだら猫の部屋　から、そっと少女が出てくるのを見つけたのは、その時のことだった。

咄嗟に物陰に隠れて観察してみれば、自分より一つ二つ年下と見える少女は、お仕着せのメイド服をまとい、淡々とした佇まいで洗濯物を運んでいる。

どうやら、客人という身分でありながら、洗濯を手伝おうとしているらしい。

デボラは身分の高い娘らしく、平民侍女のその勤勉ぶりを、あら感心なこと、とあっさり受け流したが、同時に、平民侍女にだけ働かせて、己は悠々と眠っているのだらうイレーネには腹を立てた。

これだから美人というのはいけない。

怠惰で傲慢で、性格が悪いのだ。

当て推量と思い込みのまま、盛大に相手のことを詰る。

その勢いのまま、デボラはさらに想像を飛躍させた。

あの女、イレーネはなぜ寝ているのだらう。

もしかして、夜更かしをしたのだらうか。

たとえば　殿下と？

そう思うとますます怒りは募り、無意識に握った手のひらに爪が食い込むほどだった。

腹が立つ。ああ、腹が立つ。

美人なんて大嫌いだ。

きれいな肌、大きな瞳、艶やかな髪を視界に入れるだけで、胃のあたりがそわそわする。

だって、それらはそこにあるだけで、自分のことを嘲っているように見えるから。

昨日ルーカスの恋人としてあの少女が伴われているのを見たときから、デボラは本能的に彼女への闘志を燃やしはじめた。

美しい顔にほっそりとした肢体、王都育ちという出自。その全てが疎ましい。

彼女たち美人は、ただ美しいというだけで周囲からの愛情を獲得し、おいしいところだけをつまみ食いしながら容易に人生を渡っていくのだ。

そしてその嫌悪は、今朝のその瞬間にさらに激しく燃え上がり、デボラに行動を決意させた。

彼女が嫌がらせのリストをしたためて、部屋に乗り込んで行ったのには、そんな経緯があつたのだった。

「とうていこなせない量押し付けて、ねちねち甚振ってやろうと思つたのに……ひどい計算違いだわ」

だが、彼女の憂さを晴らしてくれるはずの嫌がらせは、実際にはまるで機能してくれていなかった。

なぜなら、難癖を付けてやろうと屋敷内をうろついていたら、むしろ方々で、完璧な仕事ぶりを目の当たりにすることになってしまったからだ。

彼女が向かうよりも早く床は磨かれ、花は活け変えられ、皮むき

やシルバー磨きや服の整理は済まされていた。

そしてそのすべてが、今までに見たことのない高い水準で完遂されていた。

裏庭のドブ池までもが、青空のように澄んでいるのに気付いた時、思わず彼女は卒倒するかと思った。

(これが美人の、いえ、王都のクオリティというものなの……!?)

いや、そんなはずがない。さすがにそれは人智の域を超えている。きつと屋敷の使用人が、イレーネたちのことを総出で手伝ったのだ。

だがそうだとしたら、それはそれで腹立たしい。

あの女狐は使用人たちを誘惑したということだし、使用人たちはデボラを裏切ったということだ。

「服を台無しにして足止めするくらいじゃ生温い、殿下があの娘の本性に気付けるように、下男をけしかけてもすればよかったのだわ」

菓子がなくなってしまったので、デボラは苛々と爪を噛む。

瘴気を避け、日光も浴びずに屋敷に籠り続けた結果、最近ますます体はどっしりしてきたというのに、感情はゆらゆらと揺れて、一向に落ち着かない。

とにかくなにもかもが腹立たしくて、仕方がなかった。

一か所に佇むことすらできず、そわそわと部屋を歩き回り、たまたま扉の前を通りがかかった時、彼女はふと気になる音を耳にした。

ガシャーン。

なにかが割れる音。

使用人の誰かが、花瓶でも落としたようである。

「エルマ！　お願いよエルマ、落ち着いて！」

音を追いかけるように、少女の懇願の声が響く。イレーネのものだ。

エルマと呼ばれる平民侍女はなにかを答えたのか、わずかな間の後、イレーネの声はさらに必死さを募らせた。

「　ええ、そうね。そうだわ、あなたは落ち着いてる、その通りだわ。だから　お願い、落ち着いて！　せめて眼鏡を掛けて！　髪をダサくまとめ！　その顔を隠して頂戴、視界の暴力だわ！」

ガターン！

今度はモップを取り落としたような音がする。

どうやら、徐々にこちらに近付いてきているようだ。

「ほら！」

イレーネの悲壮な叫びが聞こえた。

「耐性のない人たちの呼吸と心臓に、甚大なご迷惑を掛けてるじゃないの！」

視界の暴力とはなんなのだろう。

文脈から察するに、エルマなる平民侍女が、イレーネの制止を振り切って、ひどい姿でこちらに向かっているということか。

それで、その姿を目撃した使用人たちが取り乱している？

首を傾げたデボラの目の前で、

「失礼いたします」

やけに美しい声が響き、同時に扉が開いた。

「……………っ」

ノブに手を掛けている人物を認めた瞬間、デボラはがっんと殴られたような衝撃を受けた。

そこには、天使かと思まごうような、美貌の少女がいた。

結んでいた名残か、緩やかに波打つ長髪は漆黒の輝き。

濡れた瞳は、夜明けの空を溶かし込んだよう。

完璧な左右対称に整った小さな顔、ほっそりとした肢体に、幼さを少しだけ残しながらも、わずかな色香を漂わせた佇まい。

肌の色が全体的にくすんでいるように見えるのだけが残念だが
いや、捲り上げた袖からちらりと見えた腕が、はっとするほどに
白く透き通っていることにデボラは気付いた。

「あ……………」

言葉を失った喉とは裏腹に、頭では目まぐるしく思考が駆け巡る。

自分はこの少女をどこかで見たことがある。

いや、忘れられやしない。

彼女はまさしく、舞踏会の場でルーカスと踊っていた美少女。

なぜ彼女がここに、と、今更ながらの疑問が脳裏をよぎったところで、目の前の娘が口を開いた。

「デボラ・フォン・フレンツェル様。なぜあのような仕打ちをなさったのですか」

少女にしては低めで、まるで透明な湖のように涼やかな声だ。

すっかり魅了されてしまったように、ぼんやりと声の紡ぐ内容を反芻し、しばらくののち、デボラはようやく自分が彼女に糾弾されているのだという事実気付いた。

どうやらあの冴えない平民侍女の正体は目の前の美少女で、彼女はイレーネに嫌がらせをした自分に対して怒りを覚えているのだ。

「……なにを言っているのか、よくわからないわ」

デボラは引き攣る喉を叱咤して、なんとか、しらを切った。

呼吸が止まるほど美しくとも、相手はただの侍女、それも平民ではないか。

自分が萎縮するだなんておかしい。

すると相手　エルマは、すうっと剣呑に目を細めた。

「さようですか。破片に付着した指紋と、先日デボラ様の召し上がっていた紅茶のカップから検出された指紋の特徴点十二点は完全に一致。現場に残されたガウージ痕の入射角から算出するに、身長5・4フィート、体重170ポンド、平均的腕力を持った人間が5・3フィートの高さから時速32・78マイルの速さで振り下ろしたも

のとお見受けしますが、それでもお心当たりはないと」「なにを言っているのか、さっぱりわからないわ!？」

本当にさっぱりわからなかった。

この美少女は、もしかして自分のことをからかっているのだろうか。

だとしたら、平民の分際でなんと無礼な

デボラは身の内で渦巻く怯えを無理やり怒りに変換し、ぎつと少女を睨みつけた。

「な……なんなの、あなた！ わたくしが花瓶を割っただなんて言いがかりを付けて、失礼じゃないの!」

「私は『花瓶』などとは一言も申し上げておりませんが」「はっ!」

お手本のような鎌かけに引つかかってしまった。

デボラは小太りの体をぶるぶる震わせながら口を押さえた。

だめだ。

どうも冷静な思考ができない。

この、神秘的な夜明け色の瞳を覗き込んだ瞬間から、もう少しマシだったはずの、取り繕ったり嘘をついたりする能力がまるで機能してくれない。

「お答えを頂いておりません」

すっ、と、睫毛が触れ合うほどまで顔を寄せられて、デボラは一

層パニツクに陥った。

「なぜ、私たちに嫌がらせを仕掛け、祭りへの参加を妨げたのですか」

「そんなの……」

妬ましかったからに決まっている。

相手から視線も逸らせずに、硬直してしまったデボラは、まとまらない思考の中から、一番に浮かび上がってきた言葉を口にした。

「あなたたちのような美人を見ていると、うっかり誰かをめっちゃくちゃにしたくなるくらい、息苦しくなるからだわ……」

ぼろっと溢れるようにして出てきた内容の苛烈さに、自分でも驚く。

しかし、口にしてみると、まさしくそれが真実なのだということに気付いて、デボラは熱に浮かされたように続けた。

「美人っていいわよね。それだけで愛されて、恵まれて、人が寄りてくる。ただ顔が、皮膚一枚の美醜が違うからというだけで。そんな不公平って無いわ」

そつだ、そつとも。

デボラはずっとそれが不満だった。

騒動を聞きつけ、今更ながら部屋に駆け付けてきた侍女たちを視界に入れながら、彼女は思った。

あの侍女たちも、もし自分がこの娘くらいに美しければ、競って側にいたがっただろうに。

「ひどいわ。わたくしのなにが悪かったというの？ 醜いのはわたくしのせいだと？ 仕方ないじゃない、瘡弱なのよ。全身が浮腫んでいるのも、肌や髪が荒れているのも、顔色が悪いのも、全部体質のせいよ。この領地に漂う瘡氣がいけないの。なのにあなたは、そんな哀れなわたくしを責めるの？」

デボラとて幼い頃は、フレンツェルの太陽と呼ばれた母に似て、なかなか愛らしい少女だったのだ。

しかし、ある日領内のぶどう畑で、たまたま瘡氣を放つ魔蛾に触れ、三日三晩寝込み、ぱんぱんに全身が腫れ上がった。

以降、肌も髪もスタイルも、徐々に徐々に、理想とはかけ離れていってしまったのだ。

ああ、哀れだ。

実に、実に、哀れだ。

「だいたい、あなたたちに配慮が足りないからいけないのよ。可哀想なわたくしは、瘡氣を恐れて、風がない日にしか町を出歩けないというのに、来て早々楽しく殿方と外出しようだなんて、無神経だわ！」

じつとこちらの話に耳を傾けているらしい相手に、デボラは自説の正しさを確信し、ますます熱を込めた。

「そうよ、あなたたちがいけないのよ！ 傲慢で、無神経なあなたたちの仕打ちに比べたら、わたくしのことなんだというの？ せいぜい男爵家の娘の服を濡らしたのと、ああそうね、みすぼらしい花冠も壊したかしら」

「口を閉じなさい、このお肉」

唐突に放たれた衝撃の罵倒に、デボラは文字通り硬直した。

「……………お、にく……………？」

少女の背後では、侍女たちがばっ！と口元を覆い、我慢大会を始めている。

「ぶっ……………！ ちょ、エ、エルマあなた、そんな言い方……………！」

「はい。腹立ちを言語化するにあたり、口汚い言葉の使用も検討しましたが、なにしろ私は落ち着いておりますので、婉曲に相手を非難する表現を選択してみました」

「結果最高にクリティカルな言葉選びになってるわよ！」

イレーネが目の前の少女を窘めてくれているようだが、それすらも耳に入らなかった。

呆然と立ち尽くしているデボラに、美貌の少女はぐいと顔を近づけ、囁いた。

「デボラ様の主張を要約しますと、ご自身は瘡痍 つまり、魔に弱い体質のせいで不美人なのであり、かつ不美人は美人に嫌がらせを仕掛けても当然ということですね？」

「あ……………う……………」

なにか。

なにかを言い返したい。

しかし、先ほどの暴力的な発言と、この暴力的な美貌を前に、体はすっかり麻痺してしまったようだ。

少女の神秘的な夜明け色の瞳を見つめていると、頭の芯が痺れ、言葉がどろりと溶けてしまうような感覚さえ抱く。

「よろしい。ならばその主張、根底から覆して差し上げましょう」
美貌の少女が、きっぱりと言い切った。
それから彼女は、すっと細い両腕を持ち上げ、手を組むと、おもむろに骨を鳴らしはじめた。

「ぎっ！　「ぎゅぎゅぎゅぎゅっ！

「ひっ……！」

まさか、自分に向かって手を上げようというのか。
咄嗟に腕で顔をかばったデボラだったが、その予想は外れたよう
だ。

なぜなら、

「これより、デボラ・フォン・フレンツェル様の、トータル・デトックス・トリートメントを開始します」

彼女はそんなことを言って、なぜだか眼鏡を再び装着しはじめた
のだから。

10・「普通」のお手入れ(6)(前書き)

予約投稿の日時が間違っていました！

1日先を生きてた…更新、微妙に遅れてすみません！

10・「普通」のお手入れ(6)

それから一時間の間に起こったことは、すべてデボラの想像をはるかに上回るものだった。

というよりは、その場に居合わせたすべての人間の理解の範疇を超えていた。

そのために、平民の侍女が、素早く部屋中のカーテンを閉め切り、眠くなるような香りを放つ灯りを整え、デボラをシュミーズ一枚の姿に剥き、香油と薔薇の花を散らした寝台に押し倒す頃になっても、誰もが呆然とそれを見守るばかりで、身動き一つ取れずにいた。

いや、いつの間にか用意されていた見学者用の小椅子に、しつかり座らされていた。

「わ……わ、わ、わたくしに、なにをしようというの……!？」

「増大・増悪したドーシャおよびアーマを体外に排出し、トリ・ドーシャの調和を取り戻します」

「は……………?」

あられもない恰好にされたデボラが、ようやく弱々しく問い詰めるも、エルマがあまりに堂々と意味不明なことを宣言するので、氣勢をそがれる。

自分がなにをされようとしているのかさっぱりわからないまま、ただ少女の放つ気迫に吞まれていると、ちなみに少女は、「施術者は清潔が第一です」と、お団子眼鏡姿に戻っていた、相手は、ずい、と、小さなグラスを突きつけてきた。

「まずはこちらをお飲みください」

デボラは寝台に身体を押し付けられたまま、冷や汗を浮かべてグラスを見た。

今、これはいったいどこから、いつの間に合成されて出てきたのだろうか。

突如現れたグラスの中では、どろりとした緑色の液体が揺れている。

爽やかなレモンの香りもするが、草の汁のような青い匂いはごまかしきれない。

まさか毒では、という懸念も頭をよぎり、デボラは慌てて顔を逸らせたが、馬乗りになった少女に、

「さあさ、どんどん」

くいと景気よくグラスを傾けられ、反射的にごくりと飲み下してしまった。

「……………っ！」

その瞬間、身の毛もよだつ悪臭と味わいが襲ってくる　かと思いきや、意外にも飲み口は甘く清々しい。

さっぱりと癖のない野菜の風味に、はちみつやレモン、林檎の酸味や甘みがほどよく加わり、美味と言って過言ではなかった。

そして後味に、どこか今までに味わったことのないような不思議な余韻があった。

デボラは思わずごくごくすべてを飲み干してから、問うてみた。

「……………これはなに？」

「特製デトックス酵素ジュースでございます。代謝を高め、老廃物の排出を促す作用があります。材料としては、厳選した緑黄色野菜に、りんご、はちみつ、レモン」

「意外に普通の材料ね」

「あとは、ミドリムシですね」

「ぶっふおお！」

なんでもないように付け足された言葉に、思わず盛大に吹きだす。エルマはくいと眼鏡のブリッジを持ち上げながら、

「池に湧いていたので、採集し加工させていただきました。環境がよいのか、大変けっこうな生育でした」

大層生真面目な口調で、フレンツェル家産のミドリムシの質を褒めていた。

「ミ……………ミド、ミドリムシって、虫……………わたくしに虫を飲ませたというの!？」

「まあ虫といえますか……………まあ、虫ですかね。動植物の境界をさまよう生物であるうえに、池の環境のせいなのか、これらのミドリムシについては微量な瘴気までまっており、通常の虫かどうかの定義も悩ましいですが」

「な……………っ!？」

無頓着に小首を傾げながらエルマが告げた内容に、デボラは顔色を失った。

瘴気の自分が、瘴気を帯びた虫、つまり魔蟲など摂取したら、命

にかかわる。

彼女は青褪め、慌てて胃の中身を吐き出そうとしたが、それよりも早くエルマが「さて」と呟くと、デボラの額をとん、と押した。

「それでは、これより施術に入ります」

「……!?」

不思議なことに、額を指先で押されているだけだというのに、デボラの身体はまるで寝台に縫い付けられてしまったかのように、ぴくりとも動かなくなってしまうた。

「な……………」

「術は主に手技によります。今回は短期間での効果獲得を目指すため、好転反応も相応に強く迅速に展開されるかと思いますが、それらはすべて老廃物を出しきるためのものですのであしからず」

「な……………だ、誰か……………」

淡々と説明するこの侍女の言っていることが、先ほどからさっぱりわからない。

わからなすぎて恐ろしい。

デボラは、とうとうなりふり構わず、周囲に助けを求めようとしたが、

す……………」

滑らか、としか言いようのない手つきで、エルマが彼女の身体をひと撫でした。

途端に、まるで湖底にこびりついていた藻が、流れに押されてほ

どけてゆくように、心の内でくすぶっていた醜い物思いがみるみる収まっていった。

すっ、す……っ

筋肉に、骨格に沿い、優しく撫でられるたびに、全身の力が抜けていく。

「あ……」

気持ちがいい。

デボラは、凝っていた氷が、温かな日差しを受けて溶け出すさまを思い浮かべた。

いつも身体のどこかに感じていたこわばりが、みるみる溶けて消えてゆく。

苛立ちが、焦りが、かすかな吐き気が、重さが、すべて輪郭を揺らがせていった。

(温かいわ……)

この手だ。

ほっそりとした小さな手はずなのに、掌はうつとりするほど温かい。

それはデボラに、幼い日に感じた母の抱擁を思い起こさせた。

フレンツェルの太陽と呼ばれていた母。

常に快活な笑みを浮かべていた彼女に抱き締められ、手を引かれ、世の中すべては光り輝いているのだと信じていたあの時代。

自分に欠けたものなどなにもなく、ただ、目の前の母のように、この聖なるぶどう畑を守っていくのだと、誇り高く畑の葉を見回した日々。

(懐かしい……眠ってしまいそう……)

夢見心地のまま、本当に眠りの世界へと誘われそうになり、デボラの太い首がかくんと寝台に反り返る。

そのとき、ばん、と慌ただしく扉が開き、部屋に踏み入ってきた者があった。

「おい、なにが起こっている!？」

真剣な表情を浮かべたルーカスである。

彼は、昼前で一度情報収集を切り上げ、宛がわれた部屋に戻ろうとしたところ、廊下に点々と腰を抜かした使用人たちが残されているのを発見して、緊急事態を察知し、やって来たのである。

憧れの騎士に、しかも下着一枚でいるところに踏み込まれたにもかかわらず、恍惚の境地に差し掛かったデボラは、もはやそれを気にするどころではなかった。

(ああ……世界は……温かい……)

陶然とした眼差しで横になっている伯爵令嬢を見て、ルーカスはぎよっと目を見開く。

座ったまますっかり硬直してしまっている侍女軍団の中から、イレネを見つげ出すと、ルーカスはその肩を揺さぶり、鋭く問うた。

「おい、イレーネ、しつかりしろ！　いったいなにが起こっているんだ！？」

「……………はっ。殿下……………！」

呆然と事態を見守っていたイレーネは、それで我に返る。

彼女が額に手を当てながら、

「ええと……………デボラ様が、花瓶をガウージ痕で……………エルマがぶんぶんで、デボラ様の言説を覆すべく、トリ・ドーシャの調和を取り戻しているのですわ」

もごもごと言葉を掻き集めて説明すると、ルーカスは胡乱な眼差しで「さっぱりわからん」とそれを一刀両断した。

が、彼もさるもの、二か月という期間にわたって常識圏外生命体エルマと接してきただけの順応力を発揮し、かなりニアに迫る状況理解を披露した。

「……………よくわからんが、デボラ嬢が仕掛けたなんらかの行動に対して怒ったエルマが、なにかを賭けてデボラ嬢にマッサージを施しているということか？」

「それです！」

マッサージ、という単語でまとめるには、エルマの行動は突飛だったし、デボラの表情はうっとりとしすぎているが、イレーネはひとまず頷く。

なぜなら、ルーカスと会話している間にも、事態は大きく変化していたからである。

ゆつたりと、エルマは見ていただけで溶けてしまいそうな手つきで優しくデボラを撫でていたのだが、彼女がおもむろに両手を掲げると、次の瞬間、

「はあっ！」

ぶわ……っ！

掛け声とともに、すさまじい風が巻き起こったのだ！

「きゃあ……っ！」

「な……っ！」

デボラは悲鳴を上げ、ギャラリーと化したルーカスたちも腰を浮かす。

風の発生源は、エルマの手である。

人間の手であるはずのそれが、視認すらできないスピードでデボラの身体の表面を縦横無尽に撫で擦り、それにより生じた風が、あたかも竜巻のように部屋中を蹂躪しているのであった。

いや、縦横無尽　一見なんの規則性もないかに見えるその動きは、実は綿密に計算しつくされており、その指先や掌、関節の出っ張りまでもが、髪一筋のずれもなく、デボラの血流に沿っている。手が力強いストロークを刻むたびに、デボラの中で溶け始めたものたちが、今度はすさまじい勢いで体の外へ向かって躍動しはじめていた。

「す……っ！　す……っ！　す……っ！」

「皆の者、頭を下げる！　座っているものは椅子の足を持ってかが

め！ さもなくば持っていかれるぞ！」

「ごうごうと吹き荒れる風にスカートをはためかせる侍女たちに、ルーカスが毅然と指令を飛ばす。

手近な数人をかばいながら、彼は目を眇め、風に齒向かい寝台を見つめた。

騎士として古今東西の武術や体術に精通し、動体視力にも恵まれた彼は、この場で唯一、エルマの腕の動きと、それがもたらしつつある効果を認識することができた。

脳裏では目まぐるしく大陸中の修行法に関する知識が展開され、やがて彼ははつと息を呑む。

「そうか、あれは……」

「なんですの！？ いったい今、なにが起こっているんですの！？」

「アーユルヴェーダだ！」

「はっ！？」

必死に椅子にしがみついているイレエネが、戸惑いの声を上げた。

一方、寝台の上では、デボラもまた大いに混乱していた。

(な……なにが起こっているの……！？)

嵐の渦中にあるような手技。デボラは今自らの肉体に生じている未知の感覚に、ぶるりと全身を震わせる。

いや、これは身震いではない。

全身が、大地が鳴動するかのようにぶるぶると波打っているのだ。

それはまるで、地殻変動。

冷え固まって不毛な大地と化していた己の肉体　ありていに言え
ば脂肪　は、今まさに、神の轟かせる雷鳴のごとき衝撃によつて罅を受け、内に秘めたる熱い血潮という名のマグマの突き動かすままに、頭を持ち上げんとしている。

荒蕪せる暗き大地　ありていに言えば脂肪　は、徐々にマグマの濁流に蝕まれ、吞まれ、細かな破片となりながら、やがて大きなうねりとなって、デボラの全身を激しく駆け巡ってゆく　！

デボラが脳裏に天地創造をありありと描ききったそのとき、

かっ！

閃光を放つ彗星を思わせる素早さで、エルマが今度はデボラの秘孔を突いた。

「あああああああ！」

デボラの絶叫にぎよっとしたイレーネは、思わず傍らのルーカスにしがみついた。

「今度はなんなんですかの！？」

「デボラのチャクラが開いた！」

「はいっ！！！！？」

11・「普通」のお手入れ(7)

動揺する周囲をよそに、デボラはふつと全身の力を抜き、寝台の上で大きく両腕を広げた。

(感じる……！ わたくし、今、……宇宙を感じている……！)

人間の身体を構築せし小宇宙。

幾千の命を内包したそれが、創造と破壊を繰り返しながら大いなる宇宙と融合する様を思う。

デボラはうつとりと目を閉じながら、深遠で広大な宇宙の根本原理の片隅で、静寂と死と真実とを思った。

(ああ！ 炸裂する光、衝突する生命。大いなる宇宙を吹き渡る真実の息吹と鼎たる肉体で唸りを上げときに澱み発露を求めて動きさまよう哀しくも愛おしい衝動の輝きが意識の外殻より立ち現れてトリ・ドーシヤの円環を回しながらアーユスのサットヴァを指してあmしようyskwplpwjna cspskl)

もはやその先は言葉にならなかった。

言葉を失ったのは周囲も同様である。

突然恍惚の表情を浮かべ、次に絶叫し、かと思いきや鳥のように寝台から飛び立とうとしたデボラを前に、とうとう侍女たちが硬直の呪縛を逃れ、一斉に腰を上げる。

彼女たちの傲慢な主人は、寝台で大きくもんどり打った結果、床

に叩きつけられ、視界から掻き消えた。

彼女たちは慌てて寝台に向かって身を乗り出したが

「……………ど……っ」

やがてむくりとその場に起き上がった「主人」の姿を見て、全員が全員、ぴたりと声を揃えて絶叫する羽目になった。

「どちら様ですかあああああっ!?!」

なぜならば、そこには、小太りの不健康そうな女ではなく、ほっそりとした、健康的な肌色の、つぶらな瞳が愛らしい伯爵令嬢がいたのだから。

ルーカスもまた愕然としていたが、目の前の人物が妙齡の女性であることを思い出し、ひとまずくるりと壁を向く。

彼の背後では、しどけない下着姿の美少女が、ふわふわとした目つきで視線をさまよわせていた。

「わ……………わたくしは……………?」

夢うつつのまま、周囲を見回す目には、もはや隈のかけらもない。パサついていたはずの薫色の髪は、収穫期の畑を思わせる艶やかな小麦色を呈し、たるんでいたはずの身体は、理想的と言える細さで女性らしい曲線を描いていた。

しかも　まるで全身の余分な肉を胸に集めたかのように、暴力的にバストアップしている。

エルマがすちゃっと差し出した鏡を見て、デボラは大きく目を見開いた。

奇跡の光景を見たように、鏡の中の自分と、己の頬に何度も触れ、彼女は泣きそうになりながら、エルマを振り返った。

「信じられない……！　あなた、いったいなにをしたの……！？」

肌の色が違う。

髪の色が異なる。

それだけならまだしも、もはや体のラインが別人のものだった。

エルマは怪訝そうに首を傾げた。

「ただ代謝を高め、脂肪に言うことを聞かせただけですが」
「なにそれ　！」

その瞬間、デボラもイレーネも侍女たちも、ついでに壁を向いたルーカスまでも、完璧に心をひとつにして叫んだ。

脂肪と意思疎通できるのかよ！　と。

脂肪をタイムせし者　エルマは、しかしその異常さなど全く気付かぬ様子である。

ただ彼女はとっくりとデボラを検分するように見渡し、満足げに頷くと、静かに問うた。

「いかがでしょうか、デボラ様。今のあなた様は、ずいぶんとお美しいと思いませんか」

「え……………」

文脈を掴みそこねたデボラは、戸惑いながら反射的に鏡を覗き込む。

そこには、太陽と称された母親の面影を確かに感じさせる、愛らしい少女が映り込んでいた。ついでに、たわわな二つの膨らみも。

「美しいわ……とても、とても……」

これが自分だなんて、未だに信じられない。

「ねえ、あなたは聖医導師か、さもなければ魔術師かなにかなの？
醜かつたわたくしを欠片も残さず、こんなふうに変身させてしま
うなんて」

「いいえ、デボラ様」

何度も感嘆の溜息を漏らし、崇拜の色すら浮かべはじめてデボラ
が呟くと、エルマがそれを遮った。

「私は単にあなた様の代謝を高め、お肉に、本来あるべき位置へと
移動願っただけ。これがあなた様の、もともとの姿でございます」

「もともと……」

「今一度問います。ご自身は瘴弱　つまり、魔に弱い体質のせいで
不美人なのであり、かつ不美人は美人に嫌がらせを仕掛けても当
然。だからデボラ様のイレーネに対する嫌がらせは、許されるべき。
……はたしてそれは、真実でしょうか？」

その問いかけに、はつとする。

顔を上げ、じつと眼鏡姿の侍女を見つめながら、デボラは震える
声で答えた。

「いいえ……」

いいえ。

だって、今の自分は醜女などではない。

瘡弱であつても、こんなにも美しくなれる　いや、本来ならば

この姿でいられたはずだったのだ。

今ならわかる。

デボラが醜かったのは、瘡気に身体を荒らされたからではなく、それを言い訳に屋敷に閉じこもり、不摂生な生活を続けたからだ。その証拠に、ごく微量の瘡気をまとう虫くらいならば、口に入れてもなんの問題もないほどだった。

「わたくしが……わたくしが、悪かったのだわ……」

この少女はデボラの主張を根底から覆すと言っていた。

実際その通りになった。

主張どころか、凝り固まっていた価値観を根底から覆されてしまった。

思い込みも、とげとげしい態度も溶かし消してしまったデボラは、だからすっと、自分でも驚くほど素直に謝ることができた。

「ごめんなさい。わたくしが……悪かったわ」

自身の非を認める言葉は、なぜだか自身の中でうわんと響いて、心の中で整理が付いていなかった物事たちを、たちどころに一本の線につないでしまう。

デボラは、自分が、これまでずっと傷ついていたのだということを、ようやく理解した。

「わたくし……拗ねてしまっていたのよ。ずっと、……魔蛾の鱗粉に触れて倒れたあの日から、ずっと」

屋敷に引きこもるきっかけとなった、ぶどう畑での魔蛾との接触。

あの日彼女がそこに赴いたのは、実は彼女なりの正義感を燃やしていたからだっただけだ。

領主の娘として、領地であるぶどう畑を見て回ろうと。その数日前に亡くなってしまった母の遺志を継ぎ、自分こそが、頼れる次期女主人として、畑をしっかり把握しよう。

なのに、倒れてしまった。

肌は爛れ、全身が浮腫んだ。

そのとき、彼女は思ったのだ。

自分は領地のためによいことをしようとしたのに、なんてひどい。

不幸だ。ああ、まったくもって、不幸だと。

「自分で自分を憐れんで……以降どんどん身体が太っていても、肌が荒れていっても、原因の根底にはあの日の出来事があるように思えていて……。わたくしは領地のために身を傷つけたのよ、哀れな女なのよ。なのにどうして、誰もわたくしを褒めて、労わってくれないの……そう思っていて」

けれど、そうではなかった。

デボラが己の身体を損ねたのは、自分自身のせいだった。

そう思うと、羞恥で顔から火が出るかのようにだった。

「わたくし……わたくし、……どうか、許して……。イレーネ嬢も……これまで八つ当たりしてきた、みんなも」

許しを請う声は、蚊が鳴くかのよう。

俯いてデボラが呟くと、イレーネと、それまでデボラと距離を取っていた侍女たちは、ちらりと視線を交わし合った。

それから、こほんと咳払いをして、各々、彼女に向かって穏やかに礼を取った。

「もちろんですとも」

それが、彼女たちの和解の合図だった。

身も心もすっかり浄化されたデボラは、その返答に嬉しそうに頬を染める。

そこには、高慢で醜かった女の面影はない。ただただ、いじらしく愛らしい少女の姿があるだけだった。

デボラが侍女たちと歩み寄り、甲斐甲斐しくドレスを着せてもらっているその傍らで、どんよりと死んだ魚のような目をしてエルマに話しかける者があった。

「おい、エルマ」

今朝まではたしかにデボラに執着されて閉口していた、しかし今となっては完全に存在を忘れられてしまったルーカスである。

「おまえ……何をやらかしてくれただ……」

「え？」

暗雲を背負ったルーカスをよそに、エルマは怪訝そうに、ことりと首を傾げる。

眼鏡でよく見えないが、きつと心底不思議そうな目をしているのだらうなど、ルーカスは思った。

「なにとおっしゃられましても……お手入れを施し、デボラ様にきれいになっていただくことで、ひがみ由来の苛立たしい諸言動を改めていただいただけですが」

「いやおまえ……」

はつきり言つて「きれいになる」の次元を超えすぎているだろう。おまえは手入れで人のチャクラを開くのか。体型や容姿を一変させるのか。

というかまがりなりに伯爵令嬢の言動をはつきり「苛立たしい」と表現してしまうのか。

あまりに多くの突っ込みが一斉にあふれ出し、かえって言葉に詰まる。

唇を引き攣らせたルーカスに、エルマはふと顔を上げると、きらりと眼鏡を光らせた。

「ところで、いかがでしょうか、殿下」

「は？」

なぜか彼女は、ものすごく誇らしげな様子であった。

エルマはまっすぐにルーカスを見上げ、心なしか弾んだ口調で告げた。

「今回私は、客観的に見て理不尽な状況できちんと腹が立ちましたし、法的にも倫理的にも、まったく人の道を踏み外すことなく、相手から謝意を引き出すことに成功しました。これはつまり、例のあの言葉でもって、評されるべき状況なのではないでしょうか」
「……………」

彼女はもしか、人ひとりを魔改造し、精神を根底から作り変え、瘦身美容術に革命を起こしておきながら、未だに人の道を踏み外していないとでも思っているのだろうか。

ルーカスは嫌な予感を覚えながら、努めて冷静な声で、エルマに指摘した。

「…………その、だな、エルマ。おまえがなにかしらデボラ嬢の言動で腹を立てたのだとして、被害がこの程度に収まったのは奇跡的と言えるし、法的にも倫理的にも、おまえの行動に、たしかに問題はなかったかもしれない。だが、いいか。エルマ、普通、人間は手で揉んだだけで、人の容貌や性格を根底から改造してしまうことなど」

「…………」
「そうそう、そこなのですよね。メスを入れて整形したり、脂肪吸引をすればもつと効果的かつ短時間で事が済んだはずなのですが、この場面で観血的手術を披露するのは『普通』ではないかと思っ、やめました」

「は？」
エルマの主張が理解できないのは、なにもルーカスが愚かだからではないはずだ。

愕然とするルーカスに、

「手を血に染めず、あくまで言語的および身体的対話によって和解を得る」

エルマは誇らしげに眼鏡のブリッジを押し上げて問うた。

「さすがにこれならば、『普通』ですよね？」

空間が凍りつく。

なんとも言い難い沈黙が、二人の間に広がった。

まるで犬が尻尾を振るかのようになり、一心にこちらを見上げるその姿。

きらきらと瞳 いや、物理的には眼鏡のレンズ を輝かせ、
「褒め言葉普通」の評価を期待する様子は、いつそいじらしくもあるのだが

ルーカスは、覚悟を決めて息を吐きだした。

「エルマ……おまえ……」

絆されそうになってしまおう自分をぐつと戒め、低く告げる。

彼の視線の先 エルマの背後には、とても見逃せない現象が起
こっていたからだ。

驚きの手技で、人ひとりをダイナミックに変身させてしまったこ
とそれ自体も、もちろん驚きではあるが

「普通、和解させた相手というのは、神を見上げるような狂信的な
色を浮かべて、こちらに祈ってきたりしないと思うぞ」

高慢で不細工だったはずの、現・清純系美少女伯爵令嬢は、両手
を組んで跪き、「感謝申し上げますわ、エルマ様あ……」と、うっ
とりこちらを見上げていた。

11・「普通」のお手入れ(7) (後書き)

…と、こんな感じで第2部も続きます。次話、監獄サイドとなります。

いつもコメントや評価をありがとうございます。

おかげさまで、いつの間にか「シャバ難」の総合ポイントが過去作に並ぶか、もしかしたら超えるかもしれないところまできました。いつでも最新作が一番面白い、と言われるように、努力を続けてまいりますので、

これからもどうぞよろしくお願いいたします。

12・革命

昼なお薄暗い監獄の一室。

独特の雰囲気をまとう男女に囲まれながら、クレメンスが真剣な表情で、最初に捨てるべきカードの検討をしていた。

一国の中枢にあつた者として、駆け引きの類は得意だ。

そしてまた、長く野心を飼っていた者として、彼は大の負けず嫌いでもある。

勝てば脱獄させてやるというこの勝負、たとえ囚人の戯言であつたとしても、クレメンスに勝ちを譲るつもりはなかつた。

(幸い手札は、強い役ばかり。これなら、造作もなく勝てる……)

冷静に手持ちの札を見つめたクレメンスは、密かに周囲の表情を見回しながら、そんなことを思った。

彼の対戦相手は、国の権力者に疎まれ失墜した元勇者と、思考能力をすべて筋肉に回してしまったような大男と、女のような青年、老人、子どもつばい青年と、そして娼婦だ。

どれも、宰相として海千山千の相手と渡り合ってきたクレメンスからすれば、たわいもないと言えそうな者たちであつた。

かろうじて、クレメンスと同類のように見える、物腰柔らかな老人　自分で言うのもなんだが、こつした穏やかそうな人間と言つのはたいていくくでもない本性を隠し持っている　と、表現しがたい迫力をまとうている娼婦のことは、警戒するに足る、と言える

が。

クレメンスは、わずか数秒のうちに戦略を構築し、最初に捨てるカードに指を掛けた。

じきに強力なカード同士の戦いになることを見越して、絵札や「2」の札は残しておく。

慎重を期して、手札の中では最弱の「7」辺りを捨て駒として確保しておくのもよいが、プレイヤーが多い以上、何度順番が回ってくるものかわからない。

下手に余力を残すよりは、弱い札をどんどん切り捨てていくべきだろう。

ハイデマリーの呼びかけから、最初は自分の番だと信じて疑わなかった彼は、おもむろに「7」の札を捨てにかかったのだが

「革命」

その横から、当のハイデマリーの声がかかり、同時に四枚の札が投げ出された。

「……………は？」

「あら、聞こえなくって、クレメンス？ 革命よ」

美貌の娼婦は、親切にも繰り返してくれるが、それでもなお意味がわからない。

というか、クレメンスはぼかんとしてしまい、展開に付いていけなかった。

「……………いや、そうではなく、私の番だと思ったのだが」

「あら、いやだわ。まさかご自身がゲームの親だと思っただけ？」

揶揄したつもりが、まるで自意識過剰の人間のように扱われ、羞恥でかっとながら顔が染まる。

一瞬言葉を詰まらせたその隙を突いて、ハイデマリーは艶やかに微笑んだ。

「というわけで、今からカードの強さはすべて逆転するから、よろしくね」

「……………なんだと……………!?!」

今度こそクレメンスはぎょっとした。

「どづいことだ……………!」

「どうもこうも、同じ数字の札を四枚出すと、革命が起こって、強さがすべて入れ替わる。れっきとしたゲームのルールであり、技よ」

「そんな価値基盤を根底から覆すアクロバティックな技を、初手から繰り出す者があるか！」

出会い頭に鉦をふるうかのような乱暴さだ。

クレメンスはハイデマリーのあまりの暴虐ぶりに、思わず普段心掛けていた穏やかな物腰も忘れ、絶叫してしまう。

が、周囲は慣れたように肩を竦めるだけだった。

「まったく、あんたって本当にこの手の攻撃が好きな女よね。まともな精神の持ち主なら、のっけから革命なんて起こしやしないわよ」

唯一、クレメンスの側に立って嫌味を投げかけてきたのは、なぜかクレメンスが過去に会ったことのある気がする、女顔の青年である。もっとも、彼は単に、この娼婦に対抗心を燃やしているがた

めにそう言っているに過ぎないようだが。

青年が大仰に肩をすくめてみせると、ハイデマリーは拗ねたように小首を傾げた。

「ひどいわ、【嫉妬】。なにも、わたくしだけが革命好きのように言わなくたっていいじゃない」

彼女は、革命によって乱れた場を流すと、ハートの女王クイーンに口づけ、テーブルの中央に置いた。

「かわいいエルマだって、今頃、出会い頭に物事の根底を覆すような真似をしているかもしれなくてよ」

なにを思ったのか、彼女はくすくす笑いながら、絵札の女王を愛おしげに指で弾いた。

「あなたが大切に育ててくれたあの子ですもの。会う人すべてに、必ず刺激をもたらさずにはられないはずだわ　もちろん、いい方にね」

「ふん、珍しく持ち上げるじゃないの。言っとくけど、褒められても手加減はしないわよ」

青年　リーゼルは、口では辛辣に返すが、その表情は満更でもなさそうである。

並の女性以上に「母性」の強い彼は、それを認められると、心のガードが緩まずにはいられないのである。

自慢の「娘」であるエルマのことを持ち上げられれば、特に。

「刺激といえ、あの子、ひとり暮らしになってもちゃんと肌の手

入れはしているのかしら。人の骨格肌質を根底から変質させられるくらいの美容術は仕込んだつもりだけど、美の道は一日にしてならず。ヨガやストレッチを欠かさず行つて、ときどきは強めに老廃物を流してあげないと、美のサットヴァには辿り着けないわ」

「……僕は常々疑問に思つてたんだけど、美の探究者が往々にして東洋系スピリチュアル世界にハマるのはなんでなんだろうね？」

リーゼルが心配そうに眉を寄せれば、すかさず隣のホルストが半眼で突っ込みを入れる。

それでも、人ひとりの骨格ごと変質させられる それはもはや魔術だ 技能を一介の少女が持ち合わせている事実については、なんの疑問も無いようだった。

なぜならば、

「ヨガよりもオペ、瞑想よりも脳幹手術だよ。精神力を云々するんじゃないくて、直接筋肉や神経にメスを入れれば、より確実に『美しく』なれると、僕は思っただけだね」

彼自身、医療技術を応用して、容易に人間の骨格ごと変質させられてしまうからである。

リーゼルとホルストはちらりと視線を交わし合い、

「お黙り、坊主。人間の美は内面の輝きからよ」

「内面って、物理的には神経と筋肉の集合のことを言うんじゃないの」

それぞれの信じる正義を戦わせた。

ついでに、それをカードで体現するかのようになり、各々、ダイヤの10やスパー드의7を乱暴に投げ捨てていった。

「やれやれ、よしませんか、お二人とも。【嫉妬】の精神的アプローチと、【貪欲】の身体的アプローチ。両者を吸収することで、エルマが至高の美の創造者になりえたのは間違いないのですから」
「ああ。エルマの作る酵素ジュースには、西洋の科学的メソッドと東洋の医食同源の精神、両者の融合を感じるな」
「あれは、うまいよな」

穏やかに宿めるモーガンも、それに同調するギルベルトも、言葉少なに頷くイザークも、なにげなく6や5、4のカードを放り出していく。

それを見ていたハイデマリーは、「あら」と声を上げた。

「数字も柄も縛られてしまったわね。クレメンス、あなたもつ、^{スト}3」のカードしか出せなくてよ」

「……なんだと？」

会話に取り残されていたクレメンスは、呆然と顔を上げる。
魅惑の娼婦は、長い睫毛を瞬かせると、ちよつと驚いたように小首を傾げた。

「いやだわ」

そして、くすつと無邪気に笑う。

「まさか、初手からもう出すカードが無いのかしら？」

彼女は、子どもの頭を撫でるようにクレメンスの頬に触れた。

「かわいらしい方ね」

それは間違いなく、侮蔑の言葉だった。

13・「普通」の探し物(1)

深夜、ケヴィンは、喉の痛みと咳で目覚めた。

よくあることだ。

病弱な身では、昼夜の気温の変化すら堪える。

ケヴィンは喉をさすりながら、鈍い動きで寝台から身を起こした。

(ふん、主人が咳をしたのにも気づかないなんて、のろまな使用人たち)

肺の辺りにわだかまる苦しさを、苛立ちにすり替えてごまかし、罵る。

病弱なあまり、屋敷に籠って本ばかり読んでいる環境は、彼に年齢以上の語彙力と厭味つたらしい性格をもたらした。

いや、他人に対し生意気な口を利けば優位を取れると信じているあたり、むしろ幼さの証左といえようか。

さて、このまま寝台で待っていても、執事や使用人たちが水を持ってきてくれるわけでもない。

変わり者の領主と嫌われ者の姉のせいで、この屋敷の使用人は年々数を減らしてしまっているのだ。

水が欲しければ、自ら動いて使用人に声を届けねばならない。

ケヴィンはのろろと熱っぽい身体を起こし、扉へと向かった。

なにかと倒れることの多いケヴィンの続きの部屋には、たいていの場合なら、使用人が待機することになっている。彼らが人手不足のせいでほかの業務に当たっていないければ、水差しを持ってこられる人間がそこにいるはずだった。

（ いや、それとも、あの客人の世話に回っているか？）

ケヴィンの脳裏にルーカスの姿がよぎる。

ルーデンの誇る色男。

王弟にして、武芸に優れた精悍な騎士。

金髪の美少女を侍らせていることも羨ましかったが、それ以上に彼の頑強な身体が妬ましかった。

ルーカス王弟殿下は、色こそ多少好むものの、気さくな性格で人望もあり、身分に囚われず、方々を自由に歩き回っているのだという。

病弱令息として陰口を叩かれ、領地から滅多に外出しない自分とは大違いだ。

くさくさした思いで扉に手を掛け、しかし耳に飛び込んできた言葉について手を止めた。

「 でね、本当にびっくりなのよ！ あの醜女令嬢が、まさかこうなる！？ って」

醜女令嬢。

姉のことだ。

どうやら続きの間では、侍女たちが噂話に花を咲かせているらしい。

ケヴィンはすぐに出ていくのをやめ、扉の前でじっと耳を澄ませた。

話し手の侍女の話を要約すると、デボラが今日一日で急激に痩せ、美しくなったということらしい。

なんでも本当に同一人物かと目を疑うような変貌ぶりとのことだが、ケヴィンは女特有の誇張表現だろうと内心で軽くあしらった。

同様に思ったらしい聞き手側の侍女が「またまた、さすがに言い過ぎよ」と苦笑を返す。

すると、話し手はますます声に力を込めた。

「信じてないわね？ もう。あなたも明日の朝、デボラ様の部屋にお伺いしたらいいわ。そうしたらあなただって、美の使徒エルマエル様の聖なる御手にひれ伏すに違いないから！」

「なによ、美の使徒エルマエル様って」

随分と大仰な呼称だ。ケヴィンも思わず眉を寄せていると、侍女は誇らしげに続けた。

「だから、デボラ様に奇跡の御業を披露した教祖様のことよ。エルマ様に、『^{エル}輝ける』の尊称を付けてエルマエル。天使みたいでしょ？ ……ってあらやだ、私、一番肝心なその辺りのことを話してなかった？」

どうやらこの侍女は、時系列に沿って話をするのが苦手なタイプらしい。ついでに言えばネーミングセンスもちよっとアレだ。

彼女は話を、デボラがイレーネに嫌がらせを仕掛けたところまで巻き戻すと、今度こそ、デボラの身に起こった奇跡の数々と、それをもたらしたエルマなる少女の詳細について話し出した。

いわく、眼鏡の下には心臓が止まるほどの美貌が隠されている。

いわく、指の一振りで十人分の仕事をこなしてしまう技量の持ち主である。

いわく、その手が触れるとたちまち万物は生命力を吹き返し、爛漫の頃を迎えるという、聖なる御手の持ち主である。

「もうね、すごい。すごかったのよ。人ならざる速さで繰り出したのが、瘴気を帯びた池の藻から作り出した『コウソジューズ』とかいうもので、それで新陳代謝がドーシヤでアーマで、最初穏やかにもみほぐしていたかと思ったら、そこからのチャクラ開放でサツトヴァなわけ。結果、傲慢でブスだったお嬢様が、たちまち清楚で美人に魔改造よ。わかる？」

「さっぱりわからないわ」

ケヴィンにもさっぱりわからなかった。

が、侍女の話の中には、看過できない情報があった。

人ならざる速さ。

瘴気。

魔。

フレンツェルの民は、魔蛾をはじめとする、魔族の眷属との戦いの末に土地を切り開いてきた者たちだ。

魔族が滅びた今となっては、昔ほど敬虔に魔を疎む人間も少なくなってきたものの、その中枢に近い人間であればあるほど、魔に連

なるもの、異質なものを排除したがる傾向にある。

ケヴィンは領主の息子として、「人ならざる」動きを見せたというエルマなる少女に、本能的な嫌悪を抱いたのであった。

古参であるらしい聞き手側の侍女も、似たような感覚を覚えたらしい。

彼女は、はしゃいでいる同僚に同調するのではなく、警戒をにじませた声で尋ねた。

「大丈夫なの、それ？ お嬢様が王都からの侍女の手を借りて美人になったのだとして　あまりそれが過激すぎると、魔のものと契約でも交わしたんだ、とか噂になったりしない？」

彼女はむしる忌々しそうに、鼻を鳴らしさえした。

「陰気で夜になるたび徘徊する領主に、高慢で引き籠りのご令嬢に、嫌味で頼りないご令息。ただでさえこの屋敷の一家は、領民から人氣が無いっていうのに、そこでデボラ様が魔と契約しただなんて噂が立ったら、あたしたち、もう街に下りられないわ。天使だなんて浮かれてる場合じゃないわよ」

「そりゃ、そうだけど……」

話し手側は、ようやくそのことに思い至つたらしい。

「でも、魔族なんて現代にはいないし、それに、変貌後のデボラ様は本当にいい感じで　」

と、小さく反論しようとしたが、それよりも深刻な声ですぐに遮られてしまった。

「魔族がいるかいないかが問題なんじゃない、そういう怪しげな噂が立つてことが問題なのよ。あなたはデボラ様付きで、滅多に屋敷の外に出ないから知らないんだろうけど、領地の不満はなかなかよ。特に、最近の魔蛾対策不足については、相当な不信感を抱いている。畑で魔蛾の卵でも見つかるうものなら、正直、一揆だって起こってもおかしくないと思ってるわ」

ケヴィンは静かに息を呑む。

彼はデボラよりは、少しは領地のことに関心を持っているつもりだった。

が、結局彼とて病弱であることを言い訳に屋敷にこもりがちで、外のことを十分把握できているとはいえないのだ。

ケヴィンは喉の痛みも忘れ、ぐっと拳を握りしめた。

（もしかして、ルーカス殿下はこのことを確かめにきたんだろうか）

彼のひととなりであれば、お気に入り入りの娘を連れて田舎の領地に遊びに来る、というのは十分あり得たが、それでもやはり、王家と対立的な境界の地に足を伸ばすというのには、少々違和感があった。

だがそれも、外遊を兼ねて領地の視察をしているということならば、しっくりくる。

（確かめにきた……というより、むしろ揺さぶりをかけにきた可能性もある、のか……？）

すっかり斜に構えることが習いとなったケヴィンは、目を眇めてそんなことを考える。

フレンツェルはその歴史ゆえに王都と仲が悪い。

フレンツェルの民には、魔を払いぶどう畑を守ってきたという自負と、独自のルールがあるのだ。

それを王都側が面白く思っていないことは、補助金の少なさや、領土の端に、腹いせのように建てられた監獄の存在からも明らかだった。

一方で、フレンツェルの産出する良質のワインは、近年ますます需要が高まっているようである。

(たとえば……ワイン欲しさに、領民と僕たちを不仲にさせて、その隙を突いて領地を併合してしまおう、とか)

フェリクス新王がどのような人物かはまだわからないが、先王ヴエルナーの治世では、たびたびそのようなちよっかいを出されたことがあった。

王都は、欲張りなのだ。

もっとも、その辺りの駆け引きを、父ヨーナスはけっして息子に教えてくれようとしなかったので、ケヴィンとてその内幕を知っているわけではないのだが。

とにもかくにも、ケヴィンは拳を握る手に力を込めた。

十歳の少年なりに、いや、十歳だからこそ、自らの正義感と責任感の正しさを確信し、領地を守るべきだと決意を固めた。

(民に一揆なんて、起こさせるものか……)

すぐに病で倒れ、成長も遅い自分。

背も低く、外見では十歳どころか、八歳くらいにしか見えず、それを周囲が頼りなく思っていることを、ケヴィンは知っていた。

けれど、知恵を使えば。

同年代の少年よりかは多少秀でたこの頭脳を用いれば、民の不満をやわらげ、王都からの干渉を払いのけることだってできるかもしれない。

いや、領主の息子ならば、そのくらいできなくてはならないのだ。

（魔蛾への不安は、僕が抑える。魔だのなんだの噂で、民の心を掻き乱したりはさせない）

まずは、ルーカスの真意を探り、牽制をすべきだろう。

いや、その前に、人ならざる動きとやらを見せて、フレンツェル家に奇妙な噂を立てようとした侍女エルマの、化けの皮を剥いでおいた方がよいかもしれない。

なにが聖なる御手だ。

どうせ姉に取り入って、道化のような化粧でも施して少々きれいにしてやっただけのことだろう。

あの姉は、攻撃的なわりに騙されやすい性格をしているから。

ケヴィンは寝間着の胸元に手をやり、きゅっと布ごと握りしめた。

そこには、母の形見である指輪が吊るされている。

命と引き換えに、自分を産み落としたという母。

彼女の指輪は、ケヴィンにとって原罪の象徴でもあるが、それでも、この屋敷の中で唯一、彼に愛の存在を感じさせてくれるものもあつた。

ケヴィンの周囲には、距離を置いてばかりの父親と、自分の哀れさに酔った姉と、彼を侮る使用人たちしか、いなかったから。

（距離を置いて、というよりは……憎んで、と言う方が正確かな）
布越しに感じるざらりとした肌触りに、ケヴィンはふとそんなことを思う。

フレンツェル領において、指輪は領主の証として、その母の結婚指輪を受け継ぐのが習わしであった。

出産時に命を落としたとはいえ、習わしは習わし。
指輪は埋葬されることなく、ケヴィンが物心つくまでの間、父ヨーンナスによって保管され、数年前にようやく手渡されたのだがその銀の指輪は、ひどく錆びて、刻まれた文字も読めぬ有様だったのである。

ケヴィンはそれにショックを受けた。

なにしろ、次期領主の身分を保証し、息子のなによりの財産になるはずの指輪である。

新品同様に輝いていることはないにせよ、せめて大切に保管くらいはされているものだと思っていた。

が、実際には、指輪はまるで故意に痛めつけでもしたように、錆びている。

そこに、自分に対する父親の敵意を読み取って　それでもなお、母との唯一のよすがを手元に置きたいという願いが勝り、結局ケヴィンは、指輪を指に嵌めることなく、鎖に通して胸に下げているのであった。

次期領主の証を堂々と周囲に見せられない、そのささやかな事実が堪らなく嫌で、それも手伝い屋敷の奥深くに閉じこもっていたのだが、もはやそれが許される状況ではない、とケヴィンは思った。

（明日の朝、領地の視察に行こう。それから、エルマとかいう侍女も、問い詰めないと）

父ヨーナスは、息子が人前に出たり、領主の仕事を手伝おうとするのをひどく嫌がる。

自分が今回出しゃばることで、彼は嫌な顔をするかもしれないが、知ったことが。

ケヴィンは鎖を手繰り寄せ、指輪にひとつキスを落とすと、結局水差しを頼むことはせず、そのまま寝台へと引き返した。

14・「普通」の探し物(2)

明くる朝。

ルーカスとイレーネ、そしてエルマの三人は、「散策」の名目でフレンツェル領の外れ　森の奥深くにまで足を運んでいた。

広大で恵み豊かなぶどう畑から、ゆるやかに隆起していく森は、奥のほうともなると峻厳な山と表現したほうがよい。

獣道の横からは、ときおり切り立った崖が覗き、その下では、昼なお暗い色をした波が、岩肌を打ち砕かれ、飛沫を飛ばしている。

優しく恵み深い自然と、険しく脅威的な自然が緩やかに隣り合うそれがフレンツェル領の特徴なのだ。

慣れぬ山歩きに悲鳴を上げ、休憩を申し出たイレーネは、眼前に迫る崖下の光景に、ぞっと背筋を粟立たせた。

「も……森から一步足を踏み外すともう海だなんて……この崖から落ちてしまったら　ああだめ、考えただけでゾクツとするわね」
「そうですね」

付き合いでイレーネの横に腰を下ろしたエルマは、まじまじと崖の先を覗き込み、頷く。

「実に激しい波です」

すると、さりげなく女性陣をかばうように自ら崖の側に立ったルーカスが、水で喉を潤しながら片眉を上げた。

「ほう、エルマ。おまえでも荒波に身震いするなんていうことがあるのか」

「それはもちろん。遠泳とはすなわち波との戦いです。暴れ馬のよ
うな波をどう宥め、どう泳ぎ切るのかを考えただけで、ぞくぞく来
ますね」

「……………は？」

両者の会話は一瞬噛み合ったようで、その実、海溝のような深い
断絶に隔たれている。

ルーカスたちが思わずぼかんとすると、エルマは懐かしむような
声で続けた。

「今年こそ機会を逃してしまいました。遠泳といえは夏の風物詩
ですよ。幼い頃は200マイルほどしか泳げませんでした。と
きおりクラーケンやリヴァイアサンのちよっかいを躲しつつ、毎年
少しずつ距離を伸ばしていったのも、いい思い出です」

「排他的経済水域まで越すのか!？」

「も、もしや、かつて食したクラーケンってまさかそこで!？」

両者がぎょつとして大声を上げる。

しかしエルマは、それも耳に入らぬ様子で、じつと崖の先の一点
を見つめていた。

「あの先の、切り立った崖下の、門のような形をした岩をスタート
地点に見立てて……………懐かしいですね」

視線の先にあるのは、いくつかの峰を通り越した、山の頂上。最
も鬱蒼とし、最も峻厳な表情を見せる、森の最奥であった。

最も高い崖を見下ろす、険しい辺境の土地。
昼なお暗く葉を重ねる木々の間からは、ほんの少しだけ、陰気な色をした建物が壁を覗かせる。

フレンツェル領の外れ、最も険しい場所　そう、そこには、大陸中の重罪人を集めた、ヴァルツァー監獄があるのだ。

「エルマ……」

遠い監獄の姿から視線を逸らさない友人に、イレーネが瞳を揺らす。

彼女は、眼鏡で素顔を隠したエルマから、それでも郷愁を感じ取り、そつと彼女の腕に触れた。

「懐かしんでいるのね。……それはそうよね。監獄とはいえ、あなたの家なのなもの。見れば懐かしくも感じるはずだわ」

「いえ、私はほとんど監獄から外出したことはなかったので、監獄の外観を見て懐かしいと思うはずはないのですが」

言われてみれば、そうである。

「　　というか待て、『ほとんど』と言ったか？　つまり、ときどきは脱獄していたということか？　遠泳の話も含めて、そういうことだよな？」

「それに厳密に言えば、監獄というよりは、先ほどから、このフレンツェル領を山から見下ろすたびに、懐かしさを覚えるのですよね。いったいこれはなぜなのか」

「おい、無視するな」

常識人ボジに収まりつつあるルーカスがツツコミを入れるが、エ

ルマは首を傾げたまま頓着しない。

基本的に雇用主よりエルマに優先順位を置いているイレーネもまた、ルーカスの言葉には注意を払わず、労わるようにエルマの腕に手を置いた。

「教えてあげるわ。それってやつぱり、あなたはホームシックに罹っているということなのよ。私も初めて王都に出たときは、故郷の風景でなく、そこから連想されるすべてのものを見ては、懐かしさを抱いていたわ」

「そうなのですか」

イレーネが諭すように告げれば、エルマは素直に頷く。そのあまりに純粹な姿を見て、イレーネは心を痛めた。

エルマ。

この万能で純粹で不思議な友人。

監獄は劣悪な環境だと聞くし、彼女の口から語られるエピソードも酸鼻なものばかりだが、それでもこの純真な彼女にとっては、監獄は故郷であり、家なのだ。

友人として、エルマを「真つ当な」環境に引き留めてやりたいという気持ちと、望む通り「家」に帰してやりたいという気持ちの、ちょうど半々に引き裂かれそうになりながら、イレーネは尋ねた。

「……帰りたいの？」

つい、無意識に友人の袖を引いてしまう。

エルマはことりと首を傾げると、小さく、

「そうですね」

と答えた。

それを聞いたルーカスとイレネは、素早く視線を交わし合う。罪悪感と、 ついでに言えば、エルマがダイナミック帰りなど目指そうものなら、そのためだけに一国を滅亡させかねないという懸念を覚えたからだだった。

「 ですが、今は帰れません。やはり、一度自分で決めたことである以上、皆さまから『普通』のお墨付きをもらってからでなければ」
「それは……」

相槌に悩み、二人とも曖昧に頷く。

ルーカスは一応、「今回の特命を無事こなせれば、義兄上からすぐにお墨付きがもらえるはずだ」などという慰めめいた言葉を口にしたが、しかしその瞬間、劇的ビフォーアフターし、エルマ信者と化したデボラの顔が脳裏をよぎり、それを引っ込めた。

着任早々、美容革命を起こして人ひとりを隷属させた人物に向かって、まさか自信をもって「無事こなせる」などの言葉は掛けられない。

というか、掛けたらそれすなわち、フラグになる気さえする。

ちなみに、昨日からこちら、デボラはエルマに濡れ落ち葉のごとくまとわりついてきたが、そのせいで、結局エルマは市に出かけられなかった、今朝一番にエルマ本人によって撒かれたため、この場にはいなかった。

「……まあ、今日こそは『普通』に過ごせるよう、頑張れ」

結局、牽制の意も込めて、無難にそう言葉を掛ける。

それからルーカスは改めて二人に向き直った。

「さて。浸っているところ恐縮だが、監獄見物は今日の主眼ではない。この先に、『デボラ沼』とあだ名される沼があるはずだ。民の噂では、瘴気すら漂う泥沼らしいが」

そう、彼は昨日収集した情報をさっそく活かし、とある場所の視察に来ていたのであった。

ルーカスがその精悍な容貌を惜しみなく発揮し、町の女性陣から聞き出した内容としてはこうだ。

フレンツェル領主ヨーナスは、昔は才気あふれ、たった十歳で鳴鎖なる道具を発明して魔蛾を追い払った神童であった。

長じて得た妻・エリーザは「フレンツェルの太陽」と呼ばれる美貌と陽気な性格を兼ね備えた女性であり、領主一家の人望は厚く、領の未来は輝いていたかに見えたという。

状況が一変したのは十年ほど前。

エリーザが息子ケヴィンの出産で命を落としてしまったことに端を發する。

愛妻家であったヨーナスは人が変わったように無口になり、妻が命と引き換えに産んだ息子のことも、まるで領民から隠すように屋敷に籠らせ、自らも距離を置くようになった。

娘デボラは瘴気の症状をこじらせて高慢な醜女令嬢と化し、息子

ケヴィンも身体の弱さを理由に、領の運営にも参加せず屋敷に引き籠もる日々。

領主一家の凋落と同期するように、畑では時折、鳴鎖に耐性を付けたらしい魔蛾の姿が目撃され、民は不安を募らせていた。

フレンツェルは王都にすら頼らぬ独立の土地。

通常なら領主に陳情し、解決を図るところだが、今のヨーナスは到底当てにならない。

あげくの果てに、ここ数年、ヨーナスは夜になるたびにふらりと屋敷を抜け出し、森の奥深くへと向かっているのだという。

森の奥とはすなわち、魔獣が跋扈し、瘴気の漂う、魔の領域。

こっそりと後をつけていった人物の証言では、ヨーナスは領主としてそれらを始末するどころか、森の最奥にある沼で、魔蛾をその身に引き寄せながら跪いていたというのである。

周囲に魔蛾の鱗粉を漂わせ、祈るように沼に手を浸す様は、まるでなにかの儀式を行っているかのよう。

彼は死した妻の反魂を試みるべく、魔と契約を交わそうとしているのだと噂が立つまで、そう時間はかからなかった。

「魔族はとうに滅びただろう、とか、目撃者もその場で問いただせよ、といった諸々の突っ込みは正直抱かざるを得ないが、この問題の根幹は、むしろ領民の魔蛾に対する不安と見た。彼らは、魔蛾が大切なぶどうを根絶やしにしてしまわないかと心配で、その不安や不満の捌け口を、領主一家に求めているようだ」

ルーカスは冷静に分析してそう告げる。

「そして、領民の不安の源泉であり象徴であるのが、その沼だ。彼

らは、領主が沼に魔蛾を飼っているのではないかとすら疑っている。とはいえ、もともと魔をなにより嫌う気質の民だ。自ら確かめにくいことも憚られ、結果憶測が憶測を呼び　と、まあこんな感じだな

「昨日の午前中だけで、よくそこまで情報を仕入れましたね。さすがですわ」

イレーネが感嘆して告げれば、ルーカスは軽く口元を歪めて、肩をすくめた。

「お褒めにあずかり、どうも」

女癖こそ少々悪いが、結局のところ、彼というのはまじめで有能な男なのである。

ルーカスは、ちらりとエルマの方にも視線を向けてみたが、彼女からは特になんのコメントもなかったため、少しだけ物足りなさそうな表情を浮かべ、再び崖の先、沼のある方角に向き直った。

「とはいえ、俺が話を聞いて回ったのは、主には町の娘たち、つまり領民の側ばかりだ。公平を期すなら、沼を見る前に領主側の言い分も聞きだしておきたかったところだが、これは俺の手落ちだな」

ついでに彼は、職務に関することでは、自分に厳しい男でもあるのだ。

ルーカスが素早く今後の計画を頭に描きながら、

「デボラ嬢があれだけエルマに懐いたのなら、近々、彼女をこっそりこの場に呼び出すことにするか」

と眩くと、エルマがすつと立ち上がった。

「かしこまりました」

「は？」

怪訝な顔をしたルーカスをよそに、彼女はぱちんと指を鳴らす。

「デボラ様、カモン！」

するとすぐ傍の茂みがガサツと揺れ、ひとつの人影が勢いよくルーカスたちの前に躍り出た。

「お待ちせいたしましたわ、エルマ様あ！」

デボラである。

15・「普通」の探し物(3)

すっかり頬を健康的なピンク色に染め、艶やかな小麦色の髪をきりりとポニーテールにまとめ上げた彼女は、声だけは甘つたるく媚びさせながら、エルマの前に跪いた。

「デボラ・フォン・フレンツェル、エルマ様のお呼びとお聞きし、風よりも速く馳せ参じましたわあ！」

「今どういったメカニズムで出てきたのこの人!？」

「というか昨日からさらに人格が崩壊していないか!？」

イレーネとルーカスが、双方異なる観点から突っ込む。

しかしエルマは、ことりと首を傾げるだけだった。

「……………? 普通にお呼びしただけですが」

彼女は、疑問を持たれることこそが疑問だったようである。

「普通、仲良くなった相手が助けを呼んだら、急ぎ駆けつけてくれるものですよね? こちらが心を込めてお世話したことがあるなら、なおさら」

「ねえ急すぎない!?! 到着速度どころか、キャラ崩壊の速度も急すぎない!?!」

「そうですね? モーリッツもいつもこんな感じで、『馳せ参じましたわあ!』と現れるので、特に気になりませんでしたか?」

「おまえ、牛の言葉がわかるのか!?!」

二人はいよいよ絶叫したが、エルマは「私が世話をすると、大体

このように打ち解けてくださるのですよね」とこともなげに告げるだけだ。

母ユリアーナには、エルマにあまり世話を焼かれないよう忠言したほうがよいかもれない、と思っただルークスだった。

と、エルマは驚愕してばかりで一向に話を進めようとしない周囲に代わり、ちゃきちゃきとデボラへの事情聴取を始めた。

「お呼び立てして申し訳ございません、デボラ様。実はかくかくしかじかで、ヨナス様がこの近辺を徘徊しているという噂の真偽と、仮に真実であるならば、その理由や経緯などをお聞きしたいのですが」

「なるほど……委細承知しましたわあ。エルマ様たちがこの辺境の地まで足を運ばれたのには、そのような事情があつたのですね……」
「おまえ今いつたいどの部分から我々の事情を理解したんだ!？」

ルークスたちはデボラの驚異のツーカーぶりに目を剥いたが、当人同士は深刻な表情で会話を続けるだけだった。

「まずは、私ごときにも事情をご説明賜りましたこと、感謝いたしますわ。このデボラ、けっして軽々しくエルマ様方の目的を周囲に言いふらしたりなどはいたしません。けれど……申し訳ございません、肝心の父の徘徊の理由については、わたくしにはわかりかねますの……」

「では、ヨナス様が沼の近辺に夜な夜な出向いている、という噂自体は真実なのですね？」

「ええ。ただ、毎夜というわけではありませんわ。決まった周期で、というわけでもない。わたくしも、なにぶん最近まで引き籠つておりましたし、恥ずかしながら家族とは不仲でしたので、父がなにを目的に出歩いているのかを把握はしておりません……」

ただ、と、デボラは悩んだように唇を噛んでから続ける。

「ただ、……もしかしたら本当に、父は魔に連なるものに手を出そうとしているのかもしれないわ」

「魔に連なるもの、とは？」

エルマが冷静に問うと、デボラは一瞬押し黙る。

それから、慎重に言葉を選びながら話しはじめた。

「……その、昨日エルマ様が浚ってくださった池、ありましたでしょうか？ そこには虫が湧いていて、しかも瘴気を帯びていたと」

「はい。厳密にはミドリムシは虫というより植物に近いですし、瘴気それ自体は大層微弱なものでしたが」

「それでも、瘴気を帯びた虫は魔蟲ということですし、魔蟲がいたという事実は我が家 瘴弱の私を抱えるフレンツェル家には重大なことですね。実際には、今の私に魔蟲の瘴気は影響しなかったのだとしても、幼少時の私の虚弱さや、弟の病弱ぶりを知る父によって、屋敷には瘴の気配が立ち入らぬよう、徹底されていたはずなのですから」

魔と戦ってきた土地の主であるフレンツェル家では、屋敷中至る所に魔を祓うための鉄と銀が吊るされ、領主は本来、責任を持ってそれらを監督するのだという。

「それが侵されたということは、我が家によほど悪意のある人間がその環境を導いたか、……さもなくば、父本人が、それを許した、としか……」

前者の、領民によほど嫌われているという可能性も否めないが、

しかしフレンツェルの人間だったら、腹いせに魔を導くような真似はまずしないとデボラは言う。

とすれば、瘴気の介在を屋敷に許したのは、領主本人。

屋敷内の池で魔蟲を飼うほどならば、領地の外れの池で、魔蛾を身にまとわせていた　つまり、魔蛾を使役していたという噂も、あながち外れではないのかもしれない。

「父は、幼少時には魔蛾を追い払う鳴鎖を発明した、神童だと評されておりました。もとは、発明や実験の類が好きな人なので。母が生きていたころは、父の発明はもっぱら畑を豊かにするためのものでしたが、母亡き後は、ずっと自室に籠り……。もしかしたら、そうやって母を取り返すための実験や研究を、していたのかもしれませんが」

王都では滅多に姿が見られず、下等な魔物とみなされる魔蛾。

しかし、ぶどうの生産を主産業とするフレンツェルにとっては、魔族の滅びた今や、魔獸をも上回り、最大と言ってよい脅威だ。

この地に伝わる童話や伝承では、魔蛾は魔族の筆頭眷属として描かれる。

その魔蛾と親しげに触れ合っていたということは、それすなわち、強大な魔と契約を交わしたと目されてもおかしくないのである。

俯いて告白するデボラの前に、ルーカスは自らの顎に手をやり、情報を繋げ合わせながら告げた。

「池の魔蟲のことは手掛かりたりえるが、それ以外はすべて憶測の域を出ない。そう思いつめた顔をするな」

「……ですが、昨日エルマ様が磨いてくださるまで、我が家の鉄や

銀の飾りはすべて錆びておりました。父は、瘡弱の私や病弱なケヴィンへの影響すら顧みず、瘡気を屋敷に持ち込もうとしていたのかと思うと……」

「王都では鉄や銀を魔避けには使わないし、ヨードス伯もそうした験担ぎをしないタイプというだけかもしれないだろう。実際に沼を見てみないことには、現時点での断定は早すぎる。思いつめるな」

ルーカスが冷静に断じると、デボラは「そうでしょうか……」と眉を下げる。

しかし彼女は、エルマがすつと傍らにしゃがみこみ、その顎をくいと持ち上げてくると、はっとしたように目を見開いた。

「私からも申し上げます、デボラ様。思い込みというのは人の目を曇らせるもの。自分にとつては揺るがしがたい真実だと思っていたものが、実は周囲からすれば奇妙奇天烈な事象だった、といったことは、世の中に多々あります。どうか今の時点から決め込んで、ご自身を追い詰めませんよう」

「エルマ様……！」

今のは少なからず自戒を込めた言葉だったのだが、そうと知らぬデボラは、全幅の信頼を置いた教祖を見たかのように、うっとりとした眼差してエルマを見つめた。

「はい……。わたくしの信じるたった一つの真実にして光、エルマ様が仰るのなら、そういったしますわあ」

桃色吐息、再びである。

デボラは頬に片手を当て、もう片方の手でエルマの腕の辺りをつんつんとつつくという、古典的な媚びスタイルまで披露して、甘い声を出した。

「本当に、エルマ様は頼りになるお方……。わたくし、こうしてあなた様にお会いできて本当に幸せ者ですわぁ。数日のみの逗留だなんて、寂しゅうございます。あなた様の生活はわたくしが保証いたしますので、いっそ一か月ほど……いえ、一年、いえ、一生このまま」

が、

「そのくらいにしろよな、姉さん」

デボラの妄言は、がさりと茂みを揺らして現れた人物によって遮られた。

少し癖のある金髪に、ほどよく整った小生意気そうな顔。

手足の細さと、体つきの薄さから、年齢以上に幼く見えるその人物は、フレンツェル家長男、ケヴィンであった。

16・「普通」の探し物(4)

「ケヴィン！ どうしてここへ？」

「……エルマ、さてはまたおまえが召喚したのか？」

「いいえ、私は特に」

ルーカスがつい半眼で問えば、エルマは首を振る。

ついでに、至極淡々と、

「屋敷からずっと、我々の後をつけていらっしやいましたが、半マイルごとに息を切らして卒倒しそうになっていらしたので、内心気を揉んでおりました。無事に到着されてなによりです」

と付け足したものだから、ルーカスは天を仰いだ。

「突っ込みどころは！　せめて！　一日ひとつまでにしてくれと！
あれほど！」

やけくそになってぼやくが、エルマは首を傾げるだけである。

そして、勇ましくこの場へ乗り込んできたケヴィンはというと、

「途中からしか聞こえなかったけど、姉上は、目を覚ましたほうがいいんじゃないのか。一介の侍女相手に一生そばにいろだなんて、手入れをしてもらったただかなんだか知らないけど、ずいぶん一日で骨抜きにされて……！？」

後ろ姿しか捉えていなかった姉の全貌を捉えて、ぎよっと目を剥いていた。

「ど……どちら様ですかああああああっ!?!」

「いやだわ、ケヴィン。あなたの姉、ブランニュー・デボラよ」

あまりのブランニューぶりに、本人認証が困難だったようである。ケヴィンは言葉も忘れて、大きく目を見開いたまま、麗しく変貌した姉の頭からつま先まで、何度も視線を走らせた。

「な……そ……、……っ、で……えええええええ……っ」

「なんでそんなに美しく、でもそれにしたって信じられない、だなんて言われても、エルマ様のお力としか答えようがないわ」

デボラは例の超解釈能力を披露しつつ、頬を染めてもじもじと答える。

それから、上目遣いでエルマの前で両手を組んでみせた。

「このように粗野で愚鈍な弟ですが、病弱で屋敷に閉じこもっていたがゆえの見識の狭さと、お目こぼしくださいます。どうぞ身分のことなど云々せず、普通の弟分としてかわいがっていただけますと幸いですわあ」

弟をかばうふりをしながら、ちゃっかり寛容な姉アピールである。

しかしエルマは、デボラの媚態には当然心動かされた様子はなく、淡々と「かしこまりました」と頷いた。

そして次の瞬間、ケヴィンの胸倉を目にも止まらぬスピードで掴みあげ、どすの利いた声で恫喝しだした。

「おう、ナマ言っただけじゃねえぞあ、ああ!? てめえに許された返事はただひとつ『はい』だけだ、それ以外をほざくようならケ

ツから手え突っ込んで奥歯ガタガタ言わずぞあ あああん!？」
「はひいいいいいい!？」

突然の暴挙に、ケヴィンが宙に浮いた両足をじたばたさせながら悲鳴を上げる。

これにはルーカスもイレーネもぎよつとして、慌ててエルマを取り押さえた。

「おい、なにをしている!」

「ちよつと、お尻からなにを入れるですつて!？」

いや、一名の突っ込みには喜色が混ざった。

だがエルマは制止されたのを不思議そうに眉を寄せるだけである。

「いえ、デボラ様が普通にかわいがれと仰ったので……」

うつかり、監獄内でスタンダードの「かわいがり」を実行してしまつたのだ。

ヴァルツァー監獄では、このように新入りは先輩囚人からきつちり仕込まれて、頂点に君臨する七人にけして失礼がないよう、徹底的に調教されるのが常である。

「肉体言語付きの、タイプ03のかわいがりのほうがよかつたでしようか……?」

「やめろ。絶対にやめろ」

ルーカスは頭を押さえて低く唸つたが、急に離されて尻もちをついたケヴィンは、それどころではなかつた。

「ひ……っ、ひ……っく」

領主の跡取り息子、そして病弱な少年として、嚴重に保護されてきた彼は、このようにワイルドな接触を取られたのは初めてだったのである。

ケヴィンはすっかり怖気づき、ベソをかきながらエルマを見上げた。

「な……、なんなんだよ、おまえ……っ」

それでも、平民の、それも女相手に気圧されてはならぬと自分を鼓舞したのか、わずかに残った気力を掻き集め、ぎろりと涙目で睨みあげる。

彼は懐に手を差し入れると、次から次へともものを取り出し、エルマへと投げつけた。

「お……おまえ、何者なんだ！ やっぱり魔性のなにかなんじゃないか！ 失せろ！ 失せろよ！ フレンツェルから出ていけ！ あ……姉上や僕を支配して、領を脅かそうたって、そうはさせないぞ……！」

銀の十字架、鉄の珠、にんにく、聖水、玉ねぎ。

少年なりに思い付いたのだろう退魔アイテムを、これでもかと取り出していく。

その中には、騎士団が実際に魔獣退治に使う聖水もあれば、俗信でしかないアイテムも多くまぎれていた。

エルマは器用にひよひよいと避けながら、料理に使えそうなものにくと玉ねぎの辺りだけちゃっかりと受け止める。

「乱暴な真似はおやめください。支配とはどういうことでしょうか」

「しらばっくれるな！ 姉上の変貌ぶりは異常だ！ おまえ、さては魔族の生き残りかなにかなんだろう！？ 奇妙な術を掛けて、僕のことも、脅して言うことを聞かせて、フレンツェルの領主一家は魔に乗っ取られたと……そう噂を立てて、民を不安に陥れるつもりなんだろうが！」

ケヴィンの主張はおよそ妄言の域を出なかったが、たったひとつだけ、この場の誰も知らない真実を言い当てていた。

が、もちろん誰の耳にも、彼の発言は不当な言いばかりとしか響かなかつたので、ルーカスたちは険しい表情を浮かべた。

とうとう弾を切らしたケヴィンは、慌ててポケットをまさぐり、護身用に忍ばせていたナイフに行き当たる。

彼は無我夢中でそれを掴み、目をつぶったままエルマに投げつけた。

「消えろ！ 魔性め！」

だが、相応の勢いで投擲したはずのナイフは、エルマを掠ることすらなく地に落ちる。

さっと腕を伸ばしたルーカスが、素早くナイフを叩き落としたからだった。

「……女に刃を向ける者があるか、馬鹿者め」

声はいつになく低く、剣呑な響きを帯びている。

いくらエルマが人外の域に差し掛かった予測不能生命体とはいえ、無実の女性を傷つけることは、彼の騎士道精神が許さないのであった。

「いつまで腰を抜かしている。立て。おまえが攻撃しようとした相手、おまえがやったことの重大さを、しかとその目で確かめろ。ついでにその妄言の根拠の無さもな」

「で……殿下！ そんなことを言っつて、あなたがこの女を使役しているのではないんですか！？ それとも殿下まで騙されているんですか！？ その女は到底普通じゃない。さつきから、魔のもでもない限りありえない行動ばかりしているじゃないですか！」

ケヴィンがきゃんきゃん吠えると、ルーカスは少々視線を逸らした。

「……いやまあ、たしかにこいつは激しく人間の範疇外の行動価値観発言を見せるし、はつきり言っつてその存在を同じ人類にくくつていいかは日々悩むところだが、とにかく女を傷つけるのはいかん。いけないはずなんだ」

「……殿下の発言のほうだが、先ほどからよほど盛大に私の心を傷つけていますが」

ぼそつとしたエルマの申し出は無視され、残念ながら誰も拾ってはくれない。

唯一、信徒のデボラだけが眉を寄せ、「ケヴィン、あなた、なんて愚かなことを」と弟を窘めようとしたが、

「それはこつちのセリフだ、姉上！ こんな魔性に誑かされて、領民にどう噂されているのか、わかってないのか！？」

すぐさま遮られ、きゃんきゃんと噛みつかれた。

エルマはなにかに気付いたようにふと顔を上げると、デボラを視線で制し、ケヴィンの前に進み出た。

「あの、差し出がましいようですがケヴィン様」

「黙れ、魔性！ なれなれしく僕の名を呼ぶな！ いいか、ころつと騙された姉上と僕は違う。僕は次期領主として、必ずおまえの魔手から家族と領民を守ってみせるんだからな！」

「いえあの、そのお志はともご立派ですが、その声変りを済ませていない高い声で叫びつづけられますと、きんきん響いてですね」

「僕を愚弄するのか！？ はっ、魔性の耳に障るというなら結構なことだ！」

「いえあの」

だが、ケヴィンはすっかり興奮してしまい、喚くばかりで耳を貸さない。

ぱつと立ち上がって性懲りもなく退魔的アイテムを探り、とうとう母親の形見の銀の指輪を懐から引っ張り出すと、それをエルマに付きつけてみせた。

「発育が遅いと僕を侮ったことを後悔させてやる！ これでも食らって、失せろ、魔性め！」

「いえあの、私は特に銀に対してなんの反応を示すものではないのですが、どちらかということですね」

エルマはケヴィンの背後をじつと見つめ、それから少しだけ首を傾げてみせた。

「あなた様の高いお声が、魔蛾を呼び寄せているようです」

「……………は？」

一瞬だけ、沈黙が落ちる。

その隙を突くようにして、

ざあああああ……っ

空が曇りはじめた。

いや違う、雲ではなく

大量の蟲が空を覆いはじめたのだ！

17・「普通」の探し物(5)

「……………なっ」
「き、きゃああああっ！」

ケヴィンはぎょっと目を見開き、瘡弱のデボラは青褪めてその場に尻もちを突く。

通常の蛾よりも二回りほど大きな、禍々しい模様を描く緑の翅。絨毛に覆われた胸部や触覚。

そして、まるで雪のようにふわりと舞い落ちる、大量の鱗粉。

瘡気を帯びた粉を撒き散らすそれは、まさしく 魔蛾の群れであつた。

「な、なぜこんなに大量の魔蛾が……………！」
「どうやら近くにあるという沼に、本当に大量群集していたようですね」

ケヴィンが呆然として呟くと、エルマが冷静に解説する。
その傍らで、デボラはがくがく震えながらエルマの服の裾に縋つた。

「た……………助けてくださいませ！ わ、わたくし、過去にあの鱗粉をわずかに浴びただけで体中が腫れ、腫れあがり……………」

その瞳には、うつすら涙まで浮かびはじめていた。

「瘴弱でなくとも、この量を浴びれば、通常の人間とて皮膚がただれ、肺が腐るやも……針に刺されれば、即死するやもしれません……！」

その恐ろしさ、そして見た目のおぞましさに、イレーネも震え上がる。

「そ、そんなことを言っただって、こんなに大量に来られたら、どう躲せば……！」

だが、雲のごとく空を覆う魔蛾の群れはあまりに多く、逃げようもないのであった。

「ひとまず服で全身を覆え！ 群れは俺とエルマで対処する。エルマ、できるか!？」

ルーカスがイレーネとデボラを引き寄せ、己の上着をかぶせてやってから、鋭くエルマに問う。エルマは即答した。

「もちろんでございます」

そうして、魔蛾の群れる宙を見つめ、なぜかすつと喉を押さえたのだが

「ひ……っ、くっ、来るなあああっ！」

背後に響いた幼い悲鳴に、眉を寄せ振り返った。

見れば、まるでちよっかいを掛けるように、群れから抜け出してこちらに近付いていた一匹の蛾相手に、ケヴィンが恐慌をきたしているのがあった。

肺が弱く、ついでに言えば精神的にも脆いケヴィンは、全身を強張らせ、再び尻もちを突いている。

過呼吸を起こしそうなほど息を乱し、その呼吸の合間に耳ざわりな罵声を飛ばしていた。

「く、来るなっ！ おぞましい！ 来るなああああっ！」

しかし、魔蛾には高い音に反応する習性でもあるのか、かえって興味を惹かれたような様子で、数匹、また数匹と、複数の魔蛾がケヴィンへと近寄っていく。

くすんだ魔蛾の群れが、一角からざああつと形を崩してケヴィンに襲い掛かるさまをみて、デボラが悲鳴のような怒声を上げた。

「この、馬鹿……！」

そうして、せっかく掛けてもらった上着を蹴り飛ばし、瘡弱の身にもかかわらず立ち上がる。

「その口を閉じなさいと言っているでしょう！」

言葉とは裏腹に、彼女は弟の身体の上に覆いかぶさった。

「姉上」

「口を閉じなさい！ しばらく息を堪えて！」

思ってもみなかった姉の行動に、ケヴィンが瞠目する。

が、その見開いた視線の先、デボラの背からわずか腕一本分ほど

の距離に魔蛾が迫っているのを見て取り、彼はとっさに、握りしめていた指輪を投げつけた。

「来るな……っ！」

恐らくそれは、彼が初めて、自分以外の誰かを守るために取った行動だった。

だが、やはり錆びていたからいけなかったのか、それとも銀が魔を被うなどということ自体が迷信だったのか、魔蛾は警戒すらしない。

指輪の軌道に沿ってすいと滑らかに身を躲すと、群れはそのままケヴィンたちに襲い掛かろうとした。

素早い動きとともに、鱗粉もまた舞い落ちる。

このままでは、ふわりと揺れる魔の粉が、あるいは魔蛾の繊毛に隠された毒針が、ふたりに触れてしまう！

ざっ………！

そのとき、一陣の風が巻き起こった。

え、と思う間もなく、急に視界が明るくなって、ケヴィンはとっさに目を眇める。

理由は後からわかった。

暗雲のように空に大挙していた魔蛾が、鱗粉ごと宙から一掃されていたからだ。

「え………！？」

ケヴィンは呆然と呟く。
今、いったいなにが起こったのか、目を開いていたはずなのにわからなかった。

そのとき、視界の隅で、ちかつとなにかが光った気がして、彼はとっさにそちらを振り向いた。

そこには、分厚い眼鏡で陽光を弾く、小柄な侍女の姿があった。

彼女はなぜか 巨大な布袋をふたつ、両手のそれぞれに携えている。

「……………?」

すっかり停止してしまった思考を、ケヴィンは、ぎぎぎ……と動きはじめた。

彼女が持っている巨大な袋。

あれはなんだろう。

やけに大きく膨らんで、いや、ところどころ、内側からなにかがぶつかっているかのように、ぼこぼこ揺れ、……なにやら羽音も聞こえるような

「……………!？」

「エルマ様!! 魔蛾を捕獲してくださったのですね!？」

ケヴィンが袋の中身を理解するのと、恐る恐る顔を上げたデボラが、ぱつと喜色を浮かべて叫んだのは同時だった。

デボラはどんと弟を突き飛ばし、その場で両手を組んでうっとりとしてエルマを見上げた。

「ああ！ ああ！ 感謝いたしますわ！ ありがとうございます！
すごいわ、こんな、鱗粉ひとつ漏らさず袋に取りまとめてしまっ
だなんて！ さすがはエルマ、エル様……！」
「過分なお言葉、恐縮に存じます」

高貴なる身分の辺境伯爵令嬢に全力で称えられても、エルマは眉
ひとつ動かさない。

淡々、としか表現できない様子で、手際よく魔蛾を納めた袋を縛
り上げていた。

「さすがだわ、エルマ……！ どうもありがとう！ けれど、今そ
の袋はいつたどこから出てきたの？」

「え？ 普通にバッグからですが」

「……なぜそんな大きな袋を持ち歩いていたの？ とか、どうして
そんな大きな袋がその小さな布鞆に収まっていたの？ というのは、
きつと愚問なのでしょうね……」

「え？ 普通、山歩きの際には持ち歩きませんか、大きめの袋？」
「……………」

イレエネも、最初こそ感激もあらわに叫んでいたが、相変わらず
のエルマのいかれっぷりに、つい沈黙を選ぶ。

魔蛾を閉じ込められるほど頑丈な、しかも人間用の寝袋を十人分
繋ぎ合わせたくらいのサイズの袋を、それも二枚も、いったいなに
に備えて持ち歩くというのか。

ルーカスもまた一瞬遠い目をしかけたが、助かったのは事実だと
頭を切り替え、エルマに呼び掛けた。

「感謝する、エルマ。だが俺にも少しくらい仕事をさせてくれ。魔

蛾を袋ごと焼き払ったあとに、灰に聖水を撒くから、それを貸してくれないか。後は俺がやる」
「え？」

しかし、責任感溢れるその言葉に、エルマはむしる怪訝そうな様子で眉を寄せた。

「……燃やしてしまうのですか？ せっかく捕まえたのに？」

「……退治するために捕まえてくれたのだろう？」

「いえ、まさか。山で生物と出会ったら、まずは穏やかに退場願って、それでもだめなら捕獲の上、ありがたく活用する方法を検討する、というのが山の掟ですよ？ それに従っただけなのですが」
「おまえはどこの世界線における山の話をしているんだ！？」

監獄における山の話である。

頭に手を突っ込まんばかりにして叫ぶルーカスに、イレネもまた青褪めた。

「か、かつ、活用するって、……まさかその魔蛾も飲みものにする気じゃないでしょうね……！？」
「え？」

エルマは嫌そうに顎を引いた。

「いやですね、普通、魔蛾なんて飲むわけないではありませんか。番わせて蚕にし、繭玉を茹でて絹を作ろうとしているだけですよ」
「魔蛾の幼虫を茹でようとする発想がすでに普通じゃないわよ！」

ついでに言えば、この友人にだけは「普通」を説かれたくない

思ったイレーネだった。

さて、助けられたケヴィンはといえば、先ほどから啞然としたままやり取りを見守っている。

すっかり会話に取り残されていたが、

「　　ということで、ケヴィン様、ならびにデボラ様。屋敷の調理場と鍋をお借りしてもよろしいでしょうか。あと、番わせる小屋を作るための木材も」

袋を握ったエルマがくると向き直り、まっすぐにこちらを見つめてきたことで、彼は我に返った。

「あ……いや、ええと……」

返りはしたが、しかし言葉が出てこない。

本当にこの小柄の侍女が、あれだけの量の魔蛾を仕留めたのか。いや、目の前で蠢いている袋を見ればそうなのだろうが、そんなことって可能なのだろうか。

なんだか害意はなさそうだが、やはり彼女は魔性なのだろうか。というか茹でるってなんだ、我が家に魔蛾を持ち込むのか、鍋まで使うのか、うわその鍋二度と使ってほしくない

思考がいつせいに噴出し、ぐるぐると脳裏を巡る。

結果として、押し黙ってエルマを凝視するだけのケヴィンに、デボラがそつと囁いた。

「　　ケヴィン。しっかりなさい。少なくとも、エルマ様に救われたのだということはわかったでしょう？　まずは、あなたも感謝を。」

そして、失礼な態度を取ったことを詫びなさい」

「あ……………」

姉に言われて、ようやくぎこちなく身体を動かしはじめた。

そのとき、無意識に手は懐に吊るしてあるはずの指輪を探りそれから彼ははっと目を見開いた。

「……………」

ない。

そうだ、銀の指輪は、先ほど魔蛾に向けて投げつけてしまったのだ。

ケヴィンは息を呑み、慌てて周囲の茂みを掻き分けた。

地面の上には ない。

木の根元には ない。

葉の陰にも、人の足元にもない。

指輪はおそらく、魔蛾が群れを成していた宙を通り抜け 崖の向こう側へと落ちてしまったのだ。恐ろしい波が飛沫を上げる、崖壁の向こうへと。

「ああ……………母上の指輪が……………」

ケヴィンは青褪め、絶望の呻き声を上げた。

17・「普通」の探し物(5)(後書き)

次話、エルマの探し物無双(前編)。

18・「普通」の探し物(6)

ケヴィンは四つん這いになって、恐る恐る崖の縁を覗いてみる。

遙か遠く、めまいを覚えそうなほどの高さを誇る崖の下では、黒い波がごう、と唸りながら岩にぶつかって砕け、とてもそこに降りていく勇氣は持てなかった。

「母上の、形見が……」

命と引き換えに自分を産んだという母。

顔すら知らない彼女と自分を繋ぐ、指輪はたったひとつの絆だった。

そしてまた指輪は、次期領主の座を示す証でもある。

それは唯一、病弱で発育も悪いケヴィンに対し、領主の息子たることを認め、求めるものでもあったのに。

「……………」

生意気そうなケヴィンの瞳に、じわりと涙がにじむ。しかし、彼はそれを零すことはしなかった。

自業自得だ。

「……………僕は領主にふさわしくない、ということか……………」

代わりに彼は、幼い唇に自嘲の笑みを刻んだ。

ケヴィンが指輪を失ったのは、ほかに武器がなく、しかも冷静さを欠いていたためだ。

ではなぜ武器がなかったかといえば、それは彼らを助けてくれたエルマに対し攻撃を仕掛けていたからであり、なぜ冷静さを欠いていたかといえば、自分が魔蛾を呼び寄せ、しかも姉を追い詰めてしまったせいである。

どれもこれも、自分自身のせいであった。

「……取り乱して 攻撃して、悪かった」

「ケヴィン……」

「ごし、と目じりを拭い、ケヴィンがエルマに向き直って短く詫びると、デボラは驚いたように瞠目し、ついで眉を下げる。

ルーカスやイレネも素早く視線を交わし、後味が悪そうに肩をすくめた。

が。

「 謝るのはこちらのほうでございませす」

なぜだかエルマはすつとその場に跪き、深々と首を垂れた。

「私もう少し早く魔蛾を取り押さえておけば、防げる事態でございませす」

「……いや、そんなことは」

「ございませす。つい、番わせるときに効率がよいようにと、オスとメスを別の袋に仕分けながら捕獲したことで、手間取ってしまひ……大変申し訳ございませんでした」

「そんなことしてたのか!？」

ついケヴィンはぎょっと叫んでしまう。

しかしエルマはその突っ込みは聞き流し、ぐっと軽く拳を握った。

「お詫びに、指輪を探してまいります」

「はっ!？」

これには、ケヴィンだけでなく、一同が驚愕の叫びを上げる。特に、デボラとイレーネは慌ててエルマを止めにかかった。

「な、なにを仰るのですか、エルマ様! 指輪は海に沈んだのですわ!」

「そうよ、まさか海へ飛び込むつもりじゃないでしょうね!」

人、それをフリと呼ぶ。

エルマはきらりと眼鏡を光らせ、頷いた。

「はい、そのつもりですが」

「馬鹿!っ!」

イレーネは思わず罵声混じりの悲鳴を上げた。

「あなた、あなたね! わかってるの!? 海よ!? 海なのよ!? 海は広いの、大きいの! 見つかるわけがないでしょうっ
てこら! 今すぐにでも崖から飛び降りようとしな!」

と、思い立ったら即実践のエルマが、ぼいと靴や靴下を脱ぎはじめたのを見て、彼女はいいよいよ恐慌をきたした。

「殿方の前で素足を見せないの！ あああつ、裾を持ち上げないで！」

「やめろ、エルマ」

ルーカスも眉を寄せて、エルマの腕を取る。彼は至近距離から、険しい顔で低く告げた。

「ケヴィンには気の毒だが、おまえが探してやる義理はない。目を覚ませ、そもそもこんな崖から飛び降りて、無事でいられるわけがないだろう？」

苛立ちは、心配に由来するものだ。

エルマの驚異の身体能力は知っているし、突飛な行動だって何度も目にしているが、かといってそれは、目の前で少女が崖から飛び降りようとしているのを止めない理由にはならない。

「ごつごつとした岩肌がむき出しとなった、高い崖なのだ。」

身を投じたらその場で岩の壁に叩きつけられるかもしれないし、海面から突き出た岩礁に身を貫かれるかもしれない。

濁流に引きずり込まれ、海の藻屑となってしまう恐れだつてある。

そんな中で、どこに沈んだともしれない小さな指輪を探そうなど、狂気の沙汰だった。

「ですが、私、泳ぎには少々覚えが」

「だとしてもだ。いいか、言っておくが、海で数百マイルも泳ぐなどというのは『普通』ではないぞ。指輪を探すためにこの海を泳ぎ切るものなら、たちまち『普通』のお墨付きは消えてなくなることになるが、それでもいいのか？」

卑怯とは承知しつつも、エルマにとって一番有効な切り札をちらつかせてまで、制止する。

エルマはちょっと顎を引き、唇を引き結んだ。恐らく、眼鏡の奥の瞳はじつとこちらを見上げていることだろう。

ルーカスは、つくづく今、彼女が眼鏡をしてくれていてよかったと思った。

あの美しい夜明け色の瞳で、拗ねたように上目遣いなどされた日には、「だから仕方ない、俺が代わりに飛び込もうか？」などとうっかり口走ってしまいそうだから。

「……かしこまりました」

長い、長い沈黙のあと、結局エルマはそう答えた。

ルーカスも、傍で聞いていたデボラやイレーネたちもほっと胸を撫でおろす。

しかし、次の瞬間、エルマは思いもよらぬ言葉を放った。

「では、それ以外の方法で、指輪を探します」

「はっ!?!」

まだ諦めないというのか。

眉を寄せたルーカスの隙を突き、エルマは腕を振り払って数歩後ろに後退する。

け いったいなにを、と見守る周囲の前で、彼女は軽く予備動作を付

「はっ!」

勢いよく、崖の向こうに飛び込んだ！

「……………っ！」

「きゃあああああっ！」

男性陣は息を呑み、女性陣は絶叫する。

慌てて崖に身を乗り出した彼らの視線の先で、エルマは落下しながらくるくると宙返りを決め、滑らかな入水ノースブラッシュを決めた。

「あの、馬鹿……………」

「エルマああああっ！」

「水しぶきひとつ上げない、完璧なリップクリーン・エントリー！
痺れますわ！ ってそうではなくて……………エルマ様……………っ！」

約一名、完全にエルマに心酔しているデボラだけは、心配しながらもつい彼女を称える言葉を口にせずにはいられない様子だ。

ケヴィンは、青褪めて崖下を覗き込む三人の背後から、呆然と海を見つめた。

そして、自らも手で口を覆い、さあつと血の気を引かせた。

崖にぶつかって砕け、飛沫を残しながら唸る黒い波。

小舟くらいなら丸ごと海底に引きずり込んでしまいそうな、獰猛なうねり。

今そこに、人が飛び込んだのだ。

年上とはいえ、成人もしていない小柄な少女が。自分のために。

「……………っ」

ケヴィンはひゅ、と喉を鳴らした。

なんてことを。

なんとということ。

彼女は、自分は、いったいなんということをしてしまったのだ。

「馬鹿め、波間に落ちたわけではないとはいえ、この濁流だ、溺れない保証はないぞ……！ くそつ、俺は山を下りてボートを用意する。イレーネ、おまえはそこからエルマの姿を探して、俺に向かって叫んでくれ」

「は……はい……っ！」

イレーネは両手を組み合わせたまま、何度もこくこくと頷く。

「は、早く、エルマを引き上げてやってくださいませ……！」

うわごとのように叫ぶのは、いつまで経ってもエルマが海上に出てこないからだ。

深くまで沈み、それから浮かび上がってくるのだとしても、時間が掛かりすぎている。

まさか、勢いよく入水したはいいものの、その先で溺れているのではないか。

水面下にあった岩にしたたかに身体をぶつけたのではないか。水に棲む魔物に襲われたりしているのではないか。

瞬時にいくつもの、恐ろしい可能性が脳裏を駆け巡り、イレーネは震えた。

「エルマ……っ、『普通』でなんかなくていいから、泳いで私たちのもとに、帰ってきて……っ」

関節が白く浮き出るほどの力で両手を握り合わせ、祈る。
と、そのとき

「ああっ！！」

横で四つん這いになり、崖下に教祖エルマエルの姿を探していたデボラが叫んだ。

「ご覧くださいませ！ あそこ……！！」

喜色の滲む声に、イレーネだけでなく、山を駆け降りようとしていたルーカスまでもが慌てて振り返る。
彼らの視線の先、渦巻く波の間には、

「エルマ！！！」

波間から上半身だけを覗かせた、エルマの姿があった。

彼女は周囲で飛沫を上げる波をもともせず、眼鏡の角度すらずらさぬまま、悠然と片手を上げている。

そのほっそりとした手の先には、きらりと光るなにかが握られていた。

細い鎖に繋がれた、陽光を弾いて輝く輪。

ケヴィンの 母の形見の指輪だ。

「エルマ……！！！」

宣言通り指輪を取ったどーしてみせたエルマに、イレーネやデボラは感嘆を滲ませた叫びを上げる。

しかしルーカスは、あることに気付いて眉を寄せた。

「……………?」

エルマは一見、波間にぶかぶかと浮かんでいるだけのように見える。

見えるがその実、滑らかにこちら側へと移動していた。

いや、滑らかでありながらも、ぐんぐんとかかなりのスピードで近づいてきている。

崖との距離が縮まるにつれ、徐々に海面上に全身が持ち上がっていき、それに伴い、エルマが今どういう状態であるのかが明らかになってきた。

彼女は、ペナントのように三角形をしたなにかに捕まっていた。いや違う、ペナント状の取手を一部に持つ大きななにかの上に立っていた。

流木ではない。

漂流していた舟の残骸でもない。

なにかもつと、ぬらりと艶やかな体表を誇る、巨大で、ダイナミックに全身をうねらせている

くじら。

「 !? 」

ルーカスは思わず、崖に嘔りついて絶叫した。

「おまえ、いったいなにに乗っている

!? 」

19・「普通」の探し物(7)

「おまえ、いったいなにに乗っている　　!？」

ルーカスの、その魂の叫びシヤウビが聞こえたのか、エルマはふと顔を上げる。

なぜか彼女はこくりと頷くと、足下のくじらに向かって何事かを囁いた。

すると、ペナント部分がぐいんと回転して波間に沈み、くじらのぬらりとした、広い背中が上になる。

どうやら、エルマが捕まっていたのは手ひれの部分で、くじらは捕まりやすくするために、今まで斜めに傾いで泳いでいたらしい。驚きの献身だ。

それからしばらく、くじらとエルマはじゃれ合うようにしながら、縦横無尽に海原を駆け巡った。

くじらが尾で勢いよく海水を弾く。

エルマが腕を差し込んで角度を調節し、虹を掛ける。

くじらがカモメに届きそうなほど高くジャンプを決める。

エルマがどこからともなく鰯のような魚を取り出し口に放り込む。くじらが嬉しそうに身をくねらせる。

飛ぶ。

跳ねる。

ボールに見立てた飛び魚を追いかける。

阿吽の呼吸で海を駆るエルマとくじらは、さながら約束された伴侶、運命の片割れ。

その姿は人馬一体、いや、まさに人鯨一体といえる境地であった。

「……………く、くじらはエルマのベターハーフなの……………!?!」

「ああっ！ 二人の上げた飛沫が今ハートの形に……………!!」

きゃっきゃうふふと戯れる少女とくじらに、イレーネたちが何度も目を擦る。

ルーカスは無言で天を仰ぎ、ケヴィンはといえば じっと、食い入るようにエルマの姿を見つめていた。

ひとしきり水遊びを楽しむと、くじらは満足したらしい。

くるりと方向転換し、エルマを背に乗せたままぐんとスピードを上げ、あっという間に崖下までやってきた。

しかし、崖壁は威容を誇り、とても人間がそこから登ることができる代物ではない。

だがエルマのことだ、さてはくじらから降りて、今度はロツククライミングでも披露するのかと、一同は固唾を飲んだが

ピューイッ

エルマは右手で輪を作って口笛を鳴らし、左手を背中の後ろでばたばたと振ってみせた。

途端に、くじらがぐつつと頭を海に沈め、その場に静止する。

「こ、今度はなにをする気なの……………?」

「あれは、もしか…!!」

上擦った声で問うイレーネをよそに、ルーカスのはっと息を呑む。彼は、幸か不幸か、鯨が見せた予備動作がなんのためのものかを理解できてしまった。

頭を沈めた鯨。

その周囲では、濁流がさらに激しさを増して渦を巻く。大量の海水が飲み込まれているのだ。

そうして、くじらの巨体に溜め込まれた海水は

ぶしゃああああああつ!!

「潮を噴いた　　!!」

くじらの潮へと転じ、力強く天を目指した。

雲にも届きそうな水柱のてっぺんに、影が見える。

それは、接水面積を減らすためなのか、片足を上げて抱え持ち、Y字の形でつま先立ちしたエルマの姿であった。

「飛んだ　　つ!!」

エルマ、飛翔^とぶ。

その信じられない現実に、一同が顎を外しそうになりながら絶叫する。

彼らの視線の先、エルマは崖よりもはるか高くまで上昇すると、

一度くいと眼鏡のブリッジを持ち上げた。
逆光の中、レンズだけがきらりと光る。

そして、空中で膝を抱え、くるくると回転しながら、
崖に着地した。

「前方抱え込み宙返り3回半ひねりいいいいいい!?」

「小麦一粒のずれも許さぬ会心のフィニッシュ!」

もはや帰還というよりは、難易度Hの競技を見守るような心持ちである。

イレーネたちは顔を紅潮させ、「ブラボー!」と叫びながら手を打った。

しかしエルマ本人はといえば、それらの喝采には一切心動かされた様子はなく、ゆったりとした動作でケヴィンの前へと踏み出し、ずぶ濡れのメイド服の裾をつまんで礼を取った。

「侍女、エルマ。お探しの指輪を見つけてまいりました」

そう告げて、しずしずと鎖につないだ指輪を差し出す。

両掌に慎重に横たえられた指輪は、いったいいつの間にかそんなことができたのか、錆がすべて拭われて、新品同様にきらりと輝いている。

一方エルマのメイド服からは、ぼたぼたと滴が垂れたままだ。

「……………」

完全に圧倒されてしまい、ケヴィンはただ呆然と目の前の少女を

見つめた。

動けないでいる彼に代わって、エルマがそつと鎖を首にかけてやっても、ケヴィンはまだ硬直したままだった。

「無事見つかって、ようございました」

「……………あ」

優しく告げられて、喉が震える。

それを合図とするように、ケヴィンの脳裏に、いくつもの想いが堰を切って溢れだした。

本当に指輪を取って来てくれたのだ。

自分のために。

小柄な少女が、崖から飛び降りて、濁流に身を投じて。

くじらに乗って帰ってきたこととか、人鯨一体のじゃれ合いを見せつけられたこととか、潮に乗って会心のフィニッシュを決められたこととかは、これまでの人生で味わった総量をはるかに凌駕する衝撃をケヴィンにもたらしたが、むしろ一周回って精神的な麻痺をも与え、彼の中では「なんかよくわからないけどとにかくすごい方法で帰ってきた」という、ふわつとした認識で処理されていた。

それどころか、彼はエルマの中に人を超越したなにか　ありていにいえば神の存在を感じた。

崖から飛び込んで無事？

平気平気、だって神だから。

大海原から小さな指輪を見つけて出す？

そうそう、だって神だから。

ひねくれた言動の根っこに隠し持っていた、幼い少年ならではの純粹さと単純さ、そして飛躍した思考ぶりを発揮し、ケヴィンはエルマの異常ぶりをすんなりと受け入れてしまった。

「姉君を守るため、ご身分を保証する指輪すら武器へと転ずる。ケヴィン様は、御年十歳であられながら、勇気と騎士道精神を持たれた、まさに次期領主に相応しい殿方でいらっしゃいますね。さすがは、『大陸一の息子』様でございます」

「は……？」

唐突な褒め言葉に、ケヴィンはきょとんと目を瞬かせる。

要領を得ないでいる彼に向かって、エルマは、ほら、と言わんばかりに、首にかけたばかりの指輪を指さしてみせた。

「僭越ながら、指輪がだいぶ錆びていたようなので、ナノイオンクリーニングを施させていただきました」

「ナ、ナノ……？」

「はい。指輪の内寸を一切変えることなく、失われた輝きと刻印だけを取り戻す、お勧めの技法でございます。そういったしましたらばここに」

彼女が細い指先で摘まみ上げた指輪、その内側に刻まれた文字がすっかり読めるようになっていのに気づき、ケヴィンは「あ」と声を上げた。

一瞬遅れて文字の意味を理解すると、彼は無言で目を潤ませた。

夫より、最愛なる妻へ。

母より、最愛にして大陸一の息子へ。

「一文目は、おそらくお母上のご結婚時に、ヨーナス様が彫らせたものでしょうね。そして二文目は、お腹の子の性別がわかった時点で、お母上が彫らせたものかと」
「……………」

ケヴィンが声を詰まらせる。

彼は無意識に、何度も何度も指輪を擦り、それからぎゅっと握りしめた。

「フレンツェルでは、母から贈られた指輪は、次期領主の証となるとお聞きしたことがございます。この指輪をはめて、ケヴィン様がこの地を統べられる日が、今から楽しみですね」

そんな温かな言葉も、今の彼なら斜に構えず受け止められる。
むしろ、偉大なる存在から過分な褒め言葉をもらったことに、彼は陶然とした心地すら覚えた。

「いや……………いいえ、そんな、僕……………いえ、私など、まだまだで……………」

生まれて初めての謙遜の言葉は、するりと自然に口をついて出た。

身を挺して守ってもらった。

領主の証を取り戻してもらった。

少なくとも一人からは、自分も愛されていたのだということ、
こんなにもはつきりと教えてもらった。いや、もしかしたら姉からも。

ふつつつと、身の内で小さな泡が湧き上がる感覚に、ケヴィンは酔いそうになった。

それから　初めて、期待してもらった。

「そ……それより、その、す……すまな……すみません、でした。あなたに、とんだ非礼を働いて」

「なにを仰いますやら。勉強不足により接し方を違え、あなた様を不用意に怖がらせてしまったこと、ならびに魔蛾の捕獲に時間が掛かったこと、どれも私の手落ちでございます」

「とんでもない！　とんでもない……その、魔蛾を捕獲してくれて、それから、指輪もきれいにしてもらって……」

ありがとう、の言葉は、自分でも聞き取りづらいほどの小声になっ
てしまった。

だって、先ほどから心臓がうるさいのだ。

真綿に包むように慎重にはない、悪意を剥き出しにするのでもない。

そうではなく、小気味いいほど遠慮なく、本心から、自分のことを一人前の男として認め、期待してくれる人物に、ケヴィンは初めて出会った。

出会って初めて、自分が、それを切望していたことに彼は気付いた。

「そ……その、なんだ」

侍女、それも平民相手に、馬鹿らしい。

以前の彼ならそう思っていたことだろう。

しかし今、ケヴィンは、彼女が自分の発育不良の外見にもかかわらず一人前と認めてくれたように、身分という枠にとらわれず、人と接してみたいと思った。

そうしてみると、未だ全身をずぶ濡れにして、ぼたぼたと滴を垂らしている相手のことが心配でならなくなった。

「いつまでもそんな恰好では風邪を引いてしまうだろう。いえ、引いてしまうでしょう。特に、この海は魔物が棲み、波は時に瘴気すら帯びる。屋敷に用意をさせるので、早急に着替えては？」

自分が侍女の体調を心配することなど、未だかつてあつたらうかいや、ない。

視界の隅では、デボラが同志を見守るような、温かな笑みを浮かべていた。

「ああ、これはとんだご無礼を」

ところがエルマは、自らの姿の見苦しさを指摘されたものと思つたらしい。

失礼、と小さく断りを入れて立ち上がると、彼女は団子に結んでいた髪を解いて両手にまとめ、水気を絞った。

そのとき現れたほっそりとした白いうなじや、首に張り付いた濡れ髪の艶やかさに、ケヴィンは一瞬どぎまぎしてしまう。

相手は神とはいえ、外見は冴えない眼鏡少女。

いったい自分はなにを動揺して、と彼が自分に問うていたとき、今度は彼女は、その分厚い眼鏡をすつと取り外した。

「
」!

現れた、素顔。

ケヴィンは雷に打たれたような衝撃を覚え、呼吸を止めてしまった。

19・「普通」の探し物(7)(後書き)

宙返りの技名を修正いたしました。

ご指摘の数々をありがとうございます。

っていつか皆さまスポーツ領域に詳しくぎーっ!!w(

20・「普通」の探し物(8)

白く小さな顔に、すつと通った鼻梁。

薄めの唇に、淡く色づいた頬、長い睫毛。

華奢な顎を、前髪から垂れた水滴が伝い、ぽたりと胸元へと落ちる。

それに気付いて軽く目を瞬かせた、その大きな瞳は　まるで夜明けを迎えた空の色。

「……………っ、……………っ、……………」

なにか言いたい。

この美を称えたい。

けれど　魂ごと奪われてしまったように、ケヴィンは一言も告げることができなかった。

こちらを指さしたまま、ぱくぱくと口だけを動かしているケヴィンに、エルマは眼鏡を拭きつつ怪訝そうに首を傾げる。

表情から「予想外だ!」との思いだけは読み取ったようで、いったいなにをそんなに驚くことがあるだろう、といった風にしばらく首を傾げた彼女は、ついでぼんと手を打ち合わせた。

「失礼しました、指摘されたのは衣服のほうでしたね」

なにか、そのように処理されたい。

エルマはためらいもなくスカートの裾を掴むと、水気を絞るべく、
艶めかしい曲線を描く白い脚を惜しげもなく晒して持ち上げ

「ままま待ったあああああ！」

持ち上げようとして、女性陣に必死の形相で止められた。

ぶわっ！

同時にルーカスが、素早く彼女の腕を掴み、上着をかぶせる。

彼は剣呑な表情でエルマに顔を寄せると、

「この馬鹿、十歳の坊主に道を踏み外させるな！」

と叱りつけた。

エルマはきよんととして　その表情がまたあざといくらいに可
憐で、周囲は呻き声を上げる　、「え、あ、はい……？」と素直
に頷くが、時すでに遅かったらしい。

「……………」

ケヴィンは、ぼんつと体中の血が沸騰してしまったかのように顔
を赤らめ、その場にふらりと倒れ込んだ。

神ではない。

やはり神ではなく　彼女は人を誘惑し籠絡する、魔性だ。

そんな思いを、身の内で何度も何度も反芻しながら。

「あの、ケヴィン様……？　大丈夫ですか……？」

エルマが心配そうに眉を寄せ、話しかけてくる。
それを聞き取ると、今度はケヴィンはぱっと立ち上がり、盛大に言葉を噛みながら叫んだ。

「だだだ大丈夫だ！ 大丈夫です！ まったく問題ない！ まったく！ 問題ありません！ ただちょっとその、なんだ、あの、………っ」

動揺のあまり口調も定まらない。

「だいたい、ずっと屋敷に籠って過ごしてきた彼は、そもそも家族以外の女性に接することすら少ないのだ。」

この美しい少女相手に、なんと答えれば、一番心配させずにすみ、スマートに見え、いや……好感度を上げることができるであろうか。ケヴィンは素早く思考を巡らせた。

「そ、その……っ！ や、やっぱり気分がすぐれない気がするので、薬草を取ってくる！ いや、本当のところ全然大丈夫なのだが！ むしろ元気なのだが！ ただ、あなたも一緒に飲むと丁度よいかかなと思って！ 一緒に！ そう、一緒に………！」

エルマのためににかしたくて、けれど気を遣わせたくもなく、かといって心配もされなくなかったケヴィンは、結果そんなよくわからない言葉を口にしてしまう。

これ以上動揺している姿を晒したくなかった彼は、それからぱっと踵を返し、森に向かって突っ込んでいった。

「す、すぐ戻る！」

そんなセリフまでをも、思い切り噛みながら。

「あーあ……」

一連のやり取りを見守っていたイレーネは、そつと手で目を覆った。

やってしまった。

この友人は、偏屈な辺境伯令息をも、一瞬で忠犬に変えてしまった。

デボラは「さすがエルマエル様……」と陶然とした眼差しを寄越すだけだったが、ルーカスは至極不機嫌そうである。

彼はエルマの両肩を掴み、くるりと自分のほうに向き直らせると、低い声で告げた。

「……おまえ。俺がなにを言いたいか、さすがにわかるな？」

「……………」

エルマは不思議そうにルーカスを見上げる。

表情から苛立ちは読み取りつつも、それが一体なにに由来するものなのかはわからないようだ。

エルマはしばらく思考を巡らせていたが、やがて「ああ」と声を上げた。

目をきらめかせ、頬を紅潮させる。

その顔には、まぎれもなく喜色が浮かんでいた。

「頂けるのですね、例の言葉を」
「……………なんだと？」

対するルーカスは胡乱な顔つきだ。

制止にもかかわらず海に飛び込み、あまつさえくじらに乗って帰還し、あげく素顔素足を見せてほかの男を籠絡してみせた彼女に、説教のひとつもしてやろうとは思えど、それ以外を期待される覚えはなかった。

が、エルマはいつになく上機嫌で、興奮気味にまくし立てた。

「まさか殿下から真つ先に、お墨付きを頂けるものとは思いませんでした。予想外に結果を出すのが速いからと、そんな奇立たしそうなお顔をなさらないでください。不肖の弟子の成長を、ともに喜んでいただけますと幸いです」

「……………なんだと？」

「え、ですから、今回のことを褒めてくださるのでしょうか？」

エルマは、どこまでも無邪気に微笑んでいた。

「泳ぐのは『普通』ではないと言われたから、泳がずにおりましたし、大海原から指輪を探し出せるはずがないなどと言われたから、自分が探すのではなく、飛び魚の群れに探してもらいましたし」
「飛び魚に探させていたのか！？　というかどうかやってくじらや魚に頼むというんだ!？」

「え、それは普通に、頼み込んだだけですけれど」

ルーカスが全力で突っ込むと、エルマは目を瞬かせて首を傾げた。

「きちんと頭を下げて、丁寧に頼めば、くじらでも魚でもセイレーンでも、快く協力してくれるものですよね?」

主張の一部に、とんでもない単語も混ざった。

しかしエルマは「まさかシャバの方は、それくらいのことまでできない、なんて言いませんよね」と朗らかにシャバをディスるだけだ。

これは、来るぞ。

やり取りを見守っていたイレーネが、ついごとりと息を呑むと、エルマは期待にたがわず言い放った。

「海に沈んだ失せ物は、魚フロに探してもらい、泳ぐのではなくくじらの力を借りて帰還する。さすがにこれくらいなら『普通』ですよね?」

努力屋の彼女の、いじらしく、健気で、かつ最強に傲慢な、問い。ルーカスはぴきつと硬直し、イレーネはがくりとその場に崩れ落ちた。

なにそれ……!

両者の魂の叫びが、奇しくもハーモニーを奏でる。

とそこに、

「エルマ、さん! これ! これを見てみてくれ!」

純情少年と化したケヴィンが、両手いっぱい緑の葉を抱えて戻ってきた。

どうやら本当に、薬草を大量に採取してきたらしい。

彼は、尻尾があつたなら盛んに振っているにちがいない様子で、誇らしげに薬草を突きつけてきた。

「これは、昔から我が領にだけ自生するハーブで、クローバーの仲間なのだが！ 清々しい香りが魔蟲をはじめとする魔を打ち払うと信じられていて、だからきつと、あなたが浴びた瘡海水にも効果抜群で、かつ、……かつ！ 愛らしい形をしたこの葉が、大切な異性を呼び寄せてくれるという言い伝えの……！」

途中からは、頬まで染めている。

完全にエルマの僕と化したケヴィンを、周囲は憐れむような励ますような視線で見守っていた。

「……幼い恋とは、なんと恐ろしい……！」

ルーカスなどは、ぼそつと呟いてしまう。

瘡気を帯びた海水がなんだ。

相手はくじらに乗り、魚を使役し、なんならセイレーンまで従えようという娘だ。

その現実が見えぬのか。

「魔を抜う力にせよ、異性を呼び寄せる力にせよ、エルマが草ごとクローバーきに影響されるはずが」

ところが、そのとき不思議なことが起こった。

穏やかにケヴィンの話に相槌を打っていたはずのエルマが、ふと動きを止めたのである。

「……………」

彼女は、きれいに拭き終えた眼鏡を掛けなおそうとしていたが、それをぱたりと地面に取り落とした。

「……………エルマ？」

なにか、様子がおかしい。

この、急に脱力し、まとう雰囲気ふわふわとしたす光景に、過去の記憶が重なって、ルーカスは息を呑んだ。

まさか。

「……………あの」

のろのろとした動きで両手を上げ、頬を押さえたエルマが、ぽつんと漏らす。

その顔は、酒に酔ったかのように淡い薔薇色に染まり、瞳はとろんと輪郭を溶かしていた。

「わたし……………むかしから、なぜか……………この香りが……………苦手、で」

口調も、「あるとき」と同じく、どこか幼いものになる。

「エルマ、待て、おまえ」

「大変、恐縮ではございますが」

「おい、待て、またなのかおまえ　！」

「これより、気絶いたします」

言つが早いか、ルーカスがとっさに差し伸べた腕の中に、エルマはどさりと倒れ込んだ。

20・「普通」の探し物(8)(後書き)

そして、大変恐縮ではございますが、
作者も体調不良のため、これよりしばし、感想返信途絶えます。

21・縛り

「ふん、女王クイーンを封じたぞ」

クレメンスは、場にクローバーの10を投げ捨て、にやりと笑った。

彼が投げたカードの下には、先ほどハイデマリーが置いた女王の絵札がある。

彼女は今回もまた「革命」を起こしていたので、強さが逆順し、キング王を女王で陥落させていたのだ。

ハイデマリーはよほど女王の札に思い入れがあるようで、なにかとそれを切り札に使って戦おうとする。

せっかく強い持ち札に恵まれているのに、女王の札を活躍させるためだけに「革命」を起こしたりするほどだ。

クレメンスからすれば理解に苦しむ戦い方だったが、勝敗よりもむしろ勝ち方にこだわるのが、この美貌の娼婦の楽しみ方であるようだった。

(奇妙な女だ)

ちらりと、自分が封じてみせた娼婦に視線を向けてみれば、彼女はすぐそれに気付いて顔を上げる。

勝ち誇った顔をしているであろう自分に、反感を見せるでも挑戦的な色を浮かべるでもなく、彼女はふふっと口元を綻ばせた。

「あら、やるわね、クレメンス」

ハイデマリーはもはや気安ささえ感じさせる口調で告げる。

「ここまでで既にすっかり富を巻き上げられておきながら、躊躇なくわたくしに挑もうとしてくるあなたって、とても素敵だわ」

そう、この時点で、既にクレメンスは負けが込み、隠し持っていた貴金属のほか、わずかに許された上等な衣服、はては書物の間に挟んでいた地権書までも巻き上げられていたのである。

次は手足か、内臓か

彼らはその手の脅しすら辞さない。

が、クレメンスはその挑発を、静かに笑っていなしてみせた。

「もはや、私に失うものなどないからな。それに、この程度の札遊びで怯むような人間ならば、今この場に捕らえられるような罪など犯しはせぬわ」

実際、クレメンスは自分でも驚くほどに平静であった。

宰相としての肩書は地に落ちた。

政略結婚によって結ばれた妻は、記憶にない「裁判」が行われた時点で離縁を申し出たはずだし、幸か不幸か子はおらぬ。

若き日から王城の権謀術数に足を踏み入れたクレメンスは、逆に言えばそれ以外の人生を知らなかった。

手足や内臓を失ったところで、困るのは自分しかない。

彼はただ、この獄からの脱出権さえもぎ取れば、それでよかった。

ハイデマリーは興味深そうにクレメンスを見つめ、それから少し首を傾げた。

「あなた、そういった冷静な判断もできそうなものなのに、なぜ王族殺しや、王権奪取だなんて大それた罪に手を染めたのかしら？なぜそこまで権力を欲して？」

「……………」

返事には、通常の間人であれば気付かぬほどの、ごくわずかな沈黙があつた。

「…………ふん、娼婦よ。そなた、札遊びをする人間に、『なぜ勝ちたいの？』などと聞くのか？ 遊戯に参加した以上、頂点を狙う。ただそれだけのことだ」

「ふうん」

ハイデマリーは、手札で作った扇を口元に押し当てながら、ひっそりと笑つたようだった。

「ひねくれものね。 気に入つたわ」

そんな戯言を紡ぐ娼婦から視線を逸らし、クレメンスは左隣の参加者 レイヤー ホルストに目で次を促す。

しかし彼は、白けたように肩を竦めるだけだった。

「誇らしげにしているとこ悪いけど、そのカードは出せないよ、クレメンス」

「……………なんだと？」

意味を捉えそこねて聞き返したクレメンスに、ホルストは小馬鹿にするように告げた。

「だから、縛りだつてば。さっき【怠惰】が出したのがハートの王、【色欲】が出したのがハートの女王。だから、その次に出せるカードは、本来ハートの家来^{ジャック}だけ。わかる？」

「やあねえ、ホルスト。あんたが縛つてばかりで、一向にゲームが進まないからつて、さっき数字縛りはなしにしようつてマリーが決めたんじゃないの」

「数字はね。柄^{スト}は縛るさ。ということで、出せるのはハートの札だけ」

リーゼルが眉を顰めて指摘しても、ホルストは何食わぬ顔で肩を竦めるだけだ。

彼は完全に周囲の持ち札を見切っているらしく、「持つてないでしょ？」とクレメンスに告げると、さっさと彼を飛ばし、自らの持ち札から一枚を投げ捨てた。

ハートのジャック。

ホルストが持っていたのだ。

「ふん。本当なら、これで両縛り継続なのに」

「あんたつて、ほんと縛るのが好きなやつよねえ」

ホルストの隣で、出せる札を選びながらリーゼルが呆れたように告げる。

「粘着質な拘束男は嫌われるわよお」

「誰が拘束男だつて？」

厭味つたらしい声に、ホルストがついむっとして聞き返すと、ずつと沈黙を守っていたイザークが、

「過去に、エルマを、軟禁していたこと、あつたらうが」

札を投げ捨てながら、ぼそりと呟いた。

その低い声には、恨みがましい色が混ざっている。

しかしホルストは悪びれる様子を見せずに、ただ片眉を上げた。

「十年前のこと？ あれはだって、必要な措置だよ。おかげでエルマはあれ以降、室内遊びの楽しさに目覚めて、いたずらに外出したり、迷子になることはなくなったしね。そもそも僕がエルマを部屋に閉じ込めるはめになったのは、元を正せば【暴食】のせいだ」

そう、ホルストは、外遊びの末に迷子になってしまったエルマを心配し、一時期、監獄から一步も出さずにいたのである。

とはいっても、その間ホルストが全力でエルマの相手をしていたし、後に同情したり、ゼルがその数日の記憶ごと「いじって」しまったため、エルマがそれを不満に思うことなどなかったのだが。

「そんなことを、言って、おまえは、過保護すぎるんだ。迷子や遭難のひとつ、しないことには、どうやってドラゴンを狩る技術を、身に着けるといふのか」

「いや、そもそもそんな技術いらないし。生息域に毒ガスを撒けば一発でしょ」

イザークが嘆けば、ホルストは煩わし気に一刀両断する。

彼らは、自身がこの監獄内で唯一の常識人だと思っているあたり、まったく救いようがなかった。

「ドラゴン狩りはさて置くにしても」

と、今度は、静かにやり取りに耳を傾けていたギルベルトが口をはさんだ。

「毎年夏恒例の、キルシユ海での遊泳大会まで不参加にしたのはよくなかったのでは？」

彼は、イザークに続いて無造作に札を場に捨てると、幅広い肩を優雅に竦めた。

キルシユ海というのは、この監獄に接している、魔物が棲み、瘴気を帯びると言われる濁流のことである。

とはいえ、基本的に常軌を逸している彼らは、毎年夏の暑い頃になると、幼いエルマに水遊びをさせるために、わざわざキルシユ海まで足を伸ばしていたのだ。

なお、この手の獄内イベントは、誕生日会や遠足、ピクニック、音楽会など、多数存在する。

「たしかあの年は、【暴食】と【怠惰】で、相当気合いを入れて、エルマに海で過ごす技術を指導していたはずだ。彼女自身も、我々に成果を見せるのが楽しみと言っていたのに」

「そうとも。あの年は、大会の直前に、ようやく、200海里、泳げるようになってな。本人も、力強く、泳ぐ姿を披露したいと、しきりに言っていたのに」

ギルベルトが指摘すれば、イザークも非難の念を込めてそれに頷く。

「たしかにあのころ、微表情や声のトーンの判別を、他の生物に応用する術を提案したら、聡明な彼女は見る間に、くじらや魚と『会話』するようになっていましたからね。幼いエルマが魚の群れを従える様を、私としてもぜひ披露したいところでした」

さらには、モーガンもまた、札を選び取りながらそれに続いた。

もう十年も前のことだというのに、親馬鹿すぎる彼らは、いまだにエルマ軟禁事件を根に持っているようである。

大勢はこちらにあり、と踏んだリーゼルは、ふふんとホルストに流し目をくれた。

「あんたもいい加減、エルマ離れたほうがいいわね」

「……自分だつてできてないくせに、よく言う」

ホルストは仏頂面になったが、するとますますリーゼルは意地わるそうに唇の端を引き上げた。

「あら、あたしはできているわ。少なくとも今は、エルマを強引に連れ帰そうだなんて思っていないもの。彼女を信じているから、ね」

つい先日、エルマにこっそり暗示を掛けて連れ帰そうとしていた人物とは思えぬ発言である。

ハイデマリーとギルベルトは密かに苦笑して視線を交わしたが、事情を知らないホルストは、むっとした表情を浮かべた。

「ああそう、薄情なもんだね。見放すことが信頼とでも？ 違う、守るのが信頼であり、愛だ。やはりエルマを守るのは、この兄である僕しかないということがよくわかったよ」

もともと気分屋である彼は、よほど腹に据えかねたのか、カードを投げ捨て立ち上がってしまう。

そのまま部屋を出ていこうとする彼に、ハイデマリーが声を掛けた。

「どこへ行くの、ホルスト？」

「べつに、どこでもいいでしょ」

反抗期の青年のように言い捨てて、扉をすり抜けていってしまふ。後には、肩をすくめ合う大人たちだけが残った。

いや、違う。

ひとりだけ、呆然とソファに座している人物がいた。

クレメンスである。

彼は、先ほどから繰り広げられる会話に、いちいちぎょっとして目を見開いていた。

ドラゴンを狩る？ ドラゴンすら倒す強力な毒ガスを撒く？

恐怖の海峡と名高いキルシュ海を、それも200海里に渡って泳ぎ、あとはなんと言った、あらかたの海洋生物と 会話？

(こやつら、先ほどからなにを言っているのだ……)

到底、正気の発言とは思えない。

冗談か妄言の類だろうと普段の彼ならば即座に断じるところだが、しかしそれなら、なぜ誰も突っ込まない。

(ボケを回収せずに会話を進めるなど、雑な進行をしおってからに

……！)

動揺のあまり、つい思考が斜め上にずれていく。己が突っ込みに回ってどうするのだ。

いやだがしかし、そう、突っ込み。

この、特別奇妙で、突飛もなくて、冗談のような会話に、誰かが突っ込まなくてはいけないのではないか。

だって、そう、それが「ない」ということは、つまり

(これらの発言がすべて、本当のことだと……?)

一瞬、正体のわからない悪寒を感じ、クレメンスは顔を強張らせた。

まさか。

そんなはずがない。

そんな常軌を逸した事態があつてたまるか。

すっかり、この監獄の異様な空気に吞まれてしまったクレメンスに、そつと触れるものがあった。

「あなたの番よ」

ハイデマリーである。

彼女は、優しい笑みを浮かべて、クレメンスに向かって首を傾げた。

「あなたが先ほどからぼんやりしている間に、一周回ってしまった

けれど、大丈夫？ わたくしの後に、なにか出せそうかしら」

そうやって彼女が出したのは、ジョーカーだった。

なんにでもなれる、最強のカード。

この後に、出せる札などあるはずもない。

ぐ、とクレメンスがハイデマリーを睨むと、彼女は優雅にそれを
躲し、一度場を流した。

そうして次に、三枚の女王を並べる。

「はい、上がり」

今回も真つ先に、彼女が勝者となった。

しかしそれだけでなく、ハイデマリーはクレメンスに向かってそ
つと問いかけてきた。

「ねえ、クレメンス。あなたの持ち札では、この後は出せないわね
え？ ただ、わたくしの読みでは、他のみんな、この周で上がれそ
うだと思っの」

その言葉通り、リーゼルが、イザークが、モーガンが、次々と三
枚の札を出して上がっていく。

あとには、未だ多くの札を抱えているクレメンスが残された。

「な……………っ」

「あらあら、今回も大貧民ね、クレメンス？」

美貌の娼婦は、困ったように華奢な肩を竦めてみせる。

彼女は、細い指先を唇に当てて、なにごとか考えるそぶりを見せ

た。

「そうねえ、四肢を切り離す類のことをしてもいいけれど、それには【貪欲】がないと面倒だし。そもそも、あの子が棄権してしまった時点で、あなたを大貧民に確定するのも少しばかり可哀そうだし」

やがてハイデマリーは指を放し、ぱつと顔を綻ばせた。

「やはり、土地にしましょう」

「……なんだと？」

既に、書物の間に隠し持っていた権利書まで奪われていたはずだ。だがしかし、ハイデマリーはうっそりと笑うと、クレメンスの足元を見つめた。

元侯爵とは到底思えぬ、粗末な靴を履いた足。

けれど、きちんと「靴に覆われた」足を。

「ねえ、クレメンス。昔はね、わたくしたち囚人は、獄内で靴を履くことを許されなかったの」

懐かしそうに言いながら、彼女は傍らのギルベルトに視線で合図する。

「けれど、わたくしが看守に代わって、許可した。なぜだかわかって？」

「や、やめろ、なにを」

がっしりとした体格の元勇者に、なすすべもなく靴を奪われ、ク

レメン스는口調を乱して叫んだ。

「靴を返せ！」

「それはね、そうすれば、たいていの『新人』は、その靴底に大切なものを隠すようになるからよ」

ハイデマリーはふふっと笑みを深め、ギルベルトが差し出した、小さく折りたたまれた紙片を受け取った。

地名や署名が記された書類　地権証だ。

「まあ、まあ。トレンメル地方の片田舎ね？　のどかで自然深く、避暑や隠れ家にはうってつけ。引退後、または脱獄後、第二の人生をここで過ごすつもりだったのかしら？」

「返せ　！」

ハイデマリーはそれには耳を貸さず、【怠惰】に札を切るよう頼んだ。

優雅にソファに背を預け、足を組みかえる。

「さあ、次はもう少し頑張って頂戴ね、クレメンス」

まさに女王の貫録で、そう嘯きながら。

22・「普通」のお見舞い(1)

「やれやれ……」

ぐったりとしたエルマの身体を寝台に横たえてやりながら、ルーカスは疲労の溜息を漏らした。

少しずつ陽光が夕闇に取って替わられる時間帯。

エルマとイレエネの二人に宛がわれた客室である。

「娘一人を寝台に運びこむのに、こんなに苦勞したことはないぞ……」

ルーカスはげんなりとこぼし、静かに眠るエルマの額をこつんと叩いた。

エルマが倒れて、はや二時間ほど。

慌ててその場でエルマの脈や呼吸を確認し、おそらくは眠っているだけと当たりをつけたルーカスたちだったが、奇しくも、しょっちゅう医者にかかっているケヴィンは、意識喪失と睡眠の区別が付いたのであった、そこからこの屋敷内に戻るまでが大騒動だったのだ。

まず、自分が原因で倒れたらしいと考えたケヴィンが、ショックでほとんど機能停止。

その場でくずおれてエルマに詫びつつ、横ではデボラまでもが嘆きの叫びを上げた。

イレーネはさすがに二度目とあって、多少の冷静さは残っていたようだが、それでもやはり親友のことを心配するあまり、しょっちゅう背後を振り返るので、下山中なんども足を取られかけていた。

結局、そのメンバーの中で唯一平静を保っていたルーカスが、エルマを背負い、魔蛾の詰まった袋を引つ提げ、ときおり嘆きのポエムを刻みはじめるとフレックスエル姉弟を叱咤しつつ、なんとかかんとか屋敷にたどり着いたのである。

結局、魔蛾が群集しているらしい沼の件は手付かずのままだ。

今日はエルマの看病に専念し、明日以降再度山に向かうほかないだろう。

ちなみに、海水でずぶ濡れだったエルマは、イレーネとデボラによつて清拭と着替えを済まされたのだが、顔を真っ赤にした二人が、「このままでは新しい扉を開けてしまう……！」と部屋から飛び出してきたため、同じく着替えを済ませたルーカスが看病を代わったというわけだった。

「寝ていてまで人騒がせなやつめ。手当たり次第に誘惑してどうするんだ」

男であるのに、なぜかエルマの「守り役」として見なされつつあるルーカスは、ふんと鼻を鳴らす。

だが たしかに、素顔を晒し、長くつややかな髪を枕に広げた少女の姿は、美女を見慣れたルーカスにすら、強く訴えかけるものがあった。

その白く小さな顔は、ほんの少しばかり青褪めているように見える。

ルーカスは、無意識に眉を顰めた。

「くじらを乗りこなし、セイレーンすら従えるというのに、なぜ草の匂いなんかで倒れるんだ、おまえは……」

たとえばアレルギーというものの存在ならば、彼は知っているし、その恐ろしさも目にしたことはあるが、エルマの症状はそれともまた少し異なるようだった。

どちらかといえば、ひどく強い酒に酩酊したような　そう、ちよつど先日、蒸留酒を呷って昏倒したときと同じである。

呂律が回らなくなり、思考がぼやけ、気絶し、その後昏々と眠る。

「……奇妙なやつ」

ケヴィンが慌てて遣いを出した主治医は、いまだ屋敷に到着しない。

ルーカスは、不安や焦りを封じ込めて、エルマのことをそんなふうに、そつと詰った。

エルマ。

不思議な少女。

常軌を逸した能力と、人とは思えぬ美貌を有し、出会うものすべてを魅了してまわる、はた迷惑な娘。

そう、認めよう。

ルーカスは、この突飛で、意外に素直で、けれどいつもどこか盛大に空回っている、びっくり箱のような少女に、惹かれずにはいられなかった。

未知のものに興味を覚える彼にとって、女とは書物のようなものだ。

麗しい表紙絵や指に吸い付く肌触り、楽し気な内容を予感させるあらずじに、心弾ませながら手を伸ばす。

この女はどんな性格なのか、どんな思考の持ち主なのかと、わくわくしながらページをめくるが、読み終わってしまえば　あらかた理解してしまえば、途端に白けた気持ちが出てくる。

しかしエルマの場合、ページをめくるたびに思いもよらぬ一面が立ち現れて、けっして彼の心を離そうとしないのだ。

今はまだ序章。

まだ引き返せる。

けれど、あともう少し踏み込んでしまえば、この少女に、のめり込んでしまいそうな予感すらあった。

「……どうしたら、おまえみたいな女ができあがるんだろうな？」

自嘲気味に唇の端を持ち上げながら、そんなことを問う。

いや、一応答えはわかっているはずなのだ。

「監獄で育てられたから」。

これまでのエルマの話の繋ぎ合わせ、そこまでは推察できる。

美貌の娼婦の娘だから美しい。

元勇者に育てられたから正義感もある。

狂戦士に鍛えられたから魔物も倒せる、マッドサイエンティスト

に指導されたから手術もできる、誘拐犯の影響で洗脳もできるし、詐欺師に教わったから微表情も読める。

だが、いくら彼らに教育されたからといって、一介の少女がそこまでの能力を身に着けられるものだろうか。

(こいつには、まだなにか秘密がある)

それは推測ではなく、確信であった。

もしかしたら、監獄まで赴けば、その秘密はわかるのかもしれない。

けれど

(気になる女の素性を知りたいからという理由だけで、実家に踏み込む男というの、な?)

その素性が気になる相手がいたなら、本人から聞き出すべきというのがルーカスの信念だ。

まして、エルマがなんらかの罪を犯したというのならまだしも、むしろ彼女は周囲を救ってまわってばかりである。そんな少女のことを、不用意に調べて回るといふのもどうなのか。

(ヴァルツァー監獄だって、なにも全員が異能の犯罪者というわけではない。エルマに諸々を仕込んだのは、話に出てきた彼ら六人だけ。その彼らの特技はあらかた披露されたはずだから さすがにこれ以上、突飛なスキルも出てこないだろう)

人はそれを、フラグと呼ぶのだが。

ルーカスはこっそりと肩を竦めてから、眠りつづけるエルマの前

髪を払ってやった。

「……早く、目を覚ませ」

眠る顔は、いつまでも見ていたくなるような美しさだが、しかしやはり、起きて突拍子もないことをしでかす彼女の魅力には敵わない。

それに、まぐろと対峙できるくらい頑強な彼女が、こういつまでも眠りつづけていると、本当に大丈夫なのかと不安になってしまう。

呼吸を確かめようと、ルーカスがエルマの口元にすつと身をかがめたそのとき、

コン、コン

扉がノックされ、声がかかった。

「エルマさんがお休みなのは、こちらの部屋ですか？」

医者がようやく到着したのだ。

ルーカスはわけもなく動揺し、慌てて身を起こした。

「ああ、そつだ」

そうして扉を開けて入ってきたのは、ひよろりとした身を白衣に包み、分厚い眼鏡をかけた青年であった。

年の頃は、ルーカスより一回り上、といったところか。

医者、それも辺境伯爵家の主治医を務めるにしては随分と若い。

ついまじまじと見つめてしまうと、相手は委縮したのか、長い前髪で顔を隠すように俯いてしまった。

「その……早速診察いたしますので……。服をくつろげる場面もございませうから、差し支えなければ……」

「あ ああ、すまない」

青年がもごもごと告げた内容に、ルーカスははつとして頷く。

男が少女の診察に立ち会おうなど、野暮の極みだ。

「それでは、同僚の侍女を呼んでこよう」

「いえ……、時間が掛かるかもしれませんが……それには及ばないかと……」

遠慮がちに告げるので、ルーカスは「では、隣の部屋にいるので終わったら合図してくれ」と付け加えた。

そうして、眠りつつけるエルマに、思わし気な一瞥を向けてから、とうとう部屋を後にした。

「……………」

残された青年は、ふ、と静かに息をつく。

それからおもむろに、ぐるりと部屋中を見渡した。

広い寝台の横には、小ぶりの棚。

そこに置かれた、水盥やタオル、気付けの香油や、回復祈願の銀の置物。

聖水に、見舞いの花、祈りを込めた編み飾り。

窓辺にも、見る者を励ますような、明るい色の花々が活けられている。

すべて、倒れたエルマを気遣うがために用意されたものたちだ。

彼はそれらを一通り見て取ると、

「まったく」

と呟いた。

「この連中は、まだこんな前時代的な看病をしてるのか」

言うが早いか、彼は迷いのない手つきで、活けられた花から香りの強いものを選び出し、ばさりと窓から投げ捨てていく。

さらには、香油も匂いを嗅いでから、無表情で投げ捨てる。

聖水も嗅いでみて、こちらは放置することに決めたようだった。

その堂々たる態度には、先ほどの委縮した気配などかけらもない。

彼は、目を閉じて横たわる少女を見つめると、愛おしげに髪を撫でた。

「ほんとに……魔族の娘に、聖なる香りを嗅がせて看病のつもりだなんて、気が知れないよね」

そうして、分厚い眼鏡を取り外し、目にかかっていた前髪を掻き上げると、彼は小首を傾げて問いかけた。

「だいたい、普通、女の子が倒れてしまったときに必要なのは、おまじないなんかよりも、^{オベ}施術だ」

その、少年のようないたずらっぽい笑みと、狡猾な瞳。
夕闇の迫るこの部屋にやって来た、彼の正体は

「 そうだよ、僕の可愛いエルマ? 」

ホルストであった。

22・「普通」のお見舞い(1) (後書き)

お兄様、登場。

そして感想返信ですが、本日分(3月4日20時以降のもの)から再開させていただきます。

臥せている間に感想をくださった方、ありがとうございます！そして返信できずすみません…！(血涙)

23・「普通」のお見舞い(2)

いつもより視点が随分低いので、エルマは自分が夢の中にいることに気付いた。

遙か頭上で葉を茂らせる木々、遠くに見える星、ときおり耳をかすめる獣の声や、感じる森の呼吸。

きつとこれは、子どものころ、実際に彼女が目にした光景だ。いつたいつだったのか。

(……でも、監獄の外にはあまり行かないようにしていたから、……森ということは、たぶん、……数年前……)

成長に伴って、ドラゴンを一撃で倒せるくらいにまでなると、【暴食】の父イザークはよく狩りや泳ぎに連れて行ってくれたから、たぶんそのときだ。

いや、しかしそれにしても視点が低すぎる。

もっと昔、エルマがさらに小さかったころということだ。

(……それはおかしい……【貪欲】のお兄様が、小さい子はお外へ行っちゃいけないよと、言っていたのに……)

珍しく記憶が曖昧だ。

でもそう、たしか、「兄」のホルストが自分を心配して、小さい頃は、けして外に出してくれなかったはずだ。

(……なぜ、あそこまで心配されていたのだっけ)

ふと覚えた疑問は、さあっと砂のように、思考の網からこぼれ落ちていった。

思い出せないが、まあ、いい。

だって、ホルストが心配性なのは、いつものことだ。

一番歳の近い家族であった彼は、いつもエルマと一緒に行動し、誰よりも甲斐甲斐しく面倒を見てくれた。

過保護な彼がエルマに与えてきた言いつけは、数えきれないほどだ。

ひとりで外を歩かないこと。

強い酒や、香りの強い花は口に入れないこと。

泣き顔や怒り顔、寝起きの顔は、「家族」以外の誰にも見せないこと。

特に瞳を見せてはいけない。

それらのときに他人がいたら、心の中で十を数えてから目を開けること。

なぜなのか、と幼いながらに疑問に思う言いつけもあった。

けれど、それが「普通」なのだと言われれば、そういうものかと頷くだけだった。

「さあ、もう大丈夫」

ふと、懐かしい声が聞こえた気がして、エルマはきよるきよると周囲を見回した。

誰もいない。

けれど、声はうわんと響きながら、エルマを優しく包み込む。

「もう起きてても大丈夫。目を開けてごらん。大丈夫だよ、ここには僕しかいないから」

優しい、ちよつと笑みを含んだような、楽しげな声。

ああ、とエルマは、安堵の溜息を漏らし、ゆっくりと瞼を持ち上げた。

「【どんよく】の、おにいさま……」

目を開けてみればそこには、懐かしい兄の姿があった。

赤黒く染まった夕陽を背後に、いつもと同じ、清潔な白衣をまとって、にこやかにこちらを見下ろしている。

監獄にいるはずの彼がなぜここに、とぼんやりした頭で考えて、やがて結論付けた。

そうか、　まだ、夢の中にいるのだ。

夢であっても、大切な家族と会えたことが嬉しくて、エルマはふんわりと微笑んだ。

「うれしい」

ホルストは、そつと「妹」の前髪を撫でてやりながら、穏やかに頷いた。

「僕もだよ、エルマ」

繊細なメス捌きを見せる彼の細い指は、それからずっと、エルマの目じりを撫でた。

「怖い目に遭ったんじゃないかと、ずいぶん心配したから」

彼女の夜明け色のはずの瞳は　まるで滴る夕陽のような、深紅に染まっていた。

ホルストは優しい手つきでエルマの目を覆い、子どもに言い聞かせるような口調で諭した。

「ほら、お姫様。ずいぶん気を緩めているね？　さあ、目を閉じて、十まで数えてごらん」

エルマは素直に十を数え、再び瞼を持ち上げる。

そこに現れたのは、未だとろりとしている、けれどいつも通りの、紫がかった紺色の瞳だった。

「……………」

「解毒鎮静目的で打った薬液が、弛緩方向に効きすぎちゃったかな？　瞳のことを忘れるなんて、珍しい。やっぱ、僕の『言いつけ』なんかよりも、家に連れ帰って【嫉妬】あたりに暗示を掛けてもらった方がいいか……………」

「……………」

いつまでも夢見心地のまま、ぼんやりと視線をさまよわせているエルマを見て、ホルストは眉を寄せる。

このまま攫ってしまうか、とあっさり彼が結論づけたその時、エ

ルマがぼつんと呟いた。

「……お兄様」

「なに？ エルマ」

再び彼女を拉致軟禁しようとしている過保護な彼は、しかしその方針とは裏腹に、大層優しく聞き返す。

いや、実際彼にとっては、どちらもエルマへの愛情から生まれる行動なのだ。

大切に思うから優しく接する。

大事だから閉じ込める。

しかし、エルマが続けた、

「わたし……魔族、なのでしょうか」

その問いには、彼は即座に答えを返すことができなかった。

「……どうして、そんなことを？」

「わたし……、強い……聖水の原料となるような、お酒や、……おまじないに使う、草花の香りが……苦手、のような気がして……」

ホルストは押し黙った。

彼が　というより、エルマの母が隠し通してきた真実が、少しずつ綻びを見せている。

それを理解した彼は、微かな動揺とともに、そうさせた周囲に対する強い苛立ちを覚えた。

なんとということ。

エルマは 彼の大切な大切な妹は、いつまでも、この温かな揺りかごの中にいるべきなのに。

「……もし、そうなのなら、わたしは……滅ぼされなくては、いけない存在で……罪の子で、もしかしたら……だから、お母様は、囚われ」

「ふふ、おかしいことを言うね、エルマ」

だがホルストは、それらの感情をおくびにも出さず、愉快そうに笑ってみせた。

「お酒に弱くて、嫌いな花があるだけで魔族だというなら、この世はきつと魔族だらけだ」

きっぱりと、断じる。

同時に頭の中では、帰宅次第早急に【怠惰】や【嫉妬】に暗示を強化してもらおうべく算段を付けはじめた。

この場でエルマに麻酔を仕込んででも連れ帰り、まずは彼らに、エルマの正体を打ち明けなければ。

いや、それよりもハイデマリーに、自分がエルマの正体に気付いていることを告げなくてはならない。

それとも、彼女はそのくらいとっくに見通しているだろうか。そのうえで放置している？

忙しく思考を巡らせていると、いまだ夢見心地のエルマが「でも」と続けた。

「……それも、いいかもしれません」

「え？」
「だって」

彼女は小さく微笑んでいた。

「きっとそれなら、お兄様を、心配させずに、すむから……」
「……………」

ホルストは大きく目を見開いた。

「……………なんだって？」
「魔族は、強いから。簡単には、死なないというから。それならば……もう【貪欲】のお兄様を、悲しませることも、……………ないでしょう？」
「……………」

完全に意表を突かれて、ホルストは言葉を失った。

エルマは優しい笑みを浮かべたまま、徐々に声を小さくしていく。

「それなら……………私が、元気でいれば、……………ちゃんと……………お兄様の『妹』の……………代わりが……………」

できるはずだから、の言葉を告げる前に、彼女はすうつと、再び眠りの世界へと落ちていった。

ホルストは寝台の傍らで、呆然と佇んでいた。

それから、ゆっくりと掌を持ち上げ、口元を覆った。

「……………は」

零れた笑いは、かすかに震えていた。

代わり。

彼女はたしかにそう言った。

見透かされていたのだ。

ホルストが彼女に、自身の肉親を重ねていることを。

ホルストが彼女を「エルマ」としてではなく、「庇護すべき脆い妹」としてしか見ていないことを。

彼は、かつて実の妹を失ったことを、けしてエルマには話そうとしなかったのに。

「……やられたね、これは」

聡明な彼は、幼かったエルマが、自分自身ではなく、常に他者を重ねられることでどんな思いをしただろうということ、即座に推測することができた。

愛されている、大切にされている、見つめられている　けれどそれは、自分をではない。

自分をすり抜けた先の、別の誰かをだ。

切なかつたらう、虚しかつたらう。

なのに彼女は、そんなホルストを気遣いすらしていたのだ。ちゃんと代わりをしてみせる、と。

「……どっちが保護者なのやら」

ホルストは自嘲の笑みを刻んだ。

かつてハイデマリーには、もはやエルマは赤ん坊ではないと諭された。

その通りだ。

幼かった彼の大切な少女は、いつの間にかホルストよりもよほど先を歩き、彼を守ろうと手を差し伸べさえしていた。

あんたもいい加減、エルマ離れしたほうがいいわね。

ふと、直前に獄内で交わした会話が蘇る。

あたしは、エルマを強引に連れ帰そうだななんて思っていないもの。彼女を信じているから、ね。

「……………」

ホルストはわずかに唇を噛み、寝台に横たわる少女をじっと見つめた。

エルマ。

彼の大切な大切な「妹」。

離れたのはたった二か月ほどだが、瞳を閉じたその顔は、最後に会ったときよりもずいぶん大人びたように見える。

いや、本当はずっと前からそうだったのに、自分が気付かなかっただけかもしれない。

しばらくとつくりと寝顔を見つめ、やがてホルストは溜息を漏らした。

「…………オーケー、わかったよ」

それから、ひらりと両手を上げた。

「君を連れ帰るのは、今回はやめにする。僕だって…………君を信じているから、ね」

唇を片方だけ持ち上げて告げると、彼は外していた眼鏡を装着し、再び前髪を下ろして冴えない外見へと戻った。

そうして、名残惜し気にエルマの滑らかな頬をひと撫でしてから、部屋を去っていった。

と、ルーカスに言われていたことを思い出し、ちょっと引き返して、隣の扉をノックする。

すぐに出てきた彼に、ホルストは言葉少なに告げた。

「完了しました」

「ああ、そうか。ありがとう。容体は？　じきに目覚めるんだよね？」

「ええ。もともと疲労していたところに、苦手な香りを嗅いで参ってしまっただけのようなので…………」

適当なことを告げると、さすがにルーカスは怪訝そうに首を傾げた。

「本当か？　香りで気絶することはなかなか無いように思うし、ずいぶん長く眠っているようだが」

「はあ…………。珍しい症例ですが、アナフィラキシーの一種とも取れ

ますね。通常、アレルギーというのは、微粒の粉末状の成分を経口または経皮接種することで発現しますが、彼女の場合、特定の香りの成分がそれに該当するようで。過去に同様の症状を経験したなら、二回目以降は体の防衛反応でより強烈な症状を見せてもおかしくはありませんから。それに彼女の場合極端に嗅覚が優れているようですし。以上ご理解いただけましたか？」

面倒になって、早口ででっち上げを捲し立てる。

理論もへったくれもないが、門外漢のルーカスは、一応の納得を見せたようだった。

「……まあ、あの娘の身体の構造が、いろいろ特殊そうだということとは理解できるな」

口元を歪めながらの、訳知り顔の相槌に、若干の苛立ちを覚える。

なにが、理解できるだ。

だいたいからして、大切なエルマの傍に、こういった女癖の悪そうな害虫がいること自体、ホルストからすれば腹立たしいのだった。

（まあ、こいつらが監獄に近接した森で騒いでいたからこそ、エルマのことに気づけたのだとはいえ）

ちらりと、ここに至った経緯を思い出し、一瞬はそんなことを考える。

ホルストは時折気分転換に、監獄に接する森や、そこに棲む魔獣たちの生態を観測していた。

今回、ゲーム中の苛立ちを紛れさせるべく、森を「散歩」していたら、魔蛾が一斉に飛び立った気配が確認されたのだ。

気になって現場に急行したところ、ルーカスに背負われて山を下りるエルマの姿を見つけた。

まさかの邂逅。

だが、それに躊躇うホルストではない。

すぐさま獄内に引き返して諸々の準備を整え 中には、本物の医者を気絶させ記憶を混濁させるための薬品も含む 、ようやく屋敷に駆けつけたと、そういうわけだった。

「……………これもフレンツェルの因縁かな」

「なんだと？」

ぼそつとした呟きに、聞き取れなかったらしいルーカスが眉を寄せる。

その精悍な顔をじっと見つめてから、ホルストは、いかにも言い直すためであるかのように、大きく口を開けた。

そして、

「もしあの子が次に倒れることがあれば、麻酔無しでおまえらの眼球をえぐり取ってやる」

地を這うような声で恫喝した。

「……………!?!」

相手がぎょつと目を見開く。

ホルストはにこりと笑うと、口調をもとに戻した。

「 というくらいの気概でもって処置しましたので……、ご安心ください」

「 ……あ、ああ……? 」

ルーカスは引き気味だ。

正体を追及される前に、ホルストはくるりと踵を返した。

「 では、失礼いたします」

そうして、さっさと部屋の前を去っていく。

ルーカスに八つ当たりを決めたことで、多少すっきりした彼は、その後いくつかの野暮用を済ませ、獄内に戻る頃にはいつもの落着きを取り戻していた。

「 あら、お帰りなさい、【貪欲】」

彼らの溜まり場と化している最上階の部屋に足を向ければ、すぐにハイデマリーが気付いて視線を上げる。

彼女はちょうど、持ち札を整理しているところだったのか、左手にカードを扇状に広げ、右手の細い人差し指で、考えを巡らせるようにとんとんと唇を叩いていた。

「 おやまあ、相変わらずえげつないまでのカード運だね、【色欲】」

「 あら、運などではないわ。努力と実力の賜物よ」

ホルストが上から覗き込むと、ソファに座ったままのハイデマリーが、いたずらっぽく彼を睨んでみせる。

妖艶な上目遣いに、しかしホルストはちらりとも心動かされた様

子を見せず、それどころか、彼女の胸の谷間にすいと指先を差し込んでみせた。

「あん」

「たしかに、胸元に強い札を仕込んでおくのも、努力っていうのかな？」

そう言って、彼はぴらりと周囲にカードを見せつけてみせた。

ジョーカー。

最強のカードだ。

「ちよっとお、マリー！ あんた、やっぱり仕込んでやがってたわね！？」

「あら【嫉妬】、大切にしまっていただけで、使ってはないわ？」
「身体の一部にカードを隠し持つこと自体が問題だっつーの！」

リーゼルがきゃんきゃんと吠えるが、ハイデマリーは気にした様子もない。

新入りのクレメンスが最も激しく反応するものと思ったが、それもなかった。

彼はとつくに平静を失い、追い詰められた者の形相でカードを睨みつけていた。

そこには、先ほどまで辛うじて残っていた、理性の色はかけられない。

（おや、まあ。僕のいない間に随分むしり取られたようで）

哀れな姿に、ホルストは皮肉気に笑う。

それから、麗しい篡奪者に、せめてもの公平を期すべくこう告げた。

「ゲームにいいジョーカーは一枚だけだ。場違いのカードは、大人しく引っ込んで、見守り役に回ろう、ね？」

そうして、ほくそえむ悪魔の札を、びりりと引き裂いた。

24・「普通」の虫退治(1)

翌朝、朝食を取りにエルマたちが食堂へと顔を出すと、そこにはデボラとケヴィン、そして彼ら付きの使用人たちが勢ぞろいしていた。

客人として、主食堂で日々食事を供されてはいるものの、実際のところ、この屋敷の家人がともに席に着いたのは、初日の晚餐だけだ。

そのときすら、領主ヨーナスは終始無言で、デボラはしきりにルーカスに媚びを売り、ケヴィンに至っては食が進まぬからと挨拶だけ寄越して退室していた。

以降も、朝型のルーカスたちと不規則なフレンツェル一家では生活リズムが合わなかったため、こうして朝、彼らと顔を合わせるのは初めてである。

少々驚いたルーカスやイレネをよそに、フレンツェル姉弟はぱつと立ち上がり、エルマに向かって叫んだ。

「ご機嫌麗しく、王弟殿下、イレネ様、そして　エルマ様！」
「お加減はいかがだろう、殿下、イレネさん、そして　エルマさん！」

一応礼儀に則って、身分順にルーカスやイレネに向かって先に呼び掛けてはいるが、視線の熱さと声量とが、完全にそのマナーを裏切っている。

エルマはわずかに引いたような素振りを見せたが、それをものと

もせず、ふたりが駆け寄ってきた。

「ああ……！ 心なしかどこかおやつれのような！ 夕食も取らずに眠っておられたのでしょうか？ そのせいか、頬のラインが昨日昼に比べて髪の毛三本分ほどシャープになられて……！ おいたわしいですわ……！」

「手配した医師は役立ててもらえただろうか？ 腕はいいと思うのだが、昨日はよほどあなたの美しさに動転したのか、診察後に僕への報告をすることもせず帰ってしまったようで、僕はどれほどやきもきしたことが……いえ、そんなことはいいんだ、あなたが元気にさえなったのならば！」

「どうやら、二人とも大層心配し、憤り、手を尽くしてくれたようである。」

「殿下には報告したようだからまだいいものの……」

己の差配に不手際があったことがよほど悔しいのか、ケヴィンは未だぶつぶつと愚痴を漏らしていたが、エルマは冷静にそれに返事を寄越した。

「昨日は突然倒れてしまい失礼いたしました。まさか草花の香りに当てられて倒れるなど、お恥ずかしい限りでございます。ですがおかげさまで、むしろぐっすり眠れてとてもよい夢も見られました、朝から元気に掃除などさせていただきました」

「んまあ、そんな、エルマ様が掃除だなんて！」

「そうとも、掃除というならむしろ、僕があつた忌々しいクローバー畑に、今この瞬間にも火を放って一掃してくるべきという話であつて！」

「よく言っただけケヴィン！」

意地悪な姉と高慢な弟だったはずの二人は、今やすっかり、ただの純真な妄信者となり果ててしまっている。

信者二人の妄言に、エルマはわずかに顎を引きながら、

「お気持ちはありがたいですが、掃除は侍女の普通の業務ですし、今の時期は乾燥しており容易に山火事となりえますので、おやめいただけますか」

と冷静に水を差した。

「よかったわ……エルマがああ暴走姉弟を止めてくれるような、普通の感性を身に着けてくれて……」

「惑わされるなイレネ、あいつは、生態系の破壊宣言をするほど急激に自分に傾倒しだしたケヴィンの様子には、特に疑問を覚えていないようだぞ」

イレネがついぼそつと呟けば、ルーカスがささず冷静に指摘する。

実際のところエルマは、接した相手が突然自分に隷属しだすことだとか、隷属した相手が自身のために国や土地や自然を捧げることについては、なにも不思議には思っていなかった。

某母親の教えの影響である。

そんなわけで、エルマはしゃらつとケヴィンの不穏発言を聞き流し、会話を進めた。

「さて、そのようなことより、本日中にでも、例の沼に再び向かいたいと思っております。昨日捕獲した魔蛾についても、少々気になる点がございまして」

彼女としては、自分のことを心配されるよりも、自分が倒れたせいで遅れてしまった調査を早く取り戻したいという気持ちの方が強かったのだ。

だが、ケヴィンに調査の件が伝わらないよう、エルマなりにぼかしてその旨を告げたところ、当のケヴィンたちから、それを遮られてしまった。

「それなのだが」

「実は、わたくしたちにも思うところがございますの」

二人が、まるでフレーズを繋げるようにしながら息びったりに告げる。

ケヴィンもこの一日で急激にけんが取れた結果、あどけない瞳に小柄な体を持つ、いたいけな少年にしか見えなくなってしまう、今のデボラとケヴィンは、単なる麗しくいじらしい姉弟でしかなかった。

清純派少女にキャラチェンジしたデボラは、両の手をそっと組み合わせてエルマを見上げた。

「まずはエルマ様、ならびに皆さま、どうぞお許してくださいませ。

このデボラ、今の弟なら皆さまのご事情を吹聴して回ることはあるまいと愚考し、エルマ様からお聞きしたかくかくしかじかの事情を共有させていただきました」

「実際のところ、自領が陛下に憂慮されるほどの状態にあるというのは、幾重にも自省すべき問題であって、そのことで王家に反感を抱くのは筋違いであると、心得ております。ですので、その点についてはご安心ください。また、知らなかったとはいえ、殿下やイレネさんに対して放った暴言についてもお詫びします」

デボラが視線で促すと、ケヴィンもルーカスにしっかりと視線を合わせ、はきはきと告げる。

そこには幼くとも次期領主の責任感と気迫が滲んでおり、たった一日での彼の成長ぶりに、ルーカスは内心で目を丸くした。

「……そうか。ならいいが」

「もったいないお言葉ですわ」

詫びられたイレーネも、ケヴィンの豹変ぶりに驚きながら、こわごとと相槌を打つ。

するとフレンツェル姉弟は軽く頷きあい、使用人たちを下がらせると、デボラが話を切り出した。

「その上で、ご提案が。弟と話していたのですが、こたびの件、わたくしたち自身で、父である領主ヨーナスに、事情を問いたいと思っております」

「自身で？」

「ええ。ケヴィンも申しした通り、陛下が憂慮されるほどに、領民の心が離れているというのは、恥ずべき事態。それがわたくしたちの振る舞いのせいならば、わたくしたちはそれを即座に改めるべきですし、父の奇行のせいであるならば、事情を問い質し、それをやめさせるべきだと思っております」

デボラは真剣だった。

その大地の色の瞳には、領主の娘にふさわしい、揺るぎない意思の光が浮かんでいた。

横では、ケヴィンがきゅっと拳を握りしめている。

彼は一度唇を湿らせると、覚悟を決めたように告げた。

「正直なところ、僕には父の本性というか、考え……本当に母を取り戻そうとして、魔と契約を交わそうとしているのか、わかりません。あの人が何を考えて生きているのか、僕たちは満足に話し合ったことすらないから……」

ケヴィンの知る父は、病弱な息子をまるで恥じるように屋敷の奥深くに追いやり、かつ、周囲との交流を絶って自らも部屋に閉じこもるような人間だ。

ケヴィンは長らく、それは自分が母 エリーザを奪ってしまったからだと思っていた。
憎まれているのだと。

しかし、デボラから聞いた話では、父ヨナスは、瘡弱のデボラの天敵である魔蟲を、わざわざ家の池に飼っていたかもしれないという。

妻の死には関係ないはずの娘すら害そうとするのはおかしい。
それとも、憎しみ云々などではなく、ただ子どもたちのことなどどうでもよくなるほど、妻を求めているということなのか。

そのあたりの彼の考えが、ケヴィンにはさっぱりわからなかった。

「本当は、もっと早く、父の闇に踏み込むべきだったんだ。けれどできなかった。……自分の罪 自分のせいで母が死んだという事実を、改めて突きつけられるのが怖かったから」

目を伏せながら呟くと、デボラが励ますように、彼の腕に手を添える。

ケヴィンはぎゅっと、今日も胸から下げた指輪を握り締め、再び

視線を上げた。

「だから、今回の件は、その最後の機会だと思っんです。僕たちは、ちゃんと父を理解したい。そして、領主一家としてふさわしい振る舞いを選び取りたい。だから、父への聞き取りを、僕たちからさせてもらえませんか？」

「もちろん、わたくしたちが父の主張を隠蔽、捏造できぬよう、配慮するつもりです。父はきつともうすぐこの場に朝食を取りに来るので、その間、皆さまにはどこかに潜んでいただき、わたくしたちの会話を直接聞いてもらう。それならば、調査のお邪魔にはならないでしょう？」

デボラが言い添えると、むしろルーカスは困惑に眉を寄せた。

「だがそれだと、家族のごく私的な事情までをも我々が聞くことになってしまう。それでもいいというのか？」

「はい」

「ええ」

ケヴィンも、デボラも、その瞳に迷いはなかった。

「真実を聞き出す過程に、なんの恥がございましょう。隠し立てせず、真実を確かめ、知らしめることこそ、領地を束ねる者の役目。どうぞ、お任せください」

そうまで言われてしまえば、ルーカスも否とは言えない。

彼は素早く思考を巡らせ、彼らが自主的に領主に聞き取りをするということが、「王家に不満を持たれぬよう事情を明らかにせよ」との王命に背かぬものであることを確認すると、頷いた。

「わかった。では、遠慮なく頼もう」

そうして、ぐるりと辺りを見回す。

「だが、潜むにしても場所を考えなくてはな。なにぶん、俺の体格が大きいぶん、長時間隠れるとなると、壺や甲冑の類では」

「ああ、それにつきましては」

とそのとき、黙って話を聞いていたエルマが、くいと眼鏡のブリッジを押し上げ、壁に掛かっていた絵画の額縁をぐいと押しつけた。隠されていた小さなレバーを、残像が見える勢いで回転させると、ぎし、と音を立てて壁が動き出す。

ルーカスたちの目の前に、たちまち秘密の空間が現れた。

「そんなこともあるのかと、食堂の隣に発見した隠し小部屋を先ほど清掃しておきました」

「おまえはいつたいなにを想定していたんだ!？」

「座り心地が少々悪いようにお見受けしましたので、独断で恐縮ですが、ソファやワイン、ナッツなど菓子の類もご用意させていただきました」

「快適か! というか勝手に他人の屋敷の隠し部屋を暴くな! 掃除するな! 居心地をよくするな!」

至れり尽くせりすぎるエルマの仕事ぶりに、ルーカスはもはや突っ込む以外の術を持たない。

が、勝手に屋敷構造的な機密事項を暴かれ、改造されてしまったはずのフレンツェル姉弟は、

「さすがですわ、エルマ様あ……」

「ナッツは、僕も好物だ……」

なぜかぼつと頬を赤らめるだけであった。

「あの」

もはや收拾のつかなくなっている状況下で、たまたま扉の方向にたそがれていたイレーネが、ふとなにかに気付いたように拳手する。

「こちらに向かって足音が近づいてきている気がするのだけど」

彼女はちよつと顔を引き攣らせていた。

「タイミング的に　ヨーナス様ではないかしら？」

「はい、速度と音階的にも、ヨーナス様および従者殿の足音とお見受けしますね」

「呑気にコメントしている場合か！」

頷くエルマに、ルーカスが素早く一喝し、ふたりを小脇に抱えろと、そのまま小部屋に押し込む。

「悪いが、使わせてもらおうぞ！」

そうして、慎重かつ迅速に隠し扉を閉じたのと同時に、ヨーナスが食堂にやってきた。

25・「普通」の虫退治(2)

いつも通りの陰気な表情でやってきたヨーナスは、食堂に自分以外の人物　娘と息子が揃っていることにまず軽く瞠目し、それから、デボラの姿を完全に視界に入れると、ぎよっと肩を揺らした。

「　　!？」

「おはようございます。問われる前にお答えしておきますが、わたくしは、最近ダイエットに成功したあなたの娘、ブランニュー・デボラでございますわ」

デボラが淡々と述べると、ヨーナスはまじまじと見つめ返してきたが、それでも領主の貫禄なのか、彼はやがて落ち着いた素振りでも頷いた。

「……そうか」

それから、ぽつりと付け足す。

「急にきれいになったから驚いた。エリーザに、似てきたな」

劇的な変化に驚愕はしているようだが、必要以上に妻の面差しに惹き付けられている感じでもない。

果たしてこれが「妻の反魂を願って魔道に手を染める」男の言動だろうか、デボラとケヴィンは素早く困惑の視線を交わし合った。

「……父上」

しばしの逡巡ののち、ケヴィンが切り出す。今度は彼から踏み込むことにしようだ。

ケヴィンは何気なさを装うように、自らもカトラリーを取って、パンにバターを塗るふりをしながら告げた。

「姉上をこのように変身させたのは、殿下に付き従っていた侍女の一人、エルマさ……エルマという者です。彼女はとても有能で、この数日で姉上に美容術を仕込んだほかにも、王都仕込みの様々な技術を駆使して、屋敷の仕事を手伝ってくれました」

たとえば、と、ケヴィンは少しだけ間をおいてみせる。

「裏庭にあつた、澱んだ池。あそこに湧いていた魔蟲もきれいに浚ってくれたのだとか」

「……………」

これには、先ほどよりも明確な反応があつた。

「……………なんだと？」

「ですから、池の魔蟲です。ご存知でしたか？ あそこに湧いていた藻は、ただの藻ではなくて、虫で、しかも瘴気を帯びた　つまり魔蟲だったのだそう。我が家には瘴弱の姉上もいるのに、これは由々しき事態。一匹残らず処理してもらって、本当によかったですよね？」

「……………」

ヨーナスの厳格そうな顔が、わずかに強張った。

動揺しているようにも見えず、苛立っているようにも見えず。

隠し部屋の壁をくりぬいた小さな穴、およびカムフラージュに掛けられた肖像画の瞳の部分を通してやり取りを見守っていたルーカスは、壁に張り付いたまま、小声で漏らした。

「くそ、この穴からでは、さすがに細かな表情までは読めないな」
「エルマなら微表情を読めるのではありませんか？」

すると、同じく壁に張り付いて、肖像画の指輪の辺りに相当する穴から覗き見ていたイレネが、すかさず提案する。

ルーカスは頷き、

「エルマ、おまえなら領主殿の微表情を読めるか？」

視線を食堂に固定したまま問うてみたが、返事はなかった。

「エルマ？」

不審に思い、背後を振り向いてみて、ルーカスたちは思わずぎよつとしてしまう。

「……おまえ、なにをしている」
「編み物ですが」

隠し部屋の片隅、ソファとサイドボードの隙間にちよこんと佇んだエルマは、その立ち位置に見合わぬ豪快さで、レース編みを仕上げていた。

彼女が腕と指先を動かすたびに、ぎゅんと糸が唸って、みるみる意匠が出現していく。

怒涛の勢いで形成される、繊細かつ美麗なレースに、思わず両名

が突っ込んだ。

「この状況下でなぜ編み物なんかをしているんだおまえは！」

「女性は待機時間などに、編み物をして時間をつぶすのが『普通』だとお聞きしまして。今朝方、魔蛾の繭から取ったばかりの糸なのですが、これがまた予想をはるかに上回る高品質だったもので、ついでに」

「これ待機時間じゃないし！ むしろ真相に迫る正念場だし！ っ
ていうか結局ほんとに魔蛾の幼虫を茹でたのあなた！？」

「声が響きます、お静かに。おっと、差し迫った会話運びになってきたようです」

結果、冷静に突っ込みを返される。

ルーカスたちは、中途半端に叫びを封じられたもどかしさを抱きながらも、慌てて再度壁に張り付いた。

食堂では、緊迫した空気の中、ケヴィンが声を張り上げはじめた。
いた。

「なぜ、そこで浮かぬ顔をするんだ。喜ばしいはずじゃないですか、父上。そうでしょう？ 魔蟲はフレンツェル領の天敵。見つけたら即座に殺し、死骸を見つけたら縁起がいいと喜ぶ。そういうものではないですか」

「ケヴィン、別に私は」

「それともなにか、喜べない事情があたりで？ 瘴気を帯びた藻や魔蛾を、駆除するのではなく、まるで飼おうとでもするように接する。そんな、正気を疑うような行動の理由を、父上は説明できるのか！？」

とうとう、ケヴィンは勢いよく踏み込んだ。

「気付かれていないとでも!? とんでもない! 父上の行動は、領民を、僕たちを、大いなる不安に陥れています。夜な夜な森の奥の沼に向かつて、魔蛾を身に引き寄せているのでしょうか? 屋敷の池に魔蟲の存在を許したのは、父上なのでしょう? いったいなにが目的なんだ! どうしてそんな、おぞましいことをするんです!」
「ケヴィン」

「領民たちは、父上が母上の魂を取り戻すために、魔道に手を染め、神聖なぶどう畑を魔蟲に捧げようとしているのだと噂しています。そうなのですか? それが目的なのですか? あなたは そんなにも、母上を愛しているのですか!?!」

血を吐くような叫びは、むしろ、そんなにも僕のことを恨んでいるのか、と聞こえた。

感情が勝ち過ぎた弟を、デボラが視線で制する。

しかし、彼女が差し水となるような言葉を口にするよりも早く、ヨーナスが低く告げた。

「私が、領主としての軛くひきを外れるものか。噂に振り回されるな。すべて私がうまくやる。おまえは、父を信じ、ただ待っていればよい」

それは、全面的に事態を請け負うというよりは、単に息子を遠ざけるセリフだ。

案の定、かっとなったケヴィンは、ますます語調を荒げた。

「僕の質問にまったく答えていないじゃないか! 父上が沼で魔蛾を飼っているというのは事実なのか、事実ならそれはなぜなのか、僕はそれを聞いてるんだ! どうして答えてくれないんですか!?!」

「だから」

「それほどまでに、僕のことを信用できませんか!？」

間髪を入れずに、ケヴィンが叫ぶ。

怒声というよりは、血を吐くような、悲鳴。

魔道に堕ちたかもしれない父への怒りより、それこそが、長らくケヴィンを苦しめてきたものの正体であった。

「ケヴィン」

「あなたはいつも部屋に閉じこもっている！ 僕や姉上のことなど見向きもしない！ 僕が病気がちなのを言い訳に、屋敷の奥深くに追いやつて、領主の仕事も心構えも教えず、会話すら交わさず、心の内を明かさない。それは、僕のことを次期領主に目するに値しないと、そう思っているからですか？」

「なにを」

「それほどまでに、僕は、頼りない息子ですか!？」

とうとう声を震わせて叫ばれ、ヨーナスは絶句した。

デボラも目を見開いて弟を見ている。

彼女は、生意気だった弟が、ここまでの苦悩を抱えているとは思ってもみなかったのだ。

だが、病弱であることへの負い目 コンプレックス由来の毒を、全身に抱え込んでしまったその姿は、彼女自身大いに感じるどころがあり、彼女は痛ましそうに目を細めた。

「ケヴィン……」

寄り添うようなデボラの呟きに、ヨナスがはつと我に返る。
彼は息子になにかを言いかけたが、しかしすぐに口を引き結び、
やがて首を振った。

「……おまえを、至らぬ子だと思ったことは一度もない。それは本
当だ。魔蛾の件をおまえたちに話さなかったのも、おまえたちを信
じていないからではない。どうか信じてくれ」
「信じてほしい、けれど、事情はやはり話せない、と？」
「……領主の指輪に恥じるような真似は、しない。神聖なるぶどう
畑を、魔蛾の被害から守りたい。その気持ちに、嘘偽りがあるも
のか。どうか、信じてほしい」

押し殺した声で、言葉を選びながら話すヨナスに、姉弟は無言
で視線を交わし合った。

魔蛾を引き寄せていたことは否定しない。ただし領地を守りたい
気持ちに偽りはない。

ケヴィンたちのことを信用していないわけではない。けれど、事
情は話せない。

あまりに曖昧で、あまりに矛盾に満ちた言い分だ。

デボラは唇を噛み、弟に代わってどこから踏み込んでいくかを考
える。

しかし、彼女が口を開くことはとうとうなかった。

追及を諦めたからではない。

バンツ！

「旦那様！」

下がらせたはずの使用人たちが、真っ青な顔で食堂に飛び込んできたからである。

体当たりするような勢いで扉を開けた彼らは、早口でヨナスに窮状を訴えた。

「大変でございます！ 畑で魔蛾の卵が大量に見つかり、大騒ぎに……！ 該当区画の民が、畑に火を放つ許可を求めて、続々と陳情に来ております！」

「なんだと ……!？」

26・「普通」の虫退治(3)

ぶどう畑で、魔蛾の卵。

それが本当なら、魔蟲をなにより厭うフレンツェル領にとっては緊急事態だ。

ヨーナスが動揺し眉を寄せる。

だが、そうしている間にも、次々と食堂に使用人たちが押し寄せてきた。

「大変でございます、旦那様！ 少し待つようにと守衛が民に告げたところ、不安を爆発させた者たちが暴徒化し……！ 屋敷の窓を割ったり、美術品を破壊したりと、手が付けられません！」

「守衛が抑えようとしたましたが、かえってそれで緊張が高まり……！」

「旦那様！ だめです、こちらまで民が ああつ、こら！ こちららはフレンツェル家の私的な 守衛！ 彼らを止めてくれ！」

叫ぶ彼らの背後から、暴徒化した民の一部が身を乗り出し、物を投げつけようとする。

見る間に、食堂とそこへ続く廊下は、乱闘騒ぎになった。

「ぶざけるなあ！ 放せ！ 放せよ……っ！ おい！ てめえらの主人はよ、俺たちのぶどう畑を見殺しにする気か！？ ああっ！？」

「やめ……っ、落ち着いて」

「おい！ 聞いてんのか陰気領主！ 魔蛾だ！ 魔蛾の卵が、それもおびただしい量見つかったんだ！ 枝も根もめちやくちゃだ。どうしてくれんだ、ええ！？ あんたが あんたが、俺たちの再三

の陳情にもかかわらず、なにも手を打たなかったせいだろうか！」

暴れているのは、リーダー格の男たちであるらしい。
声が大きく、体格も立派だ。

目を血走らせて叫ぶ彼らに引きずられて、周囲はものものしい雰
囲気をまといはじめた。

「鳴鎖を発明した神童がなんだ！ 今やあんなもの、すっかり効果
をなくしちゃって、ただのうるさいガラクタじゃねえか！ ガラク
タだけ山の周辺にばら撒いて、おまえはずっとなにをしてた！？
ああ！？」

「なにもしないどころか、夜な夜な魔の沼に向かっては、魔蛾に餌
をやったんだろうが！ ああ？ 飼ってたんだろ！？ 魔物と契約
して、その糧をやってるんだろう！？ 女一人のために、そこまで
道を踏み外したのか、この野郎！」

もはや事実と憶測とが入り混じり、すっかりヨーナスが魔と契約
したことになってしまっている。

いや、実際彼らにとっては、この事態を解決してくれぬ領主など、
魔に堕ちたも同然なのだ。

収穫祭を前にした魔蛾の襲来。

下手を打てば、この一年分、いや、枝が回復するまでの数年分の
実りが失われる。

彼らはほとんど恐慌状態に陥りかけていた。

「なんとか言えよ！ ああ！？ おら、放せ！ 掴んでんじゃねえ
よ……」

険しい表情を浮かべ、その場を去ろうとしたヨナナスに、守衛の拘束を振りほどいて男たちが叫ぶ。

彼らがめちやくちやに振り回した腕が、壁に掛けられていた絵画や壺に当たり、あたりは一層騒然となった。

ケヴィンは初めて目にする領民たちの怒号に吞まれ、すっかり青褪めてしまっている。

壁越しに様子を窺っていたルーカスは、口を引き結んだ。

ここを出ていくのは調査としては致命的だが、こうなってはもはや、誰かが制止に入るほかない。

調査は切り上げ、彼らの前に踏み出ていくか、と、扉に手を掛けようとしたが、

「 落ち着きなさい! 」

それよりも早く、凜とした声が一同の耳を打った。

デボラだ。

かつては「醜女令嬢」とあだ名され、高慢で世間知らずだったはずの彼女は、今やまっすぐに背筋を伸ばし、大きな瞳で物怖じもせず男たちを見据えていた。

「 聖なるぶどう畑の守り手が、虫ごときに取り乱してどうします！ 非難より、対処を。あなた方 いえ、わたくしたちが攻撃すべきは、同胞よりも魔蛾でしょう? 」

きっぱりと言い切られ、男たちが氣勢をそがれたように黙り込む。

彼らはまじまじとデボラを見つめ、一様に困惑の表情を浮かべた。

「だ……誰だ……？」

「フレンツェル辺境伯爵が娘、ブランニュー・デボラですわ！ 詳細後日！ 今はとにかく、魔蛾への対処です」

もはや慣れつこととなったビフォーアフターへの驚愕をさらりと躲し、彼女はぐるりと周囲を睥睨する。その鋭い眼差し、そして暴力的な巨乳には、見る者を精神的にも物理的にも釘付けにする迫力があつた。

「あなた方の恐怖と焦燥は理解します。そのうえで、周囲への被害を防ぐべく、自らの焔を焼こうとした勇氣、そして筋を違えず我が家に許可を求めに來た冷静さは、称賛されるべきでしょう」

「デボラ、様……」

自身の恐怖に理解を示され、かつ英断を認められたことで、男たちにはわずかな安堵が広がっていく。

災害における最大の敵は、魔蟲それ自体よりも、恐怖と、焦りだ。デボラはこつそりと拳を握って震えを抑え込みながら、確実に彼らの心を掌握しようとしていた。

「父に代わって、わたくしが許可します。多少の犠牲はやむをえませんが。火器を使用し、該当の焔、および周囲半マイルに渡る焼却を

「ならん！」

しかし、その指令を、ヨーナスの鋭い声が遮った。

「火器の使用は許さぬ！ 魔蛾を焼いてはならん！」

「なぜですの、お父様!？」

デボラが愕然として聞き返す。

彼女には、とうてい父の主張が受け入れられなかった。

「魔蛾ですよ! いくら卵とはいえ、かの存在は確実に枝を腐らせる。のみならず、そこから孵化してしまえば、たちまち周囲いえ、領地全体の畑に、毒の鱗粉が撒き散らされるのですよ!？ 今焼かなくてどうするのです!？」

「ならん! 卵を付けられた枝は、焼いたところで今更元には戻らぬ。とすれば、孵化さえ止められればよいのだ。私が該当の枝ごと撤去し、適切に処理する。そうすれば、周囲の畑をいたずらに焼く必要は」

「卵の付いた枝を、一本も漏らさずに運び出すなど不可能ですわ! それに、卵をそのままにしておけば、親の魔蛾が引き寄せられて、またさらに卵を産みつけていく。一刻も早く、焼き払うことが肝要なのです。そのくらいご存知でしょう!？」

デボラの反論は、もはや悲鳴混じりだった。

なぜ父は、頑なに魔蛾への攻撃を禁じるのだ。

これではまるで、本当に、魔蛾を守ろうとしているようではないか。

領民たちの手前、彼女は辛うじてその非難を飲み込んだが、しかしその努力虚しく、男たちは再び表情を険しくしはじめた。

「あんたやっぱり……」

「魔蛾の 魔の側に下ったのか……!」

空気が、唸りすら聞こえるような緊張を帯びる。
一歩間違えば、この場で革命すら起きそうだ。

ルーカスは壁越しに、焦りの独白を漏らした。

「伯はなにを考えている……？ 魔蛾の卵の発生を許したばかりか、それへの攻撃を認めないなど、普通ならありえない暴挙だ」
「恐れながら、殿下が介入してしまつてよい場面なのではございませんか？ 魔蟲への攻撃を躊躇うだなんて、門外漢の私から見ても、もはやヨーナス様は普通ではないように思いますもの」

イレエネもまた、眉を顰めて指摘する。

彼女もまた、男爵家とはいえ領地を治める側の人間だ。
その責任の重さは重々承知しているし、今のデボラが感じているであろう戸惑いや絶望も、手に取るようにわかった。

立ち聞きしていることが露見するのはまずかろうが、それよりも今は土地の安寧だ。

恐慌を起こしかけている民にとっては、指揮慣れしている、そして王弟の権力を持つルーカスの存在は救いになるだろう。

だが、イレエネがそうけしかけたとき、

「　　そうでしょうか？」

ひどく静かで、冷涼とした声が響いた。

振り向けば、エルマが彫刻刀を置き　　いつの間にか内職は、編み物から彫り物へと変わっていたらしい　　、淡々と眼鏡のブリッジを押し上げているところだった。

「魔蛾を一刻も早く追い払いたいという、デボラ様の本能的な反応は理解しますが、かといって魔蛾に火を放つのが普通だとは、私は賛同いたしかねます」

「え？」

「というか、虫を追い払うのに火って、かなり前時代的ではございませんか？」

意表を突かれて黙り込む二人をよそに、エルマはすいと前へ出る。そうして、完成品らしい笛のようなものを、先ほどまで編んでいたレースの鎖に通すと、それを首に下げ、「よいしょ」と遠慮会釈なく隠し扉に手を掛けた。

「失礼。扉が開きますよ」

「のわああああ！？ どこから出てきたおまえ！？」

いきなり絵画の向こうから現れたエルマたち一行に、領民たちが度肝を抜かれて叫び出す。

腰を抜かした者もいたが、エルマはそれには頓着せず、ぎよつとしてこちらを見ているヨーナスに向かって一礼した。

「侍女、エルマ。僭越ながら、ヨーナス様のお考えを推察し、ここに賛意を表明いたします」

「は………？」

いきなり支持された当の本人もぼかんとしていたが、エルマはただ、眼鏡をきらりと光らせ、頷いた。

「今のご時世、害虫駆除も省エネ、クリーン、省コスト。やはり普通、魔蛾を追い払うと言えば、火や殺虫剤なんかよりも 超音波

「ですよね？」

「ちよう、おんぱ……………」

武器まで取り出そうとしていた男たちが、ぽかんと口を開けた。

27・「普通」の虫退治(4)

すっかり毒気を抜かれた男たちとともに、くだんの畑へと急行したルーカスたちは、そこに広がる惨状を見て息を呑んだ。

「これは……」

そこには、気の弱いものや、女性であれば卒倒しそうな、グロテスクな光景が広がっていた。

通常であれば、誇らしげに枝や葉を広げ、どっしりと房を実らせているはずのぶどうが、その一帯だけ腐り落ちてしまっている。

房は地に崩れ落ち、葉は萎れ、枝はぼこぼことした醜い瘤をまとわせながら、所々で折れてしまっていた。

「魔蛾は通常の蛾と違って、ものすごい勢いで成長、孵化する。昨晩まではたしかに卵なんてなかったはずなのに……おそらく今朝がた産みつけられて、数時間でこのざまだ」

瘤からは身の毛のよだつような形状をした卵が溢れ、さらにそこから、粘り気のある糸のようなものがゆらり、ゆらりとうねっていた。

卵を保護するための粘液らしいが、それ自体が菌糸のように枝を蝕み、腐らせるのだという。

細かな蟲の卵がびっしりと枝に張り付いた様は、見た目にもおぞましいが、領民たちは目を逸らすこともなく、口を引き結んで腐った枝を刈っている。

魔蛾の卵に触れぬようなんとか枝を切り倒し、袋に詰め 想定
以上に菌糸が凄まじい速さで枝を侵食していることに呻き声を漏ら
しそうになるが、それをぐっところえていた。

彼らに絶望している暇などないのだ。

一刻も早く卵を処理しなくては、日に一度、卵の様子を見に来る
習性のある魔蛾に見つかって、襲われてしまう。

魔蛾は子に対して愛情深いのかそうでないのか、死に絶えてしま
った卵に対しては興味を示さない。

ただ、生きている卵が外敵に襲われるなどすると、凄まじい攻撃
性を見せるのだ。

数匹程度ならまだよい。

しかし、怒った魔蛾が群れを引き寄せようものなら、堪ったもの
ではなかった。

「エーリヒ！ 火の許可をもらってきてくれたのか！」

と、卵を処理していた男たちがこちらに気づき、手を振る。

全身や顔のほとんどを布で覆ってなお、彼らにぱつと喜色が浮か
んだのがわかった。

それほどに、火器の使用許可を すなわち魔蛾への攻勢の合図
を、待ちわびていたのだ。

彼らは、エーリヒと呼ばれた男たちの背後に、ヨーナスやケヴィ
ン とそれから、誰かはわからないが巨乳の美少女 、そして
ルーカスたちがいるのを認めて、戸惑いと安堵がないまぜになつた
ような表情を浮かべた。

「領主様自らご足労くださって……？ ええと、そちらの色男は……？ それに、そのエリーザ様によく似たきれいな娘さんは、まさか……？」

どうやら、状況が掴めないでいるようである。

ルーカスとデボラは、

「たまたまこの辺りに遊びに来た王都の者だ。魔蛾の卵が発生したと聞き、力になればと思いい様子を見に来た」

「ブランニュー・デボラですわ」

それぞれ端的に自己紹介を済ませ、さっさと魔蛾への対処に話を移した。

「火についてだが、伯は使用を許可しないことに決めた。魔蛾はそれ以外の方法で対処する」

「こちらで手を打ちますので、あなたたちは下がっててくださいませ。これまでご苦労様でした」

目を白黒させたのは、それまで卵と格闘していた領民たちである。彼らは一瞬きよとんとし、それから見る間に表情を険しくさせると、目の前の領主一家に食ってかかった。

「火の使用を許可しないとは、どういうことですか！？ これがどういふ状況か、あんた方だってさすがにわかってんでしょ！？」

「むろん父上も、僕たちだって状況は把握している。ただ、いたずらに火を放つ前に、まずはこの、王都から来た人間直伝の方法で、魔蛾を追い払うべく対処しよう」

「坊ちゃんも黙っててください！ 病弱令息お得意の、机上の空論なんざどうでもいい、俺たちは今、目の前の畑の危機を領主に訴え

てるんだ！ この、なにもしない、陰気領主になー！」

ケヴィンの仲裁はあっけなく無視される。

それどころか、辛うじて保たれていた領家への敬意もかなぐり捨て、男たちは歯を剥き出しにして怒鳴りつけた。

「早く！一刻も早く、魔蛾が気付く前に卵を燃やしてしまう必要があるんだ！ わかってんだろう、領主様よ!?」

「それとも、あの噂は本当だってかい!? あんたは、俺たちの畑を魔蛾の糧にして、エリーザ様の魂を取り返そうってか!? ふざけるな……そうはさせるか!」

「あの」

ヨーナスがなにも言い返さないのに、ますます苛立ちを募らせたのが、男たちは一層声を荒げていく。

途中、小柄な侍女が、ひっそりと拳手をしたが、それが目に入らぬほど彼らは興奮していた。

「ああ、ならいいさ！ あんたはそこで黙って見ている！ 無許可がなんだ、後から重税を課せられようとも、もういい、今すぐ俺がここに火を放つてやるよ!」

「だが覚えているよ、無能で怠情な領主など、俺たちのほうから切り捨ててやる……!」

「あの」

興奮はいよいよ苛烈な意志へと転じ、男たちに革命を決意させる。彼らは手にしていた鍬や鋤を、そのまま武器として振るいそうな気配すらにじませていた。

「ヨーナス・フォン・フレンツェル。聖なるぶどう畑の守り手とし

て、俺たちを導いてきたフレンツェル家の栄光も、今日ここまでだ」

「我々は、おまえを魔に堕ちた罪人と断じ、ここに」

「あの」

「ふがつ！？」

彼らが剣呑なセリフで、領家との断絶を宣言しようとしたその瞬間　しかし、荒ぶる口はひんやりとした手で塞がれる。

ぎよつとして手の持ち主に視線を向ければ、そこでは小柄で冴えないなりをした少女が、真顔で眼鏡を光らせていた。

「そのくだりは、すでにやり尽くされている上に、このようにのんびりとおしゃべりをしている間にですね　」

彼女は、男たちの口を塞いでいた手をぱつと離し、すいと人差し指で空を差した。

「魔蛾、来ちゃいましたが」

韻を踏んだ指摘とともに、

ぞあ……っ

まるで雨が降り出したかのような音を伴い、急に空が暗くなる。己の頭上を覆うものの正体に気付いた男たちは、一斉に顔色を失った。

「魔蛾……！」

「こんな大群で……！」

視線の先には、空のものと色が見えないくらいにびっしりと、緑の魔蛾が押し寄せていた。

「ひ……っ！ ひい……っ！」

もはや熱すら感じそうな羽音、ときおりふわりと舞う鱗粉に、男たちが情けない悲鳴を上げる。

ルーカスは咄嗟に周囲に、全身を布で覆うよう鋭く指示を飛ばすと、忌々しげに上空を見上げた。

「すごい数だ……」

その規模たるや、昨日森で目にした群れの数十倍に及ぶ。

一匹一匹は魔獣に比べればかなり小柄とはいえ、これだけの大群で押し寄せられては、とうていすべてを躲すことなどできそうになかった。無論、袋に詰めるなど論外だ。

瘴弱のデボラや、肺に難を抱えるケヴィンも、真っ青になっていたが、この一日でよほど精神を鍛えたのか、彼らは健気にもその場に足を踏ん張り、民に向かって叫んだ。

「に 逃げなさい！ こ、ここは、わたくしたちがなんとかします！」

「ま、魔蛾は、高い音や声に反応する。ほ……僕が囿になるから、おまえたちは極力足音を殺して、屋内に逃げろ！」

「デボラ様……ケヴィン様……」

思わぬ相手から庇われた男たちは、戸惑いも露わに二人を見やる。

瘴弱の醜女令嬢に病弱令息。

フレンツェルの汚点とも噂された姉弟が、まさかこのような振る舞いを見せるとは思わなかったのだ。

そして、魔に堕ちた陰気領主と彼らが罵っていた、ヨーナスはいえ、

「 皆の者、下がれ」

周囲がはつとするほどの気迫を漲らせて、静かに魔蛾の群れを見据えていた。

「魔蛾は、音に反応する。その習性を明らかにすべく、この十数年というもの研究を続けてきた。今こそ、その成果を生かすべき時だ。魔蛾一匹にすら、大切なぶどうを襲わせるものか。そなたらは、可能な限り静かにこの場から離れる」

その声は領主としての貫禄に満ち、また、この聖なる畑を守り導いてきた一族の責任と、気概とに溢れていた。

まさしく彼こそ、この辺境にして豊潤な土地の長。

その場にいた誰もが、つい先ほどまでの憎悪すら忘れ、無意識にヨーナスに縋るような視線を向けた。

「 エルマ、と言ったか」

ヨーナスは、魔蛾の群れが徐々に距離を詰めつつあるのにも動じず、冷静に、傍らの侍女へと問う。

「先ほど、超音波を使うと言っていたな。そなたも、魔蛾の習性に気付いていたのか」

「はい。鳴鎖とは、すなわち魔蛾の嫌う特定の高さの音を出し、追

い払う道具。また、ケヴィン様のお声を平均律音階の周波数に当てはめた結果、四四十の倍数ごとに魔蛾が強く反応を示していることを確認しましたので、理論上周波数を該当倍数で極大化すれば、より強く訴えかけることが可能と推察いたしました」

「なるほど、よくわかった」

周囲には、まったくもってわからない。

だが、ヨードナスとエルマの二人は、完全に理解しあつた研究者同士のように、そのままぺらぺらと会話を続けた。

「魔蛾の特性の内、音への反応、とくに超音波の可能性については随分昔から気付いていた。が、十分な強度と粒子加速度をえられる超音波の発生方法に長らく悩み、今年になってようやく圧電効果の存在を思いついたところだったのだ」

「なるほど、圧電効果を使ったランジユバン振動子ということですね」

「その通りだ。だがそれだと携帯という点で」

彼らの口からは、流体力学的キャビテーションだとか圧壊だとか音響インピーダンスだとか、意味不明な単語が次々飛び出す。

それを余すことなく二人は理解し合い、まるで幾多の実験を共に乗り越えてきた仲間というくらいに阿吽の呼吸を見せていたが、

「して、エルマ。そなたが持っているその犬笛。それで超音波を発生させようというのだな？」

「え、これはあくまで手慰みに作った、予備ですが」

しかし、その歩調が突如として乱れた。

「……予備？」

ヨーナスはえ、と戸惑った表情を浮かべて、エルマの手元を見つめる。

そこには、先ほど彼女が盗み聞きをしながら彫り進めていた、木彫りの笛があった。

ただ、笛というには拳のような形をしていて、先端には振り回すのにちょうどよいような、絹糸を鎖編みにして作った持ち手が付いている。

ヨーナスは眉を寄せた。

「それを振り回すことで、超音波を発生させるのではないのか？」
「いえ、この緊急事態に、普通、そんなまどろっこしいことはしませんよね？」

真顔で問い返され、研究室気質の領主が「え」とまごつく。
エルマはそれを怪訝そうに眺め、それからふと上空を見上げた。

「おっと、そうこうしているうちに、だいぶ距離が狭まってきてしまいました」

それから彼女は、枯れ枝や藁が詰まれ、小山となっている部分にひよいと飛び乗ると、なぜかおもむろに眼鏡を外しはじめた。

「おい待て、なぜそこで眼鏡を外す!？」

展開に取り残されていたルーカスたちが、はっとして問い質す。

周囲は、突如として目の前の侍女が絶世の美少女に転じたことに、ぎよっとして何度も目を擦っていたが、エルマはどこ吹く風だった。

「割れてしまいますので」

「は!？」

意味が分からない。

だが、魔蛾の接近を前にしたエルマは、詳細の説明を省くことにしたようだった。

じっと群れを見つめながら、すうっと大きく深呼吸をする。

まるで演奏家が己の愛器をそっと撫でるように、喉に軽く触れると、

ああ……

次に彼女は緩く両腕を広げ、歌声を紡ぎはじめた。

28・「普通」の虫退治(5)

「……………!?!」

すつと耳に飛び込んできた声に、その場にいた誰もが状況を忘れ、はっと息を呑む。

それほどまでに、美しい声だった。

ああ……………ああ……………

歌詞もない。

これといった旋律もない。

ただ、発声練習のように半音階ずつ声を高めているだけというのに、人々はあたかもセイレーンの歌声に幻惑される船乗りのように、ふうつと意識が奪われる心地よさを感じた。

影響されているのは、もちろん人間だけではないらしい。

エルマの声が、特定のある音に差し掛かると、じわじわと距離を詰めていた魔蛾の群れが、まるで動揺するようにざわりと波打ち、揺らめいた。

ああ……………ああ……………ああ……………

声はどんどんと高さを増していく。

けれど不思議と耳ざわりな甲高さはなく、声はかすれるどころか、水のような透明感と、燃え盛る炎のような力強さを帯びはじめた。

ああ……！

ふ、と。

音階を追っていた人々の耳から、突然声が消え失せる。

取り残された聴衆は、戸惑いながらきよろきよろと周囲を見回した。

「……？ エルマは歌うのをやめてしまったの？」

「いや……」

怪訝な顔で呟いたイレーネに、ヨーナスが呆然としたまま答えた。

「あの娘の声は、人間の可聴域を越したのだ」

「なにそれ!？」

イレーネの叫びは、奇しくもその場の人間全員の心の声を代表する形となった。

……………、……………、……………

エルマが紡ぐ声は、もはや誰の耳にも届かない。

ただ、魔蛾が食い入るようにエルマを見つめていること、ただそれだけをもって、人々は彼女が「歌って」いるのだと理解した。

いや。。

「……………エルマさん……………会話、しているのか……………?」

たったひとり、エルマの発する音波を、微かに聞き取れる者があった。

ケヴィンである。

発音が遅い 逆に言えば、子ども特有の繊細な鼓膜を維持する彼は、既に成長を終えた周囲の大人たちの中でただひとり、エルマの声を耳に捉えることができたのだ。

熱に浮かされたように、彼はぼうつとエルマを、そして彼女が立ち向かっている魔蛾の群れを見つめる。

耳を澄ませば澄ますほど、これまでに感じたことのない意志の光を、あのおぞましい魔蛾の群れからも読み取れるような気がした。

(……………そうとも……………感じる……………。魔蛾には、意志があり、言葉がある……………。先程からキインと耳を細く貫いていくようなこの音を介して、彼らは会話をしているんだ……………)

その唐突な理解は、彼の世界を一変させるような衝撃を与えた。今のケヴィンには、魔蛾の群れが単に蠢く魔蟲の塊などではなく、理的なリーダーと、厳格に統制された兵士の集まりのようにすら見えはじめていた。

だとすれば、そう、群れの先頭を舞う、ひととき繊毛の立派なあの大きな個体こそが、おそらくは魔蛾の王 いや、卵を守ろうとしているところから察するに、女王だ。

女王はいかにも博学才穎、狷介孤高。

伸ばした触覚は風にもそよがず凜と伸び、介立の精神を感じさせ

る。

その威厳溢れる女王は、しかしこの日唐突に、運命を狂わせる存在との邂逅を果たしてしまった。

それこそが、目の前で緩く両手を広げ、蠱惑的なまなざしを向ける人間の青年。

(……………!?)

ケヴィンは、己の発想にぎよつとして頬を叩いた。

今なぜ、自分はエルマのことを青年だなんて思ったのだ。

だが、「歌声」を聴いて脳内で勝手に結ばれる映像は、たしかに恋愛歌劇のごとき一場面を呈す。

そこに登場する人物は、蝶を擬人化したような美貌の女王と、異性を狂わせる桃花眼が印象的な淫蕩な青年だった。

妖艶な笑みを湛えた青年は、誘うように魔蛾の女王に囁きかける。

群れを導き卵を守り、ただ一族のために己を殺して献身しつづける、その生の虚しさを。

ただ一匹の魔蛾として、女として求められるその歓びを。進むような感情の交歓を

(な、なぜこんな倒錯的な筋書きばかり思い浮かんでしまうんだ、僕は……………!?)

ケヴィンは己の隠れた性癖を指摘されたような気がして、状況も忘れてかぶりを振った。

しかしその間にも、エルマと魔蛾の女王が織りなす、甘美なる歌劇は続く。

美貌の青年が切々と謳い上げる恋情歌に、世間知らずだった厳格な女王はそつと心の鎧を下ろし、己の翅を恥じらいに震わせたころだった。

女王の複眼に、己の半生が走馬灯のように蘇る。

群れの頂点としての宿命を授かって生まれたあの日。すべてが柔らかく温かだった蚕時代。

やがて迎えた脱皮、信頼していた友の裏切り、苛烈を極めた後継者争い、そして掴んだ栄光の座。

しかしそれとともに、いつの間にか凍り閉ざしてしまっていた己の心。

女王として魔蛾を率いてきた、その責任と誇り。

次世代の命を守り繋ぐその尊い役目。

ああ、でも、けれど今はそれすらもかなぐり捨てて、この情熱の炎に身を焦がしてしまいたい。

魔蛾の女王は胸部の繊毛を震わせ、おずおずと、そして徐々に力強く、魂の叫びを奏ではじめる。

愛……それは燃え盛る炎……ラララ……

(なんか魔蛾が歌いはじめたあああああっ!?)

ケヴィンはびくつと肩を揺らし、大きく目を見開いたまま魔蛾の群れを見つめた。

群れは、大きな魔蛾を筆頭に上空に留まり、微動だにしない。

やがて、向かい合うエルマが意を迎えるように頷き、一層広く両腕を広げた。

愛……それはすべてを奪い、与える、一瞬の光……ルルル……

(すかさずエルマさんからアンサーソングが返ったあああああっ！
?)

ケヴィンは咄嗟に、手近な板壁にがんがんと頭をぶつけた。

目の前の光景が、とにかく信じられない。

超音波を聞き取れず、すっかり状況に取り残された周囲も、魔蛾の群れになにか異様としか言いようのない空気が漂いはじめたのを察知し、ざわめきだした。

彼らには、エルマと魔蛾の間には、単に沈黙が横たわっているようにしか思えない。

けれどその実、両者の間には、フルオーケストラが鳴り響かんばかりの、壮大な駆け引きが行われているのであった。

群れは今や大音量でコーラスを響かせ、激しい魂のリフレインを奏でている。

愛……！ ああ、すべてを燃やし、奪う、恐るべき猛り……！

愛……！ おお、魂の欠片を取り戻し、与える、痛切な祈り……！

エルマがすつと片腕を持ち上げ、指先を魔蛾へと伸ばす。

片方は虫であるというのに、なぜだか、手を伸ばし合い、視線を絡み合わせる麗しの男女が、ケヴィンには確かに見えた気がした。

パアアアアアン……！

まるで、シンバルを力強く打ち鳴らしたかのような高音が耳を貫く。

それはケヴィンの耳には、不思議なことに、「愛………！」の叫びであるように聞こえた。

同時に、ざあつと音を立て、群れが一斉に空を舞う。

「な………なにが………っ!？」

自身をかばうことすら忘れ、ぎよつと目を剥く人々の前で、魔蛾の群れは四方八方へと飛び散った。

完全に統制を失った、大量の魔蛾。

久々に覆いを免れた青空と太陽が姿を見せるが、人々は恐怖に顔を引き攣らせたままだ。

が、魔蛾は不思議なことに、ふわふわと酔ったような軌跡を描きながら、エルマの周辺を名残惜しそうに漂うだけだった。

その動きには、人々や畑への攻撃性も、ついでに言えば卵への関心も感じられない。

一同は、怪訝そうに眉を寄せた。

「魔蛾が………卵よりも、人間に興味を示している………?」

「はい。群れのリーダーを筆頭に、卵より大切なものの存在、すな

わち愛に目覚めてもらおうよう、誘惑させていただきました」

「なにそれ!？」

人々は絶叫したが、そのうちの幾人が、宙を舞う魔蛾にとある異変が起こりつつあるのに気づいて、困惑の呟きを漏らした。

「なんだか……魔蛾の翅が、毒々しい緑色から、透き通るような翡翠色に、変わってきてるような……」

「ええ、恋は女をきれいにしますのです。この状態の魔蛾が生んだ幼虫からだ、間違いなく最高品質の絹糸が取れますよ」

「だからなにそれ!？」

淡々と説明されるが、わけがわからない。

ただ、目の前の現実として、魔蛾は蛾というより蝶と呼びたくなるような艶やかな翅を広げ、優雅に飛翔を続けていた。

胸部のふっくらとした繊毛や、複眼のつぶらな瞳など、むしろ愛らしさすら感じさせる。

しかも、かの虫の繭玉から取れる糸は最高に美しいのだという。

なんだそれは。

単にきれいで有益な、めっちゃイケてる益虫ではないか。

人々は、素直にその美しさを感じ入り、そしてそんな自分に戸惑った。

「さすがエルマ様……その魅了のお力は、性をも種族をも超越するのですね……!」

ひとり、デボラだけは目をハートにしていたが。

ともかくにも、魔蛾の襲来という最大の脅威は、エルマによってあっさりと払いのけられたわけである。

人々は徐々にそれを理解し、それと同時に、頬を興奮に染めはじめた。

「し……信じられない……これだけの魔蛾の大群を、たった一人で鎮圧して、しかも変質させてしまうなんて……！」

「あの歌声……もしか、古の聖女のように、癒しの歌声で魔の心を鎮めたというのか……!？」

「いえ、鎮圧というか、ほかに気を逸らしたただけですが。それに癒しの歌声などではなくて、ただの超音波ですが」

エルマはちよつと顎を引きながら訂正するが、興奮した人々は聞き入れもしない。

むしろ、突如露わになった美貌の影響も受け、エルマのことを人格化しはじめた。

「奇跡だ……! とんでもない奇跡が起こったんだ! あんたは、かつてフレンツェルを魔から守ったという聖女の末裔に違いない!」
「魔蛾を抑えたばかりか、あんな天の使いみたいなの、きれいな蝶のような姿に変えちまうなんて、ありえない……! ああ、ありがたえ……! ありがたえ……!」

「いえあの、ですから」

エルマはますます顎を引く。

完璧な形を描いた眉は、少しだけ不機嫌そうに寄せられはじめた。さもありません、彼女にとって、「とんでもない」だとか「ありえない」だとかの評価は、その努力を全力でデイスる言葉だ。

あ、やばい、と、傍らで聞いていたイレーネは思った。

「べつに一匹一匹に脳幹手術を施したわけでも、一瞬で塵レベルにまで握りつぶしたわけでもなく、単に超音波を使って誘いかけただけですよ。まさかそれくらいのが、できないとは言わないですよっ?」

エルマは少しむすっとしたように告げて、それから同志に縋るように、ヨーナスを仰ぎ見た。

「ヨーナス様も、さすがにこれくらいなら、『普通』だと思われますよね?」

「……………」

一瞬で白い灰と化したヨーナスを目にして、ルーカスとイレーネが静かに天を仰ぐ。

領民の反感すら厭わず、十数年の歳月を費やして魔蛾を追い払う秘技・超音波にたどり着き、しかし実現には至らなかったヨーナス。

超音波を己の身体で発生させ、かつ、単に追い払うどころか複雑な心理操作を引き出して相手を服従・変質させ、あまつさえそれを「普通」と言つてのけたエルマの発言は、彼の心を静かに、そして大胆に抉っていった。

「……ち、父上。……なんというか、その……ち、父上が夜な夜な沼に向かっていたのは、魔蛾を研究するためだったのですね。魔蛾を焼くと言ったのも、超音波を使った方が合理的だからだったのだとわかって、ええ、それだけでも、僕は本当によかったです……！」

「そ、そうですね……！ お父様の研究が実を結んだかどうかはさておき、その真意は、最も安全に魔蛾を追い払うべしという、領主にふさわしいものだった。それがわかっただけでもわたくしたち、どれだけ救われたことか……！ お父様には、心の一等賞を上げたいと思いますわ！」

「そんな……運動会でビリだった生徒に校長先生が向けるような言葉を言われても……」

渾身のフォローを見せる子どもたちに、ヨーナスはほそりと呟く。デボラたちは「しまった」という表情を浮かべた。

ルーカスたちもまた、かける言葉が思いつかず、そっとヨーナスを励ます視線だけをひとまず向けてみたのだが、

「心の一等賞もなにも、この魔蛾を無力化したのは、すべてヨーナ様の功績ではございませんか」

先ほどヨーナスの心を華麗に折り去った当の本人が、真顔でそんなことを言った。

「通常、魔蛾の翅は褐色の色味を帯びていると聞きます。ですが、フレンツェルの魔蛾は緑色。それは、ヨナス様がかの沼に棲む魔蟲を利用して、魔蛾の体色および体質を変えていったからでございますよう?」

「……………!」

その指摘に、ヨナスははっと目を見開く。

彼はまじまじとエルマを見つめ、それから低い声で、「気付いていたのか……………」と問うた。

エルマはこくりと頷き、

「はい。屋敷の庭にて、瘴気を帯びたミドリムシを発見したときに、その性質が気に掛かったものでして」

淡々と答える。

「どづいづいことですか……………」

困惑を露わにしたデボラに、エルマはやはり、特に表情を浮かべることなく説明した。

「先日デボラ様にお飲みいただいたミドリムシ。あれは、微かに瘴気を帯びていると申し上げましたね。発育が恐ろしくよく、通常では考えられぬような強い解毒作用デトックスを持つ。ひとくち飲んだデボラ様が、一瞬であらゆる毒を流してしまったことから、かの魔蟲を摂取すると、魔蛾の毒すら無効化されるのではないかと考えたのです」

瘴弱の娘がいるはずの池に、瘴気を帯びた魔蟲がいること。

自然発生的というには、やけにミドリムシの発育がよいこと。

それが、人目に付きにくい、かつ、ヨーナスの自室にほど近い裏庭に生息していたこと。

それらのことに引つ掛かりを覚えたエルマは、今朝がた早起きをして、昨日捉えた魔蛾に池のミドリムシを与えてみた。

すると魔蛾は、慣れ親しんだ餌のようにそれを食べた。

そして、その魔蛾の体内のどこからも 昨日彼らが放っていた鱗粉も含めて 、毒や瘴気は検出されなかった。

「……………」

思いもよらぬ内容に、デボラたちが息を呑む。

だが、言われてみれば、これだけの群れが襲来したというのに、確実に鱗粉が紛れているであろう空気を吸い込んでも、一向に息苦しさを感じない。

デボラは混乱して、額に手を当てた。

「でも…………十年前、たしかにわたくしは鱗粉を吸い込んで倒れて……………」

「ええ。ですから、それを機にヨーナス様は研究に着手されたのでしようね。領内に飛散する鱗粉毒も、年を追うごとに減っていったはずです」

「言われてみれば……………」

ここ数年、デボラは倒れたことなどなかった。

ただ、ずっと屋敷に引きこもり、自ら不摂生を深めていったので、それに気付かなかったのだが。

呆然とするデボラの代わりに、エルマはヨーナスに向き直る。

そして、淡々と事実を確認するように、問うた。

「人々が、魔蟲が湧き瘴気に満ちていると噂する沼。そこであなた様は、ミドリムシを飼育し、魔蛾に与え、領内の魔蛾の無毒化を進めていたのではありませんか？ 裏庭の池に湧いていたミドリムシは、その実験体。　そうですよね？」

領民たちが息を呑む。

陰気領主、魔に堕ちた外道などと、さんざん罵ってきたヨーナスが、まさかそんなことをしていたのだとは、思いもよらなかったからだ。

しかし、もしそれが本当なら、彼は自分たちのために、不当な中傷すら受けながらも長年研究を続けてきてくれたわけだ。

エーリヒたちは、息を殺し、じっとヨーナスを見つめた。

やがて、

「……そのとおりだ」

ヨーナスは、低く呟くように頷く。

その声は、なぜか罪を突きつけられた被告人のように、かすれていた。

「魔蟲を使って魔蛾を無毒化する研究と、超音波を使って魔蛾を追い払う研究。私はその二つを、両輪で進めていた」

それは本来、領主としては誇るべき任務のはずだ。

しかしそれを隠すように、慎重に告げるヨーナスを見て、ルーカスはふと違和感を覚えた。

民や家族から距離を置かれてもなお、領地を守るための研究を進めていたヨーナス。

それほどの責任感の強さ、頭脳の明晰さを持ち合わせていてなぜ、研究内容を民に告知してしまうことを思いつかなかったのか。

そうしてしまえばよほど堂々と、研究や実験に没頭できたらうに。

そもそも彼はなぜ、手っ取り早く魔蛾を「殺す」方法ではなく、体質改善や音波を使って「無毒化」したり「追い払う」方法の開発に腐心したのだろうか。

クリーンだとか省コストだとかエルマは言っていたが、そんなものは人知を超えた能力を持ったあの娘だから言えるのであって、普通、害虫を前にしたら人は体質改善より殲滅を考えるだろう。

（そうまでして、魔蛾を傷つけまいとしていた　？）

この領主には、まだなにか隠している事情があるのではないか。しかし、ルーカスが目を眇めた瞬間、

「　ところで」

顔を俯かせたヨーナスの視線を辿り、なんとなく地面を見つめていたエルマが、ふいに切り出した。

「この卵たちは、どう処理しましょうか」
「あ」

周囲は、その指摘にはっとする。

彼らの目の前の畑には、依然、卵とそれが放つ菌糸に蝕まれた枝が、大量に転がっているのだった。

成虫のほうは無毒化されているとはいえ、これらの卵の生態までは変えられていないようだ。

枝は無残に腐り溶け、一年で最も豊かであるべきぶどう畑は、その一帯だけ色を失っている。

魔蛾の退治に成功し、領主の真意を理解し、と、興奮したり胸打たれたりして忙しかったエーリヒたちも、むごい現実を突きつけられて、黙り込んだ。

あの大群に襲来されながら、これだけの被害で済んだのは幸いだ。しかし、少なくともエーリヒたちは、今年は厳しい冬を迎えることになる。

フレンツェル一家は、口々にエーリヒたちに話しかけた。

「これは産卵を防げなかった我ら一家の責任だ。失われた枝のぶん、補償することを約束しよう」

「卵の付いた枝は、僕たちが責任を持って、魔蛾が正気に戻らぬうちに焼却処分する。任せてほしい」

「あなた方は、今日はよく休んでくださいますか」

それぞれ、これまでの彼らからは考えられないような、親身であり責任感に溢れる態度だ。

領民たちは顔を見合わせ、泣き笑いのような表情でそれを受け入れようとしたが

「お待ちください」

そこに、エルマが待ったをかけた。

彼女は、割れる恐れがなくなったためか、再びすちゃっと眼鏡を装着し、きらりとガラスを光らせる。そして、真顔なのだろうとわかる雰囲気を漂わせて問うた。

「補償とは、どういうことです。なぜそこで、卵を焼却という話になるのですか」

「は？」

エルマの問いに、姉弟と父親は怪訝そうに眉を寄せる。

しかしエルマは、どこまでも真剣に告げた。

「家に帰るまでが遠足。幸せになるまでが災害復興。卵に枝を腐らされて、そのぶんを埋め合わせるだけだなんて、そんな中途半端な虫退治、虫退治と言えるのでしょうか」

「ええと……」

戸惑う一同の前で、エルマはくいと眼鏡のブリッジを持ち上げた。

「失った以上に取り返す。畑を荒らされた以上にむしる儲けを叩きだすまでが、『普通』の虫退治というものですよね？」

「どこの世界線の虫退治について話しているんですか！？」

一同の心の叫びが、奇しくもひとつになった。

30・皇帝と大貧民

「あら、あげた以上に随分ともらってしまったわ」

昼なお薄暗い監獄の一室で、嫣然とした声が響く。

ハイデマリーは、クレメンスが差し出した二枚の絵札をひらりと手の内で翻し、長い睫毛を瞬かせた。

「でも、それがルールなのだから、仕方ないわね」

そして、悪びれもせず小首を傾げた。

相も変わらずソファに背中を預けたほかの囚人たちも、何ごともないように自身の手札を整理している。

「そうそう、大貧民から皇帝には最強の手札を二枚、皇帝から大貧民には不要な手札を二枚交換する、っていうのがこのゲームのルールだからさ。仕方ないよね。許してあげてよ、クレメンス」

「貧しき民は構造的に搾取され続けるという、実に世知辛い現実を投影したルールですが、【色欲】に悪気があるわけではありませんから。お許しください、クレメンス殿」

「そんな悲壮な顔しなくていいじゃない。許しなさいよ、クレメンス」

「許せ、クレメンス」

順に、ホルスト、モーガン、リーゼルに、ギルベルトである。

ハイデマリーに勝つことはないが、かといってけっして最下位に落ちることのない彼らは、完全に余裕の態で、新しい玩具を弄び、楽しんでいた。

「許してクレメンス」

最後にぼそつとイザークまでもが呟いた瞬間、全員の手札の整理が完了する。

そうして彼らは、気だるげな雰囲気をまとわせたまま、再び最初のカードを場に捨てはじめた。

それがチエスであれ、カードであれ、敗者は勝者に絶対服従するという決まり自体は、彼らにも適用される。

しかしクレメンスという「新人」を得た今、彼らが最下位に落ちることはまずありえなかつたし、仮にそうなつたとしても、その窮地を鮮やかに切り抜けてしまえるなんらかの術が彼らにはあつた。

下手を打てば、監獄の奴隷へと墮とされる。そのスリルすら、この退屈な獄内では、魅力的なスパイスなのである。

よつて、彼らは実に優雅に、貴族的な余裕すら漂わせて、迷いのない手つきで札を選んで場には投げていった。

そんな中であつて、必死の形相を浮かべている人物が、ひとり。

ここまでで既にすっかり身ぐるみを剥がされてしまった、クレメンス・フォン・ロットナー元侯爵である。

血走つた瞳にはかつての理知的な光はなく、強張つた顔は柔和な人柄を装うどころではない。

白髪を振り乱し、靴も脱がされて年相応に痩せ細つた足を晒した様は、ひどくみじめで、無力である。

今の彼を見て、往時は大国の王をほしいままに操り、各国でその権力を振るつてきた貴族中の貴族であると信じる人物は、誰もいな

いであるう。

クレメンスのそうした様子は、靴の中に隠していた地権証を奪われたときから続いていた。

「いやだわ、クレメンス。どうかそんな怖い顔をしないで。鬼気迫った顔で札を睨みつけたのでは、幸運の女神も逃げてしまつてよ？」

彼からすべてを巻き上げた麗しの娼婦は、甘い声で優しく囁く。

「それに、どうぞ安心して。なにもわたくしたちは、血を見るのが大好きな殺人狂というわけではないもの たぶん。次にまたあなたが大貧民になって、そのときもはや内臓くらいしかあなたが目ぼしいものを持っていないからといって、必ずしもあなたを解体するとは限らないわ」

「……………」

対するクレメンスは、ぎろりとハイデマリーを睨み上げるだけだ。その鋭い視線には、強い憎悪こそ籠っていたが、意外にも恐怖は滲んではいなかった。

常軌を逸した囚人たちに囲まれて、あげくその身を切り刻まれる可能性をまざまざと突きつけられつつも、それに対して怯懦の心を欠片も見せぬ様子は、さすがは元宰相といったところか。

ハイデマリーはまじまじとクレメンスを見つめてから、ふふ、と愉快そうに微笑んだ。

「素敵。気骨のある殿方って、わたくし、本当に好きだわ」

「……………娼婦めが」

クレメンスは、吐き捨てるように唸る。
ついでに唾まで吹きかけそうになったところを、予備動作もなく
剣を突きつけたギルベルトが制止した。

「俺の妻に失礼な真似はやめてくれるか」

つ、と喉仏に血が流れるのを見たクレメンスは、代わりにますます
す眼光を強め、射殺しそうなほどにハイデマリーを睨み据えた。

「……今に見ておれ」

「吠えるのは勝手だけど、少なくともアンタはマリーのことを『見る』のは、やめた方がいいんじゃない？」

と、不機嫌そうにカードを選んでいたリーゼルが どうやら、
少々札の戦力が乏しくなってきたらしい 嘲るように指摘する。

彼は、すいと顔を上げると、クレメンスに向かって皮肉気に唇を
吊り上げてみせた。

「【性欲】の瞳は、魔性の瞳。一度溺れてしまえば、あたしの洗脳
なんかよりよっぽど強力に、骨の髄まで吸い取られるわよ」

「いやだわ、【嫉妬】。あなたからそんなに褒められる日が来るだ
なんて、胸がどきどきしてしまったではないの」

「褒めてんじゃないわよ、こき下ろしてんの。そこらの淫魔や魅了
持ちの魔族より、よっぽどたちが悪いって言うてんでしょ」

相変わらず、この女子ふたりは反りが合わない というか、独
特の距離感を取っているようだ。

リーゼルはふんと鼻を鳴らした。

「ほんつと、あんたって節操ないんだから。男だけならまだしも、女、いえ、種族を超えてだって誘惑するでしょ。あんたが監獄に入ったばかりの頃、各国の要人どころか、牛やら魚やら鳥までもがふらふらと引き寄せられてきて、あたしたちが駆除するのにどれだけ苦労したことか」

「だが、おかげで、しばらく、食卓は、豊かになったぞ」

「人間はさすがに食べられません、未だに送られてくる彼らからの手紙は、重要な情報源になっていきますしね」

潔癖症のきらいがあるリーゼルは恨みがましく吐き捨てるが、それによって利益を得てきたイザークやモーガンはハイデマリーの擁護に回る。

泰然の構えを崩さぬ女王は、批判にも擁護にも等しく肩を竦めた。

「慣れてちょうだい。これがわたくしなのだもの」

そう、彼女は生まれつきの娼婦であったのだ。

艶めかしい肢体はただそこにあるだけで視線を釘付けにし、あえかな吐息はぞくりとするほどの色香を含む。

男であろうと女であろうと、いつそ種族を超えてさえ、彼女と目を合わせたものは、もれなくその濡れた瞳の湛える碧い世界へと引きずり込まれる。

そうなってしまうえば、彼らは自我を溶かし、熱に浮かされた人のように、ただひたすら女王の愛を乞うようになるのだ。

エルマに対して、意識的、体系的に、他人の関心を引き付け操作する術を教え込んだのはリーゼルだったが、無意識的　呼吸をするように人を誘惑する術を仕込んだのは、なにを隠そうハイデマリ

―であった。

世にも厄介な誘惑者エルマをこの世に誕生させた娼婦は、無邪気に小首を傾げる。

「それに正直なところ、魅了の力という点では、エルマのほうが優れていると思っっているわ。あの子が本気を出せば、動物どころか魔獣や魔蟲だって墮としてしまえるはずだもの」

どこか誇らしげに彼女が告げると、リーゼルはますます鼻白んだように片眉を上げた。

「そりゃあ、ね。だってあの子は、【色欲あんた】の無駄にきれいな顔に加えて、【怠惰】の話術と、あたしの洗脳術まで授かってるわけだもの。あの子に墮とせない存在なんてないでしょうよ」

自身も十分に親馬鹿な発言をかましてから、しかし彼はちよつとだけ口元を歪めて、付け足す。

「正直、エルマがあんたの忌まわしい瞳を受け継がなくてよかった、って思うわ。見つめるだけで人の自我を溶かすあんたの瞳は、ほとんど邪眼の域よ。ただでさえ、あたしたちが魅力的に育てすぎちゃったのに、邪眼まで加わったらどうなることか。過ぎた魅了の力は、身を滅ぼすわ」

「……そうね」

破滅をもたらす女、と揶揄されておきながら、ハイデマリーはなにも言い返さない。

彼女はちらりとホルストを一瞥し、牽制するように微笑んだ。

エルマの瞳は感情が昂ると赤くなるのだという事実を、ハイデマリは大切な仲間にすら伝えていない。

燃える夕陽、滴る血のような深紅の瞳は、神秘的な夜明け色の瞳よりもほど強く、人を魅了する。それこそ、かつての魔族と同じく危険視されるだろうほどに、人々の精神に強く働きかけるのだということも。

麗しの娼婦は、不都合な真実をさりげなく胸の奥にしまい、代わりに完璧な形の唇で、美しい睦言を囁いた。

「だから、わたくしはあなたが大好きだわ。リーゼル」

「……なにがどう、だからなのやら」

鼻に皺を寄せながらのぼやきに、ハイデマリはふふつと口元を綻ばせる。

それから、思い出したようにクレメンスを見やり、大仰に肩を竦めてみせた。

「ごめんなさいね、会話に取り残してしまつて。なんの話をしていたのだっけ　ああそうそう、あなたはわたくしをあまり見つめないほうがいい、という話だったわね」

微妙に逸れてしまった話を元に戻し、ついでにひらりと場に手札を投げ捨てる。

彼女は、いたずらっぽくクレメンスに向かってウィンクを決めた。

「自分で言うのもなんだけれど、そうかもしれない。あのね、なぜかわたくし、じいっと相手を見つめていると、その相手が急に跪いてきたり、慈悲を乞うてきたり、絶望して死なれたりすることが多いのよ。困っちゃっわよね」

さらりと告げるには、あまりに衝撃的な内容だ。
それではほとんど魔族か死神の類である。

さすがのクレメンスも少々面食らっていると、ハイデマリーはくすくす笑って続けた。

「これでも若い頃は、結構苦労したのよ。でもおかげで、わたくしはとてもシンプルな方針を持つに至ったの。それはね」

自分に媚びない者だけを、対等と認める。
擦り寄ってくる者は 支配する。

彼女が嫣然と言いつつ内容には、娼婦の妄言と片付けるには済まされない、異様な迫力があつた。

無意識に喉を鳴らしたクレメンスに、ハイデマリーは高貴な猫のように笑いかけた。

「出会ってから今この瞬間まで、けっして情欲を向けてこなかったあなたのことを、わたくしは気に入っていてよ。けれどね、クレメンス。わたくしに情欲を向けない 支配されずに済む人間というのは、たいてい、著しくなにかが欠けた人なの」

たとえば、と、彼女は周囲の仲間たちを見回しながら、歌うように告げる。

「欲を忘れてしまうほどに、大切なものを失ってしまった人。女の体よりもよほど強く、得難いほかなにかを求めている人。あとは……既にわたくしに心を捧げきってしまった人、というのもあつたけれど」

ギルベルトをちらりと視界に入れたとき、美しい唇からくすつと吐息が漏れた。

ぐるりと全員を見回してから、ハイデマリーはじつとクレメンスを見据える。

彼女は優雅にソファにもたれかかったまま、「それから」と付け加えた。

「わたくしが視界に入らぬほど、すでに心の最奥に愛する女性を棲まわせてしまっている人、というのよね。あなたはそれでしょう、クレメンス？」

「……………」

クレメンスは虚を突かれたように黙り込んだ。

やがて、くつと唇の端を持ち上げ、嘲笑を象る。

彼は心底馬鹿にしたように、ハイデマリーに向かって吐き捨ててみせた。

「たわけたことを。すべてを愛だ恋だのくだらぬ感情に帰結させるところが、しょせんは女よな」

が、威勢の良い罵倒は、

「だそうだけど、【怠惰】？」

「瞬きの数が増え、皺眉筋しゅうびきんは強張り、視線は右斜め上へ。すなわち彼は、【色欲】の発言に不安と不快を感じ、虚偽を口に行っている

あからさまに、動揺していますね」

モーガンの読心術によってあっさり封じ込められてしまう。そう、とくすくす笑うハイデマリーを前に、クレメンスはまるで哀れな小動物のように毛を逆立てた。

「は、ペテンかなにか知らぬが、己の妄想を勝手に事実として語るの、さぞ」

「そうそう、事実を語るといえば、つい最近、ちょっと気になる噂を聞いたのよね。聞いたというか、厳密にはこの手紙に書いてあったのだけど」

「今その手紙はどこから出てきた!？」

ぴらりと谷間から封書を取り出したハイデマリーに、クレメンスは渾身の虚勢も忘れて突っ込みを入れる。

ハイデマリーはにこやかにそれを受け流すと、優雅な手つきで便箋を広げた。

「とある社交界にいた、とある女性についての噂よ。この女性フィーネ様というらしいわね 彼女というのが、まあ巡り合わせの悪い方だね。聡明さと清廉な人柄を買われてとある王の側妃に収まったのだけれど、その善良さが煙たがられてしまって、あっさりと離縁。『信頼のおける家臣に下賜する』との名目で宮廷を追い払われたのだけれど、今度はその家臣の夫が失脚。子もおらず、後ろ盾となるはずの実家からもとうに見放されたフィーネ様は、哀れ、単身屋敷を出たらしいわ」

「……………」

「そうはいつでも、旅など不慣れな、もはや初老に差し掛かった女性よ。乏しい路銀を掻き集めて、彼女の思いつく最も人里離れた、そして ああ、涙が出そうね、彼女が唯一足を運んだことのある地方に、馬を走らせたのだとか」

もはやクレメンスは言葉もない。

ただ、血がにじむほどに拳を握りしめ、強く口を引き結んでいた。

「それは彼女の想い出の土地。彼女を引き取った『第二の夫』が、多忙な業務の合間に、申し訳程度に一度だけ連れて行った。いわば、新婚旅行の行き先」

ハイデマリーは、ひっそりと笑みを深めた。

「のどかで自然深く、避暑にはうってつけのその場所の名前は……トレンメル」

「……………」

かつ、と音を鳴らして、とうとうハイデマリーは立ち上がった。

手にしていた札を、ばさりと場に投げ捨てる。

女王の札が三枚。

それで、彼女の手札は空になる。つまり、またしても、彼女が皇帝だ。

監獄に君臨する麗しの娼婦は、優しく目を細めて告げた。

「残念ね、クレメンス。わたくしの読みでは、今回もあなたが大貧民よ。今度は、あなたから何をもらおうかしら？」

白く細い指先を伸ばし、クレメンスの強張った顎を持ち上げる。彼女はまるで睦言を囁くように、甘く甘く言葉を紡いだ。

「隠し持っていた金貨、指輪、それに、別名義の地権証。それらはもうもらってしまったし。あと何を取り上げたら、あなたの目的は

頓挫するのかしら」

「……………」

クレメンスは、絶望の唸り声を漏らした。

この女は、最初から見通していたのだ。

そのうえで、ひとつひとつ巻き上げていった。

隠し持っていた金貨、指輪、それに、別名義の地権証。

すなわち、トレンメルにたどり着くための路銀、呷るための毒を

隠した指輪、そして 妻の安全を確保するための土地を。

決めたわ、と唇を吊り上げて、ハイデマリーはクレメンスの頬にそつと手を添えた。

「最後は、あなたの真実をちょうだい。あなたが、洗脳を解かれるなり愚かにもわたくしたちに挑み、四肢をもがれる恐れすら厭わず脱獄を目指したのは フィーネ・フォン・ロットナー元侯爵夫人に土地を授け、そこで自死するためかしら？」

クレメンスは、後生大事に持っていた、手札の中で唯一強力と言えるカード ハートの女王クイーンを、力なく床に落とした。

31. シャバの「愛」はもどかしい(1)

収穫祭当日、秋空はどこまでも澄み渡り、町では至る所で人々の陽気な歌声が響いていた。

日頃は禁欲的にぶどうを作りつづける彼らも、この日ばかりは早摘みぶどうで仕込んだワインで酔っぱらい、周囲と情熱的なハグや踊りを交わす。

畑に至る農道には、豊穣を表す秋の花が咲き乱れ、町の中央に押し寄せる女性たちも、花や木の実をあしらった冠を被っていた。

教会と噴水の設えられた領地の中央広場には、多くの露店とそれを目指す人々でごった返し、フレンツェルはこの日、ささやかながらも、辺境の土地に許された最大の盛り上がりを見せるのであった。

いせ。

こと今年の収穫祭については、「ささやかながら」との描写では到底収まらない賑わいを見せる一画があった。

領主の肝煎りで、急遽市に出店を構えることになったエーリヒたちのいる場所がそれである。

エーリヒといえば、不幸にも魔蛾に襲われ、実りの多くを腐らせてしまった家の主だ。

彼の一家は、皆一様に顔つきこそ厳めしいが、義理堅い性格と丁寧なぶどう作りで周囲からも一目置かれており、そんな彼らが災害に接したということで、人々は同情も露わに、冬を越すための食料

やワインを分けてやるつもりで、続々とエーリヒが出したという露店のもとへと押しかけていた。

恐らくは、失ったぶどうの代わりに、妻がこしらえた内職の品でも販売するのだろうから、ここはひとつ援助の意味も込めて、品物を買ってやらなくては と、そんな思いで。

が、実際のところ、店の前に佇むエーリヒの表情はこれまでにないほど輝いている。

彼の家族も、自分より先にやって来ていた彼の友人たちも、沈鬱な雰囲気を漂わせるどころか、むしろ強い興奮をまとわせていたのだ、後から来た領民たちは不思議そうに顔を見合わせた。

不思議といえば、この店の作り自体が不思議である。

まず、「露店」というには違和感があるほど、全体を巨大な布で覆われている。

間取りも随分広いようで、横幅だけで周囲の店の五軒分、高さに関しては、教会の尖塔にも及びそうなほどであった。

中でなにが売られているのかは、布の外からではわからない。ただ、相当分厚いのだろう布越しにでも、ときおり「おおおお……！」とか「うわあああ……！」といった、どよめきや歓声が聞こえてくるので、人々はますます首を傾げた。

そして、なぜか得意顔のエーリヒが促すままに 同情すべき相手から、意味深に微笑まれるとはどういうことだろう 天幕とも呼べそうなその布をめくり、

「……………!?!」

人々はそこで絶句した。

布の内側、薄暗い空間の中にあつたのは、あまりに異様な光景であつた。

まず視界に飛び込んでくるのは、熱気を漂わせ、ぎゅうぎゅうに詰め込まれた観客。

きつちり張られたロープの外周に、ほとんど腹を食い込ませるように一心に中央の、一段高くなつたあたりを見つめている。

普段あまり見たことのない顔であることから察するに、どうやら日ごろフレンチェルを辺境の土地と馬鹿にしてくるわりに、祭りのときだけ冷やかにくる観客たちのようだった。

観光客が、見物に乏しいフレンチェルの露店ごときに集まっているというのは、なんとも不思議なことである。

さて、彼らが食い入るように見つめる先 「舞台」とも呼ぶべきスペースには、なぜか簡素な寝台が置かれ、その上に天井から取り込んだ陽光がまっすぐに降り注いでいる。

嫌が応でも注目せざるをえないその場所では、今、老いさらばえ、お世辞にも美人とはいいがたい老女と、メイド服に身を包んだ、眼鏡姿の冴えない少女が立っていた。

たしか老女のほうは名をベルタと言い、偏屈で意地が悪く、ここら一帯でも評判の悪い、落ちぶれた商家の未亡人だ。

「 それでは、こちらのヨードナス様特製ミドリムシを使用した酔素ジュースを、よくご覧ください」

メイド服の少女は、そのぱつとしない外見からは想像もつかない、

凜と美しい声で告げる。
そうして、

「こちらを数口、ベルタ様に含んでいただき はい、種もしかけ
もございませんよ、次に、この通り、彼女に寝台に横たわって
いただきます。……三、二、一」
「あああああっ！」

次の瞬間、少女が老女の身体に手をかざし、激しく全身を叩きは
じめた。

老女が凄まじい絶叫を上げるので、後から入ってきた領民たちは
ぎよっとして肩を揺らす。

なんだここは。

老女に虐待を加え、それを見て愉しむ、おぞましいショーでもし
ているのか

だがその疑念は、

「あああ感じる……！ 大いなる宇宙の息吹、その厳しく壮大なる
風の旅の果てに迎えられた母の腕の力強さにも似た愛と温もりと約
束の地に枝を張り優しき木漏れ日を落とす巨木の脈動に寄り添う小
動物たちの奏でる生命いのちの賛歌がlpをうyskもいadsぽじゅk
pwq……！」
「ベルタさんのチャクラが開いたあああああ！」

当の本人の生き生きとした叫びと、周囲のどよめきによって吹き
飛ばされた。

「……………！？ ………………！？ ………………つ！！！？？」

が、疑念が吹き飛ばされて生まれた思考空間の余裕には、それ以上の疑問が次々と湧き上がる。

いったいなにが起こった、チャクラとはなんだ、なぜ観衆たちはこんなにも熱狂している。

そしてもうひとつ。

「ど……っ、どちら様ですかあああああ！？」

がばつと寝台から身を起こしたベルタが、豊かな栗色の髪と、輝かんばかりの肌をした妖艶な女性に早変わりしていることに、彼らは絶叫した。

肌は張りがありながらも、その瞳は確かな経験に裏打ちされた、しっとり潤むような光を帯び、艶めかしい。

まさに熟女の貫禄を漂わせる美魔女に、その場にいた多くの男性がごくりと喉を鳴らした。

これはいったいなんだ。

大道芸 人の外見を変える曲芸か、はたまた集団に幻覚を見せる手品なのか。

しかし、舞台上で繰り広げられる「ショー」は、それだけにとどまらなかった。

「さて、ご喝采。ベルタ・マイスナー様は見事体内に溜めていらしたアーマを排出し、トリ・ドーシャの調和を取り戻すことにより、新たなる、そして本来の彼女の姿を取り戻しました。美しきベルタ様に、ふさわしい新たな装いを！」

「きゃああつ！　なんて素敵なドレス！」

眼鏡姿の侍女がさつと腕を振った途端、曲芸師も真っ青の素早さで、ベルタの衣装がたちまちすり替わる。

古びた薄墨のドレスの代わりに出現したのは、遠目からも美しい絹のドレスで、背や二の腕の辺りは透かし編みされ、ベルタの妖艶さを、下品にならないぎりぎりの大胆さでもって演出していた。

その繊細な意匠、斬新なデザイン、なにより布それ自体の美しさに、女性陣が一様に溜め息を漏らす。　　いったいどんな高品質の糸を使っているのか、布は虹色がかつた不思議な艶を湛え、角度によって微妙に色彩を変えながら、見る者を飽かず誘惑するのであった。

「お美しいベルタ様に、祝福あれ！」

侍女がさつと片手を上げると、隅に控えていた領主の息子・ケヴィンが　なぜか領主親子はこのテントの片隅に佇んでいたのだ素早く右腕を掲げ、ぶんぶんとかかを振り回す。

細く強靱な糸に括りつけられたそれは、どうやらオカリナのような形をしているようだが、不思議となんの音も聞こえない。

首を傾げそうになったその瞬間、

ばさばさばさ……っ！

頭上から突如として唸るような羽ばたきが聞こえ、視線を向けた人々はぎよつと息を呑んだ。

「な、なんだ……！？　蝶……！？」

そこには、透き通るような翅をもった美しい虫が、群れを成していたのだ。

ぶどう畑を守ってきた彼らは、羽音からとつさに魔蛾を連想して身構えるが、しかし優雅に宙を舞うそれらからは、彼らの知る魔蛾のおぞましさなど欠片も感じられない。

翡翠色をした翅は陽光を透かしてきらめき、時折ふわりと舞う鱗粉は、まるで金の粉のように光り輝きながら穏やかに人々に降り注ぐ。

本物の蝶であっても、これだけの群れとなれば本能的に恐怖を抱こうものだが、目の前のそれらは恐ろしく統制の取れた穏やかな動きをしているせいか、はたまた、純粹に美しいせいか、観衆はただぽかんと口を開けて、その奇跡の光景に見惚れた。

「なんて、美しい……」

「まるで、天からの使徒がベルタさんを祝福しているみたいだわ……」

薄暗い空間、密集した観客。

一か所に集中する陽光に、スポットライト突如として変身した美女、奇跡すら感じさせる華麗な蝶の舞。

絶妙に組み合わせさせたそれらの要素は、観客たちの冷静な思考力を容易に奪い、代わりに興奮と熱狂とを埋め込んだ。

「こんな見事なショー、見たことねえぞ……！」

「ああ、毎年楽しみにしてた王都からの大道芸すら、これに比べりゃ子ども遊びだぜ……！」

人々は周囲に引きずられ合いながら、徐々に感情のボルテージを高めていく。

とそこで、舞台の中央にいた侍女が、おもむろに眼鏡のブリッジを押し上げた。

「それでは只今より籠を回させていただきますので、皆さまのお気持ちを込めていただけますと幸いに存じます」

彼女は思わせぶりな間を置いてから、いたずらっぽく付け加えた。

「もしまた、籠の中身がこぼれるほどのお気持ちを込めていただけましたなら、僭越ながら、もっともお気持ちの強かったそのお一方を、バタフライ・全身デトックスコースにご招待させていただきます」

「うおおおおお！」

「あなた、払って！ さあ払うのよ！ ほら！ ポケットの中身まで全部出して！」

「おい、てめえら！ 俺の家まで走って、有り金全部持ってこい！ さあ！ 今すぐにだ！！！」

人々は目の色を変えて財布のひもを緩めはじめた。

観衆が籠に叩きつけんばかりの勢いでチップを払う図など、もちろん誰にとっても初めてのことだった。

しかし、その異様さに、後から入ってきた領民たちもまるで思い至ることがなく、気付けば彼らも懐を漁りはじめていた。

と、最前列を回されただけの籠が、早くもその中身を溢れさせてしまった時点で、舞台上の侍女がまた口を開く。

「皆様の熱いお気持ち、痛み入ります。本当でしたら、皆さまに感謝の気持ちを込めデトックスを施したいところですが、なにぶんこの人数。その願いは到底叶いません。ですので」

頭上から差し込む陽光に、侍女の眼鏡がきらりと光った。

「本日限り特別に、このヨーナス様特製『ミドリムシ酵素　パウダータイプ』を販売させていただきます」

「うおおお！」

人々が絶叫した。

「限定五十名様です」

「うおおおお！」

「今から三十分のみ、特別に二十パーセントのディスカウント」

「うおおおおおお！！！」

「お買い上げの方の中から抽選で、特別にバタフライ・シルクのマダム・バタフライ・ドレスをプレゼントさせていただきます。こちらは限定五名様」

「うおおおおおおおお！！！」

もはや人々は狂乱の渦に叩き込まれつつあった。

血相を変え、狂ったように全身から金目のものを取り出しては、「お買い求めの方の列はこちらです」と指し示された方向へと突進していく。

友人や恋人すらをも押し合い、殺気だった形相で金を支払わんとする人々の頭上には、熱気からなるきのご雲が形成されようとして

いた。

「皆さま！ どったんばったん騒がず一列に並んでくださいませ！」
「そこ！ 線から前には出ないでくれ！ 押さない・駆けない・フアビュラスに並ぶのが鉄則だぞ！」

よほど事前に入念にシミュレーションを重ねたのか、フレンツェル姉弟が素早く人々に指示を飛ばし、列を整える。

ヨーナスもまた、厳めしい顔で「最後尾はこちら」の看板を掲げている。

五分もせぬうちに「バタフライシリーズ」と名付けられたそれらの美容グッズは完売し、場内は歓喜に沸く勝者と、地面に蹲り涙を流す敗者とに二分された。

「 凄まじい光景だな……」

騒ぎが一段落したのを見計らって、天幕の外からそろりと布をめくったルーカスは、そんな引き攣った眩きを漏らす。

「朝九つの鐘と同時に始めて、これでもう三回目のショーだというのに、盛り上がりは収まるどころかますます加速しているようだ」
「初回から三連続で参加している『お客様』もいますものね……」
よほどミドリムシコスメ、およびシルクコスチュームが欲しいのですわ。あ、エルマが今、くだんの観客に四回目の最前列優先券を渡しましたね」

ルーカスと同じく、天幕の中を覗き見していたイレエネは、首を振りながら嘆息した。

「あの子なりの慈悲なのでしょうけれど、むしろこの泥沼のように人を引きずり込み、金を搾り取る恐るべきショーからは、解放してやるのが優しさのような気もいたしますわ……」

「同感だ」

ルーカスも首肯する。

そう、ミドリムシを主成分としたコスメティック・マーケット略してコメケ は、魔蛾によって被害を受けたエーリヒを救済するために、エルマが発案したものだっただ。

コンセプトは、「魔蛾とともに幸せになろう」。

魔蛾のことを禍をもたらした敵とみなすのではなく、そこから立ち直るための足掛かりとして捉えなおし、ぶどうの収穫で得られるはずだった、いや、それ以上の儲けや幸福を手に入れようといったものだ。

具体的には、魔蛾を使ったデトックス・ショーと魔蛾グッズの物販を組み合わせることによって、購買意欲にダイレクトアタックをこまます試みである。

が、ルーカスからすれば、エルマは「魔蛾と」幸せになるというよりは、「魔蛾で」幸せになっているように思われる。

魔蛾を使った実験によってミドリムシの解毒性をさらに強化し、超音波を発する笛をケヴィンに与えることで完全に群れを操り、果てには魔蛾が番って産んだ幼虫までをも動員してせつせと繭玉を作らせる

その搾取ぶりは実に徹底しており、使用人や奴隷の所持にさほど抵抗のないルーカスたち王侯貴族ですら冷や汗が浮かぶほどだ。

一応、枝を腐らせた卵も「保護」して幼虫に育て、それらを茹でずして絹糸を取り出す方法も編み出したあたり　　どうやら、イーネあたりがやたら「虫を茹でないで！」と叫んでいたのを真に受けたようだ　　、害虫すら殺さぬ慈悲深さ、と言えなくもないのだが、永遠に搾取され続ける人生、いや蛾生を強いるというのは、もしかしてそちらの方が残酷なのではないのか。

が、ケヴィンの証言では、「むしろ魔蛾も、嬉々として搾取されるに行っているようです」とのことなので、当事者同士としてはそれで問題ないのかもしれない。

ルーカスは「幸せとはなんだろう」という哲学的な問いを、この日も胸に抱かずにはいられなかった。

「エルマに魅入られた者たちの、これが末路か……」

なんとなくうすら寒いものを覚えて、ぼそつと呟く。

イーネがなんとも言えない顔で重々しく頷くと、そこに物販を終えたエルマとフレンツェル一家がやってきた。

一家はさすがに疲労の表情を浮かべはじめていたが、エルマは淡々と、天幕の前での入場整理を担当していたイーリヒたちを労うと、麻袋に移し替えた収益金を差し出した。

「お納めくださいませ、イーリヒ様。こちらが一回目から三回目までのショーで得た、皆さまからの『お気持ち』でございます」

「お……おっ……！」

受け取るイーリヒの腕が震える。

農家として、生活の多くを物々交換に近い形で賄ってきた彼としては、これだけの大金に触れるのは初めてのことだ。

麻袋はかなり大ぶりで、中身も紐が閉められないほどにたっぷり収まっている。

これがすべて小銅貨だとしても、結構な金額だ。

さぞ心地よい重みがあるのだろうなと思いつつ受け取り、

「！？」

エーリヒは、想像をはるかに上回る重量に、たまらず袋を取り落としました。

32・シャバの「愛」はもどかしい(2)

ゴ……ッ！

途端に、とても袋が立てたのだとは思われない、鈍器的な音が轟く。

「なんだこれ！？」

ぎょつとしたエーリヒに、エルマは粛々と頷いた。

「金貨です。貨幣がかさばっていたので、まずは一番高額かつ、持ち運びやすいものからお渡しさせていただきました」

「金貨なの！？ これ全部金貨が入ってるの！？」

「はい。ちなみに銅貨は少々場所を取っていますね」

エルマは薄暗い舞台裏から「よいしょ」となにかを引きずっていく。

ズ……ズズ……ッ

そんな、陸揚げされた巨大生物が引きずられるがごとき重低音を響かせながら、彼女は小首を傾げた。

「これがあと五袋あるのですが、夜の部まで終了してから、まとめのお渡しでよいでしょうか」

「……！？」

象が一頭収まりそうな巨大な袋を見て、エーリヒはいよいよ卒倒しそうになった。

これだけ大量の貨幣など、造幣局の役人くらいでないとお目にかかったことはないはずだ。

おそらく、家が建つ。

いや、フレンツェルの物価水準に照らせば、教会や城だって建てられる。

ぶどう作りに関しては強い矜持を持つとはいえ、基本的に小市民でしかないエーリヒは、理解の範疇を超えた事態に、もはやリアクションを忘れた。

が、一周回って平静に見えるその驚愕は、エルマには純粋な無感動として受け止められたらしい。

彼女はなぜだか誇らしげな顔になると、
「……、傍らで同じく固まっているル
ーカスやイレネにちらつと視線を向けた。」

「……、どうでしょう、お二方？」

「……、は？」

なにについて水を向けられているのか、二人にはさっぱりわからない。

怪訝な顔で問い返すと、エルマはもじもじとも、そわそわともつかない様子になって、「ですから」と付け加えた。

「まず、今回ですね、私、勇者のように猛々しく魔蟲を引きちぎるでもなく、魔術師のように凄まじい火を放つでもなく、声を使って関心を逸らすという、ごくごく一般的な方法で魔蛾を追い払ったじ

やないですか」

「……………」

ちよつとなにを言っているのかよくわからない。

超音波を発生させることを「ごくごく一般的」と言っている時点で、既に常識の埒外の発言だったが、ふたりはひとまず突っ込みを堪えて、静聴の構えを見せた。

「かつ、『復讐からはなにも生まれない。傷つけられたら、それ以上幸せになつてやろう!』という、昨今の物語における王道的価値観に則つて行動してみせたわけですよね?」

「……………」

まさかそれは、「補償なんかで満足せずに、がんがん魔蛾を搾取して稼いでやろうぜ!」という姿勢のことを指しているのだろうか。

エルマがなにを言わんとしているのかを察しはじめた二人は、次第に目の焦点を遠くへと逸らしていった。

「かつ……………かつですよ。その『幸せになる』というのが、定量的にどの程度の状態を指すのが最も悩ましかったです。エーリヒ様の反応を見るに、今回私は、特に反応するに値しない すなわち、多すぎもせず、少なすぎもしない額を稼ぐということに見事成功したようです。これはつまり、『例のあの状態』を、私がすっかり身に付けたということの証左なのではないでしょうか」

「……………おまえは……………っ、たかだか三回のショーで、下手をすればフレンツェル領の年間税収にも匹敵する額を稼ぎ出したことについて、なんら違和感を覚えないのか……………!?!?」

やめよう、突っ込むのは本当にやめよう、と思いつつも、面倒見のいいルーカスはついそう叫んでしまう。
するとエルマは、きょとんと首を傾げた。

「え……？ だって普通、女性がひとたび歌えば国宝並みの宝石が捧げられ、ひとたび舞台に立てば複数の国から王冠を捧げられるものでしょう？」

「どこの神話界にお住まいの舞姫の話をしているんだおまえは！？」

ただの監獄内にお住まいの娼婦の話である。

ルーカスは全力で問い質したが、よもや母の教えが偏っているなどとは思わぬエルマは、くいと眼鏡のブリッジを持ち上げた。

「……………？ そんなに驚かれることでしょうか。外科手術によるのではなく、あくまで手技によって女性を美しくし、魔族のように瞳で幻惑するのではなく、あくまで超音波という物理的手段によって魔蛾を使役し、それらを披露することで、あくまで適正な額を頂く」

そうして、大層嬉しそうに言い切った。

「これくらいなら、さすがに『普通』ですよね？」

と。

「……………」
「……………」

自領の税収額をあっさりと半日で稼がれてしまったフレンツェル

一家は、さすがにデボラたちも含めて瞬間で白い灰と化する。

エーリヒは硬直をキープし、イレーネはただ無言で視線を逸らした。

あ、あそこの露店の売り子、誘い受けっぱいな。

そしてルーカスと言えば

「……………いや……………、あの、だな……………」

エルマにじつと見上げられて、静かに冷や汗を浮かべていた。

彼は幾多の女性たちとの、きわどい駆け引きすら平然とこなしてきた男だ。

居丈高なわがままも、あざとい媚びも、すいと躲すのは朝飯前のはずだった。

が、

(なんて無邪気に見上げてくるんだ、こいつは……………！)

目の前の少女の、あまりのあどけなさというか、いじらしさに、返す言葉を失ってしまった。

だって、わかるのだ。

彼女は本気でそう思っているのだと。

間違いなく「普通だ」との褒め言葉をもらえると信じて、むしろ必死さすらにじませて、眼鏡の奥から真剣にこちらを見つめているのだと。

例えるならそれは、ネズミの死骸を差し出して「プレゼントだよ！褒めて？」と小首を傾げる子猫を前にしたような心持ちだ。

恐ろしく愛らしいのだが……いやだが「ねえわ！」と突っ込むべき場面であり……いやしかし凄まじく愛らしい。

ルーカスはふと、自分の脳のどこかが、ぐらりと音を立てて揺らぎはじめたのを感じた。

もう、いいのではないか。

これだけ「普通」を求めているのだから、そして、それほどまでにお墨付きをもらって家に帰りたがっているのだから、その願いを叶えてやるくらい。

ひたむきで、必死で、いとけない彼女の目標は、その根底にある「帰りたい」という願いを知ってしまったえば、むしろ哀れだ。

しかも、彼女の実家は、目と鼻の先の距離にある。

十五の少女が、課題をこなして家に帰りたいと願っているのだから、それを叶えてやるくらい

ルーカスが、つい好意と同情と誘惑とに負けて、無意識にエルマへと指を伸ばしてしまったそのとき、

「まあったく！なに言ってんだか！」

ひととき大きな声が、彼の耳朵を打った。

33. シャバの「愛」はもどかしい(3)

はつと我に返って振り向いてみれば、声の主はエーリヒである。

一通り硬直した彼は、その間にエルマの諸々の発言を「王都独特のジョーク」と処理したらしく、吹っ切れたようにエルマの肩を叩いた。

「いやはや、都会の人間の言い回しつてのは、まどろっこしくていけねえぜ。要は、謙遜だろ？ でもって、フリだろ？ 我が偉業を崇め称えよ、つていうさ！」

「え」

「こちとら、しょせん畑とばかりにらめっこしてきた、垢ぬけない農夫だ。頼むからそういうのはストレートに言ってくれよ、なあ？」

「え、いえ」

戸惑いはじめたエルマに対し、一度思考の処理を済ませてしまったエーリヒは揺るがない。

むしろ、農民そのものの朴訥さと単純さ、そして豪快さをもって、止める間もなく、天幕の周囲に向かって声を掛けはじめた。

「おうおう、おまえら！ 聞いてくれよ！ この娘、このお嬢さんは、王都から来た いや、天から舞い降りた奇跡の使徒だ！ ひとたび歌えば魔蛾を鎮め、ひとたび舞台に立てば金貨の山を築き上げるんだぞ！」

「なに？」

「どづいつことだ？」

芝居がかった口上も、祭りの気配にはしっくりと馴染み、既に酔

つぱらっていた観衆が次々と興味を惹かれたように立ち止まる。もともと天幕での一連の騒動が目立っていたこともあり、すぐに黒山の人だかりができた。

それに気をよくしたエーリヒは、もともとの気前の良さも手伝って、麻袋の中から金貨を掴んで方々に巻き散らした。

「このエーリヒに起こった奇跡を、お裾分けしてやるぜ！ 使徒・エルマエル様の偉大なるお力を、崇め称えよ！」

「おおお！？」

「ほ、本物の金貨よ！」

いきなり飛んできた金色の塊を人々はもはや脊髓反射で受け止め、それからその正体を理解してぎよっと目を剥いた。

「こんな大金、目にするのだって初めてだ。

ただでさえワインと踊りで祭りモードになっていた彼らは、そのとどめの一発で完全に理性を飛ばした。

興奮した群集と、それ以上に興奮した扇動者。あつという間に街頭集会の出来上がりである。

「見てくれ、たった半日で巨億の富を稼ぎ出すこの尋常ならざる手腕！」

「おおおおお！」

「え、あの」

「それをすべて、縁もゆかりもない、ただ困っていた俺たちを助けるためだけにしてくれたという、この突き抜けた慈愛深さ！」

「おおおおおおお！」

「え、ちよ」

勝手に、しかもすさまじい勢いでヒートアップしていく群集に、エルマはぎよっと肩を揺らす。

それまで確かに平静だったはずの　と彼女は解釈していた
エーリヒが、突如として豹変し、「尋常ならざる」だとか「突き抜けた」だとかのワードを投げつけてくることに、彼女は衝撃を隠せなかった。

「そ、そんな仰りようは、あんまりでは　」

「極めつけはこれだ！　見よ！　そして崇めよ！　この、神のご威光を感じさせる、人ならざる美貌　！」

「ちよ……っ！　」

凄腕の暗殺者でも、無邪気で突発的な赤子の抱擁からは逃れられないのと同じで、一撃でドラゴンを仕留めるエルマですら、ただ善意と好意と勢いから成る「攻撃」を躲すことはできなかった。

結果、エルマはあっさりと眼鏡を奪われ、その素顔を晒した。

「お……　」

わあわあと陽気に叫んでいた観衆たちが、一瞬黙り込んで大きく目を見開く。

たっぷり三呼吸ぶんほど沈黙したのち、

「……うおおおおおおおお　　っ！　」

彼らは、それまでにない大音声を轟かせた。あまりに凄まじくて、地面が揺れたと錯覚するほどだ。

辺境の地、そして一市民の身ではまずお目に掛かれぬ、美の極致を集めたような顔。

うつすらと涙を湛えるような濡れた瞳、通った鼻梁、完璧に左右対称な唇に恥じらう薔薇のような頬、そのすべてから漂うあえかな色香に、人々は叫び、叫びながらも凝視し、凝視しながらもやはり叫ばずにはいらなかった。

「フレンツェル地上に天使きたー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！！」

絶叫する群集の中には、男だけでなく、美しい同性に憧れる年頃の、若い女性も数多くいた。

老若男女かわからず、人々が一心に自分を見つめ、狂ったように万歳を唱えだす状況に、エルマは呆然とする。

そんな中であって、

「さすがエルマエル様……。とうとうその魅力と偉大さは、地に遍く知られるところとなってしまいましたわね……」

ただデボラだけが、したり顔で頷いていた。

あつさり自家の税収を上回れらてしまった衝撃もなんのその、エルマ教信者の中でも最右翼にして狂信者である彼女は、フレンツェル家の中で誰より早くショック状態を脱し、どこるか、叫ぶばかりで具体的な行動に移らない民たちに指示まで飛ばしはじめた。

「皆さま、頭が高いですわ！ エルマエル様に敬意を示したくば、跪き、そのおみにキスを！ 彼女に冠を！ そのご威光にふさわしく、はるかなる高みに設えた玉座を！！」

もはやエルマは王か教皇かといった扱いである。

普通ならそんな即座に冠やら玉座が召喚できるはずもなかったが、この日ばかりは少々状況が違った。

陶然とエルマに魅入っていた女性の一人が、はっと自らの髪に手を触れ、それから「はいっ」と挙手したのである。

「ありがとうございます！ここに冠、ありがとうございます！」

周囲の人々もはつとする。

そうだ、我々には金の冠はなくとも、豊穡の女神を象徴する、花の冠がある

「わ……私の冠も使ってください！」

「こ、ここにも冠はあるわよ！」

「おう、俺の女房のも使っていいぞ！」

「なに言ってるんよあんた、娘のもまとめて捧げとくれ！」

この天使に自分の花冠を身に付けてもらえれば、なにかエルマエルご利益があるのではないか。

いや、もはやそれもどうでもいい。

この美しい少女に自分の花冠の一部でも使ってもらえたなら、それだけで幸せな気分になれるのではないか。

そんな妄想すら抱きはじめた人々が、目の色を変えて少女ににじり寄る。

「え、ちよ……み、皆さま、どうぞ落ち着かれて」

「さあさあ天使様！私の花冠を着けてくださいまし！」

「いや、え」

「それとも新しく作ります!? そうね、作りましょうか! 天使様の花冠づくりは、どうぞこのフリーデにお任せあれ!」

「いえユリアに!」

「いえマルガに!」

「ちよ……!」

詐欺師のごとく表情を読み、狂戦士の膂力で敵を屠り、マッドサイエンティストの技術で生命倫理を蹂躪し、会う人々を洗脳し、誘惑して陥落させる少女、エルマ。

しかしながら、まるで最強の^{ジョーカー}カードのような彼女には、ただひとつ、致命的な弱点があった。

それは、世の中では好意だとか善意と呼ばれる感情 無力で平凡な人々でも持ち合わせている、まるでスペードの3のようにありふれた素朴な想いに、ひどく弱いということである。

「イレーネ……!」

途方に暮れたエルマは、とっさに友人の名を叫んで振り向いた。

「これ、どうすればよいのですか!??」

なんとということだろう。

任務も最終局面だというのに、自分は全然「普通」のお墨付きをもらえないばかりか、なぜか拉致されかかっている。

そんな戸惑いがありありと伝わる仕草で手を伸ばしてきたエルマを、イレーネはまじまじと見つめる。

(……この子、初めて私に頼ってきたわね)

いつものように、超然とした様子でイレーネや周囲を救ってまわるのではなく、理不尽な状況にちゃんと戸惑い、悲鳴を上げて。

「……………」

彼女は、湧き上がる笑みをそっと噛み殺した。

（ちゃんと「普通に」できるじゃないの、エルマ）

気分がいい。

出会ってからこちら、圧倒されてばかりだった自分が、ようやく本来の性分を取り戻した感すらある。

イレーネは「そうねえ」と、ひらりと右手を広げて、にやっと笑ってみせた。

「あなた、花冠を着けて祭りに出るのが夢だったじゃないの。いい機会だと思うわ。 やっておしまい、フレンツェルの皆さま！」

次いでその右手をさっと振り、どこの悪の幹部かという掛け声とともに、女性陣をけしかける。

「いよつしゃあああああっ！」

「皆さま!?! イ、イレーネ!?! ちよ、や、え、あ……… つ！」

満面の笑みを浮かべた女性陣によって、エルマがぐぐもった悲鳴を上げながら拉致されるのを、イレーネは達成感とともに見送った。

「と、放置するのも可哀そうよね。殿下、私、様子を見に行っ

てまいります！」

「わたくしも共に参りますわ！」

ついで、前のめりで申し出たデボラとともに、友人の後を追いかける。

その場には、歓声を上げて一連の出来事を見守る観衆と、いまだシヨックから抜けきれないフレンツェル男衆、そしてルーカスが残った。

「……なんというか」

やがて、ヨーナスが咳ばらいして切り出した。

「凄まじく人間離れした人物を、部下……？　としてお持ちなのですな、殿下」

しきりと顎を撫でるその様子からは、己を必死に落ち着けようとしている努力がありありと伝わってくる。

エルマと接触することで得る動揺や衝撃というのは大いに共感できたので、ルーカスは万感の思いを込め、端的に「……ああ」と頷いた。

「出自がいわくつきの娘で、いろいろ常識が欠けていてな。振り回されることも多いが　というか、毎日なにかしら張り倒されるような衝撃を受けているが、救われることも多い」

「さようでございましょうな」

ヨーナスは静かに頷く。

「彼女には驚かされてばかりではございますが、結果的に、たった

数日で、魔蛾を追い払い、のみならず益虫であるかのように領民の価値観を変え、彼らが抱いていた不安や不満を見る間に解消してしまった」

それから、傍らに佇む息子に、穏やかな視線を向けた。

「そして、子どもたちも、ずいぶん彼女との出会いを経て成長したようです」

目を細めた先には、エルマお手製のオカリナもどきを胸に下げた息子、ケヴィンが立っている。

凜と背筋を伸ばし、目上の者同士の会話に静かに耳を傾けていた彼の姿には、もはやかつてのような僻みっぽさや生意気さはかけらも見えず、代わりに、ここ数日で急速に芽生えた、領主の息子としての気迫のようなものが感じられる。

ヨーナスが思うにそれは、エルマの代わりに唯一超音波を操ることができるといふ自負から生じるものであった。

そう、発育の遅いケヴィンの体は、一家の中でただ一人、魔蛾に有効な超音波を　　おおよそだが　　察知することができたのである。

その事實は、これまで病弱でか細い肢体しか持たぬゆえに不甲斐ない思いをしてきたケヴィンに、自尊心と自信とを与えてくれた。

「デボラは己の怠慢と本心を知って脱皮し、息子は自らを誇りに思うことを知った。……あの娘には、頭が上がりません」

領主の貫禄を漂わせて、静かに告げるヨーナスの口調に、偽りはない。

その姿はいかにも思慮深く、また愛情深くもあり　しかも、それが演技とは思われなかったので、ルーカスは怪訝さに眉を寄せた。湧き上がるのは、例の疑問だ。

これほどまでに民を愛し、子どもたちを愛している聡明な領主が、なぜ、民や家族からの反発も厭わず、魔蛾の保護に腐心していたのか？

領主の奇行の正体を明らかにし、領内の平穏を取りつけよとの王命は、すでに果たした。

その動機　なぜフレンツェル辺境伯が魔蛾を払うのにその方法を取ったかの理由については、おそらくフェリクスに興味の対象ではない。

しかし、ルーカスは一個人として、なぜかそれを尋ねてみたいと思っただ。

気が付けば彼は、口を開いていた。

「　ヨーナス殿。なぜあなたは、魔蛾に対処するにあたり、超音波や餌による体質改善などという、迂遠な方法を取ったんだ？」
「……………」

ヨーナスは、わずかに顔を上げ、じっとルーカスを見つめた。

「なぜ、とは？」

「我ら騎士団が魔に遭遇したとき、一番に考えるのは、追い払うことではなく、殲滅することだ。農業を主産業とする領地を構える長ならば、きつとなおさら。時間を掛けて対処するより、手っ取り早く処分してしまおうと考えるはず。そうだろう？」

「……………」

ヨーナスはなににも言わない。

その横で、ケヴィンが静かに息を呑み、じっと会話の行く末に耳を澄ましているのが見えた。

「あなたは聡明だ。時間が掛かれば掛かるほど、リスクや人心の乱れが増すことはわかっていたろうし、その気になれば、手っ取り早く王都や騎士団に助けを乞うて、魔蛾を退治させることだってできたはず」

「……………」

「だが、しなかった。しかもあなたは、自身が長い年月を捧げた研究のことを、民に説明しようともしていなかった。それはなぜだ？ 説明さえしていれば、少なくとも領主は魔に堕ちたわけではないと、民も安心したろうに」

黙り込む父を、ケヴィンは食い入るように見つめた。

そして、ルーカスの言葉に付け足すように、小さく、

「……………家族にも、です」

と呟いた。

「父上は、僕たちにすら、説明してくれなかった」

その声には、以前食堂で父を詰ったときのような、攻撃的な感情の乱れはない。

しかし、抑制してなおにじみ出る、傷心の響きがあった。

「……………いずれは、父上から全幅の信頼を置かれる息子になれるよう、

努力する所存ですが」

その決意が、いじらしいと同時に、痛ましい。

ヨーナスは意表を突かれたように目を見開くと、ついで口を引き結んだ。

それから、ゆっくりと息を吐きだし、やがて重々しく切り出した。

「繰り返すが、私はおまえを至らぬ子だと思ったことは、一度もない」

「……………」
「いつだっておまえを信じていたし、今だって自慢の息子だと思っている」

ではなぜ、と、ケヴィンの瞳が問うている。

ヨーナスはそれを見返すと、覚悟を決めるように一度ぐっと目を瞑り、とうとうルーカスに　そしてケヴィンに向き直った。

「殿下を……………人間離れした者を受け入れられる、その懐の広さを見込んで、申し上げます」

そんな、低い前置きの言葉とともに、彼は語りはじめる。

「……………私が、魔蛾を殺せなかった理由。それは　息子が……………ケヴィンが、魔に連なる者だからです」

十年以上の長きに渡って、心の奥底に飼い殺していた、真実を。

34・シャバの「愛」はもどかしい(4)

「なんだと……？」

予想だにできなかった告白に、ルーカスは目を見開いた。

魔に連なるもの。

それは、魔の長である魔族を筆頭に、魔獣や魔蟲などの瘴気を帯びた生物、そして魔に魅入られた者を含む言葉だ。

が、魔族はとうに滅びているはずだし、ケヴィンが魔獣や魔蟲の類であるわけもない。

魔にのめり込んで奇行を見せるわけでもなし、それはむしろ、以前のヨナスのほうだ、と、ルーカスは戸惑いに眉を寄せた。ケヴィンも、衝撃を受けるといよりは、ただぼかんとして父を見上げている。

「……僕が、魔に連なるもの？」

「魔獣に襲われ血を吸われた、とかか？」

ルーカスは思い付く可能性をぶつけてみせたが、ヨナスは「いえ」と低い声で首を振るだけだった。

そして、

「彼は、……ケヴィンは、死産でした。それを、魔族によって息を吹き返したのです」

静かに、爆弾を落とした。

「……………」
「……なんだと……？」

ふたりとも息を呑む。

特にケヴィンは、無意識に指輪を握り締めながら、青ざめた。

「…………ど、どういふことなのです、父上？」

「そのままの意味だ。おまえは、エリーザとともに、産まれてすぐに一度は死んだ。呼吸も、脈も止まり、体温を失い……確かに死んだのだ。しかしそれを、魔族に助けられた。幼い妹を連れた、青年の形なりをした魔族に、な」

絶句する面々に、ヨーナスは「場所を変えましょう」と促す。

複雑な表情のまま人気がない場所まで移動し、何重にも周囲の耳がないことを確認してから、ヨーナスが説明したのは、こうだった。

もともとエリーザは、デボラを産んだ後の肥立が悪く、二人目をもうけるのは難しいと言われていた。

しかし、そこに授かった新たな命。

愛する夫の家を継げる男の子かもしれないと思った彼女は、周囲の心配を笑い飛ばし、なんととしても産むと言い放った。

エリーザの意思に従うかのごとく、妊娠経過は非常に順調で、彼女はいそいそと産まれてくる子どものために指輪を調整したり、産着を縫ったりして過ごしていた。

しかし、予定日を翌月に控えたその日の夜、エリーザの容態が、急変したのだ。

「その時、私は愚かにもすっかり安心しきって、政務に没頭していた。妻の寝室の様子を見に行くことすらせず、遅くまで仕事をしていたのだが、その日に限って使用人が呼びに来たのだ。屋敷の隅で、怪しい少女を見つけたから、来てほしいと」

「怪しい少女？」

「ああ。怪しい、と言っても、見た目には普通の……いや、大層愛らしい子どもだった。黒髪で、驚くほど目鼻が整っていて……そう、先ほど見たエルマ殿の素顔に似ていたかもしれない」

ただ、とヨーナスは告げた。

「ただ、厩舎の片隅で丸くなって寝ていたその娘は、……赤い瞳をしていた」

「赤い瞳……」

「ああ。うたた寝から目を覚まし、瞼を持ち上げたその娘の瞳は見るだけで魂を奪われそうな、禍々しいほど美しい、滴る真紅だったのだ」

人間には持ち得ぬその色彩は、今は亡き魔族によく現れる色だという。

あまりに過ぎた美しさ、そして吸い込まれるような瞳に恐れを抱いた使用人の一部は、少女を魔族の生き残りだと断定し、その場で殺そうとした。

しかし、報告を受けて駆け付けたヨーナスが、それを止めたのだ。

「見れば、少女は自分が殺されかかっていることも理解していない様子だった。あどけなく無力な様子は、娘のデボラとまったく変わらなく見えた。歳もほとんど同じようだ。だから、まずは事情をと思い、私は彼女のそばに屈み込んだ」

しかしその時、不思議なことが起こったのだ。
寝ぼけていたのか、どこかとろんとした目つきであった少女が、
ふと顔を上げ、呟いたのである。

おんなのひとが、泣いています。

彼女は、じいっと屋敷の一角　エリーザの寝室の辺りを見つめていた。

たすけて、と、言っている。わたくしの、子どもを、たすけて……

エリーザの言葉をなぞるかのような発言に、背筋がぞくりと凍った。

ただそれは、魔物を前にした時の恐怖というよりは、巫女に真実を告げられた時のような、ひやりと冷たい手で心臓を掴まれたような感覚であった。

ヨーナスは使用人たちに対し、少女には手出しをせぬよう命ずると、急いで妻の部屋へ駆け付けた。

そしてそこで　下半身を血に染め、蹲る妻を見つけたのだ。

「妻は既に、悲鳴すら上げられぬ状態だった。見る間に血が失われ……慌てて呼び寄せた医者も手は尽くしたが、ただ私たちは呆然とエリーザと腹の子が死んでゆくを見守るほかなかった」

自失すること、しばし。

我に返った若きヨーナスは、日頃の穏やかさをかなぐり捨てて叫

んだ。

ぐったりとした妻の肩を揺さぶり、医者 of 制止も振り切ってその冷えゆく体を抱き締めた。

獣のような咆哮、顔を俯かせる医者、泣き崩れる使用人。

そんな狂乱の最中、もはや息絶えたかに見えた妻が、わななく唇を動かしたのだ。

たすけて。……の、子を……

まるで、体に残っていた魂のかけらを掻き集めて、絞り出したかのような声だった。

事実、それを最後にエリーザはがくりと仰け反り、今度こそ完全に帰らぬ人となった。

その末期の声を唯一聞き取ったヨーナスは、涙に濡れた顔を上げ、医者に妻の腹を切り開くよう命じた。

医者は躊躇いを押し殺し、持てる最大の速さでエリーザの腹を裂いた。

「だが……月が満たぬうちに出てきたおまえはあまりに小さく、産声も上げられなかった。布で包み、さすり……だがそれでも小さな脈は、どんどん遠のいていき……」

誰もが絶望した。

ヨーナスですら、息子を抱きしめる自らの腕から、力が抜けていくのを感じた。

きい、と、軽やかな音を立てて部屋の扉が開いたのは、そんな時だった。

お取込み中、失礼。どうも「妹」がお世話になったようで。

場違いなほど朗らかな声に、一同はぎよつと肩を揺らし、振り向いた。

「そこには、先程の少女を腕に抱えた、年若い青年が立っていた」

年の頃は二十ほどか。

少し癖のある鳶色の髪に、理知的なはしばみ色の瞳、すらりとした体つき。

どことなく品はあるものの、その姿は少女と違い、図抜けて美しいというわけではない。

ただし彼がゆっくりと唇を持ち上げる様、そしてそこから紡がれる言葉には、ヨーナスをして思わず怯ませるような、凄みがあった。

お礼を、しようか。

青年は、再び眠ってしまったらしい少女をそつと壁にもたせ掛けると、なんでもないことのように言い放った。

その赤ん坊、助けてあげるよ。

まるで、枝に引っ掛かった帽子を取ってあげるよ、とでもいうくらい、あっさりとした口調。

戸惑う周囲をするりとくぐり抜け、彼はヨーナスからひよいと赤子を受け取った。

「そして　そこで彼は、……魔力を揮った」

魔力、としか言いようのない光景だった。

見たこともない器具、なにを意味するのかの想像もつかない手技。彼の腕の動きはあまりに早く、ほとんど視界に捉えられなかった。

数分だったのか、数刻だったのか。

……ふ

ふと、空気がゆるりと動き出すのを感じた。

……う、ふ、ふ……ふぎゃああ……

それは、小さく、か細く、けれど間違いなく赤ん坊から発された、産声だった。

はい、どうぞ。

青年は奪い取ったときと同じく、ひよいと雑な仕草で赤子をヨーナスへと突き返す。

そして、体温管理や水分補給、母乳の与え方について矢継ぎ早に指示を飛ばすと、さっさと踵を返した。

「青年は、少女を大切そうに抱えると、そのまま去ろうとした。私は慌てて名を問うたが、教えてはくれない。人としての名は、もはや誰も呼ばないし、好きではないとだけ答える。それで私は、彼は故あって魔道に堕ちたか、魔族と人の間に生まれた生き残りなのだと考えた」

実際彼が「妹」と呼ぶ少女は明らかに魔族であったし、彼が見せた手技は、あまりに人間離れた、異常な光景であった。

極めつけに彼は、「なぜ助けてくれたのだ」と問うヨーナスに対し、「だから、お礼。あとは、地獄の女王の子も僕が取り上げたからかな、ちよつと見過ごせなかったんだ。気まぐれさ」と肩をすくめた。

それでヨーナスは、青年が人ならざる世界に属す存在　魔族であるに違いないと確信したのだ。

信じられない奇跡に呆然とするヨーナスたちを置いて、青年と少女はするりと夜の闇に消えてしまった。

「その後、ケヴィンと名付けた赤子の世話に掛かりきりになり……私がかかわった使用人や医者に緘口令を敷きながら、決意を固めた」

魔に命を与えられたものは、即ち魔に連なる者。

いくら領主の息子といえど、その血には、またその運命には周りを不幸にする瘴気が込められているのかもしれない。

ここフレンツェルでは特に敵視され、殲滅されるべき存在だ。

息子が魔族に助けられたことを、民に知られてはならない。

「……私に、息子を……おまえを殺すという選択肢は、なかった」

ヨーナスは、ケヴィンを見据え、絞り出すように告げた。

「聖なるぶどう畑の守り手、フレンツェルの領主としては、おまえを殺すべきだったのだろう。いや、そもそも魔族の青年の手を借りるべきではなかった。少女も殺すべきだったのだ。しかし　私は、死後地獄に堕ちようと、おまえを死なせたくはなかった」

俯き、口元を覆った彼の右手は、わずかに震えていた。

「おまえは、愛する妻がなにより望んだ命であり……私の、最愛の息子なのだから」

「……………！」

初めて面と向かって告げられた言葉に、ケヴィンが息を呑む。

ヨーナスは「それで」と咳ばらいをすると、いくらか落ち着いた口調を取り戻し、告白を続けた。

「一方で、領主の責任を果たしたい思いももちろんあった。特に、年々鳴鎖が効かなくなっている魔蛾に、ぶどう畑を荒らさせるわけにはいかなかった。だが……魔蛾は魔族の筆頭眷属。それを傷つけて 魔への恩をあだで返す真似をしてしまったら。そして、あの青年の怒りを買って、万が一おまえの命を再び奪われることがあってはならないと……そう、思った」

「それで……………」

それでヨーナスは、魔蛾を処分するのではなく、追い払ったり、無毒化することに熱中したのだ。

「民に説明すればよいことも、もちろん理解していた。私の研究が、事情を知らぬ者からすれば奇異に見えるだろうことも、彼らを不安にさせるだろうことも。しかし……なぜ私が無毒化にこだわるのかの理由を説明してしまえば、今度はおまえが民からの敵視を免れない。石を投げつけられ、襲われるよりはと、病弱さを幸いと、おまえを屋敷の奥に押し込んだ。……保護の、つもりだった」

「……………父上……………」

「おまえを信じていないわけでも、傷つけるつもりでも、なかった

のだ。ただ……守りたかった」

信じてほしい、と小さく呟いて、それきりヨーナスは口を閉ざした。

三人の男たちの間に、息苦しいほどの沈黙が落ちる。

やがて、震える声を上げたのは、ケヴィンだった。

「……それでは……、母上からの指輪を、錆びさせたのも、そのためですか……？」

「……ああ。迷信かもしれないが、銀は魔を焼くと聞く。エリーザの形見を処分するわけにもいかなかったが、かといってそのままおまえに渡すのも不安で、せめてと思い、表面に薬品を塗って錆びさせた」

「……僕に、領主の仕事を教えようとしなかったのは……？」
「仕事に当たれば、必然民との接触が増える。少しでも露見の可能性を、避けたかった」

せめて、魔蛾を追い払う目途が着くまでは。

民の不安が解消され、やみくもに魔を忌み嫌う風土が、少しでいい、和らぐまでは。

そうやって、ずるずると時期を延ばし、気が付けば今に至っているのだとヨーナスは答えた。

「……………」

ケヴィンはぐつと唇を噛み締める。

彼は胸に下げた指輪を鎖から引きちぎり、それを父親に突きつけてみせた。

「父上は、傷つけるつもりはないと言ったが……あなたは！　あなたのその考えこそは、僕を傷つけた！」

掌に載せた指輪は、エリーザが刻ませたという文字を、誇らしげに湛えていた。

ケヴィンはそれを握りしめ、父親の胸をどんと強く叩いた。

「……言っただけじゃなかった。そんな事情があろうとも、僕はあなたから、ちゃんと説明してほしかった」

「ケヴィン」

「愛しているのだと告げてほしかった。ちゃんと求められて産まれてきたのだと　生きていても赦されるのだと、この指輪は僕の罪の象徴ではないのだと、言っただけじゃなかった……！」

以前背伸びして装っていた毒っばさも、ここ最近急激に身に付けた分別も忘れ、ケヴィンは顔をくしゃくしゃにして叫んだ。

「たとえ銀で肌を焼かれようと、民から石を投げられようと、愛されているのだとさえ、告げてくれれば……っ！　僕は、いくらでも……耐えられた　！」

とつとつヨーナスの目も潤む。

彼は掠れた声で、「すまない」と呟いた。

それから、わななく腕を持ち上げて、きつく息子のことを抱きしめた。

「すまない……すまなかった……。それが愛だと、思っていたのだ

「…」

幼い嗚咽と、力強い抱擁。

それは十年前の夜の再現のようでもあり、同時に、ふたりが初めて親子として向き合った瞬間でもあった。

強く抱き合った親子は、やがて徐々に興奮を鎮め、鏡合わせのようにぴったり同時のタイミングで、互いの身体を離す。

よく見れば似た面差しの二人は、人前で涙を見せてしまった気まぐさと照れ、そして、想いをぶつけ合った者特有の清々しい表情を浮かべていた。

「取り乱して、失礼いたしました」

やがて、年長者の貫禄が、ヨーンナスが咳ばらいをして切り出す。

「……私が魔蛾を殺せなかった理由は、申し上げた通りです」

自然に息子をかばうようにして立つ彼からは、飽かず魔と戦ってきた辺境の地の領主たる気迫と、隠しようのない親の愛とが滲み出ていた。

「この地と、当家の視察こそが、殿下の本懐でありましょう。窮地を救っていただいた恩に報い、このヨーンナス、包み隠さず話させていただきました。……魔に連なる者を擁した我が家をどう扱うかは、殿下の御心ひとつです」

いよいよヨーンナスは、これまで見て見ぬふりをしてきたルーカス側の事情にも、踏み込むことを決めたようだ。

ただし、御心ひとつとは言いながら、細められた瞳には我が子を

守る獣のような、剣呑な色が浮かぶ。

もはやケヴィンを傷つけまいと、黙秘を続ける必要はなくなった。今の彼らならば、民も領主一家から離反することはあるまい。そしてまた、ケヴィンは笛で魔蛾を操ることもできる。

もし王都がケヴィンを フレンツェルを攻撃するようなら、全力で抗う。

ヨーナスの鋭い瞳は、そう告げていた。

が。

「おお、怖い」

ルーカスは動揺の色も見せず、ひょいと肩をすくめただけだった。

「美しい娘を連れて、ワインの名産地に遊びに来ただけの気楽な王子崩れに、いったい何をそう脅しつける必要があるのか」

笑いを含んだ軽やかな口調には、「政治には疎い第二王子」としての己の地位を築き上げ その裏で、清濁併せ呑んできた彼ならでは、余裕と凄みがあった。

「……………それでは」

「王都に帰った俺が、さして仲もよくない異母兄にどんな土産話を
するかが心配と？ きつと大したことはない。変わり者と評判の領
主は、家族思いの聡明な人物だった、子どもたちも日々頼もしく成
長しているようだ、それから フレンツェルのワインは、過去も
これからも、変わらず美味しい、というくらいか。それだけ聞けば、
あの人は満足だろう」

奇行は王都への翻意の表れではなかった、子どもたちもまた王都への忠誠を弁えるに足る人物のようだ、そして、フレンツェルはこれからも、ルーデンの属州でありつづける、ということだ。

それはすなわち、王都もまた、フレンツェルを攻撃せず、庇護するということでもあった。

「これは俺の独り言だが、魔か、それとも天の遣いかの区別など、曖昧なものだ。伯も見たらう？ 枝を食う醜い魔蛾は魔蟲だが、絹糸を吐く美しい翅の虫は、天から遣わされた蝶に見えるらしい。かつてこの地で起こったのが、魔による外道の術だったのか、使徒による奇跡だったのかなど、誰に判断できるものか」

「……ルーカス殿下……」

ヨーナスが感極まったように呟くと、ルーカスはふと思いついたように、形のよい唇を吊り上げた。

「そうそう。ただ、土産話をするのにも喉が渴くのでな。ここの地自慢のワインをいくつかもらえれば、きっと俺の舌もさぞ、美しい話を紡げることだろう」

口止め料ということだ。

対価としてはあまりに安い けれど、形式上はきちんと「契約」の形を整えてくれたルーカスの意図を察したヨーナスは、感に堪えぬよう首を振った。

「もちろん」

傍らの息子を片手で撫でながら、深く頷く。

「我が領の、最高のワインをお届けしましょう。強いものがお好みならば、ブランデーもご用意しましょうか？」

この滞在で、ルーカスが相当酒に強いことを知ったの配慮であった。

しかし、

「いや」

ルーカスは軽く苦笑を浮かべると、意外な要望を申し出た。

「厚意は痛み入るが、……ならば、アルコールを含まない、ぶどうの果実水ザフトをもらえるか？」

「ザフトを、ですか……？」

ヨーナスは怪訝な顔である。

フレンツェルでは、歩きはじめたばかりの子どもですらワインを嗜む。

菓子づくりくらいにしか使わぬザフトをなぜ、と首を傾げたが、ルーカスは緩く首を振るだけだった。

「……酔わせて口説くわけにもいかない相手がいてな」

彼はそれから、つと振り向き、未だ盛り上がりを見せる市のほうを見やる。

「まったく、もどかしいものだ」

視線のはるか先、軒を連ねる露店の切れ間では、熱狂する群集に

囲まれ、花冠で飾り立てられているエルマの姿があった。

35. シャバの「愛」はもどかしい(5)

「あらまあ、どうしたの？」

言葉を失い、その場に立ち尽くすだけのクレメンスの腕に、ハイデマリーは優しく手を添えた。

「皇帝から大貧民への命令よ。あなたの隠している素敵な真実を、すべてさらけ出して頂戴？」

「……彼女に……妻に、手出しだけは」

「クレメンス？ わたくしは、話して、と言っているの」

久々に老侯爵が紡いだ言葉には、懇願の色が滲みはじめていたが、ハイデマリーはそれをぴしゃりと封じる。

高貴な猫のような瞳、そこにはまさに、ネズミをいたぶって愉しむような、酷薄な光が浮かんでいた。

「忘れないで、あなたはわたくしたちの玩具。あなたは命じられれば素直に語り、歌い、踊り、わたくしたちの無聊を慰めるの。そのためここにいるのよ」

「……………」

かつて人を駒としか見ず、思いのままに操ってきた彼にとっては、あまりに皮肉な状況だった。

クレメンスは恥辱に頬を染めたが、それを無理やり飲み下し、相手を睨みつけるのをやめた。

それは、肉体的にも精神的にも、今の自分が、周囲を取り囲む彼らには齒が立たないことを理解していたためであり、また、己の尊厳よりも優先したいものが、彼にはあつたためだった。

が、それでも口の重いクレメンスに、呆れたような声を上げた者があつた。

「やれやれ、いつまでこの男のペースに付き合っているのですか、【色欲】。このままでは夜が明けてしまいますよ」

【怠惰】の名を持つ詐欺師、モーガンである。

日頃穏やかな笑みを絶やさぬ彼は、珍しくその若草色の瞳に冷やかな色を浮かべていた。

彼はその出自から、もともと貴族という生き物が嫌いなのである。

剣呑な雰囲気を感じ取った周囲は、ある者は興味深そうに片眉を上げ、ある者は思わし気に一瞥を向けたが、当のハイデマリーは軽やかに肩を竦めると、

「そつねえ」

と、蠱惑的な笑みを浮かべた。

そのまま、白く細い指先で、ついとクレメンスの頬をなぞる。

彼女は、吐息がかかりそつなほどに唇を寄せると、そつと彼に囁いた。

「奥手な殿方を相手にするときは、わたくしがリードしてさしあげ

なくてはね」

まさに、手練れた娼婦の発言。

彼女の藍色の瞳は、今や噎せ返るほどの色香をまとい、完璧な形の唇から紡がれる言葉は、どろりと甘い蜜のようだった。

「……………」

さしものクレメンスも、体を強張らせる。

それでも拳を握り、なんとか呑まれぬよう踏みとどまっている彼を、娼婦は愉悦をにじませて見守ると、とん、と指先でその胸先を押しした。

ただそれだけで、クレメンスの身体はぐにやりと力を失い、ソファに崩れるように座り込む。

目だけを見開き、冷や汗を浮かべる彼の傍らに、ハイデマリーはそつと腰かけ、まるで虚勢の衣を一枚一枚剥いでいくように、ゆつくりと話しかけた。

「フィーネ様は、形式上はヴェルナー王から『押し付けられた』ことになっていてるけれど、本当は、側妃であった彼女を、あなたが強く望んだために行われた下賜だったのでしょう?」

「……………」

「家族の強い期待にもかかわらず、王の子を孕めず、あげくあつさり側妃の座を追われてしまった彼女は、ずいぶん自分の体質を責めていたそうだけれど、あなたは二回目の『初夜』に怯える彼女に、子どもは要らぬと言いつつ放ったとか」

「なぜ……………」

誰も知らぬはずの私的な出来事まで詳らかにされ、クレメンスが衝撃に言葉を詰まらせる。

ハイデマリーは問いには答えず、にこりと二通目の手紙を谷間から取り出した。

「そうそう、それと『理知的な宰相』像とは裏腹に、新婚当初、心を閉ざしていたフィーネ様に対してあなたは毎夜のように情熱的な詩を捧げたそうね」

「いやだから、なぜそれを!？」

「ちなみに、わたくしの一押しはこれね」

ついで彼女は、鈴を鳴らすような美しい声で、情熱の詩を朗読してみせた。

恥じらうおまえは まるで妖精^{フェアリー}

薔薇の唇は たったひとつの 輝きの旋律^{うた} 歌うよ

You're singing...

宿命のように この地に生まれたふたり

そう 運命^{イェア}…… デイステイニー……

Yeah…… 世界に ありがとう……

「やめぬか ！」

クレメンスは顔を憤怒の朱色に染め絶叫する。
その傍らでは、囚人たち全員が死んでいた。

35・シャバの「愛」はもどかしい(5)(後書き)

短くてすみません。

なにか、ここで切つといた方がよい気がしたもので。

36. シャバの「愛」はもどかしい(6)

「フェ……フェアリー……っ」

「……せ、旋律と書いて『うた』……っ」

「圧倒的……センス……っ」

皆が皆、テーブルや膝に突っ伏して肩を震わせている。

つい先ほどまで不穏な空気をまとっていたはずのモーガンまでもが、

「……………痺れますね」

静かに視線を逸らし、身を震わせていた。

ハイデマリーは、恥辱という名の社会的死を与えておきながら、なんでもないように肩を竦める。

それから、先ほどのポエムなどなかったように、しれっと話を戻した。

「あなたは彼女に詩を捧げ、宝石を捧げ、屋敷を捧げた。彼女を傷つける者のいない、安全な屋敷を」

「……………っ」

「あなたが愚かにも王のような権力を求めたのは、もしかして彼女に女王の座を与えたかったからかしら？ 愛する妻がかつて求め、けれどけっして手に入らなかったものを、あなたが代わりに与えようっ？」

「違う……っ、私は、彼女を愛してなど」

己の恥部を容赦なく暴き立てられ、動揺しきったクレメンスは、それでも頑なに首を振る。

しかしハイデマリーは頑是ない子どもを見るような目つきになる
と、

「ねえ、クレメンス」

優しい声で、そういなした。

「わたくしたちは、あなたを裁く者ではないわ。だってわたくしたちは犯罪者で、そもそもあなたも、既に裁きを受けたからこそ、この場にいるのだもの。だから」

あなたが彼女への愛を認めたところで、誰も彼女を傷つけはしないのよ。

ハイデマリーが続けた言葉に、クレメンスは瞠目し、息を呑んだ。

「……………」

一瞬の、沈黙。

それが、クレメンスが隠していた真実のすべてだった。

ハイデマリーは優雅に両手を広げると、片眉を持ち上げて微笑んだ。

「権力闘争に、行動原理、人生。すべてを愛だ恋だの感情に帰結させるなんて、そうそうできることではなくってよ。……素敵だわ」

あからさまな、揶揄。

すっかりやり返したうえで、ハイデマリーは慈愛深くクレメンスの頬を撫でた。

「ロマンチストの、可愛い可愛い宰相さん。わたくし、あなたがとても気に入ったわ。どうぞ、真実の衣の最後の一枚は、あなたの手で脱ぎ捨ててごらんないな」

「……………」

そんなことを言いつつも、もはやクレメンスにまとえる虚勢の鎧など、残っていやしないのだ。

彼女が最初に宣言した通り、彼は全財産を、社会的権威を、隠していた真実をむしり取られ、今や裸でいるような頼りなさで、監獄の女王の前に跪いている。

とうとう、クレメンスは降伏した。

「……………妻は」

そして、震える声で愛を認めた。

「妻は……………彼女は、善良で、哀れな女なのだ。周囲の都合に巻き込まれ、言われるがままに二度結婚し、二度の離縁を経験した。ただ私が求めてしまったがゆえに、犯罪者の妻の烙印を押された、哀れな女なのだ。だから、どうか」

彼は臆面もなく、ハイデマリーの手を取り、額を押し付けて慈悲を請った。

「彼女に……不幸にも私の妻であった彼女に、あの土地を授けるとだけは……見逃してくれ！」

しん、と、針の落ちる音すら聞こえそうな沈黙が満ちる。

やがて、ハイデマリーは美しく紅を引いた唇を、ゆっくりと引き上げる。

それから、

「だあめ」

甘く、懇願を退けた。

無慈悲な返答に、クレメンスが必死の形相で彼女を見上げる。

ソファどころか床に崩れ落ち、彼女の足すら舐めようとしたクレメンスだったが、しかし美貌の娼婦は、くすくすと笑いながらそれを躲した。

そして、思いもせぬ言葉を告げた。

「だってクレメンス、それでは簡単に足がついてしまつてよ？」

「……………？」

怪訝そうに顔を上げたクレメンスの傍らに、彼女はそつと屈みこむ。

そうして細く艶めかしい腕を差し出すと、元老侯爵の身を起こしてやった。

「監獄にいるわたくしですら、こんなに簡単に知れてしまうほどの噂が流れているのだもの。いくら別名義にしてみせたところで、突

然彼女がトレンメルトレンメルの土地を手に入れてしまったら、誰だって背景を疑うわ。脱獄したあなたが、そのままトレンメルで死にでもしてごらんなさい。同情されるどころか、やはりあなたの差し金かと断定されて、その土地が没収されるだけに終わるから。結果、フィー本様がますます、思い出の土地を失うだけだわ」

「……………っ」

根底に愛情があるとはいえ、己の悲愴にいくぶんか酔っていたクレメンスは、それではつとずる。

愚かしくもかわいらしい酔客を、娼婦は愉快げな表情で見守ると、「だから」と付け加えた。

「だから、わたくしたちが、代わりの土地を用立ててあげる。かつて【怠惰】が巻き上げ、【嫉妬】がきちんロンドンケとお洗濯してくれた、とてもきれいな場所よ」

「……………彼にやるには過ぎた土地ですが、まあ、先ほどの余興ぶんぶんと思っことにしますかね」

「じわじわ来るわー」

ハイデマリーの独断に対し、モーガンモリーゼルも、特に異存はないようである。

なにやらうつすらと笑みを浮かべて、クレメンスを眺めている。

すぐには話が呑み込めず、呆然とする元宰相に向かって、ハイデマリーは「そうそう」と白魚のような指を立ててみせた。

「もうひとつ、指摘が。あなたの奥様、離縁などしていなくってよ」

「……………なんだと？」

意味がわからない、というように眉を寄せた彼に、女王は再び一

通目の手紙を取り出してみせた。

「先ほどの続き。トレンメルに向かったフィーネ様は、なんでもそこに籠って、祈りを捧げるおつもりなのですって。そうして、罪をすすぐのだそうよ。宰相の地位にありながら恐るべき野望を抱えた大罪人だけれど、自分にとってはかけがえのない夫の　ね」

「……………」

クレメンスは、ぽかんとした。

言われたことが、すぐには脳に染み込んでゆかなかった。

それはおかしい。

妻にとつて、しょせん自分は政略結婚の相手だ。

常識に照らせば、大罪を犯した夫など、早々に離縁して、人目を避け僻地に籠るはずだ。

そうとも、だからこそ、自分はなんとしても隠れ家を結ぶ土地を用意せねばと焦って　。

「……………そなた、『元』侯爵夫人と、言ったではないか」

「『元』でしょう？　あなたはもう侯爵ではないのだもの」

かろうじて絞り出した反論を、ハイデマリーは難なく封じ込め、それからこやかに続けた。

「詩というのは、素晴らしいわね。今のあなたがどんなに奥様への愛を否認し、黙秘してみせたところで、若き日に捧げたそれが、なにをも超えて雄弁に愛を語り、奥様を献身へと走らせるのだから」

「……………」

クレメンスは、なにも言わない。

ただ、せつかく身を起こされたところを、視線を逸らすように顔を俯けていた。

髪に隠された瞳が、彼の人生で初めて潤んでいたかどうか

それをわざわざ確認するような無粋な輩は、この監獄には、幸い存在しなかった。

37. シャバの「愛」はもどかしい(7)

「やれやれ、我らが女王は気前のいいことで」

カードも一通り遊び尽くし、飽きを覚えた囚人たちが、三々五々部屋を去っていった。ちなみにクレメンスも、土地収受の処理をすべくモーガンやリーゼルとともに消えていった。その後。

がらんとした居室には、二人の人物だけが残された。

悪戯っぽい表情が特徴的な青年、ホルストと、蠱惑的な笑みを絶やさぬ監獄の女王、ハイデマリーである。

囚われる前にはもっぱら「狂気の少年博士」と呼ばれていたホルストは、その隠しようのない酷薄さを瞳に滲ませ、肩を竦めながら紅茶を啜った。

「クレメンスって、あなたを監獄送りにした主犯なわけでしょ？ そんなやつに、奥方のための土地をくれたばかりか、離縁されてないだなんて情報まで知らせて、喜ばせてやるだなんて」

「あら。皇帝から大貧民には、最も不要なカードを二枚与えることになっていないじゃない。田舎の土地も、とある女性の秘めた想いも、わたくしにはまったく関わりのないものたち。だから差し上げただけだわ」

「へえ。じゃあ【色欲】はといった彼からなにをもらったというのさ」

「忠誠と、娯楽を」

意地悪く尋ねたホルストに、ハイデマリーは小ゆるぎもせず、優雅に答えてみせた。

「あの手の殿方は、恥辱に弱いよね。心も鼻っ柱もすべて折ってさしあげたから、彼、きつととてもいい駒になってよ。それに、あの『詩才』も実に捨てがたいわ」

「……………たしかに」

先ほど披露された詩を思い出したのか、ホルストはくつと語尾を震わせる。

それから、この話はもう終わりと言わんばかりに、空のカップをソーサーに戻し、ひよいとその場に立ち上がった。

ソファの傍らに寄せてあった布鞆から、なにやら大量の道具を取り出す。

窓際に移動し、ごそごそとなにかを組み立てはじめたホルストに、ハイデマリーは興味深げに眉を上げた。

「なにをしているの、【貪欲】？」

「んー？ ちよつとね、望遠鏡の組み立てを。高さと角度的に、ここからじゃないと見えないんだ。えーと、市、市、フレンツェルの中央市はどこかなと…………。ちよつとこのカーテン開けるよ」

「あん、眩しいわ」

早々に組み立て、カーテンをこじ開けて望遠鏡を据え始めたホルストに、ハイデマリーが非難の声を上げる。

布の隙間からは陽光が差し込み、倦怠の空気と暗闇とをわずかに薄らがせた。

「フレンツェルの、それも市になんか、いったいなんの用？」

「ふふ。本当はそれもお見通しのくせに」

さりげない態で尋ねる女王に、獄内一の切れ者は如才なく返す。

途端に、高貴な猫のような目がきらりと光ったので、やはり彼女は、自分が監獄を抜け出し、フレンツェルにいるエルマに会ったことを知っているのだと、ホルストは確信した。

基本的に、この美貌の娼婦の前には、いかなる秘密も成立しないのだ。

彼は「はい、お土産」と言って、美しい翅の魔蛾が収まった籠を手渡すと、くるりと向き直り、望遠鏡のピントを合わせはじめた。

「わかってるんですよ。会って来たよ、エルマに。あなたのことだ、どうせ、彼女がこの監獄いえの近くまで来てることくらい、ついでに言えば、ちよつとした危機に遭ったことくらい、把握してたんでしょ？ そのうえで黙ってたんだ。あなたは人が悪いから」

「だって、言ったらみんな、絶対一斉にあの子に会いに行こうとするじゃない」

鎌を掛けるつもりで尋ねると、ハイデマリーは意外にもあっさりとそれを認めた。

それから、望遠鏡を覗き込むホルストに、ちよつと不機嫌そうに唇を尖らせた。

「わかっていて？ 巢立ちなのよ、巢立ち。過剰に妹に構う兄は嫌われてよ」

「過剰なもんか。その証拠に、僕は昏倒したエルマを連れ帰ることもなく、いけすかない害虫を強制除去することもなく、穏やかに帰って来たじゃない。遠くからちよつと様子を見たり、エルマ周辺、

具体的にはフレンツェル領主の日記を数年分盗み見して、妹の身辺に不穩の芽がないか調査しておくくらいは、いたって普通のことだと思っけどね」

「領主のプライバシーを暴くのはともかく、年頃の女の子を覗き見るのはよしなさい。常識のない子ね」

普通や常識のなんたるかが問われる瞬間である。

だが、口ではそう言いつつも、ハイデマリーとてやはり母親。

娘の動向は気になるらしく、「あ、エルマがプロデュースしてるらしい天幕を発見」だとか、「大盛況だね」とか呟くホルストに、籠の魔蛾を眺めながらさりげなく尋ねた。

「それで、どうなのかしら。あの子は、うまく周囲に溶け込んでいるかしら？ 浮いたり、いじめられたりしていない？」

「んー、それはないんじゃない？ なんかすごい大勢に囲まれてるし。あ、周囲が一斉に跪きはじめた。っていうか、全力で祈りや冠を捧げはじめた」

「あら。それなら安心ね」

惜しむらくは、彼女の価値観もまた、盛大にずれていることか。

ハイデマリーは満足げに頷き、真剣に望遠鏡を覗き込んでいるホルストに話しかけた。

「心配していたけれど、あの子もちゃんと、普通に世間に溶け込んでいるようじゃない。【貪欲】もそろそろ、あの子から」

が、いつも機敏に相槌を打ち、すぐに人の話を混ぜ返す彼は、珍しくなにも言わない。

怪訝に思ったハイデマリーが、「……【貪欲】？」と顔を上げる

と、

「……………まったくさあ」

窓際に身を乗り出して地上を覗いていたホルストは、呆れたように呟いた。

「大切に思うがゆえに切り出せないって、なんなんだろうね。理解に苦しむよ」

「なあに、クレメンスのこと？」

「いや、そうじゃなくて……………ううん、彼もそうか。妻を愛するがゆえに口を閉ざし、遠ざけた、だっけ。意味がわからないよね」

彼がレンズ越しに見つめるその先には、固く抱き合う親子
ーナスとケヴィンがいた。ヨ

ホルストはひよいと肩を竦め、ハイデマリーに向き直った。

「フレンツェルの領主さ、なんでか知らないけど、自分の息子のことを魔族だつて信じてたみたいなんだよね。あまりに発育が悪いからかな？　せつかく人が取り上げてやったのに、失礼な話だよ、まったく。それで、その『真実』を告げるべきか、告げないべきかとか、いいや、それよりも息子が民に受け入れられるよう最大の努力を、だとか、日記の記述はそんなことばっか」

自分がその親子の亀裂の原因であるとは、ホルストは考えもしない。

「ま、たった今和解したみたいだけど」と望遠鏡を指さし、心底馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「僕にはその懊悩の意義がわからないね。領主も、クレメンスもそ

うだ。相手のことが大切なら、悩みなんかせず、そう告げればいい」
「自分の本当の想いや、真実を告げることで、相手が傷つくことを恐れたんでしよう」

「だからそれがわからないんだってば」

ハイデマリーが静かに指摘すると、ホルストはますます拗ねたように唇を尖らせた。

「愛を告げることで妻が共犯者と目され、石を投げられるというのなら、いつそその妻ごと連れ去って、ともに監獄に住まえばいい。真実を告げることで息子が悩み迫害されるというのなら、いつそ自室に閉じ込めて、悩む隙もないほど、どろどろに甘やかして過ごせばいい。人を大切に思うって、そういうことですよ？」

ホルストは、妹を壊されたことで人の道を外し、そして妹を失ったことで自らの生を一度は諦めた人間だ。

そんな彼が、大切に思った相手を閉じ込め、徹底的に守るのこそが愛だと信じるのは、不思議なことではなかった。

実際彼の口調には、露悪的な響きはない。

心底そう信じているからこそ、あどけなさや無邪気さだけがあつた。

いや。

「ねえ、マリーもそうは思わない？」

彼が目を細めて付け足した問いには、大切なエルマを放逐したハイデマリーへの、未だ収まらぬ非難がごく微量含まれていた。

同時に、エルマの秘密を、自分は知っているのだという仄めかし

も。

そして、その真実を本人にも、周囲にも切り出そうとしないハイデマリーへの、苛立ちも。

正体を告げて傷つけたらどうしようと悩むくらいなら、なおさら監獄から放つべきではなかった。

この安全で頑強な揺りかごで、大切に大切に、彼女を守り続けるべきだった

ホルストの鳶色の瞳は、そう告げていた。

珍しく、ふたりの間に息苦しいほどの沈黙が落ちる。

が、ハイデマリーはやはり、それでも泰然の構えを崩さなかった。

「 若いわねえ」

彼女はゆっくりと瞬きをすることで、ホルストの揶揄と苛立ちをあっさり受け流してしまつと、静かに笑みを浮かべた。

「 ねえ、ホルスト。 あなたの言うそれは、獄内の理論だわ」

それからゆっくりと立ち上がり、望遠鏡の覗き口を白い手でそつと塞いだ。

「 ちょっと、監獄（こく）に長くいすぎてしまったのね。 小さな窓から、切り取られた光景ばかり見つめているから、そう思うのだけわ」

「 …… 自分だって、僕以上にずっと引き籠（こも）ってるくせに」

「 そうよ。 だからこそわたしは、あの子には外の世界を知ってほしいと思うの」

鋭く反論されても、ハイデマリーは譲らない。
彼女はホルストに並び立ち、監獄の小さな窓から、光あふれる外の世界を眺めた。

「わたくしは、物心ついたときから籠かごの鳥で、今や囚人。シャバ、だなんていうのは、いつもわたくしとは無縁の世界だった。眩しい世界を、しょっちゅうこうして、切り取られた窓越しに眺めていたわ」

「……………」
「けれどだからこそ、監獄を掌握した日の夜、初めてギルと外の世界を散歩してみても……その広さ、果てしなさに、眩暈がするほどの恐怖と、興奮を覚えたの」

ハイデマリーは懐かしむように、そつと瞼を閉じた。

今でも感じられるかのような、夜風の肌触り。

茂る樹々がまとう、噓せ返るほどの香り。

星は空からこぼれんばかりに広がっていた。大地は湿り、でこぼことしていた。

制限も整備もされていない空間は、彼女の知らなかったいびつさと、力強さで満ち溢れていた。

それに 監獄の建つ崖から見下ろした、人家の灯り。

ぼつぼつと淡い光を連ねる様子は、地上の星にも似て、胸を突かれるほどに美しかった。

「親の願望を子に託すなど言われたら、それまでかもしれない。けれど、いいの。誰になんと言われようと、わたくしはそれが最善だと思っただもの」

ハイデマリーはきつぱりと言いつくと、テーブルに置いていた魔蛾の籠をすいと取り上げ、窓の近くに掲げた。

「あの子のこと、閉じ込めて守りたいほど愛しいわ。かつてのわたしは、そのためにこの監獄いゑを整えた。……けれど今は、愛しいからこそ、外の空に触れてほしい。自由に、力強く、自らの翅で空を切り開いていつてほしいと思うの。だから　それを妨げる檻も、真実も、不要よ」

それから、籠の扉を指に引っかけると、窓の外に向かってぱつと開いてみせた。

バサバサバサ……

魔蛾は、翠の翅を陽光に透き通らせながら、羽音を立てて宙に消えていく。

その姿が完全に視界からなくなるのを見守ってから、ハイデマリーは振り返り、にこりとホルストに向かって微笑んでみせた。

「ねえ、あなたも、そうは思わない？」

それは、ちょうど先ほどの会話を反転させたかのようだ。

蠱惑的な笑みを湛えるハイデマリーの瞳には、ホルストへの非難がごく微量含まれている。

いつまで経ってもエルマを赤子のように扱い、かつて失った己の妹と重ねているホルストへの非難が。

あなたもそろそろ、エルマ自身を見つめるべきだわ。

高貴な猫のような、ハイデマリーの藍色の瞳は、なによりも雄弁

にそう告げていた。

「……………はいはい」

しばしの沈黙の後、ホルストはふっと短く溜息を漏らす。それから苦笑を浮かべて、ひらりと両手を広げた。

「我らが女王には敵わないよ。あなたが正しい。いつだってね」

肩を竦めながら、望遠鏡を片付けに掛かる。

口では、拗ねたようにこっぴどいいていた。

「そう、……………僕だって、わかってるさ」

彼の脳裏には、自分の思っていたよりずっと大人びた表情を浮かべる、エルマの姿があった。

エルマ。

大切な大切な、彼の「妹」。

けれど、彼女は身代わりなんかではない。

意志があり、感情があり、日々大人の階段を上っている、れっきとした一人の人間だ。

彼女のことを真に大切に思い、尊重したいというのなら 監獄に閉じ込めてどろどろに甘やかすのではなく、俗世に放って、その成長を信じ見守るべきなのだろう。

だからこそ、自分だってあの場面で、退場を決めたのだから。

「愛ゆえに閉じ込め、愛ゆえに放つ、ねえ……………」

いつそ、そのどちらかだけに偏ってしまえば、悩みもしないだろうに。

望遠鏡のレンズに付着した鱗粉を、ふつと息で払いながら、ホルストは「まったく」と苦笑を浮かべてハイデマリーを見やった。

「シャバの愛なんていうのは、もどかしいものだね」

37 シャバの「愛」はもどかしい(7) (後書き)

次話、エピソードとなります。

38・エピローグ

「んもう。そんなに落ち込まなくていいではないの」

「もういい加減、顔を上げないか。ほら、窓を覗いてみる、空がきれいだぞ」

イレーネとルーカスは、もう何度目になるかわからぬ慰めの言葉を掛けた。

澄み渡った秋空の下、房を垂れるぶどう畑の合間をうねる、穏やかな農道。

フレンツェル家を辞し、王都へと帰還する、馬車でのことである。

迅速な王命完遂により、収穫祭の休み期間もあと三日ほど残しての、早々の帰還。

本当なら、馬車内の空気は、達成感と解放感に満ち溢れた会話が繰り広げられようものだが、

「……………そうは、仰いましても……………」

屋敷を出発してからこちら、どんよりと暗雲を背負ったまま座席に沈み込む人物がいた。

誰あろう、エルマである。

彼女のそんな態度は、実は昨日の収穫祭のときから続いていた。

「ああ、なんて麗しいお姿！ 人の領域を超えた美しさだわ！」

「いやあそれにしても、この稼ぎっぷり！ とても尋常じゃないぜ

「！」
「魔蛾を美しい蝶のように変えたのも、あんななんだった？ わあ、それってまさに、聖書に乗りそうな、百年に一度の奇跡、偉業じゃないか！」

そう。

祭りの空気とエルマの圧倒的美貌と偉業に興奮したエーリヒたち領民の面々から、ひたすらその「異様さ」を褒められつづけるといって、彼女にしてみれば衝撃としか言えない数時間を過ごしたためである。

「い、いえ、そんな、このくらい、べつに『普通』の」「
「かあああつ！ 聞いたか、みんな！ 天使様のこの謙虚なお心よ！」

「おう、エーリヒ。おまえ本当に天使様に感謝しなきゃいけないぞ。どうだ、そのたんまり頂いた金で銅像でも建ててるってのは」

あげく、すでにワインをしこたま浴びていた領民たちは、ノリでそんなことまで言い出す。

「おう、いいなあ！ 俺のぶどう畑の真ん中に建ててやらあよ！」
「あら、それじゃあたしたちが拝みに行くのに不便じゃないの。もつと教会みたいにさ、町の真ん中に建てなきゃ」
「で、そこは当然日々人が集って、領民中の憧れの場所になるわけでしょう？」

「そう、それで、これが決まり文句になるんだ、『今日はエルマエル像の前で待ち合わせね』」

「告白に呼び出す手紙も『エルマエル像の前でお待ちしています』」「
「子供がいたずらした時にゃ、『エルマエル様が見てる』！」

口々に妄想を広げ、どつと笑う。

魔蛾の脅威の去ったフレンツェルの人々は、皆陽気で、気さくでお茶目だった。

その中で、唯一エルマだけが引きつった表情を浮かべていた。

「……私は、いつの間にあだ名をつけられ、あげく記念像を建てられてしまうほどのことを、しでかしてしまったのかと……」

馬車内ではそばそと懺悔するエルマの表情は、どこまでも暗い。

例えるならそれは、夜に書いたポエムを額に飾られ、あげく誰彼構わず披露されるような心持ちなのだろう。

イレネとルーカスは、さすがに同情の視線を向けた。

「まあ、最終的には殿下が、なんとか建立を防いでくれたから、よかったではないの」

「ああ。既にデボラが起案しケヴィンが審議し、ヨーナス殿が可決しようとしていたところだったから、かなり瀬戸際だったがな」

敵は身内にいたのである。

「その点でも、大変ご迷惑をお掛けしました……」

エルマはますますしょんぼりと視線を俯かせた。

ちなみに彼女は今現在、諸事情によって 具体的には、見送るデボラに「次にお会いするそのときまでわたくしが脳内にエルマ様のご尊顔を寸分の狂いもなく再現できるように、どうぞどうぞその顔を目に焼き付けさせてくださいませええええええ！」と縋られ

た　素顔を晒している。

長い睫毛は白い頬に淡い影を落とし、憂いを帯びた夜明け色の瞳は、得も言われぬ深みをまとって、人の目を引き付ける。

薄く色づいた唇から漏れる吐息は悩ましく、落とした肩ははかなげで、傍にいただけで見る者の胸が締め付けられそうな哀れさである。

今の彼女が「お情けを」とでも呟こうものなら、大陸の半分くらいの間が、財布を全開にして駆け寄りそうなほどには、破壊力のある憂い姿であった。

ルーカスとイレエネは小声でささやきを交わし合った。

「おい、イレエネ。なんとかならんのか。こいつのこういつた姿は、先ほどから最上級魔獣なみの苛烈さで、俺の精神に攻撃をかましてくるのだが」

「満面の笑みに比べれば、視界の暴力度も半分程度、とご自身に言い聞かせることですよ」

エルマ被害者の会員同士、ふたりの間にはもはや連帯意識や友情すら漂う。

素早く交わした視線で、「ここは自分が先陣」と理解したイレエネは、ごほんとか咳払いをした。

足の角度をずらし、隣に座すエルマの顔を、正面から覗き込む。それから、おもむろに切り出した。

「ねえ、エルマ。勝手な話だけれど、私はあなたが今回も『普通』にはなれなかったことを、嬉しく思ったりもしているのよ」

「『今回も』……………」

「そこに引つ掛からないでよろしい。事実なんだからしょうがないじゃない。でもおかげで、あなたはまだ私たちと一緒にいられる。そう思うと、嬉しいの」

もやっとしたらしいエルマを容赦なく遮りつつも、イレーネの声は優しい。

あなたは自分にとって大切な友人なのだと、傍にいられることが少なくとも一人の間人を喜ばせているのだと、それが伝わるように、心を込めて彼女は話した。

「『普通』のお墨付きをもらえそうにないのがなによ。ぶっ飛んでいるのがなによ。あなたはいつだって私の自慢の、そして大好きな友人だわ。そんなあなたと、収穫祭の残りも、これからの日々も、一緒に過ごせるのだと思うと、私はとても嬉しい」

「……イレーネ……」

ストレートな物言いに、エルマはちよつと息を呑んで目を見開く。

「……………」

けれど、しばしの沈黙ののち、拗ねたような表情になって、呟いた。

「……でも私は、収穫祭の間に、監獄いえに戻りたかったです」

「エルマ……」

素直な反論に、イレーネは言葉を失った。

家族で集い、実りを喜び合う収穫祭。

成人してもいない子どもが家に帰りたがるのは当然のことだと納得すると同時に、片やでは、やはり自分たちではエルマを引き留めるに足らぬ存在なのかと、ちくりと胸が痛む。

「……そんなに、帰りたかったのね」

「それはもう」

相槌にもしつかり頷き返され、痛みはますます強まった。
が。

「イレーネを連れて、家族に紹介したかったのです」

「え……？」

思いもせぬ続きの言葉に、イレーネは翠の瞳を大きく見開いてしまふ。

きよとんとする彼女に、エルマは「『え？』って」と、ちよつと唇を尖らせた。

「イレーネが教えてくれたものではありませんか。収穫祭の日には、家族が集まって一年を振り返ったり、踊ったり、新しいワインの樽を開けたり、あとは親しい友人を紹介しあったりするのだと」

「……………」

まさかそれをエルマが覚えていたのだとは思わず、イレーネは絶句した。

そんな友人には気付かぬ様子で、エルマは拗ねた表情のまま、小声で呟いている。

「『市で小物を買って贈り合ったり』というのもしてみたかったのに……結局市で買える物はできませんでしたし、……花冠も、お揃い

ではありませんでした」

「……………」

イレーネは、ようやく理解した。

エルマは、かつて自分の説いた「収穫祭かくあるべし」というのを信じて、愚直にそれを実行せんがために、市に行きたがっていたのだ。

花冠を着けて市に出たがっていたわりに、周囲から大量の花冠を捧げられても困惑顔だったのは、そのため。

彼女は単なる花冠が欲しかったのではない。

イレーネと シャバで初めてできた友人と、お揃いの花冠が欲しかったのだ。

それが、「友情の証」だから。

「……………殿下。馬車の行き先、東のほうに変えられませんか？」

なんだか、形容しがたい、めまいのような感覚を抱きながら、イレーネは真顔で挙手した。

「王都には戻らず、残りの収穫祭の数日、我が家で過ごしませう。里帰りです。ええ、親しい友人を連れ戻り。上司・職場・国王陛下、誰がなんとおもうとも、誰にも邪魔させるものですか！」

「許可する」

イレーネが裂帛の気合いを込めた提案は、幸いなことに即座に許可された。

「さすがに、今のを聞いてなお王都帰りを強行するほど、野暮では

ない」

「え……………」

戸惑ったのは、エルマのほうである。

ぼやきに夢中になるあまり、すっかり展開に取り残されてしまった彼女は、「ええと、それはつまり……………」と不思議そうに友人を見つめた。

そんなエルマの両手をしっかりと握りしめ、イレーネは告げる。

「エルマ。やりましょう、収穫祭。私はしがない男爵家の娘だし、フレンツェルの屋敷ほどの部屋は用意できないけれど、特別親しい友人を寝泊りさせるくらいのことではできるわ」

「……………」

「それで、前に私が言ったこと、全部やるのよ。あなたを親友だと家族に紹介して、それからみんなでこの一年を振り返って、踊って新しいワインの樽を開けるの。ノイマンの領にだって市は出るわ。そこで小物を買って、プレゼント交換して、お揃いの花冠を付けましょう。よくって？ これはもう、決定事項よ！」

鼻息も荒くイレーネが言い切ると、エルマはまん丸に目を見開いた。

そして、

「……………」

ゆっくりとイレーネの手から逃れると、その両手で、そっと自らの頬を押さえた。

「…………私…………友人の家に招かれるなんて、初めてです。…………うれし

い

その、咲き初めの薔薇のように、淡く紅潮した頬。

夜明け色の瞳は、まるで朝陽が射したかのようにうつすらと赤みを強めて潤み、口の両端にかかった白い掌は、それでも、嬉しくてたまらないというように綻ぶ唇を、完全には隠してはくれなかった。

化粧も眼鏡も取り去ってしまったからこそ見える、彼女の真実の表情。

息が止まるほど可憐で、胸が苦しくなるほどいじらしいその姿に、

「……………っ！」

イレーネとルーカスの両名は、ばっ！ と音を立てて胸を押さえ、その場に蹲った。

「なんていうダイレクトアタック……………っ！ 私、今、うつかり新たな扉に手を掛けてしまいそうな自分の幻が見えましたわ……………！」

「堪えるイレーネ。その扉、開けた先に待つのは魔境だ……………！ くそ、俺もこの場で常識圏外生命体を抱きしめてしまふところだった」

仲良く馬車の座席に崩れ落ちる二人に、エルマは怪訝そうに眉を寄せる。

「……………いったい、それはなんのポーズですか？」

「なんのポーズだと思うか、あなたも、自分の胸に手を当てて、よく考えてごらんさいよ……………っ！」

イレーネが八つ当たり気味に言い返すと、エルマはますます不思議そうに小首を傾げ、「これもなにか、一般的な仕草なのですか？」

と、素直に自分の胸に手を当てた。

穏やかな農道、質素ながら快適に整えられた馬車は、秋の日差しを浴びながらのんびりと王都を目指す。

心地よい座席には、胸に手を当てた　　というか、押さえ込んだ男女が三人。

特になにが起こるわけではないのに、いつまでも蹲っている相手を、エルマは困惑して見つめた。

やがて、ひとり腕を外し、ぼつんと呟く。

「……本当に、シャバの『普通』というのは、難しいですね」

目の前に広がる道とは裏腹に、彼女の『普通』を目指す道のりは、未だ険しいようであった。

38・エピローグ（後書き）

これにて完結となります。

「シャバの『普通』は難しい 01」は、4月5日にエンターブレインさまより発売となります。

よければ下のほうまでスクロールして、美しい表紙をお確かめくださいませ！

ついでに評価なんてしてくださると、ものすごく励みになります。

なお、エイプリルフルに閑話投稿を予定しておりますので、よければまたお会いしましょう。

改めて、最後までお付き合いくださり、誠にありがとうございました。

〈閑話〉「普通」の酔っぱらい（前書き）

酔っぱらいネタはイベント投稿の鉄板てつばんとお聞きして。

〈閑話〉 「普通」の酔っぱらい

とある穏やかな朝のことだった。

その日も厨房で料理人たちのソウルを鷲掴みにし、廊下を残像しか残らぬ速さで磨き上げ、野菜を目利きして糖度順に並べ終えたエルマは、シルバー磨きの手いでに国宝レベルの銀細工を作り上げようとしたりと、同僚のイレネに呼び止められた。

なんでも、またしても新王フェリクスから招集が掛かったことである。

面倒そうな光を眼鏡に浮かべ、フェリクスの居室に向かったエルマとイレネは、しかし扉を開けてみて首を傾げた。

豪華な調度品が並ぶその場所には、騎士団の訓練中であるはずの王弟ルーカスが いるのは、まあ当たり前前の光景として、肝心のフェリクスの姿が見えなかったのである。

「 恐れながら、新王陛下はどちらへ行かれたのでしょうか」

「日差しが麗らかだから、城の屋上で寝てくるそうさ。まあ、本当の目的かは知らんがな」

エルマが尋ねれば、先に居室のソファで足を組んでいたルーカスは、肩を竦めて答える。

が、同じく突然呼び出されただろうに 証拠に、彼は騎士団が訓練時に着用するシャツを着たままだ、珍しくその表情は、げんなりもしていなければ、苛立ちもしていない。

むしろ、彼はエルマたちを待ちわびていた様子で、傍らの小机に置かれていた便箋をひらりと振ってみせた。

「喜べ、フレンツェル領から『友好の印に』と大量のワインが届いたぞ。どれも最高品質だ」

「えっ」

大人しく控えていたイレーネが、ルーカスの言葉にぱっと顔を輝かせる。

彼女もまた、ルーカスほどではないにせよ、酒は好きな方なのだ。ワインの名産地、特に濃厚な赤ワインは「飲む宝石^{ルビ}」とまで評されるフレンツェル産のものなら、なおさらである。

「ヨーナ様も気の利いたことをなさるんですね。もしや、私たちもそのご相伴に預かれるのでしょうか？」

「ああ。なぜか、俺個人宛てにも、数十本届けられているのでな」

「まあ。さすが殿下、ヨーナ様といつの間にか随分親しくなっていたのですわね」

イレーネたちは、ルーカスがヨーナと交わした「契約」を知らない。

単純に感心したような顔つきになると、ついでソファ脇に運び込まれた大ぶりの木箱に気付き、期待に満ちた視線を向けた。

「もしや、そちらにあるのが、そのワインなのですか？」

「ああ。俺個人に宛てられたもののほうだ。義兄上宛てのものは、あまりに大量だったので、城の貯蔵庫に運ばせてある。ちなみに義兄上は、あまりに大量のワインを目にしすぎて、飲む気が失せたらしい。俺個人宛てのものは自由に扱ってよいとのことだ」

振舞う相手も飲む場所も「好きにすれば？ 君のでしょ」とフェリクスが言い放ったので、ルーカスも遠慮なく、エルマたちを呼びつけたというわけである。

王の居室は、最高級のワインを、誰に憚ることなくしこたま浴びるのにはびつたり空間だ。

「まあ、俺からの労いだと思ってくれ。この箱のワインは好きに飲んでいいぞ。ただし、侍女仲間に言いふらすなよ」

「もちろんですわ！」

「あの」

やる気満々で袖をまくりはじめたイレーネとは裏腹に、エルマは遠慮がちに声を上げる。

「申し訳ございませんが、私、お気持ちだけで十分でございます」

そう。酒を飲むと昏倒する性質の彼女は、度数の強いワインを飲めないのであった。

が、ルーカスはそれを聞いて、むしろ意を得たりとばかりに微笑んだ。

「ああ。そう言つと思って ほら」

そうして差し出したのは、他のものより一回り小ぶりの瓶だ。

中身は濃厚な紫色の液体で、一見した限りではワインのようである。

しかし、瓶はまるでクリスタルのように光を反射する加工が施さ

れ、コルク付近には美しい色のリボンが巻かれるなど、いかにも高級で上品な、贈答品のような雰囲気醸し出されていた。

「これは……!?」

「ぶどうの果実水だ。おまえでも、これなら飲めるかと思ってな」

さらりと、押しつけがましくない程度に特別扱いを匂わせるのは、さすが色男の面目躍如といったところだ。

「これをグラスに注いで飲めば、ワイン気分が味わえるだろう？」

今日は昼酒だ。俺が許す。飲むぞ」

「……………!」

ルーカスの提案に、エルマは珍しく、眼鏡をしていてもわかるくらい喜色を露わにした。

下戸の人間にはままあることだが、彼らは酒が飲めないだけで、酒盛りの場にはむしろ参加したいのである。

「私……皆さんと飲み交わすなどというのは……初めてです」

そして、気心知れた相手と酒を飲み交わすというのも、実はエルマの思う「シャバの普通リスト」のひとつであったらしい。

エルマはどきどきしたように手を伸ばすと、大切そうにザフトの瓶を胸に押し抱いた。

「ありがとうございます、殿下」

「いや」

ルーカスは愉快そうに片方の眉を上げた。

「おまえがそれほど喜んでくれるのなら、甲斐があったというものだ」

珍しく、色男が本領を發揮している。

とそのとき、箱の中身を覗き込んでいたイレーネが、あるものを見つけて声を上げた。

「あらっ。ワインだけではありませんのね。チーズに干しぶどうに、ナッツ……アテまで用意してくださっているなんて、なんと気の利くこと！」

「ああ。それはどうやらデボラ嬢の配慮らしい。証拠に、ほら」

ルーカスは、ソファに戻り便箋をめくっていたその手を休め、ぴらりと一枚を振ってみせた。

「デボラ嬢からもメッセージが届いている。不自然なくらい礼儀正しい文面だが……なぜだろう、これはあくまでエルマ宛てだということがひしひしと伝わってくるな……」

ルーカスは再び便箋に視線を落とすと、手だけを傍らの箱に伸ばして小包を拾い、「ほら」とエルマに手渡した。

「ひとまず、これはおまえがもらっておけ。干しぶどうで作ったバターケーキだそうだ。なんだか……おまえ以外の人間が食そうものなら、ケーキから攻撃されそうな狂気すら感じる。今この場でおまえが食ってしまえ」

「恐縮です」

「ねえエルマ、手紙の文面について流してしまっているの！？ 礼儀正しいのに狂気を感じるって……いったいどんな文面なのよそれは！？？」

常識人代表を自任するイレーネが、勢いでルーカスの手元を覗き込む。

そこには、思いのほか達筆な筆で、生真面目な文章が綴られていた。

時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます（エ）。

過日は自領にお越しくださいますして、誠にありがとうございました（ル）。

大したおもてなしもできず（マ）、それどころか我が家や自領の窮状を救っていただいてしまう形となりましたこと（様）、大変心苦しい限りです（エ）。

しかしながら、お三方を自領に迎え、実り豊かな収穫祭を過ごしましたことは（ル）、我が家（マ）、そして自領の全員にとって（様）、なにも代えがたい素晴らしい思い出となりました（エ）。

お礼というにはささやかですが（ル）、ワインに合う品をいくつかお送りさせていただきます（マ）。

特に、干しぶどうを練り込んだバターケーキは（様）、自領自慢の品ですので、ご笑納いただけますと幸いです（エルマエル様！）。

「……………本当ですね。なぜだか、本文が頭に入っていないほど、」

エルマへの狂気じみた愛を感じますわね」

「だろっ？ 文章はむしろ端然としているのに……なんなんだろうな？」

サブリミナル効果である。

ルーカスとイレーネの両名は首を傾げながらも、なんとなくそうせざるを得ないなにかを感じ、その場でエルマにバターケーキの包みを開封させた。

「……なにやら、独特な香りがするような」

器用に包みを開きながら、エルマがことりと首を傾げる。

「そうか？ ……ああ、手紙に続きがあるな。なんでも、『至高の御方』が口にするにふさわしい味わいを追求し、オリジナルのレシピにデボラ嬢がアレンジを加えたものらしい。 ……しかしなんなんだ、なぜこの手紙、読めば読むほど背筋が粟立つ……」

「奇妙ですわ……。でも、なぜだか続きを読まねばという気になる……」

「お先に頂いておりますね」

ルーカスもイレーネも、デボラからの手紙のどこに違和感があるのか、便箋を矯めつ眇めつして熟読している。

エルマは淡々とそれを横目に流すと、優美かつ大胆な手つきでケーキを切り分け、口に入れた。

「……………」

彼女が無言で目を見開いたのと、ルーカスたちが次の文章にたどり着いたのは、同時のことであった。

なお、「輝ける御方」のそのご威光にふさわしく、干しぶどうは自領最高品質、および最高度数のブレンダーに一週間漬け込み、香り高さを実現しました。

結果、バターケーキと表現するにはかなり逸脱した酒精の強さとなっておりますが、それも、わたくしのエルマエル様への敬愛の念に比べれば、しよせん塵埃^{じんあい}渺漠^{びやく}、そよ風のごとします。どうか楽しんでいただけますように。

ラブ・インフイニティ
愛・無限大 永遠の信徒 デボラより

「なぜそれを最後に書いた !?」

「っていつかなんでエルマについて一番重要な取り扱い情報が伝わっていないわけえええええ!?!」

ルーカスとイレーネが絶叫するも、時すでに遅し。

両者がばつと振り向いた先では、

「……………」

頬を両手で押さえ、とろんとした霧囲気を漂わせたエルマが、ぼんやりとその場に佇んでいた。

「おい、大丈夫か!」

「エ…… エルマ！ 大丈夫！？」

とっさに二人は、素早く両腕を伸ばし、エルマ昏倒の受け入れ態勢を整えるが、エルマ本人はといえば、意外にも倒れる気配はない。

代わりに彼女は、

「伝わっていない……」

とぼつりと呟くと、じいっとイレーネを見つめた。

どうやら、先ほどのイレーネの叫びが、なにか心の琴線に触れたらしい。

エルマはふわふわとした手つきで およそ普段の彼女らしからぬ緩慢な動きに、イレーネたちは冷や汗を浮かべて硬直してしまった、なぜかおもむろに眼鏡を取り外した。

途端に、酒精のせいなのか、煙るように潤んだ夜明け色の瞳が、そしてわずかに紅潮した天使のような美貌が明らかになる。

「な…… なななぜ、めめめ眼鏡をそこで外すのよ、エルマ……っ！？」

「大切なことを話すときは、しっかりと目を見なさいと、以前、侍女長さまが」

どうやら、ゲルダの教えを、断片的に思い出したのが原因らしい。妙なところで生真面目な彼女は、とろんとした目つきのまま、けれどしっかりと視線を合わせてイレーネに迫った。

「わたし、これから、大切なことを言います」

「エ……エルマっ、わ、わかったから、ちょっと、眼鏡……！ きよ、距離……！」

息が止まりそうほどの美貌で迫られて、危うく息が止まりそうになる。

どうしよう、もうすでに言語脳がおかしい。

だが、エルマはイレーネのそんな動揺などまるで頓着せず、むしろ戸惑う彼女の両手すら握り締めた。

「イレーネ。あなたはわたしの、初めての友達」

その、ほっそりとした手。

真剣に、ほんのわずか寄せられた美しい眉。

あどけなさや妖艶さを半々に湛えた瞳は、しっとりとした涙を湛え、ほんのりと色づいた唇からは、あえかな吐息が漏れる。

そうしてエルマは、そつと囁くように告げた。

「だいすき」

「うぐお……っ……！」

瞬間、イレーネの喉から、乙女らしからぬ重低音の悲鳴が迸る。どこまでもストレートな、そしてわずかに幼さを残したその言葉に、脳と心臓を豪快にえぐられたためであつた。

イレーネは息も絶え絶えと言った様子でその場に崩れ落ち、心臓を押さえて「ぐおおお……っ」と悶絶する。

その横では、酔っぱらいエルマのあまりに凄まじい威力に動揺しつつも、目を離せずにいるルーカスが「お、おい……」と躊躇いがちに手を伸ばした。

そうして、無意識に手を伸ばしてしまいがら、その瞬間彼の脳内には、無数の思いが浮かんでは流れ去っていった。

なんとというすさまじい破壊力。これはもはや暴力に類してよい媚態なのではないか。

いや今は事態に突っ込みを入れている場合ではない、この色香放射性有害生命体と化した少女を止めるべきだ、いやそれよりも人命救助だ。

そう、今はイレーネの心臓が危機にさらされている緊急事態なわけであって、けっして、けっして、この流れに乗じてエルマにとある質問を投げかけるようなタイミングでは

「おい」

だが、気付けばルーカスは問うていた。

「……その、なんだ。おまえ……俺に対して、なにか伝えることはないのか」

自制心と常識が、好奇心と本能の前に膝を突いた瞬間だった。

「え……？」

対するエルマは、やはりどこかぼんやりとしている。

崩れ落ちたイレーネに付き合っつて、その場に屈みこんで背中を撫でていたところを、ゆっくりと顔を上げ、それからちよこんと首を

傾げた。

それから、きゅっと口を引き結び、ちょこちょこ膝を動かして角度を変え、ルーカスに向き直る。どうでもいいが、一連の動作が無駄にくそ可愛い、と彼は思った。

ルーカスもまたエルマに向かって屈みこんでいたので、ふたりは床に座り込んで見つめ合うような体勢になった。

正面から圧倒的な美貌で覗き込まれて、さしものルーカスも少々鼓動が早まる。

しかもエルマは、そこでふと笑みをこぼした。

「……………！」

まるで、綻ぶ花のような。

雲の切れ間からさあつと光が注ぎ込むような。

あどけなく、心を許しきった、しかし酒精のために色っぽく潤んだ、笑み。

そうしてエルマは、とろけるような笑みを浮かべたまま、ゆっくりと手をルーカスへと伸ばし、

ぽんぽん、ぐっ。

なぜか、肩をぽんぽん叩いた後、いい笑顔でサムズアップした。

「んっ」

「んっ、じゃねえわ！」

思わずルーカスも間髪入れず絶叫してしまう。
一連の色めいた空気はどこへ消えた。蒸発したのか。

が、そんなルーカスの突っ込みを聞いた瞬間、エルマはふと表情を消すと、ついで一層とろん、とした目つきになって、小さく呟いた。

「ねむい」

「自由か!」

「おやすみなさい」

「おい待て、顔をうずめてくるな! こすりつけるな! 馬鹿者!」

あげく、ルーカスの胸元を枕とでも思ったのか、ぐりぐりと顔を押し付けてくる始末である。

酔いのためか、心持ち高く感じられる体温。

シャツの布地に押し当てられた手の細さ。

目の前に迫ったうなじの、ほっそりとしていながらも、立ち上るような色香を湛えた様子。

女性が胸に縋ってきたことなど、両手に収まりきらないほどだといふのに、まるで初心な少年のように動揺してしまった自分に、ルーカスは内心で毒づいた。

まったく、どうかしている。

しかし、そんなルーカスの心情などまるで斟酌することなく、腕の中の可憐で厄介な誘惑者は、ほんのり蜜が混ざったような声で呟いた。

「……今日は、香水のにおいが、しませんね……」
「おい」

ルーカスは思わず声を上ずらせる。

それは、この少女にこれまでの女癖の悪さをしつかり把握されていることに焦ったからかもしれないし、あるいは、自身が先ほどまで騎士団の訓練に当たっていたことを、思い出したからかもしれないかった。

女を口説きなれているルーカスは、しかしだからこそ、気になる少女の前で自分が不潔であることなど、耐えがたかったのである。

「よせ、嗅ぐな」

「肌と、お日さまの匂い」

慌てて少女の肩を掴み、遠ざけようとするが、彼女はむしろきゅうつと丸くなって、いっそう強く、ルーカスの胸元に顔を押し付けた。

「この匂い、なんだかとても、あ」

それから、唐突にこてんと寝落ちした。

「よりによってそこで切るな」

安心するのか。

味わい深いのか。

……汗臭いのか。

続くべき言葉を見失ったルーカスが、絶叫しながらエルマを揺さぶってしまったのも、無理からぬことだろう。

が、どれだけ声を掛けても、肩をゆすっても、エルマはぴくりともしない。

長い睫毛で覆われた目をぴたりと閉じ、見ているこちらが叫びたくなるほど気持ちよさそうな表情で、昏々と眠りつつけるだけであった。

「おい！ エルマ！ おまえ、この状況で……！　なんてはた迷惑な……！！！」

がつつとエルマを揺さぶっていたルーカスも、彼女が絶対に眠り倒すウーマンと化してしまったことを悟ると、やがて文尾に悲愴の色をにじませ、天を仰いだ。

「嘘だろう……！！！」

心を許しきつたように、くたりと預けられた体が憎い。

ほっそりとした腰、無防備な首筋、あえかにひらいた唇　そんなものが目の前にあったとしても、この状況で手出しができるはずがないのだから。

やがて、重々しい溜息でなんとか雑念を振り払い、慎重にエルマの身体を引きはがしたルーカスは、そこでふと、傍らにあったバターケーキの包みを目に留めた。

「……………」

思わず、苦虫を噛み潰したような顔になってしまう。

デボラめ、生殺しのような真似を。

「おい、イレーネ」

「……………はっ！ はい……………っ!？」

エルマの「だいすき」攻撃で全SAN値を持っていかれていたイレーネは、その呼びかけでようやく我に返り、ぱっとその場に立ち上がった。

と、視線の先、ルーカスの身に降りかかっている「惨状」を理解し、動揺とも同情ともつかぬ表情を浮かべる。

もはや男女だとか、身分の上下だとかの枠を超え、すっかり戦友のような連帯感を漂わせた二人は、しばし見つめ合ったあと、どちらともなく頷いた。

「そのバターケーキだが」

「ええ、処分しましょう」

「まかり間違っても、食べ残しだとかがエルマの手に渡ることがないように」

「小麦粉のかけら一粒すら残さず焼却処分ですよねえわかります」

じつに阿吽の呼吸と言える。

黙々とルーカスはエルマの身体をソファに横たえ、イレーネはてきぱきとケーキを回収し、両者は「では」&「ただけ言葉を交わしてくるりと背を向けたが

「待て。やはりひと口くらい」

「あ。やはりひと口くらい」

ぴったり同じタイミングで振り向き、図らずも見つめ合う格好と

なった。

甘さを含んだ藍色の瞳と、釣り目がちの翡翠色の瞳が、しばし交錯する。

ふたりは相手の瞳の中に、浅ましさと未練とをにじませた自分自身の姿を認め、怯んだように同時に目を逸らした。

「……ひと口も残らぬよう、処分は頼んだぞ」

「……ええ、ひと口も残らぬよう、処分いたします」

二人がかろうじて、「面倒見のよい男」と「気の合う友人」の域に踏みとどまった、それは瞬間であった。

ルーカスは、ソファで丸くなるエルマに上着を掛けてやりながら、イレーネは、爆弾でも抱えているような警戒態勢で廊下を進みながら、はあっと嘆息する。

奇しくも、ふたりは離れた場所で同時に嘆きの叫びを上げた。

まったくこの娘は、この友人は、
「普通」に酔っぱらうこともできないのか、と。

〈閑話〉 「普通」の酔っぱらい（後書き）

ハッピーエイプリルフル！

そしてこの後活動報告にて、村カルキ先生のキャララフ画を大公開
させていただきます（暑苦しい解説付き）
よろしければ覗いてみてくださいませ。

0・プロローグ

ジジ、と音を立てた蝋燭の上で、赤い火が小さく踊る。
手に持ったナイフの表面にも、ゆらりゆらりと炎の影がくねるのを、少女は飽かず見つめていた。

美しく磨かれた刃の表面に、彼女はそつと指を滑らせてみる。
愛撫するような手つきがそうさせるのか、刃はまるで玩具のように従順で、一筋たりともその白い指を傷つけはしなかった。

満足そうに口の端を持ち上げた少女は、しかし次に、静かに目を伏せる。

彼女は、寝台の脇の棚に伏せてあった書物を取り上げ、その一節を口ずさんだ。

本当はわざわざ読み返す必要もない。もう何度も読んで祈りを捧げてきた聖書だ。

しかし、今の彼女には、それはどうしても必要なものだったのだ。

「…………ごめんね」

少女は小さく呟き、それからゆっくりと周囲を見回した。

少女の手には似つかわしくないような、大ぶりの剣。
禍々しい赤い液体を湛えた小瓶。

そして　深い信仰を体現したかのような、擦りきれた聖書。

快活な少女として目されている彼女の部屋に、これらがひっそり

と紛れているだなんて、世の人は思いもしないだろう。

「……あなたは、驚くかしら」

少女は自嘲気味に唇の端を歪めると、「それでも」と、覚悟を滲ませた口調で独白を続けた。

「それでも、譲れないのよ。……ごめんね、エルマ」

友人の名を口にした彼女は、すっと視線を上げると、きびきびとした動きで荷造りを再開させた。

元より、侍女寮には大した持ち込み物もない。

普段有能すぎる同僚に隠れがちではあるものの、彼女もまた、若手の侍女の中では五本の指に入る能力を持つのだ。作業は、ものの数分で完了した。

聖書や小瓶を鞆の見えにくい場所にしまい込むと、少女は最後に、大ぶりの剣を握りしめる。

それに向かって誓うように、彼女は低く告げた。

「あなたを　引きずり落とす」

普段、猫のような印象を与える緑色の瞳には、今、苛烈さすら感じさせる強い意志が滲んでいた。

0・プロローグ（後書き）

第3部始めました。

2巻発売日（8月4日ですよ！アピール！！）までは、連日20時に投稿できればと思います。

以降は隔日投稿となる予定ですが、見捨てずお付き合いいただけますと幸いです…！

なお、初日の今日は、欲張ってもう1話、この後投稿させていただきます。

1・タロット占い

「信じがたい」

噎せ返るような退廃と優雅の気配。

それらが濃厚に立ち込める、薄暗い居室の片隅で、ひとりの老人が声を震わせた。

「ありえぬ。度しがたい。冒瀆だ。許されない」

肩を覆うほどの白い髪に、グレーの瞳、聖職者然とした佇まい。

往時には大国ルーデンの宰相まで務めた男　クレメンスである。

監獄送りとなり、すっかりこの異様な空間にも馴染みはじめた彼は、この日、とある書物を片手に握りしめ、身をわななかせていた。

「どうしたのオ、【虚飾】。わからない数字があつたら【怠惰】に聞くといいわよ」

「おや、元老害貴族とはいえ、宰相をも務めていた【虚飾】ならば、その程度の帳簿の解読など、造作もないと思っていましたか」

「粉飾でも見つけたのかな、【虚飾】だけに？」

ソファで各々寛ぎながら声を掛けてきたのは、リーゼル、モーガン、ホルストの三名である。

きつ、と音を立てる勢いで振り向いたクレメンスが、

「そのような恥ずかしい二つ名を許した覚えはない！」

と鋭く吠えると、紅茶を嚙っていたホルストは、

「許してクレメンスう」

と舌を出しながら肩をすくめた。

そう。

妻との一件で、ありとあらゆる見栄と社会的権威を剥ぎ取られたクレメンスは、そんな彼を気に入った監獄の面々によって二つ名を与えられ、ハイデマリーの予言したとおり、すっかり彼らの玩具となっているのである。

虚飾　一時は八つ目の大罪に数えられていたことのある、古き悪徳の名だ。

クレメンスは、「監獄の七人」の補佐のような立ち位置を与えられ、その経験と知識を生かし、獄内の経理を管理していた。

ただし、既に本性が露呈しているにも拘わらず、懸命に元宰相の矜持を守ろうとしている姿をいじられながら、である。

「まったく、表の帳簿を見たときには、多少は数字の読める詐欺師がいるものだと思っておったのに、……なんだ、このふざけた『帳簿』は」

「おや、元宰相殿にお褒めの言葉を頂戴するなど、汗顔の至り。表のほうでは、『この世の地獄』にふさわしい帳簿を目指していたつもりですが、専門家の目からも違和感はなかったようでは？」

「ふん、嫌みなほどに隙のない帳簿だったわ。逆に怪しいほどにな。検めるのが若造の税務官ではなく、私だったら、半年も経たずに踏み込み調査をしている。ここに送り込んだ豚面の看守では、到底管理できないだろっ緻密な帳簿である、とな」

吐き捨てるような口調だが、そこには確かに、優れた同業者への称賛のようなものが滲んでいた。

クレメンスはもともと、經理畑出身の宰相。
無能な駒を唾棄するほどに嫌う代わりに、有能な人間には心を許しやすいきらいがあるのだ。

必然、元詐欺師として監獄の経済を掌握していたモーガンとは馬が合うようで、二人は時折、こき下ろし合っているのか褒め合っているのかわからない会話を交わしていた。

モーガンとしてもまた、元貴族という出自は鼻に付くものの、経験に裏打ちされたクレメンスの数字的勘の鋭さについては、一目置いているようだ。

「それほど褒めただけのならば、いったい何に問題が？」
「しらばっくれるな。裏帳簿として渡されたこれ。これはいったいなんなのだ」

クレメンスが再び怒りも露わに掲げてみせたのは、擦りきれた一冊のノートである。

表紙にはやけに堂々と「裏帳簿」の文字と年度が記入され、めくってみれば、ばらばらの筆跡、言語で「10月下旬 晴れ 北1、西3」「南南東に新規 1」など、なんとも解釈に悩む文言が散らばっている。

のみならず、時折紙面には「腹減った」「美髪クリーム（蜂蜜ver）コンセプト設計 5月中」「研磨剤（箱入り・ベルンシユタイン商会）前のパッケージのもの」など、明らかに帳簿に記す内容ではない単語までもが現れた。

「これは日記か？ 業務メモか？ 買い物リストか？ だいたい、単位はなんなのだ、これは収入なのか、支出なのか？ 支出ならば項目は方角ではなく品名で書け、分類しろ、ルーデン語に統一しろ、旅の宿に置かれた感想ノートではあるまいし、回し書きするな！」

あまりにごもつともな指摘に、一同は肩をすくめる。
と、そのとき、

「チエックメイト」

それまで沈黙を守っていた美貌の女性が、甘く密やかな声を上げた。

ゆるく波打つ銀髪に、物憂げな藍色の瞳。

麗しの元娼婦、ハイデマリーだ。

彼女は、いきり立つクレメンスをなにげなくやり過すと、目の前で頭を抱えるイザークに向かって、そっと笑みをこぼした。

「もう、【暴食】ったら。そんなにすぐに負けたのでは、つまらなくってよ」

「俺がチエスに、弱いと、知っていて、誘ったのは、そちらのくせに……」

「だって、そういう気分だったのだから」

悪びれもせずにそう答えると、監獄の女王は、駒の佇む盤面をじっと見つめた。

「北5、東2。時期は……そうねえ、来月の終わりごろかしら。きつと、とても雨の強い日よ」

「北5、東2、11月末、雨だってさ。ほら、【虚飾】、書いとい

「てよ」
「なんだと？」

会話に取り残されたクレメンスが聞き返すと、ホルストは「だから」と溜息をつく。

彼は、出来の悪い生徒に説明するような口調で、ゆっくりと続けた。

「あなたが『これはいつたいなんだ』っていうから、親切にも【性欲】が教えてくれてるんでしょ。裏帳簿に散らばる言葉の意味をさ」
「……………」

クレメンスは怪訝そうに眉を寄せる。

教えるもなにも、見たところ、ハイデマリーはチエックメイトを決めた駒の位置を、東西南北に置き換えて伝えているだけだ。

いや、それにしても日時やら気候といった、余計な情報も加わっているが、いつたいそれがなんだというのか。

「ゲームの記録か？」
「記録っていうか、予言かな」
「なにを」

クレメンスが追及しようとしたとき、がちやりと扉が開いて、もう一人の「大罪人」が入ってきた。

がっしりとした体躯に、精悍な顔立ち。
くせのある豊かな黒髪と、深みのある碧い双眸が印象的な、元勇者。

ギルベルトである。

彼はその片方の手に、二通の封書を持っていた。

「朗報だ。以前、フェリクス新王からせしめた示談金　もとい、下賜された慰労金だが、北方の金脈と西方の銀脈で運用していたら、どちらも新たな鉱脈を発掘したそうだ。北方で一つ、西方で三つ、な」

「あ、北1、西3のやつか」

「ご名答」

ギルベルトが静かに唇の端を持ち上げると、一同がひゅーと歓声を上げる。

一番近くにいたリーゼルが、クレメンスからひよいと裏帳簿を取り上げると、「10月下旬　晴れ　北1、西3」と書かれた部分の「下旬」を棒線で消し、「25日」と書き加えた。

「うーん、金の唸る音が聞こえてきそうだわねえ」

ワードローブを一新しようかしら、と囁くリーゼルの前で、クレメンスは呆然とする。

「いったい、これはなんだ。」

脳が理解を拒否していると、それをどう受け止めたのか、ホルストが呆れ顔で説明してくれた。

「だからさ、僕たちと、僕たちの大事なお姫様が満足する環境を維持するためには、莫大な費用が必要なわけ。だからこうして、【色欲】のアドバイスに従って、ときどき資金を運用しているのさ。利率は、ざっと……いくらかな、計算するのがあほらしいくらい。毎

日、ばかみたいに金が転がり込んでくる」

記録しようとするそばから増えますしね、と、静かに頷くのはモ
ーガンだ。

そのほか、この場の誰も、そんな大量の金が延々と増え続けるこ
とについて、なんの疑問も覚えていないようだった。

「いったい……なにを……」

クレメンスは元宰相だ。

十の支出に対して、一の収入を実現するのがどれほど困難なこと
かは、身をもって知っている。

それを、「毎日」「ばかみたいに」金が転がり込んでくるなどと。

「歴戦の財務官ですら、資金を五年連続で微増できれば褒章ものだ。
それを、利率計算があらゆるくらい、だと……？」

「うん、まあ。【色欲】の言うとおり金撒いて来れば、あとは
勝手に、ばんばん増えてくるんだもんねえ。なんか把握しがいがな
いっていつか」

「昔は【暴食】が拳で金脈を掘って、【貪欲】が錬金術で石を金に
して、みたいなこともしてたけど、あのときのほうが金儲けの醍醐
味はあつたわよねえ」

「ねー」

ホルストとリーゼルがのほほんと会話しているが、それすらも耳
に入らない。

あまりにありえない事態に、クレメンスはただ、目の前の光景を
凝視するしかなかった。

(ありえない、といえば)

視線はふと、惹きつけられるようにしてある人物へと向かう。

贅を凝らした居室の最奥。

ソファにゆったりと背をもたせかけ、今日もしどけない恰好で、夫となったギルベルトの肩に頬を預ける、麗しの娼婦。

彼女はいつたい、何者なのか。

(過ぎた美貌、関心を強制的に惹きつけるような瞳や声。そして…まるで未来や真実を見通すかのような、振舞い)

思えばクレメンスは、初めて彼女に会った時から、そのほっそりとした肢体から滲み出る異様な迫力を感じ取っていたのだ。

それに、彼女が時折発揮する、まるで占い師のような力。

(は……。動揺しすぎだ。真実を見通すなど、本来は聖者に数えられてもおかしくない神聖な力。娼婦に備わっているというのなら、せいぜい人を騙すための、怪しげな術に違いない)

いや。

ハイデマリーの濡れたような藍色の瞳を見て、ふとクレメンスは思った。

可能性ならもうひとつ。

邪なる力で人間の魂を翻弄する、魔族。

「どうなさったの、クレメンス？」

まるで心を読んだかのようなタイミングで話しかけられ、クレメンスははっと息を呑んだ。

「わたくしの勘の鋭さに、感動で言葉も出ないかしら？」

「勘……」

「ええ。女ですもの」

異様なほどの能力を、勘の一言で片づける。

クレメンスが何も言えずに立ち尽くしていると、ハイデマリーは繊細な鎖骨を見せつけるように、軽く肩をすくめた。

「そうね。わたくし、占いの類は、少しばかり得意なの」

「『占い』……」

「ええ。いかにも、女らしい遊びでしょう？ 殿方には退屈な話題かしら」

むしろ自身が退屈だとしてもいうように、彼女は小さなあくびを漏らすと、「失礼」といたずらっぽく微笑んだ。

「チェスにも飽きたわ。このままでは寝てしまいそう。ねえ、クレメンス。わたくしたち、新しいゲームを始めるべきだわ」

「新しいゲーム……？」

「そう」

彼女が頷いた次の瞬間には、その白い手に、カードの束が握られていた。

「タロット、つてご存知かしら」

「今そのカードの束はどこから出てきた!？」

「谷間よ」

ハイデマリーはクレメンスの問いをしれっと受け流すと、返事も

待たずにテーブルにカードを広げはじめた。

「そうねえ。あなたはカードゲームは苦手のようなだから、競い合うのではなく、占いにしましょう。占うのはなにがいいかしら。あなたの未来？ わたくしたちの過去？ それとも、愛しいあの子の今現在……」

愚者。

魔術師。

教皇に悪魔、星、太陽。

美しく金彩の施された華美なカードが、次々と並べられてゆく。

古びてはいるが、まるで一枚一枚が高価な絵画のようだ。

王宮の秘蔵品と言われても、なんら違和感はない。

まるで一介の娼婦が国宝並みの宝石を持っているようなものだが、それもまた、この空間では日常茶飯事だ。

ハイデマリはカードを切り、五枚のカードを選び出すと、十字の形でテーブルに伏せる。

そうして、おもむろに顔を上げると、神聖さすら感じさせる静かな声で問うた。

「さあ。どのカードをめくりましょうか」

2. 「普通」のお返し(1)

法国、アウレリア。

大陸中で信仰されるアウル教の発祥の地とされる国である。

その領土は大国ルーデンの都市ひとつ分ほどしかなく、人口にも戦力にも乏しい。

三十年ほど前に、ルーデンにあっさりと属国化させられてしまったこの国は、しかしその強かな観光、文化戦略で、宗教大国の地位を不動のものにしていた。

芸術の国ヤーデルードと比肩する、宗教の国アウレリア。

この国の、洗練された教会建築群と、抜きん出た識字率、聖書の発行によって磨かれた印刷技術は、宗教人だけでなく世の中一般の群集をも惹き付けるのだ。

さて、一年を通して常に観光客の人並みが絶えぬこの国の、その中心部に位置するアウレリア国立学院には、今、ひととき大きな賑わいが押し寄せていた。

白を基調とした堂々たる校舎、講堂、円形闘技場には、容貌も国籍もさまざまな人々で溢れている。

校門から闘技場まで続く広大な庭には、神を称える祈祷布と、教会の威信を示す旗とが延々と並び、ついでに、人々の胃を満たすための屋台までもがひしめき合っていた。

まさしく、祭り。

酒を片手に観客席へと向かう人々は、これより三日間にわたり繰り広げられる武闘会を楽しみに、早くも酔いはじめている。

一方で、闘技場の内側　舞台の外周を等間隔で区切った控え室には、ぴりりと刺すような緊張感が漂っていた。

手狭な控え室で出番を待っているのは、いずれもアウル教の特徴たる白の制服をまとった学生たちである。

それが二、三人、多いところでは五名が一室となつて、出番を待っている。

椅子に腰掛けて、じつと虚空を睨む者。

そわそわと落ち着きなく控え室を歩き回る者。

仕切りの壁から身を乗り出して、隣の控え室の学生に話しかける者。

過ごし方は様々だが、彼らには共通項があつた。

それは、皆、アウレリア国立学院の学生であるということ。

そして　このたび、三十年に一度執り行われる武闘会、「聖鼎杯」に参加する資格を勝ち取った、優れた聖力の保持者ということである。

「なあ、聞いたか？　今回の聖鼎杯には、アウレリア国外からの参加者がいるんだってさ」

今、その控え室で、ひそひそと噂話に花を咲かせる者たちがあつた。

最初に切り出したのは、短く刈った黒髪と、やんちゃそうに日焼

けた肌が印象的な少年だ。

下町の訛りを残した話し方をする彼は、名をジーノと言う。

相棒である大ぶりの長剣を軽々と担ぐ姿から、彼が聖鼎杯のうち、「聖剣士」部門の候補者であることが知れた。

「ふん」

それに答えたのは、冷やかな銀髪と碧眼が目立つ、貴族的な佇まいの少年だ。

名を、ラウル・パウアリーニ。

アウレリア国が擁する下級貴族の三男で、学院内では「氷の聖術師」の異名を持ち、枢機卿たちを上回る聖力を持つと噂される人物である。

もちろん彼は、聖鼎杯のうち「聖術師」部門の候補者であった。

「そんなの珍しいことではないさ。聖鼎杯で優勝して、栄えある『聖なる三名』^{トリニテート}になれば、本人は一生安泰の教会住まい。家は一代限りとはいえ司教爵、故郷は多額の褒章に加え、地名に聖人の名まで冠される。この時期、自領からトリニテートを輩出するためだけに、どの国もばかみたいに我が子を学院^{うち}に送り込んでくるだろう。留学生だと言い張って」

だが、そんな彼の冷静な反論を、ジーノは遮るようにして封じた。

「いやいやいや！ それとはちょっと次元が違うんだってば！ だいたいそういう留学生^{うち}って、アウレリアみたいな属国の権威ですら借りたといっていう弱小国だろ？ それが今回はなんと、ルーデン！ あの大国にして宗主国ルーデンから、トリニテート入りを目指して学生が送り込まれてるんだって」

「ルーデンから？」

ラウルは驚いたように目を見開くと、次いで不機嫌そうに口元を歪めた。

「……強欲なルーデンは、アウレリア宗教界の象徴まで手中に収める気か」

「そういうこと。聞いた話では、送り込まれてくるのは女だってさ。なんか、元漁師だとか、天才外科医だとか、鬼オダンサーだとか凄腕エステティシャンだとか天使的美少女だとか、素性についての噂は信憑性ゼロなんだが、とりあえず女ってことは確かだ」

ジーノはしたり顔で頷き、それから控え室の奥を振り返った。

「……ってことは、聖女候補かもな、クロエ？」

手狭な控え室の最奥、舞台からは暗がりとなって見えない位置には、ひとりの少女が腰かけていた。

小さな顔に細い手足。

肌は透き通るように白く、肩まで伸ばした髪は、豊かな大地を思わせる亜麻色。

幼く整った顔の、そのこぼれそうなほど大きな瞳は、深い森のような緑だった。

「え……、あ、はい……」

クロエ、と呼ばれた少女は、突然振られた話題におどおどと声を上げる。

彼女は、自信なさげに、

「だとしたら……ええと、私のライバル……になるんでしょうか？」
と呟いた。

「なるんでしょうか、じゃねえよ、確実にライバルだろ」

「そうとも。なんといつてもおまえは、当代一の育成術の使い手
聖女の筆頭候補なのだから」

「いえ……」

ジーノとラウルが口々に言ったが、クロエはますます身を小さく
するだけだった。

「そんなことは。私のは単に、植物と相性がいいというだけで……。
ジーノくんやラウルくんのほうこそ、烈火の聖剣士とか、氷の聖
術師とか……すでにトリニート入りしているような二つ名をお
持ちではありませんか」

そう。

彼ら三人は、アウレリア国立学院の成績優秀者なのである。

次世代の宗教人材を育成することを目的に建てられたこの学院は、
その威信をかけて、聖女・聖剣士・聖術師となりえる学生の発掘、
育成を行っている。

性別・年齢・出自すら不問、聖力さえあれば、よちよち歩きの農
夫の赤子でも、よぼよぼ歩きのスラムの老人でも、等しく入学が許
される。もつとも、学院は一般的な教育機関としての機能も持ち
合わせているため、必然学生は十五から十八歳くらいまでの少年少
女が多かったが。

そして、学院側の粘り強い勧誘の結果、特別奨学生として学院の門をくぐったのが、商家の妾の子として不遇の生活を強いられていたクロエ・コンテストと、下町で苦しい生活を送っていたジーノ・マージ、そして、三男として爵位を継ぐ当てもなく、他国に身売りされようとしていたラウル・パヴァリーニだったのだ。

それぞれ、聖女、聖剣士、聖術師の筆頭候補生ということである。

トリニテートは狭き門。

誰にでも入学の許される学院の頂点にあるからこそ、誰もが強くその身を焦がして、トリニテート入りを望む。

必然、奨学生としてなにかと優遇される三人に対し、学生たちの風当たりは強く、クロエたちは何とはなしに三人で行動することが多かった。

「私には、こういった舞台でうまく術を発動できるほどの能力があるとは思えません……。ライバル視するというのは、私よりも、……その、この学院の皆さんのほうが、その方に注目しているのではないでしょうか」

「クロエの自己評価はさて置くとして、ま、この学院のやつらが目の敵にしてそう、ってのはその通りだな」

「ああ。そういえば、学生の何人かが、留学生用の控え室に夜分こっそり出入りしているのを見かけたが……。あれは、そのルーデン女とやらに嫌がらせを仕掛けるつもりだったのか。侵入者は何組かいたように思うが、そのルーデン女は人気者だな」

「まじか」

思いがけない情報に、ジーノがひゅーと口笛を鳴らす。

彼とて人並みの正義感を持ち合わせているが、それは、いけすか

ない宗主国の女に向けられるものではないのだ。

アウレリア国民の一人としては、やはり、彼らの最も権威ある崇高な座には、自国の人間が腰かけるべきだと、そう思うので。

ただクロエだけは、その穏やかな性格からか、「嫌がらせ」の単語に、そつと目を伏せた。

「……あまり、醜い争いにならないといいですけど」

「そうかあ？ 空気読まずに聖鼎杯に乱入してくる外国人のことなんて、心配する必要なくね？」

「その通りだな。出世欲にぎらついた学院の学生どもと、身を弁えぬルーデン女。両者が潰し合ってくれるのを、俺たちは高みの見物としゃれこもっ」

ジーノとラウルは、冷徹にそう結論付けて、視線を闘技場へと向ける。

聖鼎杯、初日。

開会式が行われるだけの、実質的には前日祭のようなものだが、同時に、「留学生」を含むすべての候補生たちが一堂に会する、初めての機会でもあった。

噂のルーデン女とやらも、この闘技場のどこかの控え室で開会式を待っているはずだ。

ジーノたちは、その姿を探していたのだったが、留学生用の控え室 最も奥まった場所にある に目を向けて、首を傾げた。

「あれ？ まだ来てない？」

「いや。今まさに入場中なのだろう」

成績優秀者として、闘技場入り口のほど近くに通された三人なので、実は先ほどから、彼らの前を通過して学生たちが続々と入場してきているのだ。

多くは、三人を睨みつけるようにして己の控え室に向かつており、居室に落ち着いた後も、剣呑な雰囲気を醸し出している。

彼らのライバル心は全方向に発揮されるものなので、入場が遅ければ遅いほど、控え室前の通路は悪意の花道と化すだろう。

ジーノはものの興味で、舞台の外周、即ち控え室前の通路を、ぐるりと見回してみた。

「うわー、見るよ、先に控え室に着いたやつら、攻撃する気満々だぜ。生卵に、生ごみに、虫に……詠唱の準備をしてるやつもいるな。入場門を睨みつけて……あれ全部、ターゲットはルーデンの留学生ってことだろ？」

「くだらない嫌がらせだ」

「ま、気持ちはわからんでもねえけど」

肩をすくめるジーノの声には、いくらかの毒が含まれている。

ルーデンの威信を背負ってこの地にやって来るくらいなのだから、きっとその留学生とやらは、それなりの身分の持ち主なのだろう。

慈愛を掲げる学院であつてすら、日々下町出身の出自を蔑まれるジーノとしては、それだけで既に鼻持ちならないのだ。

ラウルが例外的に友誼を結べただけで、普通貴族の、それも宗主国の人間などというのは、まず間違いない高慢な人間に違いないのだから。

「はん。その留学生とやら、無事に控え室に入ることすらできねんじゃないね？」

「かもな。まあ、大国ルーデンが送り込んでくるくらいなのだから、多少回避するくらいの実力はあるのかもしれんが」

「実力ねえ。元漁師で、外科医で、ダンサーでエステティシャンな美少女の誇る実力ってなんだよ　お、俺好みの金髪猫目系メイド発見。どっかの候補生の侍従かなー」

学生の中には、貴族や富豪の子息など身分の高い者も多くいるので、学院内では使用人の立ち入りが許されている。

そして、今日この場合は、日頃寮内に閉じこもっている使用人たちを一斉にチェックすることのできる、またとないチャンスだ。

ジーノは金髪美少女メイドに笑いかけて手を振ったが、目が合った彼女は、やけに驚いたようにこちらを凝視したので、一瞬ジーノは「脈ありか」と目を輝かせた。

が、その一瞬後には、彼女はさっと顔を背けてしまったので、ジーノはがくりと肩を落とす。

その後も一通り、声を掛けられそうな使用人たちをチェックし、それも終わってしまうと、やれやれと息を吐いた。

「なんだよ、一向に俺たちの前を通らないじゃんか、ルーデン女」

「少なくとも天使的美少女の噂は嘘のようだな」

「あゝ」

とそのとき、クロエが遠慮がちに声を上げた。

「もしかして、なんですけど……。あの控え室に　もう入場済みなのではないですか？」

「え？」

クロエの細い指の指し示す先を辿り、二人は目を見開く。

先ほど見たときには確かに空室であった、留学生用区域。

その控え室に、いつの間にか人影が見えていた。

「いつの間に!？」

控え室に向かうには、自分たちの前の通路を通るしかない。

ジーノたちはたしかにずっと、目の前の通路を見つめていたはずなのに。

「……………!？」

三人は、困惑の視線を交わした。

3・「普通」のお返し(2)

「はー、緊張した！　ここが聖地アウレリアの中枢にして……あれが、噂に名高いトリニテート筆頭候補生なのね。生で見られるだなんて！」

アウレリア国立学院の誇る円形闘技場、その控え室の一室に落ち着いたイレーネは、簡素な椅子にどさりと腰を下ろしながら、感嘆の声を上げた。

「引き換え、エルマ。あなたのその、小動こどうもしない泰然たいぜんの構え！　というか、泰然を通り越して、気配がなかったわよね？　一緒に歩いているはずの私すら、ときどき姿を見失うほどだなんて、もはや隠密の域だわ」

イレーネが見上げた先には、エルマがひっそりと佇んでいた。いつもの王城規定のメイド服ではなく、ほかの控え室にいる学生たちと同じ、白を基調とした制服をまとっている。

お団子頭に分厚い眼鏡はそのまま　つまり、冴えない印象はそのままに維持した、学生服姿のエルマは、「はて」と首を傾げた。

「私はあくまで普通に気配を殺した程度ですが。そもそも、私は日ごろそんなにも目立った気配を放出しておりますでしょうか？」

「いえ、気配っていつかね？　言動かね？」

イレーネは少しばかり遠い目になる。

たしかに王城でのエルマは、常に冴えない姿に身をやつし、佇ま

いもひっそりとしている。

しかしながら毎日のように、まぐるを解体したり反射炉を作ったり行き交う人々を誘惑したりと、なにかしらぶっ飛んだ騒動を引き起こすので、「エルマ、それ即ち大騒動」くらいの認識なのである。

イレーネはやれやれと溜息をついた。

「ま、いいわ。聖鼎杯本番　トリニテート入りを懸けた武闘会が始まれば、いやでもあなたは目立つことになるはずだもの。『任務』が始まりもしないうちから目立つ真似をして、不要な敵意を買っことにならずに済んで、本当にほっとしたわ」

嘆息に混ざって飛び出した、不穏な単語　「任務」。

そう。

彼女たちは、性懲りもせずに臣下をこき使うフェリクスによって、新たな任務を命じられていたのである。

「まったく、陛下ときたら……。エルマや殿下、そして私のことを、私兵かなにかと勘違いしていらっしやるのではないかしら。収穫祭から帰ってきたと思ったら、今度はアウレリア国へ向かえ？　私の緻密な新刊購入スケジュールは崩れっぱなしよ、あの腹黒狐王め！　労働基準法違反だわ！　特別手当を要求する！　私はそれで新刊を買い増し、作者様への愛を示すのよ！」

「……………？　なんだかイレーネ、いつもに増して感情の起伏が激しいというか、…………興奮気味ではありませんか？」

きゃんきゃん吠えていると、微表情を読んだのかエルマが不思議そうに首を傾げる。

イレーネはわずかに目を見開いたが、次の瞬間にはむすっとエル

マを見つめ返し、一層の早口で告げた。

「そんなことないわよ。私は至って通常運転よ？ 腹黒狐はさすがに言いすぎたかもしれないけれど、仕方ないじゃない。最大の趣味と完璧な計画を妨害されたら、人間誰だって感情が揺らぐわよ」

「いえ、その揺らぎ方がどうも」

「それに、感情の起伏がどうのと言うなら、それはルーカス殿下の方だわ。あんなに怒りをあらわにした殿下、初めて見たもの。ちょっと、微チャラキヤラの認識が揺らぐくらいの険しい表情だったわ。陛下から任務を言い渡された後の殿下を、エルマ、あなた見ていて？」

エルマの指摘を躲すように、イレーネははあつと息を吐く。

質問にはすべて答えるのが基本姿勢のエルマは、素直に疑問を取り下げ、「いえ」と首を振った。

「陛下の居室を辞してからずっと、通常業務に当たっておりますので。険しいお顔……今回の任務が、そんなにも不快だったのでしょうか？」

「そうでしょうね。あるいは、私たちが退室した後も、しばらく陛下とお話されていたようだから、そこでなにか言われたのではないかしら」

イレーネは当日のことを思い出したのか、猫のような瞳を剣呑に細める。

「だいたい陛下は、部下を人ではなく、駒のようにしか思っていないんじゃないのよ」

そうして彼女は、二日前 フェリクスに新たなる任務を言い渡

された日のことを振り返った。

「聖鼎杯で優勝して『トリニテート聖なる三者』の座を獲ってこい？」

その日もフェリクスの居室に呼び出された三人は、唐突に告げられた命に、揃って声を上げた。

「お待ちください。聖鼎杯というのは、たしかアウレリア国が教会の威信をかけて最高の宗教人材を決めるための催しでは？」

胡乱な眼差しで切り出したのは、ルーカスである。

「国立学院の学生ならば誰でも参加できる、という建前とはいえ、トリニテートはアウレリア国中の憧れであり目標であるはず。それを、ルーデン余所者の俺が横槍を入れては、アウレリアのひいては、宗教界界隈の不興を買うのでは？」

冷静な指摘を寄越した異母弟に、フェリクスはにこやかに答えた。

「あはは、大丈夫大丈夫。ぜひルーデンから横槍を入れてほしいって、そう頼んできたのは当のアウレリアの方だし。ついでに言えば、今回の任務の主演 聖鼎杯で活躍してほしいのは、ルーカス、君じゃなくてエルマのほうね」

「……………!？」

告げられた内容に、三人は瞠目した。

フェリクスが説明するには、こういうことである。

アウル教の聖地アウレリア法国では、教皇に次ぐ七人の枢機卿が実権を握っている。

慈愛と調和を掲げる枢機卿たちは、しかしながら実際のところ、大国ルーデンと協調して経済発展すべしという「親ルーデン派」と、属国という汚辱を脱してアウレリアの宗教的権威を取り戻すべしという「反ルーデン派」とに分かれ、日々争いを繰り返しているのだという。

三十年に一度執り行われる「聖鼎杯」、並びに、そこで決められる三部門の優勝者、すなわちトリニテートは、本来は宗教的に神聖極まる存在のはずだった。

しかし、前回の聖鼎杯で、聖女に内定していた学生が病死してしまった結果、トリニテートが成立せず、直後にルーデンに征服されたことで、聖鼎杯それ自体の宗教的価値は大きく毀損。

今ではすっかり 少なくとも運営側の枢機卿たちにとっては自分たちの権力闘争の「代理戦争」に過ぎなくなってしまったのだという。

つまり、それぞれが目を掛けている学生を、教皇に並ぶ権威を誇るトリニテートに押し上げることで、自身の権力を確保しようというのである。

そんなわけで枢機卿たちは、下町や他国にも探索の手を広げ、優れた聖力を持つ人材を学院に呼び込んできた。

が、目下、学院内でトリニテート筆頭候補と目されているのは、三人とも反ルーデン派の枢機卿が集めた人材。

ガイドというこの枢機卿は、自身も前回の聖剣士に内定していた

が、聖女の欠落でそれが叶わなかった経緯を持つ。

積年の夢を叶え、自身の息のかかった学生たちを、なんとしてもトリニテートに決めようと意気込んでいるものと思われた。

そこに強い危機感を覚えたのが、チエルソという、親ルーデン派の枢機卿だ。

トリニテートのうち、三人全員がガイドの手の者となれば、親ルーデン派の凋落は必至。

彼としてはなんとしても、トリニテートのうち一人でも、親ルーデン派の学生を送り込む必要があった。

とはいえ、彼らの「手持ち」の学生では、ガイド子飼いの三人の実力には、遠く及ばない。

この際、聖力を持ち合わせていなくとも構わない。
聖鼎杯という名の武闘会に、三人を圧倒する武技を持ち合わせる人物を送り込みたい　と、そう、フェリクスのもとに嘆願書を寄越してきたのである。

もちろんルーデンからすれば、属国は友好派に傾いているほうが望ましい。

そこでフェリクスは、教会の収蔵する美術品のいくつかと引き換えに、あっさり嘆願を呑んでみせたと、そういうわけである。

「とはいえ、王弟を送り込むのはさすがにあからさまだし、そのグイド卿門下の三人っていうのがみんな十五くらいの少年少女だっていうから、まあ、釣り合っているのかねえ？　そういうのを考えてさー」

フェリクスは相変わらず、人を苛立たせるような間延びした口調

で続けた。

「チエルソ卿は、聖力が無くてもごまかせる『聖剣士』部門くらいしか期待してないっほいけどさ。どうせなら、エルマを送り込んでやえよ、うっかりひとりで三部門制覇できたりなんかして、お得かになっていう」

とはいえ、ほかのトラブルは引き起こしそうだから、ルーカスとイレーネは、そのフォローに回ってね。

そう告げて、フェリクスはエルマに向かって微笑んでみせたのである。

「エルマ、王命を遂行するのは至って『普通』のことだ。フレンツエルで流布してしまった『至高エルマエルの存在』とかいう汚名エルマエルを返上するチャンスだよ。学生たちの頂点を、獲ってきてね」

と。

やり取りを思い返したイレーネは、改めてエルマに向かって眉を寄せた。

「というか、エルマったらまだ『普通』にこだわる気？ 相変わらず、そこまですて帰りたいの？ いい加減そろそろ、自分に『普通』の才能はないんじゃないかなー、って気付きはじめていい頃よ。もう」

「諦めたらそこで試合終了です。収穫祭での友人紹介はほかの形で叶いましたが、だからと言って最初の目標を手放すのは違うかと」

エルマが淡々と答えると、イレーネは軽く鼻を鳴らした。

「ほんとに、もう。妙な方向に根性を発揮するんだから」

「それを言うなら、私が陛下になにかを命じられるたびに、一緒に巻き込まれてくれるイレーネの根性も相当なものです」

実際のところ、能力の図抜けているエルマと異なり、イレーネは単に、エルマと親しいからという理由で巻き添えをくらっているだけだ。

いつでもエルマを見放すことは可能なのに、なにかと付いて回って、エルマの「普通道」を見守ってくれている。

静かに、しかし感謝を込めてエルマが告げると、イレーネは一瞬押し黙り、そっぽを向いた。

「……別に、私だって命じられているわけだし、役得だって多いから、巻き込まれてあげているだけだわ」

「役得……?」

「巻き込まれるといえば、殿下はどうされているのかしら? 王弟である殿下の介入がばれないように、変装した姿で落ち合う手筈になっただけだ」

エルマが不思議そうに首を傾げると、イレーネはそれを遮るように椅子から立ち上がり、控え室の外へと身を乗り出した。

と、その動きでようやくイレーネたちの入室に気付いたのか、学

院の用務員と見られる男がこちらへと近付いてくる。

みすばらしい鼠色のローブに、陰気臭く顔を覆ったフード。

さらに厚い眼鏡と長い前髪で顔を隠し、全体的に冴えない印象をしたその人物は、「本日から最終日までのスケジュールを示した資料です」とぼそぼそ告げて、紙の束をイレーネに手渡した。

「あら、ありがとう。あなたがこの部屋付きの使用人ということなのね？」

「はあ……」

「そう。なら早速で悪いのだけど、控え室の水甕みずがめの水を補充してください。あと、ウエルカムフルーツをとほ言わないから、なにか開会式までに摘まむものが欲しいわ。二人分。それから、旅の埃を落とすための手拭いでしょ、そうだ、双眼鏡も貸してただけかしら、あと」

雑事を仕切りなれた侍女の性さがで、イレーネは矢継ぎ早に指示を飛ばす。

つらつらと捲し立てるのに対し、相手が無反応で立ち尽くしているのに気付き、彼女は少々むっとした。

ついでこの感覚、前にもどこかで抱いたことがあると、ふと思う。

「……メモに書いて渡しましょうか？ ああ、でもあなた、字が読めて？」

冴えない眼鏡。表情の見えない相手。

自分より格下の人間のはずなのに、どこか人の上に立つ人物のような気品と迫力を滲ませている。

「いいわ、もう一度だけ言って差し上げる。これが最後だから、一度で覚えてちょうだい」

脅すように告げながら、イレーネは気付いた。

そつだ、彼はエルマと似ているのだ。

出会ったばかりの頃の、冴えなくて真意の見えない彼女と。

まるで兄妹か、さもなれば。

「言つわよ？　まず……。。………」

エルマが、変装術を施した相手であるかのように。

「で……　っ!？」

殿下、の叫びは、瞬時に手を伸ばしてきた相手によって塞がれた。

4・「普通」のお返し(3)

「……………っ!? ……………っ! ……………ふす!」

「驚くのはわかるが、叫ぶな」

「あ、ひとつ訂正しておきますと、最後のは驚きの叫びに紛れさせた爆笑ですわ」

厚底眼鏡を掛け、エルマとの類似感を溢れさせた用務員 ルーカスが窘めると、イレーネがいらぬことを補足し、鮮やかに心を抉った。

「……………爆笑……………。そんなにこの姿は冴えないか……………」

「冴えないか冴えるかと言えば、それは振り切って冴えないですけど、いえあの、なんでしょうね。色男の最後の一線を軽やかに踏み越えたというか、……………ええっと、そう、エルマとのペアルック感があつていいと思います!」

「……………エルマが施した変装術だからな」

なんとか絞り出したフォローの言葉にも、ルーカスはどんよりと返すだけだ。

イレーネは慌てて振り返り、エルマからもなにか言葉を、と促しかけたが、そのエルマ自身が珍しくぼんやりと佇んでいるのに気付いき、首を傾げた。

「エルマ?」

「あ、はい」

呼びかければ、いつものように淡々とした返事が寄越される。

気のせいかとも思ったが、イレーネはじつくりとエルマを検分し、どこか元気がなさそうなのを見て取った。

「どうしたの、エルマ？ さすがに疲れて？ 心なしか、眼鏡がいつもより曇っているような……」

「装身具の輝きで健康状態を判別するのはおやめくださいますか」

エルマは真顔でもっともな突っ込みを返したが、それから少しだけ首を振る。

「どうも、先ほどから頭がぼんやりするのです。風邪を引いてしまったのかもしれない」

「あら、珍しいこと。このアウレリア行きで、数日慌ただしかったせいかしら。あ、私、風邪に効くお茶持ってきてるわよ」

眉を顰めながらも、イレーネはエルマを休ませてやろうと、慌てて荷物を解いて茶道具を引っ張り出した。

「ふふ、風邪を引いて世話を焼かれるだなんて、あなたにもまだ新米らしいところが」

「あ、お気遣いなく」

が、それよりも早くエルマ本人が、どこからともなく、すちゃっと湯気の立ったティーカップを取り出す。

「そんなこともあるうかと、私も用意しておりましたので」

「いつどこから用意されたのよ、そのカップは！」

「鞆からです」

あまつさえ、彼女はイレーネに小瓶を添えて、それを差し出した。

「ちなみに、こちらは鎮静作用のある花を煮詰めたシロップです。紅茶と頂くと美味なうえに、鎮静作用が速やかに広がるため、今のイレーネにもうってつけかと」

「だからその小瓶、いつどこから　　って、うつま！　香り高っ！」

世話を焼くはずが、逆に焼かれているという謎展開である。

「……ほんとに、あなたって隙がないんだから……」

イレーネは小さく呟いたが、それは紅茶から立ち上る湯気に紛れてしまう。

微妙な顔つきで紅茶を啜っていると、代わりにルーカスが思わし気に尋ねた。

「エルマ。それは本当に風邪か？　　なにか……ほかの心当たりはないのか？」

「風邪以外にですか？　　はて……」

エルマは、さも思い当たらないというように顎に手を当てる。

「昨日は、就寝前に小説を三十冊ほど読み、夜明けまで工作をしただけでぐっすり寝たので、疲労ということでもないでしょうし……」

「間違いなくそれでしょ!？」

イレーネは物思いも吹き飛ばし、鋭く突っ込んだ。

「あなた、この慌ただしい時になにを遊んでいたのよ!？」

「え、遊びではなく、むしろアウレリア行きに備えていたのですが」

……」

エルマはきよとんとしながり返す。

「いったい乱読や徹夜工作のなにが旅支度に繋がるのかと問いただせば、彼女は「よくぞお聞きくださいました」と眼鏡のブリッジを押し上げた。

「こたびの任務では、僭越ながら私が作戦をリードするようにとの命を賜りましたので、学院潜入時によくある流れをシミュレーションし、準備を整えていたのです」

「シミュレーション……？」

すでに嫌な予感がする。

イレーネとルーカスは顔を見合わせ、それからルーカスの方が慎重に切り出した。

「ちなみに聞くが、その『学院潜入時によくある流れ』とはどのようなものだ……？」

エルマは「はい」と頷き、眼鏡を光らせた。

「まず潜入者は、究極に冴えない、または目立たない姿で学院に入学。エリート系ライバルから『ふん、Bランクめ』と嫌がらせを受けます。ところが真の實力はSSSランク。『やれやれ、目立ちたくなかないのになあ』と華麗に嘯きながら、武闘会ではバツバツと派手な立ち回りでライバルたちをなぎ倒し、ついでにアクシデントで現れた伝説の古龍なんかも倒します。なおその際には、銀髪オッドアイの姿に覚醒。奇しくも聖鼎杯最終日のその日に、黒幕だった父親との因縁の対決を乗り越え、優勝と英雄の座を勝ち取り

ます」

「おまえ今度は、誰からの、なんの書物を参考にした　！？」

「え？ マルク殿の貸してくださった青年向け小説ですが。学院に潜入する際の『王道』とは何かを、学校生活経験のあるマルク殿に相談したところ、誰もが一度はシミュレーションする流れがこれだから、と快く貸していただいたのです」

「マルク……！　あいつ……！」

ルーカスとイレネは、小姓マルクがそつと心の中やまい二病を飼っていることを察し、天を仰いだ。

「準備期間は短かったものの、決め台詞の候補や、アクシデンタリに学院を襲ってくれそうな古龍の目星も付けておきました。嫌がらせ役や黒幕父親役はこれから確保する予定ですが、まずまずの滑り出しだと言えるでしょう」

斜め下の奈落にしか滑り込んでねえよ、とルーカスは思った。

「『覚醒』とやらをする際に、瞳の色まで変わるなどというのは驚きでしたが、それが『普通』だと言われれば背に腹は代えられませんが。角膜に直接貼り付けるタイプの彩色ガラスを開発することで、今朝方なんとか乗り越えました。こちらがそれです」

「それまったく乗り越える必要のない困難だったんじゃないかしら　！？」

いそいそと布靴から極薄のガラスを取り出したエルマに、イレネはとうとう絶叫する。

エルマがその彩色ガラスを一般化段階に漕ぎつけていれば、大陸の眼科外科技術が一世紀分ほど前進するはずであった。

イレーネとルーカスの二人は素早く視線を交わすと、同時に溜息を落とし、エルマの肩に手を置いた。

「睡眠まで削らせておきながら残念だが、エルマ。おまえはこの任務で求められる『普通』の方向性を、まったく理解していないようだ」

「え？」

「よりによってあなた、どうしていつも致命的な教科書選択のミスをするのよ……」

げんなりと指摘され、エルマはきよんとする。

ついで、少々むっとしたような雰囲気を漂わせはじめた。

「そんなはずは。だって、指南書の冒頭にははっきりと、『この話の主人公は、どこにでもいる平凡な学生』と」

「平凡な学生は真の実力がSSSランクだったりしないし、武闘会で優勝したり英雄になったりしない。その主人公、結果だけ見れば途方もなくぶっ飛んでいるだろうが！」

「……それはそうですが、そもそも私に与えられた任務というのが、『普通に』『学生たちの頂点を獲ってこい』とのことでしたし……」

少々躊躇いを滲ませはじめたエルマに、ルーカスは強い口調で言い放った。

「それが間違っているんだ」

「え？」

「義兄上の命令。アウレリア国民でもない、聖力もないおまえに聖鼎杯で優勝せよなどというのが、そもそも間違っている」

きっぱりとした物言いに、エルマが怪訝そうに眉を寄せる。

「ですが、……それでは、陛下の言いつけに背くべしと、殿下はお考えということですか？ 臣下が王の命に逆らうというのが、普通のことなのですか？」

「……背けとは、言っていないだろう」

ルーカスは、歯切れ悪く答えてから、言葉を手練り寄せるようにして告げた。

「ただ……そう、おまえの解釈が、異なっているだけだ」

「私の解釈が？」

「圧倒的な活躍をもって聖鼎杯を制するのではなく……せめて、苦闘の末、偶然にも優勝してしまった、くらいの位置づけが、妥当だと」

いつになく煮え切らない態度に、エルマは不思議そうに首を傾げる。

が、ルーカスの表情は奇しくもエルマお手製の眼鏡に隠され、読み取れなかった。

「殿下……？」

「私もそう思うわ、エルマ」

とそのとき、イレーネが横から声を上げる。

彼女はまるでルーカスに援護射撃をするかのように、きっぱりと言葉を紡いだ。

「本来外様である私たちが、あまりに堂々とアウレリアの至高の地位を攫ってしまったら、世論的にも大問題だと思っもの。きっと陛下のご命令は、『あくまで普通の範囲を逸脱しない範囲で』聖鼎杯

で戦ってこいという意味……いえ、なんなら、優勝すらしてくるなということかもしれないわ

「え？ そうなのですか？」

「ええ、そうよ。だって陛下は、『フレンツェルでの異様な功績を帳消しにするために』『学生たちの頂点を獲ってこい』と仰った。

つまり 平凡な学生の在り方を極めてこいと、そう仰ったのよ

「え……？ そうなのですか……？」

エルマが静かに動揺の気配を見せる。

ルーカスも思わぬフォローに驚いてイレーネを振り返ったが、彼女は緑色の猫目をきらりと光らせ、しっかりと頷くだけだった。

「ええ、そうよ、エルマ。考えれば考えるほどにそうだわ。あなたが求められているのは聖鼎杯優勝やトリニテート入りなんかじゃない。平凡な学生がどのように戦い、どのように敗れていくか……どれだけ普通で一般的な学生に徹することができるか、それを試されているのよ」

「普通……」

あまりに突飛な主張に聞こえるが、しかしイレーネの瞳は気迫に溢れて揺るぎない。

微表情から一概に嘘だと断じること躊躇われ、エルマは結局、逡巡の末に頷いた。

「そう、なのですか……」

「そうよ」

「……そうとも」

そしてルーカスもまた、イレーネのフォローに、ありがたく乗っかることに決めたようだった。

「確認ですが、ということとは、私は聖鼎杯で優勝どころか、目立った活躍をしてはいけないわけですね？」

「そう。その通りよ」

「銀髪になったり、オッドアイになって覚醒したりするのもしけないのですね？」

「そう。その通りよ。とにかく目立つことは一切禁止」

目立つことは一切禁止、とエルマは復唱し、再び小さく頷いた。

「よくわかりました。目立つ、ダメ絶対」

まるで言葉を握りしめるように、きゅっと拳まで作る。

が、彼女がそれで決意表明をしようとしたとき、事態が急変した。

キュイ……ン！

突然、部屋に耳が引き攣れるような奇妙な音が響き渡ったのである。

5・「普通」のお返し(4)

「……………!?」

咄嗟に戦闘モードに意識を切り替えたルーカスが、素早く部屋を見回す。

「……………! 避ける! 頭上と右、双方向から来るぞ!」

瞬時に状況を把握した彼は鋭く叫んだが、イレエネはまだ展開に付いていけないように慌てて天井を見やり、そして、「ひっ」と声を上げた。

「な……………っ、なにこれ……………っ」

アウレリアらしい繊細な彫刻が施されていたはずの天井。そこが、まるでぐにやりと溶けたように渦を描いていたのである。渦を取り囲むように、複雑な紋様が光を発し、その円に囲まれた渦の中心では、なにか黒色の塊 おびただしい数の虫が、出口を求めて蠢いていた。

「え……………っ? な、なにこれ、いや……………っ」

一方、斜め右の壁にも同様の穴が開き、そこからは明らかに有毒とわかる鳶性の植物が、おぞましい粘液を垂らしながらこちらへと触手を伸ばしている。

にわかに緊迫した事態に、脳が理解を拒む。

完全に硬直したイレーネは、しかし、ルーカスとエルマ　ただし二人とも冴えない眼鏡姿である　が前に立ったことで、わずかに落ち着きを取り戻した。

「な……なんですよ、これ……っ」

「たぶん、攻撃生物の召喚陣だ。アウレリア学院の候補生から我々^{ルーテン}への、手荒な歓迎といったところだろうな。……ここで剣を使うのは、さすがにまずいか」

ルーカスは攻撃をさして脅威には感じていないようだが、用務員に扮した身で剣を取り出していいか、わずかに躊躇いを滲ませる。

その間にも、今度は左側の壁、そして床までもが淡い光を発して、ぐにやりと形を変えはじめた。

渦巻く中心にはそれぞれ、明らかに物騒な炎、そしてごうつと唸りを上げる風の気配がある。

おそらくは、人を攻撃する炎や、かまいたちの召喚術　。
これにはさすがのルーカスも、表情を険しいものにした。

「頭上からは毒虫、右の壁からは人喰い樹、左の壁からは灼熱の炎に、床からはかまいたち。やれやれ、俺たちは人気者だな」

ルーカスは皮肉気に呟くが、さすがに四方向からの攻撃となると分が悪い。

舌打ちしながら、まずは護身用として通じる程度の短剣を取り出そうとしたところ

「ちよつと失礼」

涼やかな声が響いた。
エルマである。

彼女は淡々とした足取りで左の壁に向かうと、ぐにやりと波打つ白い壁を見つめ、それから、いつの間にか手にしていた羽根ペンでさらさらと壁になにかを書き付けた。

ついで、床にも同様のことを行う。

「エ……エルマ……？」

「なにを……？」

取り残された二人が怪訝そうに声をかけた次の瞬間、それは起こった。

ゴ……ッ！

「きゃあっ！」

「……………！」

部屋中に、目も開けていられないほどの熱風が吹き渡り 次
目を開いたときには、虫の大群も、おぞましい蔦性植物の姿も消え
失せていたのである。

「……………え？」

あまりにあっけない展開に、イレーネはぼかんとしてしまう。

もしや、先ほどまで自分の目に見えていたものは、幻だったのだ
ろうか。

「エルマ、あなたいつたい」

なにを、と問いかけて、エルマの姿が見えないことに気付く。
イレーネはぎよつとして周囲を見回したが、その次の瞬間には、

「ただいま戻りました」

背後から涼やかな声が聞こえたので、思わずその場でぴよんと飛び跳ねそうになった。

「エ、エルマ！ あなた、いつたいなにを……！？ とうか、戻りましたって……え？ 今この場から出かけて帰ってきたってこと？ え？」

混乱のままに両手を頭に突っ込んでいると、彼女より幾分かはエルマの動きを捉えられたらしいルーカスが、やけに低い声で尋ねた。

「おまえ……。他の候補生の控え室に侵入して、なにをしてきた……？ いや、その前に、壁や床に向かってなにをしていたんだ……？」

「ああ、それはですね」

エルマは眼鏡を光らせて答えようとするが、しかしそれが告げられる前に、あちこちの控え室から絶叫が響き渡った。

「ぎゃあああああつ！ な、なんだ、この虫入り飴はあああああつ！」

「いつの間に口に突っ込まれたあああ！？」

「うおおおお！ 俺の毒虫ちゃんたちが、こんな姿にいいいいつ！」

「きゃあああつ！ あたくしが育てた人喰い樹がああああつ！」
「どうやら、「手荒な歓迎」の仕掛け人たちの悲鳴のようである。
彼らの叫び声をBGMにしながら、エルマはしゃらつと言いつつ放つた。」

「私たちを歓迎してくださった四組の方々に、虫入り飴を作ってお返し」をしてまいりました」
「……………は？」

意味を取り損ねて聞き返したルーカスたちに、エルマは丁寧に言い換えた。

「毒虫に、人喰い樹に、炎に、かまいたち。つまり、中身と樹液と熱源と刃物。折よく材料がそろってしまいましたので、かまいたちに人喰い樹を裂いてもらって樹液を取り、そこに虫を入れ、炎に熱してもらって、飴を作ったのです」
「……………」

言っていることはわかるが、言っていることがわからない。
ルーカスは、己の表情筋がひくりと引き攣るのを感じた。

「いやおまえ……………なぜこの局面で虫入り飴の展開になるんだ……………」
「え？ だって、頂き物したら、それらの一部でちよつとしたプレゼントを拵えてお返しするって、いたって普通の行動ですよね？」

いやそんな、「大量に苺を頂いたのでジャムにしてお裾分けしました」みたいに言われても。

絶句するルーカスをよそに、エルマは懐からすつと包みを取り出すと、それを朗らかにイレーネへと差し出した。

「よろしければ、どうぞ。特別大きく艶やかに仕上がったものです」
「いらんわ!」

こじやれたラッピングを施された虫飴を、イレーネは裂帛の気合いで断った。

「ていうか、そうじゃないでしょ!？」 殿下の質問の意図は、なんでああなたが、床や壁をちよつといじつただけで、凄そうな攻撃の数々を無力化 っていうか虫飴化できたのかつてことでしょ!？」

ついでにルーカスに代わりそのツツコミを解説すると、エルマは不思議そうに小首を傾げる。

「え？ 左の壁と床の陣は発動前の状態でしたので、攻撃対象を書き換えただけですが」

これには、硬直していたルーカスがなんとか己を再起動し、牙を剥いた。

「なぜ導師でもない、聖力もないおまえが、聖術陣を書き換えられてしまうんだ!」

「え……? 聖力が無くとも、術式を解読できれば問題ないわけですから、古代アウル語が読めれば陣の書き換えくらい、常人でもできますよね?」

「常人に術式や古代語が解読できるか!」

術式は、アウレリア国立学院の学生たちが数年がかりで会得するものであり、かつ新規式の解読ともなれば、大陸でも一握りの大枢

機卿が、その人生を捧げて取り組むほどである。

「そもそも、聖力保持者でもなければ目視できない陣を、どうやっておまえは察知したというんだ！」

「それはほら、陣は聖水で描かれているので、聖水の発するごく微量の熱によつて変動する気流を察知すれば」

「どうやったなら気流を察知できるのよ!？」

「え、できませんか、普通？」

小首を傾げて答えるエルマに、ルーカスもイレーネも、もう返す言葉がない。

アウレリア入国早々、どんよりと死んだ魚の目になりはじめた二人をよそに、エルマはなぜか、ちよつと誇らしげに眼鏡を光らせた。

「あとですね、……私、さつそくお二人からのアドバイスを活かしてみたのですが、いかがでしょうか」

なんのことだかわからない。

半眼で見つめ返すと、エルマは褒められるのを待つ生徒のように、胸に片手を当てた。

「目立たぬよう　つまり周囲から目視されぬよう、最善を尽くしました」

「目にも止まらぬスピードでことを済ませろって意味じゃないから
「――!」

己の忠言が、かえって事態を悪化させていたことを悟り、イレーネは絶叫した。

陣を改変し、攻撃同士を相殺し、犯人を突き止め、やり返す、それだけでも異様なことなのに、それを相手に視認されないほどの速さで済ませるなど。

状況的に、エルマがやり返したのだという事実は、誰の目にも明らかただけに　これではむしろ、底知れない凄みを知らしめただけだ。

エルマは、眼鏡越しにも嬉しそう、とわかる雰囲気微笑んでい

る。
「お二人のお陰で、私の『普通』への道のりがはかどります。いつも適切な助言、本当にありがとうございます」

そう言って頭を下げるエルマを前に、ルーカスたち二人は、無言で天井を見上げた。

ちげえよ。

天井付近にわずかに漂う煙が、なんだか目に沁みるように思えた。

6・「戦車」逆位置

「戦車、逆位置」

ハイデマリーの白い指先が優雅に動いて、一枚のカードをめくった。

十字に並べられたカードの、ちょうど中心に位置する札だ。

上下が逆さになったその表面には、黒と白の^{スフィンクス}人頭獣が、若き王子を戦車に乗せて引いている絵が描かれていた。

王子は若く、きりりと引き締まった表情で前方を見つめ、またがる戦車も豪華な仕立てである。

見るからに力強さを感じるカード。

しかし、占いの類を「女子どもの遊び」と片付けてきたクレメンスは、それにどう反応してよいのか悩み、眉を寄せた。

「……どういう意味だ」

「正位置、つまり上下が正しい向きであれば、見た通りよ。力強く前に進む戦車　事態の前進、行動力、力強さ、スピード……」

ただし、とハイデマリーは不思議な笑みを浮かべて呟いた。

「今回は逆位置ね。あの子ったら、もう」

もう、と言われても、クレメンスには何を責められているのかわからない。

怪訝な顔でいると、横からひよいと顔をのぞかせたリーゼルが、

興味深げにタロットへと視線を落とした。

「十字、五枚のスプレッド。現在・原因・未来・対応策に最終結果だけ？」

「大枠はそうよ。けれどあの子の周囲を知りたいと思いつながらシャッフルしたから、ちょっとだけ内容が異なるの。厳密には、周囲への影響・本質・周囲からの影響・対応策に最終結果よ。さすがに詳しいわね、【嫉妬】？」

「ふん、占いもまた淑女の嗜みよ。それにしても、戦車の逆位置ねえ」

それだけのやり取りで二人はすっかり通じ合っているようだが、クレメンスにはさっぱりわからない。

曖昧な表情で佇んでいると、意外に姉御肌であるリーゼルが、「仕方ないわねえ」と解説役を買って出た。

「【色欲】は、あたしたちのかわいいエルマが今どうしているかを占っているの。五枚のカードは、それぞれあの子を取り巻くものの象徴よ。即ち」

女性のように美しく整えた爪先で、とんと中心のカードを指す。

「中心のカードが示すのは、『原因』。環境を引き起こすもの。始まりの性質。占われるエルマの持つ、核となる在り様」

ついで、その左右を順々に指さす。

「そして、『原因』を取り巻く二つのカードは、エルマに影響し、影響される周囲の象徴。平たく言えば、左側は『エルマが周囲に与えるもの』で、右側は『エルマが周囲から与えられるもの』といっ

たところかしら」

指は次に、十字の上のカードを指し示した。

「『原因』の高みに位置するのは、『対応策』。現状に困難が現れた場合、エルマを導く鍵となるものの象徴ね。そして」

最後に、指はすつと宙を切り、十字の下のカードを軽く弾いた。

「最後にめくるのが『最終結果』。すべての要素を織り込んで、エルマや周囲がどんな結末を迎えるかを表すものよ」

リーゼルは過去に家庭教師を務めていたとかで、その口調は明朗である。

スプレッドと呼ばれるカードの配置を端的に説明し終わると、彼は再び、絵柄を露わにしている中心のカードに指を戻した。

「さあ【クレメンス虚飾】、確認するわよ。中心のカードが意味するのは」

「『原因』」

「そう。そして、戦車の正位置の意味は？」

「事態の前進、行動力、スピードだ」

「よくできました」

教師そのものの口調に乘せられて、うっかり生徒のように従順に答えてしまった自分に気付き、クレメンスははっとする。

が、リーゼルはいかにも当然のことであるように、威厳溢れる佇まいで頷くだけだった。

「さて、逆位置の場合、意味は逆転する。若く実力を付けはじめた王子ががむしゃらに突き進むその在り方が、負の方向に作用すると

いうことね。つまりこの場合、意味するのは、『暴走』、『空回り』、『視野の狭窄』」

そこまでを朗々と説明して、リーゼルはふふつと苦笑を漏らした。

「まったく、あの子にも困ったものねえ。大方、ここの非常識極まりない連中に仕込まれた怪しげなスキルを披露して、暴走しているんでしょう」

大当たりだが、リーゼルの言う『非常識極まりない連中』の中に、決して自分自身は含まれていない。

いけしゃあしゃあと、自身だけが常識人であるかのように振舞うリーゼルに、突っ込みたい気分を抑えられなかった真の常識人・クレメンスは、思わずぼそりと呟いた。

「……おまえも、あの非常識生命体を育成した張本人だろうに」「あん？」

だが、それには思いのほかどすの利いた声で相槌が返る。ついびくりと肩をそびやかしたクレメンスに、リーゼルは嘆かわしいというように首を振ってみせた。

「まったく、なんて生意気なじじいなのかしらね！ 人がせつかく親切に解説してあげたというのに、礼の一言すらなく、見当違いの嫌みを投げてよこすなんて」

彼は大仰な仕草で両手を広げると、エルマを象徴する戦車のカードを取り上げ、愛しげに頬ずりした。

「あの子が去ってからというもの、この場にいるのは、小生意気な

坊主か、気の利かない男か、生意気なじじいばかり。あと女狐。ああ、私に似て、受けた恩をきちんと返せる素敵なあの子が、早く帰ってくればいいのに！」

リーゼルはこれで、エルマの「道德の師」を自任している。

恩は二倍に、仇は五倍に。

彼がしばしば掲げていたその教えは、素直なエルマの行動方針として染み込んでいるはずだった。

「言つて、おくが」

がそこに、がりがりと飴を齧っていたイザークが、低い声で物申す。

「『もらったら、もらったぶんだけ返しませう』と、最初に教えたのは、俺だ。聖獣を意図せずして拾ったら、スープに。魔獣の死骸に出会ったら、干し肉に。虫と樹液を見つけたら、飴に。自然の恵みは、皆で分かち合い、還元させてこそ、美味しいのだから」

彼もまた、エルマの躰に一番寄与したのは自分だと訴えたがっているようだった。

ちなみに、一騎当千と謳われた戦士時代には軍で共同生活を送っていた彼なので、互惠精神はこれでもなかなか豊富なのである。

しかし、虫の飴の語を聞いたホルストは、おえっと舌を出す仕草をした。

「やっぱりあの悪趣味な飴は、【暴食】の差し金だったわけ？ 勘弁してよね、なんの罰ゲームかと思つたじゃない」

エルマがにこにこ差し出すから、食べざるをえなかつたけど。ホルストが洗面を浮かべると、「あら」と横からハイデマリーが気だるげな声を上げた。

「わたくしは好きだったけれど。独特な香りで胸がすつとしたし、滋養強壮にいかにも効きそうじゃない？ なんなら、今この瞬間に二、三粒欲しいくらいだわ」

「……【色欲】って、ときどき突飛な嗜好を見せるよね。なに、疲れてるの？ それなら僕が薬を出そうか？」

「あなたの腕は信頼しているけれど、薬って嫌いなよね」

気まぐれでわがままな監獄の女王は、ホルストの珍しい気遣いもさらりと受け流すと、「さて」と視線をクレメンスに巡らせた。

「ご覧の通り、わたくしのタロットは占いというより、単なるおしやべりのツール、こうしてみんなで結果を想像し合うための、ちょっとした小道具のようなものよ。どうせ監獄住まいのわたくしたちでは、結果を検証することなどできないのだから」

彼女は新参者のクレメンスに、そつと笑いかける。

瞬く間に緊張をほぐしてしまう、優しい藍色の瞳は、空間さえ異なればまるで聖女のようなだった。

「だから、クレメンス。もっと肩の力を抜いて。次のカードはなにか、一緒に見てくださる？」

そうして彼女は、今度は十字の左側、『影響される周囲』のカードに手をかけた。

7・幕間(1)

聖鼎杯初日の、夜。

実質的には前夜祭の位置づけとなるこの時間、円形闘技場は民に開放され、文字通りのお祭り騒ぎが繰り広げられていた。

神に捧げるための聖酒を飲み交わし、讚美歌を陽気に歌い、隣人と肩を叩き合う。

敬虔な信徒の多いアウレリアにおいて、日頃は眉を顰められるこれらの行いも、この聖鼎杯の期間だけは、すべて神に感謝を示すためのものとされ、許容されるのだ。

聖鼎杯とは、彼らにとってそれほど特別な儀式であった。

一方、参加する側である候補生　学生たちはといえば、翌日から始まる武闘会本番に備え、開会式を終えた後は、学生寮に戻る者がほとんどだ。

彼らは翌日に備え、多くは早々に寝台にもぐり込んでしまったため、この日付が変わる時間帯ともなると、寮内はしんと静まり返っていた。

そんな中、燭台の細い光を片手に、外廊下を歩く人物が、一人。闇にあっても物おじせずに進める金髪の少女　イレーネである。

彼女はやがて、敷地の外れにある薪舎にたどり着き、右から三つ目の扉を確認すると、それを静かにノックした。

「もし。部屋の薪が切れてしまつて、主人が眼鏡をナノクリーニングするのに難儀しているのですが」

「眼鏡が。それは大変ですね、ただいま」

とりあえず文章に「眼鏡」の語を混ぜる、というのが、イレーネたちの決めた合言葉だ。

すぐに冴えない眼鏡の用務員 の姿をしたルーカスが扉を開けてくれたので、イレーネはするりと薪舎の一室に潜り込んだ。

それから、燭台を手近な床に置くと、ルーカスに向かって恭しく一礼した。

「お呼びでしょうか、殿下？」

「今更取つて付けたように畏まられてもな。いい、もはや改まつた言葉遣いもいらん」

ルーカスは暑苦しい鬘と眼鏡をむしり取り、ばさりと髪を掻き上げると、ようやく落ち着いたように薪の山に腰を下ろした。

突然の美男の出現である。

密室に、水も滴る色男と二人きりという状況だが、なんといつても、イレーネは「ふす！」と相手を爆笑してしまつた後だ。

ときめきよりも、何度見ても鮮やかなビフォーアフターへの感動を覚え、しみじみと溜息を漏らした。

「本当に……美醜のすべてを無意味化する、なんて力を秘めた眼鏡かしら。もしかしてあの子が見ている世界とは、こんなものなのでしょうか」

「……恐ろしい可能性を突きつけないでくれるか」

自分の甘いマスクが、エルマにまったく通じていない可能性を指摘されて、ルーカスがわずかに声を低める。

が、彼は軽く頭を振って、思考をすぐに切り替えると、真剣な顔で口を開いた。

「さて。呼び出してすまないが、おまえに頼みがある」

「お任せください。エルマのスリーサイズなら既に聞き出しておりますわ。上から」

「違う。待て、おまえはいつたい俺のことをなんだと思っているんだ」

きりつとメモを取り出したイレーネを制し、ルーカスは天を仰ぐ。

それから苦虫をかみつぶしたような顔で、イレーネにも腰を下ろすよう告げると、しっかりと視線を合わせた。

「頼みたいのは、もっと別のことだ。……明日から本番を迎える聖

鼎杯で、エルマが今日のような『活躍』をしてしまわないよう、協力してほしい」

「活躍をせぬよう、協力……」

怪訝そうに反復してみせたイレーネに、ルーカスは頷き、説明を補足した。

「具体的には、聖鼎杯で三部門とも頂点を極める、などといった異常事態を阻止してほしい。聖鼎杯の結果には関わらずとも、人心に強い印象を残す今日のような事態も、できれば阻止したい。協力してくれないか、イレーネ」

「それは、あの……」

真つすぐ見つめられたイレーネは、困惑も露わに、おずおずと聞き返す。

「『トリニテートを獲ってこい』という、陛下のご命令に逆らう……
…ということですか、よね？」
「……………」

押し黙ったルーカスに、イレーネは慌てたように両手を突き出した。

「いえ、殿下が仰るのですから、なにか事情があるのでしょうか、私としても陛下よりは、殿下の命に従いたく存じます。それで今日も、なにかおかしいなとは思いつつ、あの場で殿下に同調したわけですし」

エルマに、「優勝するな」「むしろ凡人に徹せよ」と説いたあの時のことだ。

やはり、こちらの意図を汲んでのことだったかと、ちらりと視線を上げたルーカスに、イレーネは戸惑いがちに頷いてみせた。

「あのとき私は、外国人の我々がアウレリアの象徴を獲ってはいけないとか、殿下がそうした政治的配慮をしているのかなと思っただけです。あるいは、あの子が本気を出すと、聖鼎杯どころじゃない被害が起こりそうだから、苦勞性まじめ微受けポジの殿下が止めざるを得ない、といえますか……」

「待て、なんだその呪文のような不思議な属性は」
「だから私もフォローはしましたが……でも」

ルーカスの突っ込みについてはさらりと躲しつつ、イレーネは一度きゅっと両手を握り合わせた。

次いで彼女は、ぱつと顔を上げる。

「やはり、国王陛下のご命令に背いてまで優勝を避けよというのは不思議です。しかも殿下は、優勝どころか、活躍そのものを回避せよと仰る。できれば……理由についても、お教えいただけませんか？」

そうして、真つすぐに相手を見つめ返した。

ルーカスはその視線を受け止め、しばし口を閉ざす。

じじ、と燭台の炎が揺れる音だけが、二人の間に響いた。

「……今から話すことを、決して外には漏らさないと、誓えるか？」

やがて、低い声でルーカスが切り出す。

恐ろしいほどに真剣な顔だった。

イレーネは無意識に喉を鳴らし、「……は、い」と答え、声が震えていることに気付き、慌てて言い直した。

「はい。誓います」

ルーデナーの色男。

女たらしで、気さくで、最近では苦労性な一面ばかりが目立つ彼だが、やはり、若くして騎士団中隊を束ねる男であり、民を束ねる王族の一員なのだ、改めて思い知らされるようだ。

ルーカスはしばし言葉を探すように視線をさまよわせたが、やがてばさりと髪を掻くと、溜息とともに、端的に告げた。

「 エルマは、おそらく魔族だ」
「……………！」

イレーネが息を呑む。

ルーカスは足を組みかえると、口の端を軽く持ち上げた。

「厳密には、魔族の生き残りか、またはその娘だ。圧倒的な美貌、膂力、能力。これまでも『人とは思えない』と形容されることが多かった彼女だが、先日、とうとう義兄上はエルマが魔族であることを断定した。クレメンズ元侯爵の断罪に際し、囚人たちの罪状が真実であるかをひとつひとつ洗っていたが、最も冤罪臭のする『魔族の子を宿した』という娼婦。彼女が、真に有罪であることが判明したからだ」

フェリクスは愚鈍な王の仮面をかぶった傍らで、ヴァルツァー監獄に收容される囚人たちの裁判履歴を、丁寧に遡っていた。

当時の証言、提出された証拠、状況。十五年以上前のものについての作業は難航を極めたが、それでも彼は、彼の納得する真実が見極められるまで、時間を掛けてそれらを調べた。

魔族と番ったというその娼婦、ハイデマリーの、その腹を見たという娼館通いの町医者。当時の同僚。ハイデマリーが袖にしたという属国の王族。

その他関係者と思われる者を片っ端から連行し、自白剤や催眠麻で用いて当時の状況を再現した。

そして、彼女の腹にはくつきりと、邪悪な形の痣が浮かんでいたと、彼女は本当に、魔族の子を宿していたとの結論を得たのである。

「年齢と照らし合わせても、その腹の子とはエルマのことだ。特異な身体能力も、魔族ゆえと言われれば説明が付く。つまり……エルマは、魔族、ないし、魔族の血縁者だ」
「……………」

イレーネはじつと黙り込んだ後、ぽつんと呟いた。

「なにかこう……………」

それから、微妙な表情で続けた。

「それがなに、というか……………ものすごい、今更感がありません？
こう……………エルマって実は魔族だったんだよ！　と言われても、あー、
やっぱりー？　知ってたー、みたいなの……………」
「……………言うなよ。同感だ」

ルーカスは心持ちげんなりした顔になると、膝に突いた両手に頭をうずめた。

「あいつのこれまでの所業を思えば、正体が魔族だとわかってても全く驚かないというか……………むしろ、魔族だからあんななのか、と腑に落ちてほっとするというか……………我ながら感覚が麻痺しているとしたか
思えんが……………」
「ですよね……………」

奇妙にイレーネが頷くと、ルーカスは「だが」と身を起こした。

「その感覚は、いささか麻痺が過ぎていたようだ。俺たちは、あいつが善良な精神の持ち主であることを知っているが、一般的な民からすれば、魔族とは未だに恐怖の対象であり、攻撃の対象だ」

「……正体が判明すると、エルマが民衆から迫害されると？」
「いや……」

ルーカスは苦々しい表情を浮かべ、親指で唇を擦った。

「むしろ逆だ。……エルマは、このままでは、義兄上に徹底的に搾取される」

「搾取……？」

不穏な単語に怯えたように、ゆらりと炎の影が揺れる。

続く声もまた、物憂げだった。

「……義兄上はあの通りの御方だ。自らの臣下が、たとえ魔族だろうが親の仇だろうが興味はない。関心があるのはただ一点。相手が、自分にとって あるいはルーデンにとって、有益か否かだ」

「有益……」

「ああ。それでいくと、凶抜けた能力と、不死身に近い強靱な肉体を持つという魔族の臣下^{エルマ}は、むしろ好ましい限りだろう。実際、義兄上はエルマの有用性に気付いてからというもの、無茶な任務を与えてばかりいる」

これまでにエルマが巻き込まれた数々の任務を思い出したのか、ルーカスの表情はますます険しくなった。

「結果はいつも上々。義兄上は大満足だ。任務を通じて実利を得るというのもそうだが、おそらくあれは、同時に彼は、冷静に検証しているのだと思う。どこまでエルマは有益たりえるのかと」

「そんな……」

「折しも、エルマが魔族の娘だということが判明した。となると、その検証はますますとどまるところを知らない。魔^{フレンツェル}を疎む領地に放

り込んだらどうなるのか？ 魔を焼き払うという聖域アウレリアに放り込んだら？ そう。今回の任務は、おそらくその検証が主眼だ」

イレーネの目が大きく見開かれた。

「魔を、焼き払う……。アウレリアは聖なる土地だから、ということですか？」

「ああ。アウレリアはアウル教発祥の地。この国には、至る所にルーデンの比ではないほどの聖堂がある」

「そしてそこには、かつて魔族を絶滅に追いやった聖剣や、聖具が数多く収められている……。つまり、強力な聖域ということですね」

アウレリアについての情報を引っ張り出しつつ、イレーネが相槌を打つ。

ルーカスは、彼女が意外なほどアウレリアに詳しいことに内心驚きつつ、静かに頷いた。

「その通りだ。そして、聖域に近付けば近付くほど魔族の体には負荷がかかるのだという」

説明を聞き、イレーネははっとして唇に手を当てた。

「そういえばあの子……。今日、妙に調子が悪いと……」

ルーカスもまた顔を陰しくする。

そして続けた。

「学院に踏み入った初日で、これだ。数日逗留すれば、さらに体調は悪化するかもしれない」

「それに、トリニテートの表彰式は、最終日に、最も聖力に満ちた

聖堂で、強力な聖具を使いながら表彰されるといいますわね。エルマがもしそれに接してしまえば……あの子はさらに、追い詰められてしまうかもしれない、ということですか……?」

「ああ。それはなんとしても避けねばならない。そして それ以上に避けたいのは、エルマが聖域でも活躍できると、証明してしまうことだ」

その先にどのような事態が待ち受けているのかを、イレーネは理解できてしまった。

「たとえ満身創痍であっても、聖域で……つまり相当な逆境で働けるとわかれば、陛下はさらなる『検証』を行うおつもりなのですね?」

「……彼には、エルマが少女の形をした兵器にでも見えるらしい。最終的には、戦場に放り込もうと考えているようだ。エルマは聡いが、妙に世間知らずなところがある。微表情の解読や演技はできても、根が純粹だ。『普通』の切り札をかざして、嫌らしい手練手管を使う義兄上に、うっかり騙されることは十分にありえる。……それは、なんとしても避けたい」

「……もしか、出発前に、陛下と口論されていたのはそのこと……?」

ふと気付いたイレーネがおずおずと問うと、ルーカスはわずかに目を逸らして答えた。

「……一発殴っただけだ」

「……わあお」

「好ましく思う女が戦場に放り込まれるのを、はいはいと喜んで見送る騎士がいるものか」

端正な顔が、ふてくされたような表情を浮かべる。

短絡的な言動であるようだが、恐らくは、そうした性質こそが、彼が民や騎士団の団員たちから慕われている要因なのだ。

イレーネはひっそりと苦笑を浮かべると、やがて頷いた。

「わかりましたわ。つまり私は、エルマが明日以降こそは大人しくしてくれるよう、思いつくすべての手段を講じればよいのですね」
「ああ。特におまえには、エルマが気を許す友人として、説得や刷り込みを頼みたい。できるか？」

ルーカスが問うと、イレーネは器用に片方の眉を上げてみせた。

「曲がりなりにも王宮に勤める一員でありながら、国王陛下の命を裏切り、任務が失敗するよう立ち回る。そんな不遜で恐れ多いこと、私以外のどんな婦女子ができると言いますの？」

燭台の光を受けて、猫のような翠の瞳がきらりと光った。

8・幕間(2)

同じ頃。

しんと静まり返った寮内のひと隅、人目に付きにくい東屋では、三名の男女が静かな語らいを続けていた。

「それにしても驚いたよなあ。ルーデン女に嫌がらせを仕掛けたやつらが、みんな自滅しちまうなんて」

小声ながらも、驚きも露わにそう告げるのはジーノである。

彼は固い床に胡坐をかき、相棒である長剣を磨きながら、肩をすくめた。

「虫と人喰い樹と炎とかまいたちがぶつかりあって、飴になっちゃうなんて。いやあ、なんか小咄みたいな、よくできた話だよなあ」

「できすぎだ」

と、横の椅子で聖水を小瓶に移し替えていたラウルが、冷えた声で呟く。

「まさかおまえ、あれが本当に『偶然嫌がらせが相殺された結果』だとも思っているのか？」

「へ？ 割と本気で思ってるけど」

「……脳筋め」

ラウルは小瓶を抱えたまま、呆れたように友人を見下ろした。

「……内容を見るに、嫌がらせを仕掛けた学生たちは、召喚陣をあ

らかじめ控え室に描き込んでいたのだと思いますが、……普通、攻撃対象を定義した陣が、それ以外に向かって威力を発揮することはありえません」

向かいの椅子で、夜の庭をぼんやりと眺めていたクロエも、ラウルの醸す冷え冷えとした雰囲気を察知し、おずおずと解説を加える。

ジーノが「え、そうなの？」と目を見開くと、彼女はこくりと頷いた。

「はい。なので……その、もしかしたらルーデンからいらした候補生は、……ものすごい聖力の持ち主なのかもしれません。他人の描いた聖陣を、あっさりと書き換えられてしまうほどの……」

「え、でも陣つて聖力を図像化したものなんだから、べつに聖力が無くても書き換えくらいはできんだろ？」

「阿呆。一の聖力を図像化するのに、どれだけ複雑な聖言と図が必要だと思っている。聖力を注ぎ込んで術式を改変させるほうが、莫大な労力は必要だがまだ現実的だ。一瞬で他人の術式を解読し描き替えられるほど陣に精通していたら、それは教皇の域、いや、もはや神の領域に片足を突っ込んでいるぞ」

ところが、その領域にしゃらつと両足を突っ込んでいる人物が、この学院にやって来ているのである。

そんなことは露知らぬ三人は、神妙な面持ちで会話を続けた。

「だいたい、単純に術がぶつかり合って返されたとして、虫がどうして餌をまとう？ しかもどうして、こじやれたラツピングを施されて、ぴったり術者の人数分返ってくるんだ？ 『偶然術が相殺された』のなんかではなく、明らかに、そのルーデン女がやり返したんだろうが」

「こじやれたラッピングを施されてたのか……知らなかった」

「すぐに、反撃の姿すら気取らせない凄腕の候補生として噂が立つて、開会式の間だつてずつと『ルーデンからの留学生はどこだ』って、みんなそわそわしてたじゃないですか。特に、明日を控えた聖女候補の子たちは、すごくピリピリして……」

「同じく、聖術師候補生もな」

なんでも、開会式で配布された資料によれば、ルーデンからの候補生は、聖女、聖剣士、聖術師の全部門にエントリーしているらしい。

そのため、主に聖力量が試される聖女や聖術師候補生は、特に警戒を強めているのであった。

ジーノは、「でもさ」と、鼻の頭に皺を寄せた。

「開会式でちらっと見たけど、本人は全然冴えない感じだったじゃん。なんかちつさくて、陰気でさ。あんなんが、ほんとに候補生を四組も返り討ちにしたんかねえ？」

彼は手入れの終わった長剣を月光にかざし、「それに」と、不意に背後を振り返った。

「どんなライバルがいようと、トリニテート入りするのは俺たち三人だ。　　そうでしょ？　　ガイド大導師^{せんせい}」

視線の先には、ひとりの男が佇んでいた。

年の頃は四十半ばくらいか。

隙のない立ち姿に鋭い眼光。

灰色の短髪が印象的な顔は、厳めしい表情に彩られ、がっしりと

した体軀は、彼が剣士であった頃を思わせる。

身に付けているのは、学院所属の導師　つまり教師らしく、院紋の刺繍が施された法衣。

しかし同時に、大枢機卿にのみ許される緋色の肩掛け布をも身にまとっていた。

つまり彼こそは、先の聖鼎杯にて聖剣士に内定したものの、トリニテート自体が成立しなかった結果、平民の出自でありながら枢機卿の地位に据えられた男　ガイドである。

遅ればせながらその存在に気付いたクロエとラウルは、ジーノの腕を引つ張りながら、すつとその場に立ち上がった。

宗教国家アウレリアにおいて、枢機卿の地位は絶対。

しかもこの三人からすれば、貴族の権力闘争の駒として、下町の貧民として、妾の子として抑圧された人生を送らざるをえなかったところに、学院という新たな可能性を示してくれた、人生の恩人である。

必然、三人がガイドを見上げる目には、静かな敬意が籠もった。

「聖女候補クロエ、聖剣士候補生ジーノ、そして僕、聖術師候補生ラウル。明日からの聖鼎杯本番を前に、大導師のお言葉を頂けるとお聞きし、この場に馳せ参じました」

代表して、ラウルが告げる。

そう、彼らは、ガイドからの呼び出しもあって、この東屋へと集っていたのだ。

三人が真摯な眼差しを向けると、ガイドは表情を変えぬまま、静

かに口を開いた。

「堅苦しい挨拶は抜きでいい。今宵は、おまえたち三人に、改めて確認しにきたただけだ」

「確認……とは？」

「トリニテート入りの、覚悟を」

ゆっくりと話すガイドの声は、重く暗い。

だが、ラウルとジーノは、思いもかけぬことを聞かれたといわんばかりに、目を見開いて互いを見やった。

「覚悟もなにも……。トリニテートになれば、下町出身の俺でも、一生贅沢な暮らしができる。それだけを目指して学院に来たつてのに、いつたいなんで覚悟なんかが必要なんだ……。あ、いえ、必要なんですか？」

「同感です。トリニテートとなれば、穀潰しでしかない下級貴族の三男でも、教皇に次ぐ地位をもって政治に関与できる。その夢のよきな話のどこに、覚悟が必要だと？」

少年二人の声には、疑問の形を借りた自負心に満ちている。

「贅沢と権力　しかしそれと引き換えに、トリニテートは世俗と一切のかかわりを絶たれる。親とも、友人ともだ。……おまえたちは若い。それらを切り捨て、一生教会の奥深くに籠る覚悟が、本当にできるというのか？」

ガイドが静かに説明すると、彼らはそれを一笑に付した。

「もちろん！　下町のダチなんてつるんで悪さするだけだし、いつまでも豚をバラすしか能のない親なんて、こっちから願い下げだし

……あいえ、ですし」

「僕がトリニテート入りしたら、家族は権力の蜜を吸うことしか考えなくなるでしょうし、醜く足掻く彼らとの縁を切れるのなら、それは本望というものです。それに」

ラウルはちらりと、傍らのジーノやクロエに視線を向ける。

「友人ということならば、同じくトリニテートとなる彼らがいれば、私はそれで充分です」

氷の聖術師のいつになくまっすぐな物言いに、ジーノは驚いたように瞠目し、それからへへっと鼻を擦った。

「俺も同じです！」

「……だそうだが、クロエ？」

しかし、クロエだけは、ぎゅっと手を握り合わせて沈黙している。ガイドが水を向けると、彼女はようやく、言葉を喉から絞り出すようにして告げた。

「……私も、そう、思います」

「クロエ？」

様子のおかしいクロエに、ラウルが眉を寄せた。

「クロエは、僕たちとともにトリニテート入りしたくないのか？」

「いえ！ そんな！ ……そんなことは。ただ……」

ぱっと顔を上げて即座に否定するが、しかし彼女はすぐに俯いてしまふ。

「トリニテートになった後のことというより、なる前というか……その……私なんかが、聖女様になれるのかと……自信が、無くて」

「なに言っただよ！」

その咳きは、ジーノによって遮られた。

「歌うだけで植物を成長させられる力なんて、初代の聖女にも匹敵するくらいじゃないか！ それに、相手が俺みたいな貧民だろうが、性格ブスな正妻の子だろうが、どんな相手にも優しくできるクロエが聖女にふさわしくないってんなら、ほかの誰がふさわしいんだよ」

「そうだな」

ラウルも、肩をすくめて同意する。

「僕なら、侮辱してきた相手を片っ端から氷漬けにしてやるところだが、クロエはあの女に嫌がらせを仕掛けられても、表情すら動かさない。それを弱さと受け取り侮る輩もいるが、僕は、器の大きさとさだと思っ」

「ジーノくん……ラウルくん……」

力強く言われ、クロエが瞳を揺らした。

さらにそこに、黙って話を聞いていたガイドまでもが、諭すようにして言葉を重ねた。

「実際のところ、おまえの植物との相性、そして成長を促す力は、聖女たるにふさわしいと学院側も見ている。親ルーデンの間人ですら、おまえを聖女筆頭候補とみなして警戒し、付け焼刃の対抗馬を送り込んでくるほどだ。おまえは、それを誇るべきだろう」

「……先生は、ルーデンからの候補生の能力をどのようにお考えですか？」

ぼつりと問うと、ガイドは口を閉ざし、しばし考えるそぶりをする。

それから唇を歪め、

「わからん」

意外な言葉を口にした。

「わからない、のですか……？」

「あの留学生の後見人はチエルソ枢機卿で、卿は、彼女を凄まじい聖力の持ち主だと説明して今回の聖鼎杯にねじ込んでいる。が、俺の見たところ、彼女に聖力保持者特有の気配はなかった。最初は卿が権力闘争のために、虚偽の申請をしたのかと思ったが、……昼の騒動は、状況から考えて明らかに彼女の仕業だ。とすれば、彼女にはやはり、膨大な聖力があると考えるべきだろう」

「つまり……彼女は聖力を要しないほどの武術の達人か、そうでなければ、先生の目を欺きおおせるほどに、聖力のコントロールに長けた人間、ということですか……？」

ラウルが怪訝そうな声で確認すると、ガイドは慎重に、

「いずれにせよ、最大の警戒をもって臨むべき相手だということは確かだろう」

とだけ答えた。

クロエの、あどけない濃緑の瞳が戸惑いに揺れる。

それを見ていたガイドは、「だが」と、深みのある声で続けた。

「それでも、クロエ。おまえこそが、聖女筆頭候補だ。おまえたちはこの俺が見つつけ出し、三年以上にもわたって鍛え上げた、自慢の生徒なのだから」

「先生……」

きっぱりとした物言いに、クロエも顔を上げる。

彼女は一瞬だけ、まるで絶えるような表情で、制服のポケットに手を伸ばしかけたが、ふと拳を握ると、ゆっくりと頷いた。

「……はい。先生が見出してくださいました私たちですから、なんとしても、トリニテートに入ってみせます」

「クロエ」

言い切ってみせた少女に、少年たちは喜色を浮かべる。

ガイドもまた、じっくりと彼女を見渡して、その顔に先ほどまでにはなかった覚悟が浮かんでいるのを見て取ると、満足そうに頷いた。

「……期待している」

その後、彼らはいくつかの会話を交わすと、静かに東屋を離れた。

9・「普通」の歌声（1）

明くる朝、聖鼎杯二日目。

最も神に愛された女性　即ち聖女を決めるこの日、闘技場は昨日以上に盛り上がりを見せていた。

聖女という身分の性質上、候補生たちは派手に武技をぶつけ合うことはしない。

逆に、彼女たちが持つ、生命を癒し育む力を競い合うのである。

その競い合いの内容は回ごとに異なり、あるときは雨雲を最も早く呼べた女性が聖女となつたし、あるときはけが人を最も多く回復させた者が聖女と呼ばれた。

聖女の能力の発現方法もまた様々で、ある者は祈り、またある者は舞い、またある者は歌う。

つまり観客からすれば、聖鼎杯の中でも聖女決定戦というのは、神秘的なショーを見物するようなものなのである。

候補生たちもそれを十分理解しており、かつ、観客の応援は、ときに審判たる枢機卿の判断をも左右しうるので、必然、彼女たちは観客の注目を集められるよう、華美に装うようになっていった。

こうしてますます聖女決定戦は、華やかなエンターテインメントの性質を強めていったのである。

その結果、候補生たちが入場する今、静謐を重んじる日頃の学院とは裏腹に、観客席からは大音量の歓声が湧き上がっている。

舞台入り口で順番待ちをしているエルマとイレーネは、しかし、候補生たちの華々しい入場をよそに、ひそひそ声で先ほどから真剣な会話を続けていた。

「よくつて、エルマ？ もう一度確認よ。今回のあなたのミッシヨンは」

「勝たない、冴えない、目立たない……」

「そうよ。あなたは平々凡々な留学生。くれぐれも、くれぐれも、ほかの聖女候補生を押しつけて課題を秒でクリアしてしまったり、その他もろもろ目立ったりしないよう、気を付けるのよ？」

「目立たない……」

そう。

昨日の「目立たないお返し」が原因で、かえって開会式で注目を集めてしまったエルマは、ルーカスとイレーネの両名から、

「『目立たない』の定義が間違っている！」

と、こつてり絞られたのである。

今朝になつてもやまないお説教攻撃に、体調不良も手伝ってか、エルマは心なしか、眼鏡のガラスをしょんぼりと曇らせながら、「最善を尽くします……」と神妙に頷いた。

とそのとき、候補生の少女の一人が、エルマたちにわざとぶつかるとようにしながら入場門をくぐる。

とびきり目を引く装いをこらした彼女は、冴えない姿のエルマをじろじろ見つめ、「ふん」と鼻を鳴らすと、意地悪く小声で言い捨てていった。

「みすばらしい聖女候補だこと。あなたの実力はどうあれ、この聖

女戦は、観客からの実質的な人気投票を兼ねているのよ。みじめな
思いをする前に、お家に帰って鏡でも見てきたらどう?」
「……………」

後姿を見送るエルマの眼鏡が、ちよつと嬉しそうに輝く。

なにかを期待するかのようになこちらを向いたエルマに、しかしイ
レーネは素早く言い聞かせた。

「違うから。あれ、フラグじゃないから。『ふん、Bランクめ』の
言い換えでもないし、フリでもないから。繰り返すけれど、あなた
が読んだ小説は、現実世界ではまったくもって普通ではないもの
の集合体だから」

「……………」そうなのですか」

至極残念そうな口調だった。

エルマとしては、マルクが貸してくれた小説が「まったくもって
普通ではない」と断じられてしまったことが、いまだに腑に落ちな
いのである。

「…………道歩いていたらうつかり聖剣を引き抜いてしまったくだり
とか、微笑むだけで次々と異性が陥落してくるくだりとか、かなり
リアリティがあったので、今度こそは大丈夫と思っていたのですが
……………」
「そういうところよ、エルマ!？」

イレーネはとうとう絶叫したが、元勇者ギルベルトと三国一の娼
婦ハイデマリーを父母に持つエルマとしては、こつ唸るしかできな
いのだ。

「本当に…………『普通』というのは難しいですよね……………」

「青年向け小説なんかには手本を求めるからいけないのよ！ この世で人生の指針にしているのは、ごく一握りの薄い本だけなんだからね？ もっと周囲を見回して、一番多数派の動きを真似るとか、一番地味な子を真似るとかすれば解決する話でしょ！」

「なるほど」

やけくそになって叫ばれた内容に、エルマはぼんと手を合わせそうな勢いで頷く。

と、そのときとうとう、エルマたちの出番がやってきた。

入場門をくぐり、肅々と指定された舞台上の持ち場に向かう。

が、冴えない姿のエルマに観客が一齐にブーイングを始めたのを聞き取り、イレエネが眉を顰めた。

「なんなのよ、聖女候補を見守る信徒っていうより、単に女の子を値踏みする男たちの集まりじゃないの。これがアウル教の象徴にして頂点を決める祭典だなんて、信じがたいわ」

「観光立国であるアウレリア国にとって、祭典というのは重要な資源ですから。教義と折り合いを付けざるを得ないのでしょーね」

「こんなの単なる腐敗よ」

吐き捨てるような自らの言葉にふとなにかを思ったのか、イレエネは口を引き結び、一瞬だけ観客席に視線を向ける。

それはまるで、誰かを探すような仕草だった。

普通なら誰にも気づかれないうら、こっそりとした瞳の動きに、エルマだけが気付いて首を傾げたが、気を取り直すように拳を握ったイレエネが、

「さ、気合いを入れて平凡に徹しましょうー！」

と叫んだ瞬間持ち場に着いたので、追及する機会は失われてしまった。

石畳の敷かれた、巨大な闘技場。

円形の舞台に、長方形を描くように等間隔で並ぶのは、ざっと三十名ほどの聖女候補生たちだ。

それぞれ、制服の上からできる限りの装いをこらし、用意された簡易の机と椅子の前に立っている。

入場すらもパフォーマンスの一部と捉えているのか、その立ち姿はまるで舞台女優のようだった。

同系色の衣装を身に付けた侍女を大量に引き連れて、彼女たちに引き立て役をさせている者すらいる。

数少ない例外は、一番端で既定の制服に身を包んだ、眼鏡姿の冴えない少女　つまりエルマと、その隣に位置する、亜麻色の髪の少女　クロエくらいか。

筆頭候補と目されているはずの彼女は、エルマと同じく、なんの変哲もない白い制服をまとい、観客の視線を避けるかのようにそっと目を伏せていた。

地味な子、というイレエネの言葉を反芻しながら、エルマはじつと彼女を見つめた。

「お手本……」

「ねえねえエルマ、言動を真似るならあの子なんていいんじゃない？　ちよっと素朴な感じで、田舎臭さもあって、いかにも普通という感じ」

イレネはと言えば、自分たちから少し離れた列の、いかにも衣装に着られた感じの少女を指さしている。

「が、エルマはあくまでクロエに視線を固定したまま、小声でイレネに問うた。」

「口角が下がり、下唇が引き上げられる……感情抑制方向に作用する、緊張の微表情ですね。こういった場で、感情を殺そうとするほどに緊張するのは、普通のことですか？」

「いたって普通よ。三十年に一度の晴れの場で、なんなら一族の期待まで背負って出場している候補だっているはずだもの。緊張しないほうがおかしいでしょ。」

「なるほど」

とそのとき、視線の先のクロエが、ちらりと顔を上げて、怯えたような表情を見せた。

彼女の見る先には、派手に着飾った候補生がいる。

先程エルマにぶつかってきた少女だ。

彼女は懐からちらりとなにかを取り出すと、威嚇するようにクロエを見返す。

エルマはことりと首を傾げた。

「時々、周囲　ライバルと思われる人物に対して怯えた視線を走らせるのも普通ですか？　なお、ライバルのほうは時々、紙きれのようなものを取り出しては、ご満悦で眺めています。これらも普通のことですか？」

「普通なんじゃない？　紙きれはたぶん、お守りとか護符とかでしょう？　この場にあって、圧倒的なライバルたちを前におどどするのは、気弱系モブにとって一般的な行動よ」

折しも、イレエネが見ていた少女がおどどと周囲を見回す。そのため、二人は完全に食い違ったまま会話を成立させてしまっていた。

「わかりました。私、彼女をお手本に行動してみようと思います」「いいと思うわ。でも念のため、全体感を忘れないというか……時々候補生全体を見回して、多数派の動きに倣うのよ」「はい」

もはや彼女たちの目標は聖鼎杯優勝などではない。それよりもはるかに難しい、モブ的行動の体現であった。

「それではこれより、聖鼎杯聖女部門を執り行います。候補生たちは、これより配られる鉢をひとつずつ受け取るように」

枢機卿の一人が闘技場の中央から朗々と宣言し、聖女の部の開始を告げる。

今回進行を務めるのは、小柄な老年の枢機卿だ。頼りない毛髪をそよがせる彼こそがまた、この度の依頼を寄越した親ルーデン派の主要人物 チェルソ であった。

チェルソは、子犬のようにつぶらな瞳を潤ませ、そっとエルマに頷きかける。

それは訳すならば、「どうか優勝を」という懇願だ。親ルーデン派の命運を君に託す、とでもいわんばかりの態度で、それに気付いたエルマが逡巡の気配を浮かべたが、そこにもイレエネがすかさず声をかけた。

「なにも優勝するな、とは言っていないわ。あなたの場合、本気で臨むと、きっと聖鼎杯どころじゃない事態に発展してしまう。全力

で優勝から遠ざかる努力をして初めて、ちょうど普通の優勝に落ち着く、私たちはそう読んでいるのよ。あなたの行動は、裏切りでも命令違反でもないわ」

「はい」

エルマが静かに頷いたところに、植物の苗が植わった鉢が配られるはじめる。

候補生に鉢を渡す用務員の中には、冴えない風貌に身をやつしたルーカスの姿もあった。

彼は視線が合うと、「やりすぎないように」と口の動きだけで伝えてきたので、双方向からの懸念を感じ取ったエルマは、真顔で親指を立ててみせた。

ルーカスたちはかえって不安を煽られた。

「今あなたたちに配られたのは、すべてこの闘技場にも植えられている、我がアウレリア国の国樹、アローロの苗です。ただし、これらの苗は、すべて一部を傷つけられている」

鉢が全員に配られたのを見届けると、チエルソはか細い声で説明を始める。

最後の部分でざわめいた候補生たちに、老年の枢機卿は頷いてみせた。

「そう。今回の課題とは即ち、植物の治癒と、育成。鉢の苗を再生させ、かつ誰よりも大きく育てた者が聖女の冠を戴くこととなります」

治癒と育成は、一見似たような能力に思われるが、その実、前者

は破壊されたものを修繕するという「状態を変える」力、後者は対象の持つ性質を発展させるという「状態を強化する」力である。

両者を併せ持つ候補者はまずなく、誰もが完遂に不安を覚えた。いや、先に苗を再生させねば育成はできないので、育成よりも治療の能力のほうが有利ということか。

治療の能力に覚えのある候補生たちが、徐々に落ち着きを取り戻しはじめる。

中には、育成の能力が図抜けているクロエに対し、優越感の滲む視線を送る者もあった。

「周囲の反応を見るに、かなり難しい課題のようね……。エルマ、まさかあなた、実は治療も育成もできる二種の聖力の持ち主、なんてことはないわよね？」

「そもそも聖力を持ち合わせた覚えはございませんね」「そう。そうよね」

イレネの声に、わずかな安堵が滲む。

ついでに言えば用務員に扮したルーカスも、「これなら今回は、エルマ無双もあるまい」と、密かに胸を撫でおろした。

緊張。覚悟。優越。不安。

闘技場に佇む候補生たちの間に、緊迫した空気が張り詰める。

「それでは、候補生たちに神のご加護を。聖鼎杯聖女の部 開始」

チエルソの宣言とともに、少女たちが一斉に鉢を手を取った。

9・「普通」の歌声（1）（後書き）

ようやく話がメインストーリーに差し掛かってきたところで恐縮ですが…次話より隔日投稿とさせていただきます。すみません！！
そして本日、「シャバの『普通』は難しい」2巻が発売されました！
このまま下にスクロールして、ぜひ美麗な表紙をお確かめください。
その勢いで評価なんてして下さったら…泣いて喜びます！！

キャラデザインも活動報告に載せておりますので、よければ覗いて
いってくださいませ。

10・「普通」の歌声(2)

(今日が過ぎれば、こんな日々も終わるのかしら……)

クロエは、手渡された鉢の苗を見つめながら、ぼんやりと考えた。

国樹としてアウレリア中に根を張るアローロの苗は、しかし幹となるべき部分を執拗に傷つけられ、力なく土に倒れている。

さりげなく周囲を見渡す限り、それほどに手ひどく傷つけられている苗はない。

恐らくは、クロエたちの師、ガイドの存在を煙たがっている一派の仕業

(……では、ないでしょうね……)

自らの考えを即座に打ち消して、クロエは苦々しく笑った。

俯いていても感じる、敵意。

聖女筆頭候補として、クロエは入学以降数々の視線に晒されてきたが、こんなにも憎しみの籠もったものは他にない。

正体は、考えるまでもなく明らかだった。

(ルアーナ様は……そうまでして、私を排除したいのね)

ルアーナ。正式な名を、ルアーナ・コンテステイ。

アウレリア国内で権勢を誇るコンテステイ商会の娘で、クロエと同じ父を持つ 腹違いの姉だ。

クロエの母は元はコンテステイ家の侍女で、その美貌から、コン

テストイ家当主アロルドの御手付きとなったのである。

が、同じ年に生まれた異母妹のことを、ルアーナは決して快く思っていない。

聖女筆頭候補という地位にありながら、クロエとその母の家がいまだに治安の悪い片田舎にあるのは、ひとえにルアーナがクロエのコンテストイ家入りを拒否しているがためだ。

いや、拒否するくらいならともかく、彼女の敵意は鮮明で、クロエに持ち込まれる養子縁組の誘いや、縁談、留学、奨学金、その他あらゆる幸福への手掛かりを、ことごとく妨害してくるのである。

その手法も、針を仕込んだり服を裂いたりといった直接的なものから、悪意ある噂の流布や、周囲への攻撃など、精神を苛むもので多岐にわたる。

以前、気さくに声をかけてくれたクラスメイトの一人が、暴漢に襲われかけたと聞いてから、クロエは自分と同格か、それ以上の能力の持ち主としか友誼を結ばないことを決めていた。

結果、友人と呼べる存在は、圧倒的な聖術と貴族の身分で他者を寄せ付けないラウル、そして、貴族令嬢の嫌がらせなど歯牙にもかけない下町出身のジーノ、その二人くらいのものである。

（あの二人なら大丈夫と、思っていたけど……）

クロエが彼らに寄せる信頼は厚い。

だが、ルアーナは策を練り、その二人までも巻き込むような行動に打って出た。

クロエはきゅっと握った拳で、無意識に胸元を押さえ込む。そこには、先日、ルアーナが突きつけてきた契約書が忍ばせてあった。

よくつて、売女の娘さん。

あなたの行動次第で、お友達がトリニテートの栄光を掴むか、うらぶれた元候補生の一人に成り下がるのかが決まるのよ。

嫌らしく吊り上がった、紅を塗りたくった唇を思い出す。

ルアーナが持ちかけた内容は、こうだった。

クロエはトリニテート入り 聖女部門優勝を辞退せよ。そうすれば、ラウルとジーノのトリニテート入りを全面的に支援する。

逆にクロエが聖女になったならば、内定後に「売女病」のことを周囲に言いふらして、トリニテートの成立ごと妨げてやる、と。

売女病とは、アウレリア国内で時折見かけられる、手指の爛れと目の異常を主症状とする病だ。

進行すれば失明すら免れない、恐ろしい病。

それに、クロエの母が罹患してしまったのである。

この病は女性、特に身持ちの悪い商売女にばかり発現し、アウレリアが誇る高水準の癒術でも快癒が難しいことから、聖力を退ける不徳の病 即ち、売女病などという蔑称で呼ばれる。

聖女信仰が盛んで、女性の貞潔を尊ぶアウレリアの民からすれば、恥ずべき病であり、治療を受けるのも困難だというのが現実であった。

クロエの母、ゾーエは、ただでさえ困われ者。

世間体の悪く、しかも快癒の見込みのない売女病に罹った彼女を

診てくれる聖医導師は少ない。

クロエが持つのも「治癒」ではなく「育成」、それも植物を主な対象とした能力に過ぎず、治療には役立たない。

病が病であるだけに、ラウルなど聖術師たる友人に内実を明かして頼ることもできず、結局、クロエたちは、細々とした内職で医療費を賄いつつ、コンテスト家の援助を当てにせざるをえないのであった。

（敬虔なアウル教徒の多いアウレリア国内で……それも聖女の母が売女病だなんて……だめだわ、露見すれば確実に、私は聖女の座を引きずり落とされることになる）

最初から聖女になれない、というならまだましだろう。

問題は、トリニテートの一人に内定した後に、ゾーエの病が発覚することだ。

トリニテートは、聖女、聖剣士、聖術師の三人が揃って初めて成立する。

聖女が不適合者だったので、補欠を繰り上げました、とはいかないのは、三十年前の一件を見ても明らかだ。

（ガイド先生は、元は聖剣士に内定されていた。でも、当時の聖女が亡くなったせいで、トリニテート自体が成立せず、身分を持って余して学院教師に身を落とすことしかできなかつた……）

その後、学院で教鞭を揮うことの重要性に気付いた枢機卿の一部が、ガイドに倣って続々と学院入りした結果、ガイドの教師転向は、今ではだいぶ自然なことと受け止められている。

が、長く聖剣士としての立身出世を望んでいた男が、突如学院という閉じた世界に押し込まれるのは、ずいぶんな挫折感があった

ろう。

現に、周囲もガイドに対して、腫れ物に触るような態度をとることが多い。

(ラウルくんも、ジーノくんも、お情けでもらえる枢機卿の地位や、腫れもの扱いの学院教師の座なんて望んでいない。ふたりが望んでいるのは、あくまでもトリニテートという、至高の権力であり、身分)

昨夜交わした会話を思い出し、クロエはそつと眉を寄せる。

二人には、叶えたい夢、燃える野望、それに向けた溢れんばかりの情熱がある。

それを自分が妨げることは、絶対にあってはならない。

ルアーナの持ちかけた契約の巧みなところは、クロエの聖女辞退を条件に、ゾーエの治療の継続だけでなく、ラウル、ジーノへの支援を約束したところだろう。

貴族であるだけにしがらみの多いラウルと、下町出身であるだけに枢機卿たちからの支援を得にくいだろうジーノ。

権威あるコンテストイ商会の後押しがあれば、二人とも、スムーズにトリニテート入りがなされるはずだ。

(私さえ引けば……ラウルくんも、ジーノくんも、夢を叶えられる……)

押さえた胸元で、かさりと紙の擦れる音がする。

結局、クロエは、ルアーナが突きつけた契約書にサインしたのだ。彼女たちがそれぞれ一部ずつを保有するその契約書は、聖なる世

界樹の繊維から作られたもので、書かれた内容は絶対となり、契約者を縛る。

契約を反故にしようものなら、クロエの人生にはあらゆる禍が降ってかかるだろう。

（それも、今日まで。こうして、なにもせずにぼんやりと立っていれば……すべて、済む）

クロエは、目の前の鉢をぼんやりと見つめ、小さく「ごめんね」と呟いた。

自分のせいで傷を付けられ、すっかり地に伏した苗の姿が、見ていて苦しかった。

「もう！ いったいなにをしているのよおおお！」

ところが、そんなクロエを叱り飛ばすかのように、鋭い怒声が響いた。

すぐ隣 闘技場の一番端に陣取った、ルーデンからの候補生、その侍女である金髪の少女だ。

一応声は潜めているようだが、主人であるはずの黒髪の少女の胸倉を掴み上げんばかりに詰め寄っている。

クロエは思わず、耳を澄ませてしまった。

「だから！ エルマ！ 平凡！ 平凡よ！？ この流れでどうして神妙に、怪しげな薬品の数々を取り出すのよ！」

「怪しげとは失礼な。これは兄直伝の、あらゆる植物を死細胞からでも急激修復し、同時に葉緑体に働きかけて光合成と成長を爆発的に促す薬品で」

飄々とした様子で語る少女の名は、そう、たしかエルマというのだった。

昨日の控え室での一件、そして恩師グイドの警戒から、クロエもまたちらちらと視線を向けてはいたのだが　やはり、その姿は地味で、冴えない少女にしか見えない。

本当に彼女が、四方向からの聖術をさらりと躲し、元聖剣士グイドをもつて「実力がわからない」と言わしめたほどの人物なのだろうか。

ルアーナとのいざこざも一瞬だけ忘れ、クロエはそんな疑問を胸に抱いたが、いやしかし、少女から放たれる言葉の数々は、たしかに耳慣れぬ単語に満ち、そして奇妙な迫力を湛えていた。

「だからね！？　急激とか！　爆発的とか！　明らかに平凡ルートから両足踏み外してるでしょうが！　本当に周囲を見回してその判断なの！？」

「いえだって……、皆さま、めいめい最善を尽くしておられるようなので、聖力に心もとない私としては、己の出来る最善の方法を取ろうと……それが『普通』なのかと　あつ、イレーネ、なにを」「おバカああああ！」

イレーネというらしい侍女は、激高したのか、エルマの握っていたガラスの瓶を奪い取り、素早く蓋を外して床に向かって投擲した。ガラス瓶が石畳に触れる前に、エルマが素早く両手で瓶と蓋のそれぞれを掴み取ったが　恐るべき反射神経だ　、わずか一滴、瓶の中で波打った液体が、ぴつと跳ね飛んでしまう。

その滴は、本当に偶然、クロエが見つめていた鉢の中に落下した。

(え…………?)

一瞬、鉢の中の土が震えたように思えて、思わず目を擦る。
そのさらに次の瞬間には　土に倒れていたはずの苗が、みるみる茎を太らせ、ぴんと葉を左右に張り出した。

(ええええええええええええっ!?)

思わず、心の内で絶叫する。いや、一部は口や鼻から漏れ出て、「ふす…………っ!?’と奇妙な音を奏でた。

(な…………っ!?’ え!?’ えええっ!?’ ええええええっ!?)

そんなまさか。

聖力もなしに、どうしてここまで生命が回復するのだ。

アウレリアは、他国に比べ聖医導師の数に恵まれているぶん、逆に医学や科学の水準は低い。

目の前で起きた現象は、「薬を与えたら緑が元気になりました」で済ませるには異常極まりなく　いや、間違いなく、医療科学先進国であっても異常だと思うのだが　、クロエはその濃緑の瞳を見開いて、まじまじと隣人を見つめてしまった。

(や…………薬品というのは、ルーデン独特の言い回しで、本当は聖水…………いえ、エリクサー霊薬だったりするのかしら…………?)

そう考えれば、まだしっくりくる。

「こんな薬品を用意して臨むなんて、どれだけやる気満々だったの

よあなたは!」

「え、でも、その日の気分に合わせて、薬品の小瓶の二、三は、鞆に忍ばせておくものではございませんか?」

「香水瓶じゃないのよ!? っていうか神聖なこの場、この局面で、人工感ばりばりの化学薬品持ち出してくるの、あなたくらいだからね!? ほら、その不穏な瓶を早く仕舞って! 周囲を見るのよ、わかってる!?」

「周囲……」

横ではまだ、早口の会話が小声で展開されていたが、クロエはそれを衝撃のあまりぼんやりと聞き逃し、ぎこちない動きで鉢に向き直った。

すっかり完全な葉の形を取り戻し、つやつやと陽光を弾き返している苗。

なんだか苗が快哉を叫んでいるような幻覚さえ抱いて、クロエは思わず、「よかったね……」と呟いてしまった。

植物に愛されやすい体質。

恩師ガイドやラウルたちの言う、「希代の育成能力がある」というのには正直自信がないが、土に触れたり、緑を育むことが好きなこと自体は、事実だ。

「 光あれ 茂れる葉の そのあわいに……」

ほんの一節だけ、口ずさむ。

謝罪と、感謝と、祝福と。

元気に回復した苗を前に、素直な感情が紡いだ、素朴な歌だった。

すると。

ふわ……っ

「……………!？」

いつになく強い光が鉢の周囲に溢れ、思わず肩を揺らしてしまつ。硬直するクロエの前で、苗は音が鳴りそうなるほど勢いで背丈を増し、胴を太らせ、あつという間に鉢を砕き割らんほどの若木へと成長した。

「おお……!」

「一瞬で若木になったぞ！　すげえ……!」

観客たちがどよめくのが聞こえる。いや、クロエ自身もかなり動揺していた。

植物の育成を促す己の歌声。

しかし、こんなに劇的な効果を見たのは初めてだ。

「　歌声で育成。なるほど」

と、左隣から涼やかな声が聞こえる。

群集の声をかき分けるように、すつと耳に滑り込んできたその音に、ついクロエが惹かれて振り返ると、視線の先で、眼鏡姿の少女がおもむろに頷いていた。

「イレーネ、私、ようやくわかりました。やはり時代は、　　オー
ガニックですよね」

「……………はい？」

奇しくも、イレーネなる侍女と、声が重なる。
そしてその後　クロエは、奇跡を、見た。

11・「普通」の歌声(3)

エルマがイレーネに叱り飛ばされ、怪しげな薬品を布袍にしまい込むのを、ルーカスは厚底眼鏡の奥からほっとして見守っていた。

(でかした、イレーネ)

内情を知った彼女は、ルーカスの意を汲んで、実に細やかにエルマ無双の阻止に回ってくれる。

今も、薬品を仕舞わされて不満気なエルマに、滾々とイレーネが説教するのを見て、ルーカスは用務員控え室からこっそりと拍手を送った。

エルマは常に予測不可能な動きをする。

いくらルーカスが用務員の身分を生かしたところで、化学薬品などという力技を使われてしまえば、平凡化計画は一気に頓挫してしまうことだろう。

(今回は……今回の任務でだけは、エルマに活躍をさせるわけにはいかない)

ルーカスは、手すりを握る腕に力を籠め、舞台を見守った。

と、イレーネに説得されたらしいエルマが、まじまじと隣の候補生 たしかクロエとかいう、聖女筆頭候補と噂される少女だを見つめ、なにか納得したように頷く。

どうやら、化学薬品で聖女的効能を実現するのはやめて、隣人に

倣って歌でも歌ってみようと思いついたらしい。

軽く喉に触れ、鉢に向かって両手を組むような仕草をした。

(薬に比べれば、まだこちらの方が穏やかか……)

ルーカスはほっとした思いで、一連の行動を見守る。

先日、魔蛾の群れを誘惑しおおせたほどのエルマの歌声ではあるが、おそらく今回に限っては、それが結果に結びつくことはないだろう。

(なぜなら……彼女の歌声はおそらく、相手を誘惑し、墮落させる、魔性の声だから)

主神アウレールの庇護の厚いこの地、それも神域に数えられるこの学院において、彼女の能力は弱まっているはずだ。

じっと息を凝らし、ルーカスは遠くから、闘技場に佇むエルマのことを見つめた。

彼女は鉢を注視し、なにかを口ずさみはじめている。

その声は人込みと距離に紛れ、ここまでは届かないが、静かに歌っているのだろうということがわかった。

が、以前の魔蛾のときとは異なり、鉢に目立った動きはない。

他者の失敗を喜ぶなど騎士の恥だが、ルーカスはこの時、心底ほっとして、静かに拳を握った。

(よし)

実は、万全を期して、彼女に渡した鉢の苗は、その根を筆っている。

つまりあの鉢に挿されているのは、苗というより草きれ同然。

一般的に歌を聴かせると植物の発育がよくなるとは言うが、よしんばエルマが魔力ではなく、純粹な癒しの歌声を浴びせたところで、苗が育つことはあるまい。

もはや、完全に死に絶えた命なのだから。

エルマは歌い続ける。

隣の候補生のスタイルを意識してか、両手を組み、いかにも清純な少女のように、そつと唇を動かして歌声を紡いだ。

美しい音色なのだろう。

イレエネも、隣の候補生もうつとりとした表情で聞き入っている。

が、エルマは手ごたえの無さを感じてか、不思議そうに首を傾げた。

(よし、順調に不調だ)

エルマが歌を中断し、口を閉ざす。

彼女はじいっと鉢を見つめると、それから周囲をちらっと見まわした。

エルマとクロエを除いた候補生たちは、もはや鬼気迫ったと形容している様子で、舞を踊ったり聖言を唱えたりしている。

中には髪を振り乱している者もあつたし、化粧も剥げ、せつかくの衣装がはだけている者もあつた。

それでも能力の制御が難しいのか、彼女たちの鉢は、肝心の苗ではなく、その周囲に生えた雑草が育ってしまっているものが目立つ

た。
時折、「やだもうつ、雑草じゃなくて苗を育てたいのに……っ」
といった、苛立ちの声も聞こえる。

エルマはそれらを見て、ぽつんとなにかを呟いた。
読唇術を会得しているわけではないが、ルーカスには、

ぜんたいかん。

と独白したように見えた。

(全体感……?)

首を傾げるルーカスをよそに、彼女はなにを思ったか、いきなり
眼鏡を外してしまう。

「……………!？」

会場のどよめきも気にせず、彼女は顔をごしごしと擦り、その美
しい素肌を完璧に露わにしたうえで、さらにはお団子髪に手を差入
れ、ばさりとそれを乱した。

さらには、制服の襟元にも指をかけ、乱す。

「……………ま……っ」

白い首と細い肩を覆う、緩く波打つ黒髪。

夜明けの空のような、不思議な色を湛えた潤んだ瞳。完璧に整っ
た顔立ちの中で、乱暴に擦られた唇だけが妙に紅い。

そこにいたのは、人目を惹き付けずにはいられない、乱れ髪の少

女。

清楚なはずの白い学生服が、かえって滲み出る色香を引き立てる、魔性のような美少女だった。

「待て……っ、おまえ……！」

ガタツと椅子を蹴飛ばして闘技場に向かって駆けつけるも、もう遅い。

エルマは鉢をすいと見下ろすと、先ほどまでの静かな歌いぶりが嘘だったかのように、ぱつと両手を広げた。

途端に、彼女の醸し出す雰囲気は劇的に変化する。

そうして、

ああ……！

まるで舞台上の歌姫のように、大仰な身振りで、髪を振り乱し、壮麗な歌声を披露しはじめた。

来て わたしのもとへ さあ

いや、それは歌「姫」というよりは、娼婦のような。
それとも、女王のような。

艶めかしく、傲岸不遜で、すべてを従えることになんの疑問も抱かぬ力強い声。

はやく もっとはやく さあ

まるで脳髓を溶かしてしまうような、甘い、甘い、声だった。

……さあ！

女王の「命令」が響き渡る。

同時に、ルーカスを含む観衆たちは、奇妙な物音に気が付いた。

ゴゴ……ゴゴゴ……

歌声ではもちろんない。

ざわめきでもない、どちらかといえば雷に近いような、

地鳴り。

次の瞬間、

ドオオオオ……ッ！

「きゃああああああっ！」

「うわああああああっ！」

轟音とともに、石畳が割り砕ける。

観客たちは一斉に腰を浮かし、互いに縋り合った。

咄嗟に獲物を探ったルーカスは、だが目の前のありえない光景に
一瞬動きを忘れてしまう。

石畳の割れた先。

美しく設えられていた観客席のその周囲。

わずかに土を覗かせていたその場所から、ありとあらゆる植物が、
恐ろしい勢いで成長を続けていた。

樹が、根が、花が、葉が、蔓が。

まるで魔獣の躰のように、獰猛さを感じさせる速さで膨らみ、周囲を飲み込んでいく。

ひととき巨大な木の根は石畳を真つ二つに横断し、その上を、花をつけた蔓が這う。

不思議にも人々を避け、石畳を割り砕きながら植物たちが一心に進む先　そこには、エルマの見下ろす鉢があつた。

成長しながら「招集された」植物たちは、まるで統制された兵のように、ぐるりと鉢を取り囲み、そこでぴたりと動きを止める。

鉢には、いまだ苗がくたりと土に伏したままであつたが　それは、草きれというよりはむしろ、沈黙を貫く帝王の亡骸のようにさえ見えた。

そこに来て、歌っていたエルマはゆるりと両手を下ろし、おもむろに口を開いた。

「　やだもう。雑草じゃなくて苗を育てたいのに」

外して、床に伏せていた眼鏡が、なぜだかきらりと光る。

心なしか、エルマの顔は誇らしげだった。

彼女はくるりと振り返り、イレーネに向かって眉を上げてみせる。その意味は　ああ、不幸にもルーカスト、そしてイレーネにはわかってしまった　、

これなら、「普通」ですよね。

「……………」
「……………」

ルーカスと、イレーネが真っ白な顔で拳を震わせる。

しかもあるうことが、エルマはにこにここと追い打ちを掛けてきた。

「化学薬品を使えば、かなり精度高く苗だけを育てられたのですが、やはり必死さを滲ませたオーガニックな方法で、うっかり他まで育ててしまうというほうが、それっぽくていいですもんね。私、やっとなわかった気がします。イレーネ、いつもアドバイスを本当にありがとうございます」

二人は、己がエルマから化学薬品を奪ったがために、かえって事態を悪化させてしまったことを悟った。

それにしても、化学薬品に頼らぬ「自然」な方法を取った結果、「超自然的」な現象が引き起こされるのはなぜなのか。
嫌みか。嫌みなのか。

あまりに切実な思いが込み上げ、両者とも言葉を詰まらせる。

「……………」
「……………」
「ば？」

呼吸三つ分ほどの沈黙の、その後。

奇しくも、イレーネとルーカスはぴったりのタイミングで魂の叫びを上げた。

「ばか

！」

12・「普通」の歌声(4)

クロエは、今日の前で起こっていることが理解できず、ぽかんと口を開けた。

育成、などという言葉で片付けるにはあまりに凄まじい現象。突如として露わになった、少女の人外じみた美しさ。そのすべてが、理解の範疇を超えている。

絶句していると、隣では我に返った侍女と、駆けつけた用務員とが、エルマなる候補生をかくかくと揺さぶりはじめた。

「エルマ……！ あなたね、あなたね、あなたね……っ！」

「なにをどうしたら闘技場を割り砕く展開に……！」

どうやら、彼らもまた滑らかに言葉が出てこない状態であるらしい。

途切れ途切れに糾弾されると、エルマは少し戸惑ったような表情を浮かべた。

「え……？ ほかの皆さまと同じように振舞っただけですが……」

「半壊した闘技場を見ても、あなたはなにも疑問を覚えないわけ！？ 土を破り、石畳を砕き上げてよきによき植物が生えてきても！？」

「え……よく【暴食】の父も建物を全壊させていましたし、このくらいなら数時間くらいで改修できるかと。それに」

あろうことが、そこで彼女はクロエのほうに振り返り、ちよつと

絶るような上目遣いで尋ねてきた。

「普通、心を込めて歌ったら、植物ってよく育つものですね？」
ないわ！

クロエの心に、初めて「ツッコミ」という概念が芽生えた。

が、彼女の性格と、そして見つめてくるエルマの瞳の、そのあまりの美しさに、クロエはおどおどとこつ答えるに留めた。

「そ……っ、……そうです、か、ね……っ？」

半泣きだった。

自分は今、いったいなにに巻き込まれようとしているのだろう。

ところがエルマは、そんなクロエの動揺をよそに、まじまじと鉢を覗き込んでくる。

そうして、立派に成長したアローロの樹 エルマの歌声の流れ弾を受けて、さらに大きくなっていった に、感嘆の溜息を漏らした。

「素晴らしいですね。ほかの雑草や植物を巻き込むことなく、ただアローロだけが立派に成長している。しかもこの枝ぶり、葉姿、幹の肌 小宇宙を構成する盆栽BONSAIの在り方に通ずる、有機的な世界観を感じます」

「ええつと……っ？」

なにやら褒められているようだが、全体的になにを言われているのかさっぱりわからない。

「あの、でもこれ、私の歌声というよりは、その……あなたの霊薬と、歌声に反応しただけの……ような……っ」
「霊薬？」

噛みながら辛うじて指摘すると、相手はきよとんと首を傾げた。ガラス瓶に入った、と補足すると、ようやく「ああ」と納得したようで、きよろきよろと地面に視線をさまよわせる。

どうやら鞆にしまったはずの布鞆は、石畳が割り砕けた衝撃で、どこかへと跳ね飛ばされてしまったらしい。

見れば、候補生たちの幾人かも、すっかり腰を抜かし、あるいは根に足を取られて、尻もちを突いてしまっている。

とそこに、

「き……っ、きやあああああっ！」

甲高い悲鳴が響いたので、一同は素早く振り返った。

見れば、複数の取り巻きに囲まれた派手な少女　クロエの異母姉、ルアーナだ　が、真っ青な顔をして、石畳の上で腰を抜かしている。

いや、正確には、足を絡み取られて身動きが取れないでいるのだ。なにか四角い紙片から伸びる、蔓のようなものに。

「なんだあれは……？」

「蔓の形状を見るに、世界樹の一部のようですね。見たことがある気がします」

眉を顰めたルーカスの独白を、エルマが淡々と拾う。

「神秘的な力を有するとかで、昔はその繊維で作った紙を契約書等に用いていたようですよ。乱獲が進んだ結果、絶滅危惧種に指定され、今では厳重に保護されながら、樹海の奥深くにだけ生息しているはずですよ」

「なぜそんなものがここに？」

「はて」

エルマは首を傾げ掛けてから、「あ」と呟いた。

ルーアーナが尻もちを突いた、そのすぐ横には、先ほど軽く蓋をしただけの薬品瓶が転がっていた。

瓶の中身はほぼ空になっており、よく見れば、四角い紙きれのようなものは、ぐっしょりと濡れそぼっている。

世界樹の繊維でできた書類が、薬液を浴びて異常成長し、一部元の姿を取り戻してしまったことは、誰の目にも明らかであった。

「さすがは【貪欲】のお兄様ですよ」

「つまりあれは、世界樹から作られた違法の契約書ということか」

紙片の隅からは、うねうねと世界樹の蔓が伸びて、青褪めるルーアーナを拘束しようとしている。

ルーカスは、そういえば今の自分は用務員だったことを思い出し、「失礼」と声を掛けて、素早く蔓を引きはがした。

「こちらは、闘技場管理の観点から、運営側にてお預かりします

……ん？ 『売女病』？」

「ま……っ、待ちなさい……！」

と、蔓の付け根、未だ紙片の形を残している部分に、不穏な単語が書き連ねられているのを見て、ルーカスは眉を寄せた。

ルアーナの制止もよそに、その場で契約書の内容に目を通す。

「……これは、どういったことですか？」

弱きを守る騎士道精神から、つい低く問うと、ルアーナはぐっと息を呑んだ。

その時点で、ようやく異常事態から我に返ったほかの用務員や主催者たちが、わらわらと舞台上へと集まりはじめている。

中には、クロエを案じて駆けつけたラウルやジーノの姿もあった。

彼らは、エルマの鉢に集まった植物たちに畏怖の視線を送ると、次いで、そのエルマたちに取り込まれているルアーナのことを見つめる。

一斉に厳しい視線に晒され、パニックに陥ったらしいルアーナは、顔を引き攣らせると、自棄になったのか尻もちを突いたまま叫びはじめた。

「どうもこうも……っ、た、単なる事実を書いただけだわ……！
その雌猫が、間違っても聖女なんかにならないようにね……！」
「……なんだと？」

雌猫の言葉が、青褪めながら佇むクロエを指しているのだと理解すると、ラウルとジーノはさっと顔を強張らせた。

だが、それでいよいよ、ルアーナの心のどこかが弾けてしまったらしい。

彼女は目を血走らせると、口の端から唾を飛ばして罵った。

「雌猫！ 雌猫よ、わたくしとお母様から、お父様を奪った汚らわしい売女の娘、クロエ！ そんな娘が、わたくしと血が繋がっているというだけでもおぞましいのに、聖女になるうだなんて！ でも……でも、神様はちゃんと見ておられた。だから、女狐はお父様に捨てられたし、あの女は恐ろしい病に掛ったのだわ。売女病にね！」

「売女病……？」

喚くルアーナを厳しい目で見つめていた周囲が、最後の言葉で動揺を見せる。

それほどまでにその病の名は、人々から嫌悪の念を引き出すものであったのだ。

周囲の氣勢が削がれたのを敏感に感じ取ったルアーナは、そこですすます語調を強めた。

「ええ、そうよ、売女病！ ふしだらな娼婦に神が与えた罰、光を失う恐ろしい病！ そんな病を得たあばずれの娘が聖女になることを、神は許されるのかしら？ いいえ、許すはずがないわ！ だからわたくしは、よき信徒として、国民として、クロエの不遜を止めようと策を講じた、それがその契約書よ！」

主張するうちに、彼女は自身の正しさを確信しはじめたらしい。振る舞いは徐々に堂々としたものに代わり、むしろクロエのほうが見つ青になっている。

生徒や観客は、戸惑いを浮かべて両者を見つめた。

おそらくルアーナは、聖女筆頭候補のクロエになんらかの不自由を課す契約を強いたのだ。

それはいかにも卑劣で、違法の世界樹を用いたこと含め、候補生として恥ずべき振舞いである。

だがしかし、クロエの母が、あのおぞましい病、天罰ともあだ名される売女病に掛かっていたのだとしたら。

「ク……、クロエ……。本当なのか……!？」

やがて、恐る恐るジーノが切り出す。

涙目で拳を握りしめるクロエに、ジーノは怯んだように口を引き結んだが、ややあって、意を決したように声を張り上げた。

「 だとしても！ 脅して人に言うことを聞かせようだなんて、そんな卑怯なこと、あるかよ！ クロエは悪くない！ 売女病に掛かったのは……あくまで母親で……」

「そうとも」

ラウルも、力強く頷く。彼はクロエをかばうように立ちながら、その端正な顔で周囲を睥睨してみせた。

「母親の病とクロエは、あくまで切り離して考えられるべきだ。糾されるべき行いをしたのは、あくまでルアーナと、母親であって

」

「そうでしょうか？」

だがそこに、涼やかで静かな声が響く。

するりと耳に入り込んでくる声に、はっとして人々が振り向くと、そこには例の美貌の少女が、豊かな黒髪を肩に流しながら佇んでいた。

彼女はつと横を向き、契約書を握っている冴えない用務員に、淡々と尋ねた。

「でん……用務員殿なら詳しいかと推察してお尋ねするのですが、ここで言う売女病とは、性病の一種ですか？」

「……………詳しいと思われるのは不本意ですが……ええ、実に不本意ですが、そうです」

用務員は、なぜだかやたら前置きを強調してから、首肯する。

「手足が爛れ、視力が落ち、進行すると失明する病です。女性しか発症せず、癒術でも癒えにくいので、アウレリアではそう呼ばれ蔑視されています。あくまで一般知識として知っているというだけです」

「なるほど」

後半の強調表現はさらりと聞き流し、エルマは神妙な表情で頷いた。

「であれば やはり最低、としか言いようがありませんね」

その低く、断定するような口調に周囲が怯む。

かつとなったジーノとラウルが、クロエの前に出ながらエルマに向かって叫んだ。

「どういう意味だよ！？ クロエが悪いとでも言う気か！？」

「彼女に対する侮辱なら、我々も黙ってはいないぞ」

「え？ いえ」

だが、血気盛んな牽制はしゃらっといなされ、代わりに特大の爆

弾が投下された。

「悪いのはクロ工様でもお母君でもなく、もちろんそのご夫君
いえ、お母君をやり捨てたというミジン」
「糞野郎ですよね」

13・「普通」の歌声(5)

「……………!？」

今、この天使のような美少女の、花のように可憐な唇から、とんでもなく俗悪な単語が紡がれた気がする。

硬直する周囲をよそに、エルマは明らかに怒気をはらんだ声で続けた。

「女性にのみ発現する、四肢の爛れと視細胞の硬直狭窄を主症状とした病。それは、私の知識では、『線虫病』に分類されます。なぜならばその原因は、病原菌でも神の怒りでもなく、ミジンコ糞野郎が植え付けられ、植え付けた、寄生虫だから」

「寄生虫……………?」

呆然と反復する観客たちの前で、エルマはごそごそと布靴を漁りながら続けた。

「通常、羊やヤギといった家畜の直腸に生息するその寄生虫は、ミジンコ糞野郎の逸脱した性的嗜好によつて、男性器を経由し、女性の体内に寄生、成長します。癒術で癒えぬのは、当然のこと。術の発動に不可欠と言われるイメージが、病原菌と寄生虫では大幅に異なるうえに、基本的に聖力とは命を育む力。癒術でいくら体を回復させたところで、寄生虫げんいんもまた死滅させられないのだから」

「……………!」

明快に解き明かされて、一同が絶句する。

エルマは、静かにルアーナを見た。
そして、売女病の名を聞いた途端に、クロエへの嫌悪を示した観客たちのことも。

「おそらくお母君は……、唯一彼女にだけは、原因の心当たりもあつたことでしょう。けれどそれを公言することなく、耐え忍んだ。彼女以外に被害者が出なかつたのは、彼女が一切ほかの異性と交渉を持たなかつたから。そのような女性を、この国では『娼婦』だとか、『あばずれ』と呼ぶのが普通なのですか？」

「……………」

周囲の人間の顔色が変わる。

特にルアーナのそれは青を通り越し、紙のような白さになっていた。

エルマの主張が真実なら、
彼女は被害者ではなく、加害者の娘なのだから。

張り詰めるような沈黙の中、エルマはくるとクロエに向き直つた。

それから、そつと眉間を開き、まるで聖母のように慈愛深い表情を浮かべた。

「クロエ様、……………お辛かったですね」

「……………」

予想外の人物からの労りに、再度クロエの瞳が潤む。
ただしそれは、先ほどまでのものとは、まったく異なる種類の涙であつた。

エルマは優しくクロエの髪を掬い、耳にかけてやる。
そうして、クロエの腕を取り、彼女の前に置かれていた鉢へと触れさせた。

「ですが、ご安心を。実は私の兄がこの病への特效薬を開発しております。私もレシピを知っております」

「え……………？」

「主原料は奇しくもこの、アローロの樹。この樹液を酸で反応させ、晶析、分離させることで原薬を得られます」

「え……………！？」

「なお、時間の都合上、完成したものがこちらにございます」

「えええええ……………っ！？」

もう、どこからツッコんでいいかわからない。

布靴から取り出した小瓶をすちゃっと掲げたエルマの前で、クロエは目をまん丸にして立ち尽くした。

そして、ただただ、目の前の少女のことを見つめた。

植物を意のままに操る圧倒的な能力を持ち、クロエが抱えていた悩みを根底から切り崩し、特效薬まで差し出してみせる、人とは思えぬ美貌の少女。

その姿に、後光が射しているように思ったのは、なにも自分だけではないだろう。

「ど……………、どうして……………私のことを……………助けてくれるの、ですか……………？」

問いながら、知らずクロエの頬には涙が伝いはじめていた。

「縁もゆかりもない……他国の、ライバルの筆頭とも言われる、私のことを……なぜ……？」

奇跡だ。

これは奇跡だ。

渡された小瓶の、その力強い重みを感じながら、クロエは、この幸運を本当に受け取っていいのかを悩み、問うた。

「なぜ……？」

「みかじめ料です」

「……はい？」

そして戸惑った。

なんだか、文脈から外れまくった単語を聞いた気がする。

会話に取り残されたクロエに、エルマはなにを思ったか、爽やかな笑顔を浮かべてみせた。

「失礼、レッスン料のようなものだとお考え下さい。あなた様の姿に、学ぶところが多くございましたので」

「わ……私なんかから……？」

「ええ。あなた様からは、オーガニック……自然体の大切さを教えていただきました」

よく　　というか、さっぱりわからない。

自分の振る舞いから、果たしてこの奇跡のような少女が学ぶことなど本当にあるだろうか。

クロエは混乱しながら必死に考えた。

いや、それともこれは反語的表現というアレかもしれない。
理不尽な状況に抗議すらせず、じつと感情を殺して過ごしていた
自分を見て、自然に振る舞うことの重要性を再認識した、といった
主旨の。

（私はいつも……いろいろなものを、押し殺して、見ない振りをして……そればかりだったから）

ふと、昨夜ラウルたちと交わした会話を思い出す。
彼らはクロエのことを優しいと評した。器が大きいとも。

だが、本当の自分はそんなものではないということは、誰より本人が知っている。

（私はただ……臆病だっただけ。本当は嫌だったことも、争うのが怖くて言い出せずに、じつと黙り込んでいただけ）

「あの……」

クロエは意を決して顔を上げる。

しかし、彼女が口を開くよりも早く、

「冗談じゃないわよ！……ぜんぶデタラメよ、詐欺だわ！」

甲高い女の声が闘技場に響き渡った。
ルアーナだ。

彼女は顔を引き攣らせたまま、エルマとクロエを指さして叫んだ。

「みんな、そのルーデン女に騙されているのよ！ だってそうでしょ？ あの女が最初にお母様からお父様を奪ったのは事実よ。あの女は汚らわしい売女なの！ 加害者はあなたたちで、わたくしたちは被害者！ それは、揺るぎない事実なのよ！」

燃えるような瞳、力強い口調。顔は強張っていてもなお、彼女には年頃の少女以上の迫力がある。

それにいつも圧倒され、黙り込んでいたのはクロエだ。

自分だけが我慢すれば、などという自己憐憫に浸かり込み、決して戦おうとしなかった。

「ルアーナ、てめえ……！」

「言わせておけば」

血相を変えたラウルとジーノが、今また、クロエをかばおうと前に出る。

しかしそれを、クロエは初めて自らの意志で制した。

「待つて」

ちらりとエルマのほうを見て、それからルアーナを見据え、息を吸い込む。

初めて自らの感情を解放する、その心臓が震えるような感覚に、頬が熱くなった。

「ルアーナ様。私、……あなたのことが、大嫌いです」

声は思いのほか、凜と響く。

ルアーナは、まるでか弱いだけの小動物が突如噛んできたともいうように、最初、ちよつと目を見開き、それから呆れ笑いの形で

吐息を漏らした。

「……………は。そう」

「大嫌い。数少ない私の友達を傷つけた卑劣さも、母のことを口汚く罵るその言葉遣いも、取り巻きをお金で購う嫌らしさも、ずる賢さも、視野の狭さも、ヒステリックなところも、全部」

ルアーナからしてみれば、妾の子に嫌われたところで、それがどうしたという思いなのだろう。

だが、クロエにとっては、誰かを明確に「嫌う」ということは、相手を傷つけることも辞さない、その覚悟を決めるということは、大きな、とても大きな決断なのだ。

「死ねばいいとは思わない。それは、やはり思えない。けれど、苦しめばいいと思います。あなたが私を苦しめたのと、同じ分だけ」

誰かの苦しみを願うことは、恐ろしいことなのだと思っていた。嫌うこともまた。

卑劣で、残忍で、禁忌。

相手のことを許せるからではなく、「してはいけないこと」を許せる自分が許せないから、クロエは抵抗をしなかった。

けれど、それではだめなのだ。

だって、実際にルアーナへの怒りは、傷つけられた悲しみは、捌け口を求めて心の底に蠢いていた。

それを無理やり押し固めたところで、事態は沈静するどころか、悪化しただけだった。

もっと早くこの怒りに向き合って、ルアーナに対峙し、声を上げ

ていれば。

もしかしたら、母の病の原因だって、もっと早く解明されたのか
もしれない。

いらぬ不名誉は避けられたのかももしれない。

自分に必要だったのは、暴れる負の感情を、固い殻の中に押し込
めることではなく、きちんと外へ解放してやることだったのだ。

（猛々しい巨木や蔓を制御し、石畳を割り砕いてみせた彼女のよう
に）

クロエは、これまで無意識に握りしめていた右の拳を、そっと緩
めてみた。

これまでずっと、感情が溢れそうになるたびに、握り込んでいた
拳。

「奇しくも、私たちどちらも、ミジンコ糞野郎の娘ではありません
か」

「……………っ」

過去にクロエに向けてきた暴言が、倍にもなって返ってくる事態
を理解し、ルアーナが青褪める。

クロエは、愚かなルアーナに微笑みすら浮かべながら、右手の拳
から、ゆっくりと親指だけを起こした。

「石を投げられたり、服を裂かれたり、中傷文を仕込まれたり。私、
大変な親を持つ娘の苦勞というのには、あなたのおかげで随分詳し
くなりました」

「……………っ」

そして、震えるルアーナの前で、

「ですので　地獄の苦しみというものを、ご案内させていただきますわ
ますわ」

クロエは、右の親指を地面に向かって振り下ろした。

ひゅっ、と、誰かが息を呑む音がする。

繊細で儂げだったクロエから滲む、得も言われぬ迫力。

やり取りを見守っていたイレーネは、つい呟きを漏らした。

「どうしよう……せ、聖女筆頭候補が……闇堕ちしてしまったわ……
っ」

涙目だった。

「そうでしょうか」

「そうですね、じゃないわよ！　どうすんのよエルマ！　あんな清纯そうな子が……！」

「はて。彼女の心根は、あまり変わっていないように思いますが」

イレーネにがくがく揺さぶられながら、エルマは首を傾げる。

それというのも、彼女にだけは、クロエがごく小さな声で付け足した言葉が聞き取れたからだった。

……地獄の苦しみというものを、ご案内させていただきますわ……
……ともに、ね。

クロエは、彼女の言葉の通り、自らもまた加害者の娘であること

を理解しているのだ。

これまでに比べれば、売女病患者やその縁者に向けられる視線は格段に和らぐだろうが、理不尽にも、コンテストイ家当主への非難や攻撃の一部は、クロエにも向けられることになる。

これから彼女は、それと戦っていくことになるのだろう　ルア
ーナとともに。

「でもなにかこう……先ほどまでと比べて、随分芯が強くなった印象がありますよね。微表情的にも」

ただ、今のクロエならば、適切な怒りをきちんと表し、外と戦っていけるのではないかと、エルマはそんなことを考えた　無論、その変化の原因が自分にあるとは、露にも思わぬ彼女なのだが。

と、エルマの視線を感じ取ってか、クロエがぐるりと振り返る。彼女は、そのあどけなく可憐な顔に、凜とした表情を浮かべ、エルマを仰ぎ見た。

「あの　改めて、本当にありがとうございます。申し遅れましたが、私、クロエ・コンテストイと申します。このたびのこと、心から御礼申し上げます」

「いえいえ、手持ちの薬が余っていただけですから」
「いえ、それだけではありません」

クロエの濃緑の瞳には、それまでのような弱々しさは一切ない。代わりに、こちらを射抜くような真っ直ぐさがあった。

彼女は、あどけない顔にこぼれるような笑みを浮かべた。

「私、ようやくわかったんです。黙っているだけじゃいけない。敵

に遭ったら　カ一杯踏みにじらなきゃ、って」
「やっぱこの子、闇落ちしてるじゃないのー！ー！」

そばで会話を聞いていたイレーネは、堪らず叫びだし、再度エルマの肩を揺さぶった。

「なんかあどけない微笑みから、真っ黒けっけのオーラが滲み出ない！？　気のせい！？　ねえ気のせい！？」

「気のせいではありませんか？　イレーネ、後でこの成長した草花を使った料理を作って差し上げますので、どうぞ落ち着いてください」

「そんなのいらな　……いる。それはいる。わかった落ち着く」

真顔になつてぱつと手を離れたイレーネに、エルマは温かい表情を浮かべる。

「イレーネって、本当に食べるのが好きですよ……」

「う、うるさいわねっ。あなたの料理を食べると、あらゆるもの思いが吹き飛んでしまうのだから、しょうがないでしょー！」

そんなやり取りをしている間も、クロエはにっこりと微笑んでエルマを見つめていた。

その笑みにどす黒いオーラを感じ取れる気もするが、いや、一心にエルマを見つめる瞳、その目付きだけは、一点の曇りもなくキラキラと輝いている。

イレーネは、エルマの返事を待ち続けるクロエの姿に、ふと既視感を覚えた。

「ええと、クロエ様、でいらっしやいますね。ご決心に水を差すよ

うで恐縮ですが、別に私は、敵を踏みにじるだとか、そのような教えを掲げた覚えは」

「あっ、すみません……！ やはり、踏みにじるくらいでは足りませんよね？ もっとこう、すり潰したり押し切ったり、やりようがありますものね。お恥ずかしいです……」

「え、いえ」

素直な佇まいでありながら、^{エルマ} 師匠すら圧倒して暴走してゆくこの気配も、誰かを思い出させる。

怪訝さに目を細めるイレーネの前で、今度クロエは、そつと頬に手を押し当てた。

「私、もっと精進しなくては。偉大なる師匠たるあなたに、少しでも近付けるように」

「え」

「私、あなたから強さを　ものすごい力をもらったような感じがしているんです」

なんだろう。

ひたむき、と言えばその通りなのだが、その範疇に収まらないくらい^{の熱量}。

「エルマさん、と仰るのですよね？　エルマさんは本当に素晴らしいお方……」

「いえあの、クロエ様？　もしもし？」

やり取りを観察していたイレーネは、あ、と思った。誰と似ているのかわかった。

「差し支えなければ　お姉様、と、呼ばせていただいても……？」

デボラだ。

うつとりと狂信的な、いつてしまっている瞳。

イレーネが「デボラ眼」と名付けた目付きをしたクロエは、いつの間にか神に祈る信徒のようなポーズで、エルマのことを見上げていた。

「あの……」

しん、と静まり返る闘技場の舞台で、

「そろそろ、この場合の聖女が誰かを判定したいのですが」

とりあえず、一度皆さん退場していただけませんか。

チエルソ枢機卿の、哀しげで弱々しい舞台進行の声が掛かった。

14・「カ」正位置

「『カ』、正位置」

贅を凝らした、けれどどこか退廃的な空気の漂う居室に、ひっそりとした女性の声が響いた。

優雅にタロットをめくったハイデマリーは、「あらまあ」というように片眉を上げる。

彼女は白い指先でつとそのカードをなぞると、意味深に微笑んだ。

「素敵な贈り物をしたのね、エルマ？」

「……どういう意味だ？」

覗き込んでいたクレメンスは、目を凝らしながら尋ねる。

白い衣装をまとった女性が、穏やかに微笑みながら、素手でライオンの口を閉じようとしている絵。

残念ながら占いの類に明るくないクレメンスは、カードの意味も、眩きの真意も理解できなかったのである。

ハイデマリーは優しく頷くと、ゆっくりと口を開いた。

「これはね、『カ』と呼ばれているカードよ。ただし意味するのは、暴力や脅力のような物理的な力ではないわ。荒ぶる精神や、本能の比喩とされるライオンを、素手で手なずける。そういった、本来制御不可能なものと向き合い、支配下に置くという意味合いなの」

だから、正位置での意味は、強固な意志、自制、勇気、実行力。逆位置だと、引っ込み思案、人任せ、優柔不断といった意味になる。

そこまでをわかりやく説明すると、ハイデマリーは「力」のカードを拾い上げ、キスを落とした。

「そして、『周囲に与えたもの』でこのカードが出たということは、エルマが誰かに、勇気や強固な意志を与えた、ということ。親としては誇らしいわね」

「そんな……」

たかだか占いで、ばからしい。

クレメンスは咄嗟に言いかけたが、しかしそれは音として紡がれることはなかった。

なぜなら、それよりも早く、ほかの囚人たちが口々に声を上げたからである。

「なに言ってるんよ、エルマを教育したのはほとんどこのあたしよ。誇りに思うのは、真っ先にあたしであるべきだわ。他人に強固な意志を与えるだなんて、洗脳の十八番だもの。きつとあたしの洗脳技術を活かしたに違いないわ」

「なに言ってるんだか。ライオンは制御不可能なものの象徴でしょう？ きつと僕の授けた医療科学技術を駆使して、本来制御不可能な生命体を支配下に置いた、そういうことだと僕は思うね」

「……いや。やはり、『力』だと、いうのだから、純粹に、俺仕込みの、建築物を粉碎する、馬力を、披露したという、可能性も……」

順に、リーゼル、ホルスト、イザークである。

イザークは即座に「いやだから、物理的な力じゃないって言うて
るでしょ」と周囲に突っ込まれていた。

ちなみに、モーガンやギルベルトも、内心では「自分の教育の成
果だな」と思っていることがわかる表情を浮かべている。

「はいはい。わたくしなんかよりもずっと優れた教師であり親であ
る、皆のおかげだわ」

ハイデマリーが肩をすくめ、拗ねたように告げてみせると、リー
ゼルがちよっと考えたのち、鼻を鳴らした。

「……ま、あなたも、あたしの次くらいには影響力のある母親だと
思ってはいるけどね」

この二人はなにかと張り合う傾向にあるが、リーゼルは元家庭教
師だった過去もあり、人を否定するだけ、といったことはしないの
である。

「影響力っていうか、なに？ あんたのそれは、まんま支配力、っ
て感じよね。それも魔性方向に振り切った」

とはいえ、どうしても素直な褒め言葉を口にするところまではい
かないらしい。

リーゼルが褒めているのか貶しているのかわからない評価をする
と、ホルストが横からばっさりと言いつつ切った。

「魔性方向、というよりはまんま魔性だよね。マリーが歌えばたち
まち、動物でも植物でも、ありとあらゆる生き物が爆発的に成長し

たり、興奮状態になるだなんて」

「あら、そんなにおかしなことかしら。普通、歌というのは、体にも心にも影響を及ぼすものなのよ。それに、歌で興奮を掻き立てるのは娼婦の本分だわ」

「あらゆる生き物を奴隷のように従えることですか」

ハイデマリーが言い返せば、穏やかにモーガンが反論する。彼は窓から庭園を一瞥すると、やれやれといったように首を振った。

「【性欲】に歌っていただと、庭の草花が一斉に成長するのはありがたいことですが、いささか『一斉すぎる』のが難点です。東の庭はもう少し遊びを大切に、と思っていたのに、まるで定規で引いたような直線的な造形になってしまいました」

そう。

あらゆる命を誘惑し、成長と服従を誘いかける彼女の歌声は、結果的にいつも、過剰に統率の取れ過ぎた生命群を作り上げてしまうのである。

それを周囲から説明されたクレメンスは、静かに顔を強張らせた。

この監獄、既に常軌を逸した能力の持ち主ばかりとは理解していたが、まさかこの女までもとは。

(いや……ほかの者どもは医学知識にマインドコントロール、膂力、交渉力といった、人間の持ち得る能力のあくまで延長だが、この女に限っては 明らかに、人の範囲を逸脱しておらぬか……?)

いつも男たちに囲まれながら、居室の最奥で守られているかに見える、美貌の女。

華奢で、穏やかで、この場にいる誰よりも物理的には弱いはずなのに、決して勝てないと思わせるような、なにか迫力がある。

元娼婦、とは聞いていても、その前の出自がどうであったかをクレメンスは知らない。

高級娼婦であればあるほど、元は貴族の娘であったりするので、もしかしたら目の前の女も、それなりの身分の持ち主だったのかもしれない。

クレメンスはそつと目を細めた。

「まったく……あなたの適性は歌姫というより、セイレーンか魔王かといったところですよ」

と、その横では、よほど庭のことを根に持っているのか、モーガンがまだ溜息をついている。

紅茶と、それを愉しむ優雅な時間を愛する彼は、庭の手入れもまた愛しているのである。

それを聞いたハイデマリーは、ちょっと拗ねたように唇を尖らせた。

「失礼な人ねえ。これでもわたくし、聖女と呼ばれたこともあったよ?」

「【色欲】が聖女! 傑作ね」

「そんなあからさまな当てこすり、初めて聞いたよ」

ジョークと取られ、一笑に付されてしまった、発言。

「……………」

しかし、クレメンスは 過去に司教の座に就いていたこともあった男は、目の前のハイデマリーを、まじまじと見つめた。

「さて、わたくしのことより、エルマだわ。次のカード 『周囲から与えられるもの』は……あら、まあ」

美貌の娼婦は、優雅な手つきで次のタロットをめくり、軽く眉を顰めていた。

聖女の部を終え、再び迎えた夜。

この日もまた、翌日に備えて静まり返る学院の一角、敷地の外れにある備品小屋で、こっそりと扉を叩くものがあった。

「先生。入りますよ」

癖のある黒髪に、やんちゃやそんな性格を窺わせる顔立ち。

若いながらしっかりと鍛えた体に長剣を帯びた少年 ジーノである。

彼は暗がりにも目を慣らすように、きよろきよろと周囲を見回しながら小屋に踏み入った。

シュツ……！

途端に、鋭く空を切る音が響く。

ジーノは考えるよりも早く後ろに跳びのき、目の前の空間を薙ぎ払っていったものを理解すると、ひゅうと口笛を吹いた。

「刃に触れずとも、風圧だけで鉄の柱を切り裂く。これが噂の、聖剣士グイドの風剣ですか」

「……正確には、聖剣士崩れ、だな」

低く、グイドが呟く。

すると、大量の備品を収めた棚の鉄柱が、ようやく自らが切られたことを理解したとでもいうように、ぐらりと断面を見せながら斜めに滑り落ちようとする。

ジーノは慌てて断面を握り合わせ、棚の倒壊を防いだ。

「つてか重！ え、待って、これどうすりゃいいんですか、先生！？」

「考えていなかった。とりあえずそのまま握っとけ」

「ええええ！？」

意外にずさんな発言に、ジーノが思わず叫びを上げる。

「が、グイドは「嘘だ。これをやろう」と告げて、補強用の木材と布を放り投げた。」

「もともとその辺りの錆が気になっていたんだ。用務員に本格的な修理をさせるから、ひとまずこれで固定しておけ」

「えっと……。俺、もしかしてそのために呼ばれたんですか？」

「そしてもうひとつ。これもおまえにやろう」

ガイドは相変わらず淡々と、とある物を投げてよこす。

ジーノはその正体を理解すると、鉄柱すら手放して、それを両手で受け取った。

「先生、だってこれは……！」

一瞬遅れて、支えを失った備品棚が丸ごと倒壊する。

だが、いったいどう切ればそうなるのか、鉄柱と天板、備品は滑るように床に落ち、埃を巻き上げたものの、ほとんど音を立てなかった。

小窓から青褪めた月光だけが差し込む、暗い備品庫。

埃が月の光を弾いてあえかな軌跡を描くその中で、ひときわ神聖な、淡い光を湛えたそれ。

ガイドが寄越したのは、彼の強さの源泉であり、相棒とも言える聖なる長剣　風剣であった。

軽くなった右手に視線を落としたガイドは、それから真っ直ぐにジーノを見据えた。

「おまえにやる。だから、明日。おまえはなんとしても勝て」
「……………」

ジーノは困ったように口をつぐみ、頭を掻いた。

「…………いや、めちゃくちゃ光栄ですけど、でも別に、これ無しでも戦えるというか……………」

「聖剣士候補生の中にはあのルーデンの少女もいる。今日のあれが聖力とは断じられんが、そうだとしたら凄まじい聖力量だ。おまえ

の剣技を認めてはいる。だが、込められる聖力量にあれほどの差があれば、かなり厳しい戦いになるだろう」

聖剣士とは、聖力を剣に込めて戦う者の頂点だ。

込められる聖力が多い者、そして力を込めた剣で優れた技量を持つ者がトリニテートの一員となれる。

ジーノは同世代で随一の剣術を操るとはいえ、持つ聖力は「下町の少年が辛うじて持ち合わせていた」というにふさわしい、ささやかな量だ。

だが、元より聖力のたつぷり籠った聖剣を使えば、それを補える。

万全を期すべし、と重ねて告げる師に、ジーノは渋々と言った様子で、自らの剣と風剣とを差し替えた。

「……でも、普段は安い剣で鍛えてるから、かえってうまく握れないかもしれませんよ？」

「そいつはこれでも伝説級の聖剣だ。持ち主の意に添い、自在に形や重さを変えられる。念じれば、いつもの感覚で剣を振るえるだろう」

ガイドは、ジーノたちがトリニテート入りするためなら手段を選ばないのだろう。

実直そうに見える黒の瞳は、今や硬質な意志の光だけをくつきりと浮かべていた。

それを見て取ったジーノは、腰に下げた鞘から風剣を抜き、月の光にかざしてみせた。

「……俺がトリニテートになれば、下町初の快拳っすよね」

ぽつんと、呟く。

無言でこちらを見たガイドを、ジーノはしっかりと見つめ返した。

「トリニテートを出した地域は、聖人の名を冠されるって聞きました。……俺が聖剣士になれば、あのしみったれたクソみたいな町も、『豚臭いスラム』とか『貧民の巢』とかじゃなくて、もっとかっこいい、きれいな名前で呼ばれるんですよね？」

「……ああ」

「聖女に内定したクロエや、きつと聖術師に決まるだろうラウルのやつとも、並び立つのにふさわしい……ひとかどの人間、ってやつに、俺もなれるんですよね？」

ガイドは一瞬押し黙った。

そこに付け込むのは容易だったが、肩書きなど無くとも、あの二人は既にジーノのことを認めていると知っていたから 生徒を導く導師として、不要な自己卑下を宥めるべきか悩んだためだ。

だが、朗らかな言動とは裏腹に、ジーノが己の出自について強いコンプレックスを隠し持っていることも、ガイドはまた知っていた。この手の問題は、どれだけ周囲が言葉を重ねようと、本人が納得しない限り解決しないのだ。

結局、ガイドは静かに頷くに留めた。

「ああ、そうだな」

「なら、やります」

ジーノの返答に、もう躊躇いはなかった。

「先生の剣と　聖力を借りて、必ず聖剣士の座を獲ってみせます。あいつらの友人だと、胸を張って言える身分を、俺は手に入れる」

年の割に大きな手が剣を握むと、鍛え抜かれた聖剣は、呼応するかのように淡く光を漂わせた。

15・「普通」の剣技(1)

秋深き空はどこまでも澄み渡り、わずかにひやりとした風が、興奮した人々の頬を心地よく撫でてゆく、まさに武闘会日和の朝。

聖剣士の部に臨むべく、淡々と闘技場へと足を進めるエルマとは裏腹に、イレーネは既に疲労困憊の態だった。

「エルマ……ほんと、あなたって……あなたってという人は……」

小さな独白は、もはや魂を削りきった人のような虚ろさだ。

そう。イレーネはルーカスとの密談を経てからというもの、今この瞬間に至るまで、エルマをなんとか足止めしようと、あらゆる手段を講じてきたのである。

が、部屋を真っ暗にしておき寝坊させようとすれば、逆にジェントルに起こされ、あげく「目覚まし時計なるものを発明しましたので、どうぞ」とプレゼントされる謎展開。

朝食の準備を遅らせて遅刻させようとすれば、昨日の異常生育した野菜で仕立てた、マクロビ食フルコースを振舞われるという逆転劇が待ち受けていた。

ちなみに時計は大層精巧で美麗な作りで、料理のほうは軽やかに昇天しそうな美味しさであった。

ほかにも、懇々と説得してみたり、脅したり宥めすかしたりしたのだが、逆にこちらが必死過ぎるのを不思議がられ、途中で撤退。

やけくそになり、「ああっ、お腹が痛い！ 私のことを思うなら、聖鼎杯など辞退してそばで看病して！」ともんどりうってみたところ、診察では原因が掴めなかったエルマが 仮病なのだから当然だ 真顔になり、全身外科手術の用意をしはじめたので、イレーネは「治りましたあ！」と拳手せざるをえなかった。

結果、今、エルマは特に何ごともなかったように、舞台への入り口をくぐるうとしている。

聖女の部とは異なり、舞台は剣技が披露される危険な空間となるので、入場するのは候補生だけ。従者や侍女はここで待機だ。

イレーネがじっとりとした視線を送っていると、それに気付いたエルマが、ふと後ろを振り返った。

「イレーネ」

「な、なによ!?!」

今度はどんな展開が待ち受けているのかと、イレーネが脊髄反射で肩をびくつかせると、エルマはそれをいなすように、ぽんと肩に手を置いた。

「大丈夫。いくらなんでも、私とてこの場で剣士無双をしようなどとは思っておりません。目指すは『普通』。あくまでも『普通』。どうぞ大船に乗ったつもりでいてください」

「……………」

自信満々の様子に、イレーネはかえって不安になった。

その大船、実は泥船なのではないだろうか。

「ほ、本当に『普通』を目指すのよ？ 言っとくけど、聖剣士や勇

者にとつての『普通』ではないからね？ 伝説級の武器とか隠し持っていないでしょうね。今回は魔獣退治が課題らしいけど、一撃で倒したりしてはだめよ。本当の本当にわかってる？」

エルマは神妙に頷きながら聞いていたが、「伝説級の武器」のあたりではっとした様子を見せると、素早く靴底からなにかを取り出し、ぺいっと闘技場の廊下に投げ捨てた。

見たところ、ミスリルだとかの希少金属でできていそうな、明らかに物々しい感じの短剣だった。

「もちろんです。お任せください」

「今なに捨てたー！ー！ーっ!?」

「……いえだって、エクスカリバーの兄弟剣なんて、その辺を散歩していれば、ごろごろ遭遇するじゃないですか」

「そういうところよエルマー！ー！ー！」

イレーネががくがく揺さぶると、エルマは大人しく「すみません」と声を振動させながら謝った。

「メインの武器は事前に回収され、試合時に手渡される手筈になっているからと、油断しておりました。まさか護身用のナイフで『普通』を逸脱してしまうところだったとは」

「むしろ、小物の武器ですらエクスカリバー級ってどういうことなのよ！ ねえ、本当に大丈夫なの!? 魔獣瞬殺とか、秒で優勝とか、本当にしないでね!？」

「大丈夫です。お任せください。そもそも今の私は侍女なのですから、それに見合ったことしかいたしません」

エルマはあくまで静かに請け負う。

イレーネはあと一步踏み込もうとしたが、あまりに二人が騒ぎ過ぎたため、入場門付近のほかの候補生たちがざわつきはじめている。それに気付いた彼女は慌てて自制し、「なら、いいわ」と、エルマを門へと促した。

見れば、冴えない用務員に扮したルーカスもまた、少し離れた舞台脇に控えている。

こちらに近付きながら、首尾はどうだ、といった心の声を飛ばしてきたので、実際には眼鏡が鋭く光っただけだったが、イレーネはそつと視線を床に落とした。

背後でそんなサインが送り合われているとは知らず、エルマはまっすぐに舞台へと進む。

剣士という部門上、候補生たちは昨日とは打って変わって、筋骨隆々とした男性が多い。

その中で、背中をぴんと伸ばしてなお小柄なエルマは、冴えない眼鏡姿とはいえ、歩くだけで注目の的だった。

いや、この場にいる候補生や観客のほとんどが、彼女の素顔を知っている。

絶世の美貌を眼鏡で覆い隠しているからこそ、「今日は眼鏡を外すのか」「いつ外すのか」と、かえって関心を集めてしまっている有様だった。

「せめて、眼鏡を外させて平凡顔メイクをさせればよかった……っ」

観客席に座す学院話題の人物、クロエと信徒化した彼女はさて措くとして、ラウルまでもが、じっとエルマを見つめているのを認めて、イレーネは齒噛みした。

いったい自分はなにをしていたのか。
マクロビ全席を食していたのだ。

悔やんでももう遅い。

己の食欲と、同僚の料理の腕前を恨むしかないイレーネであった。
と、候補者のすべてが舞台に出揃う。

最後に入場を果たしたのは、筆頭候補と噂されるジーノだった。
下町出身の彼は、学院では微妙な立ち位置にあるのか、彼が入場した途端、ほかの候補生たちが距離を置いたり、鼻白んだ表情を浮かべたりする。中には、「豚臭え」と野次を飛ばす者もあった。

一方では、精悍な体つきとやんちゃそうな顔立ち、そして優れた武技がそうさせるのか、相当数のファンも付いているようで、彼が舞台を踏むと同時に、観客席から黄色い声上がる。

それらを見て取り、イレーネはきゅつと顔を引き締めた。
ジーノを睨みつけるようにして見据え、ついで観客席に視線を移す。

彼女はなにかを抑え込むようにして拳を握ると、ついで頭を振り、再び舞台に向き直った。

聖剣士の部の開会まで、あと少しだ。

舞台上に並ぶのは、ざっと六十名ほどの聖剣士候補生たち。

武器によって聖力を補うことができるぶん、わずかな聖力しか持たずとも、武技さえ優れていれば候補生になれるようで、聖女や聖術師に比べてその数は多い。

舞台の中央には聖術陣が二つ、そして候補生たちの前には、聖布で蔽封された箱がそれぞれ置かれている。

陣で二体の魔獣が召喚されるとともに、候補生たちの武器も解放される手筈になっているのだ。

候補生たちは事前に登録した武器のみを用い、魔獣を倒す。

見事魔獣を討ち取れば聖剣士の座が与えられ、逆に髪の毛一筋ぶんであっても傷を負えば、失格だ。

もし二体の魔獣が倒された時点で、複数名の候補生が残っていれば、彼らで直接剣を交えてトリニテートを決めることとなる。

まずは魔獣を倒すべし、と、誰もが闘志を湛えて聖術陣を睨みつけていた。

「 それでは、これより、聖剣士の部を開始する」

やがて、舞台中央、聖術陣のすぐ横に陣取った枢機卿が、朗々とした声でそう告げる。

今日の進行役は、昨日とは打って変わり、反ルーデン派筆頭ガイドであった。

「 召喚する魔獣は、ヒュドラの番^{っがい}。辞退を申し出る者は控えの間の用務員に向かって合図を送るように」

彼はよく通る低い声で言い渡すと、すっと右手を掲げた。

「 それでは、候補生たちに神のご加護を。聖剣士の部 開始」

ばああああっ

ガイドの合図とともに、武器を納めた箱と陣とが一斉に光を放つ。候補生たちは素早く己の剣を取り出しながら、目を細めて陣を守る。

はたして現れたのは、ぐねぐねと身をくねらせる巨大な蛇を、いくつも集めてくっつけたような、おぞましい姿の魔獣　ヒュドラであった。

舞台上で蠢く二体は、どちらも獯猛あつこそうな号から涎を滴らせ、敵意を露わにしている。

その体液も猛毒を帯びているらしく、ぼたりと涎の垂れた床が、じゅっと音を立てて削れるのがわかった。

シューツ、シューツ、と威嚇するような声に、たちまち闘技場全体が緊張に包まれる。

控えの間で見守っていたイレーネもさすがに、魔獣の凶悪さに眉を寄せた。

「こんなに恐ろしい魔獣を召喚するだなんて……」

過去の聖鼎杯の記録を見るに、召喚される魔獣はせいぜいA級、大導師が数人で倒せる程度のものだ。それが、まさかS級　熟練の聖騎士団と大導師が束になってようやく倒せる強さのものだとは。

観客はもちろん、候補生たち自身、特に、ヒュドラの性質を少しでも知っている者は、そのあまりの難儀さに顔を強張らせた。

ヒュドラは九つの頭と、毒の炎を持つ魔獣。

頭は一つを切り落とせば、傷口から二つが再生し、吐き出した炎

が頬を掠りでもすれば、たちまち全身を焼かれるような痛みに襲われる。

剣士の天敵とも呼ぶべき存在だ。

中には、その圧倒的な強さの気配に呑まれ、己の剣を取り出せない者すらあった。

いや、半分ほどの候補生たちが、完全に硬直してしまっている。

「う……うおおおおおおっ！」

と、候補生の一人が、己の怒号によって緊張を打ち払い、ヒュドラに向かって突進を始めた。

周囲もはっとし、追従するように次々と陣へと走り出す。

「エルマは……!？」

イレーネ、そしてすぐ隣にやってきたルーカスが身を乗り出して見れば、エルマはようやく武器箱に手を掛けたところだった。

「よ……よし！ ちょっと出遅れた感じのある動き！ ナイスよ！」

「出足は好調だな」

二人は息もぴったり、手すりに隠れたところでガッツポーズを決める。

特にルーカスは、これからなにが起こるかを知っているような、勝利を確信した笑みを浮かべ、舞台に佇むエルマを見守った。

視線の先では、エルマがゆっくりとした動きで 傍目には一応、恐怖に竦んでいるように見える、箱の蓋を持ち上げている。

彼女はそれから、不思議そうに小首を傾げた。

「悪いな、エルマ。箱の中の武器は、ほかの得物にすり替えさせてもらったぞ」

「えー!？」

傍らのイレーネが、ぎょっとしたように振り返る。

そこまでやるか、とでも思っているのだろう。翡翠の瞳に、強い驚愕の念を見て取ったルーカスは、ばつが悪そうに肩をすくめた。

「必要な措置だ。なにしろ、すり替えでもしないと、あいつは平然とオリハルコン製のカリブルヌスを持ち込むつもりだったようだから」

「……カリブルヌス……?」

「伝説上にしか存在しないはずの名剣だ」

ルーカスは、用務員としての権限を活かし、エルマが登録した武器の内容を検めたところ、それがとんでもない代物だったのだと説明した。

「武器の来歴」についての記載事項が、これまたぶっ飛んでいたということも。

「なんでも、『父が散歩中に拾った剣』だそうだ。峻厳な森の最奥で、龍に守られた巨岩に突き刺さった剣を、どうしたら散歩中に引き抜けるんだと思うが、なにしろエルマだ。万が一本当たったら、と思い、すり替えた」

「……ですね」

イレーネは端的に頷くにとどめた。

ただでさえ強いエルマに、そんな伝説級の剣など与えたらどうなるか。

結果は火を見るより明らかである。

と、武器箱の蓋に手を掛けたところで、エルマが動きを止める。しゃがみこみ、小首を傾げたまま動かない彼女に、次第に観客がざわめきはじめた。

イレエネは、自らも舞台に向かって首を伸ばしながら、隣のルーカスに尋ねた。

「それで、なににすり替えられたのですか？」

「ああ、それは」

ルーカスが口を開くのと同時に、エルマがすいと箱から武器を取り出す。

宙にかざされたそれを見て、観客たちが一斉にどよめいた。

「出刃包丁……っ!?」

そう。

それは、どちらのご家庭にも必ず一本は常備されている、なんの変哲もない出刃包丁だったのである。

16・「普通」の剣技(2)

ほかの候補生たちが皆、いわれのある名剣を振りかざしている中で、小柄な少女がちょこんと包丁を握りしめている様は、大層異様であり、場違いでもあった。

「ちょ……っ、な、なんでここで出刃包丁というチョイスだったのですか!？」

「いつそ武器からかけ離れたものを用意してもよかったが、昨日のケースを見るに、下手に武器を封じるとあいつは予想外の方策に打って出るだろう。伝説の剣とは桁違いに威力で劣り、だが辛うじて武器とみなされる、そのぎりぎりのラインを狙った結果だ」

ルーカスが力強く答えたその瞬間、舞台上で異変が起こった。

きしゃあああああああつ!

二体のヒュドラの内、雌と思しき一回り小さな個体が、鋭く威嚇音を放ち、一斉に首を伸ばしたのだ。

「うわ……っ!」

「ひいっ!」

同時に吐き出された毒の炎に、候補生たちが悲鳴を上げる。身をよじって躲しつつも、幾人かは攻撃を受けてしまい、じゅつと焼けた肌を押さえながら獣のような叫びを響かせた。

「くそ……っ、この、化け物め……っ」

「八つ裂きにしてやる……！」

気性の荒い候補生たちは、それでもなお果敢に攻め続けるが、斬り落としたそばから二つの頭が再生し、しかも落ちた頭は毒を撒き散らしながら床をのたうつ。

数は圧倒的に剣士たちのほうが多いはずなのに、蹂躪されているのは彼らの側であった。

聖剣士筆頭候補と言われるジーノは、まだ動きを見せない。剣を緩く握り、視線だけは鋭く間合いを凶っているようである。

ほかの候補生たちも、想像以上に厄介なヒュドラの性質に手こずり、攻める者と、様子見にまわる者とが半々、といったところか。

そんな中であってエルマといえば、出刃包丁を片手に握ったまま、所在無げに佇んでいた。

「よし……よし！ さすがに出刃包丁じゃ、どうにもならないわよね……！」
「間合いを図る技能があるぶん、現状の不利さをよく理解しているようだな」

魔獣相手に身動きが取れないでいる候補生に、通常なら焦燥や苛立ちを浮かべるべき場面。

しかしルーカスたちは喜色を露わにした。

「これで……負ける！」

時折ヒュドラの側から放たれる攻撃は、さすがに躲しているようだ。

このままいけば、エルマはぱつとしないまま試合を終えるだろう。
両名はぐつと拳を握った。

「うおおおお！ ルローケン流が奥義、悪即斬剣！」

「はああああ！ グインダーマ流が秘技、烈長縄常夜剣！」

傍らでは、候補生たちが次々と奥義名やら流派やらを叫びながら、
猛攻を続けている。

めいめいが好き勝手叫び、かつあっけなく薙ぎ払われる様子は、
多少滑稽ですらあった。

が、それを見たエルマが、

「……………」

ちらつと顔をあげ、少しときめいたような雰囲気を醸しはじめた
ので、ルーカスたちは思わず手すり越しに身を乗り出した。

「普通じゃない！ 奥義名を叫んで必殺技を繰り出す姿は、まったく
普通ではないぞ！」

「惑わされないで！」

叫びが届いたわけではないだろうが、エルマは出刃包丁にちらりと
視線を落とし、なにやら諦めたように姿勢を戻したので、二人は
ほつと胸を撫で下ろした。

「さすがに出刃包丁では必殺技もなにもないですものね……………」
「いい仕事をしたな、出刃包丁……………」

ちょうどその時、ヒュドラ二体が一齐に咆哮し、獰猛な頭を四方

八方に振り乱して一斉に毒液を飛ばした。

それまでの毒吐きが兇戯に見えるほどの、苛烈極まる攻撃。観客席や控えの間すれすれまで迫るヒュドラの毒液に、人々は恐怖のどよめきを上げる。

「ぐあ……っ！」

「うわああああああっ！」

肌を焼かれた候補生たちの凄まじい絶叫に、ルーカスたちもまた一瞬間を強張らせたが、少女がひらりと身を躲した様を見て、ほっと息を漏らした。

複数の頭から飛んでくる毒液を、完全に回避しおおせた候補生は、わずか二人。

エルマと おもむろに剣を握り直した、ジーノであった。

「……ようやく外野が減ったぜ」

呻き声を上げ、救護班に回収されていくライバルたちを尻目に、ジーノはくいと口の端すら持ち上げて嘯く。

敵を前にみつともなく撤退してゆくのは、日頃彼のことを、貧民だの、みすばらしいだのと罵っている級友たちだ。

ジーノはそんな彼らを、軽蔑しきったような目で見送ると、次に顔を引き締めた。

それから、まるで投擲の準備をするように、剣を握った右手を肩ごと後ろに引き その姿勢のまま、目にも留まらぬ速さで、ヒュドラの一体に向かって駆け出した！

「あいつ、無茶な　！」

観客がざわめく。

が、ジーノは揶揄すら許さぬ速さで牙を躲し、毒を刃で弾き返し、一気にヒュドラへと肉迫する。

牙を突き立てんと、鎌首を上げた十以上の頭すべてを、腕の一振りで薙ぎ払い、それらが頭を再生させる前に、一層接近。

さらには、ぐわつと唸りを上げて追いかけてきた五つの頭を、屈みながらぶつけ合わせ、その隙をついて、うねる蛇軀に守られた、ヒュドラの最奥へと手を掛けた。

「ヒュドラは頭を切り落としても再生する　核となる邪頭を潰さない限りはな」

にっと笑って、彼はまるで熟れた果実にナイフを入れてもするかのように、軽々と剣を突き刺した。

「ど真ん中に……聖力の塊を食らいな！」

ぱああああああっ！

その瞬間、目も開けていられないような閃光が炸裂した。

耳を聳する末期の叫びとともに、ヒュドラの輪郭が消し飛ぶ。

ざら、と、砂が崩れるような音が響き　その次に人々が臉を持ち上げたときには、ヒュドラの姿そのものが、消えていた。

「……まずは、一体」

ジーノは、ぺろりと舌で唇を舐めて呟く。

一瞬の沈黙ののち、観客席から一斉に歓声が溢れた。

「うおおおお！　すげええええええ！」

「さすがは筆頭候補生！　やはりトリニテートは彼よ！　彼以外にありえないわ！」

見れば、すっかりエルマ教信徒となつたクロエもさすがに頬を紅潮させ、友人であるラウルも、喜びを隠せないように微笑んでいる。イレーネもまた、舞台と観客席の双方に素早く視線を走らせ、興奮のためかぎゅつと胸元を押さえた。

「聖力で丸ごと吹き飛ばしたか……それほどの威力の得物を完全に操るとは、さすがだな」

優れた武技を見慣れたルーカスもまた、「ほう」と感嘆の溜息を漏らす。

が、目の前でそれを見ていたはずのエルマは、ちらりとも感動したそぶりを見せないの、ルーカスは不思議に思い、目を凝らした。

(さすがに度肝を抜かれて、硬直しているのか……?)

だが、それともなにかが違う。

ルーカスはまじまじと彼女を観察し、ふと、あることに気付いた。

(なにやら……怒っている?)

眼鏡で素顔は見えないが、どことなく、ジーノに対してつんと顔を上げて佇む様は、彼女が怒りを湛えているかのようにも見えた。

「……あんまりです」

周囲の喧騒に紛れて、ぼそっと、彼女が低く呟く。

(え……？)

その真意が掴めず、ルーカスが眉を顰めていると、エルマはくりとこちらに向き直った。

「イレーネ、そして、殿……用務員殿」

声を張り上げ、こちらに真つすぐ呼びかける。

イレーネとルーカスが、ずっとやきもきしながら見守っていたことを、もちろん彼女は気付いていたようだ。

「私の剣を出刃包丁にすり替えたそのお気持ち、しかと理解いたしました」

ついでに、彼らが小細工を弄したことも、もちろんすっかりと気付いていたらしい。

ただ、エルマはそれだけを言い切ると、再びヒュドラへと向き直ってしまったので、ルーカスたちは、発言の意図を、すっかり取り損ねてしまった。

「エルマ……？」

「な、なぜそこで、おもむろにヒュドラに近付いていくの……!？」

ついでに、エルマがなぜか残ったヒュドラへと歩み寄っていったので、彼らは混乱した。

特に、興奮して観戦しつつも、ヒュドラが毒を吐くたびにびくりと肩を震わせていたイレーネは、手すりにかじりつくようにして身

を乗り出した。

「ちよ……ちよっと待って、エルマ！ まさかヒュドラと戦う感じやないわよね！ ねえ、あなた、戦わないって言ったわよね！？」

「戦いません」

「じゃあなんでそっちへ行くのよ……！ 早く、……早く、こっちに帰ってきなさいよ！ 危ないわ、それは単なる包丁なのよ！？ 棄権しなさいよ！」

背を向けたまま言い捨てるエルマに、イレーネがますます語気を強める。

だが、イレーネが再び叫ぶよりも早く、それは起こった。

ぐあああああつ！

目の前で番いを失ったヒュドラが、大地を震わすような咆哮を上げ、ひときわ大きな蛇頭の、その獯猛な号を開き、襲い掛かってきたのである。

毒の炎を吐くときは段違いの物々しさに、観客が思わず息を呑む。

これまでの攻撃は、しょせん牽制でしかなかったのだと突きつけるような、それは害意に満ちた動きであった。

風を切り、瞬きすら許さず、その巨大な口で餌食を貪る。 。
絶対なる捕食者の、あまりに素早い動き。

観客に恐怖と動揺が広がったのは、だから、少女が呑み込まれてから、ひと呼吸を置いた後だった。

「……………く、食われた……………」

ぼつりと、誰かの喉から引き攣った眩きが漏れる。
それを皮切りに、闘技場は蜂の巣をひっくり返したような大騒ぎ
になった。

「お、女の子が食われたぞ……！」

16・「普通」の剣技(2)(後書き)

大変恐縮ですが、3日ほど感想返信をお休みさせていただきます。
後日遡ってのご返信も難しいかもしれませんが。
更新は続けますので、ご容赦くださいませ…！

17・「普通」の剣技(3)

「お、女の子が食われたぞ……！」
「わああああっ！」

彼らの脳裏に浮かぶのは、無残に引き裂かれ、臓腑を晒した哀れな少女の姿だ。

小柄な体からは、おびただしい血が流れているのかもしれない。
昨日見た整った顔は、皮膚のかけらも残さず蹂躪されているのかもしれない。

いや、蛇の体と、あれだけ強力な毒の炎を持つヒュドラのことだ。
少女は牙で引き裂かれるのではなく、丸呑みにされ、その体内で溶かされる責め苦を負っているのかもしれない。

「エル、マ……！」
「くそ……っ！」

イレエネはもはや立っていることもできず、その場にふらりと崩れ落ちた。

ルーカスもまた、用務員に扮していることを忘れ、手すりを飛び越え舞台上へと駆け上がっていく。

そしてジーノと言えば、目の前で起こったことが信じられないとでもいうように、ただ蛇頭を蠢かせるヒュドラのことを凝視していた。

「ヒュドラの腹を切り裂く！ 運営！ 枢機卿以下、全候補生による援護を！ おい、その剣を貸せ！」

壇上の人となったルーカスが鋭く吠え、この場で最も威力のあるジーノの剣を奪おうとする。

既にヒュドラは少女を消化するためか、床を這いずるのをやめ、蠢く頭を満足そうに震わせていた。

「早く！」

「……どういうことだ」

が、ジーノはルーカスの叫びにすら耳を貸さず、怪訝な顔つきでヒュドラの事情を見つめるだけだ。

いせ。

ヒュドラというよりは、その腹の中にいるであろう、少女のことを。

「なんであの子、『おいしそう』だなんて舌なめずりしてたんだ……」

「……」

「……………は？」

言葉がすぐには理解できず、ルーカスが思わず聞き返す。

しかし、ジーノがそれに答えるよりも、ヒュドラに起こった異変が、回答の役割を果たした。

ぶるぶる……っ、ぶるんっ

数を増やし、二十では収まらない蛇頭が、震える。

それは、愉悦の蠢動のように思われたが いや、よくよく見れば、ヒュドラの目がおしなべて反転し、いわゆる、白目を剥いた状

態になっている。

ヒュドラは、痙攣を起こしていた。

「いったい……なにが……!?」

異変に気付いた観客までもが、ざわざわと疑問を口にした、その瞬間。

べろろろろろんっ！

なにかが凄まじい勢いで剥がれるような音とともに、ひとつの小さな影が、ヒュドラの口から飛び出してきた！

「あ……っ、あれは……！」

空高く舞い上がったその影は、宙で両膝を丸め、両腕を胸の前で交差させている。

その目元、そして右手の先辺りが、陽光を弾いてきらりと光った。

「ルーデンの候補生　!?」

それは、眼鏡と出刃包丁であった。

空中でくるくると華麗に回転した少女　エルマは、しゅたつと石の舞台に着地を決めると、条件反射のように両腕をY字に掲げた。

そのほっそりとした右手には、なんの変哲もない出刃包丁。

そして左手には、ピンクがかった、えもいわれぬ質感の、巨大な球状のなにかを器用にぶら下げている。

動揺を隠せぬギャラリーを置いてけぼりにして、彼女はそつと出刃を置き、その傍らに球状のなにかを安置すると、再びすつと立ち上がった。

猛毒の炎を放つヒュドラに呑み込まれたというのに、怪我のひとつも負った様子ではない。

ただ不思議なことに、食われる前と比べると、彼女はなぜかほっかむりを装着しており、それを含めた頭部から爪の先まで、全身をヒュドラの消化液であるう粘性の液体にまみれていた。

くん、と臭いを嗅いでみたエルマは、閉口したように肩をすくめる。

ついで、硬直している周囲をよそに、眼鏡とほっかむりを投げ捨てて、美貌を露わにすると、驚くべきことに、その髪も肌も、まったく濡れていなかった、さらに、制服の襟元を寛がせはじめた。

「エ……エルマ……!?!」

「きゃあっ! お姉様……!?!」

突如として始まったストリップショーに、観客席からどよめき上がる。

我に返ったイレーネは、待ったを掛けようと身を乗り出したが、それよりも早く、

ばっ!

エルマは制服を脱ぎ捨てて、それに覆われていた姿を周囲に晒してしまった。

……王宮お仕着せのメイド服姿を。

「下に着てたんかあああい！」

「ちくしょおおおおおお！」

女性陣も男性陣も、等しく叫びを上げる。

悲喜こもこもの現場であった。

いずれにせよ、いつもの侍女姿を取り戻したエルマは、絶句しているルーカスに向かって、真顔でサムズアップを決めてみせた。

「妙味の王様・ヒュドラを、聖力で消し飛ばしてしまう無粋な輩には任せておけぬ、とのご懸念、このエルマ、しかと理解いたしました」

「……は？」

「武闘より料理。伝説の剣より出刃包丁。剣士であるより、侍女であれ。そういうことですよね。私、お二方のメッセージを真摯に受け止め、あくまで侍女として、このヒュドラに向き合いたいと思います」

「……は？」

もうなにもかもよくわからない。

が、ルーカスが硬直してしまったその一瞬の隙を突き、エルマはジーノに眼を飛ばす。

「せっかく皆さんが二十まで頭を増やしてくださいましたヒュドラ一体が、台無しになってしまったではありませんか。今度食べ物を粗末にしたら、ジーノ様の分は無しにいたしますからね」

「……………はい？」

要領を得ないでいるジーノに、エルマは珍しく、ふんつと鼻を鳴らし、それからヒュドラに向き直った。

一番巨大な鎌首部分を、真つすぐに内側から裂かれたヒュドラは、俎板の鯉のようにビクビクと震えていた。

「バルツアー流が奥義……………」

エルマはすつつと身をかがめ、右手に握った出刃包丁をゆっくりと構える。
そして、

「威汰墮鬼魔栖いただきます！」

天高く跳躍しながら、それを真一文字に振り下ろした！

「なにしてんのよエルマ————ツ！」
「おまえ、やはり必殺技名を言それつてみたかっただけじゃないのか——！！！」

イレーネとルーカスが、両手を頭に突っ込んで絶叫するも、時すでに遅し。

エルマのほっそりとした右手から繰り出される出刃包丁は、ごうつと唸りを上げて宙を切り裂いた。

ヒュドラはその巨体を天高くまで舞い上げ、そこでぴたりと静止する。

「こ、これは、まさか……」
「ああ」

いつか見た光景が蘇ったイレーネが呟けば、ルーカスは低い声で頷く。

「……太刀筋が鋭すぎて、ヒュドラも切られたことに気付いていない……」
「やっぱり……！」

二人は遠い目になりはじめ、同時に、この先待ち受ける展開について、うっすらとした理解を結びはじめた。

取り残されたのは観客たち、そしてジーノのほうだ。

彼らは、筆頭候補生ジーノすら視認しきれぬスピードで刃を振るった少女に瞠目し、それから、宙でぴたりと静止してしまったヒュドラに、困惑の視線を向けた。

「こ、これは……？」

が、次の瞬間、

バラバラバラバララッ！

そんな統制の取れた音とともに、ヒュドラの体がばらばらに切り離れてゆくではないか。

いや、「ばらばら」などというものではなく、彼らが次に目を開けたときには、ヒュドラはすべて、頭部と皮、そして肉とに分かれ、床の上に敷かれた清潔な布の上に、ブロック状に美しく整列していた。

「なにこれ!？」

国境、宗教、性別出自。

その他すべてを乗り越えて、その場にいた全員の心が、ぴったりひとつに揃う。

エルマはそれを声援とでも思ったのか、軽く手を挙げて応え、それから、ぴくりとも動かなくなったヒュドラの肉に向けて、ちよつと残念そうに眉を下げた。

「……やはり、もう少し頭を増やしてから、魔袋を剥ぎ取ればよかった……」

まるで、料理の手順を誤ったことを悔やむ、主婦のような口調であった。

そう、主婦。

ヒュドラに対峙するエルマを見て、ジーノは強烈な既視感を抱かずにはいられなかった。

(この、姿……。スクラス魔獣を前にしても、なんの闘志も抱かない佇まい……)

目の前の少女からは、闘志、害意、勝利への妄執や生への渴望、そういった、巨大な敵に臨む時、必ず人間が抱くであろう感情が一切感じられなかった。

なぜなら、彼女にとってそれは、生死を懸けた戦いなどではないからだ。

「食うか食われるか」の決着など、とうにしている。
今この場において、絶対者は彼女。
ヒュドラは ただの食料でしかない。

(俺の剣が、一撃で相手を斬り殺す『聖剣士の剣』だというなら…
…)

ジーノはごくりと喉を鳴らした。

(この子のそれは 『主婦の包丁捌き』！)

語彙のレベル感がまるで揃っていない。

揃っていないが、それはほかのなによりの確に、エルマの動きを
表していた。

「はっ！」

短い掛け声とともに、エルマが旋回しながらぱつと布を払う。
すると布から放たれたヒュドラ肉は、まるで嵐に揉まれる木の葉
のように、激しく渦を巻きながら上空へと飛翔していった。

それを高らかに掲げた右手の一振りで一口大に刻み、かと思えば、
いつの間にか左手に取り寄せた酒の瓶でそれらの臭みを消し、さら
には包丁から持ち替えた右手でハーブのようなものを叩きつける。

まさに、熟練の技。

それはしかし、プロの料理人のように、工程ひとつひとつを細分
化し、じっくりこなしていく類の仕事ではない。

たとえば同時に十皿分の調理をこなす食堂のおばちゃんのような、

あるいは夫の世話と子どもを躾と犬の餌やりを同時進行でこなす主婦のような、はたまたあらゆる煩雑な業務を網羅的にこなす王宮侍女のような、そう、どこか女性的な力強さを帯びた動きであった。

（見える……！ あの子の背景になぜか、働き者の主婦の姿が……！）

ジーノは闘技場の片隅から、幼い日に感じた匂いや音が、ふと漂ってくるかのような錯覚を抱いた。

例えばそれは、手狭で粗末な家の調理場。

雑然としたその場所に、彼女は女王のような足取りでやって来る。

事実、その場において彼女は女王なのだ。

くたびれたエプロンを身に着けども、家族の腹を満たすという崇高な任務は、いつも彼女の瞳に凜とした光を与える。

周りを取り囲むのは、相棒、いや、もはや自分の手足とも呼べるほど使い込んだ調理器具たち。

目の前には食料。

ときに首を断たれ、内臓を晒したそれらを見ても、彼女の心には何の怯懦のさざ波も立たぬ。

害意もない、闘志も、勝利への妄執もない。

あるのはただ、淡々とした日常に横たわる、己のこなす仕事への誇り。

彼女は右手で肉を裂き、左手でそれを清め、ときに口や顎まで使いながら迅速に調理を進める。

それは常に時間との戦いだからだ。

彼女の戦場のすぐ後ろには、腹を空かせた大切な者たちが待つているのだから。

「ごはんまだー？」

「ちよつと待つてな、あとはこいつをしっかり焼けば終わりだよ！
えー、またモツ焼きかよー！」

いつの日か交わした、幼い自分と母の会話までも思い出こしはじめたジーノの横では、観客がどよめきを続けていた。

「見る……！ あの駆け上がるような削ぎ切り、からのリズムカルな筋切り！」

「つていうかあの酒やハーブ、今どこから出てきたんだ！？」

「ああっ、救護班だ！ 救護班からかつぱらったんだ！」

舞台の片隅で、消毒用の強い酒と、解毒作用を持つアローロの葉を掠め取られた救護班は、なにが起こったのか理解できず、ぽかんとした姿勢で固まっている。

彼らが大量に沸かしていた湯も、気付けばヒュドラ肉の湯通し用にすっかり使われていた。

よくよく見ればエルマが俎板代わりに使っていた布も、彼らの用意していたシーツの一部だ。

「ちゃっかりだ……！ あの子、相当なちゃっかり者だ……！」

有り合わせですべてを事足らせようとする、主婦的執念に観客が声を震わせる。

周囲の動揺をよそに、エルマは今度は、ぱつと大鍋に油を投入し、素早く熱しはじめた。

「待て、あの油と鍋は今どこから出てきたんだ……!?」
「あれだ……! ヒュドラの体内から剥ぎ取った球みたいなやつ、あの大きいほうに、大量の油が入ってるんだ!」

そう。ヒュドラは炎毒と呼ばれる攻撃を可能にするために、体内に瘴気を帯びた液体を溜める魔袋と、それを炎に加工するための大量の油を保持しているのである。エルマはそれを奪い取ったのだ。

ちなみに鍋は、もちろん鞆から取り出したものである。

理解が、ツツコミが、行動に追い付いていなかった。

くるくるとせわしなく鍋の周囲を動き回るエルマの動きは、踊っているようにすら見える。

同じ舞台上でエルマに見入っていたジーノは、彼女がふんふんと何かを口ずさんでいるのに気付いた。

鼻歌だ。

(ご機嫌か!)

さては好物なのか。

そのあまりに泰然とした態度に、ジーノは戦慄を覚えた。

鍋が煮立つ。

いつのまにか塩こしょうやんにく、小麦粉を絡められたこれは布鞆から登場したようだ ヒュドラ肉が、じゅっと音を立てて投げ込まれる。

からから、ぴちぴちという、楽しい油の音。
こんがりときつね色に転じていくヒュドラ肉。

やがて漂い出す、揚げた肉特有の、えもいわれぬ香ばしく旨味あ
る香り。

とうとうジーノは、そして人々は悟った。

「ヒュドラの、唐揚げ……！」

18・「普通」の剣技(4)

温められたにんにくの香りがふんわりと鼻腔をくすぐり、思わず一同はごくりと喉を鳴らす。

そして、そんな自分たちに戸惑いを覚えた。

だって、これはヒュドラだ。

おぞましい蛇の形をした、恐ろしい炎毒を吐く、ヒュドラなのだ。

「お待たせいたしました」

エルマが華麗に油切りを済ませた唐揚げを、皿代わりのアローロの葉に載せていく。

いつの間にか設えられていたテーブルの上には、気付けば百人分を上回る唐揚げが並べられていた。

「ヒュドラの唐揚げです。十分に下味は付けておりますが、お好みで塩などどうぞ」

繊細に筋を切られた肉は、油を含んでふっくらと膨らみ、薄い衣は陽光を誇らしげに弾き返して、きらきらと輝いている。

だが、ヒュドラ肉。

これは魔獣の肉なのだ。食らったら死ぬかもしれない。

戦闘ですっかり腹を空かせていたジーノは、とっさに皿へと伸びる右手を、なんとか左手で抑え込んだ。

「なお、毒は魔袋ごと完全に処理したうえ、清酒で臭みを消し、寄生虫対策に隠し包丁、さらに十分に加熱いたしましたので、ご安心ください」

……死なないかもしれないが、いや、それでもヒュドラ。魔獣の肉なのだ。

きつと筋張って、奇妙な味わいがして、到底食べられたものではないだろう。

「なおご存知の通り、猛毒で身を守る生物の常として、身はとても柔らかくジューシーです」

……ジューシーかもしれないが、いや、それでもヒュドラ。ヒュドラなのだ。

おぞましい、蛇の形なりをした……ゲテモノの……。

きつと、ゲテモノの……。

「噛むと一気に肉汁が溢れますので、猫舌の方はご注意くださいね」「いただきます！」

気付けば、ジーノはひとつめのヒュドラ唐揚げを頬張っていた。

「……………！」

そして、天国を見た。

舌に真っ先に感じるのは、塩の利いた薄い衣の感触。

それをさくつと歯で割れば、たちまちジューシーな肉と、じゅわつと渦巻く肉汁に行き当たる。

熱さに、歯の先がちんとした。

むちむちとした地鶏のような食感。

それでありながら、脂の乗った魚のような、濃厚な味わい。

噛めば噛むほど、丸みを帯びた脂と、塩気を帯びた肉汁が混ざり合い、口の中いっぱい広がっていく。

無我夢中で次の一皿に手を伸ばそうとしたジーノを、しかしエルマが素早く制止した。

「お待ちください。二個目は、ぜひこちらのソースとともに」

振りほどけぬほど強い力で腕を掴まれ、ジーノは思わず絶望の呻き声を上げる。

ソースがなんだ。今は塩すら欲しくない。

それよりも、早く、早く、次の一口を含みたいのに。

舌の上に、喉の奥に、この素晴らしい味わいを感じたいのに！

もはや中毒者のような目つきをしたジーノは、無理やり「ソース」とやらを振りかけられた唐揚げを奪うようにして食った。

そして、

「あ………」

恍惚の眩きを漏らした。

これは、なんだ。

(口の中で、肉が、溶けていく……！)

それは、今までに経験したことのない、まさに奇跡の食感であった。

むっちりとしていたはずの肉は、つんと酸味の立ったソースを受け止めたところから、ほろりとほどけていく。

ゆっくりと溶けゆく肉の繊維は、まるでそつと寝台に横たえられていく、たおやかな乙女のようなようであった。

さくさくの衣と、とろける肉。

爽やかなソースの酸味と、どこまでも丸い脂の甘み。

相反する要素同士が手を取り合い、ともに笑い合っているかのような瞬間。

それはまさに、平和。あるいは、奇跡。

目を見開いて、絶句するしかないジーノに、エルマは真顔で頷いた。

「聖水をベースにしたソースです。微量な魔力を残したヒュドラ肉は、聖水を振りかけることによって溶けるため、このような食感が楽しめます」

ジーノは、無粋にも聖力を大量投入して、一気に肉を消し炭にしてしまった自分を、斬り殺してやりたくなった。

「俺……、俺はなんてことを……っ！」

己の所業を悔いて涙目になるジーノの肩に、エルマがそつと手を置く。

「ジーノ様は、普通のヒュドラの食し方をご存じなかったのですよ

ね。常識の欠如による失態は、私もしばしば演じてしまいます。どうぞそこまで気を落とさずに」

「……………」

いや、ヒュドラを食すこと自体が普通ではないんじゃないかな。

ジーノが、そしてギャラリーが、またも心をひとつにする。しかし、そのツッコミが声として紡がれる機会はなかった。

なぜなら、

「ふ……ふめええええ！」

「ちくしょう……！ 初めての食感なのに……なんか……なんか、すごく懐かしいぜ……っ」

「母さああああん！」

ジーノに続き、食欲と興味を抑えられず唐揚げを口にしたほかの候補生たちが、次々とむせび泣きはじめたからである。

彼らは、舞台袖で救護班に応急手当をしてもらった後、唐揚げの匂いに釣られて、這いずるようにして再び舞台上がったのであった。

いくら間口の広い剣士職とはいえ、ジーノのように下町出身の候補生はほかにいない。

にもかかわらず、その出自を超えて、彼らに家庭の味を想起させるようななにかが、ヒュドラの唐揚げ、およびエルマの包丁捌きにはあった。

しかも、彼らの感動の対象はそれだけにはとどまらなかった。

「なんか……すげえ力が湧いてくる……!?!」

「……………!?! ヒュドラにやられた火傷が、みるみる回復してる……!?!」

そう。

魔袋を取り除かれたことで毒を排され、さらに聖水によってごく微量の残存魔力すら取り払われたヒュドラ肉というのは、魔獣特有の、ひたすら滋養強壮によい成分の塊でしかなかったのだ。

聖女の癒術も真つ青のレベルで回復していく己の体に、候補生たちも愕然とする。

彼らはゆっくりとエルマのほうを振り返り、そこに陶醉の色を浮かべた。

「……………やっぱり聖女だ……………」

「いや、女神だ……………」

「いや、あの凄まじい包丁捌き……………。彼女は、戦闘と癒しを同時に司る、戦女神なんだ……………」

肩書きが着実に進化している。

うっとりとしてエルマを見上げる彼らの中には、数日前までは「外様とさまの女がでしゃばりやがって」と陰口を叩いていた者や、中には嫌がらせを仕掛けた者までいたが、今や、そんな過去などかけらも感じさせぬほどに、皆エルマに隷属しきっていた。

そんな候補生を見ていたジーノに、苦々しい笑みが浮かぶ。

彼らの突然の変心滑稽に思われたからではない。

そうではなく、わずか一時間足らずで、高慢な周囲を改心させてしまったエルマと、三年近く学院に在籍してなお、彼らのことを

完全にはねじ伏せられなかった自分との差を、痛いほどに実感したからであった。

（俺に嫌がらせを仕掛けてきたやつらはぶちのめしてやったし、どんな決闘でも相手を斬り負かしてきたけど……結局、俺を侮る目つてのは消えやしねえ。ひきかえこいつときたら、ものの数十分で、こいつらの心からの尊敬まで得てやがる。……これが、出自の差つてやつかねえ）

屈強な剣士候補生たちに跪かれながら、小柄な体で凜と佇む少女の姿には、友人のラウルにも通ずる、生まれながらに高貴な雰囲気があった。

やはり彼女は、アウレリアからトリニテートを奪取する任務を命じられるほどに、能力に秀で、かつ高貴な身分の少女であるのだから。

その圧倒的な技量。

美貌。

他者を従えるオーラ。

どれ一つをとっても、敵わない。

多少荒っぽいところはあるものの、心根はまっすぐなジーノは、潔く負けを認めた。

「……降参だわ」

「え？」

少女は怪訝そうな顔で振り返る。

ジーノは肩をすくめると、敗者の証として、師から託された聖剣

を床に置いた。

「俺はあんたにや敵わねえ。聖剣士の座は、あんたに譲るよ」

「え？ いえ」

「言い遅れたな。俺は、ジーノ。下町のしがない肉屋の息子、ジーノ・マージだ。あんた、名前はなんていうんだ？」

当惑した様子の少女を遮り、名を問う。

聖剣士の座は逃したが、せめて誇り高い剣士のように、正々堂々とした名乗り合いというものを済ませてみたかったのだ。

だが、そこで少女はますます困惑したように首を傾げた。

「私に苗字はないのですが……」

「は？ あ……孤児とか？ いや、でも、学校か教会に行けば、そこで苗字をもらえるだろ？」

「いえ、学校や教会通いの経験もない……というか、そもそも戸籍がないものでして……」

その弁に、耳を疑う。

アウレリアでは、たとえスラムの最下層民であっても、出生と同時に導師から洗礼を受け、かりそめの姓を与えられ、戸籍が作られるものだ。

アウレリアより数段大国であるルーデンならば、より間違いなく社会に組み入れられることだろう。

なのに少女は戸籍が無く、しかも聞けば、学校に通ったことすらないのだという。

それはつまり、彼女は高貴なる生まれなどではないということ。さらに言えば、普通の家庭、普通の社会といったものすら知らない

ということだ。

(それなのに……?)

ジーノが呆然としてしていると、エルマは「私のことはさておき」と、なぜか納得したように頷いた。

「ジーノ様は精肉店のご令息であられたのですね。道理で鮮やかかつ繊細な太刀捌きだと、腑に落ちた思いです」

「……ご、ごれいそく?」

こと宗教色の強いアウレリアにおいて、獣肉を解体するジーノの父の仕事は、下賤の労働とされる。

学院では「豚小屋の息子」と蔑まれる出自を、妙に麗しく表現されて、ジーノは戸惑った。

「はい。周囲の料理人複数名から、アウレリアの精肉加工技術は、他国に比べて数段優れていると聞き及んでおります。一太刀のもとに頭を切り落とす技、血管や筋肉を極力潰さぬ、解剖学に則った合理的な刃運び……命に対する真摯な在り方が、そうした技術を結実させるのでしょうか」

「……いや」

そんなものが、あの下町や、自分の父にあつたらうか。
だが、

「ご謙遜を。ジーノ様も、先ほど過剰な聖力こそ込めてはしまいましたが、ヒュドラの頭の軌道を見極め、一太刀のもとに邪頭を貫いたその技術、さすがはアウレリア精肉加工の神髓よと、感服する思いでございます」

エルマにそう指摘され、ジーノは思わず目を見開いた。

いいかあ、ジーノ。一刀両断。これが肝なんだ。

ふいに、脳裏に父のだみ声が蘇る。

俺たちあよ、大切な命を頂いて、捌く、それが仕事だ。

だから、相手が豚であれなんであれ、怖がらせちゃならねえ。苦しませちゃならねえ。

俺たちにや、うじうじ悩む時間も、躊躇いも、いらねえんだ。ばさっと一思いに、斬ってやらにゃあ。

町で商品を買いかれたとき。豚臭いと、周囲から嘲笑われたとき。

地団太を踏んで悔しがる幼いジーノを横目に、父親はただそれだけ告げて、豚の頭を落としてつづけていた。

その頃のジーノの目に、それは逃げのように映った。

蔑まれようと、ほかにできることがないから、父親はそうしているのだと。

明後日なことを告げて、仕事に没頭することで、不甲斐なさをこまかしているのだと。

だが。

立ち込める臭気も。

汚らわしい仕事よと蔑む世間の視線も。

それらもまとめて断ってやるといわんばかりに、斬る。斬る。

家畜の汚物と血にまみれ、安い労働に汗を滲ませたその背中は、たしかに、力強さと、誇りに溢れていた。

「……………」

なぜだか、喉の奥が熱くなった。

あのしみつたれた下町に、豚臭い父親に、学ぶものなどないと思っていた。

だが、そんなことはない。

そこで得た教えは、むしろ自分のど真ん中に、しっかりと根付いていたのだ。

（そっか…………）

ジーノは、そのときようやく悟った。

自分が、三年かかっても学院で出自への中傷をねじ伏せられなかった理由。

それは、ほかでもない彼自身が、自らの生まれを恥じていたからだ。

（むしろ、俺はそれを誇るべきだったのに…………）

どうだ、これが下町の、肉屋の息子の剣だと。

胃袋を満たし、人を生かすための、迷いのない力強い剣であろうと。

ジーノは、ふっと息を漏らし、笑った。

いよいよ、トリニテートの座など、出自に対する周囲の目など、
どうでもよくなった。

(だって、そんなもんでも、俺は……俺だ)

観客席から、身を乗り出さんばかりにこちらを見ている、ラウル
とクロエの姿が視界に入る。

二人に軽く片手を挙げて答えてから、ジーノは「そうとも」と、
心中で呟いた。

そうとも、俺は、俺だ。

トリニテートの身分などなくとも、あの輝かしい友人たちに並び
立つのに、十分ふさわしい資質を持っている。

「……目が覚めたわ。ありがとな」

感謝の気持ちを込めて力いっぱい肩を抱けば、予想外だったらしく、
小柄な少女はちよつとよろける。

「おつと悪イ！ ……にしてもあんた、ほんと別嬪だな」

しげしげと見つめて告げると、彼女は戸惑いも露わに「いえ……」
と首を振ったが、そんなとき、背後から暗雲を背負ったかのような
低い声が掛かった。

「ちよつと、失礼……！」

ルーカスである。

18・「普通」の剣技(4)(後書き)

本日20時以降の感想から返信を再開いたします。
ご心配をお掛けし申し訳ございませんでした…！

19・「普通」の剣技(5)

ルーカスは、用務員に扮した立場から、それまでなんとか沈黙を保っていたが、ここにきてとうとう堪忍が効かなくなったようで、べりっと二人を引きはがした。

そうして、エルマを強引に、イレエネも待つ舞台袖まで引き連れ、小声で説教を始めた。

「エルマ……！ おまえ、いったいなにをしている！」

「なにを、と仰いますと……。……もしや、私の行動のどこかに非常識な点がありましたでしょうか？」

「最初から最後まで、徹頭徹尾、非常識祭りだ！」

最後の最後、ジーノに親し気に肩を抱かれていたことも気に食わないが、もちろんそれ以外にも、ルーカスに言いたいことは山のようであった。

「おまえな　！」

なんとという無茶をする。

どれだけ心配したと思っている。

とうかなげヒュドラを調理しはじめた、活躍を避けるというのは嘘だったのか。

もともとルーカスは、好いた女性ならば腕の中で守りたいタイプだ。

無茶ばかりするエルマのことを揺さぶって問いただしてやりたい

気持ちがあつたし、同時に、ぶっ飛んだ無双ばかりする彼女に激しくツツコミを入れたい気持ちもあつたが、そのどちらもが、次のエルマの言葉によって行き場を失ってしまった。

「非常識。……そうでした、まだお礼を申し上げておりませんでしたね。このたびは、ありがとうございました、殿下」

「なんだと……？」

「殿下とイレーネが得物を出刃包丁にすり替えてくださったおかげで、私、目が覚めました」

なにを言われているのかわからず、ルーカスはぼかんとしてしまふ。

エルマはちよつと照れたように微笑んで続けた。

「私、『今日こそは平凡に徹するぞ』と決意だけは固めていたのですが、実は、具体的な方法については今一つ理解できていなかったのですよね。先程イレーネに叱られたことで、登録してしまった剣は、どうやら『普通』とは掛け離れたものだとなつたので、こうなったら棄権でもすればよいのかな、と思っていたのですが」

彼女はそこで、ふふつと嬉しそうに小首を傾げた。

「そうしたら、出刃包丁に武器を替えてくださっているではありませんか。なるほど、この場で求められている一般的な行動とは、棄権などして目立つことではなく、あくまで一介の侍女として振舞い、ヒュドラを調理することだったのかと、ようやく得心した次第です」

ルーカスは白目を剥くかと思つた。

この、完全に行動が裏目に出ている感はどうだろう。

「……あまりに戦力に劣る武器で、戸惑っていたのではなかったのか」

「え？　むしろ小回りも利き、しっくり手に馴染む大きさで、大変すばらしい使い心地でしたが」

「いやだが、おまえ、ヒュドラを前に手も足も出ずに突っ立って……！」

「ああ。皆さまが頭を増やしてくださっていたので、二十を目標に待っていたのです」

「じゃあ、ヒュドラに食われてみせたのは……！」

「食われた、というか、内部から魔袋を剥がしに行ったのです。必要な工程ですよね？」

「ですよね、と聞かれても。」

「もはや言葉もない。」

沈黙するルーカスを前に、エルマはそっと頬を赤らめ、目を細めた。

「伝説級武器を使用しての戦闘も行わず、棄権などの目立つ行為も控え、あくまでジーノ様のトリニート入りが確実となってから、一介の侍女としてできる精いっぱいをこなす」

「おかげでヒュドラ一体は無駄にしていまいましたが、と残念そうに告げてから、彼女はきらきらと輝く瞳でルーカスを見上げた。

「これなら　非の打ち所がない、普通ぶりですよね？」

「実に澄んだ瞳だった。」

「いやおまえ……捌いた時点で、おまえもヒュドラを倒したことに

なるだろうか……！」

「それにつきましてはご心配なく」

ルーカスが辛うじて絞り出した反論にも、エルマは邪気のない笑みで答える。

彼女はすつと左手を掲げ、その人さし指の第二関節あたりを指し示した。

「ほら、ここ。揚げ油が跳ねて、少しばかり火傷が」

よくよく目を凝らしてみれば、その白魚のような指は、ごくわずかに、ごま粒ほどの範囲で赤みを帯びているのだった。

「試合中に髪の毛一筋ぶんであっても傷つけられれば、失格。ヒュドラの油によって火傷を負った私は、もちろん聖剣士の資格などございませぬ」

「……………」

そのこじつけのような敗北宣言で、いったい誰が納得するというのが。

ルーカスはとうとう天を仰いだが、そのときになってふと、違和感を感じた。

どうも先ほどから、イレーネが大人しい。

「おい、イレーネ。おまえからも何か言っただよってくれ」

ついにルーカス自ら水を向けてみれば、それまでずっと俯いていたイレーネは、ようやく顔を上げた。

普段表情豊かなはずのその顔は、未だに蒼白で、強張っていた。

「……………？ イレーネ？ どうしましたか」
「エルマ」

首を傾げたエルマに、イレーネはやけに低い声で切り出した。

「……………あなたは、どうしていつもそう、無茶をするの」
「無茶？」

夜明け色の瞳が、きょとんと見開かれる。

エルマは困ったようにイレーネの顔を覗き込み、その怒りも露わな様子を見て取って、宥めるように腕に手を添えた。

「とても苛立っているご様子ですね。お腹がすきましたか？ 時間がかかってしまい申し訳ないです、イレーネもぜひこの聖水ソースで」
「いらないわよ！」

イレーネが強くそれを振り払うと、エルマはびっくりしたように肩を揺らした。

「すみません、イレーネは塩派」
「たしかに塩派だけど、今はそんなことを話してるんじゃないわ！」

その荒々しい口調に、横で聞いていたルーカスまでもが片眉を上げる。

イレーネは、一瞬気まずそうに唇を噛んだが、すぐに顔を上げ、じっとエルマを見つめた。

「エルマ、私はね。あなたの、……………あなたのそういう、……………っ」

だが、その声はすぐに詰まり、なにも言えなくなってしまう。
イレーネはぐっと唇を引き結び、激しい感情を呑み下すと、ぱつと踵を返した。

「私、帰ります」

「え？」

「具合が悪いので、先に部屋に帰って休みます。……いえ、主人に移したらいけないので、学院の保健室で今日一日休んでまいります。申し訳ございません。食事と湯あみの用意は先に整えておきますので」

「待ってください、イレーネ」

突然の態度の変容に、エルマが珍しくまごつく。

しかしイレーネは、制止を振り切り、闘技場を走り去っていつてしまった。

出会って、半年。

初めて起こった事態に、エルマはなすすべもなく立ち尽くす。

それを見たルーカスは、思わず「おい……」と声を掛けかけたが、

「ひとまず、ヒュドラ二体は倒されたものと認定する」

困惑を多分に含んだガイドの宣言によって、はっと我に返った。

そうだ。

今はまだ聖鼎杯の最中なのであり、ルーカスはその運営に携わる
用務員の一人なのであった。

「ヒュドラを倒したジーノ・マジとエルマは、前へ。傷がないかを確認のうえ、両者とも無傷であれば、すみやかに個別試合へと移行する。用務員たちは、救護班と協働し、担当の候補生の状態を確認のうえ、場内に散らばった武器や……なんだ、その、調理器具を回収せよ。舞台の衛生を確保する」

グイドの命で、舞台脇の控え室から、ばらばらとほかの用務員たちが出て来る。

ルーカスは一瞬の逡巡の後、慌ててその一団に加わった。

なにしろ彼は、エルマの武器をすり替えている。

もともと箱に収まっていた、エルマが登録したと思いき剣は、闘技場隅の予備武具置き場に紛れさせたままであったので、隙を見てあれを回収せねばならないのだ。

様子のおかしいイレーネや、珍しく呆然としていたエルマ。

部下たちのことで気が急ぎながらも、如才なく立ち回って、なんとか元の剣を手中に収める。

回収したその剣を、ひとまず己の身に佩き、さっさとエルマたちのもとへと引き返そうとしたルーカスだったが、

「……………?」

柄つかに触れた指に違和感を覚え、彼は剣を検めた。

「これは……………?」

登録情報によれば、それは、オリハルコン製のカリブルヌスのはずであるもの。

すり替えたときには焦っていたので、じっくりと剣を検分するこ
とはしなかった。

が、今、改めてそれを握り、刃や、柄の部分をまじまじと見つめ
る。

そうして、ふと思いついたままに、己の右手 柄に巻かれた布
に触れた部分 の匂いを嗅いでみて、

「……………」

ルーカスは、険しい表情を浮かべた。

20・「正義」逆位置(1)

「『正義』の、逆位置」

札をめくったハイデマリーは、珍しく哀しそうな声を漏らした。

「あら、まあ……」

ほう、とこぼれた溜息の先には、凜と前を向く女王の絵がある。
左手に天秤、右手に剣。それぞれ、公正な裁きと断罪とを象徴するものたちだ。

平等、調和。均衡に、誠意。

「正義」のカードはそういった、安定した状態を表す。ただし、
正位置ならば。

「逆位置。……『正義』の逆位置ねえ？」

「……なにか問題なのか？」

気になったクレメンスがつい尋ねてしまうと、ハイデマリーはかすかに顔を顰めた。

「まあ、解釈次第だけれど。このカードが逆位置で出た場合、意味するのは『不均衡』。安定が崩れた状態よ。エルマが周囲から与えられたもの。不協和、釣り合いの崩壊、偏り、一方通行……」

彼女は連想される言葉を紡ぎながら、カードに白い指を滑らせた。

「ぶつかりあって均衡を失った正義　喧嘩でもしたかしら？」

物憂げに呟く様子は、心配性な母親そのものである。

難しい表情で口を閉ざした麗しの女王に、周囲が肩をすくめながら声を掛けた。

「喧嘩、できる相手に、恵まれたというのなら、結構なことではないか」

特徴的なぶつ切れの口調で告げたのは、相変わらず大量の菓子を頬張っているイザークである。

彼は、強靱な顎でもりもりとクッキーを咀嚼しながら、わずかに首を傾げた。

「喧嘩とは、対決であり、対決とは、語り合いだ。俺は、聖獣に、魔獣、はては魔蟲や妖精の類までも、遭遇するたびに、拳を戦わせ、彼らの魂を、身の内に感じてきた」

「身の内に感じるっていうか、胃袋に収めただけだよな」

即座に、横で紅茶に暴力的な量の砂糖を投入していたホルストが応じる。

すると、その隣でマニキュアの仕上がりを確認していたリーゼルも加勢した。

「そうよお。【暴食】がなんでもかんでも食べられるって教えるものだから、あたしたちは一時期ずいぶんゲテモノ食生活を強いられたんじゃないの。ヒュドラだっけ？　高級地鶏のフライだと思っていたのが、蛇だったと知った時の衝撃、あたしは忘れないわよ」

「……うまい、うまいと、一番、食っていたのは、【嫉妬】だったと、思うが」

「だからこそショックだったんでしょ！ ドラゴンといい、ヒュドラといい、【暴食】の料理は倫理観を味で軽々超越してくるから、たちが悪いのよ」

リーゼルはふんと鼻を鳴らす、ほかの「大罪人」たちは静観の構えだ。

というのは、潔癖症のきらいがあるリーゼルを除けば、ホルストやモーガンのように食への興味が低いか、またはハイデマリーやギルベルトのように食への許容度が高いかの、どちらかだったからである。

特にギルベルトは、愛するハイデマリーが鶏のように淡泊な味わいの肉を好むと知っていたので、イザークがヒュドラ狩りに出かけると聞くと、ぽんとエクスカリバーやカリブルヌスを貸して寄越すほどであった。

勇者時代、ギルベルトは名剣と呼ばれる存在にやたら遭遇する体質だったので、この監獄においては、伝説の名剣も、切れ味のよい果物ナイフと同等の扱いである。

ゲテモノ食いの定義について云々しだした周囲を、ハイデマリーはしばらくぼんやりと見守っていたが、やがてソファに身を沈めると、傍らのモーガンに紅茶のお代わりを所望した。

「ねえ、【怠惰】。あなたが手ずから入れた紅茶が飲みたいわ。ミルクはなし、レモンをたっぷり絞ってちょうだい」

「おや。ブランデーも垂らしましょうか？」

「今日はいいわ。けれど、レモンはブランデーと同じくらいに香り高い、新鮮なものでなければいよいよ」

女王が嫣然と言い切ると、モーガンはやれやれと溜息をついた。

「わがままな方だ。わかりましたよ、庭のレモンを摘むところから始めましょう」

「ギルを使っていいわよ」

「では遠慮なく」

そうしてギルベルトを伴い、部屋を去っていく。

それを見送ると、ハイデマリーはソファに掛けたまま頬杖を突き、卓上のカードを眺めた。

「さて……均衡を失ったあの子への、『対応策』も見てみようかしら」

彼女は浮かない表情のまま、ひらりと「正義」の真上に位置するカードを翻す。

今回現れたのは、ローブをまとい、厳粛な横顔を見せる老年の男性の絵だった。

左手には杖、右手にはランタンを掲げて、老人は暗い道を静かに歩んでいる。

ハイデマリーはなぜかくすりと笑うと、知性を宿した老人の瞳の辺りを、そつと人さし指で隠した。

「『隠者』ね。意味するのは、経験、助言　ああ、よかった。エルマに起こった不均衡は、きっと彼によって解決の糸口をもたらされるでしょう」

ゆつたりとした口調には、能力ある占術師か、さもなければ霊験

あらたかな巫女のような、静かな迫力が滲む。

そばでハイデマリーの占いを見守っていたクレメンスは、「ばかばかしい」と鼻を鳴らすことすら忘れて、つい彼女を見つめてしまった。

「彼とは……誰なのだ？」

「隠者の正体？ ふふ、内緒よ」

美貌の女王は、そつと目を細めて笑う。

その藍色の瞳には、ランタンを掲げた隠者が愛娘に救いの手を差し伸べる様が、まるで現実に見えているかのようにだった。

「……ああ、でもそうね、随分と年若い隠者かもしれないから、老婆心ながら、わたくしもお呪いまじなをしておこうかしら」

彼女はそんなことを呟き、白い指をそつと、逆位置となった「正義」のカードに掛けた。

そつして指でとんと隅を押さえ、すつとカードを半回転させていく。

「位置を、正しく。不均衡から、均衡へ。善意と誠意がたがわず噛み合う、調和の取れた状態へ」

正位置に収まった「正義」の女王は、宙を射抜くように、凜と前を見据えていた。

夕闇の迫った学院。

薄暗い廊下を、ランタンを片手に黙々と進む者があった。

全身を陰気なローブに包み、さらに冴えない眼鏡で顔を覆った姿は、まるで老人そのものといったところだ。

が、その足取りはよくよく見ればしつかりとしており、ランタンを掴む手もまた、力強く、張りのある肌をしている。

学院の片隅にある保健室に向かっている彼の正体は、
用務員に身をやつした、ルーカス・フォン・ルーデンドルフであった。

「イレネ・フォン・ノイマン殿。在室でしょうか」

清潔な白い扉の前にたどり着いたルーカスは、念のため用務員としての体裁を維持しながらドアをノックし、それからするりと入室を果たす。

赤い夕陽の差し込む、薄暗い空間には、簡易のベッドが六台。

イレネは、その最奥のベッドでぼつんと一人、シーツごと膝を抱えていた。

「……保健医は」

「……先ほど帰られました」

言葉少なに人払いされていることを確認しあい、それきり両者は黙り込む。

ランタンを置き、フードを下ろし、眼鏡を外す頃になっても、イ

レーネはなにも言わない。

ややあって、静かな溜息とともに切り出したのは、ルーカスのほうだった。

「 で。いつになったら部屋に戻るつもりだ? 」

「 明日の早朝にでも。……今日一晩は、ここで頭を冷やします 」

低い声で答え、イレーネは再び押し黙る。

普段はおしゃべりなほうである彼女は、感情が溢れると逆に、口数が減ってしまうようであった。

居心地のよいとはいえない沈黙に、ルーカスは無言で顎を撫でる。なにしろ、人との間合いを取ることに優れたルーカスだ。

普段ならば、友人と喧嘩してふさぎ込んでいる女性を見かけたら、そつとその場を離れるだろうが、今回はそうしなかった。

彼には、聞きたいことがあったためだ。

「 イレーネ 」

ルーカスは、奇妙に静かな声で問うた。

「 おまえが今回そうやってエルマと距離を置こうとするのは、本当に、エルマの無茶に腹を立てたからだけなのか? 」

「 ……………? 」

イレーネが、怪訝そうに顔を上げる。

逆光で見えにくい表情をよく検分するために、ルーカスは、こつ、と靴音を立てて寝台に一步近づいた。

「質問を変えよう。おまえは、今回かなり協力的に、エルマの活躍を止めようと働きかけてくれた。それはなぜだ？」

「……なぜって、それはだって、殿下が、エルマの正体が魔族である」と

「そうだな、俺が頼んだ。だが……一昨日の依頼であつたにもかかわらず、なぜおまえは、細工を施した剣など用意できたんだ？」

猫のような緑の瞳が見開かれる。

薄日でもそうとわかるほどに、彼女は肩を揺らした。

ルーカスは、いつの間にか寝台のすぐそばにまで距離を詰め、イレーネを見下ろした。

「先ほど、出刃包丁とすり替えた元の剣を、エルマに返そうと回収してな。その時、カリブルヌスであるはずのそれに、どうも違和感を覚えて、今更ながら検めてみた。するとどうだ。そいつは……名剣どころか、刃の欠けた古剣だったよ。それも、細工の施された、な」

「……………」

「これまでのおまえの態度で、少々気になるところが俺にはあつたんだ。それでも意識には上っていなかったそれらが、その瞬間、すべて浮上した」

思えばイレーネは、時折妙に、アウレリアヤトリニテート候補生たちについて詳しくかった。

また、ルーカスが協力を依頼する前から、エルマの活躍の阻止にやけに協力的だった。

意を汲んで、と彼女は言っていたが、日頃ルーカスのことを上司

とも思っていないささそうなそぶりを考えるに、その協力的な態度はいささか妙である。

それに先程の試合で、ルーカスが出刃包丁にすり替えたと告白したときには、やけに　ルーカスからすれば必要以上に　驚いていたようであった。

最も気になったのは、彼女の視線。

イレーネは、このアウレリアに来てから、やけに周囲をきよろきよると見回すことが増えた。

闘技場においては、特に。

大切な友人であるエルマの試合中でさえ、時折、そうせすにはいられないというように、観客席の一点を見つめていた。

まるで、そこに心を寄せる相手か、そうでなければ、なにかの合図があるかのように。

黙り込むイレーネの顎を掬い取り、ルーカスは低く告げた。

「答える。おまえは、いつからエルマ妨害の準備を進めていた？
なぜ、アウレリア側の筆頭候補生　ラウル・パウアリーニやジーノ・マージを熱心に見つめ、かつ、それを隠そうとする？　……おまえの目的は、なんだ？」

21・「正義」逆位置(2)

「おまえの目的は、なんだ？」

エルマのカリブルヌスは、まず何者かによって柄の部分に、痺れ薬を塗りつけた古剣に替えられていたのだ。

そのすり替えた剣をさらにルーカスが出刃包丁にすり替えたことになる。

塗りつけられていた痺れ薬は、即座に人を死に至らしめる毒ではないが、ヒュドラと対峙する際に使うというなら、話は別だ。

ただでさえ、この地に溢れる聖力で疲弊したエルマから、痺れ薬は体の自由を奪い、致命的な敗因となりえるだろう。

「エルマのぶっ飛んだ活躍を防ごうという、一般的な配慮から」と言い訳するには、あまりに備えが過剰すぎた。

それに、イレーネはアウレリアに来たのは初めてと言いながら、やけにこの地、そしてこの学院の情報に詳しい。

時折、敵勢力であるはずのラウルやジーノをこっそりと視線で追いかける様子から、ルーカスとはある疑いを持つに至ったのだ。

もしやイレーネは、トルソ枢機卿がフェリクスと通じているのと同様に、ガイド枢機卿傘下の学生たちと通じているのではないかと。

「……………あ」

至近距離から真つすぐ睨みつけられ、イレーネは観念するかのよう
うに、あえかな息を漏らした。

「……アウレリアは、聖地なのです」

そして、震える声で告白を始めた。

「さては、原理主義の一派か？ 魔族どころか、他国の者を聖地か
ら遠ざけよと主張する類の」

「原理主義……？ え、ええ、まあ。私は根つからの聖書原理主義バイブル
で、安易な二次創作は死すべしと思っと思っていますけど」

「……………は？」

そして、次の瞬間には、ルーカスを混乱の坩堝に叩き込んだ。

「特に、リバは絶対ダメです。ダメ絶対。地雷。聖書げんきくがラウジノで
ある以上、ジノラウなんて唱えるやつは異端者です。ただし脇カプ
はよし。グイジノはぎりオツケー、むしろ当て馬としては推奨です。
ご理解いただけますか？」
「まったくご理解いただけん！」

突然緑の瞳を爛々と輝かせ、熱く語り出したイレーネに、ルーカ
スは思わず顎にやっていた手を離して叫んだ。

「おまえはいったい何の話をしている！？」

「え？ 殿下が振ったんですよね？ 聖書の話ですけど」

そうして、シーツの隙間から取り出したのは、何度も読みこまれ、
擦りきれてしまった一冊の本だった。

題名もほとんど薄れてしまっているが、「薔薇の剣士と獣の歌が

聴こえる」の文字が見て取れる。

ルーカスはなんだか、すごく嫌な予感がした。

が、イレエネは覚悟を決めたとてもいうように息を吐きだすと、一気に話しはじめた。

「周囲に積極的にばらすようなものではないと思っていたので、これまであまり語りはしませんでした。……私、腐女子です。腐女子です。特にクール攻めやんちゃ受け、またはおバカ受けが大好物の、腐女子ですの！」

「……後半の情報は、初めて聞いたな」

しかも三回繰り返された。

静かに引いたルーカスをよそに、イレエネは拳を握って語りつづけた。

「そんな私を開眼させ、決定的にこの恐ろしき沼に引きずり込んだのが、この『薔薇の剣士』獣の歌が聴こえる』、通称薔薇ケモですわ。この一巻が刊行されたのは、もう三年も前のこと。あまりにどストライクなキャラ設定、そしてリアルな世界観に、私は一節を諳んじられるくらいにこの本を読み込みました」

ときどき作品のすばらしさについて脱線しそうになりつつ、イレエネが語るにはこうだった。

薔薇ケモは、アウレリア国立学院を舞台に、少年たちが戦い成長し、そして愛し合う物語だ。

主人公の名はラウルにジーノ。

どちらもありふれた名前であるが、時折描写に出てくる「氷の聖術師」という肩書や「下町出身の少年」といった属性、そしてやけ

にリアルな設定から、学院在籍の生徒か、その関係者が、実在の生徒をモデルに妄想を書き連ねているのだろうと、当時からファンの間では話題になっていた。

実際、観光業と並び、聖書の印刷業で栄えていたアウレリアは、個人でも容易に小規模出版をすることができたので、この手の自費出版物は、国内全域に溢れていた。

ただし薔薇ケモは、思わず諦んじたくなくなるほどの印象的な文章、そして目を閉じていても光景が見えるようなドラマチックな展開が受けた結果、密かに版を重ね、ルーデン王国の一部読者にまで頒布されていたのである。

熱心な教徒となつたイレーネは、何度も何度も薔薇ケモ聖書を読み込み、やがて、ある野望を胸に秘めるようになった。

「いつか……いつの日か、このモデルだというラウル様とジノたんを、この目で見たいと……！」
「たん、つてなんだ、たんつて」

特に、「聖鼎杯編」と銘打たれた章で、トリニテイト入りを果たしたジノたんが、感極まってラウルに愛を告げるシーンは、全薔薇ケミストが感涙にむせばずにはいられない名場面であった。

仮に現実のラウルとジーノがトリニテイトとなれば、さすがにキスはせずとも、小説と同じシチュで もとい、観客に囲まれた闘技場で、抱擁くらいは交わすだろう。

最低でも、小説と同じコスで もとい、法衣とアロー口の冠をまとった姿で、挨拶くらいはするだろう。

だとすれば、他は脳内補完でなんとでもなる。

逆に言えば、挿絵もないこのご時世、補完の基礎となる人物二人についてだけは、なんとしても肉眼で捉える必要があった。

見たい。

聖なるコスをまとい聖なるシチュに身を置いた二人を、なんとかも見たい……！

「そのためには、エルマがトリニテート全部門を制覇する、という事態は、絶対に避けなくてはなりませんでした……」

「……………」
「私は、決めていたのです。この私の決意を知ったら、エルマは驚くかもしれない。呆れるかもしれない。けれど、それでも譲れない。私は、トリニテート入りを決めるラウジノを見るのだと。あの名シーンをこの目に刻みつけるのだと。そしてできれば、エルマにもそれを見てもらって、薔薇ケモのすばらしさに開眼させ……とともに、この腐の沼に、引きずり下ろしてみせると……！」

ルーカスは、無言で天を仰いだ。

もうやだ。

ろくな部下に恵まれなかった男の悲哀を、あえて言葉で表すなら、それはその四文字で事足りた。
が、面倒見のいいルーカスは、痛みはじめた頭を押さえながら、ぼそぼそと突っ込みの言葉を口にした。

「おまえ……。本当に、そんなくだらない理由で剣に細工まで……？」

「くだらなくありません！ 一大事です！」

「で、その甲斐なくエルマが大活躍してしまったから拗ねていると？ だとしたら、それはさすがに改めるべきだ。結局やつは、目論み通り火傷で失格となり聖剣士とはならなかったわけだし、……なにより、己の目的のためにエルマに平凡な振る舞いを期待し、意に沿わなかったら怒るなど、あいつが哀れだ」

自らも、ある種「己の目的のためにエルマに平凡な振る舞いを期待」していることは重々承知しつつ、ルーカスはあえてきっぱりと言い切った。

「あいつの能力を搾取するのも、その意思を無視して封じ込むのも、どちらも同じくらい身勝手なことだ。……俺も含めて、な」

諭すように告げれば、イレーネは押し黙る。

彼女はそのまま、しばらくシートとにらめっこをしていたが、やがてぽつんと呟いた。

「……私、寂しかったのですわ」

素直な告白は、夕闇に溶けてしまいそうなほど、か細かった。

無言で眉を寄せたルーカスから目を逸らすように、イレーネは俯いたまま続けた。

「……あの子、いつも泰然としているでしょう。なんでもできる。……できるから、頼らない。頼るといふ発想が、まずない。フレンツェルでは一回だけ、たしかに私に縋ったように思ったけれど……結局、それきり。あの子はいつも、有能で、……とびきり有能で、だから無頓着。私はそれが、寂しいのです」

こんなにも相手との距離が掴めない友情は、初めてなのだとイレネは言った。

出会ったばかりの頃、エルマは能力が突き抜けているだけで、感情の起伏に乏しい、人間味のない少女なのだと思った。

けれど、付き合いが深まっていくうちに、その考えは変わった。分厚い眼鏡と抑揚のない口調を取り去ってしまえば、彼女もまた、些事で悩み、戸惑い、人との距離を測りあぐねる、普通の女の子だとわかったからだ。

けれどその気付きは、同時にイレネをもっと欲深くもしてしまっただ。

エルマが他者と「普通」の友情を結ぶ、そうした心の用意があるのなら。

イレネは、彼女ともっと親しく 親友に、なりたいたい。

「……エルマが、初めてだったのです。身分に囚われず、偏った趣味の持ち主でもあっさりを受け入れてくれる、同年代の女の子。突飛で、豪快で、でも変なところで抜けていて、目が離せない……びっくり箱みたいな子」

イレネは男爵令嬢。

とびきり身分の高い貴族令嬢とはいえなかったが、そうであつてさえ、領地でも王宮内でも、しがらみは絶えなかった。

そんな中で、身分の上下も気にせず、対等に、心置きなく趣味を語るエルマとの関係は、ただただ心地よかった。

だが 対等。

そう考えたときに、むしろ、自分ばかりがエルマから恩恵を受けているのではないかと、イレネは不安になったのだ。

「あの子は、なんでもできる。もはや侍女の仕事については、私が先輩として教えられることなどにもないし、こうした特殊な任務を与えられても、あの子ならいろいろな能力を生かして、切り抜けていくでしょう。粛々と、淡々と。私がやきもきしたり、心配したりしても、それを歯牙にもかけずに」

やきもきするのは、いつも自分ばかりだとイレーネは思った。

自分ばかりが、エルマのずば抜けた能力に圧倒され、無謀さに肝を冷やし、心配したり、感情を乱したりする。

それが、イレーネには悔しくてたまらなかったのだ。

「だって……友情って 友達って、そういうものではないでしょう？ もっと、互いが互いを思い合ったり、頼り合ったり……そうあるべきでしょう？ なのに現実には、私ばかりがあの子を思って、あの子に新しい世界を教えてもらって……。私は……、ひとつでもいい、エルマの優位に立ちたかったです……！」

イレーネは、シーツのひだをぎゅっと握りしめた。

「私が最も得意である腐の世界に彼女を引きずり込んで……、ひとつでもいい、エルマに、私が、未知の世界というものを教えてあげたかった……！」

「未知の方向性が間違っているだろうか!？」

ルーカスはいきなり叫んだが、イレーネはそれには反論せず、「ですが」と、再び肩を落とした。

「そうした私の勝手な思いが、……今回、結局、エルマを危機に追

「いやってしまいました」

その、悔恨に満ちた眩き。

イレーネがどうしてここまで塞ぎ込んでいるかに、ルーカスはようやく思い至った。

「……エルマがヒュドラに呑み込まれたのが、そこまでショックだったのか」

「目の前で友人を魔獣に丸呑みにされて、ショックを受けない女子などいませんわ」

「だが……」

エルマは無事だったろう。

以前には、崖から海に身を投げたこともあったろう。

反論は思いついたが、結局ルーカスはそれを呑み下した。

戦闘や死体を見慣れているルーカスと、貴族令嬢として育ったイレーネでは、その辺りの衝撃も当然異なるだろうと、理解できたからだった。

「私……」

とうとう、イレーネの目が潤みはじめた。

「もう、ぐちゃぐちゃです。……エルマと……もっと仲良くなりたい、頼られたいって、そう思って……、だからエルマの剣をすり替えて、殿下と一緒に、エルマが困るたびにガッツポーズをして……でも、あんなことになるなんて、思っていなくて……」

「ああ」

「その時になって急に怖くなって……しかも、エルマにとっては、

それすらも、全然、問題ない感じで……結局、いつもと同じ、私ばかりが心配して……っ」

「ああ」

「それが腹立たしいわ、自分が不甲斐ないわ、……しかも、ジノたんは予想以上にかっこいいわ、ラウル様の応援ぶりが尊くて見逃せないわで、もう……視線も考えも定まりません……っ！」

「萌えるか悩むかどちらかにしろ！」

最後涙をこぼして叫んだイレーネを、ルーカスは一刀両断した。

それから、静かに溜息を落とし、「おまえに、いいことを教えてやるっ」と切り出した。

「エルマは今、アウレリアー険しいと言われるセルモンティ山のおそらく山頂付近にいる」

「……………はい？」

そのなにか「いいこと」なのだが、わからない。

イレーネは眉を寄せた。

「明日の試合も控えているというのに、休みもせず、エルマはなにをしていると言うのですか？ 登山？」

「山頂付近で採取できるという希少な岩塩を、取りに行くそうだ」

「……………は？」

なぜここにきて、岩塩。

ますます怪訝そうな顔つきになったイレーネに、ルーカスは唇の片端を持ち上げてみせた。

「わからんか？ 唐揚げは塩派のイレーネ」

「……………っ！」

イレーネは、目を見開いて「まさか……」と呟いた。

「そう。あいつは、おまえが落ち込んでいるのをあいつなりに思い悩み、行動しているんだ」

怒られてしまった、どうやら自分が悪いらしい、どうすればいいのだろう。

お腹が空いているのだろうか、美味しいものを作れば喜んでくれるだろうか。

「たしかに塩派」とは言っていたから、では、とびきりおいしい塩を用意してみればどうだろうか。

イレーネって、本当に食べるのが好きですよ……。

う、うるさいわねっ。あなたの料理を食べると、あらゆるものの思いが吹き飛んでしまうのだもの、しょうがないでしょ！

先日交わした会話が、蘇る。

イレーネは情けなく眉を下げて、唇をかみしめた。

「あいつはこれまでも、数々の言葉を鵜呑みにしてきては、盛大にやらかしてきているが、振り返ってみれば、あいつが鵜呑みにするのは、あいつが信用を置いた相手や、その人物が勧めてきた書物だけだ。……イレーネ。それだけ、おまえの一言は、あいつにとって重みがあるということだ」

「……………っ」

「おまえだけが振り回されている？ とんでもない、あいつだって振り回されているさ。思いが不均衡？ とんでもない、あいつだって、十分おまえに心を砕いている。ただそれが、表情や言葉ではなく、突飛な行動に表れているだけで」

女性は特に、行動よりも、その時々表情や言葉を重視しやすいのかもしれないが。

ルーカスはそう肩をすくめると、静かに続けた。

「信じてやれ、エルマのことを。足りない表情や言葉ではなく、あいつの突飛な行動と、その奥にある素直な想いを。……少なくとも、俺はそうする心の用意ができています」

だからルーカスは、エルマが無茶無双をやらかすたびに、激しくツッコミはすれども、突き放すことはしないのだ。

それはまさしく、癖の強い騎士団をまとめ上げる男ならではの、懐の深さと経験の豊かさと言えた。

すっかり薄暗くなった保健室に、沈黙が訪れる。

やがて、イレエネはルーカスを見上げ、ぼつんと咳きを漏らした。

「……殿下の、その、包容力……」

素直な感嘆の響きに、ルーカスはいたずらっぽく片眉を持ち上げる。

「惚れそうか？ 残念だが、色よい返事はできんぞ」

「いえ、『包容受け』というのもアリだなと、目から鱗が落ちる思いでした。ごちそうさまです」

「……………待て、なぜ俺を『受け』と括る？」

ルーカスは顔を引き攣らせながら、イレエネの表情が清々しいものに戻ったのを見て取り、「それにしても」と話題を切り替えた。

「剣を包丁にすり替えた俺に、それを指摘する資格があるかはなんだが、さすがに剣に細工を施すのはやりすぎだと思っぞ。エルマだから最悪の事態にはならなかったが、普通なら、十分に悪意ある、そして致命的な行動だ」

「細工……。そうですよ。こたびのことは、私からエルマにきちんと話して、どんな怒りでも罰でも受け入れようと思っています」

「ああ。だいたい、一介の侍女が痺れ薬なんてどうやって手に入れたというのだから」

「は？」

「……ん？」

だが、途中でイレーネが怪訝そうに顔を上げたので、途中で口を閉ざす。

聞き返されて、ルーカスもまた眉を寄せた。

「なにか疑問でも？」

「疑問と言いますか……え？ 痺れ薬？ 痺れ薬ってなんのことです？」

「は？ おまえがエルマの活躍を阻止するために、すり替えた剣の柄に、薬を塗った布を巻き付けたんだろ？」

「はっ？」

ほら、とルーカスが証拠の剣を突きつけると、イレーネは、猫のような目をまん丸に見開き、剣を指さした。

「しません、そんな恐ろしいこと！ というかこれ、私の用意した剣ではございませんわ！」

22・「正義」逆位置(3)

ルーカスが証拠の剣を突きつけると、イレーネは、猫のような目をまん丸に見開き、剣を指さした。

「しません、そんな恐ろしいこと！　　というかこれ、私の用意した剣ではございませんわ！　　たしかに私は、エルマの物々しい剣を、昨晚こつそり、刃を潰した剣とすり替えましたが……私がその剣に施した細工とは、振ると偽物の血がドバーっと噴き出るようにしたことですよ！」

「なんだその演劇用の剣みたいなのは！」

「だって、そうしたら怪我をしたみたいに見えて、棄権できるかと思っただけ！　　殿下は『威力を落として平凡に戦え』スタイルでしたけど、私は『早々に棄権しようぜ』スタイルだったので」

でも、出刃包丁でもこれだけショックを受ける展開になったのだから、刃を潰した剣をそのまま使われていたら、自分はどれだけ罪悪感に苦しんでいたことか……と再び負のループに陥りかけたイレーネを、ルーカスが真剣な声で遮った。

「……待て。ということとは、エルマのカリブルヌスはまず、おまえによつて血のり剣にすり替えられ、さらにそこから、謎の人物によりこの痺れ薬付きの古剣にすり替えられ、それを俺が出刃包丁にすりかえていたということか……？」

「ややこしい！」

指を折り経緯を負っていたイレーネが、ぱつと両手を頭に差し込む。

しかし、時間を置いてその意味が脳に沁み込んでいくと、彼女は次第に顔を強張らせた。

「つまり……」

イレーネはこわごわと、見知らぬ剣を見つめる。
それから、怯えたようにルーカスを見上げた。

「私たち以外に、痺れ薬を用意した人物がいる」

「エルマのことを、本気で害そうとした人物が、いるということか……?」

聖鼎杯最終日を翌日に控えた夜、学院は静まり返っていた。

聖女や聖剣士となれなかつた候補生たちが学院を離れ、それぞれ帰途に就いたり、自棄酒を呷りに町の祭りに参加したりしているためである。

今、寮に残っているのは、明日に臨む聖術師候補生のみ。

その多くは、部屋に籠って瞑想や鍛錬に耽っていたが、ただひとり ラウル・パウアリーニだけは、厳粛な面持ちで、学院の敷地の外れにある東屋へと向かっていた。

そこで、彼の恩師である人物が待っていたからである。

「ガイド先生。お待ちいたしました」

「……いや」

柱の一つにもたれかかって夜空を眺めていたガイドは、静かに身を起こし、それからふと珍しそうな顔つきになってラウルを見た。

「クロエやジーノを伴わない姿というのを、久々に見たな」

「彼らはもはや聖女や聖剣士に内定したわけですから。今頃祝賀会に引っ張りだこですよ」

ラウルは東屋に足を踏み入れながら、淡々と答える。

それから、真つすぐにガイドを見つめ、自信に溢れた声で付け加えた。

「ですが、私も明日で追いつきます。そこからはずっと、三人一緒だ」

「……頼もしい限りだ」

ガイドは低く笑う。

それから、真剣な顔つきになって、ラウルの視線を正面から受け止めた。

「ラウル・パヴァリーニ。後はおまえさえ聖術師となれば、俺の生徒三人がトリニテートを固めることになる。ルーデンの候補生の聖力量はいまだに握めないが、当代一の聖力量保持者と言われるおまえの敵ではないはずだ。期待しているぞ」

「……活を入れるためだけに、私を呼び出したのですか？」

ラウルが問えば、ガイドは片方の眉を引き上げる。

「聖術師の課題はチエルソ殿の管轄だが、聞いた話では」「いえ、結構です」

課題の内容を口にしかけたガイドを、しかしラウルは短く遮った。

「僕がトリニテート入りを目指すのは、先生には申し訳ないですが、枢機卿間の権力闘争に貢献するためではありません。助力など得ずとも、僕は僕の実力で、ジーノたちと並び立つ地位を手に入れてみせます」

丁寧な口調だが、その物言いには力強さがある。

冷たく整った美貌とは裏腹に、そこにはたしかに、少年らしい自尊心と正義感が滲み出ていた。

ラウルは静かに拳を握り、ガイドに告げた。

「トリニテートとなれば、教皇の決定すら覆せるほどの発言権が手に入る……。僕はいずれ、平等を掲げておきながら、身分や出自で人を差別するアウレリアの社会を是正したい。そのためには、たとえ先生といえど、枢機卿の力を借りるわけにはいかないのです」

ラウルは、クロエやジーノとは異なり、自身が枢機卿たちの権力闘争を代理させられていることについても、理解している。

それでもなお、トリニテート入りを目指しているのだ。

それはひとつには、貴族の三男という「穀潰し」のような存在であつても、絶大な権力を手に入れてみせるという、少年らしい野心のため。

そしてそれ以上に、ジーノやクロエといった、彼が誇る友人に、並び立つためであつた。

妾の子であつても、清らかな心で生きてきたクロエ。
出自を蔑まれても、朗らかで素直な心を保つてきたジーノ。
真つすぐに生きる彼らに触れるうちに、ラウルもまた、そうした
生き方に憧れるようになった。

彼らのように、ありたい。

兄たちのスペアとしての役割しか持たない、貴族の三男の自分だ
けれど、もし、少しでもこの身分を生かすことができるなら。

自分は、トリニテートの権力を宮廷で揮い、友人たちを苦しめる
あらゆる軛を、取り払うことをしたい。

それが、目的もなく生きていたラウルが初めて抱いた、強い意志
であつたのだ。

「先生。トリニテートという可能性を提示してくださつたあなたに、
僕は深く感謝しています。チェルソ枢機卿のように大国に尻尾を振
るのではなく、自国でアウレリアの尊厳を守るべしという先生のお
考えも、この国の貴族の端くれとして、十分に理解できる。ですが、
僕はあくまで、あなたの権力のためではなく、友のために戦い
たい」

湖のような碧眼に、炎のような闘志が揺れる。

ガイドはしばしそれを見つめていたが、やがて静かに、

「そうか」

と呟き、ならばよいと、会話を締めくくつた。
無言で頭を下げ、去っていくラウルを見送る。

それから、グイドは再び星空を見上げた。

「……………本当に守りたいのは、アウレリアの尊厳などではないさ」
瞬く星の、そのどこかに大切な誰かがいるとでもいうように、彼は目を細める。

やがて彼は、自嘲の形に口元を歪めた。

「ラウル・パヴァリーニ。……………友のために戦う者が、おまえだけとでも……………?」

やけに、苦々しい声だった。

23・「正義」逆位置(4)

「真つすぐに。釣り合うように。善意と誠意が、違わず噛み合うように」

ハイデマリーは楽しそうに嘯きながらくるりと「正義」のカードを回転しおえると、疲れたようにどさりとソファに背中を預けた。

「ああ。タロットって、集中力がいるのよね。紅茶はまだなのかしら。【怠惰】ったら、あんまりのんびりしては、夜が明けてしまうじゃないの」

先ほど出ていったばかりのモーガンに対して、そんな無茶な独白を放つ。

彼女は自身の膝に頬杖を突き、気だるげな表情で最後の一枚をめくると、「ああ」とぞんざいに頷いた。

「『太陽』。よかったわねえ、ハッピーエンド。めでたしめでたしだわ」

最後に開かれた、十字の一番下のカードには、人の顔を持つ太陽と、青い腰布を巻いた裸の赤子の絵が描き込まれている。

周囲には、色鮮やかな光の雫。タロットに疎い者であっても、輝かしく、喜ばしい札なのだと思うせるような、それは絵柄であった。

「これが最終結果と言ったな。どういう意味だ？」

すっかり興味津々となったクレメンスが、札を覗きながら問うが、

ハイデマリーは軽やかに肩をすくめるだけだ。

「どういうもなにも、見たままの意味よ。太陽。成功。祝福」

そうして、彼女はすつと立ち上がると、優雅に裾を捌いて、部屋を去っていかうとするではないか。

「　　なんだか、とても眠くなってきてしまったわ。占いは、ここまで。悪いけれど、【怠惰】とギルにはよろしく伝えておいて」

「はい、おやすみー」

「紅茶は、代わりに、俺が、頂こう」

女王の気まぐれは今に始まったことではないのか、ホルストやイザークは、こともなげにそれを受け入れ、彼女を見送る。

が、クレメンスは、ハイデマリーの一連の行動に、強い疑問を抱かずにはいらなかった。

よって彼は、するりと猫のように立ち去る彼女を追いかけ、廊下へと飛び出した。

「待たぬか」

ハイデマリーはちらりと振り返るが、すぐに視線を戻し、そのまま歩きつづける。

クレメンスはむきになり、そのほっそりとした二の腕を掴んで、強引に振り向かせた。

「待て。……聞きたいことがある」

「あらやだ、思わぬアプローチに胸が高鳴ってよ。わたくしにもポエムを捧げてくださるの？」

笑みを含んだ声も表情も、いつもの彼女だ。人をおちよくって惑わすのも同じ。

だが、今回ばかりはクレメンスも、その手に乗るわけにはいかなかった。

「望むなら書いて進ぜよう。だが報酬として、おまえの真実を頂戴したいものだ」

「……情熱的な方ね」

ハイデマリーは優雅な笑みを崩さない。だが、声がごくわずかに低くなった。

あなたの真実をちょうだい。

かつてハイデマリーが告げたセリフの意趣返しだと、理解したからだろう。

途端に彼女がまといはじめた冷ややかな雰囲気、クレメンスは無意識に唇を舐めた。

脳裏では目まぐるしい勢いで言葉と記憶を手繰り寄せ、確実に相手の興味を引き付ける問いをひねり出す。

「聖鼎杯。もしくは、トリニテートという言葉を、知っているか」

「……………」

反応は、上々だった。

無言でこちらを見返してきたその藍色の瞳を逃さぬよう、クレメンスはハイデマリーを見据えながら続けた。

「ちょうど今年、今頃にでも、聖鼎杯が行われているはずだ。直近では、三十年前だった」

「……それがどうかして？」

「当時私は司教の座に無かったが、それでも噂が耳に入るくらい、当時アウレリア界隈を騒がせた醜聞があった。トリニートに内定していた三人のうち、聖女候補の娘が脱走した、と。表向きには、病死ということになっているが……な」

「……………」

ハイデマリーはなにも言わない。

クレメンスは、気にせず続けた。

「当時の聖女候補は、学院史上類を見ない聖力量の持ち主で、その能力の高さゆえに、わずか五歳で聖女候補生となり、彼女を見出した学院によって『保護』されていた。髪色などの詳しい情報は知らぬが……幼くして完璧に整った美貌と、覗き込むだけで自我が溶かされるような、深い双眸の持ち主だったと聞く」

「……………そう」

「その聖女候補のほかに、優れた聖剣士候補と聖術師候補に恵まれたその年、三人はトリニートの内定を得て、聖鼎杯はもはや消化試合に過ぎなかった。だがそれが行われる前夜　それまで従順だった五歳の聖女候補が、逃げた」

無言で耳を傾けるハイデマリーに、クレメンスは元宰相らしく、端的に過去を語って聞かせた。

聖女の逃亡に手を貸したのは、その瞳で自我を溶かされた聖剣士候補だった。

彼は友人であった聖術師候補によって我に返り、自首。

投獄も検討されたが、当代一の聖剣使いを手放せないと考えた教会は、名ばかりの枢機卿の地位を与え、学院に飼い殺しにすることによって償いを命じた。

併せて、教会や学院への不信を避けるため、聖女の逃亡は、表向きには病による突然死として片付けた。

脱走に関与しなかった聖術師候補生にだけは、そのまま聖術師の地位を与え、教会の奥深くにある聖地への入殿を許したものの、三人のうち二人までもがその座を手放したことにより、その年のトリニテートは不成立。

それに対する神の怒りかのように、数年後アウレリアはルーデンの属国となる。

亡国の危機に喘ぐアウレリアをよそに、幼い聖女候補の足取りは、杳として掴めなかった。

「醜聞を疎んだ教会が積極的に語らなかつたせいで、聖女候補について情報は曖昧なものや、ばかばかしいものも多いが、共通して語られるエピソードは、こうだ。彼女が歌えばたちまち動植物が育ち、彼女が見つめれば、たちまちすべてが魅了され、膝をつく」

クレメンスは、灰色の瞳を鋭く細め、向き合う女の、その潤むような藍色の瞳を射抜いた。

「魔性にすら似た、その魅了の力。声に、瞳。そして……おそろくは年齢的にも。おまえ、さては」

「あーら、【虚飾^{クレ}】ちゃんったら、夢中になってなんの話？」

とそのとき、クレメンスの背後から、ぼんと肩を叩く者があった。

ほんのわずかにハスキーな、ハイデマリーとは異なる艶を帯びた声。

リーゼルである。

彼は、とつさに振り向いたクレメンスの頬を、肩に置いた人さし指でむにと攻撃し、小首を傾げた。

「いつまでもその女の腕を掴んで口説いてると、【憤怒^{ギル}】にすり潰されるか、あるいは本人からがつぽり巻き上げられるわよ」

「やあね、口説かれてなんかいいわ。年齢についてささやかな会話を交わしていただけよ」

「年齢？ 無粋ねえ」

リーゼルは鼻に皺を寄せて、クレメンスをハイデマリーから引きはがすと、しっしと犬を追い払うような仕草をした。

「遊びに不慣れなじじいは、これだから困るわ。女が部屋に帰りがつていたら、速やかに道を開けて見送るのが男つてものよ」

「だが、その女は」

「聞こえない？」

クレメンスが身を乗り出すと、リーゼルもまた背を屈め、ぐつと声を低めて囁いた。

「引っ込め、つってんの」

どすの利いた、声。

それによる恐怖よりも、頭のどこかがキーンと引っ張られる感覚によって、クレメンスはその場で硬直した。

リーゼルによる洗脳が、ここにきて効果を発現したのだ。

やがて意識の消失した瞳で、ふら、と廊下を引き返しはじめたクレメンスを見届け、リーゼルはふんと鼻を鳴らした。

「ルーデン男なんて、たいがい無粋なものよねえ」

「ありがとう、【嫉妬】。助かったわ」

ハイデマリーが静かに笑って礼を述べると、リーゼルは「いいえ」と肩をすくめた。

「礼には及ばないわ」

「あら、珍しく優しいこと」

「べつに。だって、クレちゃんを追い払ったのは、あなたのためなんじゃないもの」

目を瞬かせたハイデマリーの前で、リーゼルはすっと、一枚のカードを掲げてみせた。

光の雫を撒く日輪と、裸の赤子が描かれた札。

先ほどハイデマリーが開き、そのままにしてきた、『太陽』の夕ロツトだ。

「ねえ、【色欲】。最終結果の、あなたの解釈をまだ聞いてないわ。ついでにあんたの過去とやらも。ぽつと出のじじいなんかよりも、まずあたしに……話してくれるわよね？」

美しく化粧を施した琥珀色の瞳が、獲物を狙う猫のように、きらりと光った。

24・「普通」の対話(1)

聖鼎杯最後の一日、聖術師の部。

前日に引き続き晴天に恵まれたこの日、闘技場は最終日ということも手伝い満員であった。

観客たちの目的は、当代一の実力者、氷のような美貌と前評判を集める候補生、ラウル・パウアリーニ。

そして 聖女・聖剣士の部で、勝利はほかの候補生に譲ったとはいえ、会場で誰より目立っていた美貌の少女、エルマである。

そうすれば平凡に徹せられる、と言わんばかりに、頑なに眼鏡を掛けて、冴えない姿に擬態する彼女の姿勢は、好奇心旺盛な観客からすれば、むしろ興味という火に油を注ぐだけである。

結果、観客たちは雁首を揃え、なによりもエルマの入場を楽しみに舞台を見下ろしていたのだったが。

「……………朝から、疲れました……………」

聖術師候補生のうち、最後に舞台の石畳を踏んだエルマはといえは、珍しく背を丸くし、史上最大にやる気のない佇まいであった。

それというのも彼女は、イレーネがおかんむりだと見て取るや、聖術師の部のこともうっちゃって険しい山頂を目指し、岩塩の採取に徹夜で臨んでいたからである。

名峰セルモンティは、常人の足なら往復四日は掛かる山。

それを一晩で登頂し、最もおいしい塩を有する岩を探し、朝までに引き返して精練、さらに唐揚げ用の肉を仕切り直して用意するというのは、さすがのエルマでも骨が折れた。

過去にないことだが、下ごしらえが終わった途端、テーブルに伏してうとうととしてしまったほどだ。

ふと目を開けると、イレーネは既に保健室から帰って来ていて、カーテンの隙間から差し込む朝陽を拾いながら、愛読書に視線を落としていたところだった。

ぱつと身を起こすと、掛けられていたらしい毛布がするりと肩を滑る。

エルマは脊髄反射でそれを受け止め、ついで無意識にかつ華麗に折り畳みながら、まじまじとイレーネを見つめた。

イレーネはそれに気付くと、ぱたんと本を閉じ、こちらに向き直った。

「おはよう、エルマ」
「……おはようございます」

若草色の瞳は、拗ねたような、呆れたような、むず痒そうな、けれど敵意や嫌悪感のない感情を浮かべている。

イレーネの表情と、向こうから声を掛けて来てくれた事実、エルマはふと、小さな溜息を漏らした。

その時抱いた、じわりと心臓が緩むような感覚はなんと呼ばれ、なぜ生じるものなのかを、これまで「友人」のいなかったエルマは知らなかった。

「は。そうでした、肉を揚げねば」

血流がよくなると、思考も徐々にはつきりしてくる。

素早く立ち上がり掛けたエルマだったが、イレーネがそれを制した。

「いいわ」

「え」

「今は、いらない」

「……まだ怒っていらっしやるのですか？」

微表情を見た限りでは、そのようにも思われないのだが。

困惑したエルマが首を傾げると、イレーネは苦笑した。

「怒ってなんかいいわ。むしろ、私はあなたに謝らなきゃいけない」

「え……？」

「……私、あなたに話したいことがいっぱいあるわ。あなたの話も聞きたい。私たち、もつときちゃんと、対話すべきなのよ。でもそうするには、今じゃ時間が足りないわ。対話も唐揚げも、聖術師の部が終わって この任務がすべて片付いてからにしましょう」

そう言い切る態度は、先輩侍女としての、あるいは年長者としての風格に満ちている。

エルマは無意識にフライパンを求めていた手をおずおずと引っ込め、「はい」と頷いた。

「時間が足りないとのことですが……私、そんなに寝ていましたでしょうか？」

「ええ、起こすのが忍びないほどだったわ。早く支度しないと」

イレーネはくすりと笑って立ち上がり、カーテンを開ける。
一斉に降り注いできた光の矢　朝陽のおおよその入射角を目で
測り、珍しくエルマは顔を強張らせた。

「……思いのほか、日が昇っているようなのですが」

「そうねえ。今、何時だと思う？」

「……その前に私からも質問をよろしいですか？　聖術師の部の、
入場指定時間は何時でしたっけ」

「あら、偶然ね。あなたの質問の答えは、私の質問の答えと一緒によ」

くるりと振り向いたイレーネと、青褪めたエルマ、ついでにベッ
ド脇に置かれたエルマ作の目覚まし時計が、同時に答えを示した。

「　九時！」

（大急ぎで向かったおかげで、結果的には間に合ったものの……）

変な時間に眠ってしまい、かつ朝食も取らず、慌てて身支度を整
えたため、頭の芯がぼうつとする。

凜とした佇まいの候補生たちに続き、粛々と舞台を進みながら、
エルマはそんな自分に内心で首を傾げた。

こんなにも体が重く感じるのが、これまでにあったらうか。

無かった気もする。
が、似たような感覚なら過去に抱いたことがある気もする。

強い酒を飲んでしまった時や、苦手な花の香りを嗅いでしまった時というのがそれだ。

思考がふわふわとし、眠くなる。

なにかがどんよりと沈んでいくような、いや、逆に、ぐうっと、体の奥底でなにかが蠢くような。

ぼんやりしたまま入場、整列を済ませ、初日と同じく、再びチエル枢機卿が開会の宣言をするのを聞きながら、エルマは結論付けた。

(風邪でしょうね)

思考が散漫になっていることを裏付けるような、雑な結論だった。

だいたいそんなことよりも、とにかく自分は「対話」なるものについて、よくよく考えねばならない、とエルマは気を引き締めた。

なにしろイレーネは初めての友人だ。

普通の交友というものについては日々模索中だが、わからないならせめて、全力で臨まねばなるまい。

これまで、とにかくイレーネは食いしん坊だという認識が先走り、彼女に美味しい食事を提供するのが友情かと思いかけていたが、彼女が求めるのは対話だという。

だとすれば、自分は考えつく最高の対話技術を体得して、それに臨むというのがあるべき友情の姿だろう。

対話。

……対話。

その二文字についてつらつらと考えているうちに、チエルソ枢機卿が課題について説明し、大仰な仕草で、なにやら禍々しい印象の壺を開けた。

途端に、ぶわっと凄まじい風が捲き起こり、ついでに空に暗雲まで集まり、候補生までも含めた周囲が悲鳴を上げる。

舞台上を吹き抜ける間にかまいたちと化し、石畳を割り砕いていたそれを、エルマはひょいと器用に避け 避けながら、頭ではまず「対話」の定義について検討を始めていた。

風が唸る。

砕かれた破片が舞う。

雲に覆われ、薄暗くなった舞台の中央には、大量の砂塵が舞い、巨大な人の顔を出現させていた。

(対話。対話とは……)

ぐい い い ああ ああ ああ !

顔が咆哮し、巨大な口ががばりと開かれる。

途端に、その場に立っていらぬほどの強風が吹きすさび、幾人かの候補生たちが舞台のへりに叩きつけられた。

「わあああああ！」

「ひい……っ！」

その、心臓を震わせるような轟音と、衝撃。
候補生たちの多くが恐怖に顔を歪め、叫び出す。

エルマは「対話」の実践スリーステップに想いを馳せながら、さりげなくそんな彼らに同調した。

「わー」

擬態は万全だ。

巨人顔から放たれる衝撃波をさりげなく躲しながら、エルマは再び思考の海へとダイブを決めた。

24・「普通」の対話(1)(後書き)

次話、エルマなりの凡人擬態無双(前編)。

25・「普通」の対話(2)

「害霊、か……」

ラウル・パヴァリーニは、逃げ惑うほかの候補生たちを冷ややかな目で見つめ、次いで、頭上で唸る巨大な顔に、鋭い一瞥をくれた。

害霊。

またの名を、邪霊や、魔魂とも呼ばれる。

聖なる教えに背いて魔道に堕ちた者、または魔族や上級魔獣と契約した者になるとされる、忌まわしき存在だ。

その咆哮は禍の雲を呼び、吐く息はかまいたちとなって、生者たちを傷付ける。

のみならず、彼らの放つ、引き撃った声を聴くだけで精神の均衡を崩されるという、まさに聖術師が討伐するに足る存在であった。

今回ラウルたち候補生に与えられた課題は、この害霊を封じ込めること。

聖壺に再び押し込めるならそれもよし、あるいは、存在自体を浄化すなわち消滅させてしまえば、さらによしといったところだ。

(狙うのは 無論、消滅)

観客席から、ジーノやクロエがこちらを凝視している気配を感じる。

ラウルはそれに、唇の端をわずかに上げることと答え、深い湖のような双眸に、静かな闘志を宿した。

両手を重ね、掌を外に向けるようにしながら、掲げる。

「こお……と、聖力が掌で渦巻くのを思い描きながら、彼は口を開いた。」

「偉大なる名のもとに請う」

大國ルーデンの上級導師ですら、聖力を術として発動させるには、長々と請願の言葉を唱えねばならない。

が、聖力保持量が枢機卿を上回るとまで評される「氷の聖術師」ラウルは、候補生の身でありながら、既に詠唱の短縮化に成功していた。

後はもう、術の発動方法を述べるだけだ。

「石畳に触れる者すべてを、氷の盾で遠ざけよ」

彼が端的に告げた途端、ぴきぴきぴきと鋭い音を立てて、舞台上に一斉に霜柱が立ち、それは見る間に候補生たちの足へと這いあがっていった。

「な……っ！」

「ど、どうして私たちを……っ!?!」

ラウルに下半身を氷漬けにされた恰好の生徒たちは、驚愕に目を見開く。

そのまま、氷の波がゆつくりと彼らを舞台の外周に押し出すのを、ラウルは無表情で見守った。

「邪魔だ」

候補生同士の攻撃を躲せない程度の人間が、害霊と戦えるとは思えない。

精神の均衡を崩して同士討ちを始める前に、彼らにはさっさと退場を決めてもらうのが吉だと判断したためだった。

「僕は聖術師となり、トリニテートの権力を使って新たなアウレリアを拓く。邪魔しないでもらおう」

冷やかに言い捨て、害霊に向き直ろうとしたラウルは、しかしそのとき、ある人物を視界に捉えて、わずかに目を見開いた。

お団子眼鏡姿の冴えない少女。

ルーデンからの留学生、エルマだ。

彼女は、ラウルの放った氷の聖術を、とっさに床から離れることであっさり躲し、氷の波が舞台上を覆った後　つまり、「床に触れない」状態になった時点で着地したようだった。

ただし、術を回避して、害霊に挑む気なのかといえはそうでもないように、腕を組んだまま明後日の方を向き、なにやら考え事でもしている様子である。

とそのとき、控え室にいる金髪の侍女と、陰気そうな用務員とが、声を枯らして、

「エルマあああああ！　だ、か、らあああああ！」
「徹してくれ！」

と呼びかける。

エルマははつとしたように顔を上げると、素早く周囲を見回し、なぜか不自然なポーズを取って大道芸人のように静止した。

「大丈夫。私も皆さんと同じように硬直しております」

唇を動かさずにそう伝えるところを見るに　腹話術のようだ、
、どうやら、氷漬けになって身動きが取れないでいる候補生たちの、真似をしているらしい。

控え室の二人はがくりと壁に向かって頂垂れた。

なんだか、悲哀の滲む仕草だった。

(……なんだ、あれは?)

ラウルは思わず怪訝な顔つきになったが、すぐに頭を振ると、意識を切り替える。

この少女、どうも聖力は使っていなかったようだが、自分の術を素早く回避できるくらいならば、少なくとも害霊に吞まれ、自分の邪魔をすることはないだろう。

「砂の害霊か。明確な弱点がないぶん厄介だが、……せいぜい、僕の聖術のお披露目に付き合ってもらおうでしょう」

砂は、形も変幻自在。

炎系や風系の攻撃は離散することで回避し、水系の攻撃は、受ければ逆に相手に重量を与えてしまう。雷の類も効果がない。

これといった明確な対処法が定まっていないため、あらゆる攻撃を尽くして反応を探る必要があるのだ。

が、ラウルはそれを好機と捉えた。

(この聖鼎杯は、アウレリア中に、そして諸国に僕の聖力を見せつける恰好の場。あらゆる系統の力を操れることを示して、民意と、圧倒的な権力を 僕は得る！)

気合い一閃、ラウルは短い詠唱とともに、まずは閃光を炸裂させた。

「聖なる光を！」

どん……っ！

『グウイイアあああああ！』

轟音すら伴う強烈な光に晒されて、害霊の顔が苦悶に歪む。

あまりの眩しさに、観客を含めた周囲は一齐に目をかばった。

ラウル本人ですら、腕で庇を作り、目を細めていたが、しかし少し離れた場所にいるエルマは、腕ひとつ動かす気配もなく、静止したままである。

「……………?」

思わずラウルが不審の眼差しでエルマを見ると、彼女は「ああとなにかに気付いたように、今更ながら腕で目をかばい、ぼそっと呟いた。

「失礼。この眼鏡、遮光効果が強いので、少々反応が遅れました」

「……………?」

ちよっとなにを言っているのかよくわからない。

「レ……レンズは透明では……？」
「そうですね」

答えになっていない雑な相槌を返し、少女はなぜかラウルに向かつて、そつと片手を差し出す仕草をした。

「あの、どうぞ私のことはただの考える輩とでもお思いになって、お構いなく続きをどうぞ」
「……………」

なんと返したものが、悩む。
が、

『ドウア……アアアあああああ！』

攻撃を受けた害霊が、我を失ったように砂塵を撒き散らし、凄まじい咆哮を上げたので、ラウルはすぐに向き直ると、素早く聖術を放った。

「させるか！ 聖なる雨を！」

邪悪なる砂塵を浴びれば、物理的にも精神的にもダメージを負うことになるため、まずは雨を呼び寄せて盾代わりにする。

ざああああ……っ！

ラウルの周辺にだけ局地的に降ってきた雨によって、砂塵は泥となり、ラウルの体を傷付ける前に、じゅっと音を立てながら氷の舞台に落下した。

念のためほかの候補生たちに攻撃が行っていないかを、ラウルはちらりと視線を走らせる。

が、

「……………!?」

そこで思わず叫ぶ羽目になった。

「なぜ君の周りは、僕のところより激しく雨が降っている!？」

「え? ああ、先ほどジャンプした際に手榴弾で雨雲を刺激しておいただけなのですが……………」

ちゃっかりと自分の周辺に雨を呼び寄せたエルマは、いつの間にか取り出した大ぶりの傘を差しながら、おずおずと答えた。

「すみません、どうぞお気になさらず。我々は物言わぬ貝のように、背景に徹しておりますので」

そんな目立つ背景いねえよ。

ラウルの喉元まで、突っ込みの言葉が込み上げた。

「ズア………… あああアアああ!」

が、氷の舞台に落ちた泥がぶるぶると震え、おぞましい唸りを上げながら集まりはじめたので、ラウルは今一度害霊に向き直った。

「聖なる炎とかまいたちよ、合わされ!」

今度は高温を誇る炎と、疾風を組み合わせた、攻撃性の高い術だ。

烈火の風は舞台上の氷を溶かしながら吹きわたり、集まりかけた害霊の「顔」を粉々に蹴散らす。

びゅっ！ と鋭い音がいくつも響き渡り、そのたびに舞台が、壁が、そして害霊が砕けていった。

「きゃあああああっ！」

「わあああああっ！」

これには、ほかの候補生たちも堪ったものではないのだろう。

足を拘束していた氷が溶けたのを幸いに、悲鳴を上げて舞台上を去ろうとする。

ラウルは煩わしさに舌打ちしつつ、やむなく逃げる彼らの背後に風の防御壁を巡らそうとしたが

「……………!?!」

そこで、またもや目を見開く羽目になった。

「君……っ、いったいなにを使って烈火の風を避けている　!?!」

「あ、ただのカーボンナノファイバー製の傘ですので、どうぞお気になさらず」

エルマは、先ほど雨をしのぐのに使っていた傘を前に倒し、炎やかまいたちの攻撃を避けていたのである。

なんの変哲もない傘に見えるのに、凄まじい勢いの炎が、風が、あっさりとそれに撥ね退けられて、エルマの前で二股に分かれてゆく。

よく見れば、ほかの候補生たちは、まるでドッジボールの際に長

身の生徒の後ろに隠れるかのように、傘を掲げるエルマの後ろに、おどおどした表情で整列していた。

「カ……カーボン、なによ……？」

「はい。軽量でありながら、おおよそすべての物理的攻撃を無効化してくれるので、大変重宝しております」

耳慣れぬ単語に舌を噛みながらラウルが復唱すると、エルマは「あ、どうも」みたいな感じで、そそくさと片手を挙げて応じる。

彼女は傘を差したまま、もう一方の手で害霊の方を指し示した。

「ついでに候補生の皆さまには、ただいま耳栓もお配りいたしましたので、精神の均衡を崩すリスクもだいぶ低減しております。我々は完全なモブとして、完全な沈黙を演じる用意がございますので、ラウル・パヴァリー二様におかれては、どうぞ後顧の憂いなく、ヒーローの役回りを演じていただければと」

ささ、と真顔で勧められても、誰がこの局面で颯爽とヒーローぶれるんですか、という話である。

「き……っ、君はさっきから、いったい何をしている……っ！」

「ほかの候補生の皆さまと同じく、なす術もなく防戦に徹しております」

エルマはそこで、なぜか誇らしげに眼鏡を光らせた。

「聖力のひとかけらも使っておりません。なにしろ、凡人につき、あなた様のような聖力を持ち合わせておりませんので」

「それ以上に異様なことをしているだろっがあああ！」

実際、観客たちの注目は、強力とはいえ想定範囲内の聖術ありきたりを駆使したラウルよりも、奇抜かつ大胆な方法で攻撃を無効化してみせたエルマの方に集まっていた。

「エルマ……っ。こんの……、エルマああああ……っ」
「もうあいつは……だめだ……」

ちなみにイレーネやルーカスはといえば、詰る言葉すら失い、がりりと控え室の壁を搔いている。

もはや完全にツッコミの心を折られてしまった二人に代わりというわけでもなかるうが、ラウルはエルマに詰め寄った。

「いったい君はなんなんだ！ さつきからいつたい……何を考えている!？」

彼の質問の意図としては、もちろん「どういつつもりだ」といったところだったが、エルマは言葉を額面通りに受け取り、厳かに頷いた。

「『対話』について考えております」

「な……っ、今がどういう局面なのか理解しているのか!? くだらんことを考えるよりも、目の前の光景をよく見てみる!」

彼の命令の意図としては、もちろん「ふざけるな」といったところだったが、エルマは言葉を額面通りに 以下略。

そして彼女は、眼鏡で覆われた顔をつと持ち上げ、攻撃に咆哮しつづける害霊を、じっと見つめた。

「ぱつと見た感じでは、叫んでいらっしやるようですね」

「いや、そうではなく」

「そう。そうではない。その通りですね。実際のところ、彼はただ闇雲に叫んでいるのではなく……なにかを伝えたがっている。あなた様も、そのように思われるのですね？」

「……………は？」

突然の切り返しに、ラウルは絶句した。

26・「普通」の対話(3)

エルマはなにを思ったか、持っていたナノファイバー傘をぱいと後ろの候補生に押し付けると、「こつ」と害霊に向かって歩み寄った。

「考えるよりも、目の前を見よ。机上の空論より実践を重んじる姿勢、さすがは聖術師筆頭候補生でいらっしやいます」

「え」

「やはり、脳内シミュレーションより、実地訓練。私、害霊様とともに対話経験を積み、対話のなんたるかを体得してまいりたいと思います」

「は」

ラウルが一音節しか発音できない間に、エルマはじり、と害霊に近付いてゆく。

「対話の第一歩……歩み寄り……」

わけのわからぬことを呟きながら、飛び交う砂塵と炎、かまいたちを器用に避け、彼女は害霊の前にたどり着いた。

「第二步……自己開示！」

ぱっ！ と両手を広げる。

『グウエエエエアアアアア！』

途端に、害霊がその口を大きく開き、凄まじい咆哮とともに疾風

を放った。

が、エルマはそれらをひよいと躲す。あまつさえ、舞台上でわだかまっていた泥を団子状に丸めると、それを次々と宙に投げ、そこを足掛かりにして、激しく顔を左右に振る害霊へと、一層近付いていった。

「第三步……傾聴および、相手の模倣！」

さっ！

両手で作った拡声器メガホンを素早く耳に当て、エルマはそつと目を伏せる。

『デエアアアああああああアア！』

「『デエ……アアア』。これは……『て』ですかね……」

そうして、精神の均衡すら崩すおぞましき害霊の声に、真剣に耳を傾け、自らも真似をしながら、彼の声の解読を始めた。

『グウイいい……あああ！ドウアア……アアア……ッ！』

「『グーイ』……いえ、『グイー』？『ドウア』は、『だ』でしようか。それとも『た』のつもり？」

『ズアあ……あああああッ！』

「ああ、そうか。叫んでいるために、途中からすべて母音がア段に引つ張られてしまうわけですね。とすると、これは『ズ』……いえ、『ス』の可能性も……？」

ひよい。ひよい。

足では泥団子を蹴って宙に浮かび、顔は真摯に害霊を追いかける。エルマは、常人では考えられない身のこなしをあっさり実現しな

がら、しつこく害霊の顔にまわりつき、見る間に彼の言語を吸収しだした。

『グウエエエエアアアアア!』

「『げ』または『け』。母音のニュアンスが特徴的ですな。』
もしや、ヤーデルード語ですか?』」

途中から、小首を傾げてヤーデルード語に切り替える。

反応がないのを見て取って、彼女は次々に、思いつく言語をぶつけていった。

『デエアアアアああああああアア!』

【あるいは、ラハイエツト語?】

『グウイイイいああああ!』

「それとも、ガルバル語?」

『ドウアアアアああああ!』

《まさか古代ダズー言語系統だった!》

後半ともなると、マイナーすぎてもはや誰にも理解できない。

害霊の咆哮もまた、周囲にはただの恐ろしい轟音にしか聞こえなかったが、エルマはまるで、相手が歩み寄ってきた気配を察知しているかのように、真摯に害霊に向かって話しかけていた。

いや。

舞台上に、もう一人。

聖術に精通しているラウル・パヴァリーニだけは、害霊の変化を感じ取ったかのように、大きく目を見開いていた。

「古代……」

エルマは小さく呟いてから、ふと、なにかに気付いたように唇に手を当てた。

『もしや……』

次に彼女が選んだのは、ラウルや、固唾をのんで見守っていた候補生たちならば、かすかに理解できる言葉。

『古代アウレリア語……？』

害霊の反応は、顕著だった。

『そううああアアあああ！ ウウアアアあああああ、ダ、ズイイイ
いいあああああ！ ドルイいい、にいゝい……ドウエエエえええ
ああ、どあああああ！』

候補生が、観客がざわつく。

害霊の咆哮は、相変わらず意味を結ばない。

だが、それが単なる威嚇や攻撃ではなく、なにかしらの意図をもって紡がれた「言語」なのだということは、もはや誰の耳にも明らかであった。

害霊は、炎とかまいたちに苛まれながら、苦悶の表情を浮かべて叫びつづける。

『ドウアアア、ムウアああ、ざ、るうえあああ、ドウアアアああ

……

『！』

砂塵と、疾風とともに撒き散らされる、叫び。

だが、そう。

それは、呪詛に満ちた攻撃などではなく、どちらかといえば悲痛な悲鳴にも聞こえた。

「せ、聖術師の部を中断する！ 候補生のすべては攻撃を中止せよ！ す、枢機卿以下運営陣は、害霊の封じ込め、および候補生たちの安全確保を！」

と、害霊の異様な状態から、暴走の懸念を抱いてか、進行役のチエルソがおどおどした声で宣言する。

呆然と成り行きを見守っていた周囲は、それではっと我に返ったが、彼らが舞台に乗り込むよりも早く、眼鏡姿の少女がひとつ頷いた。

「わかりました」

彼女は、真剣そのものの雰囲気で、害霊の歪んだ顔を見つめる。それから、炎や疾風の舞う害霊の前で、ゆっくりと両手を広げた。

「もう少し深い対話が、必要のご様子」

まるで、相手のことを無条件に受け入れるかのような、無防備なポーズ。

聖女のごとき慈悲深さすら滲む仕草をした彼女は、

「ご……っ！」

しかし、むちゃくちゃに暴れる害霊に正面からぶつかるとなる形となり、

宙に激しく跳ね飛ばされた。

小柄の少女の体は、まるで毬のように跳ね、鈍い音を立てて石畳に叩きつけられる。

同時に、害霊はまるで突然眠りに落ちたかのように動きを止め、ざら……と音を立てながら、砂となってその場に崩れ落ちた。

舞台には一瞬、針の落ちる音さえ聞こえそうな、沈黙が満ちた。

「…………お」

だらりと仰向けになったまま、ぴくりとも動かない少女を見て、観客の誰かが引き攣った眩きを漏らす。

「起き上がらないぞ…………！」

それを引き金に、観客席も控え室も、候補生のいる舞台上も、蜂の巣をつついたような大騒ぎになった。

「大変だ！ あの子、死んじまったんじゃないか！？」

「相打ちか！？」

「エルマ！」

青褪めたルーカスが、壁を乗り越えて舞台に飛び出そうとする。が、彼ははっとしたように顔を上げると、素早く背後のイレーネを振り返った。

「イレーネ。おまえはどうする」

端的な、問い。

通常、あれだけの勢いで、あれだけの高さから固い地面に叩きつけられたら、重傷は免れない。

エルマが無茶をするたびに真つ青になっていたイレーネであれば、傷口を見ただけで昏倒する恐れもあった。

が。

「 見くびらないでくださいませ」

イレーネは、ぐっと拳を握りしめ、静かに答えた。

「私は、エルマを信じると決めたのです。どんな無茶も、無鉄砲も、あの子なりの意図があつてのものだし……それを怒ったり、突き放したりなどは、もうしないと」

よく見れば、その拳はかたかたと震えていた。

やはり、心配なのだ。恐ろしいのだ。

友人が危機に瀕することを、笑って受け止めることなどできない。

それでも イレーネは、それを受け入れると、決めた。

「だから……もちろん、私も行きます！」

言うのが早いか、彼女はメイド服の裾をぱつと捌き、自らも壁をよじ登りはじめた。

ルーカスの介助を得て、なんとか舞台上に舞い降りる。そして、脇目も振らず、エルマに向かって駆け寄った。

「エルマ！」

エルマは既に、先に乗り込んだ枢機卿や候補生たちによって、舞台の端へと避難させられ、さらに、同じく駆けつけたクロエや、救護班によって介抱を始められていた。

「お姉様！ エルマお姉様！ どうぞしっかりとなさってください！」
「意識消失……呼吸もないぞ！」
「脈は！？」

見たところ、頭部を含めて外傷はない。

ルーカスは彼らからエルマを奪い取ると、素早く全身に視線を走らせ、ついでその手首を取り、さらには首筋にも指を当てた。

「脈は……」

だが、彼はそこでふと怪訝な顔つきになった。

「……………？」

「エルマはどうなんですか！？」

息を切らしたイレエネが鋭く問えば、ルーカスは無言で、手に取ったエルマの手首を戻す。

ほっそりと白いエルマの手。

その手はなぜか、親指と人さし指で円を作り、残る三本も揃えて緩く曲げられている。

両手ともだ。

やけにゆっくりと刻まれる心拍。

そして、無呼吸と思われるほどにゆっくりとした、深い呼吸。

それらを総合し、結論付けると、ルーカスは重い重い溜息をついて、静かに天を仰いだ。

「……………瞑想中だ」

「はい!？」

眼鏡の下で遠い目をしながら、ルーカスは聞き返してくる周囲に説明した。

「南の大陸の修行僧が、このようなスタイルで瞑想をしているのを見たことがある。彼女…………エルマは、どうやら深い精神世界に潜っているようだ」

「はい!？」

つまりはそういうことであつた。

なんとか理解の追い付いたイレーネは、がくりとその場に崩れ落ちる。

彼女は湧き上がる怒りと虚しさと突っ込みを、「覚悟」の二文字で必死に押さえ込んでいた。

「やっぱり……………言うべきなのか……………っ。わかつては、いたけれど……………っ、いたけれど……………っ、無事ならそれは、いいことなのだけれど……………っ」

ぐぬぬ、と葛藤するイレーネの肩に、ルーカスがそつと手を置く。
『色男と美少女の図』というよりは、『ベテラン中間管理職と、最近になって管理職の苦しみを知るに至った若手の図』とでもいう

ような趣が、そこにはあった。

「失礼。その候補生　エルマ殿を、保健室にお運びしてもよろしいでしょうか。見たところご無事のようにですが、ルーデンからの大切な候補生を、このまま舞台に横たえておくわけにはまいりませぬゆえ」

とそこに、遠慮がちに話しかけてくる者がある。

ぱつと振り向いてみればそれは、こたびの任務の依頼者　親ルーデン派筆頭の枢機卿、チエルソであった。

彼は、元から頼りなげな頭髪が振り落とされてしまうのではというほどに、ぺこぺこ頭を下げ、こちらを伺い見た。

「治療には、アウレリアでも指折りの聖医導師と、聖女に内定した生徒を宛てさせますので……！　その、害霊の暴走で、貴国からの候補生が倒れたということは、どうぞ、その、フェリクス王陛下には……」

親ルーデンの人間としては、フェリクスの機嫌を損ないうるいかなる要素も排除したい、ということなのだろう。

その政治的配慮を理解したのと、実際、エルマをこのまま闘技場に置いておくわけにはいかないとの判断で　実際彼らのすぐ横では、今もほかの枢機卿や候補生が、砂となった害霊に険しい顔で対峙している　、ルーカスたちはチエルソの申し出を受け入れた。

すると、チエルソは米つきバッタのような素早さで、エルマを闘技場外へと運ばせていった。

ルーカスたちもそれに続こうとするが、

「エルマ殿……エルマ殿は、どこへ!？」

背後からの叫びに、振り返る。

ラウルだ。

彼は、いつまで経っても決定的な動きをしない周囲にしびれを切らし、聖術を振るって害霊の砂を壺に押し込んでしまったところだった。

既に砂の姿になっていたとはいえ、候補生で唯一、害霊の封じ込めに成功したラウル。

即ち聖術師への内定も望めるはずで、その顔は達成感に溢れていていいはずだったが、彼はひどく険しい表情を浮かべていた。

「チエルソ枢機卿が、今まさに保健室へと運んでいるところです」
「……そうか」

ルーカスが用務員としての体裁を維持しつつ応じれば、ラウルは言葉少なに頷く。

そうしてそのまま、自らも保健室へと足を向けたので、ルーカスは怪訝な顔になった。

「どちらへ?」

「保健室へ。害霊はもはや、いかなる『言葉』も発してはくれなかった。ならば僕は、彼女に問いたたださねば」

「問いたただす?」

ルーカスが聞き返すが、ラウルはそれを振り払う勢いで舞台を去

ろうとする。

とそこに、ひとり退出しようとする教え子を不審に思ったらしい
枢機卿　ガイドが、眉を寄せてやってきた。

「ラウル。どうした？」

「先生……僕は行かねばならないのです」

「だが、害霊の扱いに最も長けているチエルソ殿が退出してしまつた今、あの害霊の壺の安全確保は、おまえが頼りだ。見る、枢機卿陣も、候補生たちも、こわごわと壺を見るだけで、近付けやしない」

恥ずかしながら、剣の脳しかない俺もだが、とガイドが唇を歪めると、ラウルはぱつと顔を上げた。

「その害霊の正体について、僕はエルマ殿に確かめに行くのです」

「なんだと？」

聞き返すガイドの声に、ルーカスの低い声も重なった。

「ラウル・パウァリーニ殿。どういふことです？」

「……………」

ラウルは、逡巡するように一瞬唇を引き結ぶと、次には悩む時間のほうが惜しいと判断したのか、ガイドに向き直り、覚悟を決めたように話し出した。

「エルマ殿は、様々な言語で呼びかけることによって害霊の反応を測り、最終的に、古代アウレリア語によって、彼との『会話』に成功していました」

「古代アウレリア語？　聖術陣に書き込まれる、あの言語か？」

「ええ。古代アウレリア語は、陣の構築に使われる聖なる言語。あ

れを解読できるのは、よほど聖術に精通した聖職者か、僕のように独学で解読を目指した学生くらいしかない。『邪悪な存在のはずの』害霊が、会話に用いるほど聖なる言語を体得しているなど、ありえないはずです」

話を聞いていたガイドが、「たしかに」と難しい顔で頷く。

傍らではルーカスが、慎重な口調で切り出した。

「……それで、害霊は古代アウレリア語で、なんと言っていたのです?」

「……確証は、ないのだが」

ラウルは、ぐっと眉根を寄せ、記憶をたどるように目を細めた。

「エルマ殿の拾っていた音を、繋ぎ合わせるならば。それはおそらくこうだった。『タ』、『ス』、『ケ』、そして『テ』。繋げて、僕たちの言語に翻訳するのならそれは」

助けて。

周囲が、静かに息を呑んだ。

ラウルはルーカスに頷くと、再びガイドに向き直って、続けた。

「エルマ殿が古代アウレリア語で話しかけた瞬間から、害霊の咆哮は明らかに性質を変えていました。あれはまぎれもなく、意図を伴った『言語』だった。エルマ殿は、害霊の叫びは、母音が変質しやすいうえに、音が濁りやすいと言っていました。それを踏まえ、あの音を解釈するならば、彼の……害霊の叫びは、おそらくこういう意味になります」

次に告げられた言葉を聞いて、ガイドは顔色を失った。

「助けて。騙された。私は」

私は、トリニテート。

26・「普通」の対話(3) (後書き)

次話より非エルマ回、即ちシリアス先輩のターン！

シリアスが何話連続で生き延びられるか、その活躍を温かく見守っていただけますと幸いです。

27・「太陽」(1)

「ねえ、【色欲】。話してくれるわよね？」

リーゼルが目を細めて問うと、ハイデマリーは軽く笑って肩をすくめた。

「いやだわ、話すまでもないじゃない。むしろあなたの方が詳しいくらいでしょう？」 『太陽』正位置の意味は、成功、祝福。エルマヤその周囲に、喜ばしい運命が待ち受けているということだわ」

いかにも自然な口調だった。

だが、リーゼルはこれまでの付き合いで既に知っていた。

この女は、なにかを隠しているときほど自然に振舞い、嘘を吐くときほど美しく微笑むのだということ。

「 見くびらないでちょうだい。微表情を読む【怠惰】や、パートナーの【憤怒】さえ追い払えば、あんたの嘘が見破られないとも思った？」

ハイデマリーが、ほんのわずかに目を見開く。

そう、リーゼルは、気まぐれな女王のいつものわがままにしか見えない先ほどの行為も、実は緻密な計算のもとに取られたのだということを理解していた。

いつだって、女の嘘を見破るのは女。

リーゼルは内心で嘯き、静かに唇の端を持ち上げた。

「あたしは微表情なんて読めないけど、よくって？ 女性というのはピンクから紫にかけてのグラデーションを、男性より何倍も敏感に識別できるものなの。あたしのこの優れた色彩感覚を持つてすれば、顔色くらい読めるわ」

「待つてリーゼルあなた男性」

「そしてあなたの顔は、あなたがなにかを隠していると告げている……さあ、吐きなさい」

ハイデマリーの冷静な突っ込みをさらっと遮り、リーゼルはハイデマリーに顔を寄せた。

「だいたい、あたしたちを差し置いて、新人のクレちゃんなんかに過去を明かされかけてるのも気に食わないのよ。なに、聖女って？ そのあたりも、洗いざらい白状してもらっわよ」

「……」女が部屋に帰ったがっていたら、速やかに道を開けて見送るのが男『……』

「あたしは女だからノーカンよ。当然でしょ」

結局のところ、ハイデマリーが隠し事をしていること、そして自分を差し置いてほかの男に過去を知られかけていることが、リーゼルは不満でならないのだ。

さすがは【嫉妬】というところか。

ハイデマリーは無言で溜息をつくと、くるりと踵を返した。

「ちよつと、どこ行くのよー！」

「部屋に戻るのよ」

「待ちなさい、まだ話は」

「ええ、だから、続きは部屋でね」

ハイデマリーが振り返りながら微笑むと、リーゼルは氣勢が削がれたように黙り込む。

それから、ぶすつとした表情で、大人しくハイデマリーの後を付いていった。

やがて監獄の最奥　最も広く、最も優雅に造られた女王の居室にたどり着くと、二人は特になにを言うでもなく、それぞれのポジションに収まる。

リーゼルは猫足のソファにどさりと腰を下ろし、ハイデマリーは寝台のそばに立って、躊躇いなく装飾品の類を外しはじめた。

「……なに、人を招いておきながら、本当に寝る気なの？」

「ええ。言ったでしょう？　すぐ眠いの。いつでも去ってもらってかまわなくてよ」

波打つ銀髪を肩に流し、ピアスを外す。

ネックレスやブレスレットも棚に放り投げ、優美な靴もぽいと寝台の近くに脱ぎ捨てていく。

リーゼルに背は向けているものの、たちまち華奢な肩や、息を呑むほど白い足が露わになった。

「言っとくけど、聞きたいことを聞くまでは寝かせないわよ」

「んもう、しつこい人ねえ」

ばさ、とドレスも脱ぎ落す。

剥き出しの背中、くびれた腰から足首にかけての滑らかな曲線は、息が止まるほど扇情的だった。

「……ちよつとは恥じらいなさいよ」

「あなたは女なのでしょう？ それに体なんて、ただの商品にすぎないわ。愛しい人の前以外では、ね」

肩越しに微笑まれ、リーゼルは鼻に皺を寄せる。

それでも彼が去るつもりがないと見ると、ハイデマリーはネグリジェをまとい、溜息とともに寝台に腰を下ろした。

「わかったわ、話せばいいんでしょう？ ただ、悪いけれど、横にならせてもらうわよ。私にとっては、寝物語くらいにしか値しないような、つまらない話だもの」

言うが早いか、さっさと寝台の天蓋を下ろしてしまう。

彼女は、紗の向こうでなにかを取り出して顔を拭い、どうやら化粧を落としているようだった。

素顔を他人に見せたくない女心は理解できたので、リーゼルは静かに話の続きを待った。

「……そうねえ。なにから話せばいいのかしら。わたくしが生まれたのは、アウレリアの外れの、とても小さな田舎町だったですよ。季節は冬。産気づく前に母親が食べていた最後の食事はりんご。いかにも冬よね。ちょうど雪が降っていて、セルモンティ山の頂に降り積もる白雪のような肌と、光を閉じ込めたかのような輝く髪を持ったわたくしは、まるで雪の精か天使のようだと」

「序盤で引っ張るうつつあって、そうはいかないわよ。ぐだぐだした描写はいいから、展開のスピードを上げなさいよ」

「天使のようだと噂が立って、教会に親を殺されて拉致されたの」

劇的に加速した展開に、リーゼルはぎよつと目を剥いた。

「は!?!」

「誕生と同時に、凄まじい聖力の発現が感じられたのですって。白い服をまとった人間が何人もやって来て、わたくしを連れ去ったわたくしはあまりに幼かったから、教会は記憶を封印も操作もしなかった。ただ、聖力の影響なのか、わたくしの脳裏にはある光景が刻み込まれていたの。それが何度も何度も蘇るものだから、物心ついたころには、うっすらと事態を把握していたわ」

真つ白な雪景色。

力なく倒れた女性の手、その先に転がる真つ赤なりんご……血。

自分を取り囲む男たち。

その中に紛れ込む、金貨を握りしめた男。
直前まで、自分をあやしていた 父親。

次にある記憶は、もう、教会の奥深くから見上げた空になっていった。

清潔で穏やかな空間。

惜しみなく注がれる教育と眼差し。

矛盾する記憶のかけらに、ハイデマリーは沈黙を選び、無口な少女と目されるその内側で、じつと真実を考え続けていた。

教会という場所が優雅な檻で、自分が籠の鳥なのだを理解するの
に、数年を要した。

「教会はわたくしを従順な聖女に仕立て上げるつもりのようなうけ
本当はもう少し成長するまで、しっかり洗脳したかったのだらうけ

れど、それよりも早く、聖鼎杯のタイミングがやって来てしまった。そこで存在を披露すれば、聖女の地位は揺るぎないものになる。だから、ほかのトリニテート 聖剣士や聖術師も早々に内定を与えてしまつて、幼すぎる聖女の登場を、いかに演出するかに心血を注ぎはじめたのよ」

教会の都合に巻き込まれるようにトリニテートの座を約束されたのは、聖術師候補のレナート、そして、聖剣士候補のガイドという二人の青年だった。

ハイデマリーは聖鼎杯の数カ月ほど前から、彼らに引き合わされていた。

既に学院で頭角を現していた二人は、職種も出自も異なれど、互いに認め合い、研鑽し合う親友だったようだ。

ただし、ハイデマリーへの態度は二人でかなり違っていた。

レナートは、自らも聖術に精通する者として、底知れぬ聖力を持つハイデマリーに本能的な警戒心 嫌悪といつてもいい を覚えたと感じた。

彼は、見る者を籠絡するハイデマリーの力に、魔性めいた要素すら感じると言い放ち、しきりと彼女を攻撃してきた。

一方ガイドはといえば、聖力そのものよりも武技に重きを置く聖剣士であったためか、ハイデマリーへの警戒心はほとんど抱かなかったらしい。

ぶっきらぼうな言動とは裏腹に、年の離れた妹のようだと言って、彼女のことをかわいがった。

「レナートはしばしばわたくしを攻撃したけれど、決して聖女の座から引きずり落とそうとはしなかった。一人でも欠落があれば、ト

リニテートが成立しないと理解していたからだわ。彼は、親友のグイドとともに、栄えあるトリニテートとして祖国を支えるのが夢だった。二人は友情の誓いすら交わっていたようよ」

けれど、という呟きとともに、あえかな吐息が天蓋を揺らす。

布越しで見えはしなかったが、彼女は、笑みを浮かべているようだった。

「……聖鼎杯の前日にね、怖い夢を見たの。それでわたくし、すっかり聖女になるのが嫌になってしまったのよ。だから、グイドに『お願い』して、教会から逃げ出したの」

もともと、幼い少女が教会に閉じ込められ、さらには一生をここで終えようとするのを疑問に思っていたグイドは、逡巡の末に手を貸してくれた。

激怒したのはレナートの方だ。

聖女が脱走しただけでなく、それを助けた聖剣士も欠落。これではトリニテートは成立しない。

自分との誓いより、後から来たハイデマリーへの同情を優先したグイドに、裏切られたという思いもあったのだろう。

レナートはその後、ひとりだけ聖術師の座を得て教会へと籠った。それは教会側の配慮だと世間からは思われているが、おそらく本当は、レナート側がそれを望んだのだ。

グイドがいなくても夢を叶えてみせるという、彼なりの意地であり意趣返しとして。

「ちなみに、グイドの方は、脱走を助けた罪を問われ、教会の運営する学院で子飼いにされているそうよ。そしてわたくしはいえ、

ささやかな逃走劇を演じながら、やがて娼館の扉を叩いた」

あまりに目立つ美貌、与えられた教育、そして勝手に周囲を魅了してしまう力を、彼女は持て余していた。

これでは村娘に混じって暮らしていくことなどできない。

ならば、美しく、教養高く、見る者を籠絡する人間が集まる場所へ と、彼女はそう考えたのだ。

世俗の極みに身を置くことで、聖職者連中からの探索回避と、意趣返しを図った、というのもある。

そして実際に飛び込んでみれば、そこはまさに、彼女の運命の場所であった。

「貞操と引き換えに、わたくしは自由と力を得た。……まあ、籠の鳥であることには変わりなかったのだけれど、少なくとも当時のわたくしは、自分が何にも縛られないと思っていたわ。そうして、気ままに過ごし、やがて大切な人に出会い、恋を覚え、エルマを授かり 今に至る、といったところかしら」

魔族の生き残りと身を結ばれるに至った経緯を、彼女はそんな風に軽やかにまとめた。

それから、顔に触れていた手を下ろし、こちらに向き直るような気配を見せた。

「めでたし、めでたし」

「……待ちなさいよ……」

リーゼルはといえば、思った以上に過酷な半生を、さらりとした口調で語られてしまったことに動揺を隠せず、両手で頭を抱えた。

「以前、本当に魔族の子を宿してたつてことにも驚かされたけど……
なによ、あんた本人は、聖女ですって？ それも希代の？ あん
た、どんだけ札を隠しておけば気が済むのよ」
「手札は大切にしまっておく主義なのよ。隠し通す価値もない札を、
今こうして披露しただけ」
「さすが、夢見の悪さを理由に聖女の座を投げ捨てた女は、言うこ
とが違うわ」

げんなりとした顔で毒づいてから、リーゼルはふと顔を上げた。

「……どんな夢だったのよ」

「え？」

「あんたに脱走を決意させた夢」

リーゼルはソファから身を起こし、首を傾げたらしい相手を、天
蓋ごしに見つめた。

「いくらあんたが炭素繊維並みに凶太い神経の持ち主で、しかも元
から教会に違和感を抱いていたとはいえ、幼い女の子に、人生のす
べてを投げ捨てさせるって、相当よ。……どんな夢だったのよ」

ハスキーで中性的なその声には、好奇心というよりも、労わりだ
とか、心配だとか、そういった素朴な感情が滲んでいる。

ハイデマリーは小さく息を漏らし、ぽつりと呟いた。

「……あなたのそういうところが、わたくしは大好きだし、とても
苦手だわ」

「はん。あんたの弱点になれたなら光栄だわ。 で、どんな夢よ」

再三尋ねると、ハイデマリーはしばし沈黙したのち、口を開いた。

「……暗い聖堂で、悪趣味な剣に貫かれて、自由も、言葉も、力も奪われ　化け物になってしまう夢よ」

蔵かで、ひっそりとした声だった。

「害霊の正体が、親友かもしれない？」

ガイドが告げた言葉を、ルーカスたちは瞠目して聞き返した。
保健室に向かう道すがらのことだ。

ラウルが訳した害霊の言葉を聞くなり、ガイドは校内へと急いだ。
それを、ラウルやルーカス、イレーネといったメンバーが慌てて
追いかけて、問いただしたのである。

ガイドは険しい表情で先の言葉を呟いたが、それきり口を噤むと、
足を動かすことに専念しだした。

「どういうことですか？」

「後で話す」

ラウルに尋ねられても、ガイドは短く返すだけで、かなりのスピ
ードで廊下を走り抜けていく。

ルーカスを除く二名は足をもつれさせそうになりながら、そんな
ガイドに付いていった。

そして、違和感を覚えはじめる。

つい先ほど、チエルソに連れられて立ち去ったばかりのはずのエ
ルマ。

保健室に続く一本道のような廊下を、こんなにも早く追いかけて
いるのに、彼らの姿が一向に見えない。

ばんっ！

「留学生エルマ、チエルソ殿！ 在室か！？」

不安と緊張感が徐々に体内で膨らむのを感じながら、勢いよく保健室の扉を開ける。

が、

「……………いない……………」

清潔なシーツが敷かれた六台のベッドは、どれも無人だった。

カーテンで仕切られた処置室を覗いても、エルマの姿はない。

困惑顔のイレネたちの横で、ガイドが真っ青になりながら「まさか……………」と呟いたので、ルーカスは改めて彼に事情を聞いただけだ。

「ガイド枢機卿。いったい彼女はどこへ？ 先ほどの呟きの真意は？ あなたはなにを知っているというのです？」

「……………」

ガイドはのろのろと顔を振るばかりで、答えようとしない。

痺れを切らしたルーカスは眼鏡を外し、ガイドへと詰め寄った。

「訳あって変装していたが、俺はエルマの安全を確保するために遣わされた、ルーデンの人間だ。彼女が危機に巻き込まれようとしているのなら、俺はあなたの話を聞き出す資格と義務がある」

「……………」

グイドの青灰色の瞳が見開かれる。
が、彼はわずかな間に驚きをやり過ぎすと、唇を噛み、眉を寄せた。

恐らく、ルーデンの人間に、彼の事情を話してよいものかを思案しているのだろう。

が、ラウルやルーカスに再三促されると、彼はようやく口を開いた。

「俺には、当代一の聖術使いと呼ばれる親友がいた。名をレナートという。……もう、三十年も前のことだ」

「三十年前の、希代の聖術使い……。それはもしや、前代の聖術師の……？」

「ああ。トリニテート自体は成立しなかったが、唯一彼だけは、聖術師の座を与えられた」

グイドがその鋭い目を伏せ、語るにはこうだった。

レナートとグイドは、それぞれ聖術と剣の腕を見込まれ、十年で学院の門を叩いた。

五年に渡り研鑽を続け、その間に、二人には固い友情が芽生えた。聖術師として選民意識に凝り固まっていたレナートは、聖力はわずかでも、腕一本で魔獣を退治するグイドの力強さに心打たれ、聖力も教会もあまり信じていなかったグイドは、レナートの紡ぎあげる聖術陣の美しさに頭を垂れたのだ。

三十年前、トリニテートの座は彼ら二人と、あとは学院内の適当な生徒によって埋められるものと思われていたし、二人はその誓いも交わしていた。

が、聖鼎杯の数カ月前、とある少女が登場したことにより、その

目算は崩れることとなる。

教会が大切に秘匿してきたその少女は、驚くべきことに、まだ五歳を過ぎたばかりだった。

しかし、その時点ですでに完成された美貌を持ち、また同時に凄まじい聖力をも持ち合わせていた。

圧倒的で、暴力的とすら言える聖力。

それは人の心を宥めるどころか奪いつくし、動植物と心を通わせるどころか、それらを隷属させてしまう。もはや、魔性へと傾いた力だ。

聖力の崇高さを信じてきたレナートは、妬心もあってそんな彼女に強く反発した。

一方、聖力よりも肉体や武技に重きを置くガイドは、五歳の少女の体に不釣り合いな力が収まっていることを心配した。

五歳にして両親の姿も知らず、教会から一步も出ないことを憐れんだのも、聖女となったのちには一生籠の鳥となることを同情したのも、ガイドだ。

だからこそ彼は、常に表情が無く、寡黙であったその少女が、目に強い意志を浮かべて学院からの脱出を願った時、まずそれを喜んだ。

いや、もしかしたらその時点で既に、彼もまた、少女の藍色の瞳に絡み取られていたのかもしれない。

かくして先の聖鼎杯の前夜、ガイドは少女を逃がした。

が、これに激怒したのはレナートだ。

彼からすれば、自分たちの誓いや将来よりも少女の願いを優先したグイドの行為は、裏切りに他ならなかったのだ。

グイドは最初、レナートに共に逃げないかと呼びかけた。トリニテートにならずとも、国や人々のために聖術や剣の腕を役立てることはできる。

少女を追いかけ、ともに在野の聖者たろうと。

「俺はもともとレナートに比べれば信心深くもなかったし、五歳の少女を軟禁している教会の在り方にも疑問を覚えていた。それに、脱走の間際に彼女が言ったんだ」

あなたと、レナート。

いつしよに来る？

そうでない、すべてを奪われて、ばけものにされてしまうわ。

それは、やけに真剣な声だった。

グイドはその言葉を、一生自由を奪われることへの比喻表現として受け止めたが、それでもなお、聞いた者にひやりと冷たいなにかを突きつけるような、そんな口調だった。

だから、グイドはレナートに誘いかけた。

しかしそれは、彼を一層激昂させ、意地にさせるだけだった。

結局レナートはグイドの腕を強く振り払い、ひとり教会へと駆け込んでいった。

罪の所在を明らかにし、トリニテート不成立どころか、グイドの聖剣士内定の取り消しも訴えて。

彼ひとりだけで、トリニテートの一角ではない、単身の聖術師の座をもぎ取ったのだ。

「俺は、聖女候補を逃がした罪で、当初処刑も検討されていたようだが、奇しくもレナートが聖術師となったことで、不要な醜聞でその誕生を穢してはならないと教会に判断され、名ばかりの枢機卿の地位と学院講師の職を与えられた。要は飼い殺しだ」

「そんな……」

病死とされていた聖女が脱走していたこと、元聖剣士候補という輝かしい実績を持つ恩師が、実は犯罪者で、三十年以上も学院に押し込められていたこと。

次々と明らかになる事実、ラウルが言葉を失う。

ガイドは教え子から視線を逸らすと、続けた。

「それでも俺には希望があった。次代のトリニテートを育成することだ。俺が壊してしまったトリニテートを、次こそは、俺の手で創りあげる。そうすれば、……多少の償いになるのではと、思ったんだ」

聖術師となった後は、俗世との接触も許されず、ひたすら教会の奥に籠りつつづけている友人。

けれど、彼の後継者を、自分が育てられれば。代替わりの際にも、一目会えれば。

詫びを、変わらぬ友情を、一言でいい、告げられれば。

「そう思って、この三十年過ごしてきた。……だが、あの害霊はなれんと言った？ 大地を操る聖術は、あいつの十八番だった。砂でできたあの顔は、どこかあいつの面影を残していた。古代アウレリア

語を流暢に操れるのは、ラウルを除けば、レナートと……チエルソ殿くらいしかない」

ガイドが、震える手で短い髪を掻き上げる。

青灰色の瞳は、今や疑念と恐怖で見開かれていた。

「枢機卿も代替わりが進んだ。前回の聖鼎杯から今日まで残っているのは、俺を除いては、もう彼だけだ。聖術陣と、古代アウレリア語の第一人者。害霊すら巧みな聖術で調伏し、聖術師部門の課題設定まで任される、枢機卿チエルソ・ロベルティ」

ルーカスは顔を強張らせた。

「……彼は、今どこにいる」

「わからない。もとより保健室に向かったのではなかったのだろう。彼の真意はわからないが、もし俺の想像が正しければ、害霊の言葉を解したあの少女の存在は、彼にとって」

「邪魔」

ガイドの言葉を継いだイレネが、さっと青褪める。

彼女は、細かに震える両手を握り合わせた。

「無茶を止めないとは、たしかに決めたわよ。覚悟したけど……でも」

意識を失ったエルマ。

いくらそれが単なる瞑想なのとはいえ、物理的には、体の自由を失った状態に変わりはないのだ。

ただでさえ、^{エルマ}魔族とは相性の悪いこの土地。

もしチエルソが、聖地に連れ込み、聖術を使ってエルマを害そう
とでもしていたら？

「心配かけすぎよ、あのばか……っ」

イレーネは、ぎゅっと目をつぶった。

28・「太陽」(2) (後書き)

おかげさまで、シャバ難も100話の大台に乗りました。

いつも応援くださる皆さま、お祝いの言葉をくださった方々、本当にありがとうございます。

気付けばポイントの方も「無欲の聖女」を抜き、8万ptの大台に近々乗れそうです。

あ、今この瞬間にポイントを投じて、乗せてくださってもよいですよ！（ゲス顔）

長くなるとともに、思い入れも深まりつつある「シャバ難」を、

完結まで頑張ってお届けしてまいりますので、

引き続き温かく見守っていただけますと幸いです。

次話、エルマのターンに戻ります！

29. シャバの「友情」は悩ましい(1)

そこは、白い世界だった。

すべての輪郭が溶け、音も消え去った、まるで雪原のような、それとも雲の中のような場所。

その世界の片隅から、時折、泡のようなものが湧き上がり、ふらりと空間を漂っては、弾け消えてゆく。

天地も前後も定かではない、不規則な動き。泡の大きさも様々だ。ただしそれらは皆、ふらりと揺れる膜の表面に、なにがしかの光景を写し込んでいて、そつと手で触れると、弾ける前にひときわ鮮やかに輝いた。

(そつ……)

意識の雪原に佇んだ少女 エルマは、静かに頷いた。

(これが、あなたの記憶なのですね。……レナート様)

害霊、と呼ばれた者の名も、既に知っていた。

聞き出したのではない、気が付けば「既に知っていた」のだ。

エルマとレナートは、まるで胎内で母親を共有する双子のように、精神世界という白い闇の中で、両者のすべてを分かち合っていた。

知識も記憶も、感情までもが、もはや個々の輪郭を失い、混ざり合う。

エルマはぼんやりと記憶の泡を目で追いながら、なるほど、と神妙な顔で首を振った。

（これが「対話」……。たしかにこれに比べれば、イレーネと私のそれは、単なる言葉のキャッチボールに過ぎなかった……）

それで充分である。

が、ようやく「普通の対話」を会得したと考えたエルマは、斜め上の方向に思考を駆け上がらせた。

（イレーネがこのレベルの「対話」を求めているのだとすると、互いの性格趣味嗜好過去のすべてが筒抜けになるわけで、……私はべつに構わないものの、一般的に思春期のただなかにいる人間にとって、その状況はいささか辛いのでは。やはり熟年期くらいまで成長を待つてから「対話」したほうが……。？ それに、瞑想中は仮死状態になるわけだから、イレーネが「対話」初心者だった場合に備えて、周囲の環境を整えておかねば）

一般的な人間は、そもそも瞑想などできない。

が、エルマはレナートの記憶の泡をぼんやりと辿りながら、傍らでは、来るべきイレーネとの対話に向けての準備事項に、忙しく思考を巡らせた。

と、たまたま触れた記憶の泡が、ぼう、と淡い光を放つ。

その中に、興味を惹かれる人物の姿を見て取り、エルマはふと視線を向けた。

幼い少女だ。

五歳ほどだろうか。

顔も体つきも華奢だというのに、その美貌は既に完成され、どこか老成した雰囲気がある。

彼女ととてもよく似た雰囲気の持ち主を、エルマはごく身近に知っている気がした。

(けれど……この女の子は、銀髪ではない)

少女の、まるで太陽の光で紡いだような金色の髪を見て、エルマははてと首を傾げる。

世界で一番美しいのは母だと思っていたが、もしかしたら自分の見識が狭いだけで、巷には彼女くらいの美貌の持ち主も、ちらほらいるのかもしれない。

エルマの考えを肯定するように、少女の関わる記憶の泡が次々と揺らぎ、光を放っていった。

それでエルマは、泡に浮かぶ美貌の少女が、過去の聖女候補生であつたことを知った。

(聖女。ならば……お母様には申し訳ないけれど、やはり別人……)

エルマの知るハイデマリーは、この世の誰より美しくて気高くて愛情深い、まず間違っても聖女というタイプの人間ではない。

あっさりと別人として結論付け、エルマは再びレナートの過去を辿った。

聖術師候補生としての厳しい修行の日々。

同齡の友人と交わした誓い。

その彼の裏切り、それへの煮えたぎるような怒り。

レナートは衝動のままに教会の門を叩いた。

翌日に聖鼎杯を控えた深夜、月光も射さぬ深い闇。

彼を驚きながら、しかし優しく受け入れたのは、今より三十年分だけ若々しい頭髪を持った　チエルソであった。

(……意地に、なっていた)

ふと、若い男性の音が響く。

いや　外から聞こえるように思われたそれは、もしかしたらエルマの声なのかもしれない。

だって、「ここ」では、己と他者の区別などないに等しい。

(ひとりで、いいと。……誰も……友などいらぬ、と)

わずかな幼さを残した青年の声は、彼とエルマの心を行ったり来たりしながら、うわんと周囲に広がっていった。

(私は、ひとりでいい。誰も要らない。ひとりで夢を、掴み、ひとりで……過ぐす)

彼のように、怒りを源泉としていたわけではないが、そうした在り方はエルマにも容易に理解ができた。

ひとりでいい。

頼る必要などない。

だって、自分にはたいいていの局面を切り抜けられる能力があるから。

(誰かに……イレーネに、迷惑をかける必要などない)

ただ、自分ひとりで処理できることだからと、取り組んでいるだけなのに。

なのにイレーネには、いつも怒られたり、心配されたりする。

エルマにはそれが不思議だったし、少しばかり、哀しくもあった。

声は、時折混ざり合いながら響きつづける。

(支え合う必要などない。ガイドなどいなくとも、私はひとり、聖術師となり、この国を、守り、導く……その能力が、私にはある)

(喜んでもらいたいただけなのに。頼らず、迷惑を掛けず、……ただ、私の出来ることをして、喜んでもらいたい。……それくらいの能力は、私にも、あるはずなのに)

(ひとりでいい。ガイドなど要らない。頼らない。……ああ、でも、だから私は……)

が、青年の レナートの声が、悲し気にくぐもる。

ふわりと舞い上がった泡の一つが、儂い光を放って、とある光景を描き出した。

聖術師の座を約束してくれたチエルソが、巧みに地下の神殿へとレナートを誘い出す場面だ。

逆さに掲げられた祈祷布、片目を失った神像。

いかにも禍々しい空間に、レナートは危機感を抱きはじめる。が、内心で立てた絶縁の誓いが、彼に悲鳴を上げさせることを躊躇わせ

た。

態度を豹変させるチエルソ。
引き倒され、祭壇に拘束された自身の肉体。
怪しげな陣。
勢いよく振り下ろされる聖剣。

その時になってようやく、レナートは、自分が誰に救いを求めていたかを理解した。

(だから私はあの時……素直に助けを求められなかった)

しかし彼がその名前を叫ぶよりも早く、
切っ先が、彼の心臓を貫いた。

(ああ……)

哄笑するチエルソが見える。
見る間に肉体が乾燥して縮み、魂だけが砂となって浮き上がったレナートの姿が見える。
肉体を、言葉を、自由を奪われ、チエルソに使役されるだけの害霊となった彼の姿が。

害霊とは、肉体から切り離され、歪んでしまった聖力の塊。
辛うじて発話の許される聖なる言語古代アウレリア語で、害霊と化したレナートが
なんと叫んでいたのかを、エルマはようやく理解した。

(『グイー』。あれは悲鳴でも唸りでもなく……。あなたはずっと、
親友ガイドの名を、呼んでいたのですね)

返事はない。

ただ代わりに、世界が揺れるような激しさで、一斉に記憶の泡が立ち上り、強い光を放っては弾けていった。

その最後の泡が消えたとき、エルマはゆっくりと、閉じていた瞼を持ち上げた。

「……………」

ずしりと、自身の肉体の重みを感じる。

ぼんやりと目だけを動かして周囲を見回し、彼女はぼつりと呟いた。

「……………地下、聖堂？」

逆さに吊るされた祈祷布。片目を抉られたアウル神の像。時折ぼつりと滴を落とす岩の壁、湿った水の匂い。

どうやらここは、先ほどまでいたはずの闘技場でも、保健室などでもなく、洞窟をくり抜いて作った、聖堂のような場所らしい。

そう。レナートがかつて誘い込まれた、あの場所だ。

ずし、と、胃の腑が重くなるような感覚に眉を寄せながら、エルマはようやく身を起こそうとした。

が、できない。

どうやら自分は、頑丈な鉄の鎖で祭壇のような場所に縛り付けられているのだと、それでようやく気付いた。

「お目覚めですか？」

とそこに、ゆったりと声が掛けられる。

おもねるような、猫なで声。振り返らずとも、声の持ち主の正体は明らかだった。

「……チエルソ枢機卿」

30. シャバの「友情」は悩ましい(2)

「……チエルソ枢機卿」

「おーや。さすが、取り乱しはしないと」

小柄な体に、貧相な面。おどおどとした毛髪と表情の持ち主で、今回の任務の依頼者であったはずの チエルソ・ロベルティ。

彼は、以前までの遠慮がちな佇まいをかなぐり捨てたように、にいと唇の端を引き上げてみせた。

「ですが、すでに、体に力が入らないのではないですかなあ？」

言われてみて、全身がやけに重いのに気付く。

鎖で縛りつけられているからというよりは、だってこのくらいなら、普通、軽く力を籠めれば破壊できる、体そのものの動きが鈍っているのだとわかった。

頭がぼうつとして、思考が散漫になる。

息苦しくて、体の重心が定まらなくて、全身が熱い。

これらは、そう……まるで、強い酒や花の香りに接してしまったときの症状によく似ていた。

同時に、エルマが学院に足を踏み入れたときからうつすらと感じていた症状でもあった。

「私に……なに、を……」

「なあに。強い酒を飲ませただけです。まじないに使う花の蜜もと

もに、ね」

呂律の回りにくい舌で尋ねると、チエルソはいやらしい笑みで応じた。

「ふむ。酒やクローバーで弱るといふことは、やはり魔の者、ということですか？　だとしたら、残念。もし君の体が聖なるものたちを受け入れるなら　つまり、君に聖女の素質があるならということだが　、今度の『僕』^{キト}は君にしようと思っていたのに」

ついで、いかにも演技がかった様子で眉を下げた。

「実に期待外れですなあ。当代の候補生たちを圧倒する力……見知った聖力の気配は感じないが、かといって禍々しい魔力という感じでもない。突然変異とも言つべき、変わった聖力の持ち主なのかと思いきや、結局単に、俗悪な魔力でしかなかったなんて。きちんと見極めておいてよかった」

私が信仰を捧げるのは、異端とはいえ、あくまで唯一なるアウル神なものでねえ。

チエルソは芝居がかった仕草で肩をすくめながら、そんなことを嘯く。

つまりこの聖鼎杯を通して、彼は豊富に聖力を持ち合わせる人物の見極めをしていたのだろう。

それを裏付けるように、彼はひょいとおもちゃの剣を持ち上げてみせた。

「そうそう、これ。せっかく、君の正体がなにかを見極めるために、名剣カリブルヌスを聖剣にすり替えようとしたのに、私が引き換え

に手にしたのはカリブルヌスなどではなく、こんなくだらない、血のり付きの剣だった。いったいこれは、どういうつもりで？ 私の野望を見通していると、挑戦でもしてきたつもりですかなあ？」

だとしたら、と呟きながら剣を投げ捨て、チエルソは低く凄んでみせた。

「君は、その寿命を縮めてしまったようだ。もったも　　たった数日の差だろうけれど」

エルマはぼんやりとした頭で、少なくとも剣の件は知らないな、などと考える。

しかしそれを口にする前に、チエルソが再び話を続けてしまった。

「私の糧となる聖力を持たぬのなら、君に用などない。中途半端に真相に触れてしまった君には、悪いがこの場で死んでもらおう。だが……そう。せめてもの情けとして、君が知ろうとして、けれどこの先得ることのない真実のすべてを、教えてあげようではないか」

両手を広げ、聖堂に響き渡る己の声に酔うチエルソを見ながら、エルマはなんとなく、ずっと誰かに陰謀を披露したかったんだろうなこの人、と考えた。

口調まで、次第に「ぼくのかんがえるさいきょうのラスボス」みたいな感じで、ちょっと傲岸不遜なものに変わってきている。

「ふ……。私は枢機卿陣の中で誰より早く、そして長くこの地位を得、維持し続けてきた。それは、古代アウレリア語と聖術構築に精通した私の明晰さもさることながら、トリニテートに伍するとも評価される、膨大な聖力によるものだ。……そして、その膨大な聖力の源泉。ふふ、それは」

「トリニテート、つまり大量の聖力を保持している聖術師や聖女を害霊に貶めることで、聖力をかすめ取ってきたのですよねわかります」

「こそぞ迫真、といった様子でチエルソが悪っぽい笑みを浮かべた瞬間、エルマが割って入った。」

「聖剣によって聖力を過剰に注ぎ込んで歪め、受け止めきれなくなった肉体と魂を切り離し、害霊化させる、と」

要領よくまとめられ、チエルソはちよつと顎を引いた。

「……な、なかなかいい線まで掴んでおるではないか」

が、彼もさるもの、すぐに態勢を立て直す。

今度は左手を胸に当て、右手を高らかに広げると、眉を寄せて首を振った。

「だが、そう。その素晴らしい構想は、残念ながら、重大な瑕疵に見舞われてしまった。聖女の脱走だ。表向きは病死となっている前代の聖女候補だが、実は」

「実は脱走してしまつたのですよね。結果、聖女と聖術師の二人を害霊化させるはずだったのが、一人分しか聖力を確保できず、しかもトリニテート不成立が神の怒りに触れたのか、アウレリアはルーデンの属国に落とされてしまつて、チエルソ殿におかれては諸方向に悔しい思いを噛み締めたとなるほどよくわかります」

「またもエルマにカットインされ、チエルソは今度こそ引き攣つた表情を浮かべた。」

「君。なぜそれを……?」

「8割は精神世界で覗いてまいりました。2割は脳内補完です」
「は?」

チエルソは一瞬胡乱な顔つきになったが、すぐに「なるほど、害霊と接触したことで記憶を媒介したか……」などとそれっぽくシリアスな表現で言い直し、再び影の実力者役へと舞い戻った。

「ふふ、だがその重大な瑕疵すらも、巡り巡って私に恩恵をもたらした……。君、なぜ私が親ルーデンに徹し、わざわざルーデンの間を聖鼎杯に引き込んだかわかるかね? わからんだろうなあ。それというのは」

「ルーデンからの候補生を害し、反ルーデン派を犯人に仕立て上げることで、ルーデンによる反ルーデン派の一掃を狙ったのですよね。ついでに、ルーデンが支配を強め、言語や文化が一層ルーデン色に染まることで、アウレリア宗教界の知識、ひいては権力を、中枢であるご自身に集中させたいとの狙いがあったと」

「君は! 目上の者を! 立てることを! 知らんのかね!?!?」

とうとうチエルソは顔を真っ赤にした。

「先ほどから自分ばかりぺらぺらと! なんなんだね君は!」

「申し訳ございません。なにぶん、鎖に繋がれた状態で黒幕の告白を聞く、という場面に不慣れなもので、勝手がわからず」

素直なエルマは、祭壇に押し付けられた体勢から、ぎこちなく頭を下げた。

「ついでに申し上げますと、先ほどから気分が優れないのです。差し支えなければ巻きの進行をお願いしたいのですが……」

が、コルクのはまった蓋からわずかに漂う匂いを拾ったエルマは、本能的に顔を顰めた。

「それは……」

「酒だよ。燃えるほどに酒精を強めた、ただの安酒」

だが、と彼は笑い、横たわるエルマの元へと近付いてきた。

「魔族には、これが堪えるのだろうか？　ははっ、聖力の持ち主にはむしろ助けとなる酒精が、それも単なる安酒が、まさか教会が高値で売りつける聖水よりもよほど魔族を苦しめるとは、ひどい笑い話だ。……だが、そう。そうした知識は、下賤の民に知られることなく管理されるからこそ、尊い」

きゅ……、と音を立てて、コルクでできた栓を取る。途端に、辺り一面に、普通の人間でも噎せ返りそうなほどの酒精の匂いが広がった。

「知は力なり。その通りだ。そしてその崇高な知恵は、ごく一部の選ばれた人間によってのみ継承されねばならぬ。事実、ルーデンの属国となってから、古代アウレリア語をまともに読めるのは、私くらいしかいなくなった。有象無象の民など、粗忽なルーデン文化をありがたがっておけばよいのだ。その中で、私が　私だけが、アウル教の真義を解し、力を得る」

チエルソは、香りに当てられて身動きできずにいるエルマの顎を掴むと、ぐいと瓶を傾け、無理やり中身を注ぎ込んだ。

「……………！」

「ほづら、たとと飲むがいい。私からの餞別だ」

顔をそむけようとするが、叶わない。
魔族でなくとも、そのあまりの度数の高さに、ほんの数滴口にするだけで昏倒してしまうほどの酒精だ。

吐き出しきれずに呑み込んでしまったぶんだけであっても、致死量と言える。

これにはさすがに、エルマも眉を寄せ、苦悶の様子を見せた。

「……………っ、……………う」

激しく頭を振った拍子に、眼鏡が小さな音を立てて滑り落ちる。

露わになった美貌、そしてそれが苦しげに歪められているのを見て、チエルソはようやく留飲を下ろしたように頷いた。

「苦しむがいい、魔族よ。おまえを遣わせたルーデンの怒りを、ぞんぶんに掻き立てられるよう……………苦しんで、息絶えよ」

酷薄な表情を浮かべて言い切ると、踵を返す。

これが反ルーデン派の仕業だと誤認させるために、いくつかの工作が必要だったためだ。

薄暗い洞窟には、息を荒げるエルマだけが残された。

「……………は、……………う、ぶっ、……………んは……………っ」

心臓が暴れている。

呼吸がうるさい。

暑い。

寒い。
耳鳴りがする。

彼女はおそらく、その人生で初めて「死」の気配を身近に感じた。

「……………っ、は……………っ、あ……………！」

小刻みに震える体。

その内側では、無数の感情と思考、映像が入り乱れては消えていった。

やはり自分は魔族だったのか、という、諦念の混じったような驚き。

酒を口にするなど教えた【貪欲】の兄の憂い顔。

いつも真意の伺えない けれどどこか悲し気な笑みを湛えていた母ハイデマリー。

突然降りかかった危機への戸惑い。

このくらいの局面なら切り抜けられると信じていた自分への不甲斐なさ。

自分を心配して怒っていた友人の姿が、今こんなにも胸に迫る。

「……………イ、……………っ、は……………！」

そのときたしかに、エルマはなにかを叫ぼうとした。

が、それがなんだったのかを自分で理解するよりも早く、暴れる呼気が声を奪ってしまう。

苦しい、と、初めて思った。

「…………た、……………っ！」

誰かに縋るための、とても無力で、無縁だった言葉。

それを口にしようとしたその瞬間、

どくんっ

ひとときわ大きく心臓が波打って、エルマは限界まで目を見開いた。

31. シャバの「友情」は悩ましい(3)

「なにその夢……」

聞き出した夢の内容の不穏さに、リーゼルは眉を寄せて呟いた。
それはつまり、教会　それも神殿を自由にできるほどの上層部
がトリニテートを殺害し、邪悪な存在に貶めていたということだ。

ハイデマリーの「能力」を考えるに、それは夢というより、現実
として起こりえた、あるいは起こってしまった出来事なのだろう。
彼女は詳しくは語らなかったが、逃走劇も苛烈を極めたに違いな
かった。

リーゼルが黙り込んでいると、ハイデマリーはなんでもないこと
のように肩をすくめた。

「同情でもしてくれていて？　なら結構よ。わたくしはわたくしで、
その後楽しくやっていたもの。娼館で教わった染髪と化粧は、わた
くしの命を何度も救ってくれただけでなく、純粹に、かけがえのな
い財産になっただわ」

なにげない口調に、強がりの色はない。

教会からの追跡を逃れるために、純潔を売り渡し、髪色を隠し、
素顔を封じることすらも、彼女は楽しんでみせたのだろう。

その意を汲んで、リーゼルは表情を皮肉っぽいものへと戻し、ふ
んと鼻を鳴らしてみせた。

「あんたの意地わるそうなすつぴんと、無駄に目立つ銀髪じゃ、隠すのにも随分技術がいったでしょうね」

「ひどいわ、素顔を見たこともないくせに。それに、わたくし、昔は金髪だったのよ」

「は？」

思いがけない告白に、リーゼルがつい目をつい瞬かせると、ハイデマリーは寝台で足をぶらぶらとさせたまま、こともなげに続けた。

「エルマを授かったときに、聖力の一部と髪の色を失ってしまったの。わたくしの体の聖力と、彼の魔力とが反発したのね。つわりもひどかった。あの時はつらかったわ」

「……………」

この女はいつもそうだ、とリーゼルは思った。

髪の色を失うほどの苦痛。

それは、「つらかった」の一言で済まされるようなものではない。まい。

聖力とは、それを持つ者にとっては血液のような存在だと言われる。

それを、聖女と目されるほどに大量に保持していた女が、突如として失うのだ。普通なら叫びを上げ、のたうち回ることだろう。

だが彼女は、少なくともリーゼルの知る限り、苦しむ様子を見せることは一度もなかった。

決して他人に弱みを見せない　そういう女なのだ。

「…………エルマが、あんたみたいにひねくれた女に生まれなくてよかったわよ。魔族とはいえ、父親似でなによりだわね」

「そうねえ……」

胸に兆したなにかの感情を、嫌みな口調にすり替えて、唇の端を持ち上げる。

するとハイデマリーは、ぶらつかせていた足を、ふと飽きたように止めた。

「あの子って……やはり、父親似なのかしらね？」

「少なくとも性格はあんたと違うわね」

「そうかしら。……まあ、わたくしも、基本は魔族寄りだとは思っていたのだけど。あの子、感情が高ぶると目が赤くなるし」

「待って、そのくだり聞いてないわよ」

ぎょつとしたリーゼルによるツツコミは、軽やかに聞き流された。

「でも、お酒を飲んだ時の反応とかが、不思議なのよねえ。ね

え、知っていて？ 聖力持ちにとって、酒は妙薬。飲めば飲むほど力が湧くものなのだけど、魔族にとって、酒は毒なの。特定の花香りもそう」

「……エルマが酒に弱いつてこと自体は、もちろん知ってるわ。あんたがえげつないザルだつてこともね」

面倒見のいいリーゼルが、一度ツツコミを無視されてなお、ぼそりと嫌みを呟く。

もちろんハイデマリーは、それを春のそよ風のように受け流した。

「獄内でも、エルマが誤って酒を飲んでしまつて、何度か倒れたことがあるじゃない？ ホルストあたりは魔族の性質が酒によって傷つけられたせいだと考えているみたいだけど……わたくしは、ちょっと違うと思うの」

彼女は、考えをまとめるように、シーツに添えた己の手をじっと見つめた。

「だって、本当の魔族ならね、お酒を飲んでしまった途端、体中が焼け爛れるのよ。けれどエルマは、体や精神の動きが鈍くなり、意識を失う。これって、防衛反応のようなものではないかしら」

「防衛反応？」

「ええ。酒を　　妙薬を注がれて、一気に膨らんでしまった聖力を、押さえ込むための反応」

ハイデマリーはくすりと笑った。

「つまりね、普段のあの子は、魔族ちちおやの性質の方が強く出ているけれど、ちゃんと、聖女わたくしの血も流れているのよ。だから、酒や香りで魔族的性質を削いでしまうと、それが抑えていてくれた聖女の血が解放されてしまう。中途半端な量の酒を摂取すると、あの子の体の中で、魔力と聖力がせめぎ合うのだから。今まではなんとか、魔族の血のほうに勝ってきた」

けれど、と続けて、彼女は小首を傾げた。

「　　もしあの子の聖女の血が解放されてしまったら、どうなるでしょうね。きつと、いつものあの子以上に、危なっかしくなるに違いないわ」

なにが面白いのか、美貌の娼婦はくすくすと喉を鳴らしつつける。鈴のように美しい声に、リーゼルは目を細め、また一步寝台に近寄った。

「ご機嫌じゃないの」

「そうかしら」

「ええ。あんたがまだ隠し事をしている証拠だわ」

「……………」

笑い声が、止まった。

いつまで経ってもベールを脱ごうとしない女王のもとに、リーゼルはとうとうたどり着く。

二人を隔てている優雅な紗を、彼はその中性的な手でそつと撫でた。

「……………あんたは、いつもそうよ。なにかを隠しているときほど自然に振舞い、嘘を吐くときほどきれいに笑う。そして」

リーゼルは突如として天蓋の布を払い、シーツに添えられていたハイデマリーの細腕を引き掴んだ。

「なにを」

「苦しいときほど、身を隠す。まるで、死に際に隠れる猫のようにね」

ほっそりとした優雅な女王の腕。

けれど、その肌は氷のように冷え、肌は白を通り越し、青かった。

「……………離してちょうだい」

「あなたの過去は聞いたわ。でも、今については聞けてない。太陽のタロットの解釈は？ さっきはなぜ【怠惰】や【憤怒】を追い払ったの？ 『おまじない』とやらをしてから、あなたの顔色はますます酷くなってたわ。それを気取られなくなかったんじゃないの？」

「離して」

口調こそ疑問の形をとっているが、リーゼルの中ではほとんど仮説が完成している様子だ。

腕を払おうと抗うハイデマリーを、男の膂力で押さえつけ、リーゼルはぐいと彼女の顎を捉えた。

「ねえ、知ってるわよね。『太陽』の逆位置の意味は、『死』。あんたが最後に引いたカードは、本当は逆位置だったんじゃないかしら」

リーゼルは、その琥珀色の瞳で、至近距離からハイデマリーを見据えた。

青白い肌、わずかに乱れた呼吸。

緩慢な体の動き、それとは裏腹に、速い脈。

己の過去を「捨て札」にしてまで、彼女が隠し通そうとしている真実を、ひとかけらも見逃さないために。

「ハイデマリー。あんた本当は　死にそうなほど、具合が悪いんじゃないの？」

リーゼルが立ち上がったソファには、彼が持ち込んだ「太陽」のカードが、光の矢を逆さまにした状態で残されていた。

32・シャバの「友情」は悩ましい(4)

「……………あ」

エルマは、小さな小さな咳きを漏らした。

先程感じた、胸を搔き毟りたくなるほどの衝撃。

呼吸が止まるほどの苦痛をやり過ぎた今　なぜか、急に体が軽くなつたからだ。

「……………ああ……………」

自らの内側にある、温かで力強い血の流れを感じる。

指先に力が戻ってくる。

心臓を掴んでいたなにかの手が、ぐっと緩んだようだった。

力が漲る。

体から重みが消える。

そのまま浮いてしまいうさだ。

体も心も、浮き立つような高揚感に支配されていた。

こんな感覚は、初めてだ。

エルマは無意識に、赤い舌でぺろりと唇を舐めた。

ぞくぞくする。

ふと、視界の隅に、鎖で祭壇に縛り付けられたままの自分の体が映つたので、彼女は眉を顰めた。

無粋だ。

自分から自由を奪う存在など、あつてはならないのに。

「どいてちょうだい」

まるで女王のような口調でそつと呟けば、それだけで「周囲」は動いた。

洞窟に漂っていた水の気配が、鎖の周辺に凝る。

それは見る間に鉄を腐蝕させ、また鎖それ自体も実に従順に、自らを溶かしていった。

彼女が長い睫毛を数度瞬かせる間に、頑丈な鉄の鎖は、脆い音を立てて壊れた。

「ありがとう」

当然のことを労うような口調で告げて、エルマはゆったりと身を起す。

それを追いかけるように、さらりと髪が肩を滑った。

緩く波打つ長い髪。

ほっそりとした肩を豊かに覆う様はいつも通りとも言えたが、一つだけ、決定的に違う点があった。

エルマの髪は、まるで陽光を集めて紡ぎあげたような、眩い金色をしていた。

彼女は無言で髪を摘まむ。

そして首を傾げた。

こつ、と靴音を鳴らして祭壇から降りる。

洞窟の奥、透き通るような水が溜まった場所に己を映し、全身の姿を確認すると、彼女はますます首の角度を深めた。

豊かに波打つ金色の髪に、まるで冬の湖のような、藍色の瞳。

唇は薔薇のように赤く、しなやかな肢体は香り立つような色香を滲ませる。

髪色こそ違えど、その佇まいは　まるで母ハイデマリーそのものだった。

「……………」

エルマはしばし沈黙する。

高揚感に沸き立つ精神の片隅で、一応、混乱はしていた。

が、

「銀髪ではなく、金髪。オッドアイではなく、両目とも変色。……セーフ」

ややあつてから、彼女は神妙な顔で自身にセーフ判定を下した。

「『銀髪オッドアイ』に変身するとか、全然普通じゃないから！』とイレーネたちが叫んでいたことを、彼女なりに気にしていたらしい。

どうやら小説の主人公のように「覚醒」してしまったようだが、辛うじて「普通」の範疇でよかったと、彼女は胸を撫でおろしてい

た。

論点はそこじゃねえよ、と突っ込める人物は、残念ながらこの場にいなかった。

エルマはぐるりと周囲を見回す。

薄暗い洞窟内に怪しげな祭壇、床には打ち捨てられたなにがしかの遺骸。

いかにも禍々しい雰囲気を湛えつつも、片やでは、聖酒や香油、聖剣に聖像といった、神の光を宿すものたちも多く転がっている。

そのどれもが、エルマには等しく心地よく、親しみやすいものに感ぜられた。

いや、今は特に、後者のほうが好ましいか。

エルマはふと、祭壇の横に転がっていた酒瓶に気付き、それを拾い上げてみた。

中に残っていた液体をすべて呷る。

かっとう喉が燃えるような感覚があり、ついで体の内側から、抑えきれない歓びの感情と、純粋な力が湧きあがってきた。

「ふふ……っ、ふふふ」

陶然とした表情で、唇についた滴を舐めとる。

それからエルマは、若かりし頃のハイデマリーそのものの姿で、両手で口を覆い、くすくすと笑いはじめた。

その様は、可憐であり、奔放であり、自由である。

無邪気な少女のようであり、見る者すべてを籠絡する熟女のよう
な、得も言われぬ貫禄がある。

喉を鳴らす猫を思わせる笑みは、淫蕩ですらあった。

ハイデマリーの予想は正しかった。

なぜなら、魔族まじらの血は、エルマに異質な能力をもたらしたとはい
え、生真面目な性質をも彼女に与えていたというのに、ハイデマリー聖女の血は、
特異な能力のみならず、享樂的な性質をもたらすのだったのだから。

とどめを刺そうと酒なんて飲ませた結果、むしろ、相手の潜在能
力を目覚めさせてしまったことをもしチエルソが知ったら、きつと
衝撃のあまり、残り少ない頭髮まで禿げ散らかしてしまうことだろ
う。

聖女の血が発現したほうが、よほど魔族めいた言動になるという
謎仕様が、今ここに爆誕していた。

「どーん」

なんだかもものすごく楽しくなってきた、エルマは人さし指をアウ
ル神の像に向けてみる。

抉られた片目に、ウイंकでもされたような気分がしたからだっ
た。

みるみる、周囲の岩壁から素材が合成され、石像が完全な姿を取
り戻した。

「ふふっ」

「ご機嫌になって、次々とあちこちを指してみる。

いびつな形をしていた湖が美しい噴水となり、無骨だった岩壁が繊細な彫刻を施された石壁となり、どこからともなく、鮮やかな草花が咲きはじめた。

「んー……」

だが、光が足りない。

エルマはほんの少し唇を尖らせ　無駄に、かつ過剰に、可憐である　、それからぱっと閃いたように、もはや荘厳な大聖堂と化した洞窟の天井を見上げた。

「どーん」

斜め上の天井に向かって、すっと人さし指を立てる。

たちまち、

すう……

まるで熱したナイフを入れられたバターのように、滑らかに天井の一部がくり抜かれ、洞窟内に光の矢が一斉に降り注いだ。

事物を支配し、攻撃するのが魔力だとしたら、聖力とは庇護を呼びかけ、周囲の「自発的な」協力を仰ぐ力だ。

ゆえに、純粹で究極的な聖力が発動するとき、そこには轟音も破壊音も響かない。

円形に落下した土石は、一瞬宙で静止したかと思うと、あくまで静かに地面に降り積もり、まるで自然の祭壇のような形を描き出し

た。

エルマはそこへ近づくと、真っすぐに注がれる陽光を見上げ、うっとり目を細めた。

なんて、気持ちがいいのだろう。

少しばかり調子に乗って、エルマは両手をそっと重ねてみる。普通なら【暴食^{イザーク}】の教えを生かし、拳で殴らないと穴が開かないのに、今は指先で示すだけで岩壁が貫けるのだ。

では、両手を重ねて力を籠めたら、どんなことが起こるのか。【^{ホルスト}貪欲】譲りの知的好奇心が疼いた。

これで難なく脱出もできるだろう。

が、そのときふと、脳裏にとある声が蘇った。

……あなたは、どうしていつもそう、無茶をするの。

イレエネの声だった。

記憶にある彼女の声は、思いつめたように掠れていた。

エルマ、私はね。あなたの、……あなたのそういつ、………
…っ

あのとき彼女は、なんと続けようとしていたのだろう。
わからない。

わからないがしかし、これまでに叱られた経験を様々な角度から比較検証するに、おそらく彼女は、エルマが「一人きりで」「周囲を頼らずに」「なにかを解決しよう」とすると、怒っているような気が

した。

「……………」

重ねた両手を、見下ろしてみる。

たとえばこの洞窟を半壊させて、地上に脱出することは、エルマにとっては何んの苦でもない、合理的な選択だけれど、それは「一人きり」で、「周囲を頼らない」行為だ。

もしかしたらこれもまた、イレエネたちの怒りを買うのかもしれないと思うと、急に肩がしょんぼりと落ちるような心地がした。

それはいけない。

エルマは軽く頭を振り、方針転換を図った。

自力での脱出はNGだ。

ここは大人しく悲鳴を上げて、救助を待とう。

(……………幸運にも、私はまだ、「助けを呼べる」身の上なのだから)

頭の片隅に、まだ青年の声が残っていた。

エルマは土の祭壇の上に腰を下ろすと、軽く喉に触れてみた。

誰かに助けを求めるなど、初めてだ。

とても緊張する。

そわそわとしながら、まずはぽつんと、

「助けを」

小さく呟いてみた。

が、両手で顔を覆い、すぐにぷるぷると首を振る。

照れが捨てきれていないし、悲壮感も緊張感もない。これではだめだ。

【怠情^{モイガン}】が見たら、きっと呆れ顔になることだろう。

「た……助けて……」

ついで彼女は両手を握り合わせて、躊躇いを押し殺すために両目も瞑ってみせた。

だいたいいい感じだ。

だが、名指しで呼べばいいのだろうか。

それとも「誰か」などと付けたほうが、より緊迫感が出るのだろうか。

エルマは一瞬の逡巡のうえ、どちらをも採用することにし、全力で叫んだ。

「イレエネ……！ いえ、誰か……！ どうか、助けて……！」

切羽詰まった、情感豊かな渾身の叫び。

もしこれが採点競技だったとしたら、技術点演技点ともに高得点を叩き出せそうな、かなり理想的な悲鳴と言えただろう。

が、惜しむらくは、莫大な聖力をまとった状態で、そんなにも高らかに「願い」を口にしたらどんなことになるのか、その認識がエルマには欠落していた。

厳密に言えば、初めて手にした力ですっかり「酔ってしまった」
彼女は、今自分が聖力を揮っているのだという理解すらなかった。

結果。

……イ……ン

最初、聖堂内には、ただ「悲鳴」の余韻だけが広がった。

それは、ともすれば「悲鳴」が聞き入れられず、残酷にも静寂だ
けが応じた光景 のようにも見える。
が、もちろん違う。

それは言うなれば、大波が押し寄せる前に、潮が一度大きく引い
ていく、その過程の現象なのであった。

エルマの声は、洞窟内を満たし、光に溶け、風に乗りながら空を
駆け抜けてゆく。

雲を揺らし、海をさざめかせ、ときに生き物の心の内を渡りなが
ら、瞬く間に世界中へと広がっていった。

……イ……ン

聖力の発動それ自体は、あくまでも 静かに。

しかし、引ききった波が、ある時点を境に猛烈な勢いで押し返し
てくるように、それは突然起こった。

世界のどこかで、鳥の群れが一斉に羽ばたく。

火山が噴火し、穏やかだった川の流れが濁流へと転じ、森では動

物たちが大地を揺らしながら、ある方向を目指して一斉に駆けはじめた。

風が吹く。

雲がちぎれる。

辺境のぶどう畑では木々が突然ざわめきはじめ、長いポニーテールを揺らした少女がはっと顔を上げた。

ティーカップを取り落とした貴婦人が、突然暴れ出した火に驚いた料理人が、患者の脈の乱れに目を見開いた少年が、切れた弦に頬を弾かれた音楽家が、あらゆる人々が、胸騒ぎを覚えて、わけもなく空を見上げる。

純粹で凶暴なまでの「なにか」が、ある場所をめぐけて唸りを上げていた。

ご……っ

遠くで、低くて鈍い音がする。

じじじ……っ

それは、時間を追うごとに、大地を揺らすような音量を伴って、辺り一面に響き渡った。

じじじじじじじじじじ……っ！

いや、「大地を揺らすような」ではない。
実際に、大地を揺らしているのだ。

洞窟の周囲の地盤が、一斉に隆起する。

それによって「邪魔な」樹木や建築物が振り落とされると、今度はそのある一点を貫くようにして海水が押し寄せた。

波はしかし見る間に引き返し、代わりに大量の動物たちが、まるで道を作るようにして駆け抜けてゆく。

踏み慣らされた大地を、今度は植物たちが、枝や蔓を凄まじい勢いで這い伸ばして行った。

そう。

洞窟の聖堂　エルマの所在地を目的地として、今、世界が自ら地殻変動を起こして、道を作っているのだ。

祭壇に腰掛けていたエルマは、急激に目の前の空間が開け、見る間に色鮮やかな緑の絨毯が出現していくのを、悠然とした表情で見守った。

裂けた岩壁から伸びた緑の道が、とうとう足元にたどり着いたので、エルマは意を迎えるように微笑んで立ち上がる。

相変わらず、全身が高揚感に満たされていた。

しかし、彼女がねぎらいの意を込めて片手を挙げたその瞬間その瞳がふつと曇った。

聖力を一度に使いすぎたのだ。

藍色に潤んでいた瞳が、いつものような紫がかつた夜明け色を取り戻し、髪は毛先から再び黒へと戻っていく。

全身から力が抜け、エルマはふらりと祭壇に座り込んだ。

そのまま目を閉じ、くたりと横になる。

白い肌に長い睫毛の影を落とす、薔薇の唇をほんのわずか開いて眠る彼女は、さながら天使か妖精かといった美しさだ。

だが同時に、それはさながら、酔っぱらってハイになった人物が、破壊行動の限りを尽くしたあげく、突然スヤア……と穏やかな眠りに落ちるような、身勝手極まりない姿でもあった。

「き……っ、きゃあああああああっ！」

「おいっ、ここは暴れずに掴まるんだ……っ！ 弾き飛ばされるぞ！」

と、そこに、男女の元気な絶叫が響き渡る。

身近に知った声だったので、うとうととしていたエルマは、ぱちりと目を開き、その場にむくりと起き上がった。

目をこすりながら見てみれば、イレーネとルーカスである。

彼らは、なぜか蔦性植物に全身をぐるぐる巻きにされ、できたばかりの「道」の上を、怒涛の勢いで運ばれているのであった。

よく見れば、彼らの背後には、ラウルやグイドの姿もある。

「……………！ エルマ！」

先頭にいたイレーネとルーカスは、エルマの姿を見つけると、はつと顔を上げた。

32・シャバの「友情」は悩ましい(4) (後書き)

というわけで、覚醒^{ハイ}エルマ回なのでした。

その戦闘力、53万…！

33. シャバの「友情」は悩ましい(5)

「エルマ！」

イレーネとルーカスのふたりは、前に身を乗り出そうとするが、とにかくきつく蔓が巻きついていて叶わない。

エルマはその姿に、心配になって眉を寄せた。

「……なんだか、邪神の生贄に捧げるために攫われてきた人のような風体ですが、皆さまご無事ですか？」

「おまえもな！」

「あなたもね！」

両名のツツコミが美しく唱和する。

それと同時に、彼らを拘束していた植物群が一斉に解け、しゅるしゅると去っていったので エルマの「願い」を達成したために退出したわけだが、一同は戸惑いの声を上げた。

「な、なんなの、この植物たち！ 急にわさわさ発生して、人を拉致したと思ったら、攻撃もせず去っていくなんて……。いえ、攻撃されても困るわけだけれど！」

「奇妙に洗練された聖堂……ここが黒幕 チエルソ卿の本拠地ということか。俺たちをここに集めて、儀式にでも利用する気か……？」

どつやら彼らは、エルマ」に「呼び寄せられたのではなく、エルマ」と同じ場所に「呼び寄せられたという認識であるらしい。

黒幕・チエルソの出現を警戒する一行に向かって、エルマは「あの」と静かに手を挙げた。

「紛らわしい行為を働き申し訳ございません。皆さまをこの場にお呼び立てしたのは、私です」

「は？」

「危機に遭遇したもので、普通かつ当然の行いとして、助けを求めさせていただきました」

素面かつ素顔状態のエルマは、夜明け色の瞳をきらりと輝かせて言い切る。

ドヤ顔、と称して差し支えないその表情に、周囲は一瞬リアクシオンを忘れた。

「はい？」

「ですので、チエルソ卿に連れ去られ、難儀したため、叫んで周囲に助力を求めました。なので、大地や動植物が協働して、イレーネたちがここまでたどり着けるための道を作ってくれたものと思われ
ます」

「……………はい？」

あまりに自然なことのように説明されてしまい、イレーネたちは
ぽかんとせざるを得なかった。

悲鳴を？

上げたら、大地や植物が？

協働して、道を作って、人を運ぶ？

「……………はい？」

三度くらい反芻してみたが、なにかもさっぱりわからなかった。

あまりに想定外の返答に、誰もが絶句する。

そんな中、

「待て……エルマ……」

唯一、鋼のツツコミ魂を磨き上げるに至ったルーカスが、額を押さえながら片手を挙げた。

「おまえは、なぜ、そんな、ことが、できるといふのかな……?」

言葉が不自然にブツ切れになるのも、致し方あるまい。

だって、ルーカスたちは今この瞬間まで、エルマが魔族だと信じ、この地では十分な力を発揮できないはずと気を揉んでいたのだから。なのになぜ、全然問題ないというか、むしろ、「これまで以上に人間離れした力を揮っているというのか。」

歌声で植物を異常成長させていた時点で突っ込むべきだったが、今こそ、ようやくルーカスはその問いを口にした。

「おまえは……、聖力を操れるというのか……?」

「え?」

だが、エルマは怪訝そうな顔である。

「聖力など、操れるはずないではございませんか。私は特にそうい
った家系でもないですし、特別な修行を積んだわけでもございませ
んし」

「そ……………」

その答えに顔を引き攣らせたのは、巻き込まれてこの場に到着したラウルとガイドである。

意のままに動き、従う植物たち。

彼女に至る道を作るためだけに地殻変動を起こした大地。

魔力が発動されたならば、それなりに禍々しい気配が残っているはずだが、漂うのはどこまでも澄んだ光の余韻だけだ。

とすれば、彼女が行使したのは聖力のはずだが、しかし、ラウルたちが知るそれと比べて、その威力はあまりに桁違いすぎた。

たった一人で、詠唱も要せず、ただ悲鳴を上げただけで大地が動く　そんなの、もはや聖力ではない。

「それなら、いったいなんの力を使ったというんだ……………」

当代一の聖術使いの自負を持つラウルは、血を吐くような叫びを上げた。

答えとしては、現代の水準では理解・把握できないほどの聖力、というのが正しいが、幸か不幸か、その正解を当のエルマ自身も知らなかった。

よって、彼女はあくまでも不思議そうに首を傾げて答えた。

「力を使ったというか……………普通に、助けを求めただけですよね」

「なぜ助けを求めたら、大地が鳴動し山が火を噴くというんだ！」

「なぜってそれはもちろん、女性が助けを求めれば、世界がたちどころに救いの手を差し伸べるのが『普通』のことだからです」

ラウル、沈黙。

これ以上エルマ初心者に質問役を任せるのは酷だと判断したルカスは、さりげなくラウルたちを追いやって、前に進み出た。

「エルマ。その『普通』は、いったい誰に吹き込まれたんだ……！？」

「父と母です」

そう。

思い返せば、元勇者であったギルベルトは、幼いエルマに、「誰かが救いを求めていたら、必ず救いの手を伸ばさねばならないし、世界はそうあるべきだ」と言い聞かせていたし、ハイデマリーもまた、寝物語をせがむエルマに、こう語ってくれていた。

なぜお山は高いのか？

ああ、それはね、お母様が隆起させたからよ。

ふもとの町が暑かったから、年中日陰にしてほしかったの。

それで「お願い」したら、背が伸びたのよ。

そんなことができるのかと、幼いエルマは目を丸くしたものだったが、美貌の女王は穏やかに微笑むだけだった。

もちろんよ。

女が願えば、大地だって動くし、海だってうねるのよ。

ふふ、女がひとたび歌えば、どうか自国は滅ぼさななくてくれと国宝が捧げられ、舞台に立てば、どうか自国は滅ぼさななくてくれと複数の王から王冠が捧げられるものなの。

けれど、だからこそ気を付けて。

安易に救いを求めては、身を滅ぼしてしまうから。

美しい母は、いつもそう言って話を締めくくった。

だからエルマは、それを疑いもせず信じたのだ。

安易に周囲を頼ってはいけないという、戒めとともに。

そう 別人格と言っていていいほどの高揚感ハイ・エルマはすでに去り、いつもの冷静な思考力が戻ってきていたエルマであったが、だからといって彼女が、この事態に驚いたり青褪めたりすることなど、あるわけもなかった。

なぜなら、戻ってきた冷静な思考能力それ自体も、たいがい狂っていたからである。

「実際に『救いを求める』のは初めてのことで、緊張いたしました
が、成果としては普通の範疇なのではないでしょうか。特に国が滅
びたりもしていませんし」

エルマは、小首を傾げて言い放つ。

それから、白磁の頬をなぜかほんのり染め、照れた顔つきでイレ
ーネを見やった。

「対話と、信頼。そういうことですよね。イレエネがたびたび示し
てきてくれた、もっと周囲に頼れ、というメッセージ。私……なん
だか、やっと理解できた気がします」

誰かを頼るって、素敵なことですね。

嬉しそうに告げられ、膝から崩れ落ちたイレエネを、誰が責める
ことができようか。

「違う……！ そうじゃない……っ」

床に蹲って小さく震えるイレーネの肩に、ルーカスはそっと手を置き、静かに頷いた。

その気持ち、わかる。

「エルマとやら、いいか」

とそこに、今度はガイドが神妙な表情で切り出す。
この異常事態に思うことはもちろん多々あったが、彼にはそれ以上に、気に掛かる事項があったのである。

「確認なのだが、おまえがチエルソ卿によって、この場に拉致されたのは事実、ということでもいいのか」

チエルソの真意や動向を明らかにすべく、彼が慎重に問うと、エルマはあっさりと頷いた。

「あ、はい。そうですね。祭壇に鎖で縛りつけられ、致死量だという、聖酒以上に強い酒を呷らされたのですが」

「なんとということ……！」
「そうしたら逆に大層力が湧いてまいりまして、この結果となりました」

「……………」

ガイドたちは息を呑んだのも一転、ちょっと微妙な顔になった。

こちらの心配をよそに、この、「すでに解決済みですがなにか」
感はどうだろう。

特に、ルーカスとイレーネは困惑しきりという様子だった。

エルマは魔族のはずだ。

聖域の祭壇に縛り付けられ、聖酒など飲まされようものなら、間違いなく弱るはずだろうに、なぜそこで逆に元気になるのか。

やはり、彼女が魔族だという前提自体が、間違っているのか？

疑問が溢れて身動きが取れないでいる二人をよそに、ガイドは咳ばらいをして思考を切り替えると、再び踏み込んだ。

「ここで問うのも申し訳ないが、その際、チエルソ卿はなにか言っていないかったか？ ことの真相に迫る、手掛かりとなりえるようななにか」

「申し訳ございません。私の具合が優れなかったせいで、彼の言い分をじっくり聞きだすことはかなわなかったのですが」

「そうか。その状況では仕方ないな」
「代わりに、手っ取り早く私の方から真相を示しておきました。チエルソ卿は、権力基盤となる聖力欲しさに、トリニテイト候補生を害霊に貶め聖力を搾取していたようです。なお、親ルーデンを装ったうえで私を害し、ルーデン側の怒りを引き出すことによって、反ルーデン派の一掃と権力掌握を図ったというのが今回の『依頼』の真相のわけですが、どちらについても卿は事実を認めています」
「なにそれ!？」

斜め上の展開に、思わずガイドの口調が乱れる。

一同は再度思った。

なんだろう、この「すでに解決済みですがなにか」感は。

連れ去られた少女を救うためにやってきたはずなのに、間に合わなかったばかりか、当の少女から事件の真相を解説されるという謎展開である。

ガイドは呆然としたが、親友が害された事実を思い、顔を悲愴に歪めた。

「そういう、ことだったのか……。くそ、チエルソめ……。必ず捕まえて、その罪を白日の下に晒してやる……！」

「あ、それでしたら」

エルマはふと目を瞬かせて、ぱちんと指を鳴らした。

「チエルソ卿。カモン！」

しゅるしゅるしゅるしゅるしゅる……っ！

「うわあああああああ！」

途端に、退場を決めたと思われていた植物群が再び現れ、全身をぐるぐる巻きにされた人間を連れてくる。

海水でびしょ濡れになった法衣を棘に裂かれ、動物たちの糞にまみれた、見るも堪えぬ姿をしたその人物は 誰あるう、チエルソ・ロベルティであった。

34・シャバの「友情」は悩ましい(6) (前書き)

頭髪の量が相対的に少ないことに関する言及、また、毛髪損壊描写があります。
閲覧ご注意ください。

34・シャバの「友情」は悩ましい(6)

チエルソは、不自由な身で、エルマに向かってなにかを叫ぼうとしたが、それよりも早くひゅっと伸びた蔓で猿轡を噛まされ、あらゆる言論を封じられた。

「いつでも任意同行いただけよう、スタンバイしておきました」「なにそれええええええ！」

飽和する解決済み感に、一同は仲よく絶叫した。

「登場の仕方もさることながら、チエルソ卿……その姿は……」

ついで、顔を真っ赤にしてもがくチエルソの姿を見たガイドは、思わず言いよどむ。

全身としてひどい状態と言えたが、視線は自然と、頭部へと引きつけられた。

数少ない毛髪が、それでも健気に揺れていたはずの頭皮。

なのにそれが、地面を引きずられた影響なのか、まるで豊かに茂る周囲の緑と反比例するかのように、ごっそりと無くなっていたのだ。

いや 厳密に言えば、すべてが無くなったわけではない。

ちようどてっぺん、滑らかな頭皮がひときわ輝く辺りに、一本だけ、最後まで足掻くチエルソ自身を象徴するかのような毛が、ゆらゆらと揺れていた。

「は……、放さぬか……っ、放さぬか、この魔性めがあああ　むぐ！」

激しくもがき、とうとう猿轡を外したチエルソが叫ぶ。
が、それは最後まで紡がれることなく、むっとした感じで動いた蔓によって彼は頭部をはたかれ、再び猿轡を噛まされた。

ぷっ……ん。

果たして最後の一撃のせいなのか、どうなのか。
静かな断末魔を響かせて、最後の毛髪がはらりと落ちてゆく。

「むぐううううううう！」

口を封じられながらも、絶叫を上げているらしいチエルソから、
一同はなんとなく目を逸らした。

ひとまず無力化されているようだし、それよりも重要な追^{ハンティング}究対象
が目の前に山積していたからだだった。

「こ、この植物群は、いったいどういうメカニズムで動いているんだ……！？」

話題を変えたかったわけではなからうが、詠唱もないのに、健気にエルマに尽くす植物たちを見て、ラウルが声を引き攣らせる。
問われてみて初めて異様さに気付いたというように、エルマは首を傾げた。

「そういえば……特に『お世話』をしたわけでもないのに、なぜでしょうね。　ああ、先ほどの『誰でもいいから助けて』という願いが、まだ発動中なのでしょうか」

ふと洞窟の入り口付近に視線を転じれば、100%植物製の「動く歩道」はまだまだ元気に脈動中で、続々とぐるぐる巻きの人間を運び込もうとしている。

その中には、恐慌状態に陥っているクロエや、ジーノといった有力な候補生たちの姿もあった。

どうやら、植物たちに「役に立ちそう」と判断された人間は、手当たり次第に巻き込まれている様子である。

「お……おい！ エルマ、止める！ 今すぐその願いを中断してくれ！ でないと、いずれルーデンや大陸の裏側からでも、こいつら誰かを引きずり込んでくるんじゃないか！？」

「え？ あ……そうですかね。え……ですが、救いを求めるのをやめるって、どうすればいいんでしょうか？ 『もう結構』……？」

危機察知能力に優れたルーカスが叫ぶと、エルマは曖昧に頷きながら、それっぽい言葉を口にした。

途端に、蔓は「пейт！」と言った感じでクロエたちを吐き出し、今度こそ大人しく去っていく。

エルマはそれに手を振って見送りながら、したり顔で頷いた。

「なるほど。助けを求めるといふ行為は、中断もできるのですね」

「そうじゃないだろう！」

ルーカスが両手を頭に突っ込むが、エルマはきよんとするだけだ。

一方、強引に呼び寄せられた形のクロエたちは、呆然と周囲を見回していた。

「エ……エルマお姉様……？ いったい、これは、どういう……」

彼女たちは混乱しきりといった様子である。それもそのはず、聖術師の部で倒れたエルマを心配し、保健室へと向かおうとしていたところを、いきなり植物群に襲われるようにして、この地下聖堂へと連れてこられたのだから。

クロエは、ひとまず現状を把握しようとするように、周囲にこわごわと視線を向けた。

「攫われる過程で、ここがセルモンティ山の地下だということは理解しましたが……この場所に、まさかこんな壮麗な聖堂があったなんて……」

主要教会にしかないような巨大なアウル神像に、堂々たる祈祷布。繊細な壁の彫刻に、ステンドグラスに勝るとも劣らない植物による彩色。

ただ、その床の片隅に転がる「あるもの」を視界に入れて、クロエは顔を強張らせた。

「あ……あれは、……遺体、ですか……？」

アウル神像の真下、かすかな聖術陣の跡が残った、古びた方の祭壇。

先ほどチエルソが立っていたその場所には、咲き誇る花々に隠れるようにして、干からびた人間の体が転がっていたのである。

皮膚は乾燥し、ほとんど骨に張り付いている。

白骨化も、腐蝕もしていないが、見るに堪えない、無残な姿だった。

「……………っ！ レナート！？」

はつと息を呑んだガイドが、素早く駆け寄る。

彼は、誰もが厭うだろう状態のその体にためらいなく腕を伸ばすと、震える手で、その顔に触れた。

「レナート！ レナートなのか……………！？」

骨格がそのまま浮き出た顔。色あせてしまった髪。

しかし、親友の面影を辿るように、ガイドは何度も何度も、その顔を撫でた。

それから、胸元に穴の開いた制服を隠すように、そっと「彼」の全身を抱きしめた。

「レナート……………！」

青灰色の瞳には、今、悔恨の涙が滲んでいた。

俗世とのかかわりを絶つたのだと思っていた親友。

許されなくていい、せめて、一言詫びを告げたかった。

かつて交わした誓いを破ってしまったことを謝り、せめて、彼が安心して世代交代できるよう、懸命に育て上げた生徒たちを、披露したかったのに。

「くそ……………。くそ……………！ レナート……………なぜ、おまえが、こんな姿

に……っ」

寡黙な男が浮かべる涙に、イレーネたちもぐっと唇を噛み締める。グイドは、きつく眉根を寄せ、その顔をレナートの首元へと近づめた。

「すまない……。すまない……。！レナート……。恨みごとでも、罵倒でもいい。せめて、もう一度、おまえの声が聞きたかった……。っ」

掠れ、震える言葉。

だが、それを、あっさりとした少女の声が遮った。

「え。聞けばよいのではございませんか」

エルマは、怪訝な眼差しで、レナートの体が横たわっていた、古びた聖術陣の辺りを指さした。

「その陣、仮死状態にした肉体から、魂を切り離して歪める術式ですよね。レナート様、別に亡くなられていませんけど。そんなことをしたら、たましい害霊を維持できるはずがないではございませんか」

彼女はむしろ、「縁起でもない」とグイドを非難するように一瞥し、それからラウルに向き直った。

「ねえ？」

ねえと言われても。

ラウルは口をぱくぱくさせたが、遅ればせながら古びた陣をじっくり検分し、エルマの主張が正しいと理解すると、いよいよ唸り声

を上げた。

「いったい……なぜ一目見ただけで陣の解読ができるというんだ……？ やはり君、相当な聖力保持者、そして聖術使いなのではないのか……！？」

「ですから、そのようにご大層な力など持ち合わせておりません。陣そのものは、古代アウレリア語さえわかれば、聖力が無くても読み書きできるではありませんか。この陣の解読くらい、誰にでもできることかと」

当代一聖術に精通しているはずの自分でも解読しにくい陣を、あっさりそんな風に評され、ラウルが白い灰になる。

使い物にならないラウルの代わりに、エルマはちゃきちゃきと行動に移った。

彼女はまず布袋から聖水を取り出すと、それに指を浸し、陣をすらすらと書き換えた。

「まずは、この部分、肉体と魂を切り離させる文言を書き換えてですな」

途端に、ごおおおおおと風が唸り、グイドの腕の中の体に大量の砂 害霊となっていた魂が引き込まれてゆく。

ついでエルマは、すちゃっと小瓶を取り出し、それをレナートの体に振りかけた。

「ここでちょっと科学の力にも頼ってしまうのですが、【貪欲】の兄直伝・細胞を蘇生する薬液を加えることで、時間の短縮を図りつつ」

みるみる、干からびていたレナートの体が、人体本来の瑞々しさを取り戻しはじめた。

そして最後に、エルマはクロエの方へと微笑みかけた。

「あとは仕上げに、クロエ様お得意の、育成の歌声を披露していた
だければ　さん、はい」

「え……っ？　え、ええと、『光あれ　餓^{かつ}えた体に　恵む祈りよ』
……っ？」

戸惑いながらクロエが一節口ずさむと

「……………う」

すっかり元の姿を取り戻したレナートが、ゆるりと瞼を持ち上げた。
た。

しかも、三十年前に封じられた少年のままの姿だ。

「わ……私、は……？」

「な……！」

ガイドは瞠目し、口を半開きにした。

衝撃のあまり涙を吹き飛ばし　けれどまたすぐに、じわりと目を潤ませた。

今度は、歓喜の涙だ。

「レナート……！」

ガイドは強い力で友を抱擁し、苦しんだ相手が悲鳴を漏らすという、微笑ましい図が展開される。

クロエやジーノは呆然として、ルーカスは遠い目になって、そしてイレーネは「おじシヨタも、アリかも……」という腐った目で、それを見守った。

しばらくその場合は、感動と困惑と腐が不思議にミックスされた空気に支配されていたが、やがて、親友がいつまでも黙っているままなのに気付いたジーノが、そっとラウルの肩を叩いた。

「おい……ラウル。大丈夫か？ さつきからおまえ、随分静かだけど」

「……大丈夫なわけが、あるものか……」

ややあつて、ラウルは額に手を当て、力ない口調で応じた。

「息も継がせず襲ってくる奇跡と価値観破壊に、僕という人間は、どう立ち向かえばいいのか……」

もはや、息も絶え絶えといった様子である。

聖術に精通した彼だからこそ、今この現状が、どれだけ異様なのかを理解することができてしまった。

「一声で大地を動かす力……それも、魔力でも、通常の聖力でもない、秘められた力……？ 一目で陣の構造を解し、指の一振りですれを書き換え、薬液の一振りで人体を蘇生する……。もう、めっちゃくちゃだ……。ツッコミどころのオンパレード、彼女は、常識の破壊神だ……」

ラウルはその場にしゃがみこみ、膝の間に頭をうずめた。

「……僕が目指してきたものとは、なんだったんだ……」

破壊された価値観の中には、長く彼が拠り所としてきた、トリニテート入りの夢も含まれていた。

憧れだった聖術師の身分とは、権力に狂った枢機卿に食い物にされるための存在に過ぎなかった。

トリニテートにさえなれば、下級貴族の三男坊でも国の一角を動かせるという野望は、ラウルたちを都合よく動かすために用意されたまやかしでしかなかった。

しかも、裏で糸を引いていたはずの黒幕は、あっさりと退治され、今はもごもごと力なく蠢いている。

トリニテート入りは、つまらない人生を歩むしかないはずだった自分が、初めて抱いた夢だった。

初めて意志を宿し、初めて闘志を燃やした。いつも瞳を輝かせている友人たちと、同じように。

なのに今は　もう、なにを信じていいのか、さっぱりわからない。

「当代一の聖術使いだという自負も、この国を動かしたいという野望も……。僕はもう……。すべてが、ばかばかしい」

力なく頂垂れたラウルに、誰もが同情の視線を向ける。

そんな中であって、彼の精神的支柱を折り去った当の本人が、朗らかに声を掛けた。

「なにを仰います。この国の中枢を掌握したいということでしたら、今がチャンスではございませんか」

エルマは、なんの含みもない口調で、穏やかにラウルへと微笑みかけた。

「このたびの件で、チエルソ卿は凋落せざるを得ませんから、ここは、若くして希代の聖力を持つラウル様の出番でございます。今回の不祥事に付け込めば、学院でも宗教界でも好き放題。トリニテートなどという、世俗とのかかわりを絶たれる不思議な慣習を廃したうえで、堂々とアウレリアの権力基盤に食い込めますね？」

爽やかな口調で、言っていることはえぐい。

だが、ラウルは思ってもみなかった可能性を提示された、というように、ぱちぱちと目を瞬かせた。

「……………」

下級貴族がアウレリアで昇り詰めるには、トリニテートという飛び道具を使うしかないと思いついたが、不祥事を糾弾した英雄役として名を馳せるという、さらに飛び道具的展開があったのだ。

「だとしたらさ……………」

そこに、躊躇いがちに声が掛かる。

振り向けばそれは、ぼりぼりと頬を搔いたジーノだった。

「そっちのが……………よくね？」

彼は、押し黙ったラウルに、弁明するかのように両手を突き出した。

「いや、だってさ、トリニテートにならなくても、欲しいもんが手

に入るんなら、そりゃあ、シャバと縁を切らずに過ごせるほうがいいじゃんか」

「……………」

「俺、さ。あのしみつたれた故郷や親なんてどうでもいいって思ってたけど……………やっぱ、いいところもあるもんだと、最近思ったし。トリニテートにでもなんなきゃ、おまえやクロ工と対等になれないと思ひ込んでたけど……………そんななくても、俺には誇れるもんがあるって、わかったし」

ジーノは、腰に佩いたままの剣を無意識に撫でて、続けた。

「下町出身でも、俺は俺でさ。ついでに言えば、妾の子でも、クロ工はクロ工で、穀潰しの三男坊でも、おまえはおまえなんだよ。別に身分の後ろ盾が無くて、俺たちには俺たちなりの力があって、それでもって」

やんちゃそうな顔が、少しばかり照れたように、笑みを浮かべる。

「身分なんか押し固めてもらわなかったって、俺たち、ずっとダチじゃん？」

「……………」

ラウルは一瞬、ほんの少しだけ、泣きそうになった。

自分がなぜトリニテート入りにこだわっていたか。

それは、権力だとか、初めての夢だとかいうことはもちろん単純に、この友人たちと「一緒にいたい」と思っていたからだ、今になって思い至ったからだ。

トリニテートになれば、ずっと一緒。

(…………そんな年でも、あるまいに…………)

苦笑が漏れる。

「…………そうだな」

ラウルは、しゃがみこんだまま泣き笑いのような笑みを浮かべ、それから片手を上げた。

「その通りだ」

以心伝心、といわんばかりに、ジーノが笑ってラウルを引っ張り起こす。

向き合った二人は軽く口の端を持ち上げると、握った右の拳をぶつけ合った。

イレエネの口から、「尊い……………」というくぐもった呟きが漏れた。

35・シャバの「友情」は悩ましい(7)

ということは、と、エルマがふと状況を整理する。

「今期もまた、トリニテートは不成立ということでしょうか？」

「ああ」

それには、ガイドが応じた。

彼は、呆然と周囲を見回しているレナートを宥めてから、エルマたちへと向き直った。

「これだけの不祥事だ。トリニテートは今期を機に、慣習自体を廃止する。悪しき野望の持ち主に搾取される聖力保持者を、もう二度と生むものか」

ちらりと、青灰色の瞳が、成長を止めたままのレナートと、教え子たちを捉えた。

彼は表情を一層引き締めると、おもむろにエルマの前に跪く。

そして、剣を捧げる騎士のように、あるいは誓願を立てる導師のように敬虔な口調で、エルマに告げた。

「エルマ殿。もはやトリニテートの座を君に捧げることはできないが、間違いなく君こそが、当代一の聖女であり、聖剣士であり、聖術師だ。なにしろ君は、傷ついた命を癒し、おぞましい魔物を打ち負かし、害霊をあるべき場所からだに戻したのだから」

「いえあの……それは行きがかり上、そうなたただけと言いますか

……」

「君は、ルーデンの威信をかけてこの場に送り込まれてきたのだらう。だが、この状況下、もはや聖鼎杯の表彰式を大々的に執り行うことはできない。必要ならば、トリニテートは廃止するが、君こそが実質的な聖鼎杯優勝者であると、俺からルーデン王に親書を送るう」

「ええと……」

突如として捧げられた尊崇の念に、エルマは困惑顔である。

彼女は眉を寄せ、上司であるルーカスを振り仰いだ。

「この場合……私は、殿下並びに陛下のご命令を、守れたことになるのでしょう、か……？」

「……………」

ルーカスは無言でこめかみを押さえた。

一応表面上、「トリニテートを獲得」という任務については「失敗」したことになる。トリニテートという制度それ自体を破壊してしまつたわけなのだから。

エルマとしてはそれを以って「平凡に徹しろ」というルーカスたちからの命令を守つた」という認識なのだらう。

が、彼女はむしろ、そんな表層的な任務よりも、よりルーデンに益なす成果を上げたわけだ。

ルーデンを利用しようとする政敵を阻止し、他国の弱みを握つた。トリニテートにはならなかったが、観衆に強い印象を残すとともに、実質的なアウレリアの頂点の座を確約された。

（あの義兄上のことだ。チエルソが依頼を寄越してきた時点で、多少のきな臭さは感じ取っていたのだらう。そのうえで、俺たちを放

り込んだ。……とすれば、これは満点、いや、「満点以上」の成果だ）

実に、最高。

そして 実に最低だ。

ルーカスはこめかみから手を離し、親指の背で唇を強く押さえた。

（結局、魔を払う聖なる国であつてさえ、エルマは最高に有能な駒たりえると、証明してしまつたわけだ）

人間離れた能力を持ち、魔族ではないかと思われていたエルマ。聖域でも働けて、聖酒を飲んでも無事なことから、では「やはり魔族ではなかつたのか、よかつた」とはならない。

むしろ、状況はさらに謎と困難の度合いを増しただけである。

（魔族のように人々を籠絡し、しかし禍々しい魔力は持たず、聖女のように自在に動植物を操り、しかしそれは聖力ではないという。いったいこいつは、何者なんだ）

単なるそのハイブリッドです、と正解を口にできるものは、残念ながらこの場にはいなかった。

今のルーカスにわかるのはただひとつ。

エルマが、とんでもなく異常で、とんでもなく有益な存在で、

だからこそ、なんとしても忍び寄る搾取の手から、守り通さねばならないということである。

「……………対話だな」

やがてルーカスは、深い溜息とともに告げた。

「え？」

「俺の一存では、なんとも判定しがたい。義兄上と話して決めるさ」

そうとも。対話だ。

ルーカスは、ぐるりと聖堂にいる人物たちを見回して思った。

三十年もすれ違ってしまったガイドとレナート。

ぎりぎりのところで意見を交わし合い、友情を確かめ合えたジーノとラウル。

両者の違いは、ただ、相手の言い分に対して聞く耳を持てたかどうかだ。

(話し合おう、義兄上と)

任務をごまかし、戦力を削ぐための小細工を弄するのではなく。

相手の腹積もりを、ただ憶測のままに気を揉むのではなく。

いい加減自分も、剥がれかかった「道楽者で、政治には疎い王弟」の仮面を捨て、あの義兄に向き合うべき時だ。

自分は彼の掌で踊らされるだけの駒ではない。意思を持った、人間なのだから。

「ひとまず、おまえは身なりでも整えとけ。俺はチエルソ卿を捕縛し直す」

ルーカスは祭壇の近くに落ちていた眼鏡を拾い上げ、エルマに押し付けると、自らは踵を返した。

捕縛に事情聴取、ルーデンへの報告の仕方の交渉に、対外的に流

す情報の調整。やるべきことは山のようにある。

眼鏡を胸元に押し抱いたエルマは、ときばきと動き出したルーカスの後ろ姿を見ながら、

「対話……」

ぼつりと呟いた。

それからなにを思ったか、ぐるりと首を巡らせて、所在無げに佇んでいる友人を見やる。

イレーネは、改めて抱擁を交わすガイドとレナート、そして話し込むラウルたち三人の内、特にラウルとジーノの組合せを、ぼんやりと見つめていた。

「イレーネ」

呼びかけると、イレーネははつと顔を上げる。

その瞳には、腐の余韻のほか、に、気まずさや安堵といった、複雑な色が浮かんでいた。

「……なに？」

「ひとまず、任務は一通り片付いたようです。ですので……今こそ、始めませんか？ 我々の『対話』を」

「対話、って……。ああ、そうね……。って、え、待って、今この場、この状況で？」

イレーネは、困惑したように目を見開く。

周囲を見やり、声を潜めた彼女に、エルマは安堵させるような笑みを浮かべてみせた。

「ご安心ください。レナート様との対話体験を積んだことで、今の私は、どのような環境、どのような相手とでも、深く精神世界を感じさせることが可能です」

「は!？」

「瞑想中の肉体の状態をご心配なら、人工呼吸器を用意しておきますが。それともやはり、熟年期に差し掛かるまで成長を待った方がよろしいでしょうか？」

「あなたいつたい、どの次元の対話を求めているのよ!？」

思わず絶叫したイレーネに、エルマはきょとんと首を傾げた。

「もちろん……『普通』の対話ですが」

「普通の対話は、まず瞑想なんてしませんから!」

「え」

目を丸くしたエルマに、イレーネは「だー、かー、らー……!!」と両手で顔を覆いながら天を仰ぎ、しかしゆるゆると、その手を下ろした。

「……もう、いいわよ。時間が掛るのも、覚悟の上だわ」

ふう、と深い溜息を落とす。

それから、唇の端を引き上げ、苦笑を浮かべた。

「あなたなりに『普通』を、模索してくれているのだものね」
「……………」

エルマは、夜明け色の瞳を見開き、黙り込んだ。

「ただ、悪いけど、瞑想を要する『対話』は、私の求めている対話ではないわ。それについては、また時と場所を改めましょう。さて。仮にも部下の私たちが、殿下ばかりを働かせるわけにはいかないわ。なにかしら手伝わないと」

思考を切り替えたのか、肩をすくめて、イレーネは踵を返そうとする。

「……あの」

遠ざかろうとする友人の腕を、エルマは咄嗟に掴んだ。

「あの、待ってください」

「え？」

ひやりと滑らかな肌の感触に、イレーネがびっくりしたように振り返る。

珍しいことに、そんな彼女になんと続けていいものかを悩みながら、エルマは再び「あの」と呟き、無意識に唇を舐めた。

なぜか、今この瞬間に、彼女に伝えなくてはならないことがある気がした。

「心拍が通常より1割増、瞬きの回数は2割増、視線を逸らし、物思いにふける回想が飛躍的に増え、一日の平均値では常時と比べプラス3.6回でした」

「……………はい？」

文脈に取り残され、イレーネが胡乱な目つきになる。

エルマは、きゅっと腕に力を籠め、急いで続く言葉を紡いだ。

「学院じいに着いてからの、イレーネの状態変化です。隠しているつものようだったので、直接的な指摘はしませんでした。いわゆる『興奮状態』、または『精神的に不安定な状態』がたびたび呈されています」

「そ、そう……？」

恐らくそれは、大好きな小説の舞台に立ち、大好きなキャラの実在モデルを目の当たりにしていたからだ。

どう反応してよいか迷い、イレーネは曖昧に頷いた。

「よ、よく見てたわね……？」

「人喰い樹の液で作った飴には、精神を落ち着け、体の緊張をほぐす作用があります。なので、初日、イレーネに喜んでもらえるかという思いもあり、それを作りました」

「……………」

思いもかけぬ言葉に、イレーネの目が見開かれる。

エルマは一層腕に力を籠め、身を乗り出した。

「歌声を聞いて育った植物は、通常のものより栄養価が高くなりま
す。聖女の部であれだけ植物を成長させたのは、調理に使ってしま
おうという打算もありました。ヒュドラの唐揚げは強い滋養強壯作
用があります。だから……イレーネは食べるのが好きだと言っ
たので……喜んでもらいたくて、作りました」

エルマは、イレーネの顔を真っすぐに見つめ、前のめりになって告げた。

それは、必死、といってよい姿だった。

眼鏡を外したままの顔。普段隠されている夜明け色の瞳は、素朴な緊張をはらんで、ゆらゆらと揺れている。

「……………」

イレーネは、無意識に眉を寄せた。

そうでないとい、理由の分からぬ涙が、滲んできてしまいそうだからだった。

「『普通』の対話方法というのが、お恥ずかしながら、未だわかりません。ですが、私なりに、害霊となったレナート様と精神世界に潜り込むことで、修行してきたつもりでした」

エルマは、熱を込めて話しつづけた。

自分の、握りしめた手がほんのわずかに震えていることや、頬がわずかに赤く染まっていることなど。それほど必死で、緊張していることなど、気付いてすらいなかった。

ただ、言葉を。

どことなくだらしないことでもいい、みつともないことでもいい、自分の素直な心の内を、きちんと音に乗せて、相手に伝えなくてはならない。

そんなことを考えていた。

恐らくは、それこそが、害霊に貶められたレナートが、三十年の長きに渡って願ってきたことだったから。

「いつも快活なイレーネが、視線や心拍を不安定にさせていると、私の胸郭の奥の血流まで鈍る感覚がします。イレーネが喜ぶ姿をシミュレートすると、前頭葉が活性化するのがわかります。だから…」

…私なりに、努力を重ねているつもり、でした」

あなたが心を乱していると、心配になる。
笑顔を思うと頑張れる。

そうした言葉遣いを、エルマは知らない。
それは、獄中にはない感情だったからだ。

結局エルマはなんと続けたものか悩み、一度口を噤むと、深く頭を下げた。

「『普通』がわからず、申し訳ございません。私が『普通』を誤るたびに、イレーネが怒ること、本当に申し訳なく思っているのです。いつもご心配をお掛けして、ごめんなさい。『普通』の会得には、まだ時間が掛ってしまいそうですが……それでも、どうか」

友人でいてください。

最後の一言は、消え入りそうだった。

「……………ばか」

イレーネは、短く呟いた。

声の震えを、相手に気取らせるわけにはいかないと思った。

「ばかね、……私たち、二人とも」

そうして彼女は、苦笑いを浮かべた。

ばかだ、本当に。

互いに互いを心配し、思い合っておきながら、噛み合わず、その

ことで自分を責めていたなんて。

「……悩ましいものね、友情なんて」

小さすぎた独白は、相手の耳にすべては届かなかったらしい。

エルマが「今なんて……？」と顔を上げたのに、イレーネはふつと微笑んで首を振った。

「おじシヨタの友情も、青い果実な友情も、どちらもムネアツで悩ましいわねって言ったの」

「おじシヨタ……？」

「さ、エルマ、早く殿下を手伝って、この場を片付けるわよ！ 私たちにはやるのがたくさんあるんだから」

イレーネはエルマの腕をきゅっと握り返して、いたずらっぽく唇の端を引き上げた。

「よくって？ 二度は言わないから、一度で覚えるのよ。この状況の『後片付け』を済ませたら、私たちはなにがなんでも寮の部屋に引っ込むの。シャワーを浴びて、化粧も落として、最高に居心地のいい寝間着姿になったら、ベッドに寝そべりながら唐揚げを摘まむのよ」

それはさながら、彼女たちが出会った初日のような光景だ。

しかし、今、イレーネの突きつけるミッションは、実にささやかで、くだらなくて、親しさに溢れていた。

「私はお腹いっぱい食べるから、あなたはお腹いっぱいになるまで、私の謝罪を聞いてちょうだい。それが済んだら、薔薇ケモの推しについて意見を戦わせて、新刊のあらすじダービーをして、二次と三

次におけるラウジノの差異について熱く語るの」

「はい……？」

「全部付き合ってくれなきゃいやよ。拗ねるわ。あなたは私の一番の友人なのだから」

あえて傲岸不遜に言い切ってみせると、エルマはその夜明け色の瞳を、大きく見開いた。

「一番の……」

「さ！ 行きましょ」

言ってから恥ずかしくなってきたしまい、イレーネは今度こそ踵を返す。

にわかには慌ただしくなった聖堂。

大きく風穴を開けられた洞窟の天井からは、力強い太陽が、皆さんと祝福の光を降り注いでいた。

35・シャバの「友情」は悩ましい(7) (後書き)

明日9月26日、コンプエースさまにて「シャバ難」のコミカライズが始まります！

感謝の気持ちを籠め、次話と次々話^{エピソード}は明日中に投稿させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします！

36・シャバの「友情」は悩ましい(8) (前書き)

本日、コンプエースさまにて「シャバ難」コミカライズが始まります！
よろしく願いいたします！！

36. シャバの「友情」は悩ましい(8)

「答えなさいよ、ハイデマリ。あんたの引いた『太陽』は、本当に正位置だったのか」

リーゼルは、掴んだ顎をぐいと引き寄せ、

「それとも逆位置」

そして、ふと口を噤んだ。

ハイデマリによって拒否されたからではない。

逆に彼女は、すべてを受け入れるかのように、じつところちらを見つめ返してきた。

薄暗い居室の、さらに深い闇に閉ざされていた、天蓋の内側。

乏しい光を集め、ようやく捉えた彼女の素顔は　やはり、どこまでも美しかった。

今は青褪めて見える、陶器のように白い肌。

繊細な鼻筋に、左右対称の唇。

眉はそつと自然な弧を描き、長い睫毛とともに、藍色に潤む瞳を困っている。

人間離れた、麗しい相貌。

しかし、化粧という彩色を落とした今、人を支配するかのような艶やかさは消え、逆に、庇護欲をくすぐるような、儂さと可憐さが

際立っていた。

「あなた……」

化粧は、女性を美しくするためのもの。

そう信じてやまなかったリーゼルは、この時になってある事実を悟った。

目の前の女は、自らの美しさを隠すために、化粧をしてきていたのだと。

それほどに、素顔を晒したハイデマリーは、リーゼルの心を惹きつけた。

華やかで、婀娜めいた、女王然としたいいつもの彼女は今ここにはいない。

ただ、降りゆく淡雪のように、人目をいつまでも釘付けにして離さない、脆さを孕んだ美しさだけがあつた。

自身の性を女だと認識するリーゼルですら、そつと腕を差し伸べたくなる

「正位置だったわ」

静かな声が響いて、リーゼルははつと、顎を掴んでいた手を緩めた。

一瞬、言葉の意味が捉えられなかった。

「え……？」

「わたくしの引いた、『太陽』のカード。エルマとその周囲が迎える最終結果は、『太陽』の正位置だった」

完璧な形の唇が、静謐な言葉を紡ぐ。
藍色の瞳は理知の光を宿している。

この女は、いつもこんな風だったろうかと、リーゼルはぼんやりと相手の顔を眺めた。

それはまさしく、聖なるものの美しさだ。
穢れなく、澄み渡っていて、見る者を厳粛な心持ちにさせる。

だが、そう。

人の足を受け入れたことのない真っ白な雪原が、庇護欲と同時に、嗜虐心をもくすぐるように、彼女の美しさもまた、どこか危うさを秘めていた。

先ほど顎から離れたはずの自分の手が、ふらりとハイデマリーの頬へと伸びていく。

それも無意識だった。

「『太陽』の解釈は、先ほどあなたも言っていた通りよ。成功。勝利。祝福。きつとエルマは今頃、己の戦車のごとき性質を受け入れ、隠者の助力を得ながら、均衡を取り戻し、彼女なりの勝利を手に行っていることでしょう」

滑らかな肌。

小さな顔。

胸を突かれるほどに、華奢な骨。

それに比べれば、ほっそりとした自分の手は、しかしやはり男性のそれだ。

彼女はこんなにも小さく、可憐だったろうか。

「ただね、先ほどわたくしが口にしなかった解釈も、あるにはあるわ。『太陽』正位置の、もう一つの意味。それは、『誕生』」

こんなにも儂げで、こんなにも愛らしかったろうか。

まるで、自分の庇護を求めてくるような。

自身の腕の中で守りたくなるような、……いや、いっそ、閉じ込めてしまいたくなるような

「エルマと、わたくしたちを含むその周囲は、やがて『誕生』を目の当たりにすることになる。……リーゼル、わたくしね。妊娠しているのよ」

今度こそ、リーゼルは弾かれたように身を起こした。

「なんですって？」

体に馴染んだ女言葉に、その一瞬、なぜか違和感を覚えた。

しかし彼は、その違和感の正体を追究しようとする衝動を、本能的に押さえ込んだ。

彼女の頬に伸ばしかけたままだった手に、そっとハイデマリーの手が添えられる。

ほっそりとした指先は、切なくなるほど細く、冷たかった。

「やたら眠いのも、『おまじない』程度で気分が悪くなるのも、そのせい。まあでも、今回は魔族との子ではないから、エルマのときに比べればだいぶ楽だわ」

「……………」
「心配させたくないし、十五年前のような大騒ぎにもしたくないの。少なくとも安定するまで……ギルにも、みんなにも、まだ内緒にしていてちょうだい。お願いよ」

いたずらっぽく微笑む姿は、たとえいつも以上に可憐であっても、普通の彼女だ。

しかし、それだというのに、なぜ、いつになく、こんなにも心が震えるのか、リーゼルにはわからなかった。

いや……わかりたくなかった。

「知っているのは、あなただけ。だってあなたは、誰より大切な人だから」

ハイデマリーはさりげなくリーゼルの手を取り、頬から離す。そうして、きゅっと手を握りながら、穏やかに笑いかけた。

「あなたはわたくしの、最高で、唯一の『女友達』だもの。　　そうでしょう?」

リーゼルは、無言で唇の端を引き上げた。

息を呑むことも、顔を強張らせることさえ、彼の高い矜持が、それを許そうとはしなかったからだ。

「……………はん」

やがて彼は、軽く肩をすくめ、鼻を鳴らした。言葉が、ようやく追いついてくれた。

「仕方ないわねえ。てんで魅力もない、友達もないあんたの唯一の女友達として、お腹の子の快適な生活を守ってやるわよ」

「ふふ、嬉しい」

「嬉しい、じゃないわよ。にやにや笑ってないで、早く寝なさい。

睡眠不足は、美容と健康と胎児の敵よ」

自分でハイデマリーを引き留めていたことを棚に上げ、立ち上がり、天蓋を下ろす。

ソファに転がっていた「太陽」の札に気付いて回収すると、彼はさっさと部屋を出ていこうとした。

とそこに、

「ねえ、リーゼル」

寝台の奥から、声が掛けられた。

「大好きよ」

既にまどろみの域に差し掛かっている、ハイデマリーだ。

リーゼルは眉間にいくつも皺を刻み、ゆっくりと振り返る。

それから、またゆっくりと顔の向きを戻し、今度こそ扉に手を掛けた。

「あつそ。あたしは、大嫌いよ」

「知ってる」

くすくすと笑い声が聞こえる。

だがそれも、扉を閉じてしまえば聞こえなくなった。

リーゼルはしばらく、不機嫌丸出しの顔で廊下を歩く。その途中、自分ともあるうものが、祝福の言葉を掛けそびれたことに気付き、なおさら彼は機嫌を損ねた。見るものすべてが腹立たしい。

燭台の隅にほんのわずか積もっている埃が気になる。最近敷き換えさせたばかりの絨毯の柄がひどく気に食わない。五分以内にこのエリアの掃除番を見つけ出し、それも面倒だから、もうクレメンズでいい、いびつてやろうと決めた。

と、

「【嫉妬】。我らが女王は、在室かな？」

ちょうど廊下の向こうから、今日も無駄に精悍な佇まいをしたギルベルトが、盆を片手にやってきた。

コジーをかぶせたティーポットに、繊細なカップにクッキー。恐らく、モーガンから託されたのだろう。

リーゼルは無言で、ギルベルトのことを睨みつけた。獄内ではまあまあ好みのタイプのはずなのに、今は実に、まったくもって気に食わない。

「どうした？」

「……別に。あの身勝手な女王なら、もう寝てるわよ」

必要以上に棘を滲ませてしまったが、ギルベルトは頓着する様子もなく、「そうか」と頷いた。

それでも、踵を返さないところを見ると、部屋には向かうらしい。

きつと傍らに座って、寝顔でも眺めるつもりなのだろう。

無防備な素顔、それに触れることを唯一許された男の、当然の権利として。

「ふん」

リーゼルはもう一度鼻を鳴らして、ギルベルトの横を通り過ぎた。歩きながら、ふと思いつき立ち、先ほど回収した「太陽」のカードをポケットから取り出す。

彼はひとしきり、その神秘的な太陽の絵を眺めると、わざわざひっくり返してから、びりりとそれを引き裂いた。腹いせを兼ねた、おまじないだ。

太陽の逆位置は、「誕生」の反対。

流産の危険を、あらゆる不安を、不幸を、ないことにしてしましますように。

小指の先ほどにまで細かくちぎると、彼はそれを、ぱつと宙に撒いてみた。

美しいタロットカードだった紙片は、燭台の光を弾きながらひらひらと廊下を舞う。

豪華な紙吹雪を見上げながら、リーゼルは肩をすくめた。

「……悩ましいわね、友情なんて」

ひとつ息をつくとき、前を向く。

行き先を決めたからだった。

クレメンスの部屋に奇襲をかけ、この紙吹雪を含めた廊下を掃除させるのだ。

美しく背筋を伸ばして歩く彼は、もう、いつもの彼だった。

36・シャバの「友情」は悩ましい(8) (後書き)

次話のエピローグは、お昼頃投稿予定です。

あともう1話、お付き合いいただけますと幸いです…！

37・エピローグ

途中まで書き上げた報告書をくしゃりと握りつぶし、ルーカスは溜息をついた。

反故にした紙は、これで十を超える。

彼は艶やかな髪に手を差入れ、くしゃくしゃとそれを掻き乱した。もとより机に向かう仕事は、苦手とは言わないが、好きではない。

(そのうえ、義兄上に付け入る隙を与えぬよう、内容を整えるとなると……)

エルマの扱いに関し、フェリクスとじかに対話をしようと決めたのはルーカスだ。

だが、それ即ち、丸腰でぶつかっていくという意味ではない。

相手が興味を持ちそうな情報とそうでないものを峻別し、有益な情報を切り札として隠しながら、こちらが話し合いの主導権を握れるようではなくてはならないのだ。

そのためには、ルーカスたち一行が帰国するより、一足早く届けられるこの報告書は、細心の注意を払って書き上げねばならない。

ルーカスは短く溜息を吐き出すと、再び羽根ペンをインク壺に突っ込んだ。

と、そのとき、

「失礼いたします」

淡々とした声とともに、行き届いたノックの音が響いた。
エルマである。

彼女は、ルーカスが入室を許可すると、しげしげと部屋を見回しながら銀のワゴンを引き入れた。

「どうやら、茶の用意をしてくれるらしい。」

「殿下が眼鏡を外した途端、宛がわれる部屋も随分とアップグレードしましたね」

「厳密には、部屋のグレードに影響したのは眼鏡の有無というより、ルーデン王弟の身分の有無だがな」

ルーカスは、ほのかな紅茶の香りをかき取って、ペンを持った手を休める。

脳が休息を欲していた。

セルモンティ山付近の地下聖堂で、エルマが地殻変動を起こしながらチエルソの陰謀を阻止して、半日。

行きがかり上、己の正体を明らかにせざるを得なかったルーカスは、それまでの用務員用の詰め所から一転、貴人用の居室を宛がわれ、そこで諸々の事後処理に追われていた。

ルーデン側の全権委任者として、チエルソの扱いや聖鼎杯の運営について協議したり、アウレリアの謝罪を引き出したり。

他方では、エルマが破壊した諸々の修復作業について差配したり驚くべきことに、エルマがあと三日ほどこの地に留まり、土地と全建築物の修繕を手伝うということ片付いてしまった　と、大忙しだ。

そうして、夜もとっぴり更けた今になって、今度は義兄フェリク

スに向けた報告書の作成に頭を悩ませているというわけである。

どさりと椅子に背を預け、目頭を揉むルーカスに、エルマは遠慮がちに声を掛けた。

「あの……。もし執筆がはかどらないとのことでしたら、クロ工様のお母君にアドバイスを頂戴してまいりましょうか？ 先ほどクロ工様に教えていただいたのですが、なんでもお母君は、長らく文筆業の内職をされてきたとのことだ」

「文筆業？」

「はい。視力を半ば失いながらも、思わず諳んじなくなるほどの印象的な文章、そして目を閉じていても光景が見えるようなドラマチックな展開を特徴とした作品の執筆を続けてきたのだそうです」

「……どこかで聞いた触れ込みだな」

頭の使い過ぎで、思考がぼんやりとする。

ルーカスは、エルマの遠慮がちな申し出を聞き流しながら、ひらりと片手を振った。

「気持ちはあるがたいが、報告書の作成に他者の協力は不要だ。おまえの代筆も含めて必要ない。その、ティーポットの後ろに隠し持ったインク壺は、だから仕舞っておいてくれ」

彼はまた、さりげなく部屋に持ち込まれた文具の存在にも気付いていたのだ。

抜かりなく牽制すると、エルマは「はい……」と、しょんぼりと肩を落とした。

「このたびは、私の普通でない救助要請によって、甚大なご迷惑をお掛けし、大変申し訳ございませんでした……」

そう。

彼女は、己が引き起こした事態の後始末にルーカスが忙殺されているのを見て、どうやら「脱出するために地形を変動させるのは普通ではないらしい」と悟ったようなのである。

イレーネとの約束も、「後片付け」が全然済んでいないという理由で、いまだ実行されぬままだ。

「殿下はイレーネとの仲違いのフォローまでしてくださったというのに、私ときたら、ご迷惑をお掛けしてばかりで……」

それでもどうやら、イレーネと「仲直り」できたのは、裏にルーカスの助言があつてのことだと知らされたらしい。

小柄な体をさらに縮めるようにして佇むエルマから、ルーカスは苦笑を浮かべてカップを受け取った。

「気にするな。もとより俺に与えられた役回りは、おまえのフォロ―だったし、そもそも上司などというのは、部下の尻拭いをするためにいるようなものだ」

「……………」

軽く肩をすくめてみせれば、エルマはますます立つ瀬が無さそうに身を縮める。

「殿下のその慈悲深さと寛容さが……むしろ自責の念にとどめを刺すようです……」

あまりに不甲斐なさそうな口調で言うので、ついルーカスは笑いそうになってしまった。

この全方向にぶっ飛んでいて、妙に泰然としている少女が、ここ

まで恐縮している姿というのも珍しい。

温かな紅茶を含んでいるうちに、全身の血の巡りもよくなってくる。

回復した気力は、ふと彼の悪戯心を刺激した。

「……ただ寛容なわけではない、と言っただら？」

「え？」

エルマが困惑したように顔を上げる。

ルーカスはカップを置いて立ち上がり、そんな彼女へと一歩近づいた。

「おまえもイレーネも、俺を苦労性だなんだと言ってくれど、べつに俺は、誰彼構わず救いの手を差し伸べたり、奔走しているつもりはない」

また、一歩。

あつという間に、相手の眼鏡のつるに手が届く距離になった。

「あの……」

「買いかぶらないでくれるか？俺が好きでもない事務作業に没頭し、らしくもなく敵に直接対決しようなどとしているのは エルマ。おまえのためだからだ」

逃げることに、躲すこと。

そういった己の特技を封じ、待ち受ける状況へと愚直にぶつかろうと、ルーカスは決めた。

だとすれば、この少女に対しても、その姿勢を取ってみせるべき

だろう。

硬直している相手から眼鏡を取り去り、その夜明け色の瞳が見開かれているのを認めて、ルーカスは満足げに微笑んだ。

「おまえにわかるような言葉で言い直そうか？」

そつと頬に手を伸ばす。

睦言を告げるように、唇を耳に近付ける。

「おまえが落ち込んでいるのを見ると、俺の心室の血流が滞る。利用されようとしているのを見ると、知らず眉間にしわが寄る。……おまえの笑顔を想像すると、脳が活性化するようだ」

彼女は、息を呑むだろうか。

近付いてきているルーカスの胸に腕を突っ張り、押し返そうとするだろうか。

だとしたら、それでいい。

彼女も多少、自分という男に対する警戒心と、緊張感を持つべきだ。

ルーカスは意地悪く唇の端を引き上げ、そつと囁いた。

「わかるか？　つまり、俺は」

「わかります」

が、意外にも力強く請け負われて、ルーカスは思わず硬直してしまった。

「……………は？」

「殿下のお気持ち、このエルマ、しかと受け止めました」

頬に添えた手は、振り払われるどころか、逆にきゅっと上から握りしめられる始末だ。

きらきらと瞳が輝いている。滑らかな頬は上気している。

だが　そこに照れだとか恥じらいだとかの色はない。

「こんなにも親密な仕草。」

しかし、たつた今、異性から好意を告げられようとしているのだと彼女が理解しているようには、まったく見えなかった。

それもそのはず。

「血流を左右し、前頭葉域を活性化させるほどの想い。殿下が、そんなにも深い友情を抱いていてくださっていたなんて……………これぞ望外の喜び、天にも昇る心地でございます」

「は!？」

彼女はそれを、「友情」として処理していたのだから。

ルーカスは愕然とした。

「いやおまえ……………！　ちょっと待て、今こそ俺の微表情をよく読んでくれ！　さあ！」

「よろしいのですか？　……………おお、瞳孔はわずかに開き、脈が速まり、呼吸は浅く。ほほう、明確な肉体的興奮と好意のサインですね。強い好意……………おそらくは、私がイレーネに向けるのと勝るとも劣らないほどの、友情。光栄です」

エルマはこれまでないほどにルーカスと距離を詰め、実に素直で無邪気な笑みを浮かべている。

握りしめたルーカスの手に、ぺた、と甘えるように頬を押し付けさえした。

全幅の信頼が置かれている。

友人として。

ルーカスは勢いのまま、エルマの手を振り払った。

「俺はイレーネではない！ 同性間の感情をそのまま俺に適用しないでくれるか!?!」

「たしかに、殿下と私の間には、性差に身分差、年齢差という、三重苦とも呼べる開きがございます。ですが」

エルマはなぜかそこで、妙に堂々とした笑みを浮かべ、己の胸を張った。

効果音を添えるなら「どん!」、セリフを添えるなら「俺に任せときな!」のような、頼もしさ溢れる仕草だった。

「殿下との友情を獲得するためならば、このエルマ、それらの障害など粉微塵に吹き飛ばしてみせましょう」

「吹き飛ばさないでくれるか!?! 特に性差!」

ルーカスはいよいよエルマの肩を揺さぶりかけた。

相応の速さで繰り出されたはずの手は、しかしひらりと躲されてしまっ。

「おっと。ですが、殿下からみだりに触れるのはおやめください。

なにぶんまだ障害を乗り越えきれぬ未熟な私ですので、そうされる

と、時折妙に心拍が速まるのです」

なにげなく加えられた、思いもかけぬその言葉が、ルーカスの動きを止めた。

「……………え？」

言葉の意味を理解するよりも早く、エルマがすちゃっと眼鏡を装着しなおす。

隠されてしまった素顔。

しかし、無粋なガラスに覆われる直前に見えたその瞳は、いつもより潤み、頬は、いつもより上気してはいなかったか。

「おい……………待て」

ルーカスが伸ばした腕は、再度空を切った。

次の瞬間には、エルマはもう扉に手を掛けているところであった。

「失敗を恐れるなどの殿下の言葉、しかと胸に刻みました。かくなる上は、この心拍上昇障害についても、各所で適切な経験を積み、克服に尽力する所存でございます。今しばし、お時間を」

「おい!？」

やけに張り切った口調で告げると、エルマはするりと部屋を辞してしまふ。

後には、中途半端に腰を浮かせたままのルーカスが残された。

「……………」

触れないで。

性差を超えられずに、心拍が、速まるから　？

無意識に、片手で口元を覆う。

「……………おい」

躲しておきながら、期待させ。
期待させながらするりと逃げる。

まったく、なんという少女だと思った。

「なんなんだ、しばし時間をつて…………俺の好意を踏みにじるための準備期間か？　だいたい、各所で適切な経験つて」

適切な経験。

そこまですをようやく反芻した時点で、ルーカスはさあっと青褪めた。

性差を気にせず済むようになるための、適切な経験とは、なんだ？

「お、おい…………！」

彼の懸念を裏付けるように、扉の向こうで、通行人と思しき男性陣の狼狽した声上がる。

「き…………っ、君いいいい…………っ!？」

「うひゃあああああっ」

悲鳴というにはやけに感動や興奮混じりの絶叫を聞き届けるより

も早く、ルーカスはばんつと扉を蹴って飛び出した。

「待て！ ……………っ、この大ばか者！ その惱ましい行動を即座にやめる！！」

視線の先で繰り広げられている光景を認め、息を呑んだのも一瞬。夜も更けたアウレリアの一角で、そんな叫びが騒々しく響き渡った。

37・エピローグ（後書き）

これにて完結となります。

ちょうど本日からコンプエースさまでコミカライズが開始しておりますので、よければお手に取ってみてください。

コメント、評価などしてくださいと、とても励みになります！

最後までお付き合いくださいまして、本当にありがとうございます！
た！

0・プロローグ

ふと腹が張った感覚を抱き、テレジアは刺繍針を持つ手を休めた。すっかり冷めてしまった紅茶のカップを取り上げ、もう片方の手で、大きくせり出した腹をそっと撫でる。

「どうした、坊や。ご機嫌斜めか？」

囁く声は品のよい女性のものだが、口調はどうにも男っぽい。

テレジアは、元は武勲に優れたロルバツ八侯爵家の、やはり男勝りの剣技で知られる娘だった。

周囲を威圧するための声、と評されてきた己の声を、それでも極力やわらげ、テレジアは話しかけた。

「もしかして、雷が怖いのか？　大丈夫。母様が守ってやろう。世界一大切な坊や」

窓の外では、つい先ほどまで晴れていたというのに、今やすぐそこまで暗雲が迫ってきている。

黒い雲の合間に、ぴかりと稲妻が走るのを認めて、テレジアは刺繍道具を片付け始めた。

もともと苦手な針仕事、暗い部屋ではますますできる気がしない。

「ふん、やはり刺繍など、クリスタの管轄だな。慣れぬことをするから雷も鳴るし、腹も張るのだ」

あまり上手とは言えない縫い跡に向かって目を細め、テレジアは

毒づく。

何度も針で突いてしまった指先には、淡く血が滲んでいた。

幼い頃から、彼女が興味を向けてきたのは剣技や乗馬、史学に政治。

とても女らしいとは言えない趣味ばかりだ。

二つ年の離れた妹クリスタはといえば、つんとした顔立ちの姉とは逆に可憐な容姿で、性格は優しく、しかも、ロルバツ八侯爵家の者としては珍しく、大量の聖力を保持していた。

世代さえ合っていたならば、法国アウレリアに留学して、トリニテート候補生になっていただろうほどだ。

現実には、引っ込み思案の性格ゆえ、留学の可能性など視野にも入れず、王妃として王宮に上がった姉に付いて、行儀見習いをする道をクリスタは選んだ。

もっとも、テレジアの妊娠や、諸々の事情によって、その行儀見習いすら半年ほどで切り上げてしまったが。

「……まあ、あの子は、家で囲われてこそ幸せになれる娘よ」

テレジアは扉に目をやりながら、ぽつりと呟く。

廊下に面することなく、隣り合う姉妹の部屋を行き来するための扉。

それは、身動きの取りにくい妊婦であっても、声さえ上げれば即座に助けを呼べるようにと、テレジアの命で作らせたものだった。

「……やはり、刺繍はクリスタにやってもらうとするか」

テレジアは手元の刺繍に再び視線を戻し、溜息を落とす。
その拍子にまた腹がぐうと引き攣れて、彼女は眉根を寄せた。

「なんだ、怒っているのか？ 許せ、イニシャルは母様自らが刺したぞ」

腹をさすりながら、言い訳する。

産まれてくる赤子に用意した産着には、既にFの文字が刺繍されていた。

「フェリクス、というのは長すぎたかもしれぬ。フェルやフィンにすればよかった。だが、……ルーデンの国を統べる王の名前だもの。やはり、誉あるものでないとな」

フェリクスというのは、その昔、始祖とともにルーデンの国を興した三傑の一人の名であった。

知患者で、強い意志を持ち、世界を良い方向へと導いた賢者。

その名には、テレジアの願いのすべてが籠っていると聞いていい。

腹の子の父親の愚鈍な有様を思い浮かべながら、テレジアは皮肉気に口の端を引き上げた。

「そうとも。凡愚な父からでも、優れた子は生まれる。私とおまえで、それを証明してやるうではないか。なあ、………っ」

だが、不意に腹の痛みが強まって、テレジアは声を詰まらせた。昏倒を避けるために咄嗟に床に膝を突き、痛みをやり過ごす。

「が、いくつ数を数えてみても、痛みは遠のくどころか、ますます強まるばかりだった。」

「……陣痛？ もっ？」

脂汗を浮かべながら、自問する。
だが、テレジアはすぐに首を振った。

まだ臨月にすらなっていない。
それに、聞いていた陣痛とは、どうにも異なる症状だ。

息が上がる。

めまいがする。

耳鳴りがして、吐き気がして　　そう、妙に喉がひりつく。

瞬時に、ある恐ろしい可能性が脳裏によぎって、テレジアは青褪めた。

妃となった、それも王の子を宿した女なら、誰もが恐れるもの。
妊娠初期から早々に実家に帰省し、徹底的に人払いをしてまで、
テレジアが避けようとしていたもの。

毒。

「ぐ……う」

急に、腹の痛みが増す。

それが、真に症状から来るものか、それとも毒を連想してしまった精神の働きによるものか、テレジアには判別がつかなかった。

毒にはかなり注意を払ってきたはずだ。

だとしたら、妊娠それ自体の経過に問題があるのかもしれない。

いずれにせよ、まずい事態だ。

「……クリス、タ」

テレジアはうずくまったまま、妹の名を呼んだ。

「クリスタ！ 来てくれ……！」

だが、扉の向こうから返事はない。

もしかしたら妹も、この長い昼時間を持て余して、のんびりと寝ているのかもしれないが いや、そんなはずはない。

彼女はテレジアよりも数倍繊細で、空にこんな暗雲が立ち込めようものならば、すぐにそわそわとして、テレジアの部屋に駆け込んできたものだった。

「クリスタ！ ……クリスタ！」

ゴロゴロ……

声にかぶせるように、雷鳴が轟きはじめる。

魔物の唸り声のような低い音に、無性に不安が掻き立てられた。

「クリスタ……？」

テレジアはじっと扉を見つめ、やがて口を引き結ぶ。

それから、冷や汗を浮かべたまま、這うようにして扉に近付いていった。

昼だからと灯りを入れていなかった部屋は、今やほとんど薄闇に覆われている。

カーテンすら閉じていない窓の向こうでは、とうとう大粒の雨が降り始めた。

ぴか、と、暗雲の隙間に閃光が覗く。

一拍遅れて、大音声の雷が響き渡る。

震える手でノブを回し、テレジアはぎこちなく繋ぎの扉を押し開けた。

ギィ、と、軋んだ音がする。

ピカ……ッ！

ちょうどその時、稲妻が暗い部屋を照らし、そこに広がる光景を理解したテレジアは、極限まで目を見開いた。

「クリスタ……！」

獣の咆哮のような鋭い雷鳴が、テレジアの耳を刺した。

0 プロローグ（後書き）

本日もう1話更新します

1. 「普通」の里帰り(1)

ルーデン王城の名物と言えば、威容を誇る宮殿や広大な庭、膨大な蔵書を誇る図書室などが挙げられるが、ここ最近、そこにもうひとつ、あるものが加わりつつある。

それは建築物でなければ美術品でもない。

たった一人の人物のことを指す上に、その人物の正体とは、成人もしておらぬ少女であった。

名を、エルマ。

ひとたび彼女が庭に向かって旋回すれば、その庭木は一分の隙もなく剪定され、ひとたび彼女が手首を閃かせれば、どんな難解な言語で書かれた文書でも、たちまちのうちに翻訳される。

土いじりをすれば化石を探し当て、散歩をすれば鉱脈にぶつかりふと相手の顔を見つめればそこに隠された不倫事件の真相を見破りと、彼女が歩く先々では、常になんらかの奇跡が起こる。

王宮で働く者たちは、彼女の仕事ぶりを目の当たりにすることで、日々自身の「驚愕最高記録」を更新し、時に、悟りのその先へ到達したりもするのだが、

「……あれ？　なんだ、こりゃ……？」

その日、エルマのこなした仕事を見た人々は、揃って首を傾げた。

「いた！ エルマ！」

朝から王宮中を駆けずり回っていたイレーネは、ようやくお目当ての人物を廊下の先に探し当てると、ほっと肩の力を抜いた。

この一時間ほどの間、ずっと探していた同僚・エルマは、今は、壁の一つに掛けられた絵画の補修作業をしているところだった。

彼女がほんのひと振り筆を滑らすだけで、色褪せていた絵画が夜の海辺を描いた風景画だった。みるみる鮮やかさを取り戻していく。

(なんだ、全然、いつも通りのエルマじゃない)

相変わらずの凄まじい有能さに、イレーネは胸を撫でおろしながら近付いてゆき、しかし、エルマが補修した海岸部分に視線をやるど、ぎよっと目を見開いた。

波が寄せるだけだったはずの砂浜には、なぜか、真珠のような涙を流す亀が描き込まれていた。

「何描いてるのよエルマ！」

「……ウミガメの産卵です……」

「いやいやいや！　なんで元には無かったウミガメが、ものすごい存在感で登場してるの!？」

「は

肩をがくがく揺さぶると、エルマはようやく我に返ったように絵画を見つめる。

むしろ補修前よりも一層美しく神秘的に仕上がってしまった絵を

前に、彼女は「しまった」とでもいうように顔を強張らせた。

「申し訳ございません。気が付けば、腕が勝手に動いておりました。補修し直します……」

しょんぼりとした表情も口調も、彼女が真実無意識だったことを告げている。

イレーネは眉を寄せて、

「……ねえ」

と慎重に切り出した。

「あなた、今日おかしいわよ」

「え……?」

「覇気がないし、眼鏡も心なしか曇ってるし。ぼうつとしてるっていうか……なんか、関心に変な方向に向いているでしょ」

イレーネが変な方向、と言ったのは、ここに来るまでに、エルマの仕事ぶりを目撃したためだ。

輪郭だけを整えればよいはずの庭木は、なぜか無駄に芸術的な聖母子像の形に象られ、ルーデン語に訳すだけでよいはずの外国書籍は、なぜか難解な古代文字に訳され、調理場まで運ぶだけでよいはずの卵は、なぜかすべて孵化されていた。ついでに雌雄にも分けられていた。

拳げ句、ウミガメである。

「そちらの方がよほど凄いとえば、凄いけど……どれもこれも、命じられた業務とは異なるでしょう。訳本を見た図書室の文官なん

て、語学堪能が売りだったって言うのに、何語かすらわからなくて、半泣きになっていたわよ」

「ああ……申し訳ございません。母を謳う詩があまりに見事だったので、つい古代ダズー語で表現してしまったのだと思います……至急修正いたします……」

「『つい』の因果関係がさっぱりわからないわ!？」

イレーネが素早く突っ込むと、エルマは「申し訳ございません……」と深々頭を下げる。

それでも依然として、心ここにあらずといった様子を感じ取って、イレーネは「もう」と眉を下げた。

「みんな、『なんかすごいからもうこのままでいい』って言うてくれてるけど……、エルマ、あなた、いったいどうしたのよ？」

「……『いつ胎動したのよ』？」
「いやだからほんとどうしたの!？」

おかしい。

やはり今日のエルマは絶対におかしい。

イレーネはひとまず友人の腕を掴み、無理やり医務室へ連れて行くとした。

「また風邪でも引いたのではないの？ これ以上被害が拡大する前に、さつさと休むべきだわ。とりあえず、八時間寝る！ たとえ突然陛下からの呼び出しがあるうと、半日くらい待たせてしまえばいいのよ。私が許す！」

「あ」

だが、為すがままにずるずると廊下を引きずられていたエルマは、

そこでぽつんと声を上げた。

「……そういえば昨日の夜、『翌日^{あした}でいいから、なるはやで部屋に
来てー』との陛下からの命を、託^{たく}っていたのでした……」

イレーネは無言で振り返った。

エルマの背後、廊下の奥には、ちょうど美術品としても通用する
柱時計が置かれている。

現在 八時五分。

呼び出しから、ばっちり半日が経過していた。

「お……っ」

イレーネはエルマの腕をぎゅっと掴み直す。

「お馬鹿ああああああ！」

それから、医務室ではなく王の居室に向かつて、友人を引きずつ
たままダッシュしはじめた。

「失礼いたしました」

「お考え直してください、義兄^{あにじい}上」

平身低頭したイレーネが、恐る恐るエルマを部屋に引きずり込んだ時、そこではルーカスが、険しい表情でフェリクスに食って掛かっているところだった。

アウレリア国での一件以降、頻繁に見られるようになった衝突。普段気さくなルーカスが、恐ろしい迫力をまとっているのを見て、イレーネは「まずいところに来てしまった」と身を縮こませた。

ルーカスはエルマたちの登場に気付き、やや表情を緩めたが、それでも毅然として義兄王に向かって抗議を続けた。

「なぜ今、俺たちにシュタルク国を征服してこいなどと言うのです。かつてのフレンツェルのように謀反の噂が立っているわけでも、アウレリアの時のように、向こうから仕掛けてきたのでもないというのに」

「どうやら今回、エルマたちは、そしてもしかしたら自分も、隣国の征服に巻き込まれようとしているらしい。」

朝っぱらから剣呑なやり取りに、イレーネはびくびくとしながらエルマの腕を掴む。

エルマはといえば、男たちの鋭い応酬に怯えることもなく、ぼんやりと部屋を眺めていた。

「なぜって、シュタルクは良質な聖具を生み出す技術を持ってるじゃない。いつだって成長を続けたい、育ち盛りのルーデンとしては、とても気になるごちそうだ。近隣国を飲み込もうとするのは、国の本能のようなものでしょ？」

「シュタルク国は、我々の異母弟エルヴィンも住まう友好国。ルーデンの餌ではなく、同志です。禁忌の『同族食らい』をするというなら、相応の理由をお聞かせいただけますか」

フェリクスが指摘すると、すかさずルーカスが応じる。
上質な革のソファでワイングラスを弄んでいたフェリクスは、そこで「んー」と首を傾げた。

「だってあの第三王子^{エルツァイン}ってさあ、てんで無能なんだもん。せつかくスパイのつもりで、相手国の上位貴族に婿入りさせたのに、健気に働いてルーデンに益なすどころか、こちらの技術をちまちま盗んでは、シユタルクに流してさ。挙げ句、『私この魂はすでにシユタルクの土に溶け込んでいる』とか演説してるわけでしょ？」

そこでイレーネは、フェリクスのソファの傍らに投げ出された、新聞の存在に気付いた。

ルーデン語によく似た文字で書かれたそれは、おそらく隣国シユタルクのものだろう。

かつてルーデンを去った第三王子が、今や新天地で、反ルーデン勢力をまとめ上げる旗印になろうとしている。ルーデンでも通じる単語を拾い読みするだけで、それくらいの情報がわかる。

記事には、甘ったるい容貌をした若者が、シユタルクの下層民と思しき者たちに向かって演説する場面が、一緒に描かれていた。

「だいたいこいつ、その母親ともども好きじゃないんだよねえ。特にあの下睫毛の目立つ濃い顔を見ると、うっ、ってならない？」

「同意ですが、そんな個人的な感情を持ち出さないでください」

「あはは、でも同意ではあるんだー」

フェリクスは緩く笑って、それから目を細めてルーカスを見つめた。

「その点、僕は君のことは評価しているよ、ルーカス。だって、『相応の理由を言ってくれ』ということは、シユタルク征服の可能性として受け入れてる、ってことだからね」

王の言は絶対。国の成長は正義。

人道的に認められぬことでも、王権を維持する者としてはそうあるべきということを、ルーカスは理解している。

シユタルクを手中に収めてしまえば、たしかにルーデンとしては美味しいということも。

フェリクスはぞんざいな手付きでグラスをテーブルに置くと、異母弟に向かってにんまりと笑みを深めてみせた。

「その忠実さと、腹に隠し持った強欲さ。ああ、実に好ましいとも……認めなよ、君が本当に反論したいのは、隣国にちよっかいを出すという行為そのものより、そこにエルマを投入するという、その一点だろうか？」

不意にエルマの名前が出てきて、イレエネは小さく息を呑む。

ルーカスは不機嫌そうに押し黙り、エルマ本人はと言えば、やはりぼんやりと立ち尽くすだけだった。

フェリクスは膝に肘をついて、ぐいと身を乗り出した。

「ルーデンの兵士も動かさない、シユタルクの民も傷つけない。エルマを一人ひょいと王宮に放り込めば、たちまちシユタルクを無血開城できる。そんな、王族なら涎よだれが出るほど理想的な戦力がここにあるのに、君はただその戦力が、愛らしい少女の姿をしてるっただけで、それを止めようとするんだ」

「……何度も申し上げますが、これまで彼女が得てきた『戦果』は、

あくまで奇跡のような偶然によるものです。彼女の力は未知数だし、不安定だ。そんな、たった一人の少女の肩に国の命運すべてをゆだねるといふのは、到底まともではありません」

「まともでない？ たった一人を送り込むだけで、相手国の王族が陥落するかもしれない、しかも失敗すればエルマだけが責を負えばいい。こんなノーリスクで、合理的で、真つ当な方法が他にある？」

フェリクスはもはや、エルマを王権拡大の駒と見なしていることを隠しもしない。

さすがにその扱いは、とイレーネは眉を顰め、こつそり傍の友人を見やった。

が、エルマは特に怒るでも悲しむでもなく、今度は天井の辺りをぼんやりと眺めている。

「……ねえ。ちょっと、エルマ？　今、陛下や殿下はあなたのことと議論していると思うのだけど……」

小声で囁きかけたのと同時に、ルーカスたちもエルマの様子がおかしいと気づいたらしい。

「曲がりなりにも、それが人の上に立つ者の発言で　エルマ？

おい、どうした？」

「国の頂点に立つからこそその発言だよ　って、あれ？　どうしたの、エルマ？」

三人から問いかけられ、ひらひらと目の前で手まで振られて、やっとエルマは我に返ったように姿勢を正した。

「は。失礼いたしました。卵割らんかつがなんでしたっけ？」
「卵割つてなによ!？」

いよいよ調子のおかしいエルマに、イレーネが両手に頭を突っ込むと、男性陣も怪訝そうに首を傾げた。

「いったいどうした……?」
「どうしたもこうしたも、今朝からずっとこの調子なのですわ。心ここに在らずで」

イレーネは眉を下げると、エルマの顔を覗き込んだ。

「ねえ、私も聞きたいわ。いったい、何があったのよ」

三人からもの問いたげな視線を向けられると、エルマは顎を引き、黙り込んだ。

それから、長い躊躇いの後に、小さな声で答えた。

「妊娠しました」

「……………」

一同、沈黙。

それから、三呼吸分ほどを置いて、声を揃えて絶叫した。

「はあああああああ!？」

1・」普通「の里帰り）1（）後書き（

読者の皆さまも驚いてくださっていいのよ（懇願）

今回は、序盤は連日投稿、途中から隔日投稿で進めさせていただき
予定です。

最後までお付き合いいただけますと幸いです。

2・「普通」の里帰り(2)

聞き間違いかと思ったが、訂正も説明もない。

どうやらこれは本当であるらしいと理解した彼らのうち、中でもルーカスは、ひどく剣呑な表情を浮かべた。

「おい、今なんと言った!？」

「ですから、妊娠したと。経過は良好……」

「経過は今聞いていない! 相手は誰だ!？」

肩を掴んでの問いに、エルマは戸惑ったように眉を寄せる。

それから、眼鏡越しにもそうとわかるほど、沈鬱な表情を浮かべた。

「わかりません……」

「わからない!？」

ルーカスは息を呑み、それから剣呑に声を低めた。

「……本意ではないということか? 言え。相手は誰だ」

「いえ、本意でないということは無いと思うのですが」

「はぐらかすな、言え。殺しはしない。……誰だ?」

いよいよ殺気すら滲にじませて問うと、エルマはなぜか縋ひるようにならなうてきた。

「誰だと思えます?」

「知るか!」

なぞなぞではあるまいし、と吠えるルーカスをよそに、エルマはふいと顔を俯けた。

「個人的にはお父様であってほしいというか、それ以外に選択肢は無いと思うのですが……ですがなんと書いてもあの母ですので、誰でもあり得るといっつか、一周回ってありえないといっつか、さらに半周回ってやはりありえる……ああもう、なぜ【嫉妬】のお兄……お姉様ときたら、肝心なことを書いて下さらなかったのか……。いくら獄内がお祭りムードでお忙しいとはいえ……」

唇に指を当てたまま、ぶつぶつと呟きはじめた辺りで、ルーカスたちはようやく何かおかしいと気付きはじめた。

「……『母』？」

「え？ ええ」

「それはつまり、その、元娼婦だということ……？」

「ええ。母が妊娠したと、家族から手紙をもらったのです。は。前職時代の知り合いがお相手、という可能性も……？」

エルマは返事もそこそこに、再び思索の海に沈んでゆく。

どうやら、今朝方手紙を受け取って以来、こうして悶々と母の妊娠について考え続けていたらしい。

お相手は……だとか、祝いの品は……だとか、名付けはどうすれば……などと唸るエルマを見て、一同はがくりと脱力した。

主語を言ってくれよ。

どつと安堵するとともに、いやいや、考えてみればこのエルマが、

そのような事態に陥るはずもないかと、冷静な思考力も戻ってくる。ルーカスはようやく、他者の妊娠の報を聞いた際に、真っ先に告げるべき言葉を思い出した。

「それは、おめでとう　　でいいんだよな？　　というか、相手について、なにしろ外部と隔絶されたヴァルツァー監獄での話なのだから、獄内の人物と考えるのが普通なのではないか？」

「いやあ。外部接触厳禁の監獄からしれっと手紙が届いてる時点で、いろいろお察しだよなあ？」

横でフェリクスがぼそつと呟くのを聞き、はっとなる。

そういえば、これまでのエルマの話を総合するに、エルマの「家族」とやらは、のびのびと獄外へ遊泳やピクニックに行ったりする輩なのであった。

「……まあ相手のことは一旦置くとして、なにしろ重大な慶事だ。さっさと返信するなり、祝いを贈るなりすればいいではないか」

その言葉を聞きつけると、エルマはぱつと顔を上げた。

「　　そのことなのですが、陛下、ならびに殿下」
「うん？」

急にお鉢が回ってきたフェリクスも、目を瞬かせる。エルマは男性陣を見つめ、真剣な様子で言い募った。

「手紙によれば、母は周囲の過剰な反応を避けるため、妊娠をぎりぎりまで隠し通し、私にも伝えぬようほかの家族に頼んでいたそうです。痺れを切らした姉がこうして手紙を寄越してくれたのですが、　　なんと、既に臨月に差し掛かっているとのこと」

「あれまあ。随分時間が経ってたんだ」

「はい。妊娠出産とは、常に何が起こるかわからぬ非常事態の連続とお聞きします。正直今この瞬間にも、お腹の子が飛び出してくるのではないかと、私は朝から、気が気ではございませんでした。このままでは、仕事も手に付かず、方々にご迷惑をお掛けするやもしれません。ですので」

そこで、エルマは両手を組み、すっとその場に膝を突いた。

「どうか、只今から、母の出産……できれば産後落ち着くまで、里帰りを許可していただけませんでしょうか？」

ルーカスは目を見開いた。

思いがけない事態だが、まあ、もっともな願いではある。

「それは、そうだな。獄内では女手も足りないだろうし」

だが、

「だめー」

フェリクスが間延びした口調でそれを取り下げたので、ルーカスは眉を寄せた。

「今なんと？」

「今すぐにはだめだよ。シユタルクを墮として欲しいって言ったでしょ？ そうだねえ、シユタルクの経済か宗教心か文化を完全にこちらに依存させて、あとはラトランドやモンテーニュへの種蒔きまで済ませたら、ちょっとは休憩していいよ」

ルーカスの碧い瞳が見開かれた。
そんなもの、一流の職員や大量の兵力を投じて、どうしたって一年以上かかる案件だ。

「義兄上。あなたの横暴ぶりも、いよいよ度が過ぎ」
「時間ももつたないんだよね」

フェリクスは煩わしそうに手を振る。
それから、再び深々とソファに背を預けた。

「王たる僕の時間は、この国の誰のものより貴重なんだ。一介の侍女の私事と、一国の王の公務、どちらが優先するのが普通かなんて自明の理だよねえ？」

国の命運を担わせる戦力だと表現したその口で、一介の侍女にすぎぬと言いつつ。

そのあまりの身勝手さに、ルーカスもイレーネも顔を歪めた。

愚王の仮面を被った、聡明なフェリクス。
たしかに彼は有能な王なのだろうし、その即位以降、ルーデンは着実に成長を続けているが あんまりだ。

「……………」

エルマはショックのあまりか、すっかり黙り込んでしまっている。

「義兄上、お言葉ですが」

こんな非情な目に遭っても、反論一つしない哀れなエルマに胸を痛め、ルーカスたちが剣呑な表情で口を開いた、その時だ。

ばんっ

王の私室の扉が突然開いたため、一同はぱつと振り返った。

衛兵に守られているはずの扉には、上等なチュニツクに身を包んだ一人の青年が、やけに気取ったポーズで佇んでいた。

「……ごきげんよう」

その人物は、癖のある豪奢な金髪を掻き上げ、にやりと微笑む。それから、フェリクスの特許も待たず、かつかつと靴を鳴らして部屋に踏み入った。

「ご会談中でしたか。ですが、なにぶん緊急事態につき、非礼の段、ご容赦を？」

青年は、ふつと微笑み、颯爽と部屋を横切ってゆく。

(なんか……)

これまでに見たことのない人物に、どうした礼を取るべきか悩みつつ、イレーネは思った。

(なんかすごく……)

すらりとした長軀。

後ろに高位貴族と見える人物を数名連れながらも、けっして臆せぬ堂々とした姿。

目鼻立ちのはっきりとし、明るい金髪や緑の瞳も、いかにも華やいでいるが、

(　　)　　なんか、うざい)

特に、濃ゆくて長い下睫毛が、見ているだけでうっとなる、とイレーネは思った。

それから、自身の感想を手掛かりに、目の前の青年の正体に思い至った。

癖のある金髪に、緑の瞳。

ルーデンの伯爵家出身側妃の息子にして、数年前国外　それこそシユタルクに追い払われた、第三王子。

「エルヴィン王子殿下……」

エルヴィン・フォン・ルーデンドルフ元王子の登場に、フェリクスとルーカスは目を見開いた。

「おやまあ、これは久しぶり。どうしたの？　僕の冠婚葬祭くらいにしか戻ってきちゃだめだよって、クレメンスから言い含めさせたと思ったけど。脳味噌から下睫毛に栄養が流れ過ぎて、覚えられなかったかなあ？」

とぼけた口調には、隠しようのない棘が滲む。

が、エルヴィンは動じず、ふっと白い歯を見せて　いちいちくどい仕草だ　笑った。

「覚えておりますとも。ですが……いえ、だからこそ、私はこの場に参ったのです」

彼は芝居がかった所作でぐるりと背後を振り返ると、控えていた

数名の人物に向かって、「例のものを」と合図した。

ルーデンのものとは少々異なる礼装に身を包んだ老人たちは、恭しくエルヴィンに小箱を差し出す。

水晶のようなものをくりぬいたその中には、透明な液体が湛えられていた。

「それは……？」

ルーカスが眉を顰めると、エルヴィンは我が意を得たりとばかりに頷く。

そうして、箱をずいとフェリクスたちに突きつけた。

「これは、我がシユタルクの聖具生産技術の粹すいを集めて作った、『
真実の水』。効能については、これより実際にご覧いただきましょ
う」

不法侵入者はエルヴィンの方だというのに、彼は妙に堂々として
いる。

実質的には国外追放されたのだとはいえ、身分としては王弟である
彼が義兄を尋ねてきたことについて、臣下がなにを言えるでもない。
い。

ルーカスは警戒を、イレエネは戸惑いを含みながら、ひとまずエ
ルヴィンの一方的な行動を見守った。

「まずはこちらの水に、とある人物の血液を垂らします。血液でな
ければ、唾液でもいい。髪でも、肉片でも、その人物の一部を成し
ているものならば。今回は、遺髪を使いました」

エルヴィンの指さす先を辿れば、たしかに水底には、細い黒髪が

一本だけ漂っている。

どことなく不穏な気配の漂う小箱を左手に掲げ、右手では胸元を押さえながら、エルヴィンはフェリクスに一歩一歩近付いていった。

「そして、この箱に、もう一人の 鑑定したい人物のそれを加える。繰り返しますが、人体の一部を成すものならば、髪でなくともいい。血液でも唾液でも」

そこでテーブルに置いてあったフェリクスのワイングラスを取り上げると、懐から取り出したハンカチで、さっと飲み口を拭いた。

「たとえば、グラスに付いた、ごく微量の唾液でも」
「なにを」

冷やかに目を細めるフェリクスの前で、エルヴィンはハンカチを小箱に押し込んだ。

途端に、

じわ……っ

透明であったはずの水が、ハンカチの触れたところから赤黒く濁ってゆく。

それを見て、エルヴィンは勝ち誇ったような笑い声を上げた。

「ほら！ ほら見たか、偽の王め！ ははは、シユタルクの忠臣たちよ、今こそ私は諸君に報いよう。この男は世を謀る大悪党。一方の私が、そして誇り高き技術の国シユタルクこそが、真実を見破りそれを告げんとする、正義だ！」

朗々たる言葉に、背後の老人たちは感極まったように手を打って

いる。

すっかり状況に取り残されているルーカスたちに、エルヴィンは大げさに肩を竦めて向き直った。

「ご挨拶が遅れましたね、ルーカス義兄上。今いたいこの場でないが起こっているのか、女と剣にばかり溺れていた貴方にはわかりますまい？ 異母兄弟のよしみで、解説してさしあげましょう」

彼は、濃い相貌に、にやりと笑みを乗せた。

「これは、血縁関係 真に親子であるかを鑑定するために作られた聖具。親子以外の人体が同時に触れれば、たちまち水は濁る、そのように作られている。……おっと、お疑いのようなら、何度でも他の部位を使つても検証して差し上げますが」

エルヴィンは愉快でたまらないというように、水晶の小箱を指差した。

「先ほど加えた唾液は、フェリクス義兄上のものでしたね？ しておわかりですか、この黒髪は 我らが父、先王ヴェルナーのもの。こちらも、何度でも証明いたしましょう」

彼が何を言わんとしているかを理解し、ルーカスたちは顔を強張らせた。

ヴェルナー王の遺髪と、フェリクスの唾液を、聖なる水は反発させた。

つまり。

エルヴィンは睨むようにしながらフェリクスに指を突きつけ、言

い切った。

「つまりね。フェリクス義兄上は　この男は、王の実の息子ではない。真なるルーデンの血統を受け継がぬ不義の子……偽の王ということですよ」

高らかな宣言に、ルーカスはぽかんとする。

「いったい何の妄言を、と呆れの溜息を漏らそうとしたところで、ふと、異母兄が何も言わないでいることに気が付いた。

「……義兄上？」

フェリクスは興ざめしたような顔つきで、ただ黙っている。

いつまでも、何も言い返さぬ彼を見て、ルーカスは徐々に顔を強張らせていった。

「……本当なのですか？」

その時点で、彼はまだ、エルヴィンよりはフェリクスの方を信じていた。

エルヴィンはその母親の影響か、何かと芝居がかった、荒唐無稽な言動を取ることが多かったし、フェリクスがそんな彼にやすやす追い詰められるとは思えない。

さては、よほど痛烈な反論を考えているのだろうかとも思っていたのだが、

「んー……まあ」

頬杖を突き、フェリクスがしれっと呟いた内容に、驚愕した。

「そつだねえ」

彼は、それがなにごとも言わんばかりの口調で、
気だるげに頷いたのだった。

3・「普通」の里帰り(3)

どうしてこうなったのだろう。

ルーカスは、もう何度目になるかわからぬ思いを再び反芻^{はんすう}し、遠い目になった。

「さて、それではもう少し散策を楽しみながら、今度は左右をご覧ください。まずは皆さまの左手、愛らしい花を咲かせているのは、錬金術師御用達、マンドラゴラです。抜くと絶叫しますので、ご注意くださいね。ちなみに、右手に見えます紫の花は、ジギタリス。こちらは猛毒注意です」

彼の数歩先では、布鞆だけを肩掛けにした侍女姿のエルマが、ご機嫌で道案内をしている。

彼女のすぐ後ろにイレーネ、その後ろにルーカス。

この三人であれば、既にいろいろな場所で行動を共にしたことがあり、この光景も単なる山歩きに見えなくもなかったが、こと今回に限っては、明らかに不穏さを感じさせる要素があった。

「ねー。いつまでこのピクニックごっこを続けるのさ」

不穏要素その一。

ルーカスの後ろに、フェリクスがいる。

「……疲れた。馬とは言わぬが、駕籠は無いのか」

そして、こちらが決定的なのだが 不穏要素その二。

なんとフェリクスの後ろには、彼の母、テレジア王太后陛下がましましているのである。

テレジアと言えば、荒事を好む苛烈な性格で知られ、フェリクスの出産後は、ユリアーナたち側妃に数々の攻撃を仕掛けてきた女性である。

いわく、国母としての地位を保つためなら、その手を血に染めるのに眉ひとつ動かさない。

気に入らぬ侍女を集めて剣で斬り刻んだとか、愛らしいと評判の実妹さえ、嫉妬のあまり顔を切り裂いて修道院送りにしたとか、彼女にまつわる恐ろしい噂は、両手で収まらぬほどだ。

こつそりと囁かれる彼女のあだ名は、ブラッディ血塗れテレジア。

そんな彼女を迎えた一行の雰囲気は、明るく楽しいはずもなく前を行くイレーネが、テレジアが溜息をつくたびにびくつくのを見て、ルーカスもまた溜息を漏らした。

どうしてこうなったのだろう。

「ご不便をおかけし恐縮でございます。あともう少し歩けば、我が屋敷　ヴァルツァー監獄が見えてまいりますので、何卒ご容赦くださいませ。あ、ちなみにあちらの草陰から覗いていらつしやるのが、この辺りに定住する少数民族、首狩り族でございます。ふふ、今日もいい槍、持っていますねえ」

ガイド役を務めるエルマは、始終浮き浮きした様子だ。

物騒な観光案内の中身もさることながら、ルーカスとしては、彼女のその態度についてまず突っ込みたかった。

これは、自宅に遊びに来た友人への道案内ではないのだぞと。
あくまで 現王と国母を、この世の地獄と名高い、ヴァルツァ
ー監獄に監禁しにいくための道中なのだぞと。

「おっと、そうこうしている内に、この森一帯に雷雨がやってくる
時間ですね。さ、ペースを上げて参りましょう」

意気揚々と先導するエルマを眺めながら、ルーカスは、あの日の
ことを思い出していた。

素っ気なく頷いたきり黙り込んでしまったフェリクスに代わり、
王の居室で我が物顔の演説を続けていたのは、やはりエルヴィンだ
った。

「ははっ、殊勝なことだ。さすがにこれだけの証拠を突きつけられ
ては、お得意の弁舌も、すっかり鈍ってしまうようですね？ 完全
な劣勢であると、正確に事態を把握できた理解力だけは褒めて差し
上げましょう。ご褒美に、報告をもっひとつ」

彼は、華々しい目鼻立ちに剣呑な笑みを乗せ、凄んでみせた。

「既にこのスキャンダル、各国の新聞社に囁かせていただきました」
「エルヴィン、おまえ」

あまりの大胆さに、ルーカスは耳を疑う。

仮にこれが真実なのだとしたら、ルーデン全体、いや、大陸全土
を揺るがす醜聞だ。

それを、慎重な審査も検証もなく、国外までも流布してしまえる軽薄さが信じられなかった。

が、エルヴィンは己の優位を確信した笑みのままだ。

その小さな脳味噌には、「国外追放された悲劇の英雄が、虚飾の王の化けの皮を剥いでやった瞬間」とでもいった筋書きでいっぱいなのだろうことは明らかだった。

「ご安心なさいませ、義兄上　いえ、フェリクス殿。ルーデンは法治国家。たとえあなたが極悪人でも、必ずや法廷を通してその罪を裁きましょう。誠実で、開かれた国家にふさわしく　全国民の目の前でね！」

公開処刑の予定もあるということだ。

もはや発言に滲みはじめた嗜虐性すら、エルヴィンは隠そうとしなかった。

「お一人では寂しいでしょう？　ですので、お母上も一緒ですよ。ちょうどこの場にお呼びしておきました。不義を働きながら、ぬけぬけと国母として君臨したばかりか、私の母たち側妃を残酷にいたぶった、稀代の悪女をね」

ぱちん、と指を鳴らすと、廊下からさらに数名の兵士が現れどうやらエルヴィンは、ルーデン内にそこそこの手駒を確保していたらしい　、乱暴にひとりの女性を突き出した。

くすんだ金髪に、意志の強そうな緑の瞳。

整った美貌よりも、苛烈さや獰猛さを感じさせるその熟年の女性こそ、先王の正妃、テレジア・フォン・ルーデンドルフであった。

「無礼者。穢らわしい手で触れるな」

女性にしては低い声は、こんな時でも威厳に満ち、静かな口調であつても強く耳朵を打つ。

ひと睨みで兵士を動揺させ、悠然とドレスの裾を払った彼女は、次いでぐるりと周囲を睥睨した。

エルヴィンの姿を見つけ、「ほう」と口の端を持ち上げる。

「久しいの、三番目の。母子共々、シユタルクの田舎に追いやつたと思つておつたが。その乏しい脳みそでは、帰る家を覚えられなかつたかな？」

「……不快な口を叩けるのもそこまでですよ、テレジア殿。おぞましい毒で、母を聖具無しには生きられぬ体にしたその罪、あなたにはこれからしかと償っていたいただくのだから」

エルヴィンの声は、いよいよ心底からのものと思われる憎悪を帯びる。

が、テレジアは片眉を優雅に持ち上げただけだつた。

「ほう、あの雌猫、聖具の力を借りてまだ生きておつたか。聖具開発で有名なシユタルク行きを認めてしまったなど、私の慈悲深さには我ながら呆れるわ」

「この女……！ いいか、おまえらなど、裁判の準備が整い次第、国民全員の前でみすばらしい衣を着せ、判決の後には国中を引き回して」

「あの」

エルヴィンは激しかけたが、壮大な復讐計画を披露しきるよりも早く、涼やかな声が割って入った。

「お取り込み中大変恐縮なのですが、少々確認と、ご提案をよろしいでしょうか」

エルマである。

もちろん全然よろしくなかったが、エルヴィンが何かを言い返す前に、エルマはするすると言葉を紡いでいった。

「まずは確認なのですが、御身 エルヴィン殿下におかれては、現王陛下が先王の実子でないとの物証を得て、全国民にその真実を伝えるべく、告知と裁判とを行おうとしている。と、そういう理解で合っていますでしょうか？」

「あ、ああ……」

いったいこの、地味で今まで視界にも入らなかった侍女は何者だ。疑問を抱きながらも、小柄な少女からえもいわれぬ迫力を感じ取り、エルヴィンは頷く。

「そう、その通りだ……」

「なるほど。では僭越ながらお尋ねしますが、現役の王を裁くためにはどのような手続きが発生するかご存知で？ 所要日数は？ その間の被告人の扱いは？」

「え……？」

淡々と捲し立てられ、エルヴィンは目を白黒させた。

「それは、その……所定の規則に則って、速やかな裁判を……」

「絶対者である王を裁くには、全裁判官の署名と国民審査、そして近隣五力国の承認が必要と国際法で定められております。かつ、エルヴィン殿下は現在シユタルクの方ですので、残念ながらルーデン

で起訴するのは、不可能とは言いませんが膨大な手続きが必要となります。そして同時に、判決の槌が降るされるその時までには、被告人は推定無罪として相応の生活を保証せねばなりません」

「え……え……」

思ってもよらぬ事項を次々と並べられ、エルヴィンが動揺する。

とりあえず何か反論を、と口を開きかけた彼に、そこでエルマはにこりと微笑んだ。

「でも大丈夫」

さらに、眼鏡をすつと外す。

突如現れた絶世の美貌にぎよつとしたエルヴィンに、彼女は一歩歩み寄つてさえみせた。

「僭越ながら、私にご提案がございます。蒙昧なるこの身なれど、お役に立てればと固めましたこの考え、御身の前で口にするお許しを頂けますでしょうか……？」

ほんの少し見上げるようにして、目を潤ませて。両手を胸の前で組み告げる様は、可憐の一言だ。

絶対口くでもないことを考えているに違いないとわかるルーカスたちですら、視線を惹きつけられてしまうその媚態。

耐性の無いエルヴィンが、一秒と保つはずもなかった。

「よ、よ、よろひい！ 言いたまえ！」

「彼ら 現王陛下と、王太后陛下に、準備が整うまでの間、ヴァルツァー監獄で過ごしていただくというのはいかがでしょう」

エルヴィンはぼかんとする。

ルーカスはいえ、その一言でエルマの意図を悟り、無言で顔を引きつらせた。

「ヴァルツァー監獄……この世の地獄で、か？」

「はい。なにしろヴァルツァーはルーデンの誇る絶対要塞。脱獄の困難さには定評がございます。王宮とも距離が離れておりますので、準備期間中に裁判関係者を懐柔するのは不可能。一方、形骸化しているとはいえ、推定無罪の貴人を『お預かり』するための部屋もございませぬので、国際的にも言い訳は立つかと」

エルマの弁は、まるで立て板に水を流すよう。

同時に、やけに熱の籠もったものだった。

「ただし、唯一問題があるとすれば、体裁を維持するとなると、被告人たる彼らに付き添う人間を確保せねばならないということ。半ば罪人の烙印を押されつつある彼らに、好き好んで付いていく者はあまりおりませぬ。ですが」

彼女はまた一步エルヴィンに詰め寄り、そつと甘い声を上げる。

「ですが、エルヴィン殿下」

おい、とルーカスは思った。

俺には一度だって、そんな声を出したことはないじゃないかと。

「私は……その付き添いに、ぜひ志願しとついでいます」

(エルマ、おまえ……っ)

ルーカスは拳を握った。

そうまでして里帰りを決めるつもりか、と。

そう。

エルマが、ダイナミック里帰りを志すあまり、今回は自分ではなく、フェリクスを犯罪者に仕立て上げるつもりなのだという事は、ルーカスには容易に理解できた。

「な……っ、なぜっ、君は、そんなことを望むというんだい!？」

秒でエルマに陥落させられたエルヴィンは、鼻息も荒く彼女の肩を掴んでいる。

エルマは、その下心の滲む手に己の手を重ねさえして、じっと潤んだ瞳で彼を見上げた。

「願いを、叶えたいと思ったのです」

身を委ねた姿勢での発言は、あたかもエルマが元王子エルヴィンに一目惚れし、彼の願いを叶えてあげたいと思った、とでもいう趣旨の発言に聞こえる。

が。

(あくまでおまえの願いを、だろっがあああああ!)

意図を正確に把握できてしまったルーカスとしては、そう突っ込まざるをえなかった。

そして同時に理解した。

フェリクスに里帰りを阻まれ、黙り込んでいたエルマ。

あれはショックを受けていたのではなく 相当怒っていたのだ、
ということ。

(……解せない)

回想を終え、ルーカスは眉を寄せた。

確かにあの時、自分はエルマの行動に疑問を持ち、突っ込みに回
ったと思ったのだが、それがなぜこうして、このメンバーで、監
獄へと至る山道を歩いているのだろうか。

(いや、「最低限体裁の繕える付き添い人を」確保した結果、エル
マとイレネが選ばれ、「信頼のおける監督者を」確保した結果、
騎士団所属の俺が選ばれた、ということは覚えているんだが……い
つかにそうなっていった?)

考えれば考えるほどに、強引だったり、穴のあつたりする意思決
定過程だ。

なのに、今こうして山道を歩いてしばらくするまで、誰もがそれ
を不思議に思わなかった。

エルマが夜明け色の瞳を向け、「殿下はどうなさいますか」「イ
レネはどうしますか」と尋ねてきた時、むしろ自分たちは、進ん
で監獄への同行を申し出たような気さえするのだ。

洗脳。

そんな単語がふと思いつき起こされて、ルーカスは顔を引き攣らせた。

ありえすぎて、笑えない。

「さあ、だんだん見えて参りましたよ。ふふ、家に人をお招きするのなんて、初めてです。どきどきいたしますね」

が、前に行くエルマといえば、里帰りを実現させた今や大層ご機嫌である。

彼女の中で、これは「監獄送りの付き添い」ではなく「人を招いての帰郷」と整理されているらしい。重苦しい空気をものともせず、先ほどから張り切ってガイド役を務めている。

(……こいつが張り切ると、ろくなことが起きない、というのが定説なんだが)

つい思わし気な視線を向けてしまうと、それに気付いたエルマは、ルーカスに向かって力強く頷いてみせた。

「実は今回、高貴なる方々も交えてのご招待ということで、失礼が無いように、侍女長から『初めてのホームパーティー』もてなしのアイデア100』なる本を借りて、おもてなしのなんたるかを研究したのです。今の私は、もはやホームパーティーのプロ。大船に乗った気で、ヴァルツァーでのひとときをお楽しみくださいませ」

「……………」

ツツコミどころも様々あるが、それを差し置いて、不吉な予感しかない。

フェリクスやテレジアは怪訝そうに首を傾げただけだったが、エルマ危険予測士の資格を持つイレーネは、怯えたようにルーカスを

振り返った。

ルーカスは咄嗟に視線を逸らしかけたが、上司の責任を思い出し、ひとつ頷く。

大丈夫、少なくとも借主や本の題名を聞く限り、今回については、そこまでひどいことにはならないはずだ。

「さ、到着でございます」

浮き浮きとした声が響いたのを機に、ルーカスは戦場に臨む兵士のような顔つきで、そびえたつ監獄の建物を見上げた。

4・「普通」の里帰り(4)

ヴァルツァー監獄。

ところどころ鳶の絡んだ、陰気な色の石づくりの建物。

空は青く晴れ渡っているというのに、そびえたつ尖塔も周囲を覆う森も、すべてが暗く沈んでおり、魔王の城とでもいった趣がある。

(これが歌劇なら、今にもおどろおどろしい背景曲が流れだしそうな光景だな)

そんな感想を抱いたルーカスだったが、

「……………?」

「……………なにか、どこからか美しい音色が……………」

現実には、繊細なバイオリンの音色が鼓膜を揺らしたので、一同はこぞって辺りを見回した。

険しいだけだった山道。当然彼らの周囲を囲むのは、猛々しい緑だけだ。

だが　葉を揺らす木々の影から。土に影を落とす草のあわいから。

まるで緑の隙間からこぼれるようにして、澄んだ音色は響き渡る。

さながら、風や葉擦れといった自然の音が、音階をまもって立ち現れたかのようだった。

「なんてきれい……………これはもはや、精霊の歌なのかしら……………」

「へえ、美しいねえ」
「ほう……」

イレーネは頬を紅潮させ、ひねくれものと見えるフェリクスやテレジアまでもが感嘆したように、そつと溜息を漏らす。

そんな中、動体視力と勘に優れたルーカスだけが、緑の奥で蠢く存在を捉えた。

「何者　！」

腰の剣に手を当てながら誰何すいかすると、ふつと森がざわめく。

それは、風が引き起こした自然の音色のようにも、あるいは笑みを含んだ溜息のようにも聞こえた。

キュイ……ン

一拍置いて、まるで問いに答えるように、艶やかなバイオリンの音が響く。

それを聞き取ると、傍で森の奥を眺めていたエルマは、静かに笑って頷いた。

「腕を上げましたね、ジヨヴァンニ」

「は!？」

ルーカスは思わず眉を寄せ、それから

ざっ!

一斉に草を踏み締めて現れた存在に絶句した。

「……………!」
「過分なるお言葉を頂き、恐悦至極」

そこにいたのは、森と同化するようなくすんだ衣服に身を包み、顔にまで緑のペイントを施した男。

そして、同様の格好をした数十人の男たちだった。

その厳しい表情、そして恐ろしく統制の取れた動きは、まるで森に進軍する隠密部隊のようだが、しかし皆一様に楽器を構えているのがおかしい。

しかも目を凝してみれば、彼らのまとった衣服は、迷彩柄でこそあるものの、王宮楽団が身に付けるのと同様のチュニックやドレスシャツである。

「……………!? 彼らは……………!?」

「ああ、彼らはただの音楽係です」

「音楽……………係……………?」

愕然としながら反復すると、男たちはざつとその場で楽器を脇に持ち替え、お辞儀をする。

ジヨヴァンニと呼ばれた男だけが彼らを紹介するように片腕を掲げ、魅惑の声で告げた。

「我ら、ヴァルツァー構成員から成る音楽集団、『宵の森楽団』で
ございます」

「本日の演奏も見事でした」

エルマがぱちぱちと拍手すると、楽器を抱えた男たちは、それぞれ土を踏み鳴らしたり打楽器をそつと叩いたりして応える。

それらは、楽団が拍手の代わりによくする仕草であったが、結果

滲み出るあまりの迫力に、イレーネがびくつと肩を揺らした。

「な……っ、な、なな……っ、なんなのこの人たち……！」

「ジヨヴァンニは元窃盗団の頭領ですね。凄腕の鍵師でもあり、目隠したままでも、錠の音だけを頼りに開けられるのが売りでして、彼に破れぬ金庫は無いと謳われるほど。その耳の良さを活かせるのではと、【嫉妬】の兄　いえ、姉が音楽教育を施しました」

「教育の成果凄まじすぎるでしょ!？」

「ちなみに、ジヨヴァンニを慕ってともに投獄された部下たちは、

【暴食】の父が鍛え上げ、二十四時間の演奏や、夜を徹しての武闘にも耐えられるほどに成長しました」

「舞踏じゃなくて武闘!？」

常軌を逸した存在を淡々と紹介されて、まだ監獄に足を踏み入れぬ内からツツコミが止まらない。

「なお、以前は室内で演奏してもらっていたのですが、母が『音楽とはもつと自然と溶け込んで、あたかも風がそよぐかのように聴こえてくるべきものだわ』と漏らしたことから、このスタイルに落ち着きました。以降、この一帯は木霊の歌声の響く森と、冒険者たち間で密かに話題に」

「お母様の権限大きすぎる！」

イレーネが天を仰いで絶叫すると、その横でテレジアも静かに顎を引いていた。

「……ルーデンの王宮でも、いや、音楽の都・ヤーデルドでさえも聴いたことのない水準の楽団が、監獄に……だと……?」

どうやら、豪胆さで知られる彼女でも、のっけからのこの暴投に

は度肝を抜かれたようだ。
フェリクスは冷静に、

「これくらいで動揺していたら、後々保ちませんよ？ 王太后陛下」

と微笑んでいたが 彼は母親のことを、王子時代から変わらず
「陛下」と呼ぶ、ルーカスはその言葉に慌てて気を引き締めた。

そうとも、ここはエルマのホーム。

どんな常識圏外のことが起こってもおかしくない、ある種の魔境
だ。

しかも今回、エルマはやたら張り切っているときだ。

「なるほど、エルマ。さては、先程言っていた『もてなし』とはこ
れのことだったのか」

大丈夫。

自分はこの場の誰よりもエルマ耐性が付いている。

これしきのこと動じてたまるかと、さも想定内であるように問
うてみれば、エルマは「え」と小首を傾げた。

「はい、まあ、その一つではありませんが ホームパーティーの際
に、演奏でお迎えするのなんて、普通のことと言いますか……も
てなしの内にも入りませんものね」

「……なんだと？」

「ですので、『お迎え』のメインはこちらです」

エルマは微笑んで、ぱちんつと指を鳴らしてみせた。

途端、宵の森楽団の男たちは、愛器を伏せ、さっと耳を塞ぐ。

ひゅうつうつう……っ

同時に、彼らの頭上には光の線が鋭く宙を駆け上がり、

どお……………んっ！

青空のもと、大輪の花を咲かせた。

「花火いいいいいい！？」

それも、ルーデンの祝祭でも見たことのない、やけに巨大な、完璧な球を描いた花火である。

「ふむ、割物・芯入り銀冠菊、からの柳ですか。音、色とも見事」

「もう何を評価しているのかさっぱりわからないのだけど！？」

「ただの種類の名前ですよ。いやはや、カルロスも腕を磨いたものです」

「誰よカルロス！？」

イレエネはくわつと叫んだが、花火の軌跡を遡っていたルーカスは、尖塔のてっぺんにいる人影を認めてぎよつと顔を強張らせた。

「まさか……………あそこから身を乗り出して手を振っている男は……………一時期大陸中を騒がせた爆破犯の『爆散カルロス』か……………！？」

「ああ、もしかして殿下、その世代でしたか。そうです、彼の爆発物取扱いの技術の高さに興味を引かれた【貪欲】の兄が……………」
「もういい、だいたいわかった」

爆破愉快犯・カルロスが、ジョヴァンニ同様「教育」の末、監獄

お抱え花火師として「成長」したのだろうことは、誰の目にも明らかであった。

花火はそれから、「ないあがら」、「すたあまいん」からなるクライマックスまでを激しく駆け抜け、とどめに「エルマLOVE」「おかえり」の文字を象って仕舞いとなった。

「……もう。お客様の方をもてなしてと伝えたのに……」

エルマが眼鏡姿のまま恐縮するが、一同は腹の中で叫んだ。

そこじゃねえだろ。

これだけの爆発物を製造、保管し、緻密に展開してみせるその技術。

はつきり言って、これもまた軍隊に相当する戦力だ。

「……ていうかさー、この花火って、フレンツェル全域くらいには見えちゃうんじゃないの？」

フェリクスだけはのんびりと、三人とは異なる観点から突っ込むと、エルマは優しく首を振る。

「皆さまのヴァルツァー来訪は『密かな訪問』という態でございませので、花火が目に着かぬよう、ただいまフレンツェル全域には雲を集め、雷雨を降らせております」

「ご安心ください、と微笑まれるが、そのどこに安心材料があるというのだろうか。」

「花火のために……？」

「雲を……？」

え、どうやって。

一同は完璧に硬直する。

が、エルマはその問いには答えず、肩にかけていた布鞆　　とい
うより、そこから覗く冊子にちらりと視線を落とし、ひとつ頷いた。

それから、こつんと靴を鳴らして監獄の前に立つと、完璧な礼を
した。

「本日は、遠路はるばるようこそお越しくございました。心ばかり
のもてなしをご用意しておりますので、どうぞ我が家と思って、お
くつろぎくださいませ」

*

「はじめてのホームパーティー　　くおもてなしのアイデア100
」

家に招く前から、既に雰囲気作りは始まっています。

周りを囲む自然や名物を紹介し、場の空気を盛り上げましょう。

音楽の得意な家族がいれば、歓迎曲の演奏を頼みましょう。

ただし、主張の強い選曲は避け、心地よい背景曲に徹すること。

玄関は家の顔。

玄関をくぐる前に、華やかな花が見えるようにし、お客様の気分を盛り上げましょう。

笑顔、笑顔、笑顔。

「楽しいことがたくさん起こる」と予感させるべく、ホストはにこやかにゲストを出迎えます。

5・「普通」の里帰り(5)

「ねえ、ギル。髪型、どうかしら。このドレスだと、なんだか顔色が悪く見えて？ やはり赤いドレスにしようかしら」

エルマが入獄前から一同の価値観をクラッシュさせた、その少し前。

監獄の最上階　女王の居室では、ハイデマリーが鏡を覗き込んでいた。

普段緩く背に流している銀髪は、清楚に結い上げられ、ネグリジエのように肌の露出が多いドレスも、今日ばかりはシンプルな藍色のドレスに代わられている。

ただ、禁欲的な装いをしたところで、かえって溢れんばかりの色香が滲んでしまうところは、やはり彼女が彼女たる由縁であったが。

ドレスは豊富な胸のすぐ下で絞られ、大きく膨らんだ腹を絞め付けぬようになっていた。

見るからに重そうな腹を、しかしハイデマリーが気にした様子もなく振り返り、さっさと着替えようとするので、傍らで剣を磨いていたギルベルトは慌てて止めに入った。

「待ってくれ。そのままでも十分きれいだ。髪型は完璧だし、君は何を着ても美しい」

「本当？ 本当に？ 一目見ただけで、未来永劫わたくしの今のこの姿が脳裏に焼き付けられるくらいに、きれい？」

「ああ、きれいだ」

十五年越しに手にした妻に骨抜きてぶのギルベルトは、銜てぶもなく頷く。
だから座っていてくれ、とハイデマリーの背に手を掛け、そつとソファに導いた。

「んもう、ギルったら。妊娠は病ではないと何度言ったらわかるの？ 少しは動かなくては、太ってしまうわ」

「たとえ太っても君はきれいだ。エルマも、彼女が連れてくるといふ友人や上司たちも、きつと同意見だろう。だから、少し落ち着いてくれ」

すぐに座れ、横になれと勧めてくる夫に、ハイデマリーは溜息を落とした。

周囲のこうした態度は、彼女がとうとう腹の膨らみを隠しきれなくなり、妊娠を告白した時から、ずっと続いていた。

「んもう、みんな口を開けば休め、休めって。自分たちは日々お祭り騒ぎをしているくせに、ずるいわ」

「祭りなどしてないだろう」
「生まれてくるこの子のために、世界樹を伐採して揺りかごを作ったり、アーティファクト聖遺物を使ってお守りを作ったり、一国家分の年間予算を投資信託しようとしたりすることを、巷ではお祭り騒ぎと言つものよ」

ハイデマリーがげんなりと髪を掻き上げながら告げると、ギルベルトは不思議そうに首を傾げた。

「そうか。エルマの時はもつと盛大だったから、気付かなかった。むしろ、二人目ともなると、我々もある種の慣れが生じてしまった、盛り上がりがないなと日々自省していたくらいだ」

「……まあたしかに、エルマの時はもつと凄まじかったわね」

ハイデマリーも少し苦笑気味に認める。

だが、「それはそれとして」と、逸れかけてしまった話を元に戻した。

「今日は、わたくしにとつて久々のイベントなのよ。あの子がお友達や、上司を連れてくるなんて、初めてのこともだもの。あの子がわたくしたちのことで虐められたりしないよう、最高の印象を与えなくては」

毎秒なにかしらの無双をしでかしているエルマを、それも監獄の「家族」を理由に虐める輩がいたとしたら、それは随分な猛者である。

が、ハイデマリーはまるで普通の母親そのもののように、娘の周囲に好印象を与えるべく気合いを入れているのであった。

「わたくしだけではないわ。エルマから、里帰りすると手紙が届いてからというもの、監獄中がこの子のことすら忘れて、そわそわし通しではないの」

ついでに言えば、気合いが入っているのは、もちろんハイデマリーだけではなかったのである。

彼女が指摘すると、ギルベルトも「まあ、たしかに」と口元を歪める。

そうして、彼らは、愛娘からの手紙が届いた日のことを思い出しはじめた。

それは三日前のことだ。

大罪人と呼ばれる者たちは、ハイデマリーの体調に最大限留意しつつ、その日も最上階の一室で寛いでいた。

第二子誕生を前に、それぞれ最高級の産着をデザインしたり、人間工学に基づくバウンサーを開発したりと、有意義な時間を過ごしているが、ハイデマリーが言うほどには、お祭り騒ぎをしているわけではない。と彼らは思っていた。

やはり第一子であるエルマの時の方が、彼らも肩に力が入っていたのだ。

「もう今月には生まれるわねエ……」

「どんな子でしょうね」

「ま、どんな子でも可愛いだろうねえ」

「だな」

経験は余裕を生む。

既に一通りの育児をこなした彼らにとって、第二子は「子」というよりは、「孫」に近い。

どんな子でも可愛い。なんでも大丈夫。オールオッケー。

彼らはもはや悟りの域にいた。

圧倒的全肯定は、少しだけ放置にも似ている。

十五年前は全員総出で育児書を世界中から取り寄せていたのに対し、今回は雑用係クレメンに「図書室から関連図書を持ってきておいて」と投げてしまえるくらいには、彼らも落ち着いていた。

クレメンスが苛つきながら大量の図書を運ぶ傍らで、彼らはのんびりとハーブティーを啜る。

ギルベルトが封筒を持って現れたのは、その時だった。

「見る。エルマから手紙が届いたぞ」

「なんですって!?!」

「えっ、初めてだ!」

一同は喜色を浮かべ、ギルベルトの手元を覗き込む。

愛しい少女の筆跡で、「ちょうど監獄に向かう用事ができたので、友人と上司、そのご家族を連れて帰郷いたします」と書かれたそれを読み、大罪人たちはカツと目を見開いた。

彼らが手塩にかけて育てた少女が、この監獄に帰ってくる。

それも、シャバで知り合った人間を連れて。

これは退屈と言う名の魔物を飼っている彼らにとって、まごころかなき大イベントだ。

一同は、わくわくと心を躍らせて続きを読んだ。

「ふうん。『国家転覆を凶った女性とその息子が、裁判を迎えるまでの世話役として派遣されることになった』ねえ。うまい建前を用意したわね。さすがあたしのエルマ」

「『フェリクス王の母テレジアは、不貞を働いただけでなく、不義の子を王の座に据え置き、国家転覆を目論んだとの罪状で起訴されている』、ですか。やれやれ、国家転覆などと言って、単なる不倫騒動ではありませんか」

「しけた、罪状だな」

ただし、王の実子ではない人物が王位を継承していたという大スキャンダルは、彼らにとつてとくに注目に値しないようであったが、価値観の偏った彼らは、巷を騒がせている王位篡奪事件の概要についてはさらりと読み流し、それよりも、ある一文に注目した。

我が家に人をお招きするのは初めてのことで、どうか楽しい時間を過ごしていただきたいと思っております。

ついでに家族の皆さま、おもてなしにご協力いただけますでしょうか。

「もてなしに……」

「協力？」

外部の人間を丁寧に扱うという発想は彼らにはなかったが、大切な少女からのお願いというのは、彼らの心を大いに震わせた。

とそこに、クレメンスがふうふう言いながら、大量の書物とともにやって来た。

「おい、持ってきたぞ。まったく、年長者にこんな労働をさせおつて」

開口一番愚痴を唱え始めた彼は、しかし、途中で困惑したように口を噤む。

なぜなら、普段は薄笑いを浮かべるか、つまらなそうな顔でゲームにばかり興じていたはずの大罪人たちが、皆やけに、真剣な表情を浮かべていたからだ。

「……何事だ？」

「【虚飾】ちゃん」

くる、と振り返ったリーゼルは、クレメンスが鼻の高さまで積み持った書物を見て、怪訝そうに首を傾げる。

「なにしてんの？」

「いや、育児書を集めて来いと、おまえらが」

「あ、ごめん、それもういいわ」

「は？」

遮られたクレメンスは、続く言葉に絶句した。

「図書室から、おもてなし関連の書物を持ってきて」

リーゼルは悪びれもせず言い放った。

「全部ね」

「……………は？」

なにがどうして、そうなったのか。

が、リーゼルだけでなく、他の大罪人たちもぐるぐると肩を回しはじめた。

「……………よし。メインドイツシュを、ひと狩り、行くか」

「おとぎ話によれば、土産には不老長寿薬のつづらを渡すつてのが普通なんだっけ。いや、加齢促進剤？ 開発を急がなきゃ」

「客人をもてなすための特別予算が必要ですね。一国潰しますか」

「獄のほかの罪人たちも会いたがるだろうから、綿密なタイムテーブルを組まねばな……………」

それぞれ、拳を鳴らしたり、白衣をばさつと翻したり、目を伏せながら薄く笑んだり、剣を背負ったりと、やけに格好よく居室を去って行く。

後には、ぼかんとしたままのクレメンスと、無言で溜息を落とす

ハイデマリーだけが残った。

「……な、なんなのだ、あれは」

「フェリクス王陛下とお母君の王太后陛下が投獄されそうだから、その機に乗じてエルマが帰ってくるのですって」

「はっ？」

一文に込められた情報量の、あまりの多さに、クレメンスが顔を強張らせる。

それはつまりどういうことなのか、と彼が現状を理解するよりも早く、ハイデマリーは、何かを振り切るようにして微笑んだ。

「つまり あなたはとりあえず、おもてなしに関連する書物を持ってくればよい、ということよ」

「……と、彼が持ってきてくれた一押しが、これのわけだけど。ああ、もう一度復習しておこうかしら」

ハイデマリーは真剣な表情で、サイドテーブルに置かれた書物を取り上げる。

その表紙には、「初めてのホームパーティー ～おもてなしのアイデア100～」の文字があった。

なんでも、実践的なおもてなし技術をコンパクトにまとめ、付録に動線シミュレーション用の指人形や、一般的な屋敷の間取り図まで付けた、大層人気の本なのだという。

ハイデマリーは神妙な表情で、姫君を象った指人形を動かし、今日の動線を確認しだした。

「エルマたちは正午を目指してやって来るから、わたくしたちはその間、各自の居室で待機して……夕食時に顔合わせをするから、それまではなるべく遭遇しないよう……待って、これだと食料庫から移動した【暴食】^{イサーク}が鉢合わせしてしまうかしら？」

騎士に王、老いた女王に侍女。それから戦士。

それぞれの人形を実際の人物に見立て、こまこまと操る姿は、真剣そのものだ。

「帰郷の知らせ以降、エルマとはそれなりに打ち合わせを重ねたつもりだけれど……やはり伝書鳩を使つてのやり取りでは限界があるわね。こういう微細な部分が決めきれないもの」

「それでも、伝書鳩が百羽疲弊しきるくらいには打合せしただろう。俺たちは最善を尽くしたさ。頼むから君は、自分を追い込むことななくゆつたりとしていてくれ」

ギルベルトが懇願すると、ハイデマリーは拗ねたように眉を寄せた。

「んもう、気にしすぎよ。今日のダイナーだつて、わたくしも最後まで同席したかったわ。……ねえ、やつぱりだめかしら？」

「だめだ。悪いが、俺と腹の子のために早く切り上げてくれ。盛り上がったら夜中まで騒ぐだろうし、【暴食】がやけに肩を回しているから、あの調子では卓上でドラゴン解体もしかねん。危険だし、それに君は、目の前に酒が振舞われると、つい飲みたくなると言っていただろう」

「ここ最近、一滴も飲んでいなくつてよ」

「それでもだ」

ハイデマリーが甘えた声を出しても、ギルベルトは譲らない。

数往復交渉を続けたが、愛情と父性を溢れさせたギルベルトは頑として意見を変えないので、やがてハイデマリーはひらりと両手を上げた。

「わかったわ、もう。皆が一番楽しんでいる瞬間に、こっそり退散させてもらおうよ」

「……すまん。心配で仕方ないんだ」

申し訳なさそうに眉を下げた夫に、しかし彼女は慰めるように微笑んだ。

「もういいわ。そのほうが、お互い良い印象を抱いたままでいられるかもしれないもの」

そうして、彼女はふと顔を上げ、窓の外を見つめる。

鬱蒼と茂った森の向こう、フレンツェル領周辺には、唐突な暗雲が集まりはじめていた。

ホルストが薬剤を打ち上げ、雨雲を刺激して生成したものだ。

着々と進む「もてなし」の準備を見て、ハイデマリーはご機嫌な猫のように目を細めた。

「さあ、この限られた時間を、楽しく過ごさなくてはね。最高のおもてなしができるよう　張り切っていきましょう」

フレンツェルの上空で最初の雷が落ちたと同時に、監獄の空に、大輪の花火が打ち上がった。

5・「普通」の里帰り(5)(後書き)

以降は隔日投稿とさせていただきます。

次話「『普通』のデイナー(1)」は、1月31日(木)の投稿となりますのでよろしくお願いいたします…!!

6・「普通」のディナー（1）

「……疲れた……」

広々とした空間に、苦悩の滲む眩きが漏れた。

偶然にも、三つの声がぴたりと重なり、テーブルに腰掛けて俯いていた三人はふと顔を上げる。

ルーカスが、イレーネが、そしてテレジアが、死んだ魚のような目をして互いを見合う格好になった。

「……申し訳ございません。侍女の分際で、つい独り言が……」

「……いや、イレーネ。皆まで言うな。気持ちはわかる」

「……ふん」

イレーネが詫びれば、ルーカスはげんなりとした口調でそれを遮る。

侍女のことを虫けら程度にしか思っていないと評判のテレジアですら、鼻を鳴らしたきり、何を言うでもなかった。

黙りがちな彼らを取り囲むのは、壁中を覆う巨大な書架と、その合間を縫って完璧に配置された美術品。

今ルーカスたちは、監獄内で「休憩室リラックス」と呼ばれる場所にいた。そこで、夕食まで時間を潰しているのである。

というのも、エルマの「『家族』がこの来客を大変歓迎しており、
「ささやかな夕食ディナーでもてなしたいので」とのことだからだ。

なお、エルマは調理を手伝うべく、すでに休憩室を去った後だっ

た。

「みんな、真面目だねえ。いちいち突っ込むから心身が疲弊するのさ。僕みたいにもっと、すべてを受け入れる姿勢で日々を生きないと」

そんな中、フェリクスだけがのほほんと茶菓子を頬張っている。その泰然とした佇まいに、ルーカスは思わず唇の端を引き攣らせた。

「……よく、この環境で平然と菓子を頬張れますね」

「え？ 大量の蔵書と美術品に囲まれ、微かに漂う音楽を聴きながら、夕食までの待ち時間を過ごすことに、なんの問題が？ どれも素晴らしいクオリティじゃない」

「素晴らしすぎるところが問題なのでしょう！ あなたの辞書に常識の文字はないのか！」

ルーカスがくわつと吠える。するとたちまち、

「辞書をお探しでしたら、こちらに」

どこからともなく、すつと辞書を抱えた男たちが現れたので、ルーカスは慌てて手を振った。

「いや、違う。今のは『検索』ではない。頼むから放っておいてくれ」

「御意」

辞書を掲げていた男たちは、速やかに引っ込んでゆく。

彼らはこの休憩室の書架を預かる存在で、シャバで言うところの

「司書」に相当する役割を担うらしい。

だが、読みたい本の題名の一部や、作者の名前を呟くだけで、速やかに該当書物の該当ページを広げて持ってくる彼らは、もはや「自動検索機」とでも呼ぶべき存在だった。

持ち場に戻った彼らが、待機モードに切り替わって俯くのを眺めていたイレーネは、

「この監獄には……異常でないものはないの……？」

と、顔を引き攣らせる。

それから、怯えたように、この異様なまでに立派な休憩室を見回した。

「ここって……監獄ですよ？　なのに、この王宮図書室をも上回る蔵書量はなんですか？　というかあの右の壁の一角を占めるのは、アウレリアですら入手しにくい薔薇のレベルではございませんの？　なぜそんなものまで網羅的にラインナップされてますの？」

「そうなのか……？　ここからでは遠すぎて題名すら読めんが」

「こちとらプロです。背表紙の色だけでわかるのです」

イレーネはそこだけはきっぱりと言い切り、それから恐怖を堪えるように、自身の体を抱きしめた。

「だいたい、監獄で『ディナー』ってどういうことですか？　しかも看守ではなく、囚人が用意するんですか？　浮き浮きと去って行ったエルマの姿は、一体なんのフラグですか？」

「突っ込む余力は取っておいたほうが身のためだぞ、イレーネ。きつとこの後も、何かしら衝撃の事態が待ち受けているのだから」

「……」
「……そうですわね」

天井を見上げたままぼんやりと指摘するルーカスに、イレーネも疲れたように頷く。

実際のところ、エルマによる獄内ツアーから今に至るまでの間、彼らは怒涛のように押し寄せる突っ込みどころに、もみくちゃにされていったようなものである。

たとえば、監獄内に踏み入ったルーカスが、「旅の疲れをお拭いください」と渡されたタオルを受け取ってみれば、

「な、なんだこのタオル、指がどこまでも沈んでいく……!?!」

「裏庭で栽培した木綿から作ったコットンタオルです。超長綿種をさらに品種改良したことで、カシミヤをも上回る繊維の長さを実現。獄内では『木綿、その先へ』の名で親しまれております」

「裏庭で木綿って採れるのか!?!」

タオル一つで監獄の農業レベルの高さを突きつけられ。

廊下になにげなく掛けられた絵画をテレジアが見ればたちまち、

「……!?! 王宮の最奥にあるはずの『微笑む少女』が、なぜここにある……? 精巧なレプリカか……?」

「あ、いえ、こちらが本物で、王宮にあるのが贋作です。ただ、金髪の色味をくすませて描いた贋作の方が、結果的に芸術として優れてしまって、我々もその点は反省しており」

「待たぬか、『我々も反省』とはどういうことだ!?!」

王宮所蔵の最高級絵画が、監獄作の贋作である可能性を示唆され。

ほかにも、

「廊下の床が動いているように思うんだが……!?!?」
「ああ、殿下。それは『動く歩道』ですね。とかく獄内が広いので、
重宝しております」

だとか、

「あれ？ 今、窓の外を魔鳥が横切って行かなかったー？」
「ああ、フェリクス陛下。『鶏舎』で数頭を飼っているのです。良
質な卵を産むほか、くすぐってやると
火も吐いてくれて、暖を取るにもうってつけなのですよ」

だとか、

「なんかこのトイレ、勝手に便座が持ち上がったんですけどおおお
おお！」
「ああ、イレエネ。本監獄では、全館で温水洗浄便座を採用してお
りまして。便利ですよ、オート開閉機能」

だとか、とんでもない仕様が次々と、かつ、さらっと披露されて
いったのである。

一つに対して十分なツッコミをしておおせる前に、さらに三つくら
いのありえない環境が披露される。

まさに息も継がせぬ怒涛の異常事態に、フェリクスを除く一同は、
ツアー開始五分でぐったりとしはじめた。

濃い。

濃ゆすぎる。

少しくらい休憩が欲しい。

だいたい、突っ込み要員の数に対して、異常事態の手数が多すぎるのだ。

廊下を案内されているだけで、ルーカスは早くも遠い目つきになっってしまう。

結果、全く同じ動作をしているテレジアの姿が視界に入った。

彼女は冒頭の贗作絵画で度肝を抜かれたらしく、以降ペースを崩されたのか、ツツコミどころに遭遇するたびにライフを削られていた。

ルーカスからすれば、彼女は不貞の疑惑を掛けられた被告人であるうえ、かつて母や自分に対して、毒剣や虫を仕掛けてきた人物である。

精神的距離は限りなく遠くあつてしかるべきだった。が、この異様な環境下、一緒にげっそりしている姿を見ると、つい連帯感を抱きかけてしまう。

ルーカスは危機感を覚えた。

時に敵味方の区分すらなくしてしまう、この監獄のぶっ飛び具合ときたら。

ルーカスの密かな懊悩をよそに、フェリクスだけがのほほんとしていたが いや、そんな彼も、エルマによってある人物に引き合わされたときには、さすがに目を見開いていた。

まずは彼らにご挨拶を、と連れて行かれた看守部屋には、一人の壮年男性が立っていた。

「ご紹介申し上げます。彼がこのヴァルツァー監獄を預かる看守、

アントン司祭でいらっしやいます」

「ようこそおいでくださいました。いかなる疑惑を向けられようと、厳肅なる裁きの槌が降りるその瞬間まで、あなた様方は皆、生を寿ことほがれし愛し子。この獄内で、できる限りのもてなしをいたしましよ
う」

「……え、アントン？ 昔クレメンスが手駒として送り込んだ、あの？ なんかだいたいぶキャラ変わってない？」

そう。

クレメンスが監獄を操るために派遣した、権力と贅肉に溺れた色ぼけ司祭は、今や全身の肉を削ぎ落し、厳しい修行を経た信徒のよ
うな佇まいとなっていたのである。

「かつて私は、色欲に溺れた、ただの飛べない豚でした……。です
が、愚かにも至高の存在に手を掛けんとしたその罪を契機に、真の
信仰に目覚めたのです。今の私は、至高の七人の忠実なる僕しもへ……。
相変わらず飛べない愚鈍な豚ではあれど、この豚めは、真実のなん
たるかを知っております」

ただし彼が信仰を捧げる神の名は、アウル神ではなく、「至高の
七人」と言っらしい。

「アントン司祭は、かつて私の母を手籠めにしようとしたことがあ
ったそうなのですが、その時、父をはじめとする『家族』に諭され、
生きる姿勢を改めたのだそうです。その際、豚呼ばわりされたこと
で多方向に才能を開花させ、今では獄の運営に何くれとなく力を貸
してくれる、頼もしい存在です」

「過分なお言葉、汗顔の至りでございます……」

エルマが淡々と補足すると、アントンはアンニユイな表情で、も

の静かに謙遜する。

もしかしてそれって、洗脳調教って言うのでは。

フェリクスを除く三人は、無言でアントンから一歩、距離を取った。

と、そこに、

「おい、アントン。先週おまえの上げた監獄報告書だが、【怠惰】にチェックさせたところ、拷問の描写が紋切り型で、いま一つ凄惨さが伝わらないと」

ノックもなしに、不機嫌そうな老年男性が踏み入ってくる。

その顔を見て、フェリクスは「あ」と声を上げた。

「クレメンスだ」

7・「普通」のディナー（2）

「クレメンスだ」

「……………」

名を呼ばれ、相手　アントンに報告書の書き直しを伝えに来たクレメンスは、ぎよっと一同に向き直る。

それから、フェリクスとテレジアを順に眺め、ふんと皮肉気な笑みを浮かべた。

「これはこれは、王太后陛下にフェリクス陛下。いや、『元』とお呼びするべきですか？　国民を欺いた大罪のお噂はかねがね再びお会いできて光栄ですよ」

言葉には、苛烈とも言える毒が滲む。

鋭い眼光には、宰相時代に装っていた穏やかさの欠片も残っていないが、

「いいね、クレメンス。実にいいよ」

「候のそのブレなさは、尊敬に値すると俺も思いますよ」

「ロットナー元侯爵閣下……………よくぞこの監獄で、かつての悪役キャラを崩壊させずにここまで来ましたね……………」

「……………ほっとしたぞ」

フェリクスどころか、テレジアまで含む面々から一斉に真顔で頷かれ、クレメンスは嫌そうな表情になった。

「……………監獄送りにした政敵が、五体満足で生き生き暮らしている姿

を目の当たりにして、出てくる感想はそれでよいのか……？」

「ふふ、常識を問われちゃったー。やっぱクレメンスはこうでなきや。心身ともに健全でよかったねえ」

腕をもちでよし、といった手紙まで添えた本人が、しれつと言いつ切るのを見て、クレメンスは顔を引き攣らせる。

が、クレメンスには悪いが、そんな真つ当なりアクションを維持する彼の存在は、監獄の異常さに食傷を起こしていたルーカスたちにとって、一服の清涼剤でしかなかった。

おかげで、ルーカスたちは気絶することもなく、エルマによる監獄ツアーを最後まで終え、もちろんその後も衝撃の連続だった、こうして休憩室で一服しているという次第なのである。

「いやあ、面白かったねえ。エルマがあんな仕上がりになるのも納得の環境だよなー」

ぐったりとした一同をよそに、フェリクスはのほほんと書物のページをめくりながら言う。

そのあまりに泰然とした様子に、ルーカスは唇の端をゆがめた。

「……義兄上の、その動じない心の持ちようには頭が下がりますよ」

「そりゃだって、想定範囲内だからねえ」

「は？」

軽く目を見張れば、相手は変わらずページに視線を落としたまま、なんでもないことのように告げた。

「エルマが『家族』と呼ぶ大罪人に、この監獄は支配されている。

彼らは皆エルマのことを溺愛していて、彼女のために、それぞれの

能力を生かしてこの監獄を快適な城に整えたそうだよ。傾国の娼婦に、神殺しの英雄、一国を破綻させた詐欺師に、聖獣を殲滅した狂戦士、一国の貴族令嬢を丸ごと洗脳した誘拐犯に、脳を開き肉人形すら作り出せると噂の狂博士。それから」

そこで、フェリクスは頬杖を突いたまま、くすりと笑う。

「暫定、魔族の娘 エルマ。合わせて七人。それが、『至高の七人』と呼ばれる大罪人にして、ヴァルツァーという王国を支配する者の正体さ。一人でも厄介な彼らが、何人も寄り集まって本気を出したなら、そりゃあこんな魔境ができあがってもおかしくないさ」
「……………」

ルーカスは絶句する。

あっさりと披露された監獄の真実。

その内容そのものにも驚いたし、まさか、このへらへらと笑ってばかりの異母兄が、そこまでの情報を掴んでいるとは思わなかったのだ。

「ふふ、どうしたの、ハトが豆鉄砲食らったような顔をして。エルマ自身が『至高の七人』の一人だっていうのがショックだった？ それとも、お歴々の華々しい肩書にびつくりした？」

「いえ、……いつの間に監獄の内実をそこまで把握し、……かつ、なぜ今まで放置していたのかと」

動揺しながら答えると、フェリクスは呆れたように肩を竦めた。

「君がとろすぎるんだよ。エルマの育った環境に興味はあるけど、踏み込むのは憚られるからしませんって？ 馬鹿だねえ、そこは即

調査一択でしょ。放置したのは 彼らの行動や能力が異常だと理解はしていたけど、彼らの興味がエルマの養育にしかないこともまた理解していたから。牙を剥かない猛獣なら、わざわざ駆除する必要はないでしょ」

むしろ、彼らが手塩にかけて育てたエルマを、フェリクスは戦力として搾取しているのだ。

「ここに孤児でも一個隊分放り込めば、世界最強の軍ができるかなあ」

あはは、と笑うフェリクスは、やはり人道的に何か欠けている。だが、その情報収集能力や、国の利益のためならどこまでも冷酷になれるその在り方は、やはり王なのだ。

ルーカスは、口を引き結ぶと、ややあつてから問うた。

「……義兄上は、なぜあの軽薄なエルヴィンに、してやられたままなのです。はつきり言って、彼の主張など、あなたが本気を出せば力技でねじ伏せられる。そうでしょう？ それをなぜしないのですか？」

「うーん」

フェリクスは、不意に飽きてしまったように、ぱたりと本を閉じた。

「なんでだろうねえ。物証を押さえられて手も足も出ないから？ どう思われます、王太后陛下？」

彼はそこで、ずっと沈黙を守っていたテレジアに向き直った。

よそよそしい口調で問えば、相手もまた、視線すら返さずに無言を貫く。

しん、と急に重苦しくなった休憩室の空気に、ルーカスは眉を顰めた。

「義兄上。なんでもすぐに茶化して誤魔化すのはおやめください。俺はこの事態に納得してないですし、ついでに言えば、エルマをこれ以上搾取するなと申し出た件も、話が着いたわけではまったく」

「君ってさあ」

ところが、フェリクスは途中で遮る。

彼は相変わらず、にこやかに続けた。

「僕の思っていた以上に面倒見がいいというか……馬鹿だよ。なぜ反撃しない、とか、エルマをこれ以上搾取するなとか……僕が王であり続けるって、頑なに信じてるんだ？」

だが、その緑色の瞳は、まるで笑っていない。

侮蔑、と呼んでも差し支えない色が、そこには浮かんでいた。

「それは」

「もう少し、身の振り方を考えた方がいいんじゃない？ どうするのさ、王位剥奪どころか、処刑まで見込まれる僕たちに、のこのこ付いて来ちゃって。監視役なんてしょせん建前。拘留期間中に僕たちには便宜を図った、とかなんとか難癖を付けて、エルヴィンは君も処分するつもりだよ。まさか、そんなこともわからない？」

フェリクスは曲げた人差し指の関節で、こん、とテーブルを叩く。

押し黙る異母弟に対し、いつもと変わらぬ調子で話し続けた。

「とろいんだよ。エルマの正体とか、僕の素性とかさあ。少し考えればわかるだろうに、丁寧な解説を、ただ口を開けて待ってるなんて」

それは、痛烈な批判だ。

フェリクスはいつだって、相手を苛立たせる物言いをする。しかし、これだけ明確な攻撃性を滲ませてきたのは初めてだ。

あまりの毒々しい発言に、傍で聞いていたイレーネは首を竦める。だが、

「ええ、そうですね」

ルーカスの返答は冷静だった。

「俺は馬鹿なので、本人の口から説明されないと、どうしていいか判断できないのです」

真つすぐ異母兄を見据える視線には、愚かさよりもむしろ、潔さと意志が滲む。

「身の振り方？ 決めませんよ。あなたの口から、ちゃんと事情と理由を説明してもらうまではね。なにせ 馬鹿なので」

きっぱりと言い切ると、フェリクスはほんの少しだけ目を見開いた。

だが、それもすぐ剣呑に細めてしまう。

「ふうん」

再びなにかを言おうとしたようだが、しかし、それは途中で掻き消えてしまった。

なぜならば、

どん……っ！

廊下の向こうから、監獄全体を揺るがすような爆発音が聞こえたからである。

「きゃああっ！」

「……………！？」

「なんだ……………！？」

一同はぱつと顔を扉に向ける。

ちょうどそのタイミングを計ったかのように、休憩室にやってきた者があった。

「失礼いたします」

エルマである。

彼女は着替えたらしく、王宮お仕着せのメイド服ではなく、シンブルな　けれど明らかに上質とわかるドレスを身にまもっていた。

眼鏡も外し、地味な化粧も落とした彼女は、どこからどう見ても、最上級の美少女だ。

久々にドレスアップした姿の、その破壊力に、一同はそれまでの険悪な空気や、爆音についても忘れてしまう。

が、エルマの次の言葉で、乱暴に現実に戻された。

「食事の準備が整いましたので、ダイニングへのご案内いたします。今夜は星がきれいですね。吹き抜けを用意しましたので、星見をしながらのディナーとしゃれこみましょう」

「……………」

「……………吹き抜けを」

「『用意』しました……………」

先ほどの爆発音って、まさか。

顔を強張らせる一同に、エルマは嬉しそうに微笑む。

「四季折々の自然を愛でながら、食事を堪能する。それが、普通のおもてなしだと教本にありましたので。皆さまにはありきたりな趣向となってしまうかもしれず、恐縮ですが、楽しんでいただけたら幸いです。さ、どうぞ」

初っ端からこの暴投。

どう考えても、ろくな展開が待っていないやつだ。

その場で固まる彼らをよそに、今、監獄のディナータイムが始まるうとしていた。

8・「普通」のダイナー（3）

ここに到着してから、自分たちはもう何度息を呑んだことだろう。フェリクスを除く一同は眼前の光景を眺めながら、そんなことを思った。

獄内のダイニングである。

いや、獄内の一室のはずの空間である。

しかしそこは、曲がりなりにも王侯貴族として育った彼らも知らぬ、突き抜けた贅沢さが溢れていた。

まず頭上を覆うのは、こぼれんばかりの星空。

青みがかつた夜の空で、乳白色の星々が、柔らかく光を放っている。

そこから、夜空に溶け込むようにして伸びる壁。ここには、希代の芸術家作と言われてもおかしくない、完璧な美しさを誇るステンドグラスが嵌め込まれ、ルーカスたちの元にあえかな光を届けていた。

壁の下部には、星明かりを邪魔しない、けれど不思議と部屋を暗く感じさせない大量の燭台。

たしかに炎のように揺れるのに、時折一斉にふつと色を変えるその照明の正体が、彼らにはさっぱりわからなかった。

磨き抜かれた床に、選び抜かれた調度品。

耳を澄ませばそつと聴こえる、穏やかな音楽。

そしてテーブルには、王族でも食べたことのない、豪華絢爛な料理の数々。

「さあ、どうぞ席にお掛けください」

ついでに、すぐ側でアテンドしてくれるエルマはといえば、メイド服や地味なメイクを脱ぎ捨て、蛹から抜け出た蝶のような美しさだ。

もつどちらの方向を見て感動してよいのかわからず、一同はきよるきよると視線を彷徨わせてしまった。

「ようこそ、ヴァルツアーへ」

そして、こちらの入場に合わせて席を立ち上がった人々を視界に入れて、性懲りも無く息を呑む。

テーブルの下座側には、六人の男女が立っていた。

「歓迎、する。俺は、イザークだ」

特徴的なぶつ切れの口調で告げたのは、厳しい顔つきの、熊のごとき大男。

大剣を背負った姿には尋常ならざる凄みがあり、一同は無意識に全身を強張らせた。

「ほら、【暴食】^{イザーク}の顔が怖すぎて、みんなビビってるじゃないか。

ああ、僕はホルスト。いつも『妹』がお世話になってるようで。僕たちは、心からあなたたちをもてなしたいだけなので、どうか肩の力を抜いてよ」

砕けた口調で告げたのは、なぜか白衣をまとった青年。
気さくで好印象にも思えるが、王族相手に「肩の力を抜いてよ」
などと言いつつ囚人というのは、よくよく考えれば異常だ。

「モーガンと申します。皆さまは、私どもの『娘』の、大切なお客様。シャバと離れて久しいぶん、行き届かぬ点があるかもしれませんが、心ばかりのもてなしを楽しんでいただけますと幸いです」

次いで丁寧に言うのは、物腰柔らかな壮年の男性。
彼の発言によって、場の雰囲気は少々緩む。

そうか、俗世と隔絶されていた彼らなのだから、浮世離れた空気があっても当然なのかもしれない。

「あたしはリーゼル。お会いできて嬉しいわ。エルマがお世話になっている方々がいらっしやると聞いて、この日が来るのを本当に楽しみにしていたのだから」

その次、この場の女主人といった様子で微笑むのは、しかしどうやら声の低さから男性のようだ。

髪を伸ばし、化粧までした麗しい姿に、一同は一瞬性別を捉え損ねた。

「エルマの父、ギルベルトだ。あなた方を取り巻く事情も様々あるだろうが、今宵我々はあなた方を、ただ娘の客としてもてなしたいと思っている。どうか楽しんでほしい」

真っ直ぐこちらを見て告げるのは、精悍な男性。実直そうな顔つきや、堂々とした立ち姿からは、囚人というよりも騎士のような雰

困気がにじむ。

彼は、引き締まった顔にかすかな笑みを浮かべると、最後の人物の背に、自然な手付きで腕を回した。

「エルマの母、ハイデマリーと申します。歓迎しますわ。皆さまどうぞ、お掛けになって」

手を添えられた女性は、大きく膨らんだ腹をそつと撫でながら、再度促す。

まるで鈴を鳴らすような美しい声と、麗しい相貌に、一同は思わず目を見開いた。

完璧な左右対称を誇る美貌は、間違いなくエルマと似ている。

ただし、エルマを咲き初めその可憐な薔薇に例えるならば、こちらは爛熟し、大きく咲きこぼれる百合のようだ。

詰襟のドレスをまとい、髪も清楚に結わえてあるというのに、ボタンのあわいからわずかに覗く肌や、はらりと一筋ほつれた髪からは、むしろ噎せ返るような色香が滲む。

相手は一介の娼婦、それも凶人。

だと言うのに、ルーデンの王侯貴族たちは気圧される何かを感じながら、ぎこちなく腰を下ろしたのである。

国母のテレジアや国王のフェリクス、女慣れしたルーカスですらこれなのだから、男爵家の娘に過ぎぬイレーネは、もはや昇天寸前である。

彼女はテーブルの下で拳を握り合わせて、ばくばく言う心臓をなんとかして押さえ込んだ。

(な……っ、なんて……っ、なんて……っ)

なんて鮮烈な存在感の人々なのか。

いや、イレーネとて、彼らと会う前から心の準備はしていたのだ。なにしろ彼らは犯罪者であり、囚人。

いくら親友の「家族」とは言っても、見るだけで失神しそうな凶悪な面構えをしているかもしれないし、はたまた見るに堪えない哀れめいた姿をしているのかもしれない。

それでも、大好きなエルマの「家族」だ。

どちらの場合でも、恐怖や嫌悪を外には出すまいと、こっそりシミュレーションまでしていたというのに　はつきり言って、これは予想外だった。

(イザークさんこそど迫力な佇まいだけど、ホルストさんは知的なお兄さんって感じだし、モーガンさんは執事の鑑みたいな上品さだし……)

リーゼルの中性的な言動には驚いたが、その姿は歌劇団の主役のような、独特な華があるし、ギルベルトもまた、磨き抜かれた心身が男の色気をまとうている。

そしてハイデマリーに至っては、まさに傾国。

色香がありながらもけして下品ではなく、つい目で追いかけてしまふ艶がある。

(総じて皆さま魅力的っていうか……キャラが濃い！)

イレーネは許されるならば、この場で胸を押さえて蹲りたかった。

ハイデマリーとエルマが突き抜けているため、美醜の偏差値が狂い気味だが、この大罪人たちは総じて見目も麗しい。

大男のイザークですら、筋骨隆々とした男性美に溢れている。

多方向に魅力的な面々が、一様に好意的な表情を浮かべ、こちらをもてなそうとしている状況に、イレーネは一瞬、自分が今どこにいるのかを忘れかけた。

(こんなに素敵なたちが、好意的に接してくれるのだから……この監獄での日々、思ったよりなんとかなりそう)

同時に彼女は、こっそり胸を撫でおろしもした。

監獄が実家であるエルマの手前、周囲に告げはしなかったが、イレーネはこの監獄行きに巻き込まれたことで、かなり動揺していたのである。

ただでさえ、「この世の地獄」と噂のヴァルツァー監獄。

衛生環境は劣悪だろうし、虐待や拷問も横行していると聞く。

犯罪に手を染めた極悪人たちに囲まれて、強気なイレーネもさすがに、快適な生活が送れるとは思えなかった。

しかも、世話する相手は「血塗れテレジア」。

下手を打てば、彼女からの折檻で命を落とす恐れすらある。いくら親友のエルマが一緒とはいえ、いったいどうして、この監獄行きに自ら名乗りを上げたのか、イレーネにはさっぱりわからなかった。まあ、それが洗脳というものなのだが。

しかし蓋を開けてみれば、監獄はいつそ王宮よりも清潔だし、よくわからないテクノロジーに満ち溢れている。

囚人の皆さまも、ちょっとキャラが立ちすぎている感はあるが、

普通に娘思いの人物のようだ。

「殿下。エルマのご家族って、皆さま気さくで、思ったより普通の方々なのですね」

「ああ。多少浮世離れしているが、覚悟していたほどではないな。皆、好意的だし」

隣に座るルーカスに 監獄では身分など無いということなのか、この場では侍女のイレエネも横並びでの着席を許されている。小聲で囁くと、彼も頷き返す。どうやら同じ感想を抱いたようだった。

驚くほど口当たりのよいワインで乾杯し、色とりどりの前菜を振舞われ、と、監獄の晚餐は思いのほか和やかに進んでゆく。

イザークが調理したのだという料理の数々は、実に繊細美味で、美食に慣れたテレジアでさえ、含んだ瞬間目元を綻ばせるのがわかった。

合間合間に起こる和やかな会話、軽妙なジョーク、細やかに気遣われるサーブ。

なんと快適な食事。

まるで、これから始まる監獄での日々が、穏やかなものだと思わせるような。

そう、イレエネたちが安心した、その矢先。

「では、メインディッシュを、持ってくる」

イザークがぬっと立ち上がった。

そして、彼がダイニングを離れたあたりから、雲行きがおかしく

なっっていった。

「メインディッシュとは言っても……テーブル上には、もうスペースがないわよね……？」

洋の東西を問わぬ絶品料理が並ぶ食卓を見て、イレーネが首を傾げる。

それを聞き取ったエルマは「ああ」と、なんでもないように頷いた。

「今日のメイン、鳥のグリルは、少々大きすぎるので、元々テーブルに載せる予定はないのです」

「そうなの？」

「ええ。扉もくぐれない大きさだったので、それもあつて天井を爆破したのですよね。本当はドラゴンのコンフィにする予定だったのが変わってしまった……実は、準備の際、ちょっと焦りました」

「……………は？」

少々照れたように告げるエルマに、イレーネと、横で聞いていたルーカスは顔を引き攣らせる。

どういうことだ、と問うよりも早く、

ひゅん……っ！

上方から鋭い音が響き、彼らははっと顔を上げた。

「……………！？」

彼らの頭上。

吹き抜けの、本来天井があるべきあたり。

そこには、星が散らばる夜空を背負うようにして、巨大な鳥が宙に浮かんでいた。

飛んでいるのではない。

既にこんがりと揚げられたうえで、鞭のように飛んできた針金に、全身を絡めとられている状態だ。

「な……っ」

「仕上げ焼き」

ぼっ！

イザークの太い声での呟きとともに、宙づりの鳥が一斉に炎に包まれる。

それを見上げたエルマは、にこやかにイレエネたちに説明した。

「本日のメインディッシュは、スタップド詰め物をしたフェニックスです」
「フェニックス……!?」

9・「普通」のディナー（4）

「本日のメインディッシュは、詰め物をしたフェニックスです」
「フェニックス……!?」

伝説上でしか聞いたことのない火の鳥は、確かに炎をまとっていた。食欲をそそる、香ばしい匂いとともに。

全身を駆け上がった炎が、やがてすうっと消えたそのタイミングで、絡んでいた針金が突然切れ、鳥は落下を開始する。

「ごっ……、と唸りを上げ、かなりのスピードで落ちてくるフェニックス。

このままでは、テーブル上のあらゆるものが飛散する、いや、この大きさだ、テーブルに付いている自分たちも押しつぶされる！

咄嗟に女性陣をテーブル下に押し込んだルーカスの前で、それは起こった。

とばばばばばば！

やけに歯切れのよい音が響き、次の瞬間には、

「な……………っ！」

「きれいに、取り分けられている……………!?」

各人のちょうど右手前に、サフランライスの詰められた断面も美しく、フェニックスがサーブされていたのである。

「お代わりは、こちらだ」

いつの間にか巨大な銀盆を片手に現れたイザークは、その上に載った、象ほどもあるスタツフド・フェニックスを指差す。

「客人、優先。俺たちのことは、気にせず、存分に、食べてくれ」
「もう、【暴食】のお父様ったら。そんなことを言っつて、本来出すはずだったドラゴンを一人で食べてしまったくせに」

「いや……我ながら、上手く作れた、ものだから、つい……」

拗ねた顔つきをしたエルマとの間で、なにか和やかな会話がなされているようだが、なにか「もう」でなにか「つい」なのか、ルーカスたちにはさっぱり理解できなかつた。

「皆さま、監獄名物、ドラゴンフルコースを期待されていたかもしれませんが、申し訳ございません。ですが、フェニックスも、そのほろりとした舌触りと、濃厚な味にかけては、右に出るものがございません。この辺りでは大変珍しい鳥かと存じますので、ご堪能いただければと」

「この辺りというか、全世界的に希少だろうが!？」

エルマが恐縮したように説明するのを聞き、ルーカスはつい叫んでしまう。

聖獣を Grill するという異常事態に、イレーネなど絶句してしまっていたが、今度はギルベルトがそれを見て、思わし気に眉を寄せた。

「エルマ、イザーク。お客人は戸惑っているようだ。言い訳をするよりも、もっと他にすることがあるだろう」

そのいかにも常識人然とした物言いに、ルーカスは思わず縊るようにギルベルトを見つめる。

元勇者というギルベルト。

彼であれば、少しはこの異常さを是正してくれるのだろうか。

「ぶつ切りのままでは食べにくい。こんなこともあるのかと、この前拾ったエクスカリバーの兄弟剣で、切れ味のよいナイフを鍛造しておいた。大切なお客様だ。これで召し上がってもらいなさい」
「オリハルコン製!？」

救いの手、と見せかけて容赦なく絶望の渦に叩き落とすギルベルト。

「ちなみにお近づきの印として、持ち手部分には、皆の名前を彫刻してみた。土産として持ち帰ってくれたら嬉しい。エルマを、これからもどうぞよろしく」

穏やかな笑みで物々しいナイフを手渡され、一同は心の内で叫んだ。

好意が、重すぎる。

「ちょっと、あんたたち。お客様たちは、そこに戸惑ってるんじゃないでしょ。これだから戦闘馬鹿は。ごめんなさいね、食事の席で、火を噴いたり刃物を取り出したりして」

とそこに、今度はリーゼルが嘆かわしそうに口を挟む。

のろのろと振り向いた一同に、彼は「なにもかもわかってる」といった様子でウインクを決めた。

「お近づきの印に、獣や剣を差し出すなんて、非常識もいいところよね。その点も含めて、あたしからお詫びするわ」

彼はそこで、艶やかな笑みを浮かべると、す……っ、と、卓上に小瓶を差し出した。

繊細なガラス細工に収まったそれは、どうも香水のようだ。

「特別に配合した香水バルファンよ。嗅がせれば、たいていの相手の意思を奪い、支配下に置くことができる」

「……………！？」

「エルマはなにかと至らぬ点もあるでしょう。それで相手にご迷惑をお掛けしてしまうことがあったなら、その相手を洗脳して、難を逃れてくださる？」

解決方法としてはそれでいいのか。

魔女の毒りんごよろしく差し出されたそれを、呆然と見つめてしまっていると、沈黙を守っていたハイデマリーがやれやれと溜息を吐いた。

「まったくもう。お近づきの印に、毒だなんて扱いに困るもの押し付けてどうするの。エルマをよろしく頼む、という気持ちを込めたいのなら、相手に気持ちよくなっていた方法を考えてはね」

彼女は、はらりと頬を滑ったほつれ髪を優雅に直し、上目遣いで客人を見つめた。

「ごつするのよ。エルマをどうぞよろしく。ちなみにこちらは

黄金色のお菓子ですわ」

いつの間にか並べられた大量の金塊に、一同はぎよっと目を剥いた。

「これは今、いったいどこから!？」

「ふふ、谷間ですわ」

婀娜^{あた}に微笑むハイデマリーには、悪びれたところは欠片もない。

ルーカスたちは思った。

モンスターだ。

娘のためなら兵力財力超能力、あらゆる手立てを惜しまぬ、モンスターペアレンツがここにいる。

ふとテレジアを見やれば、彼女もまた異常事態の連続に、さすがに顔を引き攣らせている。

フェリクスは相変わらず「へえ、ちゃんと純金だねえ」などと重さを確かめている中、テレジアの真つ当なりアクションは、ルーカスたちにほのかな好意を抱かせた。

「まったくもう、お母様、お父様たち。私の大切な方々をもてなそうとしてくださるのは嬉しいですが、贈収賄^{ぞうしゅうわい}のような真似はおやめください」

とそこに、困惑を含んだ声が掛かる。

エルマだ。

家族の前だからか、いつもより少しだけ幼く聞こえる口調で、彼女は申し立てた。

「よいですか。シャバでは、娘の円滑な社会生活を願って、金銀財宝や希少物を差し出すことは、犯罪の一つとして見なされるのですよ。だいたい、親馬鹿が過ぎます」

ほんのわずか、誇らしげにシャバの常識を披露する彼女は、「あのね、学校にはね、おかあさんたちは、付いて来ちゃいけないんだよ」とドヤる幼子と大差ない。

大差ないが、それでもルーカスたちはその姿に胸を打たれそうになった。

(エルマが……「普通」を説いている……！)

まじまじと見つめる先で、エルマは拗ねたように唇を尖らせた。

「だいたい、この訪問の主目的は、私の友人の紹介だけでなく、お母様のお産のお手伝いです。もっと、お母様の最近の様子だとか、お腹の子の様子について聞かせてくださいませ」

いつの間にか、国王入獄の付き添いという建前すら、軽やかに投げ捨てられている。

真つ当なようでいて真つ当でない指摘には、ホルストが応じた。

「大丈夫、僕がいるんだから。実は君を取り上げたとき、産科領域は未着手だったと痛感してね。以降いろいろなところで見聞を広めて、今ではどんなお産でも対応できる自信があるよ」

誰も知らないが、フレンツェル領でケヴィンを取り上げたのもその一環だ。

だが、エルマはそれでも心配そうな表情を浮かべた。

「どんなお産でも？ 本当に？ 出産とは予期せぬトラブルの宝庫だと、物の本で読みました。お兄様を疑うわけではありませんが、本当の本当に大丈夫ですか？」

「ああ。微弱陣痛も児頭骨盤不均衡も回旋異常もどんと来いだね」

「遷延分娩も？ 軟産道強靱も、胎盤機能不全も、ああ！ ……考えたくもないですが、臍帯先出も？」

「ねえ。ルーデン語で話してちょうだい？」

ホルストとエルマのよくわからない会話は、笑顔のハイデマリ―当人によってぶつた切られた。

が、それでもなお、エルマは頬を両手で押し包み、つらつらと話し続ける。

「無事に生まれてくれても、その後のことを考えると、今から動悸がするようです。アレルギーはないでしょうか。体や情操の発育は順調でしょうか。名付けの儀式までには、占術師を用立てて……ああ、その前に産着を仕立てねば……木綿……いえ絹……フレンツェルから魔蛾をお借りしてまいりましょうか。ああ、性別がわからないと話になりませんね。もし弟だったら ……弟？ いえ、妹でも ……妹……」

時折、うつとりと目を細めるのは、どうやら、早くも弟か妹が生まれた妄想に駆られているかららしい。

ルーカスたちの見たことのない陶然とした表情を浮かべ、「あーん、とか……ふふっ」など呟く様は、もはや彼女自身が出産を控えているかのようにだった。

「はっ。また思考が逸れました。あとは、世界三大秘湯に向かつて、産湯も確保せねばいけませんし、手形を取るための金の板も用意しなくては。爪切りはミスリル製でいいですかね。それに ……」

世界樹を裂いてベッドに、だとか、安眠確保のため夜行性魔獣を殲滅して、だとか、そのTo doリストはほとんど常軌を逸したものになってゆく。

「これに思考リソースのすべてを持っていかれていたのね……。道理でウミガメなんて描くはずだわ」

「ウミガメ？ なんのことだ？」

「いえ、なんでも」

ぼそぼそと会話を交わすイレーネたちをよそに、ホルストたちは懊悩するエルマに温かい視線を向けた。

「まあまあ。本当に必要なものなんて、いざその時になってみないとわからないものだし、今からそう心配しないで。ふふ……懐かしいなあ。エルマの時は、僕たちもこんな風に、だいぶ肩に力が入ってたよね」

「そうねエ。二人目には申し訳ないけど、やっぱり、初めての子っていうのは、それだけで力が入っちゃうのよね」

ホルストが言えば、すかさずリーゼルが頷く。

それに誘われたように、監獄のメンバーが次々と想い出話を披露しはじめた。

「思えば、エルマの、お食い初めのときに、初めて、古龍を、倒したんだっとな」

「成長の記録をしようと、世界樹の幹に印を付けにいったこともあったな。懐かしい」

「幼いエルマがとうもろこしを『とんころもし』と言っのがあまりに愛らしくて、辞書の編纂者を『説得』して、『とんころもし』を

正にしようとして、働きかけたこともありましたねえ」

うんうん、と頷き合う男たちに、エルマは恥ずかしそうに頬を染める。

「あの時は私が止めましたが……ですがたしかに、弟か妹が生まれたら、私もそうしてしまう自信があります」

嘘だろ。

ルーカスたちはぎよっと目を剥いた。

「そうだねえ。そういえば僕も、エルマの柔肌を刺さないよう、ルーデン中の虫を毒ガスで殺してまわったりもしたっけ」

ホルストの発言に、さすがのフェリクスも笑顔を固まらせる。

「それってまさか、黒死病がいきなり根絶された年のことかな……」
「そうよオ。あたしも、エルマに文字を教え始めたときなんて、どんな教え方をしたら一番身に着くかを模索してね。小さな村を丸ごと洗脳して、社会実験までしてから臨んだものよ」

リーゼルの言葉にルーカスも固まる。

「確か十五年ほど前に、劇的に識字率が伸びて話題になった村もありましたね、義兄上……」

恐るべき符号の一致に、一同の背中に冷たい汗が走った。

大罪人たちは、そんなこと露知らぬ様子で、わいわいと回想で盛り上がっている。

次々飛び出すトンデモエピソードに、もうどこから突っ込んでいけばよいのかもわからない。

気丈なはずのテレジアも、鈍感力が売りのフェリクスすら無力化され、聞き手側の戦闘能力はほとんど残っていなかった。

「く……っ、彼らの話を聞いていると、こちらの精神が崩壊しそうだ……」

ルーカスは焦燥を滲ませて、額に手を当てる。

「そうですか？」

が、隣席のイレエネがそう問い返してきたので、ルーカスは怪訝に思っただけ振り返り、それからぎよっと肩を揺らした。

イレエネは、やけに穏やかな微笑を浮かべていた。

「^{リアル}三次元のことだと思っただけなんです……。これらはすべて、二次元の事象だと思えば……。ほら、不思議とじっくり……」
「頼むから現実に戻って来い!!」

悟りと言う名の現実逃避を決めるイレエネを、ルーカスは肩を揺さぶって引き留める。

しかし、イレエネはすでに、己の世界にどっぷりと没入してしまっていた。

「ほら……思えば彼らって、エルマやお母様を筆頭に、皆さまそれぞれ異なるタイプの美形じゃないですか……。主人公なんですよ、物語の。だから特異能力があっただけ……。うん、あるある……。私たちとは違う世界線で生きていて……。うん、そうそう……」

「おい、イレーネ！　しつかりしろ……！」

「どんな物語でしょうね。耽美？　コメディ？　バトル？　これだけきれいに属性が分かれているから、なんでもござれですわね」

ふと笑みが深まり、なにか凄みを帯びたものになる。

イレーネがじ……っと男性陣を見つめると、大罪人たちは殺気を感じ取ったとでもいうように、わずかに顎を引いた。

「マッチョ受け……生真面目攻め……狂気溺愛攻め……どSオネエ攻め……」

花占いをするように順に顔を見渡す。

「いやだわ……受けが足りない……」と呟く様子は、皿の数が足りないと嘆く、東大陸で有名な幽霊のようだった。

焦点を失ったイレーネの瞳が、ふとモーガンを捉える。

常軌を逸した発言も少なく、大罪人たちの中では常識人と見える彼。

穏やかな物腰と知的な相貌を持つ彼には、そっと相手を偲ぶ純愛ストーリーが似合いそうにも思われた。

「知的う」

「そういえば、獄内の書物はすべて私が管理させていただいているのですが」

だが、「受け」の言葉を告げるよりも早く、モーガンがにこやかに切り出した。

「イレーネ様のご趣味に合うよう、今回新規に取り寄せたレーベル

があるのですよ」

「え……?」

「すべての書物の内容を把握しないと気が済まない性質ですので、読んでみました。イレーネ様は、随分と大胆かつ斬新なご趣味をお持ちと、いやはや私、感服いたしましたね」

滑らかな口上に、イレーネは冷や汗を滲ませる。

腐をカミングアウトするのとバラされるのでは、ダメージが大違いなのだ。

「いったいなぜこの人物は、初対面の人間の、ごく個人的な趣味嗜好を把握しているというのか。」

「あ、あの……」

「特に、イレーネ様のご愛読だという、背表紙が紫色のものは秀逸ですね。すべて暗記いたしましたよ。全巻、平均して40ページ台から始まるとある情景描写は、ぜひ音読して皆様にご伝したくなる」

「あのっ!」

イレーネが椅子を蹴らんばかりにして立ち上がると、モーガンはにこりと微笑んだ。

「なんでしょう」

「こ……っ、この話は……っ、このくらいで……!」

「かしこまりました」

モーガンは特にそれ以上踏み込むことはせず、引き下がる。だが、イレーネは悟った。

この獄内に、自分たちが優位に立てる相手などいない。
どいつもこいつも、敵に回したら一巻の終わりだ。

食卓は一瞬、しん……と静まり返る。

そんなとき、沈黙を解すように、美しい笑い声が響いた。

「ふふ。エルマは、本当に素敵に恵まれたのね」

ハイデマリーである。

9・「普通」のディナー（4）（後書き）

コミック版・シャバ難1巻の重版が早速決まりました！
皆さまのお陰です、ありがとうございます！

ウェブの更新も頑張りますので、引き続きどうぞよろしくお願
いいたします。

10・「普通」のディナー（5）

ハイデマリーは、完全に大罪人たちに圧倒されている面々を順に見つめながら、嬉しそうに目を細めた。

「今まで、これと思った囚人仲間を食事にお招きしても、なぜだか途中で失神したり、人格が崩壊してしまうことがほとんどだったのだけど、さすがエルマの連れてきた方々は、静かにわたくしたちの話を聞いてくれるもの」

いや、事態に呆然と取り残されているだけです。

ルーカスやイレーネの心の声は、あくまで外に出ることはなかった。

「ええ、そうなのです、お母様。彼らは、私が少々非常識なことをしでかしても、けっして私を見捨てはせず、こうして寡黙に、温かく見守りながら、シャバの『普通』道へと導いてくださるのです」

とそこに、エルマがしみじみと頷く。

物申したいことは多々あったが、それよりも早く、「まあ」とハイデマリーが手を打った。

「親として本当に嬉しいわ。娘が、外の世界でこんなに立派に友情を築いてくるなんて」

「はい。特にイレーネとは、『親友』なるステータスに移行し、日々様々なアクティビティに乗り出しておりますし」

そこで、エルマは突如、特大の爆弾を落とした。

「ルーカス殿下も、先日私に、並々ならぬ好意を抱いていると告げてくださいました」

「……………」

「……………」

「……………へえ」

ざっ、と、急に室内の温度が下がる。

最初に声を上げたのは、頬杖を突き、にこやかな笑みを張り付けたままのホルストだった。

「気になるなあ。……………詳しく教えて？」

声に、言い様のない冷気が滲んでいる。

ルーカスは、突然戦場に放り込まれたかのような差し迫った空気を感取り、静かに冷や汗を浮かべた。

待て。

待ってくれ。

いや、確かにそれは言ったが、なにも今。

「はい。殿下は私の眼鏡を外し、真つすぐに目を合わせて告げてくだされたのです。私の笑顔を思うと、血流が増し、活性化すると」

「……………へえ？」

「よく聞こえるように、丁寧に耳に唇が触れるほどの近さで話してください、私が意味を取り違えないように、微表情を読めとも言ってくださいました」

「……………へえ？」

やめろ。

待ってくれ。

いや、嘘は一つもないが、今。

今この面々を前に。

「実際、殿下の瞳孔は開き、呼吸も早まっており、肉体的興奮と強い好意が感じられました。……ああ、私、性別で感情を差別するつもりなどないのに、未熟にもそれで、……その、心拍が上昇、してしまい」

ガタツ！

ギルベルトを除く監獄の男たちが、一斉に立ち上がった。

「……………へえ？」

彼らの顔には、未だ先ほどまでの笑みの余韻が残っている。だが、目の奥はまるで笑っていないかった。

そして猛禽類のごときその瞳は 皆まっすぐに、ルーカスを見つめていた。

「わお。なんかこの部屋、いきなり寒くなった？」

「……私は、この状況で軽口を叩けるおまえの凶太さが少々羨ましいぞ」

「私もですわ、テレジア陛下……………！」

捕食対象でない三人はこそこそと囁き合う。

青褪めるルーカスの前で、大罪人の男たちは素早く視線を交わし合うと、やがてモーガンがにこやかに、エルマに向かって切り出した。

「そういうことは早く言っていたただかなくては、エルマ」
「え？」

少し責めるようなニュアンスに、エルマは目を瞬く。

モーガンは、さも相手の無知を窘めるように、淡い苦笑を浮かべて告げた。

「娘に異性の『友人』ができた時にはね。男親総出で、その人物が娘の『友人』に足る人物か、その人物の肝がきちんと据わっているかを、確認する必要があるのですよ。これが世に言う肝試しというものですね」

「そうなのですか」

「ちょ」

急激に怪しくなってきた雲行きに、ルーカスが声を詰まらせる。

それを制するように、ホルストとイザークが一斉に鋭い眼光を飛ばしてきた。

「ああ、そうだとも」

「そう、だとも」

「ええ、そうよオ」

ここにきて唐突に父性を発揮しだしたオネエも、約一名。

凄まじい圧に、無言で冷や汗を浮かべるルーカスに向かって、モーガンたちはにやりと笑った。

「折しも、初夏の夜にふさわしい余興ですね。始めましょうか
肝試しを」

大罪人たちによる夕食会という、ただでさえ主旨の謎だったイベントが、肝試しの名を借りた品定めに変貌を遂げた瞬間である。娘に寄りつく男を絶対潰す、と凄みのある笑みを浮かべる面々を前に、ハイデマリーはこっそり、ギルベルトへ囁きかけた。

「良識ある女親として止めた方がいいのか、面白そうな余興を女主人として歓迎したほうがいいのか、悩ましいわね。……ねえ、本当にわたくし、このまま残っていいはだめ？」

悩ましいなどと言いつつ、藍色の瞳は愉快そうに輝いている。甘えるような上目遣い。しかし、ギルベルトは、ほつれていた編み込みの一部を優しい手つきで直しながらも、きっぱりとそれを退けた。

「だめだ。ここから先、それこそこの場でなにが飛び交うかわからない。世界一危険な戦場になりえる。君は、一番安全な部屋で休んでいてくれ」

女王の居室は、監獄の中でも最も嚴重かつ安全な構造になっているのである。

過保護な夫にハイデマリーは眉を下げる。

しかしすぐに、ぱつと表情を明るくすると「そうだわ」と手を打った。

「あなたの言う通り、わたくしは部屋で大人しくしているから、代わりに話し相手をお借りしてもいいかしら」

「話し相手？」

「ええ。そちらの、テレジア様がいいわ」

突然水を向けられたテレジアは驚いて目を見開く。

「……私か？」

「ええ」

困惑の視線を向けるテレジアに、ハイデマリーは大輪の花のような笑みで応じる。

「会話になかなか参加できずにあぶれてしまった客人を、さりげなくおしゃべりに誘うのも女主人ホステスの役目だと、物の本に書いてあったもの」

容赦なくテレジアの頬を引き攣らせた監獄の女王は、さっさとそう決めてしまうと、優雅に席を立った。

「というわけで、エルマ。申し訳ないけれど、お先に失礼させてもらうわ」

「え……っ？ あ、は」

「フェリクス様。テレジア様をお借りしますわね」

「はいどうぞー」

そうして、事態に取り残されている娘を軽やかに置いて、去ってしまふ。

フェリクスの承認も軽やかに取り付けて、テレジアは強制送還だ。

「ギル。わたくしの代わりにしっかり見届けてちょうだい。それでは皆さま、ごきげんよう」

肩越しに一瞥を寄越す、たったそれだけの仕草が、舞台を去る女優のような鮮やかさだ。

彼女はその美貌で、周囲に強烈な印象を刻みつけると、気まぐれで優雅な猫のように、するりと扉を抜けて行った。テレジアを連れて。

「おい。なにを企んでいる。私はおまえと話すことなど」
「ありますわ。女同士、そして母親同士ですもの」

ちらりと視線を寄越しながら、「ねえ？」と微笑みかける。

「……………」

テレジアがすっかり黙り込んでしまったので、ハイデマリーはそれをいいことに、暗い廊下を軽やかな足取りで進んだ。

監獄の最上階。

広々とした空間に、上質な絹や絵画や宝石、無数の燭台で彩ったその場所が、女王の部屋だ。

ハイデマリーはテレジアをソファの一つに座らせ、優雅な仕草で紅茶を注ぎ分けると、自らも向かいの席に腰を下ろした。

そうして、しばし沈黙を愉しむ。

やがて、とうとうそれに堪えかねて口を開いたのは。やはり、
テレジアの方だった。

「……………何が目的だ」

「テレジア様は、おもてなしのマナーって詳しくいらっしやる？」

「が、ハイデマリーはそれをさらりと聞き流し、一冊の本を取り出す。」

同時に指人形までもが十体ほどわらわらと出てきたので、テレジアは思わず眉を寄せた。

「……今その本と人形はどこから出てきた？」

「谷間ですわ」

嫣然と微笑みながら、ハイデマリーはそれらをテーブルに広げてゆく。

「わたくし、今回のために、おもてなしのなんたるかを学ぼうと、無学なりに本を読んでみたのですが、これがなかなか優れたものなんです。人形と間取り図が付いていて、それらを使うことで、あたかも現実を見ているかのように、その場の動きを確認できるのでわ」

子どもと楽しむことを想定してか、指人形は皆愛らしく象られ、姫君、騎士、王に侍女に兵士、医師、女王に執事に魔女までいる。ハイデマリーはそこから、赤と黒、二人の女王を摘まみ上げると、それらをじつと見つめた。

「ううん。どちらが年上かしら。……たぶん赤ね。では、黒の女王がテレジア様、ということでしょうか？」

そう言っつて、世辞のつもりか、年若く見える黒の女王の方を、テレジアに手渡そうとする。

だが、もちろんそれで気を良くするはずもないテレジアは、冷ややかに指人形を見返した。

「おまえの方が、私より立場が上とでも言いたいのか？」

「滅相もない。あなた様の方が若々しくいらっしゃる、というメ

「ッセージのつもりだったのだけど……やはりおもてなしというのは、難しいものね」

ハイデマリーは悲し気に指人形をテーブルに戻すが、彼女の輝くばかりの美貌を前にしては、嫌味にしかならないメッセージである。

相手の意図が掴めず、不機嫌そうに黙り込むテレジアに、ハイデマリーは肩を竦めた。

「この通り、もてなしの何たるかも知らぬわたくしだけれど、テレジア様とお話をしたいと思ったのは事実なの。つまらない時間かもしれないけれど、どうか付き合ってくださいさる？」

そこで彼女は、はらりと零れた髪を耳に掛けなおすと、なぜか開け放たれた窓の外　夏の夜空を見やった。

「そうねえ、ずっととは言わないわ。あの星々が雲に隠れて、雨が降り出すまでいい。できれば、それがやむまで付き合ってくださいさつたら嬉しいけれど」

「……降るのか？」

つられて空を見たテレジアは、思わず眉を寄せる。

濃紺の空には、白い星々が穏やかに輝いていて、とても雨が降りそうな気配ではない。

長丁場はご免だと思いつつ、ハイデマリーはやけに確信に満ちた声で答えた。

「ええ。降るのよ」

そして彼女は、なぜかそこで苦笑を浮かべた。

「降ってしまっの」

10・「普通」のディナー(5)(後書き)

体調不良のため(イ)申し訳ございませんが(ン)数日感想返信を
お休みさせていただきます(フ)
更新は続けますのでご容赦くださいませ…(ル)

11・「普通」の品定め(1)

今一度状況を確認しよう、とルーカスは思った。

異母兄が先王の実子でないとの疑惑で監獄送りにされた。

自分はそれに巻き込まれて監獄に向かった。監獄は桃源郷だった。囚人たちからディナーに招かれたと思ったら、いつの間にか趣旨がルーカスの品定めが変わっていた。

今ここ。

(……だめだ。最初の一行からしてめちゃくちゃで、理解が追い付かん)

あのフェリクスがうかうかと謀反を起こされるといっただけでも、かなり衝撃的だったのに、ここ数時間でそれをあっさり超える衝撃が、立て続けにルーカスを襲っている。

ルーカスは死んだ魚のような目で、夕食会場だった場所を見回した。

元は独居房だったのをぶち抜いて作ったというダイニング。

かなりの広さを有するそこは、壁も家具もしっかりと手入れされ、そこかしこに上質さを滲ませている。

つい先ほどまでは、真ん中に巨大なテーブルがあったはずだが、大罪人の一人がぱちりと指を鳴らした途端、わらわらと囚人軍団が押し寄せ、瞬く間に会場をセットしなおしてしまった。

一度閉じた目を開けた時には、部屋の真ん中には巨大な闘技場^{リング}、壁側には観覧席が用意され、その場はトーナメント会場とでも言うべき空間に変身していたのである。

ちなみに、大罪人たちはリングの向こう側に陣取り、いつの間にかエルマまでもが、彼らに挟まれながら、困惑顔で座っている。

他方、フェリクスとイレーネはいつの間にかリングの手前側の観客席に座らされ、こちらも状況を飲み込めぬ顔で、リングに立たされたルーカスを見つめていた。

「フェ、フェリクス陛下……。私、いったい何がどうしてこうなったのか、よく……」

「んー、そうだねえ。僕にもよくわかんない。……お、さっきのフエニックスのグリル、観戦しながら食べやすいように、カナッペにアレンジされてる。いいねえ」

イレーネが縋るようにフェリクスに話しかけるが、彼はといえば、異母弟の窮地に全く興味が無いようである。

これならまだ、テレジアの方が親身に共感を示してくれたはずだ。

孤独に不安を噛み締めるイレーネをよそに、フェリクスは、観客席付近に用意された軽食を優雅につまみながら、のんびりと告げた。

「ま、ここは彼らのホームなんだし、彼らのやり方に従うしかないんじゃない？ ルーカスが、だけど」

彼は楽しそうに目を細めて、リングに一人立たされた異母弟を眺めた。

「何事にも本気になってこなかった色男が、意中の女の子のために

親にぼこぼこにされるって、すごく滑稽　もとい、感動的な展開だよ。せいぜいその奮闘を、僕らは見守ろうじゃないか」

さりげに、ルーカスが一方的に嬲られることを前提としている。

ルーカスは異議を唱えたかったが、それよりも先に、リングにある人物が上がってきた。

先鋒　モーガンである。

「さて。これから行う品定め　失礼、『肝試し』のルールは、先ほどご説明申し上げた通りです。これより、ルーカス・フォン・ルーデンドルフ様に対し、我々男性陣が、それぞれの分野であなたの適性や能力を問う。あなた様がそれに見事応えてみせたなら、我々は喜んであなたを娘の『友人』として受け入れるし、そうでないなら、残念ながら下僕に堕ちていただく。ここまではよろしいですね？」

「……いや、友人から下僕への凋落ぶりがラディカルすぎるのでは」「ご理解いただけたようですねによりです」

モーガンは華麗に反論をスルーした。

「我々はあなたに大いに期待しておりますよ。なにしろ、我々の挑戦に対して、即座に応じると心を決めてくださったのですから」

「……あなた方が誘導しただけだろう」

ルーカスは仏頂面で答えた。

そう。

「肝試し」を挑まれた際、最初もちろんルーカスは辞退しようとしたのだ。展開が突然すぎるし、だいたい自分はエルマに対して、女

性として魅力を感じているが、「友情」を深めたいわけではない。

しかし、モーガンが片眉を上げて告げた、次の言葉が彼に火をつけた。

「おや、辞退ですか。いえ、我々は決して無理強いは致しませんよ。友人という人間関係のスタートラインにも立てない男が、まさか恋人になれるはずもないとは思いますが、肝試しを受けるかどうかは、ええ、あくまで個人の自由ですから」

これでもルーカスは、いつも女性には不自由しなかった人間で、かつ、騎士団では王族として距離を置かれがちだったところを、生まれ持った社交性で乗り切ってきた男だ。

その恋愛力とコミュニケーション能力　つまり、ルーカスの数少ない取り柄　を、真っ向から否定する言葉を、受け入れられるはずもなかった。

見てろよ。

気が付けば、ルーカスの喉から、「やります」という言葉が飛び出していたのだった。

(……思えば、それすらも彼らの掌の上といった感じがしないでもないが……)

が、受けてしまった勝負は、どうしようもない。力の限りを尽くすだけである。

ルーカスは、死んだ魚のようだった目に力を込め、モーガンを見据えた。

「それで、俺は何をすればいいんだ」
「そうですねえ……」

優雅な挙動でリングに上がったモーガンは、思案気に顎を指で叩く。

上級貴族の執事、と言われても違和感のない佇まいで、彼はのっけから暴投をかました。

「制限時間内に、どれだけ多くの国庫から資金を頂戴できるか競う。または、特定の国の国庫保有資金の内、どれだけの額をロンドンでできるか競う。どちらがよいでしょうか」

「どちらもよいわけがないと思うが!？」

「なるほど。たしかに、時代はキャッシュより不動産ですよね。では土地を対象にしますか」

会話がまるで噛み合わない。

「なにせ『友人』たるもの、相手エルムが困っていたら即座に、まとまった金塊や土地を差し出せる甲斐性がないといけませんからね」

うん、とひとり頷くモーガンは、しかし冗談を言っているわけではまったくないようだ。

ルーカスは顔を引き攣らせながら、頭の片隅でモーガンの名と、彼の罪状を照合した。

一人で国庫を破綻させた希代の詐欺師。
彼に掛かれば、いたって自然の発想というわけだ。

(愛が……重い……!)

見れば、大罪人たちもまた、

「相変わらず、えげつない……」

「金が大事なのは同意だけどさ、【怠惰】のやり口っていつも凄まじすぎるんだよね」

「あたしとしては、淑女には、金に頼らず身を立てる方法も教え込むべきだと思うわ」

「こそこそと囁き合っている。

「どうやら、皆が皆、全方向に常軌を逸しているというわけではなく、それぞれ特定の分野について、異常な価値観を持っているだけのようなのだ。」

「とはいえ、それがわかったところで、今のルーカスになんの救いがあるわけでもなかった。」

「では、今回は土地の詐取およびロンダリング対決ということだ」

「お待ちください」

ルーカスの意思を丸つと置き去りにして、モーガンがさつさと事を進めようとしたその時、遠慮がちな声が掛かった。

エルマである。

彼女は、躊躇うように唇を噛み、それからモーガンに向かって言い募った。

「あの、肝試しの課題というのは、そこまで異様なものであるべきなのでしょうか」

「異様ですか？　これが？」

「はい。先程から殿下の微表情を観察していたところ、【怠惰】のお父様が示す課題に対して、恐怖・動揺・嫌悪の感情が読み取れました。前後の文脈を考えると、これは、課題があまりに異様であると受け止められた、と考えられます」

珍しくエルマがまともなことを言っている。

ルーカスもイレーネも、驚きに目を見開いてエルマを見た。

非常識のはずの彼女は、緊張したように両手を握り合わせ、必死に言葉を紡いでいた。

「実は私も以前、『実家の裏山を丸ごときれいにしたいわねえ』と侍女長が呟かれたのを聞き、てつきり利権が複雑に絡んだ山を整理したいのかと思い、ロンダリングに乗り出しかけたことがありました。ですがその際、侍女長本人をはじめ、あらゆる方々から必死の形相で止められたのです。つまり　」

そこでエルマは、真っ直ぐにモーガンを見つめた。

「シャバでは、土地のロンダリングは『普通』ではない。その課題は、普通ではないと思うのです、お父様」

きっぱりと言い放ったエルマに、ルーカスとイレーネは思わず胸を熱くした。

ものすごく迂遠だけれど。

そこは微表情とか読まずにわかってくれよとは思っけれど。

(エルマが……「普通」を理解した……！)

そこには、単純な数式を、何度も何度も書いては消し、ようやく正解に辿り着いた子どもを見守るような、温かな感動があった。

が。

「ですので 【怠惰】のお父様の領分で、殿下に臨んでいただくなら、結婚詐欺対決あたりが妥当ではないかと思うのです」

「……は？」

その感動は、次の一言であっけなく砕け散った。

目を見開いたモーガンに、エルマは心なしか得意げな表情で続けた。

「結婚詐欺とは、異性に甘い夢を見せて、実像をより素敵に捉えさせる行為。そうでしたよね？ でしたら、その分野において、シャバで殿下の右に出る者はいないと、この私が保証いたします」

「……ほう」

「甘いマスク、精悍な体つきに、エスコートの巧みさ、嫌味のない睦言を滑らかに紡ぐコミュニケーション能力。きつと【怠惰】のお父様と互角に渡り合えるはず いえ、もしかしたら、凌駕するかもしれません」

「そうですね」

「は。殿下ならば、昨今流行りの国際ロマンス詐欺でも行けるやも……。これまでに、殿下が様々な外国要人と接するのを見てまいりましたが、殿下の魅力は世界中で通用するものと確信しております」

「ほうほう」

褒められているようだが、まったく嬉しくない。

というか、どんな洗脳教育を施したら、詐欺行為をこつもポジテ

イブに捉えられるのだろうか。

ルーカスが顔を引き攣らせていると、それをどう捉えたのか、エルマは慌てたように両手を振った。

「あ、いえ、そもそも、こうした対決は必要ないほど、殿下の優位は明らかかもしれません」

なにかフォローされているようだが、その方向がまるで見当違いである。

さらに「そもそも言えば」と、エルマはそこで一層の気遣いを見せた。

「実はまだ、お父様たちの言う『肝試し』の必要性が腑に落ちていないのです。せっかく友情を申し出てくれた相手を、わざわざ試す必要があるのか、というか……そんなことをせずとも、殿下は間違いなく自慢の友人です、というか」

後半二行は、豪快にルーカスの心を抉っていく。

無言で立ち尽くすルーカスの前で、小さくモーガンが噴き出した。

「そうですね……くっ」

ツボに入ってしまったのか、彼は視線をうつむけ、静かに身を震わせる。

それから、すぐになんでもない表情を取り戻すと、穏やかにルーカスを見た。

「では、やめましょう」

「……………は？」

「この『肝試し』、ひとまず私との対決については、勝ちはお譲りいたします」

ほぼモーガンが進行を仕切っておきながら、まさかの一抜け宣言だ。

事態急変に愕然とするルーカスに、モーガンはいけしゃあしゃあと言いつつ放った。

「すでに、そこまでエルマから『友人』と結論付けられているあなた様を試すのは、あまりに哀れ　失礼、面倒だと思いましたが」

言い直した前後で、果たして無礼さは改善されているのか否か。

モーガンは、【怠惰】の肩書に恥じぬ無精ぶりで、のうのうと肩を竦めた。

「というわけで、私はあなた様を『友人』だと全面的に認めますので、あとは他にお任せしますよ。次は……【暴食^{イザイク}】辺りですかね」

その表情はあくまで穏やか　いや違う、品のある若草色の瞳には、はつきりとした哀れみが浮かんでいた。

ルーカスは悟る。

モーガンは、単に面倒くさくなったから勝負を投げたのではない。そうした方が、よりルーカスの心をぶち折れると理解したから、「友人」の単語を繰り返しながら身を引いたのだ。

そして悔しいことに、彼の読みは大正解だった。

(なんなんだ……！この、えもいわれぬ惨めさは……！)

ルーカスは顔を引きつらせ、拳を握る。

正々堂々戦つてぶちのめされるのならまだしも、哀れみを含んだ微笑でよしよしと頭を撫でられる、この屈辱はどうだ。

先程固めた覚悟は、拳は、どこに納めればよいのだ。

「殿下。このとおり、皆は殿下をすでに『友人』として認めつつあるようですので、もうこの辺りで辞退していただいてもよろしいかと……」

「む……？ もしや、俺も、やめた、方が、いいのか……？」

ルーカスを諭すようにエルマが告げると、聞いていたイザークは戸惑ったように呟く。

が、ルーカスはそれを遮るようにして宣言した。

「結構」

「む……？」

「生温い気遣いは無用だ。やるならやってくれ。殴り合いでも剣戟戦でもなんでも来い、だ」

このまま引きさがれるものか、とルーカスは思った。

たしかイザークは凄まじい膂力を誇る元戦士。彼の用意する対決とは、おそらく武闘によるもののはずだ。

経済的頭脳戦、それも犯罪に手を染める対決というのは遠慮願いたかったが、格闘技であれば、騎士として鍛えてきたルーカスにも多少の分がある。

ルーカスのことを、地を這う虫か何かのように捉えて、哀れみの

視線を向けてくる連中に、せめて一矢報いてやらないことには、到底収まりがつかなかった。

（合理性や常識の話ではない。これはもう、俺の意地と沽券の問題だ）

人、それをヤケクソと呼ぶ。

おお、と目を見張った大罪人たちに向かって、ルーカスは第二戦の開始を申し入れたのだった。

12・「普通」の品定め(2)

イザークはルーカスの宣言を聞くと、好敵手を前にしたかのように、あるいは美味そうな獣を目撃したかのように、にいと笑った。巨体でずん、と床を揺らすようにしながら、リングに上がる。

それを見ながら、イレエネは固唾を呑んだ。

「殿下……、あの場で素直に引けばよかったのに……！」

「男の沽券つてもんがあるんでしょー」

フェリクスは、火の鳥のカナツペを気に入ったらしく、次々に頬張っていた。

二人の男が、今リングに立つ。

巨漢のイザークと細身のルーカスが並ぶと、まるで大人と子どもほどの体格の違いがあった。

「おやまあ、せっかく私が見逃した命を、やすやす投げ出してしま
うとは」

「ま、オペの用意はしといてあげるよ。脳と心臓がそれなりに無事
なら、の話だけど」

「この男前の顔も見納めと思うと、ちょっと切ないわあ」

大罪人たちも口々に冷やかす。

特にホルストとリーゼルは、たとえルーカスが「友人」認定されていようと容赦なしだった。

大切なエルマに寄りつく男は、ぶつ潰す。
ただそれだけの話だからだ。

物見高い嘲笑が響くなか、イザークは低い声で告げた。

「ルーカス・フォン・ルーデンドルフ。俺が、おまえに、申し入れるのは」

建造物すら粉碎する拳での打撃戦か、岩盤すら穿つ巨刀での剣戟戦か。

見物を決め込む大罪人たちが、意地悪く笑みを深める。

「クッキング対決だ」

「え」

まさかの可愛い響きに、観客一同はかくつと前につんのめる。

「『友人』たるもの、うっかり、無人島に、漂着してしまった時でも、相手が、飢えないよう、速やかに、周囲の、自然を使って、料理できるようになければ」

「あなたはこういう危機を想定してんのよ、【暴食】！」
「飢えだ」

【暴食】のイザークにとって、腹が減ること以上に恐ろしい事態は存在しないのである。

「一緒に料理って……単なる仲良しじゃないか」

大罪人たちは呆れたようにぐるりと目を回し、一方でイレーネはほっとしたように胸を撫でおろす。

だが、警戒心に優れたルーカスは、不穏な予感を抱いて眉を寄せた。

彼の脳裏には、これまでエルマが取ってきた行動の数々が蘇っていた。

「……もしや、そのクッキングとやらには、食材を狩る過程が含まれるのか」

「ああ」

端的な返答に、思わず眩暈を覚える。

「それは例えば、近海に出てまぐろを釣ったり、クラーケンを釣ったり、はたまた、ヒュドラを狩ったり、と、そういった類の……？」

「ああ。むしろ、それが、メインだ」

世の中には「踊り食い」や「刺身」といった食べ方がある以上、クッキングの主眼とは、つまり食材を用立てることなのだとイザークは主張した。

「これから、俺たちが、『食糧庫』と、呼ぶ場所に、連れて行く。そこで、いかに、良質な、食材を用意できるかが 勝負だ」

「な……っ」

「まさか、【^{イザーク}暴食】とエルマしか自由に出入りできない『食糧庫』に、一般人を……？」

大罪人たちまでもがどよめく。

が、一番元気なりアクションを見せたのは、なぜか壁際に控えていたクレメンスだった。

「待たぬか！ ではなんだ、おまえたち、この私がわざわざ拵こしらえた闘リング技場を無視して、いけしゃあしゃあと場所を移す気が！？」

「うん」

こくん、とやけに素朴にイザークが頷くのを見て、イレエネがぼそりと呟く。

「……ならなんでリングを用意させたし」
「それねー」

あはは、と適当な相槌を寄越すフェリクスの前では、クレメンスが顔を真っ赤にしていた。

「うん、ではないわ！ 闘技場など、ほとんどおまえの活用のみを想定してのものぞ。使わぬのなら用意させるな！ 行動には計画性を持って、あれほど」

「すまん。許してクレメンス」

しれっとあしらわれ、老年の元宰相は憤怒の形相で両手を髪に突っ込む。

行員数が、労務管理が、特別予算の限度額が、といった単語が飛び出していることから、彼はこの牢獄で、そのあたりのことを担当しているのだろう。

生真面目ゆえにどこまでもイジられ、苦しむクレメンスの姿を見て、ルーカス以下シャバ側一同は、ほんのわずか心の慰めを得た。

頑張れ。

頑張つてクレメンス。

「さて」

イザークといえば、叫ぶクレメンズなど日常茶飯事なのか、春のそよ風のようにそれを受け流すと ルーカスに向き直った。

「では、『食糧庫』に、移動する。最近、増改築が、激しくて、間取りを、把握しきれない、ために、俺くらいしか、出入り、しないのだが」

ついで、

どいお……っ！

右にあった壁に向かって無造作に拳を突き出し、壁を円状に砕き割った。

「入り口としては、ここから見える、ほら、あの部分だ」

「修繕費iiiiiiii！」

クレメンズの絶叫がまた響く。

が、それは一同によって華麗に無視された。

「……………？ 見たところ、森しかないようだが」

「森も、『食糧庫』の一部だ。各種野菜や、山菜、森の動物たちが、そこで、育てられて、いる。だが、より多くの、『食糧』を、貯蔵しているのは、その地下」

イザークは、うむ、と得意げに頷いた。

「兎などの、たむろする、上部から、ドラゴンなどの、住まう、最

深部まで。およそ、三十の、層から成る、自慢の、食糧庫だ」

「どこのダンジョンだ!？」

「ちなみに、今年は、ドラゴンが、繁殖期らしい。子ども部屋が、必要なのか、日に日に、層が、増えているようだ」

「しかも進化するタイプ……!」

絶望とともに突っ込むルーカスの横では、エルマが「大量の、ドラゴン……」と眉を寄せ、ごくりと喉を鳴らした。

「嬉しい。しばらくごちそう三昧ですね」

どうやらそれは、恐怖ではなく、空腹によるものだったようだ。イザークとエルマは互いを見つめ、しっかりと頷き合った。

「エルマ。おまえも、行くか」

「はい、喜んで助太刀いたします」

「助かる。人手が、欲しかった。エルマは、後衛を頼む」

「待て待て待て! おまえら、主旨を忘れていないか!？」

肝試しの名を借りた品定め、と見せかけて、単に狩りがしたいだけだということを、察しのよいルーカスはうつすら悟ってしまう。

だが、「いないか!？」の「か!？」の辺りで、彼はイザークの

剛腕にタックルをかまされるようにして突き飛ばされ、そのまま階

下の森 「食糧庫」へと落ちて行ってしまった。

「……………!」

「ご安心ください、殿下の身体能力があれば、第三層あたりで受け身が取れるかと」

声もなく絶叫するルーカスの後を、ひょいとエルマが追う。

慌てて窓枠に駆け寄ったイレーネたちが見たのは、こちらに向かつて蒼白な顔で右手を伸ばしながら、奈落の闇へと吸い込まれてゆくルーカスの姿だった。

「いやあ、感動的な最期だ。親指を立てて溶鉱炉に沈んでゆく様子は、涙なしには見られないねー」

「陛下の目は節穴でいらっしやいますか!?!」

カナツペをむぐむぐ頬張りながら適当な感想を述べるフェリクスに、イレーネの突っ込みが炸裂する。

と、そこに、静かに成り行きを見守っていた大罪人たちの内、ホルストがぼつりと呟いた。

「ていうかさあ」

珍しく、彼の顔は、少々強張っていた。

「地下三十層、しかも日々、さらに地下に向かって増築中って。一層あたりの深さの平均をどう取るか次第だけど……それって上部マントルくらいには、到達してるんじゃないの?」

「まんとる?」

「うん、いや、僕が何を心配してるかって言うとな、万が一食糧庫がマントルに届いていたとして、万が一そこにSSS級魔獣でもいたとして、万が一そこでエルマと筋肉馬鹿イザックが大暴れしたら」

ホルストは、首を傾げる周囲への説明を省くと、引き攣った表情で懸念を述べた。

「この辺り一帯、地殻変動っていうか、マグマに吞まれて壊滅しち

「やうかもね……なあって」
「……………」

一瞬、居室には針の落ちる音が聞こえそうなほどの沈黙が訪れる。
それから、大罪人一同も、イレーネも、くわっと目を剥いた。

「ありえる！」

それほどに、彼らにとってイザークやエルマの行動は型破りなのだ。

「信つじられない……！　いくらエルマに言い寄る虫が気に食わないからって、辺り一帯を危機に陥れるなんて、とんだ非常識野郎だわよ」

「いや、あのやりとりを見るに、【暴食】は単に食材狩りをする人手を募ってただけでしょ」

「ますます、狂っているとしか言えませんか。やれやれ、獄内には、私とエルマ以外にまともな人間はいないのでしょか」

大罪人たちもまた、それぞれ眉を顰めたり、肩を竦めたりして、イザークを非難する。

「彼ら自身たいがい狂っているのだが、救いようのないことに、皆自分だけは良識人だ」と信じて疑わないのである。

「そ……っ、それより陛下、エルマたちに巻き込まれた殿下の救出に、誰か向かわなくてもよいのでしょうか！？」

「えー、『まんとる』とやらまでー？　だいたいこれって、ルーカスがイザークとやらに挑みに行くって主旨でしょ。それで死んじやつたんなら仕方ないじゃん」

イレーネは窓から身を乗り出しながら訴えるが、フェリクスはけんもほろろだ。

「惜しい男を亡くしたねー」と彼が棒読みで述べたその時、ホルストがあつと叫んだ。

「そつだ、ちょうどこういう時のために開発しておいたのがあつたんだつた」

そつして彼はぴゅーいと口笛を鳴らし、穴の開いた壁から数匹の蝙蝠こもじりを呼び寄せた。

「紹介するよ、こちら、僕が遺伝子改良を施した蝙蝠だ。こいつを使えば、ダンジョン、もとい食糧庫の様子をある程度捉えることができる。蝙蝠つて、超音波を発してものを『見る』性質があつてね。それを活用して、この蝙蝠の発する超音波を、画像データとして処理する技術を開発したんだ」

「視界を……超音波で……画像処理……？」

さつぱり理解できない一同に向かつて、ホルストは音速の公式がどうかとか、探触子がどうかとか、赤方偏移のドップラー効果がどうかとか捲し立てていたが、すぐに諦めたように説明を切り上げた。

「まあ、平たく言えば、蝙蝠が僕らの目の代わりになる、つて感じかな。人間の可住環境くらいまでは耐えられるように設計してあるから、この子たちがルーカスの姿を捉えられる限りは、ひとまず彼は安全な場所にいると思つていい。……たぶん」

ぼそつと不穏な言葉を付け足してから、ホルストは「論より証拠」と蝙蝠たちを宙に放す。

滑空する後姿を見送り、どこからか取り出した巨大な筐体をガチャガチャといじると イレーネたちにはさっぱりわからなかったが、エレキテルがどうだとか言っていた、やがて、つるりとした箱の内面に、白黒の絵が現れた。

いや、絵ではない。動いている。

目を凝らせば、そこはどうかやら洞窟のような場所で、準備体操のように肩を回すイザークと、手を差し伸べるエルマと、腰をさするルーカスが映っているのだとわかった。

「な……!?!」

「おおー、すごいね。遠視の聖術?」

イレーネが絶句し、フェリクスが感嘆すると、ホルストは呆れたように溜息を吐く。

「だから、ただのエコー装置だつてば。まったく、呪文を唱えれば遠くの景色が見えるなんて、ファンタジー世界の中だけのことだよ。一般人は、普通、道具を使って覗き見るものなの。わかる?」

イレーネとフェリクスは、釈然としない何かを感じながら顔を見合わせた。

ちなみに、もしホルストの発言をハイデマリーが聞いていたら、きっと彼女は「どうかしら」と言わんばかりに微笑んでいただろう。

「さてさて、どんな様子かな?」

ホルストは空気を変えるように、くるりと筐体に向き直る。

映し出された画像の中では、今、ルーカスがなにかに気付いたよ

うに、さつと立ち上がったところだった。

13・「普通」の品定め(3)

「なんだ……この場所は……！」

ルーカスは、激しく地面に叩き付けられそうになったところを、持ち前の反射神経でかろうじて受け身を取り、腰をさすりながら言った。

落下した先は、地面とは思えぬ柔らかさで、おかげでこの程度の衝撃で済んでいる。

未だ動悸が収まらぬまま、恐る恐る「地面」に触れ、ルーカスは眉を寄せた。

「……ゼリー状の、なにか……？」

「第三層一帯に生息する、発光性スライムですね。おかげで、この辺りは灯りが無くとも視界が確保できて、大変過ごしやすいかと」

そして、エルマにしゃらっと説明され、ぎよっと腰を浮かした。

それが刺激になったのか、下敷きにしていたスライムがぼつと光の明滅を始めたので、ルーカスは一気に警戒心を引き上げ、剣を構える。

その様子を見て、エルマがおずおずと口を開いた。

「あの、スライム、狩ります？ 最初に狩ってしまうと、結構重量や体積があるので、荷物になりますし、草食性のものは淡泊すぎてお勧めしませんが……」

「スライムなぞ食うか！ というか、なぜ魔物が平然と存在してい

るんだ！」

「なぜと言われましても」

エルマは不思議そうに首を傾げる。

「私が物心ついた頃から、第三層と言えばスライムでしたから。どこのご家庭も、共通なのかと思っておりましたが」

「どこのご家庭にもこんなダンジョンがあつてたまるか！」

ルーカスが吠えると、エルマは「あ」と目を見開き、イザークに向かつて頷きかけた。

「殿下のおかげでしょうか。ラッキーですね」

「ああ。幸先が、いい」

彼らは「おっ」みたいな感じで顔を輝かせるが、なんのことかわからない。

ルーカスは怪訝に思って彼らの視線を辿り、思わず顔を強張らせた。

まず視界に飛び込むのは、おどろおどろしい色合いをした、無数の赤い瞳。

ルーカスたちはいつの間にか、全身を針のような毛皮で覆われ、鋭い牙の隙間から涎を垂らした、凶悪な面構えの獣によって囲まれていた。

「こいつ、A級魔獣の」

「黒うさぎさんですね」

独白を思いもよらぬ言葉で繋げられ、ルーカスはいらいら反射的に突

っ込んだ。

「デーモン・ハーゼ魔小獣だろぅが!？」

「え? ですが、長めの耳がありますし……。赤い瞳と硬めの毛皮が特徴的な、黒うさぎさんですよ、第四層在住の。今回は、スライムの異常発光に惹かれてやって来たんでしょぅね」

「ああ。筋線維が、細かくて、柔らかい。脂肪分が、少なく、淡泊な味わいは、ウサギ肉で、間違いない」
「味で種別を判断しないでくれ……!」

ルーカスはふと自らを襲った予感に、眩暈を覚えそうになった。

「もしや、先ほどイザークが「兎」と言っていたのがこのA級魔獣か。」

「ということは、これから自分は、A級どころか、S級、いや、SS級くらいの、わさわさ湧き出る魔獣と戦い続けねばならないのか。」

しかも、

「たった一人で、この二人に突っ込みを入れながら!？」

「無茶だ、あまりに人手が足りない。」

ルーカスは天を仰ぎそうになったが、それよりも早く、魔獣が唸りを上げて襲い掛かってくる。

「くそっ!」

ルーカスは舌打ちし、すぐに応戦の構えを取った。

これで彼も、若くして騎士団の中隊長まで上り詰めた男だ。
本能の命じるままに体を動かせば、A級魔獣は一撃のもとに首を貫かれ、スライムの地面に散った。

「おお、見事」

「さすがは殿下です」

イザークとエルマは真顔で頷きながら、片や拳で魔獣を昏倒させ、片や身を躲すことで魔獣同士を衝突させている。

ぐったりと動かなくなった魔獣を手際よくロープで縛りながらどこから出てきたのかは、もはや愚問だ、二人はちよつと言いつらそつに続けた。

「ただ……、ウサギは、生け捕りに、してくれと、嬉しかった……」

「血抜き段階からハーブを使いたかったので、できれば調理場に戻ってから、首を落としていただきたかったですよね……」

至極残念そうである。

ルーカスは「知るか!」と叫びかけ、しかししょんぼりとしたエルマを見て、口を引き結んだ。

そう言えばこれは、一応「クッキング対決」なのであった。

(とすれば、彼らの主張もまた、的外れではない……はずだ。……
……たぶん)

自分は定義に忠実で、一度決めたことを投げ出さない男だ。

ルーカスは自らに言い聞かせた。
べつに、変装を解き、ドレスアップしたエルマの憂い顔ひとつで、引き下がったわけではない。

「……………第五層以下にも、『食材』はいろいろあるわけだろう。そいつらは、もっとうまく狩る」

仏頂面で告げると、エルマはぱつと顔を輝かせた。食事会が始まった時から思っていたが、獄内にいる彼女は、リラックスしているためか、いつもより少しだけ表情が豊かで、またそれがすごく可愛い。

「嬉しゅうございます。第五層から第十層にかけては、一本角の馬や毒爪を持つ熊、雷を操る鳥などもおりまして、大変食材のバリエーションに富んでいるのですよ」
「もしやそれは、ユニコーンに毒巨熊キフト・ベアに使徒鳥アポステルのことを言っているのか!？」

「まあ、平たく、言えば、野生鳥獣肉だ」

S級魔獣や聖獣の類を、イザークたちはあっさり「ジビエ」の言葉で片付ける。

ルーカスは、とうに破壊され尽くしたと想像していた常識や価値観が、今また盛大に蹂躪されるのを感じながら、剣を握り直した。

(いちいち動じていては、身が持たん。…………もう、毒を食らわば魔獣聖獣まで、だ)

切れ長の瞳に、ルーカスはざらりと強い意志を滲ませる。

それは、「ヤケクソ」と呼ばれる感情に、とてもよく似た色をしていった。

一方。

「信っじらんない。もう二十五層ですって……？」

獄内に留まり、蝙蝠エコーをモニタリングしていた面々は、感嘆の溜息を漏らしていた。

大罪人もイレーネたちも、寄り集まって画面を覗き込んでいる。

そこには、音声こそ伴わないものの、激闘、と呼んで差し支えない光景が映っていた。

視界を縦横無尽に動き回るのは、蠢く山のような体に、大量の目を備えた魔物、イービルアイ。

そして、素早い身のこなしでそれに対峙するルーカスの姿だ。

ルーカスは、魔物の変則的な動きや、時折目玉から発される奇妙な光線を、最小限の動きで躲し続ける。

彼が身をよじるたび、あるいは、岩壁に突いていた手を離すたび、その場所は豪快に抉られていった。あと一秒でも動きが遅ければ、粉微塵になっていたのはルーカス本人だったであろう。

だが、彼は構えた剣を揺らすことすらせず、防戦に徹すると、あのタイミングで一気に攻勢に打って出た。

一度、右側の目玉を狙うと見せかけて、光線をそちらへと集中さ

せる。

その先の岩盤が崩れ、どっと魔物に向かって降り注いできた瞬間に、素早く回転し、中央の最も小さな目玉を貫いた。

途端、画面越しにも音が聞こえてきそうなほど、魔物が激しく吠える。

びりびりと細かに震えていた画面が、徐々に静止し、安定すると、ルーカスは剣を振って血のりを落とした。

「……………」

「どうやら、背後にいたエルマたちに向かってなにか告げているようである。」

「『今度こそ、急所以外傷付けず倒したぞ。これでいいか』でしょうかね。いやはや、イービル・アイはSS級魔物だというのに、こつもあつさり。彼がここまでの実力者だったとは、驚きです」

唇の動きを読んだモーガンが　元詐欺師の彼は、この世のあらゆる言語だけでなく、読唇術にも精通しているのだ　、速やかに翻訳する。

イレエネたちは、神妙な顔で頷き、同意を示した。

「私、今まで殿下のことを、単なる苦労性まじめ微受けポジなどと思っていて、正直申し訳なかったですわ」

「彼は中隊長のはずだけど、これじゃあ騎士団長を超えるレベルだもんねえ。僕にまで爪を隠していたとは……まだまだこき使えたと思つと、過去が悔やまれるな」

二人は、今までエルマ無双の影に隠れてろくな活躍をしてこなかった男に、しみじみと賛意を贈る。

そういえば、誰もが忘れていたが、ルーカスには「戦場の黒豹」ウチウチなどという二つ名まであったのだった。

「ねエ、この子たち、【怠惰】モイガンの読唇術にもはや突っ込みすらしなかったわね」

「というか、この行為全般を『クッキング対決』とくくることに対してすら、なんの疑問も無いようなのだが……。俺はこの監獄の良識担当として、その辺りを指摘したほうがいいのだろうか」

背後では、リーゼルとギルベルトがひそひそと囁きを交わしていた。

ちなみに、こんな時まつさきに茶々を入れるはずのホルストとはと
言えば、

「第十三層の魔界樹の樹液……あれ幻覚剤に使えるな……この魔獣の眼球、自然のレーザー発生装置じゃないか……。生きたまま欲しい……。やばいな、ただの筋肉馬鹿の遊び場だと思っていいたら、こんな魅力的な素材の宝庫だったなんて……」

ルーカスの活躍などそつちのけで、モニターに齧りついている。

「ちょっと、蝙蝠三号。その色男の姿なんざどうでもいいから、可愛いエルマか、さもなきやその可愛い魔物を映してよ。あー、くそ、これ以上ズームはできないかあ……！」

ぼやくホルストの命令をどう受け取ったものか、モニターはやや撮影範囲をずらした。

途端に、狂気の笑みを浮かべたイザークの姿が大写しになる。

ぎよつとする一同の前で、彼はぶんと剛腕を振るった。すると、周囲の岩盤が一齐に砕け、見る間に画面上に砂嵐が掛かったようになる。

イザークは舞い上がった砂塵の中に、ぐいと腕を突っ込んで、無造作に引っ張った。

その強靱な掌に引き寄せられたのは、なんと小型のイービル・アイ、それも二体だ。

「まだいたの……！？ それも二体……！」

「わお。素手で掴むなど狂気の沙汰だ」

おぞましい図に、イレエネは声を上ずらせ、フェリクスも微かに笑顔を強張らせる。

が、ぎよるぎよると目玉を蠢かせる魔物を、イザークは風が唸るような速さで壁に叩き付け、ぐったりとした魔物の、その喉笛と思しき部分に齧りついた！

「ひ……っ！」

びしゅっ！ と飛び散る血飛沫が、黒くイザークの顔を覆う。

ぼたぼたと落ちる血や臓腑をまわりつかせ、哄笑する巨漢は、もはや彼自身が魔物のようですらあった。

常軌を逸した行動に、さすがのエルマも顔を強張らせて何かを叫び、ルーカスもまた叫びながら、エルマを庇うように地面に引き倒している。

「イザークさん……！ まさか、狂って……！？ もしや、エルマ

や殿下まで襲おうとしているのでは　!？」

「『うめー!』 『あつ、ずるいです、イービル・アイの刺身をひとり占めですか？ 私も　』 『ダンジョン内で味見をするなあああー!』と叫びあっているようですよ」「
「……………」

どうやら、単にイザークは通常運転で食欲を爆発させているだけで、ともに味見をしだしそうなエルマを、ルーカスが必死に止めている図であつたらしい。

イレエネはもちろん、さすがにフェリクスも、そして大罪人たちも、ちよつと同情的な表情を浮かべた。

「殿下………… おいたわしい…………。こんな非常識な二人の間に、一人放り込まれるだなんて…………」

「ルーカスががんば…………」

「なんだか申し訳ないね、うちの【暴食^{バガ}】が…………」

代表してホルストが詫げる。

繰り返すが、彼らもまたそれぞれの領域でぶっ飛んでいるが、別に全方向にイツてしまっているわけではないのである。

「こんな原始的な方法で狩りをしなくても、遺伝子を採用して完全養殖すればいい話なのに…………」

「そうよ、こんな暴力的な光景を見せて申し訳ないわ。全食料庫在住生物を対象に、時期が来たら自死するよう洗脳しておけばいいだけの話なのに…………」

「立ち食いなど、マナー違反ですよね」

………… 残念ながら、やはり、それぞれの領域に対してはぶっ飛んで

いるのだが。

それでもイレーネたちと、大罪人たちは、ほのかな連帯感を抱きはじめながら、じつとモニターを眺めた。

ルーカスは戦う。

SSS級と思しき魔獣が現れても、その端正な顔にやけくその表情を浮かべて、真つ当な方法で戦う。

その傍らでイザークは、およそ人間であることを放棄したようなやり方で、次々と「食材」を狩ってゆく。

技量というか、攻撃力としては、やはりイザークのほうが上だ。

これが単純な闘技対決であるならば、ルーカスは彼に及ばないと言っただけだろう。

とうとう彼らが第三十層　ドラゴンの棲みかに到達すると、いよいよその力量差は明らかになってきた。

だ　　が　　。

「あ、今度はイザークさん、うつとりした顔でドラゴンの尻尾を掴もうとしている……」

「それに対するルーカス様の叫びは……『やめろ！　踊り食いには、絶対にやめろおおおお！』、ですかね」

ルーカスの姿を見守っていたイレーネたちは思った。

なんて面倒見のいい男なのだろう。

次から次に襲い掛かる上級魔獣を薙ぎ払い、怒涛の勢いで押し寄せる「異常」の現場を前にしても、根気強くツツコミ続けるだなん

て。

しかも、イザークが尻尾を手にとった瞬間「踊り食い」の意図を察するとは、もはや才能のひらめきすら感じる理解力、そして順応力だ。

かつ、魔獣の遺骸や砂塵がエルマの方に飛んでくるたびに、きちんとかばおうとする点も、実に律儀である。

「この技量に、このツツコミ力。エルマ相手でも騎士道精神を発揮する真つ当さ。もう、『友人』としてくらは、認めてやってもいいのではないか？」

中立の立場を掲げるギルベルトは、同情を滲ませた声で呟く。

だが、エルマ溺愛隊の中でもタカ派のホルストは、けつと不機嫌そうに言い捨てた。

「僕の可愛いエルマのために、肉の盾になろうとするくらい、人として当然の行為でしょ？ それに見なよ、肝心のエルマ本人は、なんだかご機嫌斜めみたいだよ。王子さまがなんかやらかしてもしたんじゃないの」

「え？」

思わぬ指摘に、その場にいた面々は目を見開く。

男同士の対決、という建前を信じてか、大人しく二人の後ろに付いて、肅々とこれまでに狩った「食材」の下処理を済ませていたエルマ。

よくよくその表情を見てみれば、たしかに、狩りを楽しんでいるというよりは、首を傾げ、物言いたげに目の前の二人を見つめていた。

いや、どちらかと言えばルーカスよりも、イザークを見ている気もするが　なにか、不満がありそうではある。

「どうしたんだらうねえ」

「……なんだか私、嫌な予感がいたしますわ」

フェリクスがのんびりと呟けば、エルマ無双探知機能フラグリーダーを搭載しはじめたイレーネが、顔を強張らせる。

果たして数秒後、それは起こった。

ぐわあ……………っ！

先ほどイザークが昏倒させたはずの巨大なドラゴンが、突然眠りから覚めたように、凶悪な咆哮おびょうを全開にして襲い掛かってきたのである！

イザークやルーカスが驚いて振り返るのが見える。
時を同じくして、監獄の外、つまり食料庫の方角から、地鳴りのような轟音が響き渡った。

「伏せる　！」

ギルベルトが素早く吼えると、面々は慌てて身を低くする。
が、地鳴りはやがて収まり、壁の外の森にはしん……と沈黙が戻ってきた。

「今のは…………？」

恐々とモニターを覗き込んだ一同は、しかしそこで怪訝な顔つきになる。

ドラゴンと三人が向き合っていたはずの空間には、誰も映っていないかった。

「……………？ いったい皆は、どこへ……………？」

どごお おおおんっ！

誰かの呟きに呼応するように、ちょうどその時、監獄の外で再び爆音が炸裂した。

ぎょっとして窓、というか砕かれた壁の外を見やり、息を呑む。

夜空を、巨大なドラゴンが駆け上がっていた。

13・「普通」の品定め(3)(後書き)

本日投稿分への感想より返信を再開させていただきます。

お騒がせしました & 温かなお言葉をありがとうございます。

14・「普通」の品定め(4)

「……………!?!」

大きな満月に照らされたドラゴンは、さながら神話の住人のようだ。

よくよく目を凝らせば、ドラゴンにはいくつかの腕が生えており、その中の一番立派な鉤爪かぎづめには、イザークとルーカスが引つ掛かっていた。

そして、その頭上 そびえたつような立派な角の間に、小柄な少女が跪いている。

ドラゴンは火を噴き、左右に激しく身をくねらせて旋回するが、少女はびくともしない。

彼女は鼻筋にすつと指を滑らせる仕草をして、そこに何もないと気付くと、ふと苦笑を浮かべた。

それから、ドレスの裾の内側から、すらりと巨大な牛刀を取り出した。

「ちよま……………っ! どこから出てきた牛刀……………!?!」

刀は彼女自身と同じくらいの長さがあり、到底ドレスで隠しおおせるはずがない。

イレーネは絶叫し、ホルストやリーゼルたち大罪人もさすがに突っ込んだ。

「まったく、刃物は危ないから毒を持ち歩くように言ってるのに!」

「んもつ。護身ナイフは必要とはいえ、裾から出すときに脚を見せちゃダメじゃないの！」

残念ながら、突っ込みの観点は、少々異なっているようだったが。エルマは両手に握りしめた牛刀を、ゆっくりと天高く掲げ持つ。

まさか、と見守る一同の視線の先で、

「はっ！」

彼女は気合い一閃、それを素早く振り下ろした！

「っっ……っ！」

風が唸り、一部はかまいたちとなって監獄の壁をぴしりと弾く。

しゅばばばばばばっ！

牛刀を操る動きが縦横無尽なものになると、風はいよいよ台風の様相を呈した。

「きゃあああああっ！」

壁の穴から吹き込んできた強風に、咄嗟にイレーネたちは顔を庇い、そして次に目を開けた時には

「……………なっ！？」

「やっぱりいいいいいいいい！」

ドラゴンは骨と皮、そしてブロック状となった肉に分かれ、空高

く、放射線状に浮かんでいた。

「心なしか花火つばい!？」

イレーネが思わず叫ぶと、それを聞き取ったらしいエルマがふと振り返り、宙に浮いたままにこりと微笑む。

それから、何ごとかを呟くと 唇の動きを読んだモーガンは「ターマヤー」……?」と首を傾げた、くるりと身を引き寄せ、着陸態勢に入った。

くるん、くるん、くるん。

自由落下しながらも、エルマの身体は美しく回転を続ける。

何度目かの回転のときに、彼女は猫のようにぐんと身体を伸ばすと、大きく壊れた監獄の壁のへりを掴み、そこから勢いをつけて反回転した。

しゅとっ!

Y字の形に両手を上げて、獄内への完璧な着地を決める。

突然目の前に帰還された格好の一同は、思わず拍手を送ろうとしかけたが、それよりも早く、エルマは素早く身をよじり、壁の外に向かってぐわつと何かを広げた。

大きな布のように見えるそれは、よく目を凝らせば、彼女たちが先ほど「食糧庫」^{ダンジョン}の三層目で狩ってきた、スライムである。

ぐん……っ

淡い光を発するスライムは、振り回された遠心力によって、夜空

めがけて、まるでナンのように薄く引き伸ばされてゆく。

ちょうど最大まで広がりきったその瞬間、エルマより一拍遅れて落下していたものたちが、一斉にスライムの「クツション」に到達した。

「はっ！」

短い掛け声とともに、次にエルマは、広がりきったスライムを収斂させてゆく。

上に乗っていた、ドラゴンのコマ切れ肉が、骨が。

エルマが予めドラゴンの鉤爪に引っ掛けておいた、狩りの収穫物すべてが。

そしてイザークが、ルーカスが、一斉に監獄の内側へと引き寄せられていった。

すたとととと、と……………っ

最後までだけは静かな音を立てて、それらがイレーネたちのすぐ目の前に並べられてゆく。

ドラゴン肉の横に、気付けば正座させられていたイザークとルーカスに向かって、エルマは「まったくもう」と両手を腰に突いた。

「【暴食】のお父様。危うくドラゴンに捕食されるところだったではありませんか」

「面目ない。味見に、夢中に、なるあまり、背後が、おろそかに……………」

「私だけが相手なら問題ございません。ですが本日は殿下も一緒に。ご覧ください、殿下は事態に取り残されて、すっかり黙り込んでいらっしやるではありませんか」

彼女はそう言って、ぐったりとしたルーカスを指差す。

マントル付近から成層圏付近まで急上昇・急降下を強いられた彼は、のろのろと顔を上げた。

「え……？」

正直、肉体的な負荷が強すぎて、展開に頭が付いていかない。

なにを言いだすんだ、という表情をどう受け止めたのか、エルマはしっかりと頷いた。

「実は私、この狩りが始まった瞬間から、殿下が必死の形相で突っ込んでばかりなのが、少々気に掛かっておりました。特に、【暴食】のお父様がドラゴンを拳で気絶させたときの、殿下のあの驚愕と絶望が入り混じった表情。それを見て、殿下は我々の狩りのスタイルに強い疑問を抱いているのだと、確信せざるをえませんでした」

ルーカスはわずかに目を見開く。

（エルマが……自分たちの非常識さを、理解した……？）

そこは表情を読まずともわかってくれよとは思うが、それでも感動を禁じ得なかった。

ルーカスの顔に歓喜の色が滲んだのを見て取り、エルマは「なにもかもわかっている」と言うように重々しく頷いた。

「一年という短い期間ではございますが、私も外の世界を見てきました。その過程で、何度も何度も、監獄の『普通』とシャバの『普通』は異なるのだということを、身をもって学んできました」

今、エルマがイザークを見つめる目には、与えられた価値観を鵜呑みにする善良さだけでなく、自ら知恵を付けようとする聡明さが浮かぶ。

ほかんとするイザークに、エルマは凜とした口調で続けた。

「【暴食】のお父様。僭越ながら申し上げます。ドラゴンを拳で昏倒させ、丸焼きにして食すというお父様のスタイルは、シャバではまるで『普通』ではないのです」
「なんだと……？」

家族に眉を顰められても、堂々と意見を述べるエルマの姿に、ルカスは、そしてそれを見守るイレーネは、思わず胸が熱くなるのを感じた。

エルマが、真つ当なことを言っている。

常に常識外れだったこの少女が、今や自分と大罪人の間に立って、「普通」を説こうとしている　！

「そうだ。そうだとも　！」

「シャバでは、ドラゴンやヒュドラといった爬虫類系魔獣は、コマ切れにして、唐揚げで頂くのが基本なのですよ」

だが、その感動は、一瞬で地面にべしゃつと擲たれた。

「……………はっ！？」

「私もいつ指摘しようかとやきもきしたのですが……。お父様がドラゴンを仮死状態に留めたのは、丸焼きにこだわるあまりですよね。ですが、シャバではむしろ、即座に頭を落とし、揚げ物にするのが正義、『普通』なのです。挙げ句、仕留めなかったばかりに、ドラゴンに襲われることになって……。殿下の呆れの念は、そういう

ところにもあったと思うのですよね」

違う。

そうじゃない。

だがエルマは、もはやドヤ顔と称して差し支えない表情になっている。

彼女は胸を張ると、「そうなのか……！」と驚くイザークに言い切った。

「ええ。私もシャバで、いろいろな『くびなが』を丸焼きにしては驚かれたものでしたが、先日ヒュドラを唐揚げにした際は、大層喜ばれたものでした。なので、間違いございません」

エルマは誇らしげに告げ、それからイレエネをちらりと見て付け足した。

「そして頂く際は、ソースではなく、塩が『普通』です」

得意げに言い切って、エルマは「差し出がましいようですが」とイザークに拳を突きつける。

その中には、ダイヤモンドと見まごうような、美しい結晶が載っていた。

「先ほどのドラゴンの涙から、塩を精製してみました。どうぞご利用してくださいませ。お父様、繰り返しようですが、ドラゴンは唐揚げ、そして塩。これが、シャバの『普通』というものなのですよ」

その、邪気の無い笑顔。

ルーカスとイレーネは同時に天を仰ぎ、力なく呟いた。

「もしま……俺たちはエルマに、とんでもない成功体験を植え付けてしまったんじゃないか……？」

「ごく一部の嗜好が、エルマの中で、『シャバの普通』になるようにしていますわ……」

だが、二人の焦燥などいざ知らず、イザークは感嘆の声を上げるだけだ。

「エルマ……おまえ、成長、したな」

「いえ。ひとえに、殿下やイレーネといった、素晴らしい方々によるご指導の賜物です」

「そうか……」

神妙に答えるエルマに、イザークは感じ入るものがあったらしい。ふと目頭を押さえると、もう片方の手でぼん……とルーカスの肩を叩いてきた。

「ルーカス・フォン・ルーデンドルフ。俺は、認める。おまえは、エルマの、『普通』の師匠だ……」

「なんだそれ!？」

「娘を……よろしく頼む……」

なにかそういうことになったらしい。

すっかり展開に取り残されたルーカスをよそに、大罪人たちはまばらな拍手を送る。

「わー、『普通』の師匠だつてー」

「よかつたわねエ」

こんなにおざなりな祝福を受けたのは初めてだ。

「いやはや感動的な光景ですねえ。主旨が行方不明気味ですが、本人も相手を認める発言をしておりますし、二戦目もまたルーカス様の勝利ということ。さて、敗者の【暴食】^{イザーク}には速やかにこのドラゴン肉を調理していただいて、一度ここでハイティーンといたしまし
ようか」

モーガンが穏やかかつ雑な進行を見せる。

どうやら、お茶好きなラトランド人である彼は、^{ハイティーン}肉料理付き茶会の時間を前にして、いよいよ品定めに興味を失ってきたらしい。

彼はちやきちやきとリング撤収の指示を飛ばすと　クレメンスがまた絶叫していた　、今度はその場に豪華なティーセットを出現させる。

ルーカスが呆然としている間に、今、優雅な茶会が始まるうとしていた。

「おい……！」

なんなのだ、これは。

彼らの気分一つで、食事会が品定め会になり、ダンジョン攻略になり、茶会になる。

あまりに取り留めのない展開に、根が真面目なルーカスは顔を引き攣らせたが、その時、

「殿下」

彼の裾を、そっと引く者があった。
エルマである。

「さすがでございますね」

彼女は、露わにした夜明け色の瞳に、純粋な称賛を浮かべ、こちらを見上げていた。

「殿下が無事に家族からの『肝試し』をくぐり抜けられるものかと、傲慢にも私、少しひやひやしていたのですが、まったく無用な心配でしたね。【怠惰】のお父様や【暴食】のお父様相手に、あっさり勝利を認めさせてしまうなんて」

「いや……」

どちらもルーカスの実力というよりは、エルマの介在によって、不可解な展開に行きついただけなのだが。

ルーカスは微妙な顔つきになったが、エルマはそれを吹き飛ばすように愛らしくはにかみ、両手を合わせた。

「それに、副次的ではありませんが、私の『普通』についての成長ぶりも、家族に認めてもらえて……。思えば、家族に物申したことなど初めてで、ドキドキしましたが、私、とても自分が誇らしいです」

それは恐らく、モーガンに向かってロンダリングより結婚詐欺を勧めたり、イザークに向かって、ドラゴンの丸焼きより唐揚げを勧めたことを指すのだろう。

ルーカスは遠い目になる。

だが、

「これも、ひとえに殿下のおかげですね。本当に、ありがとうございます」

桃色に上気した頬を晒され、純粋な敬意の籠もった眼差しを向けられ。

それでもなお、「むしろ『普通』から全力で遠ざかっている！」などと否定することは、悲しいことに、ルーカスにはできなかったのである。

「……………そうか」

「はい。感謝の気持ちを込めて、ドラゴン唐揚げは、私も腕によりをかけて調理いたしますね」

「……………そうか」

ただそれだけ、短く頷くと、イレーネやフェリクスから、えもいわれぬ生温かな眼差しが向けられるのを感じる。

ルーカスは静かに視線を逸らした。

15・「普通」の品定め(5)

ルーカスは恋に刺激を求める男だ。

男にはない柔らかさや華やかさ、意外な強かさを持つ、女性という生き物。その存在はルーカスにとって未知であり、だからこそ興味をそそられる。

特に、恋の始まり。

相手が何を考えているのかを探り、自分にはない一面がどうやって形作られてきたのかを想像する作業は、ルーカスの心に、戦闘とはまた異なる興奮を与えてくれる。

未知への好奇心と、そこへ迫れるかの甘美な緊張感。

それを求めて、気が付けばルーカスは「ルーデンーの色男」と呼ばれるまでに、女性を渡り歩くようになったのだ。

が。

(こんな未知と緊張感は、求めていないぞ……!)

ルーカスは、上等な茶器を前に冷や汗を浮かべた。

先ほどとは異なるセットでコーディネートされた、ハイティー茶会の席である。

元は夕食を兼ねていたと言われるハイティーでは、肉料理や酒精も供される。

今、ルーカスの目の前には、芳しい紅茶と湯気を立てるドラゴン唐揚げ、さらには、辛口のエールに上等なブランドー、燃えるよう

なラム、豊潤なワインなどが、彼を見上げるようにして並んでいた。

そして、甲斐甲斐しく世話を焼こうとするエルマの姿も。

「いかがでしょう、ドラゴン唐揚げの味のほどは。たしか殿下は衣薄めがお好きとお聞きし、そのように仕上げてみたのですが。あ、多めにお取り分けいたしますね。レモンも搾りましょうか」

「……ああ……どうも」

「殿下にはラトランドの血も流れていらっしやるわけですから、ハイティーも、きつとお好きでしょう？ お好みの酒類もふんだんにご用意いたしましたので、遠慮なくお召し上がりくださいね」

「……ああ……どうも」

供されているのは、神々の食事と呼んで差し支えない、ハイクオリティの美食だ。

そして隣にいるのは、大陸中を見回してもほかにいないほどの、希代の美少女であり、好意を抱く相手。

それも盛装し、親しみと敬意を込めて、こちらに向かって微笑んでいる。

男ならばまず、快適にならざるをえない状況。

なのに、なぜルーカスが蛇に睨まれた蛙のごとき心境を味わっているかといえは、それはひとえに、テーブルの向かいから発される異様な冷気が原因だった。

「至れり尽くせりだねえ、エルマ。王城内じゃあるまいし、君はここでは侍女じゃないんだ。いくら客人とはいえ、そんなに世話を焼かなくてもいいんじゃない？ 具体的には、もう少し離れたら？」

笑みを張り付けたまま、エルマに申し出る青年　ホルスト。

彼はそのはしばみ色の瞳を、エルマに向けるときだけは春の日差のように穏やかに輝かせ、ルーカスに向けるときは地獄の業火のようにぎらつかせるという、大層な器用さを発揮していた。

「久々の里帰りなんだから、彼のことなんて放つといて、もっと僕たちと話そうよ」

彼はどうやら、あまり人に遠慮しないというか、自分の願望をストレートに表現するタイプの御仁らしい。

この大罪人たちは一様にエルマを溺愛しすぎているが、それでもその愛情には多少の濃淡があるということが、ルーカスにもわかって来ていた。

モーガンは元来の淡々とした性格からか、わりと冷静にエルマとの距離を取っているように見えるし、イザークはさっぱりとした性質なのか、先ほどルーカスを「普通の師匠」と認めてからは、一切こちらを軽んじるような言動はしない。

ギルベルトは、さすが元勇者という肩書がそうさせるのか、エルマを溺愛はしても、他者を排斥するような真似はせず、高いところから娘の成長を見守っている感がある。

リーゼルは時折皮肉っぽい言葉を口にするにはあるものの、物理的な攻撃は特にならない。

精神的にも、物理的にも、明らかにこちらを攻撃しようとしているのは、この、ホルストという年若い男だった。

彼はエルマと歳が近い分、ほかの男性陣とは異なり、娘というよりは妹、あるいは恋人としてでも、エルマを見ているかに思われた。

「ええ、私ももちろん、お兄さまたちとたくさんおしゃべりをした
いのですが……あ、殿下、ソースもよいのですが、ぜひこちらの塩
も。なにしろ揚げ物には塩が『普通』ですのぞ」

「ねーねーねーねー、僕にその塩、先に使わせてくれるー？」

エルマがほかの男のために塩を取ろうとしただけで、それを邪魔
してくる有り様だ。

戸惑うエルマから半ば強引に塩の瓶を奪い取り、ホルストはル
カスに向かつてふふんと笑う。

それから、とん、と白磁の小瓶をルーカスに差し出した。

「君には代わりにこれでもあげよう」

「これは……？」

「塩みたいなもの。ただの青酸カリだよ」

あ、僕が掛けてあげよつか？ と、皿に瓶を傾けかける。

ルーカスは青褪めて皿を守った。

「結構だ！」

「えー、人の厚意を秒で拒否するなんて、感じ悪い」

けつと言い捨てて、どさりと椅子に腰を落とす。

エルマは苦笑して、ルーカスに詫びた。

「申し訳ございません、【貪欲】の兄は、気に入った相手にああし
てちよつかいを掛けることがあるのです」

「掛けようとしたのは、ちよつかいではなく猛毒だろう！？」

「でもほら、青酸カリくらいでしたら、ちよつと解毒すればいいだ
けですし」

「できるか！」

そして一介の囚人が猛毒を所持していることについて、なぜ誰も突っ込まないのだと思ったが、そういえばホルストは、エルマに「麻酔の一つ二つ持ち歩くのは当然」などという「普通」を仕込んだ人物だったと思い至る。

ルーカスはこのように、いつ何が起こるかわからない圧倒的未知と、いっつどうやって命を落とすかわからない究極の緊迫感に、絶え間なく襲われ続けているのであった。

げっそりしていると、エルマが表情を読んだのか、気遣わしげな顔つきになる。

「殿下、顔色が優れないようですが……もしや油がくどかったでしょうか。口直しにさっぱりしたもので」

「え、なに、今度はうちの妹の料理に文句でも？」

ホルストが剣呑な笑みを深め、今度は怪しげな液体を取り出します。まずまず青褪めたルーカスに向かって、エルマは一層心配そうに眉を寄せた。

「大丈夫ですか？ もしや熱でも」

「うわなに、うちの無垢な妹に、男の脂ぎった臭い額を触らせるつもり？ けっがらわしい、消毒が必要だね」

今度は怪しげなスプレー。

さすがにホルストの言いざまにむっとしたのか、エルマはくるりと向き直った。

「お兄様、私の大切な方にそのような仰り方はひどいです。名誉のために申し添えますと、殿下は爽やか体質で、これまで顔を寄せて囁かれたときも、気になる匂いなどは一切なく」
「やめる！ おまえは俺を殺したいのか！？」

エルマがフォローに回るたびに、ルーカスの生命危機レベルが確実に急上昇してゆく。

それも恐ろしかったが、気になる少女に体臭についてなど言及されるというのもまた、耐えられないルーカスなのであった。

彼は思わず、エルマの両腕を掴んで揺さぶった。

「頼むから、今この瞬間はこれ以上俺に構わないでくれ。ここまで一応なんとか勝利を重ねているんだ。敵をこれ以上挑発しないでくれ……！」

ついでに言えば、この「一応」という勝利のもぎ取り方も、ルーカスからすれば本意なのだ。

これまで彼は、その美貌や優れた武技、また要領のよさも手伝って、大抵の局面においてあっさり勝利を収めてきた。

それは女性関係においても同様で、彼が好意を仄めかせば、たちまち女性はしなだれかかり、時にはありもしない「既成事実」をでっちあげて、家族ぐるみで婚約を迫ってきたものだ。

だというのに、エルマはいくらルーカスが好意を示してみたところで、いつも斜め四十五度の方向にしか受け取らない。

あげく、その家族はルーカスと娘の接近を喜ぶどころか、品定めと来た。

ルーカスの勝気な性格からすれば、好きな女の家族から試されているのだとしたら、正々堂々と勝利を勝ち取ってみせたいところだ。なのに、これまで結局、エルマ自身がモーガンとイザークを打ち負かすというか、話の腰を折るような形で、なし崩し的に勝ちを譲ってもらっている格好。

エルマがルーカスに惚れ直すといった展開ももちろんなく、むしろ本人からもイレーネたちからも生温かく見守られて、彼としては大変居心地が悪かったのである。

(あまりに不甲斐ない……！)

そんなもどかしさも込めて告げると、エルマは驚いたように顎を引き、おずおずと頷いた。

「……はい。かしこまりました……」

エルマの委縮した態度に苛立ったのか、ホルストが「ちょっと身を乗り出す。

だがそこに、思いも寄らぬ声が上がった。

「あらま、楽しそうねエ。なんの話？」

リーゼルである。

彼は、軽やかな仕草でティーカップをソーサーに戻すと、代わりに赤ワインのボトルとグラス二脚を掴み、テーブルのこちらへと回ってきた。

そして、すいとグラスの片方をルーカスに差し出し、ウインクする。

「あたしも混ぜて」

気障なはずなのに、気さくさと茶目つ氣の感じられる仕草だった。

彼がやって来たことで、その周囲の空気が途端に華やかなものになる。

悄然としかけていたエルマに、リーゼルは、

「ね。あたし、イレーネちゃんにも香水のプレゼントを用意してるの。食事の匂いと混ざるのは申し訳ないから、部屋の奥のソファセツトに並べてあるんだけど、ちょっと一緒に見てきなさいよ。ルーカスくんはあたしがもてなしておくからさ」

と目先を変えさせて、さっさとその場から移動させた。

ついでにホルストには「あなたはカリカリしすぎなのよ。カルシウムでも摂取なさい」と告げてどばどばと紅茶にミルクを注ぎ、さらにクレメンスを呼び寄せて、「ここの猛毒類、ぜんぶ処分して」と命じる。

すっかり小間使いと化しているクレメンスはぎゃあぎゃあと叫んでいたが、リーゼルはそうやって、あっという間に場の空気を切り替えてしまった。

「いやー、本当はもっと早く止めに入るべきだったと思うんだけど、ごめんなさいねエ」

そうして、ルーカスに改めて向き直ると、彼は滑らかな仕草でワインを注ぐ。

さらには、同じボトルから注ぎ分けたワインを、自ら先に含み、

軽く目で微笑みかけた。

安心して、のサイン。

この獄内で初めて接したと言っていい、誠実で、押しつけがましくない気遣いの行為だ。

軽く目を瞞ったルーカスに、リーゼルは苦笑を浮かべた。

「この連中、ちょっとイカれてるでしょ。……ま、あたしも多少はそうかもしれないけど。外の人間からすれば、異常極まりないっていうか、心休まらない空間だと思う。今更かもしれないけれど、改めて言わせて。ごめんなさいね」

飾らない物言いと、抑揚の利いた口調は、実に真摯に響く。

警戒心を最大値まで引き上げていたところに、突然下手に出られて、ルーカスはわずかに動揺した。

「いや……」

「無理しなくていいのよ。あなたの感覚の方が正しいもの。ただ、言い訳だけさせてもらえたら嬉しい。正直に言っと、そのために、機会を窺ってたのよ」

反射的に紡ごうとした社交辞令も、あっさりと躲される。

しかも「あなたが正しい」と正面から肯定され、「正直に言っと」などと告白され、あまつさえその目的がやけに好意的なもので。

リーゼルの姿は、異常空間で擦り切れかけていたルーカスに、もはや誠実さの塊とでもいうように映った。

「あたしたち、監獄（トウ）にいるって以上、一応それぞれ訳ありでさ。隔絶された空間でエルマっていう、無垢で純粋な存在に出会ってしま

ったものだから……あの子が愛しくて愛しくて仕方ないのよ」

彼はワイングラスを揺らしながら、ちよつとばつが悪そうに微笑む。

「そんなところに、あなたたちシャバの人間を、初めて『大切な人』って連れてきたものだからね、どうしても浮き足立つちゃうの。品定めだなんて失礼な話だけど、要は、あなたたちがどういう人なのか、気になって仕方ないのよ」

自嘲まじりの言葉は、どれも真つ当に聞こえる。
ルーカスは慎重にワインを口に含み、相槌を打った。

「……それが親心というものなのだろうと、理解している。行き過ぎているとは思つが」

ワインは、ルーカスが未だかつて味わったことのないような、芳醇な香りがした。

「そ、行き過ぎ。安心して、あたしはさすがに、彼らみたいな真似はしないわ」

「……ほう？」
「だって、こつやつてワインを飲み交わして、話すだけで、人となりなんてわかるもの」

もちろん、あたしだってあなたのが気になって仕方ないけど。

リーゼルはふふつと悪戯っぽく笑う。

ハイデマリーの噫せ返るような色香とはまた異なる、中性的な魅力がそこにはあった。

気さくで、誠実で、けれど軽妙で。

ほんのわずか、嫌らしくない程度の駆け引きのスリルが滲む。

そう、とても人間として魅力的である、とても言うような。

「だから……このワインを飲み終えるまで。ちょっとだけ、お話し
ましょ」

広いテーブルの片隅では、フェリクスがしげしげとブランデーの
瓶を眺めている。

エルマとイレネは視界の端で、楽しげに香水を選び、ギルベル
トやイザークといった大罪人たちも思い思いの姿勢で紅茶を楽しん
でいる。

同じ空間内にいるというのに、今、ルーカスとリーゼルの周囲だ
け、緩やかに切り取られてしまったかのようにだった。

相手の声だけが、やけにくっきりと聞こえる。

しかしそれは、まるで馴染みの酒場かカフェにでもいるような、
心地よい隔絶感であった。

「さ、乾杯」

くい、と板に付いた動きでグラスを持ち上げるリーゼルに、ルー
カスはいつの間にか、ほぐれた表情で同じ仕草を返していた。

「おやおや」

ティーマスターとして、紅茶のお代わりを準備すべく席を立っていたモーガンは、ルーカスとリーゼルが和やかにワイングラスを傾けるのを見つけて、片眉を上げた。

「もう始まっていたか」

すると、大量のドラゴン肉を頬張っていたイザークが、口をもぐもぐとさせたまま頷く。

「ああ。宣戦布告も、無くな」

「やれやれ、【怠惰】と【暴食】が既に彼を認めているんだから、品定めなどお開きにしたらいいものを」

紅茶を啜りつつ、ギルベルトが呆れ顔でそう言つと、ルーカスの向かいの席を追い払われたホルストが、ふんと鼻を鳴らしながらこちらにやって来た。

「【憤怒】がそう言うのは、部屋に戻ったマリーを早く追いかけたいからでしょ。だいたい、【怠惰】も【暴食】もちよるすぎるんだよ。敢闘賞で友人認定なんかしてどうするの。ああいう男は、害虫と一緒に。最初は『友人』なんてしおらしい顔してても、すぐにのさばって、美しい花を横暴に蝕むようになる。初期時点で駆除しなきゃ」

彼は手近な椅子を引きずり、モーガンたちの近くに落ち着くと、ミルクの入りすぎた紅茶に暴力的な量の砂糖を加え、不機嫌そうに

啜った。

「僕は、僕を超える男でなきゃ、エルマに好意を寄せることすら認めたくないね」

それはつまり、大陸最高水準の医者や錬金術師であっても、箸にも棒にも掛からないということだ。

ホルストは、さら、とカップに沈む砂糖を舐めながら、ちょっとだけ愉快そうにリーゼルを見た。

人の心を許すための完璧なL字型布陣、ごく微量の精神安定剤入りワイン、こっそりと肌から漂わせている、暗示作用のある香。

そして、軽妙さを装った、周到な誘惑。

「やっちゃえ、【嫉妬^{リーゼル}】。色男の化けの皮を剥いで、無垢なエルマの目を覚ましてあげて」

イザークによってうやむやになったと思われていた「肝試し」は、今、リーゼルに引き継がれ、密かに第三戦の幕を上げようとしていた。

16・「普通」の品定め(6)

「あん、危ない」

不意に窓から吹いてきた夜風に、騎士を模した指人形がテーブルから落ちてしまったのを見て、ハイデマリーは慌てて片手を差し出した。

柔らかな白い手は、勢いづくあまり、人形をかえって天井近くまで跳ね飛ばしてしまったが、なんとかテーブルの上、ダイニングの間取り図の辺りまで戻ってくる。

ハイデマリーはそれを丁寧に、テーブルのイラストが描かれた部分に置き直すと、他の人形たちを動かし、バランスを整えた。

「……おい。その腹であまり屈んだりするのではない」

「お気遣いありがとう、テレジア様。でも受け止めてあげないと、繊細なお人形が壊れてしまうもの」

ハイデマリーはくすりと笑って、騎士の人形をよしよしと撫でる。お茶の時間にしましょう、と言って、テーブルの絵の描かれたあたりに人形を移動させる様子は、さながらあどけない女兒のようだ。

が、にこやかに人形を操る彼女から、得も言われぬ異様な雰囲気を感じ取って、テレジアは無意識に眉を顰めた。

(なんなんだ、この女は……)

一見する限りでは、ただただ美しい、儂げな女。
だが、娼婦さながらの噎せ返るような色気をまとうたかと思えば、
貴族子女のような気品を見せ、かと思えば、幼子のように無邪気に
人形遊びを始める。

その言動はとりとめがなく、対峙するテレジアに本能的な警戒心
を与えた。

(この女を見ていると……なにかひどく、違和感を覚える……)

テレジアは顎を引き、じっと向かいの相手を検分する。

緩く結び上げた銀の髪、白磁のように滑らかな肌。

穢れを感じさせない美しい瞳は、不思議なことに、世間知らずだ
った妹にも似ていた。

どこか浮世離れた、神聖さすら感じさせる美貌。

(まとう雰囲気は気になるのか……？ それとも、他に何か……？)

自身が何に反応しているのかわからず、険しい顔で凝視している
と、突然、

どごおおお……ん！

外から爆音が響いたので、テレジアは咄嗟に腰を浮かせた。

「な……っ！？」

「あらあら、盛り上がっているわねえ」

が、目の前の女性はさして気にした素振りもない。

想定内だとしても言うように、のんびりと窓の外を眺め、それからしばらくして、なぜか「あら」と目を瞬かせた。

「テレジア様はご存じでした？ ドラゴンは、唐揚げで塩が『普通』なのですって。わたくし、知らなかった」

「……は？」

「ふふ、失礼。気になる話題が聞こえたものだから、つい」

軽やかに詫びられ、テレジアの眉間の皺がますます深まる。

先ほどの爆音と、ドラゴンの話がなぜ繋がるのかわからない。それに、この部屋にはテレジアと彼女の二人しかおらず、しんと静まり返っているというのに、「聞こえた」とはいったいどういうことか。

だが、それらの問いを口にしても、

「わたくし、とても耳がいいの」

ハイデマリーはふふっと笑っただけだ。

（仮にどこかの会話を拾ったのだとしたら まさか、棟も異なるダイニングから？）

不意にぞく、と背筋の冷える感覚がして、テレジアは顔を強張らせてハイデマリーを見た。

美貌の女王はそれに気付くことなく、熱心に指人形を並べ直している。

テレジアと話したいと誘ってきたわりに、彼女は相手の動向には

まるで無頓着のようだった。

「ああ、困ったわねえ。姫君と騎士をくっつけてあげたいのに、この席の配置だと、どうしても邪魔が入ってしまう。どう並べてあげたらいいのかしら？」

彼女は目下、指人形の席次に悩んでいるようだ。

そんなもの適当に並べればいいではないかと思うが、彼女は「これはおもてなしの訓練だもの。ゲスト全員が気持ちよくなれるよう、よくよく人間関係に配慮して並べなくてはね」となぜか意気込んでいる。

医者 of 恰好をした人形を姫の隣に座らせ、やはり考え直して移動させ、代わりに魔女の人形を騎士の横に付けたあたりで、ハイデマリは溜息を漏らした。

「だめだわ。姫君への皆の愛が強すぎて、手の打ちようがない」

本気で嘆いているようである彼女を、テレジアはつい異様なものを見る目で見つめてしまう。

すると、ハイデマリはちらりと視線を上げ、きまりが悪そうに微笑んだ。

「ごめんなさいね、あなたを放ってこちらに夢中になってしまってもね、親としてはつい、子どものことが気になってしまうの。娘に見立てた人形の扱いを間違えたら、あの子が不幸になってしまう気がして……。この親心、テレジア様なら、わかってくたださるでしょうっ？」

あいにくテレジアは、人形遊びと現実を混同するような幼い精神

の持ち主ではない。

だが、それ以上に気に食わないことがあり、つい彼女は言い返していた。

「さつきから母だの親心だの、思わせぶりに………いったいおまえは何が言いたいだ」

「テレジア様は情愛深い方ですね、と言いたいですわ」

「なんだと？」

テレジアは眉間の皺を深める。

鋭い目つきでひとにらみすれば、権力とその気迫も相まって、大抵の相手は青褪めたものだ。

が、目の前の女は困ったように肩を竦めるだけだった。

「あら、わたくしの認識が違っていて？ だってそうでしょう、あなたはとても情愛深い方。大切な者に降りかかった禍を自分のことのように受け止め、茨の道を進んでまで、責任と秘密を守り通す方だわ」

「……………！」

ハイデマリーの口調は迂遠そのものだ。それでも、テレジアに息を呑ませるのには十分だった。

「おまえは………何を知っている………？」

「すべてを」

答えは短く、揺るぎない。

ハイデマリーはその藍色の瞳を猫のように輝かせ、じっとテレジアを見つめた。

そこには、聖女のような神聖さと、相手から言葉を奪うような、奇妙な迫力があつた。

「言ったでしょう、わたくし、とても耳がいいの。だから、あの日雨に掻き消されてしまった悲鳴も、産声も、ちゃんと聞こえたのよ。その時には意味が解らなくても、こうして遊戯に集中していればね、すべてが一本の糸に繋がってくるの」

「な……にを……」

圧倒され、腰を引いたテレジアを憐れむように、ハイデマリーは優雅に立ち上がる。

彼女は美しい顔に憂いの表情を乗せて、ゆっくりとこちらに近づいてきた。

「ねえ、どうか怖がらないで。わたくしはあなたにお願いしたいだけ」

「願……い……?」

「あなたは、これから降る雨の意味に気付いてしまえる、この場で唯一の人。私もあの雨の日のことを誰にも言わないから、あなたもどうか、これから降る雨のことを、周りに告げないでほしいの」

ハイデマリーはそつとテレジアの手を取り、親しい友人のようにソファに隣り合つて座らせる。

相手から立ち上る芳しい香り、そして、見るだけで頭の芯が溶けてゆくような心地のする美しい瞳。

テレジアはぼうつとなつて、ただ虚ろに言葉を反芻した。

「雨……?」

「一生とは言わないわ。そうね、雨が止むまで……夜明けくらいまでかしら。あなたは、ただ黙っていてくれればそれでいい。これま

でのように、誰にも縊らず、秘密をそつと、身の内に閉じ込めておいてくれれば」

燭台の揺れる光を、淡く弾き返す銀の髪。

複雑に結われた髪が、また一筋はらりと肩に零れるのを見て、テレジアははつと息を呑んだ。

一気に意識が覚醒し、抱いていた違和感の正体に気付く。

「まさか、おまえ……！」

窓の外　濃紺の夜空に、その時、細い雨の粒が落ち始めた。

(んふ、なかなかいい男じゃなァい)

間近で遠慮なくルーカスを観察しながら、リーゼルは内心で唇を吊り上げた。

甘いマスクに精悍な体つき。

先ほど披露した剣技は惚れ惚れするほどだったし、声は荒げども乱暴な口は利かない品のよさや、意外な面倒見のよさも高得点だ。

まだ二十になっただけ、という点で青さも目立つが、エルマの「友人」　ひいては恋人候補としての年齢的釣り合いを考えるなら、それも許容の範囲内と言えた。

（気さくで、身分差を気にせず振舞う豪胆さもあるけれど、同時に自分の立ち位置や、周囲との距離感は慎重に計算している気もある。要領のよさと、それを外面のよさに隠せるだけの強かさがあるってことね。こういう男って、えてして本性はドライなのよ。弟タイプね。星占いで言うなら双子座）

にこやかに相槌を打ちながら、つらつらとそんなことを考える。リーゼルは女なので、つい占いの類に人を当てはめて楽しんでしまう傾向にあるが、同時にその性格分析は鋭かったりもする。

言葉選びやちよっとした仕草、視線の動きや座り方まで網羅的に情報を総合し、見る間に相手の性質を掴んでゆくのだ。

詐欺師モーガンもその手のことは巧みだが、リーゼルのそれは、「女の勘」という無意識的な要素まで加わる分、よりダイナミックとも言えた。

（女慣れは……相当しているわね。ただ、誠実さも感じられる。恋人である間は、惜しみなく愛情を注ぐタイプね。それってつまり『相手に興味がある間は』ってことだけど……そこがちよっと気に掛かるかしら）

リーゼルはワインをひと口啜るまでの間に、ルーカスのおおよその恋愛遍歴や、恋の終焉の原因までも当たりを付けてしまった。

恐らく、飽きっぽい性格のはずだ。

もともとの性質に加え、ずっと「選ぶ側」にいた傲慢さから、情

を引きずることなしに、躊躇いもなく相手を切り捨ててしまえる。

自らが手塩をかけて育てた「娘」^{エルマ}なら、まさかそこの平凡な少女のように、相手から早々に飽きられてしまうなどということはま
ずないだろうが、万が一の可能性であっても拭い去りたいと願うの
が親心というものだ。

（もし、あたしの可愛いエルマを、そこの女のように弄ぶのだと
いうなら、今の内からねじ切って捻り潰す。それでもって……きれ
いに潰したら、あたしの奴隷にしてあげてもいいかも）

娘に近づく男を容赦なく撃退しようとする父性と、いい男を前に
舌なめずりする女の欲は、リーゼルの中で矛盾なく存在していた。

今、同じタイミングでワインを口に含んだルーカスは、確実に先
ほどよりもリーゼルに心を許しはじめている。
そろそろ、さりげなく彼自身の話題に移行していつてもよいだろ
う。

話を聞き出し、感嘆してみせ、まずは好意と信頼をきっちり引き
上げてゆく。

そこで滑らかに洗脳や暗示を施せば、男の欲望を引き出すなど造
作もない。

リーゼルが望めば、性別すら超えて、大陸中の誰もが這いつくば
り、愛を求めて手を伸ばすのだ。

（ま、唯一手を伸ばさない人間がいたとしたら、あの女くらい
かしらね）

脳裏にちらりと誇り高い娼婦の姿がよぎるが、リーゼルは瞬きも

せずにその思考を振り払った。

今対処すべきは、目の前の色男だ。

愛の言葉を囁かせてやってもよいし、戯れに求婚させてみてよい。

（ああエルマ、あなたはショックを受けるのかしら。でも、それって必要なレッスンだわ。後であたしがちゃんと慰めてあげる。あなたのこと、ルーカスくんのこと）

内心では魔女さながらに唇を吊り上げ、しかし表面上はあくまで気さくに、リーゼルは「美味しい」とワイングラスを揺らした。

17・「普通」の品定め(7)

「で……っ」

心行くまで香水の香りを堪能し、なにげなくテーブルを振り返ったイレーネは、そこでぎよっと目を見開いた。

(殿下が、エルマのオネエ様に誘惑されてる……！？)

彼女の視線の先には、和やかに談笑するリーゼルとルーカスの姿があった。

一見した限りでは、笑みを湛えてグラスを傾け合う図は、気の合う友人たちといった感じだ。

二人とも見目のよい男性同士なので、普通の女性がその様子を見たならば、「まあ、似合いの友人なこと」などと微笑ましく思うのかもしれない。

が、腐蝕したと書いて、「真実の」と読む 眼を持つに至ったイレーネは、その二人の間に横たわる密やかな緊張感を、性別などというフィルターに誤魔化されることなく、見抜いてしまった。

(さりげなく詰められた距離、そして自然かつ嫌みの無いボディタッチ。己の表情を一番魅力的に見せる角度での笑顔……。間違いない、オネエ様は、殿下を落とそうとしているわ……！)

一応イレーネとて、それなりの社交界経験を積んだ男爵令嬢だ。侍女として、王宮の片隅で繰り広げられる禁断の恋や、火遊びとい

ったものも、多少は目にしてきた。

なにより、同性間での恋愛について人一倍許容度が高い　なんなら、煙が立っていないところにさえ火を認定してみせる彼女だからこそわかる。

リーゼルは、ルーカスを誘惑しようとしているのだと。

イレエネは目の前の光景を凝視したまま、静かに冷や汗を浮かべた。

(な……っ、なぜここに来てこんなことに……！？)

ここまでの時点で、目まぐるしく変化する展開に、既に彼女はすっかり取り残されていた。

突然クーデターに巻き込まれて監獄にやって来たと思ったら、怒涛のもてなしを受け、震撼のディナーに招かれ、なぜかルーカスの品定めに移行し、かと思ったら突然場の空気が緩んでお茶会。

エルマの同性の友人である自分は、首尾一貫して厚遇されているが、ルーカスについては、大罪人たちが彼をもてなそうとしているのか、疎んでいるのか、よくわからない。

「『で』が、どうかしましたか？」

とそこに、背後から不思議そうに声を掛けられて、イレエネははっと振り返った。

エルマである。

彼女は、リーゼルの言いつけ通り、大量の香水を披露すべく、イ

レーネを部屋奥のテーブルに案内してくれていたのだった。

邪気の無い瞳でこちらを窺うその姿は、珍しく素顔を露わにし、ドレスアップしていることもあいまって、大層愛らしかった。

「で……、で……デトックス作用のある、香水がいいなー、なんて……」

夜明け色の瞳に真つすぐ覗き込まれレーネは、咄嗟にそう誤魔化してしまう。

彼女はかねてからルーカスとエルマのカップリングを推してきたというのに、まさかのライバルがぶち込まれたことに、動揺を隠せなかったのだった。

「デトックス作用ですか？ ああ、それならこの辺りなどお勧めですが」

「あるの!？」

「ええ。これは【嫉妬】のお兄……姉様がデトックス目的専門で調合した、オリジナル香水ですね。ひと噴きするだけで、たちどころに心身の毒素が抜け、憑き物が落ちたように大人しくなると評判です。ただし、香りが切れると少々乱暴になるそうですが」

「……それって洗脳とか調教って言うんじゃないかしら」

相変わらずツッコミどころ満載の大罪人たちだ。香水の香りというよりもむしろ、犯罪の匂いしかない。

輝いて見えていた香水瓶が、不意に異様なオーラをまとったように感じた。

「もしかして、私も、下手を打つたらエルマのご家族たちに殺されるの……?」

だが、顔を引き攣らせて指摘すると、エルマは驚いたように首を振る。

「何を仰るんですか！ とんでもない！ イレーネや殿下は、私の初めての、大切な友人。丁重にもてなしたいと伝えたら、お姉様はじめ、家族全員とても喜んで、この日のために、いろいろと心を砕いて準備してくださったのですよ」

その発言に、嘘や誇張の色はない。

恐らく、エルマは本当にイレーネたちをもてなそうとしたのだし、大罪人たちもまた、イレーネたちの訪問を偽りなく喜んで、心尽くしの品を用意したのだろう。

ただ、それがことごとく常軌を逸しているだけで。

「私も家族も、友人を家に招き入れるなど初めてのことで、すっかり舞い上がってしまったている感は何もないのですが……、でも、短い期間ながら、あれこれ相談したり、準備をしたりするのが本当に楽しくて。自慢の家族をイレーネたちに紹介できるのが、本当に嬉しかったですし、しかもその家族がもう一人増えようとしているなんて……。もう、私、幸せでいっぱいです」

頬を染め、はにかんで告げるエルマは、うつかりその場に蹲って悶絶したくなるくらい可憐だ。

イレーネは丹田たんでんに力を込め、ぐっと拳を握り、さらには「うぐお……」と低い声を出すことによって、さりげなく衝撃を逃した。

わかりたくないが、わかってしまう。

大罪人たちが、どうしてこんなにも、彼女を溺愛してしまうのか。

どれだけ深く、この純粹で善良な少女を愛しているか。

（私だって、もしエルマが変な男や、新しい友達を連れてきたなら、そりゃもう重箱の隅を針でほじくるくらいに詮索しまくると思うもの……！）

特に男。

そこんじよそこらの男ではダメだ。

ルーカスは優良物件だと思うし、彼の真面目な一面も知っているため、自然と応援することができるとは思うが、そのルーカスであっても、万が一彼がほかの女に手を出そうものなら、自分は即座に彼を全力で排除しにかかると思う。

と、そこまで考えたとき、イレーネははっと目を見開いた。

（まさか……つまり、オネエ様のモーションって……そういうこと！？）

ようやく真意にたどり着いて、彼女はますます冷や汗を流した。今度は、ルーカスの身の安全を危ぶむ冷や汗だ。

（ま……まずくない！？ お歴々の能力の高さを考えるに、殿下なんて一発でノックアウトじゃない！？）

ルーカスの女性遍歴を侮るわけではないが、はっきり言って分が悪すぎると思う。

ここの住人たちは、みな異常だ。彼らは突き抜けて有能だし、モラルや常識を平気でかなぐり捨ててかかるし、だからこそ、奇妙な魅力に富んでいる。

一国の貴族令嬢を集団で洗脳してみせたという誘拐犯が、ちよつと暗示や薬剤を用いれば、血気盛んな若い男の一人二人、簡単に陥落させてしまえるだろう。

そして、もしそうなれば、リーゼルはあっさりと掌を返し、ルーカスを容赦なく攻撃するに違いない。

恐らくは、遠巻きにそれを観察している、ほかの「家族」たちも。

品定め第三戦は、とつくに始まっていたのだ。

(ど、どうしよう……！ 割って入って、殿下を引きはがすべき！？ ああでも、これは殿下の品定めなのだから、私がしゃしゃり出るのNG……！？ でも、でも、エルマの前で、殿下がオネエ様に跪きでもしたら、それってすぐショックな現場のような……！)

正直、エルマがどれほどの衝撃を受けるかはわからない。

あくまでルーカスを「友人」としか見ていない彼女なら、なんら問題はないのかもしれない。

だが、問題なさすぎるのが、逆に大問題を引き起こす恐れもあった。

(例えば、誘惑される殿下を笑顔で見送ったり、あまつさえ応援したり……！ うわ、エルマにとどめを刺される殿下の姿が見えるようだわ……！)

これまでの付き合いから、エルマシミュレーターと化したイレーネは、己のあまりに精密な予測に青褪めた。

冗談めかした言動の合間に、ルーカスが実は誠実な想いを忍ばせていることを、イレーネは知っている。

その想いを、そんな形で蹂躪されるのは、あまりに彼が可哀想だ。

(それでも、私の三次元^{リアル}での推しカプは、殿下×エルマなんですからね……！)

推しの不幸は、回避せねば。

ひとまず、この不穏な現場からエルマを遠ざけようと決心した瞬間、

「あれ？ お姉様、もしや殿下を誘惑しようとなさっている…

…?」

こともあろうくに、イレーネの視線を辿ったエルマが、後ろから不思議そうに首を傾げた。

「あ……っ、あっ、あっ」

「そうですね？ あの微表情、あのパーソナルスペース、あの声のトーン」

「あっ、あ、あ……!」

「ふむ。わずかな会話の中に散りばめられたゴルディロックス効果、返報性法則、ミラーリング、コントラスト原理……」

動揺したイレーネが、ぱくぱく口を開きながら押し返そうとするのを、エルマはひよいと躲してテーブルを覗き込んでしまう。

それから、「もう」と、不満そうに眉を寄せた。

(……………!?! エルマが、誘惑される殿下に、苛立っている……

!?!)

もはや、自分の知らないところで、実はエルマもルーカスに惹かれはじめていたりしたのだろうか。

驚愕しつつも、嬉しい誤算に目を輝かせたイレーネを、しかしエルマは次の言葉で現実に引き戻した。

「まったく。お姉様だったら、シャバ式の誘惑の仕方をご存じないのですね」

「え……？」

「シャバの殿方には、そういった迂遠な誘惑よりも、肌を露出させるタイプのアプローチが一般的。そうでしょうか？」

「は……っ!？」

いつの間に、そんな『普通』が彼女の中に植え付けられていたのか。

愕然とするイレーネの前で、なぜかエルマは、きちんと結び上げていた自らの髪を乱しはじめた。

「私もあまり、シャバの殿方の生態を存じ上げているわけではございませんが……。一番身近、かつ『普通』の師匠たる殿下は、以前はよく、胸元に女性の香水や口紅を付着させていたようにお見受けします。噂では、夜の町だと目が合っただけで女性がしなだれかかってくるので、『全自動テイクアウトのルーカス』と称されていたとか」

「そうなの!？　ってというかそのネーミングセンスどうなの!？」
「すなわち」

エルマは首元のリボンの結び目に指を掛けると、きりりとイレーネを見据える。

「シャバの誘惑とは、しなだれかかること」

そう言って、しゅる、とりポンを解いてしまおうではないか。

たちまち、ほっそりとした白い首と、繊細な鎖骨の一部が露わになる。

真珠のような肌の上を、艶やかな黒髪が這い　　普段の端然とした雰囲気とは打って変わった、噓せ返るような色香に、イレーネは思わず息を呑んだ。

「色恋慣れしている殿下に対し、お姉様が監獄式の迂遠な誘惑を仕掛けて、恥をかいてはなりません。ここはひとつ、僭越ながら私めが、シャバ式の誘惑というものを例示　　」
「待った――――！！」

息を呑んだが、イレーネはがばつとエルマに抱き着き制止した。

「お願いだから殿下を殺さないで！　死んじやう！　それ、絶対に死んじやうから！」

恐らくルーカスは、エルマの悩ましさに瞬殺され、ついで己の存在がエルマにとってアウトオブ眼中である事実之魂を殺され、最後、愛娘にしなだれかかられたことを理由に、大罪人たちによって物理的に殺されるだろう。

たった一度しかない人生、なにも三度も死ななくても。

義理、人情、そして道徳心の三つが、イレーネを必死にさせた。

「エ、エルマ、外！　外の空気を吸いに行きましょう！　私、そう、

腹ごなしに散歩したいかなあなんて！」

「え……ですが、なにやら窓の外からは、雨音が聞こえてくるようですが……」

「あつ、ああ、雨。雨ね！ うん、いいじゃない、雨の夜の散歩！ それもまた乙なり、よ。親友同士でしかできない感じ。すごく素敵。すごく『普通』！ ね!？」

「『親友』……『普通』……」

苦し紛れにひねり出したフレーズに、エルマは心惹かれたように振り向いたが、しばらく考えると、躊躇いがちに視線をルーカスたちへと戻してしまう。

「ですが、やはりお姉様に恥をかかせるのは忍びないです。ひとまず、以前シャバの歓楽街で拝見した、『襟元を寛げて胸を押し付ける』スタイルだけでも伝授してから
「やめてえええええ！」

イレーネは光の速さでエルマの胸元のリボンと髪を結び直した。火事場の馬鹿力を発揮して、エルマをぐいぐい引っ張る。

なんとか香水瓶の並んだ部屋の最奥まで戻ってくると、声を潜めてエルマを叱った。

「よくつて、エルマ。殿方の、そして溺愛系男性家族の前で、みだりに服を寛げるものではないわ。だいたいあなた、さっきも殿下に余計な手出しはしないでくれって言われていたじゃない」

「余計な手出し……」

エルマははつとした顔つきになると、それから神妙に頷いた。

「……そうでした。危うく、また殿下のお怒りを買うところでした」

「どうやら、ルーカスの発言を受けて、それなりにへこんでいたらしい。」

「しゅんとなったエルマを見て、今度はイレーネの良心が痛みだしたが、天秤の片方には世界平和と人命がかかっている。心を鬼にして、再度関心を逸らそうと口を開いた。」

「のだが。」

「やあ、なんだかすごいことになって来たねえ」

そこに、ティーカップを持ったフェリクスがやって来た。

「どうやら彼は、ティーテーブルからこちらのソファセットに席を移ってきたらしい。」

「なんだか、あのテーブルにいると、よくわからない冷気に襲われて、どうしてもこちらに移動しなきゃ、っていう気になってさー」

「ああ……。それは【嫉妬】のお姉様の仕業ですね」

「フェリクスが不思議そうに告げると、エルマはこともなげに頷いた。」

「対象者を確実に陥落させたい場合に、周囲がそれを邪魔しないよう、さりげなく場を立ち去るよう促すという、お姉様が独自に編み出した暗示技術です。いわゆる洗脳結界ですね」

「うん、いわゆるっていうか、まったく聞いたこともない現象だけ」

「フェリクスが笑顔で突っ込んだが、エルマはもの思わしげに眉を寄せるだけだった。」

「洗脳結界を張ってまで……お姉様、本気なのですね」

全力で常識外れの振る舞いをする身内を、憂えるかの口調だ。

だが、エルマの解説を聞けば聞くほど、イレエネたちはむしろ、ルーカスの身が心配になってきた。

「ねえ……今、オネ工様がさりげなく指先を擦り合わせたように思っただけだ」

「ああ、あれは、予め小容器に隠してあつた暗示の香を、擦り合わせることで揮発させているんですね。やはり、殿下にはそうした物理的揺さぶりをかけないと難しい、と判断したのでしょう」

「なんかさ、よくよく耳を澄ませてみると、ルーカス、結構精神にくることも言われてるっぽいんだけど」

「ああ。過去のトラウマを利用した暗示に移行したようです。殿下の恋愛耐性が強すぎて、まずは心を折らねば隙が生じないと考えたのでしょう」

「ねえエルマ……。なんだか、オネ工様の姿を見ているだけで、だんだん私も、動悸がしてきたのだけど……すごく、オネ工様が魅力的に見えるっていうか……」

「サブリミナルですね」

香による身体攻撃、過去まで遡った精神攻撃、サブリミナル視覚的刷込みと、もはやそれは、恋の駆け引きというより、命を賭けた戦闘行為のように見える。

テーブルの反対側で見守っていた大罪人たちも、リーゼルの本気ぶりに、静かにドン引きしはじめた。

「うっわ……あの香、めっちゃくちゃ中毒性が高いやつだよ……えげ

つな……」

「久々に彼の本気を見ましたね……」

「あれはもはや誘惑と言うより、攻撃ではないのか」

「む……なんだか、俺まで、眩暈が……」

動揺しながら、ひそひそと囁き合う。

動体視力に優れたイザークなど、うっかりサブリミナルが効いてしまい、呻きはじめた。

いや、彼だけではない。

遠巻きに二人を見守っていた周囲は皆、リーゼルの繰り出す渾身の誘惑術の流れ弾に、次々と当てられていった。

「やばっ、香をちょっと吸っちゃった……！ くらくらする……」

「く……、話術だけでなく、五感全てを揺さぶりに掛かっていますね……！」

「俺には世界一美しく素晴らしい妻が……！」

「目が……！ 目が……！」

いろいろとぶっ飛んでいる大罪人たちでさえこれなのだ。一般人のイレエネたちなど、ひとたまりもなかった。

「はあ……っ、リーゼルオネ様、……っ、素敵……！」

「やばいなー、ちょっと僕も、彼から目が離せなくなってきた……？」

視線の先、ワイングラスを傾けるリーゼルが、ひどく魅力的に見える。

琥珀色の瞳は、まるで熟した樹液のような濃密な色香を湛え、薄い唇にはミステリアスな微笑み。

グラスの脚をなぞる指先も、頬杖をついたまま小首を傾げる仕草も、ただの女ではあり得ない、複雑で奥深い艶に満ちている。

堂々たる女王というよりは、沼に引きずり込んでくる魔女のような、蠱惑的で、不思議な磁力。

喉が渇く。

視線が彼から離せない。

いつしか全身が、彼の存在に溺れたがっていた。

ああ、これが恋なのだろうか。狂おしく彼を求め、跪きたくなる。一言命じられれば、命だって捧げるのを躊躇わぬ、嵐のように凶暴な感情。

ふら、と、ルーカスが椅子から立ち上がった。

見ているイレーネにはわかる、彼はその場で跪こうと言うのだから。

這いつくばり、足に口付け、永遠の忠誠を誓う。

先ほどまであんなにそれを阻止しようとしていたくせに、今や彼女はそれを自然なこととして受け止めていた。

だってそうだろう。

こんなの、逆らえない。

自分だってそうする。

「ルーカス殿下……」

そのとき、イレーネの横で大人しく推移を見守っていたエルマが、

ぽつんと呟いた。

「それでよいのですか……?」

小さな小さな独白。

非難と言うよりは、素朴な驚きと、微量の戸惑いを含んだ声。

だがそれを聞いた瞬間、イレーネは、自身をいつの間にか取り囲んでいた膜のようなものが、ふっと消失したかの感覚を抱いた。

ぼんやりとしか追えていなかったルーカスの行動が、ようやくくつきりと像を結ぶ。

ふらついたように見えていた彼は、思いのほかしつかりとした足取りで床に膝を突き、それから、すぐに立ち上がった。

「え……?」

「落としたぞ」

驚きに目を瞪るイレーネたちの前で、ルーカスはリーゼルに向かって、滑らかな仕草で片手を差し出す。

その手の中には、ごく小さな貝殻が収まっていた。

「とどめに使った、暗示の香　だろっ?」

「……………!」

リーゼルが静かに息を呑む。

ルーカスは器用に片方の眉を上げ、小首を傾げてみせた。

18・「普通」の品定め(8)

ルーカスは器用に片方の眉を上げ、小首を傾げてみせた。

「貝殻の中に収めるとは、洒落たものだ」

軽やかな褒め言葉。

けれどそこには、気迫、のようなものが滲んでいる。

しん、と静まり返った空間で、「なんか……」とフェリクスは驚いたように囁いた。

「空気、一気に変わったね……？」

「ええ……。ええ……。！ 見えました。私にも見えましたわ、殿下が受けから、一気に攻めへと転じた決定的瞬間が……！」

「あー、『守り』から攻めに、じゃないんだ？」

礼儀上フェリクスがそのあたりを突っ込むが、イレエネの耳はそれを拾おうとはしなかった。

こつ、と靴音を立ててリーゼルとの距離を詰めてゆくルーカスから、目が離せなかったからである。

「な……。あなた、いつから香の存在を見破ってたの……！？」

「さて。いつからだと思う？」

容易に御せると思っていた相手が、にわかには肉薄してきたことでリーゼルが動揺すると、ルーカスは薄く微笑む。

そればかりか、彼はと……。とテーブルに片手を突いて、その長身で、座ったままの相手を腕の中に閉じ込めるような行動に出た。

「こ、これは……っ！ 壁ドンを応用した卓ドン……！ 物理的構図からも、自分が覆いかぶさる側だと、相手に示しているわけですね！？」

「真相をすぐには明かさない辺り、なかなか策士だねえ」

一気に優勢に持ってきたルーカスに、実況・解説者と化したイレネとフェリクスは目を輝かせる。

どう返すべきかをリーゼルが逡巡した、そのわずかな隙に、彼はぐっと顔を近付け、にやりと笑ってみせた。

「これでも、強引な女や毒殺の危機を、二十年近く回避してきたものでね。媚薬や色恋系の暗示の類には、ある程度耐性があるんだ。コツは単純。必要以上に近付いてきた相手の前では、飲まない、息を殺す、目を逸らす」

そうしてルーカスは、ワインを染み込ませた小ぶりなタオルを掲げてみせた。

「申し訳ないが、この怪しげなワインは、『木綿、その先へ』に飲ませてしまった。さすがの吸水性だ」

「なんと……！ 常に掛け算の左側の地位をキープしてきたドスタイプの絶対攻者ガチ攻めでないと浮かべえないという『キング・スマイル』が、まさか殿下から発動する日が来るなんて！」

「さりげなく監獄製のタオルを取り入れて意趣返しとは、一抹の腹黒さも感じさせるねえ」

意外にも息の合った二人の実況ぶりだ。

「そんな……あの香に耐性があるほどだなんて……」と呆然と呟く

リーゼルに、ルーカスはなぜか遠い目になって微笑んでみせた。

「誘惑への免疫は、この一年で随分鍛えられた」

なんとという説得力。

一年という言葉の意味を正確に理解したイレーネは、思わず目頭を押さえた。

その脳裏には、上目遣いだったり頬を染めたりするエルマと、彼女に右手を伸ばしかけては左手でそれを封じるルーカスの姿が浮かんで消えた。

「殿下……っ。私たちの気付かぬ間に、なんと過酷な鍛錬を重ねられていたのか……っ」

「そりゃあ、強くなるよねー……」

さすがのフェリクスですら同情的な声色だ。

だが、もちろんそれが聞こえるはずもないルーカスは、「実に残念だ」と続け、不意に椅子に腰を下ろした。

「俺に声を掛けてくれた時、ほっとしたのは本当だったのに。あなたは、俺を試すつもりでしかなかったなんて」

「え……？」

急に緩んだ攻勢と、思いもかけぬ内容に、リーゼルが瞳を揺らす。すると、ルーカスは拗ねたように肩を竦めた。

「薬剤入りのワインではなく、素朴な味わいの酒を飲み交わしたかった。暗示の香ではなく、あなた本来のまとう香りを知りたかった」

それからぐ、と身を乗り出し、悪戯っぽくリーゼルの顔を覗き込んだ。

「それは、俺だけのわがままだろうか？」

「一気に懐に攻め入ったあああああ！ 絶対攻者からの、このワノコ系スマイルのギャップは大きい！ ほんのり腹黒風味のスパイスがまた堪らない！ 殿下は二極のスマイルを持つ男……っ！」

「効果は靦面だ。弟系に弱かったようだね」

フェリクスの冷静な解説の通り、それが決定打となったようだ。

リーゼルはぱつと赤面し、席から飛びのくようにして距離を取った。

それを見て、ルーカスは少し肩の力を抜く。

ようやく、彼だけの力でもぎ取った勝利に、喜ぶというよりは安堵したようだ。

が。

「どうだ、見ていたか、エルマ」

誇らしげな表情も露わに、くるりとこちらを振り返ったルーカスは、しかし、エルマの様子を見て、中途半端に口を閉ざした。

「エルマ？」

「……………」

エルマは、難しい顔で口を引き結んでいた。

「……………さすがでございませす、殿下」

ややあつて、ぎこちなく褒め言葉を紡ぐ。

けれど、その夜明け色の瞳は、どこか、傷付いたような表情を浮かべていた。

「シャバ慣れしていない姉にも、恥をかかせぬ完璧なご対応」

それから付け加えた言葉に、ルーカスは顔色を失った。

「私めに好意を囁いてくださったのも、その溢れ出る騎士道精神ゆえだったのですね」

「……………!」

どうやら、女たらしの真髄を見せつけたルーカスに対し、称賛の念よりも、不信を抱いてしまったらしい。

「気を遣わせてしまい……………申し訳なく存じます……………」

かつてエルマに、本心から好意を告げたことすら、「シャバ慣れせぬ自分に、気を遣って好意的に接してやった」と解釈されてしまっている。

「おい……………待て、待ってくれ、それとこれは違う。違うに決まっているだろう……………!？」

「考えてみれば、殿下は呼吸するように甘言を囁ける御仁なのでした……………。分不相応にも、強い好意を捧げられたと勘違いしてしまった私の傲慢、なにとぞご容赦くださいませ……………」

エルマはずーんと落ち込んでいる。

ルーカスはそれ以上に青褪めていたが、非情にも、ホルストはそ

れを更に追い詰めてきた。

「うっわ、最低。誰彼構わず甘い言葉をばら撒いて、それが初心な女の子を傷付けるって、まさか気付いてないわけ？ まじで糞以下だね」

勝利だ。

これは、ルーカスがこの監獄で初めて自力で勝ち得た、堂々たる勝利のはずだ。

なのになぜ、事態はこんなに悪化している。

うるたえるルーカスに、モーガンは哀れみの視線を送ったが、無情にもこう告げた。

「おめでとうございます、ルーカス様。あなた様は見事、【嫉妬^{リーゼル}】の誘惑をも退けられることをお示しになった。もっとも、その結果、あなたは『友人』の地位すらも遠ざかったかもしれないが」

残酷な言葉に息を呑む。

モーガンは、冷め始めた紅茶のカップを掲げ、にこりと微笑んだ。

「お次は ^{ホルスト}【貪欲】が、お相手^{つかまつ}仕りましようか？」

頬杖を突きながらカップに口付けていたホルストが、ふと顔を上げる。

彼はまるで肉食獣のように獰猛な笑みを浮かべ、低く告げた。

「……よろしくね？」

ルーカス死亡決定のお知らせだった。

「まさか、おまえ……！」

テレジアは声をかすれさせた。
ずっと抱いていた違和感。
その正体が、今ようやくわかった。

美しく結び上げている銀の髪が 先ほどよりも伸びている。
夕食会の席で初めて彼女を見た時から今までの、この短時間で、
編み目が緩み、髪がほつれるほどに。

およそ現実ではありえない光景。
だが、テレジアはその現象に、そしてその原因に、心当たりがあ
った。

「まさか、おまえは」
「あん、もう。とうとう始まってしまったわ」

が、テレジアが言葉を続けるよりも先に、ハイデマリーが嘆かわ
しそうに首を振って立ち上がる。
彼女は先ほどまで腰かけていたソファに戻ると、どさりと体をゆ
だねた。

ほんのわずか、優雅さを欠いた動き。

だがそれだけで、彼女が相当な苦痛を強いられているのがわかる。

ハイデマリーはひじ掛けに突いた腕に顔を埋め、そっと震える息を漏らしたが、次の瞬間には再び顔を上げて微笑んでみせた。

「失礼、少し……息が上がってしまって。妊婦にはよくあることだわ」

なんでもないと言うように、額にかかった銀髪を掻き上げる。

だがその拍子に、とつとつ髪の毛の結び目がほどけ、ばさりと肩を覆ってしまった。

今やはつきりと、髪が異様な速さで伸びていくのがわかる。

星の光のようなそれが、ハイデマリーの腰かけるソファの座面に届いた辺りで、テレジアはぱっと踵を返した。

「どこへ行くの」

「人を呼ぶ」

「だめよ」

が、テレジアがドアのノブに手を掛けた途端、木の扉がどくんと脈打ち、驚いた彼女は咄嗟に手を離してしまった。

「な……っ！」

「お願いしたでしょう。雨が止むまで、傍にいて 誰も呼ばないで。見られたくないの。あなたなら、わかるでしょうっ？」

ハイデマリーはソファに座り、両腕で己をきつく抱きしめながら、テレジアを見た。

「二十二年前の雨の日、妹の、あの死に姿を見たあなたならば」
「……………っ！」

窓の外の雨音が強まる。

同時に、暗い夜空を白い光が駆け下りていった。

一瞬遅れて、耳を貫くような轟音が響く。

まるであの日のような、大雷雨。

扉の前で振り返ったまま硬直したテレジアに、ハイデマリーは優しく話しかけた。

「大丈夫。怖くないわ。あなたはそこにいてくれればいい。この部屋に満ちるものたちは、あなたをけっして傷付けはしない。……だってこれは、癒しの力ですもの」

ほんの少し自嘲の形に唇を歪め、彼女は続ける。

その肌には、わずかに汗の粒が滲みはじめていた。

「雨はいずれ止む。あなたはそれまで、ただそこにいてちょうだい。他人を遠ざけ、助けを求めず、秘密を喉の奥に呑み込んで」

再び、閃光。

そして轟く雷鳴。

両者のずれはどんどん狭まり、とうとう、光と音がぴたりと重なった。

カ……………ッ！

「あの日と同じように、……………今度はどうかわたくしを隠して」

轟音とともに地上に落ちた光は、部屋を白く染め上げる。

光の中輪郭を浮かび上がらせたハイデマリーは、まるで聖女のよう
に美しく微笑んでいた。

「……………、る」

やがて、激しい雨音に紛れて、小さな声がテレジアの喉から転び
出る。

「え？」

「ご免こうむる」

聞き返してきた相手に、彼女はきっぱりと告げた。

「愛する妹だからこそ、私は彼女の死を隠したのだ。いけすかない
娼婦の『願い』など 誰が聞いてやるものか！」

ハイデマリーが大きく目を見開く。

「いいか、ここで待っている。すぐに人を呼んでくる。この頭がお
かしくなるような事態も、頭のおかしいあの連中なら、どうにかで
きるかもしれないだろう」

「待って」

「待つか！」

テレジアは扉に手を掛け、揺さぶっても開かないとわかると、叩
き、蹴り、舌打ちを漏らした。

「だめよ、行かせない」

だが扉は頑として動かないどころか、ハイデマリーの言葉に反応し、木であった記憶を取り戻したかのように、枝を伸ばしはじめた。若木のような細い枝は、所々に新芽を芽吹かせながら、ノブをぐるりと取り囲んでしまう。

もしこれが数十年の時間をかけていたならば、木の扉が自然に還ってゆくかのような、美しい光景。

けれど今は不気味でしかないその光景を前に、テレジアは息を呑んだ。

が、

「……これも、癒しの力なんだったな」

低く呟くと、素早くソファセットへと引き返して紅茶のカップを取り上げる。

そして、躊躇いもなくそれを叩き割り、

シュッ！

鋭い破片を握り、表情も変えずに己の腕を切り裂いた！

途端に、扉にまとわりついていた「枝」が、獲物を前にした獣のように、一斉にテレジアの腕へと伸びてゆく。

ただそれは、魔物のそれとは違って淡い光を帯び、見る間に腕の傷を塞いでいった。

「ふん、おぞましい奇跡め……！」

テレジアはその隙を見逃さず、素早く扉に駆け寄る。
その勢いのまま、体当たりをするように扉を押し開けた。

扉をくぐり抜けざま、「見定めを外したな」とハイデマリーを振り返る。

「同じ罪を、繰り返す私ではないわ！」

テレジアはそう言い捨て、雷鳴が轟く獄内を、息を荒らげながら走り抜けていった。

19・「普通」のピンチ(1)

「さあて」

紅茶のカップを置くと、ホルストはにやりと笑って立ち上がった。

「それじゃ今度は、僕が確かめさせてもらおうかな。君が、エルマの『友人』にふさわしいかどうかを」

笑みとは言っても、琥珀色の瞳は剣呑に細められている。

全般的に関心が薄いモーガンや、諸方向に頓珍漢なイザーク、基本的には良識のあるリーゼルと異なり、ホルストは、大切な妹に近付く男^{ムシ}への敵意を隠しもしなかった。

「……お手柔らかに」

「はは。自分より十も年下の男相手に、本気で殺しに掛かるほど大人げなくはないよ。常識のない他の囚人とは違って、僕はいつだって、初夏の空みたいに、穏やかで広い心を持つ人間さ」

ピシャーン！

ちょうどその頃、破られた壁の向こう　初夏の夜空では、唐突に雷が落ち始めた。

バケツをひっくり返したような豪雨のおまけ付きだ。

大破した壁から吹き込む激しい雨に、ルーカスは顔を引き攣らせながら理解した。

なるほど、初夏の空だ。

「おい、壁に穴が開きっぱなしでは、室内が水浸しになるではないか」

とそこに、獄内の衛生管理委員であるらしいクレメンスが怒りの呟きを漏らす。

するとギルベルトは「ああ」と頷き、

「そうだな、クレメンス。ぜひ壁を塞いでおいてくれ。一分以内で構わない」

気もそぞろに無茶ぶりをした。

ちらちらと扉を振り返っているところを見るに、先に引き上げた妻の様子が気になっているらしい。

一方で、「代わりにしっかりと見届けて」という彼女の言葉に、身動きが取れないでいるようだ。

「一分！？ ふざけるな！」

水が高いところから低いところに流れるような自然さで不条理な目に遭うクレメンスだったが、それについては誰もが自然のこととして受け止め、さりげなく視線を逸らした。

「さて、壁の修理は【虚飾】に任せることにして。ルーカス君には、なにをしてもらおうかなあ？」

ホルストは、身にまとった白衣のポケットに行儀悪く手を突っ込み、ゆっくりとこちらに向かってくる。

中肉中背、知的な相貌。

イザークのように物理的な強さは感じられないが、その佇まいには、狂気にも似た迫力がある。

ルーカスは知らず息を呑み、思考を巡らせた。

たしかこの人物は、幼少時から奴隷を買い集め、人体実験を繰り返したかどで投獄されたはずだ。

エルマの高水準の医療技術や発明は、おそらく彼から伝授されたもの。

ルーカスの脳裏に、これまで目にした異常なスキルが、走馬灯のように蘇った。

外科手術おへをするエルマ、一人で騎士団全員を手当てするエルマ、麻酔を持ち歩くエルマ、ついでに嗅いただけで麻酔の種類を言い当てられるエルマ、エトセトラ、エトセトラ……。

(どれも「課題」となっても到底こなせないが……たぶん、治療や、解剖対決か……?)

そうであってほしいと彼は願った。

医療の心得は無いが、騎士としての野営経験から、同僚の手当てや獣の解体くらいなら、一通りこなしたことがある。

が、ホルストはルーカスの目の前までやってくると、にこっとはしばみ色の笑みを細めて告げた。

「じゃ、人体蘇生薬の開発対決ってことで」

「あなたは身内の友人に何を求めてるんだ!？」

あまりの無茶ぶりに、思わずルーカスは絶叫した。

そうだ。

先のアウレリア行きで、根を断たれた植物や、ミイラ化した人間をよみがえらせた薬を作ったのもまた、彼なのであった。

だが冷静に考えて、普通の人間がそんなものを精製できるはずがない。

ルーカスは当然の非難をしただけだったが、それを聞いたホルストは、真夏の生ごみを見るような目で、こちらを見返してきた。

「え？ このくらい普通じゃない？ まさかできないの？ 曲がりなりに友人を名乗るんなら、エルマに脳と心臓しか残ってなくても蘇生できるくらいの甲斐性がなくてどうするの？ カスなの？」

「いやそれは甲斐性の範疇ではないというか」

「ていうかエルマに髪一筋でも傷を負わせた時点で、その環境を許した君を僕が殺してるわけだけどね、はは」

「めっちゃくちゃだ!」

暴論を振りかざすホルストに、ルーカスは青褪める。

が、これまでこんな時に、彼女なりの「常識」をもって制止してくれていたエルマは、今や沈黙に徹するだけだった。

「ね、ねえ、エルマ……。なんだかお兄様、殿下にすごい無茶ぶりをなさってるようだけど……。いいの?」

見かねたイレエネがこそこそと囁きかけたが、

「……………」

エルマは夜明け色の瞳を揺らして、黙り込むだけだ。口を引き結んだ姿は、不機嫌、とも取れた。

イレーネは困惑して眉を寄せた。

「ねえ、待って。あなた、どうしてそう怒っているのよ」

一応、文脈としては、エルマの不機嫌の原因は理解できる。

エルマはかつてルーカスに好意を告げられていた。けれど同じ口で、彼が簡単に「女」をあしらうところを見てしまった。

だから、告げられた言葉が信頼に足るものではなかったとして機嫌を損ねている。

甘い囁きを喜んでしまった自分を恥じているのだ。

だが、それではまるで、エルマがルーカスに対し、「普通」に恋をしているようだ。

ついさっきまで、姉の誘惑が上手くいくようと、協力姿勢すら見せていたというのに。

この突飛な友人は、今この瞬間も、やはり突飛な思考を展開しているのかもしれない。

一足飛びに「もはや、焼きもち!？」と喜ぶのが躊躇われ、イレーネは慎重に問うた。

「まさか、オネエ様の監獄式誘惑が通用しないどころか、殿下にやり込められてしまって、身内が恥をかかされたと思ってる、とか…

…?」

が、それに対するエルマの答えは意外なものだった。

「……いえ」

彼女は難しそうに眉を寄せて、言葉を選ぶように、珍しくもごとごと口を開いた。

「たしかに、それも少しはあるのですが。……恥をかかされたのは、私のほうと言いますか……」

話しながら、自らの胸に問っているようだ。

「殿下があまりに女性慣れしているので、……なんだか、もやもやいたしました。……いえ、元より姉の監獄式誘惑は、殿下にはあまり通用しないだろうとは思っていたのですが、まさかこれほどだなんて。あるいは、あっさり陥落していただいた方が、よほど納得できたのですが、これではまるで……」

エルマはそこでまた言葉に悩むと、ちよつと唇を噛んで付け足した。

殿下は、本当に女たらしでいらしたんですね。

イレーネは思わず息を呑んだ。

(それって……)

続く言葉を、なんとか胸の内で飲み下す。

代わりにイレーネは、親友をじっくりと見つめた。

胸の前で片手を握ったエルマは、時折躊躇いがちにルーカスを見る。
やる。

彼の姿を映す夜明け色の瞳には、未知の男性を見るような緊張と
困惑が滲んでいた。

恐らく、エルマは初めて、ルーカスのことを男性として認識した
のだ。

「王城にいる一番身近な異性で王弟で上司で女たらしで苦労性の
友人」という、属性がただ無機質に連なっただけの存在ではなく、
大切な家族と対等に渡り合う、生身の人間として。

外の世界の登場人物その一としてではなく、同じ世界に身を置く
男性として。

だからこそ、「女たらし」という、ただの情報でしかなかった属
性が、今こんなにも胸に迫るのだ。

彼女にとって唯一の世界だった監獄、その外にいる人物が、それ
でもれつきとした、生身の存在だと理解したから。

「私……すみません。自分でもなにをこんなに戸惑っているのか、
よく」

「トウク……！」

イレーネはがばつと親友の腕を取った。

「はい……？」

「いい！ いいわエルマ、実にいい！ 考えなくていい、感じれば
いいのよ！ よくって、私が教えてあげる、それは歓迎すべき心の
変化よ！」

「え……」

目を瞠ったエルマに、イレーネは興奮して捲し立てた。

「あなたが今なにに目覚めようとしているか、たぶん、私は答えを知ってるわ。でも、今は言わない。だって、それはあなたが感じるべきものだし、きっとあなたならわかるはずだもの」

恋だ。

恋をしている。

この突飛で異常で、けれどとびきり魅力的で大好きな親友が、年頃の少女なら誰もが経験する、「普通」の恋をしようとしている。

イレーネは答えを吹き込んでしまいたいのをぐっところえて、代わりにぶんぶんと相手の両腕を振った。

「その時が来たなら、きっとあなたの胸の音がトウंक……！と高鳴って教えてくれるわ。よくってエルマ、ドントシंक、フィールトウंक！ 私からは以上よ」

きりりと締めくくると、エルマはぼかんとした顔で相槌を打った。

「……はあ」

興奮の先走ったイレーネの解説を、さっぱり理解できなかったよっだ。

しかし、イレーネはくふふと笑い、久々の先輩気分を堪能した。

「うーん、部下二人が制止もせず盛り上がっている間に、着実にルーカスは追い詰められていってるんだけど。どうしたもんかねー、これ」

と、やり取りを横目で見ていたフェリクスは、相変わらずのんびりと独白する。

彼らの前では、哀れ誰にもフォローに入ってもらえなかったルーカスが、にこやかにホルストに拉致られようとしている。

なんでも、この部屋では十分な開発施設が無いため、地下の研究室に移動することだ。

密室で、殺人を屁とも思わぬ狂博士と一緒。

悲報でしかない。

ルーカスはぐいぐいと部屋から連行されかけていたが、ホルストが扉を引くよりも先に、乱暴に反対側から蹴破る者があった。

「誰か おまえは、医師か!？」

白衣を着たホルストと目が合うなり、そう吼えるその人物は、テレジア。

これまで、獄内の空気に圧倒され気味とはいえ、落ち着いたたたずまいをしていた彼女が、今やただならぬ形相を浮かべていた。

「どうしたの、王太后さま。話し相手もお役御免になっちゃった？

僕たちはこれから」

「来てくれ！ あの女が倒れた」

短い叫びを聞き、ホルストがぱっとルーカスを解放する。

彼は恐ろしいほど真剣な顔で、即座に頷く。

「わかった。出血は？ 意識はある？」

その足は、既にハイデマリーの居室に向かいつつある。
だが、テレジアの唸るような言葉に、眉を寄せて振り返った。

「違う、産気づいたのではない。妊娠による症状ではないのだ。いや、厳密には妊娠による症状だが」
「は？」

要領を得ない説明に、ホルストが苛立たし気に聞き返すと、テレジアは焦れたように告げた。

「意識はあったが、今はもう途切れているかもしれない。出血はない。負傷したわけではない。むしろ逆だ。物凄い勢いで、すべてが癒えて成長してゆく。髪や爪が伸び、木や石でできたものは恐ろしい勢いで元の形を取り戻し……まるで、あの部屋だけ、時が速まっってしまったように」

「……………は？」

ぼかんとするホルストに、テレジアは絶望の声を漏らした。

「おまえたちでも、知らないのか」
「知らないって、なにを？」

不穏さを感じ取った周囲が、徐々に表情を強張らせてゆく。
未だ穴の開いたままの壁の向こうで、また雷鳴が轟いた。
それはまるで、あの日の再現のようだった。

テレジアしか知らない、あの雷雨の日。
激しい雨、笑みの下に隠された秘密と諦念、大きく膨らんだ彼女の腹、うねる聖力。

真っ白な閃光と、耳を聳^{もも}する轟音が炸裂したその瞬間、テレジアは血を吐くようにして告げた。

「……聖力過剰だ」

20・「普通」のピンチ(2)

窓の外では、激しい雨と悲鳴のような雷が続いていた。

ホルストは、渋面のクレメンスが居室すべての燭台に火を灯すよりも早く、急いたように口を開いた。

「それで、王太后さま。あなたの知ってることを、全部教えてくれる？」

組んだ腕を落ち着かぬ指先で叩くホルスト。

彼を囲むのは、エルマを除く大罪人たちと、ルーカス、イレーネ、そしてフェリクスにテレジアだ。

彼らが今居る、質実剛健を表したような飾り気のない部屋は、ギルベルトのものだった。

ただし本来の部屋の持ち主は、壁に背を預けることすらせず、じつと扉の向こう　廊下を挟んだハイデマリーの部屋を見つめていた。

テレジアが急を告げてから大罪人とエルマたちは茶会も品定めも放り出し、即座にハイデマリーの部屋に駆けつけた。

そうして、息を呑んだ。

屋内であるはずのその場所が、森と化していたからだ。

しかもその「森」は、彼らの前で目まぐるしく変化していた。

壁がぼろりと崩れ、隙間から伸び出した蔓が枝に、やがて巨木に。枝の先では緑が芽吹き、蕾み、盛大に花開いたかと思うと枯れ朽

ちてゆく。

一つの木が死と再生の環^わを巡る間にも、そこから落ちた種が次々と実を結び、広がってゆく。

凄まじい勢いで茂ってゆく葉の間からは、時折ぼうつと炎が生まれ、やがて消えた。

植物に破られた壁からは雨が吹き込み、それは一時、海を思わせる激しさで床を侵食し、かと思えば気まぐれに引いてゆく。

それはまるで、神話に描かれる天地創造のような光景だった。

そして、肝心のハイデマリーが横たわるのは、部屋の中央、広々とした寝台があったはずの場所。

彼女は、蔦と花と枝で編み上げられた揺りかごのようなものに支えられ、宙に浮いていた。

眼を閉じたその顔は、いつになく苦しそうだ。

そして注目すべきは、植物たちに吊り上げられているようにも見える彼女の髪が、異様な勢いで伸びていることだった。

腰あたりまでだったはずの髪は、宙から床にこぼれ、それでもなお余って植物の床を這う。

到底現実にはありえない光景に、大罪人たちまでもが硬直する。

それはそうだ、いくら「常軌を逸した」とは言えど、彼らもまた、魔力や聖力といった世界とは無縁の、普通の人間だったのだから。

それでも我に返り、ハイデマリーの元に駆け寄ったのは、娘として母の世界をいくらか共有してきたエルマ、そして監獄の医師を自認するホルストであった。

呼びかけ、脈を取り、瞳孔を見る。

血液を採取し、全身をくまなく検めたが、結局彼らがわかったのは、通常の医療技術ではまったく理解できない。そして対応できない事態に、ハイデマリーが陥っている、ということだけだった。

「胎児や胎内に問題があるわけじゃない、血中のあらゆる数値も正常範囲、ウイルスも細菌も無し。なのに心拍が異常に上昇し、呼吸困難、発汗、意識混濁。なによりあの異常な身体成育。不甲斐ないけど、僕の知識じゃ、とても理解できない」

本人の強い希望があったためエルマをハイデマリーの傍に残し、すぐ向かいのギルベルトの部屋に移動したホルストは、苛立たしげに髪を掻き上げた。

彼らには、冷静になって議論する場が必要だったのだ。

「それに、あの部屋の植物の異常生育は、明らかにマリーに引きずられたもののように思う。これはもはや医療の管轄じゃない。聖力だとか、あるいは魔力の領域だ。そうでしょ？」

その声は憎々しげと言っている。

聖力や魔力というのは、ホルストが「ファンタジー」の一言で切り捨ててきた領域だ。

それが、目の前の、彼の大切な人間を苦しめているということが、ホルストには許せなかった。

いや、ホルストだけではない。

いつも優雅と退廃の空気をまとっていた大罪人たちも、今この時ばかりは、飲み物すら用意せず、ぴりぴりとして部屋に立ち尽くしていた。

ハイデマリーは監獄の女王にして、彼らの友人であり、妻であり、母。

かけがえのない女性の危機に、誰もが強い焦燥を抱いていたのである。

「……その通りだ」

問い詰められたテレジアが、女性にしては低い声で頷く。

彼女は、大罪人たちに鋭く見据えられても動じず、聡明さを感じさせる口振りで答えた。

「彼女の身に振りかかっている事態を説明するには、私の妹の身に起こった出来事を説明するのが早いと思う」

「妹……？」

世情に疎い一部の大罪人が眉を寄せる横で、ルーカスやイレーネははっと目配せをした。

ブラッドデー
血塗れテレジアの由縁。

姉のために相談役として王宮に上がったというのに、その愛らしさと聖力の高さを疎まれ、人に見られぬ顔にされて修道院に送られたという、実妹クリスタ。

しかし、テレジアから語られることの真相は、彼らが噂から想像していたものとは、かなり異なるものだった。

「知っているかわからぬが、私には妹がいた。クリスタという。祖父が聖者の家系だったのだが、その血が作用してか、彼女は家族の中で唯一、ずば抜けて聖力が高かった。時さえ合えば、聖鼎杯に、聖女候補として送り込まれるだろうほどに」

その言葉に、今度はリーゼルとクレメンスが視線を交わす。
テレジアはそれには気付かず、話を続けた。

「神殿入りもあり得ると、聖女教育を施されたクリスタは、善良で、世間知らずの娘に育った。彼女は親や、姉である私に完全に依存していた。結果として、アウレリア留学の話が持ち上がった際、彼女は一人国外に出ることを怖がり、私が王妃に指名されたのを理由に、相談役としてともに王城に上がった」

テレジアはしかし、愚かゆえに善良な妹を愛した。
過保護とは知りつつ、相談役の肩書きを与えて傍に置き、悪意渦巻く社交界から隔離するほどには。

けれどその結果、クリスタは醜い王城の内実を知ることもなく、テレジアが目を離れたところであっさりと男の火遊びに引つかかってしまった。

彼女は、誰とも知らぬ男の子どもを妊娠してしまったのだ。

「では……もしや、テレジア陛下が彼女を修道院送りにしたのは、そのため……？」

ルーカスが呟くと、テレジアは「そうできていたなら、どんなによかったか」と苦々しく笑った。

「元は、そのつもりだった。ただ、せめて出産と、その子どもの名付けくらいまでは私が面倒を見ねばと思ってな。ちょうど私が同時に妊娠したのを幸いと、姉妹ともども実家に引っ込んだ」

両親の説得も、箝口令も、部屋の改装も、全てテレジアが行った。

妹の妊娠の責任は、自分にあると思っただからだ。

妊婦に危機があつたらすぐ対応できるよう、姉妹の部屋を繋いだ扉。

その妊婦とは、互いのことだった。

「ただ、聖力に縁のなかつた私も、中途半端に聖女教育を投げ出してしまった妹も、肝心な知識が欠けていた。強すぎる聖力を持つ女が孕んだら、どうなるのか」

核心に近づいてきた話に、ホルストが視線を上げた。

「……それが、聖力過剰？」

「ああ。裏付けとなる文献を見つけたわけではないが、私はそう理解している。過ぎた薬が毒になるように、溢れ続ける聖力は、持ち主の体を破壊するのだ」

ちょうど妹が臨月に差し掛かった頃だ、とテレジアは言う。

クリスタの体に、異常が見られるようになっていった。

「時折、ひどく壓されるようになった。熱が出て、呼吸が乱れて、……彼女はそんな時、『内側から破裂しそう』と言っていた。それで私は、てっきり妊娠の症状の一つかと思ひ込んでいた」

だが、違った。

症状は徐々に、彼女の身体を離れ、周囲にまで影響を及ぼすようになった。

クリスタの聖力は、主に水を操るものだったのだが、ふと気を抜くと、水差しの水を溢れさせてしまったり、夏だというのに霜を下

ろしてしまったりと、次第にその制御を失っていったのである。

「それも、妊娠のせいだと思っていた。やたら眠いと言って、長く眠るのも。聖力を持つ者の妊娠は、他とは多少異なるのだらうと、甘く見ていたのだ」

テレジアにはテレジアで、腹の中の子を守らねばという重圧があった。

そうしてある日　あの、突然けたたましく空が泣き出したあの日。

テレジアは自身の異変を訴えるべく妹の部屋の扉を開け　そこで、異変どころではない、異常な光景を見た。

「クリスタの部屋は、まるで屋外のように雨が降っていた。水は床でうねり、壁を遡ってまた落下していた。そしてクリスタはその中心で、こと切れていた。部屋中に髪と爪を伸ばし、……老婆のような顔で」

「なんだって……？」

ホルスト以下、一同が息を呑む。

テレジアは苦い過去を飲み下すように、ぐっと唇を歪めると、拳を握って続けた。

「まるで、その部屋だけ時を速めたかのようにだった。私はぞつとして、しばらく立ち尽くしてその光景を見ていたが、やがてあることに気付いた。私の指先にはその時、針でできた傷があったのだが、その部屋に漂う水に触れると、みるみる塞がったのだ。小さな傷だけではない。剣の稽古や落馬でできた古傷も、すべてだ。部屋には、凄まじい聖力が溢れていた。妹の遺骸を中心として」

聖力が過剰に溢れている。
テレジアは直感的に思った。

「聖力とは、生物を癒し育む^{たく}聖なる力。
けれど、それが頃合いで洩れ果てることなく、制御を失い、無限に持ち主を「癒し育」んだらどうなる？」

髪は、爪は伸び続けるだろう。

古い池の水が雨となって新しく生まれ変わるように、骨や肉は劣化と再生を繰り返す。

それはつまり 恐るべき速さで老化が進むということだ。

そうしてとうとう、暴力的に「回復」を促す聖力に耐え切れなくなり、擦り切れた肉体は死を迎える。それが、目の前の妹だ。

聖力は血統で受け継がれるというのに、教会がなぜ聖女に純潔を命じ 子を産ませようとしないのか、テレジアはその時になって、ようやく理解したのだった。

「腹の子を育てようとするあまり聖力が暴走するのか、それとも胎児を異物とみなして攻撃しつづけたということなのか、私にはわからない。が……、聖力過剰と妊娠は、間違いなく結びついている。これが私の直感と、経験からくる結論だ」

テレジアは、なぜ気付けなかったのかと自責の念に苦しみながら、自身の出産の直後、妹の遺体を処理した。
葬儀を上げず、顔を傷付けて修道院送りにしたなどという噂を流したのは、クリスタのためだ。

老いさらばえたその体を、誰にも見られたくはないだろうと思っ

たから。

そこまでを聞くと、ホルストは「なるほど」と一つ頷いた。

彼にとって、テレジアの悔恨や二十二年前の事件の真相などどうでもよい。

ただ、彼の大切な身内を救えるに足る情報かを、真剣に吟味していた。

「たしかにその事件と今のマリーの症状は符合するな。老化も、異常な細胞分裂促進によるテロメアの破損と思えば理解できなくはない。……でも、囚人にして元娼婦の【色欲】^{ハイデマリー}が、聖女並みの聖力の持ち主だって……？」

「それについては、あたしが保証するわ」

とそこに、黙って話を聞いていたリーゼルが口を開いた。

「あの女は、三十年前の聖鼎杯で、わずか五歳にして聖女候補だった。それを、当時の教会の腐敗を悟って、その座を投げ捨てて娼婦になったのよ」

「なんだって？」

ギルベルトを除いた一同が目を見開く。

壁の近くに控えていた 無理やり巻き込まれたとも言つク
レメン스는、勝手に過去を暴露したリーゼルにちらりと眉を上げて
みせたが、リーゼルは鼻を鳴らしてそれに応えた。

「なによ、バラしちや悪い？ 言っとくけど、先に裏切ったのはあの女 ハイデマリーのほうよ。何枚も手札を隠して、勿体ぶりながらやっと思せたと思ったら、どれも捨て札ばかり。人の厚意と心

配を、平気で踏みにじる真似しやがって」

乱暴な口調には、苛立ちと焦りが等しく滲む。

なにが、「誰より大切な人」だ。

顔色が悪いのは妊娠のせいだというのも嘘だった。

いや、嘘ではないが、あの女は隠していた。

自らが死の淵に、片足でようやく立っているのだということ。

彼女はきつと、こうなることを「知って」「いたに違いないのに。」

「……ざけんじゃないわよ」

リーゼルはぎり、と親指の爪を噛んだ。

それが、あの美貌の娼婦の矜持なのだとということは理解していた。ある種の愛情であり、友情であるのだということも。

彼女はまるで、死に際に隠れる気高い猫のよう。

けれど 手を差し伸べていた側からすれば、それはなんと腹立たしい振る舞いか。

強い怒りは、攻撃的な笑みを象り、傍らのギルベルトに向けられた。

「あなたは知ってたわけ、ギル？ 知ってたはずよねえ。十五年もの間思い続けた女だもの、その正体が聖女候補であったことなんてだから、マリーが周囲に妊娠を隠そうとしていた時も、それに従ってたんでしょ。ええ？ 元勇者さん、なんとか仰いよ」

「……」
「愛しい女を死の淵に追い込んで、満足？」

「満足なものか！」

ずっと黙り込んでいたギルベルトは、突如抑制の糸が切れたように咆哮した。

「彼女の過去は聞いていた。だが、こんなことになるだなんて、知らなかった！ 妊娠の事実をぎりぎりまで伏せていたのは、獄内のお祭り騒ぎを避けたいからだ、繰り返し聞かされていた。マリーは、俺にまで隠していた……！」

彼は、両手に顔を埋めると、血を吐くようにして叫んだ。

「俺が……子を持つなどと言わなければ……！」

一同はそこで静かに息を呑んだ。

聖力過剰が妊娠によって引き起こされるのだとしたら、この状況下、一番追い詰められるのはギルベルトだ。

居室に気まずい沈黙が下りる。

いつも泰然としていたはずの大罪人たちが、感情を揺らしていた。それほどまでに、女王の存在は絶大なのだ。

「……だが、なぜエルマの時は聖力過剰にならなかったんだ？」

その時、ふと低い声が一同の耳を打った。

慎重な声で問いを紡いだのは、ルーカスだった。

「妊娠によつて聖力過剰が引き起こされるのなら、エルマが生まれた時点でこうならなければおかしい。エルマの時と、今で異なるのはなんだ？ そこに、解決の糸口になりえるものがあるかもしれない」

「い

……………」

ホルストが目を見開いた。

「……………魔力だ」

彼は、ふら、と腕を持ち上げ、無意識のような仕草で髪を押しつぶした。

「魔力だ。腹の中のエルマの魔力が、過剰な聖力を相殺したんだ。

……………はは、神の敵たる魔族の血が、結果的に聖女^{マリー}を守っていたんだ

……………!」

「エルマの魔力……………?」

それでは、と顔を強張らせるルーカスたちに、ホルストは口早に
応じてみせた。

「ああ、そうさ。君たちもどうせ気付きかけていたんだろ？ エルマは真実、魔族の娘だ。……………もつとも、聖女の娘でもあったわけだけど」

あつさりと明かされた真実に、ルーカスとイレーネは表情に悩む。

ありえない出自。

けれど同時に　あまりにも腑に落ちる、事実。

見れば、既にそれを知っていた様子のギルベルトやリーゼルだけでなく、モーガンやイザークも、神妙にただ頷いている。

驚くには値しない、ということだろう。

ホルストは周囲の反応など置き去りにして、ぐるぐると部屋を歩きはじめた。

「魔力をぶつけて、聖力を削げばいいんだ。でもどうやって？　くそ、聖力の生成器官でもあれば、そいつを魔剣で貫けばいいんだろうけど、聖力とやらが物理的な身体構造と一致しているのか……いや、まずは魔力の確保だ。あれほどの聖力に対抗するだけの、強大な魔力……」

聖力や魔力といったものは、本来彼の管轄外だ。

けれどホルストは、それを明晰な頭脳で無理やり理解の範疇に引き込もうとしていた。

「そこは、やっぱりエルマを使うんじゃない？」

とそこに、のんびりとした声が響いた。

テレジアの告白すら他人事のように聞いていた、フェリクスである。

彼は、テレジアとよく似た緑の瞳を、わずかばかり愉快そうに輝かせていた。

「だってさ、エルマの魔力で対応できたって、十五年前に証明されてるわけでしょ。すぐそこに魔力生成器があるのに、使わない手はないじゃない」

エルマのことなど、駒か道具としか見ていないことがわかる発言だ。

ホルスト以下、大罪人たちは一瞬、視線だけで氷河期を呼び寄せ

そうなほど目を細めたが、すぐに現状を思い出し、表情を元に戻した。

「……エルマは、身体構造や能力こそ魔族的性質が強いけど、魔力があるわけじゃない。普段の瞳が赤くないことから、それは明らかだ。【憤怒】^{キルベルト}がほいほい拾ってくる聖剣の類にも、忌避を示したことはない」

長年にわたり、エルマを見守ってきた主治医^{ホルスト}は、低い声で告げる。

「十五年前、聖女並みだというマリーの聖力を相殺しえたのは、おそらくエルマが彼女の胎内にいたからだ。分化した今、聖剣にすら反応しない微弱な魔力じゃ、マリーを救えるとは思えないね」

「じゃあ、覚醒させれば？」

フェリクスはますます楽しげに肩を竦め、そこできると異母弟を振り返った。

「ね、ルーカス。君があんまり上手にアウレリアでの報告書を書くものだから、僕、逆に気になっちゃってさ。つい自分でも調べちゃったんだよね。エルマは、聖力保持者には妙薬となる、魔族には毒となる強い酒を飲まされて、結果、大地や植物を操ったんでしょ？」

あまりにさらりともたらされた情報に、ルーカスやイレーネは絶句した。

無難に隠していたつもりだった。

本人も、すんなり報告書の内容を信じた様子を見せていたのに、いつの間に調査を進めていたというのか。

フェリクスは二人の表情を見ると、「こそこそ調べ回るのが趣味なものでね」と笑みを深めた。

「で、だ。その時発現したエルマの力は、はたして酒に耐性を得た突然変異的魔力なのか、それともまさか聖力か、というので悩んでたんだけど、今わかったよ。答えは両方なんだ。エルマは魔力と聖力を持っていて、普段はそれらが互いを削ぎあっている。ただし、一方を強化する環境に置かれたら、一気に天秤がそちらに傾くつまり、覚醒するんだ。アウレリアでは、おそらく彼女は聖力を覚醒させた」

ならば今度は、と、フェリクスは好奇心旺盛な子どものように、無邪気に周囲に笑いかけてみせた。

「僕、エルマが魔力を覚醒させるのを、見てみたいなあ」

いや。

その瞳は無邪気なようできて、その実、狡猾で冷酷な理知の光が浮かんでいた。

彼は見たいのだ。

自身の手にしていた駒が、どこまで有益たれるかの、その限界を。

「……検討に値する手段だね。でも僕、あんたのことがすごく嫌いだな、フェリクス王さま」

人を人とも思わぬフェリクスの提案に、ホルストが冷ややかに応じる。

「奇遇だねー。僕も、君を見てるとなんか嫌な気分になる」

フェリクスは笑顔を崩さなかったが、辺りの空気は一層殺伐としたものになった。

「同族嫌悪でしょうね」

モーガンはあっさりとそれを総括すると、ホルストに向き直った。

「ホルスト【貪欲】。医学は私の専門外ですが、魔力や聖力　おとぎ話の世界ならば、伝承や書物の得意とするところ。つまり、この監獄の図書室を管理する、私の領分です。『検索機能』を使って、エルマを魔族的に覚醒させる方法を調べましょう」

モーガンは、化学や物理の説く真実には興味を示さないが、言語や物語には、詐欺師として常に並々ならぬ関心を抱いている。

その結果が、ルーデンの王宮図書室すら上回る知の集合、監獄図書室だ。

あの膨大な蔵書からならば、間違いなく覚醒の手立てが見つかると思われた。

不意に見えてきた希望の光に、その場の土気がぐつと高まる。

エルマを呼んでくると申し出たルーカスを除き、一同は素早く図書室へと移動を始めた。

21・「普通」のピンチ(3)

エルマにとって、母とは世界そのものだった。

監獄の女王たるハイデマリーは、誰より美しく、誰より力強く、誇り高く、愛情深い。

彼女がその織手を自分に向かって優しく伸ばすのを、エルマは何より喜んだし、彼女が自分に向けていかなる言葉も、疑いなく呑み込んだ。

歌えば大地が動くのも、見つめれば人が傳かすくのも、だからそれは「普通」のことだ。

だって、母がそう言うのだから。

(でも……)

性懲りもなく壁を突き破ろうとする蔓を手早くまとめながら、エルマは瞳を揺らした。

「お母様。この状況は、『普通』のことですか……？」

視線の先には、眉根を寄せたまま眠る母の姿があった。

部屋を取り囲んでいた植物たちは、エルマが適切に「処理」した。具体的には、狂戦士の膂力で引きはがし、まとめ上げ、あるいは狂博士のように投薬で成長の勢いを弱めた。

意外にも、暗示を掛けるように植物に向かって囁くと、いくらか従順になったりもした。

結局エルマは、寝台に横たわるハイデマリーの傍らに立ち、腕だけは激しく植物と攻防を繰り返しながら、じっと母の寝顔を見つめている。

「お母様。私、……よくわからなくなっていました」

ハイデマリーを取り囲むように植物が異常生育するなど、いかにも普通でない光景だが、しかし「願えば山も伸びる」と言っていた母の言に照らせば、もしかしたらこれも「普通」の範疇なのかもしれない。

いずれにせよ、初めて見る母の苦しそうな顔は、エルマの不安をひどく掻き立てた。

「お母様。どうしたらよいのですか。私は何をすれば」

いよいよ彼女が、置き去りにされた子どものように目を潤ませかけた時、

「……………エル、マ」

ふ、と、唐突にハイデマリーがその瞼を持ち上げた。

「お母様！」

「……………ねえ、聞いて。……………実は、わたくし……………ドラゴンは、塩で頂くのが普通と聞いて、……………驚いたわ」

「……………目覚めざま、声を震わせて告白する内容はそれでよいのですようか、お母様」

エルマは戸惑った。

だが同時に、この全く周囲や状況に頓着しない母が、いかにもい

つもの母という感じがして、妙に安堵もした。

ハイデマリーは、何ごともなかったように前髪を掻き上げる。

横たわったままエルマを悪戯っぽく見上げ、まるで、寝室に忍び込んだきた小さな子どもを窺めるように、笑んだまま軽く睨んでみせた。

「どうしたの、そんな不安そうな顔をして。可愛いお目目が、潤んでいてよ」

「それは、だって……」

「ねえ、心配しないで。こんなのよくあること。いたって、普通のことだわ」

その声は、鈴を鳴らすよう。

口調もいつもの滑らかさを取り戻し、窮地にあることなど欠片も感じさせない。

ハイデマリーは、娘がなにかを言い返す前に、軽やかに言葉を紡いだ。

「そうそう。告白といえば、もうひとつ。あのね、わたくし、実は聖女候補だったのよ。それで、ただでさえ多い聖力が妊娠のせいで暴走して、もうすぐ死ぬの」

あまりに何気ない言い方と、衝撃的な内容のギャップに、エルマは一瞬硬直した。

「……え？」

「あとね、あなたは本当に魔族……もつと言えば、魔王の娘よ。寝起きだとか、軽くお酒を飲むと、うっかり瞳が赤くなってしまっか

ら、気を付けて。ただ、お酒を飲みすぎると、今度は聖女の血が暴走してしまうから、そちらにはもっと気を付けたほうがいいわ」

ハイデマリーは小気味よく話す。

そこには、感傷的な過去の語らいも無ければ、詳細な経緯の説明も無かった。

彼女はただ、端的に事実だけを述べ、娘が呆然としているのを見て取ると、淡く苦笑を浮かべた。

「……ごめんなさいね。死の床で何かを言い残すという経験をしたことが無いから、勝手がわからなくて。計画では、あなたに看取られることなく死ぬつもりだったのだから。実は、ちよっと動揺していますよ」

その言葉を聞いた途端、エルマは、これまでに意識もしていなかった細かい糸が、ぴんと一本に繋がるような感覚を抱いた。

「……お母様。もしかして、私を監獄の外に出したときから……こうなるのがわかっていたのですか？」

「……」
「それで、シャバの『普通』がわかるまでは、帰って来てはいけな
いなどと、……無理難題を仰ったのですか？」

ハイデマリーは緩く笑んだまま、答えない。

だがもし、この場にリーゼルがいたなら、きつと息を呑んでいたことだろう。

富と権力に身を固めた王でさえ、寿命には勝てない。親は、子どもよりも長くは生きていられないのだと。

かつてハイデマリーが語った、エルマ放逐の動機。それは単なる想像などではなく、こんなにも明確な「予知」に起因したものだっただのかと。

ハイデマリーはゆっくりと瞬きをすると、やがてまっすぐにエルマを見上げた。

「わたくし、涙の別れというのが好きではないの。だから、これから起きることを、ただ伝えさせてちょうだい」

許可を窺うようでありながら、それは実質的な命令だ。

ハイデマリーはやはり、どこまでも女王然とした口調で、滑らかに話し出した。

「今わたくしの体の中では、凄まじい量の聖力が渦巻いているの。一部は溢れてこの有様、わたくしにみだりに触れたら、きつとあなたの聖力も『覚醒』してしまうわ。だから、なるべく触れないで」

まるで、商品の取り扱いを説明するような、淡々とした物言い。瞳には力があり、声には張りがある。

けれど　ハイデマリーは先ほどからずっと、寝台から身を起ささないでいる。

いや、エルマにだけはわかった。

彼女は、起き上がることすらできないのだ。

「今は、……なんていうのかしら、気力で抑え込んでいるわ。あなたに無様な姿など、見せたくないもの。でも、それもきつと夜明け

くらいまでだわ。私の体は限界を迎えて、そこで老婆の姿となつて、こと切れる」

そこでハイデマリーは、花が綻ぶように美しく笑った。

「けれど、それでいいの。それでようやくこの暴走が終わって、お腹の子が無事に出てこられるわ。本当は今にでも腹を裂いて出してあげたいところだけれど……いかんせん、切っても、切る傍から塞がってしまうのよね」

軽やかな声色とは裏腹に、その藍色の瞳には、覚悟を決めた者だけが持つ凄みがある。

彼女は、何も言えないでいるエルマに、そつと手を伸ばした。

「あなたが魔力持ちだったから、わたくしはあなたの出産を生き延びた。それからなんと十五年も、おまけの人生を享受してきたのよ。幸運な女でしょう？ ……ねえ、泣かないで。不安にならないで。大丈夫、こんなのよくある。至つて『普通』のことだわ」

だが、その指は、触れるなどの言葉の通り、頬に届くことはない。涙が伝いはじめたエルマの頬を、白い指は辿ることなく、静かに寝台へと戻った。

「親が子より先に死ぬのは『普通』のことよ。出産で命を落とすのも、ママあること。死んだ母親が、子どもの思っていた姿よりだいぶ年老いていたというのも、まあ、よく聞く話ね。だからエルマ。怖がらなくていいのよ」

穏やかな声、美しい笑み。

母の語る世界は、いつだって優しい。

彼女が今ここで示した「普通」を、これまでのように呑み込んでしまえば、きっとエルマは救われるのだろう。

だが。

「お母様」

「そうねえ、驚くのは仕方ないわ。わたくしも、自分の思っていた『普通』と、周囲のそれが違うと知るたびに、とてもびっくりするもの。ドラゴンに塩、とかね」

「お母様」

「だからエルマ、泣かないのよ。あなたも外の世界で、いろいろな『普通』に触れて、驚いてきたでしょう。それと一緒に。驚くかもしれない、でも不安になる必要はない、だってそれが『普通』なのだから。信じて、受け入れなさい。そうしたらお母様は、きっとたくさん、あなたを褒めてあげる」

エルマがシャバで身に付けてきた「普通」を披露するたび、嬉しそうに目を細めていたハイデマリ！。

きっと彼女は、エルマが素直にこの「普通」を 母の死を受け入れてみせたなら、嬉しそうに目を細めるのだろう。

世界一美しい笑顔で。

死の床にあっても。

「お母様……ですが」

それでも。

エルマがきゅっと拳を握りしめた瞬間、時を同じくして、居室の扉が開いた。

「エルマ！」

ルーカスだ。

彼は、晴れ渡った空のような碧い瞳に、希望の光を浮かべて叫んだ。

「至急図書室に来てくれ！ 母君を助ける手立てが、きっと見つかる！」

広大な獄内を移動する時間を、ルーカスは経緯の説明に充てようとした。

ともに夜の廊下を走りながら、彼は慎重に口を開く。

「王太后陛下の知見によって、母君の症状に見通しがついた。にわかには信じられないかもしれないが、エルマ、おまえの母君は実は

「

「聖女候補だったのですよね。それで、大量の聖力が妊娠のせいで過剰回復状態を生み出し、今に至ると。先ほど本人から聞きました」
「そ、そうか。それで、対応策なんだが、膨大な魔力で聖力を削ごう、ということになった。そこでエルマ、おまえの協力が不可欠なんだが、なぜおまえかと言うと

「

「私が魔王の娘でもあるからですよね。先ほど聞きました」

「聞いたのか！？　　というか魔王だったのか！？」

衝撃の出自を、なるべくソフトに伝えようというルーカスの配慮は、エルマの淡々とした相槌によって全力で投げ捨てられてゆく。動揺の欠片も見せないで、ルーカスはちら、とエルマの横顔を一瞥してみたが、彼女は可憐な口を引き結び、廊下を爆走するだけだった。それだけ、切羽詰まっているのだ。

それでも、なんとか解決の糸口は見つかった。

あとは、大陸中のすべての叡智が詰まった図書室で、常軌を逸した「検索機能」を用いて書物を紐解けば、すぐに魔族的覚醒の方法が判明するはずだ。

エルマたちは転がり込むようにして図書室の扉を開けたが、

「皆さま　　」

しかし、先に到着していた大罪人たちが、一様に難しい表情を浮かべているのを見て、中途半端に言葉を切った。

「……どう、したのですか……？」

「エルマ。ちょっと待ってて。今、みんな必死で考えてるから」

エルマに気付いたホルストが、代表して答える。

しかし、手当たり次第に書物をひっくり返し、苛立たしげに髪を掻き上げる彼の様子は、事態が緊迫しているのだということを示していた。

「　　おい、どうしたというんだ、イレーネ？」

「それが……」

隅の方でもに関連書物を広げていたイレーネに、ルーカスがこっそり問うてみれば、彼女もまた追い詰められた表情で顔を上げる。

「魔力を覚醒させる方法というのが、想像以上に難しそうで……」

イレーネが語るには、こういうことだった。

魔力を覚醒　つまり、体内に潜伏していた魔力的素養を開花させるには、いくつかの方法がある。

たとえば、高位の魔族が魔力を用い、覚醒を促すという方法。

だがこれは、最後の魔族であったというエルマの実父が死んでしまっている以上、望むべくもない。

ほかには、魔力保持者を窮地に追い込み、無理やり覚醒させるという方法。
エルマ

だがこれは、エルマが聖女の娘でもあり、下手な「窮地」ではむしろ彼女を聖力方向に覚醒させてしまうという点で　これは、アウレリアでの事件が保証済みだ　、却下された。

とすれば、残るはあと一つ。

「厳密には、中級魔族を、魔王として祀り上げるための儀式、というところらしいですけど……」

そうイレーネが前置きして告げた内容に、ルーカスも、横で聞いていたエルマも、目を見開いた。

「『魔力覚醒を願う百万の生き物の、生き血を捧げる』……?」

「ええ。どうやら、血の量は一滴ずつでもいいようなのですが、『数』が必要のようで」

イレネが深刻な表情で頷くと、横で気乗りしない様子でページをめくっていたフェリクスが、皮肉な笑みを刻んだ。

「ま、血による投票だと僕は解釈したけど。魔王なんて言うわりに、随分民主的な方法で即位するもんだ。ちなみに、『生き物』にもちゃんと階級があつて、鳩の血一滴を基準としたとき、山羊の血一滴だと五滴に相当、下級魔獣の血一滴だと十滴に相当、とか、事に細かに定められてるらしい。興味深いねえ」

なんでも、上級魔族の血であればそれだけで千滴に相当するのだという。

ルーカスははっとして、異母兄に食いついた。

「では 人間は！？ 人間の血なら何滴に相当するんだ！？」
「百滴。つまり、人間だけでこの事態を乗り切ろうとするなら、一万人の血を取って回らなくてはならないってことだね。それも、『魔力覚醒を願う』人間の、ね」
「……………」

ルーカスは黙り込んだ。

百万よりはかなり難易度が下がったようだが、それでも、とても現実的な数ではない。

「一万の……。それも、夜明けまでに……………」

エルマが呆然としたまま呟くのを聞いて、大罪人たちはますます表情の陰しさを深めた。

そう。

この条件とは、この常軌を逸した彼らの、たった一つの弱点を突くものであったのだ。

それ即ち 外界との接点が、少なすぎること。

「自発的な協力を仰ぐ」という点で、真っ先に頼りにするのはリーゼルの洗脳や、モーガンの詐欺術であるが、複雑で繊細な精神操作を必要とするこれらは、少人数にしか対応できないうえに時間が掛かる。

イザークやギルベルト、またホルストは、一夜で何百という魔獣からでも血を奪い取ることができるだろうが、「奪う」のでは意味がないし、それでは数が足りないのだ。

彼らはまた、この監獄から各国の要人に黒いパイプを張り巡らせてもいるが、支配と恐怖で結ばれた彼らを利用して、一体どれだけ「覚醒を願う」血が得られるものか。

あらゆる手立てを使ったとしても 絶対的な量が、足りていなかった。

不意に本を投げ出したリーゼルが、きつく眉根を寄せて親指を噛んだ。

「不甲斐ないわ……あたしや【怠惰】モーガンじゃ、一万の領民を持つ人間を操り人形にすることはできても、そいつが血を集めおおせるまでに夜が明けてしまうわ」

「我々の暗示や詐欺が効力を持つのは、対面だと五百人ほどがせいぜいですし……」

「魔獣の血抜き、くらいなら、わけもない、のだが……自発的となると……」

「俺の聖剣では、覚醒に協力的であろう魔獣に限っては殲滅させてしまおう」

「血液を新鮮な状態で輸送する手段には心当たりがあるけど、協力的な対象者だなんて……僕、友達なんて一人もいないのに」

大罪人たちは悲壮な表情で俯いている。

「ていうかそのスキルの方が、僕としてはすごい気がするんだけど

」
「同感ですが、彼らの絶望もまた理解できますわ」

フェリクスとイレエネはこそこそと囁き合った。

そう。

いかに日頃の能力が高くても、彼らが救いを必要とする場面で活かさなければ意味が無いのだ。

むしろ、普段なんでも容易に解決できてしまう彼らだけに、今は一層無力感に打ちのめされているのだろう。

現にそれは、いつも万能なエルマにおいても顕著だった。

「……………」

エルマはその美しい顔を紙のように白くし、言葉もなく立ち尽くしていた。

が。

「なんだ」

その時、やけにはっきりとした声が、図書室の空間に響いた。

「それほど具体的に、状況とこちらの手勢がわかっているなら、やることは限られているじゃないか」

沈んだ空気を振り払うようにして口を開いたのは、ルーカスであった。

22・「普通」のピンチ(4)

ルーカスは、のろのろと顔を上げたエルマの髪を軽くかき混ぜると、呆れを含ませた溜息さえ落としてみせた。

「なまじおまえたちは何でも出来るだけに、ぐちゃぐちゃ考えすぎるんだ。もつと単純に考える」

「単純に……？」

言葉を反復し、エルマは不安そうに夜明け色の瞳を揺らした。

洗脳も、詐欺も間に合わない。

破壊や浄化では意味がない。

ではいったい、どうしたら？

「決まってる。シャバではな、自分の手に余ることがあったら、人に『頼む』んだよ」

「は……？」

エルマはぽかんとした。

「だから。事情を説明して頭を下げて、どうかそちらから血を分けてくれて頼むんだ。詐欺でも洗脳でも強奪でもなく、協力を仰ぐ。頼んで頼んで頼みまくる。それしかないだろう」

きつぱりと言い切られて、エルマは眉を下げた。

「そんな……」

あまりに捻りの無い、現実味に欠ける方法。

シヤバで一年ほどしか過ごしたことの無い自分でもわかる。これは「普通」なんかではないと。

「フレンツェルでもアウレリアでも、魔族は忌避の対象でした。シヤバでは、魔族とは疎まれるものなのでしょう？ それがなぜ、その親玉たる魔王覚醒に力を貸してくれると言うのか……それに、一万もの方々が……」

エルマが指摘すると、ルーカスは「そうか？」と愉快そうに唇の片端を上げた。

「かつておまえはフレンツェルで、魔蛾を 魔の筆頭眷属を、美しく有益な存在だと認めさせたではないか。ルーデンで最も魔を嫌うフレンツェルの民、数千人の心を解した。なのに、彼らが協力してくれるとは、信じられない？」

「それは……」

「フレンツェルだけではない。アウレリアでは、最も聖なる存在をかすず傅かせた。おまえに全面的に協力するだろう人物は、それだけではないぞ。元ラトランド貴族であり、領民だって持っていた我が母クリアーナ、モンテーニユの王侯貴族や市民とも繋がるラマディエ料理長、最近は孤児院で治療を行っているデニス聖医導師、各国で熱狂的なファンを持つヨーラン・スヴァルド……」

ルーカスはつらつらと名を挙げてゆく。

どれも、彼らが指一本を動かせば、数百もの人間が喜んで従うだろう、多大な影響力を持つ者たちばかりだ。

大罪人たち七人で一万の血を集めることは難しくとも。

彼らがすべての親しい人間に協力を仰ぎ、その人間がすべての周囲に頼み込めば、一万の数はきつと集まる。

真剣にこちらを見つめはじめた大罪人たちに、ルーカスは肩を竦めて続けた。

「なにも全身の血を抜けと命じるわけではない。刺繍針で指先をつつくような、ほんの一滴をわけてくれと頼むだけだ。瀕死の母を前に、血を必要とする少女を救うために。それも、大恩のある少女を、な」

そこで彼は、これまでルーカスに対し挑戦的な態度を示してきた大罪人たちに向かって、小首を傾げてみせた。

「さらに、だ。監獄には、一晩に何百通と手紙をやり取りする伝書手段ハトも、生き血を速やかに回収する技術も、あとはエルマ、おまえの、生き物をことごとく懐柔する不思議な力もある。エルマが魔王として覚醒しても、確実にそれを封じ込められるだろう、希代の勇者と戦士もいる。これでもなお」

彼は、整った眉を器用に持ち上げ、軽く笑った。

「監獄の方々は、これくらいのことでもできない、と？」

「……………」

面々は、さつと顔を紅潮させた。恥辱に震える表情ではない。それ以上の興奮と、闘志に湧く顔だ。

にわかには活気づいた空間で、しかしエルマだけが、未だ不安そうに瞳を揺らしていた。

「……そう、でしょうか……」

「なにがだ？」

「その……本当に、頼むなどという行為だけで、自然でも動物でもない……人々が、力を貸してくださいださるものなのでしょうか」

これは彼女が、日頃いかに他人を頼りにしていないかということの表れだろう。

一方的に周囲に恩恵を与えて回る行為は、一見すれば献身的で無欲のようだが、最初から対等の関係を期待しないその姿勢は、ある種傲慢だ。

ルーカスは反論しようと口を開きかけたが、それよりも早く、今度は少女の声が一同の耳を打った。

「貸すわよ」

イレーネだ。

彼女は、焦れたような表情を浮かべて、エルマに詰め寄った。

「少なくとも私は、力を貸す。当然じゃないの、友達が困ってるのよ。友達本人じゃなくて、友達の友達、くらいのことでも力を貸すわ。私とその友達のことを、大切に思って、信じているなら」

彼女は、この局面で、怒りを感じさせるほど頬を赤く染め、言い募った。

「エルマ。私たちは シャバの人間は、あなたたちほどいろいろなことができない。できないから、頼り合うのよ。気軽に。当然の

ことのように。だってそれが、『普通』なのだから」

イレーネはエルマの両手を取り、ぎゅっと握りしめた。

「前から言いたかったの。あなたはもっと、私たちを頼りなさい。もっと、信じて」

「……………！」

エルマの瞳が見開かれる。

無言でイレーネを見つめるエルマに、ルーカスが「まだ信じられないようなら」と、悪戯っぽく告げた。

「例えば、デボラ嬢辺りをここに呼び寄せてみたらどうだ？ フレソツェルならここから近いし、彼女ならすぐに駆けつけてくれるだろう。その反応を、直に見てみればいい」

自信たっぷりの口調だ。

エルマはちよつと唇を噛み、ややあつてから、おずおずと指を鳴らした。

「デボラ様、カモン」

「馳せ参じましたわあ！」

「予想以上に速い！！」

指を鳴らし終わると同時に、バーン！ と図書室の扉が開き、さしものルーカスもぎよつとする。

豊満な胸に汗と雨を這わせ、息を荒げて登場したのは、誰あろう、デボラ・フォン・フレンツェル边境伯爵令嬢であった。

ありえない速さで平然と到着してみせたデボラに、「だからこれ

は、いったいどういうメカニズムなのよ……っ？」とイレーネも呻いた。

「はあっ、はあ……っ、な、何やら本日の昼頃から、エルマエル様がお近くにいらっしやるような胸騒ぎを覚えましたので、このデボラ、もしやお呼び立てがあるやもしれぬと、エルマエル様ゆかりの地を聖地巡礼しておりました。そうしましたら、この通り！」

デボラは、ぐっしりと濡れたポニーテールを掻き上げ、誇らしげに豊かな胸を張った。

「エルマエル様の第一使徒の名に恥じぬべく、雨の中を走って参りましたわ！」

「走ってきたの！？ 召喚とかではなくて!？」

「え？ 走る以外にどのような移動手段がございますの?」

思わずイレーネが突っ込むと、デボラはきよとんと首を傾げた。

なるほど、第一使徒の肩書にふさわしく、既に「普通」を大幅に逸脱している。

呆然とするイレーネや、初対面の令嬢のキャラに啞然とするテレジアをよそに、デボラはきりりと表情を引き締め、エルマの前に跪いた。

「お久しゅうございます、エルマエル様。本日はどのようなご用向きでしょうか。この忠実なるデボラめに、なんなりとご下命くださいませ」

「下命と申しますか、その……話せば長くなるのですが、かくかくしかじかといった事情で……」

「なんてお劳しい……。なるほど、委細承知いたしましたわ」

「だからどつやって!?!」

わずかなやり取りで完璧に通じ合った二人に、再度イレーネが絶叫する。

だが、デボラがすつと立ち上がり、あまりに真剣な表情を浮かべたので、思わず口を噤んだ。

デボラは、いつもの陶醉したような目つきではなく、凜とした意志を浮かべ、まっすぐにエルマを見つめていた。

「エルマ様。わたくし、嬉しいですわ。エルマ様が大変な時に、こうして頼っていただけで」

「え……?」

「第一使徒として、そして恐れ多くも、近しい友人として。わたくし……絶対に、あなた様の願いに応えてみせます」

エルマの逡巡を吹き飛ばすように、彼女はにっこりと微笑んだ。

「血がいるのですわね? なるべく多くの人間の。お任せください。フレンツェルの領民二千五百は、あなた様の味方ですわ」

「……………!」

必要数の、四分の一。

戦局が大きく変わる数を、なんの躊躇いもなく請け負われて、エルマが絶句した。

デボラは、それを微笑ましそうに見守っていた。

「なんの造作もございません。先日ご指導いただいた魔蛾の育成のため、フレンツェルでは昼夜絶えず、民が領主の館を出入りしておりますの。この半年、わたくしとケヴィンで、すべての領民と交流を持ち、もはや領内に掌握できぬ者などおりません」

ぶどう栽培の閑散期に、フレンツェルでは魔蛾ビジネスを本格的に推進していた。

その結果、全領民がこれまでにない利益を獲得。今では、魔蛾は未来と成功の象徴となり、領主一家と領民の仲も、これ以上なく良好であるという。

「デボラ様たちは、そんなにもフレンツェルを変えられたのですか……」

「いやですわ、変えたのはあなた様です、エルマエル様」

デボラは、その大地色の瞳を優しく細め、そっとエルマの手を取った。

「半年前、わたくしたちに奇跡を起こしてくださいだったのは、あなた様。だからわたくしたちは、そのささやかな恩返しをするだけですわ。自ら進んで、ね」

ちなみに、領内のエルマエル像も十体まで増えました、と微笑むデボラを、エルマは瞳を揺らして見つめ返した。

像は正直建立してほしくなかったが 彼女の言葉を、信じてよ
いと言っならば。

「……頼っても……いい、ですか」

「もちろん。これしき、至って些細な 『普通』 のことですよ」

デボラが器用にウインクを決めたのを見て、とうとうエルマも心を決めた。

23・「普通」のピンチ(5)

エルマは夜明け色の瞳に意思を漲みなぎらせると、ぐるりと周囲を見渡した。

「それでは僭越ながらお願い申し上げますが、まず、【貪欲】のお兄様は血液採取キットを一式ご用意いただけますか」

「任せて。各地の採取予定人数と合わせて即座に振り分ける」

「ありがとうございます。デボラ様は、お手数ですが即座にフレんツェルにお戻りいただき、早速領民の皆様への説明と、採取の開始をお願いいたします。事態を説明する書面もあつたほうが良さそうですね。【怠惰】のお父様、お願いできますか」

「任せてください。『司書』たちも使つて、十か国語で、十分以内にまずは干……いえ、二千部用意させましょう」

「書面には、あたしがサブリミナルを施しておくわ。少しでも効果が増すように」

「お姉様、ありがとうございます」

司令塔と見なした人物への連絡手段、連行手段、血液の保存運搬手段など、エルマは矢継ぎ早に指示を飛ばしてゆく。

「並行して、【暴食】のお父様は、監獄までの山道を均ならしていただけますか。運搬は伝書鳩による空路がメインとなる予定ですが、陸路での運搬も確保したいので」

「任せる。象の大群が、通ったかのように、大きな道を、整備してみせる」

イザークが力強く頷いたのを見届けてから、エルマは「それから」

と、ギルベルトに向き直った。

「お父様は……お母様の傍に、いて差し上げてください」

自分も何かを、と今にも飛び出しそうだったギルベルトは、それを聞いて目を見開いた。

「……いいのか？」

「ええ。お母様は、お父様の前では、何が何でも綺麗なままで居続けようとしたいと思いますから」

きつぱりとした発言に、ギルベルトは一瞬言葉を失い、それからふと苦笑を浮かべた。

「……そうだな。『一目見ただけで、未来永劫その姿が脳裏に焼き付けられるくらいに、きれい』で居続けようとしてくれるはずだ。だが……一目などで終わらせるものか」

何やら、二人だけの約束を感じさせる言葉だった。

方針さえ決まれば、この恐ろしいほど有能な大罪人たちのことだ、すべてが凄まじい勢いで進んでゆく。

あつという間に、依頼の文書と返信手段、採血キットやあらゆるタイプの移動手段が確保され、豪雨の降る夜空に、おびたしい数の伝書鳩が羽ばたいていった。

「……お願いします」

夜の闇に溶ける鳩の姿を目で追いながら、エルマは無意識に両手を組む。

自らも足を運び、人々に頼んで回りたかったが、ハイデマリーの身に万が一のことがあった時のことを考え、彼女もまた獄内に残り、儀式の準備を進めることを選んだ。

今のエルマにできることは、ただ仲間たちに縋り、祈ることだけだ。

だから、無縁だったはずの無力な言葉は、いとも自然に口を突いた。

「……助けて。どうか……助けてください」

本人も知らぬところで、その声はぼつりと夜の闇に広がり、ハイデマリーの居室から漏れ出した聖力と合わさって、ぐんと広がっていった。

それは雨雲をくぐり抜け、月や星の光と混ざり合い、緩やかに人の子の頭上に広がってゆく。

あるいは風となり、雨の中無理に飛翔する鳩の羽を、そつと乾かしてやる。

もはや夜更けと呼んで差し支えない時間。

領主の娘にたたき起こされた領民の家に、突然鳩に窓を叩かれた前妃の部屋に、植物のざわめきで飛び起きた元聖女候補の寮室に、次々と、奇跡を呼ぶ明りが灯っていった。

「エルマエル様のお母君が、難産で瀕死だって……？」

「まあ。エルマが、愚息だけでなく、わたくしにも助けを求めてくれるだなんて……」

「エルマお姉様、魔王の血もお持ちでしたか……？」

寝ぼけ眼を擦った彼らは、助けを求められたのだと理解すると、一気に寝台から飛び降りて行動に移った。

「急がなくては！」

それだけではない。

翌日の仕込み作業をしていた王城の料理人も、辺境の孤児院で研修を積んでいた聖医導師も、宵つ張りのヤーデルード国の夜会で聴衆を虜にしていた演奏家も。

エルマの窮地を知るや、なんの躊躇いもなく仕事の手を止め、方々に呼び掛けた。

「大変だ。おい、力を貸してくれ！」

そうして、どれくらいの時間が経ったことだろうか。

血液確保のため、一旦方々に散った面々も、それぞれの戦果を抱えて、対策本部と定めたギルベルトの部屋へと、再び戻ってきた。

「ノイマン領からも、いくらか集めてきたわよ……！ 第一陣で八十！」

「王城への根回しはすべて済ませた。まずは二百」

血を収めた小瓶、さらにそれを温度を保つ箱に入れ、びしょ濡れになってやって来たのはイレーネとルーカス。

監獄で調教された馬という、世にも恐ろしい生物兵器での移動を選択した二人だったが、よほどの強行軍だったのか、イレーネは「吐く……」と呟いてその場で崩れ落ちた。

それにすかさずテレジアが肩を貸し、フェリクスも呆れながらだが、水とタオルを差し出してやる。

政情的に獄外に出られぬ彼らではあったが、意外なことに、採取キットに真つ先に血を落としたのはテレジアであったし、説得がスムーズに行くようにと、書面に署名をしたのはフェリクスであった。

「死にたがりの女の願いなど叶えてやるものか」

「ま、投獄された王なんかの署名でも、下睫毛野郎なんかよりは信エルヴィンじる、つて酔狂な人間もいくらかいるでしょ」

そして、フェリクスの署名は、王城での説得に、本人が思っている以上の影響を与えたのである。

（義兄上は、狡猾だが公平だ。冷酷だが、誰よりルーデンという国に対して誠実だ。心ある家臣は、皆それをわかっている）

フェリクスの署名を見るなり何やら考え込み、やがて肩を竦めて指先を切り出した貴族たち。

腹の内を見せぬ古狸と、卑怯者の狐のような兄王との間に、確かな絆を感じたルーカスは、ちらりとフェリクスを見やった。

なぜ彼が、エルヴィンの粗略な謀反に乗ったのか。

その理由も、この件が落ち着き次第、白状させてみせる。

「ただいまー！」

「『種蒔き』は完了したよ」

そこに、リーゼルやホルストを筆頭に、分担を終えた大罪人たちも続々と帰還してくる。

彼らは一様に、その瞳に興奮の色を浮かべていた。

「今、助太刀がてら近隣のいくつかの採取現場を見てきたんだけど

……あたし、ちょっと肩透かしを食らったわよ」

「話を聞いた人たちが、皆躊躇いもなく血を差し出してたよ。魔王を覚醒させるって言うのに」

彼らは、部屋の奥で儀式の準備を進めていたエルマに近付き、くしゃりとその髪を掻き交ぜた。

「エルマ。……やるじゃない」

無心で祭壇を形成し、衣装を誂え、血を注ぎ入れる槽を拵えていたエルマは、驚いて手を止めた。

「……本当に、皆さまが、協力してくださって……？」

「ええ、私も見ましたよ」

「俺も、道を、整えるなり、何十人か、早速こちらに、向かってくるのを、見た」

モーガンやイザークも頷くと、エルマは目を見開いた。

人々に助けを乞うとは決めたものの、本当にここまでしてくれるものとは思っていなかったらしい。

「……………」

エルマは不意に胸元を押さえ、ぽつりと何かを呟きかけたが、それよりも早く、居室に一齐に賑わいが押し寄せた。

「おい！ 者どもが大挙してきて、門の前で膨れ上がっているぞ！ 整列のための人員を寄越さぬか！」

ばん！ と扉が開き、門番役を引き受けていたクレメンスが血相

を変えて踏み入ってくる。

かと思えば、

バサバサバサバサバサ!

「きゃっ!」

窓からは血を携えた伝書鳩が一斉に飛び込んできて、勢いを制御しきれず壁にぶつかった。

時を同じくして、窓の外では、雨の音に紛れて、何かの唸りが聞こえはじめる。

「……………? 地鳴り?」

どこかが土砂崩れでも起こしたのかと、眉を寄せながら窓に近付き、

「……………!」

エルマは、小さく息を呑んだ。

窓の下、監獄の門から森に続く道は、人で溢れかえっていた。

「エルマエル様ー! あたしの血も使ってくださいよー!」

「お母君、大丈夫ですかー!?!」

「フレンツェルに来てたんなら、教えてくださいよもー!」

雨にくぐもった音は、地鳴りなどではなく、人々の声であった。

「……………は、早く、彼らを、……………屋根のある所に、……………タオルと飲み

物を
」

珍しく言葉を噛みながら、呆然と呟くエルマの背後で、今度は誇らしげな女性の声が響いた。

「事情を説明したら、直接届けると言って聞きませんでしたの。これからまだまだ来ますわ。フレンツェルからだけでなく、王都からも、近隣の国々からも」

デボラだ。

彼女は、雨の中走り回ったのだろう、頬にまで泥を飛ばした姿で、にっこりと笑った。

「陸路で来る彼らの対応は、わたくしと あの門番はなんて言いましたっけ、ええと、クレメンズ？ 彼にお任せくださいませ。エルマ様はそれ以外に備えていたかないと……ほら、続々参りますわよ！」

指差した先で、鳩が一斉に嘴くちばしを開く。

雨のように次々と落下する小瓶を、エルマは咄嗟に かつ華麗に受け止め、それから、こぼれそうなほどに目を見開いた。

小瓶には、どれもカードや便箋、慌てて手繰り寄せたと思しき紙切れが添えられていたからだ。

“ 愚息は少しは役立つっているかしら？ 離宮の住人全員分の血です、取り急ぎ”

“ エルマお姉様、このクロエの血もお役立てくださいませ。全寮生とその友人の血もすぐに”

“ 料理人たちとその家族の血液は、追って。今度、マグロ釣りに

行くござ

“孤児院の子どもたちも協力してくれました。今度その輸液保存技術をご教授ください”

“ミューズよ。今宵の夜会は、急遽、ミューズの聖母を救うためのチャリティーコンサートにしてみましたよ。そのうち、僕の演奏会にゲスト出演してくれると嬉しい”

筆跡も、言語もばらばらのメッセージ。
けれどそれは、まったく気負いなく、実に親身で、温かだった。

トトトトトト……ッ

「第二陣、到着！」

馬車と戦車を駆って、荷台いっぱい詰めた小瓶が、今また到着する。

続々部屋に運び込まれるそれらにも、ある物はリボンが巻かれ、ある物は裏紙が貼り付けられと、何かしらの言葉が添えられていた。

“ツレがいつもお世話になっています”

“外科手術で息子を救っていただいてからずっと、あなたのファンでした”

“お噂はかねがね！ 今度私も侍女の詰め所を覗きに行ってもいいですか？”

“妻がよくあなたの話をしています。お母君、どうかご無事で”
知り合いもいれば、そうでない者もいる。

顔も、名前すら知らない者もいる。いや、そうした人物の方が多い。

だというのに、彼らはおそらく、ただ「自分の大切な相手が頼んできたから」というだけで、エルマにぼんと、血を分けて寄越そうとしている。

夜中に叩き起こされたというのに。

魔力を引き出すための儀式に使うと、聞いたはずなのに。

「……………っ」

エルマは髪ごと巻き込んで、両頬を押さえた。

一度ぎゅっつと目を瞑り、それから片方の手を伸ばし、近くに来てくれたイレーネの服の裾を引っ張った。

「…………イレーネ。こ、これ、ですか…………？」

俯いたために、さらりと黒髪が流れ、真っ赤に染まった頬を露わにしてしまう。

エルマは、夜明け色の瞳を潤ませて、声を震わせた。

「先ほどから、心拍が上昇して収まりません。これが、『トウंक』ですか？」

おずおずと上げた顔は、縋るようにしてイレーネを見つめた。

「この、心臓が震えるような感覚は……………なんですか？」

絶世の美少女に正面から覗き込まれ、イレーネは一瞬息を呑んだが、すぐに態勢を立て直すと、ふふんと笑った。

「教えてほしい？」

「はい…………っ」

「……教えてあげない」

えっ、とシヨックを受けた顔になった親友を、イレーネはにやりと小突いてみせた。

「ただね。それはとても『普通』で……素晴らしい感情だ、とだけ言っておくわ」

エルマは目を瞬かせ、頬を染めたまましばし黙り込む。
軽く握った両手を胸に当て、初めてそこに芽生えた感情を味わうような彼女を、この時ばかりは大罪人たちも表情を緩めて、温かく見守っていた。

「……もし、あの時……」

同じくやり取りを見ていたテレジアが、ぼつりと呟く。
小さな声を、たまたま近くにいたフェリクスが気付き、

「なにか仰いましたかー、王太后陛下？」

と声を掛けたが、彼女はすぐに首を振った。

「いや、なんでもない。今は儀式のことだ」

テレジアはいつもの気の強そうな様子を取り戻し、顔を上げると、
どンドン積み上がってゆく小瓶の山を見つめた。

ギルベルトの部屋はかなり広がったはずだが、このままではすぐに埋まってしまう。

そろそろ次の段階に移る頃合いだろう。

テレジアがちらりとエルマに向かって視線を向ければ、それに気付いた彼女は物思いを切り上げ、はっと表情を引き締めた。

ルーカスたちも、デボラも、その場の大罪人たちも、一斉に頷く。

「では……儀式の準備を、進めましょう」

エルマは一歩進み出ると、握っていた拳を開き、小瓶のひとつに手を伸ばした。

24・「普通」のピンチ(6)

無垢の木で作った邪悪な祭壇に、穢れた場所で育てた純白の綿から成る衣、本物より美しいまがいの美術品、猛々しく生気の無い花。

魔力覚醒の儀式には、いかにも魔族好みの、矛盾し、ねじれた供物が必要とされる。

さらには、幾千の血塗られた金貨や、宝石といった、とてもすぐには用意できない宝飾品も。

だが、

「ちょうど監獄内で揃えやすいものばかりで、助かりました」

と、一人儀式の準備を進めていたエルマは告げた。

地獄とまで称される監獄の裏庭で育てた「木綿、その先へ」や、贗作の絵画、危険物でありながら無機物の「花火」、大罪人たちが私蔵していた宝飾品。

既にだいたいの供物が揃っていたので、あとは、祭壇と衣服を仕立てるだけで済んだのだ。

エルマは綿で誂^{あつ}えた純白のワンピースに着替え、緻密な彫刻を施した祭壇に供物を並べると、石床を掘って作った浅い槽に、白い足を踏み入れた。

「文献によれば、この槽内に、魔力覚醒を願う百万の生き物の血を

注ぎ入れ、私のまとった衣がそれを吸いつくし　つまり私が全身に血をまとった状態になると、覚醒が起こるのだそうです」

血を浴びると酔う、ということですかね、と、エルマは補足した。

「酔う、という言葉の通り、強い魔力に目覚めた魔族　魔王は、しばしば、それまでとは全く異なる人格や言動を見せるようですよ。なので、もし……」

そこで、言いづらそうに口を閉ざす。

だが、儀式のために、ハイデマリーの元から離れて部屋に戻ってきたギルベルトの姿を認めると、おずおずと続けた。

「もし私が、皆さまのことを害するようなことがあれば、……殺しても止めてください」

不穏な単語に、聴衆が一瞬息を呑む。

かつて「神殺しの英雄」とまで謳われた父に、縋るような視線を送ったエルマだったが、ギルベルトは静かに首を振るだけだった。

「覚醒したての魔王など、殺さずともどうにでもできる。それに俺は、君の父親を知っている。エルマ、君の体に流れるのが彼の血である以上、滅多なことにはならないはずだ」

彼は、「娘」の夜明け色の瞳を優しく覗き込んだ。

「信じてくれ。君の父親たちのことを」

エルマは静かに息を呑んだ。

ギルベルトはこれまで、エルマに実の父が魔族であることを明かさなかった。

同時に、自分こそが実父であるという嘘を、刷り込むこともしなかった。

だが、今のたった一つの言葉で理解できた。

父親たち。

ギルベルトは、魔族の最後の生き残りであったという男のことも、自分自身も、そして監獄の大罪人たちのことも、等しくエルマの親として認めているのだ。

「……はい」

エルマはこくりと頷いた。

「信じております。お父様方」

「ご安心くださいませ、エルマエル様にはこのデボラも付いておりますわ！」

とその時、緊迫感漂う部屋に、明るい声が響く。

デボラは元気づけるためか、エルマのほっそりとした両手を取って、きゅっとして握りしめた。

「不肖デボラ、エルマエル様がたとえどのようなキャラチェンジを果たしたとしても、全力で付いてまいります。ドジっ子でもいい、無気力系でもいい、狂気病みキャラでも実においしい、ああん、でもでも、欲を言えば色気滴るDS女王キャラなんかですと　あっ
「デボラ様は少し自重という言葉を感じるべきですわ！」

どうやら純粹な激励というわけでもなかったらしい。

横からイレーネが「いろいろ台無し！」と叫びながら、握った手をぶんと薙ぎ払ったが、おかげで室内の張り詰めた空気も解された。

エルマは「よろしくお願いいたします」とくすくす笑いながら、槽の中で跪く。

ちらりと目で合図すると、ホルストが頷き、小瓶からタンクに移していた大量の血を、静かに槽へと注ぎはじめた。

途端に、つんと鉄臭い匂いが立ち込める。

女性陣は慣れぬ血臭に唇を引き結んだが、そんな中で、エルマはふと、足の指先を浸しはじめた赤い液体に、興味を惹かれたように視線を向けた。

少しぬるつく、生温かな液体。

紅く いや、今は薄暗い室内にあつて、黒くさえ見える。

純白の衣がみるみる血を吸い上げ、裾から染まってゆくのと同時に、エルマはぽつりと眩きを漏らした。

「あ……」

なんて、心地よい。

それはまるで、温かな湯に身を浸したときのよう。

それとも、羊水に浮かぶ胎児がこのような気持ちなのだろうか。

温かく、滑らかで、懐かしい匂いがする。

いや。

それと同時に、凍っていた血潮が、どくどくと音を立てて流れ出すような。

じわり、じわりと血が衣服を這い上る様は、傍からは邪悪な血が無垢な少女を穢しているかのようにも見えたが、その実、エルマは全身が歓喜に沸き立つのを感じていた。

ああ。

やはり、自分は魔族の娘であったのだ。

「きもち……いい……」

可憐な唇から、幼い呟きが漏れる。

夜明け色だった瞳は、徐々に赤みが強くなり、今はつつすらと紫がかっていた。

「こんなに……きもちが、よくて……、……こわい……っ」

あどけない瞳は、未知の快感に怯えてつつすらと涙を浮かべている。

そのあまりに庇護欲をくすぐる姿に、一同は思わずつつと胸を押さえた。

「こ……これが覚醒状態か……！？ 魔王がこんなに愛らしくていいのか……！？」

「こんな魔王がいたら、そりゃあ配下の魔族は世界を捧げたくなくなるってもんですわ……！」

ルーカスやイレーネはもちろんのこと、

「く……、十年ほど前の幼気いたいけなエルマの姿を思い出します……！」
「今は今であたし似の美少女だけど、やっぱりこれはこれで破壊力が凄まじいわぁ……！」

「これが、魔王とは、とうてい、思えん……っ」

大罪人たちも十年ほど前の育児ライフが蘇ったのか、シャバの間以上にダメージを食らっている。
が、

「く……、こわくて、……ああっ」

エルマが両腕できゅっと自身を抱きしめ、大きく息を吐きだした途端、

ゴオツ！

凄まじいかまいたちが起こり、堅固なはずの壁と、一同の前髪の一部を切り取っていった。

「やっぱり魔王だ……！！！」

破壊力千万なエルマに、皆が仲良く絶叫する。

しゃがみ込み、小さく震えるエルマは、見た目こそ繊細可憐な美少女だったが、その実、息吹ひとつで周囲の命を奪いかねない恐るべき存在だった。

ギルベルトもイザークも、本能的にじり、とエルマとの距離を測りはじめる。

だがそんな中であって、デボラだけが槽の近くににじり寄り、選

手に檄を飛ばす熱血コーチよろしく、エルマに声を掛けた。

「足りない足りない！ まだ全然足りない！ エルマエル様、あなたはまだまだ、素晴らしい魔王になれる！ なれますとも！」

どうやら彼女は、ロリ庇護欲キャラよりも、もっとパンチのある魔王キャラを求めているらしい。

それを受けて、ということではないだろうが、衣にさらに血を吸わせたエルマは、そこでまた態度の変貌を見せた。

「ん……」

どこか甘えるような、寛いだ声。

血がもたらす快感に慣れたのか、先程までのような怯えた素振りは見せず、ただ心地よさそうに目を細めている。

その瞳は一層青味を失い、ほとんど赤と呼んで差し支えない色になっていた。

「ほしい……もっと……」

二の腕を抱き締めていた両手をほどき、ゆるりと立ち上がる。

先程とは打って変わって、妖艶な立ち姿を見せた彼女は、紅い唇を見せつけるように舌舐めずりをした。

「血を……力を……もっと……！」

細く白い指が、血に染まった衣服に沿って、ねだるように体を撫でる。

渴きを宥めるつもりなのか、血に濡れた両手を喉に這わすエルマ

を見て、一同はばつと口元を押さえた。

「……………エ」

エツ口……………！！

それはなんて煽情的な。

見るもの全ての興奮を引き出さずにはいられない、暴力的なほどの美しさ。

鼻の付け根を揉んだり、口を引き結んだりして、諸々の発露を抑え込んでいる面々に、エルマはすうっと目を細めて微笑みかけた。

「早く」

「……………え？」

「早く、すべての血を寄越しなさい」

血で彩られた女王の命令に、一同は無意識のうちに跪いていた。いや、「なにか」によって全身を地に打ち付けられたのだと言っている。

呼吸を忘れるほどの色艶、そして肌が粟立つほどの威厳に、体がいつの間にか屈していた。

「これが……………魔王となったエルマの姿なんだ……………」

ホルストでさえ、熱に浮かされたように譫言を紡ぎ、血を注ぎ入るペースを速めてゆく。

デボラは槽のすぐ側で五体投地しながら、狂信者さながらの表情でエルマを見上げていた。

「は、鼻血が……っ。けれど……まだ……！　まだいけるまだいける！　エロマエル様は、まだまだいける……！」

もはや呂律が回っていない。

それでも彼女は、崇拜するエルマの究極のその先を見届けようとしているようだった。

「大丈夫！　できるできる！　もっと、もっと熱くなれる！　崖っぷち、最高おおお！」

それとも気が狂ったのだろうか。

デボラの熱血応援が実を結んだのか、はたまた無意味だったのか、とうとう衣のすべてが血を含んだ時、エルマのまとう雰囲気^{まとう}が、また変化した。

「……………」

微笑みの形に細めていた瞳を、静かに閉じる。

ふと、力が抜けたようにその場に跪くと、彼女は静かに両手を広げた。

ふわ……

どこからともなく風が起こる。

それは血生臭くもなければ、色香も含んでもおらず、夜空を映す湖面のように、ただ静かに澄み渡っていた。

血を吸った長い髪は、射干玉^{めはたま}の黒。

ゆっくりと持ち上げた瞼の下から現れたのは、宝石のように透き

通った真紅。

形の良い唇が、そつと音を紡いだ。

「私に注がれたすべての血に、感謝を」

玲瓏たる声だ。

これまで無様な格好で膝をついたり口を押さえていたりした面々は、無意識に佇まいを正した。

血臭や叫び声で溢れていたはずの居室は、いつの間にか、夜の雪原のようにしんと静まり返っていた。

(な、なんか……)

漆黒に見える衣。

濡れた黒髪。

荘厳な空間。

厳粛な面持ちで両手を組むエルマを前に、人々は思った。

「この身に捧げられたあまねく血、その祈りを力に変えて」

凜と意思を宿した、純度の高い紅瞳。

「必ずや、救済を我が手に」

なんか、一周回ってめっちゃ聖女っぽいんですけど！

魔王の血が覚醒したほうが、よほど聖女めいた言動になるといって謎仕様であった。

24・「普通」のピンチ(6) (後書き)

今話のデボラのキャラは誰をモデルにしたか、答えのわかった方は感想欄にて。

(ヒント：彼が海外に移動するだけで日本に大寒波が訪れる、太陽神と噂されるほど熱い男性。好き。)

25・「普通」のピンチ(7)

覚醒したエルマを見て、神々しさに目を細めたデボラは、

「邪を極むれば聖に通じんとす……この世の真理を、体現なさったのですわね……」

そのまま昇天しそうな笑みを浮かべて、穏やかに気絶した。

「ああ、そうだ……、彼はそういう性格だった……」

圧倒される面々をよそに、ギルベルトだけは、懐かしそうに目を細める。

超然とした雰囲気をもった娘に、彼はかつての友の姿を重ねているようだった。

「それとも……君がそうなのか……？」

あまりに人とかけ離れた佇まいは、もはやエルマという少女の人格が転じたというよりも、魔王だったというその人物が乗り移ったかのようにも見える。

これまでぎりぎりのところで精神の均衡を保っていたギルベルトは、ふらりと、エルマに向かって手を伸ばした。

「……………」

古に失われた言語は、きつと「彼」の名前。

ギルベルトは、絞るような声でそれを告げると、きつく眉根を寄

せた。

「すまない。……君の大切な女性むすめを、こんな目に遭わせてしまった」
その言葉は、娘に向けたものだったか、それともかつての友に向けたものだったのか。

エルマは、禍々しさと言うより神々しさを感じさせる深紅の瞳で、じっとギルベルトを見つめた。

時折、ふわりと魔力の風が髪をなびかせる。

ギルベルトは、拳を握り俯いた。

「……君は、許してくれるだろうか。俺に、彼女を愛する資格はあるだろうか」

それはおそらく、この騒動が起こってから、彼がずっと胸の内でも飼っていた葛藤だ。

寡黙な元勇者がようやく吐露したその想いは、ひどく掠れた声をまとっていた。

魔族であった父親とギルベルトの間に、どんな約束が交わされていたのかを、エルマは知らない。

ただ、返すべき言葉は、自然と口をついた。

「……言っただけ。信じます、と」

自分の言葉のような、誰かの代わりに話しているかのような、不思議な感覚だった。

ギルベルトの碧い瞳が見開かれる。
その清々しい色合いに、妙な懐かしさを感じながらエルマは頷いた。

「私が、助けます。ですから　あとは、頼みます」

エルマ自身の言葉のはずだ。

だが同時に、誰かの言葉。

凜として、優しく　目の前の勇者と扉の向こうの女性を、とびきり愛していた者の。

エルマはすつと頭を上げ、何かに惹かれたように扉の外を見つめる。

その秀麗な眉をそつと寄せると、躊躇いの無い足取りで、素足のままの爪先を槽の外に踏み出した。

指の先から滴った赤い血が、石床に触れるや、たちまちむわりと複雑な紋様を描き出す。

エルマが足を踏み出すたびに、血の紋様はみるみる広がり、それはすぐに居室のすべてを覆ってしまった。

血でできているというのに、意外にも禍々しさは無い。

代わりに、何百年をかけて作られた聖堂の彫刻のように、気の遠くなるほどの緻密な美だけがあった。

それが境界だとも言うように、血の紋様は、エルマの歩む先へ、先へと伸びてゆく。

扉を抜け、廊下を横切り、ハイデマリーの部屋の扉に手を掛けそのときにだけ一瞬、紋様は怯んだように動きを止めたが、エルマがノブを握ると、そこを中心にはつと音を立てて広がっていった。

「お母様」

静かに、扉を開く。

もはや密林の様相を呈した空間で、ハイデマリーはぐったりと横たわっていた。

儀式のためギルベルトが傍から離れたことで気を抜いたのか、苦しげな様子を隠さず、きつく眉を寄せている。

それでも彼女は、エルマの指先が汗の粒の浮いた額を撫でると、はっと目を見開き、咄嗟に笑みを浮かべようとした。

「あら、……」

しかし、エルマの姿を目にした途端、両端を持ち上げるはずだった唇が、わずかに開かれる。

ハイデマリーは、まじまじと、娘の深紅の瞳を見つめていた。

「……………」

小さく呟いた、男性の名。

ハイデマリーはふと力を抜くと、今度こそ微笑んだ。

ただし、決して弱みを見せぬ女王の笑みではなく、心を許しきった、幼子のような笑みだ。

「………迎えに、来てくれたの？」

「いいえ」

だから、エルマはきっぱりと否定する。

呼吸を荒げる母へと慎重に両腕を伸ばし、それから、緩く波打つ

髪ごと相手のことを強く抱きしめた。

「引き留めに来ました。お母様とお腹の子を、救うために」

触れた途端、聖力と魔力が反発し合って、ぱりつと火花が散る。

ハイデマリーを取り囲んでいた植物が一斉にエルマを襲い、エルマを中心に広がっていた血の紋様もまた、揃ってそれに食らいついた。

「……………く……………」

高貴なる監獄ハイデマリーの女王の口から、初めて苦痛の悲鳴が漏れる。

彼女は強い力で、娘の体を押し返した。

「やめ……………なさい……………っ、エルマ、あなたが、傷付く、わ……………！」

「はい、少々、苦しいです」

ハイデマリーとよく似たエルマの白い肌にも、汗が滲みはじめていた。

「少々というか……………かなり……………相当……………凄まじく、苦しいです……………」

「離し、なさい……………っ！ エルマ……………！ お母様の言うことを、お聞きなさい……………！」

ハイデマリーは抗ったが、エルマは「嫌です！」と叫んで、彼女を抱きしめる腕の力を強めた。

それは、母に全力で継りつく幼子の姿によく似ていたが、苦痛を堪えるエルマの瞳には、無力な涙ではなく、強い意志が漲っていた。

「やめなさい……！　あなたを、苦しみに、巻き込むなんて、ごめんだわ……！」

「ええ、苦しいです。とても。ですが……これが、お母様の感じてきた、苦しみだったのですよね」

「エルマ……？」

「十五年前、お母様は、反発する胎児の魔力と戦いながら、私を産んでくださったのですね。そして今も、同じ苦しみと、ずっと一人で戦っておられるのですね。……その苦しみを、どうか私にも、分けてください」

力を暴走させた者を抱きしめ、そう囁きかける様子は、まさに聖女そのものだ。

ただし、「もう大丈夫」と慈愛深く微笑む代わりに、エルマは厳しい顔で母に申し入れた。

「そして、一人で抱え込んで死ぬような真似は、絶対におやめください」

「エルマ……」

「お母様。私、僭越ながら申し上げます」

ぐう、と、血の紋様が大きく膨らむ。

猛り狂うようだった植物たちが、それに圧されたように、徐々に勢いを弱めはじめた。

「お母様は仰いましたね。親が子より先に死ぬのは『普通』だと。出産で命を落とすのも、年老いるのも『普通』のことだと。だから受け入れると。ですが、お母様。私が思うに」

エルマの瞳が、ふっと紅い輝きを放つ。

ぶわっ！

同時に、じわじわと植物たちを攻略していた血の紋様が、凄まじい勢いで部屋中を飲み込んだ！

「これは全然、『普通』なんかではありません」

「……………あ……………」

突然体中を渦巻いていた荒ぶる聖力が無くなり、ハイデマリーが大きく喉をのけ反らせる。

部屋中を覆っていた蔓が、枝が、花が、一斉に光の破片になって溶け消えていった。

がくりと力を失った母の体を、エルマはしっかりと抱え直した。そして、囁くような声で続けた。

「お母様。だって私は学びました。監獄の常識は　お母様たちの言う『普通』は、シヤバでは全然『普通』なんかではなかったことを。人の『普通』と自分のそれは、全然違って……………人の数だけ『普通』があるのだということを」

エルマの瞳もまた赤みを失い、いつもの夜明けの空のような色合いへと戻っている。

息は荒くなり、肌には無数の汗が滲み、大きな瞳には涙の粒が浮かんでいた。

「お母様の『普通』は、私の『普通』ではありません。だって、私はお母様を助けない。生きていてほしい。だから……………嫌がられてでもお母様を助けることが、私の『普通』です！」

最後、声を震わせながら言い切ると、ハイデマリーはゆっくりと顔を上げ、信じられないものを見るようにエルマを見つめた。

いつだって、母親の示す世界を素直に受け入れてきた娘。

この監獄で、捻じ曲がった、他人の「普通」を従順に信じ込んでいた彼女が、初めて、反発しようとしている。

「エルマ……」

ハイデマリーは、ゆっくりと手を伸ばし、涙の跡の残る娘の頬を、そっと撫でた。

親の自分に従えば、たくさん褒めてあげると言ったけれど。なんて不思議なことだろう。

「あなた……成長したのね……」

反抗されたことが、こんなにも嬉しい。

ハイデマリーはほっそりとした腕を回し、娘の体を強く抱きしめた。

「エルマ。わたくしは、あなたの成長がとても嬉しい」

「お母様……」

「そして、今のあなたにだからこそ、頼みたいことがあるの」

「え？」

目を瞬かせる愛らしい娘に、ハイデマリーは汗を浮かべたままの笑みで応えてみせた。

「出……ちやう。あと三秒。取り上げてくれる？」

「え……っ！？」

久々に見る、娘の驚き顔。

お説教はされてしまったけれど、彼女を振り回すのは、まだまだこちらの方だ。

きっかり三秒後、両手を組んで祈る人々の耳に、元気な産声が響いた。

26・シャバの「普通」は愛おしい(1)

無事に生まれてきた子どもに万全のケアを施し、その傍らで、協力すべく監獄に集まって来てくれた人々をもてなし、丁寧に送り返す頃には、すっかり日が高く昇っていた。

前夜の雨も上がり、獄舎を囲む森の緑は水分を含んでつやつやと輝いている。

危機と焦燥に揺れた夜は去り、今ヴァルツァー監獄には、生命の歓びを謳うような、初夏の日差しが溢れていた。

「ようやく一段落ですね。皆さま、本当にお疲れ様でございました」

最後の「協力者」の一人を見送ったエルマは、ほっと肩の力を抜く一同を居間に集め、紅茶を差し出す。

広いテーブルに着いた大罪人家族とルーカスたちは、さすがに疲労を隠せず、緩慢な動きでカップを受け取った。

「エルマ、おまえも少しは休んだらどうだ。ずっと眠っていないだろう」

エルマの美しい顔にも、うつすらと疲労の色が滲んでいることに気付いたルーカスは、思わし気な表情を浮かべる。

そう。

魔王覚醒の儀式、出産の介助、協力者への表敬に新生児の世話と、忙しく動き回っていたエルマは、皆には仮眠を勧めておきながら、自らは一睡もしていなかったのだ。

だが、

「いえいえ、二時間ごとに授乳と計量がございますし、着替えの用意や洗濯……何よりすやすやと愛らしい音を立てて眠るあの子を、毎時観察して記録とスケッチを残すミッションがございます。七日後の名付けに向け、検討会議も招集せねば。やることは山のようにありますし、不思議なことに、気力も山のように湧いてくるのです」

エルマは肩をぐるぐる回して応じた。その全身からはやる気が立ち上り、かと思えば突然にへら……と笑み崩れる。

「弟というのが、あんなに可愛い存在だなんて……。彼を世界に迎え入れたこの奇跡を、人類は皆、両の膝の皿を割って大地に身を投げ出すくらいの姿勢で感謝せねばなりませんね」

「あ、ああ……」

ナチュラル危険者と化したエルマに、ルーカスが顔を引き攣らせる。

産まれてきたのは、なぜかハイデマリーの銀髪でもギルベルトの黒髪でもない、金髪の愛らしい男の子だった。

とはいえ、瞼を閉じているためまだ瞳の色はわからないし、産後すぐなので体もくしゃくしゃとして、胸を引き絞るような可愛さというよりは、か弱さの方を強く感じさせる。

ルーカスのような外野の、それも男性からすれば、「小さいな」くらいの感想しかないのだが、大罪人たち、特にエルマには、既に絶世の美新生児に映っているようであった。

エルマはひとしきり、生まれたばかりの弟に対する贅辞をでれれと続けてから、ふと表情を神妙なものに戻した。

「こうして喜びを噛み締められるのも、ひとえに皆様のおかげでございます」

そうして、まずはテレジアの方を向いて丁寧に頭を下げる。

「特にテレジア王太后陛下。あなた様が母の制止を振り切って私どもを呼んでくださったからこそ、こうして母は助かりました。勇敢にして慈愛深いあなた様に、心より感謝申し上げます」

「……べつに。あの女があまりにあまりに必死に『呼ぶな』と言うから、その逆をしたくなっただけだ」

テレジアはふんと鼻を鳴らしてひねくれた答えを寄越す。

が、香りも味わずに紅茶のカップを傾ける仕草が、照れによるものだということは、微表情を読むまでもなく、誰の目にも明らかだった。

続いてエルマはルーカスに向き直ると、彼にも深々と礼を取る。

「そしてまた、ルーカス殿下。あの時あの場で進むべき道を示してくださいましたこと、本当に感謝しております。私どもの絶望を、きっぱりとした口調で切り捨ててくださった殿下の姿は、とても頼もしかったですし……その」

それから、トレーを胸の前できゅっと抱きしめ、紅潮した顔でおずおずとルーカスを見つめた。

「とても、格好よかったです」

なんだこの可愛い生き物は。

昨夜は突然機嫌を損なわれてしまったので 途中からそれどころではなくなったとはいえ、こんな素直な表情を向けられるとなおさら破壊力が凄まじい。

ルーカスは脊髄反射で右手をエルマの頬に持っていきかけ、ついで無表情のまま左手で封じた。

この常軌を逸した大罪人^{かぞく}たちの前でエルマを抱きしめたりしようものなら、待つのは死だ。

「……それは光栄だ」

少し考えて、無難な言葉を口から押し出す。

結果いささかぶつきらばうな口調となったルーカスに、エルマは戸惑ったようだった。

「あの……ああ、そうですね、こうした場面では御礼よりもお詫びを申し上げるのが適切でしたね。その……このたびは大変なご迷惑をお掛けし、申し訳ございませんでした」

そして何やら、そのように受け止められたらしい。

「監獄^{とく}でなら少しはおもてなしができるかと思っておりますのに、結局それもままならず……。どころか、殿下だけでなく、関係者各位まで巻き込んだ大騒動を引き起こしてしまいましたこと、誠に心苦しく」

「馬鹿者」

しゅんとして謝罪を続けるエルマを、ルーカスは軽い溜息とともに

に遮った。

「協力した人間の大部分は、単におまえに恩を返したただけだし、そもそも見知った人間が弱り果てていたら、自分にできる手助けをするのなど『普通』のことだ」

恐る恐る、といった様子でこちらを窺う少女は、うっかり生命の危機を忘れて頬ずりしたくなるほどのいじらしさだ。

ルーカスは「ああもう」と内心で天を仰ぎながら、つい腕を伸ばし、俯いた拍子にこぼれた黒髪をくいと引っ張ってしまった。

「それが、大切な相手であるならばなおさら、な」

少しばかり距離を詰めて、声を潜めて。

どうせこの頓珍漢な少女は、百九十度くらいに捻じ曲がった解釈をするのだろうが、もう知ったことが。

少女は今度は何を思ったものか、夜明け色の瞳を零れそうなほどに見開いて、まじまじとこちらを見つめた。

「殿下……」

「なんだ」

「トウ、トウ、トウ、トウ」

「あん？」

トレーを盾のように掲げ、小声で告げてくる謎の言葉に、ついルーカスは怪訝に眉を寄せてしまう。
なんだその呪文は。

「はははもうなんだよ死んじゃえ君死んでしまえ」

やはり妙な解釈をされたようだと言っていると、なぜか向かいの席から殺気立った声が掛かった。

向き直って見れば、ホルストである。

彼は相変わらずの白衣姿で頬杖を突き、笑っていない目をして唇を吊り上げていた。

その手元には、エルマが淹れた温かな紅茶と　なぜか大量の紙の束がある。

ホルストは笑みを仕舞って溜息を吐くと、見るだけで胸やけを起こしそうな量の砂糖をカップに注ぎ入れ始めた。

「やだやだ、せつかくの第二子誕生の清々しい日に、胸糞悪い光景を見せないでくれる？　おかげで、せつかく固めた僕の決意が、みるみる霧散しそうじゃないか」

「決意？」

「そ」

がしゃがしゃと液体を掻きまわしてから、ぽいとスプーンを投げ捨てる。

「君を勝者だと、認めるよ」

それから彼は、言葉も投げ捨てるようにして告げた。

「勝者……」

「まさか品定め、もとい、肝試しのこと、忘れてたわけじゃないでしょ？　どちらが人体蘇生薬を作れるかの勝負、君はぼろぼろの老婆になって死ぬところだったマリーを救ったわけだから、君の勝ち

だよ」

ルーカスは目を見開いた。

こじつけのような勝利認定だ。認める、と言っているわりに、不本意そうなのも気になる。

(だが)

ハイデマリーのために、顔色を変えて奔走していたホルストを見てしまった今ならわかる。

これは彼なりの、謝意なのだ。

「つまり、君は、【怠惰】^{キカン}、【暴食】^{イザーク}、【嫉妬】^{リーゼル}に引き続き、この僕からも勝利をもぎ取ったわけだ。ただいまマリーの隣で絶賛笑み崩れ中の【憤怒】^{キルベルト}からも、くれぐれもよろしくとの伝言を言付かっている。結論すると」

ホルストはぶすつと頬杖を突いたまま、ひらりと片手を振った。

「僕たちは、君をエルマの友人として認める」

薄い唇が、拗ねたように歪められた。

「ま、ありがと、ってことで」

「んもう、素直じゃないわねえ！ ルーカスクンは、友人どころか、あの大馬鹿マリーを救ってくれた恩人なのよ。もっと礼を尽くしなさいよ」

ホルストが素っ気なく告げると、隣に座っていたリーゼルがすぱんとその頭をはたく。

彼は、その中性的な美貌に、美しく見えるよう計算し尽くされた笑みを浮かべて、完璧なウインクを寄越した。

「あたしたち、ほんとに感謝してるのよ。あの時ルーカスくんがピシッと仕切ってくれなかったら、きつと今頃葬式でも上げてるもの。ああん、あの時のあなた、かつこよかったわ。もうあたし、なんでもしてあげたくなくなっちゃうくらい」

しなを作って放たれたその言葉は、一体どこまでが本気なものか。顔を引き攣らせて、「それは、どうも……」と無難に答えたルーカスに、さらにモーガンもが穏やかに頷きかけた。

「そうですね、あなた様はエルマの友人として認められたわけですから、我々も友情を示さねば。何か御入用のものはございますか？ エルマ以外の美少女ならば即座に『用立て』ますし、あるいは一国くらいなら落とせますよ」

「いや。ルーカス殿は、騎士だと、言うから、魔獣を、百匹ほど狩って、軍に、調教するほうが、喜ばれるかも、しれん」

イザークももぐもぐと茶菓子を頬張りながら、とんでもないことを言っただけで寄越す。

「わああ。エルマの友人になると、特典でもれなく世界の覇権が付いてくるのか。いいなー」

「いいものですか！ これってもう、神か悪魔の領域ですわよ……！」

紅茶を啜りながらのほほん感想を漏らしたフェリクスに、イレネはこそこそと突っ込んだ。

気に入られれば、この世のあらゆる権力や快楽を与えてもらえる。それはもはや、おとぎ話か何かだ。

そして多くのおとぎ話が見えるように、もしそこで欲を掻こうものなら、彼らはすぐにその人物を、地獄の底へと引きずり落とすのだらう。

それを察してかどうか、

「……………いや結構」

ルーカスはしばしばかんとした後、口の端を片方だけ持ち上げて、肩を竦めた。

「気持ちありがたいが、それくらいなら、そこでのんびり紅茶を飲んで、うちの愚王をどうにかしてほしいものだ」

「え？　そこで僕に振るの？」

「本人はすっかりお忘れのようだが、そもそも俺たちがここにいるのは、『全国民の前での裁判』とやらまで、あなたを見張るため、なぜそうなったかと言えば、あなたがつかつかとくだらない謀反に巻き込まれたためだ」

きよとんと己の顔を指差す異母兄を、ルーカスはじろりと睨んでみせた。

「良識ある臣下ならば、誰が見てもエルヴィンの言いがかりとわかるのに、肝心の当事者は事情も話さず、諾々と監獄に身を寄せるこの有様。　義兄上、いい加減、腹の内を明かしていただけませんか」

そう。

品定めやらハイデマリーの命の危機、そして出産という騒動の連続で一同はすっかり忘れていたが、そもそもルーカスたちがこの場にいるのは、フェリクスが血統を騙った罪で監獄送りにされからであり、なぜそんなお粗末な謀反に巻き込まれてしまったかと言えば、フェリクスたち当事者が、エルヴィンに何も反撃をしないでいるためだ。

テレジアについては短い付き合いであるものの、噂とは裏腹に、実は聡明で果敢な女性であるとわかつている。フェリクスもまた、聖具ごときの曖昧な証拠で、やすやすと白旗を上げるような人物ではないはずだ。

だというのに、なぜ。

その真意が掴めず、ルーカスはやきもきしていたのであった。

「えー。だからさー。言ったじゃん、物証を押しえられて手も足も出ないって」

「謀反者の作らせた聖具ごときのなにが『物証』だと言つのです。先王の血を継ぐ、継がないにかかわらず、血を落としたら反応するように仕立てて、事実を捻じ曲げたに決まっている」

「事実だよ」

ルーカスが身を乗り出しかけたところに、水を差すような声が響く。

フェリクスの間延びした話し方とは似て非なる、投げ捨てるような口調で告げたのは、ホルストであった。

彼は相変わらず頬杖を突いたまま、気だるげに小首を傾げた。

「その狐顔が、先王ヴェルナーの実子でないというのは、事実だ」

「……………は？」

ぽかん、とするルーカスに、ホルストはぺらりと紙の束の一枚を取り出してみせた。

ひらひらと宙で翻しながら、とんでもない爆弾を投下する。

「たった今、血液によるDNA鑑定技術を確立したんだよね。それによって、早速君の願いを叶えてあげよう、ルーカスくん。フェリクス・フォン・ルーデンドルフと、先王ヴェルナー・フォン・ルーデンドルフの血縁可能性はゼロ。二人は赤の他人だ。嬉しい？」

「D……………NA……………？」

聞き慣れぬ単語に眉を寄せるルーカスに、ホルストは特に解説を加えることはせず、ただ悪戯小僧のように、にやりと口の端を持ち上げた。

「せっかく一万タイプもの血液が集まる機会を、僕が見逃すはずがないよね。それについても感謝してるよ、色男くん」

よくわからないが、彼は儀式のために集めた血をちゃっかり利用して、何らかの技術を確立したらしい。

愕然とするルーカスたちを見て、ホルストは何を思ったか、釈明するように肩を竦めた。

「正確性はそこらの聖具よりはるかに高いと自負してるよ。信じられないなら論文を書いてもいいし、君たちの信用できる学者に再現をさせてもいい」

「いや……………その点では、疑う点も無いが……………」

人間性はさておき、監獄の住人たちの能力や、ある種の誠実さに

については、ルーカスも腹で理解しているのである　ルーカス自身、それもどうかとは思いますが。

「信憑性よりも今は、その内容だ。先王の実子では、ない……？」

そんなの、エルヴィンの言いがかりでしかないと思っていたのに。

ルーカスは目を見開いたままフェリクスと、テレジアを見た。

腹の内を見せぬ異母兄は、冷ややかな一瞥をホルストに向けるだけだったが、テレジアはさっと青褪めている。

それはそうだろう。

ホルストの持つ絶対的な科学の力によって、いよいよ己の罪が明らかになれようとしているのだから。

（先王の子ではないということは、つまり……やはり、彼女は不貞を働いていたということなのか……？）

冷酷非道な「ブラッディ血塗れテレジア」とあだ名されながら、その実、妹を庇うために不名誉をかぶってきたという彼女。

その本性は、意外にも潔く誠実だと、そう認識を改めつつあったところだったのに、そんな人物が夫以外の男と通じたというのか。

「ついでに言うと」

だが、ホルストが続けた言葉によって、ルーカスたちはさらなる混乱に突き落とされることになった。

「やめてくれ」

「その王太后サマとフェリクス王も、親子関係にはない」

テレビジョンの制止と、ホルストによる衝撃的な指摘は、同時だった。

27・シャバの「普通」は愛おしい(2)

「……………なんだと？」

今度こそ、ルーカスは硬直する。

フェリクスは先王ヴェルナーの子ではない。
ただし、テレジア王太后の子でもない。

では 彼は、誰の子なのか。

呆然とするルーカスの前で、ホルストは悠々と紅茶を啜ってみせた。

「わからない？ まあ、ここから先は、鑑定結果ではなく推測だけ
ど その狐男はね、テレジア王太后サマの妹と、彼女を手籠め
にしたどこかの男の子ともさ」

「……………！」

居室に、ルーカスとイレエネの息を呑む音が響く。

ホルストは酷薄そうなはしばみ色の瞳で「ねえ？」とテレジアに
笑いかけると、悪戯っぽく小首を傾げた。

「僕たちは探偵ではなくて、罪人なんだ。自供は自分でしてくれ、
王太后サマ？」

すべてを見通しているかのような、余裕の表情。

青褪めて黙り込むテレジアの代わりに、フェリクスが珍しく不機

嫌そうに眉を寄せて「あーあ」と呟いた。

「悪趣味だねー。女性の秘密を暴き立てるなんてさ」

「僕が暴き立てたのは、あんたの秘密のつもりだったんだけど、フェリクス王さま？ 彼女は巻き込まれただけさ、可哀そうにね」

毒を含んだ抗議は、いけしゃあしゃあとした口調で返される。

「言っただろう？ 僕たちは『友人』にはきちんと尽くすし、逆に、エルマを搾取しようとする人間のことは、きちんと攻撃するんだ」

ホルストは、はしばみ色の瞳を剣呑な笑みの形に細めた。

フェリクスの出自を解き明かすということは、ルーカスの「願い」を叶えることであると同時に、高みの見物を決め込んでいたフェリクスへの意趣返しでもあるわけだ。

室内に、緊迫した沈黙が満ちる。

「…………フェリクス」

やがて口を開いたのは、テレジアだった。

初めて息子の名前を呼んだ彼女は、ふらりと立ち上がると、震える声で問うた。

「…………いつから、知っていた？」

彼女は、真実を突き止めたホルストよりも、フェリクスに対して驚愕の表情を浮かべていた。

「さあ」

対して、フェリクスはつまらなそうに感じるだけだ。
テレジアはしばし彼の顔を凝視すると、ややあって、糸が切れた人形のように、再び椅子に座り込んだ。

「……………ああ、そうだ」

それから、それまでの貫禄ある態度が嘘だったかのように、顔を俯け、静かに口を開いた。

「……………その通りだ」

力ない声で彼女が語った内容は、以下のようなものだった。

先に告白したとおり、テレジアとクリスタは同時に妊娠していた。聖力過剰が起こったのは、クリスタが臨月に入ってから少し過ぎた頃。その時テレジアもまた、翌月に臨月を控えていた。

順調に行けば、クリスタの出産の半月後に、テレジアもまた出産を迎える予定だった。

だが、狂ったように雨が降り出したあの日。

隣室でクリスタがこと切れるその少し前、テレジアは、突然激しい腹痛に襲われたのだ。

陣痛かと思うほどの腹部の痛み。

目は眩み、胃は吐き気を訴え波打った。

咄嗟に手を突いたテーブルには、冷めきった紅茶のカップ。

不自然にひりつく喉の痛みから、テレジアはすぐに原因を理解した。

毒。

「当時、王の第一子を授かった私を害そうとする者は多かった。細心の注意を払っていたはずだったが、実家に引つ込んでからはだいぶちよっかいかいも減って……油断していたのだ。それが敵の策だったとも気付かずに」

「敵、とは……？」

慎重な声でルーカスは尋ねるが、テレジアは名を口にするのも嫌だと言わんばかりに顔を歪める。

代わりに、だらりと椅子の背にもたれて話を聞いていたフェリクスが、なにげなく答えた。

「下睫毛の母親」

エルヴィンの母ということだ。

「王太后陛下によって、聖具なしには生きられない体にされたという、あの……？」

符合した事実には、思わずルーカスが呟くと、テレジアは俯いたままふんと口の端を持ち上げた。

「同じ毒を返しただけよ」

それほど、苛烈な作用を持つ毒であったのだ。

「してやられたと理解した時、既に私の体は毒に蝕まれていた。ふらつく足取りで妹の部屋の扉を開け、……しかし私は、思ってもみ

ない惨状に自身の状況を忘れた。そして気付いたのだ」

体が、楽になっている。

そう。

指を針で突いた程度の、小さな傷がきっかけで気付いたなど、嘘だ。

全身を蝕む毒を、たちどころに癒すほどの「なにか」。

それがあつたからこそ、テレジアは妹の聖力過剰に気付いた。

「だが、理屈はわからぬが、聖力は腹の中の子にまでは及ばなかった。結果、健康を取り戻した私の体はその場で産気づいたのだが生まれてきたその子は、死んでいた。そうとも。私は、落ちるようにして出てくるその子どもを、自分一人で受け止めたのだ」

聖力が胎児にまで及ばないというのは、クリスタも同様だった。荒ぶる聖力は、彼女の体を急激に老いさせ、滅ぼしたのに対し、その腹の子にはそうした作用をしなかったのだ。

産褥の血を流すテレジアの横で、こと切れたクリスタの腹が、一度だけ動いたように見えた。

テレジアは一瞬だけ逡巡し、ついで、震える手で妹の腹を裂いた。

途端、元気な産声が部屋に響いた。

「ひどい雨の日だ。産声も悲鳴も助けを呼ぶ声も、すべて雷雨に呑み込まれて、薄暗い部屋には結局私一人しかいなかった。目の前には、死した我が子と、老いた妹と、生きた甥。そして、いまだ血を流した私。私は……混乱していた」

正しくあるべきだ、と最初彼女は思った。

毒を盛られて、我が子は死んだ。聖力を暴走させて、妹は死んだ。二つの事実を明らかにして、正しい道を進むべきだと。

「だが……それをしてどうなる？ 正しいから何になる？ 私は実際に子どもを失ったばかりか、それを認めれば、あの女に勝利と権力を許すことになる。甥は母親を失い、父親のわからぬ子として、どこぞの孤児院に預けられることになる」

だが 自分と甥が、同時にその憂き目を避ける方法が、一つだけある。

二つの秘密を足し合わせ、嘘と噂で塗り固め。

そうするだけで、テレジアには勝利が、甥にはこの世で一番の富と権力が手に入る。

よせ、と、頭の片隅で誰かが叫んだ。

どうかしている。

それは甥と妹と自身と、そして我が子、四人もの尊厳を踏みにじる行為だ。

だが同時に否定した。

いや違う。

甥を助け我が身を守り、我が子と妹に償うための行為だ。

「認めよう。そこには打算があった。野望も、憎しみも。ただ、同時に……私なりの、罪滅ぼしの意味もあった」

徐々に収まってきた雷鳴が、最後の悲鳴を上げた時、テレジアは震える手を、赤子へと伸ばした。

フェリクス。

そのとき初めて呼んだ、我が子の響き。
それが、彼女の罪の名前。

フェリクス。おまえを、絶対に育てる。なんとしても、王にしてみせる。

それが、彼女の贖罪。

テレジアは顔を上げ、フェリクスをじっと見つめた。

「その後……私は、おまえを育てるのに躍起になった。第三王妃への復讐を果たし、ほかの側妃も牽制し、間違ってもおまえに手出しをするような愚か者が出ぬよう、心を砕いた」

その結果の一つが、ルーカスの母ユリアーナに対する嫌がらせと言っわけだ。

告白を終えたテレジアは、最後、体に残った過去の残滓を吐き出すように、長い溜息を漏らした。

「……黙っていて、すまなかった」

「あーあ」

そこに、気だるげな様子で耳を傾けていたフェリクスが、ひらりと両手を翻す。

「ゼーんぶ言っちゃった。せつかく、人が隠してあげてたのに」

その一言で、ルーカスは悟った。

「……義兄上が黙秘していたのは、このことを隠すためですか。父王の実子でないと早々に認めてしまえば、テレジア陛下と親子でないことまでは、探られずに済むから、と？」

「孝行息子でしょー？」

慎重な問いは、ひょうひょうとした口調で認められた。

「なぜかみんなには信じてもらえないんだけど、僕ってこれでも、かなり義理堅くて優しい男だからさー。僕のためにがんがん孤立していく母親を見てたら、その願いの一つ二つ、叶えてあげなきゃって思ったわけだよ」

「私の、願いだと……？」

初めて「息子」の真意に触れたテレジアが、眉を寄せて問い返す。フェリクスはそれには直ぐには答えず、ひっそりと笑った。

「……十一年前でしたよ、母上」

「え……？」

「先ほどの問いの答え。僕があなたのいや、僕たちの秘密に気付いた年。僕は、十一歳だった」

突然の告白。

テレジアは息を呑んだ。

「十一年前に……なぜ？」

「さあ。……誤魔化すわけではなく、自分でもなぜその日だったかはわからないのです。でも、そんなものでしょう？ 日々一滴ずつ溜まっていた疑問の水が、たまたまその日になって閾値を超え、溢れ出してしまった。それだけのこと」

フェリクスは昔から、聡い子どもだった。

日々強く緊張している母親を見て、王宮を恐ろしい場所だと理解するほどには。

有能な政敵を次々と叩き潰してゆく母親を見て、なるほどあからさまな有能さなど、害にしかならぬと理解するほどには。

そうして、剛腕で冷酷な母親の存在感に隠れ、懦弱な王子の仮面を被り、のらりくらりと王宮生活を紡ぐ内に、彼の内側には日々、微かな違和感が蓄積されていった。

本来は実直な性格のようにも思える母。それがこつも、冷酷非道な烈婦を演じているのはなぜだ？

側妃たちの能力を推し量り、それに見合った、実害とならぬぎりぎりの牽制を仕掛けてきた母親。第三王妃に限って、重篤な症状に追いやったのはなぜだ？

昔は仲の良かったと評判の、修道院送りにされたという母の妹。どれだけ調べても、一向に存在が確認できないのはなぜだ？

「慎重なあなたは、懊惱を日記にすら残そうとしなかった。実家にあっただはずのクリスタの肖像画もすべて処分した。ただ唯一、最も美しいと呼ばれる肖像画だけは処分できなかったのでしょう。『微笑みの少女』とあだ名されるその絵画を、あなたは王宮の宝物庫の奥深くに秘蔵して、ときどきこっそりと見に行っていた」

「微笑みの少女」。

監獄にあるのを見て、テレジアが強く反応した作品だ。

「でも、隠されると見なくなるのが僕の性分だからさー」

そこでフェリクスは口調を砕けたものに戻し、ルーカスを振り向いた。

「その日、なんでだか僕は思い立って、その絵を見に行つたわけ。で、なんか色々悟っちゃつた。昔から、この手の勘は鋭いんだよねー」

すっかり冷めてしまった紅茶を一口すすると、フェリクスはその淡い液面を見つめた。

「それで、思った。そうかー、僕はフェリクス王子じゃなかったんだ。もともと『フェリクス』が座るべきだった魂の席に、しれっと腰を下ろしている赤の他人。それが僕か、って」

壁いつぱいに金銀財宝や宝飾品がひしめく空間。そこでほんやりと膝を抱えながら、しばらく彼は考えた。

十一年。

知らずとはいえ、十一年に亘つて、自分は他者の玉座を略奪し、浴びるように富と権力を享受してきたわけだ。

それはなんだか

「ちょっと、悪いかなって」

少しマナーを違えてしまった、くらいの軽い気まずさを浮かべ、フェリクスは肩を竦めた。

それで次に、彼はこう考えた。

ならば、返そう。

次の十一年、同じ年月だけ、自分は「彼」に、これまで受けた分の富と権力を返す。

いや、それ以上のものを約束しよう。「彼」が守りたかったであろうルーデンを富ませ、最も権力ある国にしてみせる。

だって、自分のためにいくつもの罪に手を染めた「母」は、願いを込めてこの名を授けたというから。

フェリクス。

ルーデンを興した賢者のようであれと。

「ほんとは、僕の誕生日までに、シユタルク併合と、近隣への種蒔きまで済ませておきたかったんだけどな」。ちよつと遅延」

ぼやく彼は、来月二十二歳になる。

時間ももつたないんだ。

王たる僕の時間は、この国の誰のものより貴重。

フェリクスが口にしてた言葉の意味をようやく理解して、ルーカスは目を見開いた。

強硬なまでの富国策が、そんな理由にあったとは。

そのありようは、一途というよりは、いびつだ。偏執的なようについて、どこか気まぐれでもある。

だが、その奇妙さがむしろ、彼らしいようにも感じた。

「とまあ」

フェリクスはそこで空気を切り替えるようにして笑い、小首を傾げてルーカスを見やる。

「これで君は、ルーデン最大の秘密を握ってしまったわけだけれど。僕たちを　ルーデンを、どうする？」

その悪魔のような微笑みで、ルーカスはようやくフェリクスの意図を悟った。

彼は委ねたのだ。

これまで頑なに隠していた真意を突然明らかにして、彼の処遇を、ルーデンの命運を、異母弟に押し付けた。

「せっかく一人で抱えてやってたのに、しつこく聞き出そうとしたのは君だよ、ルーカス。……さあ、僕たちを断罪する？　それとも事実を封殺して、民を欺く？　どうしよっか」

フェリクスは無邪気な子どものように尋ねる。

全面的に身を委ねたようであり、その笑みはやけに攻撃的だった。

そう、彼は、きっと委ねたくなどなかったのだ。巻き込みたくなかった。

とびきりプライドの高い彼は、「弟」に事情など知られなくなかったし、手など間違っても差し伸べられなくなかったのだ。

「……義兄上」

「よくお考えよ、ルーカス。どちらが合理的で真つ当か、要領のいい君ならすぐにわかるでしょー？ 血縁もない罪人二人を庇って、全国民を欺くだなんて、狂気の沙汰」
「楽しそうなお話ね」

が、フェリクスが手綱を握ろうとした会話は、涼やかな声によって遮られた。

「マリー！」

「あんだ、もう起き上がってよかったの！？」

ハイデマリーである。

彼女は、締め付けの少ないドレスをまとい、ゆっくりとこちらにやって来た。

「ごきげんよう、皆さま。このたびはどうもありがとうございます。おかげで母子ともども健康よ」

「子どもはどうしたのよ？」

「ギルが付きつきりで見ているわ。隙あらば子どもの愛らしさを詩にしようとするものだから、閉口してちよっと抜け出てきたの。あれって、クレメンスの影響かしら。わたくしにも紅茶をくれる、エルマ？」

優雅に椅子の一つに腰を下ろす彼女は、とても産後すぐとは信じられない。

艶麗で、泰然たる、まさに監獄の女王だ。

甲斐甲斐しく世話を焼こうとする周囲を慣れた素振りであしらい、ハイデマリーは悪戯っぽくテーブルに身を乗り出した。

「それで、なんのお話をしていたのかしら。一人の女性の秘められた過去について？ それとも、とある青年の秘められた決意について？」

まるで恋愛話に目を輝かせる娘のように笑みを浮かべる。

「それとも、兄を殺すか国を騙すかの葛藤とか？ ふふ、失礼、そんなありきたりなテーマで、長々と盛り上げられるはずもないわね」

言外に、一国を揺るがす秘密や、それにまつわる懊悩を、些事だと言いつける。

絶句したルーカスたちに、ハイデマリーは優しく目を細めてみせた。

「だってわたくしたちは、罪人なのだから。嘘も秘密も、罪も、歪んだ正義も、すべてわたくしたちの世界に属する、ありふれたものたち。それらを恐れる理由なんて、ひとつも無いわ」

彼女は、すべてを見通すかのような藍色の瞳をルーカスに、そしてテレビアやフェリクスに向け、慈愛深く語りかけた。

「ねえ。だからなにも躊躇うことなどない。悩んでいるなら、わたくしが背中を押して差し上げる。だってわたくし、心から思っているのだから」

白い指が、優雅に紅茶のカップを持ち上げる。

「友人であり恩人であるあなた方に、なにかお礼をしなくては、とね」

完全に以前の姿を取り戻した女王は、ゆっくりと立ち上る紅茶の湯気越しに、そっと目を細めた。

28・シャバの「普通」は愛おしい(3)

「とうとう来たぞ、この日が……！」

エルヴィン・シュタルクは、城下の広場に続々と押し寄せる人並みをカーテンの裏から見下ろし、興奮で顔を赤らめた。

王都中にはら撒いた触れ紙や新聞を握りしめた人々。彼らの顔は、皆不信や疑念をはらんでいる。

(いや……期待したよりは、少し落ち着いているか……?)

じっくりと民の表情を検分したエルヴィンは、内心で感想を修正する。

なんでも二週間ほど前に、魔王が復活するだとかなんとか怪しげな噂が立って、国中の話題が一時期そちらで持ちきりになってしまったのだ。

その突拍子もない噂は、なぜか先週ごろからびたりと止み、あれだけ大騒ぎしていた者たちも不思議なほどその話題を口にしなくなったが、未だに彼らの関心はそちらに残っているようだ。

ルーデン王フェリクスは王位篡奪者、だとか、シュタルクより真の英雄現る、だとか、すべての伝手を使ってさんざん世論を煽ったわりには、いまいち反応が芳しくない、というのが、エルヴィンの正直な印象だった。

(だが……現に人は、こうして広場に集まっている。この大人数を

相手に、印象的にフェリクスが偽の王である証を示してみせたら、それは揺るぎない「事実」となって国中に広がっていくさ）

民が興奮し、暴走するのはその時でよい。

数年とはいえ導いてきたはずの国民が、寄り集まって暴徒と化し、一斉に怒号を上げてフェリクスを王座から引きずり落とす。そんな小気味よい一幕を思い浮かべて、エルヴィンは笑みを深めた。

「世にも鮮やかな、王位交代の名場面だ。卑しき偽王は民から石を投げられ、雌伏の時を耐えた真の英雄。僕が、ルーデンを取り戻す。どうか楽しみにお待ちください、母上」

芝居がかった仕草で、右手の薬指に嵌まった指輪に口付けを落とす。

それは、忌まわしい烈婦テレジアの奸計によつて、半身不随の体にされてしまった哀れな母が、「いつかルーデンを取り戻すのです」との悲願を込めて、自分に託してくれたものだった。

おおおお……

人々の発する微かなざわめきは、今や重なり合い、唸りうなとなって広場に響き渡る。

それを、芝居の幕開けを待ちきれぬ観客の声、と受け取ったエルヴィンは、シュタルクから連れてきた側近たちに合図し、いよいよバルコニーへと躍り出た。

「皆の者、よく来てくれた！僕は、ルーデンの正統なる王子、エルヴィン・フォン・ルーデンドルフ。シュタルクにて見聞を広めていたが、ルーデンが陥ろうとしている危機を見過ごせず、この地に

戻ってきた！」

片手を挙げ、朗々と階下に向かって声を張る。

シユタルクでは考えられないほどの聴衆の数。これでは、いくら大声で叫んでも肉声は届かないのかもしれない。

だが、その状況は、彼に焦燥や緊張よりも、ただ快感をもたらした。

こんなにも多くの人間を、これから自分は掌握しようとしている！

たとえ声は聞こえずとも、自分の華やかな顔立ちは観客に強く印象を残すはずだ。

優美な立ち姿に、堂々たる話しぶり。

聖具もあれからさらに改良を施し、血縁が認められない場合には、より劇的な反発が起るようになっておいた。

こうした、視覚に訴えて人心を操作する術を、エルヴィンは言葉の通じにくいシユタルクで学んだ。

かつて善良な母を甚振り、正義感溢れる自分を一方的にシユタルク辺境国に追いやったフェリクスたち。

だが、彼らの仕打ちがかえって自分に力を蓄えさせることになったと思うと、その因果の妙に、エルヴィンは笑いすら込み上げるのだった。

「偽の王を、ここへ！」

勢いのまま、バルコニーの内側を振り返って合図し、二人の人物を引っ張りだす。

両手を荒縄で拘束された彼らこそ、狐のごとき卑劣な異母兄フェリクスと、その母テレジアだった。

国民の前での「公平な」査問準備が整うまでの監獄生活が堪えたのか、二人とも力なく顔を伏せている。

いつになく神妙な彼らに、エルヴィンは満足を覚えた。こつでなくてはならない。

無抵抗でバルコニーまで引きずられてきた二人を指し示し、エルヴィンは再び声を張った。

「聞いてくれ、民よ！ 彼らは、天をも恐れぬ重大な罪を犯した！」

彼は身振り手振りを交え、その派手な顔立ちも存分に生かしながら、ドラマチックに糾弾を始めた。

彼らはかつて、自分たち親子を理不尽に害し、追放したこと。

エルヴィンたちはその暴挙に驚き、なにか理由があるのではないかと探索に手を尽くしたこと。

やがて、聖具生産の盛んなシユタルクの助力で、彼らが隠そうとしていた恐るべき真相を、明らかにする術を得たこと。

それを誠実に断じるべく、こつして国民の前で査問の場を設けたこと。

彼の熱弁は、すべての民には届かぬものの、少なくともバルコニーの近くを固める数百の人間は、熱心にバルコニーを見上げている。徐々に彼らの顔が不信の色を強めていったのを確信し、エルヴィンはこつとばかりに叫んだ。

「これが、その聖具だ！ 血の一滴を加えるだけで、たちまちに真実を明らかにする！ この聖具が、偽りを、打ち破る！」

聖具の開発者であるシユタルクの側近は、詳細な仕組みを説明しようとして身乗り出したが、エルヴィンはそれを視線で制する。

今この場で必要なのは、懇切丁寧でつまらない説明ではなく、大胆で胸を打つ演説だ。

偽りを打ち破る、と短くまとめたフレーズを、聴衆がざわめきながら反復するのを認めて、エルヴィンはいよいよ笑みを深めた。

さあ、仕上げだ。

エルヴィンは、予めバルコニーに置かせておいた巨大な水槽に近づき、それを覆っていた布を、ぱつと音を立てて引き抜いた。

透明な水をなみなみと湛えたそれに、まずは恭しい手つきで髪の毛の一筋を沈める。

仰々しい緋色の布から取り出したその毛髪は、先王ヴェルナーのものだった。

「この、獅子の刺繍からわかる通り、水槽　この聖具に入れたのは、埋葬された父王ヴェルナーの遺骸から採取した毛髪だ！　そこに、ここなるフェリクスを名乗る男の血を垂らす。二人が真に血の繋がった親子でなければ、聖なる水はたちどころに『反発』を起すだろう」

朗々と声を上げながらエルヴィンは踵を返し、今度はフェリクスの腕を掴むと、それを高く掲げた。

「皆の者、よく見ておくがいい！」

そうして、懐から取り出したナイフで指先を突き、血の滴を水槽へと振り入れた。

「これが、真実だ！」

途端に、巨大な水槽の水すべてが、さっと色を変える。

より鮮やかに発色するよう改良した、その水の色は、人々の興奮を掻き立てる赤。

偽の王を戴いていたという事実を知った民は、愕然とし、激怒して、声を荒げ始めるだろう。

が。

し……ん。

予想とは裏腹に、王城前の広場が静まり返っていることに気付き、エルヴィンは眉を顰めた。

怒りの余りの絶句、というわけでもない。

見るに、彼らはどうも 困惑、に近い表情を浮かべていた。

「きれいな赤ねエ」

誰かが、ふと呟く。

「ルーデンの、王の色だわ」

不思議なことに、それはたった一人の小さな声だったにも関わら

ず、バルコニーの上にいるエルヴィンの耳にまではつきりと届いた。まるでそれが、水面に投じられた石であったかのように、次々と囁きの輪が広がってゆく。

見たか、色が変わったぞ。

ああ、本当だ。……ええと、それはつまり……？

馬鹿、フェリクス王はやっぱり本当に王の子だった、ってことだよ。

あれ？ 色が変わったら偽の王なんじゃなかったっけ。

逆発したら、だろ。きれいな緋色に染まったんだから、逆だ、逆。

その詳細な言葉までは、エルヴィンのいる場所からはとても拾いきれない。

ただ、徐々に、人々の口の端に昇り始めたフレーズを聞き取って、彼は顔色を失った。

あれは、王の色だ。

王の色。

正統なる、ルーデンの王を示す緋色。

「違う……！ 違う、愚か者どもめ、言っただろう、『変色したら』実子ではないと！」

手すりから身を乗り出して呼びかけるが、もう遅い。

ようやく事態を把握できたと考えた人々は、「王の色」のフレーズを、確信を持って叫びはじめた。

「王の色。王の色だ！ フェリクス陛下の血を注いだら、色が変わったぞ！」

「王の色だ！ やはり本当の王なんだ！」

ただでさえ人が多いこの状況、バルコニーから離れた民からすれば、エルヴィンの演説など聞こえるはずもない。

よって彼らは、前方から波のように押し寄せる声が、真実であると信じた。

なにせ、彼らに唯一認識できたのは、遙か遠くのエルヴィンの言葉でも、表情でもなく、さっと色を変えた水槽だけであったので。

「王の色だ！ 偽の王などというのは、嘘だったんだ！」

「真実の王、フェリクス陛下万歳！」

唯一エルヴィンの目算が当たっていたとすれば、それは、一度暴走を始めた民に歯止めなど効かぬということ。

彼らは、濡れ衣を着せられかけた王が、真実を掲げてそれを振り払った、という大層ドラマティックな一幕に、胸を躍らせていた。

「フェリクス陛下、万歳！」

「やー、形勢逆転だねえ、エルヴィン？」

突き上げるような歓声を聞きながら、フェリクスが徐々に口を開いた。

29. シャバの「普通」は愛おしい(4)

フェリクスは、しっかりと拘束してあったはずの荒縄から、するりと腕を抜いてしまうと、にこやかに民衆に手を振った。途端に、雷鳴のような声がさらに盛り上がる。

そうして彼は、呆然としている異母弟に、無邪気な仕草で首を傾げた。

「ね、君さー、予備の水槽をそこに用意してあるじゃない。せつかくこんな盛りに上がってるから、今度は君を『鑑定』してみよっか？ そしたら、どうなるかなー」

「な……っ」

エルヴィンは間違いなくヴェルナーの実子なのだから、聖水は反応せず、透明のままであるに決まっている。

彼は咄嗟にそう指摘しかけたが、それがこの状況下、何を意味するかを悟り、ますます顔色を失った。

「民は驚くだろうねえ。君が先王の実子ではないと知ったら。君は、偽りの王を退ける英雄役から、見事、真実の王に成り代わろうとした悪役に転落だ。おめでとう」

「ち……違う……っ、聖なる水は、実子でなければ変色し、実子なら透明のまま……！」

「君、馬鹿ー？」

唾を飛ばして力説するエルヴィンを、フェリクスはのほほんとした口調で罵った。

「もう、白と黒は入れ替わってしまったんだよ」

彼は狐を思わせる目元を細めると、

「あ。白と黒じゃなくて、透明と赤か」

と、妙に律儀に訂正を加えた。

「な……っ、な……っ！」

「さ、君が『実子でない』と知った民が暴動を起こす前に、尻尾を巻いてお帰りよ。出口はあっちだよー」

フェリクスが間延びした口調で部屋の奥を指し示すと、同じく縄を解いてしまったテレジアが片方の眉を上げる。

「……殺さぬのか」

「ええ。僕はね。『本物の王』は慈悲深いので」

ぬけぬけと言い放つと、フェリクスはにっこりとエルヴィンに笑いかけた。

「道中、気を付けて」

言外に、自分では手を汚さないだけで、処分する気満々だと告げている。

エルヴィンは混乱する頭でフェリクスとテレジア、水槽と民とを順々に見回し、それから、脱兎のごとくバルコニーを抜け出した。

その場に留まっていれば、自分は「実子ではない」ことにされ、

国を謀ろうとした悪逆の王子として、民から引きずり落とされてしまふことがわかったからだった。

「エルヴィン様！ お待ちを」

「くそ……っ！ くそっ、くそっ、くそっ！」

戸惑う側近を振り払い、エルヴィンは走りながら悪態をつく。

なぜだ。

なぜこんな風に筋書きが狂ってしまった。

自分は英雄で、フェリクスは偽りの王なのに。

真実は、正義は、自分の側にあるというのに。

屈辱にまみれた後姿を見送りながら、フェリクスは「馬鹿だねー」と再度呟いた。

「真実とは事実じゃない。大人数が信じマジョリティた事象のことだよ」

「あるいは、力あるものが信じさせた事象のこと、だな」

げんなりとテレジアが付け加える。

彼女は縄の跡が付いた手首を撫でながら、はあと溜息を落とした。

「こんなにも彼らの計画通り進むなど……私はあの監獄が、心底恐ろしいぞ」

「そうですね？ あんな心強い『友人』など、なかなかいないと思います」

フェリクスは相変わらず飄々としている。

そう。

今回、ハイデマリーが「恩を返す」と言った直後から、大罪人たちは一丸となって、フェリクススの王座奪還作戦を展開したのである。

まず、魔王覚醒の儀という一大ニュースを利用し、民の関心を徹底的にそちらへと引き寄せる。

話題のエルマなる少女は実は魔王の娘であったとか、実はその母は元聖女であったとか、エルマが魔王として目覚めると海が割れて新大陸ができるほどの威力だとか、だがそれを本人が指の一振りですぐ抑え込んだとか、徐々に話のスケールを大きくしながら、噂を荒唐無稽の域になるまで流し続けた。

さすがに、エルマは実は地母神の生まれ変わりで、この大陸の創造を三回見届けた、というくらいにまでなると、人々は「いやいや、さすがにそれは……」と我に返りはじめる。

魔王云々に関する人々の関心は急激に下がり、エルマが方々に血を求めたという事実も、「難産の母親のために輸血を求めたら、本人の超人的なキャラクターと相俟って、大げさに伝わってしまった。一万の血は不要だったが、本人や周囲はとても感謝している」という、集団ヒステリー事件の一つとして解釈された。

結局、人々はエルヴィンがせつせと流したつもりの「フェリクス偽王事件」などそつちのけで、さんざん魔王の話題に夢中になった挙げ句、「あんまり噂を簡単に信じちゃいけないよな」という、大^マ衆^{スミ}情報に対する不信と警戒心を獲得し、今に至っていたのだ。

そこに、この「偽王査問」だ。

以前の民ならば、査問が始まる前から興奮し、拘束されてバルコニーに出てきたフェリクスたちに石を投げつけていただろうが、噂

に翻弄されて情報リテラシーを向上させた彼らは違った。

彼らはこう思ったのだ。

「フェリクスが偽王だという情報は、本当だろうか。」

よって彼らは、不信と疑念を抱きながら、バルコニー上のエルヴィンたちをじつと見つめた。

が、悲しいかな、エルヴィンの弁は感情的なだけで、具体的に聖具がどう反応すれば「正」なのかがよくわからない。

いや、そもそも、人が多すぎて、説明がほとんど耳に入らないというのが正直なところだった。

「だいたい、『変色が起これば実子ではない』という設計自体が、直感的に受け入れがたいのですよね。結果はポジティブなのに、結論がネガティブなど、設計者のセンスを疑います」

というのは、この集団詐欺をプロデュースしたモーガンの言だ。

彼は、エルヴィンが自発的に「聖具の反応を鮮やかに」したくなるよう裏で手を回しながら、一方では、民のその辺りの困惑を突き、「王の色」と刷り込むことで、あっさり白と黒を入れ替えてしまった。

詐欺スキルが効力を持つのは、対面だと五百人がせいぜい。

モーガンは自身の能力をそう嘆いたが、逆に言えば、バルコニー付近の五百人くらい、適切な準備期間さえあれば、彼一人でもどうとでも騙せるということだ。

そして、その五百人が一斉に真偽をすり替えてしまったら、もはやそれを覆すのは難しい。

ついでに言えば、ここまで簡単に事が運んだのは、リーゼルの協力のおかげでもあった。

彼は、献血のお礼にと各人に微量の香水を贈り、感謝の書面に施したサブリミナルを利用して、人々の認知能力を下げ、そのうえで広場へと誘導していたのだ。

さらには、フェリクスたちは演技指導や縄抜けの訓練まで施されつ
つまり、エルヴィンの稚拙な謀反などよりも、何倍も丁寧に準備を整えたうえで、この場に臨んでいたのである。

ちなみに、監獄側はその対価として、今後一切エルマから搾取しないとの言質をフェリクスから取った。

その点も含め、全方向に抜かりのない大罪人たちだ。

「あの特訓の日々を思い出すと、未だ顔が強張るわ……。側妃の息子め、きれいごとばかりの騎士かと思えば、いけしゃあしゃあと罪人どもを後押ししおって……」

何を隠そう、ハイデマリーの命に対して、「あれ、でもそれやつちやうとルーデンの正統な血統とか途絶えるけどいいんだっけ」と首を傾げた大罪人を、

「いい。もう、やってしまってくれ」

と承認してしまったのは、ルーカスであった。

「義兄上が廃位されたところで、俺は王位などご免だし、エルヴィンを王と仰ぐのはもっとご免だ。このまま義兄上でいい」

というのがその理由である。

フェリクスの即位以降、ルーデンは着実に隆盛を迎えているし、能力があれば特にルーデンの純血にはこだわらないというのだ。

もしかしたらそれは、彼自身ラトランドの血が混ざっているからかもしれない。

「ていうかさー、もし後にこれが露見したら、真実を隠蔽した極悪人の役は君になるんだよ。わかってるの？」

フェリクスが呆れて指摘すれば、ルーカスはふと精悍な相貌にやりと笑みを乗せ、「何を言っんです」と異母兄を、そして周囲を見渡してみせた。

「そうならないように、義兄上も王太后陛下も、監獄の面々も、頑張ってくれるんでしょう？」

それは、自棄^{やけ}くその発言のようにも見えだが、いずれにせよ大層魅力的な笑顔であった。

結局、ハイデマリーは弾けるように笑いだし、他の大罪人たちも苦笑を浮かべて肩を竦めたのである。

「魔王の儀といい、今回といい……あの男はなかなか肝が据わっておりますし、人を巻き込むのが上手よな」

監獄でのやり取りを思い出したテレジアはつい、ぼそりと呟いてしまう。

その声には、わずかな悔恨も滲んでいた。

もしあの時……私も周囲を頼っていたなら、妹は助かってい

たのだろうか。

エルマに差し出された無数の助けを目にして、テレジアが漏らした言葉。

もつと周囲を信じていれば。人を遠ざけなければ。
一人で抱え込もうとしなければ。

たった一人で子を産み落とし、妹の遺骸を処理し、以降も孤独に後宮で戦ってきた烈婦は、今そんな想いを抱く。

「そうですかねー」

フェリクスは、やはりのんびりとした口調でそれを否定した。

「彼はただ、すぐに人を頼る甘ったれというだけですよ。『弟』なんです、本質が」

目を見開いて振り返ったテレジアに、フェリクスは一步近づき、横に並ぶ。

「一方で、僕たちはつい一人で抱え込みたがる。これはもう能力云々というより、長男長女の性さがですねえ」

そして、バルコニー下にひしめく群集を見下ろし、わずかに口の端を持ち上げた。

「でもそれが、頂点に立つ者たちの宿命だ」
「……………」

テレジアはまじまじと「息子」を見つめた。
慰めと言うには、あまりに温度の無い言葉。
けれど確かにそこには、彼らでしか分かち合えない何かがある。
横たわっていたから。

「……………なあ」

テレジアはこれからも、決して彼をフェリクスの名で呼ぶことは無い。

そして彼もまた、テレジアを「母上」と呼ぶことは無いのだろう。

過去を知り、互いの想いを知ってもなお　いや、知ってしまったからこそ、彼らは温かな、「普通」の親子の情愛など交わしはしない。

だからテレジアは、母親が子に愛を告げるのと同じ口調で、別の言葉を紡いだ。

「守り抜こうな」

この秘密を。

この罪を。

この国を。

視線も合わせずに呟けば、フェリクスはやはり、間延びした話しかたで応じる。

「それはまー、もちろん」

素っ気ない会話が、きつと彼らの「普通」の距離感。

そこには抱擁も、微笑みもない。

拳ひとつ分の距離を開けたまま、じっと同じ方向を見て、彼らは
すいと片手を挙げる。

堂々たる王と王太後の姿に、観衆はわあっと歓声を上げた。

29・シャバの「普通」は愛おしい(4) (後書き)

次話 (エピローグ)は、いつもより早く明日19日の朝8時に投稿させていただきます。

最後までお付き合いいただけますと幸いです！

30・エピローグ

「あらら」

窓から吹き込む爽やかな初夏の風で、指人形を落とされてしまったハイデマリーは、寝台から小さく声を上げた。拾い上げるべく、床に手を伸ばしながら屈もつとすると、

「こら、マリー。大人しく寝ていてくれと何度言ったらわかる」

横からすいと、がっしりとした腕が伸びてきて、先に掬い取られてしまった。

赤子を片手で抱きかかえたままのギルベルトである。

彼は、すっかり慣れた手つきで子どもをあやししながら　なにせ日に十数時間は自主的に抱っこしているので、実に板に付いている、もう片方の手で指人形を掲げた。

「こんな細かいものを見つめていたら、目が疲れる。これは仕舞っておくぞ」

「あら、バルドのおもちゃにしようと思ったのに」
「誤飲が心配だ。……それになんだか、呪術的な遊びになってしまう
いそつな気がする」

監獄一の危険予測機能を持つギルベルトは、ぼそりと不穏な呟きを漏らしながら、早々に指人形を柵の奥底に放り込んでしまう。

ハイデマリーは唇を尖らせたが、取り上げられたのは、王子の衣

装をまとったその一体だけだったので、よしとすることにした。

その王子だけは、顔つきがやけに濃くて気に入らなかつたのだ。

代わりに、彼女は手元に残った人形を、間取り図の上にきれいに並べてあげることにした。

冠をかぶった王の人形と、黒の女王の人形を、バルコニーでそつと近付けて。

それ以外の色とりどりの人形は、行儀よく家の内側へ。

騎士と侍女の人形は、楽しげな庭へと放してやる。

一際愛らしい姫君の人形だけ、家の内側に入れるか、庭に置くかで悩んだ彼女だったが、

「……あなたが決めなさい」

ハイデマリーはそつと囁いて、結局その人形だけ、玄関口に立たせることにした。

「今、何か言つたか？」

「いえ、ただの独り言よ」

「本当に？ 君は大切な言葉に限って、独り言に閉じ込めようとする。今うつかり聞き逃した言葉が、もしや世界滅亡の呪文だったりはしないか？ あるいは最愛の夫への愛の囁きだったりすることは？」

一度妻を失いかけたギルベルトは、今かなり疑い深い。

立ったままくいと顎を掬ってくる夫を、ハイデマリーは微笑んで見上げた。

「ないわね。世界を滅ぼすのに呪文なんていらないし、あなたへの

愛の言葉なら目を見て囁くもの」

「……では、独り言に紛れ込ませた遺言ということもない？」

探るような表情を見て取り、ハイデマリーは笑みを苦いものへと変えた。

愛情深い夫を、どうやら自分はかなり追い詰めてしまったらしい。

彼女は、顎を取ってくる手をそつと外すと、それを握り返した。

腕を引き、バルドと名付けた息子を抱えさせたまま、夫を寝台に腰かけさせる。

そうして、彼女はほっそりとした腕で、我が子ごと夫を抱きしめた。

「……ないわ。もう、わたくしに死ぬ理由などないもの」

ギルベルトはじつとこちらを見つめている。

ハイデマリーは肩口に顔を埋めて、目を閉じた。

頬のあたりに彼の首筋が当たり、力強い脈動を感じる。

優しく吹き込む初夏の風。

甘い匂いのする赤子。

寄り添う夫。

まるで絵に描いたような、ありきたりの、「普通」の光景。

「……わたくし、また死に損なったのね」

「生き延びたんだ」

「そうね。そうかも。そして、うっかり勝ち得たこの奇跡のような時間を、平然と、『普通』の日々として、これからも重ねていくの

だわ」

いつだって泰然とし、どこか物憂げであった彼女の声。

しかし、生への諦念という、彼女の根幹に横たわっていた価値観が崩されてしまった今、初めて、そこに淡い怯えの色が滲んだ。

「……許されるのかしら」

小さな、声。

彼女が許してもらいたいのは、きつとアウル教が説く神などではない。

その相手を知っているギルベルトは、瞼の裏に、彼の端正だった微笑みを思い浮かべながら「ああ」と頷いた。

「もちろん。彼は、そういう性格だった」

「……そうね」

くぐもった声が、応える。

ややあつて、ハイデマリーは顔を起こし、両親に挟まれてすやすやと眠る我が子を見つめた。

知らず、笑みがこぼれる。

バルド。

神の加護という意味を持つ名前。

その神の正体と名は、自分と夫、そしてエルマだけが知っている。柔らかな赤子の頬を撫でながら、ハイデマリーはもう一度、「そうね」と呟いた。

繋がるはずのなかった命。

続くはずのなかった時間。

途切れるはずだった日常は、時に信じられない幸運を孕んで反転し、時に嘘や偽りの絵の具で繋ぎ目を隠しながら、傍目には平然と続いてゆく。

ただ粛々と紡がれているかに見える日々が、その実、なんとという奇跡の上に成り立っているものか。

「ああ。本当に、『普通』というのは、なんて」

赤子の頬を撫でながらの、小さな囁きは、初夏の風にそっと溶けていった。

同じ頃。

フェリクス勝利に沸くバルコニー広場のちょうど真逆、使用人の小さな裏門をひっそりと潜る者があった。

エルマである。

彼女は、今日この日のために三週間ぶりに王城に足を踏み入れ、しかし作戦の成功を見届けると、小さな布鞆だけを持って、さつさと城を去ろうとしていた。

そんな彼女を、二人の人物が背後から呼び止めた。

「待て、エルマ」

「ちよつと……!!　これ、どういふことよ!!」

剣呑な表情を浮かべた、ルーカスとイレーネである。

息を切らしたイレーネは、その手に、銅板で出来た王城通行証を握り締めていた。

エルマが寮の部屋に残してきたものだ。

「どうして……これを置いていくの!?!」

「ここに戻って来ることは、きつともう二度とありませんから」

対するエルマの答えは淡々としている。

「なぜ　!!」

と咄嗟に声を荒げたイレーネを遮り、久々にお団子髪のメイド姿を取り戻した彼女は、眼鏡で表情を隠したまま、困ったように小首を傾げた。

「なぜ、と言われましても……。この度のことで、私が魔族であるということ、というか一時的とはいえ魔王にすらなりえたということとは、多くの方々の知るところとなりました。魔族とは、シャバでは石を投げられる存在。この上この場に留まるのは『普通』ではないと、愚考した次第です」

「そんなの今更じゃない!　だいたい、あなたが魔族だと知っても、それでもあなたのことが好きだから、多くの人間が力を貸したわけでしょう!?!　現に、あなたが魔族だと言って敵意を向けて来る人間なんて、誰もいないじゃない!」

即座に言い返したイレーネに、エルマはやはり困惑したように顔を俯けた。

「それは、【怠惰】のお父様たちが、事態を曖昧にしてくださいからで……。いずれなんらかのきっかけで、はっきり私が魔族だと認識してしまえば、今回勢いで協力くださった方々も、やがてその重大さに青褪めると思えます」

どうやら彼女なりに、シャバの常識だとか、世間への迷惑といったものを考えた結果の行動らしい。

「それに、血まで提供いただいておきながら、のうのうと『皆さまの早とちりでした』と片付けるこの方法が、やはり心苦しくて……。ここはひとつ、けじめとして潔くシャバを去るのが、普通なのではないかと思うのです」

口調はゆつくりとしているが、決意に満ちている。

真面目な彼女のことだ、途中で思考を前方抱え込み宙返り三回半ひねりさせながら、考え抜いてこの結論に至ったのだろう。

「そう悪いことばかりでもないのですよ。弟のバルドは本当に可愛くて、陛下が認めてくださった休暇だけでは、後ろ髪を引かれすぎてやはり王城に復帰できる気がしません。きちんと退職したうえで、ここで得た経験を生かし、弟を『普通』かつ真っ当に育て上げる…。そんな日々を送れたら、それはとても幸せなことですよ」

そう微笑まれてしまえば、イレーネたちも容易には言い返せない。ただ、どうしても気になったこの質問だけ、彼女は同僚にぶつけないにはいらなかった。

「……念のため聞くけど、エルマの思う『普通』の子育てってどんなものなの？」

「え？ 全然大層なものではなく、本当に普通ですよ。ちゃんと自分の力で、上部マントルからでも食材を確保し、目上の方への敬意と、大陸中にいる配下への統率・配慮を忘れず、ありがとうとごめんなさいを、五十ヶ国語で言えたら、まずはそれでいいかなって。あの子はまだ一歳にもなってますものね」

「お馬鹿あああああああ！」

そして案の定、絶叫する羽目になった。

「いったいどんな非常識生物を育て上げるつもりなのよ！ エルマ、あなたやつぱり『普通』が全然わかってないじゃない！」

「なあ」

イレーネが激しくエルマの肩を揺さぶっていると、それまで聞き役に徹していたルーカスが口を開いた。

「確認だが、お前が頑なにヴァルツァーに帰ろうとするのは、魔族はシャバから去るのが普通だと考えたからだな？」

「え？ ……はい」

ぐいと近寄られて、エルマがわずかに顎を引く。

ルーカスは「ふうん」と口の端を持ち上げて彼女の腕を取ると、その白い指先に軽く口付けた。

「そうか」

「あ、あの、そのような行動を取られると、いささかトウク」
「前にも伝えたと思っていたが……まあいい、何度でも教え込まな

いと、馬鹿なお前にはなかなか『普通』が染み込まないようだ」
「『馬鹿』?」

シヨックを受けるエルマには答えず、ルーカスはピューイと口笛を鳴らしてみせた。

「一同、カモン集合!」

どどどどどど……っ

遠くから地鳴りのような音が響き、それは次第にこちらへと近付いてくる。

その音の正体を見て取って、エルマはぼかんと口を開けた。

「エルマエル様あああ! ご自身が魔族だから、などという理由で、わたくしたちを捨てないでくださいませえええ!」

先頭にはデボラ。

「お待ちなさい、エルマ! この王城を去る理由なんて、寿退社以外に認めなくてよ!」

『そこ動くなよ、エルマ! つかおまえ、魔族って、正体に意外性がなさすぎんだよ!』

すぐ後ろ、後宮や調理場の方角からはユリアーナとゲオルクが。

「エルマさん、行かないでください!」

『魔族な君も素敵だ、ミューズよ!』

「これを機に、聖魔協定をリードする構想に興味はございませんか、エルマお姉様!」

デニスが、ヨーランが、クロエたちアウレリア学院の生徒が、次々と茂みや柱の陰から姿を現したからだ。

彼らはどれだけ必死に走ってきたのか、皆肩で息をしていた。

「え……なんですかこれ、いったいどんなメカニズム……」

「ふん、日頃の俺たちの気持ちがあったか。普通に走って来ただけだ」

意趣返しをばっちり決めたルーカスは、悪戯な少年のようににやりと笑う。

それから、不遜な仕草で小首を傾げた。

「まだまだ来るぞ」

「はい……？」

「彼らはいくまで第一陣。さっきの口笛を合図に、お前を引き留めたい人間は、まだ続々と、絶賛こちらに向かって疾走中だ」

「え……っ」

ぎょつとしたエルマを見て、ルーカスはふと表情を真面目なものに戻す。

彼は先程から離さずにいた手を握り直し、囁きかけた。

「それでも、まだ信じられないか？」

「そ、それは……」

「皆、おまえが人の域をいささか逸脱していることなど、とうの昔に受け入れている。それでも、いや、だからこそ、おまえと一緒にいたいんだ」

きつぱりと言い切る。

「いささか逸脱……」と複雑そうに復唱したエルマに、ルーカスは今一步詰め寄った。

眼鏡を取り去り、こめかみをそっと撫でる。

「あ、あの、殿下、パーソナルスペースが」

「いい加減に理解してくれないか。魔族だろうが大罪人の娘だろうが、おまえが好きなんだ。そして」

彼は、エルマの白い手をしっかりと握り締め、不敵な笑みを浮かべた。

「好きな相手が去ろうとしたら、全力で引き留めに掛かるっていうのが、シャバの普通なんだよ」

「……！」

逃がさない、と言外に告げられ、夜明け色の瞳が大きく見開かれる。

ただし、前回里帰りを一同に引き留められた時とは異なり、今、その大きな瞳には、戸惑い以外の感情も滲んでいた。

「……あの」

「なんだ」

エルマが生まれてしばらくした頃、ハイデマリーが彼女に授けたあだ名は【傲慢】だった。

過大な愛情と歪んだ価値観を、その身にたつぷりと詰め込まれた、監獄の王女様。

家族が注ぐ愛以外の感情に触れ、シャバの普通を学び、少しはその傲慢さも是正できたかと自惚れていたが

(全然、治ってなんかいませんね)

エルマは、頬がじわりと熱を帯びるのを感じながら、呟いた。

「……申し訳ありません」

「なぜ謝る」

「だって……嬉しく、て」

これだけ多くの人に迷惑をかけて、それなのに、彼らが自分を引き留めてくれるのが、嬉しいだなんて。

まるで周囲の寛容さと愛情深さを試すような　　なんて傲慢な女。

うぐ、と唇を噛んで黙り込んでしまったエルマの髪を、ルーカスはくしゃりとかき混ぜた。

「　半年だ」

「………?」

「実際のところ、監獄で女手が足りないのは事実だろう。だから、半年はおまえを返してやる。だが、それ以上は認めん。半年経ったら、絶対に帰って来い。………ついでにその時、弟のことも見せる」

「………!!」

驚いたエルマが顔を上げる。

ルーカスはイレーネに目配せをし、銅板の通行証を受け取ると、それをエルマに押し付けた。

「忘れないように」

「………はい」

ほっそりとした指が、恐る恐る通行証に触れ、やがて握りしめる。

エルマはそれを胸に押し抱くと、こくりと頷いた。

「はい、ルーカス殿下」

集まってくれた人々は、皆真剣な、けれど温かな表情を浮かべている。

遠く離れたバルコニー広場からは、群衆の歓声が聞こえる。

今また何人か、その広場を離れてこちらに向かってくる一団が見えて、エルマは面映おもはゆさに唇を噛み締めた。

ああ、自分はこんなにも、この場所に溶け込んでいたのだ。

(シャバでの生活は、なんと難しいものかと思っていましたか)

気付けば出来ていた自分の居場所。

当然のことのように存在を受け入れ、手を差し伸べてくれる人々。

知らず積み上げられてゆく「普通」の日々は、なんて悩みに満ち、
そして、

「なんて、愛おしいのでしょうか……」

目を潤ませ、ルーカスを見上げたエルマに、一同が絶句する。

一拍ののち、彼らはわあっと歓声を上げた。

30・エピソード(後書き)

以上で完結となります。

最後までお付き合いくださりありがとうございました。

感想・レビュー・評価など頂けるとものすごく喜びます！

(おかげさまで10万ptの舞台が見えてきました…！感謝しかないです)

0 プロローグ(前書き)

0・プロローグ

ルーデンの冬は厳しい。

早朝のひやりとした空気に白い息を漏らしながら、少女は窓に近づき、そっと鎧戸を押し開けた。

白みはじめた空の明るさに、目を細める。入り込んできた冷たい風に首を竦めると、豊かな黒髪が波打った。

「まあ、なんて美しい庭かしら」

眼前に広がる巨大な庭園に、少女は感嘆の声を上げる。

年の頃は、十六、七か。

訛りの無いルーデン語を話すその声は愛らしく、控えめな笑みを湛えた彼女は、いかにも可憐な少女に見えた。

彼女は、子犬のようにつぶらなこげ茶の瞳で、ぐるりと庭を見渡す。

遠くに立つ見張りの騎士と視線が合うと、おずおずとはにかみ、それから満足したように窓から身を翻した。

寝台まで戻る足取りは軽やかで、弾むようである。

だが　引き寄せた膝に頬杖を突いた彼女は、そこで表情を消した。

「はん、だだっ広い庭だね。ルーデンの財力を見せつけようってわけ」

紡がれるのは、蓮っ葉な外国語だ。

巻き舌を特徴とするその言語は、ルーデンの属国の一つ、南西に位置するエスピアナ国のものであった。

それも、下町に住む者が話すような口調だ。

『王妃選考会のためにわざわざ迎賓館を建てるなんて、さっすが大國はやるのが違うねえ。四階からルーデンの地を見下ろせるなんて、流刑地出身の庶民には恐悦至極』

皮肉気に口元を歪めながら、両手を広げてどさりと寝台に身を投げ出す。

そう。

彼女は、二年ほど前に即位したルーデン王の、王妃選考会に参加するためにこの場にいるのだ。

上等な寝台の感触を、仰向けになったまま楽しんでいた彼女だったが、ふとなにかに気付いたように舌打ちをした。

『……違った、「庶民」じゃない。今は聖侯爵令嬢だ。アナじゃなくて、アナスタシア。アナスタシア・ドン・ロドリゴ……』

ロドリゴ、の名前を紡ぐときだけ、少女　アナスタシアの唇は嬉しそうに綻ぶ。

寝台脇の机に置いてあった髪飾りを取り出すと、まるで恋人からの手紙にするように、そっと口付けを落とした。

かわいらしいデザインその髪飾りには、鈴蘭によく似た白い花と、小さな鈴が付いている。

花はもちろん、貝殻で作った偽物だが、本物の花とまったく同じ香りが漂うよう加工され、鈴は耳に心地よい音を立てた。

『ロドリゴ様。あたし、頑張りますね。あなた様に引き取っていたから、この十年の成果を、きつと発揮してみせます』

波打つ艶やかな黒髪に、豊かな大地のようなヘーゼルブラウンの瞳。

健康的に輝く肌と、愛らしく整った顔を持つ今の彼女を見て、寒村の貧民という出自に気付く人物はまずいないだろう。

もちろん、指輪に潜ませた毒や、体中のあらゆる場所に仕込んだ暗器の存在も。

次いで彼女は、己の足元をうつと見下ろす。

宙に持ち上げた両足は、ガラス細工をあしらった繊細な靴に包まれていた。

ガラスの靴と髪飾り。

どちらも、彼女を貧困から救ってくれた養父の贈り物だ。

まさに、爪先から頭のとっぺんまで自分を変身させてくれた、魔法使いのようなロドリゴ。彼のことを思うたびに、これから成すべき任務へのやる気が湧いてくる。

大国ルーデンの王を暗殺するくらい、これまで自分が受けた恩に比べれば、なんと些細なことだろう。

アナスタシアは寝転がったまま、先ほどの窓に向かって目を細めた。

『迷いやすく作られた庭。見張りの騎士は二十人以上。徹底管理された通路に、鉄柵。優美な檻つてどこかい……』

そうして思考を巡らす。

あどけなく見える容貌とは裏腹に、彼女は冷静に状況を把握していた。

先ほど見えた庭には、いかにも手練れの、かつ見目のよい騎士が多く配置されている。

逃亡や殺傷沙汰は容易に防がれてしまうし、しかも、貞節に欠ける女はそこでふるい落とされるといふ寸法だろう。

部屋割りも、身分や境遇を考慮して、実に綿密に組まれている。

結託も、逆に足の引つ張り合いもできないよう、関係の薄い候補者同士が隣り合うように仕組まれているのだ。

(凡愚王子と評判の御仁だが、少なくとも有能な側近には恵まれたようだね)

アナスタシアはふんと鼻を鳴らし、フェリクスなる人物の顔を思い浮かべた。

実は彼女は一度だけ、フェリクスに会ったことがある。

と言つても、向こうはこちらを視界にすら入れていなかったろう。

数年前、彼がまだ王子だったとき、^{エスピアナ}属国への視察にやってきた彼を、聖侯爵家の侍女に扮してもてなしたただけだったのだから。

(ロドリゴ様がしきりに話を振ってやってたのに、へらへら笑って頓珍漢なことばかり答える、絵に描いたような「凡愚王子」だった

ねえ……)

夜会の席での一幕を思い出し、アナはつい顔を顰める。

ロドリゴは、エスピアナが属国化される前には王族だった。

それを、国の併合とともに一家臣の身分に落とされ、相当な煮え湯を飲まされたのだ。

にもかかわらず、それをおくびにも出さずに、ルーデンの王子をもてなす姿勢は立派の一言だったが、フェリクスはといえばそれに気付くでもなく、ただ調子はずれの応対をするだけだった。

そんな男であるのに、彼の妃の座を目指して、全国から優秀な女性がこの迎賓館に集まっているのだと思うと、実に滑稽だ。

瞳を権力欲でぎらつかせ、ライバルに牽制の視線を投げかける候補者たちを見て、アナスタシアは失笑せずにはいられなかった。

(男の取り合いなら、せいぜいあなたたちのお庭でおやりよ。悪いけど、あたしの目的は、そんな低俗なものとは違う。そのために、弱小国出身とはいえ、こちらら、命を懸けて王妃修行に取り組んできたんだ)

フェリクスはさすが大国ルーデンの王だけあって、常に厳重な守りの中にいる。

アナスタシアが得意とするのは毒の操作だが、肌に触れるほどの距離に近付くのは至難の業だ。

それが唯一可能となるのが、最終選考の場。健闘した女性に褒賞を与えるときである。

王妃に内定した女性には、国宝の首飾りを王自らが首に掛けるのだそうで、アナスタシアが 目指すのは、ずばりその地位だ。

そのために、外見も仕草も教養も、同年代の女子とは比べ物にならないほどの努力で磨き上げてきた。

とはいえ、現実的に考えて、いくら聖侯爵の養女とはいえ、属国出身の自分が立后されるのは難しいのも承知している。

そこでアナスタシアとしては、最終選考進出者ならば対象となる、「枕問い」のことも、同時に狙っていた。

「枕問い」とは、その名の通り、婚姻前に体の相性を確かめる儀式のことである。

世の常識に照らせば不道徳とされる婚前交渉も、世継ぎを生むという重大の前には正当化されるということだ。

もともと流刑地の出で、貞操観念に大らかなアナスタシアは、女性なら躊躇う「枕問い」も、暗殺のよい機会だと捉えていたのである。

（どんな手でも、構うもんか。あたしはなんとしてもこの選考会を勝ち抜いて、王に接近し　　）

アナスタシアは、押し抱いていた髪飾りを宙に持ち上げ、鈴をちりんと鳴らした。

『卑劣な泥棒、フェリクス・フォン・ルーデンドルフを……殺す』

ヘーゼルブラウンの瞳に、禍々しい光が浮かぶ。

重厚な櫛の扉がノックされたのは、その時だった。

「失礼いたします。アナスタシア・ドン・ロドリゴ様はご在室でしょうか」

「……はい」

アナスタシアは素早く身を起こし、ルーデン語で短く応じる。

年若い女の声。

丁寧な口調から、恐らくは侍女だろう。

だが、こんな早朝から部屋に来られる理由がわからない。

演技も込め、相応の戸惑いを露わに「どちらさまでしょうか」と扉に問いかけながら、彼女は無意識に自身の太腿辺りを探った。

他の候補者からの偵察。それとも、早速自分の正体に気付いたルーデンからの刺客。

後者ならば、悲鳴を上げられぬよう、返り討ちにせねばならない。

だが、開いた扉の先にいた人物を見つめて、アナスタシアはわずかに眉を寄せた。

「朝早くから申し訳ございません。少しばかり、お時間をよろしいでしょうか」

そこには、逆光を背負い、眼鏡だけをきらりと光らせた、実に冴えない侍女が立っていたのだから。

「はあ……」

大陸一の栄華を極めるルーデンの侍女にしては、あまりにみすぼ

らしい。

暗殺者を仕留めに来た刺客にしては、あまりに殺気がない。

それよりなにより、

「……なぜ、赤子連れ……？」

「バルたん我が愛のことは、どうぞお気になさらず。いえ、視線が暴力的に惹きつけられてしまう愛らしさは重々理解しておりますが、この場ではできうる限り、私との話に集中していただけますと幸甚に存じます」

その侍女は、なぜか、生後半年ほどの赤ん坊を抱きかかえていた。

「……ええと？」

「こちらの都合で大変恐縮ですが、バルたんが次に愛らしいお目を覚ますまでに、あらかじめ話を決着させとっございます。ついては、単刀直入にお伺いするのですが」

侍女は器用にも、赤ん坊を抱っこしたまま、眼鏡のブリッジをすつと押し上げた。

「ルーデン王妃の座に、ご興味はございませんか？」

0 プロローグ（後書き）

今度こそ完結編となります。

第4部までで書ききれなかった、エルマの恋…模様…？ 的なサムシング…？ なアレに、決着をつけるために書きました。

よって、第5部では、主人公についての恋愛要素を含む可能性があるるので、いや含みたいので、いやもうどうかお願いだから含んでくれたらいいなと思っているので、予めご承知おきくださいませ。ルーカスいいやつなんで、報わせてやってくださいー！

本日、初日拡大スペシャルで、22時にもう1話投稿予定です。

1・「普通」の職場復帰(1)

「それではっ、エルマの職場復帰を祝してえ……」

「深夜のルーデン王城、その侍女寮の一室で、音量を抑えたイレーネの声が響く。

「乾杯！」

小声ながら高らかに彼女がワイングラスを突き上げると、さらに小さな声で、「乾杯」の音が続いた。

鈴を鳴らすような涼やかな声。

終業後であるため寝間着に着替え、眼鏡こそ残したままだが、艶やかな黒髪を解いたその少女は、エルマである。

彼女は、寝台を広々使って寝かせた赤ん坊　弟のバルトの腹を
とんとんと叩きながら、イレーネに囁いた。

「バルさんの寝かしつけが終わるまで待つていただいちゃダメ、申し訳ございませんでした。蠟燭もあまり灯すことができず、暗くて恐縮なのですが」

「なあに言ってるのよ、これはこれで雰囲気があって楽しいじゃない。こちらが勝手に祝いたいただけだったんだから、そんなの気にしないで」

上機嫌なイレーネは、手元のグラスにワインを注ぎ、ついでにエルマのグラスには、葡萄のザフトを注ぎ足す。

「約束通り、やっとあなたと会えたんだもの。もう、とにかく嬉しくって」

それから、暗闇でもそうとわかるほど、にっこりと笑った。

献血騒動のけじめを付けるため、エルマが監獄に帰ってしまったから、はや半年。

期日が近づいたたびに、本当に親友は戻ってくるだろうかと気を揉んでいたものの、きっかり六カ月が経った日の夕方、エルマは王城の門をくぐってきてくれた。

本人はステルス復帰を狙ったようだが、エルマの姿が見えるなり、城中の牛が暴れ、馬がいなき、鶏が空を飛び出したので、イレエネたちはすぐに気付けた。

そうして彼女たちは、並みいるライバルを振り切るようにしてエルマの元に駆けつけ、侍女長ゲルダに挨拶だけさせると、弟バルドのための寝台や食事を整え、寝かせ、ようやく今に至るといっわけである。

「あの、本当に今更ながらなのですが……」

「さ、飲みましょ、飲みましょ。とあるルートから、とっておきのワインを仕入れているんだから。おっと、ただしあなたはザフトよ、エルマ」

「あの、ご配慮痛み入るのですが、それよりその、隣の……」

「積もる話が山ほどあるのよ。といっても、あなたがいなくなつてから、ちょっと前までは平穩そのもので、暇すぎるくらいだったのだけど。一か月前から事態急変っていうか、彼女のせいでぶち壊し

っていうか、助けてっていうか」

「あの、それなのですがイレーネ、いったいなんでまた」

どこか据わった目で話し続けるイレーネを、エルマはとうとう遮って問うた。

「先ほどから、この場に、メイド姿のデボラ様がいらっしやるのでしょっつ」

というのも、エルマの寮室の片隅で、恍惚の表情を浮かべたデボラ・フォン・フレンツェル辺境伯爵令嬢が身をくねらせていたからである。

「ああん、寝間着姿のエルマエル様と、こんな狭い密室で飲み交わせるだなんて……！ エルマエル様のご復帰に先んじ、王宮侍女に収まった甲斐があったというものですわ」

「え」

まさかの発言に、さしものエルマも軽く顎を引く。
すると、デボラは誇らしげに、豊かな胸を張った。

「地の利を生かし、監獄の『御近所さん』としてエルマエル様のお近くを独占していた夢のような五ヶ月。その幸福な時間を永らえさせるべく、あえてこの一か月、血の涙を吞んでエルマエル様のお傍を離れ、王城での就職工作に勤しんでおりましたの！」

「道理で、最近監獄に押しかけてこないと……」

納得の面持ちで頷くエルマをよそに、イレーネはちっと苛立たし気に舌を打つ。

「おかげで、先月から王城の平和はめちやくちやよ。ちょっとでも目を離すと、すぐにエルマ像を建立しようとするわ、聖歌隊の楽譜をオリジナルエルマソングに差し替えようとするわ、敷地中に隠れエルマスポーツを仕込もうとするわ……」

「あらまあ、イレーネさん。わたくしは人間として当然の行動を、日々取っているまでですわ」

そう。

エルマに暑苦しいほど心酔しているデボラは、周囲の迷惑を顧みず、王城中を巻き込んでエルマへの愛を表現しようとしていたのである。

しかも伯爵令嬢であり、かつ、エルマ仕込みの特異な能力も持ち合わせているため、誰も止められないというのが実情であった。

「それは、その……私としては、どんなリアクションを示せばよいものやら……」

エルマは大いに困惑した。

行き過ぎた敬愛行動を素直にやめてほしいと思うし、同僚に申し訳ないような気もするが、責任を負うのもなにか違う気がする。

ついでに言えば、キャラの濃い者同士、イレーネとデボラはもつと気が合うのではないかと思っていたために、両者の醸し出す緊張状態が、少々意外でもあった。

「はんつ、デボラ様。いいえ、もはや同僚である以上デボラと呼ぶわ。あなた、自分の犯した最大の罪がなにか、まだわかっていないようね」

「エルマエル様への忠誠を誓う行為のどこに、犯罪性があると言い

ますの？ 像も楽譜も庭園改変も、最終的には上の許可をもぎ取りましたわ」

「そんなことじゃないわよ。私が一番許せないのはね、王宮図書室に蔵書してもらえよう、数年掛けて働きかけてきた『薔薇ケモ』を差し置いて、あなたがまんまと百合モノの自作小説を図書室にぶち込んできたことよ！」

「まあ、当然の帰結ですわ。あれは、エルマエル様と一信徒の高潔な愛を描いた、世界一美しいオリジナル小説。今は薔薇より、百合を世界は求めているのよ」

よくわからないが、二人は相容れない正義を戦わせているらしい。

エルマはとても雑に「なるほど」と頷いて流すと、再びそつと弟の柔らかな腹を撫でた。

ひとまず、彼に影響がないのならなんでもいい。

流されたのを敏感に察知したイレーネは、そこで我に返り、咳ばらいをした。

「……と、とにかく。おかげさまでこの一か月、私はデボラの尻拭いで大わらわだったってわけ。まあ、それ以前の五カ月は退屈で仕方なかったけど。エルマ、あなたはどう過ごしていたの？」

改めて尋ねられて、エルマはことりと首を傾げた。

「そうですね……。バルたんの世話に始まりバルたんの世話に終わる、といった具合で、詳細な記憶は定かではありません」

「ねえ、さつきから気になっていたんだけど、『バルたん』ってあだ名は誰のセンスなの？」

「もちろん私です。すごく可愛いし、普通だと思うのですが……な

「ぜ聞くのですか？」

真顔で問い返されて、イレネは一瞬言葉を詰まらせた。ダサイ
とは言いにくい。

「……えーっと、その、ほら、あなたの家族って、【憤怒】とか【
怠惰】とか、大罪の名前で呼び合っていたみたいじゃない？ ずい
ぶん系統が変わったなあ、って……」

「あ、もちろんバルたんにも罪名はありますよ。ずばり【可愛】で
す」

「だから一人だけ系統違うでしょ!？」

「なにが違うことがありましよう。暴力的なまでの可愛さ……それ
こそがバルたんの罪」

しみじみ独白され、イレネはとうとう突っ込む気力を失った。
罪名はハイデマリーによって決められていると聞いたから、つま
り監獄中がこんな感じだということだ。

寝台ですやすやと眠るバルドは、頬がふくふくとして、金色の髪
もまだ柔らかく、たしかに愛らしい。

が、ギルベルトに似たのだろう、とびきり色白というわけでもな
いし、顔の造形も、ハイデマリーやエルマのような、息が止まる美
しさに溢れているわけではない。

だというのに、絶世の美少女エルマが、まるで世界一の美青年を
相手にするように、うっとり頬を染めて傳くかす図というのが、イレ
ネにはなんとも腑に落ちないのだった。

「ああ……この真善美すべてのエッセンスを感じさせる顎のライン

……。天上の調べのような軽やかな寝息。顔を寄せるとほんのり漂う、甘い香り……」

そこでエルマはそつと顔を弟の首元あたりに近付けると、そこでふにゃあつと笑い崩れた。

「あああつ、可愛い……っ！ なんつて可愛い！ バルたんは、ほんとにほんとに可愛いでしゅねええええええ！ ちゅっちゅっちゅ！」

あげく、頬に雨のようにキスを落とす有様である。

エルマがここまでキャラを崩壊させる現場を、イレーネは初めて目撃した。

人道的には何ら問題のない光景。

だが、この場にはいない人物を思うと、そつと目頭を押さえたくなる。

「哀れ、ルーカス殿下……。この十分の一でもうつとりとされ、キスされたら、どんなに喜んだか知れないのに……」

ちなみに、イレーネ同様にエルマの帰還を待ち侘びていた彼は、不憫属性をいかになく発揮し、今日に限って近隣国まで視察中である。もちろんフェリクスの我が儘のせいだった。

「あつ……！ 今のバルたんの寝息、もしや古代ダズー語で『世界への光』を意味する単語の頭文字、『スー』の発声でした……！？」

ああつ、両手の三本の指を柔らかく曲げるポーズは、まさしく東大陸教の教祖が涅槃ねはんへと至った時のポーズの一部……！ まさかバルたん、もう解脱げだつしようとしているの……！？」

だというのに、エルマはルーカスのことなど尋ねもせず、弟の寝姿に息を呑んだり、身を震わせたりと忙しい。

明らかに、かなりの姉馬鹿だ。

なのに完全なイエスマンと化したデボラが「その通りですわね！」と頷くばかりなので、一向にそれが是正される気配がない。

エルマはとうとうグラスを脇に追いやり、恍惚としたままバルドの寝顔をスケッチしはじめた。

このままでは親友が、年頃の娘として大切ななにかを失ってしま
う。

危機感を抱いたイレーネは、こめかみを押さえて割って入った。

「ちよつと、エルマ。バル……たん、が可愛いのはわかるけど、い
い加減育児に没頭しすぎよ。あなたはあくまで『姉』であって『母』
ではないし、侍女に復帰したからには仕事が待っているのよ？ バ
ルたんは一通りお披露目したら監獄おちちに帰すのだから、今から少しず
つ子離れしておかないと」

「何を仰います。私はすでにバルたんと適切な距離を置き、冷静な
態度で接しておりますしゅよ」

「語尾！」

真顔でキャラ崩壊しきつた親友に、イレーネは思わず頭を抱えて
叫んだ。

「んもう！ エルマ、あなた、このままじゃ一生をバルたんおちちに捧げ
かねないわよ。育児よりもほかに、すべきことがあるでしょう！？」
「バルたんのお世話を差し置いて、ほかにすべきこと……？」

エルマはスケッチブックから顔を上げ、きよとんとしている。

城を去るまでは、ルーカスとなかなかいい雰囲気だったように思うのに、半年の育児生活が挟まることで、かなりフェードアウトしてしまったのかもしれない。

しきりとエルマを気にしていたルーカスも哀れだが、イレーネとしては、青春を全力で投げ捨てようとしている親友のことが気がかりだった。

「あなた、私がこの半年間定期的に送りつけたロマンス小説や聖書には、ちゃんと目を通したのでしょうか？ あれらの主人公の言動こそが、年頃の乙女の模範よ。そのうちの誰か一人でも、育児にかりきりになつていた子がいた？ いないでしょうか？」

「もちろんできる限り熟読いたしました。ただ、正直に申し上げますと、薄い冊子のほうは、『なにか禍々しいオーラを感じる』と、家族に取り上げられてしまつていて……」

「んまあ！　なんて無粋なご家族なの！」

怒りの余り、泣く子も黙る大罪人たちをこき下ろす、という偉業をイレーネはやってのけた。

「ならば改めて言うわ。私たち、花も恥じらう乙女なのよ！？　隙あらばデートしなきゃいけないし、新しいカフェができたらチエックしなきゃいけないし、縁結びで有名な花園が見ごろになつたら頬を染めて足を運ばなきゃいけないの。新しいスイーツは大人買いして、イケメンには粉を掛けて、薄い本は予約購入保存布教しなくちゃいけないの。わかる！？」

「後半がよく……」

「とにかくこれを読む！」

顎を引いたエルマに、イレーネはばんっと新たな本の束を突きつ

ける。

薔薇薔薇しい薄い本のほかに、王都の見どころガイドブックや、有名菓子店の新作カタログ、王城イケメン名鑑があったので、ひとまずエルマはそのうちの一冊、ガイドブックを開いてみた。

「超有名・『約束の花』が冬でも見られるのはエストワ庭園だけ。大好きなあの人と永遠の想いを誓ってみては？ 貴族専用には作られた優雅な空間が、あなたのデートを完璧に演出……」

エルマは神妙に文章を読み上げ、それから困ったように眉を寄せた。

「いえあの……侍女としての自覚を持つと言うことなら、このように浮かれている場合でもないと思うのですが……」

「あら、なにを言っているの？」

控えめな反論を、イレーネはあっさりと遮る。

「フェリクス王陛下だってお妃選びに大わらわなんですもの。今やルーデンは、国中が恋の季節。冬でありながら、春なのよ！」

その主張に、エルマは夜明け色の瞳を軽く見開いた。

「え？ あの陛下が、ご結婚されるのですか？」

「なによ、それで忙しくなるからって帰ってきてくれたのではなかったの？」

「いえ、私は単に半年後という約束を守ったままでして。なんというのか……かのお方も、結婚という『普通』のライフイベントをこなすのかと思うと、驚きですね」

そっくりブーメランになりそうな発言をさらりとかましながら、エルマは恥じたように顔を俯けた。

「たしかに、この半年というもの、獄内に籠りきりで育児に没頭していたために、その辺りの世情にもすっかり疎くなっていたようです。せつかくシャバに精通できたと思っていたのに、不甲斐ない…」

さすがにそこまでしょんぼりとされると、言いすぎたような気もしてくる。

イレーネは咳払いをした。

「ま、まあ、今日の今日でいきなり大仕事がやってくるわけではないし、明日からちょっとずつ、勘を取り戻していけばいいんじゃないの？ 困った時は、もちろん私が」

「イレーネさん」

だが、それをデボラに遮られる。

ここまで黙っていたデボラは、なぜか扉を指差しながら、にこりとイレーネに向かって微笑んだ。

「わたくし、百合薔薇戦争では永遠に分かり合える気がしませんが、あなたのその、フラグ建築能力については、一目置いていますわ」「は？」

イレーネが怪訝な顔つきになったその瞬間、

「エルマ、もう休んでいるかしら？」

ノックもそこそこに、とある人物が転がり込むようにしてやってくる。

「復帰したばかりのところに、本当にごめんなさいね」

バルドに配慮して、ひそひそ声で部屋に踏み入ってきたのは、先ほど挨拶を済ませたばかりの侍女長・ゲルダであった。

そして彼女は、

「でも、緊急のお呼び出しなの。至急、陛下のお部屋に向かってくれる?」

心底申し訳なさそうに、「いきなりの大仕事」を申し付けていたのである。

1・「普通」の職場復帰(1)(後書き)

以降は、連日20時に投稿予定です。

お付き合いのほど、どうぞよろしくお願いいたします。

2・「普通」の職場復帰(2)

付き添いを申し出たデボラとイレーネ、眠ったままのバルド、そしてエルマ。

四人で訪れたフェリクスの私室は、半年前と全く変わらず書類で埋もれていた。

「やー、エルマ。元気？ 夜にごめんねー、でも今日には頼んでおかないとまずい案件だったからさー」

そして書類の山に足を投げ出しながら、だらしなくソファから手を振るフェリクス本人もまた、半年前と全く変わっていなかった。話しぶりまで、つい昨日別れたばかりのようだ。

共に現れたイレーネとデボラについても、既に仕事を振ったことがあるからだろう、「やあ、君たちも来たの？」と軽く受け流すと、彼はバルドに気付き、目を瞬かせた。

「お、君がバルド君だね。おーいバルド君、僕のこと、覚えてるかなー？」

フェリクスは立ち上がり、しげしげと寝顔を覗き込む。

バルドが、想像していたような絶世の美乳児でもなければ、五十か国語を話したり、牛を喚よんだり覚醒したりするわけでもないを見ると、ことりと首を傾げた。

「ふーん、意外に普通な感じなんだね」

「ええ、圧倒的きゃわゆさを持ちながらも、この年で既に『普通』」

を体得している、天が地上に与えたもうた奇跡のような存在です」

「顔もありきたりってどうか」

「そう、普遍性を感じさせる顔立ちですよ。つまり真実の顔立ちということですよ」

「それに、寝てるだけなんだね。エルマの弟なら、もう歩いたり走ったり飛んだりしてるかと思ってたのに」

「まさに。動かざること山のごとしと言うのでしょうか。俗世の卑小なる出来事には目もくれず、泰然と構えてみせる器の大きさに痺れますよね」

なかなかの暴言を吐かれているというのに、エルマはダイナミックにポジティブ変換し、いかんなく姉馬鹿を發揮している。

フェリクスは早々に興味を失ってしまったらしい。

処置なし、というように両手を上げ、「で」と、おもむろにエルマに向き直った。

「不躰だけど、君、今妊娠の可能性はある？　ないよね？」

「は？」

突然の質問に、エルマはきょとんと目を見開く。

同時に、そのあまりの非礼さに、背後で控えていたイレーネとデボラが一斉に顔色を変えた。

「いきなり、なんてことをお聞きになるのですか、陛下！」

「いくら陛下といえど、あまりに無礼ですわ！」

だが、フェリクスは「ごめんごめん」と緩く笑っばかりで、まったく取り合わない。

「だって、どうしても確認しておかなきゃいけなかったからさー」。

なにせ、今回の仕事っていうのは
「義兄上！」

バンッ！

重厚な扉が乱暴に開かれたのは、その瞬間だった。

「これはいったいどういうことです！」

息を荒らげながら踏み込んできたのは、豊かな黒髪に、甘さを含んだ藍色の瞳を持った、精悍な青年、ルーカスである。

彼は珍しく、正式な騎士服をまとい、黒いマントまで身に付けていた。

たった今駆けつけてきたのか、肩口にはいまだ粉雪が残っている。嵌めたままの手袋は、封蝋の施された手紙を強く握りしめていた。

「悪ふざけだとしたら、性質たむが悪いにもほどが、……エルマ！」

と、声を荒らげていた彼が、ふとエルマの姿を捉える。

久々の再会に喜色を浮かべるかと思いきや、彼は険しい表情になっ
てつかつかと近付き、エルマの顎を覗き込んだ。

「おまえ、今回の任務内容を知ってなお戻ってきたのか!？」

「いえあの、殿下、距離が少々……。具体的には、バルたんを押し
つぶさずに済む程度に離れていただけですと大変」

「任務内容を知っているのかと聞いている！」

「今まさに知ろうとしているところです」

あまりの剣幕に、エルマは思わずバルドを抱え直す。

ルーカスはほっとしたように息を吐くと、ようやくバルドに視線を落とし、少しばかり表情を緩めた。

「バルド、か。大きくなった。お父上似だな」

くしゃりと髪を撫でると、すぐにフェリクスに向き直る。

そして、エルマを背に庇うようにしたまま、再び鋭く異母兄を睨み付けた。

「繰り返しますが、冗談にしてもあまりに性質が悪すぎます。俺を早く呼び戻したいだけだったなら、こんなことで釣らずとも、ただ一言『早く帰れ』とお命じください。というか、そもそも今日この日に遠くまで行かせないでください」

「君をびつくりさせたかったのは事実だけど、手紙に書いた内容は、残念ながら冗談なんかじゃないよ」

「なんだと？」

とうとうルーカスの口調から敬語が取れる。

フェリクスはまるで満腹な猫のように、にいと口の端を引き上げてみせた。

「本気だとも。僕、フェリクス・フォン・ルーデンドルフは王命として、エルマ、君に、王妃選考会に候補者として参加することを命じる」

軽やかな宣言に、エルマを除く全員が凍り付いた。

唯一、フェリクスの妙に上手いウインクを受けたエルマは、それを避けるように顎を引いた。

「……私が、陛下の王妃選考会に、ですか？」

「なにその嫌そうな反応。うまくすれば大国の王妃だよ、もつとテンション上げていこうよ」

「恐れながら、権力にも、あなた様の妻の座というのにも、まったくそられないのですが」

淡々とした塩対応に、面々がほつと胸を撫でおろす。

我に返ったルーカスは、やっといつもの皮肉気な笑みを取り戻した。

「ご覧の通り、エルマは全く乗り気でないようです。王妃候補になるには、貴族による後見と本人の意思が必要のほず。両方とも無いエルマでは、候補に上がることもまず不可能ですね」

「意地悪だなー。せつかく僕が、最高の世継ぎを確保する気になったんだから、水を差すような真似しなくてもいいじゃない」

フェリクスは軽く首を竦めて、へらりと笑う。相変わらず、狐のような笑みだった。

「僕は血を残すつもりなんてさらさら無かったけど、君が王を続けるって言うからさ。それならまあ、僕の血を上書きするくらい、優秀な血があつたほうがいいでしょ」

声にはほんのわずか、なにか真摯な色が滲む。

しかし、周囲がそれに気付く前に、彼はいつもの間延びした口調に戻ってしまった。

「エルマで即決してもいいけど、魔族の血が混ざるのはちょっとアレな気もするしー。一応、他の候補を見ておくべきかなーって。そこで選考会だ。知力体力時の運、それから美貌。どれを取ってもピカイチのエルマを参加させれば、一気に水準が跳ね上がる。雑魚令

嬢の足切りの理由付けにももってこい。そうして僕は、最高品質の妃選びに専念できるってわけ」

「……王の発想として一定の理解はできます。が、さすがにこの任務は、本人の意志を無視して命じるべきではないでしょう。王以前に、人として」

「あくまで本人の意志が問題？　なら話は簡単だ」

低い声で反論したルーカスを封じるように、フェリクスはにこやかにエルマを見つめてみせた。

「ねえ、エルマ」

「先に申し上げておきますが、もはや、陛下にやすやすと乗せられるチヨロい私ではありませんよ」

「うんうんそうだよね。ところで君の弟くんってさ、ものすごく可愛いし、頭もよさそうだし、発育もよくて、なんかもう世界一素晴らしい赤ちゃんだよね」

絵に描いたような掌返しだ。

シャバの世知辛さを既に学んだエルマは、ぴしりとそれを撥ね退けようとしたが、

「……そ、そのような事実を仰つても、べつに、まったく、騙されるわけではありませんが、ですがまあその、まぎれもない事実ですよねバルたんめちゃきゃわわですよね」

あっさり失敗し、見事に前のめりの体勢を見せた。

「ダメだわ、この子、世界一チヨロい姉だわ……！」

「でも、チヨロいエルマエル様も素敵ですわ……！」

イレーネとデボラがひそひそ声でコメントを交わす中、エルマはがつつりとフェリクスの話術に絡め取られていった。

「こんなに可愛い弟君だもの。同じく弟を持つ身として、どんなことでも叶えてあげたいっていう君の気持ち、すごくよくわかるよ。実際、そう思ってるでしょ？」

「それはもう。バルたんの寝顔を見ていると、どんなことでもしてあげたくありません」

「わかるわかる。すごく伝わってくるよ。あらゆる障害を取り除き、あらゆる幸福を授けたいくなるよね」

「ええ、まったく、仰るとおりで……！」

バルドを引き合いに出され、エルマがみるみる話にのめり込んでゆく。

彼女が顔を輝かせ、渾身の相槌を打ったタイミングで、しかしフェリクスはふと表情を暗くした。

「でも……本当に残念。現時点では、彼に決定的に欠けているものがあるんだ」

「え……！？」

エルマが怯んだように息を呑む。

狐とあだ名されるルーデン王は、ずる賢いそうな瞳をそつと伏せることで隠し、低く告げた。

「戸籍だよ。社会で『普通』の生活を送るにあたって、なによりも必要なもの。けれど、監獄生まれの君たち姉弟には、それが無い」
「……………！」

エルマは雷に打たれたようによろめいた。

フェリクスの意図を悟って、「落ち着け」と口を挟んだのはルーカスだった。

「騙されるな、エルマ。戸籍が無くとも、おまえは俺の口利きでこうして働いているだろうが。それに、ヴァルツァーの医療環境は王都より充実している。べつに戸籍が無くとも、職や診察に困ることはないだろう?」

「それはそうですが……。いつかバルたんが誰かと愛を育み、結婚するときにはどうするのです? 子を持つときは? バルたんは内縁の夫となり……。子どもとも正式な親子関係を結べないのではありませんか?」

「そこはもう、お得意の詐欺か洗脳でも使って偽造すればいいだろうが!」

「ダメです、バルたんまがに紛まがい物を差し出すなんて!」

もはや、騎士が邪道を説き、罪人の娘が正道を説くという不思議な事態である。

そこに、フェリクスがもったいぶった声で追加燃料を投下した。

「最近僕さー、名誉騎士爵位、っていうのを設けたんだよねえ」

ソファの手すりに頬杖を突き、もう片方の手をひらりと宙に向ける。

どこか、獲物を前にした蜘蛛のような、滑らかな動きだった。

「国に大いに貢献した者に授ける、一代限りの爵位だ。とはいえ、ここから貢献を重ねれば、陞しやう爵じやくも可能、伯爵になれば世襲も認められる。貴族の仲間入りってことだね。ちなみに、爵位が授けられれば、自動的に戸籍も授けられることになる。公式に、ね」

「公式に……」

「そう。騎士爵位があれば、王城にも社交界にも出られる。逆に平民に戻ることもできる。つまり、上は王族から、下は平民まで、どんな相手と付き合っても後ろ指を差されることがないということさ」
「……………」

エルマが黙り込む。

「もし君が今回の選考会に出て、そうだなあ、最終選考まで残ってくれたなら、名誉騎士爵位を約束しよう。別に妃になる必要はないんだよ。最高の当て馬になってほしいだけ」

「……………」

「今なら特別に、セットでバルド君にも爵位をプレゼント。おまけにお好きな姓も贈呈」

「やります」

即答したエルマに、やり取りを見守っていた三人は一斉に叫び声を上げた。

「馬鹿エルマ！ あなたに、最終選考でちゃんと脱落できる器用さがあるはずないじゃない！」

「うっかり王妃になってしまふ未来が目に見えるようですわ！」

「エルマ、おまえ、本当に事の重大さをわかっているのか！？」

ルーカスに至っては、険しい顔でエルマの腕を掴む。

精悍な美貌を顰め、這うような低い声で告げた。

「過去にルーデンで行われた選考会では、最終選考前に『枕問い』を行使した王もいたんだぞ……………！？」

つまり、王妃にならなかつたとしても、純潔を失う恐れがあると

いうことだ。

騎士である彼としては、かなり直截的にそうした危機を指摘したつもりだったが、エルマの反応は淡々としていた。

「枕問い。書物を通じてではありませんが、定義は理解しております。ですが、私と陛下の間柄で、まさかそのようなことが起こるはずもありませんので」

「えー、それって信頼されてるのか、逆に視界に入っていないのか微妙ー」

間延びした口調で突っ込むフェリクスをよそに、ルーカスは声を荒らげた。

「おまえはなにもわかっていない！」

部屋の空気がびりりと震えるほどの怒声だった。

「おまえは年頃の、誰より美しい娘なんだぞ！ 権力志向もないくせに、公式に手籠めにされにいくような悪趣味な催しに、なぜそんな気軽に臨める！？ 人間の欲望や卑しさに、いい加減、無防備すぎるー！」

エルマは怯んだように目を睜ったが、腕の中のバルドをきゅっと抱え直すと、おずおずと口を開いた。

「あの、ご心配いただいているようで恐縮ですが、これはあくまで任務。つまり形だけの王妃候補ですし、万が一そのような場合となつたら、多少、武術の心得もございますし……」

「酒だの薬だの、やり方はいくらでもあるだろう。男の欲を甘く見るな。それにこれは、それ以前に名誉の問題」

「殿下もですか？」

厳しい顔つきのまま続けようとしたルーカスを、エルマは不思議そうに見つめた。

「殿下も、そのような、『甘く見てはいけない男の欲』をお持ちなので？」

これには、ルーカス本人よりも、やり取りを見守っていた周囲の方がごくりと喉を鳴らした。

「エ、エルマ、それ、最高に答えにくいやつ……っ」

「無自覚ゆえのクリティカルヒットですわね……っ」

いがみ合っていたはずのイレネとデボラは、いつの間にか両手を取り合って冷や汗を浮かべている。

ルーカスがなにかを答えるよりも早く、エルマは身を乗り出した。

「そんなことはないはずです。殿下は全自動テイクアウトと称される殿方であっても、常に私に対して誠実に接してくださいます。思うに、殿下は少々心配しすぎなのではないでしょうか」

エルマは真剣だった。

「私、きっと今回も立派に任務をこなしてみせます。こなしたいのです。これまでは母からの課題をこなすためでしたが、今度は、自分自身の欲しいもののために。私、絶対に騎士爵位を」
「もういい」

だが、その熱弁は、低い声によって遮られた。

「そこまで言うなら、好きにするがいいさ」

まるで、窓の外でちらつく、雪のように冷ややかな声。

ルーカスは、その青い瞳に、これまでにならないほどの冷たさを湛えていた。

「あの、殿下……」

戸惑うエルマから視線を外し、くるりと踵を返す。

そして、カツカツとブーツを鳴らし、扉へと引き返していった。

「義兄上。今回はエルマへの直接の任務命令ということですね。ならば俺は、この件には一切関知しませんので」

「ほいほーい」

のんびりした返事を聞くか聞かぬかの内に、部屋を去ってしまう。残されたエルマは、腕に弟を抱えたまま、無表情で立ち尽くしていた。

「ど、どどど、どうしよう、殿下とエルマが本格的に喧嘩するだなんて、初めてだわ……っ」

「ま……まあでも、『俺にも欲があるに決まってるだろ、ガオー！』と襲いかかれない殿下は、しょせんそれまでの男というだけですわ」

ちなみにイレーネとデボラでは、この事態への賛否は分かれるようである。

「考えてみれば、エルマエル様のライバルが減るのはよいことですもの。意気地なし殿下とはここで終えてもらって、なんら問題ござ

「いませんわ」

「この人でなし！ この半年、色男の称号を投げ捨てるくらい身を憤んで、なにくれとなくエルマに手紙を送っては、大罪セブンに秘密裏に撃退されてきた経緯を知らないから、そんなことが言えるのよ！」

半年の裏事情を知っているイレーネは、だいぶルーカス寄りだ。今日だって、フェリクスの無茶ぶりで遠出していたのを、この事態を知って慌てて馬を駆ってきたというのに。エルマが気にするのは弟のことばかりで、挙げ句、弟のために、他の男の妻に立候補するときだ。

「どうすんのよ、エルマあ……」

涙目になって見つめる先では、やはりエルマが沈黙を保って佇んでいる。

それを見ていたフェリクスが、ソファから愉快そうに声を掛けた。

「どうするー、エルマ？ ルーカスと大喧嘩なんて、初めてじゃない。実はちよつと動揺してたり？」

「……いえ特に」

その声は、いつもより少しだけ固い気がするし、顔も強張っている気がする。

いや、それとも通常通りだろうか。

エルマの人となりをだいぶ把握しているイレーネでも、眼鏡で覆われてしまうと、よくわからない。

目を凝らしたイレーネだったが、エルマがなにこともなかったように、バルドを優しく揺すりだしたので、絶望に天を仰いだ。

好意を抱く男と喧嘩した直後の人間は、普通、こんなに愛おしげに誰かをあやしたりしないだろう。

「枕問いを回避しつつ、騎士爵位を頂戴すれば、ご懸念も払拭できるかと思しますので」

静かに答える様子は、やはりどう見ても動揺の欠片すらないように見える。

エルマは眼鏡のブリッジを押し上げる代わりに、バルドの頬をつんと突くと、瞳に力を込めた。

「『普通』の身分を手に入れるため　優勝までは一歩及ばぬ妃候補。やらせていただきます」

3・「普通」の職場復帰(3)

「信じられない！」

侍女寮、エルマの自室へと続く夜の廊下に、イレーネの憤慨の聲が響いた。

「いくらなんでも今回は、エルマ、あなたが軽率だわ。殿下はあなたを心配しているっていうことくらいは、さすがに理解できるでしょう？」

皆が寝静まっている時間帯、しかも友人の腕の中には赤子がいるとあって、その音量は控えめだ。

本当は、「エルマのことが好きだから、嫉妬と心配で怒っているのだ」くらい指摘してやりたいのだが、ルーカス本人を差し置いてそれを告げるのも躊躇われ、こんな言い方に留まっている。

「実際陛下と夜を共にしてしまうかどうか、そういう問題じゃないのよ。あなたの純潔が、社会的に失われるというそのことが問題なの」

「お静かに。バルたんがレム睡眠に移行しつつあります。彼の安眠を妨げてまでするほどの問題でもありません。陛下の性格的に、おそらく枕問いなどしないでしょーし」

「が、エルマはそれに頼着せず、ただ弟の頬を優しくつつくだけだった。

感触を気に入ったようである。

イレーネはますます眉根を寄せた。

「大問題よ。枕問いが無いにしても、まかり間違つて本当に王妃に選ばれてしまったらどうするの？」

「最終選考まで残る正式な候補者は、美姫中の美姫、才媛中の才媛のはずです。そのお方に負ければよいだけですから、そう難しいことでは」

「あなたが、そんな普通のレベルに徹することができるわけないでしょー!？」

これまで、数々のエルマ無双を見てきたイレーネは、裂帛の気合いで突っ込んだ。

「たしかに、普通のおつもりで、数々の奇跡を生み出す……それがエルマエル様の真髄ではありませんわね……」

大人しく聞いていたデボラさえ、エルマを褒めつつもそこは認めるようだ。

苛立ちや心配の表情を浮かべた友人たちに、しかし、エルマはきりりとした声で応じた。

「お二人とも、そこまでご心配なさらないでください」

「え……?」

「シャバでの一年の経験に、イレーネからの教本……。それらを糧に、私は成長しました。それでも、いろいろ考えているのですよ。大丈夫、私に策がございます」

エルマなりの考えに、策。

どうにも不安要素しかない。

大丈夫と言われるほどに不安に駆られるイレーネたちの前で、エ

ルマは、弟の柔らかな頬から指を離し、ぴたりと立ち止まった。

「思い返せば半年前」

彼女は窓を向き、そこから見える建物をじっと見つめた。

迎賓館。

各国から集まった優秀な候補者たちが寝泊まりする、その場所を。

「母の出産に伴う一件で、私は既に学びました。『普通』とは、絶対のようできてひどく曖昧なもの。私が皆さまの『普通』に合わせるのではなく……私の『普通』を、皆さまの『普通』にしてしまえばよいのだと」

「……………は？」

ぼかんとする友人たちに、エルマはくるりと向き直った。

「つまり、私の『普通』のレベルを、他の候補者さま方に上回っていただく。そのように私が、教育すればよいのです」

「は!？」

「なに、育児の延長と思えばなんら問題ございません。まずは教える子となる候補者の当たりを付けて参ります」

はっ！

言うが早いか、エルマはバルドを腕に抱いたまま、ひらりと窓から飛び降りる。

「ちよ……………っ！ こっ、四階いいいいいい！」

「なにをぼさつとしていますの。走って追いかければ済む話でしょう。行きますわよー！」

ぎよっとするイレーネをよそに、デボラは呆れたように鼻を鳴らす。

「ほらーっ、早くなさーい！」

そして次の瞬間には、デボラもまた地上の人となって、四階の窓辺に佇んだままのイレーネのことを見上げていた。

「え！？　ちょ、え！？　い、いつの間に！？　というかどうやって！？」

「階段を駆け下りたに決まっていますわー！　ほらーっ、イレーネさんも、はー、やー、くー！」

両手で口を囲って、デボラが叫ぶ。

その間にも、エルマは地上を爆走していた。

いや、宵闇に紛れてよく見えないのだが、庭園の樹木が、迎賓館へと続く直線の形でザザザッ！　と揺れている。

迎賓館で寝泊まりする候補者たちを電撃訪問、あるいはこっそりと視察するつもりなのだろう。

「ちよっと……もう……！　もおおお……！」

しばしの葛藤の後、結局イレーネは、普通の脚力しか持たぬ自分を呪いながら、急いで階段を駆け下り始めた。

それから何時間経つたらうか。

窓越しに見える空が白みはじめているのに気付いて、イレーネは死んだ魚のような瞳になった。

「エルマ……もういいでしょ。もうすぐ朝の鐘が鳴るわよ。あなたのお眼鏡に叶う候補者なんて、いないわよ……」

「諦めたらそこで試合終了ですよ、イレーネ。ルーデンの威信にかけて、今ここには大陸中で選りすぐりの女性が集まっています。であれば必ず、これぞと思う候補者の一人や二人、いるはず」

廊下からこそそと話しかけるイレーネとは対照的に、エルマは堂々と、眠る候補者の部屋に踏み入っている。

バルドの抱っこをイレーネとデボラに任せた彼女は、手袋で腕を覆い、髪をまとめ上げ、証拠を残さぬように部屋を動き回っていた。まさに手練れの空き巣か、強盗のようだ。

「ふむ。この方も、残念ながらから体力と柔軟性に難があるようですね。はい、体勢を戻して結構ですよ」

「ぱちん、と指を鳴らすと、寝台の上で眠ったまま前屈をさせられていた姫君が、ぱたりと元の姿勢に倒れ込む。

どうやら、今のエルマは洗脳犯でもあるようだ。

姫君の寝息はどこまでも健やかで、身じろぎひとつしなかった。

エルマは廊下に戻りながら、ぱつが悪そうに肩を竦めた。

「……とはいえ、ここまで教え子候補が見つからないのは予想外で

した。まさかこれほど、候補者の皆さまが外敵わたしに無防備で、体の硬い方々ばかりだなんて。彼女たちは、いったいどんな教育を受けてこの場に臨んでいるのでしょうか……」

「いやだから、普通の淑女教育だってば」

イレーネは半眼で突っ込んだが、デボラは、

「本当ですわね。エルマエル様のご降臨の際には、その五分前からフラグ気配を察知し、お茶の一杯も用意しておくようであれば！ 同じ貴族の娘として、わたくし、恥ずかしい限りですわ」

などと、バルドを抱っこしたまま妙な観点から憤慨している。

イレーネは思わずこめかみを押さえた。

「だったらもう、デボラがエルマの教えを受けて、王妃になったらいいじゃないの……」

「ほほほ、ご自分にブーメランしそうな発言は控えた方がよいですよ、イレーネさん」

笑顔でやり返すデボラからバルドを受け取り、エルマは沈鬱な面持ちで溜息を吐いた。

「それにしても、この状況はどうしたものか……。皆さまお美しく、聡明な方々とお見受けしましたが、惜しむらくは体力や緊張感、そして根性に欠けるご様子。もっとこう……、飢えた狼のように貪欲で、雑草のように逞しく、相応の警戒心とガッツを持ち、暗器の一つや二つ扱えるような方というのは、いらっしやらないでしょうか」「いるわけないでしょ！？ 王妃候補になにを求めているのよ！」

イレーネは思わず絶叫してしまふ。

そして、前方に見える扉の一つを指差した。

「いい？ 残るのはもう一人だけ。社交界すら経験したことのないだろう、辺境弱小国の姫君よ。その方を『視察』したら、さっさとこの場を離れましょ。一刻も早く陛下に会って、任務から外してもらうようお願いするのよ」

同時に、心の中では、すやすやと眠り続けるバルドに「どうかそろそろ泣いて起きてくれ」と念を飛ばす。

赤子は泣いて大人を困らせるのが仕事だというのに、この子ときたら、抱っこで寝たまま起きやしないのだ。

いい子か。いい子だ。

だが、おかげでエルマの暴走が一向に中断されない。

もうここまで来たら、あともう一人くらい変わるものか、と、イレーネがやさぐれた時、しかし異変が起こった。

「……おや」

バルドを抱っこしたままドアに近付いたエルマが、なにかに気付いたように首を傾げたのだ。

「こちらの姫君は、起きていらっしやいますね」

イレーネとデボラは顔を見合わせた。

まだ朝陽も登り切らぬ時分。

ずいぶん早起きな貴族令嬢もいたものだ。

「失礼いたします。アナスタシア・ドン・ロドリゴ様はご在室でしょうか」

「……はい」

忍び込むのを止め、ノックして声を掛けると、可憐な少女が扉を開ける。

子犬のようにつぶらな瞳と、北国を思わせる白い肌が特徴的な、利発そうな娘だった。

エルマは素早く相手を観察し、満足げに頷くと、短いやり取りの後唐突に切り出した。

「ルーデン王妃の座に、ご興味はございませんか？」

と。

「は……？ それは、……ええ、まあ、もちろん、興味はございませんが……」

アナスタシアは曖昧に頷く。

質問の意図を測りかねているのだろう。

それ以上に、侍女が子連れであることに怪訝さを隠せぬようで、ちらちらとバルドに視線を走らせている。

お手本のような「戸惑い」の仕草。

動揺を抑えるように、さりげなく耳に髪をかけた手の動きを見て、エルマは満足そうに眼鏡を光らせた。

「なるほど、初手はそこからのですね。武器の配置にも身体の動きにも、鍛え抜かれたゆえの哲学を感じます。素晴らしい」

「……はい？」

「白を切る演技もお見事。表情筋の操作は未熟ですが、顔の筋肉含

め、身体全体をよく鍛えているようなので、大丈夫。すぐに上達しますね」

警戒も露わに一步身を引いたアナスタシアを前に、エルマは同僚たちに再びバルドを預け、くいと眼鏡のブリッジを押し上げた。

「なにより、怪しげな人物に遭ったらまず手持ちの武器の確認、というその警戒心。実に素晴らしゅうございます」

ばっ！

同時に、まるで低年齢男子が悪戯をするように、アナスタシアのドレスの裾を勢いよくめくり上げる。

『き……きやあっ！』

巻き起こったすさまじい風に、アナスタシアがつい母国語で悲鳴を上げた次の瞬間には、

ばらばらばらばら！

軽やかな音を立てて、床に危険物の小山が出現した。

『な……っ』

「指輪には毒針、ネックレスストップの中には暗示の香。ドレスの中には暗器各種。そして、ピアスに仕込んだ自白剤で、まずは軽いジャブを狙った、といったところですか」

『……………！』

淡々と指摘されて、アナスタシアが顔色を失う。

じり、と距離を取りはじめた彼女を、イレーネは震える手で指差した。

「な……っ、なな、なんでその子、剣とか鈍器とか怪しげな瓶とかを大量に隠し持っているの!? まさか、刺客!? フェリクス陛下を狙って!?!」

「え?」

振り返ったエルマは、一拍ぶんの間を置くと、ふるふると首を振った。

「あー、……いえほら、このくらい、護身用として普通誰でも持ち歩くではありませんか」

「そんなわけないでしょ!?!」

どうやらエルマは、アナスタシアなる少女の正体について誤魔化したいようだが、そう何人も暗器を持ち歩く一般人がいるはずもない。

「今すぐ騎士団に突き出すわよ! エルマ! 後ろに庇ったその子、拘束してこっちに引き渡しなさい」

「ええー……」

「ええー、じゃないわよ! 暗殺者を王妃に仕立て上げようだなんて、ありえないわ。いくら他に候補がいらないからって、ダメなものはダメ!」

イレーネが叱りつけると、エルマは「そんなに大声を上げるとバルたんが……」と焦ったように身を乗り出す。

そしてその隙に、じりじりと距離を測っていたアナスタシアが、ぱっと身を翻した。

窓から逃亡するのかもしれない、彼女はエルマから十分な距離を取りながら、大きく口を開く。

「いけませんわ！ 彼女、舌を」

意図を察したデボラが叫ぶが、結局のところ、アナスタシアが己の舌を噛み切ることはなかった。
なぜならば、

しゅっ！

『ぶぐっ！？』

一瞬だけ開いた口に、残像しか見えない速さで飛んできた「なにか」が差し込まれたからである。

『ほ……っ、ほれは……！？』

『バルたんの歯固めのために東大陸から取り寄せた、最高級乾燥海藻です』

4・「普通」の職場復帰（4）

『バルたんの歯固めのために東大陸から取り寄せた、最高級乾燥海藻（おしやばら）です』

最初は板のように固いですが、噛み続けると、柔らかくなり旨みが広がりますよ。

流暢なエスピアナ語で、どこか誇らしげに解説されるが、そんなことが聞きたいわけではない。

昆布で自害を阻止された少女・アナスタシアは、巨大な昆布を口からはみ出させたまま、呆然とその場に座り込んだ。

『あんは……はひ者なんは……』

『ひとまず昆布を口から離しましょうか。人と話すときは、食べ物
を口に入れない。シャバの常識ですよ』

自分で突っ込んでおきながら、いけしゃあしゃあとそんなことを
言い放つ相手に、もはやどうリアクションしてよいのかわからない。

硬直したアナスタシアの傍に、エルマはそつと跪き、取り除いた
昆布を袋に入れて『おやつにどうぞ』と持たせてやると、優しく微笑んだ。

『ご挨拶が遅れた非礼、心よりお詫び申し上げます。改めまして、
私はエルマと申します。この王城で侍女をしておりますが、とある
経緯から、選考会では候補者として参加を命じられました』

『え……あ……』

『ですが、私にはどうしても、最終選考で負けなくてはならない事情がございます。そのためには、あなた様のお力がぜひ必要なのです』

『え……』

立て板に水を流すようなトークに、アナスタシアは一音節しか挟めずにいる。

エルマはおもむろに眼鏡を外すと、ぎよっとした少女の両手を取り、至近距離から相手を見つめた。

『美貌よし、語学よし。体力、根性、柔軟性、なによりアグレッシブな行動傾向。この迎賓館に、あなた様以上に王妃適性の高い女性はいません。私が全面的に支援いたしますので、どうか、王妃選考会で優勝していただけますか』

『いや、王妃適性って……。あんだ、なに言ってた……』

刺客という正体はばれているはずなのに、それにまるで頓着せず話しかける相手に、アナが素の口調で呟く。

それを聞き取り、エルマはますます身を乗り出した。

『もしや、陛下の暗殺計画に支障をきたすことをご懸念でしょうか。でしたら、ご安心ください。選考会で勝ち進めば進むほど、陛下との接触機会は増えます。というか、王妃になつてしまえば、陛下はエブリデイあなた様のお隣、オルウェイズ狙い放題。あなた様に美しい状況でしかありませんよ。やる気が出ませんか？』

『いやそうじゃなくて、犯罪者をいそいそ王妃候補に仕立て上げるなんて、頭おかしいだろ、つってんですけど！ あんだどういう神経してんだ！』

追い詰められすぎて、アナスタシアが半ギレになる。

が、エルマはことりと首を傾げるだけだった。

『普通の神経ですが……。バレなければ犯罪ではないと母は言っていましたし、そもそも暗殺を実行できていない時点で、あなた様はまだ犯罪者ではありませんよね？ なんの問題がございましょう？！？』

謎理論に、アナスタシアは絶句してしまふ。

「ちょっとエルマ、いったいなにを話し込んでいるのよ……？」

早口のエスピアナ語が理解できないイレーネが、半眼で問うが、

「ご自身を王妃候補に相応しくないと謙遜なさるアナスタシア様に、そんなことはないとお伝えし、理解を得ようとしているだけです」

エルマは空つとぼけた。

べつに、嘘ではない。

「ごまかさないでちょうだい。その子、他国からの暗殺者なんでしょう？ そんな子を」

「アナスタシア様。お伺いしますが、あなた様は、まさか暗殺者でいらつしやるのです？」

常識的にことを進めようとしたイレーネを遮り、エルマはアナスタシアに、ルーデン語で問うた。

『は？ だからさつきから』

「仮にそうだとしたら、私も陛下に忠誠を捧げる者の一人として、自害など許さぬうえで、苛烈極まる拷問を与える用意がございませうが、……。それでも、暗殺者であると？」

先ほど「フェリクス狙い放題」などと言った口で、悪びれもなくそんなことを告げる。

が、実際のところ、目の前の少女からわずかににじみ出る凄み。その一端を理解しただけで、アナスタシアは震えあがった。

どこにも隙が無い。そして、得体が知れない。

こんなの 敵うわけがない。

「だいたい」

視線一つで相手を圧倒したエルマは、【傲慢】の名に相応しく、世にも美しい笑みを刻んだ。

「昆布一つで動きを封じられる非力な女性が、まさか、国の命運を背負った暗殺者だとも?」

ぼきんつと、なにか乾いた音が聞こえる。

思うに、それはアナスタシアの鼻っ柱が天に召されたときの音だったのだろう。

『……………つ、つ……………つ……………つ!』

涙目になった異国の少女を、イレーネはつい哀れみの目で見てしまった。

あ、これ、もうこれ以上追い詰めたらいけないやつだ。

「さあ、アナスタシア様。あなたは、暗殺者なんかではありませんよね?」

『……………つ、つ……………つ』

「ご本人も頷いていらっしやいますし。なんら問題ございませんね。ねえ、デボラ様？」

「ええ！ まったくもって、小麦一粒ぶんの問題もございませんわ、エルマエル様！」

無力化された当事者と、完全なるイエスマンによる、実質的な欠席裁判だった。

さあ、とエルマがアナスタシアの顎を持ち上げる。

いまだ身動きが取れずにいる相手に、エルマは刷り込むように囁いた。

「なにを迷うことがございましょう。あなた様は、ただ、私の手を取り、従うだけ。そうすれば、すべてが上手くゆくのです」

完璧に整った顔で微笑む様は、まるで女神のよう。

口調から滲む、絶対的捕食者の余裕に、獲物と化したアナスタシアはただ震えながら、差し出された手を見つめた。

ありえない展開。

この手を取るなんて、するはずがない。

ああでも、なぜだろう。

このほっそりとした白い手、そして夜明け色の瞳を見るだけで、なにがなんでも、服従しなくてはいけない気にさせられる。

「……………う、ふ……………」

ところがそのとき、不意に高い声が一同の耳を打った。

「う、うつつんっ、ふえええええ……っ」

バルドである。

夜明けとともに自然に目を覚ました彼は、見知らぬ天井、というか他人イレーネに抱っこされた状況に気付き、火が付いたように泣き出したのだ。

「うぎゃああああああん！」

「バ……っ！ バルたんっ！」

エルマの変化は劇的だった。

それまで口元に帯びていた、傾国の娼婦を思わせる笑みをかなぐり捨て、さっと青褪める。

アナスタシアのことなどぽいと放し、素早く身を翻すと、バルドをイレーネから受け取った。

「お目目が覚めたんでしゅねー！ 今週の平均より六分三十二秒も早いなんて……。ミルクかなー？ うんちかなー？ それとも寒かったかなー？」

左手で抱っこをしつつ、器用にも右手で、布鞆から次々と育児グッズを取り出してゆく。

哺乳瓶、粉ミルク、水筒、おむつの替え、ガーゼ、脱臭袋、ブランケット、羽織、帽子、靴下。

いったいこの小さな鞆にどうやって、という量だ。

それでも一向に泣き止まないのを見ると、彼女はますます焦った顔で、今度は全身から小道具を取り出した。

「た、退屈している……！？ いいえ、それとも空気の味が変わって怯えて……！？ あああ、バルたん、なぜなの……！？？」

袖口からガラガラ、胸元からぬいぐるみ、ベルトから指人形、ドレスの内側からは、ボタンのたくさんついた機械やバイオリン、ベビィアロマや小型空気清浄機などなど。

「いや、だから、質量保存の法則を無視しすぎでしょ！？」

「まあっ、あのバイオリンは世界に一つしかないヴェルク工房の銘入り……！ 見たところ、ほかのグッズもすべて一級品ですわね、さすがエルマエル様……！」

イレーネもデボラも、その異様な光景に、ツッコミと興奮を禁じ得ない。

唯一、突然放り出されたアナスタシアだけが、ぽかんとしていた。

『あの……』

恐る恐る話しかけるが、エルマは振り返りすらしない。

「さあバルたん、このヒーリングミュージックに心を委ねて……き、聴いてくれない、ですか……！？ 暗示！？ 暗示を掛けてしまった方が速攻で泣き止んでくれます！？？」

先ほどまでの泰然ぶりはどこへやら、ほとんどパニックの様相である。

『あの……』

「丹田をアーユルヴェーダ式マッサージで刺激……いえ、それとも催眠魔獣を狩ってきた方が早い……？ そ、それとも【貪欲】のお

兄様のオーガニック麻酔……？ ど、どうすれば……っ」

『ねえ、ちよっと』

「可哀そうに、こんなに泣いて……！ 愛らしく繊細な喉を傷めてしまうではありませんか！ バルたん！ どうしたら泣き止んでくれるのですか！？」

果ては、マッサージオイルや狩用の巨大斧、注射器までを、どこから取り出し、エルマは無力さに打ちひしがれたまま弟に取り纏った。

「バルたん」

『人の話聞けや！』

と、そこに、とうとう緊張の糸の切れたアナスタシアが声を荒げる。

彼女はぱっと立ち上がり、つかつかとエルマに近寄ると、乱暴にバルドを奪った。

「あつ、なにを」

『おい、ガキ。話が進まないから、さっさと泣きやんでくれる！？ こっちには大人の話があるんだからね』

慣れた手つきで抱っこし、ぐつと顔を近付ける。

『べろべろばあ〜』

「うぎゃあああ、……………う？」

睨み顔から一転、見事な変顔を決めてみせたアナスタシアに、なんとバルドが泣き声を引っ込めた。

きょとんと見上げる赤子に、彼女は、先ほどエルマが外して床に

置いていた眼鏡を、ぽいと放り与える。

『ほーら、これで遊んでな。壊していいぞ』

すると、バルドは不思議そうに眼鏡を握りしめ　やがて、きやつきやつと声を上げて笑いだすではないか。

アナスタシアは鼻を鳴らし、

『大人が慌てるからガキは泣くし、媚びるから付け上がるのさ。こ
ういうときは、適当にあしらう！』

なんでもないことのように、泣き止んだバルドをエルマに押し付けた。

『で、やっと本題に戻るけど。あたしじゃあんたに敵わないってことは、よくわかった。こうなりやもう、腹をくくるしかない。だから、条件を
』
「て」

しかし、ぎゅうつとバルドを抱きしめたエルマの、その小さく震える声によって、問いは遮られてしまった。

『条件を聞きたいんだけど　……「て」？』

『天使ですか！？』

『はー！？』

ぱつと顔を上げ、エスピアナ語で叫びだしたエルマに、アナスタシアはぎょつとする。

『あなた様は！バルさんと、育児に悩む私に光を投げかけんとする、祝福の天使でいらっしやいますか！？』

『あんた真顔でなに言ってるの！？』

『一瞬で涙を止めてみせる、SS級威力を誇る変顔……。数ある最高級おもちゃを差し置いて、眼鏡などという無機質極まりないもので見事バルさんの関心を攫うそのチョイス……。媚びず、揺るがず、凜とバルさんを導くその姿は、まさに私の思い描いてきた育児の理想形……。』

エルマは感極まったように瞳を潤ませ、次いで、その場にすつと跪いた。

『アナスタシア様……。いえ、敬愛を込めて、【変顔】のアナお姉様とお呼びしても？』

『絶対やだ！』

震えながらエルマが差し伸べてきた右手を、アナスタシアは光の速さで振り払った。

いや、振り払おうとして、がしつと掴まれた。

『ひっ！』

『先ほどまでの傲慢な態度、心よりお詫び申し上げます。私ごときがあなた様を無理やり王妃の座に据え置くなんて、言語道断。私めは、あなた様に衷心より従い、^{かします}傳き。』

エルマは、もう片方の手でバルドを抱っこしたまま、瞳をきらきらと輝かせてアナスタシアを見上げた。

『そうして、あなた様が必ず王妃となられますよう、全力で支えさせていただきます！』

『結果やることはなんら変わってないじゃん!?!』

悲鳴のようなアナスタシアのツッコミが響く。

「なんか……」

一連のやり取りを見ていたイレーネは、ぼつりと呟いた。

「エスピアナ語はよくわからないけれど、……あの子は危険な暗殺者というより、哀れなエルマ被害者、……という理解でいいのよね?」

「なにを仰いますの。エルマエル様に奇跡を授けられようとしている、世界一幸運な人間ですわ」

デボラはうつとりと答える。

とりあえず、アナスタシア・ドン・ロドリゴは、あまり危険視しなくても大丈夫そうだな、と、イレーネはそんなことを思った。

5・灰かぶり姫

「あん」

昼なお薄暗い監獄の一室　その最上階に位置する豪華な部屋で、
ばさつとなにかが落ちる音と、軽い悲鳴が響いた。

「ばらばらにしてみましたわ」

困ったような口調で呟くのは、二児の母となつてなお、輝く美貌
を誇る元娼婦、ハイデマリー。

今日もしどけないドレスを身に付けた彼女は、豊かな胸を押しつ
ぶすようにしながら屈み、床に散らばった紙の束を拾い上げた。

あちこちに広がってしまった長方形の紙には、金彩まで施された、
美しい絵が描かれている。

宗教画にも見える荘厳さであったが、描かれている大半は、ドレ
スやチュニツクをまとった、貴族の男女であった。

王子に姫君。

華やかな宮殿、馬車、そして魔法使い。

そう、これは、物語を連作の絵画で表した、世にも高級な紙芝居
なのだ。

「参ったわねえ。本とは違って、頁ページが振られていないのよ。どついで
う順番だったかしら」

「物語に沿って並べるだけだろう。貸してくれ」

部屋の奥から呆れたように声を掛けるのは、ハイデマリーの夫、ギルベルトだ。

彼はソファから立ち上がり、妻の拾い物を手伝おうとしたが、当の本人からそれを断られた。

「待つて。それじゃあわたくしの『訓練』にならないわ。なにしろわたくし、『普通』の読み聞かせができるようになりたいのだから。灰かぶりアッシュエンツテル姫の話くらいは、あの子たちがいない間に身に付けておかなくてはね」

ハイデマリーは完璧な形の眉を顰めながら、軽く肩を竦める。

彼女がわざわざ自室に紙芝居などを運び込んだのは、周囲にその世間知らずをとがめられたからだだった。

赤ん坊の頃は聖女として外界から隔絶され、少女の頃からは娼館で籠の鳥となっていたハイデマリー。

ゆえに彼女は、世の母親が子どもに読み聞かせるような、童話を知らない。

それでもエルマの育児中は、彼女なりに、神話や聖書、そして春書《エロ本》の情報を繋ぎ合わせて、それっぽく話をごまかしていたのだったが、バルトに同様の読み聞かせをしようとしたところ、エルマを筆頭に止められたのだ。

「お母様、私も最近気付いたのですが、お母様の読み聞かせは、シヤバのそれからは少々逸脱しているようです」

「そうよオ、美髪を操り、魔獣どもを薙ぎ倒すラプンツェルの話なんて、あたし聞いたことなかったわ。まあそれはそれで、美容教育には良さそうだから放っておいたけど」

「僕も、毒りんごを食べた白雪姫のために、人体蘇生薬を求めて西

を指す話を聞いた時は、どうしたものかと思ったよ。まあ、医学への興味喚起によさそうだから放っておいたけど」

「俺も、時折セリフに艶声の混ざる読み聞かせは……内心どうかとずっと思っていた」

とまあ、このような感じで。

「ひどいじゃない。みんなの反応がよかったから、これでいいのだろうと思っていたのに。違っていたなら、その時に教えてくれるべきだったわ」

ハイデマリーは唇を尖らせて回想しながら、紙芝居を一枚ずつつまみ上げる。

珍しく意地になった彼女は、自分の力で、「アッシエンプッテル」の物語を正しく再現しようとしていた。

「物語の形式テンプレートなら、歌や観劇で一通り学んだもの。だいたいわかってよ。まずは、主人公が誰かを特定しましょう」

灰かぶり、灰かぶり、と呟いて、ハイデマリーは白い指を一枚の絵の上に置いた。

灰まみれのみすぼらしい格好をした少女と、魔法使いの二人が向き合う様子を描いたものだ。

「灰かぶりというからには、主人公はこの女の子なのでしょうね。でも、最初から魔法使いに助けてもらっただけなんて、そんな他力本願な物語があるのかしら？」

ときに娼婦に身を落とし、ときに魔王の妻となり、常に自らの運命を切り開いてきたハイデマリーは、不思議そうに首を傾げる。

彼女はしばらく絵を眺め、「ああ、わかったわ」と納得の声を上げた。

「きっとこれは、師弟ものというやつよ。女の子の闘いと成長、そしてそれを導く魔法使いとの間に芽生える絆。そういうものを描^{えが}いているのね」

藍色の瞳は、きらきらと輝きながら絵を見つめる。

そこでは、満面の笑みを湛えた魔法使いが、熱血コーチよろしく、みすばらしい少女の両手を握りしめていた。

6・「普通」の余興(1)

今でこそ「アナスタシア・ドン・ロドリゴ」などとご大層な名前で呼ばれているが、六年前まで、彼女はただの「アナ」だった。ルーデンの属国に落とされた辺境国の、その更に辺境の村で育った農民の娘。

いや、「辺境の村」というのはまだ着飾った呼び方で、アナの故郷は、正確には流刑地だった。

死刑や収監に処されるには身分の足りない者たちが、贖罪の名目で土地の開拓を命じられ、荒れた寒村に追いやられた。それを起源とする村だ。

人々は貧しいくせに、いや、貧しさゆえに労働力を求めて子どもを産むものだから、村は常に、飢えた子どもたちで溢れていた。

卑しき流刑地ゆえに、村の外に出ることは許されない。

ただ朝から晩まで働いて、泥にまみれたまま弟妹と身を寄せ合って眠る子ども　アナも、そんなありふれた少女の一人だった。

風向きが変わったのは、六年前。

高貴なるロドリゴ聖侯爵が、アナの住む村に祝福を授けに来たときだ。

村では大雪がたたって作物が育たず、しかも伝染病が流行って半壊状態となっていたが、彼はそんな場所にやって来て、惜しみなくパンを分け与えた。

ただし、大家族の長女として、十歳ながら必死に弟妹たちの面倒を見ていたアナからしてみれば、その登場は少しばかり遅すぎた。

そこで、手打ち覚悟で「今さら来てなんの用だ、偽善者め」と吐き捨ててやったのだが、なんとロドリゴは、穏やかに頷いてみせたのである。

「君が毒づくのは、飢えているからだね。苛立つのは、心が乾いているからだ。君にこそ、パンときれいな水が必要だったんだね」と。

睨み付けても、殴りすらしてこない男に、アナはそのとき驚いた。そして彼は、そんなアナに、荒れた大地に咲いていた一輪の白い花を差し出した。

「君は、必死に家族を守ってきた。私はそれを、称えよう」

鈴蘭すずらんによく似た釣鐘型の花は、愛らしいけれども単なる雑草の一種だ。

痩せきつた土にでも根を張り、最後まで栄養を吸いつくしてしまふことから、村ではむしろ厄介者としてみなされるような花だった。

けれど、初めて鼻先に近付けてみたその花からは、心がすつと穏やかになるような、優しい香りがした。

花の香りを味わうなんて、生まれて初めてのことだった。

穏やかで、高貴な男。

そのとき既に初老に差し掛かっていた侯爵だったが、幼いアナの目には、これまで目にしてきた村の大人とは比べ物にならぬほど、揺るぎない存在に映った。

ロドリゴのほうも、利発で物怖じしないアナを気に入ったという。

なんとアナを養女に迎え、エスピアナの王都へと連れ出してくれた。

蓋を開けてみれば、同様にしてロドリゴの庇護を受けた子どもたちはほかに何人もいて、アナも数いる養子の一人でしかなかったが、あの村から脱出できたのも、ひとえにロドリゴのおかげ。

アナは、貧困から自分を救い出してくれた聖侯爵に、深く感謝していた。

欲を言えば、弟妹たち全員を連れて来てほしかったし、侯爵家の「義兄姉」にはさんざんいびられたが、それでも、満腹で寝られるのは彼のおかげだ。

養女として受ける教育の中には、一般教養の外に、貴族令嬢としての嗜み、果ては本格的な武術まで含まれる。

あまりに厳しい指導に、養子となった「同期」の中には音を上げる者もあったが、アナはひたすらそれに打ち込んだ。

純粋に学ぶのが面白いと思えたのと、やはり、父とも慕うロドリゴの、役に立ちたかったからだ。

元は王族でさえあったという聖侯爵は、しかしそれゆえに政敵も多く、そんな彼を支えることができるという自負は、アナを奮い立たせた。

結果、アナは見る間に、あらゆる方面で才能を伸ばし、「辺境の出でよくぞここまで」とロドリゴを含む周囲を大いに驚かせたものだ。

だからこそアナは、ルーデン王暗殺などという任務を前にしても、自分ならできると信じて疑わなかったのである。

出自の誉こそないけれど、鍛え上げたスキルと根性は折り紙付きだ。

自分に、できないことなど何も無い、と。

（実際、あたしみたいに適応力のある人間がこの役回りで、大正解だったんだろうね）

今、アナは目の前の光景を見つめながら、そんなことを思う。

奇妙な侍女が、子連れで部屋に押しかけてきてから数刻。

エルマと名乗るその人物は、一度退室したと思ったら、次にはアナの部屋に荷物とベビーベッドを運び込み、すっかり同居の準備を整えてしまった。

なんでも、自身も候補者として選考会に参加しつつも、それ以外の時間はアナの専属侍女として、王妃教育に没頭することにしたというのだ。

『……アリなのかい、そんなの』

『規則では特に禁止されておりませんので。侍女長様からも許可をもぎ取……取得しております。ご安心くださいませ、アナ様』

半眼で突っ込んでみると、しれっとそんな回答が返る。

それは単に、そんな事態が想定されていなかったからだろうとは思ったが、アナは反論を喉下で飲み下した。

ちなみに、呼称は「アナ様」で落ち着いたようである。

（ふん、いいさ。真意は知れないものの、向こうからあたしをお膳立てしてくれるってんだ。ばかな振りして乗ってみようじゃないの）

元より、エルマに力で敵わない以上、自分には誘いに応じる選択肢しかない。

だとしたら、せいぜい尻尾を振ってみせて、本懐を遂げるまで。

(こちとら、元貧民。遅しさにかけては、定評があるんでね)

目の前の美少女　今は再び眼鏡を装着してしまつて見えないが
は、戦闘術こそ異様に冏抜けているが、その洗練された物腰を
見るに、高貴な生まれなのだろう。

もしかしたら、隠密用にと育てられた隠し種なのかもしれない。
いずれにせよ、貴族。

属国から思う様血税を貪つて、贅沢の限りを尽くしてきた、憎き
連中だ。

(草の根を嚙んで空腹をしのぐ生活や、血反吐を吐きながら修行する日々を、あたしは送ってきたんだ。それに比べりゃ、ルーデン人のお嬢様による王妃教育なんざ、わけないさ)

実際のところ、一通り教養や芸は身に付けてきたつもりだが、自分
はルーデン王について詳しくない。

彼の好みなどを聞き出すのは、有益であろう。

『さて、バルたんのミルクも完了し、ご機嫌もよく世界が平和です
ので、早速、選考会対策を始めたいと思います。過去情報によりま
すと、毎回選考会の最初の課題は、候補者による芸事の披露となっ
ているようですが』

と、エルマが、すいと立ち上がり、アナに向き直る。
上から下まで見下ろすと、軽く頷いた。

『アナ様は、舞踊の類がとても得意のようですね。しなやかな筋肉
をお持ちです。リズム感もおありのようです』

『……見ただけでわかるってのかい』

『はい』

どうしてそんなことがわかるのか、とは思いつつも、褒められて悪い気はしない。

下賤の民よと笑われた悔しさを原動力に身に付けたステップは、エスピアナ随一と自負している。

が、

『ただし、芸の神は細部に宿ると言います。完璧な表現を実現するため、体のバランスを少し矯正しましょう。まずは、心臓の位置を少し右にずらしていただけますか？』

『……はっ？』

後に続いたエルマの言葉に、思わずアナは硬直した。

心臓の、位置を、ずらす？

素の表情でぽかんとしていると、エルマはフォローするように言葉足を足した。

『あっ、もし難しいようなら、大腸のねじれを十三度ほど、反時計回りに解消していただくだけでも……』

『いやもうナニ言ってるの!?!』

思わず絶叫すると、エルマは眼鏡越しにもわかるほどぎょとんとする。

『なにを、と言われましても……。普通の舞踊指導ですが……』

それから彼女は、「さては流派の違いがありましたか。誤算です

ね……」と呟くと、腕をまくり、ぐるりと肩を回した。
窓から差し込む昼の陽光が、きらりと眼鏡を光らせる。
ついでにエルマは、そのほっそりとした掌を組み合わせ、軽く力を込めた。

「ぎゅ……っ、ぎゅぎゅぎゅッ！」

人体にあってはならないような音がした。

「な……っ」

「選考会まで、あと二日。あなた様には、絶対に卓越した芸を身に付け、私のそれを『普通』に貶めていただく必要がございます。……厳しく参りますよ、アナ様」

「ひっ……」

逞しさが売りのアナ。

どんなに厳しい修行でも、弱音一つ漏らさなかった彼女であったが、

「ぎゅッ！　ぎゅぎゅぎゅぎゅ……ッ！」

「た……っ、助けて、ロドリゴ様ああああ！」

この日、迎賓館の片隅で、そんな怪音と絶叫が響き渡った。

7. 「普通」の余興(2)

ルーデンではおよそ数十年ぶりとなる王妃選考会。

その初日は、冬ながら麗らかな日差しが降り注ぐ好天であった。

「これぞ満員御礼、つてね……」

観客席の一つに腰を下ろしたイレーネは、眩きながら周囲を見回す。

今彼女たちがいるのは、王宮の外れにある屋外演劇場だった。

大人数を受け入れられるよう設計されていたが、すぐ隣に設置された鐘楼の音あまりにうるさいため、常時は夜にしか使われない。だが、今回については収容人数のほうを優先したのだろう。

久々に昼時開放された演劇場に、人々はわくわくしながら詰めかけていた。

演劇場は正円形をしていて、中央の舞台を見下ろすように、すり鉢状に客席が設けられている。

舞台に近い方に座るのは、当然ながら候補者たちの親類や、各国要人。中ほどには物見高い貴族たち。

そして、だいぶ舞台から離れた場所ではあるが、外周には、市民や王城の使用人たちも参加を許されている。

イレーネは侍女としての業務の合間を縫い、なんとか席を確保したのであった。

「飲食物の売り子も立っているし、パンフレット販売や、賭けまで公認されているなんて……。開かれた王室、といえば聞こえはいい

けど、これでは単なる見世物じゃないの。陛下は、ご自身の王妃選考会を、なんだと思っているのかしら」

座った途端、方々から掛けられる売り子の声に、イレーネは眉を寄せる。

まったく、王城内とは思えぬ俗っぽさだ。

いや、以前のイレーネなら、間違いなく胸を躍らせて、パンフレットを読み込んで赤ペンで丸を付けたりしていただろう。

だが、親友がすっかり活躍してしまっただけだと思つと、呑気に勝ち馬予想などしてられない。

どうもエルマと出会ってからというもの、この手の心配事が増えた気がする。

隣席の客が手にしたパンフレットで、エルマの名前の上に「一番人気！」とコメントが入っているのに気付いて、イレーネはつい顔を顰めてしまった。

選考会では、観衆からの声援も票としてカウントすると聞く。

これまでの大活躍で、使用人たちの間はもちろん、城外でも人気を博しているエルマ。

彼らの応援が、エルマの立后を後押ししてしまったらどうなるか。王妃なんて、偏屈な上位貴族たちが、密室で上位貴族令嬢を指名してくれたら、その方がよかったのに。

「絶対、活躍なんかしないでよね、エルマ……」

「ああん、エルマエル様の大活躍が楽しみですわあん」

と、斜め後ろの席から楽しげな声がかぶさった。

ぱっと振り向いてみれば、そこにいたのは、うきうきとパンフレ

ツトを見つめるデボラである。

彼女は額にハチマキを締め、両手には「エルマエル様」とデコレーションされた団扇を掲げ持ち、両隣の人物まで巻き込んで垂れ幕を掲げさせるという、完全応援態勢であった。

「ちょ……っ！ なにやってるのよ!？」

「なにつて、もちろんエルマエル様の応援ですわ。はい、プラカード」

「いらんわ!！」

イレーネは即座に断ると、ぎっと相手を睨み付けた。

「ちょっとデボラ、あなた、本気でエルマを応援しようというの？」

「万が一あの子が、本当に立后してしまったらどうするのよ!！」
「それもまたよしですわ」

デボラはハチマキの角度を確かめながら、ふふんと言いつつ切った。

「わたくしは、エルマエル様が魔王だろうが聖女だろうが、変わらず忠誠を誓う用意がございますもの。ただか人間の王の妻に収まるくらい、なんだというの？ あなたはルーカス殿下に義理立てているようだけれど、エルマエル様のお心を振り向かせられぬ男など、しよせん気に掛ける価値もございませんわ」

エルマ第一主義を掲げる彼女は、揺るぎない。

イレーネは思わず圧倒され、視線をさまよわせた。

貴族と市民、外国人も入り混じった会場では、精鋭の騎士団が警護に当たる。

舞台から顔を背けるように、無表情で舞台袖に佇むルーカスの姿

を見つけ、イレエネは、悔しそうに眉を寄せた。

「だって……。こんなの、おかしいわよ」

ルーカスは、エルマが城に来たその時から一緒にいたのだ。

エルマを城に引き入れたのも、無双をやらかすたびに尻拭いに奔走したのも、無茶苦茶な王命を共にこなしたのも、すべて彼。

イレエネにとって、ルーカスはいつもエルマの傍にいてはいけない存在だった。

「エルマが大ボケをかまして、殿下と私でツツコンで……。それでようやくワンセットなのよ。傍に殿下がいないエルマなんて、リバ並みにおかしいでしょ。ありえないでしょ、不自然でしょ、ナシ寄りのナシなのよ！」

「わたくしはリバ許容の人間なので、その主張はわかりかねますわあ」

しれつと言い切るデボラに、二人の間の空気は一気に険悪なものになる。

突然高まる緊張感に、周囲の客はごくりと喉を鳴らした。

両者の主張を一番わかりかねているのは彼らだ。

硬直する周囲をよそに、デボラは悠然と、舞台の方を指差した。

「だって、ご覧になって。エルマエル様は、ルーカス殿下が不機嫌な様子に気付いても、まるで動じていなくてよ。それがつまり、エルマエル様のお心ということ。そうでしょう？」

指が指し示す先では、今、そろそろ候補者たちが舞台に昇りはじめている。

最後尾に立ったエルマは、当然袖に佇むルーカスに気付き、目礼を寄越したが、すげなく無視されていた。

エルマはしばし、ルーカスのことを見つめる。

が、やがて何ごともなかったかのように、抱っこしていたバルトに視線を落とすと、ぷにぷにと愛おしげに頬を突つきはじめた。やはり、感触が相当気に入ったらしい。

「ぷにぷにしてんじゃないわよ……！　というか、選考会の場で、堂々と赤ちゃん抱っこしてんじゃないわよ……！」

イレーネはつい天を仰いだ。

エルマときたら、女性の頂点を競うこの場にあっても、いつものメイド服にお団子眼鏡姿だ。

それ以上に、子連れという点で異色すぎである。

いや、だが逆に、子連れスタイルが原因で、選考会の候補からいち早く脱落するかもしれない。

イレーネはそう心を奮い立たせたが、しかしその希望は、次のデボラの言葉によって打ち砕かれた。

「ああ……っ、見える……っ。わたくしには見えますわ、今のエルマエル様から放たれる、まるで聖母のような慈愛の光が……っ！」

むしろ、抱っこしたバルトに向かって微笑む姿が、この上なく神々しく、目立って見えるのである。

「おい見ろよ。眼鏡越しですらわかる、あの母性の輝き……あれは彼女の子どもか……？」

「年の離れた弟らしいぜ。でももうそんなのどうでもいい……ひた

すら光景が尊い……」

「国母感、ある……」

「彼女の赤ちゃんに生まれただけの人生だった……」

優しく額を撫でる掌、時々いたずらっぽく頬を突く指先。

どこまでも優しく弧を描く口元は、見る者の心をたちまち解してしまっ。

十六歳独身でありながら、既に圧倒的母性を放つエルマに、観客たちは開会前から釘付けになった。

王妃というのが、「国の母」の地位を指すのであれば、もう彼女でいいのではないか。

そんな先走った雰囲気すら漂いかける。

イレーネはわなわなと震えた。

「あんつのばか……っ、半年でどこまで母性レベルを上げているのよ……っ」

「聖母レベルまでですわねえ……」

うつとりとしたデボラの相槌に、絶望しそうになる。

(やっぱりだめよ、こんなの……っ)

やはり、この状況にはルーカスがいないとダメなのだ。彼と一緒に突っ込んでくれないと、到底御しきれない。

エルマはさまざまいい速度で墓穴を掘り続けるだろうし、イレーネはストレスのゲージを振り切るだろう。

きつと選考会が終わる三日後には、エルマは見事王妃だ。

イレーネは恐ろしさに目を潤ませ、階下の二人を睨み付けた。エルマもルーカスも、今や互いに背を向け、完全に無視を決め込んでいるように見える。

(二人とも……っ、そんな意地を張っている場合じゃないでしょう！？)

歌に踊りに女の手習い。エルマと言えば余興の申し子だ。

そんな彼女が、活躍をせずに普通のレベルに徹することなど、到底不可能だろうに。

「んもう、見てられない……！」

「あつ、イレーネさん、どこへ……？」

イレーネは席を蹴るようにして立ち上がると、舞台袖へと走り出した。

「本日はお日柄もよろしく、大勢に集まってもらって僕は幸せ者です。どうもどうも。あー、それでは、寒い中長い前置きもなんなんので、選考会を始めます。初日の今日は、各自これぞという一芸を披露してもらおうと思います。やはり僕としては、妻となる女性には、人の心を打つ特技を持ってほしいのでー」

舞台では、フェリクスによる、やる気皆無の開会宣言を経て、いよいよ選考会が始まっていた。

五十人近く集まった候補者たちは、名前を呼ばれると同時に、一人ずつ袖から舞台上がってくる。

候補者紹介と一芸披露を、一度で済ませてしまおうということらしい。

上は小国の王女から、下は豪商の娘、いや、王宮侍女まで。

身分も国籍も異なる妙齡の美女たちが、次々と芸を披露してゆく様子は、圧巻の一言であった。

『あのお姫様の歌唱力、やべえな……歌でぐつときたなんて、初めてだ……。二つ前の伯爵令嬢のダンスなんて、もはや物語を感じるし、豪商の娘の金塊重さ当てはいかにも実利的だし……』

舞台袖で順番を待つアナは、すっかり圧倒されてしまっている。

いくら自負心が強いとはいえ、辺境の流刑地、その後は俗世と隔離された聖堂で育った彼女だ。

王都最高水準の芸術や、見たこともないスキルに、ただ驚いてしまったのであった。

王と貴族、平民代表から成る審査員が、高得点の札を掲げるたびに、彼女は唸り声を上げてそれに見入っていた。

が、その隣に座すエルマは、泰然の構えを揺るがせもしない。

代わりに、腕の中で「あー」と話すバルトのことを優しく揺ると、穏やかに話しかけた。

『ご心配には及びません。たしかに皆さま優れた芸をお持ちでいらつしゃいますが、アナ様の披露されるダンスは、世界一。ついでに、

バルたんの笑顔は宇宙一です』

『そんなこと言って……。それに、なんかやたら、ダンスの候補者が多いぞ。突風が巻き起こるような、見たこともないステップが混ざってるし……。まさかルーデンが、こんなダンス大国だったなんて』
『ああ、なぜだか一年ほど前からブームなのだそうです』

かつてクレメンスを捕縛した際、エルマが披露した錐もみ回転に触発され、また、ダンスが得意なカロリーネ伯爵嬢が奮起したことで、ルーデンの社交ダンスが革命期に差し掛かっていることを、本人は知らない。

困惑に眉を寄せるアナに、エルマは優しく笑いかけた。

『大丈夫。証拠に、ご覧ください。バルたんだって先ほどから、自信を持ちたまえアナスタシア。魂を突き動かす情動をただ溢れさせればいい。君の心臓の内側で光り輝く星だけを見つめるんだ』と

『』
『そいつそんなこと言ってるの!?!』

『と、今にも言い出しそうな、包容力溢れる眼差しで、アナ様を見つめているではありませんか』

『なんの励ましにもならねえ!』

あまりの超解釈に、アナは両手を髪に突っ込んだ。

荒れた口調は、不安の表れだ。

『なあ、あんた、ほんとに、あたしを勝たせるつもりはあるのかよ? 五十人のうち、少なくとも上位十人には残らなきゃいけないんだぞ?』

結局この二日間、エルマがアナに施した指導とは、柔軟体操や筋力トレーニング、瞑想にヨガに緊張緩和訓練、奇襲体験といったも

のだ。

前半はともかく、最後はまったくダンスに関係ない。

エルマの迫力に圧されて、つい従ってしまったが、自分はこの二日をフイにしまったのではないかと、焦りは募る。

「エルマ！」

切羽詰まった声が掛かったのは、そんな時だった。

人をかき分けるようにして、控えの舞台袖にやって来たのは、イレネであった。

「エルマ、今からでも考え直して。歌か踊りか手芸か手術か知らないけれど、あなたの披露する芸が、『普通』の域に収まるはずなんてないじゃない。あなたがぶつちぎりで、オール10の評価を叩き出す未来が目に見えるようだよ」

どうやら、最後の説得にやって来たらしい。

そこまで言うということは、さてはこのエルマなる少女は、そこそ有能な人物なのだろうか。

アナが無言でやり取りを見守っていると、エルマは淡々と答えた。

「ご心配には及びません。なにしろこの半年というものの育児漬けで、諸スキルがかなり鈍ってしまったんです。私は歌を披露するつもりですが、半年前より、レベルは格段に落ちているかと」

自信ありげな様子に、イレネもわずかに落ち着きを取り戻す。

そうか、エルマには半年のハンデがある。

それに、いくら卓越した歌とはいえ、王宮に近い人間は、エルマの評判を耳にしているのだから、そのレベルの高さは織り込み済み

のはずだ。

ハードルはかなり上がっているだろう。

「し……信じていいのね？」

「もちろん。私は、私の歌を必ず『普通』と思わせてみせます」

エルマがきつぱりと言い切ったその時、ちょうど彼女の名が呼ばれた。

出番だ。

相変わらずバルトを抱っこしたまま、静かに舞台へと向かうエルマを、イレーネは両手を組んで、そしてアナは腕を組んで見守った。

「エントリーナンバー22、エルマ。歌を歌います」

中央まで歩みを進めると、エルマは優雅に一礼し、告げる。

彼女の多才ぶりは有名だ。

観客はどよめき、期待に目を輝かせて舞台を見つめた。

かつてフレンツェルで披露したという、魔すら従える魅惑の歌声か。

それとも、まぐるを捌きくじらを操る彼女に相応しく、奇抜で豪快な詠唱か。

とんでもなく華々しいなにかを予想して、観客はわくわくと拳をにぎる。

しかし、

……ラララ……

深呼吸の後、彼らの耳に届いたのは、か細く繊細な、鼻歌のような声だった。

ねんねん　おやすみ　おやすみ　バルたん
あなたの　ねがおは　うちゅういち　だお

技巧も凝らさぬ、ただただ静かな歌。
そう　子守歌である。

「王妃選考会の場で子守歌というこのチョイス……！」
「しかも歌詞の文尾が気になる……？」

観客たちは戸惑った。

前評判から期待していた、激しく心を揺さぶる歌声ではまったく
ない。

だが、

「……あれ……？　なんだか……」
「すごく落ち着く……」
「なんだろう、……急に、眠く……」

不思議なことに、旋律を耳にした途端、観客たちは、心拍がすう
……と落ち着くような感覚を抱いた。

エルマの腕の中にいるバルトと同様、ゆっくりゆっくり、瞼が下
りてゆく。

いや、人間の観客だけではない。

「ピールルルルル……ル……」
「クルルルル……ル……」

頭上を舞っていた鳥や、客席の足元に蹲っていたペットまでもが、次々と落下し、あるいは寝息を立てはじめるではないか。

心なしか、周囲の樹々までもが枝を緩ませている。

見る間に、エルマを中心として、ぐったりと俯く集団ができあがっていた。

「たしかに歌としての技巧レベルは下がっているかもしれないけど……妙な方向にスキルアップしてるじゃないのよおおお！」

半年かけて磨き上げた子守歌は、もはや聖女が紡ぐ鎮魂歌レクイエムのごとき効力を放っている。

むしろ、芸術という枠を逸脱し、聖術の域に進化してしまった歌声を前に、イレーネは膝から崩れ落ちた。

8・「普通」の余興(3)

芸術という枠を逸脱し、聖術の域に進化してしまったエルマの歌声を前に、イレーネは膝から崩れ落ちた。

だがそこで、イレーネは、なぜ自分は起きたままなのだろうという疑問に気付く。

起きているのは、警備の騎士が数名と、貴族の何人か、そして、フェリクスにルーカス、イレーネやデボラ、アナといった面子だ。

「……………？　もしやいつの間にか、私に耐性が付いていたのかしら？」

「いえ。やらねばならないことがある、と強く気を引き締めている方には影響しないよう、周波数を調整しながら歌わせていただいているのです」

そこで、ちょうど歌い終えたエルマが、イレーネの呟きを舞台上から拾って答える。

眼鏡のブリッジをくいと押し上げた彼女は、すやすやと眠りはじめたバルトのことを、愛おしげに見下ろした。

「仕事を控えた周囲の大人が、全員眠ってしまったっては、バルたんの二十四時間見守り態勢に支障をきたしますので」

育児最適化されすぎである。

これまでどの候補者に対しても「5点」の札しか挙げてこなかったフェリクスも、その威力と都合のよさに、しみじみと頷いた。

「おー。これは兵器としての価値を感じる。10点」

「責任感の無い部下のあぶり出しに使えそうですね。10点」

隣で、上位貴族の男も頷きながら「10点」の札を挙げる。

市民代表の男は、

「おお……！ 不眠症にあれだけ悩まされていた妻も、いびきを掻いて寝ているぞ……！？」

感動したように「10点」の札を挙げかけたが、少し考えて、「9点」に変えた。

彼には、市民席からの拍手や喝采を点数化する役目がある。聴衆が寝こけて、拍手も喝采も聞こえない今、満点を掲げるのは躊躇われたのである。

それでも、計29点。

これまでで最高得点だ。

「ほらもう……！ 言わんこつちやないじゃない……！」

イレーネは青褪めたが、エルマはやはり余裕の構えを崩さなかった。

「大丈夫。この後、アナ様が圧倒的ダンスを披露して、私のこれなど、しょせん『普通』レベルであったと、皆さまに気付かせてくださいますから」

「そんなこと言って……！」

少なくともイレーネは、エルマがこれまでに披露してきたものよりも見事なダンスなど、見たことがない。

まして、辺境の属国育ちの娘が見せるステップなど、新鮮さの欠片もないだろう。

イレーネは青褪めたが、それはアナも同様で、青い顔に険しい表情を乗せてこちらを睨みつけてきた。

『あなた……あたしを勝たせるってのは、嘘だったのかい。満点近くを叩き出された後に、あたしにどうしろってんだ？』

『そう、満点近く。満点ではございません』

だが、それにもエルマは揺るがない。

むしろ、動揺するアナの手に、なぜかバルドの手を重ね、正面から顔を覗き込んだ。

『この二日、いえ、これまでの長い年月、あなた様はずっとご自分を鍛えてこられた。命を懸けるようにして長期間鍛錬を重ねてきた』

その事実には自信がおりでしょう？』

たしかに、養女時代は血反吐を吐きながら訓練に耐えてきたし、この二日は、「いきなり地上四階から突き飛ばされかけて急上昇した心拍を、三秒以内に元に戻す」といった、かなり生命危機に接したトレーニングもこなしてきた。

一拍置いて、ぎこちなく頷くアナに、エルマは優しく微笑んだ。

『ならば、大丈夫。あなた様には、バルたんの加護と、そして私の全力のサポートもございます。あとは、ご自分を信じてくださいませ』

ぱちん、と指を鳴らす。

するとたちまち、穏やかな眠りについていた観客たちが、一斉に

身を起こしはじめた。

「お……？ 俺、今、寝てた……？」

「なんだか、体がすぐくすつきりしてる……」

どうやら、強制的、かつ健康的に、観客たちの目を覚ましたようである。

短い昼寝を経て、集中力も万全。

先程よりも強い眼差しで、揃って舞台を見下ろす観客たちに、アナはたじろぐ。

だが、再び『さあ』と優しく促されたことで、彼女は覚悟を決めた。

（実際、この二日で心臓はかなり強化されたし……そもそも、こんなことで上がるようじゃ、流刑地育ちの看板が泣くぜ）

アナは舞台上がって、短く名乗る。いよいよ出番だ。

が、なぜかエルマも連れ立って登壇するのに気付いて、怪訝な顔つきになった。

『……なんで付いてくんの？』

『それはだって、私の「伴奏」が無いと、アナ様のダンスが成立しませんので』

『はっ？』

この時、アナはまだ、自分が接している少女の異常さを、完全に理解していなかったのだろう。

舞台上に控えるオーケストラを退け、エルマがなぜか鉄板を仕込んだ靴に履き替えた時点でもまだ、アナは、至って一般的なダンス

ステップを踏むつもりでいたのだから。

『おっと。アナ様がお履きの靴では、ステップの途中で飾りが割れてしまうかもしれません。サイズは合わせておきましたので、アナ様もどうぞ、こちらのダンスシューズにお召替えを』

『はっ!?!』

さらには、エルマは滑らかな動きで、アナのガラス細工の靴をもぎ取ってしまう。

代わりに履かされた靴の底には、エルマのものと同様鉄板が仕込まれており、床を踏むと「カチン！」と小気味よい音を立てた。

硬いのに、履き心地はどこまでも優しく　なぜか、アナの足に絶妙にフィットしている。

『いや、ちょ、待て、返せよ、その靴はロドリゴ様が　』

フィットしているが、お守りを取り上げられた気持ちになったアナは、慌てて手を伸ばした。

が、エルマはそれをすいと受け流し、おもむろに片手を宙に掲げる。

「ミュージック……スタート」

パチン！

エルマが指を鳴らすや、舞台上に取り付けられていた夜会用の松明が、一斉に炎を上げた！

ぼぼぼぼぼぼ……っ、　　ダン！

唸りのような着火音がぐるりと舞台を一周すると同時に、エルマが高らかに靴を踏み鳴らす。

それはまるで、鬨を告げる声のように、力強く辺りに響き渡った。

タタタン、タタタン、タタタタタタタタタタタタ！

鉄板を仕込んだ靴が、異様な速さでステップを刻む。

ただし、その上半身は微動だにせず抱っこを継続しており、彼女は単に音を刻んでいるだけだということがわかった。

まるで高まる鼓動のような、原始的な音。

だが、反響を伴い、波がうねるようにして広がってゆくその音は、聴衆の心を強制的に高揚させる。

誰ともなく、リズムに合わせて顎を上下に振りはじめた。

タンツ！ タ、タンツ！ タ、タタタタン、タタタタン、タ

タタタタタタタタタタ！

やがてスイングは、顎から肩に。肩から全身に。

観客席の全員が、まるで催眠にかかったように一斉に体を揺すりはじめる。

とうとう、熱のこもった手拍子まで沸き起こった。

『ちよ、え、な……っ』

ダンス用の赤いドレスをまとったアナは、舞台の真ん中で呆然と立ち尽くす。

観客全員が、まるで儀式のようにエキゾチックなリズムを刻むこの展開に、付いていけなかった。

が。

「はっ！」

鋭い叫び声とともに、なにかが閃く気配を感じ取る。

アナは考えるよりも先に、素早く身をよじってそれを躲した。

力……ッ！

前髪を切り取るような距離で、横の壁になにかが突き刺さる。

毒針……にしては随分太い。

壁に先端をめり込ませたものの正体を理解して、アナはぎょっと目を見開いた。

「め、綿棒!?!」

「バルたんのために世界樹から作った、安全性重視のソフトタッチ綿棒です」

「ソフトタッチな綿棒がなんで壁に突き刺さるんだよ!」

「そう……どんなに安全にデザインされた育児グッズでも、扱いにはよくよく気を付けねばなりませんよね」

噛み合わない答えを返しつつ、エルマは再び、バルトを抱っこしたまま投擲の構えを取った。

「さあ、参りますよ、アナ様」

「は!?!」

もう、なにから突っ込んでよいのかわからない。

わからないまま、アナは、次々に飛んでくる凶器を躲しつつける

羽目になった。

タタタン、タタタン、タタタタタタタタタタタタ！
ヒュッ！ ヒュッ！ ヒュヒュヒュヒュヒュッヒュ！

エルマが刻むリズムに合わせ、綿棒は右へ、あるいは左へ。

アナは全身の集中力を極限まで高めて、ぎりぎりのところで避けつづける。

結果として、激しく首を振り、ときに華麗なターンを決めていることに、自分では気づいていなかった。

「お、おい、見ろよ……なんて機敏な動きなんだ……」

「ほかの踊り手とは段違いの、鬼気迫った迫力を感じるわね。靴が鳴らす音も、切羽詰まったダイナミックさがあるわ……！」

「彼女のステップには、はとほし進るような生命の輝きが宿っている……！」

無心にリズムを刻んでいた観客たちも、アナの圧倒的なダンスに、思わず目を奪われる。

そこには、芸の域に留まらない、命が懸かったような切実な美があった。

大きく振り上げた足、ぴんと伸ばされた腕、汗の滴を飛ばしながら振り向く顔。

まるで、狩りの最中にある獣のような、緊張に満ちたしなやかさ。

観客たちは、ほう……と感嘆の溜息を漏らすと、ついで、アナの動きに引きずられるようにして、再び体を揺らしはじめた。

タタタン、タタタン、タタタタタタタタタタタタ！

揺れる。

揺らす。

この、鼓動のような、原始的なリズムに合わせて。

ヒュッ！ ヒュッ！ ヒュヒュヒュヒュッヒュ！

舞い上がるドレスの裾は、まるでサバナに飛び散る赤い血のよう。

遠いどこかの大地が、**ごっ**……と唸りを上げる。

一斉に土を踏み鳴らす動物たちの群れ。躍動する生命。

そう 大地の鼓動。

一気に駆け上がる心臓の音 それが一際大きく脈打った瞬間、誰もが、赤茶色の大地が噴火する様を思い浮かべた。

……**ダンッ**！

身体を突き上げるような音とともに、最後の一投を躲したアナが、宙でポーズを決める。

観客たちもまた、一糸乱れぬ動きで、全員が両手を天に向かって突き出していた。

し……ん。

一瞬、辺りには針の落ちる音さえ聞こえそうな沈黙が満ちる。

「あうー」

それを、愛らしい赤子の声が破った。

途端に、止まっていたかのような時間が流れ出す。

アナは呆然と舞台に座り込み、観客たちは我に返ると、ややあつてから、一斉に力強い拍手を始めた。

「素晴らしい……！」

「舞台と観客が一体となった、なんて素晴らしいダンスだ！」

「ブラボー！ ブラボー！」

まさに、万雷。

市民代表が、頬を紅潮させて高らかに「10点」の札を突き出す。同時に、貴族代表も興奮の表情で、またフェリクスも愉快そうに、それぞれ「10点」の札を掲げた。

初めての、満点。

割れんばかりの拍手と賛辞を浴びたアナは、ぎこちなく、舞台端に佇むエルマを見やった。

相変わらず優しく赤子を抱っこした彼女は、視線に気付くと、ふと顔を上げる。

それから、悪戯っぽく笑みを浮かべて小首を傾げた。

「ほら。アナ様のダンスに比べれば、私の歌なんて、『普通』でしかなかったでしょう？」

慈愛深く　そして、大層得意げな表情であった。

8・「普通」の余興(3)(後書き)

次話の幕間、短いのでこのあと連続で投稿させていただきます。

9・灰かぶり姫

「ええと、……二枚目は、きつとこれかしら」

ハイデマリーは白い指で顎をとんとんと叩き、それから一枚の絵を摘まみ上げた。

描かれているのは、鉄の靴を履かされ、必死の形相で踊り狂っている女性だ。

周囲には炎が燃え盛り、いかにもおどろおどろしい雰囲気演出している。

それは、灰かぶりを虐め抜いた継母が、仕返しに焼けた鉄の靴を履かされ、炎に巻かれながら、踊るようにしてのたうち回るといふ、終盤的一幕である。

が、ハイデマリーの解釈は違っていた。

「きつと、灰かぶりの修行回だわ」

満足げに頷く。

くぐり抜けてきた修羅場の数が違う彼女にとって、これしきのことは、修行風景にしか映らなかつたようである。

「高みを目指すには、やはり自分自身の苛烈な努力なしにはありえないもの。たぶん、こつという修行パートがしばらく続くのね?」

ついでに彼女は、気付かれにくいのだが、隠れスポ根タイプでもあった。

「……いや、マリー。言いにくいが、それは恐らく」
「ねえ、そうでしょう、ギル？」

おずおずと訂正を試みたギルベルトだったが、目を輝かせる妻の愛らしさを前に、良識はあっさり膝を突いた。

「……まあ、そうかもしれない」

考えてみれば、物語とは伝聞と解釈の集合体であるので、そういう受け止め方があってもいいだろう。

絵の女性は「灰かぶり姫」と明らかに顔立ちが異なるが いやいや、誤差の範疇だ。十分な描き分けができない画家のほうが悪い。

勇者らしくもなく、そう責任転嫁をすると、絵の中の女性に、一瞬ぎろつと睨まれたような心地を覚える。

だが、彼は視線を逸らすことでそれから逃げた。

「ほら、やっぱり！ だとしたら、まだ修行場面が続くでしょうか……」

生ぬるい全肯定を素直に受け入れたハイデマリーは、うきうきと物語の続きを探し出す。

白魚のような指が、やがてぴたりと一枚を指し示した。

「次は、この辺りかしら？」

そこに描かれていたのは、全身を黒く汚しながら、必死に豆を掻き集める少女の姿であった。

10・「普通」の慈善活動(1)

「はい。それじゃ、今日の会場は、こちらです」

フェリクスの呑気な声を合図に、続々と馬車を降りてきた令嬢たちは、突き刺すような寒さ、そして目の前の光景に顔を強張らせた。

選考会、二日目の朝。

馬車に数時間揺られてやって来たその場所は、ルーデン北部の、辺境の村。その中でもさらに外れに位置する、養護院であった。

「なんですの、ここ……」

「こんな粗末な建物、見たことはありませんわ……」

「ひどい臭い……」

今にも落ちそうな藁ぶきの屋根。腐った柱、穴の開いた壁。

小さい窓はガラスの代わりに布で覆われ、防ぎようのない臭気が、内側から周囲へと立ち込める。

箱入りの貴族令嬢が大半を占める候補者たちは、初めて目にする劣悪な環境に、それだけで顔色を悪くしていた。

「王妃ともなるとさー、城の奥で毎日お茶だけ飲んでいればいい、つてもんでもないじゃない？ 醜い現実を、直視するだけでなく、対処しなくてはならない。そういうわけで、今日は、みんながどれくらいその覚悟があるかを、見極めたいと思いまーす」

間延びした声で告げられた内容を、あえて訳すならこうだ。

醜い現実に対処せよ　つまり、この養護院の者たちに、しかるべき対応を取れ。

「直視するだけでなく」とわざわざ言ったということは、単に見守るだとか、温かく励ましの言葉を掛ける、といった程度の対応は求められていないのだろう。

たとえば、この汚れ切った病人の看病をしたり、虫の這う養護院の修繕を図ったり。そうした、現実的で具体的な行動を、フェリクスは求めているのだ。

ここまでに残った候補者は、既にたったの十人。どれも皆、そうした意図を理解できる程度には優秀だ。そしてそれゆえに、己に強いられようとしている現実を前に、青褪めているのだった。

「陛下もなかなかえぐいお題を出すわね。ごもつともではあるけれど、貴族の娘には、この臭いだけでもうキツイわよ。実際に住んでいる方々には悪いけど……本当に、耐えがたい臭気だと思わない？」

今回は観客としてではなく、王宮からの侍女の一人として付き添ってきたイレエネは、同じく横に控えるデボラに、こそこそと囁く。

だが、

「え？　エルマエル様が同一視界内にいらっしやるというだけで、世界は光り輝き、芳しく香りますけどなにか」

「あなた脳内補完力高すぎでしょ！？」

あっさりと裏切られ、思わず突っ込む羽目になった。

だが、寒気もなんのその、豊満な胸をぶるんと張ったデボラは、

我が意を得たり、とばかりに頷いた。

「要は、陛下の仰るとおり、覚悟の問題ですね。心頭滅却すれば火もまたエルマ。意志を持って臨めば、これしきの悪環境は、ノープロブレムということですよ。見たところ、それくらいの気骨のある女性は、何人がいてよ」

そんなまさか、と思うが、デボラが得意げに指差す先を辿れば、たしかに、背をしゃんと伸ばして養護院を見つめる候補者たちが数名いる。

一人はもちろん、監獄育ちのエルマ。

ほかには、多少下町にも免疫のありそうな商家の娘と、意外なところでは、伯爵令嬢のカロリーネ。

かつて、舞踏会でエルマにめつためたに打ち負かされたダンス自慢の少女だ。

彼女は相変わらずあまりよい評判は聞かないが、とにかく「エルマには負けたくない」との思いで、この場に踏みとどまっているようだった。

その根性は褒められてしかるべきだろう。

(あと、もう一人……)

そしてイレーネは、もう一人、目の前の光景に動揺を示さぬ候補者を発見した。

アナスタシア・ドン・ロドリゴだ。

昨日の一次戦を満点で突破した彼女は、どこか超然とした様子でその場に立っていた。

吹きすさぶ寒風に首を竦めることもなく、涼しさを味わうかのようには佇んでいる。

さては、かなりの精神力の持ち主なのか。

イレーネは怪訝な顔でアナを見つめたが、実際のところ、彼女の精神状態は「超然」とは少々異なるものだった。

（朝が……来た……）

アナは、自分が今日もまた凄まじい修行を乗り越え、こうして朝を迎えられたことに、しみじみとした感慨を覚えていた。

（死ぬかと思った……。つーか、三回くらい死んだと思った……）

思い返せば昨日の昼過ぎ。無理やり「神のダンス」と周囲から絶賛された　を踊らされたアナは、当然その後エルマに猛然と抗議した。

ところが、当のエルマはどこ吹く風。

というより、純粹にきよとんとして「なぜ責められるのかわからない」と困惑の態だ。

綿棒を壁にめり込む勢いで投擲することも、人体の限界を超えて人を踊らせることも、彼女からすれば「至って普通」と言わんばかりの態度であった。

頭に来たアナは、語彙の限りにエルマを罵った。

が、どんなに口汚く罵倒しようと、エルマの表情は小麦一粒分も揺るがない。

それどころか、その暴言を糸口に、慣用句や外国語、歴史を仕込もうとする勤勉さだ。

抵抗すると、脳の働きを活性化するとかいう怪しげな薬まで注射しようとしてきた。

羽交い絞めにされていよいよ追い詰められたアナは、そこで叫んでしまったのだ。

『てめえ、ふざけんな！　そ、そんな詰め込み教育、上手くいくもんか！　そんな教育されるんじゃ、弟の未来も真っ暗だな！』

バルドの話題に触れないほうがいいというのは、本能で理解していたはずだった。

だがその時、まさに本能こそが、そこを刺激して難を逃れよと命じてきたのだ。

そして、その効果は観面^{てきめん}だった。

『バルたんの未来が……真っ暗……？』

エルマはさあつと顔色を失い、唇を震わせたのである。

彼女は見ていて哀れになるくらいの勢いでその場に崩れ落ち、絶えるようにアナを仰ぎ見た。

『お教えてください、アナ様。私めの教育方針の、どのあたりがどうまずいのでしょうか。私……っ、私はどうすれば……っ』

『ま……、まあ落ち着け』

あまりの豹変ぶりに、ドン引きする。

しかし同時に、アナは素早く打算を巡らせた。

これはチャンスだ。

今ここで、自分のほうが優位にあると相手に信じ込ませれば、この、頭のおかしい「修行」とやらから解放されるだろう。

いや、そうでなければ自分の身が持たない。

そこでアナは、いかにも平然を装って、自信たっぷりに言ってみせたのである。

『とにかく第一に重要なのは、相手の自主性を重んじることだ。相手の嫌がることは強要しない。これが基本。わかるか？』

『はい……っ』

自信ありげな表情を作る。

眉の角度、視線の位置、ごく微細な眼輪筋の動きまで意識して。

エルマに仕込まれた微表情のスキルを、こんなにも完璧に実践できたのはこれが初めてだ。

生命の危機に瀕して、幸か不幸か、己の実力がどんどん上がっているのを感じる。

ただそこで、アナは完全な優位を求めるあまり、余計な一言を加えてしまった。

『まあ、あたしの言うことを聞いてりゃ、大丈夫だ。なにせ村にいたときは、六人姉弟の一番上だったんだからね。どの年齢のガキでも、コツはわかってる。一から教えてやるさ』

『アナ様……っ！』

エルマは歓喜に身を震わせ　そこで一気に雲行きが怪しくなった。

『本当に、全面的に教えを乞うてよいのですね！？』

『ああ。女に二言はないさ』

『精神的教育方針についてだけでなく、育児シーンで発生する具体

的な手法のあれこれも……!?!?」

「ああ。おむつ替えも寝かしつけも、ベビーサインもなんでもござれだ」

「アナ様……! では早速、おむつ替え百本ノックをお願い申し上げます!」

「ああ。……ああ?」

耳慣れぬ単語に、アナは思わず眉を寄せた。

百本ノック? おむつ替えで?

だが、彼女が困惑する間にも、エルマはささつとベビーベッド周辺を整え、しゅぱつとバルドのおむつを替えてみせた。

巻き起こる風が心地よいのか、赤子が眠ったまま、むふうと笑う。

「このように、私のおむつ替えスキルはまだまだで……」

「いやどこが!? 残像しか見えなかつたけど!?!?」

「いえ、これではまだ、バルたんにおむつを替えたことを気付かれちゃうのですよね。本当はもつと、この愛らしい寝顔を微動だにさせぬくらい、さりげなく替えたいのですが……」

どうやら、エルマの目標は、一般よりはるか高みにあるらしい。

言葉を失うアナに、エルマはおむつをぐいと突きつけ迫った。

「さあ、お願いです、アナ様。私めに稽古を付けてくださいませ。

バルたんのためなら、たとえこの筋肉が弾け、皮膚が焼け切れても悔いはありませんから」

「おむつ替えでどんな修行を想定してんの!?!?」

そうして、実際にはアナの筋肉が弾け、皮膚が焼け切れそうにな

るほどに、おむつ替え修行に巻き込まれたのである。

(途中から、「あらゆるコンディションの便に対応できねば」とか言い出して、あっちこっち突撃するし、かと思えば、高吸水性高分子^{ポリマ}の開発を材料収集から始めて徹夜するし、寝かしつけにもぼつちり付き合わされるし……)

しかも、一応王妃教育の時間であるという認識は忘れていないらしく、時折思い出したように、アナにあらゆる知識を植え込んでゆくのだ。

『ちよ……待って、もうやめてくれ……。王妃の選考会に絶対必要な知識だろ、これ……っ』

『またまた。ルーデンは大陸最大の国、つまりその王妃は大陸一の女性。その女性に、把握していない領域など、あつていいはずがございませぬ』

アナが悲鳴を上げてても、エルマはにこやかに修行を進めるばかり。とうとう『もう無理！ もう限界！』と逃げ出そうとすると、エルマは不思議そうに首を傾げ、こう告げるのだった。

『え……？ この程度で……？ そんなまさか。アナ様は、エスピアナの命運を背負って、陛下の暗殺を目論んでいたというのに、この程度で音を上げる、それくらいの覚悟と準備しかなさっていませんか？』

『……………っ』

嫌味な口調だったら、いつそどんなにかよかつただろう。

心底怪訝そうな、むしろ動揺を滲ませた呟きは、アナの自尊心をこりっと抉っていった。

（あたしは、ロドリゴ様が育てた一番優秀な養女、最高の刺客だったの……！）

侯爵への恩に報いるため、彼女だって血を吐くような努力を重ねてここまで来たのだ。

それを馬鹿にするのは、アナへの侮辱というだけでなく、彼女を育てたロドリゴ聖侯爵への愚弄にほかならない。

侯爵の慈愛深さや、そんな彼女に対する自分の忠誠心まで、一緒に否定されたように思えて、アナは気付けば怒鳴り返していた。

『あゝああああん！？ 全然想定内だし。ロドリゴ様の屋敷で受けた修行のほうが、全っ然厳しかったし。今も、ほんとは超余裕だし！』

『ああ、よかった。さすがはアナ様。生まれ持った、そして鍛え抜かれた根性が段違いですね。では安心して、少しペースアップいたしましょう』

『え』

カッとなって言った。

今では後悔している。

結局それが引き金となり、アナはそこからさらに三倍速で、すさまじいオムツ開発と、ついでに王妃教育に巻き込まれることになったのである。

あの悪夢のような時間に比べれば、目の前の養護院など可愛いものだ。

悪臭も、肌を刺す冷気も、ぼんやりした五感を現実に取り戻すには、ちょうどいい。

無我の境地に佇む自分を、騎士の一人が怪訝そうに見てきたが、それを前に可憐な少女を演じるのも、もはや難しかった。

というか、大事な任務のはずなのに、今この選考会自体が、激しくどうでもいい。

「はい、それじゃあ、審査開始ー」

だからアナは、フェリクスはその言葉を聞いたとき、のろのろと視線を動かして、視界に映ったものに対して、ただ本能的に動きを開始したのであった。

10・「普通」の慈善活動(1)(後書き)

先ほど、シャバ難に関するお得すぎる情報を、活動報告にて告知させていただきました。
ぜひお目通しくださいませー！

11・「普通」の慈善活動(2)

(二日目にして、実質ここが最終閉門のようなものだな。どの令嬢も真っ青になって突っ立っている)

護衛騎士として、ともに養護院にやってきたルーカスは、少し離れた場所からじっと選考会の様子を見守っていた。

大陸中から選り抜かれた女性たち。

中でも抜きん出た芸と度胸を誇る十名の候補者たちのほとんどが、今、呆然と立ち尽くすのが見えた。

それはそうだろう。

ここにいる多くは、上流階級で大切に育てられてきた箱入り娘。貧困を書物で知ることがあっても、心を挫くような寒さや、膿を流して呻く病人とは無縁だったはずだから。

だが、例外もいるにはいる。

この中では身分の低い商家の娘や、辺境国育ちの娘、伯爵家の力ロリーネと　そして、エルマだ。

(義兄上は、本気でエルマを望んでいるというのか……?)

芸の披露に、養護院の訪問。

どちらも、エルマに有利な課題という気もする。

あの異母兄が、本気で異性を求める姿というのは腑に落ちなかったが、有益な駒として気に入る、くらいのことは大いにあり得た。

(そしてエルマも、満更ではない、と……?)

昨日も案の定大活躍をしてみせたエルマを思い出し、ルーカスはつい眉を寄せかけた。

あまりに陰気な発想に、我ながら嫌気が差して表情を戻したが、それでも溜息は漏らしてしまう。

なかなか真意を読み取らせない、不思議な少女。それが彼女の魅力であり、自分が惹かれた部分であったはずだ。

だが　少々疲れた、と彼は思った。

エルマがシャバを去ってから半年。

嵐のような少女を失ったルーカスたちに残されたのは、うんざりするくらい平和な日々だった。

なにもかもが、想定内の日々。

かつて自分は、こうした日々を謳歌していたはずだ。

王族であるにも関わらず、騎士団に入り、平民の友と戦場や下町を走り抜け、艶やかに微笑む女性を渡り歩く。

ただ同じ生活が戻ってきただけのはずなのに、味気ない。

女を口説く気にもなれず、結局行儀よく帰宅しては、柄にもなく監獄へ手紙をしたためた。

文通の企みは、過保護な家族によってことごとく退けられたが、そんな状況もかえって張り合いがある。

闘志を燃やしたおかげで、エルマのいない日々もそれなりに楽しめた。

しかし、そのささやかな幸福は、エルマから初めて返信が来たときに、むしろ徹底的に蹂躪されることになる。

なぜなら、「おまえのいない生活は寂しい」という、かなりストリートな文言への返信は、

承知しました。

その一言きりだったのだから。

挙げ句、その後には延々と弟とのどうでもいい日常の描写が続き、その熱量の差は、ルーカスを打ちのめした。

ただ視線を合わせれば女性が寄って来ていたルーカス。

思えば、真剣に己の感情に向き合うのも、それを伝えようと言葉を選ぶのも、初めてのことだった。

だというのに、結果はそれ。

久々に再会できたと思えば、相手はこちらに見向きもせず弟のことばかり。

しかも、弟のために、フェリクスに身を投げ出す始末。

極めつけに、必死で制止するルーカスに対しては、「欲はないですよね」。

(ない、わけ、ない、だろ！)

あの瞬間、ルーカスは、己の好意がまったく伝わっていないことに絶望した。

いや、そんな鈍さや、突拍子の無さも彼女の魅力ではあったし、これまではそこに闘志を燃やしていた節もあったのだが、さすがに、虚しくなったのだ。

これ以上、どうしろと、と。

(昨日の様子を見る限りでは、ぎりぎりのところで優勝を避けるつもりはあるようだが……どうなることやらな)

これまでルーカスは、エルマの活躍が彼女の危機に繋がるときは、必死でそれを妨害してきた。

声も荒げたし、彼女に迫りもした。

だが今回、危機に瀕するのは、彼女の心だけ。

べつに彼女が、フェリクスと結ばれて問題ないと考えているようなら、ルーカスがすべきは静観することだけだ。

(一応、ほかの候補者を立てようとは目論んでいるようだが……)

果たして、それは上手くゆくのか、ゆかぬのか。

(一言でも助けを求められれば、必ず手を差し出すのが騎士というものだが　肝心の本人が助けを求めないでいるんだ。もう、知るものか)

人はそれを、やさぐれる、という。

なまじ色事に長けていたばかりに、初めての感情を持て余しつつ、ルーカスは二日目の今日も、むすっとした表情で立ち尽くしていたのであった。

(ああもつ。ああもつ、ああもつ、あああああもつ!)

侍女としての所定の位置から、エルマとルーカスを見ていたイレーネは、無言で両手を髪に突っ込み、わなないた。

（殿下、なに無視を決め込んだんじゃってるんです！？ エルマも、全然ノープロブレムって顔で、バルドくんの頬を突いてるんじゃないっ！）

心境はまるで、好き合っている幼馴染同士を見守る母親だ。

ルーカスもそろそろ冷静になってくれるかと思っていたのに、すっかり拗ねてしまったのか、この事態を前にだんまりを決め込んでいる。

いや、イレーネの感覚としては、そんな彼を責めるのは難しい。あんな露骨なアプローチを躲され続けたら、さすがに心も折れようものだ。

（こらエルマ！ 今も、陛下の課題に、真っ先に応えに行こうとするんじゃないわよぉ！）

視線の先では、課題を告げられたエルマが、バルドをデボラに託し、躊躇いなく養護院へと足を向けている。

ほかの候補者たちは尻込みする者が大半なので、これは大きく一歩リードだ。

だが、それを防ぐように、肝の据わった二名の候補者が、後から走ってエルマを追い越す。

商家の娘に、カロリーネ。

どちらも玄関で身支度を済ませ、手袋まで持ち出したカロリーネは、やけに準備がいい、果敢に養護院の中へと入っていったが、

「……………！」
「う……………っ」

二人が平静を保てたのは、そこまでだった。
なぜなら、建物の中の光景は、彼女たちの想像をあまりに超えるものだったからだ。

全身を爛れさせ、膿を噴き出した老人。

やせ細っているのに、奇妙に腹だけ膨れた子ども。

部屋のうちこちで吐瀉物と排泄物が広がり、その隙間に、病人たちが身を丸めて横たわっている。

冷え切った空気の中さえ、むわりと充満する臭気に、二人は無意識に後ずさった。

「ここは、元は流刑地に使用されていた村でねえ」

逃げを打つ二人を封じるように、玄関口からのんびりとした口調のフェリクスが顔を出す。

彼は、強い香りのハーブを鼻に当てながら、淡々と説明を加えた。

「僕が即位してから、貧困と医療はかなり手厚く対策したつもりだけど、聖医導師も、食糧も、この場所に差し向けるのは最後になつてしまった。困り果てた村民が、村の延命を図るため、尻尾を切り落とすようにして病人を集めたのが、ここだよ。まあでも、彼らの症状の原因は、寒さと飢え、そして不衛生さだ。性質たちの悪い伝染病ではないから、そこは安心していい」

そこで、狐のような瞳が、細く笑みを描いた。

「ただ、君たちにはこの現状を解決してほしいと思ってる。……さあ、どうしよつか？」

二人は固唾を呑んだ。

取るべき模範的な行動はわかっている。

実際に、看病をすればよいのだ。

だが 自らの手で？

汚物に、あるいは膿にまみれた病人を？

ドレスの裾に、吐瀉物としゃぶつが付くのすら躊躇ちゆうちゆうわれる。そんな彼女たちに、具体的に取れる行動などあるわけがないのだった。

「ひ、ひとまず、換気だけして……追って、十分な道具と資金を用意したうえで」

「お取込み中失礼いたしますが、今、部屋の西側にいらっしやる方々は、少し移動願えますか」

もごもご言いながら撤退しようとしたカロリーネたちを、涼やかな声が遮る。

遅れて建物に踏み入ってきた、エルマであった。

彼女は、清潔なエプロンで手を覆い、そつと病人を抱え上げると、器用に部屋の東側へと移動させた。

「ちょ……っ、ちょっとあなた……！ エプロンに、その、かなり『汚れ』が付いていてよ！」

「よく平気な顔をしてられるわね……っ」

躊躇ちゆうちゆういもなく汚物の中に腕を突っ込むエルマに、ほかの候補者た

ちが絶叫する。

が、エルマは不思議そうに首を傾げるだけだった。

「そうですね。それがなにか？」

「なにかつて……っ。あなた、嫌ではないの!？」

「嫌か好きかという問題ではございません。ただただ、大切な観察対象です」

「はっ!？」

戸惑う二人に、エルマは眼鏡越しでもそれとわかるドヤ顔で言い切った。

「吐瀉物と排泄物。育児ライフとは、もっぱらこれらとの戦いですので」

「……………!？」

なにを言っているのかわからない。

固まる二人の前で、エルマは床の片隅に散らばるそれを観察し、重々しく頷いた。

「状態はCマイナスですが、量はよし。頑張りましたね」
「……………!？」

本当に、なにを言っているのかわからない。

たっぷり溜まった汚物に、なぜか微笑ましい表情で頷くエルマを見て、候補者たちは無意識に一步後ろに退いた。

手ずから運ばれた病人たちも、信じられないものを前にしたような目つきで、じっとエルマを見つめている。

エルマは、どこからか取り出した石鹼と消毒液で丁寧に手を洗う

と、無人となった部屋の片側、その窓付近に立った。

「それでは、まず部屋のこちら側の洗浄を開始いたします」

「洗浄……？」

周囲の人間が首を傾げる。

洗浄、という割に、モップの類はもちろん、水すら用意していなかったからだ。

だがエルマは、ただ静かに「窓の向こうにいらっしやる方々は、ご移動願えますか」と声を掛ける。

なぜか、大きく口を開けた袋を窓に連結させると、部屋の中央まで戻り、こきっ、こきっと首を鳴らした。

そして、

すっ

まるでダンスを始めるかのように両手を高らかに掲げ、片足を後ろに引くと、

「はっ！」

凄まじい勢いで、回転しはじめたのである！

「き、きゃあああああ！」

「うわあああああああ！」

巻き起こる風の激しさに、病人も含めた周囲が悲鳴を上げる。しかし、その勢いとは裏腹に、風は彼らの方にはやって来ず、た

だ窓の方へ、窓の方へと吹き込んでいた。

それに気付いた人々は、閉じていた瞼を恐る恐る持ち上げる。そうして、息を呑んだ。

かつて、天才バイオリニスト・ヨーランをして、「物理的に神の息吹を感じさせる」と言わしめた、錐もみ回転。

それが、今部屋の片側にだけ風を巻き起こして、床に散らばるあらゆるものを吹き飛ばしている。

たとえば、吐瀉物。

たとえば、排泄物。

いや、その凄まじい遠心力は、ほこりやバクテリアですら逃しはしない。

窓に向かつて、真つすぐにごみの虹がかかるのを、人々は奇跡に接したような表情で見守った。

「しかも、風で四方八方に撒き散らすのではなく、窓の外にだけ向けて、ごみを吹き飛ばす……まさに、ダイナミック高圧洗浄！さすがですわ、エルマエル様！」

「あんの……っ、おばか……！」

すっかり目にハートマークを浮かべたデボラは、戸口に齧りつきながら歓喜の声を上げる。

一方のイレーネは、その傍らで、わなわなと両手を震わせていた。

(なに、スイッチ入っちゃってるのよおおおお……っ！)

数日とはいえ、最近のエルマを見ていた自分にはわかる。

あれは、育児モードに突入した状態だ。

つまり、理性も常識もかなぐり捨てて、全力投球している状態で

ある。

叶うことなら、その胸倉を掴み上げて制止にかかりたかったが、
錐もみエルマに近付けるだけのスキルを、残念ながら彼女は持ち合
わせていなかった。

三分ほど経つただろうか。

「ごおおおおお！」と、人ならざる回転音を紡いでいたエルマは、
ふう、と息を吐いて停止する。

後に現れたのは、髪の毛一筋すら見当たらず、滑らかな石床であ
った。

「この建物が新築だった時ですら、床はこつも滑らかではなかった
が……」

肌を爛れさせていた老人が呆然と呟く。

今や、暴風に表面を削られた石は、大理石のように光り輝いてい
た。

彼自身の肌からも、全身を覆っていた膿が、きれいに取り除かれ
ている。

「ちよ、ちよつと、エルマ」

「おつと、清掃にばかりかまけているわけにもいきませんね」

今こそとばかりに、イレーネが声を掛けるが、育児モードをオン
にしたエルマは、既にその場所にいなかった。いつの間にか、勝手
口へと移動していたのである。

「あ、あのう、どこへ……？」

「外で、麦と野菜を確保して参ります」

そして彼女は、おずおず問いかける病人たちを、淡々と困惑の渦へと叩き落とした。

麦と野菜。

たしかに養護院の裏手には、かつて畑であった空き地があったが、もはやそこに生えるのは雑草のみ。

しかも今は冬だ。

「はは……こんな養護院の畑が、ちゃんとしているとでも思ったのかねえ、あのお嬢ちゃんは」

「野菜は一年中穫れる、と思いこむような、いいとこ育ちの嬢ちゃんなんだろうよ」

取り残された病人たちは、苦笑しつつそんな囁きを交わしていたが、イレーネにはわかった。

これは、例のエルマ無双のやつの前振りだ、と。

（私にはわかる……！ あの子は、さらっと「裏庭になかったので、半マイル先の村まで行って穫ってきました」とか言っちゃう子だわ……！ それも、十分以内とかで！）

きつと、裏庭にろくな作物がないと理解したエルマは、「無いならば、有るまで探そう、麦と野菜」とばかりに、今にも村に向かって爆走し

「ただいま戻りました」

「はっや！」

その予想すら裏切って、籠いっぱい野菜と麦を抱えて戻ってき

たエルマに、イレーネ以下周囲は絶叫した。

「え！？ え……っ！？ いったいその野菜、どうやって……」

「裏庭に野菜が育っていなかったなので、歌声で成長を促進して収穫してまいりました」

（「無いならば、異常育成そだててしまえ、麦と野菜」の精神だった！
—————！）

自分の想像以上に、エルマが「育成」方向に振り切っている事実
に、イレーネは青褪めた。

「いや、歌でつて、え……、歌で……？」

「はい。歌声による育成促進は、オーガニック栽培の一般的ふつうな手法
です。ああ、無毒のものだけを対象に育成させましたので、今
大きく育っているものは、野菜であれ花であれ、召し上がって大丈
夫ですよ」

「無毒のものだけを対象に、つて、え……！？ どうやって……！
？」

「周波数を調整しただけです」

愕然とする病人たちへの説明を、エルマはあっさりと強制終了さ
せてしまう。

次に彼女は、麦と野菜を抱えたまま、台所 とは名ばかりの、
壁で遮られた竈の跡地に向かった。

そして、

「お待たせいたしました」

「……………！？」

瞬きをした次の瞬間、くらいの体感時間で、ほかほかと湯気を立てる鍋を手に再登場した。

「全然待たされてませんけど!？」

病人たちの叫びが美しく唱和する。

異常事態の連続がそうさせるのか、それとも、鍋から漂う芳香と温もりがそうさせるのか、土気色だった彼らの顔には、徐々に血の気が滲みだしていた。

「ああん、エルマエル様ったら、素早すぎでいらっしやる！ 血沸き肉躍り肉汁飛ぶ、大胆な調理シーンを、わたくし、この目で拝見しようございましたわ……！」

「申し訳ございません、デボラ様。たしかに、豪快に料理せよというのが【暴食】の父の教えだったので、バルさんの離乳食づくりが始まってからというもの、『うまい、はやい、静か』を調理のモットーとしております」

それに、まだバルさんには肉類を食べさせはじめておりませんので……。などと、この場には激しく関係の無い情報も挟まる。

道理で、物音一つしなかったはずだ、と納得しかけて、イレーネはぷるぷると首を振った。

そんな場合ではない。

ぱつと病人たちを振り返ってみれば、いつの間にか椀を手にした彼らは、恐々とその中身を覗き込んでいる。どうやら冬野菜の麦粥のようだ。

得体の知れなさはあれども、立ち上る芳香に負け、一人、また一人と匙を口に運び

「か……っ、母ちゃああああん！」

一斉に、滂沱ほうたの涙を流しはじめた。

薄味ながら、野菜のふくよかな甘みを湛える出汁。

ほんのり効かせた塩味は、麦の旨みを引き出し、舌をけっして飽きさせない。

ここには優しさがある。

淡々と、けれど丁寧に紡がれてゆく日常の光景がある。

飢えと寒さ、そして病に冒されていた臓腑に、さりげなく染みわたってゆくその味わいは、まさに母の愛、そのものであった。

「俺……っ、俺……っ、なんか急に、母ちゃんが恋しく……っ」

「うまいよおお……っ。染みるよおお……っ」

「魂が浄化されそうな味わいだ……っ」

すすり泣きながら粥を食む病人たちは、実際、みるみる肌の色艶を取り戻してゆく。

膿で爛れていた老人の肌は、いよいよもって滑らかな皮膚へと転じていたし、痩せた少年の奇妙に膨らんだ腹は、人体本来のバランスに収まりつつあった。

魂が浄化というか、物理的に身体が浄化されているような光景である。

「エルマのお粥は靈薬エリクサーか……っ」

「またまた。このくらい普通ですよ。離乳食……じゃない、お粥と
いうのは、臓腑に負担が少なく、栄養豊富なものなのですから」

エルマは「イレーネったら」みたいに微笑んで背中を叩くが、イ
レーネは「んなわけあるかあ!」と、裂帛の気合いでそれを振り払
った。

育児漬け生活で諸スキルが鈍ってしまったなんて、大嘘だ。

現に彼女は、離乳食作りスキルを極めるあまり、普通の食材から
でもエリクサー霊薬粥を生み出せるようになってしまったではないか。

(これなら、魔獣ヒュドラの唐揚げだから回復力が高まります、とかやって
た半年前のほうが、まだ「普通」だったわ……っ)

ふと、戸口の向こうに視線をやってみれば、

「……………」

外に控えたルーカスは、無言で顔を背けている。

(ほらもおおおおおお!)

イレーネは半泣きになって、エルマの肩をがくがく揺さぶった。

「どうするの!? どうするのよ、エルマ! このままじゃあなた
が、二日目にして大勝利、ぶっちぎりのナンバーワンで一気に王妃
よ! どうするの!?」

「そんな、わけが、ありま、せ……ちょ、イレーネ……、落ち着い
て、あちらを、見て……………」

「話を逸らしてるんじゃないわよ! この場にあなた以上に注目で

きる対象なんてありやしないわよ！ ああもう 「

イレーネは衝動に任せて肩を揺すり続けたが、そのときふと、妙な気配を感じて後ろを振り返った。

見れば、エルマが「あちら」と指差したその先を、病人たちがじっと注目している。

部屋の西側 エルマがまだ「洗浄」を済ませていないはずのその場所には、一人の女性が疲れ切った様子で佇んでいた。

「こちら側も、掃除が完了しました」

訛りのないルーデン語で告げる異国の少女は アナスタシア・ドン・ロドリゴであった。

12・「普通」の慈善活動(3)

「こちら側も、掃除が完了しました」

訛りのないルーデン語で告げる異国の少女は　アナスタシア・
ドン・ロドリゴ。

ドレスを裂いた布でほつかむりをし、手には、ずっしりと膨らんだ布の塊のようなものを持っている。

彼女は、それを嚴重に袋にしまい込むと、周囲に酒のようなものを振りまき、最後に香水をひと吹きした。

未だ汚物が残っていたはずの場所なのに、いつの間にかすっかり綺麗になっている。

もちろん石床のぼこぼことした表面はそのままだったが、そのくぼみに溜まっていた汚水までもが、すべて拭き取られていた。

「ひとまず、汚れを拭きとって、消毒液を撒いただけです。このあと、熱湯で拭いて、仕上げにもう一度消毒させてください。窓は拡張して、日中はなるべく光を入れましょう。寒いのは承知ですが、日光優先です」

アナは、消毒液を使って己の腕を清め、ほつかむりを外すと、病人たちを見回した。

「下痢や嘔吐の症状がある方。辛いのはわかりますが、必ず決まった場所で排泄、嘔吐してください。症状の重さに応じて、寝床の位置を考えるように。かつ、汚物は必ず決まった手順で処理してください」

さい」

次々と指示を飛ばす様は、実に堂々としている。
小柄で、容姿も可憐な部類のはずだが、今そこに滲む表情は、疲労からか殺伐としていた。

「看護人がいないのであれば、すべての作業を病人^{あなた}たち自身で完結させるほかありません。吐くだけの体力があればできる衛生管理方法を、この後図解で示しておくので、それを壁に」
「ねーねー」

滑らかな口上を遮って、フェリクスが、この場全員の疑問を代弁した。

「君、いつの間に、どうやって、ここを掃除したの？」

心の底から不思議そうに問う彼に、アナは「は？」と、すさんだ瞳で応じる。

「そんなの、普通に、高吸水性高分子^{ポリマー}で吸わせただけですけど」

「……ポリマー？ え……いや、普通そんなもの持ち歩かないよね？ っていうか、身近に無いよね？」

「はあ。無いなら作ればいいんじゃないですか？」

媚びるべき相手に素っ気なく答えてしまうほどに、そのときのアナは、疲れ切っていた。

一体自分はなにをしているのだろう。

もう二十四時間近く、排泄物^{うんっん}と嘔吐物^{げーげー}にしか関わっていない。

エルマが次々披露する異常ぶりに、驚愕したりツツコミを入れた

りする気力さえ、もはや残っていなかった。

「作る……?」

「ですから、普通にアクリル酸を網目構造に架橋させて、ポリアクリル酸ナトリウムにした後、顆粒にすればいいんですよ。そのくらのこともわかりませんか?」

珍しくフェリクスが顔を引き攣らせているが、アナはそれが異常事態だとも気付かない。

というより、もう、なにが普通でなにが異常なのか、線引きがわからなくなっていた。

(だりい……寝たい……。こちとら、あの女に、一晩中実験に付き合わされてんだよ……)

バルドにとつての快適さを求めるエルマの情熱には、限りというものがない。

おむつの吸水性をよくしたいと言い出したら、途端にポリマーを開発しだし、完成したかと思ったら、そこからさらに吸水速度や保水性、凝集力や耐候性にまでこだわりはじめる始末。

途中からは、「いつもバルたんが良好な便をしてくれるとは限りません!」と懊悩しだし、エルマの表現を借りるならCマイナス、いや、D相当の便が採取できる環境まで突撃していった。

あの劣悪極まる環境、そして過酷な実験に比べれば、この養護院の状況がなんだというのだろう。

そこに汚物があつたとき、とりあえずポリマーを作るというアップローチの、いったいなにかおかしいだろう。

完全に「普通」を見失った少女は、俄かに湧き出した強い感情やけくそを源泉に、自然とこのフレーズを紡いでいた。

「このくらい、普通じゃないですか」

フェリクスの瞳が大きく見開かれる。

背後でエルマが「お見事」と拍手するのを聞き流し、アナはくると踵を返した。

「それから」

向かったのは、勝手口の先。

先ほどエルマが「普通のオーガニック栽培」で野菜を異常生育させた畑だ。

そこには、四季を無視した野菜の外、無毒と判断されたい野の花までもが、群れとなって咲きほこり、あるいは実を結んでいた。

ありえないほど青々とした光景を、死んだ魚のような瞳で受け流してから、アナは畑の端にすいと屈みこむ。

そして、頬やドレスが土まみれになるのも気にせず、腕を伸ばし、棘に覆われた植物を根っこから掘り起こした。

「これ。食べられますし、薬にもなります」

戻ってきて、病人たちに突き出したのは、寒村であればどこにも生えている、雑草の一種だった。

根はぼこぼこと瘤状こぶに膨らみ、いかにも不気味である。

「まさか、そいつが……？」

「冗談だろう、根には毒があるって聞いたぜ」

あまりにありふれていて、しかも厄介者であるために、名前すら付いていない雑草。

しかし、アナはきっぱりと続けた。

「本当です。毒があるのは、これとよく似た、もつと棘が太いもののほう。こちらは無毒で、根っこは豆みたいな味がするし、葉の汁には解毒や、消毒の作用があります。ほら」

「……………」

棘でこさえてしまった切り傷に、目の前で汁を塗りつけてみせたアナに、病人たちは息を呑む。

「ちなみにこちら、茹でてみました」

そこに黒衣よろしく、エルマが茹でた根を差し出してくる。

人々はツツコミも忘れてそれを摘まみ、たしかに豆の味がするのを理解すると、「嘘だろう……………」と呟いた。

つまり 打ち捨てられた寒村にいた自分たちは、大量の食料と、薬に囲まれていたということになる。

呆然とする病人たちに、アナはふつと口の端を引き上げる。

彼らの近くにしゃがみこむと、ぴんとその額を弾いた。

『辛気臭い顔しやがって。病人面は、草の根でも齧ってからしろつての』

「え……………」

「お大事に、と申し上げました」

額を押さえて首を傾げる病人たちに、アナはしれっとルーデン語に戻して告げる。
するとそこに、

「いやあ、見事だねえ」

間延びした口調で声が掛かった。

フェリクスである。

彼は、アナに向かってひとしきり拍手を送ると、愉快そうに小首を傾げた。

「洗浄も調理も、エルマのやり方はエルマにしかできないけど、化学は『再現』できるし、食べられる野草の存在は『伝達』できる」

狐を思わせる緑の瞳は、いつになく上機嫌だった。

「つまり、……君のやり方の方が、より多くの民を救えるね？ アナスタシア・ドン・ロドリゴ」

アナは、意表を突かれたように目を見開く。

フェリクスはひとつ頷くと、ぱんと大きく手を打った。

「さて」

すっかり綺麗になった養護院、そして健康を取り戻しつつある病人たちを、満足そうに眺める。

「この通り、候補者エルマ、およびアナスタシア・ドン・ロドリゴは、それぞれの手法で課題をこなした。ああ、『時間と金をかけて臨む』という策を提案してみせたカロリーネ・フォン・ファイネン

のことも、一応は認めておこうかな。そうした方法も、実際は必要なことだし。よって、この三名について、明日の最終選考に進むことを認める」

きっぱりとした宣言に、アナはぽかんとした。

「え……。あ、はい……」

「さすがでございます、アナ様。私は信じておりました」

とそこに、エルマが興奮したような拍手を送ってくる。

眼鏡越しにも上機嫌とわかる彼女は、誇らしげにアナに向かって頷き、それからなぜか、イレーネに向かって、「ほら」と、にっこり微笑んでみせた。

「アナ様の、この清々しい活躍ぶり。これに比べれば、私の慈善活動などいたって『普通』。いえ、カスに等しいというものです」

いや、微笑みというより、親が我が子の活躍を自慢するかのようなドヤ顔、と言ったほうが正しいだろうか。

イレーネを筆頭とした周囲は、「さすがにそれは……」といった様子で顔を引き攣らせたが、たしかにアナが意外な活躍を見せたことは事実だったので、反論を控えた。

エルマがあまりに無邪気に喜ぶので、なにも言えなくなった、という側面もある。

ほかの候補者たちのうち、カロリーネは大はしゃぎし、商家の娘は悔しそうにしたものの、しかし最後には納得したように頷く。

そしてアナはと言えば、

「最終選考……」

ぼんやりと眩き、ついでぎょっとしたように小さく叫んだ。

『最終選考！？』

そうだ、目先の汚物処理にすっかり没頭していたけれど、自分は選考会の場に臨んでいたのだ。

これこそが望んでいた展開で　　ここは内心でガッツポーズでも決めるべき瞬間ではないか。

しかも今、自分はフェリクス直々に声を掛けられた。

これはつまり接近の機会が巡ってきたということ、ますます口ドリゴ侯爵の野望実現の日が近付いてきたということである。

そこまで考えて、アナは、エルマへの負けん気を燃やすあまり、途中から養父のことすら意識しなくなっていた自分に気付いた。

髪飾りや靴を愛でるのが日々の習慣だというのに、今朝はそれすらも忘れていた。

エルマとの「修行」で汚れてはいけないと、昨夜からしまいっぱなしだったのだ。

(……なにやってんだ、あたし)

アナは己の阿呆さ加減にはつの悪さを覚え、無意識に視線をそらす。

そのときちようど、視界に裏庭の畑　　そこにぽつんと咲いた、可憐な白い花が映り込んできたので、彼女は気を引き締めた。

鈴蘭に似た白い花。

かつてロドリゴが自分に贈ってくれた花だ。

多くの人間にとっては雑草でしかないが、アナにとってはなにより大事な花だった。

同じ香りを閉じ込めた髪飾りは、身に着けるとまるで、養父がすぐ傍で見守ってくれているような感覚を抱く。

なのにそれを忘れていた自分を、その白い花は責め立てているかのようにだった。

（あたしがこの場にいるのは、ロドリゴ様のため。あたしがこうして生きているのは、ロドリゴ様のおかげ……）

それが、真実であり、前提。

アナは周囲に気付かれぬよう、小さく頭を振った。

（明日の選考で、本当にあたしが王妃になれるかもしれない。ううん、その前に、今日にでも、枕問いがあって、王の閨むねに呼ばれるかもしれない。きちんと、備えなきゃ……）

例えば、すぐに短剣を取り出せるように。

あるいは、ワイングラスにでも毒薬を落とせるように。

あの異常な侍女に気取られぬようにこなすとなると、相当なハードルだ。

だが　それをするために、自分はこの場にやってきた。

侯爵にこの身を役立ててもらったために、生きてきたのだから。

自分のすぐ傍で同僚と笑い合っているはずのエルマの姿が、なぜだか遠くを感じる。

アナは静かに視線を逸らすと、密かに拳を握った。

13・「普通」の慈善活動(4)

王都へと戻る馬車の中で、真つ先に口を開いたのはデボラであった。

「それにしても、二日目にして候補者が三人にまで絞られてしまうとは。でもこれで、『優勝一步手前まで残る』というミッションは着々と進行中ですわね。さすがはエルマエル様です。そう思わなくて、イレーネさん？」

狭い車内に、恍惚とした声が響き渡る。

この四人掛けの車両には今、デボラとイレーネ、そしてバルドを抱っこしたエルマが乗っていた。

エルマはアナも誘ったのだが、「疲れたから横になって寝たい」と断られたのだ。

今や王妃筆頭候補に躍り出たアナの要望は受け入れられ、彼女は今、一つ前に行く馬車を、一人で利用しているはずだった。

「なにが着々よ」

水を向けられたイレーネは不満顔だ。

窓枠に頬杖を突いて、ぶすつとしたまま指摘した。

「陛下の良いように、ことを進められてるだけじゃない。カロリーネ嬢を候補に残したのがその証拠よ。さっさとアナ様を王妃に指名して、今日の時点で任務を終了させることもできたのに。結局、すべては陛下のお心ひとつ、掌の上ということだわ。エルマを落とす

か残すか　王妃にするか、もね」

「ですが、最終的に、私が明日の選考で逃げ切れればよいだけの話ですし……」

不機嫌な友人を前に、エルマが困ったように眉を下げる。

が、それを聞いたイレーネは、猫のような瞳をますますキツと吊り上げた。

「最終結果だけの話をしているんじゃないの。私はね、経過……ここ最近のあなたたちを見ていられないのよ！」

「あなたたち、とは？」

「あなたとルーカス殿下のことに決まってるでしょう！」

きよとんとする親友に、イレーネはびしつと指を突きつけた。

「いい加減、その鈍さは許されないわよ！　だから、私厳選の参考こいもの書がたりを読みなさいと、あれほど言っているのに」

「いえあの、ですからこれでも、最大限拝読はしているのですが……」

エルマが眉を下げ、おずおずと反論する。

親友相手に強く出られないエルマを見かねたのか、デボラが割って入った。

「あらあ、そこでエルマエル様を責めるのはお門違いですわ。単にイレーネさんのチョイスが肌に合わなかったというだけではないかしら。わたくし厳選の、百合の香りも芳しい短編集などでしたら、きつと五臓六腑に染みわたるかのように、内容が刻まれたはずですよ」

「とかなんとか言いつつ、私がエルマに貸した本を読みはじめてる

んじゃないわよ!」

「えー。だって、エルマエル様が獲得なさったすべての知識を、わたくしも共有したいのですものお」

素早くツツコミを入れるイレーネに、デボラはのんびりと、膝に本を広げながら返す。

読んでいるのは、先日イレーネがエルマに押し付けた「王都の見どころガイドブック」だ。

エストワ庭園の特集に視線を落としながら、デボラは「許されないと言えば」と唇の端を持ち上げた。

「勝手に他人の好意を告げてしまう行為も、あまつさえ、その好意に応えろと迫る行為も、マナー違反ですわねえ?」

「……………っ」

突然の鋭い一突きに、息を呑む。

たしかに、ルーカスの感情を、本人のあずかり知らぬところでエルマに告げてしまうのも、「こんなに好かれているのだからもっと行動を考えろ」と諭すのも、傲慢な行為ではある。

(でも…………っ)

それでも、イレーネはぎゅっと拳を握りしめた。

(大好きな二人が、ぎくしゃくしているのを、これ以上見たくないんだもの…………)

イレーネはエルマが好きだ。

ルーカスのことも、友人として好きだ。

そしてその二人が、騒動に巻き込まれながらも、いつもわいわいと息の合ったやりとりを交わす、それを見るのが大好きだった。

エルマと出会ってからのルーカスが、「単なる色男」から脱却し、感情を乱したり、人間味あふれる葛藤を抱えたりする様子を、イレーネは好意的に見守ってきた。

そして監獄に赴いた際には、エルマのほうも、ルーカスを意識しているようだ、たしかに感じられたのに。

「エルマ……あなた、いつたいなにを考えているのよ……」

ルーカスの苛立ちは理解できるが、エルマの真意は測れない。だからつい、イレーネはルーカスの味方をしてしまう。

難しい顔で呟いたイレーネを、エルマはじっと見つめ、やがて静かに切り出した。

「イレーネ。気付かれにくいかもしれませんが」

彼女は、眠るバルドの頬をそつと撫でると、一語一語を選ぶように告げた。

「実は私、バルたんが生まれてから、かなりオーガニックだとか、品質へのこだわりが強くなったのですよね」

「……いえ、それはもちろん気付いていたけど、なぜここでその話が出るかがさっぱりわからないわ」

ここに来てまで弟の話に終始するか、とイレーネが半眼になる。

エルマは少し焦ったように、身を乗り出した。

「これまでは、力技と言いますか、多少の困難があっても、ねつ造したり洗脳したり科学の力で矯正したり、物理の力で薙ぎ払ったり、そういうことをすればよいのだと思っていましたのです。それが『普通』だからと」

「え、ええ、まあ……あなたの育ちからすれば、そうなるわよね」
「でも……生まれてきてくれたこの子には、最高のものを与えたい、本物だけを差し出したい　この半年というもの、そう考えることがとても多くて……。すると、これまでのような力技は、もはや、少しばかり不誠実だったのではないかと、そう思えてきたのです」

切実な声に、イレーネはつい目を見開く。

エルマは、どこまでも真剣だった。

「陛下は、戸籍のことを、『普通』の生活を送るのになにより必要なもの、と仰っていましたね。以前の私なら、『ならば偽造しようか』とか、『強奪しようか』と思ったかもしれません。……ですが、今の私は、それをしたくないのです」

「エルマ……」

「紛い物ではなくて、本物がいいのです。公的に、一点の曇りもなく、社会での存在を認めてほしい。私の家族が聞いたら鼻で笑うかもしれませんし、そのために殿下の機嫌を損ねているのかもしれないが……でも、譲れないのです」

いつかバルたんが誰かと愛を育み、結婚するときにはどうするのです？　子を持つときは？

先日ルーカスと口論になったときの、エルマの主張を思い出す。
彼女は、これまでになく必死だったように見えた。

バルたんは……生まれてくる自分の子どもとも、正式な親子

関係を結べないではありませんか？

囚人の子。

世俗と隔離された監獄で秘密裏に生まれ、複数の「親」に育てられたエルマ。

彼女と「家族」はあんなにも強い絆で結ばれているのに、その関係を公的に保証するものは、なにひとつない。

それは イレーネたちの想像以上に、エルマに深い葛藤を強いていたのではないだろうか。

そう思い至ってしまえば、もう「バルドのことばかり考えすぎている」などとは非難できない。

姉としてのその心情は、けっして否定されてはいけないものだと考えたから。

それに、きつとルーカスの感情についても、自分が思っていたよりもずつと、エルマはきちんと理解しているのだらうと　そう、感じたから。

「……わかったわよ」

三呼吸ほど置いたあと、様々な感情を飲み込んで、小さく告げる。眉を寄せながら、それでも頷いてくれた親友に、エルマは明らかにそれとわかるほど、ほっと胸を撫でおろした。

「わかっていただけで、よかったです。……ご心配をお掛けしてしまい、申し訳ございません」

「いいわよ、もう。心配をかけないエルマなんて、もはやエルマじゃないわ」

「そ、それは面目次第も……」

恐縮して頭を下げるエルマを見て、イレーネはふんと鼻を鳴らす。エルマもエルマなりに考えがあって、行動しているのだ。ならば、親友を自認する自分としては、見守るほかないだろう。

「そうと割り切れれば、あとは明日の対策よ。最終選考課題はいつた
いなんなのかしらね？ 私の情報筋によると」

腹を決めてしまえば、あとはもういつものイレーネだ。

先ほどまでの寡黙ぶりから一転、さかんにおしゃべりに興じるようになった同僚を見て、隣のデボラは小さく笑みを浮かべた。

「半分は、エルマエル様の真意を理解いただけただけなようでありですわ。……まったく、ご自分が原因だとも知らないで」

後半ばやきに変わってしまった独白は、車輪の立てる音に紛れてしまい、誰にも聞き取られない。

デボラはエルマの指の動きを真似るように、ガイドブックのページの一部 エストワ庭園の特集を、とんとんと優しく突いてみせた。

「うん、行きに比べてだいぶ快適。やっぱり、一気に三十台くらい馬車で踏み均せば、獣道も多少は整うよねー。草も全部倒れて、今

なら工事もしやすそう」

一方、先頭に行く馬車には、フェリクスとルーカスの二人が乗り合わせていた。

もつとも、こちらではフェリクスがぺらぺらとしゃべり通すばかりで、ルーカスはずっと沈黙を貫いている。

「いやあ、それにしてもカロリーネ嬢は意外に健闘したよね。手袋持参とか、あんな知恵があったとは。でもやっぱり、大穴はアナスタシア嬢か。そうは思わない？ うん、やっぱり僕は好きだなあ」
「……だつたら」

と、フェリクスが間延びした口調でアナに触れたとき、とうとうルーカスが口を開いた。

「アナスタシア・ドン・ロドリゴを、さっさと王妃に指名してしまえばよかったではありませんか。どうせ、カロリーネを娶る気などさらさらないのでしょよう？」

声には、隠しきれない険がある。

無表情で告げる異母弟に、フェリクスは「やれやれ」と肩を竦めた。

「そんなことしたら、今日でエルマの任務が完了しちゃうじゃないもつたいない」

「そんな理由で、ふざけた任務を引き延ばさないでください」

「いやいや、最後までなにがあるかわからないのが王政つてものだからさー」

飄々とした様子に、ルーカスは苛立たしげに眉を寄せた。

「義兄上は、いったいなにをお考えなのですか？」

「なにをって、そりゃいろいろいるねー」

「……エルマを、望んでいるのですか？」

地を這うような声。

フェリクスは、しばし窓の外を眺めると、

「……あのさあ」

やがて、しらけたように切り出した。

さして美しくも醜くもない平凡な容貌には、今はつきりと、ルーカスを馬鹿にする表情が浮かんでいた。

「仮にそうだったとして、君はどうするわけ？」

「ということは、義兄上は」

「いやだからさ、『僕は』じゃなくて、『君は』どうしたいのかわかって聞いているんだけど」

身を乗り出したルーカスを遮り、フェリクスはひらりと掌を翻した。

「君って、ほんとに弟気質だね。『義兄上はどうするんですか？』」

『義兄上はなにを考えているんですか？』って、そればかり。君は空気をよく読むし、どんな相手にも自分を受け入れさせてしまうけど、それって逆に言えば、自分がないってことだ。だから、相手がどう出るかを見てからじゃないと、動けない」

思いも寄らぬ指摘に、ルーカスは言葉を失った。

いつも掴みどころがなく、あまり人を気にしていなさそうな異母

兄からの、突然の鋭い言葉。

それは意外にも、ほかの誰の発言よりも、ルーカスの性質を正確に言い当てていたから。

「僕が凡愚な男を装ってきたように、君も周囲を観察して、軽薄な男を演じてきた。常に本気を出さず、本気にならず、しなだれかかってきたものだけを摘まんね。異国出身の側妃の息子だもの。命だって掛かっていたんだから、君がそうなるのも無理はない。でもね　そんな時代は、とうに終わったんだ」

「……………」

ルーカスの青い瞳が見開かれる。

フェリクスは、自らの外套コート、その王の紋が刺繍された部分を、ぴらりと摘まみ上げた。

「愚かなるヴェルナーを王に戴き、母親や家臣たちの思惑に振り回される、僕たちの不幸な王子時代は、もう終わった。今や僕が王になったんだ。いや、…………君が僕を王にした」

ルーカスが、フェリクスを王にした。

それは事実だ。

監獄で真実が明かされたとき、ルーカスはそれでもフェリクスを王位に押し戻したのだから。

そして気付いた。

あるとき飄々としていたように見えた異母兄は、その実かなり、それを重く受け止めていたのだということに。

「…………怒っているのですか？」

「ほら、すぐそうやって人の顔色を見る。…………べつに怒っても、感

謝してもないよ。まあ、ちょっとどこかでやり返してやるくらい
のことは思っただけど」

小さく笑うと、フェリクスは小首を傾げた。

「ただ、それと、今回エルマを王妃候補にしたことは、なんの関係
もない。純粹に、彼女の能力が便利だと思ったからだ。でも、僕が
エルマを駒としてしか見ていないからといって、あるいは逆に、僕
がエルマを愛していたとして、いったい君になんの影響があるの？」

戸惑うルーカスに、フェリクスはぐつと顔を近付ける。

二人の横顔は、まるで似ていなかった。

それはそうだ、半分以上か、彼らにはまったく血の繋がりがな
いし、その性質も大きく異なるのだから。

「自分で手を伸ばすんだよ、ルーカス。欲しいものを、欲しいとも
思えない愚か者を、僕は弟にしておく気はない」

平凡であつたはずのフェリクスの相貌は、ひどく大人びて見えた。
いかにも、王であり、兄であると言わんばかりの顔つきだった。

彼の横の窓から、外の光景が目飛び込んでくる。

朝は確かに険しかった、寒村と王都を繋ぐ道は、今、何百もの車
輪に踏み慣らされ、すっかり進みやすくなっていた。

(ああ、そうか……)

ルーカスはそのとき、心の底に、なにかがすとんと収まるのを感じ
た。

やはりフェリクスは、王なのだ。

茨道でも獣道でも、進みたいと思う方向へ切り拓いてゆく。

引き換え、自分はなにをしてきただろう。

ほかの男になびくのかと憤り、思いが伝わらないと嘆き、相手の意向ばかり気にして。

(……あほか)

手に入れすぎぬように、欲さぬようにと、醒めた態度を演じて過ごしてきた十数年。

それでも、自分が本当に欲しいものを感じ取れるくらいの魂は、残してきたはずだ。

そして、それを押し込める必要は、もうどこにもない。

ルーカスは、ちらりと窓の外を見ると、口の端を引き上げた。

「……もう王都も、だいぶ近い。これなら、馬車を引く馬の一頭が減ったって、道中なんら問題ありませんね」

「は？」

怪訝な顔つきになったフェリクスを、ルーカスはまっすぐ見つめた。

「俺自身すっかり忘れかけていましたが、俺は弟で、騎士なんです」

「うん？」

「道を切り拓くのは、王である義兄上に任せます。……それでもって、要領のいい弟であり騎士の俺は、ちゃっかりその道を利用して、愛しい女のために奔走でもするとしましょう」

これは宣戦布告であり、誓いだ。
考えてみれば、誰かに向かつて、エルマのことを「愛しい」と口にしたのはこれが初めてだった。

そして同時に、感謝の言葉でもある。
フェリクスを王と敬い、兄と仰ぐ自分の敬意を、彼は受け取ってくれるだろうか。

「……わーお、なにその身勝手な発言」
「弟なんて『普通』こんなものです。それに……そういう人間が、お嫌いでもないでしょう？」

自信たっぷり首を傾げてみせれば、フェリクスはやれやれと苦笑を刻む。

ルーカスは、それを肯定とみなした。

「では、俺は用事を思い出したので、一足先に失礼しますよ。馬を一頭お借りします。王たる義兄上は、せいぜい馬車でのんびりお戻りください。それと」

御者台へと移動を開始するため、素早く座席を立ち上がる。
低い天井に手を掛けながら、ルーカスはやりと背後を振り返った。

「もう少しあなたの弟として、生かしておいてくださいよ。決して失望させやしませんから」

言うが早いか、さっさと扉をくぐってゆく。
考えてみれば、男二人で狭苦しい空間にいても、なんの楽しいこ

ともない。

そんなことにも思い至らず、同じ車内で悶々としていた自分は、心底平静を欠いていたのだと思い知らされた。

「しっつれいなヤツ」

馬車に残されたフェリクスは、壁に背を預けてひとりごちる。ただし、その口元には、愉快そうな笑みが浮かんでいた。

「ま、たしかに失望はさせないだろうね。なんたって君は、僕が王の道に踏み入るよりも早く、さっさと騎士の道を切り拓いた男だもの」

なんとはなしに窓に向けた瞳は、そのまま虚空を眺める。

都が近付いてきたことで、これまでただ真つすぐ伸びるだけだった道に、交わる道が現れはじめた。

交差する道と、そこを行き交う馬の図は、なんだか少しチェスにも似ている。

フェリクスは、平らな盤面を思い浮かべながら、静かに目を閉じた。

この身に秘された聖力のせいだろうか。

チェスの盤を読むことも、少々先の未来を予測することも、とても得意だ。

「僕は君を殺さないよ、ルーカス」

しばらく心地よい振動を味わってから、彼はゆるりと目を開けた。

窓枠に頬杖を突き、ぼんやりと外を眺める。

「……でも、君が勝手に死んじゃわないように、気を付けたほうがいいかねえ？」

静かな呟きは、誰にも聞き取られることなく、そっと冬の空気に溶けていった。

14・「普通」の慈善活動(5)

『さむ……』

白い吐息が夜空に溶けるのを、アナは両手で腕を抱きながら見守った。

王都へと帰還して数刻。

相変わらず影のように張り付いていたエルマも、今は、バルドの寝かしつけのため、続きの部屋に引っ込んでいる。

完全に一人になりたいと思ったアナは、迎賓館のバルコニーから、星を見ていた。

故郷の村から、あるいはロドリゴ候の屋敷から見上げたものより、夜空に散らばる光は随分とまばらに思える。

恐らく、ルーデンの王城や城下町で煌々と灯される明りが、星の輝きをくすませているのだろう。

それほどに、ここは大きな国なのだ。

なんとなく手すりに寄り掛かったアナだったが、不意にそれがすり減っているのに気付き、苦笑を浮かべた。

あの奇妙な侍女に、背後から突き飛ばされた際に、咄嗟に握りしめた部分だ。

(……いや、笑いごとじゃないんだけど)

四階から突き飛ばされたら、普通無事ではいられない。

それを、アナの持ち前の反射神経で踏みとどまり、なんとか事なきを得たのだ。

心臓が止まるかと思ったが、エルマに言わせれば、緊張に耐性を付け、すぐに平静を取り戻せるようになるのが目的だという。

『アナ様は、感情の起伏が激しくていらっしやるようですから。それ自体は美点ですが、やはり王妃たるもの、泰然と己を律してみせなくてはなりません。大丈夫、アナ様なら絶対にできますとも』

常に赤子を抱っこしている彼女は、悪びれもせずに告げたものだ。いや、実際、彼女にとつて、これは善意に基づいた、かつ、至つて「普通」の鍛錬なのだろう。

律儀に心拍を測り、まめに水を勧めたり励ましたりしながら、彼女はどこまでも真剣な様子で続けるのだ。

『心拍が落ち着くのに約十五秒ですか。ふむ。……ではもう一度』
『ちよ、え……っ』

その後、何度背後を狙われたことだろうか。

それだけでなく、毒矢を吹かれて「避けてみてください」と言われたり、催涙ガスを撒かれて「回避してみてください」と言われたり、いきなり催眠術を掛けられ、「解いてみてください」と言われたり。

その傍らで、女の修めるべき範疇を超えた学問を叩きこまれたり、化学の実験に付き合わされたり。

(……王妃って、なんだっけ……?)

アナの目が一瞬虚ろになる。

ロドリゴの屋敷で、暗殺者としての教育を受けたときですら、こんな高水準のスキルは求められなかった。

(……あいつ、ほんと、なに考えてるんだろ……)

もう何度なぞったか知れない疑問を、アナはつい反芻してしまう。

暗殺者という自分の正体は、とうに見抜かれている。

それでもエルマが騎士団にアナを突き出さないのは、簡単に御せると判断したからだし、利用価値を感じているからだ。

(……いや、違う。そうじゃないんだ)

アナはぶるぶると首を振った。

むしろ、それならまだ理解できる。

他国の暗殺者を駒に貶め、良いように利用するというのは、いかにも貴族連中が好みそうなやり口だ。

だが、エルマの場合はそうではない。

彼女はいつも甲斐甲斐しくアナの世話を焼き、敬意の籠もった瞳でアナを見つめる。

鍛錬それ自体はかなり過酷だし異常なのに、ちよつとした言葉や仕草に、これ以上ないほどの心配りが感じられる。

その矛盾がアナを戸惑わせるのだ。

(あいつ、すぐに「さすが」「って言うよな)

エルマはすぐにアナを褒める。

そしてそのとき、けっして「農民出身のわりには」といった枕詞

を使わない。

むしろ、「さすが、長年の鍛錬を感じさせる、粘りのある足腰をお持ちですね」とか、「さすが、太陽のリズムと体が完全に同期していますね」とか、アナがかつて寒村で鍛えてきたあれこれを、しみじみ感嘆したように指摘する。

ロドリゴですら、アナを褒めるときは「流刑地の出でありながら、よくここまで頑張りましたね」という言い方をするのに。

(今日だって、そうだ……)

前代未聞の活躍を見せるエルマとは異なり、自分は、誰にでも扱える道具と知識を使って対処しただけなのに、エルマは、それこそを褒め称える。

特に今日、食べられる雑草を披露したときは、「まさに血肉を伴った知識……魂を震わす衝撃の新事実ですね……！」と、その後もしきりと感動していた。

どうやら、彼女はあの食べられる雑草のことを書物でしか知らず、そこでそれは「毒」と区別されていたらしい。

ほかの植物が異常に成育していたのに、道理でその雑草はちんまりとしたままだったはずである。

「頭でつかちで、お恥ずかしい限りです。引き換えアナ様の知識は、すべてがご経験としっかり結びついていて、素晴らしいですね」

「常人にはなかなかない、貴重なご経験をされてきたのですね」

「大変勉強になります」

そんな言葉を、エルマはどこまでも真剣に呟く。

嫌味でないことは、その真つすぐな瞳と、神妙な表情を見れば、すぐにわかった。

彼女は、本気で、アナに感服しているのだ。

(この、貴族でもない、数年前まで文字も書けなかった、流刑地出身のあたしに)

エルマを前にすると、なんだか自分が、いっぱしの人間のように思えてくる。

(いけない。なに考えてんだ、あたし)

アナは再び首を振った。

やすやすと騙されてどうする。

しょせんはあの侍女も、ルーデンの人間、それも間違いなく貴族だ。

持てる者。アナの村やエスピアナから金を搾り取り、その富を浴びるようにして暮らしてきた人間。

(罪人の血を引くあたしが、草の根を齧って冬を越えてきた間、青い血の流れるあの子は、日の当たる部屋でのうのうと暮らしてきた。そんなの、不公平じゃないか)

拳を握り、考えを固める。

だというのに、なぜその傍から、エルマの敬意の籠もった眼差しが蘇るのか。

アナは忌々しそくに溜息を吐くと、とうとう手すりを乗り越えた。

滑らかな動きで柱を伝い、するりと地面にたどり着く。
こつした技術も、この数日で見違えるほど上達した。
今なら、暗殺者としてのレベルも底上げされているに違いない。

(暗殺……。ルーデンの王を、殺す……)

芝生に降りた霜を戯れに踏み潰しながら、内心でそう唱える。
これまでなんの疑問も抱かなかったその任務に、今なぜか違和感を覚えていた。

エスピアナを搾取してきたルーデンに一矢報い、心優しきロドリゴ侯爵を悩みから解放する。

そのの、なにがおかしい。
自分でもわからない。

貧しかったアナは被害者だ。

救い上げてくれた侯爵は善人で、だからこの行動は正義。
そう思うのに、なにか引っ掛かる。そして、その正体がわからない。

もどかしさは苛立ちとなって、アナの思考を攻撃的なものにした。

(……もしや、あの女に、知らない間に洗脳でもされてんじゃないのか、あたし)

不意にそんな考えが脳裏に閃く。

思えば、エルマと出会ってから、こちらのペースは崩されっぱなしだった。

実際に催眠術を掛けられたこともあるし、アナの知らぬ間に暗示を施されていたとしてもおかしくない。

「アナは親指の爪を齧った。」

「そうとも、相手は卑怯なルーデンの人間だ。」

「表では親切ごかしても、その実」

「そこでなにをしている」

そのとき、低い声が掛かったので、はっと顔を上げる。

星明りを背負って現れたのは、胸当てを身に付けた精悍な男。背格好から判断するに、今日の見張りを担当する騎士だった。

（しまった、警護が手薄だからと油断してた）

「厳重な警備がなされる迎賓館とはいえ、辺境国出身のアナに割り振られる人員は少ない。」

「しかも今はちょうど、脱落した候補者が続々と館を離れるとあって、騎士の多くは玄関口に集中しているはずだと、高を括っていたのだ。」

「それがいけなかった。」

「だが、皮肉にもエルマの指導のおかげで、こうしたときの度胸はだいぶついたものだ。」

「アナは、動揺などおくびにも出さず、怯えたように首を竦めてみせた。」

「も、申し訳ございません。寝付けなかったため、散歩をと思い外に出ておりました。すぐに戻ります」

「散歩？ 室内履きのままで？」

「室内履きのまま？ …… いやだ、本当！ お恥ずかしいですわ」
いかにも今気付いたふりをしながら、内心で舌打ちする。
男のくせに、よくも女の履物にまで気付けるというものだ。

「ぼんやりしていたからですわね。はしたないところをお見せしました」

「へえ、『ぼんやりしていたから』ですか。てっきり、『部屋から伝い下りてきたから』かと思いましたよ、アナスタシア・ドン・ロドリゴ殿」

名前をはっきり呼ばれて、アナは警戒を強めた。

目の前の男の風貌を改めて検分し、脳内で素早く情報を照合する。

そして、ひそかに息を呑んだ。

黒髪、碧眼、すらりとした男前。

彼は、選考会の場でも何度か見掛けた。

そう、現王以上に有能な王族でありながら、騎士団に身を置く変わり者として、他国でも評判の

(ルーカス・フォン・ルーデンドルフ)

アナは、警戒レベルを一気に最高値まで跳ね上げた。

15・「普通」の慈善活動(6)

アナは警戒心を最大値まで引き上げ、目の前の男を見つめた。

「……ご冗談を。バルコニーの四階から地上まで伝い下りて無事な女なんて、普通ありませんわ」
「それはどうだろう」

平静を装って紡いだ返答に、なぜだかルーカスは愉快そうに笑った。

「俺が身近に知っている女性は、普通に崖から飛び降りて無事だったりするので、判断に悩むな」

初対面のアナに、砕けた様子で笑いかける彼は、たしかに色男としての魅力にあふれているに違いない。

だが、彼の仄めかす「女性」の正体を察して、アナはいよいよ顔を強張らせた。

崖から飛び降りて無事な人間が、そうほいほい存在されたら、堪ったものではない。

「……エルマ様から、なにかお聞きに？」
「なにか、とは？」

覚悟を決めて一步踏み込んでみたが、相手は軽く眉を上げるだけだった。

間合いを測りかねて黙り込むアナに、ルーカスはなんでもないこ

とのように切り出した。

「たとえばこんなことだろうか、アナスタシア嬢。あなたが、エスピアナのロドリゴ聖侯爵の養女であることや、貴族の養女としては珍しく、辺境の流刑地出身であること。それとも、ルーデン入りの初日に暗器を山ほど所持していたことかな？」

「……………」

完全に情報が筒抜けになっている。

この分では、しらばっくれることができる段階は、とくに過ぎてしまっているだろう。

アナは、憎しみを込めて目の前の男を睨み付けた。

『やっぱり、エルマ…………あの女は、最初からあたしを騎士団に突き出す気だったんだね』

恐らく、最終日にまで残ったことで、彼女の用は済んだのだ。

だからこうして、アナの情報を騎士団に差し出した。

(ちくしょう……………)

それは、よくわからぬ敬意より、よほど合理的で「普通」の行動のほずだ。

それならアナだって、戸惑うことなく理解できる。

だというのに、裏切りを突きつけられた今、心の底がひりつくように痛む。そんな自分の弱さが忌々しかった。

だが、

「今、いまいち聞き取れなかったが、エルマが騎士団に突き出そうとした、と言ったか？」

首を傾げたルーカスの、次の言葉で、アナは大きく目を見開いた。「ならば誤解だ。エルマは、むしろ積極的にあなたの良い噂を流してまわっている」

「……なんだって？」

咄嗟に母国語のまま呟き、その後我に返ったアナは、ルーデン語で聞き直した。

「どういうことですか？」

「どうもこうも。彼女はあなたをなんとかしても立后させたいらしい。方々で人を捕まえては、相手が当惑するくらいに、あなたのことを褒めてまわっている。もちろん、弟バルドを褒め称えた後にだが」

いわく、廊下で侍女仲間に会えば「アナ様の抱っこスキルは人類史に刻まれてしかるべきレベル」と語り、騎士団に顔を出しては「アナ様の根性の据わり方は不動如山の極致なので、ぜひ見習うべき」と熱弁する。

そのほかにも、すれ違う人全員に、「おはようございますバルたんの可愛さは唯一不変。本日も気持ちのいい天気ですねアナ様の変顔すごい」と、まるで語尾のように褒め言葉を混ぜてくるらしい。それも、うっとりとした様子でだ。

「……いえそれは、選考を有利にするための情報に、まったくなっていないのでは……」

「まあ正直、印象操作をする工作人員というよりは、孫自慢をする祖父母の言動に近い、というのは事実だ。だが、あまりに好意を垂れ

流すエルマにつられて、周囲は徐々に『バルドくんはすごい。そしてアナスタシア嬢とやらもすごいらしい』と認識しはじめている。「なにそれ!？」

再び母国語に戻ってしまい、アナは慌てて咳払いをした。

「信じられないことですね。それも彼女の計算通りということでしょうか」

「いや、計算なんかではないだろう。程度がぶっ飛んでいるからこちらが見誤るだけで、彼女は……エルマは、あれでかなり単純で、思ったことをただ行動に移しているだけだ」

だからこそ、疑って己を疲弊させるより、覚悟を決めて信じ切ったほうが楽だぞ。

目の前の男は、なぜだか自分に言い聞かせるようにそう付け加える。

彼がなにを思っているかはともかく、不思議なことに、その言葉はすっとアナの腑に落ちた。

おそらくエルマは、臆面もなく、バルドやアナのことを褒めてもらったのだろう。

その想像は、アナの心を妙にそわつかせたが　しかし、今は、そんな話をしている場合ではなかった。

「仮に、本当に彼女が私を密告しなかったのだとして、それなら、なぜあなたは私を疑うのです？」

「もちろん、独自に調べたからだ」

「あなたが？　一人で？」

アナの問いに、ルーカスはおどけるように肩を竦める。

「本気を出せば、それなりに有能なのでね」

敵の規模を知りたいがための問いだったのだが、そんな答えが返ってきたので、アナはますます眉を寄せた。

「……それで。私をどうなさるおつもりなのですか？」

「どうとは？」

「それは……あなたたちが決めるのでしよう。拷問するなり、殺すなり」

ここに来て、いまさら無事で帰れるとは思わない。

苛々しながら尋ねると、それでもルーデン語だと丁寧な口調になっってしまうのが忌々しい、相手は意外な返答を寄越した。

「ああ、そういう意味なら、なにもしない」

「は？」

「これでも騎士だ。弱り切った相手を、痛めつける趣味はないものでね」

意味がわからない、と反論しかけたアナを、ルーカスは視線で封じた。

「弱っていたらどう？ バルコニーにいたときから、途方に暮れたような、今にも逃げ出しそうな顔をしていた」

「……………」

思いきり最初から見られていたのではないか。

「己の『任務』に疑問を覚えはじめたか、逆に首謀者が恋しくなつたか、はたまた、エルマによる修行にうんざりしたか。心境は測りかねるが……ただこちらとしては、今あなたに逃げられるわけにはいかないんだ」

間近に迫り、耳元で甘く囁く様は、いかにも女たらしそのものだ。だがアナは、その熱が、自分に向けられているものではないということを、本能的に悟った。

「あなたに逃げられたら、エルマが異母兄の妻になってしまうかもしれない。その可能性は、なんとしても潰しておきたいのですね」

「……それが、あの女が準優勝にこだわる理由ですか」
「鋭いな」

ひっそりと笑うルーカスの手を振り払いながら、アナは少し考えた。

「まさかあなたたちは、恋人同士なのですか？ それにしては、彼女の方は、一度もあなたのことを口にしたことはありませんでした」
「が」

「……鋭いな」

ルーカスの笑みがわずかに強張る。

鋭いのは、観察眼というより、言葉が含む内容のほうということだろう。

それだけで、アナは二人のおおよその関係を把握した。

「おい待て、なぜ急に俺を哀れみの目で見る」
「いえべつに」

アナは意識的に表情を抑え込むと、忙しく思考を巡らせた。

話を総合するに、やはりエルマにアナへの害意は無いようだ。自分の正体に気付いているのは、ルーカスの言葉を信じてよいのなら彼一人。

そして彼は、暗殺者が王妃となるリスクを冒してでも、エルマの立后を阻止したいと考えている。

（あたしのことを見逃すのは、あたしのことなんていつでも無力化できると過信するがゆえだとしても　結局、このまま見逃してもらうほかにないってことか）

無理矢理結論付けると、少し気が楽になった。

相手にも思惑があり、かつアナのことを侮っているからこそ、彼らはこうして暗殺者の存在を許容している。

掌の上だと思うと腹立たしいが、ほかに選択肢がない以上、晴れの場に備えて、肅々と爪を研ぐしかない。

遙か高みの玉座にあるルーデン王フェリクス。

彼を殺害できるほど接近できるのは、今日枕問いがなかった以上、あとは最終選考後の表彰の場だけ。王妃内定者に首飾りを授けるという、その機会を利用するしかないだろう。

（ここまで来たら、やってやるさ……！）

皮肉にも、エルマの教育のおかげで、今の自分ならほかの候補者に負ける気などしない。

唯一、師匠であるエルマには敵わないだろうと思うが、そのエルマ本人が立后を避けたがっているのだから、つまり、自分を妨げる存在はなにもないということだ。

アナは拳を固めると、真っすぐにルーカスを見つめた。

「手足が冷えてまいりました。『明日に向けて万全を期したいので、そろそろお暇いとましても？』」

言葉に含ませた意図は、しっかりと伝わったようだ。ルーカスは端整な顔をほころばせて頷いた。

「もちろん。引き留めてしまい、失礼。あなたの優勝を、心より祈っている」

そうして、どうぞ、とバルコニーを掌で指す。

アナはもう言い訳もせず、ひらりと柱を伝い、部屋に戻った。

(ふん、すかした男だね。香水の匂いまで漂わせちゃってさ)

すっかり冷え切った二の腕をさすり、顔を顰める。いつの間にか、彼がまどっていた香りがこちらまで移ってしまっ

『趣味の悪い香りだねえ……ん？ 女物？』

くん、と改めて嗅いでみて、アナは首を傾げた。

恐らく、いや、確実に、これは女物の香水だ。

ここ数日の猛特訓に含まれていたビューティー講座で、エルマに叩き込まれたからわかる。

(……と、いうことは)

色男が女物の香水を漂わせている場合、考えつくのはひとつしかない。

彼がやってきた方角、そしてアナがバルコニーで佇んでいたところから見ていたという話も総合し、表情まで見て取れる距離を算出するに

(さては、迎賓館の誰かと逢引きしていた……?)

一瞬、エルマかとも思ったが、彼女は一切香水の類を付けない。

男のために装うことはあっても、バルドの子守りがある以上、強い香りは避けるだろう。

となると残るは、今まだ迎賓館に残っている候補者、
カロリー

アナに対するのと同じように、逃亡を阻止しに行ったとも考えられるが、こんなに香りが強く残っていると、やはり思いつくのは「そついう」可能性だ。

『おやおやまあ……いい男だこと』

アナは半眼になって皮肉った。

エルマを気にする素振りを見せながら、これとは。

するとすぐ背後から、

『本当にいい男ですよね』

静かな相槌が返ってくる。もちろんエルマだ。

アナはぎよつと飛び上がった。

『な……っ、なななっ、なんであんたがここにいるんだよ!』

『それはもちろん、寝かしつけが完了しましたので、次はアナ様のお世話をと。今、バルたんを褒めてくださったのですよね? 夜を徹してのバルたんトークでもします?』

『断固拒否する! ってーか世話とかいらなから! 普通に、ガキと一緒にそのまま寝てるよ!』

『……………』

『いや、だから、いちいちそんなことで感動の視線を向けないでくれる!?』

やはり、エルマと話していると、冷静な思考力がどこかに行ってしまう。

すっかりペースを乱されたアナが、肩で息をしていると、甲斐甲斐しく水を差し出していたエルマがふと視線を上げた。

『アナ様。随分と経済的な香りの香水を召されていますね』

『…………安っぽいって素直に言えよ。あたしだってこんなの』

趣味じゃない、と言いかけ、アナは口を噤んだ。

これが移ったものであることを告げると、誰に会っていたかも説明しなくてはならない。

芋づる式に、ルーカスの女の趣味にまで話が及びそうで、それが少々躊躇われたのだ。

言いよんどんでいると、エルマは沈痛な面持ちで頷いた。

『…………私が愚かでした』

『はっ。』

「アナ様、考えてみればこの三日間、私があなた様にご指南申し上げたのは、どちらかといえばイザーク・ギルベルトライン……武闘部門の内容ばかりでしたね。王妃の資質を磨かねばならないこの期間、リーゼル・マリーライン……即ち美容部門を、あまりにも疎かにしすぎました」

「は？」

その、なんとかラインというのはなんなのだ。

嫌な予感を感じ取って硬直したアナに、エルマは手を取りながら優しく微笑みかけた。

「大丈夫。最終選考開始まで、まだ十二時間以上もあります。香水の選び方の復習から、バイオテクノロジーを用いた生け花、爆速カラー診断、ケミカルメーカーアップ術。今この瞬間から、私の持てるすべての美容知識を、あなた様に捧げますね」

「とところどころ不穏な単語混ぜるの、ほんと止めてほしいんだけど！」

アナは全力で手を引こうとしたが、離してもらえなかった。

「早速香水についてなのですが、香水というのは単に芳香を楽しむだけでなく、極めれば精神操作や洗脳といったことも可能でして、そのためにはまず化学式で香りの分類を」

「滑らかに応用編に入らないでくれる!？」

にこやかに授業に移行しようとするエルマを、アナは必死で遮る。だが、エルマは「いえいえ」と、こともなげに反論した。

「応用編だなんて。私たちの身の回りにも、こうしたものは平然と紛れ込んでいるものですよ」

『は？』

『例えば……そうですね、今日の養護院の畑に咲いていた白い花、ご覧になりましたか？』

質問の意味が、一瞬理解できなかった。

養護院の畑に咲いていた白い花。

それは、アナの村にも咲いていた、可憐なあの花のことだ。

『え……？』

『寒く荒れた土地で咲く、ありふれた雑草の一種です。咲いているときはほぼ無臭なのですが、花弁を潰すなどして加工すると、甘い香りがするのですよ。香りは鎮静作用を持ちますが、長期間嗅ぎつづけると、精神の働きが鈍り、洗脳が容易になります』

エルマの説明が、頭に入っていない。

いや、脳内でなにかが繋がってしまうのを、アナは無意識に拒否していた。

村でよく見かけた白い花。

地味だけれど、加工すると、不思議とよい香りがする。

「無毒の」植物が歌声によって異常生育していた中、かの花は、たった一輪だけ、小さいままで揺れていた。

つまり。

アナはぎこちなく首を巡らせ、寝台脇の机を見た。

ここ数日身に着けていない髪飾り、それをしまっていた引き出しを。

かつて養父から贈られた、白い花を模した髪飾り。

先端に付けられた鈴の音は軽やかで、鼻先を近付けければ、本物の花と同じ香りがする。

(つまり……?)

『アナ様。特訓に集中してくださいませ。香水の話がお嫌でしたら、先にそれ以外の美容部門について徹夜で講義を進めますが、それによろしいですね?』

『あ……ああ……』

気もそぞろに返事をする。

恐ろしい言質を取られてしまったと彼女が気付いたのは、数分後のことだった。

15・「普通」の慈善活動(6)(後書き)

この後の幕間が短いため、今日中にもう1話投稿させていただきま
す。

16 灰かぶり姫 (前書き)

短いので、本日中に投稿します

16・灰かぶり姫

「そろそろクライマックス、というところかしら」

ハイデマリーは、手にした絵と、テーブルに残った絵の枚数を見比べて、小首を傾げた。

既に並べ終えた絵を、改めて確認する。

灰かぶりと魔法使いの出会い、鉄靴を履いてのダンス修行に、汚れにまみれての豆拾い修行。

鍛錬の日々が続いたから、そろそろ灰かぶりにも、主人公らしい活躍の場があつてほしいところだ。

「ということ、やはり次は、このあたりよね？」

白い指が次に摘まみ上げたのは、最も豪華な一枚だった。

どこからともなく差し込む光に包まれながら、中央に立つ灰かぶり。

薄汚かった普段着は、光の当たった箇所から光沢のあるドレスに変わり、煤にまみれていた顔も、美しく化粧が施されている。

なにより、真つすぐに観客を射抜くような視線が、清々しかった。

いかにも、辛い修行の日々を終えて決戦に向かう、とでも言わんばかりの風情がある。

「ね、そうでしょう、ギル？」

「……ああ」

良識を愛情によって溶かされてしまったギルベルトは、そっと視線を泳がせるだけだ。

それでもハイデマリーは満足げに頷くと、ふと、灰かぶりの背後に描かれた時計に視線を落とした。

「あら。なぜこんなに思わせぶりに時計が描かれているのかしら。舞踏会で時限爆弾でも仕掛けるの？」

「……いや。たしか俺の記憶では、灰かぶりが美しくいられるのは十二時の鐘が鳴るまで、という制約があったはずだ。恐らく、それを表現しているんだろう」

極力、ハイデマリーの考えたストーリーを崩さぬよう、控えめに申し出る。

すると、ハイデマリーは「そうなの」と目を瞬かせた。

「たしかに、三分間だけしか変身できない、みたいな制約があったほうが、物語として面白そうなものね。彼女の場合、それが十二時の鐘が鳴るまで、ということなのね」

幸い、指摘は受け入れられる内容であつたらしい。

ハイデマリーは感心したように頷き、それから、凜と佇む灰かぶりのことをそっと指で撫でた。

「さあ、いよいよね、お姫様。十二時を告げる鐘の音には、どうか気を付けて」

奇しくもそれは、本来の物語で魔法使いが告げる言葉と、そっくり同じものだった。

17・「普通」の美貌(1)

「信じられない！」

アナは、緩やかな眠りに落ちそうになっていたところを、少女の元気な声によって引き戻された。

「あなたたち、性懲りもなく徹夜していたの！？ エルマ、あなたはともかく、普通の人間のアナ様を巻き込んで、だめじゃないの！」

ぷりぷりと、友情の感じられる怒声でエルマを詰めるのは、たしかイレーネという侍女だ。

デボラという巨乳の侍女とともに、様子を見に来たらしい。

朝食なのか、パンと果物の詰まった籠を持っていたが、イレーネはその籠を振り回しそうな勢いでエルマに詰め寄っていた。

「いくら最終選考直前とはいえ、追い込みすぎよ！ 肝心なところでアナ様が倒れでもしたらどうするの？」

「いえ、私ももちろんアナ様のご様子を見ながら、あくまで大丈夫と思える範囲で」

「大丈夫じゃないから、アナ様は今、刺繍道具と数学の教本を持ちながら、変なポーズで白目を剥いてるんでしょう！？ 彼女を殺す気！？」

叫びの内容を聞き取って初めて、アナは自分が、ヨガの「立木のポーズ」を決めていることに気付いた。

朝陽が差し込む部屋の真ん中で、丹田に軸を据えながら凜と片足

立ちする彼女は、この瞬間、一本の木だった。

(いけね。うっかり美のサットヴァに同化してたわ……)

もはや、こつした瞑想をしながらの鍛錬に慣れ過ぎていて、この体勢に違和感がなくなってしまうている。

ぼつりと抱く感想まで、すっかり「普通」を逸脱しはじめていたが、本人はそれに気付いていなかった。

(これまでに比べて、今日は最終選考直前つてことで、かなり手加減してもらったのにな。ちょっと気い抜きすぎだわ、あたし)

さりげなく足を戻しながら、アナはこっそりと口元を歪める。

結局今日は、十冊ほど教本を読み、解剖を五十回ほど繰り返し、顔料を百色に分類し、精油を二百種類精製し、その他、刺繍裁縫左官工事といった女性の嗜みを復習しつつ、合間に一般教養を確認していただけた。

これまでの猛特訓に比べれば、破格の優しさと言っている。

アナ自身も、始まる前は悲鳴を上げて逃げようとしていたが、いざことを成し終えてみれば、こんなものかという気もする。

合間に、美容講座の一環として、エルマにエステや酸素カプセルなるものを体験させられたので、それもあつて負荷が少なく感じるのかもしれない。

それに、

(集中してれば……変なことを考えなくて、済むしな)

ふとした瞬間、脳裏によみがえる花の香り。
それが示すかもしれない不吉な事実から逃げるには、うってつけの環境だった。

アナが体勢を戻し、「まだいける」と目で訴えると、エルマが小さく頷く。

彼女はどこからか数学の教科書を取り出し、くいと眼鏡のブリッジを上げた。

「では、朝食の時間となりましたので、数学を一冊分学んでから一度終了としましょう。解説はルーデン語の方が相性がよいので、ルーデン語で失礼します。まず、基本中の基本ですが、 $1 + 1$ は？」
「2です」

「素晴らしい。基本はばつちりですね。さて、これを応用すると、
$$\frac{1}{n!} = \frac{1}{1 \cdot 2 \cdot 3 \cdot \dots \cdot n} = \frac{1}{n!} = \frac{1}{n \cdot (n-1)!} = \frac{1}{n} \cdot \frac{1}{(n-1)!}$$

となりまして、
「なるほど、さっぱりわかりません」

基礎から応用までがぶつ飛びすぎなエルマの講義スタイルにも、もう慣れた。

思うに、エルマは有能だが、有能すぎるのだ。
だから、 $1 + 1$ と、よくわからない公式が、地続きに繋がってしまえる。

自分が大いに飛躍していることにも気づけない。

けれどアナは凡人だ。

それも、生まれ持った教養高さなど、けっして持ち合わせていない類の一般人。

けれど、だからこそ、彼女は臆面もなくエルマに問いかけることができる。

「まず、と と！の意味、それから（ ）の種類について教えてもらえますか？」

「あ、失礼いたしました」

こうして、何度も何度も問いかけて、エルマが一回で飛んでしまっその空間を、ちまちまと埋めていくしかないのだ。

「 というのは円周率を表す記号で 」

「 円周率とはなんですか？」

おかげで、一回で済むはずの実験は五十回になるし、講義はエルマの思い描くものに比べれば亀の歩みだろうが、仕方ない。

これが自分の精一杯なのだから。

いつの間にか爆速となった書き取りをしながら、エルマを質問攻めにするアナの姿を見て、イレーネはあんどりと口を開けた。

「 …… なんだか、アナ様って…… 」

「 努力の天才でいらっっしゃいますわね 」

デボラまでも、アナの凄まじい根性の据わり方に、第一使徒の座の危機を感じたのか、唸り声を上げている。

「 普通、圧倒的な謎に相対すると、人はすぐに諦めてしまいます。けれど彼女は、自分がなにがわからないかを、きちんと捉えている。エルマ様と比べて、ご自身を至らないと思いついていらっっしゃるようです…… こんなにも根気強く、エルマ様に付いていく人間を、

わたくし、自分以外に初めて見ましたわ」

見れば、三日前まで、エルマに昆布一つで身動きを封じられていたはずの彼女は、今やエルマに鋭く質問を飛ばし、恐縮させている。背筋は伸び、体幹は揺らぐ、瞳にはきらめくような知性が滲んでいた。

なにより、ふとした拍子に染み出るようだった、世を拗ねた雰囲気、今は欠片もない。

エルマという異常な少女に、全力で食らいついていく様子は、ただ健全な熱意に溢れていた。

もしかしたら、と、イレエネは密かに喉を鳴らす。

(もしかしたら、……本当に彼女が、王妃になるかもしれない)

窓から差し込む朝陽が、まるで希望の光のように胸を照らした。

王宮の外れにある鐘楼が、澄んだ音色で朝を告げる。

長く余韻を引く音は、どこか鈴の音にも似て、聞く者を軽やかな気持ちにしてくれる。

最終選考が、いよいよあと数時間で、始まるうとしていた。

最終選考は、初日と同様、鐘楼のすぐ隣の屋外演劇場で行われることになっていた。

候補者が三人にまで減った今、関係者席は随分減っていたが、それ以上の観客が押し寄せたらしく、客席は初日以上にびっしりと埋まっている。

混雑と危険を避けるために、アナたち候補者は早めに舞台袖に通され、そこで時間を過ごすことになった。

すり鉢状の客席から、まるで渦を描くようにして注いでくるざわめき。

言葉としては聞き取れないそれに、アナがぼんやりと耳を傾けていると、横から話しかけてくる者があった。

「ねえ、そのあなた」

くるくると髪を巻いた、細身の女性。どこか高慢そうな釣り目が印象的な伯爵令嬢、カロリーネ・フォン・ファイネンである。

彼女はやけに寛いだ様子で、控えの椅子に腰かけていた。

「わたくしたちの出番まで、まだ三十分近く。退屈だわ。おしゃべりでもしましょうよ」

そう言う顔はにこやかで、口調も気さくだ。

だが、エルマから仕込まれた微表情を読めば、彼女がなんらかの策を巡らせていることはすぐわかる。

アナはごくわずかに眼球を動かし、いつの間にかエルマが舞台袖から離れているのを確認した。バルドにミルクをあげ、寝かしつけているのだ。

笑い崩れながら頬ずりしているところを見るに、彼女がこちらに

戻ってくるまで、まだまだ掛かるだろう。

押し付けるわけにはいかなそうだ、と判断し、アナは人畜無害そうな笑みを貼り付けた。

「光栄でございます、ファイネン様。ですが私は、あなた様を喜ばせるような話題にも疎い、田舎育ちの娘でございます。エルマ様がお戻りになるのを、待たなくてよろしいですか？」

「やだわ、あんな女」

だが、カロリーネは即座に申し出を拒否する。

扇を広げ、意地わるそうな顔を隠すと、内緒話をするようにアナに顔を近付けた。

パーソナルスペースへの接近。親密感の演出だ。

「実はわたくし、あなたとお友達になりたいと思っていたのよ。だってあなたって、とても素直で、愛らしくて、しかも度胸のある方だもの。わたくし、そういう方が王妃になるべきだと、ずっと思っていたの」

媚びるような声に、アナは内心で首を傾げた。

自分を持ち上げて、カロリーネになんの得があるだろう。

油断させたいのかとも思ったが、彼女ならこうした場合、油断させるよりも、素直に恫喝するタイプのような気もする。

戸惑いの色をあえて滲ませてみせたアナに、カロリーネはくすりと笑い、さらにぐいと顔を近付けた。

途端に鼻先をかすめる香水は、エルマの表現を借りるなら、とても経済的な香りだ。

「ねえ、あなたの殿方の好みって？」
「はい？」

突然目先の変わった話題に、アナは素で眉を寄せた。

だが、カロリーネは、まるでこの話題運びに酔ってしまったかのように、芝居がかった笑みを浮かべている。

こちらが乗らない限り、話を進めないのだと悟ったアナは、内心でげんなりしながらそれっぽい言葉を紡いだ。

「そうですね……。ええと、やはり、尊敬できる方で、包容力や指導力があって……」

男の好みなど考えたこともない。

必然、思い描くのはロドリゴ侯爵だ。

「穏やかで、いつも笑みを湛えている……とかでしょうか」

だが、昨日からずっと、その笑みが本物であったかどうか、それほどばかりが頭をよぎる。

ここから一番近い観客席には、いつもの温かな笑みを浮かべた彼が、関係者として座っているのだろう。

ずっと心の支えにしていたのに、初日はそれどころではなくて姿を見られず、二日目は観客の立ち合いが許されなかった。

三日目の今日、ようやく養父の顔を見られると言うのに、今、それがひどく躊躇われる。

「そうなの。おとなしい男性が好みなのね。でもわたくしは違うわ」

思考の闇に引きずり込まれそうになったところを、カロリーネの声によって引き戻された。

見れば、彼女はいいと唇の端を吊り上げていた。

「わたくしはね、華やかな男性が好き。ユーモアがあって、手馴れていて、スマートで。美形ながら勇ましい、ルーデナーの色男」

「どうやら、こちらの好みに興味などなくて、単に自分語りがしたかっただけらしい。」

そして、やけに詳しい彼女の好みが、誰を指しているのかは明らかだった。

ルーカス・フォン・ルーデンドルフ。

昨日アナと遭遇した、あの王弟である。

「ねえ、知っていて？ 選考会ってね、べつに優勝して王妃にならずとも、最終選考にまで残ればメリットはいっぱいなよ。女として格が上がる、縁談が有利になる、ほかの王族との婚約も認められる……そう。わたくしは元から、あんな薄ぼんやりした陛下なんて興味はなかったの」

カロリーネはそこでふふっと笑うと、秘密を分け合うように目配せをした。

「わたくしは、むしろここで敗退して、ルーカス殿下に近付きたいと、そう思っているのよ」

表情を見るに、それは本心からの言葉なのだろう。

だが、カロリーネの希望というよりも、やけに確信めいた口調であったのが、少し気に掛かった。

じっと見返すアナに、カロリーネは意を迎えるように微笑みかけ

る。

「だからね、あなたにはぜひ頑張ってもらいたい。あんな、エルマとかいう庶民の娘なんかよりもよほど、あなたのほうが王の妻にふさわしいわ」

「……エルマ様をお嫌いなのですか？」

「大嫌いよ。わたくしは、『美と芸術を司る』とまで評されたファイン家の娘。なのに、あの女はそんなわたくしを、かつてこれ以上ないほど虚仮こけにしたわ。もっとも、あれから研鑽けんけんを重ねたわたくしには、もはや敵ではないけれど……だからあの女も、初日ダンスは避けたのだろうし。あなた、あの女が観客に奇妙な暗示を施した後の出番で、幸運だったわね」

そう言い切るカロリーネの自信家ぶりにびっくりした。

どうやら、アナのダンスは、「エルマが歌で観客を催眠状態に陥れていたゆえの高得点」と解釈されているらしい。

これほどまでに、自分に不都合な事実を無視して生きられるなら、人生楽しそうだ。

カロリーネは、扇についた羽を揺らすように、くすくすと笑った。

「その点、あなたは、他国とはいえ、侯爵令嬢でしょう？ わたくし、美や芸術、そして家格については絶対に譲れないけれど、逆に言えば、それ以外のことについては寛容な女なのよ」

つまり、家格以外ではアナのことも認めていない、ということにもなる。

白けた思いで見守っていると、カロリーネはその視線にも気付かず、にんまりと目を細めた。

「だから教えてあげる。今回の最終選考、きっと課題はくだらないものはずよ。例えば、制限時間内にげっぷを何回できるかとか、一度で何個パンを頬張れるかとか。それに勝っても、むしろ女の品位が下がるようなものばかり」

これもまた、やけに確信に満ちた物言いである。

そういえば、昨日の養護院では、準備よく手袋を取り出していたことをアナは思い出した。

「カロリーネ様は、なぜ」

だが、問おうとしたその時、

「なぜ。なぜなのでしょう。なぜバルたんの寝顔はこんなにも愛らしいのでしょうか。寝顔が見たいと渴望する心と、起こして笑顔が見たいと逸る心に、人類はどう折り合いをつけてゆけばよいのでしょうか」

エルマが眠ったバルドを抱きかかえたまま、真顔で席に戻ってきたので、つい口を噤んでしまった。

「教えてください、アナ様」

「いえ知りませんが」

「そうですね。バルたんの示す悠遠なる命題を、平凡な我々が解き明かすのはあまりに難しい……同感です」

なにに同意されたのだろう。

だが、その辺りを拾ってしまうと、延々と問わず語りというか、バルたんトークが始まってしまうことはもうわかっている。

アナは沈黙を守ろうとしたが、よせばいいのに、カロリーネがエルマに向かつて身を乗り出した。

「あらあ、エルマさん。あなたって、本当にずっと弟君を抱っこしていますのねえ。所帯じみたその仕草が、とつても板に付いてますわあ」

「え、そんな……」

「そこで照れないでくださる」

エルマがもじもじとしたので、ついカロリーネの声がどすの利いたものになる。

だがすぐに彼女は体勢を立て直すと、嫌味っぽく片方の眉を上げてみせた。

「まあ、あなたはそうやって、おままごとに夢中になっていればよろしいわ。赤ん坊の世話に没頭して、女としての勝負も投げ捨てて、そのまま年老いてしまえばいい」

随分な言い草だ。

が、たしかに今の状況を見る限りでは、毛先まで丁寧に巻き、上等なドレスをまとったカロリーネと、ひつつめ髪に眼鏡姿、そして徹夜明けの少しばかりくたびれたメイド服姿のエルマでは、前者のほうが輝いている。

きょとんと見返したエルマに、カロリーネは失望したように鼻を鳴らした。

「馬鹿にするのもいい加減にしてちょうだい。こんなダサイ女に、かつてわたくしが打ち負かされたなんて、記憶に残したくもないわ。よくって、わたくし、あなたにだけは絶対負けなくってよ」

椅子を蹴るようにして立ち上がり、彼女は舞台へと足を向ける。

「女としての序列も、……殿下の隣の座も、ね」

振り向きながら、低く一言付け足した。

聞き違えようのない、宣戦布告。

エルマはどう受け止めたのかと隣を見てみれば、相変わらず彼女は、優しい手付きでバルドの頬を突く^つだけだ。

(無反応。脈無しってかい)

あーあ、と肩を竦めそうになった直前、アナはふとあることに気付いた。

眼鏡でほとんどを覆われたエルマの顔。

なにを考えているのかわかったものではないが、ここ数日で急激に鍛えられた微表情解読スキルが、エルマのとある感情を告げてる。

わずかに見える眉はほんの少しだけ持ち上がり、唇は微細な緊張を湛えて口角が後方に引かれる。

これは

(もしかして、こいつ……)

だが、アナがある仮定を思い浮かべるよりも早く、観客席がわあっと盛り上がるのが聞こえた。

「いやー、盛大な歓迎の拍手をありがとう。それじゃあ、今日も堅苦しい挨拶は抜きにして、ちゃきちゃき選考を始めようと思います」

反対側の舞台袖から登壇し、気の抜けた宣言をするのは、フェリクス。

「いよいよ最終選考が始まるのだ。」

フェリクスの間延びした声で名を呼ばれ、アナたち最終候補者三人は、同時に舞台上った。

半円形を描いた舞台の中央には、なぜか間仕切りが設置されて小さな個室ができています。

そして前方、舞台の外周をぐるりと埋め尽くすのは、大量の服や靴、帽子や香水、化粧品といったものたち。

「……………?」

これは何ごと、と眉を寄せたアナたちに、フェリクスはにこやかに頷いた。

「ここに残った君たちは、才能に溢れ、肝の据わった素晴らしい女性たちだ。だからねえ、あとはやっぱり、美貌と忠誠心のあたりを試しておきたいかなあと思って」

「えっ」

初日から一発芸大会のようだったので、ここにきてストレートなビューティーコンテストとは予想外だ。

カロリーネも当てが外れたと言わんばかりに、小さく叫んでいる。

美や芸術以外のことなら他者に譲ると言っていた彼女も、こんな美のど真ん中を競い合うような内容では無視できないだろう。

戸惑いの表情を浮かべたカロリーネだったが、フェリクス 次の言葉を聞いて、さらに顔色を失った。

「僕としては、妻となる女性には、自分で自分のケツを拭くっていうか、まあ、身支度くらい自分で整えてほしいんだよねえ。……というわけで、一同、すっぴんになってから、身支度をしてみてくれるっ。」

18・「普通」の美貌(2)

「僕としては、妻となる女性には、自分で自分のケツを拭くつていうか、まあ、身支度くらい自分で整えてほしいんだよねえ。……というわけで、一同、すっぴんになってから、身支度をしてみてる？」

「な……っ!？」

素顔を晒すなど、本来は将来を誓った男性にしかしない行為だ。

そして実際問題として、大抵の貴族令嬢は、自らの手で化粧筆を握ったことすらない。

「へ……陛下、婚前のわたくしどもに、素顔を晒せなど、あんまりな……」

「えー、だって君たちは、婚前に性交渉するくらいの覚悟でこの場に臨んでくれてるんでしょー？ それに比べれば、些細なことじゃない。これが僕式の枕問い、とでも思つてよ」

世間体を言い訳に抗議したカロリーネを、あっさり一蹴すると、フェリクスはにこりと候補者たちを見回す。

それと、と呟いて、彼は使用人に合図して小ぶりなバケツを取り寄せると、ぱしゃっとその中身を、候補者たちに浴びせた。

エルマはすかさずバルドを高く掲げて守ったが、三人ともしつかり服に黒い液体を吸わせることになった。

「な……っ! な、ななな……!」

「ただの墨だから安心してー。着替えなきゃって、モチベーション

が上がるでしょ？ 僕なりの親切ね。ほら、王族ってこういういわれなき汚れを浴びせられることもあるから、そのの比喻っていうかあ、弁償代わりに、このドレスは好きに持っていいからね」

墨はすっかりドレスに染み込んで、落としようがない。

後に引けなくなったカロリーネ、そしてほか二人の候補者を公平に見まわしながら、フェリクスは相変わらず、狐のような笑みで続ける。

「化粧道具、ドレス、装身具一式、すべて用意してある。君たちがどんな美女ぶりを見せてくれるのか、とても楽しみにしているよ」

そうして、いつの間にか運び込んでいた銅鑼をぼーん！ と鳴らし、さっさと選考を開始してしまった。

「はい、メイクはこれで落としてねー」

「……………っ！」

とどめとばかりに、濡らした布を配布され、カロリーネは絶句する。

ここで着替えず、化粧を落とさねば、「美を競う選考で、スターラインにも立てなかった」という評価が彼女を待っているわけだった。

歯ぎしりするようにして、ぱっと個室に引っ込んだカロリーネをよそに、アナは舞台に佇んだまま、色とりどりの衣装や宝飾品、そして手の中の布巾を見つめた。

さすが王宮支給品、布巾ですら一級品だ。

(……はん。わざわざ綺麗な服を着させて、それを墨で汚して。高価な化粧品を塗りたくらせて、それを、贅沢に布を使って落とすわけだね)

一通りの美容講義を受けたアナは、この布が使い捨てであることを知っている。

泥を塗って寒さをごまかし、赤子を包む布を求めて乏しい金を掻き集める　そんなアナたちの暮らしとは、なんと違うだろう。

「どうかした？」

不意に、目の前の男が顔を覗き込んできたので、アナは咄嗟に笑みを貼りつけた。

「……いえ、なにも」

許せない、と思う。

この男は、アナたちが強いられてきた理不尽の象徴だ。搾取という名の厚着に包まれ、ぬくぬくとしている。他人に真つ黒な墨を浴びせ、平然と笑っている。

こんな人間がいるから、重税を課されたアナたちはいつも飢え、凍えていた。

(やっぱり、ロドリゴ様なんだ。あたしたちに唯一手を差し伸べてくれたのは、彼。あたしは、ロドリゴ様を信じるべきなんだ)

昨夜から揺らいでいた心が、急にすつと固まるのを感じる。

エルマにほだされ、尊敬すべき養父を疑いはじめるなんて、どうかしていた。

彼があの日白い花を差し出したのは、そしてその香りをまとった髪飾りをくれたのは、単なる偶然だ。出会ったときから、彼はいつだってアナに優しい笑みを向けてくれていた。

そうとも。

流刑地で凍えていたアナを、彼だけが救い、彼だけが真つ当な人間にしてくれた。

(ロドリゴ様だけが)

アナは意を決して、ぱつと観客席を振り返る。

そこでは養父が、あの穏やかな、慈愛深い笑みを浮かべてアナのことを見守っているはずだった。

数日ぶりに、しっかりと彼の顔を捉える。

聖侯爵にふさわしく、白い司祭服をまとった彼は、やはり微笑んで、熱心にアナを見つめていた。

だ　　が　　。

(ロドリゴ、様……)

アナは、無意識に目を見開いてしまう。

大好きだった、養父の笑み。

いつだってアナを喜ばせた彼の表情。

しかし、目の周りの筋肉や、眉の角度、唇の強張りといった「微妙」表情が示す感情は、彼女を一瞬で絶望の底に突き落とした。

「いよいよ始まったわね……」

舞台上に候補者が揃ったのを見て、イレーネが観客席で両手を組む。

ここまで、圧倒的にエルマ優勢で来ているかに思われる選考会。

最終課題はなにかと気を揉んでいたら、意外にも、普通のビューティーコンテストみたいなお題が出た。

もともと、墨をぶっかけるくんだりは、さすがフェリクスとしか言いようのない鬼畜さが滲み出ているが。

「それでも要は、美人コンテストでしょう？　どんな美女に化けるかって……そんなの、いくらほか二人が頑張っても、エルマがぶっちぎりで優勝に決まってるじゃないの。あの子の顔面は天才的よ！？」

焦りの余り、独り言までもが叫び声になる。

「あら、わかりませんわよ」

だがそこに、やけに平坦な口調で反論しながら、デボラが腰を下ろした。

「エルマエル様の顔面が、奇跡認定されるくらい美しいのは重々承知しておりますが、同時にその御手は、あらゆる造形を自在に操る神の御手。エルマエル様にかかれれば、不美人に仕上げることももちろん可能ですもの」

相変わらず暑苦しくエルマの応援グッズを手にしているのかと思いきや、今日の彼女は、なぜか「アナ様ファイト！」と書かれたハチマキやプラカードを手にしている。

勢いよく振り回せば、それだけで市民票をアナに誘導できそうなほどには、豪華な品々であった。

「……どんな状況でも一貫してエルマを応援する、のではなかったの？」

怪訝に思ったイレーネが眉を寄せると、デボラは悲愴な顔で、齒の隙間から押し出すような声を出した。

「人質を取られましたの」

「はい？」

「人というか、厳密には本だがな」

と、今度はそこに、涼やかな低音が降ってくる。

イレーネはぱつと顔を上げ、その正体を理解すると瞳を輝かせた。

「ルーカス殿下！」

そこには、鎧を外し、シンプルなシャツとズボン姿のルーカスが立っていたのだ。

彼は、ここ数日の険しい表情をどこかに流し去ってしまったように、すつきりとした顔つきをしていた。

かつ、その男らしく長い指の先には、白百合が描かれた表紙の本が摘ままれている。

「それは……？」

「うん？ デボラ嬢がいつの間にか図書室に蔵書させていた書物だな。明らかにエルマがモデルとわかる人物が、美化されまくったどこぞの辺境伯爵令嬢と愛を育む物語だ。それも、かなりいかがわしい、春書と呼んで差し支えない部類のな」

ルーカスは、その端整な顔に、皮肉っぽい笑みを浮かべてみせた。

「そこでだ。『エルマが万が一立后したら、彼女をモデルとした春書は不敬に当たる。よって、エルマが優勝したら、この書物は版と子ども、即座に燃やさなくてはならない』と、ごく当然の事実を提示してやったんだ」

「くう……っ！」

デボラが目頭を押さえその場に蹲る。

彼女は八チマキを握りしめた手を震わせ、何度も石の床を叩いた。

「鬼畜の所業ですわ……！ これは、世界に二つとない至高の愛の物語……っ。全八百ページ、総編集時間二百日にも及ぶ大長編を、版ごと燃やすと脅すなど……っ。わたくしとエルマエル様を引き裂く、この悪魔め……っ！」

「結局のところ、現実のエルマより二次元を優先しておいて、なに

を言う」

「それはだって……っ！　そもそも、エルマエル様はべつに、優勝を望んでおいでではなかったわけですし、応援を取りやめるのも、結局はエルマエル様のご意思に適うと判断したからで……っ」

冷静なツツコミに、デボラがえぐえぐと反論する。

イレーネはじつとそれを見つめ、やがて静かにデボラの肩に手を置いた。

「あなたが応援先を変えたことは、最終的にエルマのためになると思うもの。判断を恥じる必要はないわ。それに……できうる限り愛読本を守りたいと願う気持ち……、それは誰にも否定されてはならない」

「イレーネさん……？」

「なぜかわかる？　それはね。その本は、私たちにとってはただの紙の束じゃない。愛と信仰と真実が詰まった、聖書だからよ」

「イレーネさん……！」

デボラが驚いたように顔を上げる。

なにかと反目していた、二つの正義の使徒は、この時初めて互いをしかと見つめ合った。

「思えば私も視野が狭かったわ。脳内補完により同性間に愛を生じさしむる高度な知的遊戯……。薔薇であれ百合であれ、その滾るような情熱に違いなどなかったのに。ねえ、デボラ。私たちは今こそこの腐訓を胸に刻むべきだわ。『誰かの受けは、誰かの総攻め』。

『誰かの地雷は』」

「『誰かの主食』……！！」

相性の悪かった二人の間に、なぜかこの局面で友情が芽生える。

ひしつと両手を握り合った二人の前で、

「で、そろそろ話を戻していいか？」

死んだ魚のような目をしたルーカスがぼそりと突っ込みを入れたので、イレーネはいよいよ嬉しくなった。

やはり、こうでなくてはいけない。

「殿下、もうお怒りは解けたのですね。エルマの立后妨害に、力を貸してくださいさるのですね」

うきうきと確認すると、ルーカスは「まあな」と苦笑を浮かべる。

「俺も相当甘ったれていたと、気付かされた。目が覚めた以上は、いい加減、あの鈍感生命体に、俺の思いの丈を理解させるぞ。まずはとにかく、立后たごうごの阻止だ。すでにいくつか手は打ってあるが、アナスタシア嬢が身支度を終えた時点で、確実に市民票が彼女に集中するよう、観客を誘導」

だが、彼が具体的な策を披露するよりも早く、周囲からわあああああっと歓声が響いた。

「えっ？ まだ誰も身支度を開始しては」

慌てて舞台を覗き込んだイレーネは、ついで息を呑む。

そこでは、眼鏡を外し、濡れた布に顔を埋めていたエルマが、ゆっくりと顔を起こしているところだった。

「な……っ、なんて美しい……っ！」

「光り輝くような肌だ！」

「素顔のほうが美しいだなんて……っ！」

遠目にもわかるほど透き通った白い肌に、完璧な左右対称を描く瞳。紅を差していないはずの唇や頬はほんのりと色づき、まるで水滴を湛える花弁のような瑞々しさだ。

エルマが赤子を抱えたまま、もう片方の手で、お団子頭に指を差し入れる。

絹のような黒髪は宙で波打ち、はらりと肩を覆った。

「あああつ、そうだった……！　むしろあの子、すっぴんのほうが破壊力が凄まじいんだ……！」

イレーネは絶望のうめき声を漏らした。

19・「普通」の美貌(3)

「あああつ、そうだった……！　むしろあの子、すっぴんのほうが破壊力が凄まじいんだ……！」

「はああああん！　ほどいた髪がしつとりと濡れた頬にかかる様子がまた、天才画家の無造作な線で描かれた絵画のように、えもいわれぬ無限の美を醸し出している！　聖母子！　聖母子がいますわああ！　五億点満点！」

「よせデボラ！　プラカードを上げるな！」

脊髄反射で力強くプラカードを掲げようとしたデボラを、ルーカスがすんでのところで食い止める。

デボラは慌てて応援グッズを引っ込め、

「エ……エルマエルさまの、す、すすすっぴんなんて、ぜ、全然大したこと、ないひゃなひのオ……っ？」

盛大に声を裏返しながら野次を飛ばす。くつきりと刻まれた苦悶の表情は、まるで踏み絵を強いられる信徒のようだった。

が、そんな努力も虚しく、観客はエルマの素顔の麗しさに釘付けになっている。

「もつさ……化粧する前からこれって、反則じゃねえか？」

「ああ、ぶつちぎりだ……。ぶつちぎりで彼女がナンバーワンだ……」

「もはやどんな存在も、この美しさを邪魔することはできない……」

だが実際には、その圧倒的美貌をまかすませる物体は存在したものである。

「はっ！」

掛け声一閃、エルマがひらりとその場で回転すると、先ほど手放したはずの眼鏡がすちゃっと装着され、解いたはずの髪もお団子頭に戻っている。

白磁の肌はいつの間にかくすみ、墨で汚れたメイド服は、真新しいそれにとって替わられていた。

ついでに、相変わらず抱っこしているバルドまでも、洋服とスタイ、そして髪分け目が変わえられている。

「おお……っ」

観客たちはどよめいた。

まるで、眼鏡が顔面に飛び込んでいったような、あるいは時間を巻き戻したかのような、不思議な光景。

結果として、かなり地味というか、冴えない仕上がりだが、ビフォーを知っている観客たちからすれば、その仕上りの悪さはむしろ完成度の高さを窺わせる。

美女になったわけではなかったが、高度な身支度を誰よりも速く整える、という意味では、やはりエルマがナンバーワンであった。

「あのおバカ……。ここからどう巻き返すつもりなのよ……っ」

イレエネがこめかみを押さえていると、ふと舞台上のエルマと
というか眼鏡と目が合った。

彼女は、イレーネの横にルーカスがいるのに気付くと、少し驚いたような素振りを見せる。

それからなぜか、誇らしげな表情を浮かべてなにかを告げた。

唇の動きを追ったイレーネは、紡がれた言葉を考え、眉を寄せた。

「隊長受け、ほの暗い、夢中です……？」

「大丈夫、このくらい、普通です、だろ」

即座にルーカスによる素早い訂正が入る。

彼は、エルマが指し示す先を視線で追い、静かに呟いた。

「アナスタシア嬢に注目しろと言っているようだ」

アナは、濡れた布でメイクを落としきったところだった。

現れた素顔は、辺境国出身というわりに随分と綺麗に手入れされているようだ。もちろんエステの効果である。

ただし、エルマのような、見るだけで魂を奪われそうな美しさはなかった。

「ふん……可憐、と言ったら聞こえはいいけれど、地味ねえ」

「仕方ないだろ、辺境国の娘なんだから。田舎臭さは抜けないさ」

「まあ、素朴さが好きって男も一定数いるだろうよ」

観客たちも、エルマの天才的顔面を見た後ということもあり、物見高くアナの素顔を見下ろしている。まあ、早々に個室に引っ込んでしまったカロリーネと比べれば、その潔い態度は評価したい、とでもいったところか。

辺境の弱小国出身であるはずの彼女は、意外にも場の空気に呑まれてはいない。

ただし、やる気に満ちた感じでもなく、どこかぼんやりと、顔を拭った布を眺めていた。

(……早く、化粧をしなきゃ)

アナは、舞台の真ん中で、布を見つめながら自分に言い聞かせた。

(課題をこなして……それで、王に接近して……やつに、毒針を打たなきゃ)

何度も思い描いてきた彼女の任務。

ロドリゴに恩を返し、彼の念願を叶える、誇らしい仕事のはずだった。

だ　　が　　。

(ロドリゴ様は……ずっと、あんな顔で、あたしを見てたの?)

エルマから教わった微表情を読む術は、アナにある事実を気付かせてしまった。

彼は、アナを「蔑んでいる」。

緩く弧を描いた目は穏やかだったし、口角の上がった唇は優しげだったが、ごく微細な筋肉の強張りは、こちらに対する不信と軽蔑を露わにできてしまっていた。

恐らく彼にとって、アナとは大切な養女でもなんでもなく、使い勝手のよい駒　　いや、それどころか、流刑地出身の卑しい小娘で

しかないのだ。

恐らくは、白い花の香りがする髪飾りも。
アナは、喉元まで迫ってきた感情と思考を、慌てて飲み下した。

(……それがなんだ。そんなの、当たり前のことじゃないか。それに、ロドリゴ様があたしたちの村に手を差し伸べてくれたことは事実だ)

ぎゅっと布を握りしめる。

そうとも、元王族であったロドリゴが、流刑地出身の娘に気を許せないのなんて当然のことだ。

アナが任務をためらわぬよう洗脳を施すのも、きっと「普通」のこと。

どんな感情を持っているのであれ、あるとき彼は、飢えたアナのもとに、パンを携えてきてくれた。

その恩に、自分はただ報いるだけだ。

アナはきつと顔を上げ、遠くの席に座すフェリクスを見た。

(重税を課して、あたしたちを苦しめたのはあの男。あいつを倒すこと自体は、なんら間違っちゃいない)

たしかに自分はロドリゴの性質を見誤っていたのかもしれない。けれど、彼への恩は変わらない。

悪辣な宗主国の王を倒すこと自体は、きつとアナのためにも、村で飢えていた弟妹たちのためにもなる。

(殺すんだ、ルーデン王を。あたしの力で、あたしのために)

そう思いきると、アナは短く息を吐きだした。
フェリクスが好む美女にでもなんにでも、なってやるうではないか。

ずらりと並ぶドレスや化粧品を見つめる。

まずは着るものを決めなくてはと、大量に連なる布たちに指を滑らせた。

これまでのアナであれば、真つ先にフリルの付いた愛らしいドレスを手にとっていただろう。

小柄で可憐で無害な女は、たいていの男の眼鏡に叶うと侯爵家で教わっていたから。

だが、今、彼女は桃色だとかフリルだとか、そんな柔らかさを強調するものを選びたくはなかった。

同時に、身の丈に合わない上等な服も、やたらと可愛いデザインの、あの白い花の髪飾りも。

では、自分に似合うもの、そして自分が着たいものとは、なんなのか。

じっと考え込んだアナの脳裏で、ふと響く声があった。

さすが、長年の鍛錬を感じさせる、粘りのある足腰をお持ちですね。

ほんの少しだけ低めの、耳に心地よい声。エルマだ。

まさに血肉を伴った知識……すべてがご経験としっかり結びついていて、素晴らしいですね。

彼女は、ただの一度だって、アナの出自を馬鹿にしたりはしなかった。

褒めるときだって、「寒村の民のわりに」と驚くのではなく、それどころか、「さすが」と言ってアナを称えた。

常人にはなかなかない、貴重なご経験をされてきたのですね。

彼女にとって、アナは卑しき娘などではなく、子守りのうまい、知識と経験豊富な素晴らしい人材だった。

稀有で、うらやむべき境遇にある存在だった。

（ああ……そうか）

今、唐突にわかる。

エルマの前でだけ、アナは「普通の」人間だったのだ。

アナは不意に、ドレスの山から指を離した。

ここに、選ぶべき服はないと思ったからだ。

きらびやかな衣装で、ごまかすことなどしない。

だって、流刑地出身の、泥にまみれて過ごしてきた娘。それが、まぎれもない自分だ。

（きつと……本当は、あたし自身が一番、囚われてたんだな）

新しい衣装を選ぶ代わりに、墨にまみれたままのドレスに手を這わす。

裾から丸めて、揉みこむようにして擦れば、墨はじんわりと広が

って、黒へのグラデーションを生み出した。

元は深緑色だったドレスは、裾に向かってさらに色を濃くし、やがて黒へと溶けてゆく。

それはさながら、大地と一体となりながら広がる、豊かな森のような色彩だった。

(……泥にまみれて過ごしてたあたしには、お似合いの色だね)

くすりと笑って、次は化粧に着手する。

墨を洗い落とした手で選び取ったのは、高価な白粉でも、目に鮮やかな色粉でもない。

女性の装飾品としてではなく、単に舞台を飾るために撒かれていた、数枚の花びらだった。

「彼女はなにをしているの……?」

「床掃除か……?」

化粧品に手を伸ばさず、舞台に屈みこんだアナに、観客が戸惑いの呟きを漏らす。

だが、それを無視して、アナは赤い花びらを、掌の中で丁寧に揉み、やがて滲んできた紅色をすいと目じりに塗り込んだ。

「……………!」

意図を悟った観客たちが息を呑む。

ほんのひと塗りしただけで、ぐっと大人びた眼差しをもった少女が、そこにいたからだ。

工業品より、むしろ色は淡い。

自然な色付き方なのに、劇的に雰囲気が変わっていた。

20・「普通」の美貌（4）

（化粧は単なるお絵かきじゃない。まとう雰囲気の色を、変えるんだ）

静かな笑みを湛えたアナの脳裏には、この数日でエルマから叩き込まれた教えが、凄まじい勢いで蘇っていた。

顔の印象を決める要素は、大きく分けて二つある。

造形と色彩だ。

造形については、輪郭を際立たせたり、あるいはぼかしたりすることで、パーツの大きさや距離感を錯覚させることができる。

これは多少化粧をしたことがある人間なら誰もが把握していることで、一般的な令嬢たちにとっては、これが化粧の主な作業と言っている。

だが、エルマが指導を重視したのは、後者。

遠目からでもその人の印象を決めてしまう、色彩の妙だった。

例えば透き通るような肌、濡れたような瞳、淡く色づいた頬。

これらは、それだけを取り出して認識することは難しいが、結果として、造作が整っているかどうかをも上回って、観客に強い印象を与える。

「どこがどうとはわからないが、なんだか綺麗」と感じさせてしまうものなのだ。

かつ、その人物が最も引き立って見える色は、個人により違う。

髪色や素肌の色、骨格や瞳の色まで含めて、自分が最も美しく見える色というのを、アナはたっぷりと学んできた。

そして、エルマを感嘆させたことに、アナは、そのごく微細な色合いの違いを明確に見分けることができたのである。

（あたしの頬が一番きれいに見えるのは、朝の雪に一滴だけ、ガズ口の実の汁を垂らしたときの色。あたしの瞳が一番輝いて見えるのは、夏の青草を両手いっぱいぶん茹でて、その汁で木綿を染めたときの色）

令嬢たちが用いる化粧品は、主には鉱物から成り、それらの色は鮮やかで、しかも安定している。

だが、そうしたものに手が届くはずもなかったアナたちは、かつて村でささやかな晴れの日を祝うのに、草や花の汁を用いた。

それらは、季節や植物の状態によってむらがあったが、だからこそアナたちは、そうした色彩に敏感になったのだ。

（だってあたしたちは、土や草ばかりを、毎日毎日見てきたんだから）

雪国の人間が雪の種類に詳しくなるように、アナもまた、草花が織りなす多彩なグラデーションを、常人より細かく把握することができた。

そして、その鋭い審美眼で、自らを最も引き立たせる色合いを、素早く選んでいるのである。

化粧品の類は豊富に揃えられていたが、それをそのまま使うのは、わずかにアナの思う色と外れてしまう。

そこで彼女は、花びらを潰し、草の汁を絞り、ときに土を混ぜさえしながら、ごく微細な色の調整を加えていった。

色彩を鮮やかに発現させる化学知識も、計量に必要な数式も、濃淡を自在に操る左官技術も、すべてエルマから徹底的に叩き込まれている。

今のアナにとって、それらの技術を駆使することは、呼吸するようになりやすかった。

そうして、肌を整え、影の濃淡をつけ、目や唇に淡く色を乗せてゆく。

仕上げに頬に、ごくうっすらと自然な紅を差した頃には、観客の誰もが、アナの姿に釘付けになっていた。

「……なんだか、すごくきれい」

誰からともなく、呟きが漏れる。

そこに現れたのは、堂々たる緑の女王だった。

高くまとめ上げた黒髪は、豊かな森の土のよう。

可憐だったはずの緑のドレスは、腰のあたりから徐々に墨を滲ませた結果、裾に向かって黒のグラデーションを描き、まるで大地と一体となった、幻想的な樹木を思わせる。

愛らしさの目立っていたヘーゼルブラウン色の瞳は、そこだけ紅い色に囲まれて、今や凜とした艶を帯びていた。

昨今流行りの、甘い色合いに溢れた、ふわふわとしたお姫様ではない。

かといって、先ほどエルマが見せた、女神のように人間離れした

麗しさでもない。

あえて例えるなら、森の民と呼ばれる種族のような、静謐な美しさがあるにはあった。

いつの間にか、舞台はしんと静まり返っている。

その中で、アナの背後に控えるエルマだけが、なにかドヤドヤしい表情を浮かべ、イレーネたちに向かってぱくぱくと口を動かしていた。

ほら。アナ様のほうが、ずっと素晴らしいでしょう？

「……………」

イレーネは顎を引き、傍らのルーカスやデボラと囁き合った。

「たしかに、今回に限っては、エルマの作戦勝ちかもしれませんがね。なんだか、素直に認めるのは癪のような、でも結果オーライだからいいような、複雑な気持ちですが……………」

「まあ、誰がこの場で最も『美しくなったか』ということなら、間違いなくアナスタシア嬢に軍配が上がるだろうな」

「でも、誰がこの場で最も『美しいか』ということなら、それはやはりエルマエル様、というのも否定できませんわ」

三人は慌てて記憶を掘り返した。

フェリクスはなんとと言って出題したのだったか。

だがその時、

「は……………反則よー！」

引き攣ったような叫び声が舞台上に響き、一同ははっと視線を戻した。

着替え用の個室から勇ましく指を突きつけているのは、誰もが存在を忘れかけていた伯爵令嬢・カロリーネであった。

20・「普通」の美貌(4)(後書き)

すみません、次話が多いので今回はここで！

21・「普通」の美貌（5）

「陛下がわざわざ化粧品やドレスを用意してくださったのよ！ それ以外を使うなんて、反則だわ！ エルマも、その辺境国の女も、失格よ！」

カロリーネは個室から腕だけを出したまま、必死に声を張る。

「そうだった、彼女もいたんだったわ」

「だが、なぜ腕しか出してないんだ？」

「まだ身支度が済んでいないのでしょうか。ずいぶん時間が掛かりますわね」

突如としてきゃんきゃん喚きだしたカロリーネに、イレーネたちも困惑を隠せない。

「こんな、反則だらけの選考会などあつてはなりません。仕切り直しを要求いたしますわ。速やかにこの課題は打ち切りとし」
「ねえ、君なんで隠れてるのさ」

だが、のほほんとした顔のまま、ぐいとフェリクスがカロリーネを引っ張り出したのを見て、観客たちはようやく、彼女の意図と、惨状を知った。

「あ……っ！」

青褪めたカロリーネは、慌ててその場にしゃがみ込む。

それでも、ドレスからはみ出したままのคอร์セットや、絡まってしまうリボン、ぐちゃぐちゃに崩れた髪は、誰の目にもはつきりと見えてしまった。

そして、手元が狂ってしまったのだらう、無残にアイラインが伸びた顔も。

「あー……」

あまりに大胆な、かつ他人事とも言えない惨めさに、女性陣は微妙な顔つきで黙り込む。

どっと笑ったのは、やはりその手のことに無理解な男性の観客たちだった。

「おい見たか今の！」

「なんだありや、新種の呪術か！」

「初夜の寝台であれが出てきたら、腰を抜かすなア」

無遠慮な笑い声に、舞台上のカロリーネが打ち震える。

恐らく彼女は、ドレスを一人で身に着けるのも、化粧筆を己の手に握るのも、生まれて初めてのことだったのだらう。

そして、それがいかに難しいことかを、この場で一番噛み締めているのも、彼女のはずだった。

「失礼」

ふあさ……っ

蹲るカロリーネに、涼やかな声とともに、柔らかな布が降ってくる。

驚いて顔を上げた、その視線の先に立っていたのは、エルマであ

った。

「このような気候下、肩を剥き出しにしているのは冷えますので。ひとまずそちらをお羽織りください」

「あなた……」

思いもかけぬ情けに、カロリーネが一瞬、途方に暮れたような顔をする。

だが、彼女はすぐに我に返ると、しゃがんだまま、きつとまなじりを吊り上げた。

「恩を売ろうとも言うの!?!? こ、こんな布一枚で」

「そう、こんな布一枚で、暑さ寒さ紫外線にPM2.5まで防げる、実に優れたおくるみなのです。素晴らしいでしょう?」

「お、おくるみ……!?!?」

こんな布一枚で恩を売った気になるな、という挑発は、しかし妙な方向に躲され不発に終わる。

言葉を詰まらせてしまったカロリーネを、エルマはしげしげと見つめる。

そして、「なにやら」と呟き、眼鏡のブリッジを押し上げた。

「バルたんのおくるみに包まれた人間が震えているのを見ると、速やかにお着替えをさせなくては、という逆らいがたい衝動に襲われますね……。このまま私めが、カロリーネ様のお着替えを完了させてしまっても?」

「えっ?」

「はい、それではいい子にしてくださいね。三秒で終わりますしゆからねー」

「えっ? えっ?」

突如として口調を崩壊させ、両手をゆっくりと伸ばしてくるエルマに、カロリーネは硬直して冷や汗を浮かべる。

「い、いつたい、なんですか……っ!？」

育児モードだ。

だがそうと知らないカロリーネは、蛇に睨まれた蛙のように、その場で目を見開くことしかできない。

徐々に、徐々に、こちらへと伸ばされてくる細い腕。

これに触れられてしまったら、自分はもう、元には戻れない。

『ちよい待ち』

だがその時、呆れたような声が掛かった。

アナだ。

彼女はげんなりとした顔でエルマの腕を掴むと、それを押し戻した。

『なに堂々とほかの候補者に協力してんだよ。あんたが手伝ったら、単なる着替えどころじゃ済まないだろ?』

『そんなことは。普通に、カロリーネ様にお似合いになるドレスにお取替えし、簡単なお化粧を施そうとしているだけです』

『だから、あんたがそれをやると、間違いなく、絶世の美女を爆誕させちまうだろっつってんの。ってか見るよ。全身を作り変えられる恐怖に、本能的に震えてんぞ、この人』

早口のエスピアナ語は、カロリーネには理解できない。

ただし、がくがく震える彼女を見て、アナがかすかに笑ったのはわかった。

「お立ちください、カロリーネ様」

やがて、ルーデン語に切り替えたアナが、やれやれといった様子で口を開く。

彼女は、カロリーネが腰を抜かして動けないのを見て取ると、腕を取って強引に引っ張り上げた。

「他人に一発で美女にしてもらおうなんて気に食わない、……もと、魔王に全身を改造されてしまう危機を、良心ある人間として見過ごせません。私がアドバイスを差し上げますので、あなたが自身でなんとかなさってください」

「そんなアナ様、魔王扱いなさらなくなつて……」
『あなたは黙る』

エルマが悲しそうに漏らした独白については、エスピアナ語でぴしやりと封じる。

やりとりを見ていたカロリーネは、遅まきながらはっとして、か細い声でアナを詰った。

「だ……騙されなくつてよ。アドバイスだなんて言つて、変な方向に誘導する気でしょう。だいたい、田舎の娘ごときが、わたくしに指導だなんて」

「カロリーネ様の肌は、少々黄味がかっていますね。ポリウムのある栗色の髪も、同色の瞳も、深みのある色をしています。なので、あなた様には、本来こうした浮ついたピンク色など似合いません。オリーブや、よく耕された土のような、深い色のほうがお似合いです」

だがアナは、小声の反論など聞こえないかのように、さつさとドレスを押し付け、個室に追いやってしまう。
カロリーネのために選んだのは、渋い葡萄のような色のドレスだった。

「こんな地味な色」

「まずはコルセットです。一人で結べる前開けタイプ。腰に巻き付けたらお声がけください。結び方をお教えます」

不平を吐く口には、コルセットを投げつけて黙らせる。

有無を言わせぬ迫力に、カロリーネがすごすごと個室に引っ込んだので、アナはその前に仁王立ちをして陣取った。

「できましたか？」

「ま、まだよ！」

「どうせ紐を通す順番がわからないのでしょ。穴の横に番号を振っておきましたので、その順に通してください。赤の数字は上から、黒の数字は下からですよ」

「……………！」

懇切丁寧な指導に、カロリーネが絶句する。

そして、実際にその通りに見事にコルセットの紐が結べたので、思わず「まあ……………」と感嘆の声を漏らした。

『さすがでございます。アナ様は教授の天才でいらっしやいますね』
『ええ、ええ。どこぞの師匠が、教えるのが壊滅的に下手だったから、反面教師って言うのかね』

一緒になってエルマが感動したように拍手するのを、アナは半眼になって受け流す。

というのも、エルマの授業スタイルというのは、

『それではコルセットの着け方を確認しますね。こちらは、編み紐が百本あるタイプです。はい、すべて結び上がりました』
『手順と手順の間が短すぎんだろ！』

とこんな感じで、すべてが「1、用意します」「2、完成しました」の2ステップで完結してしまう、絶望的にわかりにくいものだったからだ。

なにしろ、1+1=2という基礎から、一足飛びに最難関公式までを理解できてしまえる御仁なので、途中をどう分解していいものかわからない。

それをアナは、何度も何度も何度も何度も何度も反芻し、切り分けていくことで、なんとか習得に成功したのである。

（あたしはこいつと違って、天才じゃない。でも、だからこそ、なにがわからないか、よくわかる）

そして、その努力型の才能は、「人に教える」というこの場面でも、いかに発揮されていた。

コルセットを締め終えたカロリーネに、ドレスのサイズの選び方、裾の合わせ方、リボンの結び方までも丁寧な指導する。

着替えを終えると個室から連れ出し、今度は化粧の仕方、香水の利かせ方まで。

自分で髪を結び終えた頃には、カロリーネはすっかり真剣な顔つきになって、素直にアナに従うようになっていた。

そうして、約三十分ほど。

「できた……」

鏡の前で己の姿を確認し、カロリーネは泣きそうな顔で呟いた。そこに映っているのは、先ほどまでの彼女とは打って変わって、落ち着いた色合いのドレスをまとった少女。

くるくると巻いていた髪は緩く下ろされ、甘いピンクを塗りたくっていた顔には、今やわずかな彩色しかない。

けれど、そうすることでかえって彼女本来の髪色が引き立ち、きつい印象でそこだけ目立っていた釣り目がちの瞳も、しっとりとした知性を帯びていた。

数十分前の自分では考えられないほど地味な装いのはずなのに、これまでに見てきたどの瞬間の自分より、美しい。

「……………」

カロリーネは無言でアナを振り返る。

言葉は無くとも、その瞳がすでに、降参を告げていた。そして、悔しさの内側に滲む、感謝も。

彼女は、落ち着いた色を乗せた唇を噛み締めると、エルマに畳んだおくるみ突き返す。

それから、アナを見つめて、一步後ろに下がった。

「やあ、こちらで評価する前から決着がついてしまったようで、なにより」

とそこに、相変わらず朗らかなフェリクスの声が掛かる。

彼はカロリーネを上から下まで眺めると、愉快そうに笑った。

「ずいぶんきれいになったじゃない。自称・美と芸術の守護神たる
ファイネン家の名に懸けて、もうひと踏ん張りしなくていいの？」

「……もう、十分ですわ」

「そ。じゃあまあ、君にはそれなりのご褒美を上げよう」

フェリクスはあっさり片付けると、今度はエルマとアナの二人に
向き直った。

「となると、残るは君たち二人だねえ」

王妃となる女性に贈る首飾りを、雑にくるくると指先にぶら下げ
ながら、ふむと首を傾げる。

背後に見える審査員は、それぞれエルマとアナスタシアの名が掛
かれた札を手に持ち、困った表情で宙に浮かせていた。

貴族票は絶対的な美を見せつけたエルマに、市民票は成り上がり
の可能性を見せつけたアナスタシアに、と票が割れかけ、しかし決
めあぐねているといったところだ。

「うーん、そうだねえ。僕としては、偉業を成し遂げる英雄^{エルマ}よりも、
その偉業を普遍化できてしまう凡人の方が、素晴らしいかなあ」

「……………！ では」

その言葉に、両者が大きく身を乗り出す。観客たちもどよめき、
特にイレーネなどは、喜びにガッツポーズを決めかけた。

フェリクスはアナスタシアのほうを評価した。

となれば、エルマは見事「決勝で惜しくも敗退」となったわけで、
この忌々しい任務からようやく解放される

「とは言つものー」

だが、気の抜けた次の言葉が、一同を硬直させた。

「絶対値として誰が一番美しいかと言えば、それはやっぱりエルマかなと思つから、次の一騎打ちで最終戦かな」

「は？」

最終戦。

その言葉にエルマたちはぼかんとする。これが最終選考ではなかったのか。

だが、戸惑いの気配を感じ取ったフェリクスは、こともなげに手を振るだけだった。

「僕、今のが最終選考なんて一言も言つてなかったでしょ。ちゃんと言つたよ、美貌と忠誠心を試したいって」

「美貌と……忠誠心？」

「そう。えへへ、こんなこと語るの照れちゃうけど、実は、僕の理想を一言で表すなら、それは『犬』って感じなんだよね」

「犬……？」

女性を語るには到底適さない単語に、アナたちの顔が強張る。

だが、フェリクスはうつとりとしたように目を閉じて、滔々と語るばかりだった。

「いいよね、犬って。芸が達者で退屈しない。そのへんの人間よりもよほど肝が据わってる。目はくりくりしていて愛らしいし、なによりけつして裏切らない」

一芸披露、養護院訪問、美容審査。

突飛に思えたこれらの選考課題が、まさか「犬」という理想に沿って用意されたものだったとは。

アナは大いにドン引きしたが、努めてその表情を打ち消した。

自分が真にこの男の妻であつたなら、この発言をもつて回し蹴りの刑に処しているが、しょせん自分は、毒を注ぐために近付こうとしているだけである。

殺してしまえばおさらばだ。

(こいつに飼われちまうところだった哀れな女を、一人救済してやったんだ。その子には感謝してほしいくらいだね)

この場合、それはエルマであつたということか。

アナがなんとなくエルマを見ると、彼女もやはり、内心の感情を押し隠すような様子で佇んでいた。

彼女の場合、狙うのはここでの敗退ということだから、これからフェリクスがどんな無理難題を突き付けようと、「できません」と一言告げればそれで終了となる。

ゴールは目前　となれば、エルマも内心では密かに喜んでいるのかもしれない。

「というわけで、最後は君たちの犬度、もとい忠誠心を試そうかなと。ぜひ、君たちには渾身の忠誠を示してほしい。つまり、なにをも優先して、僕の命令を聞く。できるかなあ？」

フェリクスはやはりのんびりとした口調で、かなり傲慢なことを告げている。

だが、ここでアナが命に従い、エルマが逆らえば、互いの目的が

遂げられるのだ。

アナは内心で笑った。

（来いよ、ばか王。どんなばかげた命令にだって、わんと鳴いて従ってやるうじやないか）

しかし、その余裕は、フェリクスの次の一言で打ち砕かれた。

「まず、アナスタシア・ドン・ロドリゴ。君には、君の一番大事な人間……君の養父を、切り捨ててきてほしい」

「……………は？」

一瞬、脳が理解を拒む。

呆然としたアナに、フェリクスは出来の悪い生徒を見るような顔で、「ロドリゴ聖侯爵だよ。わかる？」と繰り返した。

「……………あの」

「さて、次にエルマ。君なんだけどねえ」

アナは反論しようとして口を開くが、フェリクスはさっさとエルマのほうへと向いてしまった。

ちなみにエルマはといえば、フェリクスがなにかを言う前から、すでに断りを入れようと身構えている。

「陛下。大変心苦しくはございますが、私、陛下の命令に従うことは」

「ルーカスとカロリーネ・フォン・ハイネンの婚約を、阻止してくれる？」

だが、エルマもまた、最後まで言い切る前に、その爆弾発言を聞

いて硬直してしまった。

22・シャバの「恋」は難しい(1)

「ルーカスとカロリーネ・フォン・ハイネンの婚約を、阻止してくれる?」

「……………は?」

エルマもアナと同じく、言葉を捉え損ねたようである。

彼女には珍しく、「も…………もう一度、仰っていただけですか?」
と言葉を噛みながら問うと、フェリクスはうさん臭い笑みを貼りつけたままそれに応じた。

「うん、だからね。ルーカスとカロリーネ嬢に、婚約話が持ち上がってるんだ。というかまあ、持ち上げたのは僕なんだけど」

観客たちがざわめく。

ルーデナーの色男、王弟でありながら騎士であるルーカスは、貴族平民を問わず人気者だ。

そんな彼の婚約話は、下手をすれば、王妃が誰になるかよりも関心の的だった。

「カロリーネって…………え、今敗退したばかりの…………?」

「彼女が殿下の大ファンだっていうのは有名だけど、殿下の方には全然そんな素振りなかったじゃない…………!」

「政略結婚ということ!? ひどい! 聞いてないわ!」

特に女性陣は衝撃を隠せない。

一斉に、ルーカスが座っているあたりに向かって、視線と質問、怒声が嵐のように飛び交った。

「本当なのですか、殿下！？ てっきりエルマを狙っていて、かつ相手にされていないのだと思っていたのに！」

「さては、口説けないからと言って安牌に逃げたのですわね。試合は諦めたらそこで終了ですわよ」

イレーネはルーカスの胸倉を掴みあげかねない勢いで叫び、デボラも軽蔑したように吐き捨てる。

すかさず背後で、「そうよ、そうよ！」と女性陣が合唱したのを聞いて、ルーカスはわずかに顔を引き攣らせた。

どうやら周囲の反応は、「憧れの騎士が結婚してしまう」という嘆きによるものではなかったらしい。

「……俺の知覚品質は、いつの間にこんなに下がっていたんだ……」

「それで、実際のところどうなんです？」

「わたくしどもも初耳ですが、まさか本当にファイネン様との婚約に走ってしまわれたので？」

悲しげな声で呟くルーカスに、イレーネたちが息ぴったりに問い質す。

が、

「そんなわけがあるか。俺も初耳だ」

ルーカスはそう言って鼻を鳴らすだけだ。

ただ、初耳というわりには、なぜかその態度には余裕がある。

不思議に思った二人が口を開くよりも早く、ルーカスはさっと席を立ってしまった。

「義兄上がまたよからぬことを企てているんだろつ。被害が拡大しないうちに、行ってくる」

そう告げて、すたすと舞台へと降りてゆく。

そのあまりに堂々とした、そして滑らかな足取りに、観客たちはつい自然に道を開けてしまった。

「やけに落ち着いているけれど……殿下、のこのこ出て行ってしまつて大丈夫なのかしら。これって飛んで火に入っているところではないの？」

「少なくとも、陛下は冗談を口にされているようでは、ありませんわねえ」

イレーネたちはやきもきしつつ、付いていくのはさすがに憚られ、その場に踏みとどまる。

見れば、エルマは引き続きフェリクスの話に耳を傾けている。

どうやら、ルーカスの婚約話の詳細を聞いているようだが、相変わらず彼女の表情に変化はなかった。

「んもう、またバルドくんのほっぺをつんつんして遊んでるし……！ この局面で、どれだけ弟ラブなのよ。やって来た殿下に向かつて、さらつと婚約祝いとかしはじめないでしょうね……」

壇上のエルマを見守るイレーネは、そわそわと両手を組み合わせる。

しかし、それを聞き取ったデボラは、「あら」と片方の眉を上げた。

「ほっぺをつんつん？ ならば、殿下には喜ばしいことですね」

「は？」

意味を捉え損ねたイレーネは、眉を寄せて同僚を振り返る。そして、やけに訳知り顔で頷く相手を見て、ふとある事実思い至った。

フレンツェルの娘、デボラ。彼女は、ヴァルツァー監獄の「ご近所さん」として、頻繁に育児中の獄内に訪問していたという。

つまり　ここ最近のエルマの様子については、彼女の方が詳しいのだと。

「ねえ、それってどういう　」

だがちょうどそのとき、舞台と繋がった鐘楼が高らかな音を奏でたので、イレーネは咄嗟に口を噤んだ。

いつの間にか、もう昼の鐘が鳴る頃だ。

普段は少し離れた王城の中から、澄んだ鈴の音のように心地よく聞いていた音色も、これだけの近距離だと、びりびりと心臓が震えるようである。

イレーネは顔を顰めてやり過ごし、それからようやくデボラを問い質そうとしたが、結局それはかなわなかった。

なぜなら、舞台の上では、それ以上の出来事が起こっていたからである。

「いやー、なにせ初めての王妃選考会だからさ、ぜひ初回にふさわしい盛り上がりをおもって、実はある程度、サクラっていうか、華やき要員を確保しておいたんだよねえ。だって、王妃を募ったら応募ゼロでしたとか、照れるじゃない？」

舞台上では、フェリクスがエルマへの説明を続けていた。

「会の水準を引き上げる、見せ筋もほしい。同時に、ライバル心を刺激して、『このくらいなら私もいけそう』とほかの参加を増やしてくれるような、お手ごろ品も欠かせない。その点、カロリーネ嬢は打ってつけだったんだけど、正直に事情を告げて参加願ったら、機嫌を損ねられちゃってさー」

「……至極当然の結果かと」

「うーん、それでまあ、いい線まで残ったらルーカスと婚約してもいいよって言っちゃったんだよねー。そしたら、カロリーネ嬢ったら頑張る頑張る」

どこまでも緩い口調で語ってから、フェリクスは「でもさー」と軽く首を傾げる。

「よく考えたら、君とルーカスって、結構いい感じだったじゃない？ 勝手にそれを引き裂いちやうのって、ちよつとアレかなあってほら、僕ってそういう部下の心の機微にも配慮する名君だからさ。そこで考えたんだよね」

狐を思わせる緑の瞳が、ふと光った。

「なら、エルマ。君にチャンスを上げようじゃないか、ってね」「チャンス、ですか？」

「そう。君がルーカスの婚約話を気に食わないなら、阻止してしま

えばいい。その機会を与えてあげるよ。妨害のやり方も、君が決めていいよ。どう、すごく優しいでしょう?」

だが、ルーカスとカロリーネの婚約を阻止してみせたとしたら、その時点で「王命を全うした」として、エルマにはフェリクスの子となる未来が待っているわけだ。

かといって、王命を拒むつもりでなにもせずに行ったら、ルーカスはカロリーネとまとまってしまおう。

まるで悪魔がするような提案。

フェリクスの笑みは、エルマの反応を楽しんでいるかのようにだった。

「さあ、エルマ。君の意志は?」

「その前に、俺の意志はどこに行ったのでしょうか、義兄上」

とそのとき、低く耳触りの良い声が舞台に響いた。ルーカスだ。

客席から下りてきた彼は、長身を生かすようにして異母兄を見下ろし、目を細めた。

「婚約には、両親族と本人の承認が必要。少なくとも俺は、カロリーネ嬢との婚約話を聞いたことも無ければ、彼女へ好意を抱いたこともありませんが」

女性にけっして恥をかかせないと評判の彼にしては、かなりストレートな物言いだ。

好意を抱いたことがない、と言い切られて、舞台の隅に下がっていたカロリーネが顔を歪めるのが見える。

だが、ルーカスはそれを認識しながらも、あえて声を掛けることはせず、話を続けた。

「本人もあずかり知らぬ婚約話を、この選考会の最終課題とするのには、かなりの無理があるのではないですか？ いえ、はっきり言います、迷惑だし不快なのでおやめください」

「なかなか言うようになったねえ。でも承認ということなら、僕も君の親族だろう？ その僕が承認しているからそこは問題ない。本人の承認という点については」

突然の闖入者であるルーカスに動揺もせず、フェリクスは口の端を持ち上げてみせた。

「君が昨夜、迎賓館に寝泊まりするカロリーネ嬢のもとに訪れた、という情報を掴んでいる。未婚の女性の部屋を夜更けに訪ねる……それは、この貴族社会においては、婚約に前向きと受け取られても不思議ではないだろう？」

ルーカスは不服そうに片眉を持ち上げるが、否定はしない。

少なくとも、カロリーネの部屋を訪れたのは事実だということだ。

「昨日の養護院訪問時に落とした手袋を、届けに行ったただけだとしたら？」

「すっかりで夜に女性の部屋を訪ねる君ではないはずだ。目的があると考えるのが当然だろうね」

「……まあ、それはそうですね」

「ほら。でしょー？ こりゃもう婚約まっしぐらだ。ね、エルマ？」

旗色はルーカスの方が悪く見える。

エルマはいえ、フェリクスに水を向けられてなお、腕に抱えたバルドの頬をただくすぐるだけだ。

バルドが甘い声で「あうー」と笑うのを聞いて、それまで呆然とやり取りを見守っていたアナは、ふと我に返った。他人の修羅場を眺めている場合ではない。

「あの」

声を上げれば、フェリクスはぱっとこちらを振り返る。

「なあに？」

数年前とは異なり、かなり間近で見るその瞳は、意外にも翡翠のように美しかった。

だが、にこにことしたその顔は、仕込まれた微表情解読スキルをもっても読み取りづらく、彼を前にしていると全身に警戒感が満ちる。

言動は緩く見えても、その実、隙がない。

やはり、彼の急所に毒針を打ち込むには、今少し距離を詰める必要があるだろう。そう、直接首飾りを授かるくらいにまで。

「私にも、そのような王命を下された理由を、ご説明願えますか？」

ここでしくじるわけにはいかない。

ロドリゴに危害を加えるなどという不愉快な命令を回避しつつ、いかにフェリクスにおもねるか。

アナは必死に思考を巡らせた。

「忠誠心を見せる　私が躊躇う課題を与える、ということでしたら、ほかにも選択肢はありえるはずです。髪を切るとか、この場で裸になるとか」

「え、君、そういう趣味なの？ どうしよう、ドキドキしてきちゃった……」

「そんなわけはありませんが！」

ついペースを乱されかけて、声を荒げる。

アナは必死に感情を押さえこもうとしたが、フェリクスはその努力を踏みにじるような発言を寄越した。

「なぜ侯爵かって聞かれたら……んー、それはまあ、気に入らないから？ 言うこと聞いてくれないしー」

あんまりな理由だ。

気まぐれで、身勝手。人を人とも思わない。

そのようなルーデン王の在り方に、アナは心底呆れた。

（ロドリゴ様はあたしを見下しているかもしれないけど、こいつはそれ以下だ）

やはり、こんな男を宗主国の王に戴いている限り、アナたちにけつして平穩は訪れないのだ。

拳を握りなおしたアナだったが、しかし、フェリクスの次の言葉を聞き、思わずその力を緩めた。

「特に、貧困対策とか、超無能！。弱りきったところにパンをばら撒くんじゃ意味ないから、長期的かつ計画的に支援してねって何度も言ってるのに、貧困地域の洗い出しすらないし」

「え………？」

つい、まじまじと、目の前の男を見つめてしまう。

間延びした口調の、懦弱そうな彼は、げんなりした表情で肩を竦

めていた。

「もつとさー、いろいろあるはずじゃん。耐寒性の強い苗を開発するとか、三年おきに属国軍に全国行脚させて肥料を撒いてまわるとか。学校と養護院を整えて、無計画に子どもを産まないように教育したりとかさー」

紡がれる「貧困対策」は、やけに具体的である。
アナは強い違和感を覚えた。

(おかしい……)

だって、彼の話によれば、フェリクスは、エスビアナ属国の厳しい現状も理解せず、重税を課してくる非道で愚鈍な王なのに。

「なんのために、税率を軽減してやってるんだか。僕が即位したら、なるはやでテコ入れしたいと思ってたんだよねー。理由は以上。で、エルマ、君たちの話に戻るんだけど」

フェリクスは説明を果たしたとばかりに、さっさとエルマたちの方に向き直ってしまう。

それと同時に、アナもまた、弾かれたように養父を振り向いた。

そして、彼の顔を見て、言葉を失った。

眉と下瞼を緊張させ、唇を左右非対称に歪めたその顔が告げるのは、不快、苛立ち、嫌悪。

一見した限りでは、フェリクスの発言が偽りだとして、非難の表情を浮かべているようである。

ただし微表情を叩きこまれたアナの目は、そこにもつひとつの感情を読み取った。

焦り。

(なぜ、焦るの……?)

じわりと、心臓にいやな感触が広がった。

自分は今、とても重大ななにかに、気付こうとしている。

しかしそのとき、

ガラー……ン!

唐突に、すぐ近くから轟音が降ってきて、アナは思考を中断させた。

隣の鐘楼が、十二時を告げているのだ。

23・シャバの「恋」は難しい(2)

「ありや。もうお昼だ。思いのほか時間がかかったなあ」

少し離れた場所でフェリクスが呟いているが、それも掻き消してしまうほどの鐘の音だ。

観客たちもつるさそうに耳を押さえているのが見える。

本当は、鐘が鳴る前までに選考会を終わらせ、この場を去る予定だったのだろう。

(頭が割れそう……っ)

アナも強く両耳を押さえ、思わず体を折り曲げた。

心臓を素手で掴んで揺さぶってくるような、全身を震わせる音。

頭から爪先までを、痺れるような刺激が走り抜け、とても真つすぐ立ってられない。

頭の中が白く弾け、そこを暴力的な音が埋めてゆく。

うわん、うわん、と奇妙な音が反響する脳内で、アナはぼんやりと思考を振り返った。

(あたし……なにを、考えてたんだっけ……?)

ガラァー……ン!

また鐘が鳴る。

正午を告げるまで、あと十回鳴るのだろう。

反復する金属音。

まるで、髪飾りに付いた鈴のよう。

けれど、あのささやかな音色よりも、もっともつと強く、重い。

(なにをって、そりゃ……そうだ、考えることなんて一つしかないじゃないか。王を、殺す……そのために、あたしはここにいるんだ)

鐘が鳴るたびに、全身を強く殴打されているかのようで、アナは無意識に呻いた。

耳を押さえていた手で、そのままぐしゃりと髪を押しつぶす。

ガラァー……ン！

(王を……殺す。エスピアナを搾取し、ロドリゴ様を臣下の身に貶めた、忌々しいルーデン王を、殺す……)

でもなぜだろう。

いつも、鈴の音を聞きながら意志を固めるときは、あんなにも集中できたのに、今は、なにかが引っ掛かる。

それは喉元までせり上がり、膨張して、アナの心を掻き乱した。

苦しい。

汗が止まらない。

体の内側で、なにかが「違う！」と吼えている。

「……う、ぐっ」

せつかく整えた髪が、化粧が、乱れてゆく。

この数日で体幹を鍛え、見違えるほど美しくなった立ち姿も、体

を折り曲げた今では見る影もない。

十二時を告げる鐘の音に蹂躪され、手に入れた輝きを手放してゆく様は、まるで魔法の解けた灰かぶりのよう。

だが、それを自覚する余裕も、今のアナにはなかった。

ガラァー……ン！

なにが引つ掛かっているのだろう。

なにに引き留められているのだろう。

胸の内で暴れる殺意。

これに身を委ねてしまえば、きっと楽になれるのに。

静かな贅辞を紡ぐ誰かの唇。まっすぐな眼差し。

何度もこちらを握り締めてきた、ほっそりとした手。

そんなものが、途切れ途切れに浮かんでは、アナの心を掻き乱す。

(殺、す……違う、間違っている……いや、殺す……殺す……！)

鐘の音が重なるごとに、フェリクスに襲い掛かる衝動は強くなつてゆく。

アナは、相反する意志に引き裂かれそうになりながら、必死に己の身体を抱きしめていた。

「もしこの婚約話の根拠が昨夜の訪問ということなら、まったくの筋違いというものです。俺はカロリーネ嬢に、あくまで騎士として

手袋を届けに行っただけなのだから。……くそ、鐘の音がうるさいな」

「ほんと、よく聞こえない。でもまー、君みたいな男が未婚の女性の部屋に忍んでいったらさ、やることなんて一つなんじゃないのー？　まあ、やるっていうか、やるっていうか」

「下世話な。女性の前です！　もう少し言葉を慎んでくれませんか！」

もだえ苦しむアナの背後では、そんな彼女をよそに、引き続き侃々諤々の口論がなされていた。

ルーカスは苛立っているし、鐘の音はうるさいしで、ほとんど叫びあっているような形ではあったが。

ルーカスが声を荒げると、フェリクスはそれをせせら笑った。

「気にしないでいいんじゃない、別にー？　だってエルマ、全然気にしてなさそうだし！」

彼が指さす方向を見れば、たしかにエルマは腕の中のバルドをじっと見下ろしたまま、相変わらずつんつんと頬を突ついていた。

眼鏡で覆われてしまい、表情は読み取れないが、その行動を見る限り、心ここにあらず、といったようにも受け取れる。

ルーカスは無言で天を仰ぎそうになったが、それをぐっところらえ、「おい」とエルマに声を掛けた。

「誤解されても困るわけだが、なにかリアクションするなり、せめて議論に加わってくれないか。なぜおまえは、そう無関心なんだ」

「はい……？　すみません、少々聞こえづらくて……」

「なぜ、そう、無関心なんだと、聞いている！」

鐘の音に負けないようルーカスが怒鳴ると、エルマはむっとしたように口を開いた。

「べつに、無関心などということはございません」

「なんだと？ よく聞こえない！」

「無関心！ なんかではないと！ 申し上げました！」

思えば、エルマに怒鳴り返されるなど、滅多にないことだ。

だがそれで弾みのついたルーカスは、珍しく相手に深く踏み込んだ。

「そうか！ なら、いい加減に弟を撫でまわすのをやめろ！ ちやんと、俺のことを見てくれ！」

どこまでもストリートな、そして余裕のない物言い。

色男としての権威を保ちたかったルーカスにとって、平時であればまず口にしらない言葉だ。

びっくりして顔を上げたエルマに、ルーカスはなかばやけになつて続けた。

「もう少し俺のことも考えてくれ！ 視野に入れろ！ もう何度おまえに気持ちを伝えたと思っている！ 少しは学習してリアクションをしてくれ、ばか者！」

「ば、ばかって……！」

「こんな状況で告げるつもりはなかったが、もういい、壊滅的に鈍いおまえのために、もう一度だけ言うぞ！ 目を見て、耳の穴をかっぽじってよく聞け！」

愛の囁きからはかけ離れた雰囲気だったが、腹を決めて、表情を隠している眼鏡を取り去ろうと手を伸ばす。

「いいか、俺は」

「お待ちください！」

だが、その腕を、エルマ本人によって素早く掴まれた。

「……な、ぜ、だ！」

「なん、でも、です！」

ぐぐ、ぐぐぐ。

それでもなお眼鏡に触れんとするルーカスト、それを防ぐエルマの攻防。

両者の膂力は均衡し、結果、二人の手は触れあつたまま空中でぶるぶると震えた。

「ナチュラルに眼鏡を外そうとしないでください！　というか、無関心ってなんですか。なんだって殿下は、いつもいつも私のことを鈍いとかばかとか、そのようにおっしゃるのですか！」

「事実を端的に述べているだけだろう！　というか待て、おまえはその認識のすり合わせを優先するのか？　この場で？　今！？」

「とても重要なことです！」

珍しく、エルマが強く言い返している。

鐘の音に耳を塞いでいた観客たちは、二人が醸し出す緊迫した空気に、いつの間にか手を離し、身を乗り出しはじめた。

なにやら、王妃選考会よりもよほど重要な局面が突如訪れたようで、皆、無意識に喉を鳴らしてしまふ。

汗を浮かべて蹲るアナの姿は、そのため、誰の視界にも入らなかった。

「お言葉を返すようですが、壊滅的に鈍いのはどなたですか！？その精悍なお顔に付いていらっしやるのは、バルたんと同じく世にも美しいサファイアのような色をした節穴ですか！？」

「けなしているのか褒めているのかどっちだ！？」

「レトリックにいちいち囚われないでください！」

「おまえがなにを言いたいのかさっぱりわからん！」

両者の口調は、いよいよ激しくなってきた。

観客たちは、鼓膜を守る努力をすっかり放棄し、鐘の音の隙間から、なんとか二人の会話を拾おうと必死になった。

「これでも懸命に教科書を読み勉強しているのです！ 頭ごなしにばかだとか、わからないだとか、心を折るようなことをおっしゃらないでください！」

「いったいなんの『勉強』だ！？ おまえ、今度はなにを読んでどこに向かおうとしている！」

「ですから」

応酬が苛烈さを極めるのと同時に、最後の鐘の音が高らかに鳴り響く。

エルマがバルドを抱く腕に力を込め、なにかを言い返そうとしたそのとき、

「……………つあ、あああああああ！」

とうとう、血走った目を見開いたアナが立ち上がり、素早くフェリクスに躍りかかった！

「……………!!」

あまりに突然のことに、観衆たちは言葉も出ない。ただただ、目の前の光景をぎょっと肩を揺らした。

まるで時間を引き延ばしたかのように、ゆっくりと身をしならせる少女が見える。

髪はほつれ、目は爛々と光り、その姿はさながら、獲物に襲い掛かる獣のよう。

なにか針のようなものを握りしめた腕が、空気を切り裂くようにして、迷いなくフェリクスの喉元に掴みかかる

「恐れ入りますが、今重要なお話しておりますので、大人しくしていただけます!?!」

「あぶばっ!?!」

ドゴオ……………ッ!

掴みかかると思いきや、バルドを抱っこしたままのエルマにノーリックで振り払われた。

24・シャバの「恋」は難しい(3)

アナの身体は、陽光を弾きながら、清々しいほどに吹き飛ばされてゆく。

ちなみにその際、ルーカスもまたノールックで己のマントをアナの軌道上に投擲し、舞台に落下する彼女をフォローした。そのさりげなさときたら、もはや伝説級だ。

鐘が鳴り終わり、しんと静まり返った舞台上で、両者は何ごともなく見つめ合っている。

エルマは、風圧でずれた眼鏡の位置を直そうとして、しかしそれを、ルーカスに奪い取られた。

「あ……っ」

「おい、おまえ」

「見ないでください……っ」

エルマは素早く顔を逸らそうとする。

けれど、ルーカスの力強い指が、その顎を捉えた。

「よく、見せてみる……」

低く掠れた、静かな声。

色気を含んだ甘い命令に、会場の空気が一気にそれっぽいものへと変わってゆく。

それを肌で感じ取ったイレーネは、冷や汗を浮かべた己の額を、無意味に撫でた。

「え、ちょ、なんか、今ラブロマンスを演じてる場合じゃないようなことが、起こった気がするんですけど……っ？　なんかこう、国家危機的なアレが、起こったような気がするんですけど……っ！　流しちゃっていいの!？」

「大丈夫。国家危機は、エルマエル様のワンパンによって回避されましたわ。それにしても、理想的な軌道を描いて、爽やかに吹き飛んでいったアナスタシア嬢もお見事……。第三使徒の座に、彼女を迎え入れてもよいかもかもしれませんわね」

「ねえ、あなたそれでいいの!？　っていつか第三使徒ってなに!？」

「しっ、お静かに、第二使徒のイレーネさん。ここが正念場ですよ」

ツッコミどころ満載な制止をされ、イレーネは目を白黒させたが、結局は彼女も口を引き結んで見守り態勢に戻った。

見れば、観客たちも皆、刺客アナの急襲を意識の外にうつちやることを決めたようである。

彼らは今、国王暗殺よりも数段緊迫した事態を前にしたかのように、全神経を集中させて、舞台上のエルマたちを見つめていた。

「見ないでください……。今、私、……きつとひどい顔をしています」

「なぜ？」

密やかに囁きながら、くい、とルーカスがエルマの顎を持ち上げる。

彼女の夜明け色の瞳は潤み、頬は淡く紅潮していた。

「だって……、私……おかしいのです。殿下にパーソナルスペースを侵されると、いつも涙液が過剰分泌され、心拍および血流速度が上昇し……大頰骨筋や上唇挙筋の制御も乱れ……、まるで……」
「まるで？」

間違いなく恋の表情を浮かべているエルマに、ルーカスの全身が期待で沸き立った。

長い指で、露わになった頰骨のあたりを、そつと撫でる。

エルマはびくつとして身をよじりかけたが、彼は腰に腕を回してそれを引き戻した。

「エルマ。まるで、それはどんな顔だ……？」
「まるで、で……」

エルマはぐつと唇を噛み、いよいよ耳まで赤く染めて俯いた。

「まるで、イヤラシい涙を流す発情した雌猫^{メス}」

「おい今度はこいつに誰がなんの本を読ませたあああ！」

ルーカスがぱつと振り向いて絶叫したので、イレーネとデボラは、さつと視線を逸らした。

「違う！ 違うだろう！？ そこはそうじゃないだろう！？」

「違うのですか……？」

「いや！ 最終的にはアリだが、アリなんだが、……アリなんだが……っ」

ルーカスはがっつとエルマの肩を掴んだまま懊悩する。

騎士であっても、百戦錬磨であっても、彼もまた男であった。

言葉に詰まってしまったルーカスを見て、エルマはますます途方に暮れたように肩を落とした。

「教科書の表現を借りても間違いだというなら……私……もう、なにもわかりません……」

「なんだと……？」

頼りなげな言葉に、ルーカスが眉を寄せる。

エルマはすっかり俯いて、ぽつりぽつりと言葉を紡いだ。

「私……、最近、おかしいのです。監獄で、殿下に母を救ってもらったあたりから、なぜか、殿下のことばかり想起してしまい……。育休中も、毎日二十時間ほどバルたんを抱っこしていたわけですが、ふと殿下のことを思い出すと、手が震えたりもして……。もしかこれがいわゆる、会いたくて震える現象かと思ったのですが……」

それは単なる腱鞘炎ではと思ったが、誰もがそのツツコミを差し控えた。

「殿下のことを考えると、なぜか顔が強張り、呼吸が不自然になり……。自然でいよう、普通でいようと思えば思うほど、うまくいかず、結局、ぎこちない顔になってしまう……」

ルーカスが静かに息を呑む。

やたら平坦だった彼女の口調。表情を出さなかった彼女の顔。

それがもし、動揺を必死に押し殺した姿だったのならば。

「あ……」

同時に、二人を見守っていたイレーネも、あることに気付いて眩きを漏らした。

ぎゅう……と、強く弟を抱きしめ、その頬を突ついているエルマ。その瞳が潤み、眉が所在無げに下がっていると知った、今だからこそわかる。

彼女はルーカスを前に退屈していたのではない。

むしろ、心細くなった子どもがぬいぐるみに縋り付くように、あるいは母親の髪を引っ張るように、心の均衡を必死に取り戻そうとしていたのだ。

思えば、エルマがそうした行動を取るのは、いつもルーカスに冷ややかにあしらわれたときだった。

(鈍感なんかじゃない……むしろ)

イレーネは、世界が反転したような衝撃を受け、無意識に胸のあたりの服を両手で握りしめた。

今、繊細で不器用な親友を、思い切り抱きしめてあげたいと思った。

視線の先では、エルマがバルドに縋り付いたまま、懸命に言葉を紡いでいた。

「なのに、殿下はといえば、半年ぶりに会っても平常運転……いえ、冷やかかというか……。むしろ開口一番、戻ってきてほしくなかつたとはかりに怒鳴りつけられましたし」

おまえ、今回の任務内容を知っていてなお戻ってきたのか!?

たしかに、二人が半年ぶりに再会したとき、ルーカスが一番に向けたのは笑顔でも抱擁でもなく、険しい顔での怒声だった。

「いや、それは、だな……」

素直に引いたほうがいい場面とはわかっているが、多少言い訳しなくもなる。

ルーカスは苦し紛れに、過去のエルマの塩対応を持ち出した。

「冷やかと言えば、おまえだって、『おまえがいなくて寂しい』という俺の手紙に対して、『承知しました』の一言しか返さず、弟の話ばかりだったではないか。俺があの時、どれだけショックを受けたと思う？」

「殿下が寂しいと仰るから、無聊を慰めるつもりでバルたんの秘蔵エピソードを披露したのではないですか！　なのにそこから手紙も途絶えて、私こそ大ショックです！」

「そ、そうか……」

そして完璧なすれ違いを悟り、今度こそ撤退を決めた。

氣勢を弱めたルーカスに、エルマはますます顔を俯けた。

「途絶えた手紙。会うなり怒声。しかも、再会して真っ先に殿下が触れたのは、私ではなくバルたんでした。それはもちろん、バルたんの可愛さを愛するのは、全人類に備わった本能ではあるもの……。でも、イレーネの貸してくれた教本ほんによれば、好意を抱き合う男女は、再会するや熱く視線を絡め、なにを措いても激しく抱き合うのが『普通』であるというのに……」

それは明らかに教本が間違っているが、しゅんと肩を落とす今の

エルマを、ルーカスはとても責める気にはなれない。
代わりに、彼は絶望の表情でイレーネを振り返った。

「イレーネおまえ……!!」

「すみませんごめんなさいすみません！ だってまさかこんなことになるなんて！」

「それで、やはり私は、殿下にとってあくまで『友人』でしかないと、確信した次第です」

イレーネは舞台の床に額をぶつけんばかりに頭を下げたが、それをよそに、エルマは「ですが」と拳を握った。

「このまま引き下がっては、母と【嫉妬】のお姉様の沽券にかかわります。諦めたらそこで試合終了。となれば、ここは粘るしかない」と、数日前の私は考えました」

「は……?」

突然風向きの変わった話に、ルーカスが目を点にする。

エルマはそれをどう受け取ったか、拗ねたように視線を逸らした。

「ですから、まずは殿下を尋常に、その……、デート、に、誘おうと思っただのです」

「デート」

「ええ。なにせ私も年頃の娘は、隙あらばデートをしなくてはならないそうぞ。『王都の見どころガイドブック』なる本によれば、エストワ庭園なる場所で想いを誓い合うのが『普通』なのだそうぞす」

「想いを」

あまりに信じられない単語が次々飛び出てきて、ルーカスはほか

んとそれを繰り返す。

すぐ足元まで押し寄せてきている喜びの波。

だが、あまりにも自分に都合がよすぎて、それに身体を浸してよいものかどうか、慎重になっているかのようにだった。

イレエネもまた、「エストワ庭園」の名を聞いて、あつと声を上げた。

「そう。そういうことだったの。だから」

その横で、デボラは「ようやくわかったか」と言わんばかりに、小さく肩を竦めていた。

「ただ、その庭園でデートを実践するためには問題があつて、……エストワ庭園は貴族専用の庭園であるので、貴族の身分が無いと、入場できないのだそうです」

「……………！」
「なので、我ながら馬鹿らしいとは思いつつ、どうしても、どうしても、……騎士爵位が欲しかった。公式で、『普通』の身分が。バルたんのためはもちろん、……自分のためにも」

私、きつと立派に任務をこなしてみせます。こなしたいのです。

今度は、自分自身の欲しいもののために。

あのとき、真剣な様子で告げていたエルマの姿が蘇る。

ルーカスは、それに対して自分がどんな態度を取ったかを思い出し、己の頬を全力で殴ってやりたいような衝動に駆られた。

(ばかか、俺は……………！)

いや、さすがにあの流れですべてを読み取れというのは無理難題とも思えるが、それでもあのとき、彼の欲しかったものは、すぐ目の前にぶら下がっていたというのに。

「なのに」

とうとう、エルマがくしゃりと顔を歪めた。

「私がそれに向けて努力すればするほど、殿下は冷たくなられます。ここ数日、視線も合わせてくださらなかった」

「す、すまない」

「ただでさえ、殿下の前では『普通』でいられなくなるというのに……。『普通』の表情も繕えず、『普通』のデートも実現できず、この感情を、教科書に従って『普通』に表現することすらままならず……『さつぱりわからない』とか、……『鈍感』……挙げ句、そういうしているうちに、カロリーネ様との婚約話……」

「すまない。すまなかった！」

もはやルーカスは青褪めている。

エルマは込み上げるなにかがあったのか、夜明け色の瞳をじわりと潤ませた。

「も、……つらい」

「なにもかも俺が悪かった！ だから泣かないでくれ！」

エルマが放った「つらい」のたった三文字の前に、ルーデンーの色男は、その場で勢いよく無条件降伏した。

好いた娘、それもこんなに可憐な少女に弱々しく涙を浮かべられ

て、平気な男などいるものだろうか。いやいな。

少なくともルーカスは、史上最大の罪悪感に打ちのめされた。

なんだってあの眼鏡は、こんなに素直で愛らしい感情を、こうも見事に覆い隠してしまっていたのか　いや、それを読み取れなかった自分が悪い。もうそれでいい。

ルーカスはそう結論付けて、俯いたままのエルマに顔を寄せた。

「頼む。説明させてくれ。俺が昨夜カロリーネ嬢に接触したのは、選考会で不正を働いているのではないかと疑ったからだ」

「な……っ」

早口の弁明には、エルマではなくカロリーネが反応する。

彼女は動揺を隠せぬ様子で、口をぱくぱくさせた。

「たとえば二日目、彼女は手袋を持参するなど、やけに用意周到だった。最初はそれこそ義兄上の差し金……サクラだからかと思っていたが、義兄上は知らなかったという。では、独自に課題を事前入手しているのかと踏んで、伯爵家を密かに探り始めた」

その内容に、観客がざわつく。

選考会課題の入手。

それ自体が重大な違反であるし、いかにも贈収賄やほかの余罪にも繋がりそうな、大事件だ。

もしかやこれを機に、伯爵家についての長期の取り調べが始まることになるかもしれない。

しかし、当のエルマはといえば、それにはさして興味を示さず、

顔を俯けたままだった。

「ファイネン家が、一部の商家を手駒にして、ときどき王城の機密書類を拝借していることくらい、伯爵のお顔を拝見すればすぐわかるではありませんか。そんな調査を言い訳になさるなんて……」
「ええっ！」

取り調べどころか、三秒で真相を解き明かされて、観客たちが再度ざわめく。

だが、ルーカスはまるで動じず頷いた。

「おまえの言う通りだ。ただ、その時の俺は、背後関係まで明らかにすることで、選考会を操作、あるいは中止できるかもしれないと思った。そこでカロリーネ嬢には、手袋を口実に訪問して、最終課題をどう予想しているかを聞きに行ったんだ」

しかし、カロリーネは最終選考の課題を正しく把握できていなかった。

それを見てルーカスは、すでに伯爵家は商家と決裂していること、少なくとも伯爵家が実行犯ではないことを理解したのだ。

決裂の原因は恐らく、選考会二日目で、商家の娘が落選してしまったことだろう。

つまり主犯は、二日目まで残った商家のほうだったのだ。

「ファイネン伯爵家の件はそれでいったん調査終了としたが、そのとき思ったんだ。王妃選考会で残った少数の候補者の内、二人もが不正に関与していたのは偶然だろうか。もしや義兄上は、選考会の場を使つて、怪しげな家臣を一斉にあぶりだすつもりではなからうかと」

「ええっ!?!」

突如として政治ドラマの様相を帯びてきた選考会の真実に、観客たちは戸惑いの声を上げた。

だが、エルマはやはり驚きもせず、弱々しく首を振るだけだった。

「それは私だつて、弱小属国であるエスピアナの候補者を迎賓館に招き入れている時点ですでに、ロドリゴ聖侯爵あたりを怪しんでいらっしやるのだろうとは思いました。ですが、それが殿下のここ最近の冷やかさと、どう関係があるのでしょうか」

「えっ!?!」

「ああそうだな。ロドリゴ聖侯爵は王位を篡奪された恨みで、フェリクス義兄上の暗殺を企む逆者のようだが、たしかにそれは俺の態度とはなにも関係ないな。悪かった」

「ええっ!?!」

「そうですよ。いくら聖侯爵が、安価に暗殺者を仕入れたいがために、寒村から少年少女を誘拐洗脳してきている大悪党だからといって、殿下の仕打ちが軽減されるわけでもございません」

「えええっ!?!」

「ああ。いくら聖侯爵がルーデンへの憎悪を植え込もうとするあまり、ルーデンの本来課した率より過大な重税を寒村に強いて搾取しているとはいえ、それとこれとは別問題だ。どうか、許してくれないか」

「ええええっ!?!」

観客たちは、ルーカスとエルマから次々もたらされる重大情報に、ラリーを見守るかのように首を左右に振った。

フェリクスですら、さすがに顔を引き攣らせている。

「こ、こんな痴話げんかの片手間みたいに解き明かされていていい事件じゃない気がするんですけど……! 進行が雑すぎるわ!?!」

「殿下も、だいたいいい感じに仕上がってきましたわね……」

イレーネが冷や汗を浮かべれば、さしものデボラも神妙な顔で唸る。

対エルマで最も常識的であったはずのルーカスは、今や、二国間の国交を揺るがすような重大事件すら全力で擲ち、エルマだけを見つめていた。

「なあ、頼む。顔を上げてくれないか」

「……………」

「おまえにまだ、きちんと伝えられていない言葉があるんだ」

囁く声は、低く、甘い。

観客たちは、良識に則り「そんな場合じゃないだろ！」と突っ込むべきか、本能に従いこのまま二人の恋路を見届けるべきか、大いに悩んだ。

ルーカスは再び腕を上げ、エルマの滑らかな頬にそつと掌を添わせた。

「なあ、エルマ。五秒でいい。選考会だの、聖侯爵の頭の悪そうな陰謀だの、弟だのをすべていったん横に置いて、俺だけを見てくれ。いいか、俺は――」

唇が、吐息がかかりそうなくらいの距離に近付いてゆく。

観客のうち、ある者は頬を紅潮させ隣人の肩をばんばん叩き、またある者は目を覆った両手の隙間から爛々と目を輝かせた。

人々の喉を鳴らす音が会場中に響き渡る、それほどの緊張感。

しかし、

「い……言いがかりですぞ！」

極めて重大な言葉が紡がれるより早く、しわがれた男性の聲が一同の耳を打った。

25・シャバの「恋」は難しい(4)

「い……言いがかりですぞ！」

極めて重大な言葉が紡がれるより早く、しわがれた男性の聲が一同の耳を打った。

声の主は誰かと見てみれば、聖職者の衣をまとった老年の男性だ。関係者席を蹴り上げるようにして立ち、険しい顔で声を張る彼こそは、エスピアナの聖侯爵・ロドリゴであった。

「エスピアナを属国に貶め、王族を一貴族に落とし、哀れな国民から搾取を重ね。それでありながら、その罪を私にかぶせようなど、盗人猛々しい！ 私はエスピアナの名誉にかけて、ルーカス・フォン・ルーデンドルフの発言に断固として抗議する！」

さすが元王族と言うべきか、辺境国出身ながら、そのルーデン語は実に流暢だ。顔立ちにも品があり、話しぶりも堂々としている。

が、

(今かよー！)

この局面に来ての乱入に、観客たちの心が完全に一つになった。

それはたしかに、彼にとっては、というか社会常識としては、この抗議は一刻を争う重大な問題なのかもしれない。

とはいえ、今この瞬間、舞台上の主役はエルマとルーカスだ。侯爵の行動は、完全に場の空気を外したものでしかなかった。

「あれだけ身勝手に重税を課しておきながら、それを私が私腹を肥やしたかのように言うなど……。よろしいか、はっきりと言うが、哀れな貧者に救いの手を差し伸べたのは『私』で、『悪党』はルーデン王だ！」

だが、言葉の端々を妙に強調する侯爵の口上を聞き、幾人かは彼の真意に気付いた。

ロドリゴ侯爵は、ルーカスに向かって抗議しているのではない。ある人物に向かって、必死に主張しているのだ。

『……ロドリゴ、様』

髪を乱し、破れたドレスの裾を引きずりながら、ゆっくりと近付いてくる人物。

つい先ほど舞台の端まで吹き飛ばされた後、なんとか受け身を取って立ち上がった、アナに向かって。

その瞳は暗い色を浮かべ、体はゆらりと揺れている。

焦点の定まらない目つきから、彼女が正気を失った状態であることはすぐにわかった。

喉からは獣のような唸り声が漏れ、震える手には鋭い針のようななにか。

彼女は、混濁した意識のまま、なにかを探している。

その身に刷り込まれた敵意を炸裂させる相手　襲い掛かる相手を。

その対象が、一歩間違えば自分になるということを、ロドリゴは

察知したわけであった。

『ああ、アナスタシア、可愛い子。ルーデン王弟の卑劣な策に乗ってはなりませんよ。あれらはすべて嘘。圧政を敷き、あなたたちを搾取していたのはルーデンです。だから私たちは、それに正当な抵抗をせねばならない』

『……………』

腕を伸ばしたら触れられる距離までアナがやってくると、ロドリゴは発言をエスピアナ語に切り替えた。

穏やかなイントネーションの、説得力のある話しぶり。

彼がこれまで、多くの養子に向かって語りかけてきた口調だ。

こうして目を合わせ、ゆったりと話しかければ、単純な田舎の子どもは、いくらでも彼のことを信じた。

だからこの時も、ロドリゴはいかにも平静を装って、優しく笑みを刻んだ。

『ただし、もちろんその「抵抗」は、正当な国際手続きを踏んだものでなくてはなりませんかね。……私の言いたいことはわかりますね？ さあ、アナスタシア。その物騒なものをしまっ』

実際は暗殺を命じていたし、決行後はアナを切り捨てる予定でもあったロドリゴだが、さすがに暗殺指示の嫌疑をかけられた今の状態で、ことを進めるのはまずい。

いざとなれば、「暴走した養女を諭して暗殺を阻止した」という筋書きに転向できるよう、彼は慎重に言葉を選びながら、ゆっくりと腕を持ち上げた。

ちり……ん。

聖職者でもある彼の肩には、祈祷布を模した幅広の布が掛けられていて、それには白い花の香りが焚きしめられているほか、先端には小さな鈴が付いている。

人の理性を溶かす香り、腕を動かすだけで鳴らすことのできる鈴。

それらは、暗示の道具に打ってつけで、彼は子どもたちにこの香りと音色を刷り込むことで、自由に彼らを操ってきた。

二種の道具を使えば、洗脳はより強固に施せるのだ。

(もつとも、ときに強く作用しすぎるのが難点ではあるが……)

ルーデンの鐘楼と鈴が、同周期の周波数を持っていたのはロドリゴにとっても大きな誤算だった。

だが、逆に言えば、鈴で行う以上に強く洗脳されている娘を操るなど、造作もない。

ロドリゴはいつもの笑みを浮かべながら、優しい声で養女の名を呼んだ。

『アナスタシア。さあ』

ちり……ん。

もう一度鈴を鳴らせば、アナスタシアの身体からすうつと鬼気が薄らぎ、彼女は系の切れた人形のように、ぺたりと床に座り込む。

緩んだ掌から、毒針がぼろりと転がったのを捉え、ロドリゴは内心でそつと安堵の溜息を漏らした。

ひとまず、この兵器に、至近距離から襲われる恐れはなくなった。

『先ほどは随分取り乱してしまいましたね。なにがあなたを追い詰めてしまったのでしょうか。大丈夫、私はどんなことがあってもあなたの味方です。この後ルーデンの取り調べがあるかもしれませんが、必ず私も同席しますからね』

ちり……ん。

『……………』

罪をすべてアナに被せられるように、徐々に暗示の内容を修正していく。

養女が反発もせずしゃがみ込み、床を見つめたままであることに、ロドリゴは深い満足を覚えた。
こうでなくてはならない。

『さあ、もう大丈夫。私がいますから、顔を上げなさい。あの卑しく飢えた寒村からあなたを救い出したときのように、今回も』

ガコ……ッ！

深い満足を覚えて、だから、鈍い音が響いたとき、彼はそれが、自分の側頭部から響いたものだと理解できなかった。

『……………え？』

ぼかんとする。

一拍して、猛烈な痛みが襲ってきた。

視界が明滅し、全身から力が抜けてゆく。

ぐら……とその場に倒れ込むロドリゴとは裏腹に、アナはすっと立ち上がった。

『……暗示を解くときのコツは、まず自身にショックを与え、関心を途切れさせること。ついで、暗示者から視線を逸らすこと』

まるで学習内容を反復する生徒のように、淡々と呟く。

『意識を一点に集中させ、ひたすらそれだけを考える』

真つすぐに舞台に立つアナの、その足元を飾るガラス細工のついた靴は、右側だけが無くなっていた。 たった今、投げつけたためだ。

エルマの暴投によって正気を取りもどしたアナは、静かな声で続けた。

『あなたはパンをくれたけれど、苗は授けなかった。微笑みはくれたけれど、けっして私たちに触れようとはしなかった。褒めてくれただけれど……その顔はいつも、冷え切っていた』

気付くべき事實は、きつとたくさんあった。

なぜロドリゴは、アナたちが弱りきった後にやってきたのか。

なぜ「救いに来た」と言いながら、アナだけを攫うようにして、さっさと村を去ってしまったのか。

なぜ、エスピアナはルーデンに搾取されていると言いながら、彼は大量の養子を抱え、立派な屋敷を擁していたのか。

ロドリゴが貧民を蔑みながらも、エスピアナを　あの寒村を救おうとしていたなら、きっとそれでもよかった。けれど。

『あたしは……、あたしたちの村は、ルーデンに搾取されてたんじやない。業突く張りのエスピアナの元王族に……あんたに、食い物にされてたんだ』

こげ茶色の瞳に、涙が滲む。
けれど、剥き出しになった足はしっかりと舞台を踏みしめ、アナの身体を支えていた。

自分の意志だけで、立つ。
今はそれだけで十分だと、彼女は思った。

「おやおや、いいのー？　相手の言い分も聞かないで、のしちゃって。本当は彼の言う通り、僕たちルーデンが君たちの村に重税を課していて、彼が正義の人なのかもしれないよ？」
「……顔を見れば、だいたいわかるようになりましたので」

からかうように話しかけてきたフェリクスに、アナはくるりと向き直る。

そして、その場に跪き、両手を差し出した。

「偉大なる陛下におかれては、すべての事情をご賢察のことと思いません。私の愚かさもまた、一連の罪を引き起こしました。どうぞ、処刑するなり、監獄送りにするなり、ご随意に」

曇りの取れた目で見れば、常におちゃらけた言動のこの男が、凡

愚を装った名君であることも、察せられる。

寒村に対するやけに具体的な支援例を思い出すに、彼に任せておけば、故郷の行く末も問題はないだろう。

自分自身の今後については、虚脱感が大きすぎて、なにも考えられなかった。

「……なんか、そんなところまで師匠に似るものなんだねえ」

だが、神妙に差し出していた腕を、愉快そうなフェリクスに取られ、アナはすいと立たされた。

「君を監獄送りなんて、しないよ。処刑もね」

「は？」

「なんか僕、黒幕を靴で殴り倒して、自ら監獄送りを申し出る女子を見ると、無性に傍におきたくなるタイプみたいでさー」

「……は？」

そんなタイプ、聞いたことがない。

思わず胡乱げな顔つきになってしまったアナを、彼は「こっちの話」と躲し、その足元に跪いた。

「……………!？」

「片足だけヒールだと立ちにくいでしょ。脱いじゃいなよ、こんな靴」

そう言っつて、左足に残っていた靴を脱がせる。

彼は靴の先に付いた細工に目を止めると、「ガラスの靴だね」と呟き、ぽいとそれを後ろに放り投げた。

「君は、素足で大地を踏みしめるほうが、好きな人でしょ？」

そう、アナの目をまっすぐ覗き込んで笑う。

最初は愚鈍な王だと思っていたし、今では狐のように不器用な賢い男だと思っているが、歯を見せて笑う様子は、意外にも爽やかだ。

驚きに目を瞠っていると、彼はじつとアナを見つめたまま立ち上がった。

緑色の瞳は、どこか故郷の森を思わせる。

なんとなくそれから視線をそらせずにいると、彼の顔がふと近付いてきた。

骨ばった意外に大きな手がアナの肩に回り、そして。

カチリ。

「……………!?!」

「お、似合うね。よしよし」

首にずしりとした重みを感じて、アナは勢いよく後ずさった。

『……………!?! ………………!?! ……これ……………っ』

あざといほどに陽光を弾き返す金細工と、大量の宝石が埋め込まれた首飾り。

間違いなく、この選考会の優勝者に授けられるという、「王妃の首飾り」だった。

「おめでとう。君は見事、『養父ロドリゴを切り捨てる』という僕の命令に対し、忠誠を示した。婚約話を妨害するどころか、君やロドリゴに話の腰を折られまくっていたエルマとは大違いだ。いやー、

これはもう、満場一致で君が優勝だね」
『な……っ!?!』

想定外すぎる展開に、もはや言葉が出てこない。

それまでもどかしそうに話を中断させていたエルマは、フェリクスの発言を聞くと、瞳に溢れんばかりの感動を浮かべ、きらきらとアナを見つめた。

「アナ様……！ 殿下との会話にさんざん横槍を入れられて、正直困惑しておりますが、まさか、私の命令達成を防ごうという、そんな深遠なお気遣いがあったとは……」
『いや違う！ 違うから!』

アナは思わず母国語のまま絶叫したが、エルマは感じ入ったように首を振るだけだった。

「アナ様っ たら……」
『違う!』

というか冷静に考えて明らかにおかしいだろう。
どこの世に、自分の命を狙った女を妻にしようとする男がいるのか。

暗殺者を王妃にしようとする国があるのか。

青褪めるアナに、フェリクスはにっこりと両手を広げた。

「大丈夫、大丈夫。世論はどうともなるから。やっぱこういうのって、周囲の目とかよりも、本人同士の想いが一番重要だと思うし」
「『あたしの』…… いや、私の想いはどこへ!?!」

思わず母国語が出かけたアナは、慌ててルーデン語に改めつつ、鋭く叫んだ。

「あ、僕、エスピアナ語もだいたいわかるから、そのまま話してくれていいよ。すごい？ 尊敬しちゃう？ だつてほら、君、尊敬できて、包容力や指導力があって、穏やかで、いつも笑みを湛えている男が好みなんでしょ？ つまり僕だね」

「……………!?!」

いったいどこまで筒抜けになっているのか。

そしてその自信はなんだ。

口をばくばくさせるアナに、フェリクスはうっとり指を伸ばし、その首飾りを撫でた。

「うん、よく似合うなあ。まだ僕が王子だったころ、エスピアナに視察に行ったことがあったんだけど、君、そのとき侯爵家に侍女の恰好をしていたじゃない？ 犬みたいに全力で主人のことを慕ってさ。あれを見たときから、君には絶対首輪が似合うと思ってたんだよね」

なにか、とてつもなく恐ろしい発言を聞いた気がする。

『そ、そのときから、あたしのことに、気付いて……………?』

『だから選考会を開いたんじゃないか』

強張った問いには、流暢なエスピアナ語で答えが返った。

『僕はこれで、ロマンチストな男だよ。まあ、嫁取りは無理かなー
と思っただけけど、ちょっと事情が変わったもので、……………欲しい

ものには、自分で手を伸ばしてみることにしたんだ』

彼の発言には含みが多くて、真意のすべては掴めない。

滝のように冷や汗を流す今のアナにわかるのは、たった三つのことだけだった。

『さてさて、ロドリゴ侯爵はどう料理しようかなあ。監獄に放り込んだら、クレメンズと面白い化学反応を起こしてくれそうだけど、ちよっとキャラがかぶってる気もするし。ひとまず、ファイネン伯爵と商家のほうから考えるかな』

一つ、ロドリゴなんて比較にならないほど、目の前の男は有能で、かつ狡猾であること。

『まあ、カロリーネ嬢は「ご褒美」で情状酌量にするとして！。なにせ、君の好みという重要情報を聞き出してくれた働きも、評価しなきゃだしね。ほら、僕って公正公平がウリの人だから』

二つ、目の前の男は、優先順位の付け方や自己評価がおかしいということ。

『そう、だから、君にも基本、無理強いをしたくはないんだよ。僕はロドリゴ侯爵とは違って、君の足を窮屈な靴に押し込めたりなんかしない。だって僕は、飢えた犬のように貪欲で、雑草のように遅く、自分自身の足でしっかりと大地を踏みしめてみせる、ありのままの君が好きになったんだから』

そして、三つ。。

『なにより、素足に首輪、もとい首飾りって、……犬らしくて実に

「そそるもんねえ？」

重度の変態であるということ。

『……………っ！』

青褪めて首飾りを外そうとするアナに、フェリクスはのほほんと微笑んで告げた。

『あ、それ、僕以外に付け外しできないから、安心してね』

安心要素がまるでない。

ぎよっとして振り返ったが、フェリクスはそんな彼女の肩を無理やり抱き、もう片方の手を高らかに掲げた。

「みんな、ありがとー！ 無事、お妃が決まったよー」

くだけた宣言に、観客たちがぽかんとする。

彼らは「え……………？ あれ、いいのかな……………？」みたいな空気を醸し出した後、困惑顔のまま、ぱらぱらと拍手を始めた。

それでもやはりそこは集団心理で、拍手は次第に大きくなってゆく。

あつという間に、会場を揺るがすほどの音量となった拍手や歓声に包まれ、アナはただ茫然と、その場に立ち尽くした。

25・シャバの「恋」は難しい(4) (後書き)

次話、再びエルマ&ルーカスのターン！

26・シャバの「恋」は難しい(5)

「さて」

と、今度は、咳払いとともに真面目くさった声が響く。
ルーカスだ。

エルマはといえば、相変わらずバルドを抱っこしたまま、目を輝かせてアナに拍手をしていたが、ルーカスはそんな彼女の肩をつかみ、振り向かせた。

アナの襲撃に、ロドリゴの逆上、からのアナの王妃就任。

幾度にもわたって邪魔され、しかもそれらは一つ一つがかなり重大な案件であったが、ルーカスは半ばやけになって、流れを無視することを決めた。

「俺たちの本題はまだ解決していないぞ、エルマ。いい加減に言わせてくれ。いいか、俺は――」
「殿下！」

だが、ここにきて、当のエルマ本人が、ルーカスの引き戻しかけた流れをぶった切った。

「アナ様が見事ご立后を決めました。つまり私はぎりぎりの敗退。つまり……騎士爵位を勝ち取ったということになりますね！」
「あ、ああ……」

あまりに得意満面に言い切るので、うっかり頷いてしまう。

だが、それどころではないとすぐに思い直した彼は、再びぐつと身を乗り出した。

「その通りだ、見事だな。さて、それでだが」

「ああ、よかった。これで私、……殿下に釣り合う、『普通』の女として、殿下を庭園に誘うことができます」

「……………」

動機はすでに聞いていたとはいえ、改めてそれを告げられると、妙な感動に襲われてなにも言えなくなってしまう。

まじまじとエルマを見下ろすと、相手は再び不安に襲われたようにバルドを抱きつぶしかけ、そしてそれに気づいたのか、はっと姿勢を正した。

一度、二度、三度。

バルドの頬に、ためらうように視線をさまよわせ、やがて意を決したように顔を上げる。

それから彼女は、さりげなくメイド服の裾から高級揺りかごを取り出すと、嚴重におくるみに包んだ弟をそつつと横たえた。

初めて弟を「放置」し、エルマはまっすぐにルーカスの瞳を見つめた。

「……その、殿下。私、初期に比べればかなり『普通』を身に着けたつもりですが、それでもやはり、鈍い……一般的な心の機微を理解できないなど、至らぬところも、もしかしたらあるのかもかもしれません」

必死に言葉を選んでいるのだろう。

白い頬は淡く紅潮し、なにも抱えぬ手はそわそわと握り合わされている。

「いや、それは……」

「ですが、殿下が先ほど謝罪してくださった　こちらに譲ってくださいったのを見て、まだ見捨てられたのではないと判断し、勇気を出して申し上げます」

常に眼鏡に隠されていた夜明け色の瞳は、今や、まぎれもない緊張を湛えてゆらゆらと潤んでいた。

もう、その瞳を見ただけで、なにかも許して抱きしめたくなくなるような可憐さだ。

「私……まだまだ未熟で、殿下を見ると心拍すら普通に刻めず、殿下の美点であるはずの色男ぶりを苛立たしく感じたりと、合理的思考もできなくなり、……とにかくその、まだ『普通』を極めるには精進が必要な身の上では、ございますが……っ」

どうしたものか。

潤んだ瞳で上目遣いしてくる美少女が、ルーカスの心臓に言葉でもストリートアタックをぶちかましてくる。

ルーカスはただ、無表情で己の心臓を抑え、爆散の危機から己を守った。

「そんな身の上で、『普通』の師匠たる殿下にこのような申し出を差し上げるのも、いかにも身の程知らずではあるのですが、その……っ」

バルド 精神安定剤を持たぬエルマは、とうとう顔を両手で覆ってしまっ

た。

「私と、デート、を、してみませんか……っ？」

「……………」

「いえあの、別に身構えていただく必要はないというか、連れ込んでしまえばあとはこちらのものもとい、全力で楽しい時間をプロデュースさせていただきますので、殿下はただ、友達感覚で、ひとまず庭園にお越しいただければと」

「いやだ」

とうとう、ルーカスはやけに平坦な声でエルマの言説を遮った。

「え……っ」

「友達感覚など、ご免こうむる」

シヨックに見開かれた目を、至近距離から覗き込む。

そこには、抑えきれない喜びで顔を緩めかけた、ルーカス自身が映り込んでいた。

きつと、と、彼は思う。

エルマは初めてなのだろう。

告白することも、誰かに思いを寄せること自体も。

だからこそ、好意を伝えることもなしに、デートの誘いに話が終始したりする。

この夜明け色の瞳に、こんなにも至近距離で映り込む男は自分が初めて。

その発想は、自分でも驚くほどルーカスを高揚させた。

真意が読めず、苛立たしく思うこともあったエルマの言動。
なのに今は、その拙さが、とびきり愛おしい。

「なあ、エルマ。……俺は、おまえが好きだ」

手本を見せねば、と彼は思った。

ぶっ飛んでいて、全方向に常軌を逸したこの少女に、普通の恋情がどんなもので、普通の告白がどんなものなのかを。

エルマはぼかん、とこちらを見上げている。

ルーカスは苦笑を刻もうとし、それに失敗して、自分が単なるにやけ顔になっていることに気付いた。

「おまえが好きだ。友人や部下としてではなく、異性として。その突飛な言動や、勢いよく斜め上に駆け上がる思考回路を、いつまでだつて見ていたい。誰よりも、そばで」

「え……？ あ……、え……？」

完璧な形の唇は、珍しく言葉を詰まらせてしまっている。

りんごのように頬を赤く染め、無意識に後ずさるうとする彼女を、ルーカスは一步踏み込んで抱き留めた。

途端に、耳の縁まで真っ赤になるのが、ああ、なんてかわいい。

「眼鏡に隠された素朴な感情や、意外に純情なところも、好きだ。抱きしめたく……いや、抱き潰したくなる」

「や、あの、ちょ……、近……っ」

耳元で囁けば、エルマは腕を突っ張つてもがいた。

そんなところに限って、至って普通の少女の反応なのが、なんだ

か少々……いや、かなり愉快だった。

ルーカスはいよいよ色男の本領を発揮し、か弱い抵抗を見せるエルマに、滑らかな仕草で顔を近づけた。

「友達から、なんて言わないでくれ。俺の気持ち、まだわからないか？」

「いえ、あの……っ、あの！　じゅ、準備が……っ」

ここにきて心の準備など。

彼女を「普通」の少女にしておおせているこの状況が、たまらない。

ルーカスは幾人もの女性を虜にしてきた、悪戯っぽい笑みを浮かべ、エルマの唇をなぞった。

「あ……っ」

「エルマ。好きだ」

そつと触れた唇は、まるでしつとりと朝露を湛えた花弁のよう。ルーカスが顔の角度を変え、その甘露をむさぼろうとしたその瞬間、

しゅぽっ。

なにか小さな摩擦音が響き、ついで彼の首筋に、ちくりとした痛みが走った。

「…………？」

ぐら、と視界がぼやける。

己の体がどさりと音を立てて崩れ落ちるまで、ルーカスは自身になにが起こったのかわからなかった。

「あああ……、間に合いませんでした……っ」

エルマがすぐそばに跪き、抱き起こす気配がする。
しかしその声すら、ひどく遠い。

「この半年の間に【貪欲】のお兄様が、私の眼鏡に痴漢撃退システムを搭載したのです……っ」

劣情を持って近付いた人物を特定・追尾し、該当人物が重大な皮膚接触をした場合に麻酔針を発射するシステムで、とか、事前に解除すれば問題ないのだが「準備」が間に合わなかった、とか、エルマは慌てた口調でまくしたてていたが、そのほとんどがルーカスの意識にまで届かなかった。

「いやその眼鏡、どんな闇遺物よ!? ダーク・アーティファクト こっわ!」

「いえ、麻酔針とサーモグラフィと追尾システムを組み合わせれば、だれでも簡単に作れるものはあるのですが……、あっ、こらバルたん、麻酔針に手を伸ばしてはめっ、ですよ! ……って、え……っ!? バルたん、いつの間に揺りかごを抜け出して……ま、まさか今、ずり這いを……!?!」

「っていつかさー、これ後遺症とか大丈夫なの?」

なにやらエルマたちが会話しているのが、かろうじてわかる。
力なく床に伸びた指先に感じる、つるりと滑らかな感触。
恐らく眼鏡のつるだろう。

頬をくすぐる赤子の湿った吐息、「あうー」という愛らしい声と、

小さな手、そして

「だから言ったじゃないか、ルーカス。死んじやわないように、気を付けてねって。……ま、独り言でだけど」

いい加減極まりない異母兄の眩きを最後に拾って、ルーカスの意識はぶつりと途絶えた。

26・シャバの「恋」は難しい(5) (後書き)

明日、幕間とエピローグを投稿し、完結となります。

最後までお付き合いのほど、どうぞよろしくお願いいたします。

27・灰かぶり姫

「それで、最後はこうね。灰かぶり姫は王子様に見初められて、いつまでも幸せに暮らしました」

静かな監獄の一室。

ハイデマリーはほっそりとした指で、最後の一枚となった絵画を満足そうに撫で上げた。

そこに描かれているのは、ガラスの靴を手に跪いている王子と、両手を頬に当て、彼を見返す灰かぶりの姿だった。

瞳を潤ませた彼女は、喜びに感涙を浮かべているようにも見え、し、恐怖に凍り付いているようにも見える。

ハイデマリーは首を傾げながら、つとガラスの靴のあたりをなぞった。

「これって、脱がせているのかしら？ まさか、履かせているってことはないわよね」

彼女の常識からすれば、服や靴とは脱ぐためにあるものだ。

男が跪き、女が許し、それらを脱がせることから物語は始まる。

「ま、いいわ。魔法使いも含めて、めでたし、めでたし」

ついで白い指は、灰かぶりの背後で笑みを浮かべている魔法使いの女をなぞる。

華やかな一幕に仕立てるための演出、それとも、王子の前では礼を取るということだろうか。

それまで冴えないローブに身を包み、顔の大部分を隠していた彼女も、このときばかりはフードを下ろしていた。

露わになった素顔は、意外に若々しく、美しい。

「……魔法使いもめでたし、なのか？」

「ええ、そうよ。弟子が栄華を極めて嬉しいでしょうし、ほら、彼女もきつとこの騎士あたりと恋仲になったのよ」

ギルベルトが疑問を差し挟むと、ハイデマリーは自信たっぷりに頷いた。

慈愛を含んだ笑みを目立たせようと画家が考えたのが、魔法使いの顔はほとんど正面を向いている。

結果たしかに、その視線は、斜め前に位置する灰かぶりよりも、ほんの少しだけ外れていた。

その視線の真正面に当たるのは、王子の付き添いと思しき騎士の男だ。

王子とともに跪いているが、ガラスの靴を納める台座を捧げ持ち、体をねじっているため、やはり視線は、少しばかり灰かぶりから逸れている。

結果、魔法使いと見つめ合うような構図になっていた。

なるほど言われてみれば、密やかに視線を交わし合う二人、と解釈できなくはない。

「厳しい修行の末、弟子の灰かぶり姫は次期国王の妻に。そして師匠の魔法使いもまた、王の側近との恋を掴む。文句なしの大団円。ああ、わたくし、初めて普通にシャバの物語を完成させられたわ」

これで合っているでしょう、と、無邪気に見上げられて、ギルベ

ルトは咄嗟に沈黙を選ぶ。

本来の物語では、魔法使いはべつにスポコン師匠などではないし、体を張った修行シーンなどないし、幸せになるのは主人公と王子の二人だけである。

言葉を詰まらせた夫を見て、ハイデマリーの眉が悲しげに下がった。

「……間違っていたかしら？ シャバの恋物語って、難しいのね

」

「いや」

気付けば、ギルベルトは声を割り込ませていた。

「おおむね、そんな感じだ。特に、王子に見初められるラストシーンなんて、満場一致の大正解だとも」

逆に言えば、ラストシーン以外は、ストーリー順もキャラ造形も不正解なわけだったが、そう褒めるとハイデマリーは機嫌よく両手を打ち合わせた。

「まあ。よかつたわ」

「……………ああ」

こうしたやり取りは、奇しくも、娘のエルマとルーカスの間で発生するそれと、大変似ている。

妖艶で、誇り高く、人を弄ぶ傾国の娼婦。

けれど、時折　そしてギルベルトにだけ見せてくれる、この不器用さが、彼をたまらなく夢中にさせるのだ。

ギルベルトは結局、普通の「灰かぶり姫」がどんな話であったかなんて些細なことだ、と己に言い聞かせ、最愛の妻を甘やかすことにした。

「君は、聞いたことがなくても物語を完成させることができる、素晴らしい語り手だ」

「あら、嬉しい」

腕の中に抱きしめながら囁けば、妻は少女のようにくすくすと笑う。

自信を付けたのか、彼女は夫の耳に唇を寄せて、内緒話のように告げた。

「ふふ、あのね、実は、物語を想像するにあたって、意識していたコツがあるのよ」

「なんだ？」

「必ず、ハッピーエンドに持っていくの。『終わりよければすべてよし』って言うじゃない？ たとえ途中が間違っているとしても、最後まで合っていればそれでいい。……そうでしょう？」

その言葉に、ギルベルトはふと腕を緩めて、まじまじとハイデマリーを見つめる。

高貴な猫のような藍色の瞳は、悪戯っぽい光を湛えていた。

己の紡いだ物語が「普通」でなかったことも、夫が気を遣ってそれを正解としたことも、もちろん彼女は気付いているわけだ。

ギルベルトは静かに苦笑し、妻を抱きしめる腕に、再び力を込めた。

「そうとも。『普通』であろうがなかるうが、幸せならそれが正解だ」

腕の中の大切な女性は、それに相槌を打つ代わりに、「ねえ、ギル」と小さな呟きを返す。

「なんだ？」

「わたくし……幸せだわ。怖いほどに」

安堵と、感謝と、ほんの一匙、後ろめたさの混ざった声。

なにごとにも動じない監獄の女王の、すぎた幸福に戸惑う心も、ギルベルトだけが知っている。

過酷な運命にも、過剰な能力にも振り回されず、ただ、子どもに読み聞かせる絵本の内容に悩むような日々。

その他愛ない、あまりに「普通」の在り様が、時に不安を駆り立ててもするのだろう。

(「普通」とは、とても難しいものだから……)

だからきつと、その答え合わせに勤しむよりも、それが幸せであるかどうかだけを、こうして味わってゆくべきなのだ。

「……そうか。君にも怖いものがあつて、よかった」

ギルベルトはあえて意地悪く告げると、妻の頬を撫で、そつとキスを落とす。

27・灰かぶり姫 (後書き)

幕間が短いため、エピソードもこの後投稿させていただきます。
最後までお付き合いいただけますと幸いです！

28・エピローグ

満月の夜である。

豪邸がひしめく王都とは打って変わって、鬱蒼とした森と湖が連なるその場所の、ぽつんと立った屋敷の中で、密やかに息を荒げる者があつた。

『……くそっ、一体どうなってやがる……！』

黒い装束をまとつた男は、闇に紛れて通路を移動しながら、小さく毒づく。

独白はルーデン語ではないどころか、海をまたいだ別大陸の、耳慣れない言語であつた。

それもそのはず、彼は、人里から徹底的に隔絶された環境で育つた、暗殺業を稼業とする特殊な部族の一人だつたのだから。

組織から下された命令にはすべて忠実に従い、任務は必ず全うするという、権力者にとっては実に使い勝手のよい、生きた兵器。

男は、その中でも一等、組織への忠誠心が高く、技量も優れた暗殺者であつた。

が、そんな彼は今、「別荘での貴人暗殺」という、実にありふれた他愛もない任務で、これまでにないほど身の危険を感じている。

『くそ……っ！』

再び短く罵声を上げるとともに、彼は素早く床に伏せた。

途端に、頭上すれすれの位置を、仕掛け矢のようなものが勢いよく飛んで行く。

すぐ脇の壁に当たってめり込む、その深さを見て取って、男は静かに息を呑んだ。

『なんなんだ、ここは……!』

その一言に、男の荒ぶる感情のすべてが集約されていた。

ここは、閑静な別荘。

ルーデンの騎士団長が最近買った、少々辺鄙な場所にある別宅である。

事前に入手した間取り図を見る限り、いかにも普通の住居。

家の持ち主というのが、ルーデンの元王弟でもあるというので、多少警備が手厚いかと警戒したものの、別宅ということもあってか、かなり手薄だ。

結婚を機に臣籍降下し、もはや王族ではなくなった以上、一般貴族と同様の生活をするという意志表示でもあるのだろう。侵入は実に容易だった。

しかも今回の任務のターゲットは、騎士団長だというその男ではなく、その妻。

今年になって王城の侍女長に昇進したという女だ。

夫婦仲は冷えているのか、夫は妻を残して一足先に王都へ戻るという。

つまり、今回の任務は、戦闘力の無い女の屋敷に忍び込み、殺す、ただそれだけだった。

上はなぜか、「普通でないほどの美人」としか、女についての情

報をくれなかったが、男もまた、特に詳しい情報を必要だとは思わなかった。

戦闘訓練を積んだ人間ならともかく、箱入りの女を殺すなど、赤子の手を捻るに等しい。

だというのに。

『はあ、はあ……っ！』

今、男は床に伏せ、冷や汗を浮かべて周囲を見回す羽目になっている。

侵入してからこちら、彼を襲ったのは、未知かつ怒涛のトラップだった。

廊下を進めば床を踏み抜き、地下牢と思しき場所に落ちかけ。下水道を通って抜け出た先には、複雑な庭園迷路。厨房に踏み入れば飛び交う刃物の嵐、厩舎を通れば襲い掛かる魔牛の軍団、回廊の絵画を視界に入れるとなぜか猛烈な恐怖に襲われ、ついでに毎回、階段の段数を間違え転びかける。

この時点で、男はすでに疲労困憊の態だった。

おかしい。

先程からなぜか頭がぼんやりとする。

いや、頭だけでなく、手足の先が痺れてくるような。

『しまっ……っ』

男は慌てて床から身を起こしたが、すでに遅い。

先ほど壁にめり込んだ矢の先端から、じわりと黒い液体が滲み、

それは床に伏せていた男の指先に触れてしまっていた。

神経毒。

ぐら……と力なく男が頭を垂れたのと、低い声が掛ったのは、同時だった。

「死んだふりか、刺客殿？」

腹に食い込む靴の感触。

ぞんざいに体をひっくり返され、声の主を見上げる形となって、男は目を見開いた。

『……………なぜ』

「なぜ俺がこの屋敷からまだ出発していないのか、……………か？」

涼やかな相貌、精悍な体つき。

「ルーデナーの色男」の看板を長年にわたり背負っているその男は、ルーデンの騎士団長、ルーカス・フォン・ヴァルツアルク。

この屋敷の持ち主の夫であり、今日の昼、一足先に王都に戻っているはずの人物だった。

彼は、若々しさとともに貫禄を滲ませはじめたその顔で、冷やかに刺客を見下ろした。

「それはもちろん、俺が一足先に王都に戻るといふ情報が、偽物だからだろうな」

「噂話の拡散なら、このイレーネの右に出る者はありませんもの」

「あらあ、わたくしの名前も出してくれなきゃ嫌ですわ。刺客襲来の情報を駆け足で届けに来たのは、このわたくしですわよ」

佇むルーカスの後ろに、メイド服をまとった金髪の女と、やたら豊満な胸を張った女とが顔を出す。

さらに、通路の反対側からは、やけに間延びした声が掛かった。

「いやあ、君たちもどんどん、僕の私兵としての振る舞いが板に付いてきたねえ。僕の治世もこれで安泰だ。これからも無理せず、馬車馬のように働いてね」

刺客の存在をまるっと無視して、のんびりと三人に言葉を掛ける男。

金髪に平均的な体躯、狐を思わせる狡猾そうな緑の瞳　ルーデーン王、フェリクスだ。

屋敷の主の異母兄とはいえ、なぜ一国の王がこの場にいるのか。男が目を瞪れば、フェリクスは視線に気付いたのか、妙にうまいウイंकを寄越した。

「小旅行、小旅行。ほらー、僕とルーカスってマブダチだからさー。べつに、毎年一回は家出する奥さんを、義理の妹の別荘まで追いかけて来たとか、そういうわけじゃないよ。ねえ、アナ？」

「……言っとくけど、ガルラン王国への一方的な砲撃準備を解消しない限り、あたしは王宮には帰らないからね」

「えー。君を馬鹿にしたガルラン王に、ちよっとお仕置きしようっただけじゃない」

「口には口で返せてんだよ！　すぐに物理攻撃に走らないでくれる！？」

「息を荒げるしかできない刺客に対して、毒矢を放った君に言われなくてもねえ」

フェリクスは、すぐ隣でふてくされた表情を浮かべた女性に向か

って、やれやれと肩を竦める。

上質なドレスをまとったその女が、この国の王妃だということはすぐわかったが、出回っている肖像画の可憐な立ち姿とは裏腹に、彼女の口調は蓮っ葉で、しかも、やけに自然に弓を担いでいた。

間違いなく、男を狙撃したのは彼女だ。

「僕の愛が伝わるかと思ったのに、悲しいなあ」

「重すぎるわ！ っていうか、本当は外交上の理由があるくせに、あたしを口実に使うなつての。そういうところが胸糞悪いんだよ」

「うーん。君のそういうところが、本当に好きなんだよねえ」

国王夫妻は、刺客の男をそっちのけで、わいわいと応酬を続けている。

事態に完全に取り残された彼の前で、さらにぎよっとするような事態が起こった。

「皆さま」

突然、目の前の壁が反転し、いかにもなんでもない感じで、女性が現れたのである。

ナイトドレスをまとったその人物は、夜目にも美しいとわかる顔で、静かに周囲を見回した。

月光を弾く肌は神秘的に白く、肩に流した髪は黒檀の輝き。

長い睫毛に彩られた瞳は、一匙の紅を溶かした夜空のようだ。

人間離れた美貌に、男はぽかんと口を開いて女を見上げた。

一拍遅れて、脳が情報を引っ張り上げる。

上いわく「普通でないほどの美人」。

つまり彼女こそが エルマ。
エルマ・フォン・ヴァルツアルクだ。

奇妙な場所から平然と登場した彼女は、なぜか上等な銀のポットを手に、そつと微笑んだ。

「夜になつても賑やかですね。もしや眠れないのではないのでしょうか、ハーブティーをお持ちしました。ひとくち含めば、おやすみ三秒です」
『いや、この場面で気の利いた女主人みたいなこと言われても！』

というか、そんな過激な効果を持つ飲み物はハーブティーなどではない。ただの睡眠薬だ。

思わず母国語で叫んでしまった男の言葉は、奇しくもその場のツッコミを引き寄せる呼び水となつたらしい。

エルマを取り囲む面々が、次々に呆れたように溜息を漏らした。

「なぜおまえまで出てくるんだ。余計に騒動が大きくなるだけだろうが。この程度の刺客、俺たちだけでどうとでもなるから、部屋で休んでいろとあれほど言つたらう」

さりげなくガウンを羽織らせ、艶めかしい体の輪郭を隠すのは、夫であるルーカス。

「そうよ。この別荘に遊びに来る条件として、ヴァルツァーでの二泊三日のブートキャンプを過ごした私たちよ？ すでにこの刺客の所属組織について、腐った噂話を創作するところまで完了してるわだから寝てなさいよ」

「配本準備も万全ですわあ。数日後には、大陸中の権力者たちが、この組織の上層部を色眼鏡で眺め もとい、不信感を覚えて依頼

を控えるようになるかと。なので、エルマエル様は心配ご無用ですわ」

「やれやれ、といった様子で、異常なことを平然と言ったのけるのは、金髪のメイドと巨乳の女　つまりは、イレーネとデボラ。」

「あなたたちつてさ、なんでいつもそう奇妙な方法で敵を撃退しようとするわけ？　もっと、刺客を脳解剖、マイクロチップで洗脳して組織を一掃とか、そういう『普通』の方法があるだろ？　でもってエルマ、あなたはさっさと寝な。先週ずっと、遊びに来たバルドの相手をして、ろくに寝てないんだろ？」

「そうそう、さっさと寝室に帰りな、帰りな！。でもって、君は僕の腕の中に帰っておいでよ、アナ」

こめかみを押さえるのはルーデン王妃のアナ、そして、へらへらと笑いながら妻の背に腕を回すのが、ルーデン王フェリクスだ。

男は、ただただ絶句して、彼らのことを見上げていた。

組織内でも一、二の実力を誇り、たった一人で一国を壊滅させたこともある自分を指して、「どうとでもなる」？

すでに組織は突き止められ、そこへの印象操作までなされている？　後はなんと聞いた、マイクロチップ……？

理解が追い付かず、口を開けたままの男を見て取って、ルーカスが再度溜息を落とした。

「まったく……今どき、無謀にもこの『魔境』に飛び込んでくるなんてな。これだから、人里離れた暗殺部族で養成された箱入りは」

まるで、この屋敷が最難関ダンジョンのように言われ、男は怪訝さに眉を寄せる。

ルーカスはその様子を見て、いよいよその顔に同情の色を浮かべた。

「おまえもつくづく運の無い男だな。いくら情報操作したとはいえ、なんでよりもよって、この六人が全員そろったタイミングで、このこ侵入してくるんだ」

と、夫の発言で、とうとうエルマは拗ねてしまったらしい。

彼女は麗しい顔をむっつと顰め、ポットを壁の向こう側に押し戻した。

「皆さま、口を開けば寝ろ、寝ろと……。それにルーカス様、私たちのことを異常者軍団のように仰らなくなつてよいではありませんか。それぞれの『普通』のやり方で、招かれざるお客様を、もてなそうとしただけなのに」

だがそこで彼女は、ふとなにかに気付いたように、口元を綻ばせた。

夫の腕に触れながら、甘えるように彼を見上げる。

「それに、六人ではありません」

そうして彼女は、もう一方の手で自らの腹を撫でながら、愛情深い微笑みとともに、こう訂正した。

「七人、ですよ」

28・エピソード（後書き）

これにて、「シャバの『普通』は難しい」は完結となります。

第1部のプロローグを投稿してから、約2年。こんなにも長く、そして多くの読者さまに読んでもらえる物語になったこと、感謝しありません。

「無欲の聖女は金にときめく」同様、読者さま方に育ててもらった物語でした。

お祭り騒ぎのような感想欄が大好きなので、記念に一言でも残していただけたら嬉しいです。

評価ポイントを投じてくださってもよいのよ（ゲス顔）

最後までお付き合いくださり、本当にありがとうございました。

この作品の詳細については以下のURLをご覧ください。
<https://ncode.syosetu.com/n0641eh/>

シャバの「普通」は難しい

2024年5月14日22時37分発行